

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—諏訪市 その4—

昭和50年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—— 諏訪市・その4 ——

昭和50年度



日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和50年度長野県中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、諏訪市内その4地区3遺跡(追加1)の発掘調査が、4月18日から9月17日にかけて実施された。

この諏訪市有賀・真志野・大熊地区は、諏訪湖の南部、盆地西南縁から有賀峠・真志野峠を経て守屋山に続く山地の山麓にあって、断層崖下に崖錐面の連続する所である。湖東北の濃厚な遺跡地帯に比べて、湖南はやや稀薄かと見られていたが、48・49年両年度の調査により極めて濃厚な遺跡の発見が多く、一躍脚光を浴びる地域ともなり、今回の調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られる通り、当地域では最大規模の調査となり、かつその成果も多大であった。昨年度から継続の金鑄場遺跡は、県下では余り例のなかった古墳時代後期の集落をほぼ露呈し、その変遷のあとを辿る良好な資料が得られ、同じく十二ノ后遺跡も最終的には140余りの住居址を検出し、それが前期縄文時代と奈良・平安時代に主体を置く、県下有数の大集落址であることが判明した。縄文中期文化の中心地として著名な諏訪地方で、その先駆をなす前期文化や、奈良・平安期の質、量ともに豊富な資料を得られたことは、当地方は勿論、全国的にみても学界や地域社会に寄与するところ大であるといえよう。

報告書の刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、余寒まだ去りやらない4月から、9月中旬にかけて、長期間この発掘調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査のためにご協力いただいた諏訪中央道事務所、諏訪市当局ならびに同市各地区地権者組合・各区各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和51年3月20日

長野県教育委員会教育長 水 口 米 雄

例 言

- 1 本書は、昭和50年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、長野県諏訪市その4地区の調査報告書である。
- 2 調査結果については、検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおき、他は時間の許す範囲にとどめたため、十分でない点が多いことを了承されたい。
- 3 複合する遺跡のため、縄文、弥生、古墳、奈良・平安の4時期に大別して、編年的に記述してあるが、住居址・集石など遺構の部分では、例えば土壇などについては一括した項もあり、全体的に統一されていない部分もある。
- 4 遺構図中、ドットは焼土を、柱穴・ピット周辺の数字はその床面からの深さをそれぞれ表わしている。住居址の切り合い関係については、遺構が非常に複雑なため、統一的記号を示すことができず、点線、一点鎖線等の用法がまちまちの部分がある。記述の面で理解していただきたい。
- 5 遺物図中、縄文時代石器、土製品、古墳、奈良・平安時代土器、鉄製品、土製品については、観察表を別表として付したが、縄文土器のみそれがないので、図と出土地点の関係のみ記した表を添付してある。
- 6 須恵器、灰釉陶器類については名古屋大学教授檜崎彰一先生の御教示を受けた。
- 7 本書の整理、復元、執筆等の分担は複雑になるので、巻末に一覧表で示した。
- 8 本書掲載の遺物、実測図、写真類などは、上伊那郡辰野町平出、辰野東小学校内、長野県中央道遺跡調査団本部に保管してある。

本文目次

序

例言

目次（本文・挿図・表・別表・図・図版）

I 調査状況

1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託契約	2
3) 長野県中央道遺跡調査会	2
ア 昭和49・50年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿	2
イ 長野県中央道遺跡調査団編成（諏訪班）	3
2 調査の実施と経過	3
1) 調査の経過	3
2) 発掘調査協力者	4
3) 現地指導・視察者	5
3 発掘調査の方法	5

II 諏訪市の概況

III 調査遺跡

1 神送山遺跡（SKOB）	11
1) 位置 2) 遺物 3) まとめ	11
2 金(鐘)鋳場遺跡（SK1B）	13
1) 位置	13
2) 遺構と遺物	13
ア 古墳時代後期土器の手法と器種分類（(i)手法の分類 (ii)土器の分類 (iii)まとめ）	13
イ 縄文時代の出土遺物	25
ウ 弥生時代の遺構と遺物	25
ア) 14号住居址(25) イ) 30号住居址	
エ 古墳時代の遺構と遺物	26
ア) 1号古墳(26)〈経過・遺物の出土状況とその年代・墳丘の構築・内部主体〉	
イ) 1号住居址（以下住居址は略す）(31) ウ) 2号住	エ) 3号住
オ) 4号住	カ) 5号住(32) キ) 6号住 ク) 7号住
ケ) 8号住	コ) 9号住(33) サ) 10号住 シ) 11号住
ス) 12号住	セ) 13号住(34) ソ) 15号住 タ) 16号住
チ) 17号住(35) ツ) 18号住	テ) 19号住(36) ト) 20号住
ナ) 21号住(37) ニ) 22号住	ヌ) 23号住(38) ネ) 24号住

ノ) 25号住	ハ) 26号住(39)	ヒ) 27号住	フ) 28号住(40)
ヘ) 29号住(41)	ホ) 31号住	マ) 32号住(42)	ミ) 33号住
ム) 34号住	メ) 35号住(43)	モ) 36号住(44)	ヤ) 37号住(45)
ユ) 38号住	ヨ) 39号住(46)	ラ) 40号住	リ) 41号住(47)
オ 竪穴状遺構47		
カ 土 塚47		
キ 列石状遺構48		
ク 集 石48		
ア) 集石1(48)	イ) 集石2	ウ) 集石3(49)	エ) 集石4 オ) 集石5
ケ 溝状遺構50		
コ 水鳥紐付蓋平瓶について51		
サ その他の出土遺物55		
ア) 包含層出土の土器(55)			
3) まとめ56		
ア 古墳時代後期土器の時期区分(土器の大別、供膳形態、貯蔵・煮沸形態、I期、II期)56		
イ 1号古墳63		
ウ 住居址・集落65		
3 十二ノ后遺跡(SJNB)68		
1) 位 置68		
2) 遺物の分類68		
ア 縄文土器の分類68		
イ 縄文時代石器の分類73		
ア) 小形石器(73)			
①打製石器	i 石 鏃(75)	ii 石 槍(76)	iii 挟入刺突具 iv 石 匙
	v スクレイパー(78)	vi 複数挟入石器	
	vii 小型有抉頭磨石器	viii 石 錐(79)	
	ix 使用痕のある石核・剥片・原石(80)	x 石核類(81)	
②磨製石器	i 石 錘	ii 軽 石	iii 装身具
イ) 大形石器(82)			
ウ 縄文時代土製品の分類82		
エ 古墳時代土器の器種分類82		
オ 奈良・平安時代土器の器種分類82		
ア) 時代区分(82)	イ) 供膳形態の土器(83)	ウ) 煮沸・貯蔵形態の土器(87)	
カ 古墳~平安時代土錘の分類88		
ア) 形態分類(88)	イ) 破損状態		
3) 遺構と遺物90		
ア 縄文時代の遺構と遺物90		
ア) 縄文時代前期90		

① 1号住	② 6号住 ⁽⁹¹⁾	③ 8号住	④ 10号住 ⁽⁹²⁾
⑤ 11号住	⑥ 12号住 ⁽⁹³⁾	⑦ 15号住 ⁽⁹⁴⁾	⑧ 16号住
⑨ 17号住 ⁽⁹⁶⁾	⑩ 19号住	⑪ 20号住 ⁽⁹⁷⁾	⑫ 21号住
⑬ 22号住 ⁽⁹⁸⁾	⑭ 23号住	⑮ 24号住 ⁽⁹⁹⁾	⑯ 25号住
⑰ 27号住 ⁽¹⁰⁰⁾	⑱ 28号住	⑲ 37号住 ⁽¹⁰¹⁾	⑳ 42号住
㉑ 46号住 ⁽¹⁰²⁾	㉒ 47号住 ⁽¹⁰³⁾	㉓ 52号住	㉔ 56号住 ⁽¹⁰⁴⁾
㉕ 58号住	㉖ 59号住	㉗ 61号住 ⁽¹⁰⁵⁾	㉘ 64号住
㉙ 66号住 ⁽¹⁰⁶⁾	㉚ 68号住	㉛ 69号住	㉜ 73号住 ⁽¹⁰⁷⁾
㉝ 74号住	㉞ 75号住 ⁽¹⁰⁸⁾	㉟ 80号住 ⁽¹⁰⁹⁾	㊱ 86号住
㊲ 90号住 ⁽¹¹⁰⁾	㊳ 92号住	㊴ 93号住 ⁽¹¹¹⁾	㊵ 95号住
㊶ 96号住 ⁽¹¹²⁾	㊷ 98号住	㊸ 102号住 ⁽¹¹³⁾	㊹ 104号住
㊺ 106号住 ⁽¹¹⁴⁾	㊻ 108号住	㊼ 111号住 ⁽¹¹⁵⁾	㊽ 112号住
㊾ 113号住 ⁽¹¹⁶⁾	㊿ 118号住	㊽ 119号住 ⁽¹¹⁷⁾	㊿ 122号住
㊽ 125号住 ⁽¹¹⁸⁾	㊿ 127号住	㊽ 131号住 ⁽¹¹⁹⁾	㊿ 132号住 ⁽¹²⁰⁾
㊽ 135号住	㊿ 138号住 ⁽¹²¹⁾	㊽ 139号住	㊿ 141号住
㊽ 143号住 ⁽¹²²⁾	㊿ 竪穴 1	㊽ 竪穴 2	㊿ 集石 1 ⁽¹²³⁾
㊽ 集石 2	㊿ 集石炉 1	㊽ 方形配列土塚群	
イ) 縄文時代中期..... 124			
① 26号住	② 49号住 ⁽¹²⁵⁾	③ 50号住	④ 65号住 ⁽¹²⁶⁾
⑤ 100号住			
ウ) 縄文時代後期..... 127			
① 38号住	② 39号住	③ 81号住 ⁽¹²⁸⁾	④ 88号住 ⁽¹²⁹⁾
⑤ 99号住 ⁽¹³⁰⁾	⑥ 107号住 ⁽¹³¹⁾	⑦ 110号住	⑧ 137号住 ⁽¹³²⁾
⑨ 140号住 ⁽¹³³⁾			
イ 弥生時代の遺構と遺物..... 134			
ア) 土 塚..... 134			
イ) 土塚出土の土器..... 134			
ウ) 包含層出土の土器..... 134			
ウ 古墳時代の遺構と遺物..... 137			
ア) 古墳時代Ⅰ期..... 137			
① 48号住 ⁽¹³⁷⁾	② 82号住	③ 85号住	④ 116号住 ⁽¹³⁸⁾
⑤ 128号住			
イ) 古墳時代Ⅱ期..... 139			
① 7号住	② 9号住	③ 13号住	④ 14号住 ⁽¹⁴⁰⁾
エ 奈良・平安時代の遺構と遺物..... 140			
ア) 奈良・平安時代Ⅰ期..... 140			
① 31・32号住	② 44号住 ⁽¹⁴¹⁾	③ 77号住 ⁽¹⁴²⁾	④ 114号住
⑤ 133号住 ⁽¹⁴³⁾			

イ) 奈良・平安時代Ⅱ期	143
① 142号住	
ウ) 奈良・平安時代Ⅲ期	143
① 4号住	② 91号住 ⁽¹⁴⁴⁾
③ 117号住	④ 126号住 ⁽¹⁴⁵⁾
エ) 奈良・平安時代Ⅳ期	145
① 30号住	② 35号住 ⁽¹⁴⁶⁾
③ 57号住	④ 123号住 ⁽¹⁴⁷⁾
オ) 奈良・平安時代Ⅴ期	147
① 55号住	② 76号住 ⁽¹⁴⁸⁾
③ 78号住	④ 79号住
⑤ 84号住 ⁽¹⁴⁹⁾	⑥ 94号住
⑦ 105号住 ⁽¹⁵⁰⁾	
カ) 奈良・平安時代Ⅵ期	150
① 40号住	② 51号住
③ 60号住 ⁽¹⁵¹⁾	④ 62号住
⑤ 67号住 ⁽¹⁵²⁾	⑥ 83号住
⑦ 87号住	⑧ 89号住 ⁽¹⁵³⁾
⑨ 97号住	⑩ 101号住
⑪ 103号住 ⁽¹⁵⁴⁾	⑫ 130号住
キ) 奈良・平安時代Ⅶ期	154
① 2号住	② 5号住 ⁽¹⁵⁵⁾
③ 45号住	④ 53号住 ⁽¹⁵⁶⁾
⑤ 54号住	⑥ 63号住 ⁽¹⁵⁷⁾
⑦ 115号住	
ク) 奈良・平安時代Ⅷ期	157
① 36号住	② 43号住 ⁽¹⁵⁸⁾
③ 71号住	④ 120号住 ⁽¹⁵⁹⁾
⑤ 124号住	
ケ) 奈良・平安時代Ⅸ期	159
① 3号住	② 34号住 ⁽¹⁶⁰⁾
③ 41号住	④ 70号住 ⁽¹⁶¹⁾
⑤ 72号住	⑥ 129号住 ⁽¹⁶²⁾
⑦ 134号住	
コ) 奈良・平安時代Ⅹ期	162
① 18号住	② 29号住 ⁽¹⁶³⁾
③ 33号住	④ 121号住 ⁽¹⁶⁴⁾
サ) 時期不詳	164
① 109号住	② 136号住 ⁽¹⁶⁵⁾
オ) その他の遺構と遺物	165
ア) 土壇及び土壇群1・2	165
① 土壇	② 土壇群1・2 ⁽¹⁶⁶⁾
イ) 竪穴	166
① 竪穴3	② 竪穴4 ⁽¹⁶⁷⁾
③ 竪穴4	
ウ) 周溝1	167
エ) 柱列	168
① 柱列1	② 柱列2
オ) フンド	168
① フンド1	② フンド2 ⁽¹⁶⁸⁾
③ フンド3	④ フンド4 ⁽¹⁷⁰⁾
カ) 墓壇1	170
キ) 集列石	170

カ	中世の遺構と遺物	171
4)	まとめ	172
ア	縄文時代の土器・土製品について	172
ア)	縄文前期の土器	172
	① 第Ⅰ群土器 ⁽¹⁷³⁾ ② 第Ⅱ群土器 ⁽¹⁷⁶⁾	
イ)	縄文後期の土器	176
	① 第Ⅳ群土器 ② 第Ⅴ群土器 ⁽¹⁷⁹⁾	
ウ)	縄文時代の土製品	180
イ	縄文時代の石器・石製品について	181
ア)	小形石器	181
	① 住居址出土石器の時期的組成変化 ② 面的広がりの中での石器の偏在 ⁽¹⁸²⁾	
	③ 石質の比較 ⁽¹⁸³⁾ ④ 器種別石器の扱い ⁽¹⁸⁴⁾	
	A—打製石器 (i) 石 鏃 (ii) 石 槍 (iii) 抉入刺突具 (iv) 石 匙	
	(v) スクレイパー (vi) 複数抉入石器 (vii) 小型有抉頭磨石器	
	(viii) 石 錘 (ix) 使用痕ある石核・剥片・原石	
	B—磨製石器 (x) 石 錘 (xi) 装身具	
イ)	大形石器	199
	(i) 打製石斧 (ii) 磨製石斧 (iii) 打製刃器類 (iv) 石 錘	
	(v) 敲打器類 (vi) 磨 石 (vii) 特殊磨石 (viii) 凹 石	
	(ix) 石 皿 (x) 石 棒 (xi) 砥 石 (xii) その他の石器	
	〈付55号住居址床面出土の円礫について〉	
ウ	奈良・平安時代の土器について	213
ア)	東日本の奈良・平安時代土器の編年研究	213
イ)	編年作業上での基礎的視点	214
ウ)	十二ノ后遺跡の奈良・平安時代の土器編年	214
エ)	十二ノ后遺跡の年代比定	218
エ	古墳・奈良・平安時代の鉄製品・石製品・土製品について	223
ア)	鉄製品	223
イ)	石製品	223
	① 石 銚 帯 ② 子持勾玉 ⁽²²⁵⁾	
ウ)	土製品	226
オ	住居址・集落・その他	229
4	荒神山古墳 (調査の経過・墳丘・内部主体・まとめ)	231

挿 図 目 次

挿図1	神送山遺跡近景	11
挿図2	神送山遺跡出土遺物	12
挿図3	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の分類(その1)	15
挿図4	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の分類(その2)	16
挿図5	金鑄場・十二ノ后遺跡出土古墳時代後期土器の器種・手法分類構成一覽	22
挿図6	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の坏各種径高指数相関	23
挿図7	金鑄場1号古墳墳形・石室の復元	28
挿図8	州原6号窯出土土器	53
挿図9	金鑄場遺跡包含層出土灰釉陶器	55
挿図10	坏G・L製作手法分類	58
挿図11	壺Aの変遷	59
挿図12	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器分類(その1)	60
挿図13	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器分類(その2)	61
挿図14	十二ノ后遺跡出土石鏃の形態分類(上)と破損状況分類(下)	75
挿図15	十二ノ后遺跡出土石匙の形態分類(上)と破損状況分類(下)	76
挿図16	十二ノ后遺跡出土スクレイパーの形態分類	77
挿図17	十二ノ后遺跡出土小型有袂頭磨石器の形態分類	79
挿図18	十二ノ后遺跡出土石錘の形態分類	79
挿図19	十二ノ后遺跡出土使用痕ある剥片・石核・原石の形態分類	80
挿図20	十二ノ后遺跡出土石錘の形態分類	81
挿図21	十二ノ后遺跡出土土器(供膳形態)の器種分類	83
挿図22	灰釉陶器を模倣した土器	84
挿図23	坏E法量の分布	84
挿図24	坏E(甲州型坏)の変遷	84
挿図25	十二ノ后遺跡出土土師器甕の分類	86
挿図26	土錘の形態分類(上)と破損状況分類の模式(下)	88
挿図27	外傾指数の求め方	89
挿図28	包含層出土弥生土器拓影	135
挿図29	縄文後期土器の分類(その1)	176
挿図30	縄文後期土器の分類(その2)	177
挿図31	縄文後期土器の分類(その3)	178
挿図32	十二ノ后遺跡住居址出土小形石器類の時期別組成	182
挿図33	千鹿頭社・十二ノ后遺跡住居址出土小形石器分布	183
挿図34	十二ノ后遺跡出土主な小形石器の器種別石質組成	183
挿図35	十二ノ后遺跡出土無茎凹基式石鏃長幅関係	186

挿図36	十二ノ后遺跡出土無茎平基式石鏃長幅関係	187
挿図37	十二ノ后遺跡出土無茎円基式石鏃長幅関係	188
挿図38	十二ノ后遺跡出土無茎尖基式石鏃長幅関係	189
挿図39	十二ノ后遺跡出土石鏃重量分布	190
挿図40	十二ノ后遺跡出土石匙つまみ角分布	192
挿図41	十二ノ后遺跡出土石匙・スクレイパー石質別重量分布	194
挿図42	十二ノ后遺跡出土小型有袂顕磨石器・石錘・土器片錘重量分布(千鹿頭社遺跡分含む)	196
挿図43	十二ノ后遺跡出土打製石斧形態模式図	200
挿図44	十二ノ后遺跡出土打製石斧の形態別重量分布	201
挿図45	十二ノ后遺跡出土磨製石斧の折損部位(左)と使用痕の位置(右)模式図	202
挿図46	十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧形態模式図	202
挿図47	十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧の形態別重量分布	203
挿図48	十二ノ后遺跡出土凹石の形態別分布	205
挿図49	十二ノ后遺跡出土凹石の形態別重量分布	206
挿図50	十二ノ后遺跡55号住居址出土円礫の長さ重量相関図	210
挿図51	十二ノ后遺跡および周辺遺跡出土の供膳形態の器種別占有率	215
挿図52	黒色土器・須恵器坏C時期別法量分布	216
挿図53	坏の外傾指数の時期別分布	216
挿図54	十二ノ后遺跡出土奈良・平安時代土器時期別器種構成	219
挿図55	十二ノ后遺跡出土土錘重量・長さ・最大径相関図	227
挿図56	荒神山古墳出土遺物	233

表 目 次

表 1	諏訪市中央部遺跡一覧	6
表 2	金鑄場・十二ノ后遺跡出土古墳時代後期土器供膳形態の手法・器種構成分類一覧	17
表 3	金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の器種分類一覧	18
表 4	金鑄場 1 号古墳出土箇所遺物一覧	26
表 5	金鑄場遺跡土坑一覧	47
表 6	金鑄場遺跡時期・遺構別出土土器一覧	57
表 7	天竜川中・上流域における古墳時代後期土器の編年	62
表 8	十二ノ后遺跡出土縄文土器分類一覧	69
表 9	十二ノ后遺跡出土縄文時代小形石器器種別出土場所一覧	181
表 10	十二ノ后遺跡出土石鏃型式別破損状況一覧	185
表 11	十二ノ后遺跡出土時期別住居址(多)出土打製石斧の形態別分布	201
表 12	十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧の折損と使用痕	203
表 13	十二ノ后遺跡出土乳棒状石斧(左)と定角石斧(右)の形態別折損一覧	204
表 14	十二ノ后遺跡遺構別出土縄文時代石器一覧	211
表 15	十二ノ后遺跡出土灰釉陶器の産地別個体数	217
表 16	十二ノ后遺跡の年代比定	220
表 17	十二ノ后遺跡出土鉄製品一覧	223
表 18	十二ノ后遺跡出土土錘形態別計測一覧	226
表 19	十二ノ后遺跡出土土錘の遺構・分類別一覧	228

別 表 目 次

別表 1	金鑄場遺跡出土土器法量一覧	234
別表 2	金鑄場遺跡出土土錘一覧	240
別表 3	十二ノ后遺跡土坑一覧	241
別表 4	十二ノ后遺跡出土石器一覧	246
別表 5	十二ノ后遺跡出土土器片錘ならびに土製円板一覧	295
別表 6	十二ノ后遺跡出土古墳時代以降土器法量一覧	296
別表 7	十二ノ后遺跡出土鉄製品一覧	304
別表 8	十二ノ后遺跡出土土錘(縄文以外)	306
別表 9	十二ノ后遺跡出土縄文土器出土地点一覧	308

目 次

神送山・金鑄場遺跡

- 図 1 諏訪市中央部遺跡分布図(1:40,000)
- 図 2 神送山遺跡付近地形図及び調査範囲(1:2,000)
- 図 3 十二ノ后遺跡付近地形及び調査範囲(1:2,000)
- 図 4 金鑄場遺跡付近地形図及び調査範囲(1:2,000)
- 図 5 金鑄場遺跡付近遺構全体図(1:800)
- 図 6 金鑄場遺跡14・15・30号住居址, 30号住居址炉実測図
- 図 7 金鑄場遺跡1号古墳全体実測図
- 図 8 金鑄場遺跡1号古墳石室実測図, 石室内遺物出土状況
- 図 9 金鑄場遺跡1・2号住居址, 溝状遺構1, 土壇2・14実測図
- 図 10 金鑄場遺跡3・4・13号住居址, 溝状遺構6実測図
- 図 11 金鑄場遺跡5・6・7・8・9・10号住居址, 竪穴状遺構1実測図
- 図 12 金鑄場遺跡11・12号住居址, 土壇6・7・15, 12号住居址カマド実測図
- 図 13 金鑄場遺跡16・17号住居址, 17号住居址カマド, 土壇8・9実測図
- 図 14 金鑄場遺跡18号住居址, 同カマド, 同内集石実測図
- 図 15 金鑄場遺跡19・20号住居址実測図
- 図 16 金鑄場遺跡21号住居址, 同カマド実測図
- 図 17 金鑄場遺跡22号住居址, 同カマド実測図
- 図 18 金鑄場遺跡23・24号住居址, 溝状遺構7実測図
- 図 19 金鑄場遺跡25号住居址, 同カマド実測図
- 図 20 金鑄場遺跡26号住居址, 同内集石, 同カマド実測図
- 図 21 金鑄場遺跡27号住居址, 同カマド, 同内集石実測図
- 図 22 金鑄場遺跡28号住居址, 溝状遺構7実測図
- 図 23 金鑄場遺跡29号住居址, 同カマド, 31号住居址, 同内集石実測図
- 図 24 金鑄場遺跡32号住居址, 同カマド, 33号住居址, 同カマド, 溝状遺構7実測図
- 図 25 金鑄場遺跡34号住居址, 同カマド, 同内集石実測図
- 図 26 金鑄場遺跡35号住居址, 同カマド, 40号住居址, 溝状遺構7実測図
- 図 27 金鑄場遺跡36号住居址, 同カマド, 37号住居址実測図
- 図 28 金鑄場遺跡38号住居址, 39号住居址, 同カマド実測図
- 図 29 金鑄場遺跡土壇1・3~13・15実測図
- 図 30 金鑄場遺跡土壇18~21, 集石3・4実測図
- 図 31 金鑄場遺跡列石状遺構1, 集石1・2実測図
- 図 32 金鑄場遺跡溝状遺構2~5実測図
- 図 33 金鑄場遺跡土壇16・17, 溝状遺構7, 集石5実測図
- 図 34 金鑄場遺跡出土縄文土器拓影図

- 図 35 金鑄場遺跡出土縄文土器拓影図
- 図 36 金鑄場遺跡出土弥生土器実測・拓影図
- 図 37 金鑄場遺跡1～11号住居址出土土器実測図
- 図 38 金鑄場遺跡12号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 39 金鑄場遺跡12号住居址(その2), 13号住居址出土土器実測図
- 図 40 金鑄場遺跡15・17号住居址出土土器実測図
- 図 41 金鑄場遺跡16号住居址出土土器実測図
- 図 42 金鑄場遺跡土壇7～9・12出土土器実測図
- 図 43 金鑄場遺跡集石1・2出土土器実測図
- 図 44 金鑄場遺跡一号古墳(その1)出土土器実測図
- 図 45 金鑄場遺跡一号古墳(その2)出土土器実測図
- 図 46 金鑄場遺跡一号古墳(その3)出土土器実測図
- 図 47 金鑄場遺跡18・19号住居址出土土器(その1)実測図
- 図 48 金鑄場遺跡18・19号住居址(その2), 20号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 49 金鑄場遺跡20号住居址(その2), 21号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 50 金鑄場遺跡21号住居址(その2)出土土器実測図
- 図 51 金鑄場遺跡22号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 52 金鑄場遺跡22号住居址(その2), 23・24号住居址出土土器実測図
- 図 53 金鑄場遺跡25・26号住居址出土土器実測図
- 図 54 金鑄場遺跡27号住居址出土土器実測図
- 図 55 金鑄場遺跡28・29号住居址出土土器実測図
- 図 56 金鑄場遺跡31・32・33号住居址出土土器実測図
- 図 57 金鑄場遺跡34号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 58 金鑄場遺跡34号住居址(その2), 39・40号住居址出土土器実測図
- 図 59 金鑄場遺跡35号住居址(その1)出土土器実測図
- 図 60 金鑄場遺跡35号住居址(その2)出土土器実測図
- 図 61 金鑄場遺跡36号住居址出土土器実測図
- 図 62 金鑄場遺跡37・38号住居址出土土器実測図
- 図 63 金鑄場遺跡39号住居址出土土器実測図
- 図 64 金鑄場遺跡集石3・4・5, 溝状遺構7, 包含層出土土器実測図
- 図 65 金鑄場遺跡出土鉄製品実測図
- 図 66 金鑄場遺跡出土銭貨, 土製紡錘車実測図
- 図 67 金鑄場遺跡出土土錘実測図

十二ノ后遺跡

- 図 1 十二ノ后遺跡縄文期遺構全体図
- 図 2 十二ノ后遺跡弥生期以降遺構全体図
- 図 3 十二ノ后遺跡1・10・42号住居址, 土壇2～7実測図

- 図 4 十二ノ后遺跡 2・3・4・5 号住居址，土塚33実測図
- 図 5 十二ノ后遺跡 4・7 号住居址，土塚12・15・17～19・33实測図
- 図 6 十二ノ后遺跡 6・8・16・22・24号住居址，土塚16・19实測図
- 図 7 十二ノ后遺跡 9・12号住居址，土塚1・8・9～13实測図
- 図 8 十二ノ后遺跡11・14号住居址，土塚20・21实測図
- 図 9 十二ノ后遺跡13・28号住居址，13号住居址カマド実測図
- 図 10 十二ノ后遺跡15・25・27号住居址，土塚43・63～65实測図
- 図 11 十二ノ后遺跡17号住居址，土塚85～94实測図
- 図 12 十二ノ后遺跡18・21・138 号住居址，集石 2，土塚45实測図
- 図 13 十二ノ后遺跡19号住居址，竪穴 2・3，墓塚 1，土塚14・41・42・44・66・79・82・98・
99实測図
- 図 14 十二ノ后遺跡20・23号住居址，竪穴 1，土塚15・22～28实測図
- 図 15 十二ノ后遺跡26・29号住居址実測図
- 図 16 十二ノ后遺跡30・34号住居址，土塚104～107・129・132实測図
- 図 17 十二ノ后遺跡31・32号住居址，竪穴 4，土塚71～78・80・81实測図
- 図 18 十二ノ后遺跡33・35・71号住居址実測図
- 図 19 十二ノ后遺跡36・37・47号住居址，土塚83・84实測図
- 図 20 十二ノ后遺跡38・39・40号住居址実測図
- 図 21 十二ノ后遺跡41・104・105・106号住居址実測図
- 図 22 十二ノ后遺跡43・45・100号住居址実測図
- 図 23 十二ノ后遺跡44・49号住居址実測図
- 図 24 十二ノ后遺跡46・56号住居址，竪穴 5，土塚100・101・108 实測図
- 図 25 十二ノ后遺跡48・50号住居址実測図
- 図 26 十二ノ后遺跡51・53・54・62号住居址，土塚 103 实測図
- 図 27 十二ノ后遺跡52・59・61・64号住居址，集石 1，土塚102・127・128・131・135实測図
- 図 28 十二ノ后遺跡55・60・63号住居址実測図
- 図 29 十二ノ后遺跡57号住居址，土塚109・110・122・130・181・182实測図
- 図 30 十二ノ后遺跡58・66号住居址実測図
- 図 31 十二ノ后遺跡65・91号住居址，土塚114・115・119・120・121・139实測図
- 図 32 十二ノ后遺跡67・73・101・139号住居址，土塚116・118・125・126・191 实測図
- 図 33 十二ノ后遺跡68・69・70・89号住居址実測図
- 図 34 十二ノ后遺跡72・97・103・109号住居址実測図
- 図 35 十二ノ后遺跡74・85号住居址，土塚187～190实測図
- 図 36 十二ノ后遺跡75・86・132・135号住居址，土塚146・168～174・177・178 实測図
- 図 37 十二ノ后遺跡76・78・96号住居址実測図
- 図 38 十二ノ后遺跡77号住居址，土塚192～197实測図
- 図 39 十二ノ后遺跡79・80号住居址実測図
- 図 40 十二ノ后遺跡82・83号住居址実測図

- 図 41 十二ノ后遺跡84・87・134号住居址，集石炉1実測図
- 図 42 十二ノ后遺跡90・92号住居址，土塚159実測図
- 図 43 十二ノ后遺跡93・94・98号住居址実測図
- 図 44 十二ノ后遺跡95・102・110号住居址，土塚136実測図
- 図 45 十二ノ后遺跡99号住居址，土塚146・168～175・178実測図
- 図 46 十二ノ后遺跡108・116・141号住居址，土塚123実測図
- 図 47 十二ノ后遺跡111・112・113号住居址実測図
- 図 48 十二ノ后遺跡114・124・128号住居址，土塚141実測図
- 図 49 十二ノ后遺跡115・117・119・133号住居址，土塚140実測図
- 図 50 十二ノ后遺跡118・120・121・129・130号住居址，土塚124実測図
- 図 51 十二ノ后遺跡122・127号住居址，土塚137・142・143・145・166・167実測図
- 図 52 十二ノ后遺跡124号住居址，周溝1，土塚137・140・141・160・166・167・176・179・
180・183実測図
- 図 53 十二ノ后遺跡123・126号住居址，柱列1，フンド4，土塚144実測図
- 図 54 十二ノ后遺跡125・142号住居址，土塚113・117実測図
- 図 55 十二ノ后遺跡131・136・140号住居址実測図
- 図 56 十二ノ后遺跡88号住居址敷石部実測図
- 図 57 十二ノ后遺跡88号住居址柱穴，土塚部実測図
- 図 58 十二ノ后遺跡81号住居址実測図
- 図 59 十二ノ后遺跡81・107・137号住居址実測図
- 図 60 十二ノ后遺跡137号住居址実測図
- 図 61 十二ノ后遺跡81・107・137号住居址実測図
- 図 62 十二ノ后遺跡土塚29～32・34～40・46～62・67～70・85～97実測図
- 図 63 十二ノ后遺跡土塚111・112・138・148～158・161～165・184～186実測図
- 図 64 十二ノ后遺跡土塚群1・2，土塚147・160実測図
- 図 65 十二ノ后遺跡方形配列土塚群1実測図
- 図 66 十二ノ后遺跡フンド1・2実測図
- 図 67 十二ノ后遺跡土層断面図
- 図 68 十二ノ后遺跡土層断面図
- 図 69 十二ノ后遺跡8・11・12・15・16号住居址出土土器実測図
- 図 70 十二ノ后遺跡21・28・37・46・47・56号住居址出土土器実測図
- 図 71 十二ノ后遺跡56・64・66号住居址出土土器実測図
- 図 72 十二ノ后遺跡75・86・93・96・98号住居址出土土器実測図
- 図 73 十二ノ后遺跡102・106・111・112号住居址出土土器実測図
- 図 74 十二ノ后遺跡118・119・131・26・49・50号住居址出土土器実測図
- 図 75 十二ノ后遺跡65・100・38・39・81・99号住居址出土土器実測図
- 図 76 十二ノ后遺跡137号住居址，土塚3・5・66・173・174，遺構外出土土器実測図
- 図 77 十二ノ后遺跡遺構外出土土器実測図

- 図 78 十二ノ后遺跡46・65・38・81・110・137号住居址出土土器実測図
- 図 79 十二ノ后遺跡137号住居址及び遺構外出土土器実測図
- 図 80 十二ノ后遺跡1号住居址出土土器拓影
- 図 81 十二ノ后遺跡6号住居址，8号住居址（その1）出土土器拓影
- 図 82 十二ノ后遺跡8号住居址（その2）出土土器拓影
- 図 83 十二ノ后遺跡8号住居址（その3）出土土器拓影
- 図 84 十二ノ后遺跡10号住居址出土土器拓影
- 図 85 十二ノ后遺跡11号住居址（その1）出土土器拓影
- 図 86 十二ノ后遺跡11号住居址（その2）出土土器拓影
- 図 87 十二ノ后遺跡12号住居址出土土器拓影
- 図 88 十二ノ后遺跡15号住居址出土土器拓影
- 図 89 十二ノ后遺跡16号住居址（その1）出土土器拓影
- 図 90 十二ノ后遺跡16号住居址（その2）出土土器拓影
- 図 91 十二ノ后遺跡16号住居址（その3）出土土器拓影
- 図 92 十二ノ后遺跡17号住居址（その1）出土土器拓影
- 図 93 十二ノ后遺跡17号住居址（その2）出土土器，19号住居址出土土器拓影
- 図 94 十二ノ后遺跡20号住居址出土土器拓影
- 図 95 十二ノ后遺跡21・23号住居址出土土器拓影
- 図 96 十二ノ后遺跡24・25・26・27号住居址出土土器拓影
- 図 97 十二ノ后遺跡37号住居址，38号住居址（その1）出土土器拓影
- 図 98 十二ノ后遺跡38号住居址（その2）出土土器拓影
- 図 99 十二ノ后遺跡38号住居址（その3）出土土器拓影
- 図100 十二ノ后遺跡38号住居址（その4）出土土器拓影
- 図101 十二ノ后遺跡39号住居址出土土器拓影
- 図102 十二ノ后遺跡46号住居址（その1）出土土器拓影
- 図103 十二ノ后遺跡46号住居址（その2）出土土器拓影
- 図104 十二ノ后遺跡47号住居址（その1）出土土器拓影
- 図105 十二ノ后遺跡47号住居址（その2）出土土器拓影
- 図106 十二ノ后遺跡47号住居址（その3）出土土器拓影
- 図107 十二ノ后遺跡50号住居址，52号住居址（その1）出土土器拓影
- 図108 十二ノ后遺跡52号住居址（その2），56号住居址（その1）出土土器拓影
- 図109 十二ノ后遺跡56号住居址（その2），58号住居址，59号住居址（その1）出土土器拓影
- 図110 十二ノ后遺跡59号住居址（その2），61号住居址出土土器拓影
- 図111 十二ノ后遺跡64号住居址（その1）出土土器拓影
- 図112 十二ノ后遺跡64号住居址（その2），65号住居址，66号住居址（その1）出土土器拓影
- 図113 十二ノ后遺跡66号住居址（その2），68号住居址，69号住居址（その1）出土土器拓影
- 図114 十二ノ后遺跡69号住居址（その2），73号住居址出土土器拓影
- 図115 十二ノ后遺跡74号住居址，75号住居址（その1）出土土器拓影

- 図116 十二ノ后遺跡75号住居址(その2)出土土器拓影
- 図117 十二ノ后遺跡80号住居址出土土器拓影
- 図118 十二ノ后遺跡81号住居址出土土器拓影
- 図119 十二ノ后遺跡86号住居址(その1)出土土器拓影
- 図120 十二ノ后遺跡86号住居址(その2), 88号住居址(その1)出土土器拓影
- 図121 十二ノ后遺跡88号住居址(その2), 90号住居址, 92号住居址, 93号住居址(その1)
出土土器拓影
- 図122 十二ノ后遺跡93号住居址(その2), 95号住居址(その1)出土土器拓影
- 図123 十二ノ后遺跡95号住居址(その2), 96号住居址(その1)出土土器拓影
- 図124 十二ノ后遺跡96号住居址(その2), 98号住居址, 99号住居址出土土器拓影
- 図125 十二ノ后遺跡100・102号住居址出土土器拓影
- 図126 十二ノ后遺跡104号住居址, 106号住居址(その1)出土土器拓影
- 図127 十二ノ后遺跡106号住居址(その2)出土土器拓影
- 図128 十二ノ后遺跡108号住居址(その1)出土土器拓影
- 図129 十二ノ后遺跡108号住居址(その2), 110号住居址出土土器拓影
- 図130 十二ノ后遺跡111号住居址出土土器拓影
- 図131 十二ノ后遺跡112号住居址(その1)出土土器拓影
- 図132 十二ノ后遺跡112号住居址(その2)出土土器拓影
- 図133 十二ノ后遺跡113号住居址出土土器拓影
- 図134 十二ノ后遺跡118号住居址出土土器拓影
- 図135 十二ノ后遺跡119号住居址出土土器拓影
- 図136 十二ノ后遺跡122号住居址出土土器拓影
- 図137 十二ノ后遺跡125・127号住居址出土土器拓影
- 図138 十二ノ后遺跡131号住居址出土土器拓影
- 図139 十二ノ后遺跡132号住居址(その1)出土土器拓影
- 図140 十二ノ后遺跡132号住居址(その2)出土土器拓影
- 図141 十二ノ后遺跡135・137号住居址出土土器拓影
- 図142 十二ノ后遺跡139号住居址出土土器拓影
- 図143 十二ノ后遺跡140・141号住居址出土土器拓影
- 図144 十二ノ后遺跡竪穴1, 集石炉1, 集石1出土土器拓影
- 図145 十二ノ后遺跡集石2, 溝状遺構, 土壇1～7出土土器拓影
- 図146 十二ノ后遺跡土壇9～13・15～19, 35～38出土土器拓影
- 図147 十二ノ后遺跡土壇39～45出土土器拓影
- 図148 十二ノ后遺跡土壇22～26, 30・33・34・44・104・107出土土器拓影
- 図149 十二ノ后遺跡土壇45～49・53・57・101・105・106出土土器拓影
- 図150 十二ノ后遺跡土壇107～114・119・120・121出土土器拓影
- 図151 十二ノ后遺跡土壇122～125・127～129出土土器拓影
- 図152 十二ノ后遺跡土壇131・134・136・140・142・143・146・155・159・160出土土器拓影

- 図153 十二ノ后遺跡土塚160・164・166～172・174 出土土器拓影
- 図154 十二ノ后遺跡土塚174・176・180～187・191 出土土器拓影
- 図155 十二ノ后遺跡土塚128・130・132・137～140・148～150・153・176・178出土土器拓影
- 図156 十二ノ后遺跡遺構外(その1)出土土器(I群1類)拓影
- 図157 十二ノ后遺跡遺構外(その2)出土土器(I群2類)拓影
- 図158 十二ノ后遺跡遺構外(その3)出土土器(I群3類)拓影
- 図159 十二ノ后遺跡遺構外(その4)出土土器(I群4類)拓影
- 図160 十二ノ后遺跡遺構外(その5)出土土器(I群4・5類)拓影
- 図161 十二ノ后遺跡遺構外(その6)出土土器(I群5類)拓影
- 図162 十二ノ后遺跡遺構外(その7)出土土器(II群1・2類)拓影
- 図163 十二ノ后遺跡遺構外(その8)出土土器(II群2類)拓影
- 図164 十二ノ后遺跡遺構外(その9)出土土器(II群3類, I群6類, II群4類, III群2・3類)拓影
- 図165 十二ノ后遺跡遺構外(その10)出土土器(IV群1・2類)拓影
- 図166 十二ノ后遺跡遺構外(その11)出土土器(IV群2類)拓影
- 図167 十二ノ后遺跡遺構外(その12)出土土器(IV群2類)拓影
- 図168 十二ノ后遺跡遺構外(その13)出土土器(IV群2・3類)拓影
- 図169 十二ノ后遺跡遺構外(その14)出土土器(IV群3類)拓影
- 図170 十二ノ后遺跡遺構外(その15)出土土器(IV群3・2類)拓影
- 図171 十二ノ后遺跡遺構外(その16)出土土器(IV群2類, IV群, V群1類A)拓影
- 図172 十二ノ后遺跡出土弥生土器(その1)実測図・拓影
- 図173 十二ノ后遺跡出土弥生土器(その2)拓影
- 図174 十二ノ后遺跡第48・116号住居址, 包含層出土土器実測図
- 図175 十二ノ后遺跡第82号住居址出土土器実測図
- 図176 十二ノ后遺跡第128・85号住居址, 包含層出土土器実測図
- 図177 十二ノ后遺跡第7・14号住居址出土土器実測図
- 図178 十二ノ后遺跡第9・13号住居址出土土器実測図
- 図179 十二ノ后遺跡第31・32・44・77号住居址, 包含層出土土器実測図
- 図180 十二ノ后遺跡第114・133号住居址出土土器実測図
- 図181 十二ノ后遺跡142号住居址, 包含層出土土器実測図
- 図182 十二ノ后遺跡4号住居址出土土器実測図
- 図183 十二ノ后遺跡91・117・126号住居址出土土器実測図
- 図184 十二ノ后遺跡30号住居址出土土器実測図
- 図185 十二ノ后遺跡35・57号住居址出土土器実測図
- 図186 十二ノ后遺跡123・76号住居址出土土器実測図
- 図187 十二ノ后遺跡78・84・105号住居址出土土器実測図
- 図188 十二ノ后遺跡55・79・94・51・103・130号住居址出土土器実測図
- 図189 十二ノ后遺跡40号住居址出土土器実測図
- 図190 十二ノ后遺跡60・67・97号住居址出土土器実測図

- 図191 十二ノ后遺跡83号住居址出土土器実測図
- 図192 十二ノ后遺跡 62・89・101号住居址出土土器実測図
- 図193 十二ノ后遺跡 101・87号住居址出土土器実測図
- 図194 十二ノ后遺跡 2号住居址出土土器実測図
- 図195 十二ノ后遺跡 5・45号住居址出土土器実測図
- 図196 十二ノ后遺跡53号住居址(その1)出土土器実測図
- 図197 十二ノ后遺跡53号住居址(その2)出土土器実測図
- 図198 十二ノ后遺跡 115号住居址出土土器実測図
- 図199 十二ノ后遺跡63・36号住居址出土土器実測図
- 図200 十二ノ后遺跡43号住居址出土土器実測図
- 図201 十二ノ后遺跡71・124号住居址出土土器実測図
- 図202 十二ノ后遺跡120・129・134・70・54・72号住居址出土土器実測図
- 図203 十二ノ后遺跡 3号住居址出土土器実測図
- 図204 十二ノ后遺跡41号住居址出土土器実測図
- 図205 十二ノ后遺跡18・29・33号住居址出土土器実測図
- 図206 十二ノ后遺跡 34・121号住居址出土土器実測図
- 図207 十二ノ后遺跡 3号フンド出土土器実測図
- 図208 十二ノ后遺跡 3・2号フンド出土土器実測図
- 図209 十二ノ后遺跡 1・4号フンド, 集石列出土土器実測図
- 図210 十二ノ后遺跡 4・1号フンド, 包含層, 1号墳墓出土土器実測図
- 図211 十二ノ后遺跡包含層出土土器実測図
- 図212 十二ノ后遺跡 1号住居址(その1)出土石器実測図
- 図213 十二ノ后遺跡 1号住居址(その2), 6号住居址, 8号住居址(その1)出土石器実測図
- 図214 十二ノ后遺跡 8号住居址(その2)出土石器実測図
- 図215 十二ノ后遺跡10・11号住居址, 12号住居址(その1)出土石器実測図
- 図216 十二ノ后遺跡12号住居址(その2)出土石器実測図
- 図217 十二ノ后遺跡12号住居址(その3)出土石器実測図
- 図218 十二ノ后遺跡15号住居址出土石器実測図
- 図219 十二ノ后遺跡16号住居址(その1)出土石器実測図
- 図220 十二ノ后遺跡16号住居址(その2)出土石器実測図
- 図221 十二ノ后遺跡16号住居址(その3)出土石器実測図
- 図222 十二ノ后遺跡16号住居址(その4)出土石器実測図
- 図223 十二ノ后遺跡16号住居址(その5)出土石器実測図
- 図224 十二ノ后遺跡16号住居址(その6), 17・19・20号住居址出土石器実測図
- 図225 十二ノ后遺跡21号住居址(その1)出土石器実測図
- 図226 十二ノ后遺跡21号住居址(その2), 22・23・24・25号住居址, 26号住居址(その1)出土石器実測図
- 図227 十二ノ后遺跡26号住居址(その2), 27・28号住居址, 37号住居址(その1)出土石器実測図

- 図228 十二ノ后遺跡37号住居址(その2)出土石器実測図
- 図229 十二ノ后遺跡38号住居址出土石器実測図
- 図230 十二ノ后遺跡39号住居址, 46号住居址(その1)出土石器実測図
- 図231 十二ノ后遺跡46号住居址(その2), 47・49・50号住居址出土石器実測図
- 図232 十二ノ后遺跡52・56・58・61号住居址出土石器実測図
- 図233 十二ノ后遺跡64・65号住居址, 66号住居址(その1)出土石器実測図
- 図234 十二ノ后遺跡66号住居址(その2), 68・69・73号住居址出土石器実測図
- 図235 十二ノ后遺跡74・75号住居址出土石器実測図
- 図236 十二ノ后遺跡81・86・90・92号住居址, 93号住居址(その1)出土石器実測図
- 図237 十二ノ后遺跡93号住居址(その2), 95・96号住居址出土石器実測図
- 図238 十二ノ后遺跡98・99・100・102・104号住居址出土石器実測図
- 図239 十二ノ后遺跡106・108号住居址出土石器実測図
- 図240 十二ノ后遺跡111号住居址出土石器実測図
- 図241 十二ノ后遺跡112号住居址出土石器実測図
- 図242 十二ノ后遺跡113号住居址出土石器実測図
- 図243 十二ノ后遺跡118・119・122・125号住居址, 127号住居址(その1)出土石器実測図
- 図244 十二ノ后遺跡127号住居址(その2), 131号住居址出土石器実測図
- 図245 十二ノ后遺跡132・135・137・139号住居址出土石器実測図
- 図246 十二ノ后遺跡141号住居址, 竪穴1・2, 集石1出土石器実測図
- 図247 十二ノ后遺跡遺構外(その1)出土石器実測図
- 図248 十二ノ后遺跡遺構外(その2)出土石器実測図
- 図249 十二ノ后遺跡遺構外(その3)出土石器実測図
- 図250 十二ノ后遺跡遺構外(その4)出土石器実測図
- 図251 十二ノ后遺跡遺構外(その5)出土石器実測図
- 図252 十二ノ后遺跡遺構外(その6)出土石器実測図
- 図253 十二ノ后遺跡遺構外(その7)出土石器実測図
- 図254 十二ノ后遺跡遺構外(その8)出土石器実測図
- 図255 十二ノ后遺跡遺構外(その9)出土石器実測図
- 図256 十二ノ后遺跡遺構外(その10)出土石器実測図
- 図257 十二ノ后遺跡遺構外(その11)出土石器実測図
- 図258 十二ノ后遺跡遺構外(その12)出土石器実測図
- 図259 十二ノ后遺跡遺構外(その13)出土石器実測図
- 図260 十二ノ后遺跡遺構外(その14)出土石器実測図
- 図261 十二ノ后遺跡遺構外(その15)出土石器実測図
- 図262 十二ノ后遺跡遺構外(その16)出土石器実測図
- 図263 十二ノ后遺跡遺構外(その17)出土石器, 古墳時代, 平安時代以降, 77・34・4・94号住居址, フンド1・3出土石器実測図
- 図264 十二ノ后遺跡土坑2・3・5・7・9・12・15・17・25・26・34・35・40・42出土石器

実測図

- 図265 十二ノ后遺跡土坑44・45・59・66・77・78・83・84・101・107・123・130・142・146・
164・177・179 出土石器実測図
- 図266 十二ノ后遺跡出土打製石斧（その1）実測図
- 図267 十二ノ后遺跡出土打製石斧（その2）実測図
- 図268 十二ノ后遺跡出土磨製石斧（その1—小形）実測図
- 図269 十二ノ后遺跡出土磨製石斧（その2—定角・乳棒状）実測図
- 図270 十二ノ后遺跡出土磨製石斧（その3—乳棒状）実測図
- 図271 十二ノ后遺跡出土打製刃器類，石錘実測図
- 図272 十二ノ后遺跡出土敲打器類実測図
- 図273 十二ノ后遺跡出土磨石実測図
- 図274 十二ノ后遺跡出土特殊磨石，凹石実測図
- 図275 十二ノ后遺跡出土凹石（その1）実測図
- 図276 十二ノ后遺跡出土凹石（その2）実測図
- 図277 十二ノ后遺跡出土凹石（その3）実測図
- 図278 十二ノ后遺跡出土凹石（その4）実測図
- 図279 十二ノ后遺跡出土凹石（その5）実測図
- 図280 十二ノ后遺跡出土石皿実測図
- 図281 十二ノ后遺跡出土縄文時代土製品（その1）土偶実測図
- 図282 十二ノ后遺跡出土縄文時代土製品（その2）土錘（土器片）実測図
- 図283 十二ノ后遺跡出土縄文時代土製品（その3）土錘（土器片）実測図
- 図284 十二ノ后遺跡出土縄文時代土製品（その4）土錘（土器片）実測図
- 図285 十二ノ后遺跡住居址出土鉄製品（その1）実測図
- 図286 十二ノ后遺跡住居址出土鉄製品（その2）実測図
- 図287 十二ノ后遺跡31・32号住居址，フンド1・2・3，墓坛1，グリット（その1）出土石製品・鉄製品実測図
- 図288 十二ノ后遺跡グリット（その2）出土鉄製品実測図
- 図289 十二ノ后遺跡グリット出土古銭実測図
- 図290 十二ノ后遺跡出土土錘（その1）実測図
- 図291 十二ノ后遺跡出土土錘（その2）実測図

図 版 目 次

金鑄場遺跡

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|------------------------|
| 図版 1 | 全景, 1~4号住居址, 溝1 | 図版 16 | 1号古墳 |
| 図版 2 | 5~12号住居址 | 図版 17 | 土坑19・20, 溝7, 集石3 |
| 図版 3 | 14~16号住居址 | 図版 18 | 1・12・16号住居址, 土坑8・9出土遺物 |
| 図版 4 | 18号住居址 | 図版 19 | 1号古墳出土遺物 |
| 図版 5 | 19・20号住居址 | 図版 20 | 1号古墳出土遺物 |
| 図版 6 | 21・22号住居址 | 図版 21 | 1号古墳出土遺物 |
| 図版 7 | 22・23号住居址 | 図版 22 | 1号古墳出土遺物 |
| 図版 8 | 24・25号住居址 | 図版 23 | 18~22号住居址出土遺物 |
| 図版 9 | 26号住居址 | 図版 24 | 22・23・25・27号住居址出土遺物 |
| 図版 10 | 27号住居址 | 図版 25 | 26・34・35号住居址出土遺物 |
| 図版 11 | 28~30号住居址 | 図版 26 | 28・29・31・33号住居址出土遺物 |
| 図版 12 | 30・31号住居址 | 図版 27 | 39号住居址出土遺物 |
| 図版 13 | 33・34号住居址 | 図版 28 | 34~36・38号住居址出土遺物 |
| 図版 14 | 34・36・37号住居址 | 図版 29 | 鉄製品 |
| 図版 15 | 38・39号住居址 | 図版 30 | 土錘他 |

十二ノ后遺跡

- | | | | |
|-------|---|-------|---------------------|
| 図版 31 | 全景 | 図版 46 | 100・102・111~113号住居址 |
| 図版 32 | 住居址群 | 図版 47 | 116~119号住居址 |
| 図版 33 | 1~3・5~8・10・13・16・20・22・
24・28・42号住居址 | 図版 48 | 竪穴1・3・4, フンド3 |
| 図版 34 | 11~14号住居址 | 図版 49 | フンド2~4 |
| 図版 35 | 9・15・18・20・21・23・27・138号住居址 | 図版 50 | 集列石 |
| 図版 36 | 20・23・26号住居址 | 図版 51 | 土坑 |
| 図版 37 | 29・33・36・37・46号住居址 | 図版 52 | 土坑, 墓坑1 |
| 図版 38 | 43・48・50・55・60・61・142号住居址 | 図版 53 | 方形配列土坑群 |
| 図版 39 | 56・57・65号住居址 | 図版 54 | 方形配列土坑群, 土坑 |
| 図版 40 | 68~70・73~75・85・89号住居址 | 図版 55 | 縄文土器(第I群1類) |
| 図版 41 | 75・77・78・86・132・135号住居址 | 図版 56 | 縄文土器(第I群1・4類) |
| 図版 42 | 79~81号住居址 | 図版 57 | 縄文土器(第I群2類) |
| 図版 43 | 82~84・134号住居址 | 図版 58 | 縄文土器(第I群2類) |
| 図版 44 | 88・93号住居址 | 図版 59 | 縄文土器(第I群2類他) |
| 図版 45 | 95・99・110号住居址 | 図版 60 | 縄文土器(第I群3類) |
| | | 図版 61 | 縄文土器(第I群3類) |

- 図版 62 縄文土器 (第Ⅰ群 3類)
 図版 63 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 64 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 65 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 66 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 67 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 68 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 69 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類)
 図版 70 縄文土器 (第Ⅱ群 1類)
 図版 71 縄文土器 (第Ⅱ群 1類)
 図版 72 縄文土器 (第Ⅱ群 1類)
 図版 73 縄文土器 (第Ⅰ群 4・5類, Ⅱ群 1・2類)
 図版 74 縄文土器 (第Ⅱ群 2類)
 図版 75 縄文土器 (第Ⅱ群 1・2類)
 図版 76 縄文土器 (第Ⅰ・Ⅱ群)
 図版 77 縄文土器 (第Ⅱ群 4類)
 図版 78 縄文土器 (第Ⅱ群 4類)
 図版 79 縄文土器 (第Ⅲ群 3類)
 図版 80 縄文土器 (第Ⅳ群)
 図版 81 縄文土器 (第Ⅳ群)
 図版 82 縄文土器 (第Ⅳ群)
 図版 83 縄文土器 (第Ⅳ群 1～3類)
 図版 84 縄文土器 (第Ⅳ群 2～5類)
 図版 85 縄文土器 (第Ⅳ群 2類)
 図版 86 縄文土器 (第Ⅳ群 4・5類)
 図版 87 縄文土器 (第Ⅳ群 4～6類, V群 1類)
 図版 88 弥生土器 (包含層)
 図版 89 弥生土器 (包含層)
 図版 90 弥生土器 (土坑)
 図版 91 奈良・平安時代土器 (その 1)
 図版 92 奈良・平安時代土器 (その 2)
 図版 93 奈良・平安時代土器 (その 3)
 図版 94 奈良・平安時代土器 (その 4)
 図版 95 奈良・平安時代土器 (その 5)
 図版 96 奈良・平安時代土器 (その 6)
 図版 97 奈良・平安時代土器 (その 7)
 図版 98 奈良・平安時代土器 (その 8)
 図版 99 奈良・平安時代土器 (その 9)
 図版 100 奈良・平安時代土器 (その 10)
 図版 101 奈良・平安時代土器 (その 11)
 図版 102 奈良・平安時代土器 (その 12)
 図版 103 奈良・平安時代土器 (その 13)
 図版 104 縄文石器 (石鏃)
 図版 105 縄文石器 (石鏃, 石槍, 袂入刺突具, 石匙)
 図版 106 縄文石器 (石匙)
 図版 107 縄文石器 (スクレイパー)
 図版 108 縄文石器 (小型有快顕磨石器)
 図版 109 縄文石器 (複数袂入石器)
 図版 110 縄文～平安時代石器 (石錐, 装身具, 紡錘車)
 図版 111 縄文石器 (使用痕ある剥片・石核・原石)
 図版 112 16号住居址出土小形石器 (その 1)
 図版 113 16号住居址出土小形石器 (その 2)
 図版 114 縄文石器 (打製石斧)
 図版 115 縄文石器 (打製石斧)
 図版 116 縄文石器 (小型磨製石斧)
 図版 117 縄文石器 (定角石斧, 乳棒状石斧)
 図版 118 縄文石器 (乳棒状石斧)
 図版 119 縄文石器 (打製刃器, 石錘)
 図版 120 縄文石器 (蔽打器)
 図版 121 縄文石器 (磨石, 石棒)
 図版 122 縄文石器 (特殊磨石, 凹石)
 図版 123 縄文石器 (凹石)
 図版 124 鉄製品 (その 1)
 図版 125 鉄製品 (その 2)
 図版 126 土器片錘
 図版 127 土錘, 土偶, 土製品
 図版 129 石製品 (石帯, 子持勾玉)

荒神山古墳

- 図版 128 和鏡, 鉄製品

〈付図 十二ノ后遺跡における奈良・平安時代の土器編年〉

I 調査状況

1. 調査にいたるまで

1) 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

買収された用地は、昭和52年3月現在6,826,218㎡の広さに及ぶ。ルート内に含まれる埋蔵文化財包蔵地は195遺跡を数え、調査対象面積も1,125,495㎡以上に及んでいる。昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、昭和45年までの数年にわたり度重なる協議が日本道路公団名古屋支社との間に続けられ、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で7年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和50年度末までに184遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持たないので、「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。調査団の運営には、団長と共に、県教育委員会文化課に置いた指導主事が調査主任として現地へ出向し、当たっている。昭和45・46年度には調査主任2名、調査班2班編成であったが、昭和47年度から増員され6名の調査主任が数班編成で業務に当たることになった。

昭和49年度は、4月に宮田村内その2地区1遺跡（調査費778万円）、岡谷市その1地区4遺跡（調査費1032.8万円）、諏訪市内その3地区6遺跡（調査費2761.3万円）、鼎町その2地区1遺跡（調査費302.3万円）を契約した。更に7月には岡谷市その2地区6遺跡（調査費2193.3万円）を契約している。その後、鼎町その2地区は遺構統出のため調査費502.3万円と契約変更、諏訪市内その3地区は十二の后・金鑄場・荒神山遺跡での遺構統出と、土砂運搬のためのパイロット道路早期着工のため調査遺跡を変更し、岡谷市その2地区3遺跡（調査費2116.9万円）、諏訪市内その3地区6遺跡（調査費3514.4万円）と契約変更し、49年11月25日発掘作業を終了し、50年3月20日業務を終了している。

昭和50年度は、4月14日に岡谷市内その3地区3遺跡（調査費3,302.6万円）、諏訪市内その4地区4遺跡（調査費3,327.8万円）、茅野市・原村・富士見町内6遺跡（調査費2,767.7万円）を契約し、3班編成により調査を開始し、各調査区共多大の成果をあげ、調査区により終了時期の差はあるが、原村塩水（阿久）遺跡の発掘調査を最後に50年11月17日発掘調査を終了し、51年3月20日業務を終了している。なお、原村大石遺跡は遺構統出により、調査面積が増大し、塩水（阿久）・居沢尾根遺跡が調査未了となったので、昭和51年1月茅野・原・富士見町内4遺跡と契約変更している。

茅野市・原村地籍の山林中に、新しく8遺跡が発見されたが、本年度の調査体制が整わないため、公団名古屋建設局と協議の結果、昭和51年度に実施する事に決定している。

2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施工前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会は、公団と現地協議など度重なる事務接衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査費・調査期間・調査方法が定められる。その後相互の委託・受託の文書の往来があって、発掘調査委託契約が締結される。契約書の内容については、調査発足以来その条項に変更がないので「諏訪市その1・2」等の既刊報告書を参照していただき、関係分のみ記載したい。

- 1 委託事務の名称 中央道埋蔵文化財発掘調査 諏訪市内その3・4
- 2 委託期間と金額 昭和49年4月10日から昭和50年3月20日まで(その3) 35,144,000円
昭和50年4月14日から昭和51年3月20日まで(その4) 33,278,000円

このうち、昭和49年度の千鹿頭社・本城・女帝垣外・荒神山4遺跡の報告書は年度内に刊行を終了し、50年度は後続調査した金鑄場・十二ノ後の2遺跡と新しい神送山、年度終了間際、工事中に発見された荒神山遺跡地内の古墳の4遺跡の報告書となる。

3) 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。調査会の規約は「諏訪市その1・2」にあり、また、県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないのでそれぞれ省略する。昭和49・50年度役員・諏訪市地内調査団組織はつぎのとおりである。

ア 昭和49・50年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿(昭和49・50年10月現在)

(○印49年度のみ、●印50年度のみ)

顧問	一志 茂樹	(県文化財専門委員)		
会長	水口 米雄	(県教育長)		
理事	金井喜久一郎	(県文化財専門委員)	米山 一政	(県文化財専門委員)
	樋口 昇一	(県文化財専門委員)	原 嘉藤	(信濃史学会理事)
	木内 仁平	(県教育次長)	太田 波夫	(県文化課長)
	○馬場 昌人	(飯田教育事務所長)	瀬尾 忠幸	(伊那教育事務所長)
	○羽生 保吉	(下伊那地区教委協議会長)	坂井 喜久	(上伊那地区教委協議会長)
	笠原 信平	(諏訪地区教委協議会長)	下島 節	(県町教育長)

林 金茂	(宮田村教育長)	熊谷 大一	(辰野町教育長)
久保 義幸	(岡谷市教育長)	中村 文武	(諏訪市教育長)
木川 千年	(茅野市教育長)	小泉 真澄	(原村教育長)
小林 繁治	(富士見町教育長)	○倉田 利久	(下伊那教育会長)
○木下 衛	(上伊那教育会長)	○藤森 純一	(諏訪教育会長)
林 茂樹	(長藤小学校長)	●岡西 良治	(諏訪教育会長)
監事 小栗栄重郎	(県文化課課長補佐)	田中一太郎	(諏訪市社会教育課長)
幹事○金井 汲次	(県文化課文化財係長)	泉 勇一郎	(県文化課文化係長)
●浅井 舎人	(県文化課文化財係長)	堀内規矩雄	(県文化課主事)
●浅川 欽一	(県文化課主事)	平野 益雄	(県文化課主事)
宮島 孝明	(県文化課主事)	○佐藤 陸	(飯田教育事務所主任)
○斉藤 文男	(飯田教育事務所総務課長)	矢野 公一	(伊那教育事務所総務課長)
○下平 久雄	(飯田教育事務所主事)	唐沢 茂門	(伊那教育事務所主任)
久保田秀明	(伊那教育事務所主任)	○麻生 弘明	(伊那教育事務所主任)
星野 政清	(伊那教育事務所社会教育課長)	武井今朝人	(伊那教育事務所主任)
土屋喜久治	(伊那教育事務所諏訪支所長)	今村 善興	(県文化課指導主事)
桐原 健	(県文化課指導主事)	山田 瑞穂	(県文化課指導主事)
伴 信夫	(県文化課指導主事)	宮沢 恒之	(県文化課指導主事)
丸山徹一郎	(県文化課指導主事)	岡田 正彦	(県文化課指導主事)

イ 長野県中央道遺跡調査会調査団編成（諏訪班）

調査団長	大沢和夫				
調査主任	山田瑞穂	伴 信夫	宮沢恒之	岡田正彦	今村善興（総括）
調査員	辰野伝衛	根津清志	福沢幸一	小松原義人	堀 知哉 細川光貞 木下平八郎
	平出一治	松永満夫	郷道哲章	高桑俊雄	田畑辰雄 小林正春 福島邦男
	三浦孝一	村上 孝	矢島宏雄	長沼英光	
調査補助員	片山 徹	山内志賀子	板倉たせ子	丸山雅子	

2. 調査の実施と経過

1) 調査の経過

昭和49年度は、下伊那・上伊那・諏訪3郡下で調査が実施されたが、とくに諏訪地区では、48年以來、遺構・遺物の多出する遺跡にあたり、調査体制自体一わけても調査期間やその後の整理・報告書出版等に関連して種々の問題が生じた年度であった。こうした状況下で調査された金鉢場以下6遺跡のうち、金鉢場・十二ノ后両遺跡は大幅に期間の延長を必要とする状況となり、工事終了直前発見された荒神山遺跡内の古墳とともに50年度へ継続されることになった。先の2遺跡を除く千鹿頭社・本城・女帝垣外・荒神山

4遺跡については、『諏訪市—その3』に報告済みなので省略し、以下、簡単に49～50年度にわたる調査について一覧表にして示すにとどめたい。なお、49・50両年度を通し、4遺跡の発掘調査に要した実日数のみでも、400日以上に達し、延人員は1万人をこす数字となっている。

遺跡名	全 体 面 積 m ²	用 地 内 面 積 m ²	調 査 面 積 m ²	昭 和 49 年 度					昭 和 50 年 度								
				7月	8月	9月	10月	11月	12～3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10～3月	
神送山	4,000	4,000	1,600														
金 鑄 場	18,000	12,925	3,200			25		9						15		17	
十二ノ后	20,000	11,125	3,000	8		5		4	12				18			17	
荒神山古墳	7,000	5,375	.370												18	4	

※荒神山古墳の面積数字は一般遺跡分

2) 発掘調査協力者

発掘作業は諏訪市当局の好意で応募した下記のような市民の方々を中心に、近隣市町村からも参加者を
得て実施した。

〈諏訪市〉

青柳 卷子	赤沼 絹子	浅川 淑恵	有賀 仲人	有賀二三人	飯野 竹由	伊藤 倭男
伊藤 大三	伊藤はなえ	伊藤 陸二	伊藤よしえ	岩波けさ江	岩波 輝明	岩波やよひ
小笠原礼次	小川 健二	小沢 タイ	小野塚信雄	折井 敦	河西 勇	笠原あさ子
笠原 勘治	笠原 重幸	笠原としえ	笠原 智明	笠原はる子	笠原 信	笠原 とり
春日かよ子	春日 多鶴	春日 哲子	金井 三郎	金子 克幸	金子 菊子	金子 哲治
金子 都	金子ヤチヨ	金田 一郎	上條 俊一	唐木 孝雄	北沢 志叙	北原 ふく
小泉いそ子	小泉 松平	小林 常子	小林 はな	小林みさえ	小林八千代	小松 賢次
小松 大三	小松とよみ	後町 弘	五味 とき	佐久間 香	佐藤 剛	篠原 悟
下島とし子	城倉けさみ	関 すみ子	関 つね	関 ツルギ	関 花	関 弘
関 雅一	関 ミヨシ	関 喜子	高山 なか	竹渕ちか子	竹渕うけ子	竹渕はつ子
田中 千之	中沢 明	中島 きみ	中島 保男	長峰 ウタ	新村 和好	野沢 明子
野沢 和代	野沢 博子	野沢 正美	野村しめよ	服部 達雄	原 お志ん	原 トメ
原 よし子	平林登喜子	平林 朝治	平林 中子	藤森 栄一	藤森佐久恵	藤森 しず
藤森 俊孝	藤森 正子	藤森 光子	藤森ミツ子	保坂 泰正	細野 たつ	増沢 政光
松沢 晶	三品 隆司	水野 淳	宮坂 一正	宮阪 庄平	宮坂みさ子	宮下 武
向山 利見	森野 勇	森野さとみ	守屋 かの	守屋くにゑ	守矢 たつ	守屋としえ
矢崎つな子	矢崎みどり	矢沢 静子	矢島 楨郎	矢花 民次	矢花 保朗	小口 卓郎

〈岡谷市〉

味沢 一子	味沢さよ子	味沢 千恵	味沢千万喜	味沢 正子	鮎沢 静子	鮎沢はつ子
伊藤 三郎	伊藤 茂	今井 国雄	円山 計意	小口 鈴子	小坂けさ子	小坂しげの
小坂 節子	小坂千恵子	小坂 寛	小坂 裕子	小坂まち子	小坂 嘉子	加賀 寛
笠原 良子	片倉けさの	加藤イホコ	栗山せき子	小泉 酉男	小林 昭子	小林 常子
小林三八子	小松みつ子	斉藤 正	高沢 富治	田中てる子	中村 亀義	花岡 公子

花岡 清子	花岡千代子	花岡 富子	花岡 博茂	花岡 弘子	花岡ふく子	花岡まさ子
花岡みつ子	花岡八重子	藤沢 藤雄	星野 清治	松下 永喜	宮沢 隆良	向山すみ子
山岡 真一	山田 忠夫	山田 兼敬	横内ゆき子	陸川 三郎		
〈下諏訪町〉		〈辰野町〉		〈飯田市〉		〈下伊那郡〉
栗沢 義雄	高木 幸雄	武井スミエ	赤羽 義洋	飯島 洋一	今村 俊文	
〈事務局〉鈴木御恵子 丸山 優子 田中 惇子 春日 房子						

3) 現地指導・視察者（順不同）

日本道路公団	名古屋建設局総務管理課長代理他・諏訪工事事務所所長・同副所長・同庶務課長・同工事長他
県教委事務局	県文化課課長・同文化財係長・同文化財担当指導主事・義務教育課課長他・伊那教育事務所所長・同総務課長・同主事・中央道遺跡調査会理事会・同伊那事務所係員他
諏訪市当局	市長・教育委員長他・教育長・社会教育課長・同係長・同主事・企画課課長・市議会議員・市文化財審議委員他
研究者	一志茂樹・中村龍雄・細野正夫・林茂樹・江坂輝彌・徳丸始朗・藤森みち子・武藤雄六・武居幸重・樋口昇一・戸沢充則・神村透・宮坂光昭・河野春江・矢崎忠衛・土肥孝・梅沢太久夫・松下芳叙・会田進・高島徹・吉村進・小林公明・長崎元広・唐木孝雄・竹内三千夫・星田享二・八木光則・鶴飼幸雄・慶応大学考古学研究会・笹沢浩・井上肇・河西清光・伊藤克司・斉藤弘道・松井征幸
その他	諏訪市小中学校長会・高校教文会議諏訪地区社会科研究会・岡谷東高校地歴クラブ・諏訪西中学校郷土班・市城北小学校教頭及び児童・市公民館・中州公民館老人学級・真志野地区敬老会・地券者組合役員・東映教育映画企画班・同撮影班・地元諏訪市住民の皆さん多数

3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊される遺跡を事前に記録保存することを目的とし、どのような時期の遺構・遺物かをさぐり、それを報告書としてまとめることが主眼となる。

遺跡の範囲・時期は分布調査により確認されているため、中央道がいかなる部分を通過するかによって4区分し、遺跡名の略記号の末尾にそれを付した。A—遺跡の頂部、B—遺跡の中央部、C—遺跡の先端部、0—全面がそれである。用地内の遺跡全面に2m間隔の基準方眼グリットを設定し、中央道の幅員方向に01～99の2桁の数字を用い、それに直交する長軸方向にA～Yの25のアルファベットを用い、50m毎にA地区…B地区…とした。但し、中央道のセンターライン（20mおきにセンター杭あり）は50とする。これにより25地区1250mがとれる。だからそれぞれのグリット地点は「SHJC AC55」の如く表示できる。これは遺跡の先端部を中央道がかかる本城遺跡のA地区C55地点を意味する。グリット設定後、適宜それを掘り、遺構が確認されるとその周辺を拡張する方法をとった。詳細な調査方法については、「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査方針」と云う小冊子にまとめたものを基にしている。（今村 善興）

Ⅱ 諏訪市の概況

諏訪市の自然的・歴史的環境や、中央道の通過する諏訪湖西・湖南地区の遺跡分布や特色については、「諏訪市その1・2地区」(昭和48年度)・「同その3地区」(昭和49年度)に掲載してあるので、今回は省略し、その後新たに諏訪市教育委員会で作成した、遺跡地名表と関係地区の分布図のみ収録させていただくことにした。

表1 諏訪市中央部遺跡一覧(図1)

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代			古墳・平安時代			中世	備考	
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵			灰粘
1	ミシャグチ	大和 1											○				
2	曾根	諏訪湖底(大和沖)	○	○													
3	大和	大和 2				○						○	○				石棒
4	山口	〃				○											
5	台御堂	〃				○											石棒
6	ウルシガイト	〃				○							○				
7	榎田	〃											○				
8	篠鉢古墳	〃															
9	新井	大和 3				○							○				
10	中浜町	湖岸通 3											○				骨角器
11	天神山	湯の脇 1	○														
12	天神山道上	茶臼山	○														
13	天神山道下	〃	○														
14	片羽町A	諏訪 1		○	○	○	○						○				
15	片羽町B	〃				○											
16	温泉寺横	湯の脇 1	○														
17	北踊場	立石	○														
18	踊場	〃				○											
19	踊場下	〃				○											
20	上ノ平	茶臼山	○														
21	手長丘	〃	○										○				
22	合戦場	桜ヶ丘	○														
23	踊場古墳	立石											○				
24	二本松	茶臼山											○	○			
25	立石	立石	○														
26	カゴ石	双葉ヶ丘				○											洞穴(黒曜石原石)
27	唐沢	〃				○	○						○	○		○	
28	山の神古墳	〃											○				

番号	遺跡名	所在地	先 土 器	縄文時代						弥生時代		古墳・平安時代			中 世	備 考	
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵			灰軸
29	穴場	双葉ヶ丘					○	○					○				敷石住居址
30	百姓地	〃					○	○					○				〃
31	茶白山	桜ヶ丘	○													○	
32	茶白山古墳群	〃															古墳3基
33	手長丘古墳	諏訪	2														
34	綿の芝古墳	岡村	1					○					○	○			直刀・馬具
35	綿の芝	〃						○									
36	小川屋前	諏訪	2					○									石棒
37	不動尊前	岡村	1					○									〃
38	貞松院入口	諏訪	2					○									
39	南沢	元町						○					○				
40	地藏寺墓地	〃						○					○				
41	若宮	〃					○	○									
42	諏訪中学校	横						○					○	○			
43	カジバ畑	双葉ヶ丘											○		○		
44	尾玉	〃											○	○			
45	清陵高校庭	元町						○					○	○			
46	小ダッショ	〃						○									
47	三の丸	高島	1										○				
48	高島城	〃						○					○	○		○	人骨・鹿骨
49	御蔵島	〃						○	○				○	○			旧半島
50	大石古墳	清水	2										○	○	○		直刀・鉄鍔
51	清水窪	清水	1					○					○				〃
52	アカッパナ	赤羽根						○					○	○			
53	赤羽根古墳	〃															
54	大黒様	〃						○	○	○			○				
55	先の宮団地	角間新田						○					○	○			
56	山の神	〃						○	○								
57	武津通り	四賀武津											○				
58	烽火台	四賀細久保														○	土壇
59	細久保通り	〃						○					○				
60	親塚	四賀普門寺														○	経塚(和鏡・数珠)
61	伝普門院跡	〃														○	
62	御曾儀社	〃											○			○	梵字石柱
63	有賀氏祝神	〃						○					○	○			石棒・古式須恵器
64	ミシヤグチ平	〃											○	○		○	銅剣形石器
65	桑原城址	四賀桑原														○	土壇・空濠・曲輪
66	太夫窪	〃														○	
67	寺家	〃														○	

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代		古墳・平安時代		中世	備考		
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後			土師	須恵
68	四賀小学校々庭	四賀桑原					○						○			
69	四賀小上	〃											○	○		
70	山崎通り	〃				○					○		○			勾玉
71	金山通り	〃				○							○	○		直刀
72	角道通り	〃											○			〃
73	沢久保	〃				○										
74	角道古墳1	〃														直刀・玉
75	角道古墳2	〃														〃
76	角道古墳3	〃														〃
77	御頭ミシヤグチ古墳	〃														
78	四ツ塚古墳A	四賀桑原丸山腰														須恵器
79	四ツ塚古墳B	〃														直刀・鉄鏃・玉
80	四ツ塚古墳C	四賀桑原南沢日向														直刀・鉄鏃・玉・馬具
81	四ツ塚古墳D	〃														直刀・農具・馬具
82	金山古墳	四賀桑原金山通り														直刀・玉
83	藤塚古墳	四賀桑原新林越														鉄鏃・人骨
84	丸山	四賀桑原丸山			○								○			
85	仏法寺北	四賀桑原				○										
86	廻場古墳	四賀桑原廻場														
87	昼タタエ	四賀桑原											○	○		
88	大門窪下	四賀神戸				○										石棒
89	扇平通り	〃											○	○		
90	在家屋敷	〃											○	○	○	石仏
91	オオガミ屋敷	〃				○										石棒
92	神ノ木神社	〃				○										
93	神戸神社	〃				○										古墳
94	頼重院	〃													○	五輪
95	灰塚古墳	〃														
96	仲畑	中州神宮寺											○	○		
97	矢穴古墳	四賀神戸														須恵器
98	矢穴	〃				○										
99	上ノ矢穴	〃				○							○	○		鉄器
100	神戸上	〃				○								○		
101	八幡社	〃				○										
102	神送り山	有賀				○							○			(中央道発掘)
103	鑄あげ	有賀鑄あげ			○	○	○									
104	コシキ原	有賀二本松				○							○	○		
105	鐘(金)鑄場	有賀金鑄場				○	○						○	○	○	(中央道発掘)
106	千鹿頭社	有賀宮垣外				○	○	○					○	○	○	〃

番号	遺跡名	所在地	先 土 器	縄文時代					弥生時代			古墳・平安時代			中 世	備 考	
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵			灰釉
107	十二ノ后	有賀宮垣外			○	○	○	○					○	○			(中央道発掘)
108	女帝垣外	有賀町屋					○	○					○	○			(〃)
109	女帝塚	〃											○	○			剣形石製模造品
110	久保塚古墳	有賀															直刀
111	丹羽屋敷	〃											○	○	○		(「女帝垣外」として中央道発掘)
112	清水	〃				○	○	○					○	○			(中央道発掘)
113	清水古墳	〃															
114	小丸山古墳	有賀小丸山															(中央道発掘)
115	平林	有賀平林				○							○				直刀
116	有賀城址	有賀													○		土塁・石垣
117	中道	〃											○				
118	鐘鑄場古墳	有賀鐘鑄場															(中央道発掘)
119	大安寺	湖南北真志野			○	○	○	○					○	○	○		
120	大安寺南	〃					○										(「平林」として中央道発掘)
121	塚屋古墳	〃															直刀・馬具・金環
122	クルミ沢社	〃				○							○	○			石棒
123	中塚古墳	〃															蕨手刀
124	北山の神古墳	〃															
125	西原古墳	〃															
126	本城	〃			○	○	○				○		○	○			(中央道発掘)
127	的場	湖南真志野					○										
128	山姥塚古墳	〃															
129	真弓塚古墳	湖南南真志野															
130	御屋敷	〃				○	○										
131	金山北	〃					○										(中央道発掘)
132	金山窯址	〃															
133	馬場通り	〃					○										
134	南沢	〃				○	○										
135	西沢	〃				○	○										
136	福松砥沢	〃					○						○		○		
137	砥沢	湖南大熊					○										
138	城山	〃				○	○	○				○	○		○		(中央道発掘)
139	大熊城址	〃					○	○				○			○		(中央道発掘)
140	荒神山	〃				○	○	○			○	○			○		(中央道発掘)
141	荒神山上	〃				○	○	○									
142	荒神山1号墳	〃															(中央道発掘) 蕨手刀・和鏡
143	荒神山2号墳	〃															
144	大熊御頭屋敷	〃											○	○			
145	双子塚古墳	〃															直刀・勾玉・金環

番号	遺跡名	所在地	先 土 器	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代			中 世	備 考	
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵	灰釉			
146	塚屋古墳	湖南大熊																
147	大熊道上	〃															○	(中央道発掘)
148	三月畑	〃				○	○										○	馬具
149	新城	〃															○	石段状遺構
150	片山古墳	〃																直刀・玉・鏡
151	湯の上	〃				○	○											
152	宮の脇墓地	中州神宮寺				○												
153	フネ古墳	湖南大熊																
154	入込畑	中州神宮寺										○	○					
155	諏訪神社上社地	〃					○						○		○	○		
156	神宮寺跡	〃															○	三重塔礎石
157	武居畑	〃				○		○					○	○	○	○		白磁
158	保科畑	〃											○				○	
159	武居城址	〃											○	○	○	○		
160	根祝屋敷	〃															○	
161	大祝屋敷	〃															○	
162	金子城址	湖南下金子											○				○	
163	有賀峠積石塚	有賀真虫久保											○				○	古銭一貫目
164	仙妙塚	〃															○	
165	明星屋敷	有賀明星				○	○	○						○	○	○		
166	明星池	〃				○	○	○										
167	赤実口	湖南梶平					○											
168	花木久保	湖南後山					○											

Ⅲ 調査遺跡

1. 神送山遺跡 (SKOB)

1) 位置 (挿図1, 図1・2)

本遺跡は、岡谷市と諏訪市との境、諏訪市豊田有賀にあり、諏訪盆地の西縁を形成する西山山系の中腹下端に位置している。隣接する馬捨場遺跡 (昭和50年度調査) の高台から東につき出した通称神送山と呼ばれる標高 835m の丘陵を中心とした非常に起伏に富む地形の上に立地している。丘陵の東側から北側にかけては急激に傾斜し、一段低い所に諏訪湖へ向かってテラス状の緩傾斜面が続く。丘陵の北側から西側にかけては凹地を隔てて通称有賀公園と呼ばれる高台があり、そこから東に張り出す尾根には次章に記す金鑄場遺跡がある。

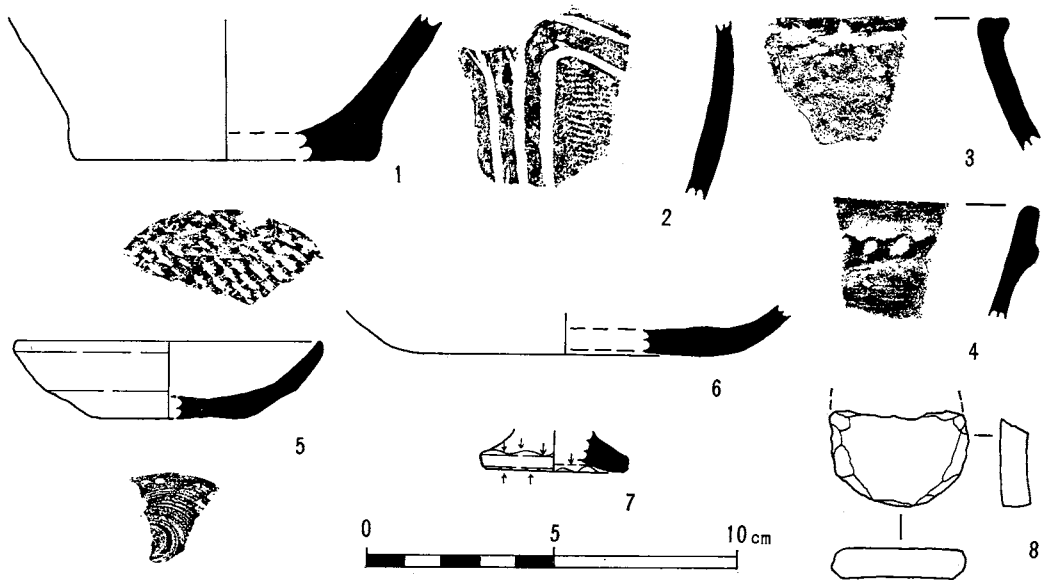
調査は、神送山の頂部を通るセンターライン100+90から101+70の間、幅20mにグリッドを、また、この丘陵の北東部、テラス状になった所には、センターラインと平行に2m幅のトレンチを数本、更に南西部有賀公園との間の凹地にもグリッドをそれぞれ設定して実施した。遺跡付近における土層は、丘陵部は礫混じりの褐色土が地山に薄く堆積していた。この丘陵の北東部と南西部の低地での層序は、70cm～1mとその深さは若干異なるが、上面から耕作土 (黒褐色土)、褐色土、漸移層、地山 (ローム) であり、南西部の土層中には神送山からのものと思われる礫の混入が目立った。また、西山山系からの伏流水がこの低い地で湧き出するため、西際は多分に湿気を帯びていた。有賀公園は地表の風化がすすみ、東側が急傾斜であるため、土砂の流出があり、その頂部から裾にかけて一面ロームを露出させていた。

2) 遺物 (挿図2)

調査の結果、遺構は確認されず、丘陵より一段低い北東部のグリッドから20点余の遺物を得たにとどまる。少ない出土遺物の中では縄文時代後期の土器片が多く (1～4)、他に灰釉坏 (5)、須恵器坏 (6)、近世の陶器と思われるもの (7) 等も出土した。外縁をつぶした痕跡がみられ何かに転用しようとした内耳鍋の破片 (8) もある。



挿図1 神送山遺跡近景



挿図2 神送山遺跡出土遺物（1：2）

3) まとめ

本遺跡は、起伏の激しい地形、不安定な水の確保などから、定置性の遺構を考えるよりむしろ、諏訪湖を一望する絶佳の地形、「神送山」という地名などから、何らかの信仰的な性格を帯びた遺構の検出を期待したのであるが、最近の、畠の石を積んだものが存在したにすぎなかった。この地は西接する馬捨場遺跡と併せて考える必要があり、わずかに散布する各期の遺物からして、ともに通過地としての性格や生産活動の場が考えられる。なお、神送山の南西部の高台には古字で「お天井」という地名が残っており、中世にもこの地がある程度の重要性をもっていたことがうかがわれる。

（高桑 俊雄）

2. 金(鐘) 鋳 場 遺 跡 (SKIB)

1) 位 置 (図1, 4, 図版1)

本遺跡は、諏訪市豊田区有賀字金鋳場4041番地他一帯に所在する。諏訪湖の西岸に連なる守屋山系の東側山麓は、諏訪盆地に突き出す尾根とその間に挟まれた狭い傾斜地が続く、かなり起伏に富んだ地形を呈している。有賀峠への谷筋の北側尾根が諏訪盆地に接する地点に千鹿頭社が存在し、この残丘状地形が、本遺跡の南を限っている。北限は有賀公園の独立丘状から東に張り出す尾根であり、この間の山麓テラス状台地の東傾斜面が遺跡地である。この中央辺に常時は枯れた東流する沢筋が存在し、遺跡はこれを最凹地とする東に口を開く日だまり地形を呈している。現状は谷筋と傾斜面の普通畑で、標高805~835mを測る。眼下には諏訪湖と諏訪盆地の穀倉地帯、東方には霧ヶ峰、八ヶ岳から富士見高原一帯の山脈を眺望する景観の地である。また北西上方には豊かな引水があり、現在この水を利用して一部耕作が行なわれている高所水田がある。

附近の遺跡としては、南限の小丘陵の南に、千鹿頭社、十二ノ后、女帝垣外、清水の各遺跡が続き、北側には、本遺跡、金揚、神送山の三遺跡、更に岡谷市馬捨場遺跡から新井南遺跡が続いて存在しており、遺跡の密集する山麓である。また本遺跡の呼称ともなった地字は、寺の鐘を鋳たところからつけられたといわれる伝承の地である。かつての分布調査では、縄文中期土器片、弥生後期土器片、土師器片、須恵器片等を採集しており、各期の遺構の存在が予測され、問題視されていた遺跡である。

調査は、この地がサービスエリアになるため、道路公団の要請から2年次にわたって実施された。49年は、早急なパイロット道路部分の確保ということから、103+00をA Aとし、105+80までを結ぶセンターライン東側用地内にグリッドを設定して行ない、50年度は、センターライン西側の調査に当たった。

(山田 瑞穂)

2) 遺構と遺物

ア 古墳時代後期土器の手法と器種分類

金鋳場遺跡の第一次・第二次調査によって、多量に検出された土器の主体は、古墳時代後期に属するものであった。南に隣接する十二ノ后遺跡の調査においても、同様式に属する土器群が一部検出されたためここで一括して取扱う。両者を併せるとこの様式における大部分の器種と器形を備えていた。

器種分類の主眼は、個々の土器の分析を通してその構成形態を求めると同時に、背後にある土器製作集団や、広く社会構造も含めた包括的かつ系統的研究に資することである。ここで取り扱う古墳時代後期の土師器は、弥生式土器製作の延長線上に基本を置くものであるが、新しく焼成技法の分野に、炭素吸着法による内面黒色手法を加えた黒色土器の成立が認められる。また、器形の新たな編成が須恵器の影響によって起っている。黒色土器は、土師器一般の器種構成の中に包括されることと出土量が少ないため、ここではあえて別項での分類をさけた。なお本報告では、金鋳場遺跡の土器を中心に土師器の大別を試みた。

それに関しては、土器の大別（56頁）を参照されたい。

器種分類の方法は、第一次的に土器の完成を目的とする成形技法、焼成手法、調整手法、胎土の差異、および使用目的による二次的な加工、穿孔等に基づくものである。また、土器の用途や使用目的は原則として、形態のもつ機能性から推定した。本遺跡で看取される土師器は、供膳形態と貯蔵形態、および煮沸形態の三つの構成形態に集約される。供膳形態のうち坏類は、器形を系統的に分類するための基準として、径高指数（器高／口径×100）⁽⁴⁾（挿図6）を用いた。⁽⁵⁾

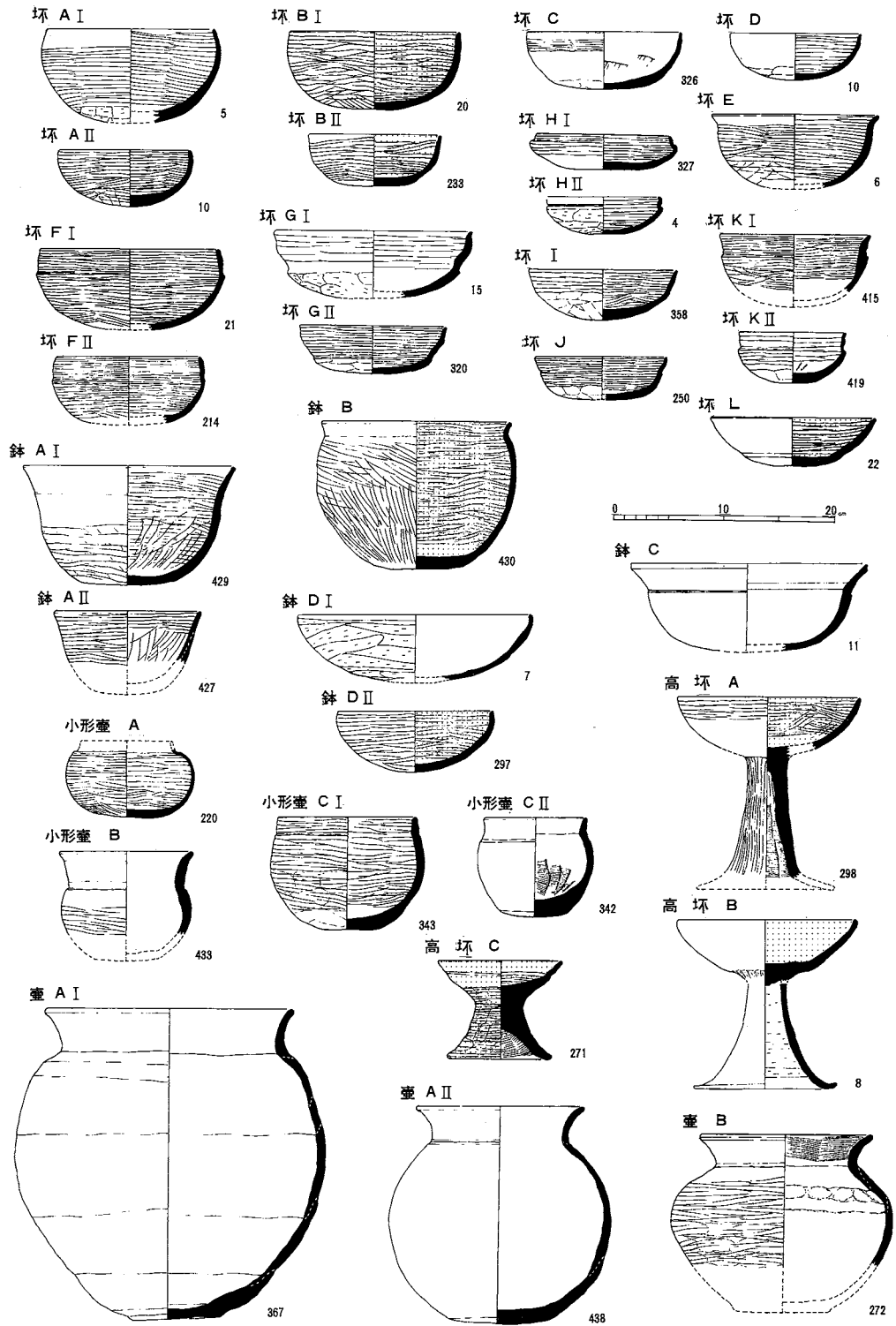
(i) 手法の分類

土器は一般に、粘土紐を巻き上げて三つの手法を基本として成形される。ただ一部の小形容器は「手づくね」⁽⁶⁾手法で成形され、その一端が本遺跡でもみられる。成形後、器体を調整するために、「よこ撫で」、「へら削り」、「へら磨き」、「刷目」⁽⁷⁾等が施される。よこ撫ではあらゆる器種の口縁部におよぶが、供膳・貯蔵容器は、へら削りとへら磨きを組合せた手法が主体である。煮沸容器は、ハケ目を器体の内面に施すことを一般とする。その外面は、ハケ目、ごくまれにへら削り等によって調整される。各手法の有無と範囲、施し方の検討を通して、個々の土器を一つの系統でとらえる手がかりとしたい。

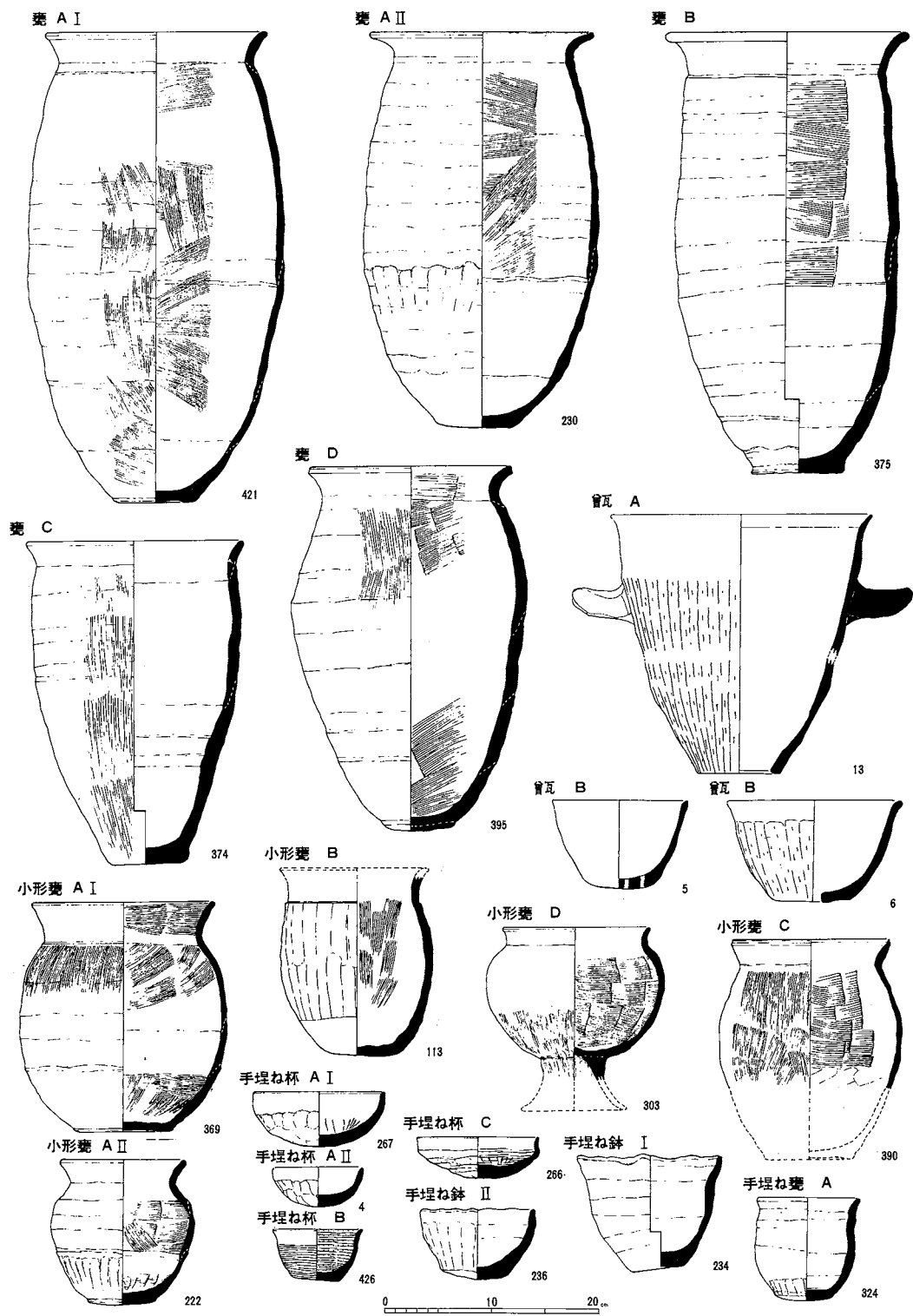
供膳形態は、手法の組み合わせによる分類を行った。成形後、へら削りをまったく施さないため、底部から口縁下部に木の葉文や指圧痕等の成形痕をそのまま残す a 手法、へら削りを底部外面に施して成形痕を除去する b 手法、口縁部の下半から底部をへら削りする c 手法、底部と口縁部の外面全体をへら削りする d 手法がある。坏類のへら削り調整は丁寧に行われているため、成形時の痕跡をとどめる例はほとんどみられない。次に、へら磨きをまったく施さないものを 0 手法、口縁部の外面をへら磨きする 1 手法、口縁部の内面をへら磨きする 2 手法、口縁部の内外面と底部内面をへら磨きする 3 手法、口縁部・底部の内外全面をへら磨きする 4 手法に区別できる。こうして両者を組合せると、 $a_0 \cdot a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdot a_4$ 、同様に $b \cdot c \cdot d$ の 20 手法に区別される（表2）。さらに、へら磨きは、線上に細長く施される長さ 6～9 cm、幅 0.1～0.2 cm のものと、小刻みに短く、やや幅の広い面をつくる長さ 3～6 cm、幅 0.3～0.5 cm 前後の 2 種がみられる。前者をへら磨きの (A)、後者をへら磨きの (B) と称する。この 2 手法は、器種による区別を必ずしも限定できないが、(A) 手法の主体は坏類で、(B) 手法は鉢、高坏、壺類を中心にみられる。ただし、(B) 手法は坏類にもおよぶが、(A) 手法は後者の器種のうち極く一部の例外を除いて認められない手法である。坏類にみられる (A) は、口縁部の内外面にはほぼ平行して外面では右回り、内面では左回りに 4～6 回を目安として行われている。内底部では同心円状に施されることが多い。(B) は、不定方向とほぼ一定した方向の 2 様があり、鉢や小形壺の口縁部内外面と、大形壺の胴部内面は主として横方向である。黒色土器は概して (B) 手法によっており、器表に光沢がみられる。これらのへら磨きは、装飾的効果をかねるが器表の平滑化と緻密化をねらいとした調整手法である。実測図では繁雑になることを防ぐため、その施し方が判読できる程度に簡略化した。壺のうち大形のものは、へら磨きを省略したので代表例を細部写真（図版 367）で補足した。

(ii) 土器の分類（挿図3・4・6、表3）

供膳形態 坏・鉢・小形壺・高坏の4器種である。高坏は、一般の供膳容器と区別される面をもつが伴出関係から一括した。前三者の主要な調整手法は、へら削り b・へら磨き 3、すなわち b₃ 手法である。坏は口縁部の稜の有無によって、無稜・有稜に区別される。無稜の坏は A～E の 5 種で、 $a_0 \cdot a_2 \cdot b_1 \cdot b_2 \cdot b_3 \cdot b_4$ 手法がみられ、内黒手法が一般的に認められる。有稜の坏は、須恵器との関係が指摘できるものがある。稜部の位置と器形によって F～L の 7 種に区別される。調整は、 $a_0 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdot a_4 \cdot b_0 \cdot b_1 \cdot b_2 \cdot b_3 \cdot c_2 \cdot$



挿図3 金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の分類 (その1) (1:6)



挿図4 金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器の分類(その2)(1:6)

表2

金鑄場・十二后遺跡出土古墳時代後期土器供膳形態の手法・器種構成分類一覧（点線左が金鑄場、右が十二ノ后）

器種	手法	0		1		2		3		4		合計		%		器種構成			
		a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b		
無稜杯	a	1				3						4		18.2		} 22 (17.3) %	} 7 (21.9) %		
	b		1			2	1	11	2	5	3	18	7	81.8	100				
	c																		
	d																		
有稜杯	a					2		1				3		3.6		} 85 (66.9) %	} 19 (59.4) %		
	b	1		1		19	5	59	14			80	19	94.2	100				
	c							1				1		1.2					
	d					1						1		1.2					
鉢	a							9	1		1	10	1	66.7	33.3	} 15 (11.8) %	} 3 (9.4) %		
	b							1				5	2	33.4	66.6				
	c		1			4	1	1	1										
	d																		
小形壺	a									1		1		20.0		} 5 (3.9) %	} 3 (9.4) %		
	b		1	1				3	1			4	2	80.0	66.6				
	c								1				1	33.3					
	d																		
合計		2	3	2		31	7	85	19	7	3	127	32	100	100	127	32		
%		1.6	9.0	1.6		24.4	22.0	52.0	60.0	20.5	90	100	100						
手法	a	1				5		1		1		8		6.0					
	b	1	2	2		2	7	82	18	6	3	112	30	89.0	93.8				
	c		1			4		2	1			6	2	4.0	6.2				
	d					1						1		1.0					

c₃・d₁手法である。漆黒色の塗彩（漆黒彩）、（細部写真の図版 25 -353）が一部に認められる。坏類はb₃手法が支配的である。鉢はA～Dの4種で、a₁・a₂・b₀・b₃・b₄・c₀・c₂・c₃手法である。小形壺は有稜の坏と同様、須恵器の影響を受けた器形があり、A～Cの3種である。a₄・b₁・b₃・c₄手法である。有稜の坏と同様器体の内外面に漆黒彩がみられるものがある。高坏は器形と成形方法からA～Cの3種に区別される。供膳形態の胎土は、粘質性が高く良質である。白色と赤褐色の微砂粘（鈹物質）、および若干の金雲母が含まれる。焼成はいずれも良好である。

貯蔵形態 壺類A・Bの2種がある。調整は必ずヘラ磨き（B）手法によっている。胎土は、石英粒（2～5mm）を混和材として添加されている。粘質は良好で微石粒・金雲母を含む。焼成は良好である。漆黒彩が一部にみられる。大形壺の成形は原則として木の葉底手法によっているため、底部の調整が不徹底である場合、その圧痕が観察される。

煮沸形態 甕と甑である。副次的には鉢や壺類が使用されている。大形甕と小形甕は共にA～Eの5種である。甕はほとんどすべて木の葉底手法によって成形されるため、底部には木の葉の圧痕が認められる（図版・25左下）。大形甕の胎土は、石英粒が多く混和されている。また砂粒や金雲母を多く含み粗質で、焼成不良のものがみられる。甑は把手を左右対称につけた大形のA種と、把手をつけない小形のB種がある。胎土・焼成は壺類と似る。各器種の分類の大要を以下表形式にして説明する。

表3 金鑄場遺跡出土古墳時代後期, 土器の器種分類一覧

器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	径高指数	手法・調整	胎土・製作等	説	明
坏	I	5	15.0	(8.5)	57	へら磨き(B) b ₃	良質、淡明褐色 若干の雲母、微 砂粒	強く内湾する口縁部が大きな弧をえがいて、口端まで連続する半球形状の深い器形である。底部は丸底である。	
	II	10	11.8 ~9.8	6.2 ~5.0					
	B	I	20	16.5 ~15.3	7.6 ~6.6	45	へら磨き(B) b ₄ 内面黒色手法	Aと同じ良質	丸底に近い小さな平底から漸進的に口縁部へ移行して、下部は強く内湾するが上部でたちあがり気味になる。
		II	233	13.0 ~11.0	6.2 ~4.7				
	C	326	14.0 ~12.1	5.2 ~4.3	37	へら磨き(B) b ₁ A・B種に対し調整がやや粗雑	砂粒を含み良質	偏球形を呈するやや浅い器形で、口縁部は内湾する弧をえがきつつ底部へ連続している。底部は丸底に近い平底である。	
	D	I	10	14.5 ~13.8	4.6 ~3.6	32	へら磨き(A) b ₂	Cと同じ良質	丸底の底部から内湾しつつ口縁部が開く浅い器形である。
II		12.2 ~10.6		4.2 ~3.4					
E	6	15.0	(6.9)	(46)	内外面へら磨き(B) b ₃	良好、 金雲母、微砂粒	口端が外反して大きく弧をえがくもので、丸底の底部への移行は漸進的である。		
有	F	I	21	16.2 ~15.5	7.5 ~7.4	47	内外面へら磨き(A) b ₄	淡橙褐色。良質 で雲母を含まず 漆黒彩	内傾して立ち上がる口縁部が稜を境に、下部は大きく弧をつくって平底に近い丸底へ移行する深い器形である。
		II	214	13.0 ~11.0	6.2 ~5.4	49			
	G	I	15	17.8	(6.1)	(34)	へら磨き(A) b ₃	良質、淡褐色、 微赤粒、金雲母 漆黒彩	口縁部の中位からやや下位を折り返して明瞭な稜をつくるもので、その上部は内湾しつつ立ち上がる。下部はゆるく弧をえがいて丸底の底部に連続している。坏類の主体をなすものである。
II		320	13.4 ~11.3	4.3 ~2.7					
稜	H	I	327	12.2 ~11.8	3.3 ~3.1	27	へら磨き(A) b ₃	良質、微赤粒	内傾する短い立ち上がりを有するもので、丈の低い器体の上位に稜がみられる。底部は平底でわずかに上げ底風につくられる。
		II	4	10.3 ~10.1	3.4 ~3.1	29			
坏	I	358	13.5 ~11.5	4.5 ~3.7	34	へら磨き(B) b ₃	微赤粒。漆黒彩	外方へ大きく開いた口縁部が稜を境に内湾して、丸底の底部へ漸進的に移行する器形である。	
	J	250	11.8	3.9	33	へら磨き(A) b ₃	良質、微白砂粒	やや小形のもので、平底の底部から強く内湾する口縁部が、稜を境に短かく外傾している。資料にとぼしい。	
	K	I	415	13.6 ~13.4	(6.6)	(48)	へら磨き(A) b ₃	良質、微赤粒	直立する口縁部と強く内湾する体部とからなる小形のものである。
II		419	9.6	4.6	48				

器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	径高指数	手法・調整	胎土・製作等	説明
有稜 坏	I	22	14.8 ~14.0	5.3 ~4.4	34	内面のみヘラ 磨き(B)	良質、B種と同 じ	内湾しつつ大きく開いた口縁部下位の内外面に、小さな稜をつくって丸底の底部へ移行している。この器形は黒色土器にはほぼ限定される。
	II	424	13.6 ~12.6	(4.2) ~(3.7)	31	b ₂ 内面黒色手法		
鉢	I	429	19.2	10.8		口縁部上半はよこ撫で 下半と内面はヘラ磨き (B)下半は横斜ヘラ磨き C ₃	良質、明褐色 砂粒、金雲母 Iは二次加熱	やや広い平底風の底部から内湾する口縁部へ移って、上部が外反する深い器形である。
	II	427	14.7 ~10.0	(10.9) ~(7.5)		内外面ヘラ磨き(B) b ₄		
	B	430	17.2	13.4		内外面ヘラ磨き(B) b ₄ 内面黒色手法	石英粒混合 二次加熱	端部が短く外反する半球形状の深い器形である。平底の底部から大きく内湾する弧をえがいて口縁部へ移行している。
	C	276 11	23.8 ~22.0	(12.8) ~(7.5)		口縁よこ撫で体部全体 ヘラ削り内面ヘラ磨き (B) C ₂	微砂粒、金雲母 砂質性	偏球形状の体部に外傾する口縁部がつくもので、鍋形状を呈する。底部は平底風の丸底である。
	I	302	21.2 ~20.8	7.0 ~6.2		内外面ヘラ磨き(B) b ₃	良質、細砂粒 微赤粒	大きな弧をえがいて内湾する口縁部が口端まで連続する浅い器形である。
II	297	15.4 ~12.0	8.2 ~5.6		a ₄ ・b ₂ 内面黒色手法			
小 形 壺	A	220	10.0 ~8.3	8.2 ~7.0		内外面ヘラ磨き(B) b ₄	淡明褐色、金雲母、 微白砂、漆黒彩	偏球形状を呈する体部と、短く立ち上る口頸部とからなる丈の低い器形である。須恵器、短頸壺の模倣と考えられる。
	B	433	12.0	10.0		頸・体部内面よこ撫で 外面ヘラ磨き(B) b ₁	並質、微細粒	外反する口縁部と小さい球形状の体部とからなる。
	I	343	12.6 ~11.5	10.2 ~7.2		内外面ヘラ磨き(B) C ₄	良質、砂粒 二次加熱	外傾する短い頸部と内湾する深い体部とからなるもので、丸底に近い平底を有する。
II	342	9.3	9.0		くもの巣状にハケ目調整してあるが不明瞭			
高 坏	A	298	17.1 ~16.5	(17.5)		坏部内外面ヘラ磨き(B) 脚部内面上部刺突痕 下半ヘラ削り、柱状部 ヘラ磨き 内面黒色手法	良質、淡明褐色 砂粒	内湾して弧をえがく坏部を、長い柱状部の裾が大きく開いた脚部に接合する器形である。成形は3段手法(II)。坏と脚の接合は坏の底部につくられた「へそ」状凸部を脚内に挿入して接合する。
	B	8	16.7 ~14.3	(16.0)		坏部内外面ヘラ磨き (B) 内面黒色手法	砂粒、粘質性が やや劣る	坏部の内外面に稜をつくって大きく広がる器体を、下部で折り曲げて裾を開く脚部に接合するもので成形は3段手法である。資料少し

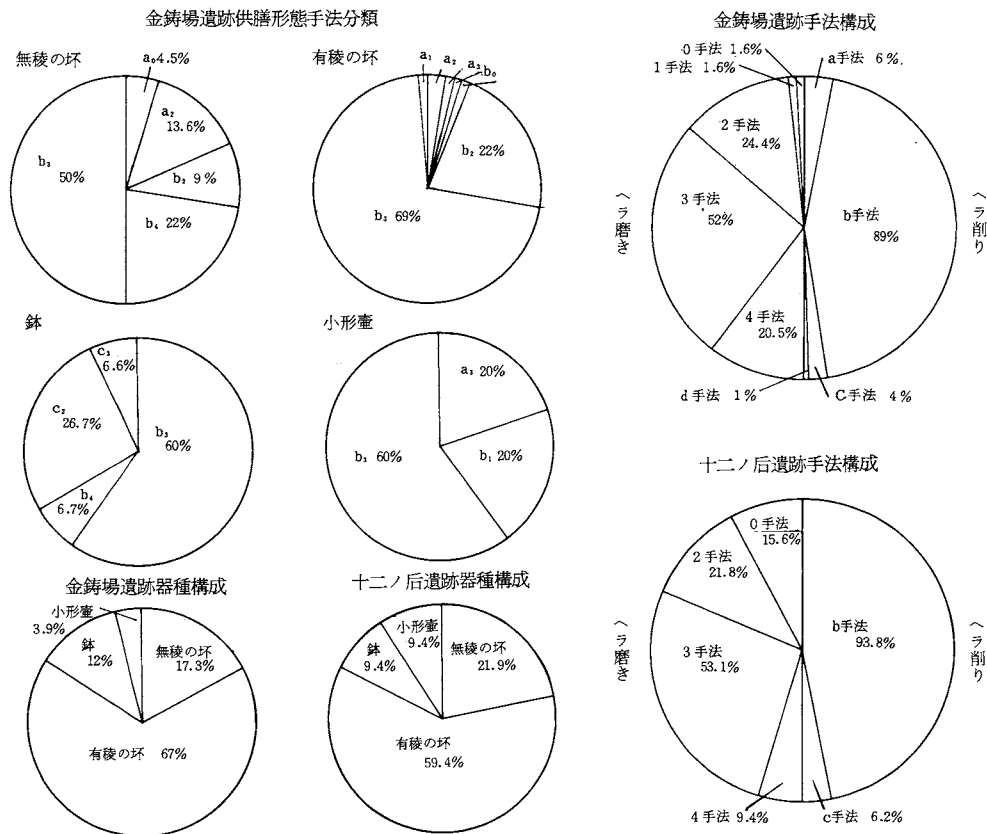
器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	手 法	胎土・製作等	説 明
高 環	C	271	11.3	9.0	脚部へラ削り、環部 内底部と脚部外面へ ラ磨き(A) 脚部内面「クモノ巢 状」ハケ目調整 黒色手法	やゝ砂質 微赤粒	丈の低い小形の高環である。環部は中央 に稜をつくるごく浅いものである。脚部 は太く短かいもので、環部と連続してつ くられている。
壺	A	I	29.1 ~20.3	31.8 ~(27.2)	内外面丁寧なへラ磨 き(B) 外面一口端から頸部 へ粗く斜めに 肩部は横、胴 部は下から上 へ4回に分け 縦に 内面一口縁部緻密に 横、胴部は横 縦に幅広く下 部から底部は まわすように 乱磨	粘質性は良好 明褐色、石英粒 二次加熱	縦にやゝ長い不整球状を呈する大形の体 部に、外反する口縁部をつけたものであ る。底部は体部に比し、小形であるため 周縁に凸部をつくって安定させている。 凹部には成形時の木の葉圧痕がのこる例 も稀にみられる。体部は4回にかけて成 形され、口縁部と併せて5段成形をなし ている。
		II	19.2 ~14.2	19.2			
	B	272	15.6	(16.0)	体部上半はへラ磨き (B) 体部下半はへラ 削り調整。口縁内面 はハケ目	Aと同様 砂粒多く含む	強い屈曲を示す口縁部から、肩部が大き く張り出す体部へ移行している。底部は やはり平底である。
甕	A	I	21.5 ~18.5	43.3 ~39.1	器体調整は指頭によ る撫でつけ痕が一般 的 外面一指頭痕が除去 されないもの とハケ目調整 の2種法 内面一右回りハケ目 調整が主とな り、指頭痕は ほぼ除去 下部から内底部は「 クモノ巢状」ハケ目 調整	粗雑、砂粒と金 雲母、石英粒	胴張りを有する筒状の細長い体部に、外 反する口縁部をつけたものである。底部 は平底で、一般に周縁に幅1cm前後の低 い凸部を加えて安定させている。凹面に は、殆どすべて木の葉圧痕、凸面は草茎 や種子圧痕が観察される。大形の甕の成 形は体部全体を一気に作り上げたのでは なく、下部から3~4段に分けて自重に 耐えるべく積重ねる。口縁部とあわせて 4~5段成形。(口縁と底部の軸がずれ て不整形なものあり)粘土紐を巻き上げ た痕跡(紐目)の目立つものが多い。
		II	23.0 ~19.1	37.5 ~33.2			
	B	375	22.3	40.6	Aとほぼ同じ	石英粒添加なし 焼成は良好	外反して口端を丸くおさめる口縁部に、 筒状の体部を接合している。底部は平底 でやはり木の葉圧痕がみられる。
	C	374	20.0	29.8	体部外面にハケ目調 整。成形は粗雑、口 縁部にゆがみ、粘土 紐巻き上げ痕が目立つ。	砂質性が強く、 粗雑、石英粒	やや小形のもので外傾する短い口縁部と テーバー状に開く体部とからなり、平底 の小さい底部をもつ。

器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	手法	胎土・製作等	説明
甕	D	395	18.6	33.7	粗雑、粘土紐の痕跡目立つ 体部外面上部、口縁内面上部と下部にハケ目調整、胴部中央の内外面にヘラ磨き(B)	小石粒、粘質性 A、B、Cに比して異質	強く外反する口縁部と、胴上位に最大径をもつゆがみの著しい体部とからなる。丈がやや短かく器壁が厚いものである。底部は小さく丸底風の平底。器形、調整胎土からみてA・B・Cとは異質。
小形	I	369	17.0 ~15.0	22.8 ~20.7	外面は肩部、口縁部胴上部調整、底部にハケ目 体部下半は指頭による撫でつけ、内面はハケ目	良好、石英粒若干粗雑、小石粒	胴部中央に最大径をもつ丈の短い体部と、わずかに外反する口縁とからなるものである。底部は木葉底手法で、周縁に幅約1.5cmの凸部をつくっている。 A II底部は丸底風の平底。
	II	222	14.5 ~11.0	13.4			
	I	223	19.8 ~18.4	(19.2)	内面はハケ目調整、底部はくもの巣状。113は器壁厚く短い筒状の体部、丸底風の平底。撫で調整	粗雑、砂粒	体部外面をヘラ削りするものである。わずかに外反する短い口縁部と不整形な体部とからなる。底部は上げ底のものと平底風のものがあり、木葉庄痕をのこす。
	II	113	15.3 ~13.4	(19.4) ~(17.4)			
甕	C	390	14.5	(20.4)	体面外部、丁寧なハケ目調整、内面は強く押し引きその下半はヘラ削り(図版、390)	良質、雲母を含まない。	わずかに肥厚して外傾する口縁部の口端を、小さくつまみ上げるものである。なで肩で胴の中央に最大径をもつ体部が薄くつくられている。器形、手法、焼成、胎土からみて、在地の土器群とは区別される。
	D	303	13.6	(17.0)	体部外面の下半と内面はハケ目調整。接合部は内外面とも指頭によるなでつけ	良好、微赤粒	大きく内湾して弧をえがく偏球形状の体部を、脚台部に接合するものである。口縁部は強く外反して口端をまるめる短いものである。
甕	A	13	24.1	(24.0)	把手より下半と内面の下部はヘラ削り、それ以外はヘラ磨き(b)	良好、粘質性 石英粒	大形の深鉢形を呈する器体の上位に、左右対象の把手を貼り付けたものである。口端でわずかに外反するが、下方へ向って次第にすぼまり、底部はつくられない。
	B	5・6	16.5 ~12.5	9.3 ~8.2	口縁部内外ヘラ磨き(B)(5) 口縁部外面ヘラ削り(6)	良質 石英粒単混合	把手をつけないものである。鉢Aによく似た形状を示す。底部は単孔のものと多孔につくられたものがあり、5は直径0.5cm程の孔を13箇所に通している。

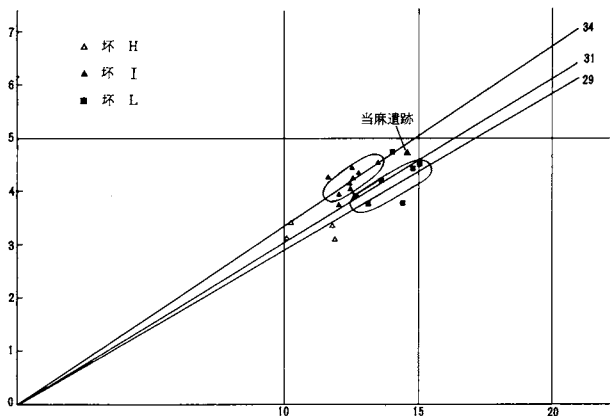
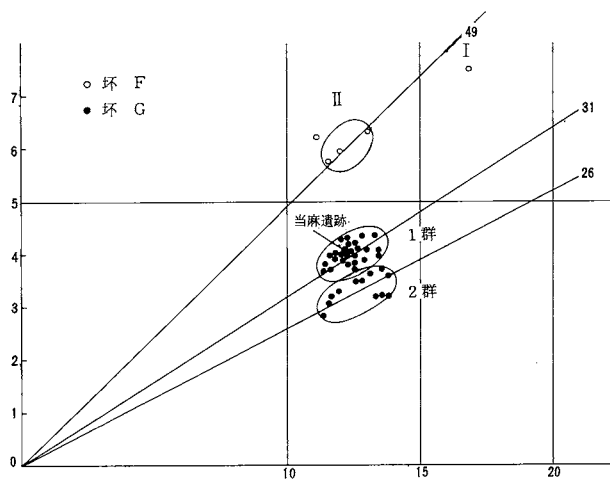
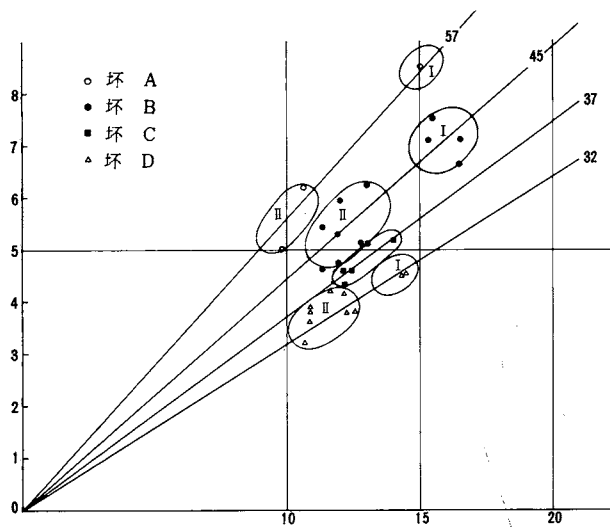
手づくね土器

器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	手法・調整	胎土・製作等	説明
坏	I	267	12.2	5.1	底部外面はヘラ削り	粘質、小石粒	偏球形状を呈する小形のものである。口縁部は強く内湾して口端で立ちあがる。
	II	4	8.4	3.7	口縁下部は指圧痕目立つb。手法		

器種	種別	図No.	口径cm	器高cm	手法・調整	胎土・製作等	説明
坏	B	426	8.4	4.7	口縁上部外面をのぞき全面に丁寧なへら磨き(B) b ₃ 内面黒色手法	良質 微砂粒	小さい平底の底部から口縁部が内湾して口端で外反する。焼成は内面黒色手法である。
	C	266	11.3	3.8	稜の下部内外面は荒くへら磨き(A) たゞ指圧痕のこる	Aと同様、粗質	口縁部中位に程をつくって、外反気味に立ち上がるもので、不整形な丸底風の底部をもつ。口縁部は大きくゆがんでいる。
鉢	I	234	13.4	10.8	I・IIとも粘土紐巻き上げ痕目立つ、IIは体部外面へら削り	粗質、小石粒 二次加熱	内湾してわずかに開く口縁部と小さい平底風の底部とからなる。口端は不整形で指圧によって波うっている。
	II	236	10.5	6.5			
甕	A	324	8.5	9.6	体部形成粗雑、下部にへら削り	粗質、石英粒 雲母	短く外反する口縁部と、袋状の小さい体部とからなるもので、丸底風につくり出された小さい底部をもつ。



挿図5 金鋳場・十二ノ后遺跡出土古墳時代後期土器の器種・手法分類構成一覽



挿図6 金鉢場遺跡出土古墳時代後期土器の坏各種径高指数相関

(iii) まとめ

金鉢場遺跡の土師器は、以上の器種分類と手法の分析の結果、手づくね成形の一部器種と甕を除くすべての器種に、原則としてヘラ削りとヘラ磨きが施されていた。供膳形態は90%以上が、ヘラ削りとヘラ磨きを組合せた手法で調整されていた(挿図5右)。ことにヘラ磨きは98%の土器に施された手法である。ヘラ削りは、底部外面を削るb手法が圧倒的多数を占め89%の高さにのぼる。ヘラ磨きは、口縁部の内外面と底部の内面を磨く3手法が半数の52%を占め、次に2手法24.4%、4手法20.5%の順である。貯蔵形態は必ずヘラ磨きが施されることが特徴である。副次的には煮沸用具として一部のものが使用されたが、しかし、煮沸を本来の目的とした甕類とは峻別される調整手法であった。煮沸容器のうち甕は、壺とほとんど変わらない良好な胎土で、調整手法も内面はヘラ磨きが丁寧に施されていた。大形甕の調整手法は、ハケ目を主体とし、その施し方は器壁を薄くすることと同時に、器表の平滑化を狙いとしたものであった。特徴的なことは大形、小形の甕すべてにおいて、関東地方で一般にみられる外面をヘラ削りする手法が徹底して回避されていたことである。このような地方色は上述してきたとおりで重ねて指摘しないが、土器の形態・成形技法・各種の手法を通して随所にわたって看取される。要するに各器種にみられる調整手法の差異は、土器の用途から規定された結果であった。

一般に供膳形態に属するものは、胎土が良質で精選度の高いものであった。微白砂、微赤粒等を混和材とみなせるか否かは問題を残すが、坏類を中心に認められた。また当地方で看取される大形の貯蔵・煮沸容器

は必ず石英粒を混和材としているといっても過言ではない。混和材は成形後、直接加熱しないものにも添加されていたことからすれば、成形と焼成の過程に於ける対処の仕方であったことは明らかである。

次に視点を変えて、供膳形態の器種構成のあり方を促えてみよう。まず前様式からの系譜をもつ無稜の坏が17.3%、須恵器の器形を受容した有稜の坏類は約7割、67%を占めている。鉢類は12%、小形壺4%となる。(挿図5左)。また、有稜の坏は、坏類全体で占める割合が実に8割、79.4%である。従って、当遺跡の供膳形態の主体が須恵器の影響下で成立した有稜の坏であったことになる。こうした器種構成の傾向は、十二ノ后遺跡においても挿図5左下の如く、おおむね同じ傾向が認められる。ただ十二ノ后との関連で注目されることは、 b_3 手法の減少(53.1%)とヘラ磨きを施さないa手法がやや増加(15.6%)することである。すなわち金鉢場遺跡と十二ノ后遺跡とでは、全体として器種自体の差異は顕在化していないが、土器の調整手法において、すでに省略化傾向の進行が看取されるのである。

なお、この器種分類では整理期間の関係ではほかの地域の遺物との比較にまで及んでいない。しかし小形甕C種は、東海地方の土師器との関連性が指摘されるものである。ここで特に注目されることは、関東地方の相模川東・西岸地域との関連がみられることである。金鉢場・十二ノ后遺跡の坏の一部が東岸の当麻遺跡のものと同通性がみられる。すなわち、坏G種I群は稜部が強く折り返えされた器形で、径高指数31、¹²坏Iは同指数が33とほぼ一致(挿図6)しており、調整手法も変らない。また漆黒彩が施されていることである。加えて、大形甕でハケ目調整される手法が多く認められるのは、西岸域の草山遺跡である。この種¹³のものは、やはり外面にヘラ削りが施されていないのである。(坂野 和信)

註1 田中琢「畿内」『日本の考古学VI』1967

2 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器(1)(2)」『考古学研究』70・71 1971

3 横山浩一「手工業生産の発展」『世界考古学大系3 日本III』1959

4 供膳・貯蔵・煮沸容器の口縁部・体部・底部を焼成後穿孔、打ち欠きによって機能を変質させたもの。例えば、壺類の底部を打ち欠いて古墳に飾られた仮器等である。

5 西弘海「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II-V 考察-2 遺物」奈良国立文化財研究所学報31 1978

6 註(1)による。当遺跡では「木の葉手法」、「左手手法」によるものが圧倒的多数を占めている。

7 横山浩一「刷目工具に関する基礎的実験」九州大学文学部研究論集 1978 この論文によって「刷目は一枚の板である」ことが証明された。

8 吉田恵二・西弘海・小笠原好彦「平城宮発掘調査報告IV-VI 遺物3」奈良国立文化財研究所学報26 1976

9 ここで漆黒彩と称しているものは坏類のヘラ磨き調整後、内面から口縁部外面に漆黒色を呈する塗彩が施されたものである。資料の化学分析を行っていないため、素材が何であったか判明していない。

10 佐原真「土器」『原色陶器大辞典』1972 「混和材の多くは素地作成工程で粘土の粘性を弱める働きをもつが、さらに乾燥・焼成によるひび割れを防ぎ、また耐火度を増すなどの目的を果たしている」とされる。こうした目的から、「大形土器」や「火にかける飾らぬ土器」に用いられたものと解されている。

11 笹沢浩「信濃における鬼高式土器の開始」『信濃』20-3 1968

12 上田薫「第VII章第2地点発見遺構と遺物」『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告12 1977

13 山本暉久「第V章発見遺構と遺物」『草山遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告11 1976

イ 縄文時代の出土遺物 (図34・35)

該期遺構の確認はなかったが、沢筋への流れ込み土中や耕作土中に若干量の遺物出土をみた。土器は、すべて破片であり、器形の判明するものはない。図34—1～30は、縄文をもつもので、前期前半に比定される一群である。遺跡の南限である残丘状の尾根を越した南隣りは千鹿頭社遺跡であり、それに続いて十二ノ后遺跡が存在している。この千鹿頭社遺跡2、3、4、6、7、8号住居址と同時期であり、それとの関連としてみられる一群の土器片である。図35—31は浮線縄文の顕著なもの、32はいわゆるボタン状突起をもった下島式土器の特長を示すものであり、33、34と共に前期後半から最末期に位置づくものである。35～39は中期初頭の梨久保式土器の範疇に入るもので、平行線文にその特長がみられる。40～51は中期後葉曾利式土器の一群である。52～56は後期土器であり、やはり千鹿頭社遺跡に関連が求められる。

石器は、刃部磨痕が認められる打製石斧や石鏃・石錐・石匙、スクレイパーの出土もみたが量は少ない。

(山田 瑞穂)

ウ 弥生時代の遺構と遺物

ア) 14号住居址 (図6、36，図版3)

遺構 本址は、調査区の南部に確認された弥生後期のものである。中央部から東側半分は、15号住によって切られているため西半部の確認のみに終わったやや胴張りの隅丸方形プランと推察される住居址である。壁高は西壁が高く、35cmを測るが、東への傾斜地のため順次、その高さを減じている。床面はローム土を固めた堅緻な面で良好である。柱穴は西側2箇所を検出されたP₁(20×22、-37cm)とP₂(23×21、-42cm)があり、その中間に2個の石で囲まれた埋甕炉が存在する。胴部下半を欠損する口径18cm、高さ12.5cmのものを逆位に埋めてあり、付近には焼土の堆積がみられた。

遺物 図36に掲げたもので、量的には多くない。いずれも波状文、簾状文、斜走短線文が施される弥生後期のものである。1は底部欠損のもので、床面上に横倒しで、つぶれた状態で出土している。口径18cmで口唇部に刻みを入れ、頸部には波状文間に簾状文が施されている。2は埋甕炉に使われたもので、口唇に刻みを入れ、その直下に斜走短線文が施されており、頸部は波状文で飾られている。(小松原義人)

イ) 30号住居址 (図6、36，図版11，12)

遺構 本址も調査区南部にあたり、14号住より西35mに検出された弥生後期のもので、東側半分を39号住により切られている。確認できた西壁などから、ほぼ南北5mの隅丸方形と考えられる。残存する西壁で15～20cmの壁高を測るが、東壁は不明である。床面は東へ緩く傾斜しているが、ほぼ平坦で、ローム面が比較的良好に固められている。柱穴は、支柱穴であろう両壁沿いの2本のみで、共にこの期に多い長楕円形の平面を呈する。このP₁(35×17、-36cm)・P₂(35×19、-33cm)の中間、径60cm、深さ50cmのピット内に更にコの字に3個の石で囲まれた埋甕炉がある。正位に埋められた口縁、底部を欠くこの炉の外側のピット内には焼土や炭化物混入の黒色土が充満していた。この埋甕炉と西壁の間には浅い小さなピット以外何も検出できなかった。

遺物 図36—16～23に示す少量の土器のみで、14号住同様16を除き波状文、簾状文のある弥生後期に属する土器である。16は埋甕炉で、口縁部と底部を欠き無文である。灰白色を呈し、わずかにケツリやミガキの痕跡がみえる。甕が大半を占め、壺・高環類はない。

(山田 瑞穂)

エ 古墳時代の遺構と遺物

ア) 1号古墳 (挿図7、表4、図7、8、44~46、65、図版16、19~22)

経過 本古墳はいままで全く存在が知られていなかったが、昭和50年度の発掘調査の一環として発見されたものである。すでに大部分は破壊されており、墳丘、石室の大部分は残存せず、横穴式石室の基底部と墳丘をとりまく列石、周濠の確認ができたにすぎなかった。また、石室内、列石の間、周濠内、古墳周辺から遺物の収集ができたが、ほとんど破壊されていたので、その出土状態については、特に層位的に問題があり、埋葬当時の状況を復元することはほとんど不可能であった。前述したように、最初から古墳と意識して調査したものでなく、墳丘北側の周濠、列石の発見が調査の発端であったため、他の住居址の調査と同じように平面発掘で行なわれた。古墳の外表面の列石、周濠、横穴式石室の残存部の順で調査され、墳丘外表面から灰釉水鳥鈕蓋付平瓶の大部分、玄室内からその頭部が出土し、他にも外表面~列石間から土師器、須恵器、灰釉陶器片の出土があった。玄室内の出土状況は図8-2の通りであるが混在している。石室内の埋土は黒色土で、この地層は、「古墳周濠上面および古墳時代遺構検出面をおおう黒色土」である。このような地層から考えるとかなり石室内の混乱は推測でき、各遺物の相関関係はとらえにくい。後述するように、築造年代と追葬、墳丘出土の土器との関係、玄室内出土の灰釉水鳥鈕蓋付平瓶の年代との関係など問題は残る。

調査は墳丘がほとんど残存していなかったこともあって、墳丘をとりまく列石が中心になった。玄門から一周する内側の列石、羨門からとりまく外側の列石の2列がめぐっていた。なお、墳丘西側は発掘用地外で調査できず、また、墳丘北側に**23号住**があり、墳丘構築時にその1/3が破壊されている。

遺物の出土状況とその年代 遺物の出土状況は大きく3つに分けられる。玄室内、羨道内、墳丘外表面(列石または周濠内) 各々出土の一群であるが、いずれも混在し、埋葬当時の状況を保っていない。そのため確実に古墳に伴うものかどうかは疑問である。玄室内の場合も埋葬当時そのままとは思えない。発掘調査時の観察によれば、玄室内は耕作土直下の歴史時代遺物包含層である黒色土でおおわれていたという。前述したように破壊されていること、内部主体が横穴式石室という性格上、玄室内の遺物の出土状態は混在するのかもしれないが、かなり攪乱されたと見る方が無難であろう。玄室内出土の遺物である程度時期が明らかにされるのは土器の類で、時期的に2つに分けられる。土師器環と同甕の類(図46-201・202・203・204)と、灰釉水鳥鈕蓋(図44・45)で、前者の201~203の土師器が7世紀後半、後者は9世紀前半の時期が当てられている。前者は本古墳のなかでは最も古く位置するもので、その築造時期を示す資料となろう。204は小破片の復元で詳細は不明であるが、時期的にはかなり新しいものとなろう。土器のみで見てもかなり長期間にわたっている。(通常、横穴式石室の追葬とされる例とは少し異なる状況である) 正確な出土状況の把握がなされないのが残念であるが、ここで一番問題となるのは、灰釉水鳥鈕蓋の出土である。

表4 金鉢場1号古墳遺物出土箇所一覧

出土箇所	出土遺物	図番号
玄室	土師器環 (C II・b s.)	図46-201
	〃 鉢	〃 202
	〃 小形甕 (A I)	〃 203
	〃 環 (C・A ₂ II)	〃 204
	灰釉水鳥鈕蓋・尾部	図44-200
	鉄鏃	図65-23
	〃	〃 24
	〃	〃 25
羨道	人骨(頸骨・頭骨片・歯) 骨片・骨粉 くるみ・木炭片・鉄片	
	土師器環 (G II・b s.)	図46-206
周濠	灰釉短頸壺	〃 207
	灰釉長頸壺	図46-205
	土師器環 (G II・b s.)	図46-208
	須恵器環 (A ₂ II)	〃 209
	〃 長頸瓶	〃 210
〃 横瓶	〃 211	

玄室内が前述の通りであるために、この出土の意味するものは不明である。調査者の小林正春氏は、「本資料の主体部が古墳とは若干離れて出土したこともあって、古墳との関係は即断できない。しかし古墳周溝内から本資料とほぼ同時期と考えられる灰釉長頸瓶なども出土しており、付近に本資料と直接結びつく遺構のないことなど考えれば、古墳への供膳供養の器であったことも十分考えられる」とされ、古墳との関係を示唆された。この是非はともあれ、玄室内出土は興味深い事実である。

(1)
古墳の周濠から出た遺物は、灰釉長頸壺 (205)、須恵器長頸瓶 (210)、須恵器横瓶 (211)、須恵器高台付坏 (209)、土師器坏 (208) である。いずれも7世紀後半の時期が与えられている。玄室内出土の土器に比べるとやや新しい傾向にあるが、玄室内出土の一群の土器と非常に近い関係にある。

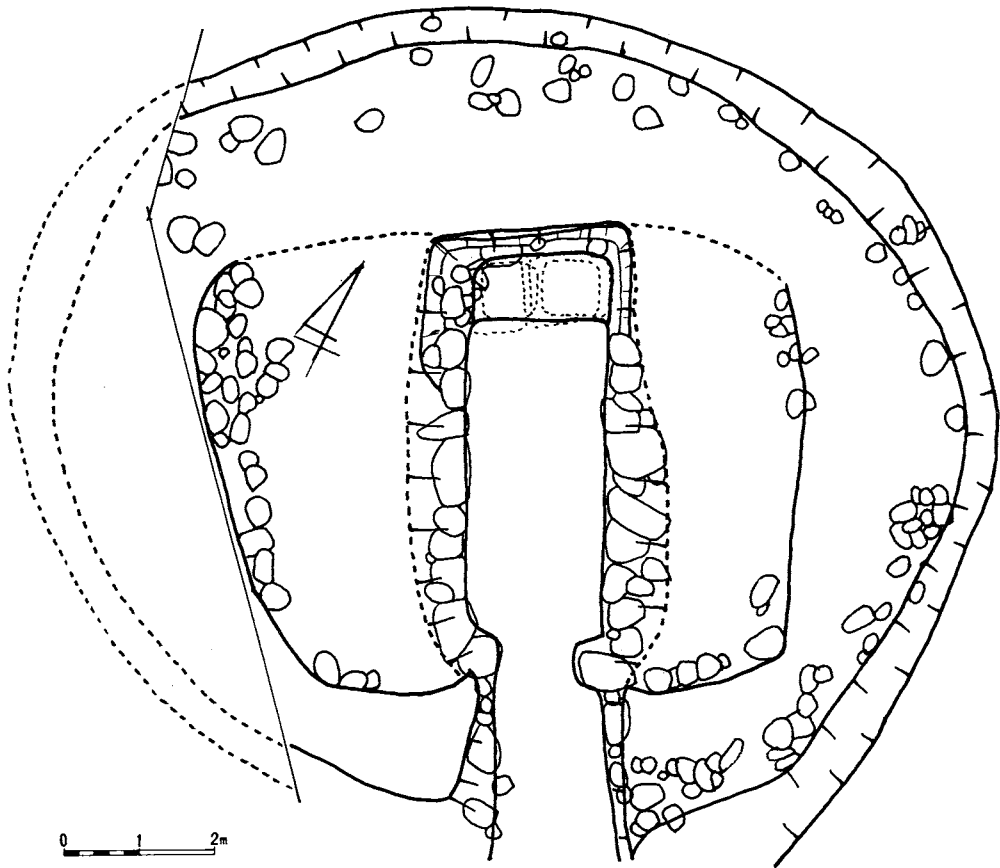
羨道内出土の土器は灰釉短頸壺 (207) 土師器坏 (206) である。灰釉短頸壺は10世紀後半の時期とされ直接古墳と結びつけられるのか疑問のあるところである。

土器以外の遺物で、刀子 (図65-22) 以外は玄室内出土遺物である。大部分は玄室内中央から混在して出土したが、特徴のある出土状態ではなく、また時代を決定するものではない。なお刀子の2個 (図65-24・25) は平根有茎定角形で造は両端丸みをもつが平造りで、他の1個 (23) は尖根形の茎の残欠である。

以上、出土遺物を時期的に区分して見ると、①玄室内出土遺物 ②周濠内 (墳丘外側列石内) ③灰釉水鳥鈕蓋 ④羨道内出土遺物というように4回に分けられる。年代的には7世紀後半から9世紀前半、10世紀後半というように長期にわたっている。このような土器のあり方から、古墳の築造は7世紀後半ころで、その後まもなく墳丘上において何らかの儀式が行なわれ、この段階で古墳との直接の関係はなくなり、7世紀代において古墳に埋葬することはなくなったものと思われる。このことは、内部主体の項でもふれるように、石室内に改築の跡などが見られないところからもうかがえる。玄室内出土の灰釉水鳥鈕蓋がいつ混入したのか、時期を決定するものはない。水鳥鈕蓋と水鳥尾部の一部が玄室内から出土したのみで、むしろ本体の平瓶は羨道部を中心に墳丘南側から検出されたという。同様な水鳥鈕蓋の出土した諏訪市十二ノ后遺跡 (本報告書記載) も同様にあまりはっきりした出土状態ではないが、祭祀址と思われる3号フンドから水鳥鈕蓋部のみが出土した。両資料ともに出土状態には問題の残るところである。出土層位は既述したように古墳周辺の歴史時代遺物包含層とされた黒色土層である。玄室内に落ち込んだ石の下には、黒土層の下に、褐色土層が見られたことが観察されているが、この事実がこの問題を解くものと思われる。羨道部で発見された一群の遺物の時代——10世紀後半までには古墳は破壊されており、水鳥鈕蓋部は黒土層中であり破壊された時点で玄室内に混入したものと思われる。しかしながら、本体はむしろ羨道付近の列石にあったことからその出土は全く古墳との関係を断ちきれないままである。10世紀後半よりも以前の段階で、古墳を利用した集石等の祭祀的性格を持った遺構の存在も考えられる。今後類例を待ちたいと思う。

墳丘の構築 墳丘は南北約10.5m、東西推定約12m、周濠は約40cm～50cmの幅と思われる。墳丘高は破壊されているので不明であるが、それほど高くなかったであろう。周濠は浅いところで30cm、深いところで50cmほどで、特に北側は深い傾向にある。墳丘にはたくさんの礫石が残存していた。この礫はある一定のレベルと方向を持っているものと思われるので、この礫群の石の配列を手がかりに墳丘の構築を考えた。

第1段階として横穴式石室の掘方を掘る。これはあまり深くなく、側壁の4段目あたりが入る位までで、掘方は石室構築ができる範囲で長軸8.4m、奥壁で2.8m、中央部で3.5m、羨道部で2.4mほどの石室の形態にあわせて掘りこんだものと思われる。石室は墳丘の列石に用いたものと同様な割石を横積みにして構



挿図7 金鑄場1号古墳墳形・石室の復元 (1:100)

築する。

墳丘には内側をめぐる列石と、外側をめぐる列石の2列があり、大きな石で70cm大、小さなもので20cm大の礫を用いている。現状は図7の通りであるが、レベル、石の配列でみていくと、挿図5のような関連性をうかがえるものがある。内側の列石は横穴式石室をとりまくように、石室前面から西側、東側へと方形に配列される。この配列は玄門部を中心をめぐり、墳丘の構築の過程で組みこまれていったものである。比較的保存状態のよい西側では、何列にもわたっている。石室の控え積みの意味を持つものかどうかは、不明であるが、西側の列石と石室側壁の現存部分の最高部とレベルは、ほぼ同様である。列石の状況を見ると、墳丘盛土の上に、列石が据え付けられたものと観察された。どの程度の規模で配列されたものかは今回の調査では確認できなかった。内側の列石は、石室の構築が終り、墳丘に盛土をし石室の形態にあわせてめぐらせたものと思われる。

外側の列石は、羨門部からほぼ墳丘を一周するようにめぐらしたもので、羨道部からずっと続き、墳丘外表面に裾石状に配置されている。内側の列石が方形状にめぐったのに比べて外側は円形である。特に東側は密であって、内側と対応して、レベルも羨道部と同様である。石室床面よりレベルが上部であるところを見ると石室前面の墳丘外部を飾るための列石と考えることも可能であろう。前述したように羨道外列石(外側の列石)と同じような列石が石室背後までめぐっている。石室背後は現状では列石が散在的である。

墳丘の盛土については、すでに破壊されて確認できる状態ではないが、石室構築が終り一部盛土を行いながら、内側の列石をめぐらせ、外側の列石は墳丘掘石の性格を持たせながら、墳丘を一周させたものと考えられる。盛土は外側列石のぎりぎりの範囲までに行なわれたと推定される。

墳丘北側で見られた周濠状遺構は、通常古墳の周濠とされたものと異なる。一番深いところは墳丘北側で、幅50cm、深さ50cmとかなりはっきりと調査時に確認されたという。反面、墳丘東西側（側壁側）はあまりはっきり断面形に現われていない。周濠が部分的なものかどうかは不明であるが、調査時の観察によれば、図版16のようなかなり幅の広い高低差のない周濠とされたが、列石と墳丘基盤とのレベル差を検討すると、むしろ復元したような周濠と考えた方が、古墳と接続する23号住との切り合い関係も合理的な状況となる。周濠については今後類例を集めて改めて考えたい。

墳丘をめぐる列石については、最近、墳丘全体にわたる調査例が多くなり資料が増加している。たとえば、京都府亀岡市小金岐古墳群の調査などがある。このなかの小金岐第71号古墳例と本古墳を比較してみると、列石のめぐり方は、玄門部からめぐる内側の列石と、羨道部からの外側の列石と2列になることは共通する。列石の性格については、小金岐71号古墳例は、「列石の下部が石室最下段の石より上部から始まることにより、石室前面の墳丘外部を飾るための列石と考えることができる。」とされたが本古墳例は、石室と列石のレベルについては資料が不足するが、玄門部と羨門部の列石のレベル差が、約40cm～50cm、石室最下段と列石下部のレベル差は、20cm前後列石の方が低い。列石の状況を見ても内側の列石は、横穴式石室の控え積みに関係するものとは思えない。外側の列石については前述したように掘石的性格を持っていたかも知れない。いずれにしろ京都小金岐71号墳例で見たように、「石室前面の墳丘外部を飾るための性格」と共通するものと考えられる。

この列石——特に外側の列石の間から土師器、須恵器、灰釉陶器片の出土があった。出土状態は特別なものでなく、出土地点も数箇所散っている。破壊された墳丘であるので速断できないが、墳丘外表部から出土する供膳形態の土器のあり方と共通している。このことから見ても外側の列石の上には、墳丘盛土がなかったものと考えられる。外側の列石がほぼ墳丘を一周するのと比較して、内側の列石は保存状態のよい西側でみると、何列にもわたっていた可能性がある。墳丘前面から側壁部にかけて葺石的な意味も含んでいたかも知れない。

金鑄場古墳の立地を検討してみると、北側に守屋山系が続き、南側は諏訪湖に向って傾斜しているテラス状の地である。かなり起伏に富んだ地形で、尾根状に残ったような状態の地である。東西ともにやがて傾斜面に達する。古墳は南側に開口している。視角的にも、墳丘列石の状況と、合致してくることがわかる。同様な外護列石は、茅野市川久保古墳⁽³⁾、茅野市王経塚古墳⁽⁴⁾に類例があるというが、報告書には図がないので詳細は不明である。時期的には、あまり変わらない。参考となる資料である。

	内部主体
石室全長	7 m40cm
玄室長	5 m40cm
羨道部長	2 m
奥壁部幅	—
玄室中央部幅	1 m88cm
玄門部幅	1 m44cm
羨門部幅	1 m44cm
石室高	—
羨道部高	—

内部主体は両袖式と思われる横穴式石室で、細部の計測は左の通りである。古墳の大部分は破壊され石室の細部については不明の部分が多い。ここでは発掘された状況と、破壊されたがゆえに判明した石室の構築方法についてふれたい。

奥壁はすでに抜かれているが、床面に残った痕跡から80cm～90cm大の方形の2枚の板石であったと思われる。堀方が残り、奥壁の割栗石状のものが残っている。側壁は現存している部分で最高は4段、他は1～2段という状態である。横割りされた石を横積みしているが、控え積みはあまりなされていない。

ない。羨道部も同様な状態である。玄門部に間仕切石があり、玄室部にはほぼ全面に、奥壁下端から間仕切石前まで20cm～30cm大の平らな自然石の敷石がある。間仕切石は敷石と比べると大きく、玄門より内側にある。間仕切石と敷石のレベル差は約20cmであった。玄門は東側については、はっきりしているが、西側は不明の部分が多い。しかし、羨道部の状態や堀方の状況から西側にも玄門が存在していたことは充分にうかがえるところである。また発掘時の所見や、写真からも60cm大ほどの割石の存在が認められる。墳丘の項で前述したように玄門部から内側の列石に連らなり、玄門と列石の上端部のレベルの差もほとんどないところを見ると墳丘と石室の構築が関連性を持ってなされているものと考えられる。

羨道部は玄室に比べるとやや高くなり、敷石の存在がない。閉塞石は玄門部と羨門部との2箇所にあった。いずれも20cm大の、敷石に用いられた石と同様のものである。現存するところで約30cm～40cmほどの高さまで積んである。玄門部と羨道部の閉塞状態を比較すると羨道部の方がやや低く、石も小さい傾向がある。確実に天井石と思われるものはなかったが、玄室内奥壁より1 m 50cm大の板石と、1 m大の2枚の板石が落ち込んでいた。側壁基部の石が1 m以内である点から天井石と考えることも可能であろう。石室床面の層序(図8)は、発掘調査時の所見によれば、敷石直下から第1層——軟弱でざらざらした黒褐色土層が石室全面に広がり、石室を構成する土層となっている。第2層は粘質の強い貼床状の堅い黒色土とロームを交互に築き固めた層で、玄室内に敷かれたものである。石室構築のために、堀方を掘った際、安定した基盤を造るために造成された土層であろう。第3層は褐色土層——ローム漸移層である。玄室中央から羨道部にかけて、第4層、ローム層——地山を平坦にするために盛土されたものであろう。以上のような層位の観察から石室の構築を推定すると、まず堀方を掘る。ローム層上面に合わせて、第3層を盛り上げ平坦面を造る。続いて玄室にあたる範囲を第2層とした築き固めた層を造り石室を構築する。側壁下部には確実に第2層が入っていることが観察されている。奥壁のあったと思われるところに第1層の黒褐色土層が深く、敷石面まで堆積していたが、奥壁が抜きとられた状況では側壁との構築関係は不明といわざるを得ない。しかし、間仕切石の部分での第1層の入り方を見ると、いくぶん掘り下げて間仕切石を据え付けているのが観察される。玄室内に見られる敷石は第1層の上に据えられ、間仕切石の直前でとまっている。北側——奥壁側では奥壁の存在を想定した下端から敷石が続いている。このことから、奥壁を据え付けた後、第1層——黒褐色土を敷きつめ平坦にし奥壁下端部に合わせて敷石をひいたものと考えられ、本古墳の平面形の構成はかなり計画的になされていたことが想定される。

玄門部は内側の列石に、羨門部は外側の列石にそれぞれつながるものと思われる。特に内側の列石は、石室開口部——南側から東西にかけて巡り北側にはまわっていない。また、羨道部の側壁は比較的低いものと思われ羨門部から巡る外側の列石と合わせて推定すると、石室構築の面からも墳丘外部を飾る意味を強くもたせたものと考えたい。

玄室部と羨道部との関係は、玄門部と羨門部の両方に閉塞石状の石があり、羨道部からも土師器坏、灰釉短頸壺等の出土があった。時期的には新しく、直接古墳とは関係なさそうであるが、横穴式石室内に9世紀代、10世紀代の遺物が出土する例は長野県内ではしばしば経験するところであり、このあり方については資料の増加をまって検討したい問題である。(小林 秀夫)

註1 小林正春「長野県諏訪市金鉢場遺跡出土の灰釉水鳥鈕蓋付平瓶」『信濃』28-4 1978

2 堤圭三郎他『京都府埋蔵文化財発掘調査概報7—昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡調査概要』京都府教委 1977
石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報1』兵庫県社会文化協会 1971

3 宮坂光昭『川久保古墳』茅野市教委 1975

4 斎藤忠・宮坂光昭・宮坂虎次『王経塚』茅野市教委 1975

イ) 1号住居址 (図9-1, 37-1~3, 65-1, 図版1, 18)

遺構 調査区南部でも最も東寄りの低位傾斜面上に位置して検出された。本址は東半を2号住および、溝状遺構1に切られているため、西半部の確認に終わった方形プランと思われる住居址である。カマドは焼土から北壁に存したものと考えられる。ルーム面を掘り込んで構築されているが、耕作土が浅いため、鍬先が床面にまで及び2号住寄りの床面は破壊が進んでいる。西壁高20cmで、東するにつれ順次壁高を減じている。周溝が西壁直下にめぐられ、この周溝寄りの床面は平坦で堅緻である。カマドはすでに破壊され、僅かに焼土が残ってその痕跡を北壁に認めた。北西隅にはかためた状態で石が存在した。支柱穴の確認はなく、北西部に小さなピット1が存したのみである。

遺物 本址からの遺物の出土は少なく、土師器甕(1)と坏(2)の他に図65-1の鉄鍬が出土したのみである。坏は丸底の口径8cm、高さ4cmの内面黒色土器である。(福島 邦男)

ウ) 2号住居址 (図9-1, 37-4・5, 図版1)

遺構 耕作による破壊と、更に、溝状遺構1に切られるとあって、西側壁沿いと柱穴が確認されたのみで全体プランは把握し得なかった。西壁から想定して、5.7m程の方形プラン規模になるかと思われる。床面は西壁沿いに堅い面が残っているが、東部はすでに破壊されている。支柱穴はP₁(39×41, -20cm), P₂(38×35, -40cm), P₃(44×45, -34cm), P₄(31×28, -23cm)の4箇所に検出され、北側のP₁・P₃内には詰め石に使用したかと思われる石が入り込んでいた。

遺物 本址から出土した遺物も少なく、土師器片があるのみである。4は口縁内側に細い隆帯が施されるもので注意をひく。5は甕底部である。(福島 邦男)

エ) 3号住居址 (図10-1, 37-6・7, 図版1)

遺構 調査区の最南部に位置する本址は、東半分を4号住に切断されて検出された。西側壁沿いが原形を保つが、他は耕作による破損が著しく全貌は不明である。南北5.35mを測る隅丸長方形プランを呈するものと想定でき、石組粘土カマドを北壁に有する。支柱穴は、北側2箇所にP₁(38×40, -54cm), P₂(38×42, -40cm)がある。カマドもすでにこわされていて、僅かに残る石と焼土からその痕跡が知れる状態であった。

遺物 本址からの出土遺物も少なく、土師器小片が出土したのみである。6は口縁が外反した丸底坏であり、7は甕口縁部である。(堀 知哉)

オ) 4号住居址 (図10-1, 37-8, 65-16, 図版1)

遺構 3号住を切って、その東側に検出された本址は、3号住同様に耕作による攪乱が進んでおり、全貌が明確に把握できなかつたものである。南北で5.2mを測る隅丸方形プランを呈するものと思われ、支柱穴はP₁(40×38, -45cm), P₂(44×40, -15cm), P₃(17×20, -17cm), P₄(17×18, -15cm)の4本検出されたが、P₂はややずれている。西側のP₁をのぞく東側のP₂~P₄は浅いが、これは貼床部が耕作により削平されたためであろう。西壁残高15cmを数えるのみで、他の壁は不明であり、この壁沿いに堅い床面がみられたのみである。カマドの位置を知る痕跡はない。

遺物 本址も出土遺物が極めて少なく、土師器小片が少量出土したのみである。図に示せるのは、8の甕底部片のみである。また図65-16の刀子の出土がある。(堀 知哉)

カ) 5号住居址 (図11-1, 37-9~12, 図版2)

遺構 本址は、6~10号の各住居址との切り合い関係をもつもので、これら一群の密集した住居址は、調査区内農道南に接しており、一部農道下へ入るものもある。すぐ北には、かつての自然流があった沢状地形があり、1・2号住も同様、この沢に沿った地点に営まれたものと考えられる。5~10号住は、いずれも耕作による削平で、壁と僅かな床面を残すだけといった状態で確認された。発掘時の所見から構築順序は、7→6→5→9→8→10の順になるろう。

さて本5号住は、6・7号住の上に貼床を行なって構築された後、9・10号住に切られている。全貌は不明であるが、南北4.9mを測る隅丸方形プランのものであったろう。床面は堅いタタキ状を呈しているが、貼床部は薄く、6号住とのレベル差は約10cmである。6号住上の貼床部は、荒れているため、検出されたP₁(62×64, -45cm)、P₂(55×50, -26cm)、P₃(48×50, -38cm)、P₄(18×22, -45cm)の4柱穴は、5・6号住のいずれに伴うものか明らかにできなかった。壁は比較のもろく、コーナーは不定形な感を受ける。

遺物 本址も出土の遺物は少なく、床面直上より土師器(9~12)の出土をみただけである。

(福島 邦男)

キ) 6号住居址 (図11-1, 図版2)

遺構 本址は、5号住床面精査中に貼床を認め、掘り下げて確認されたものである。7号住の上に貼床を施して構築してあるが、北から東側は9・10号住に切られて、全貌は不明である。規模、形状は測るすべもないが、南北(西壁からして)3m程の方形プランではなかったかと想像される。床面は礫の散乱と起伏があって良好とはいえない。先のP₁~P₄の4柱穴も5・6号住のいずれか判定しがたい。西側壁は5号住床面より10cmの差がある。遺物の出土はなかった。

(福島 邦男)

ク) 7号住居址 (図11-1, 図版2)

遺構 本址は、北側を10号住に切れ、西壁は5・6号住の貼床下に確認されたが、西壁沿いの僅か一部の検出のみで、プラン規模は不明である。西壁から判断して胴脹りの方形プランではなかったかと推察する程度である。西壁面は良好であり、その直下に周溝が存在している。これに沿った僅かの床面は、タタキがなされて堅く平坦良好である。柱穴、カマド等の検出はない。本址は切り合いをもつ一群の中で最も古い位置におかれる住居址である。遺物の出土はない。

(福島 邦男)

ケ) 8号住居址 (図11-1, 37-13, 図版2)

遺構 9号住の上に、貼床をなしている一部分が確認されたのみで、他の部分は農道下にひろがるため拡張することができなかった。床面はローム上面より10cm下で、9号住の上に黒色土を25cmの厚さに埋めタタキがなされている。壁はあまり良い状態とはいえない。部分的な壁の形状から方形プランを呈すると思われるが、規模等不明である。切り合い関係を有する一群の住居址のうち、本址のみが、その方向性を異にしている点注意をひく。

遺物 土師器甕底部1点(13)が床面上から出土したのみである。

(福島 邦男)

コ) 9号住居址 (図11-1, 37-14, 図版2)

遺構 本址も農道に接して確認されたもので全貌は不明である。5・6号住の北部を切って構築され以後東南部を10号住に切られ、更に北西部には8号住の貼床がのっかっている状態で検出された。規模等不明であるが、方形プランを呈するものと思われる。床面は5号住より25cm、6号住より15cm低位にあり、割合堅緻である。

遺物 土師器坏片1点(14)の出土をみたのみである。(福島 邦男)

サ) 10号住居址 (図11-1, 37-15, 67-15, 図版2)

遺構 本址以外の5住居址全体プランを想定すると、総てが本址に切られるという関係を有し、一群の切り合い関係を持つ住居址の中で、最も新しい時期に位置する住居址である。耕作による攪乱が進んでいて西側壁がかるうじて残っている状態である。西側壁より想定すると、一辺4m程の方形プランを呈するかと思われる。床面も壁直下に僅か堅いタヌキ面が確認されたのみで、柱穴、カマド等不明である。

遺物 土師器高台付底部片(15)と紡錘形土錘(図67-15)が床面上から出土しただけである。

(福島 邦男)

シ) 11号住居址 (図12-1, 37-16~19, 図版2)

遺構 本址は10号住の東、農道に接して確認されたもので、東部は12号住上に深い埋め土と貼床を施して構築してある。北壁中央に石組粘土カマドを有する、隅丸方形プランの住居址である。壁高は西側で50cmローム土を掘り込んであり、東へ移行するにつれてそれは減少している。南側壁の中央辺は、土塚6・15を切り、また12号住と重複する所には土塚7が掘り込まれている。床面は一部12号住に厚い貼床を行ない、やや傾斜しているが全体に堅緻で良好である。西壁に沿って幅10~15cm、深さ5~10cmの周溝が南壁までめぐらされている。柱穴はP₁(23, -30cm), P₂(28×26, -34cm), P₃(47×42, -31cm), P₄(35×37, -33cm), P₅(42×43, -30cm), P₆(46×44, -15cm)の6箇所確認されているが主柱穴はP₁~P₄の4箇所であろう。P₁のみ袋状に底が広がる。カマドは北壁中央に接してあり1個の支脚石と僅かな焼土を残すのみであるが、その痕跡からして、石組粘土カマドであったろう。カマド付近から中央辺にかけて礫の散乱があったが、住居址廃絶に伴うものかも知れない。

遺物 覆土より土師器甕(16)、須恵器坏(17, 18)、土師器甕底部で内面に櫛状工具による調整痕のあるもの(19)が出土している。覆土、床面とも少量の出土であった。(福沢 幸一)

ス) 12号住居址 (図12-1・2, 38-20~42, 39-43~56, 図版2, 18)

遺構 本址は11号住貼床下に西壁をもつ住居址で、東側は土手構築により破壊されて全貌はつかめ得なかった。隅丸方形プランを想定できる。西壁は中央部で土塚7に切られ、そして11号住南東部貼床下に存在する。壁高は西壁で140cmを計る深いものであり、ローム土を垂直に掘り込んでいる。地形が傾斜しているため東側ほど壁高が低くなる。床面はローム土をかためて、多少凹凸はあるが堅緻良好である。柱穴はP₁(40×24, -42cm), P₂(43×28, -30cm), P₃(42×38, -15cm), P₄(40×46, -20cm), P₅(42×39, -19cm)のほか小さく深さが10cm以下の3個が検出されている。P₁をのぞくと南壁寄りにかたまる傾向がある。おそらく主柱穴は4個であろう。P₁・P₂と他2個が外側へ傾斜する掘り方をしている。北壁直下のカマド西側から西壁をまわって南壁まで幅10~20cm、深さ5~10cmの周溝がめぐっている。カマドは、北壁のほぼ中央に

位置して構築された石組粘土カマドで、焚口両袖は平石が直立に置かれ、中には5～10cmに及ぶ焼土の堆積があった。

遺物 覆土、カマド内・その周辺から多量に土師器の出土をみた。図38—20～42、39—43～56である。器形から大別して図上復元可能なものは土師器坏9点、同甕口縁部26点、高坏脚部2点の計37点にも及ぶ。また器形や形態もそれぞれ異なっており変化に富んだ様相を示す。20は柱穴からの出土で、外面へラ整形の内面黒色研磨の丸底坏、21は内外面ともに研磨された精製品で肩部がやや張り出し、口縁が内湾気味の丸底坏でこの二者は他に比し大型である。22は内面黒色研磨の丸底坏で、へラ記号と思われる線刻が底部にある。29はカマド内の火床より出土した広口の甕で口径21cm、胴部最大径29cmを計る焼成良好なものである。50はカマド外粘土塊上に伏せた状態で出土したもので、底部はかなり不安定であり、内面には櫛状工具による調整痕がみられる。

出土量の多いことと器形の変化に富む様相から注目すべき住居址といえよう。 (福沢 幸一)

セ) 13号住居址 (図10—2, 39—57～69, 図版18)

遺構 本址は調査区の中央部、道路北側の傾斜面に独立して確認された。この辺からやや急傾斜になり、また耕作が遺構面にまで届いているため、西側壁面とその直下に存在する僅かの床面が検出されただけでプラン規模等不明である。壁上面は当然削られてしまっているが20cmの壁高を測り、これに沿って周溝が存在している。北側攪乱部に柱穴P₁ (48×47, -38cm) が1箇所あるのみで内部施設も全く不明である。また本址南側は溝状遺構6によって切られている。

遺物 土師器と須恵器の出土がある。土師器は坏、甕、高坏であり、須恵器は壺である。67は胴部上半から底部まで片寄ったもので底部は丸味を帯びて不安定である。口径10.5cm、高さ11.5cmの完形品で、茶褐色を帯びて焼成はやや不良である。68は須恵器の丸底を有する短頸壺もしくは長頸壺になるかと思われるもので、外面肩部と内面底部辺に自然釉がかかっている。58は全体が茶褐色を呈し、坏部内面に黒色研磨を施した高坏脚部である。また、64、65、69の底部には木葉痕がみられる。 (福島 邦男)

ソ) 15号住居址 (図6—1, 40—70～76, 図版3)

遺構 本址は弥生後期の14号住の東部を切って構築してあるが、土手造成によって、東半分はすでに削り取られて全貌は不明である。南北3.9mを測る隅丸方形プランであろう。主柱穴と思われるP₁ (32×34, -12cm) 1個が確認された他、内部施設の判明するものは何も得られなかった。残存床面はローム土を固めたもので堅く良好である。壁高は西側が最も高く35cmを測るが、東へいくにつれそれを減じている。

遺物 破片のみであるが土師器の甕と高坏脚部の出土がある。 (小松原義人)

タ) 16号住居址 (図13—3, 41—88～116, 図版4, 18)

遺構 本址は13号住の北西に位置している。黄色ロームの地山はこの付近から急激に傾斜を増している。西側壁面は傾斜しているローム面を掘り込んで作られているが、他3壁面は、床面をも含めて黒色土中に存在している。北側壁中央にカマドを持つ長方形の不定形なプランを呈する。側壁は傾斜をもって掘り込まれて約10cmを有し、東側に周溝をもつ。床面はカマド付近が堅く残存していたが他はやや軟弱で、東へ僅かに傾斜している。カマドは北壁中央にあり、耕作による攪乱のため、礫の散乱と55～95cmの範囲にわたって焼土の残存が認められた程度である。柱穴と思われるP₁ (29×28, -14cm) が北東コーナーに石を

有して1箇所だけ検出されている。

遺物 土師器と須恵器がある。88は、本址唯一の須恵器環で、張った肩部から強く内側へ折れる口縁をもつ。土師器は環、甕、高環がある。89～93は環であり、うち90、93には内面黒色研磨が施されている。甕はその殆んどが口縁部で全器形の判明するものはない。口縁の器形からして変化に富んだ様相もっていることに注意したい。114～116は高環脚部で脚底部は強く外方にひろがる器形をとる。カマド内とその周辺に集中的に出土している。 (福島 邦男)

チ) 17号住居址 (図13-1・2, 40-77~87, 67-12・13)

遺構 本址は調査区の北部地区に確認されたもので、住居址上に後世の石垣があって発掘には苦勞したしかし耕作による攪乱で、北壁と床面上に残存する焼土の確認ができた程度で全貌はつかめ得なかった。北西コーナーから推定し、隅丸方形プランのものであったと思われる。側壁は北側のみの検出で、約20cmを有する。床面はやや凹凸はあるが堅くしまってたやすく判別できることが多い。床面上には4箇所に焼土の堆積があるが火災に遭遇した痕跡は認められなかった。柱穴はP₁ (54×45, -29cm) 1箇所のみの確認に終わっている。カマドは北壁中央辺に構築された石組粘土カマドである。断面でみるように、上下二層に焼土の堆積があって二回の修築を物語っている。二層の焼土は顕著に使用されたと思われる赤色を呈しその間に炭混り茶褐色土の一層をもつ。この炭混り茶褐色土中につぶれた状態で甕 (86, 87) の出土があった。住居址全体からは修築、改築、建て直しをうかがう所見は得られなかったが、カマドは明らかに二期に分けられる。

遺物 本址出土遺物に土師器と土錘がある。土師器は環と甕で77、78、83の環は内面黒色研磨が施されている。また81など甕底部の内面には櫛状工具による調整痕がみられる。86、87は長胴の甕で、カマド内出土である。土錘は図67-12・13の紡錘形のもので覆土中からの出土である。 (堀 知哉)

ツ) 18号住居址 (図14, 47-212~218, 48-228, 図版4, 23)

遺構 調査区北半の南への傾斜面に検出された金鑄場I期の堅穴住居址である。住居址としての落ち込みを確認した時点では、覆土中に2～3個の石は見たものの、図14-1に見るような集石は予想できなかった。石は拳大から大きいもので60cmに及び、床面密着はなく5cm以上浮いた状態で、住居址内南半に集中的にみられた。集石は意識的に配列、配置するとか積んだり組んだりする様子は見られず、無雑作に寄せ集めたという表現の方が適切であった。この集石の性格であるが、同内容のものが、20、26、27、31、34号各住居址にみられる。本址は火災に遭遇しているため覆土中に炭化物の混入がみられ、掘り下げの際、消火の目的で投げ込まれた石ではないという考えも出されたが、全貌を見るに至って、廃屋墓的な性格をもつものではないかと見られるに至った。床面から焼土と共に骨粉並びに金環の出土があり、考えるべき資料提示となった。

次に本址は、石組粘土カマドを北壁の中央に持つ隅丸方形を呈し、ローム土を掘り込んで構築されている。南傾する土地ゆえ、北壁58cm、西壁中程で50cmと側壁は高く、南壁32cm、東壁北寄り40cmと低くなっている。壁直下には、幅10～15cmの周溝が、カマド西から北東隅まで一周しており、焼土はこの周溝上とそれに沿った床面上にみられた。床面は平坦で、概して堅緻であり、4主柱穴 (P₁~P₄) を持つ。P₁ (36×32, -13cm) は西側底面に石を持つ。P₂ (44×34, -20cm)、P₃ (28×24, -16cm)、P₄ (32×32, -33cm) の他に補助柱穴と思われる径18cmほどのP₅、P₇があり、カマド東には、貯蔵穴と思われるP₆ (52×36, 29cm) があ

る。また床面上には焼材と焼板材の検出があった。カマドの石組みは、ほぼ原形を保っており、完形の長胴甕が、かけられていた。焚口は幅70cm、高さ30cmで石組みもしっかりしている。壁外の煙道も平石を立てて使い、幅30cm長さ40cmが遺存していた。出土状況は、カマド前に金環と土師器環、カマド東に土師器環、東壁沿いに土師器環の出土をみた。また骨粉は、P₄周辺に多くみられた。本址の発掘調査は故人となられた辰野伝衛氏の担当によるものであることを付記したい。(山田 瑞穂)

遺物 出土量は少ない。土器は土師器が主体で、環、鉢、壺、甕類などがある。環類ではF II・b₄ (214)、C II・b₃ (212)、I・b₂ (213)、鉢はA II・C₂ (215)、壺はA I (218)、甕はA II (228) などがある。金属製品としては、環 (図65-13, 図版29) がカマドの前から検出されたが遺存状態は悪い。(坂野 和信)

テ) 19号住居址 (図15-1, 47-219~227, 48-229~231, 図版5, 23)

遺構 本址は調査区北半の西側用地境に近く、北東側に21号住、西側38号住に隣接し、東方向への傾斜地に位置している。褐色土の上面まで除土し、プランが検出された本址の側壁は地表面と同じ東方向へ傾斜する。西壁は垂直に近く、壁面はロームで堅く良好であるが、東壁にあっては削り取られて立上りは皆無である。床面はローム土そのものであるが遺存状態はかならずしも良好とはいえない。床面中央の一部に軟弱の箇所があり、東側は壁と同様に削られている。周溝は東側を除く壁直下を囲周している。支柱穴P₁ (37×38, -24cm)、P₂ (37×33, -11cm)、P₃ (36×34, -8cm)、P₄ (38×40, -12cm) は、ほぼ等間隔に配列しているがP₁をのぞくとやや浅い。カマドは北壁中央に築かれた石組粘土カマドで、破壊が進んでいる。焚口の西側には平板石の袖石が残存し、東側には粘土と袖石が僅かに1個残存しているのみである。西側壁直下の床面上にやや広い範囲で焼土の堆積が2箇所があり、火災に遭遇したものと思われる。

遺物 カマドの東側床面から集中して出土する。実測可能な土器は11個体である。供膳類は僅か1個の内黒の坏G II・B₃ (219) のみで、他は壺と甕である。甕A II (229・230) はほぼ完形である。小形甕は6個体 (221・222・224・226-A I, 225-A₂, 223-B II) と多い。また小形の壺A (220) と壺A I (229) が1個ずつある。出土遺物からして本住居址の時期は金鑄場 II 期である。(福沢 幸一)

ト) 20号住居址 (図15-2, 49-232~241, 図版5, 23)

遺構 調査区の中央部に位置し、他の住居址との複合関係がなく、ほぼ完全な状態で検出された。地形的には、西から東へゆるやかな傾斜地であるために、西壁と東壁とでは、壁高にかなりの差がある。西壁での観察では、ローム層上褐色土からの切り込みであった。住居址内は黒色土の堆積が認められた。小形な方形の住居址で北壁の中央にカマドが存在する。全形はほとんど破壊されて明らかでないが、板石状の石を組み合わせ、その上を粘土で被った構造で、石はほとんど抜き取られていた。規模は南北80cm、東西60cmほどであろう。支柱穴は4本でP₁ (30×40, -38cm)、P₂ (48×55, -30cm)、P₃ (27×22, -39cm, 64×46, -19cm)、P₄ (28×25, -45cm, 57×56, -28cm) が対応する。P₆~P₇の2本は規模は柱穴としても充分と思われるが位置的にややずれ、P₆は貯蔵穴ともみられる袋状のピットである。壁は前述のように壁高に差があるが検出の状態の差によるものである。残存状態のよい西壁で見ると、垂直に近い状態である。周溝はカマド西側から西壁、南壁にかけて他は深さ10cm、幅15cmで検出された。床面は、東壁側で桑の抜根のため判然としない部分があるが、他は堅くよくしまっている。東壁中央に40cm大の焼土があり、周辺から土師器環が出土している。住居址中央部に約20cm~40cm大の自然石が約40個ほど、一部は床面に接して、大部分は住居址内に堆積した黒土の上、約10cmほどのところにみられた。土器の出土状況は、甕はカマド周辺に多

く、坏は東壁近くの焼土と、西壁中央の床面からの出土である。

遺物 遺物は土師器が中心である。坏は2点で、GⅡ・b₃(232)とBⅡ・b₄(233)に分類されるものである。小形甕AⅡ(235)、手づくね鉢Ⅰ・a₀(234)、同AⅡ・c₀(236)、甕AⅠ(231)が各1点、壺AⅠ(237~238)が2点という組み合わせである。時期的には金鑄場Ⅱ期に属するものであろう。(小林 秀夫)

ナ) 21号住居址 (図16, 50-242~261, 図版6, 23)

遺構 調査区北半センター杭104+20の西側、17・18号住の中間にあって、南方向への傾斜地に位置する。本址は褐色土からローム層を外傾斜に掘り込んでいる。壁面はロームで、壁高は地表面と同じ南方向へ傾斜するので、北西壁は深く、南東へいくにつれ高さを減じ、東南のコーナーは壁の立上りは低い。床面はロームそのものを固めてあり、カマドの前は特に堅く、遺存状態は良好であった。周溝はカマドを挟み四囲の側壁直下に認められる。柱穴も等間隔にP₁(45×47, -29cm)、P₂(38×37, -16cm)、P₃(37×35, -24cm)、P₄(58×67, -53cm)の4本があり、P₂には転落したと思える礫があり、P₃は段をつけて穿たれている。カマドは北壁の中央に設けられた石組粘土カマドで、両袖石は平板石であり天井石はなく上部は崩れ陥没している。火床は良く焼け赤色を呈しており、煙道は認められなかった。

遺物 総べて土師器である。実測可能な土器は21個体で、カマド周辺、特にカマドの西側より、壺・甕類の出土を見る。壺AⅠ(257・258)、壺(261)、甕(239・256・260)、甕A(240)、甕AⅠ(241・255・255)、甕C(259)、坏は内黒の高坏を含め11個体で、覆土と床面より出土する。坏GⅡ・B₃(245)、FⅡ・C₃(251)、内黒の高坏A(252)。以上の坏のほかの坏は、総て漆黒彩である。GⅡ・B₃(242・243・244・246・247・249)、坏Ⅰ・B₃(248)、坏J・B₃(250)がある。以上の出土遺物から本住居址の時期は金鑄場Ⅰ期である。(福沢 幸一)

ニ) 22号住居址 (図17, 51-262~277, 52-278~284, 図版6, 7, 23, 24)

遺構 調査区の中央部に位置し、検出された住居址の内では大規模なものである。検出面は耕作土下の褐色土層である。他の住居址との複合関係はない。住居址はローム面に切りこむ状態であったが、東へ傾斜する地形であり、桑などの後世の耕作により、住居址西側の壁は、1m余りも存在するのに比べて、東側の壁は検出できなかった。住居址内の堆積土は褐色土、または黒褐色土で自然堆積の状態であった。住居址全体の層位は、耕作による攪乱によって確認できない。住居址のプランは壁、床面ともに明確でないがほぼ方形であろう。カマドは北壁の中央部にあり、20cm~30cm大の平板な石を組み合わせ、その上を粘土で覆った構造である。規模は、70cm×90cmほどでややくずれているがほぼ完存に近い。内部に甕の破片が出土している。カマド前に十数個の集石があり、実測された断面図によると床面よりやや上において、据えつけられた状況とは異なる。柱穴はP₁(105(65)×53, -61cm)、P₂(73×75, -67cm)、P₃(120×98, -43cm)、P₄(80×105, -66cm)の主柱穴が4本でP₃は袋状を呈していた。カマド東にP₆、南壁中央沿いにP₇がある他西壁隅、南壁隅にピットがあるが浅いものである。幅10cm~15cm、深さ10cmほどの周溝はカマド西側から西壁更に南壁へと巡り、東側は確認できなかった。床面は多少の凹凸があるが堅い。東側の一部は桑の抜根で破壊されていた。南壁下中央部に焼土が見られた。

遺物の出土状態は、ほとんど床面出土である。大部分はカマド周辺であるが、甕は、住居址全面に散っている。刀子はカマド西側から出土した。他に灰皿皿、坏の出土があったが、いずれも堆積土内であった。本址の上面になんらかの遺構が存在したものと思えるし、カマド前の集石と関連するかもしれない。

遺物 図示できるもので22点、いずれも土師器である。供膳形態は、坏GⅡ・b₃(262~265)、手づくねC・

b₂ (266)、A I・a₀ (267)、鉢A I・b₃ (270)・A II・c₀ (268)・A II・b₄ (269)・C I・b₃ (276)、高坏C (271) である。壺A I (274・275)・A II (273・274)、B (272)、小形甕A I (280・281)・A II (278・279)・B I (282)、甕A I (277)・A (283) の出土があった。このうち262~265・269・271は黒色土器である。器形的なバラエティーも多く、煮沸形態の中での小形甕の比重が高いのが注目される。鉄製品は刀子と鉄鎌がある。刀子(図65-4)は茎尻の一部を欠いているが、ほぼ完存に近い。全長13.5cm、刀長8.5cm、先幅1cm、元幅1.5cmになるものと思われる。鉄鎌(図65-18)は尖根形式の茎の一部である。出土遺物から本址は金鑄場Ⅱ期の住居址である。

(小林 秀夫)

又) 23号住居址 (図18-1, 52-285~289, 65-15, 図版7, 24)

遺構 調査区の北西端に近い1号古墳の北側に検出された。南側を古墳周溝によって切られているが、比較的形状自体は明瞭で、ローム層を60cm掘り凹めている。東壁中央部にあるカマドは、袖石の一部と焼土が残存するが、石組粘土であろう。北壁側に対照的にP₁(24×25, -14cm)、P₂(24×25, -23cm)の支柱穴がある。幅はせまいが周溝は全周するらしい。周壁はほぼ直立した形態で保存もよい。床面も全面的によく固められている。胴張りの隅丸方形プランを推定できる。

(山田 瑞穂)

遺物 住居址が半壊していたため、出土量は少ない。土師器は、壺A II (288)、甕A (287・289)があり、須恵器では坏(285)のみである。金属製品として刀子(図65-15)の身部残片があるが、関は腐蝕のため不明瞭である。金鑄場Ⅰ期に属する住居址であろう。

(坂野 和信)

ネ) 24号住居址 (図18-2, 52-290~292, 図版8)

遺構 本址は調査区中央部に確認された。南壁側は、現在の溝によって東壁側は溝状遺構7によってそれぞれ削り取られるという状態で検出されたため、全貌は不明である。推定規模、東西5.20m、南北5.80m程の方形プランと思われ、支柱穴もP₁(60×64, -32cm)、P₂(76×45, -60cm)、P₃(40×40, -58cm)まで確認されているところから4穴あったであろうが、南東隅は形跡もない。カマド横の貯蔵穴と思われるP₄(56cm×60cm)は底面が二段になったものである。カマドは北壁中央に構築された、石組粘土カマドであるが、これも破壊が進んで、その痕跡を認めるだけである。推定規模80cm×100cmほどである。側壁は、西から東へ傾斜するため、西壁が50cmと一番高く、残存北壁は西から東へと順次その高さを減じている。壁直下には、カマド西から西壁に周溝が掘られている。残存床面は、ほぼ平坦であり、概して堅い面をもつ。また、西壁中程に張り出し状に小ビットがある。北西隅床面上に3cm程の厚さで焼土が確認されている。

(山田 瑞穂)

遺物 出土遺物は少なく、実測可能な3点の土器以外は小片のみである。土師器は坏のG II・b₃ (290)と甕の底部(291)、須恵器は甗の口縁部片(292)のみである。

(坂野 和信)

ノ) 25号住居址 (図19, 53-293~306, 図版8, 24)

遺構 本址は調査区中央部の用地境西端にあり、遺跡内では地形的に高所に位置する。耕作土は流れ、10cmほどでローム層に達するところがあるため、遺構の検出面はローム層上面であった。住居址の一部は桑の抜根のため破壊され確認できない部分があり、特に東側の壁は確められなかった。地形上西から東へ傾斜しているため、西壁の残存状態はよく、壁が50cmにも達する部分もある。他の遺構との切り合い関係は確められなかった。カマドは北壁中央に位置する。残存状態は良好で、40cm~50cmの板石を長方形の箱

状に組み合わせたもので、壁に近い部分と、焚口部に各一枚の板石をのせ、煮沸容器をのせる天井部を形成し、中心部に一枚の石を支柱状に組み込んでいる。この板石の上を粘土で覆った、いわゆる石組粘土固めのカマドである。柱穴はP₁(40×51, -36cm)、P₂(40×47, -35cm)、P₃(49×50, -34cm)、P₄(54×47, -40cm)の4本、それぞれ対になるもので、口径、深さともにほぼ同規模である。カマド東側に、北壁に接して60cm大の方形のP₅が検出されたが、埋没の状態には特に問題はなく、底面は床面と同様堅く叩きしめてあった。周溝はカマド西側から西壁、南壁にかけて検出された。床面は残存部分ではかなり堅く良好であった。焼土はカマド周辺で検出されただけであり、屋外施設は認められなかった。遺物の出土状態は、カマド周辺、北壁側に集中している。特に北側に片寄ったものか、遺構の残存状態によるものなのかは不明である。ほとんど床面出土である。鉄製品が3本、床面より少し上の堆積土内から出土した。

遺物 土師器環4、鉢2、高環1、高環脚2、小形甕1、甕3、須恵器高環脚1点と鉄製品3点の出土があった。土師器の環(293~295)はいずれもカマド東側から重なって出土したもので、環L・b₂に分類されている黒色土器である。他に環BII・b₄(296)がある。鉢はDII・a₄(297)とDI・b₄(302)の2個と高環は分類できるものは298のAである。小形甕D(303)がある。須恵器は高環脚(301)があり、P₁北側からの出土である。鉄製品のうち図65-5は先端部が錆で判別できない。鞘状のものが付いているので、刃部一利器になるところが鑑別できない。細い棒状のものが続いているように見える。何か工具になるものかとも思われる。発掘時点では刀子とされたものである。他に鉄鏝の尖根の茎(6)の部分と思われるものと刀子の残欠(7)がある。

本址は出土土器から判断して金鑄場Ⅱ期に属するものであろう。

(小林 秀夫)

ハ) 26号住居址 (図20, 53-307-310, 図版9, 25)

遺構 調査区北半の南への傾斜面に検出された金鑄場Ⅱ期の堅穴住居址である。18・20・27・31・34各住居址と同様に覆土中に集石を持つもので、本址はやや北寄りに拳大から60cmの長さ及び自然石が床面密着のものもあったが、大部分は5~20cm程の間層をおいて、寄せ集められていた。覆土掘り下げ中炭化物の混入があり、また、集石取り上げ後の床面には焼土がみられ、特に北西隅にはそれが多量に存在していたことから火災に遭遇したことがうかがわれる。火災と集石との関係は不明といわねばならないが、この集石は廃屋墓的性格を有するものではないかと考えられる。

本址は、石組粘土カマドを北壁中程に持つ、やや不整の隅丸方形プランを呈する。側壁高は西壁60cm、南壁50cm、東壁18cm、北壁44cmを測る。周溝は西南隅にあるのみで、他は検出できなかった。床面はやや起伏があるものの平坦といえる状態であり、堅くしまっていた。柱穴と思われるものは、P₁(40×32, -22cm)、P₂(42×40, -36cm)の2穴が確認されたのみである。カマドは焚口部の破壊がみられるが、立てて並べた袖石や天井石の一部が残存し、推定規模75×100cm程と考えられる。カマド内より土師器片の出土をみた。壁外は精査したが、ピット等確認できなかった。本址の発掘調査は、故人となられた辰野伝衛氏の担当によるものであることを記しておく。

遺物カマド周辺に少量検出された。土師器の環GII・b₃(307)、壺A I (308)があり、同器種の木葉匠痕ある底部(309)もある。その他甕(310)がある。

(山田 瑞穂)

ヒ) 27号住居址 (図21, 54-311-319, 65-9・14, 66-21, 図版10, 24)

遺構 本址は調査区北半の中ほどに位置し、褐色土からロームへ掘り込まれた住居址である。この付近は南への緩斜面というよりは、用地北縁部が微高地のために耕作土を取り除き、さらに検出面まで至ると

南西へ向かってかなり傾斜しているのがわかる。そのため、北西から南東部にかけての方向から本址への土砂の流入が多量に見られた。特に北東部は赤褐色の堅い古期ロームへの掘り込みであり、流れ込んだ覆土も同質の土で非常に堅く、壁面、床面の検出もなかなか大変であった。覆土中には人頭大程の石を中心に、直径3cmから60cm程度の角石、平石が約50個程、カマド正面から住居址中央部にかけて散在していた。これらの集石は、覆土上層より見られ、低いものでも床面よりはわずかに浮いた状態であった。カマドは、北壁中央やや東寄りに設けられた石組粘土カマドである。遺存状態は非常に良好であり、袖、天井の部分に平石を配し、周囲を粘土で固めてあるのが明瞭に確認できた。また、甕がカマドにかけられたままで検出された。柱穴は対象的にP₁(57×56, -50cm)、P₂(52×45, -46cm)の2本をコーナーに確認できた。壁は、検出面からみると、北側、東側が高く、南側、西側は低い。なお北、東壁はロームであり、南・西壁も明瞭であり良好な状態であった。床面はタタキを施されて堅く良好な状態である。なお、覆土中に見られた集石は、遺物をほとんど含んでおらず、検出時の状態よりみて、本址埋没途中に投げ込まれたものと思われる。

遺物 本址からの出土遺物のうち図示できるものとしては土器、紡錘車、環、刀子等がある。土器は、器種が多く、これらのほとんどがカマド内、或はその周辺、または壁際、床面上からの遺物であり、いわゆる覆土中からの出土としてとらえられるものは少なかった。甕AⅠ(319)は、ほぼ完形でありカマドにかけられたままの状態出土したものである。また、坏3点(311~313)もカマド内から得られたものであるが、とくにBⅡ・b₃(313)は完形のまま、焚口のやや奥に置かれた状態のまま出土した。なお小形甕BⅡ(316)もカマド内からの遺物である。紡錘車(図66-21)は土製のもので、比較的大形である。周囲は、ヘラ状工具で丁寧に磨かれ、中央の穴に木製、或は鉄製の軸棒を入れ使用したものであろう。刀子(図65-9)は、茎元のあたりに木質部が残っている。刀子の刃部は欠損して不明であるが、茎は、ほぼ全体が残っていた。環(図14)は錆のために鍍金状態が変化しており詳しくは分らない。

なお、遺物から見て本址は、金鉢場Ⅰ期に属する。

(高桑 俊雄)

フ) 28号住居址 (図22, 55-320~335, 図版11, 26)

遺構 調査区中央部の西端の地形的には高所に位置する。耕作土が浅く、20cmほどでローム層に達する。桑の抜根によって壁の一部、床面が破壊され住居址全体の検出はできなかった。層位的には検出面はほとんど確認できずわずかにローム層への落ちこみ面のみ検出できた状態であった。住居址南側の大半を溝状遺構7によって切られているが、ほぼ隅丸方形のプランを持つものと思われる。カマドと確定できる遺構は発見されなかったが、住居址東側の壁にあたる部分に、90cm大の円形の焼土が検出されている。この焼土がカマドにあたる部分と思われる。柱穴は主柱穴と思われるものP₁(92×76, -50cm)、P₂(70×78, -72cm)、P₃(87×120, -67cm)、P₄(90×63, -74cm)の4本、他3本(P₅~P₇)がある。主柱穴はそれぞれ対応するものである。壁は残存状態はあまり良好でないが、南西壁側では壁高80cmに達し、垂直に近い状況で形成されている。周溝は壁が残存している部分では廻らされていて、幅15cm、深さ10cmである。床面は叩きしめられているが多少の凹凸がある。屋外施設の検出はなかった。遺物の出土状況には特色はなく、ほとんど床面に散布している状態であった。

遺物 土師器13点と須恵器3点の出土があった。そのほとんどは破片で、図上復元している。土師器(320~332)は坏の出土が多く、また、器形的なバラエティーに富んでいる。GⅡ・b₃(320)・b₂(321)・b₃(322), AⅡ・b₃(323), J・b₃(325), C・b₁(326), HI・a₃(327)に分類される。鉢CI・C₀(328), 手づくね甕A(324)各1点の出土し

た。煮沸形態では、脚部のみであるが小形甕D (329~330) と甕A (331~332) が各2点ずつ出土している。須恵器 (333~335) は坏A (333~334) が2点、高坏 (335) が1点の出土で、陶邑古窯址群の編年でいうTK43の時期にあたるものである。本址の年代は金鑄場Ⅰ期に属するものである。(小林 秀夫)

へ) 29号住居址 (図23-1・2, 55-336~338, 図版11, 26)

遺構 本址は、遺跡用地内北西隅、1号古墳の北西にあり、地形的には古墳の上方に位置する。北西の高台より流れ込んだと思われる黄褐色土へ掘り込まれ、覆土は黒褐色を呈していた。全体的にややゆがんだ比較的小形の住居址である。覆土中からは、拳大から人頭大程の石が17・8個約80cm四方の中にまとまり、ほぼ住居址の中央に当たる位置より出ている。カマドは、北壁中央にあり、壁に対して直角に設けられた石組粘土カマドである。遺存状態は、非常に良好であり、焚口上にある1枚と、奥の2枚の天井石を支えるように左右の袖の中には平坦な石を立てて配し、土師器甕片をその補強材として中に入れ、囲りを粘土で固めており、細長い支脚も深く土の中に埋め構築されていた。カマド内に見られる焼土は非常に少なく、奥の部分に若干検出できたのみである。柱穴は、西壁中央に検出されたP₁ (28×26, -40cm) があるのみであった。壁は、黄褐色土のため全体的に軟弱であり、検出面より測ると北側は高い。床面は黄褐色土混入の黒褐色土で、北側部分は堅くて良好、他の部分は若干の固さがわかるのみの状態であった。なお、床面はほぼ中央より少量の焼土と炭化材片を検出した。

遺物 遺物は非常に少なく、図示できるものは土器3点のみである。土師器の甕A (338) は、カマド構築の際に中に入れられ使用されたものである。また、土師器小形甕AⅠ (337) は、カマド内に破損していたものである。このほかに住居址中央の焼土脇から炭化したモモの種子1果を検出できた。遺物からすると本址は金鑄場Ⅱ期におくことができる。(高桑 俊雄)

ホ) 31号住居址 (図23-3・4, 56-351・352, 図版12, 26)

遺構 本址は、用地内中央北西寄りに、北側を黄褐色土、他の側は黒色土に掘り込んだ端正な形をした小形の住居址である。南側は当初プランがはっきり擱めず、床面にとらえた。覆土中からは、拳大から人頭大までの大きさの石を中心に30余個が住居址の中央部と、カマド南側から検出された。いずれも床面には達せず低いものでも床面からは7cm程浮いている。また、焼土が、カマド正面と、住居址中央やや西側にあり、前者は床面上、他は床面より2~5cm浮き、焼土下には炭化したカヤ材を多量に検出した。カマドは東壁中央やや北側へ寄った位置に設けられた石組粘土カマドである。耕作により上面が破壊されて欠失しており、右側の袖石と左側の一部が残っている程度であった。柱穴は、南東隅と、南西隅のP₁ (44×39, -15cm)、P₂ (40×37, -19cm) の2本を検出した。なお、図示しては無いが北東隅に直径8cm程の小穴が2個、50cm程間隔をもって検出されている。壁は、検出面より見て一番高い北側が黄褐色土で約80cm、低い側にあたる南西は40cmであった。また東・西の壁は、上層が黒色土、床面に近い下層が黄褐色土であり、南壁を除いて良好な状態であった。床面は、黄褐色土を混入した黒褐色の堅い床である。

遺物 本址も遺物はきわめて少なく、図示できるものは土器2点 (図56-351・352) である。土師器壺AⅠ (351) は、P₂の北側から床面上に横位のまま上からの圧力でつぶれて出土した。また、土師器甕AⅠ (352) は、カマドの南側からの出土である。カマド正面、床面上には炭化したモモの種子1果が残っていた。

遺物からして本址は金鑄場Ⅰ期の住居址であろう。

(高桑 俊雄)

マ) 32号住居址 (図24-1・2, 56-346~350)

遺構 調査区中央部の西端にあたる傾斜面に検出された小形方形の住居址である。住居址のほぼ東西方向に溝状遺構7が横断している。耕作土下に褐色土が続き、その下に20cmほどの黒色土層がレンズ状に入りこんでいるのが観察される。溝状遺構は褐色土層から切りこみ、下層の茶褐色土層まで深く入りこんでいる。本址はこの茶褐色土層からローム層へと切りこんでいる。傾斜面上にあるので壁面の残存状態には差がある。カマドは北壁中央に位置する。その構造は板石を組み合わせ、その上に粘土で覆ったもので、煙道部はかなり残存していた。柱穴は南壁中央付近に1箇所P₁(50×41, -21cm)が存在するのみで、他は溝状遺構で破壊されたのか検出不可能であった。壁は西側壁の保存状態が良好で壁高50cmで、ほぼ垂直に近い状態である。周溝は検出されなかった。床面はローム面を叩いてあり堅い。屋外施設は認められなかった。遺物の出土状況は、かまど周辺を中心としている。量的には少ないが床面を中心とした資料である。

遺物 図示できるのは土師器5点で、坏GⅡ・b₃(346・347)が2点、高坏脚(348)が1点、小形甕B(349)が1点、壺AⅠが1点である。時期的には金鑄場Ⅰ期に属するものである。(小林 秀夫)

ミ) 33号住居址 (図-24-3・4, 56-339~345, 図版13, 26)

遺構 本址は、調査区北半Ⅰ号古墳の東側に位置し、軟弱なロームから黒褐色土にかけて掘り込まれた不整形プランの堅穴住居址である。住居址の西隅には集石5が本址上に存在している。覆土は黒褐色を呈し、下層中から炭化した丸材片を数本検出した。それは最大のもので直径7cm程であり、長さは1m前後のものまでである。また、荒削りした平材もあり、それらは床面には着いておらず、床面上6~18cmの間に不規則に倒れていた。また、P₃近くと、住居址中央やや南寄りの2箇所から焼土を検出したが、いずれも床面上ではなく、炭化材の下から、或は、それと同レベルからのものである。カマドは石組粘土カマドであり北東壁に対して直角に設けられている。遺存状態は割合良好であった。カマド内部には土器片が散在しており、カマドを作る際に石と土器とを芯にして構築したものが、使用時の加熱により、内側にあったものが剥げて落ちたと推察される。また、発掘時、カマド内に落ちていた平石は、天井の部分にあったものらしく、裏面が炭化物の付着により黒色を呈していた。柱穴は、カマドのある北東壁を除いて、各壁のほぼ中央部、やや内側にP₁(39×43, -24cm)・P₂(23×25, -59cm)・P₃(20×14, -28cm)の3本が検出された。壁は各壁によって土色が若干違うが、ほぼ上層が黄褐色土、床面に近い下層が黒褐色土で軟弱な状態であった。周溝は、西隅と東隅には検出できず、南西壁側の一部が15~30cm壁から離れてP₃を中心に長さ170cm程の独立した溝をつくり、他の溝は、ほぼ壁直下に3本を検出した。床面は、黄褐色の堅い床であり、部分的に若干の高低差はあるが、良好な状態であった。

遺物 図示できるものは土器のみである。このうち土師器坏GⅡ・b₃(339・340)は2点、ともにカマド内からの出土であり、ほぼ完形であった。また、坏BⅡ・b₄(341)は、若干口縁部を欠損してカマド左袖手前床面上より正位で出土した。この他に床面からは、底部がかなりの器厚をもつ小形壺CⅠ(342)と、同じCⅠ・C₄(343)が出土している。小形壺CⅠ・C₄(344)と小形甕AⅠ(345)は、覆土からの遺物であり、モモの種子1果も検出している。なお本址は、遺物からして金鑄場Ⅰ期の遺構である。(高桑 俊雄)

ム) 34号住居址 (図-25, 57-353~369, 58-370~373, 65-8・16, 図版13, 14, 25, 28)

遺構 本址は、調査区北西部に位置し、北西から南東へ緩やかに傾斜した地に検出された。北西170cmの所には、本址と時期的に並行する33号住がある。北東部は黄褐色土、西~南にかけては黒褐色~黒色と

いう土層へ掘り込まれており、覆土は、検出面からみると、中央部が黄褐色、その周囲が黒褐色を呈して床面までかなりの深さを想像させた。なお、本址北隅には土坑21があり本址を切っている。覆土中には、人頭大程を中心にした約100個の石が、主に住居址中央、ややカマド寄りから出土したが、すべて床面には着かず、覆土下層中からのものである。また、同じ下層中からは、焼土が南東壁、南隅寄りから、炭化材料がP₂とP₄の中間、やや内側から検出されたが、いずれも少量であった。カマドは、石組粘土カマドであり、西接する33号住と同じく、北東壁ほぼ中央に直角に設けられている。遺存状態は割合に良好であり、焚口部から煙道部までよく残っている。本址の掘り込みが深いため、焚口から煙出しの部分までの長さは、約1.5m、両口の比高差は、1mであった。なお、焚口部と煙出し部分の幅は、それぞれ、50cm、15cmであった。カマド焚口部上面は若干破損しており、天井の部分に用いられたと思われる長い平石が床面上に転がっていた。柱穴は、四隅やや内側にP₁(23×25、-55cm)、P₂(33×35、-60cm)、P₃(24×23、-59cm)、P₄(21×18、-60cm)の4本が検出された。これらは、径は小さいが深さは50~60cmとかなり深い。P₃・P₄は補助的な柱穴と考えられる。また、P₃・P₄の周囲、及びP₃は貼床されていた。壁は、北~東壁にかけては黄褐色土であり、南壁は、上層が黒色で、床面近くが黄褐色土、西壁は黒褐色土であり、良好であった。壁高は、検出面から床面まで、北西~北東部で約95cm、南西~南東で約60cmとかなり深い。周溝は、カマド部分を除き、壁直下に全周しており、その幅は10~15cm、深さは2~8cmであった。床面は、黒色を呈し、かなり堅く良好、また、P₂より北西壁に向かって周溝よりやや深い溝があり、小ピットがP₁とP₂の間、及び、住居址中央部に検出された。これらは間仕切りの用途のために設けられたものではなからうかと思われる。

遺物 土器、鉄器が出土した。土器のうち図示できるものは割合に多い。器種も多く、坏、鉢、高坏、甕、壺などを見ることができる。ほとんどが、床面、或は、床面近くの覆土から出土している。坏は量的に多いが完形品はない。種別としてはGⅡ・b₃(353~357)が多い。また本址からは高坏が3点出土している。361は、西隅から、363は本址中央ややカマド寄りからのもので、3点共に床面からの出土である。坏部、または脚部のみの完形品は見られなかった。4点の小形甕AⅠ(345・364~366)は、すべて床面から得られた。壺AⅠ(367)は、ほぼ完形であり、東隅壁際、覆土中の若干高いレベルから出土、甕AⅠ(370)は一部が床面からで、ほとんどがカマドを作る際に芯などとして用いられていたものである。おそらく371と同一個体であろう。小形甕A(373)は、カマドの右側、壁近くに底部を欠いており、正位で出土したものである。貼床下のP₃の存在と置かれたようなこの遺物は何か関連があるのかもしれない。

鉄製品(図65-8・16)は、刀子である。8は刀子の刃部がほぼ残っているが、茎の部分は欠失して不明で、刀子の中では小形のものである。16は刀子の茎で区の状態が分らない。小さな目釘穴が1個あり、全体の茎の重は薄い。また、カマド内、及びカマド正面、集石中などより、タール状になった小塊を検出したが、何が変化したものであるかは分らない、遺物から見て本址は金鑄場Ⅰ期の遺構である。

(高桑 俊雄)

メ) 35号住居址(図26-1・2, 59-377~394, 60-395~399, 65-10, 67-4; 図版25, 28)

遺物 本址は、調査区北西部、34号住の西側に検出された。北西から南東への微傾斜地であり、褐色土から黄褐色土にかけて掘り込まれており、覆土は、若干黄色味を帯びた黒褐色土であった。本址西側は、一部分用地外へかかっており、今回調査できたのは約70%程と思われる。覆土中には、隣接する33・34号

住居土中に見られたような多数の石は見られず、焼土が床面よりやや高いレベルから検出されたのみである。カマドは石組粘土カマドであり、未調査の部分を考え併せると北壁中央やや東に寄ると思われる位置に、壁に対して直角に設けられている。焚口から煙道まではよく残存しており、焚口から煙出しの部分までの距離1.8m、比高差1m、焚口の幅48cm、煙出し部分の幅30cm、煙道の最も細い部分で10cmを測った。焼土は、焚口、カマド内、煙道の中に多量に見られる。また、カマド上からは遺物が2個倒れたままつぶれて出土した。柱穴は、P₁(28×31, -19cm)、P₃(23×24, -40cm)、P₄(35×23, -39cm)の3本が主柱穴と思われる。この配列、間隔から見て、恐らく主柱穴の1本が用地外にあるものと考えられる。これらの柱穴は共に径は細いが、床面からの深さは40cm前後である。なお、カマド右側のP₂は27cmと若干浅く、貯蔵穴として使用されたものであろうか。壁は上層が褐色～黒褐色を呈し、床面近くが黄褐色土で、良好な状態であった。斜面のため、北壁では検出面より床面まで約60cm、南壁で45cmを測る。周溝は、幅10～15cm、深さ5～10cmで壁直下にカマド部分を除いて、東壁から北壁まで廻り、南壁には一部に見られるのみである。床面は小石、礫を含む黄褐色土であり堅くて良好な状態を示していた。

遺物 土器、鉄器、土製品等が出土した。土器には、図示できるものも多いが、完形のまま、床面からの出土は多くない。器種は多く坏、甕、甌、壺、提瓶等がある。坏の中ではGⅡ・b₃種が比較的多い。坏b₄(385)は完形のまま東壁寄り床面上から出土した。他にも377・379・385の3点が床面から得られたものである。また、本遺跡より唯1点の甌(386)は底部のみであり、全体を知ることはできない。甕には様々な器形のものがあるが、そのほとんどが破片であった。床面からの遺物としては、382・389・390の3点がある。395・396の2点はカマド上からの出土である。いずれも西へ向いて並んで倒れており、395の上には人頭大程の石がのっていた。この2点は、のちにはほぼ完全に復元できた資料である。本址からの須恵器では唯1点、提瓶(394)がある。これは、P₄・P₃の間、床面近くの覆土中からの遺物であり、胴部のみしか得られなかった。鉄器は、身の大半が残る鎌(図65-10)がある。土製品は1点のIC型に属する土錘(図67-4)で、住居址外、カマド煙出し部分の石組の際より出土したが、本址の遺物かどうかは疑問である。また、カマド前の焼土を中心として、その周囲、80cm×180cmの範囲内の、床面、或は、床面近くの覆土中より植物種子の実が多数検出された。種類が多く、クリ、ヒン、スモモ、クルミ、モモ、ドングリ等が判別できた。カマド焚口中央部、焼土中からは微量の骨粉も検出できたが、何の骨なのかは不明である。なお出土遺物より本址は金鈔場Ⅰ期の遺構である。

(高桑 俊雄)

モ) 36号住居址 (図27-1, 61-400~413, 図版14, 28)

遺構 調査区北半では一番南に位置する単独住居址である。検出状況は、東側にゆるやかな傾斜をしている地点で褐色土層からローム層に切りこんでいる面でプランを確認した。プラン内には黒褐色土が堆積していた。他の遺構との複合関係は確認できなかったが、36号住居東南側に一部色調、土質の変化を認めた。時間的、用地界などの関係で調査できなかった。かつての沢筋の落ち込みと考えられる。住居址は方形のプランで、その東側の壁中央部に石組の粘土被いカマドがある。カマドは板石の組みあわせであるが、一部の石は抜き取られ、カマドの全容は明らかでない。図示していないが、調査カードによると、カマド周辺に30～40cm大の自然石が12個投げ込まれたような状態で検出された。同様な状況は、本遺跡でも、18・20・22・23・26・27・31・34各住居址などにも見られる。床面に密着している状態ではなく、10cmほど堆積土上にある。床面上に構築された遺構ではなく2次的なものと思われる。今後類例を集めて検討が必要であろう。カマドと対応するように西側壁近くに、50cm大の焼土があった。焼土の厚さ10cmでかなり厚く、

焼土の内から土師器片と、紡錘車の残欠が発見された。柱穴はP₁(30×32, -59cm)、P₂(34×28, -65cm)、P₃(40×38, -35cm)、P₄(23×22, -50cm)の4本であるが、いずれも堀方状のものよりも細いものである。周溝は東壁の一部から北壁へ、さらに西壁の半分ほどまで巡っている。壁は垂直で、壁面に10cm大の自然石が露出している。床面は平でかたい。屋外施設は確認できなかった。遺物の検出状態は、土師器が床面に密着し、大部分が西壁の焼土周辺から出土した。他は紡錘車の残欠と刀子状鉄片が住居址上面から出土した。

遺物 土師器は坏が5点出土した。器形はバラエティーがあり、G II・b₃(400・401)が2点、J・b₂(402)、K・c₄(404)、L・d₂(403)が1点ずつある。高坏(407)はBに、鉢(405)はD IIにあてられる。小形甕は3点あったが、この中も、小形甕A II(488)、B II(410)、手づくね(409)の3つに分類される。甕(411~413)は3点あったが甕Aに属するものであろう。鉄製品としては刀子状の鉄片、また、紡錘車の滑石製の残欠が出土したが共に図示していない。土錘(図67-5~8)は4箇あり形態的にはIBa、II B、II A(2個)とある。本址の時期は金鑄場II期に属するものであろう。(小林 秀夫)

ヤ) 37号住居址 (図27-1、62-414~418、図版14)

遺構 調査区北半の南への傾斜面に検出された金鑄場II期の竪穴住居址である。黒色土の落ち込みを掘り下げて行ったところ、更に黒色土の落ち込みが現われ、周壁が二段になることが判明した。前後関係を問題にし、貼り床の存在等を予期して精査に当たったが、その確認はなく、同時存在か、縮小しての掘り込みと判断すべきに至った。覆土の状態も検討したが違いは把握できず、問題として残る。

本址は外・内側ともやや不整の隅丸方形を呈し、北東隅は周壁を同じにするが、他は二段の側壁を持ち、西側で42cm幅、東側で20cm幅の棚状部分をもつことになる。側壁の高さは、西が24と62cm、南が12と32cm、東が10と30cm、北が20と55cmを測る。柱穴は確認されず、南西隅に底の丸い凹み(-20cm)があるだけである。床面は小石を含んだローム土が固められており、平坦ではあったが、北壁から東壁には礫が多くみられた。カマドは北壁中程に構築されていたが、すでに破壊され、袖石の一部と焼土が残存したのみで、規模等不明である。出土遺物は少ない。

遺物 土師器と須恵器が少量ある。土師器は坏G II・b₃(414)、K I・b₄(415)、小形壺C I・b₄(416)、高坏A(417)があり、小形壺は本遺跡では1点のみ紅彩が施されたものである。須恵器では高坏(418)が1点のみある。(山田 瑞穂)

ユ) 38号住居址 (図28-1、62-419~422、図版15、28)

遺構 調査区北半の東への傾斜面に検出された金鑄場II期の竪穴住居址である。北東隅が石垣造成のため破壊されて不明となっているが、隅丸方形であることが判明した。主柱穴は4本であったと思われるが石垣部分は確認できなかった。P₁(20×21, -37cm)、P₂(24, -42cm)、P₃(22, -57cm)がある。側壁は西壁52cm、南壁32cm、北壁22cm、東壁3cmの高さを有し、西壁直下に一部周溝がある。壁にも床面にも礫の混在があって、床面は粗雑な様相を呈し、やや起伏に富んだ傾斜をもつため平坦とはいえない。北東隅には径40cm、深さ19cmの小ピットが穿たれている。カマドは確認部にはないところから、破壊された石垣部分にあったとすれば、北壁中央やや東寄りということになる。出土遺物は少なく、南壁西隅寄り床面に土師器甕がつぶれた状態で出土している。

遺物 完形に近い大形の土師器甕2点と坏1点、および須恵器の坏1点などが検出されている。土師器は坏K II・b₃(419)、甕A I・A II(421・422)があり、須恵器坏(420)は床面出土である。(山田 瑞穂)

㉓) 39号住居址 (図28-2・3, 58-374・375, 63-423~440, 図版15, 27)

遺構 本址は調査区南半、用地西端近くに検出された。西南にある弥生期の**30号住**を調査中、更に落ち込みが確認されたのが本址である。構築時には**30号住**の床面の存在は考えられるので、その床面を掘込んで作られた住居址である。カマドは東壁のほぼ中央にあり、石組粘土作りで、規模は65×70cmを測る。左袖は平石を3個縦にならべそれを芯として白粘土で覆っており、煙道部へ続く石も2個ほぼ築造時の原型をとどめているが、右袖は石組粘土共に破壊されており煙道部入口の2個の石が残っている。天井石は住居外へ持ち出されてない。支脚も見当らず、火床を精査したが据えられた痕跡も無い。焼土は火床に4cmの厚さで堆積しており、煙道入口附近にも黒褐色の中に混入している。焚口前にも散っている。柱穴は床面上にある3個のピットのうち、西隅と南隅は浅すぎ、東壁北隅寄にあるP₃(25×40, -38cm)のみ形状、深さ、位置共によいが他は不明である。住居内を精査したが他時期の土坑が貼床の下より2個検出された以外はない。壁は砂質ロームを掘込んで作られており良好である。東西の壁は比高差が少なく、南北の壁は南西から東へ傾斜する地形のため比高差が大きい。東壁は30cm前後、西壁は70~50cmで、南壁は70~30cm北壁は50~30cmと北東に傾斜している。周溝は浅いが東壁を除き壁の直下を巡る。床面は貼床の上面以外良く締り良好である。図示しなかったが焚口附近から右袖にかけて住居廃棄後に投入された人頭大の礫が多数散在しており、右袖もこの礫による破壊が考えられる。遺物の出土量多く特に完形となる土器が多い。住居址内で使用された土器のセット関係を知るには良好な資料を提供してくれた住居址である。須恵器の提瓶(440)は使用時そのままの状態のカマドの左袖が東壁に接する位置に立て掛けてあり、その左へ30cm離れた壁の縁に内側へ僅かにずれて、手捏ね環(426)と土師器の坏(432)があり、この2点は壁上テラスに置かれていたものであり、以上の3点は同時に使用されたものであろう。提瓶が住居址から出土することはまれで数少ない例である。右袖が東壁に接する位置に投入された礫の下より黒色土器の鉢(430)が、その南西へ10cm離れた床面上に土師器の壺(438)が張り付く状態で潰されている。西隅コーナーより東へ60cm寄った周溝近くに土師器の甕(374)が床面上に倒れて土圧により潰れている。北東の隅より80cm西へ離れた壁近くに土師器の甕(375)が余り毀れずに北東に倒れており、底部で16cm口縁部が30cm床面から浮いている。この甕の口縁部に重ねた状態で土師器の鉢(429)がある。甕(375)の底部から内側へ50cm入った所と、右袖石前方20cmの床面上に高坏の坏部と脚部の破片があり、東隅コーナーから中央へ95cm入った所に床面から12cm浮いた覆土中よりほぼ完形の刀子が出土している。

遺物 出土量は本遺跡中でも多い方で、完形やそれに近いものもある。土師器は器種もバラエティーに富んでいる。坏類ではGⅡ・b₃(423・425)、FⅡ・b₃(432)、鉢AⅡ・b₄(427・428)、AⅠ・c₃(429)、高坏A(431)壺A(437)、AⅡ(438)、小形壺AⅡ(434)・B(433)、甕B(375)・C(374)などがある。黒色土器では坏GⅡ・b₃(424)、鉢BⅠ・b₄(430)、手捏ね環B・b₄(426)、須恵器はほぼ完形に近い提瓶(440)と蓋(439)が検出された。鉄製品としてはほぼ完形の刀子(図65-20)が出土している。

(木下平八郎)

㉔) 40号住居址 (図26-3, 58-376)

遺構 調査区中央部に確認された住居址であるが、破壊が進み、全容が不明である。住居址南半は、現在の溝によって削り取られ、東半は西から東へのかなりの傾斜面のため耕作で不明になっている。従って確認された部分は北西隅を中心とする3×2.5m程度である。北西隅から推定して隅丸方形プランを呈するものと思われる。西壁高16cmで、確認した南部に周溝がある。北壁高は傾斜のため順次減じてみられない。床面も西壁沿いにやや堅い面がみられたが、耕作によって荒れている。西壁近くに径40cmの浅いピットが

検出されたのみで、カマドや柱穴の確認はなかった。出土遺物も少ない。

遺物 計測できる資料は土師器坏GⅡ・b₃(376)の1点のみである。(山田 瑞穂)

リ) 41号住居址 (図58-376)

遺構 調査区では最も北西に確認された竪穴住居址であるが、用地内では、その北東隅の極く一部がかかるのみで、主体は用地外にあるため、位置の確認のみに終わったものである。土師器坏の出土がある。

遺物 土師器坏GⅡ・b₃(376)である。やや薄手のつくりで、胎土は砂粒が少なく良質で、漆黒彩がみられる。(山田 瑞穂)

オ 竪穴状遺構 (図11-2)

遺構 本遺跡中唯一の確認で、調査区最南端に位置している。南北2.60m、東西2.65mの小規模な方形プランで、北壁と南壁に沿って柱穴と思われるピットが並んでいる。側壁は西側で20cmを測るが、東へ移るにつれて壁高を減じている。床面はローム土を固めた堅い面で、東南部が一段低くなっている。火気使用の痕跡は認められず、住居址の範疇から除外して竪穴状遺構と呼称した。出土遺物もなく、時期および性格等不明である。(小松原義人)

カ 土 坑

土坑は一覧表にして記述する。

表5 金鉢場遺跡土坑一覧

土坑 No.	挿図 No.	平面 プラン	規 模 (cm)			状 態	出 土 遺 物	備 考
			東西	南北	深さ			
1	29	円	135	150	50	北壁は垂直に近い掘り込み	なし	時期不詳
2	9	楕円	90	135	35	底部に凹みをもつ	土師器甕片	古墳時代
3	29	円	100	105	25		土師器甕片、内面丹彩坏底部	〃
4	29	円	90	110	25	底面に30cm大の石と拳大の石4個をもつ	土師器甕片、高坏脚部片、内黒坏片	〃
5	29	円	100	110	25		土師器甕片、須恵器片	〃
6	29	円	90	110	20	11号住に切られる	土師器甕片	〃
7	29	円	130	140	35	11, 12号住を切っている	土師器甕口縁部片	〃
8	29	楕円	50	85	40		土師器甕口縁部、坏	〃
9	29	楕円	70	100	80		土師器甕口縁部、坏、高坏脚部、骨片、炭火物	〃
10	29	円	175	180	50	壁面は堅いたたき、底面も同じく堅い。集石と貝を内包。	多量の巻貝と蛸の殻	時期不詳
11	29	円	45	55	35		土師器甕片、内黒丸底坏底部片、炭化物小片	古墳時代
12	29	楕円	65	120	65	16号住床面下、底面に凹みをもつ	土師器甕口縁部、坏底部片	〃
13	29	楕円	75	130	65	16号住床面下、底面に凹みをもつ	なし	〃
14	9	円	55	60	50	内に拳大の石8個をもつ	なし	〃
15	29	円	70	?	30	11号住に切られている	なし	〃
16	33	円	100	95	32	39号住の貼り床下	縄文前期土器片	39号住以前

17	33	楕円	102	82	32	39号住の貼り床下・底面に2個の小ピットをもつ。	なし	〃
18	30	不整円	148	124	30		なし	時期不詳
19	30	楕円	140	232	56	土壌20を切っている。	なし	〃
20	30	楕円	140	?	45	土壌19と28号住に切られる。	縄文前期土器片	時期不詳だが遺物からすれば縄文前期
21	30	円	76	64	21	34号住堆積土中にある。	炭化物	時期不詳

二年次に亘る調査で、一覧表のように21基の土塚の確認があった。年次別にいえば1～15までが初年次、土塚16～21が二年次である。分布的にみると調査区北半に2基、中央部に8基、南半に11基となり特に中央部では16号住周辺と28号住西側に、南半では11号住南側に集中している。形態的には、土塚19のように1.4m×2.32m、深さ56cmという大きなものから、土塚11のように45cm×55cm、深さ35cmという小さなものまでであるが、大きく円形プランのものと楕円形プランのものに二分別できる。時期的には不明なものがあるが大部分は住居址構築年代のものと考えたい。特記したいものとして次のものがある。土塚10は、構築及び伴出した貝等からして後世のものであろう。土塚8・9・12・13の楕円形を呈した16号住周辺にあるものであるが、出土土器や小骨片、木炭化物等からして速断はできないが、埋葬的な感を受ける。また土塚16・20からは縄文前期土器片の出土があるが、偶然埋土に入り込んだとばかりには考えられず、縄文前期におくべきものかも知れない。土塚21は34号住が埋没後に作られたもので後世のものであろう。

(山田 瑞穂)

キ 列石状遺構 (図31, 図版17)

調査区中央部の東へ下る傾斜面に検出された石列で、南西に接して集石1・2が確認されているが、それとは全く異なる構築である。傾斜面の黒土層を幅40～60cm、深さ20～30cm掘り込み、そこに一辺が20～40cmの自然石を直線列状に配列したもので、確認した長さは約7mを測る。本列石の周辺からは土師器片の出土があるが、伴う遺物とは考えられず、時期不詳である。地元耕作者の話によれば、傾斜土地の境界線に本列石と同じ状態のものを見たことがあるとのことだが、それとする確証はない。いずれにしても後世のものであろう。

(福沢 幸一)

ク 集石

ア) 集石1 (図31, 43-146-166, 65-12)

遺構 農道の北西に検出された。西方に13号住、北方に集石2と列石状遺構が続く地点に位置している。この地点は以前沢筋になっており、黒色土の堆積が厚く、本集石1は黒色土層上面に構築され、南北方向にのびている。20～30cmの自然礫を二段ないし三段に積重ねた箇所が一部にみられるが規則性には欠ける。30～40cmの礫は平らな面をやや斜めにして並べた形跡がみられるがこれとて当初からかは疑問である。本集石1の東には黒色土層に二箇所の焼土があり、その周辺から土師器片と金環の出土があった。

遺物 礫と礫の間と集石東の焼土辺にかけて多く出土をみた。土師器と少量の須恵器片である。土師器は環、甕、高環脚部で、特に環形土器は器形の変化に富む。図65-12は銅芯の鍍金による金環である。

(福沢 幸一)

イ) 集石2 (図31, 43-167・168)

遺構 集石1と列石状遺構にはさまれた位置ある東西に長い集石で、黒色土中にある。集石の大部分は

崩れているが、一部残存している箇所から、礫の並べ方、積み重ね方、遺物の出土状況など、集石1と同じであり、関連する遺構と思われるが如何なる性格かを定める手がかりはつかめなかった。

遺物 須恵器坏片(167)と同高台付底部片(168)の他に土師器甕片の出土があった。

以上記した集石1・2は、いずれも東・南に焼土面をもつ箇所に構築され、この三者は何らかの関連性をもつものと思われる。出土した金環、高環等の遺物から、祭祀、信仰に関連する遺構かも知れないが即断しかねる。また、個の集合で全体的にかかる集石になったのか、当初からこの姿であったのかも不明であり、集石下には何ら遺構をつかめなかった。(福沢 幸一)

ウ) 集石3 (図30-3, 64-441~451)

遺構 調査区最北部に近い古墳周溝と33号住の間に3箇所の集石がみられた。集石3はその1つであり、3箇所中では一番規模の大きなものである。石の範囲は4m四方に及ぶが、その中心は、3.5×1.6mの範囲となろう。そしてこの集石は、6つほどの単位で構成されているものらしい。集石周辺には焼土の他、北側に土塚、南から西側に7個のピットが発見されているが、いずれも集石との関連を明確になし得られなかった。一応ここでそれらについて記しておきたい。焼土は、径60~70cmの範囲で、厚さ2~4cmほどあり、単位集石の直下にはみられず、若干ずれた位置にある。焼土と石の間には1~3cm程の間層がみられた。土塚は集石の端に接した状態にあり、東西1.6m、南北1.1mの卵円形状で1mの深さを有する。ローム土を掘り込み、覆土に黒褐色土をもつが遺物の出土はなかった。次に7個の柱穴状のピットであるが、40~60cmの径をもち、深さも12~52cmと一定した規模でなく、また配置にも何ら特別な規則性はうかがえない。P₁、P₂、P₄は底面に石を有する。集石3の周辺から、土師器片の出土をみているが、集石に関するものか判別も困難であり、むしろ古墳との関連もあって、ただちに集石3の時期を決める資料とはなり得ないと思われる。一応以下に集石3周辺出土土器としてのせておく。

遺物 比較的まとまった土師器の出土がみられた。坏GⅡ・b₃(441~443)や器種分類では示さなかった坏類として黒色土器(444)もある。鉢AⅡ・b₃(445)は完形である。甕A(447)、小形甕AⅠ(448・449)、甕B(451)のほか、器形が不明確なもの(446・450)もある。(山田 瑞穂)

エ) 集石4 (図30-3, 64-452・453)

遺構 集石3の東に続いて確認されたもので、意識的に石を組んだ様子がみられる。十数個かの石であったろうが、9個の石が組み集められた状態で検出された。その直下に60×220cmの細長い、深さ40cmの土塚が穿たれている。集石に伴うものとみたい。

遺物 土師器と須恵器が1点ずつ検出されている。土師器は小形鉢(453)、須恵器は坏CⅡ・a₃(452)である。(山田 瑞穂)

オ) 集石5 (図33-3, 64-454, 66-6)

遺構 33号住の西隅上にあたる地点に構築された集石で、3単位から成ることが判明している。図33-3の断面A~B、C~D、E~Fがその単位を示すものである。北に当たる断面A~Bの集石は、13個の石から成り、その下に75×120cm、深さ16cmで底面中央に石をもつ土塚が確認され、嘉祐通宝(図66-6)北宋1056~1063)の古銭と灰釉陶器碗の出土をみた。他の2個からは遺物の出土も、土塚の確認もなかった。出土遺物からして埋葬に関する性格が強く感じられる。

遺物 出土遺物のうち灰釉陶器1点の坏AⅡ・a₂(454)が計測できたのみで、他には、嘉祐通宝が1個ある。

(山田 瑞穂)

ケ 溝状遺構 (図9-2, 32-1~3, 10-2, 33-2, 64-455~457, 図版1)

調査区内から、表に示すような溝状遺構が7箇所確認された。

溝状遺構番号	図番号	方向	形状	出土遺物	備考
1	9	西→東	2号住を切って構築された断面U字状のもので西は1住の東からはじまり東は未確認。確認部9m、幅約1.5m、深さ約35cm	土師器片23、須恵器片6	
2	32	西→東	調査区最南端丘陵下に確認された断面ゆるいV字状のもので途中で分かれる。西、東いずれも未確認。確認部11.5m、幅約1.5m、深さ60cm	土師器片3	同一のものでつながる
3	32	西→東	溝2と途中で分かれる。形状2と同じ。確認部10m、幅約1.5m、深さ30cm	弥生片1、土師器片1	
4	32	西→東	調査区最南端丘陵下に確認された断面U字状のもので、溝内に大礫、小礫、砂層の混入あり。西東いずれも未確認。確認部12m、幅約1.5m、深さ約60cm	縄文前期土器片、中期土器片、土師器片、須恵器片、刀子?	
5	32	西→東	12号住の南に確認された断面U字状のもので東は土手で不明、確認部4.5m、幅約1.4m、深さ約30cm	土師器片1	
6	10	西→東	13号住を切って構築された断面U字状のもので西東未確認、確認部6m、幅約1.5m、深さ約30cm	土師器片2、須恵器片1	
7	33	西→東	32、28、24号各住居址を切って構築されており断面台形の溝で、確認した総延長は45mに及ぶ長いものである。(道路下は想定)幅は平均で1.5m、深さは40~60cm。底部は流水の痕跡を示す礫と砂がたまった面が観察できた。	土師器、須恵器、石製紡錘車	

調査区中央部と南半を区画した現在の沢筋が農道のUカーブする地点にあるが、二年間の調査中は流水をみることはできなかった。しかし、雨期や集中豪雨等のあった際は水流をみるとのこと、調査時も地元から、この沢筋への土の投入を強く禁止された。溝状遺構7は、この沢筋に平行しており、24号住の東半を切ってほぼ直角に曲がり、現沢筋に合していることから、前身的な感を受けて興味深い。また、36号住の南から、16号住の北側にかけて深く埋った古い沢筋があることから、この地は相当に流水によって地形変貌したことが観察されている。従って確認された7箇所の溝状遺構は住居址への水の進入を防ぐための計画的または応急的なものであったと推測される。特に調査区最南端の千鹿頭社西方の丘陵北側直下に確認された溝状遺構2~4は一連のもので、溝7とともに計画的な長い溝であったに違いない。時期的には、金鑄場Ⅰ期以降であることは事実であるが決め手を欠く。おそらく、金鑄場Ⅱ期とした時期のものであろう。

(山田 瑞穂)

コ 水鳥紐付蓋平瓶について (図8、44~46, 図版19~22)

この「水鳥紐付蓋平瓶」は、長野県に搬入された東海地方産の諸製品のうち最も傑出したものの一つである。既に公表されたものであるが、1・2の知見を加えて説明することにする。

本資料は第二次調査によって、遺跡の西北端に位置する古墳の玄室埋土中と周濠状の浅い凹部、およびその周辺に散乱して出土した。このうち、鈕部と尾部は玄室埋土中の上位から検出されたものである。また、凹部からは長頸壺(図46-205)が伴出している。しかし、古墳は削平・盗掘等で墳丘の大半と石室上半部が破壊されており、わずかに玄室両側壁の一部と、奥壁の手前から玄門部までの敷石床面が遺存したただけであった。したがって、出土状態からは古墳の副葬品とはみなし難く、また、後代の祭祀・供膳供養の器であったこともただちに求めることはできない。

水鳥紐付蓋平瓶は、通有の平瓶に水鳥の頭部を形象化した鈕付蓋とその尾部を把手に備えるものである。鈕部と把手部はヘラで成形して、端正に造り出されている。淡灰白色を呈する堅緻な胎土と、やや黄味を帯びた淡緑色に発色した灰釉が施される優美なもので、鈕付蓋と肩部によって水鳥を形づくる調和のとれた姿態を呈する。規模は蓋をかむせた総高25.8cm、体部最大径27.0cm、高台径16.6cm、把手部高23.7cm、体部高13.1cm、注口径9.8cm、鈕付蓋径10.9cm、高さ8.8cmである。器体は小破片で検出されたが、復元にたえるものである。体部・把手部・鈕付蓋の順に述べる。

体部は、直線的に大きく外傾して肩部を鋭角につくる高台付の浅鉢形のもの、それを覆って中央部で盛上る偏球状のものとなる。この体部にやや外傾して開口する太目の注口を挿入している。注口は口端でやや外反して丸く仕上げられているが、口端をよこ撫でた際にわずかな突線がつくられている。体部の成形は、広く浅い鉢形の体部を覆うために、体上部の天井に円孔を穿ち、その上から粘土板を貼り付けて蓋をする技法である(図44-200b、図版 26-200i)。したがって断面から見ると凸状に梁をかけてもたせる構造的なつくりになっている。同様の技法は古墳時代の提瓶にもみられるもので、須恵器の伝統的技法である。上記のように体部を成形した後、一方の肩部に円孔を穿って注口を挿入している。このため体上部内面は、粘土板を貼り付けた後ろくろ撫で調整されるが、しかし、注口と体部との接合部は指が入らないため挿入時のまま未調整である。高台は、縦にやや長い断面台形状のものが貼り付けられている。底部外面と肩部は丁寧なヘラ削り調整が施されている。また、内底部は仕上げ撫でが施されている(200k)。肩部は極くわずかな釉のふきだしがみえる程度で施釉されていないため、胎土中の微黒粒と細い長石粒の移動が明瞭である。ろくろ成形回転は右回りである。

把手部は、中央より右側と尾部の末端が欠失している。注口から肩部までをいっばいに使うもので、推定約18cmの安定した基部と、中央部で注口に向かって立ち上りながら反り返る鷗尾状の尾部とからなる。基部は体部との接合部でほぼ垂直に折れ曲って、左右から次第に高まりながら拡幅して中央部で最大になっている。断面形は曲折部で短辺1.5cm、長辺2.4cmの長方形であるが、体部との接合部はやや拡く方形状を呈する。尾部は、基部との分岐点で幅4.6cmを測るが、上方へ向って幅・厚さとも減じており、末端では尖っていたと考えられる。尾部の下部には、人差し指ほどの半円弧状の削り込みをもつ指掛りがつくられている。また把手部は、基部の裏面と接合部の正面を除いて、羽毛を抽象化して表現された幅0.2mm程の細線刻が浅く施されている。この線刻は基部の側面と尾部の側面上部で斜め、その下部はゆるい弧状、正面と平面は短く横にそれぞれ施されている。

鈕付蓋は、嘴が根元の間際から折れているだけで、遺存状態は良好である(図44-200a・図版 19~21-200i~L)。口縁部を短く折り曲げ、わずかに内傾する口端と、水鳥の頭部を巧みな造形で表わされた鈕部

とかなるものである。嘴は基部の幅1.8cmから推定して、幅の広いものが考えられるが、図示したものよりやや細長く3cm程になることも考慮される。上嘴と下嘴は沈線によって表わされている。嘴の背後は、面取によって立ち上った鼻部が造り出され、さらに頸部後方には冠毛にあたる箇所が小さく三角形に突出し、下方からのヘラの切り込みも加わって強調されている。頭下部から頸部は中空で、陶土を縮めるために直径約3cmの円孔が穿たれている。内面の上部は、指圧痕を残しているが、側面下部と口縁部の境は丁寧にヘラ削り調整されている。鈕部正面と両側面は、把手部と同様鋭いヘラ状具で格子目状に斜の細線刻が施され、羽毛を菱形に簡略化表現している。また頭部上面から冠毛にかけて、尾部と同じように、斜から横の短い線刻がみられる。施文の順序は、右下りの斜線、次いで左下りの順である。眼は羽毛を施した最終段階に入れられたもので、竹管の小口にわずかな面取りを施して突き刺している。

施釉は体部の側面と注口の外面を除いて、底部の外面も含めた器体と把手部、および鈕付蓋のほとんど全面に淡緑色灰釉がゆきわたっている。体上部は厚くどっぷりと施され、鹿子斑状の濃淡がみられる。把手部の側面にも釉の流れたあとがみられる。高台の内側約0.5cmの所より外底部に施釉の痕跡が認められる(図版 21-200L)。窯内での温度の上昇が充分でないため釉の大部分は剥落している。また、注口下部にあたる内底部には降灰による釉の融着が認められる。鈕付蓋は黄味を帯びた釉が薄くかけられている。頭部右側には小さな「ブク」がみられ、左側面はわずかにかかっている程度である。上記の如く注口の下部に降灰がみられる(図版 21-200k)ため、焼成時には蓋をのせていなかったことは無論である。しかし、体上部に降灰が一切観察されないことからすれば、本品は鉢匣入焼成であった可能性も充分考えられる。

上記の平瓶と伴出関係あるものは長頸壺(図46-203)である。二段構成技法でつくられたもので口径8.7cm、頸長6.8cm、器高20.0cmである。径頸指数(口径/頸長×100)128で、灰釉陶二段構成⁽³⁾に属する。頸部が開き口端の内外面に段を有する。肩部はゆるいなで肩で、胴部の張りもあまり目立たない。調整は内底部から体上部までをろくろ撫で、外面の下半はヘラ削りされている。体部のろくろ成形は不備である。口縁部から体部には、淡緑黄色から濃緑色に発色した灰釉が施され体下部まで釉流れがみられる。胎土は灰白色を呈し良好である。

ところで、本資料と類似の出土例は猿投窯において、3つの既報告例がある。黒笹4号と同7号では鈕付蓋、黒笹8号では把手部がある。今それらに猿投窯井ヶ谷地区の州原6号から出土した把手部⁽⁴⁾(挿図8-1)を加える。基部から尾部へかけての残欠で、差しわたし13.5cm、高さ7.5cm程である。尾部の背面で基部との境には、三角形の小さな凸部がつくられている。基部は側面に対し平面の幅が広いもので、短辺6cm、長辺2.4cmの断面長方形形状である。尾部は上部を欠失しているが、金鑄場遺跡や黒笹8号のものと同じように、鷗尾状に反り返るものとみられる。羽毛は側面において二条を一对とする深い沈線で具象的に彫り込まれている。平面は縦位に、凸部の下方で三条、上方で二条、さらに尾部先端に向って一条の沈線で表現されている。施釉は、基部の裏面を除いて全面に厚く淡緑灰色釉がみられる。胎土は緻密で灰白色を呈し、やはり微黒点の混入がみられる。

州原6号窯の把手部に伴って出土した須恵器は、坏B・C・皿、蓋、壺、把手付盤、長頸壺、短頸壺等である(挿図8)。また特殊品として、十字透かし彫坏(2)がある。坏B(4)は器高が高く深いもの一口径18.3cm、器高7.2cm一と、盤状を呈する浅いもの(6)一口径24.8cm、器高3.5cm一、および両者の中間的な器形(5)一口径15.1cm、器高4.0cm一がある。深いつくりのものは、口縁部がまっすぐに立ち上がり口端でわずかに外反する。盤状を呈する浅いものは、口端が外反している。高台はいずれも低く断面台形状を呈する。調整は内底部から口縁部をろくろ撫で、外底部はヘラ削りされる。胎土は青灰色～淡青灰色を呈

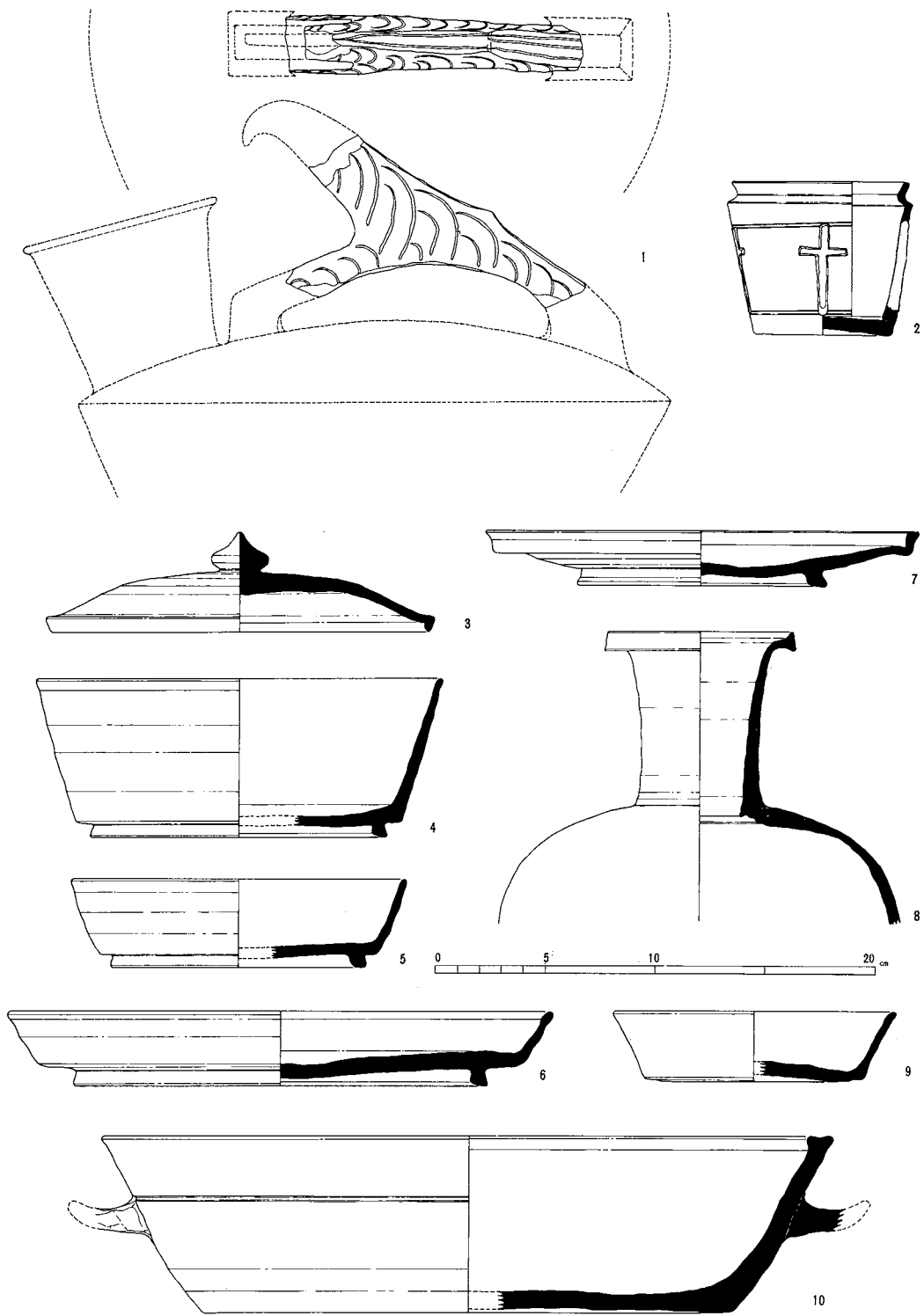


插图8 州原6号窯出土土器(1:3)

し、ことに深いものは良質で、ろくろ成形も丁寧である。坏C(9)は浅く小形である。口径12.7cm、器高3.2cm、口縁部と内底部はろくろ撫で、底部外面はヘラ削りされる。皿(7)は高台があり、口端を強く折り返して外反する。高台は坏と変らない。口径19.5cm、器高2.3cm。口縁部内面から底部をろくろ撫で、口縁部の外面と底部はヘラ削りされている。この器形は天地を逆にして、環状の鈕を付けた蓋とすることもできるがここでは皿とした。蓋C(3)は頂部に宝珠状の高い鈕を有するもので、口端を断面三角形に折り曲げて身受けがつけられている。口径17.1cm、器高4.6cmである。調整手法は口縁部上半の外面をヘラ削り、その下半と内面はろくろ撫でされる。胎土は青紫色を呈し精良である。把手付盤(10)は平らで大きな底部と外傾する口縁部とからなり、口縁部中央に把手が付けられる。口径33.3cm、器高8.0cm、口端の中央に小さな凹部をつくる。底部内面から口縁部の上半をろくろ撫で、下半と底部外面はヘラ削りされる。胎土は淡青灰色を呈し良好である。三段構成で頸部がつけられる長頸壺(8)は口縁部が細く締って口端内面に段をつくる。口径8.4cm、頸長10.6cm、頸径指数106である。肩部に自然釉の付着がみられる。胎土は淡青灰色を呈し良好である。猿投窯で一般に認められる三段構成長頸壺である。十字透かし彫環(2)は箱形の体部に短く外反する口縁部がつけられ、体上部と下部に各一条ずつめぐらされた沈線の間に、十字透かし窓が4箇所割り付けられている。口径7.9cm、器高7.0cmである。内底部から口縁部はろくろ撫でされる。外底部は糸切の後、周辺がヘラ削りされる。体部外面と口縁部内側は、暗緑褐色を呈する灰釉がみられる。胎土は青灰色を呈し須恵質である。灰釉陶器は、極くわずかで先記した水鳥鈕付蓋平瓶と、短頸壺蓋がある。当窯は全面的な発掘調査が行われていないため灰釉陶の実態は明らかにし難いが初期の灰釉陶窯である。

本遺跡の水鳥鈕付蓋平瓶は、猿投窯における特産品の一つであるが、これまでに出土したものに比し、羽毛の表現の仕方に顕著な差異が認められる。黒笹4号、同7号の鈕付蓋に描かれた羽毛は、一羽ずつ具象的に表現されており写実性が高いものであるのに対し、本資料は、斜線の組合せによる格子目状であり、表現方法に簡略化と形骸化が認められる。同様に把手部の斜めや横の細線による羽毛の抽象化も、黒笹8号、州原6号の退化形式と考えられる。一方、体部の形態をみると、平城宮東三坊大路側溝SD 650A様式(7)に類似例があること、また古墳の周溝状凹部から検出された長頸壺もこの様式で理解されるものであることから、9世紀前半の所産とすることができる。したがって、羽毛の表現の仕方からみれば黒笹4号、同7号、同8号、州原6号の水鳥鈕付蓋平瓶は本資料よりさらに遡ることは明らかである。また、同窯の須恵器は、平城宮6ABO地区のSE311Bと同宮6AAB地区のSE715によって代表される平城宮Ⅶ(8)に比定され、その下限は天長元年(825)頃とされる。要するに、水鳥鈕付蓋は初期灰釉陶生産開始段階の高度な施釉陶技術(9)に支えられて成立したものと把握されるのである。また、その系譜の示唆的なものとして愛知県では後期古墳に副葬された有蓋高坏の鈕に鳥形のものがあり、岡崎市の岩津1号墳(10)、宝飯郡一宮町の炭焼14号墳(11)、名古屋市師長町の師長古墳、犬山市羽黒の白山神社古墳等から出土している。6世紀末～7世紀前半の年代が与えられるものである。こうした伝統的須恵器生産の中に既にみられる系譜の延長として、水鳥鈕付蓋平瓶は扱えられるものであろう。また、原形となった水鳥は、頭部の造形からみて、池や沼地に群泳ぐおし鳥であった可能性を指摘することができよう。

州原6号窯の資料は、谷沢靖氏の御好意によって掲載させていただいたものである。

(坂野 和信)

註1 小林正春「長野県諏訪市金鉢場遺跡出土の灰釉水鳥鈕付蓋」『信濃』28-4 1976

2 植崎彰一「彩釉陶器製作技法の伝播」『名古屋大学文学部研究論集』1967

3 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討I」『考古学雑誌』65-2 1979

- 4 橋崎彰一「白瓷」『日本陶磁全集 6』 1976
- 5 橋崎彰一「古窯址地名表及出土品実測図」『愛知県猿投山西南麓古窯址群』 1957
- 6 谷沢靖「井ヶ谷古窯跡群」『刈谷市の古窯』 1958
- 7 吉田恵二・小笠原好彦「平城宮発掘調査報告Ⅵ—遺物3」『奈良国立文化財研究所学報』23 1974
- 8 西弘海・小笠原好彦「平城宮発掘調査報告Ⅶ—考察3」『奈良国立文化財研究所学報』26 1977
- 9 註3と同じ
- 10 斎藤嘉彦・久永春男「岩津第一号墳」『愛知県岡崎市岩津古墳群』 1964
- 11 橋崎彰一「須恵器・甕器編年表」『日本の考古学Ⅴ』 1967
- 12 「白山神社古墳」『愛知県犬山市埋蔵文化財調査報告書』犬山市教育委員会 1967
- 13 坪井清足氏の教示による。

サ その他の出土遺物

ア) 包含層出土の土器 (図64—458—460)

本遺跡の包含層出土の古墳時代後期土器は、その大半が各住居址から検出されたものと同様であったため、以下に記すもの外を割愛した。坏E (458) は丸底の底部から腰の強い口縁部へ移行し、口端を受口状に大きく拡げるものである。調整手法はb₁による丁寧なもので、胎土は明褐色を呈し精良である。坏G II (459) はやや厚手のつくりで稜部が大きくえぐられている。黒色土器の鉢C II (460) は、器形、調整手法とも鉢Cの典形である。以上の土器は、金鑄場Ⅱ期に属するものである。

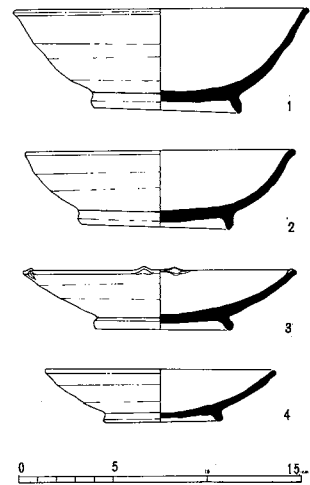
なお、本遺跡からは平安時代後期の土器 (挿図9—1—4) も出土している。中央区に位置する22号住居址の上層位から、灰釉陶器碗A 2個体、皿B 2個体が出土している。遺構は確認されなかったが、遺物はいずれもほぼ完存の遺存状態であった。したがって土壌等何らかの遺構の存在が想定される。器種分類は、十二ノ后遺跡奈良・平安時代の土器分類によっている。

碗A II (1—2) は大きく開く口縁部が口端でわずかに外反するものである。口径15.6—14.3cm、器高4.2cmを測る。高台は1、2とも断面三角形状を呈し、外面の端が面取りされている。内底部から口縁部はろくろ撫でされるが、底部外面はヘラ削りされる。2は底部の調整が不徹底で糸切り痕が残っている。いずれもろくろ目が目立ち成形はやや不備である。施釉は灰白色～灰緑色を呈する釉が薄くツケがけされており、外面は極く薄くかかっている程度である。胎土は淡灰白～灰黄色を呈し、比較的良質である。

皿A (3—4) は4つの輪花を配する口径の大きい3と、小形の4がある。輪花は指頭によって加えられたもので退化的である。口径14.5cm—12.2cm、器高3.3cm—2.8cmである。高台は低いもので外方へふんばっている。調整は碗と同じであるが、やはりろくろ成形は不備である。施釉は淡緑灰釉が内面にみられる。3・4とも外面は碗と同様ごく薄い。胎土は白色に近い灰白色を呈し良好である。ことに4は焼成も良好で堅緻である。

以上の灰釉陶器は、東濃系を主体とする製作地が求められるもので、十二ノ后Ⅸ期に位置づけられるものである (十二ノ后遺跡出土土器の大別参照)。

(坂野 和信)



挿図9 金鑄場遺跡包含層出土灰釉陶器 (1:4)

3) まとめ

山麓テラス状台地の日だまり地形である本遺跡は、調査以前から、各期の遺物の採集があって、それに伴う遺構の存在が予想されたり、地字である寺の鐘を铸たという伝承から、それに関する何らかの手がかかりがあるやも知れないということで重要視されていた。二次次に亘る発掘調査で、鐘を铸たということは、用地内調査では、何の手がかかりも把握できなかったが、すでに記したように、弥生後期住居址2軒、予想もし得なかった半壊古墳1基、古墳時代後期住居址39軒、同期と考えたい堅穴状遺構1、時期不詳も含めた土坑21基、集石5箇所、溝状遺構7箇所、列石状遺構1箇所と多くの遺構の確認とそれに伴う遺物の出土をみた。わけても古墳時代後期の集落の一端を把握したことは、この西山地帯では大きな意義をもつと同時に重要な成果といわねばならない。以下、問題点の多い古墳時代後期土器を一項にまとめ、他に住居址・集落・古墳等につき若干の所見を記してまとめとしたい。

ア 古墳時代後期土器の時期区分

諏訪地方の土師器は、主として諏訪盆地周辺の山麓に形成される後期古墳群の研究と併行し、その築造年代を求めるための資料として取り上げられてきた。ここでは、金铸場遺跡を中心に十二ノ后遺跡も含めて、集落址から出土した土器群の形式差から編年的位置についての基礎的な作業を試みることにする。各住居址から出土した土器は、若干の混入を除けば一括資料として、一時期あるいは単一様式の土器群とすることができる。これらの土器群の形式差を基準として、6世紀後半～7世紀前半までを2期に大別した(表6)。ただし、遺構の重複関係からみても明らかな如く、古墳時代後期の住居址群は2期以上のまとまりがみられる。したがって住居址のあり方からみれば、70年前後の間を3期ないし4期に区別することも不可能ではない。しかし、現状での土器の分析では、不徹底な部分が生ずるため、あえて細分を行なわなかった。加えて、今回の調査では古墳時代後期のごく一端を知見したのみである。また、当遺跡においても奈良・平安時代I期に属するものもみられるが、それについては十二ノ后遺跡の該当の項目(本書82頁)を参照されたい。

さて、当地方における6世紀後半～7世紀前半の土器は、約1世紀の間、成形技法、器形、調整手法に大きな差異を看取することができなかった。総じて、その変遷過程は極めて漸進的で、とりわけ調整手法における停滞が認められる。その中でも比較的器形に変化がみられる坏G・L、壺A種の形式差をとりあげて時期区分の指標としたい。坏類では主体をなすG種の製作手法の変化によって生じた器形の差異と、L種における新たな形態の出現を契機としている。また、壺Aでは径体指数(口径/体部径×100)による分析を行なってみた。

土器の大別(挿図10～13、表6・7)

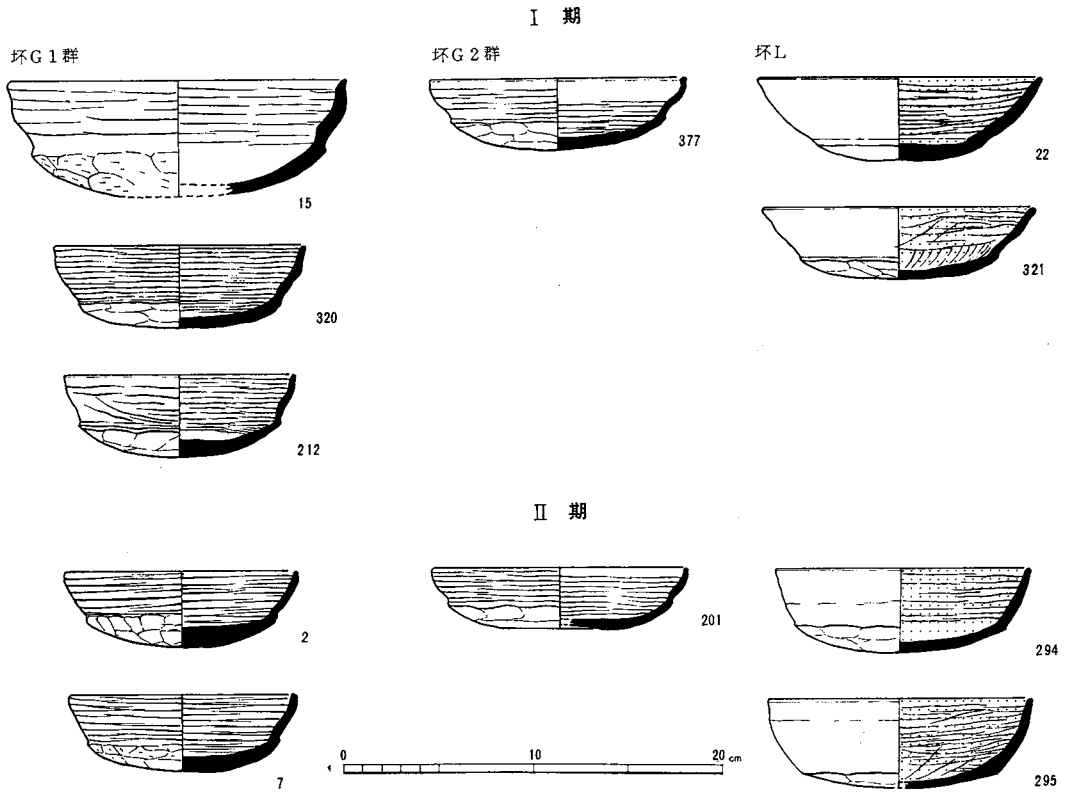
I期に属する坏G種のうちの1群(挿図10-15・212・320)は、稜部のつくりが鋭く、口縁部に何回もよこ撫でを施すことによって、大きく弓なりに内湾することが一般的である。底部外面は必ずヘラ削りされている。ヘラ磨きは、底部の一部にまで及ぶものがあり、緻密に施されている。金铸場18号、21号、28号、34号、十二ノ后116住居址に典型がみられる。2群(377)は、1群に比べ器高の低いもので数量は多くないが調整手法は前者と変らない。坏L種(22・321)は口縁部が内湾気味に大きく開くもので、底部との境の内面に段を有する。この器種は、I期より古い形式のものにおいても、口縁部外面にヘラ磨き調整を施さないことが特徴である。内面は黒色手法によって処理され、底部外面はヘラ削り調整されるが、指圧痕

表6 金鑄場遺跡時期・遺構別出土土器一覽

時期	遺構	土 器	(図No.)	須恵器(図No.)
古 墳 I 期	3号住	6		17 88 285 292 333, 334, 335 394, (439, 440)
	5号住	11, 12		
	8号住			
	11号住			
	12号住	20, 21, 22, 25, 26, 27		
	16号住	91, 113, 115, (102)		
	18号住	212, 214, 215, 218		
	21号住	241, 242, 246, 247, 250, 252, 252, 258		
	23号住	287, 289		
	24号住	290		
	28号住	320, 321, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330		
	31号住	351, 352		
	32号住			
	33号住	339, 340, 341, 342, 343, 344, 345		
	34号住	353, 356, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 367, 369, 370, 371, 372		
35号住	375, 377, 379, 383, 391, 395, 399, (385)			
39号住	423, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 438			
40号住	376			
古 墳 II 期	1号住	1		301 314 418 420 457 137
	6号住	?		
	9号住	14		
	17号住	77, 80, 87		
	19号住	219, 220, 222, 223, 227, 229, 230		
	20号住	231, 232, 233, 237		
	22号住	262, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 276, 277		
	25号住	293, 294, 295, 296, 297, 298, 303, 306		
	26号住	307, 308		
	27号住	311, 312, 313, 316, 318, 319		
	29号住	336, 337,		
	36号住	400, 402, 404, 405, 407, 408, 409, 411		
	37号住	414, 415, 416, 417		
	38号住	419, 421, 422,		
	一号古墳 溝	201, 202, 203, 205, 208, (204, 206, 209, 210, 211)		
7	455, 456			
土壇	7 117			
9	129, 130, 132			
12	144			
集石	1 146, 147, 148, 152, (151, 153)			
〃	3 441, 443, 444, 445, 451			
奈良・平安 I 期	2号住	(4)		(15) 68 167, (168) 452
	4号住			
	7号住			
	10号住			
	13号住	57, 58, 59, 61, 67		
	15号住	76, (70)		
	土壇	8 122, 123, 124, 128		
集石	2 453			

の残る例もみられる。

II期の坏G種(2・7)の1群は、稜部に鋭さがなくなり、口縁部との境いはやや不明瞭になる。よこ撫での省略によるもので、口縁部は湾曲がゆるやかになりわずかにのこる程度になる。法量は小形化する傾向もみられるが明瞭でない。へら磨きの施し方がやや粗くなって、調整手法に不徹底な要素の促進がみられるようになる。金鑄場20号、27号、36号、十二ノ后9号、13号住居址に典型例がみられる。手法における簡略化傾向は、やや浅い器形的特徴をもつ2群(201)について



挿図 10 坏G・L製作手法分類図 (1:4)

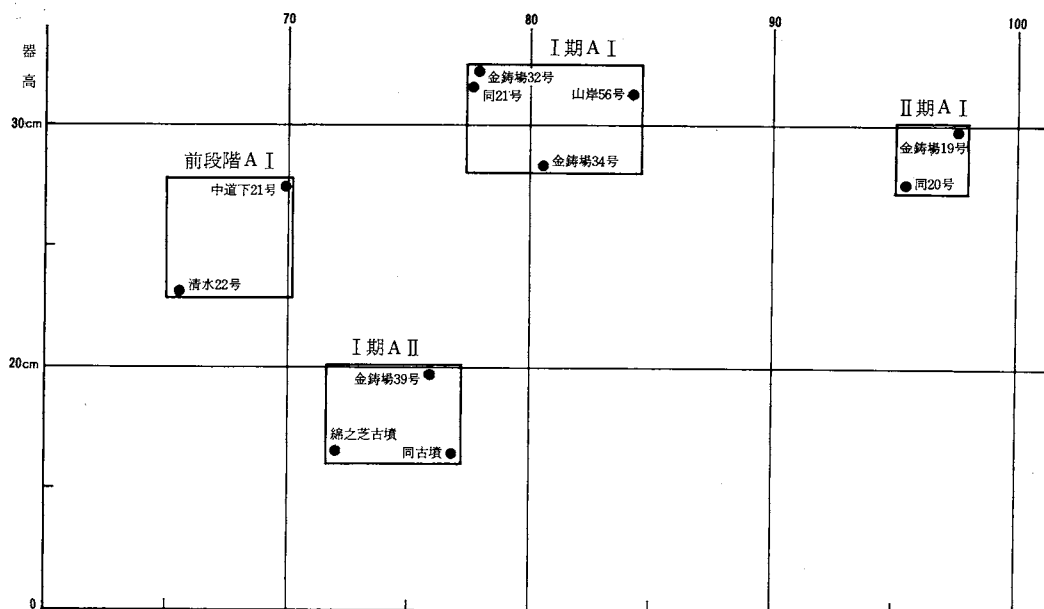
も一致して指摘することができる。この段階において坏L種(294・295)は新たな器形の出現が金鑄場19号・25号にみられる。前段階までみられたものがほとんど認められなくなり、これにかわって同一技法・手法・焼成による新たな器形の造形がみられる。口縁部は立ち上りつつ内湾気味に開き、器高が深いものとなっている。

次に、壺Aは大きな体部に外反する口縁部をつけたもので、器形の変化は体部に集中している。これを径体指数で表わしたものが、挿図11である。I期は体部の張り出しが強く略球形状を呈するもので、このため体部径は口径を大きく上まわり、径体指数が80~77前後に集中している。器高は32~28cm。金鑄場21号、32号、34号住居址が代表例としてあげられる。A IIも同様の傾向がみられ、39号住居址では同指数76である。II期になると、体部がやや縦長の不整楕円形になり、口径と体部径がほぼ等しくなるものへと変化している。径体指数98~95ほどになる。器高は30~27.5cm、I期のものに比し低くなっている。つまり、壺A Iは体部の最も発達したI期の段階の法量が最大であり、II期では体部径が小さく、丈も低くなって容量が減少しているのである。I期の前段階のものは、まだ体部の発達がみられずやや小形である。

ところで、先に表6であげた時期区分の一部を図表にまとめたものが、挿図12・13である。土師器は、器種分類(13頁)で述べたもののうち、比較的資料の豊富なものを構成形態別にI期とII期に区別した。いちいち言及していないが、I・II期はそれぞれに新、古を含むものである。

供膳形態

坏類はA、B、C、D、E種と口縁部に稜を有するG、H、I、J、L種の形式差を把えてみた。II期で



挿図11 壺Aの変遷 (径指数=口径/体部位×100)

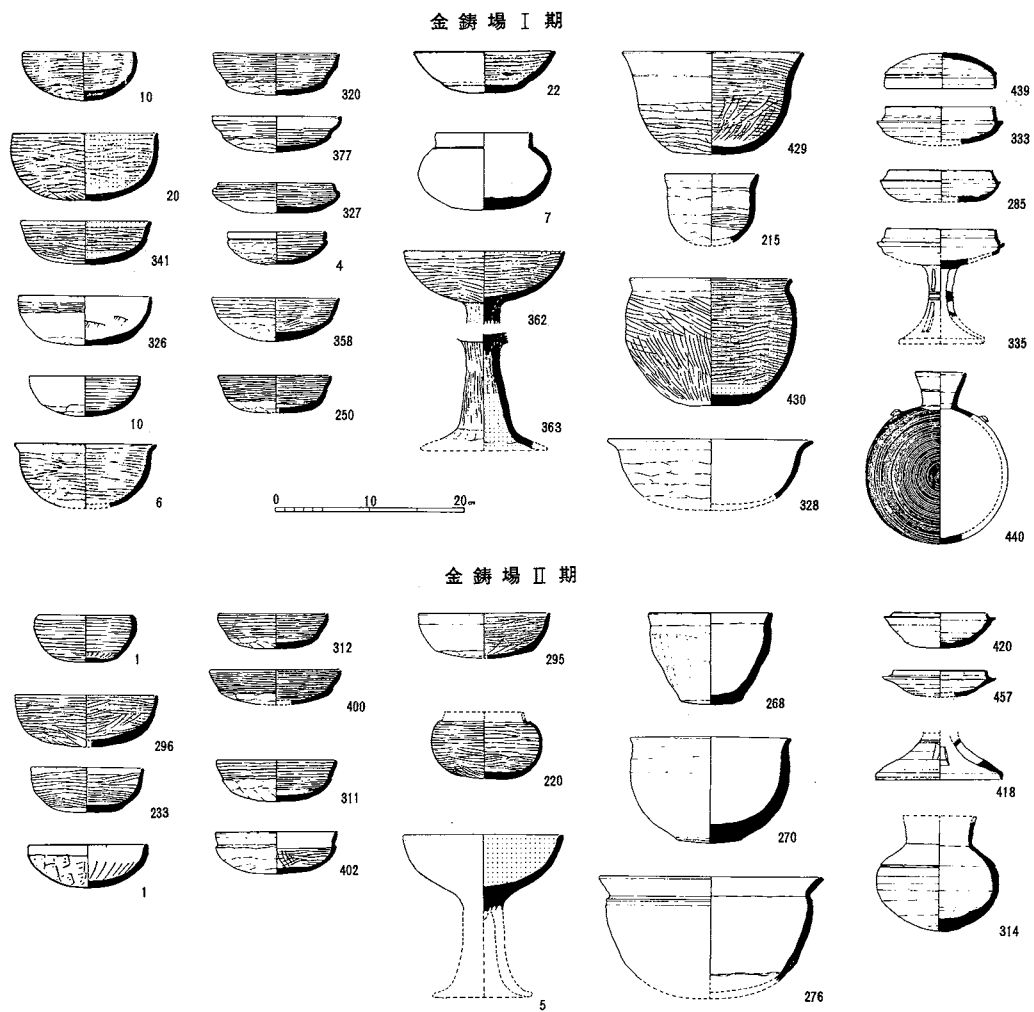
は坏D、Hの良好な資料を欠いている。I期とII期の差異は、大づかみに捉えて法量の小形化と、一部器種における調整手法の簡略化といえよう。こうした傾向については先に坏G種等で記した。法量の小形化は坏B (20・341・296・233)、坏C (326・1)、坏I (358・311)において明瞭であり、ヘラ磨きの省略化は坏J (250・402)に顕著である。坏類にみられるI期からII期への今一つの特徴的变化は、概して丸底風のものから平底風のものへ底部が変化していることである。また、坏Eは、古い時期からの系譜がみられるものであるが、II期においてはほとんど皆無となっている。

鉢類はA、B、C種に器形の差が認められる。D種はII期において出現した器種と考えられるもので、金鉢場25号、29号住居址、十二ノ后43号住居址にみられる。II期ではA Iの良好な資料を欠く。鉢A I (429) I期は、外方へ開く口縁部と内湾する体部とからなるものである。A II (215)は、内面にヘラ磨きがみられる。この図では示していないが、39号住居址にほぼ全面をヘラ磨きしたのもみられる。また、34号住居址には口縁部外面にヘラ削りを施したのがある。II期のA IIは口縁部にヘラ削りを施すが、成形技法の劣るものや、器壁が厚く鈍重なものもみられる。鉢B (430) I期は、口縁部が偏球形状に大きく内湾して口端が短く外反するもので、II期 (270)になると大きく内湾する厚い器壁が、口端でつまみあげられるものになる。底部は丸底風の平底が小さくつくり出されている。鉢C (328)のI期は、口縁部が外反して鍋状の浅い体部を有するもので、それがII期 (276)には器体が大きく深いつくりのものになる。口縁部が強く外傾し肩部に凸線がみられる。

小形壺A (7・220)は体部に大きな変化がみられる。I期 (7)はほぼ直立する短い頸部が大きく張り出す体部につけられ、II期 (220)は体部の張り出しが弱まって、孤状に内湾するものになっている。

高坏A (362, 363・5)は坏部と脚部の変化が特徴的である。B種は良好な資料を欠く。I期 (362, 363)は大きく内湾する坏部と柱状の脚部が裾で「く」の字形に折れ曲って開くものである。II期 (5)の坏部は内湾気味に立ち上りつつ開くが、脚部は裾を大きく拡げていない。

貯蔵・煮沸形態



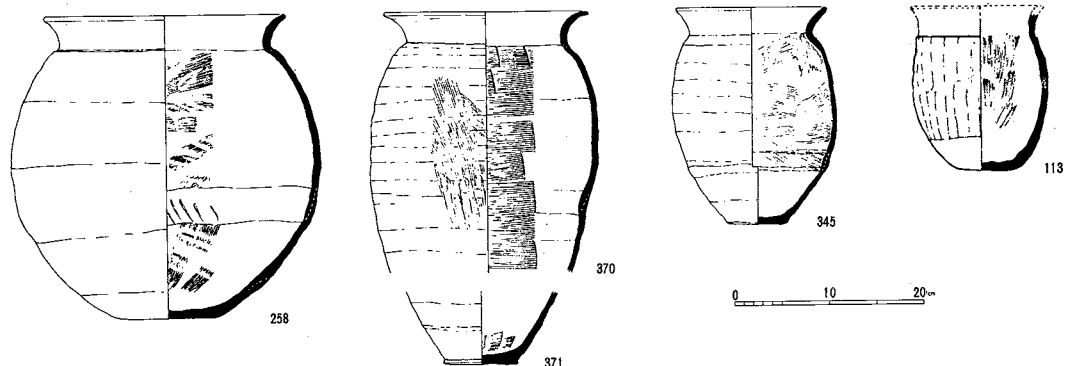
挿図12 金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器分類(その1) (1:8)

壺 A (258・237) には先記したとおりの変化がみられる。

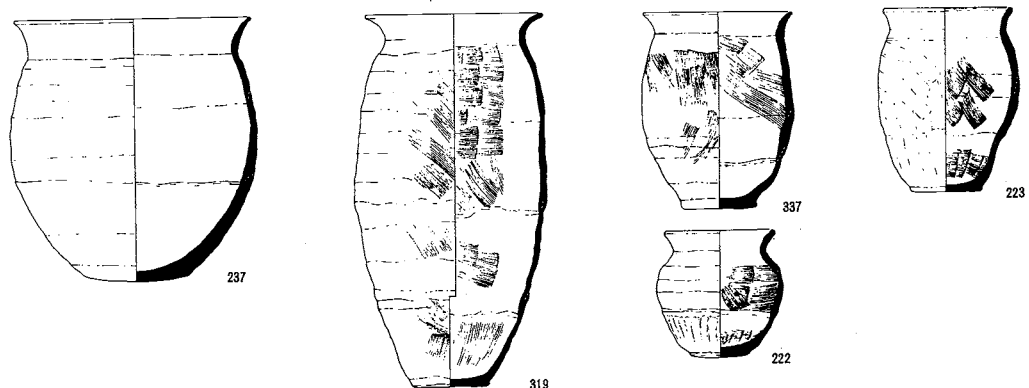
甕 A I (370, 371・319) における I 期から II 期への変化の仕方は、大略壺 A と同様で、体部に大きな変化がみられる。I 期 (370, 371) は完形ではないが 34 号住居址を典形例とする、強く外反する口縁部と体上部で大きく張り出す体部とからなり、II 期 (319) はその体部が細長い筒状やテーパ状を呈するようになる。

小形甕 A (345・337, 222) は口縁部と肩部に変化がみられる。I 期 (345) では肩部が張り出す体部に、外傾する口縁部をつけて、II 期 (337, 222) になると口縁部が肥厚して外反するものがみられ、体部は短い筒状を呈し、不整形なものが多い。A II は良好な資料にめぐまれないが、成形は粗雑である。調整手法は I・II 期を通してほとんど変わらない。小形甕 B (113・223) は体部外面にヘラ削りを有する一群である。I 期 (113) は口縁部が若干肥厚するもので、肩部に明瞭な突出部がみられ、底部は丸底風の平底である。II 期 (223) は A 種と同様、体部の成形が不整形で、底部は上げ底風の平底である。

金 鑄 場 I 期



金 鑄 場 II 期



挿図13 金鑄場遺跡出土古墳時代後期土器分類(その2) (1:8)

土師器と伴出関係がみられる須恵器は、坏、蓋、高坏、短頸壺、提瓶、甕、等で、東海地方で製作されものと、当地方産のものがみられる。諏訪地方で須恵器の生産が7世紀代に行われたことを知る古窯址は鬼戸窯で、埴輪と須恵器が併焼されており、須恵器から同紀後半の稼動年代が考えられる。当遺跡では、⁽¹⁾須恵器の検出量が少なく器種分類を行っていない。I期とII期の時期区分を述べる(挿図12・13)。

I 期

坏 (285・333) 内傾する立ち上り部とわずかに突出する蓋受を有するものである。口径11.4~10.8cm、器高4.1~3.4cm。底部外面の下半はヘラ削りされるが、内底部から口縁部はろくろ撫で調整される。

蓋 (439) 偏球形状の天井部との境に小さく突出する稜部をつくり、口縁部がわずかに内湾している。口径11.5cm、器高3.7cm。天井部外面下半から内面はろくろ撫で、外面上半はヘラ削りされる。

高坏 (335) 有蓋のもので、坏部は内傾してたちあがる口縁部を有し、丈が低い。脚部は細くラップ状に開くもので、長方形の2段透かし窓を四方に穿っている。口径11.2cm、推定器高12.1cm。坏部の調整は坏と同じである。

提瓶 (440) 正面円形を呈する体部に短い口縁部を付けたものである。肩部に小さく突出した紐掛を一対配している。また体部には、うず巻状に細く沈線がめぐらされ、側面はヘラ削りされ、その成形は、平瓶と同じ技法で側面頂部に粘土板を貼りつけて行われている。なお提瓶と蓋 (439) はⅠ期末に属する。

Ⅱ 期

坏 (420・457) Ⅰ期に比し著しく小形化することが特徴である。ごく短いちあがり部と蓋受を有するものである。口径9.9~9.8cm、器高3.8~2.8cm。底部外面の下半はヘラ削りされており、調整手法はⅠ期と変わらない。

高坏 (418) 脚部の残欠であるが、無蓋のものとみられる。丈が短く、裾を大きく拡げるもので、四方に長形状の透かし孔を有する。

直口壺 (314) 直立する口径部を略球形状の体部に接合するもので、底部は尖り気味の丸底である。なで肩の肩部に一条の沈線がめぐらされ、沈線の下から底部までヘラ削りされている。

以上述べてきた金鑄場Ⅰ期・Ⅱ期の実年代の推定は、結局、須恵器の編年によって導かれるものである。先記した如く須恵器の大半は東海地方産のものである。しかし、東海地方の須恵器編年で実年代が限定される資料が皆無に等しい現状では、畿内「陶邑古窯址」⁽²⁾や「飛鳥地方」⁽³⁾の須恵器・土師器の編年に比定して求めざるを得ない。すなわち、金鑄場Ⅰ期は、陶邑第Ⅱ期 (TK43~TK209) 頃までの6世紀後末葉、同Ⅱ期は飛鳥Ⅱ~Ⅲ期頃までの7世紀前半代に位置づけることができる。

小稿では、金鑄場遺跡の時期を明確にするため、南信地方における古墳時代後期の土器群を、天竜川中流域から上流域の下伊那・上伊那・諏訪の三つの地域に分けて編年的試みを行うことにしていた。主として、初期須恵器と土師器の伴出関係が認められる5世紀後半から、奈良前期までの7世紀前半に四つの画期を求めて把えようとするものであった(表7)。編年の根拠は、住居址の重複関係と土師器・須恵器の形式差である。しかしながら緊急発掘調査報告という性格上の限界と整理期間の関係等から、既報告遺物に関しても十分な観察が行なえず、加えて紙幅の制約著しいため今回の報告では詳細については割愛せざるを得ず試案(表7)のみをかかげた。今後の研究によって訂正と補充を積み重ねてゆくことが必要であると同時にその成果に期待するところ大である。(坂野 和信)

表7 天竜川中・上流域における古墳時代後期土器の編年

地域 編年	諏 訪	上 伊 那	下 伊 那
Ⅰ 480 500	本城-1, 2号墳	中通り下-1号墳	天伯B-2・6・7・9・28住 山岸-5・52・53住 伊久間原-8住
Ⅱ	小丸山古墳 綿之芝古墳	中通り下-21・22住	天伯B-1・3・5住 山岸-13・21・22・32・34住
Ⅲ 600	金鑄場Ⅰ期	天伯-1住 天伯古墳	天伯B-4・8・10・22・23住 山岸-17・56住
Ⅳ 650	金鑄場Ⅱ期		

- 註1 藤森栄一「川岸村三沢戸鬼埴輪窯址」『諏訪考古学』8 1952 当窯の資料を実見する機会を得た。須恵器の高台坏、蓋、高坏等から年代を推定すれば、「飛鳥Ⅳ」～「飛鳥Ⅴ」に相当する、7世紀後半に稼動していたものとみられる。埴輪は円筒形のものが多く底部へ向かって、テーパ状に細くなっている。残存部からみて3段に鈍い突起がめぐらされる小形のものと考えられる。形態は退化的なものであるが、ハケ目調整は比較的丁寧に施されている。
- 2 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
- 3 西弘海「Ⅴ考察—2遺物」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報 26 1976

イ 1号古墳

諏訪湖盆地の古墳については、古くは藤森栄一氏による「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」⁽¹⁾があり、地域的特色は明らかにされている。また最近では桐原健氏、宮坂光昭氏によって論考が発表されている。また個々の古墳についても、「諏訪上社フネ古墳」⁽²⁾、「諏訪市大熊片山古墳」⁽³⁾などがあり、中央道用地内にも「本城1号、2号墳」⁽⁴⁾、「小丸山古墳」⁽⁵⁾など内容のある程度判明しているものもある。金鑄場古墳についても、調査者の小林正春氏によって報告がなされ特に、灰水鳥蓋蓋付平瓶について詳細にされている。歴史的環境については『長野県中央道遺跡発掘報告書——諏訪市その1・2』⁽⁶⁾に詳しい。これらの先学に学び、諏訪湖東縁山麓——いわゆる西山山麓の古墳群の中での位置を明らかにしたいと思う。(図1)

諏訪湖東縁山麓——西山山麓の古墳群は、桐原健氏の分類の守屋古墳群である。この一帯には約36の古墳が知られ、その分布は散在的で群集化していない。時代的にも諏訪上社フネ古墳を5世紀前半期とし、金鑄場古墳、荒神山古墳のように7世紀終末の築造と考えられる古墳まで約200年の長期にわたっている。守屋山麓一帯の古墳の分布のあり方——支群のとらえ方など立地についての問題、時期的な問題——古墳群形成の過程、その中に内在する地域的特色など、また終末期の古墳の問題——古墳出土の8～9世紀代の遺物などこの地域での解決しなければならない問題が多い。

現在内部主体の判明している古墳は18基で、フネ古墳、片山古墳(ともに粘土床)以外は横穴式石室である。築造年代と副葬品との間に大きな幅が考えられるのは横穴式石室である。横穴式石室の性格上追葬やまた後世の混入や、再利用なども考えられ、出土品がそのまま築造年代とすることは、一概に決定できない。ほとんどの古墳が古く破壊され出土現状が不明という状態では年代決定は不可能に近い。先学の示された古墳の年代も再検討の必要があろう。守屋古墳群全体の古墳の再検討は資料的にも、時間的にもまた筆者が諏訪の古墳について全く不勉強という現状では無理である。今回は特に特色ある遺物の検討を行うことによって年代を推定した。先に桐原健氏によって年代観が発表されたが、氏の年代決定方法とまた古墳の年代観には若干問題がある。それは、築造年代と追葬品とを全く同一視したことにあり、氏の8世紀代築造とした古墳の多くは疑問の残るところである。(宮坂氏も7C末の年代をあたえている)例えば諏訪双子塚古墳について検討してみると、墳丘は前方後円墳とされたこともあるが、現状は堙滅して不明である。内部主体は横穴式石室であつたらしい。副葬品は豊富で、藤森栄一氏の「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」および「信濃考古総覧」によると直刀、鐔、刀子2、鉄鏃(尖根、片刃、平根形の両丸造柳葉式と称されるもの)、鏃、釘、轡、鉸具、辻金具、勾玉5、管玉3、切子玉3、小玉、金環3、石製鏝2、土師器、須恵器の出土があった。この内古墳の築造の年代と明らかに異なる遺物、例えば石製鏝などを除いて、築造年代を明確にできるものは、土器の類である。藤森栄一氏の前著中の須恵器、坏、坏蓋、土師器高坏の脚部の実測図で判断すれば、須恵器は陶邑古窯址群の編年の第Ⅲ期⁽⁷⁾にあてられ、また、土師器もいわゆる鬼高式⁽⁸⁾の範ちゅうに入るものであり、副葬品の豊富さはとても桐原氏のいう8世紀の築造古墳とは考えられず、7

世紀代の前半期に比定されるものである。他にも塚屋古墳は銅鏡が出土した古墳として知られるが、この銅鏡も小田富士雄氏の編年による第1形式の1類に、また、毛利光俊彦氏のAⅢに分類されるもので7世紀代のものであろう。小丸山古墳も氏自身によって7世紀前半に変更されている。他にも同様な例もあるがほとんど7世紀代と考えられるものである。蕨手刀や和鏡を副葬した古墳の中で築造年代を決定できる古墳はない。破壊されて、他との共存関係が明確でなく追葬かどうか決定できる資料ではない。この地域での横穴式石室を内部主体とする古墳の多くが、8世紀代、9世紀代の遺物が出土するところを見ると、はたして、和鏡や蕨手刀の出土を持って築造年代とすることは疑問である。むしろ他の横穴式石室と同様7世紀代をもって古墳の築造と考えたい。

このように考えてみると、諏訪湖盆の古墳も古墳文化の発達の中で特別な地域でなく、全国的な古墳文化の変遷の中でとらえられるものと思われる。守屋古墳群の変遷を追ってみると、フネ古墳を5世紀代中葉、これに続くのが本城1号・2号墳、片山古墳など、6世紀後半になると守屋古墳群も群集墳化し綿の芝古墳、双子塚古墳などが築造され、四賀四ツ塚古墳、小丸山古墳などが続き、有賀塚屋古墳、荒神山古墳、金鉢場古墳などが7世紀後半に形成されて行ったものと私考する。ほとんどの古墳は守屋古墳群が群集墳化していく中で築造され、8世紀代に新しく築造されることはほとんどなかったであろう。かなり先学の古墳年代観とずれが生じたが、もしこの年代が推定通りとすると、先学の諏訪地域古墳文化全般の見解と相違する部分がある。墳丘、内部主体、副葬品などは、古墳文化の中では全国的な時代的背景をよく反映しているものである。長野県内の古墳文化の中では副葬品の豊富さ(残存状態のよさ)はとびぬけている。こうした点今後更に詳細な検討を必要とするであろう。

8世紀代、9世紀代とも思われる古墳のうち、東日本における横穴式石室ではしばしば遺物が出土するものであり、長野県内でもよく経験するところである。諏訪湖盆の古墳の分布をみると、盆地にのぞむテラス状の山麓部に2～3基、多くても4～5基という分布のあり方を示している。仮に諏訪湖の西側一帯——守屋古墳群を一つの古墳群と設定すると、散在的な分布を示すこれらを一つの単位と考え支群とすると、関連性を持ち年代的な系列に気がつく。いくつかを例示すると、フネ古墳と片山古墳——ともに内部主体を粘土床、または粘土礫を用い、前者を5世紀前半、後者を6世紀初頭とされるなど系列が考えられる。本城1号墳と同2号墳も同様である。細部は不明であるが四ツ塚古墳群、まわり場古墳、金山古墳、角道1・2・3号古墳で構成する古墳群、小丸山古墳、北山ノ神古墳、有賀塚屋古墳の支群、双子塚古墳、荒神山古墳の支群など小さな地域で一つの支群——単位を形成する。これらは築造年代が近接し、またこれらの間には、成層的な関連を暗示させるものがある。金鉢場古墳はその存在さえ知られなかった古墳であるので、現在の段階では、直接関連を予想できる古墳はないが、当然近接する古墳は存在したであろう。一つの支群を構成する系統は、古墳の築造を継続させながら、追葬を行い、古墳そのものへの利用が終わった後も、何らかの利用がなされていたことが考えられよう。8世紀代、9世紀代の遺物が古墳から出土するのもこのような事情があったかも知れない。先学が説かれたように、諏訪地方の古墳の盛行が8世紀代にくるのでなく、全国的な古墳文化の発達のなかで、他地域に比較して群集墳化していく波が小さく、伝統的な力が続いていたものと思われる。

最近終末期古墳の問題が検討されているが、この地方でも宮坂光昭氏⁽¹³⁾、桐原健氏の論考⁽¹⁴⁾がある。このなかで宮坂氏は「墳(盛)土はあるが、石室の消滅した時期の墳墓から、火葬墳墓出現までの墳墓を終末期古墳と呼称して扱う」とされ、「斎藤忠博士の終末古墳第二期に属す」と年代を規定されている。

いずれにせよ、地方——本県における古墳築造の終末の問題は、中央(畿内)の古墳構造の終末との関連で

とらえる問題である。墳丘、内部主体、副葬品に終末期古墳としての特質、文献資料との対比など検討を要する課題は多い。今後、諏訪地方に限らず、長野県内において7世紀後半以後とされる古墳を抽出し再編成する作業が必要であろう。また、明らかに古墳築造以後と考えられる遺物の出土状態の検討が急がれる問題である。(小林 秀夫)

- 註1 藤森栄一「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」『考古学』10-1『古墳の地域的研究』所収 1939
藤森栄一「信濃上代文化の考古学的試論」『信濃』20-10 1968
- 2 桐原 健「諏訪盆地古墳群にみられる一姿相」『信濃』16-10 1964
- 3 宮坂光昭「諏訪盆地湖北における古墳発達の一試案」『信濃』20-4 1968
宮坂光昭「長野県釜石古墳」『信濃』19-4 1967
- 4 藤森栄一「諏訪上社フネ古墳」『考古学集刊』3-1 1965
- 5 藤森栄一「諏訪市大熊片山古墳」『長野県考古学会誌』7 1969
- 6 岡田正彦「本城1・2号墳」『長野県中央道報告書——諏訪市内その3』 1975
- 7 桐原 健「小丸山古墳」『長野県中央道報告書——諏訪市内その1・その2』 1973
唐木孝雄
- 8 小林正春「長野県諏訪市金鉢場遺跡出土の灰釉水鳥鈕蓋付平瓶」『信濃』28-4 1976
- 9 註7に同じ
- 10 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
- 11 小田富士雄「日本の古墳出土銅鏡について」『九州考古学研究（古墳時代篇）』 学生社 1979
- 12 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』64-1 1978
- 13 宮坂光昭「地方における古墳時代末期墓制の展開」『信濃』25-4 1973
〃 「諏訪湖盆東縁の終末期古墳群の考察」『信濃』22-4 1970
- 14 桐原 健「諏訪盆地に見られる終末期古墳の様相」『長野県考古学会誌』7 1969

ウ 住居址・集落

まず、この地への人々の到来は、縄文期から確認でき、前期、中期、後期と断片的に訪れを裏付ける遺物の出土がある。遺跡の南を限る丘陵の南側には、千鹿頭社遺跡、十二ノ后遺跡があって、縄文前期、中期、後期の集落が確認されており、そちらとの関連を強くもつものと思われる。今回調査による出土は沢筋の流れ込みによるものが大部分であることから、縄文期の遺構は西方用地外に求められると同時に、居住地としても生産活動の場としても好適な地であったといえよう。

弥生後期の住居址2軒が確認されたことは、諏訪湖西方の山麓地帯における該期集落の在り方を知る好資料を提示したものと見える。隅丸方形ないし長方形プランで主柱穴間中央辺に埋甕炉をもつ形態の竪穴住居址は、西山を越した伊那谷にみられる弥生後期の一般的な姿⁽¹⁾であり、検出された二軒とも、西側主柱穴間に埋甕炉をもつものである。二軒とも古墳時代の住居址にその東半部が破壊されて、全貌が判明しなかったのは残念であるが、諏訪湖西岸山麓での弥生後期の住居址の確認は初めてであり、意味深いものである。荒神山遺跡⁽²⁾では、弥生中期初めの庄の畑期の竪穴住居址が2軒確認されており、やや不明な点はあるが楕円形プランの住居址中央辺よりやや寄った箇所⁽³⁾に楕円形に組んだ石甕炉をもつものと報じられている。また本城遺跡では、弥生中期末の天王垣外期の竪穴住居址が4軒確認されており、隅丸方形を呈する住居址の中央辺から壁側へやや寄った箇所に、3個の石を「コ」の字に配した方形石甕炉をもつものと報

告されている。ここに弥生後期初めの資料を得たことは、当地方における該期集落の在り方、竪穴住居址や炉の変遷を知る上で貴重といえる。柱穴間に埋甕炉をもつ本遺跡の炉には共に石囲いがみられ注目すべきことである。三遺跡とも沖積平地を東方に持ち、守屋山系から流れ出す小河川を近くに持つ小高いテラス状高台に住居地をもつことで共通しており、立地を考える一つのポイントになる。生産活動の場は、やはり東方の沖積平地に求めるのが妥当と思われる。

古墳時代末の金鑄場集落の露呈は、何といても丘巻であった。古墳時代後期の割合短期間の集落と考えられるが、23号住居址を破壊して古墳が構築されるという事実や住居址の重複関係からして、時期差を考えないわけにはいかない。

まず住居址とその立地についてである。現在残る沢状の凹地が示すように、この地域は雨水によって相当の地形変貌をしていることである。16号・20号住居址北側から36号住居址の南にかけての間は、現地形には著しくないが、かつては沢筋の存在したことが深い堆積層から判明した。現在の沢筋とこの埋った沢筋により、この地は、北、中、南と三区区分される、起伏の多い地形で、沢筋間に低い台地を形成している。そして住居地は、この微地形を巧みに利用して住居を構築していることである。北半には36号住居址以北に古墳1基と住居址16軒が、中央部には20号と24号住居址の間に9軒が、南半には11号住居址以南に14軒と竪穴状遺構1がそれぞれ存在していたことになる。南部は最も土地の低い地点で、それだけ流水に対しては不安定な地であった。重複関係を多くみせる住居址や溝状遺構の多いのは、それを物語るかの如きであり、本遺跡全体をみても沢水支配ならびに利用という立地制約が、居住に関して相当な面をもっていたものと思われる。南限の溝状遺構4・2・3と溝状遺構7は長大なものであり、そういった意欲の現われと見れようし、現沢筋と平行して構築された溝状遺構7は前身的な感じもして興味深い。しかし、二年間の調査で沢筋に水の流れるのを遂に見ることのできなかつたことから、果して年間通して、生活に必要な水は如何にして得ていたのか疑問に思えてならなかった。

次に住居址についてである。別項のように出土土器の検討の結果、古墳時代後期に当たる本遺跡の出土土器を二時期に分類し、更にそれに続く奈良時代に比定できるものを十二ノ后Ⅰ期として、三大別してみたので表6を参照されたい。この尺度をもって住居址を見ると、金鑄場Ⅰ期住居址18、金鑄場Ⅱ期住居址14、十二ノ后Ⅰ期6という数になる。しかし重複関係(金鑄場Ⅰ期同志である11号と12号住居址の重複、同Ⅱ期同志の6・9号と他の5・7号各住居址の重複)や、接近しすぎる配列、住居の規模の大小や主軸方向、更に廃屋要因になったのではないかと思われる火災に遭遇した住居と廃屋墓の色彩のある集石をもつ住居、そして出土土器の少ない住居等々を考慮に入れると、必ずしも3期にはならず疑問点として残る。特に金鑄場Ⅰ期とした18号、31号、33号住居址と同Ⅱ期とした17号、19号、26号住居址は接近して北地区にあり、いずれも焼土が存在するという共通点を持ち、想像を逞しくするならば、水便の悪さから火災で類焼したとするならば、同時存在を考慮しなければならなくなるのである。また、18号、20号、22号、26号、27号、31号、34号、36号の各住居址には、それぞれの住居址の項で記してあるように、拳大から長さ40~60cmの集石があることである。金環、骨粉等の出土もあり、即断はさけて、廃屋墓的なものとして今後の類例の集積とその検討に待ちたいが、そういった風潮と埋没進行状況を考えるとまた同時的存在が考えられて、土器分類上だけの方法ではうまくいかないという当然といえば当然の結果となる。従って問題点として残るが、遺物の少ない十二ノ后Ⅰ期の土器出土住居は、金鑄場Ⅱ期に含め、出土土器を中心にして二時期に大別して住居址の時期決定を行っている。

次に古墳についてである。金鑄場Ⅰ期とした23号住居址の南半を破壊して構築されたものであるが、す

で古墳自体も完全に消滅削平されて、地字にも伝承にも残っていない。全面発掘調査によって考古資料として確認できたことは成果の一つでもあり、このような例が西山地域では、荒神山遺跡に1例、本城遺跡に2例と中央道用地内であって、本古墳を加えると計4例になる。これは当地方には、相当数の消滅古墳のあることの証査で、今後考慮していかねばならないことを示唆するものといえる。かろうじて残った石室最下部石組みは原形を保っていて、平面的な規模は把握できたが出土遺物は皆無に近い状態で、それからの時期追求は困難である。幸い23号住居址との関係から、金鑄場Ⅰ期以降という事実からして、諏訪地方最末期古墳と位置づけられよう。また古墳周濠出土の遺物や水鳥鈕付蓋平瓶から、古墳時代以降にも古墳周辺で何か祭祀的なことが行なわれたことが推測される。水鳥鈕付蓋平瓶については別項(51頁)を参照されたい。

35号住居址の項で既述されているが、カマド周辺からの、スモモ、ヤマモモ、ドングリ、クルミ、クリ、ヒシと判別できた自然遺物のあることは、当時の食生活の一面を知る点で興味深い問題提示といえる。水田地帯は東方の沖積平地に求められようが、畑作も当然居住地周辺でも行われた他、かかる自然遺物の積極的な採集が行なわれた結果とみられる。また農耕のための道具類は鉄鎌だけで意外な感を受けた。

最後に集石5出土の灰釉陶器碗と古銭についてである。古銭は嘉祐通宝一点であるが碗と共に埋葬を物語るものと思われ、平安期の墳墓の在り方を示すものとして注目される。古墳時代末に展開した集落が、平安期はみられず、生活の場から、集石として埋葬の場が変わった事情は何であったのか疑問も生じる。生活様式の変化もあるが、水の問題が大きく思えてならない。

(山田 瑞穂)

註1 宮沢恒之「弥生住居址の分析」『信濃』Ⅲ・25-12 1973

2 「長野県中央道報告書—諏訪市その3」 1975

3 註2に同じ

3 十二ノ后遺跡 (SJNB)

1) 位置 (図1・3, 図版31)

本遺跡は、諏訪市有賀3950番地付近一帯に所在し、縄文時代以降平安時代にあたる集落遺跡である。有賀地籍は、諏訪湖を中心としたときには湖南地区に、また、諏訪盆地全体の中では西山地区と呼ばれ、フォッサ・マグナ南西縁に位置することになる。一方、この背後は、赤石山系北端にあたり、守屋山系と総称される比較的山容が高原状を呈する山なみの北東麓であるが、この麓裾を走る釜無山断層線が通過するため、断層崖下には守屋山系から運ばれる過剰堆積によつた扇状地形面が形成されている。有賀地籍は、この守屋山系北端に近い鞍部、有賀峠付近の山襲沢の流れを合せる峠の沢によつて押し出された、有賀扇状地を中心に、更には北側の湖面に迫る盆底沖積地帯をも含めている。

本遺跡は、この有賀扇状地の扇頂部の標高850～810m一帯にあたる大遺跡で、下方には連続していると考えられる千鹿頭社遺跡(昭和49年度調査)、南に女帝垣外(同)・女帝塚、東に中道祭祀址が、また北西上方には本書報告の金鋳場遺跡があつて、諏訪湖縁西山山麓遺跡群中の中心をなし、豊富な遺物やその特異な地名から、地元研究者に古くから注目されてきた。遺跡に立つと眼前に諏訪湖につづく盆底沖積地帯が広がり、フォッサ・マグナ北東縁の諏訪市街と、その背景となる霧ヶ峰山塊が迫り、また東すれば遙かに八ヶ岳の連峯を迎ぐことができる。背後は古東山道の一路とも推定される有賀峠への登はん口にも当り遺跡立地としては恰好の条件を具えた一帯ともいえる。

中央道用地は、遺跡中心部を千鹿頭社遺跡のある北側から、女帝垣外遺跡につづく南東へ貫く。調査はこの内のセンター杭108+00を基点AAとし、南へは同109+60(+10)まで、従つてA区～D区J列、これに直交する40～65列をとつてグリッド設定した。遺構・遺物の多出により、49年度は下方に当るセンター杭東側を、50年度は西側を調査した。調査地域は全体に緩傾地であり、耕作等により相当攪乱された部分もあつて、層序関係などは余り統一的に把握されなかつた。

(宮沢 恒之)

2) 遺物の分類

ア 縄文土器の分類 (表9, 図156～171, 図版55～87)

本遺跡出土の土器は早期から晩期のすべてにあたる。そのうち主体となるのは前期で、出土量の80%以上を占める。後期は良好な資料があるが、余り多くない。前・後期を除く他は断片的といえる。そのため分類は前期を主とし、他は簡略にした。

分類項目は群→類→種としたが、群は時期とし、早・前期のみ本遺跡の性格上一群にまとめた。類は型式を主としたが、編年区分や型式設定に不明確なものがあり、二型式以上にわたる場合もある。種は型式内での文様(第I群)や器形・器種(第III群)を主とした区分方法をとつたが、類との関連から型式自体をあてた場合もある。

以上のように、本分類はいたって便宜的なものである。整理作業後の検討が不十分なまま原稿作成に入

ったので、手直しや改訂を行う余裕がなかった。あらかじめ諒とされたい。分類やそれに伴う問題点については後章で触れたい。以下表形式で分類の概要を示す。

表8 十二ノ后遺跡出土縄文土器分類一覧

群	類	種	概 要
I	第1類		胎土に繊維を多量に含み、焼成や作りが余り良好でないや、厚手の土器で、関東地方の早期末から前期初頭に比定される一群。尖底・平底の両者がある。
		A	浅い条痕文が表面、あるいは裏面につけられたもので、茅山式に比定されるもの。
		B	複合口縁やや、太めの隆帯（上に縄文や刻目をつける場合と無文のものあり）が口縁部や頸部にめぐり、他は縄文、捺糸文、無文となる一群で、花積下層式に比定されるもの。
		C	捺糸文のみのもの。B種と同一、あるいは第4・5類に下るものもあるかも知れない。
		D	縄文のみのもの。B種と同一、あるいは第4・5類に下るものもあるかも知れない。
		E	無文乃至無文に近いもの。
		F	その他
	第2類		胎土に繊維を含まず、薄手堅緻な作りや、成形時の指痕などを特色とする土器で、東海地方を中心とした早期末～前期中葉に比定される一群。
	2	A	低い貼付粘土紐による口縁部文様帯と、それを細線で切る手法を特色とした一群で、木鳥式の古い方に比定されるもの。
		B	Aの粘土紐がなく、細線文を主に、口縁部、頸部に刺突文が加わる一群で、木鳥式の新しい方や塩屋上層・清水の上I式に比定されるもの。
		C	口縁部に貝殻・竹管による押圧文や刺突文をつける文様帯が帯状にめぐり（縁帯文）一群で清水の上II式、石塚下層式に比定されるもの。
		D	器表面或は裏面に条痕文があり、爪形文などを主とする北白川下層I式に比定されるもの。
		E	無文のもの。
F		その他。	
第3類		胎土に繊維を含まず、やや薄手から中厚手で、波状口縁頂部から垂下する粘土紐貼付文や、木鳥式に類似した細線格子文、また、爪形文あるいは刺突文をもつ一群で広義の所謂「中越式」に比定されるもの。	
3	A	波状口縁の頂部から縦位の垂紐貼付文がつくのみで他は無文の一群で、大半が丸底となるらしい。	

3	B	A種に細線文がつけられた一群。
	C	無文の一群。しかし、A・B種の一部との区分はむずかしい。
	D	垂紐貼付文なく、細線文のみの一群。
	E	爪形文や刺突文が口縁部にめぐる一群。
	F	その他
	第4類	<p>繊維を含み、口縁部文様帯に竹管によるコンパス文などを配す以外、器全面に縄文が施される関山式と、繊維を含まず竹管による刺突文や列点文を特色とする神ノ木式を一括する。底部は共に平底のみとなる。</p>
4	A	繊維を含み、縄文のみの一群。次のB種の胴部以下も含まれる。
	B	繊維を含み、口縁部に竹管文等による文様帯をもち、他は縄文となる一群。
	C	繊維を含まず、縄文のみの一群。組紐、ループ文など関山式に特徴的な文様を主とする。
	D	繊維を含まず、竹管による刺突文、爪形文、平行沈線文などを口縁から頸部に施し、胴部が無文或は縄文となる一群。複合口縁も一つの特徴となる。
	F	その他。
	G	C類と同じ繊維を含まず、縄文のみの一群であるが、胎土に金雲母を含み、裏面に指頭圧痕やそれに類似した凹凸が顕著に認められる特色あるグループ。(時期的に問題もあり、4類と5類の項に含めた)
第5類	<p>繊維を含み縄文のみの一群と、口縁部から頸部にかけて、竹管による平行沈線文、爪形文、コンパス文などの文様帯を構成し、胴部以下に縄文が施される一群の黒浜式と、繊維を含まず、黒浜式のうちコンパス文を列点状連続刺突文と入れかえた文様をもつ、有尾式を一括する。</p>	
5	A	繊維を含み、縄文のみの一群。次のB種の胴部以下も含まれる。
	B	繊維を含み、口縁部に竹管文等による文様帯をもち、他は縄文となる一群。
	C	繊維を含まず、縄文のみの一群。
	D	繊維を含まず、口縁部から頸部に竹管による文様帯を構成し、胴部以下が縄文或は無文となる一群。
	F	その他。

I	5	G	C類と同じ繊維を含まず、縄文のみの一群であるが、胎土に金雲母を含み、裏面に指頭圧痕やそれに類似した凹凸が顕著に認められる特色あるグループ。(時期的に問題もあり、4類と5類の項に含めた)
II	第1類		器形・文様構成等において地域的特色が余りない、所謂諸磯A式を中心とする。本類以下は、無繊維、平底が通例となる。
	1	A	器面全体を縄文で飾るもの。羽状縄文はなくきれいな斜縄文が中心となる。しかし第I群4・5類C・G種や次の第2類A種との厳密な区分は現在のところ余りできない。胎土、器厚、成形や縄文から常識的に判断したことが多い。
		B	口縁部或は頸部まで半割竹管工具による文様帯のあるうち、爪形文や、爪形文区割を主とした磨消縄文手法のある一群で、胴部以下は縄文或は無文となる。深鉢などもあるが浅鉢など小形土器が多い。
		C	B種の文様帯が、円形竹管文やそれを加えた助骨文、連弧文などを中心とした一群で、細分可能な面もあるが一括した。
		D	B種文様帯が、平行沈線文のみの場合であるが、類例は少ない。
		E	無文土器の一群で、特にやゝ薄く、口縁部に連続した小孔をもち、特殊な浅鉢となる一群で、次の第2類E種との区分は器厚や製作等のみによる点問題はある。
		F	その他。
	第2類		器厚が厚手となり、器形、文様構成などが一般的に複雑化する諸磯B式に比定される一群。細分案もあるがここでは従来通りとした。
	2	A	器面全体を縄文で飾るもの。粗い撚りの斜縄文が主体となるが、羽状縄文の存在も考慮されるなど前項第1類A種との区分に不明確な点もある。器厚、器形、縄文施文などを一応の目安とした。
		B	竹管工具による大形粗大な爪形文を主とした文様構成をとる一群で、円形竹管文や爪形文帯間の隆起部につけられる刻目、刺突などが組合さる場合もある。深鉢を主とする。本類ではその前半に位置するらしいが、まだ明確ではない。
		C	B類文様が平行沈線文となる一群で、器形、文様構成もほぼ同じ傾向をみせる。本類の後半らしいが、まだ判然としない。
		D	B・C類文様が浮線文となる一群である。浮線文自体数種類のバリエーションがある。器形、文様構成はほぼ、B・C類と同じ。
		E	無文土器の一群で、厚手の深鉢は少なく、磨消縄文手法の退化した文様やまったくの無文のものは浅鉢が多い。一部に前項第1類E種との区別しがたいものもある。

II	2	F	その他。
	第3類		結節状浮線文を主とした諸磯C式に比定される一群であるが、量が少ないので一括し、種の区分はしない。
	第4類		前期後半に編年される関西系、とくに北白川下層式系を一括した。薄手作りや比較的精選された灰色やねづみ色の胎土から容易に区分ができる。平底が中心。
		A	器上半部に連続（棕櫚状）爪形文による文様構成を施し胴下半が縄文となる北白川下層 II a 式に比定されるもの。
		B	A 種よりやゝ器形が変化し、C 字形爪形文や、爪形文帯による磨消縄文的手法が加わる一群で北白川下層 II b 式に比定されるもの。朱塗り土器もある。
		C	縄文のみの土器で、A・B 種或は次の D 種などの胴部破片も含まれることが多い。
		D	羽状縄文、斜縄文を地文とするか、或は無文の上に浮線文（刻目あるものとないものあり）で文様構成をする一群。北白川 II 式の新しい部分（II C 式）と同 III 式に比定される。細分も可能だがこゝでは一括する。
	E	無文土器。	
	F	その他。	
III	第1類		梨久保式など中期初頭の一群。
	第2類		新道・藤内式など中期中葉の一群。
	第3類		曾利式など中期後葉の一群。
IV	第1類		称名寺式など後期初頭の一群。
	第2類		堀ノ内 I 式に比定される一群。
	第3類		堀ノ内 II 式に比定される一群。
	第4類		加曾利 B I 式に比定される一群。
	第5類		加曾利 B II 式に比定される一群。
	第6類		加曾利 B III 式と関連するが、中部地方の独自型式に発展する可能性ある一群。
V	第1類		晩期後半の氷式に比定されるもの。

(山田瑞穂・樋口昇一・百瀬長秀)

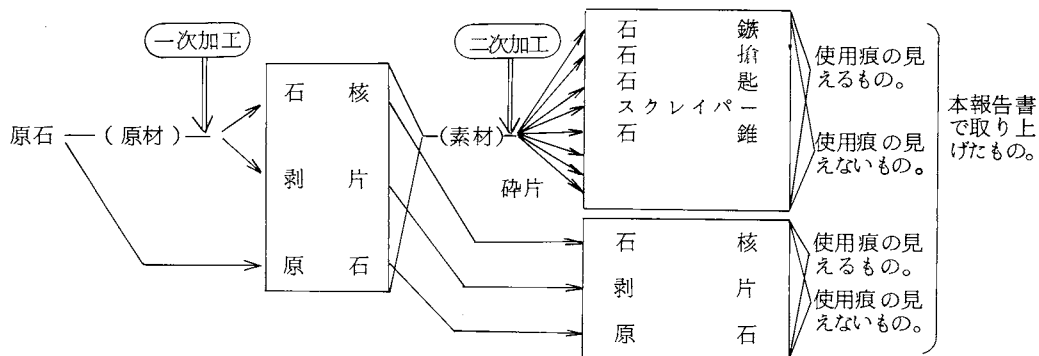
イ 縄文時代石器の分類

ア) 小形石器 (挿図14~19, 図104~111)

縄文時代の石器については便宜的に、小形と大形に区分して担当した。ために本項で使う「石器」はことわらない限り「小形石器」であることを了解されたい。

個々に入る前に、全体的な点で二・三述べておこう。まず、ここで扱う石器類の分類に際しては、その基本を形態分類に置いた。その上で同一形式に分類された石器の名称として、従来使用されてきた種々の形式名のうち適当と判断されるものを使用するという方法を採用している。換言すれば、本報告書中で使用されている石器形式名称は、形態・加工状況からみて共通な一群という意味であり、従来その名称の持っている機能的側面についてはすべて抹消してある。例をあげるなら、石鏃とは『石鏃形石器』であり、石匙とは『石匙形石器』という意味であるということである。なお、機能に関しては後章の「まとめ」中の使用痕の項でできるだけ詳細にふれてある。かくの如く命名した石器のうち、この項では、石鏃、石槍、挟入刺突具、石匙、スクレイパー、複数挟入石器、有挟頭磨石器、石錐、使用痕のある石核・剥片・原石、石核類の打製石器と、石錘の磨製石器および軽石製品、装身具を扱う。

次に、これから使ってゆく用語を規定しながら打製石器の製作過程を追ってゆく中で、本報告書で扱っている石器の範囲を大雑把に観てみることにする。まず、原石はその大部分が石器原材として一次加工が施され、その結果として剥片が剥ぎとられて石核が残る。次にこれ等の剥片・石核・原石のある部分は、それを素材として二次加工が施され、石鏃、石匙、スクレイパー等となっているわけである。そして、これ等の二次加工が施された石器と、剥片・石核・原石には、その使用法に従って、様々な「使用痕」と呼ばれるキズが残っている場合がある。ここでは二次加工の施された石器の総てと、剥片・石核・原石のうち、肉眼による確認可能な使用痕の残されているもの、特異な出土状態の原石、および石核の一部を取りあげており、大部分の、原石と一次加工が施されたのみのものについては、その全体量、出土状況等に不明な点が多く割愛した。ただ、石器量からみて膨大な量のそれがあつたことは推察できる。⁽¹⁾以上をまとめてみると下のようになる。



ここで素材のうちその大多数を占める剥片の部分名称を整理しておくことにする。⁽²⁾原材から剥片を剥離した際、新たに剥片側にできた面を背面、その反対側の原材の面を正面とする。この主要剥離面とも呼ばれる背面は、原材に新たにできた面をネガとしたポジティブなコピーということになる。原材の面の部分を切りとったといえる正面は、剥片剥離の状況により様々な形を呈するが、ふつう、自然面と複数のネガ

ティブな剥離面の組み合わせた面となっており、ポジティブな剥離面は無い。従って、剥片剥離の結果生じた石核の表面もまた、ネガティブな剥離面と自然面で構成されている。剥片の主要剥離面(背面)の打点部位を頂端、その反対側を末端とする。

素材に施された二次加工をその特徴により次の様に呼びわけた。

調整：縁辺のある長さ⁽³⁾に施された断面両刃の両面加工⁽⁴⁾。

刃部作出：縁辺のある長さ⁽³⁾に施された片面加工の総てと、断面片刃の両面加工。

薄化：ある長さの縁辺を打面として施された剥離で、刃状を呈さず輪郭を縮めることはない。階段状剥離による。

扶入：縁辺の短い部分に施された両面加工で、加工後の状態が強く内湾する。

ここで扱う遺跡出土の石器のうち、本報告書でとり上げたものについては、実体顕微鏡によって、石器表面に残っているキズ跡の観察を行なった。その総てが使用痕跡と断定できないが、大部分がそうであり、ここでは、そのキズ跡を「使用痕」と呼ぶことにする。観察によって知り得た範囲での使用痕の種類とその特徴は次の様である。

刃こぼれ：縁辺の片面のみにみられる。ある長さをもつ非連続的な小剥離。

刃つぶれ：縁辺の両面に相互に無関係にみられる。ある長さをもつ非連続的な小剥離。

線状痕：表面にみられる非常に細い溝。比較的長く、使用痕跡として現われる場合数条から非常に多数が平行して観られる。

擦痕：表面にみられる比較的浅く幅広の溝。断面U字状を呈し、使用痕として現われる場合比較的短いそれが、縁辺付近に数条から非常に多数平行して観られる。

点状痕：表面にみられる点状あるいは円状の傷。大きさは不揃いで、多くの場合1つでなく、ある範囲に多数みられる。

つぶれ：縁辺、稜線等つきでた部分にみられる。本来線であったものが面をなすまで減っているわけで、細かい刃つぶれもしくは点状痕の集中といった内容であると思われるが、高倍率の顕微鏡による観察の機会が無かったため、推定にとどめたい。

磨耗：縁辺、稜線等つきでた部分にみられ、削り取られたかの様相を呈するもの。

磨研痕：表面にみられ光沢状を呈する。表面の細かい凹凸がなめらかになったものであろう。

最後にここで扱う石器の所属時期にふれておきたい。

遺構出土の遺物については、主として出土土器によって決定された「遺構の時期」に所属するものとした。その際、明らかに遺構の時期と異なるもの、例えば奈良・平安時代のものでされた遺構より出土した打製石鏃、縄文時代前期の遺構より出土した擦切目石錘等々は、遺構外の遺物として分類した。接近した時期の遺構が非常に近接している場合や、凹基式打製石鏃等の如く汎縄文時代的石器の場合、遺構とは時期を異にする遺物が混入している可能性も大分あるが、出土した遺構の時期のものとして扱った。

遺構外出土の遺物も大量にある。グリット掘りで進められた発掘の遺物であったが、その後の整理の段階で、遺構外の遺物は総べて一括する形になってしまった。この事は、個々の石器についての、所属時期を云々する手がかりが全く無くなったことを意味するわけで、今後共、それを問題にすることはできないのである。ただ、石器全体の所属時期については、遺構のあり方や、土器等の他の遺構外出土遺物のあり方を反映していると判断される。その面からみるなら、遺構外出土遺物の約90%が縄文時代前期に所属するものであり、わずかに縄文時代中期・後期のものがあるほか、縄文時代晩期と、時期は異なるが弥生時

代の石器が若干含まれているということができよう。

































以上をふまえて、各石器形式を定義しながら、その分類を進めていってみたい。

① 打製石器










I 石 鏃

全周から施された両面加工によって平面二等辺三角形に調整されたもの。先端部が本群石器の要素の総てであるが、その先端は棒状までにはならず、板状にとどまる。次に述べる石槍より小形で、重量でいえばおよそ5gより小さいものを本群とした。

個々の石鏃にはまず、アルファベット4文字により型式名が与えられる。この型式名は①茎の有無、②基部形態、③側辺形態、④先端部形態、の各々の組み合わせであり、逆にいえば型式名により各個の形態を想起できるようにしてある。(挿図14-上)

茎	基 部				側 辺	先 端	長 さ と 幅※	
A 有 茎  248-35	A 凹 逆刺 挟り 深い 鋭い	A ₁	A ₄  247-43	A ₇  232-22	A 突出部有り  247-1	A 鋭い  247-3	A 非常に縦長 (160以上)  247-12	
		純い	A ₂  247-65	A ₅  247-19	A ₈  247-23	B 内湾する  247-6	B 普通  247-29	B 縦長 (100 ~ 160)  247-20
	B 無 茎  247-64	円い	A ₃  247-63	A ₆  247-22	A ₉  247-75	C 直である  247-16	C 純い  247-26	C 三角形状 (100未満)  247-31
B 無 茎  248-1	B 平 基  248-22				D ₁ 最大幅下方  247-56	D 円い  247-15	C 三角形状 (100未満)  247-40	
	C 円 基  248-18				D ₂ 最大幅中間  247-60	E 平ら  244-13		
	D 尖 基  248-28					E 平ら  247-38		 247-27
							 247-62	 247-42

※ () 内の数字は目やすとしての尖頭部の長幅指数

破損状況	O	A	B	C	D	E	F	G	H
破損部所	完形	先端	片脚	両脚	先端・片脚	片側辺	基部	先端・基部	基部
	 247-24	 247-49	 247-44	 239-1	 231-19	 265-34	 244-15	 226-36	 248-31

挿図14 十二ノ后遺跡出土石鏃の形態分類(上)と破損状況分類(下)

さらにその属性として長さ、幅、厚さ、重量、石質、尖頭部の長幅指数、破損状況を調べた。基準線として先端を頂点として想定した二等辺三角形の頂点から底辺へおろした垂線を設定し、基準線と平行と直交する線で石器をかんだ上で、基準線と平行な辺の長さを長さ、直行する辺の長さを幅とした。厚さは最大幅、破損状況(挿図14一下)は、その状況により、アルファベットで表わした。次に実測図中の置き方にふれたい。素材は総て剥片と判断されそれには正面、裏面があるが、二次加工はそれを消すようにしており、任意の片面のみを表わすことにした。その際、先端を上、基準線が垂直となるように置いた。

ii 石槍

全周から施された両面加工によって平面二等辺三角形に調整されたもの。先端部が本群石器の要素の総てであるが、その先端は棒状までにはならず、板状にとどまる。前に述べた石鏃より大形で、重量でいえばおよそ5gより大きいものを本群とした。ただ、'大きめ、'ということで確たる分類基準があるわけではない。個々の石槍の観察、処理については石鏃と同様である。

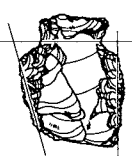
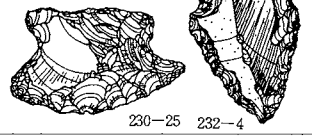
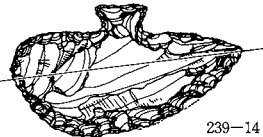
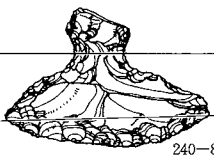
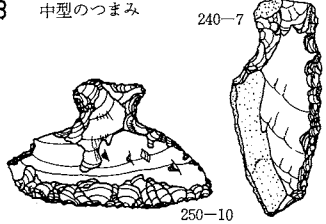
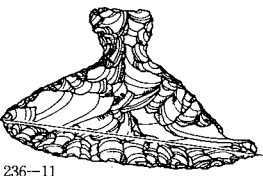
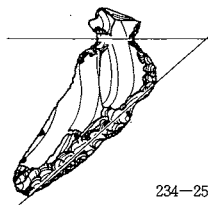
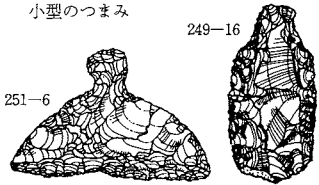
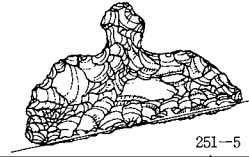
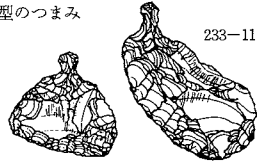
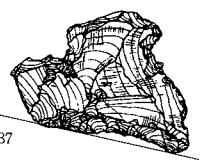
iii 挟入刺突具

石鏃と同様、全周から施された両面加工によって平面二等辺三角形に調整されており、棒状までにはならず板状にとどまる先端部を石器の要素の総てとするものも同様である。ただ、側辺の基部近くに1対の挟りをもつ。結果として石匙のある種(AA型)に非常に酷似した平面形を呈する場合があるが、二次加工

に刃部作出がみられず、区別できる。個々の挟入刺突具の観察・処理については石鏃と同様である。

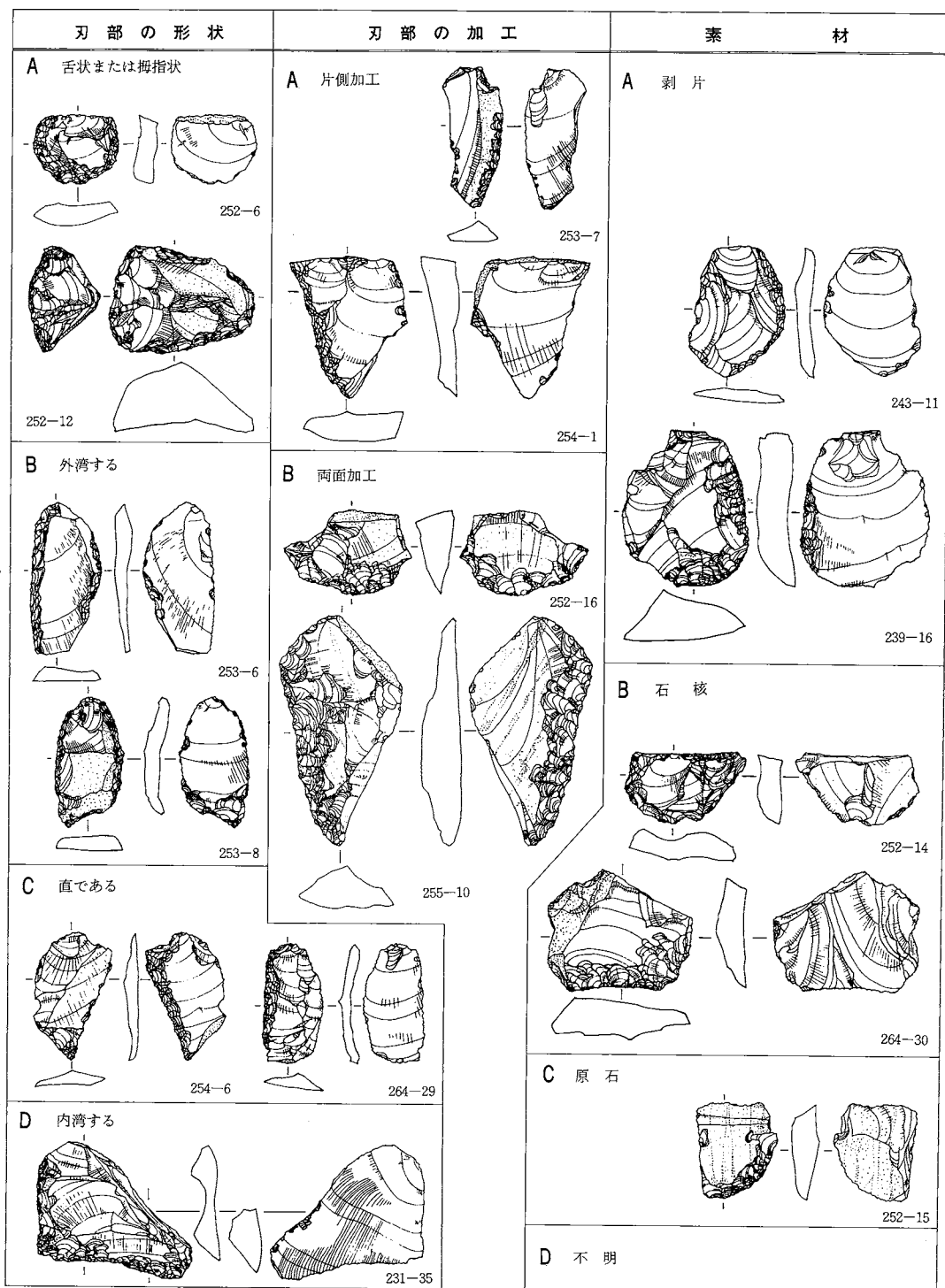
iv 石匙

本群の石器は2種類の二次加工が施されていることによって他の石器と識別される。その1つは刃部作出であり、他は1対の挟入によっていわゆる'つまみ'が作出されていることである。刃部作出には例外的に調整と区別できない

つまみと刃部の関係	つまみ部の形状	刃部の形状
A 縦型  249-13	A 挟りを入れただけの大きなつまみ  230-25 232-4	A 外湾する  239-14
B 横型  240-8	B 中型のつまみ  240-7 250-10	B 直である  236-11
C 斜型  234-25	C 小型のつまみ  249-16 251-6	B 直である  251-5
	D 極小型のつまみ  251-10 233-11	C 内湾する  232-37

挿図15 十二ノ后遺跡出土石匙の形態分類

※図中の線は基準線(水平)と刃部両端を結ぶ線



挿図16 十二ノ后遺跡出土スクレイパーの形態分類

※二次加工・素材・破損の状況による

ものや、その観られないものがあるが、つまみは総てにみられる。つまみを含む部分の二次加工は総て調整であって、製作時に於て刃部とつまみ部とは明確に区別されていたことがわかる。基本的には、つまみ部を持つ一種のスクレイパーと解釈したい。個々の石匙には、①つまみの位置、②つまみの形状、③刃部の形、を基にした3文字のアルファベットによる型式名がまず付される(挿図15)。なお③について、1個体に2つの刃部がある場合には例えばAB(A+C)のように表現した。

さらにその属性として長さ、幅、厚さ、重量、石質、刃長、つまみ角、刃角、破損状況、使用痕を調べた。基準線としてつまみの挟入部を結ぶ線を採用、基準線と平行と直交する線で石器をかこんだ上で、基準線と直交する辺の長さを長さ、平行な辺の長さを幅とした。厚さは最大幅、つまみ角は刃部両端を結ぶ線と基準線とのなす角のうち鋭角を採用した。次に実測図をみてみよう。図は基準線を水平に置くことを原則とし、つまみを上にした。また、刃部作出の見える面を表面として左側へ置き、その反対側の面を裏面として右側へ置いた。この表裏感覚は使用痕の項でも使用している。

V スクレイパー

以上述べてきたものと、後述する石錐に分類できない二次加工を施されたものが多数ある。過去、剥片石器あるいは不定形石器等の名称で呼ばれてきたものも含まれているが、ここで総てを一括して扱うことにする。次に述べる複数挟入石器、有挟頭磨石器をそれぞれの項で明らかにする特徴で注出した上で全体をみるならば、刃部作出の部分のある石器、換言すれば、搔器、削器様石器が本群の大部分を占めており、スクレイパーの名を付した。この二次加工の特徴は逆にいえば調整を施した石器が少ないという事であり、それが本群石器の細分を躊躇させる原因でもある。

個々の石器には ①加工部の平面形、②二次加工の種類 ③素材によって3文字のアルファベットによる型式名が付される(挿図16)。なお、①、②について1個体に2ヶ所以上二次加工の部分がある場合は、石匙の例にならった。

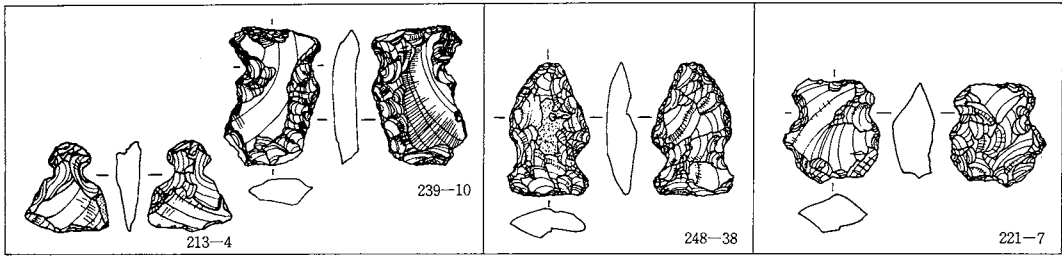
次に、個々の石器の属性として、長さ、幅、厚さ、重量、石質、刃長、刃角、破損状況、使用痕を調べた。基準線として素材の、裏面の打点を通り末端に達する線を設定し、石鏃と同様にして長さ、幅、厚さをもとめた。実測図においては、素材に従いその正面が左に、裏面が右にくるように置き、裏面打点部位を上に基準線を垂直に置くことを原則とした。また、原石を素材としたもの、素材が不明なものについては、二次加工の見える面が左図の下へくるように置いた。ただ、使用痕観察の際には、二次加工の見える面を表面、その反対側を裏面と呼ぶことにした。

VI 複数挟入石器

スクレイパーの一種であるが縁辺の数ヶ所に施された二次加工が総て挟入であるところに特徴がある。挟入には、対をなしていると思われるところもあり、また、全体形にも様々な要素がからんでおり、今後の課題となる石器である。個々の石器については、挟入数を調べた後、スクレイパーと同様の計測、観察を行なった。実測図中の取扱いも同様である。

VII 小型有挟頭磨石器

使用痕に特徴的なものを持つ一群である。形態をみると、その平面形は様々な形を呈するものの、一对の挟入部を総てが持っている。挟入部以外に二次加工がみられる場合、その総ては両面加工の調整である。一对の挟入は石匙、挟入刺突具にも見られる二次加工であり、現に本群中にはそれ等と全く同形態のものがある。次に本群の特徴的な使用痕をみてみよう。それは、稜線、縁辺およびリングの突出部のつぶれを伴う、ほぼ全面にわたる打撃痕と思われる顕著な点状痕である。しかもこの磨滅痕といつていい使用痕は



挿図17 十二ノ后遺跡出土小型有抉頭磨石器の形態分類

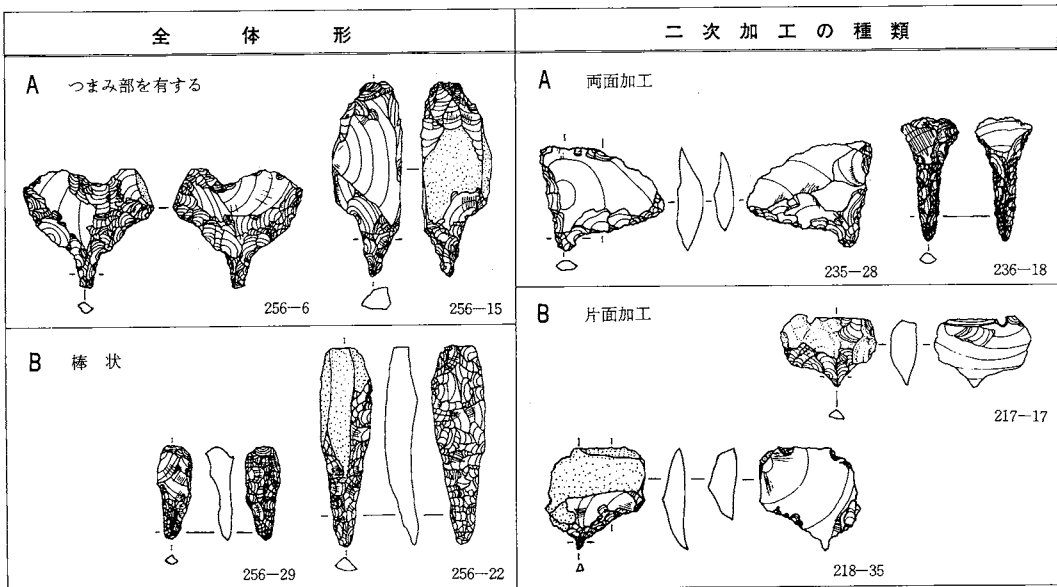
全面にあるのではなく、抉入部を結ぶ部分が表裏面共に無磨減部となっており、この事が先に述べた点状痕と共に本群を識別する要素となる。

個々の石器については、その全体形で型式分類(挿図17)した後、長さ、幅、厚さ、重量、石質、欠損状況、使用痕を調べた。基準線を石匙同様抉入部を結ぶ線におき、法量測定も石匙にならった。実測図には基準線を水平に置く他は任意に置いた。

なお、この小型有抉頭磨石器という名称は、先の複数抉入石器と共に当調査団が調査した千鹿頭社遺跡報文中で仮称として使用したものであり、それをここで使用することによる定着化を恐れるものだが、報文中で必要を説かれている機能面を含めた本群石器の検討も進んでおらず、止むなく使用した。使用痕の成因を含めた検討が待たれる。

VIII 石 錐

素材の一部または全体に二次加工を施して棒状に尖った部分あるいは全体を作出したもの。この棒状部を錐部と呼んで本群石器の識別要素とする。個々の石器は㉑全体形、㉒二次加工の種類により型式分類される(挿図18)。次にその属性として長さ、幅、厚さ、重量、石質、錐部の長さ、錐部の幅、欠損状況および使用痕を調べた。錐部先端と基部中央を結ぶ線を基準線として、同様手段で基準線と平行する辺の長さ



挿図18 十二ノ后遺跡出土石錐の形態分類

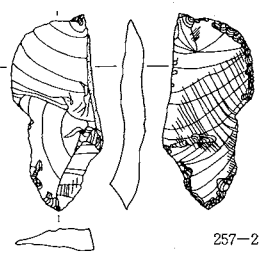
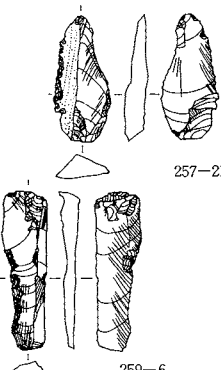
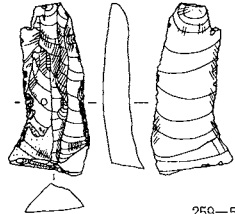
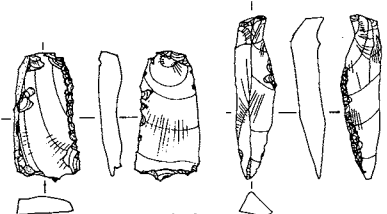
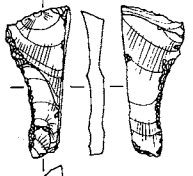
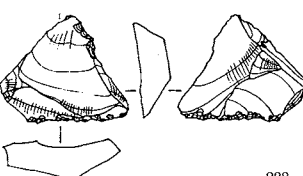
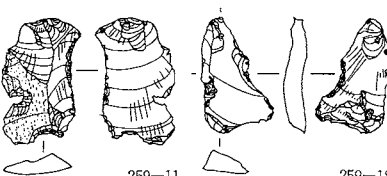
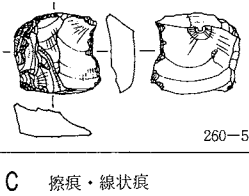
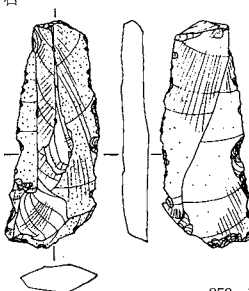
を長さ、直交する辺の長さを幅とした。錐部の長さは先端と基部中央を結ぶ線分の長さ、幅は最大幅であ

る基部の幅である。欠損状況については、錐部欠損をA、錐部残をB、完形をOとした。なお、型式BAの二次加工が全体におよぶものとBD型の石鏃の一部とはその区別が非常に難しいが、基準線を中心に左右対称のものを石鏃、非対称のものを石錐に入れた。

IX 使用痕のある石核・剥片・原石

はじめの本報書で扱う石器の範囲のところでは述べた所に従えば、本群は、当遺跡出土の全部の剥片・石核・原石の中で分析されなければならない一群である。しかもここで注目した使用痕は、肉眼観察で識別できる、刃こぼれ、刃つぶれのみであることをみれば、全体の中ではもちろん、使用痕のあるものの中でもその一部にすぎない。従って以下は「部分」の中での分析ということになる。

個々の石器については、④使用痕部分あるいは使用痕自体の形、⑤使用痕の種類、⑥素材によってアルファベット3文字の型式名を付した(挿図19)。2ヶ所以上に使用痕のあるものはスクレイパーの例に従った。さらにその属性として長さ、幅、厚さ、重量、石質、使用痕部の長さ、使用痕、欠損状況を調べた。基準線はその素材に従って以下、スクレイパーと同様の方法をとった。部分名称についても素材に従うことにする。なお、以後本群を総称して「使用痕の有るもの」と呼ぶことにする。

使用痕・使用痕部の形状	使用痕部の状態	素 材
<p>A 外湾する</p>  <p>257-2</p>	<p>A 刃こぼれ</p>  <p>257-21 259-6</p>	<p>A 剥片</p>  <p>259-5</p>
<p>B 直である</p>  <p>258-9 257-17</p>	<p>B 刃つぶれ</p>  <p>260-4</p>	<p>B 石核</p>  <p>228-12</p>
<p>C 内湾する</p>  <p>259-11 259-18</p>	<p>C 擦痕・線状痕</p>  <p>260-5</p>	<p>C 原石</p>  <p>258-11</p>
		<p>D 不明 ※二次加工・素材 ※破損の状況による</p>

挿図19 十二ノ后遺跡出土使用痕ある剥片・石核・原石の形態分類

X 石核類

一次加工を施されたと判断されるもののうち、ポジティブな剥離面を持たぬものを総て一括した。石核類とあいまいな表現をしたのは、そこにみられるものの総てを一次加工といい切ることができず、またこれも千鹿頭社遺跡報文中で仮称した石核状石器と類似するものも含んでいることによる。

個々の石器については、その打点部位を観察した後、長さ、幅、厚さ、重量、石質、を測った。基準線は打面を水平に置き、打点の集中する面を上、剥離の集中する面を正面とした。

② 磨製石器

i 石 錘

棒状あるいは狭長な板状に調整された小礫の両端に挟りを入れたものである。

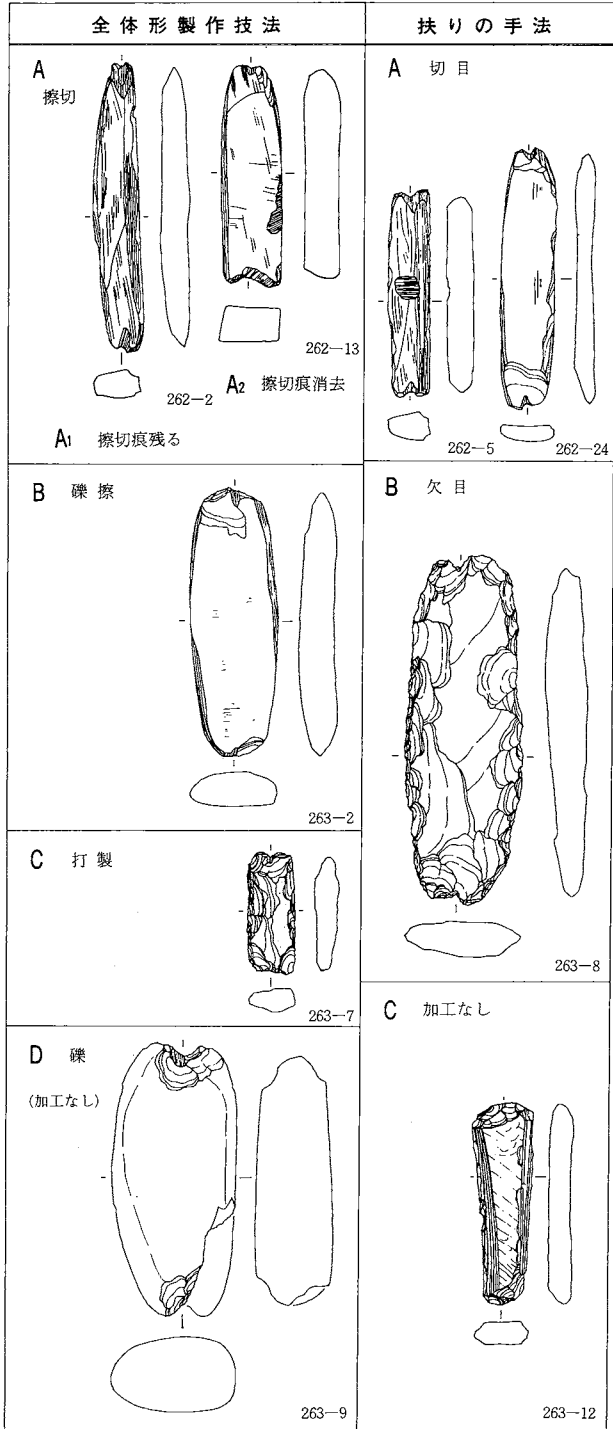
個々の石器はまず、㊶全体形の製作技法、㊶挟りの手法により型式分類され(挿図20)、長さ、幅、厚さ、重量の測定の後、石質、破損状況が観察される。その際、挟入部を通る線を基準線に設定し、挟りを結ぶ線分の長さを石器の長さとした。

ii 軽 石

製品を含む本遺跡出土軽石を総て一括した。形状の観察の後、長さ、幅、厚さ、重量を測定した。測定は実測図に従い、縦の最大長を長さ、横の最大長を幅、最大厚を厚さとした。

iii 装身具

ここでは、滑石製品と自然の小円礫の全体に磨痕が残るものを扱う。前者は珧状耳飾と有孔の垂飾品、玉状のものであり、後者は海浜石あるいは愛玩石とも呼ばれるものである。個々の計測基準は形状により異



挿図20 十二ノ后遺跡出土石錘の形態分類

なる。珧状耳飾は外縁から環孔に達する切れ目の中心線を基準線とし、それを垂直に置いた。有孔の垂飾品はその全体形のより表われた面を正面とし孔の位置を上方に置いた。玉状のものは古墳時代の玉類の計

測方法にならい、海浜石についてはその長軸を基準線として垂直に置いた。各々は欠損状況を観察すると同時に、欠損品のうち全体形を推定できるものはその結果を推定値として示した。なお、玉状のものについては、古墳時代以降の玉類の分類をそのままあてはめ、時期を区別する意味でその分類名称の最後に状の字を付したが、その総てが縄文時代のものであるのかは、疑問が残る。(小池 孝)

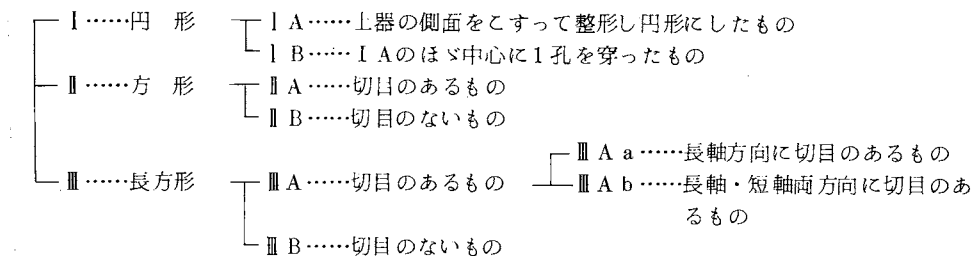
イ) 大形石器 (図版114~123)

石斧類、横刃形石器、敲打器類、磨石、凹石、石皿、石棒、砥石などを扱う。これらは整理の都合上、大形石器類とされたものであり、それ以上の意味はない。ただ素材が黒曜石以外の石器類のほとんどを指すことになる。これらのうち石斧類、凹石、敲打器類は量的にも多く、形態的にも変異が小さいので、資料の一部の実測図を示し一覧表で補い、余力を細部の観察にあてる。資料のうち確実に時期把握できるものは少なく、遺構にとまなうものなかにも重複などによる混乱が認められる。縄文前期から弥生中期までの可能性を有する石器群を扱うことにならざるを得ないが、かなりの部分は縄文前期に属するものと考えられる。

以上の理由により、本文中で行なわれる分類は、記述の便宜のためであり、なんら機能・用途などを考慮したものではない。分類は形態に即して行ったので、結果として機能を示す場合もあるかもしれない。しかし、時期限定の不十分なことにより石器組成における特定石器の位置などを明らかにすることは非常に困難である。器種名は通常用いられるものをそのまま使った。(土屋 積)

ウ 縄文時代土製品の分類 (図版126・127)

本遺跡出土の縄文時代土製品には、土器片錘と土製円板の二種がある。ともに土器片を素材とした遺物として、つぎのように形態分類をした。



形態の表示は、I A・I B・II A・II B・III Aa・III Ab・III Bとしてある。I A・I Bは土製円板であり、II A・III Aa・III Abは土器片錘である。別表一覧表の計測値はmm単位で表わし、長さの計測は土器片錘の場合切目間を、土製円板はその直径を計測した。(山本 賢治)

エ 古墳時代土器の器種分類

すでに金鑄場遺跡の項(13~24頁)で述べたので、それを参照されたい。

オ 奈良・平安時代土器の器種分類 (挿図22~27, 図版91~103)

ア) 時代区分

本稿で扱う奈良時代とは美術史上の白鳳時代を含めた、古代史上の広義の奈良時代をいい、平安時代は

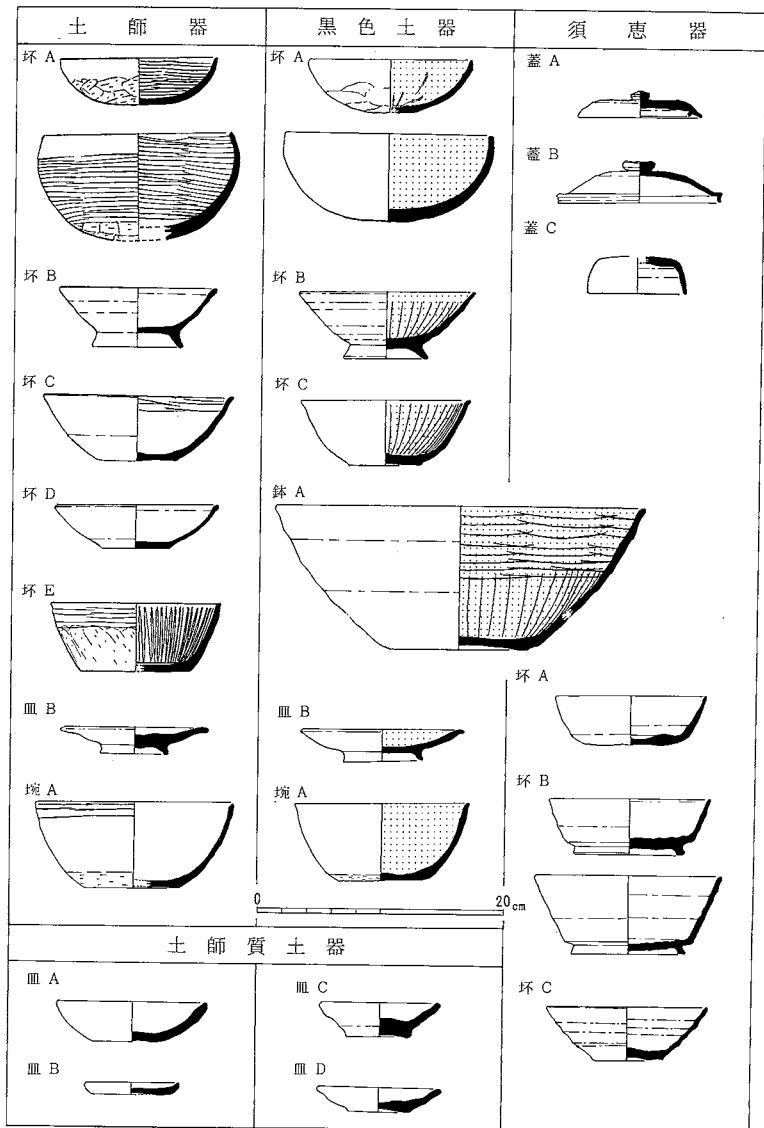
同様に通説に従っている。しかし、この歴史上の時代区分を考古学上の編年大系に適用させることは、もとより困難であり、いわんや、諏訪地方の一遺跡の時代区分に用いるのは妥当とは思えない。しかし、あえて用いたのは、考古学上の編年大系が相対的なものであることを十分に確認した上で、他に適当な用語がないことと、地方の小遺跡といえども、それを歴史上の一時点に可能な限り設定しておくことも必要と思ったからにはかならない。⁽⁶⁾特に、奈良時代の開始時期は考古学上の古墳時代の終末をどこに置くかによって、考古学上の時代区分法に従えば、変化してくる。しかし、この問題については、今日の考古学界では未だ結論がでておらず、いわんや諏訪地方では漠然としている。ただ、今日の時点では、長野県下の古墳構築の大勢はほぼ7世紀中葉までで、一部地域を除いては、終了するようであり、また、土器生産の様相も、この頃を境として、大きく変化してくる。⁽⁷⁾従って、土器編年を中心とした、本遺跡の時代区分に、7世紀中葉に1つの画期を求め、日本史上の時代区分法に従うことは、単に便宜的であるというのみならず、それなりの必然性が認められるものと思われる。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

イ) 供膳形態の土器

本遺跡で出土した供膳形態の土器は土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。器種では坏・埴・皿・鉢・高坏・短頸壺等の壺類、蓋などがある(挿図21)

本稿では可能な限り同一の基準で、先学の研究業績を踏まえつつ、器種の分類を試みた。しかし、出土量の少ない須恵器等の一部の器種と灰釉陶器については従来の一般的分類に従った。⁽¹¹⁾

灰釉陶器を除く供膳形態の土器のうち、坏・皿・埴・鉢の区分は主として、器形と法量によっておこなった。これらのうち、坏のみが、土師器・黒色土器・須恵器の三者に共通して存在する器種であり、鉢と埴は同一器形のものは須



挿図21 十二ノ后遺跡出土土器(供膳形態)の器種分類 (1:6)

恵器の埴が1点あるのみで、原則として、土師器と黒色土器に限定される。

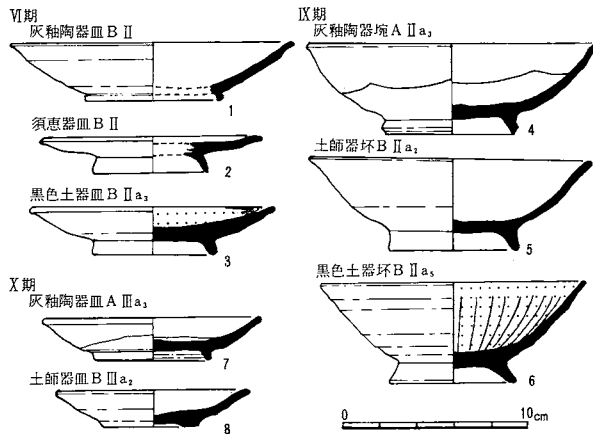
鉢 土師器と黒色土器は逆梯形状の器形をもつもので、器形上は坏と大差ない。口径が20cm以上を越えるものを鉢とした。鉢A 1種のみである。須恵器鉢は広口の甕形の器形をとるが、背が低く、平底の器形のものを鉢としたが、類例は少ない。須恵器は単に鉢とした。

埴 坏との区別が困難なものもあるが、径高指数が原則として38以上で、底部から口縁端部にかけて、内湾ぎみに急に立ち上るものを埴とした。口縁部の外傾指数は70以下である。ただし、後述する土師器坏Eの中には径高指数・外傾指数と、器形の上で埴に似るものもあるが、成形技法等が全く異なり、しかも、坏Eそれ自体、坏としての発展系列があるので、埴の中には含められない。埴はA 1種のみである。須恵器は単に埴とした。

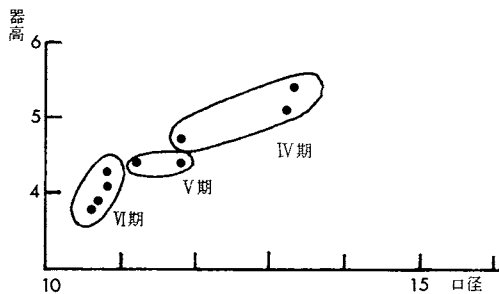
坏 鉢・埴と皿との中間にある法量と器形をもつ1群の土器を総て坏とした。土師器は坏AからEまでの5種、黒色土器と須恵器はAからCまでの3種がある。

坏A：土師器・黒色土器と須恵器では成形技法が異なる。前者は粘土紐巻き上げ法により成形され、後者はろくろ成形で、底部の切り離しは篋によるものである。土師器には2亜種がある。その1は古墳時代坏Dの、その2は坏Aを踏襲したものである。前者はII期で、後者はI期で終る。

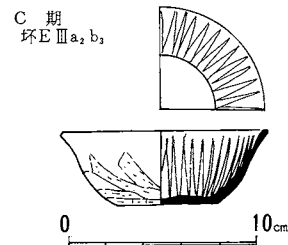
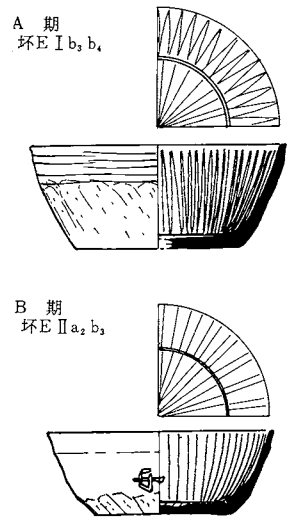
坏B：底部に高台の付くものである。須恵器では蓋Bとセットをなす。土師器・黒色土器ではVI期以降に出現するが、それらは施釉陶器の影響を受けて成立したものである(挿図22)。



挿図22 灰釉陶器を模倣した土器 (1:4)
(1・3 97号住、2 東筑・大口沢古窯址、4~6 3号住、
7 諏訪・頭殿沢1号住、8 18号住)



挿図23 坏E法量の分布



挿図24 坏E (甲州型坏)の変遷 (1:4)

坏C：ろくろ成形され、底部に糸切り痕をとどめるものである。土師器・黒色土器は内面を丁寧に磨いてある。糸切り痕を篋で削り去ったものもある。

坏D：土師器だけである。須恵器坏Cと同様にろくろ成形のままのものである。東北地方の須恵系土器⁽¹⁴⁾に酷似する。

坏E：土師器のみである。一般に甲州型坏と呼ばれるもので、本遺跡でも主体となる遺物である。ろくろ成形したのち、外面は器高中位から底部までと、底部外面を篋で削り、内面には⁽¹⁵⁾暗文を施す。全体に赤褐色の色調で、胎土の良い土器であるが、新しいものでは黄褐色を呈するものもある(挿図23・24)。

器形・法量・器面調整等から3期に細分される。

A期 箱形の器形をもち、径高指数が60以下である。口縁部と底部外面は篋で磨く。特に口縁部ではろくろ成形時に生じた稜線上を磨いている。内面は胴部と底部との境目に一本の沈線で界線をめぐらし、胴部と底部に鋸歯状または放射状暗文を描いている。

B期 箱形の器形からC期の逆梯形状の器形に移る過渡的な器形である。径高指数は60代である。A期にみられた外面の篋磨きは省略されている。内面の鋸歯状暗文は崩れたものがある。

C期 逆梯形状の器形である。径高指数は70以上となる。A・B期にみられた界線と底部の暗文は消滅する。

A期の坏Eは金鑄場・十二ノ后遺跡IV期に、B期はV期に、C期はVI期に対応する。

皿 1点の須恵器皿を除いては、総て土師器・黒色土器の高台のつく皿Bである。これらはいずれも施釉陶器からの影響を受けて成立したものであり(挿図22)、V期以降に出現する。

蓋 A・B・Cの3種があり、須恵器と少量の灰釉陶器がある。⁽¹⁷⁾

蓋A：陶邑窯TK217窯期に出現する、身にかえりを持ち、頂部に紐をつけた蓋で、須恵器坏AⅢと組み合わされる。I期で消滅する。⁽¹⁸⁾

蓋B：頂部に偽宝珠の紐をもち、身にかえりのないもので、坏Bと組みあわされる。II期にあらわれ、VII期で消滅する。

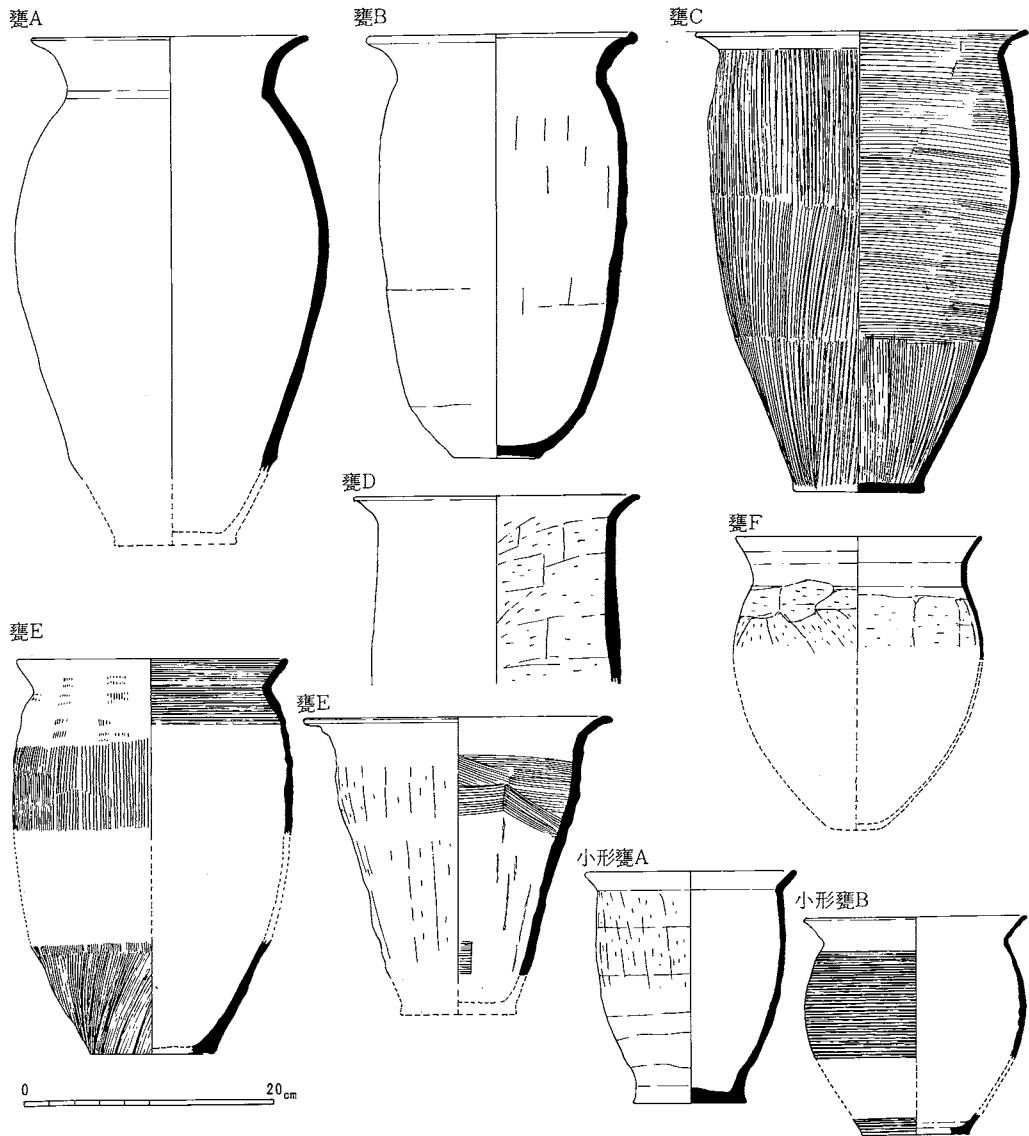
蓋C：葵壺形の短壺蓋と、A・Bに属さない蓋を一括した。灰釉陶器の蓋は総てこれに属する。

以上の供膳形態の土器のうち、坏、碗、皿、蓋は法量の相違によって細分される。口径が16cm以上20cm未満をⅠ、16cm未満12cm以上をⅡ、12cm未満をⅢとした。ただし、須恵器坏Bは特に器高が6cm以上のものを、以上の分類から切り離してⅣとした。また、土師器坏Eは口径が13cm以上をⅠ、13cm未満11cm以上をⅡ、11cm未満をⅢとした。

また、供膳形態の土器は底部の調整の仕方によっても細分される。底部調整は篋切り(篋おこし)、糸切り、篋削り、篋磨きとナデがある。これらはろくろ回転によるものと手持ちでおこなう場合とがある。篋切りを1、糸切りを2、篋削りを3、篋磨きを4、ナデを5とし、それらがろくろ回転を利用した場合をa、手持ちの場合をbとし、算用数字とアルファベットを組みあわせて、それらがろくろ回転による調整であるか、否かを区別することにした。すなわち、回転糸切り手法で、底部調整をした場合には、a₂となり、回転篋削りに手持ちの磨きが加わればa₃b₄となる。ただし坏Bの中には最終調整に手持ちの削りなり、回転利用の篋削りやナデがおこなわれた場合にはそれ以前の、ろくろ台上での粘土塊からの切り離しが、篋によったか糸切りか不明な場合が多い。従って、底部調整の最終段階を記号化し、底部調整の全工程が観察されうるものについては、可能な限り示すこととした。例えば、坏EのA期にみられる底部調

整に、回転糸切り+手持ち篋削り+篋磨きは $a_2b_3b_4$ と記号化されるが、これは回転糸切り痕が、底部中央に残されていたからにはかならない。

以上供膳形態の土器は、器形、法量、底部調整等の土器のもつ諸特徴を、記号化し、それらを組みあわせることによって、1つの器種を具現化することとした。例えば須恵器杯 A II a_3 は、16cm 未満12cm 以上の口径をもち篋でろくろ台上から切り離した後、底部をろくろの回転を利用した、篋削りでおこなった杯ということになる。



挿図25 十二ノ后遺跡出土土師器甕の分類 (1:6)

ウ) 煮沸・貯蔵形態の土器

須恵器については、出土量が少なく、かつ完形品が得られなかったために、器種の細分はおこなわずに、土師器の甕に限定した(挿図25)。

甕 原則として口径20cm以上のものを甕としたが、後述の甕Fでは20cm未満のものも含めた。これは法量上の相違よりも、土器の系譜上の諸特徴を重視したからである。

甕A：口縁部が、「く」の字状に外反し最大径が胴部にある平底の烏帽子形の甕である。底部には木葉痕をとどめるものが多い。口縁部はヨコナデされ、胴部内外面は篋でかるく削るか、ナデつけている。刷毛調整されたものもみられるが、刷毛そのものも軽くほどこされるだけである。篋、刷毛の調整は副次的であって、総じて第1次成形時のオサエ痕や、粘土紐巻き上げ痕が胴部に残されるものが多く、雑な作りのものが多い。

甕B：「く」の字形の口縁部に、最大径のある烏帽子形の甕である。最大径が異なる以外に甕Aと大きく変る所がないが、Aとともに古墳時代の甕からの伝統を受けつぐものである。

甕C：口縁部が頸部から急角度で大きく直線的に外反し、口縁部内面の屈曲部に段がつくものである。口縁部はロクロナデされたのち、内面には刷毛を施すものがある。胴部は内外面とも刷毛を強く施しているが、外面を篋でナデつけて調整しているものもある。器面調整はA・Bよりも丁寧である。底部には木葉痕をとどめるものと、それを篋で削り去ったものがある。

甕D：口縁部が大きく外湾し、胴部が直線的に底部へ集約するか、直線的に垂下し、胴部下半で底部に急に集約する器形をもつものである。口縁部はヨコナデされる。胴部は原則として篋削りされるが、刷毛と併用されるものもある。量は多くない。胴部外面は縦方向に、内面は横方向に篋削りされる。

甕E：ロクロの回転を利用して口縁部を整形しているものを一括した。器形は甕A・Bに類似するものと、最大径が口縁部にある、やや鉢形に近い胴部をもつものがある。頸部から口縁部外面はロクロナデされ胴部上半から口縁部内面はカキ目をもつものが多いが、刷毛目をもつものもある。胴部上面は刷毛を施し内面は刷毛または、篋で軽く削るか、ナデている。胴部外面の刷毛は観察し得る土器からは、底部にむけて3ないし4段以上に分けて右まわりに施している。これは口縁部を上にした正常な状態で、土器を左まわりに回転させながら、上段をまず刷毛整形し、以下順次底部まで調整した結果と思われるが、資料が少なく今後の検討にまちたい。

甕F：口縁部は強くヨコナデされ、胴部下半は内外面とも強く篋で削り、器壁を厚さ5mm前後と極めて薄く仕上げている。底部は不安定な平底となる。口縁部は甕Fの出現時は「く」の字形であるが、次第に頸部は、「コ」の字形となる。赤味を帯びた褐色の胎土と細砂を少量を含み硬く焼かれている。甕A～Eの胎土内には5mm前後の砂粒を含む、焼成の余り良くない黒褐色の土器が多いのと同様の対称的である。類例は善光寺平にもみられるが、むしろ武蔵地方の武蔵型と呼ばれる甕と近親関係がある。量は多くない。¹⁹⁾

小形甕：口径20cm以下の甕を特に小形甕とした。これらは口径が20cm未満、16cm以上をⅠ、16cm未満、12cm以上をⅡ、12cm未満をⅢとして、細分される。粘土紐巻き上げ法によって成形されたA、器面にカキ目をもち、ロクロ成形されたB、カキ目を持たずに、単にロクロ成形されたCとがある。小形甕Bは、赤褐色で硬質の焼成の良い薄手(厚さ3mm前後)の土器であり、AとCからは容易に区別が可能である。小形甕Aは底部に木葉痕を残すが、小形甕BとCは糸切り痕を残す

ものと、それを削ったものがある。小形甕Cは、本遺跡では1点それと見られる破片があるのみであり、一般に天流川流域では、量は非常に少ない。小形甕の主体は、AとBである。(笹沢 浩)

カ 古墳～平安時代土鍾の分類 (挿図26, 図版127)

土製品としての土鍾は縄文時代からあるが、ここでは縄文時代以降の土鍾について述べたい。

ア) 形態分類

十二ノ后遺跡出土の土鍾は合計167点で、大きくⅠ—紡錘形、Ⅱ—管状形の2形態に分類できる。Ⅰ型はさらに、くびれている型とそうでないものに分類し、くびれていない一般的な型—ⅠBa、くびれているのをⅠBbとした。また、径の割に長さのないずんぐりしたもの—ⅠC、長さ2cmから3cmで径1cm以下のごく小さなもの—ⅠDとした。管状形のⅡ型については、くびれている型とそうでないものに分類し、それぞれ、くびれていないものをⅡA、くびれているものをⅡBとした。以上7形態に分類し、表示はしたがって、ⅠA・ⅠBa・ⅠBb・ⅠC・ⅡA・ⅡBとしてある(挿図26—上)。

イ) 破損状態

破損状態の表示は、岡谷市新井北・新井南遺跡出土土鍾一覧表(中央道報告書—岡谷市その3」95頁)の表示方法にしたがった。

完形のをⅠ、一端欠損のをⅡ、両端欠損をⅢ、半截状の割れ方をしたものをⅣと表示した。また、割れた状態が長軸に対して直角に近い状態のをa、斜めの状態のをbとして、Ⅱ—aとかⅢ—bと表示してある(挿図26—下)。

なお、別表計測一覧はmm単位で表わし、()内の数字は残存部の長さ、重さを示している。(山本 賢治)

註1 図中には使用痕のみえない剥片がある(図215—14、231—2、260—14～16、20)が、特に意味はない。また石核類についても、その総てを扱っているわけではなく、目についたもの程度であることを承知おかれたい。

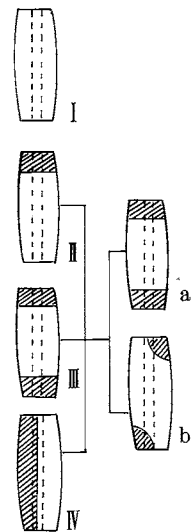
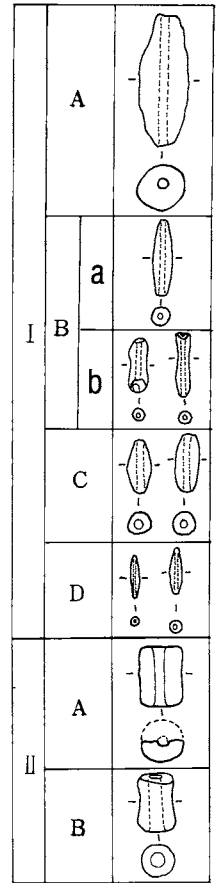
2 剥片の部分名称については佐原真氏の整理したもの(小林行雄・佐原真「紫雲出」1964)に従った。

3 二次加工を縁辺に施された連続した剥離の全体としてとらえた。それが長さを持つ場合、その剥離は連続した打点の移動によるものであり、整った印象を受けることから大きな刃こぼれと区別できる。

4 この呼びわけは本遺跡出土遺物中にみられた二次加工の違い、特に断面片刃の二次加工を他と区別して表現するためのものであり、これ等が石器に施される二次加工の総てではない。また、その呼称についても今後、検討する余地が残されている。

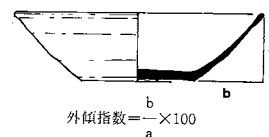
5 中央道報告書諏訪市その3 1974 P.12

6 杉原荘介氏らが、考古学的な年代観で市川市の古代史の敘述をおこなったことがある(杉原



挿図26 土鍾の形態分類(上)と破損状況分類の模式(下)

荘介・大塚初重・小林三郎「市川市史」1巻(1971)し、筆者らも同様の方法をとったことがある(森島稔・小林孚・笹沢浩・米山一政「上水内郡誌——原始・古代編」)しかし、これらの方法は考古学上の方法としては最善に近いものであろうが、古代史上の対比の上では再考が必要と思われる。



挿図27 外傾指数の求め方

- 7 一般的には古墳時代なる考古学的区分は7世紀後葉を交替期として、その役割をはたしておられるといわれるが、畿内と地方では実体が異なり、その決定は困難であるといわれている(近藤義郎「古墳とはなにか」日本の考古学IV、古墳時代上(1966)。最近では古墳時代後期のあとに終末期を設定し、その上限を須恵器の編年でⅢ型式の段階(7世紀初頭)、下限を7世紀後半(須恵器編年Ⅳ期)にあてた考え方が示されている(森浩一「あとがきにかえて」論集終末期古墳(1973)。
- 8 たしかに、一部の古墳は8世紀中葉頃まで構築されたと考えられるものがある(小松虔他「松本市新村安塚古墳群(1979)が、それは例外的存在で、おそらく大多数の古墳は7世紀末葉までにはほぼ姿を消すものと思われる。
- 9 長野県のみならず、全国的傾向である(田辺昭三「須恵器」日本美術工芸(1971)388-399号)。
- 10 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」Ⅱ(1962)A,Ⅳ(1962)B,Ⅵ(1975)C,Ⅶ(1976)D,Ⅸ(1978)E
- 11 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ(1966)A、楢崎彰一「猿投窯」陶器全集31(1958)B、「白瓷」日本陶磁全集(1976)C。
- 12 本遺跡出土の坏類等の底径は、篋削り等が少なく、あっても、明確に測定可能なものがほとんどある。従って、本稿で用いた外傾指数は $\left(\frac{\text{口径}-\text{底径}}{2} \div \text{器高}\right) \times 100$ で求めた(挿図27)。なお、外傾指数の基本的求め方は、田中琢氏によった。(注5)A
- 13 注11のC
- 14 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」研究紀要1(宮城県多賀城研究所(1974)
- 15 長野県中央道報告-諏訪郡富士見町(その1)-(1973)A、上伊那郡箕輪町——(1973)B、末木健「中部地方の平安時代土師式土器編年の諸問題」山梨県中央道埋蔵文化財包蔵発掘調査報告書——北巨摩郡須玉町地内——(1976)C
- 16 長野県内で坏Eが出土した諸遺跡は、諏訪市本城遺跡25・38号住居址、同市女帝垣外遺跡3号住居址旧、(中央道報告-諏訪市(その2)1974)、上伊那郡箕輪町中央道遺跡13・53・60号遺跡、同町堂地遺跡大原地籍2・5号住居址(注9のB)岡谷市船霊社遺跡(中央道報告-岡谷市(その4)-1980)、塩尻市丘中南遺跡(1975年調査、小林康男氏教示、未報告)等が知られ、諏訪盆地を中心に、天竜川上流域から、峠を越えた松本平南部まで、分布している。なお、諏訪郡富士見町足羽遺跡でも、十二ノ后遺跡よりも後出の坏Eが出土している(注15のA)。
- 17 注10のD
- 18 注11のA
- 19 高橋一夫「国分期土器の細分編年試論」埼玉考古第13・14号(1975)

3) 遺構と遺物

ア 縄文時代の遺構と遺物 (図1)

ア) 縄文時代前期

① 1号住居址 (図3・80・212・213・269・270・272・282, 図版33)

遺跡の北端、センターライン西側に位置し、ほぼ北向きの傾斜面に立地する。原地表での標高は813 m前後で、遺跡内では最も低い方である。検出面はローム層であるが、付近のローム層には帯状に拳大一人頭大の礫が含まれている。その成因は不明で、ほぼ南北方向に連続し、等高線と直交する。背後の山塊より崩落した岩塊や礫の転落路なのかもしれない。本址は、ローム層及び礫を含んだローム層を掘り込んで造られる。本址周辺の諸遺構の切合は複雑である。結論としては、11号住→1号住→42号住→10号住→土塚5・20→14号住の順に築かれたものである。その根拠は各々の遺構の項で述べることにする。本址と10号住及び42号住との切り合いは検出面で明瞭に把握された。両者とも本址を切っている。

遺構 方形プランを基本とした竪穴住居址である。壁はほぼ垂直で、西壁、南壁、北壁での壁高はそれぞれ50cm、30cm、15cmを測る。西壁直下全域から南壁直下西隅にかけて、幅15cm、深さ10cm程の周溝がめぐる。床は平坦につくられ、礫混じりだが、全面堅くよくしまっている。なお、床のみならず壁にも多くの礫がみられるが、礫混じりのローム層を掘り込んでいるためである。屋内からは10個以上のピットが検出されたが、このうち柱穴と判断されるのは、P₁・P₂・P₃・P₄の4個である。いずれも径40cm、深さ25cm～45cm程度である。柱穴は長方形に配置されたこの4個のみであった可能性が高い。その他のピットは浅かったり径が小さかったりで、その機能・性格を把握できない。炉址らしい痕跡は見出されなかったが、42号住に切られて破壊された部分にあった可能性もある。屋外施設は明瞭ではない。わずかに西壁縁辺部分に浅いピットがほぼ等間隔で並ぶが、その性格は特定できない。遺物出土量は多い方であるが、特記すべき出土状況を示すものはない。

遺物 土器はⅠ・Ⅱ群があるが、Ⅰ群が主体となる。Ⅰ群では2類A (図80-27)・C (26)は少なく、3類以下が多くなる。3類A (1・2)・B (4・5)・C (3)・E (25)は図示しなかった破片にも少なくな。4・5類のうち含繊維土器のA (6-9)のほか、10は乳頭状の尖底で、1類に属するものであろう。繊維を含まぬ4類では組紐ある例 (28)のほかは4・5類C (11-19)の縄文施文のみの破片が最も多く、図示しない例の中に、Gとした金雲母を含み裏面に指の押圧による調整を施した土器もある。18がやや似た特徴をもつ。5群では竹管文あるB (20・22・24)・D (21)がわずか出土している。Ⅱ群土器は特徴的なものはほとんどなく、図示したⅡ群4類D (29・30)と小破片の1類A・B、2類Dがわずか検出されたのみである。量的にはⅠ群4・5類Cが大部分で、次に3類、5類A・Bの順になる。

石器には、石鏃14 (図212-1~14)、石槍 (15)、抉入刺突具 (16)、石匙6 (17-22)、スクレイパー8 (23~27, 図213-1~3)、有抉頭磨石器 (4)、石錐2 (6・7)、使用痕のある剝片 (5)、玦状耳飾 (9)、海浜石 (8)、打製石斧、小形磨製石斧2、乳棒状石斧 (図269-1, 270-10)、凹石3、敲打器Ⅳ類 (図272-9)、石皿があり、土製器には、土製円盤及び土器片Ⅰ類 (図282-1)、同Ⅲb類 (2)がある。

出土遺物からみて、Ⅰ群3類 (中越式) 期から5類 (黒浜式) 期に属する住居址であろう。(百瀬 長秀)

② 6号住居址 (図6・81・213, 図版33)

遺構 本址は遺跡用地内北隅に検出された。ローム層に掘り込まれており、覆土はローム粒を含んだ褐色土である。周囲には遺構が多く、切り合いも複雑であった。まず、本址は遺構のほとんどをほぼ同時期の8号住・16号住とに切られ、また、東側の一部を古墳時代の7号住が切っており、南から東にかけてほんのわずか残った壁際をやはり古墳時代の9号住の北西隅がほぼすっぽりと覆い、本址覆土中に貼床を施していた。このような状態のため炉はもちろん、柱穴の痕跡すらも検出できなかった。遺存する壁、床面はロームであるが、特に堅くなく良好といえない。壁高は9号住床面との差16~23cmを測った。周溝はない。また、壁の一部は、土塚16に切られている。

遺物 遺物も少なく図示できる土器は3点、石器は5点のみである。土器は、無文で胎土が良く焼成の良いもの(図80-1)と、金雲母を多量に含み(2・3)、胎土が灰黒色を呈し、内面にかなりの指頭痕を残すもの(2)である。3点とも、中厚手で、口縁の反りが少なく、第I群3類C(A)種に含まれる土器である。石器は、石鏃(図213-10)、スクレイパー2(11・12)、使用痕ある剥片2(13・14)が出土した。これらはすべて黒曜石製であり、10~12は完形品である。

出土遺物からみてI群3類(中越式)期に属する住居址であろう。(高桑 俊雄)

③ 8号住居址 (図6・69・81~83・213・214・266・271・273・275, 図版33)

遺構 本址は遺跡用地内北隅に位置する。ロームを掘り込み、ローム粒を含んだ褐色土を覆土としていた。切合関係を見ると、先ず、南側で6号住を切り、そして住居址のほとんどを16号住に切られており、南西壁際が残ったのみである。また、本址南隅覆土上に古墳時代の9号住が貼床を施してあった。本址と16号住の床面差は約30cmと深いため、炉址はもとより、柱穴の痕跡すら検出できなかった。壁はロームであり、検出面から40cmを測る。周溝は壁直下であり、幅約20cmとかなり広く、深さも10cm前後と深い。残存する壁際全体に見られるため、恐らく全周していたと思われる。床面はロームであり、壁、床共に堅く良好な状態であった。

遺物 残存部分の少ない住居址にしては遺物量は多い。土器は床面(図81・82)と覆土出土に区分される。まず床面出土ではI群3類が多い。A(図81-4)・B(8)・C(5~7)・D(9~11・13)・E(12)などがあり、本類に対応する型式として、薄手の2類C(14~18)や無繊維の神ノ木式とされる4類D(19~23)など竹管などによる文様をもつ一群と、量的には最も多い縄文施文のグループ(図82)がある。ここには、含繊維でやや複合口縁を残し、厚手のI群1類B~D(1~3)や、羽状縄文の4・5類A(4~6)と無繊維の4・5類C(10・12・15)、また、金雲母を含む特有なG(8・9・11・14)がある。組紐文のある4類C(13)も数片検出されている。また、時期不明の一群(17~21)も混在する。これに対して、覆土(図83)もほぼ同じ傾向を示すが、縄文施文例が大部分である。I群3類B(A)(1)・D(2)、典型的は搬入品といえる2類C(3・4)、それに近いもの(5)、繊維を含む4・5類A(図69-1, 図83-8・14・19)などのほかは、斜縄文を主とする一群である。これらは多く裏面に指頭による調整痕がある点は共通するが、胎土に金雲母を含むグループ(7・10~13・15~17)と含まないもの(6・8・9・18)があり、その編年の区分がむずかしい。一応、I群4・5類のCとは区分しGとした理由でもある。

石器も出土量の割合には器種が多い。石鏃は18(図213-15~25, 27~31)と最も多くすべて黒曜石製である。石匙7(図213-35・36, 図214-1~5)、スクレイパー10(6~15)と多い。その他、挟入刺突具(図213-34)、石錐3(同一26, 図214-21・22)、使用痕のあるもの4(17~20)、複数挟入石器(16)や、打製石斧

(図266-18)、乳棒状石斧2、横刃(図271-5)、凹石5(図275-6)がある。なお、本遺跡からは比較的に少ない石錐(図271-19)と砥石(図273-3)が検出されている。これら石器の出土数は、土器も含めて、切り合いのために大部分が消失した住居址からとしては多く、すべてを本址に所属するとは決めがたい。

出土土器から、本址はⅠ群3類(中越式)・4類(関山式・神ノ木式)期に属する時期と考えられるが、明確にはできない。(高桑 俊雄)

④ 10号住居址(図3・84・215・270, 図版33)

遺跡北端近く、センターライン沿いや西寄りに位置する。ほぼ北向き傾斜面に立地し、用地内では最も標高が低い。42号住床面で検出されたが恐らく42号住覆土上面が検出面であろう。ローム及び礫を含むローム層を掘り込んでいる。本址と周囲の遺構との切合は1号住の項で示した通りである。まず本址と42号住との関係であるが、42号住検出時には切合いは把握されず、両者を区分することなく10号住とし、床面検出時になって初めて切合いが判明し、内側を10号住、外側を42号住とした。本址覆土中、42号住床面と同じレベルで床を造った痕跡は認められないため、本址が42号住を切っているものと判断した。土坑5・20との切合いは、検出時においてとらえられ、両者とも本址及び42号住を切っている。11号住との切合いは、土坑20が中間に存することによって確認できなかった。出土遺物から検討して、11号住覆土中に本址及び42号住床面が造られているものと判断した。

遺構 不整円形プランを呈する竪穴住居址である。42号住の床面施設との判別が難しい部分が多く、本址南壁の突出部分は42号住の床面施設の一部である可能性がある。壁はほぼ垂直で、10~15cm程度の壁高である。周構は確認されなかった。床はほぼ平坦で固められている。床面で検出されたピットは18個ある。このうち柱穴の可能性があるのは、P₂・P₃・P₄・P₅を結んだ配置、または、P₁・(P₉)・P₈・P₇・P₆・(P₂)を結んだ不整円形の配置である。前者はP₄が壁にかかることからみて42号住のものである可能性があり、後者もP₄が壁に接していてやや問題がある。その他のピットは大形・小形の両者があるが、いずれもその性格は不明である。炉は残されておらず、屋外施設も把握されない。特記すべき状態の出土遺物はない。

遺物 土器、石器ともに出土量は多くない。土器はⅠ・Ⅱ群土器であるが、前者は少量の3類Cのみで後者が主体となる。そのⅡ群には、1類A(図84-19・23)・B(1~6・8・10~12・14)・C(7・20~22)・D(18)、2類B(9・15~17)・D(13)があり、このうちⅡ群1類が大半を占める。なお、2類(諸磯B式)とした中には1類(同A式)との区分に問題点もある。石器には石匙(図215-1)、使用痕のある痕片(2)、軽石(3)、白玉状製品(4)、乳棒状石斧(図270-6)各1点がある。また、黒曜石の原石が20個体出土している。

出土遺物からみて、Ⅱ群1類(諸磯A式)の時期に属する住居址であろう。(百瀬 長秀)

⑤ 11号住居址(図8・69・85・86・215, 図版34)

遺跡の北端付近センターライン沿いに位置する。北向き傾斜面に立地し、調査範囲内では最も標高が低い地域に属する。ローム層上面で検出され、ローム層及び礫混じりのローム層中に築かれている。住居址の南東隅は隣接する42号住・10号住及び土坑20と切り合う。42・10号住の項に記した通り、本址廃棄後その覆土中に42・10号住の順に住居が営まれ、最後に土坑20がこの三軒を切り込んで造られる。一方住居址北側は古墳時代Ⅱ期の14号住に切られ、北東隅は土坑21に切られる。

遺構 不整円形プランの竪穴住居址である。壁はほぼ垂直で、壁高は傾斜面上方の南壁で30cm以上、斜

面下方の14号住に切られる付近で10cm程度である。周溝は南側のP₂~P₄~東壁直下にかけて巡るが壁直下ではなく、現存する壁は拡張された結果で、周溝付近に築造当初の壁があったと解することもできる。とすればプランは当初は方形に近い形態を呈していたかも知れない。床は平坦でよく固められている。柱穴はP₁・P₃と北東隅に掘られたピット、及び14号住のP₉の4個が考えられる。P₉は本址床面から測れば深さ20~25cm程度あり、北東隅のピットも最深部は床より14cmの深さを有する。全体にやや浅いがほぼ同一の深さを持ち、方形に配置される。P₂・P₃は柱穴ではないと思われるが、付近はロームに混じった礫が突出しやや荒れた様子を見せる。炉は明瞭には捉えられなかったが、住居址中央部床面に40cm×60cmの範囲で焼土が残されていた。掘り深めてはいないが、地床炉の一種と考えられようか。焼土東側に隣接するように、床面に80cm×100cm、厚さ3cmの粘土塊が残されていた。その性格づけは困難である。屋外施設は確認できなかった。特記すべき出土状況を示す遺物はない。

遺物 土器と石器がある。土器は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群がある。Ⅰ群には1類A・D(図69-2, 85-15)、2類A・C(図85-11・12)、3類A~D(図69-4, 85-1~10)、4・5類C(図69-5~7, 85-24)5類A・B(図85-16~22・28, 86-5・6)・G(図69-3, 86-1~4)などバラエティーに富み、主体となる土器群群がつかみにくい。この他は少なく、Ⅱ群1類A~C(図85-14・25~27)、2類A・B、Ⅳ群4類が共に数片で混在程度である。出土量が多いのはⅠ群4・5類C、5類A・Bと同Gの順で3類がやや少くなり、Ⅱ群・Ⅳ群が微量となる。

石器には、石鏃3(図215-5~7)、石槍(8)、石匙3(9~11)、スクレイパー2(12・13)、石錐(15)、乳棒状石斧3、凹石3がある。

出土遺物からみて、Ⅰ群3類(中越式)~5類(黒浜式)の時期に属する住居址である可能性が強いが時期は明確にできない。(百瀬 長秀)

⑥ 12号住居址(図7・69・87・215~217, 図版34)

遺構 遺跡の北端に検出された堅穴住居址であるが、耕土層となる黒土を除去しローム面で遺構の輪郭を確認している。北隅壁と東隅壁をそれぞれ土壇1・8によって切られている。本址はローム及びその下の石を含む二次堆積ロームまで掘り込むため、壁及び床面にも石が多く凹凸が激しい。壁高は南隅が最高で52cm、東隅が最低で1cmである。壁下には5~9cmの深さの周溝が全周している。支柱穴はP₁~P₄で、その配置は北東壁に片寄るが、ほぼ等間隔である。炉は床面を10cm程掘り込んだ地床炉(P₉)で径20cmを測り、内部には少量の炭化物を含む黒褐色土が充満していたが、炉底はさして焼けていない。北壁床面には石がある。本址の入口部はP₂とP₃の間と推定されるが、炉址が中央より入口に寄って設置されていること、支柱穴P₁・P₄が奥壁に接して設けられている特徴がある住居址である。

遺物 覆土の黒土中には石鏃・石匙等が特に多く、土器も床面より10~30cm浮いて出土する例が多かった。床面からはⅠ群3類Cの尖底土器が出土している(図69-8)。図示した多くの遺物は上記覆土中のものである。Ⅰ群2類A(図87-15・16)・B(11・14)、C(13)があるが、13は縁帯部にアナダラ属腹縁による擬縄文の付されたものである。3類Bでは(1・2)、BかD(4・5)、C(図69-8<内面煤付着>)・9(図87-3・6~10)がある。4類D(図87-12)、5類A(17)、B(25)や本類Aか4類A(図69-10)がある。Ⅱ群では2類C(図87-18・23)、3類24があるが、これらは明らかに混入遺物であろう。無繊維で縄文のみを施文するもの(19~22)は類別は困難で一応Ⅰ群4・5類C、((Ⅱ群1・2類のA)としたい。

石器では石鏃40(図215-16~56)、石匙6(図216-1~6)、スクレイパー18(7~24)、有袂顔磨石器2

(図216-1, 217-1)、石錐9(図215-50, 217-17-24)、使用痕のあるもの15(図217-6~14)、石核類3(25~27)があり、これら主として黒曜石製の小形石器は総計92点にのぼる。これに対し、乳棒状石斧は1、凹石2、石皿1点と少なく、打製石斧は皆無で、縄文中期の石器組成と対照的である。

本址は床面出土や主体となる土器がⅠ群3類(中越式)であり、該期に所属すると考えたい。(伴 信夫)

⑦ 15号住居址(図10・69・88・218・271・277, 図版35)

遺跡最北端、センターライン東沿いに位置する。調査地域内では最も標高が低く、原地形で812mに満たない。ほぼ北向き傾斜面に立地する。ローム層最上面で検出され、ローム層及び礫混じりのローム層中につくられる。本址は南東側にある**27号住**を切り、また、住居址東隅を**土壇64・65**に切られている。北側には時期不詳の土師器を有する住居址があったらしく、**その住居址**に一部を切られている可能性が有るが、土砂採取事業で破壊されたため、確認できない。

遺構 楕円形プランを呈する堅穴住居址である。壁はほぼ垂直で、南壁では27号住床面までの高さ20cm、他壁でも壁高は20cmに満たない。周溝が幾分か内側であるが南壁下に残る。幅20cm弱、深さ5~10cmで、規模は大きい方である。床はローム層部分はよく固められて強く、平坦である。住居址中央から北西寄りではローム層が落ち込み、堆積した黒色土上に薄くロームを貼って床とするため、軟弱で状態は悪い。柱穴はP₁~P₅が考えられるが、配置のバランスからみればP₂・P₄・P₅は27号住に帰属した方が合理的である。未確認ながら、土壇64付近及び貼床部分に各1個の柱穴を予想すれば、方形配置の4本柱の上屋が考えられよう。住居中央南東寄りに地床炉がある。径90~100cm、深さ10cmの浅いピット内西寄りに厚さ数cmの焼土塊を残している。炉外西側にも薄い焼土塊がある。屋外施設は確認できず、特記すべき出土状態の遺物もない。

遺物 土器・石器があり、土器にはⅠ・Ⅱ・Ⅳ群と弥生土器がある。Ⅰ群では捺糸文ある1類C(図88-16-18)・D(17・19)、搬入品の2類A・B(5・8~15)・C、土着の3類A~E(図69-9, 88-1~4・6・7)、4・5類C(図69-10, 88-24・25・28)、5類A・B(20~23)、無繊維で縄文のみのCかG(9~23)が主体となる。Ⅱ群1類A(26)~C、2類A~C、3類と、粗製のⅣ群、丹塗壺の破片の弥生後期土器は共に数片のみである。中心となる土器はⅠ群3類(中越式)期である。

石器には、石鎌16(図218-1~6)、石槍(17)、石匙2(19・20)スクレイパー6(21~26)、石錐(35)、使用痕のある剝片8(27~34)、抉入刺突具(18)、打製石斧、乳棒状石斧、凹石2(図277-3)、尖頭石器(図271-10)がある。

出土遺物からみてⅠ群3類(中越式)の時期の住居址であろう。(百瀬 長秀)

⑧ 16号住居址(図6・69・89~91・219~224・268, 図版33)

遺跡用地内北隅に検出された住居址である。切り合い関係が複雑で、縄文時代遺構でみると先ず南東で**6号住**、南西で**8号住**のほとんどを切り、東側で**22号住**、北西で**24号住**に若干、それぞれ切られている。また、本址中央部覆土中に**集石1**が検出されている。古墳時代に入ると、本址北西壁の一部を**13号住**が切っており、また、東側に**7号住**、南東に**9号住**がそれぞれ覆土中に貼床を施し、構築されていた。結局、本址で切り合いの見られない箇所は西隅のほんの僅かであり、ロームを掘り込み褐色土が入っていたことを確認した。

遺構 炉は、焼土が1箇所、床面上に中央から北西へ長く、25×80cmという楕円形状に拡がって検出さ

れた。量的には多くないが、床面状にかためられ、その部分が周囲よりやや低くなっている。恐らく地床炉として使用された形跡であろう。柱穴は、本址との切合関係にある遺構が多く、すべてを断定できないが、22・24号住内側周溝中に検出されたものを除き、ほとんどが本址に関するものと見られる。ただ、本址廃絶時まで使用されていたものとしては、P₉とP₁₂の2本を確認できたのみであった。しかし、配列、深さ等の状況から推測すると、P₁~P₄、P₅~P₈などの支柱穴を利用して3回、或は4回の建て直し、拡張等を考えることは容易である。壁は、本址に先行する6・8号住の掘り込みが浅いため、本址南西壁、南東壁がよく残っており、ロームであり、良好な状態であった。なお、6号住と本址との床面比高差は約26cm、8号住とのそれは約25cmである。周溝は、2重に廻っており、壁直下と、その内側、約40cm程の所に検出された。切り合いのために本址北西から南西にかけて、外、内側の周溝もほとんど消失しているのであるが、ただ内側の周溝が、壁直下のものにくらべて若干太く、また、深いために、その一部が、北隅24号住のものと思われる2本の周溝間に残存しており、レベル、溝中の柱穴などから本址のものと考えることができる。壁直下のものは、東隅を除いて全周すると思われる。その幅は約10~20cm、深さは2~5cmであった。床面はロームで非常に堅く、壁際から中央へ若干傾斜しており、その高低差は、8~15cmを測った。

遺物 出土量は土器、石器とも多く、特に石器の多出は注目すべき点である。土器はごく少量のⅡ群(図91-17・18・19)を除くとその大半がⅠ群である。薄手な東海系であるⅠ群2類A(図89-32)・B(14-18・33・35)・C(19-23, 図69-15)に対し、3類では垂紐貼付文のない無文のC(図89-1~9, 25-30)が目立ち、D(10-13)も少なくない。しかし、爪形文のE(24)や垂紐貼付文のあるA、それに細線の加わるBが少ない点、3類の細分に課題を残している。一方、4類中の繊維を含むA・B類の典型例(図90-11)は少なく、含繊維は5類Bの一群(図69-13・14, 91-1~6)の方が多く、縄文のみの土器(図69-11・12, 90-5~10, 12・13・17・20)も4類(関山式)というより5類(黒浜式)に近いものが多い。なお、4類でも繊維を含め櫛状刺突文あるD(14-16)も少ない。他の斜縄文や羽状縄文ある縄文施文の土器は、4・5類C(図69-12, 90-18・19・21~23)と金雲母を含み、裏面に指痕のあるG(図91-8~16)に区分されるが、図示しない土器を含めて共に出土量はやや多い。良好な資料があるが、単純でなく、二型式以上にわたって出土している。

石器は、その出土量が本遺跡内では最大であり、総数161点を計える。(図219~224-1・2, 268-5・27)。石鏃46、石槍2、石匙10、スクレイパー19、小型有扶頭磨石器4、石錐9、使用痕ある石核・剥片・原石57、石核類3、小形磨製石斧2、乳棒状石斧2、凹石3のほか、抉入刺突具、軽石、装身具、打製石斧各1がある。器種も一様にそろっており、石錘、石棒、砥石といった特殊なものを除くと、出土しなかったものは、複数抉入石器、定角石斧、横刃、磨石、ハンマー類のみである。ここでは、単純に現われた数の上から一、二の比較を試みた。遺跡内総出土量に対する、各石器の割合と、本址内からのそれでは、遺跡内の石鏃が35.5%と高い比率に対し、本址内からは、使用痕のあるものが35.4%と高く、次いで石鏃の28.6%であった。また、各器種の割合の差をみると、本址内からのもので特に高いパーセンテージを示すものは、石核類、次いで、有扶頭磨石器である。また、逆に低い割合のものは、凹石、次いで、打製石斧であった。各器種別の総数に対する本址からの数値をみると、20%以上のものが3種ある。石核類、有扶頭磨石器、使用痕のあるものである。逆に非常に少なく、7%以下のものは、打製石斧、凹石、装身品、抉入刺突具、乳棒状石斧、小形磨製石斧、石匙、抉入刺突具、石槍等であった。以上見てみると、定形化されたものが、不定形のものに比して少ない。この数値は本址の性格を決定するものとして今後問題にしないでならないものであろう。

本址は、前に述べた如く建て直し、拡張等が数回にわたってあったものと思われる住居址である。土器にも古いものから若干新しいものまであり、現在の土器分類では本址の時期を絞って把えることができない。I群の3～5（中越式～黒浜式）類の数時期にわたって営まれた住居址と見たい。（高桑 俊雄）

⑨ 17号住居址（図11・92・93・224・268）

遺構 用地内調査区の北方に検出されたプランなど不明確な住居址である。北側には縄文前期の1・10・42号住が接し、南側には同じ**52号住・64号住**を切っているが北東側にある土塚群とのかねあいもあってプランはつかめない。住居址の南側の一部に壁高が約15cmを測るローム層への掘り込みが見られるのみで、その他の部分は攪乱や重複のため確認できなかった。床面は、中央部に堅く踏み固められた良好な部分もあるが、全体的に軟弱である。床面全体に小さな穴がいくつも存在するが、それが何であるかは不明である。そのうち柱穴としては、 P_1 ・ P_4 ・ P_9 等が考えられるが、確定はできない。住居址のほぼ中心部と思われる位置に多量の焼土が認められる。その南東部および北方の2箇所にも焼土が存在する。地床炉であろう。推定プランは円形となるらしい。

遺物 土器と石器がある。床面出土の土器はなく、大半が覆土中であるが、II群1類が中心となる。縄文を地文とし、竹管工具による肋骨文等を施すII群1類B・C（図92-16～33, 93-4・5～9）の良好な資料が多く、それに伴うA（図93-3・6～8）も目立っている。なお図92-1～15のうち8のみは微量の繊維を含みI群5類Bに比定できるが、他は無繊維で、II群1類の古い部分とすべきか、あるいはI群5類Dまたは6・13～15などをII群2類Cとすべきかやや問題点をのこす。なお11・12は同一個体で胎土・焼成など他と異なり、II群4類Bに属すかも知れない。この類の搬入品としては、内面に朱彩してある4類A（図93-10）がある。

石器 石鏃10（図224-3～12）、石匙3（13～15）、石錐3（16～18）、小形磨製石斧2（図268-6）、凹石2、磨石、がある。石鏃が10個と比較的多く出土しており形態的にはバラエティーに富む。大半は完成品である。遺構は不明確であるが、出土土器よりII群1類（諸磯A式）期に属する住居址と考えたい。（岩崎 孝治）

⑩ 19号住居址（図13・93・224・266・273）

遺構 本址は用地にかかる遺跡の中央から北隅へかけてのほぼ中間に位置する。耕作土、黒褐色土、ロームと堆積した土層のロームへの掘り込んだ堅穴住居址である。全体に地表から浅い所に作られているため覆土の大半は耕作時のものと思われる攪乱を受けており、特に北東側はこの攪乱のため、壁・床面とも確認できなかった。このような状況のため、遺物は床面付近に少量遺存していたにすぎない。本址東側は後に作られた、**堅穴2**によって切られている。北東部で切り合い関係にある**土塚98**との関係は、前述した攪乱のため、また、北西壁と切り合う**土塚14**との関係も共につかめなかった。炉は、住居址ほぼ中央に作られた径125cm、焼土径65cmの浅い地床炉である。柱穴は P_1 ～ P_4 の4本ともほぼ規則的に配列しており、その平面形はほぼ円形のものと同楕円形のものがあり、径は35cm～45cm、深さは41cm～54cmのしっかりしたものである。炉の一部を切った形で P_9 があるが本址との関係はわからなかった。壁は南から西にかけて比較的良好的な状態で残っており、残存高は19cm～25cmである。壁直下には、幅10cm内外、深さ10cm弱の周溝が廻っており、床面は攪乱を受けた北東側約半分を除けば、堅くタタキしめられたロームで平坦である。

遺物 土器は余り多くない。I群1類D（図93-25・26）のうち26は裏に浅い条痕がある。2類A（20・21）・B（17～19）、3類C（13～16・22）、4類C（28）・D（23・24・27）、5類C（31）などのI群のほか、混入と

考えられるⅡ群1類B(29)・B(30)が数片ある。石器は打製石斧(図266-7)、側面全周に敲打痕ある磨石(図273-14)、石匙(図224-19)、スクレイパー(20)各1点の4点のみである。

出土土器からみてⅠ群2(前期前葉)～4類(関山式)土器の時期と考えてよいであろう。(松永 満夫)

⑪ 20号住居址(図14・94・224・266, 図版33・35・36)

遺跡北端、用地内東隅に位置し、ほぼ北向傾斜面に立地する。遺跡内では最も低い部分に相当し、標高812m前後である。ローム層上面で検出され、ローム層中につくられている。本址は**23号住・方形配列土塚群Ⅰ**と隣接もしくは切り合う。23号住は本址南側、標高の高い側に位置し、床面も10cm程度高くなっている。本址とは切り合うか重なり合う可能性が強いが、斜面のためその関係はつかめなかった。すなわち、23号住を本址が切るのか、本址埋設後その上に23号住がつくられるのか、確定できてない。次に方形配列土塚群Ⅰは、その一部を構成する**土塚22**及び**土塚27**が本址及び23号住を切り込んでつくられており、本址より新しいものとみなされる。また、土塚27東隣りに接する未命名の土塚(もしくはピット)は、規模・形状が一致し、位置関係からみても方形配列土塚群Ⅰに属する可能性が強い。本址北側に在る**9号住**は古墳時代Ⅱ期に属し、本址の北半、低い側を切っている。こうした諸遺構との関係から、本址はほぼ半分が残されたにすぎない。

遺構 円形または楕円形プランが推定される竪穴住居址である。壁は垂直に近く、最も残りの良い南東隅で壁高10cm程である。壁が確認できる範囲には、総て壁直下に周溝が残る。幅20cm、深さ5cm程度の規模である。床は平坦で堅く固められている。壁・床ともローム層に含まれる礫が突出する部分がある。柱穴はP₁・P₂がある。また、9号住内の南壁にある深さ9cm及び4cmの2個のピットは、本址床面から測れば、それぞれ27cm・25cm程で、P₁・P₂と同規模となろう。9号住築造時に削平された残痕と考えれば、不整形に配置された4本柱からなる上屋構造が推定される。炉は住居址中央やや東寄りに残された焼土が該当しよう。床を掘りくぼめてないが、径30cm程の地床炉であろう。屋外施設は検出されず、特記すべき出土状態を示す遺物もない。

遺物 土器・石器があるが余り多くない。土器はⅠ群1類(図94-22・25)、4・5類A(21)の数片のみが繊維を含み、大半は無繊維で、Ⅰ群の2類B(20)、3類C(19)や4類D、4・5類C以外はすべてⅡ群である。Ⅱ群1類A(23・24)、B～D(1~14)が最も多く、主体的土器といえる。2類は図示したD(15~17)と3類(諸磯C式)(18)、搬入品である赤色塗彩された4類B(27)など数片である。なお、混入品としてⅢ群2類(藤内式)、5類(曾利V式)がわずかにある。

石器には、石鏃4(図224-21~24)、石錐2(25・26)、打製石斧(図266-15)がある。

出土遺物からみて、Ⅱ群1類(諸磯A式)の時期の住居址であろう。

(百瀬 長秀)

⑫ 21号住居址(図12・70・95・225・226・271・273, 図版35)

遺構 遺跡の北よりに存在する住居址である。北側を**18号住・138号住**に切られている。壁はローム層を直に掘り込んでおり、西壁が33cm、東壁は傾斜地の下方にあたるため耕作で殆んど失われ壁高0cmであり、黒土の壁であったかと思われる。残存部では壁下に周溝が3~10cmの深さでめぐり、全周していたものらしい。床面は堅く良好である。西壁下には床面近くにも落ち込んだ石がみられ、中央部に**土塚45**があり、当初、屋内施設かと考えたが、Ⅲ群3類(曾利式)の遺物が出土するに及んで、本址とは別時期の遺構であることが判明した。炉址は残存する本址床面では確認できなかった。柱穴の規模等はP₁、P₂、P₃が

北西壁側に並び、 P_3 ・ P_4 ・ P_5 が南東壁側にならぶ。 P_4 は長方形を呈し柱穴とはしがたい。 P_5 は貼床下から検出されたものである。北隅は18・138号住に切られているため不明であるが、 P_5 などが位置的にみて本址の柱穴と考えられる。主柱穴は P_1 ・ P_3 ・ P_5 ・ P_9 であろう。

遺物 覆土中から土器片と黒曜石のコアを含めてフレイクが多数出土している。Ⅱ群2類の土器が主体となる。B～D(図95-4・9~11・13~19)のうち、4は口縁下に斜刻目を付す隆帯を持ち、14~16は無文の口縁部片でありEに含められるものかどうか、また、12は1類の可能性もあるものである。図70-1も1類Eとの判別に苦しむものである。Ⅱ群では1類B～D(図95-1~3・5~8)がある。土製品では土製円板1が出土している。現物の所在不明のため明記できないのが残念であるが、他時期の混入遺物の可能性が強いと思われる。

石器では石鏃15(図225-1~10・13・15~18)、石槍3(11・12・14)、縦型石匙2、同横型1(19~21)、スクレイパー5(22~26)、有扶頭磨石器(27)、使用痕のあるもの9(28~33, 図226-1~3)と他に石核類1点があるが非常に小さく疑問もある。乳棒状石斧2、凹石3(内床面出土1)、横刃型石斧(図271-2)、床面からは砥石?(図273-12)、敲打器Ⅱ類1点が出土している。

本址は主体となるⅡ群1類(諸磯A式)、2類(諸磯B式)にかけての時期と考えられる。(伴 信夫)

⑬ 22号住居址(図6・226, 図版33)

遺構 遺跡用地内北隅に検出された住居址である。16号住床面検出中にそれを切る周溝が検出され、それによってかろうじてその存在が判明した。東側約90程が用地外のため、調査可能範囲は狭く、その全容は把むことができなかった。南西隅は16号住、北東隅は24号住と切り合っているが、本址中には両住居址のものと思われる貼床も見られなかったことから、16・24号住が本址に先行するものであろうと判断した。また、本址上には古墳時代の7号住が貼床を施して構築されていた。柱穴は、はっきりと確認できないが、西側周溝中に検出された P_7 ・ P_{15} の2本と、南西隅床面に検出された1本が本址のものと推定される。壁は掘込面からとらえることができず、ただ、南側は外側の周溝、西側はほぼ全周すると思われる周溝をさかいにして、16号住との床面比高差が1~3cm、24号住とは2~4cmと、若干のレベル差を測ることができるのみであり、このことから恐らく周溝際に壁があったものであろうと推定する。また、周溝は、上に述べたように南側は二重になっており、内側の1本は、全周するものと思う。床面はルームで堅く平坦である。また、本址床面には、24号住のものと思われる周溝が残っていた。

遺物 わずかな調査範囲のためか、遺物はほとんど出土せず、図示できるものは、ただ石匙1点(図226-4)があるのみである。この石匙は、使用によりできたと考えられる短く浅い線状痕を有している。なお、本址の所属時期については、土器の出土がないため断定できないが、先行する24号住がⅡ群1類期であり、この周囲に縄文前期の遺構のみが集中しており、同じ程度のレベルに床面があることや周囲の周溝などもとくに変わっていないので、若干角をもった周溝やプランなどから考えて、Ⅱ群1・2類(諸磯A式・同B式)の土器を伴出する住居址と考えたい。(高桑 俊雄)

⑭ 23号住居址(図14・95・226, 図版36)

遺跡の北端、用地内東北隅に位置する。ほぼ北向き傾斜面に立地し、遺跡内では最も標高が低い。ルーム層及び礫混じりのルーム層上面で検出され、同層を掘り込んでつくられる。本址と切り合う遺構との関係は20号住の項に記した通りで、20号住との前後関係は決定できず、方形配列土坑群Ⅰには切られている。

遺構 径3.5m×2.5m程の小規模な竪穴住居址で、整楕円形プランをもつ。壁はほぼ垂直で、西壁で壁高20cmを測り、北壁～西壁直下に周溝がめぐり、幅10cm未満、深さ5cm程度である。周溝内やその周辺に、径10cm未満の小ピットが、5～20cmの不等間隔で並ぶ。壁の補強もしくは土留用板材を押さえる杭の痕かと思われるが、だとすれば周溝より内側に在るべきだろうし、壁のしっかりした側にのみ残されるのは不合理である。むしろ斜面上方の屋外から屋内に崩落する土砂の防堤を想定した方が合理的だが、推測の域を出ない。床は堅く固められて平坦である。柱穴はP₁・P₂・P₄が考えられる。北東隅にもう1個存在すれば最も合理的であるが現存しない。P₃を柱穴と考えれば、炉址と重なり合って不合理である。決定はできないが、恐らく4本柱の住居址であったろう。そのほか屋内に小ピットが残されるがいずれも浅いものである。炉址は中央北壁より検出された地床炉で、浅いピット内に焼土が残されていた。屋外施設は検出できず、特記すべき出土状況を示す遺物はなかった。

遺物 土器は総てⅡ群に属する。細分すれば1類A（図95-26）・B（20・21・23・27）・C（24）・D（22）、2類D（28）、4類B（29）である。石器には、石鏃4（図226-5～8）、石匙2（9・10）、スクレイパー2（11・12）、使用痕のある剝片（13）がある。

出土遺物から判断してⅡ群1類（諸磯A式）の時期に属する住居址であろう。（百瀬 長秀）

⑮ 24号住居址（図6・96・226，図版33）

遺構 遺跡用地内北隅、16号住床面検出中に、床面を切っている周溝を確認、かろうじてその存在を知り得た遺構である。大半以上が用地外へ出ているため、プランの推定はむずかしい。断続的な周溝と、若干の床面のみで切り合い関係を見るのは困難であったが、凡そ次のように確認できた。まず、本址は**16号住**の一部を切っており、**22号住**及び**28号住**に切られている。また、古墳時代の**13号住**が切り、**7号住**が本址上に構築されていた。はっきりと断定できないが、周溝内から検出された1本の柱穴は恐らく本址のものとして推定される。周溝は、北西から22号住の周溝に切れ、22号住の床面まで通るものがある。また、その外側、南西に約70cm程離れてほぼ平行に走る1本があるが、本址のものかどうかははっきりしない。壁は南西にあたる16号住側には褐色土中であつたものであろうが確認できず、本址の範囲も、周溝際で終るのか、或は若干外側までであるのか、16号住との床面比高差が0～5cmと一定でないためその判断はつかない。ただ、床面は全体的にロームで堅く良好な状態であつた。

遺物 出土量は少ない。図示できるものはⅡ群1類B（図96-1～4）と時期不明の斜縄文ある1片（5）と1個のスクレイパー（図226-4）のみである。

周辺住居址との関係からみてⅡ群1類（諸磯A式）土器に属する住居址であろう。（高桑 俊雄）

⑯ 25号住居址（図10・96・226）

遺構 用地内にかかる遺跡の中央やや北東寄りの用地境で、大半が用地外にかかって発見された竪穴住居址である。南側が**集列石**と仮称した遺構のため削り取られている。全体に耕作と思われる攪乱を受けているため遺存状態は悪い。炉址は用地外にかかるものと考えられる。ピットは壁ぞいに三個発見されているが、P₁・P₂が柱穴であろう。壁は西側では確認できたが、西北寄りでは残っていない。残存する壁高は0～19cmである。壁ぞいに幅約13cm～18cm、深さ13cm～27cmの周溝が廻る。前述の通り攪乱を受けているため床面の遺存状態は悪く全面で確認できたわけではない。残存する部分でも状態は良くない。円形に近いプランを想定したい。

遺物 出土量は土器・石器とも僅かである。土器はⅡ群のみで2類A(図96-8)・B(6)・C(7・19)・D(10・11)に分けられる。石器も少なく、石鏃4(図226-15~18)、スクレイパー(19)、凹石が出土しているのみである。

出土土器からⅡ群2類(諸磯B式)期の住居址であろう。

(松永 満夫)

⑰ 27号住居址(図10・96・227, 図版35)

遺跡最北端のセンターライン沿い東側に位置する。北向き傾斜面に立地し、調査範囲内では最も標高が低い。ローム層最上面で検出され、ローム層を掘り込んでいる。北西側の大半を15号住に切られて失っている。西側には古墳時代Ⅱ期に属する14号住が隣接する。本址と接する付近では両者共にその輪郭が不明瞭になってしまうが、本址覆土上に重なる可能性はある。

遺構 円形もしくは楕円形プランと推測される竪穴住居址である。唯一残存する南壁はほぼ垂直で、壁高30cmを測る。周溝は2本残され、壁直下のものは幅5cm強、深さ1cm程度と小さく、壁より内側のものは幅10cm、深さ5~10cm程で大きめである。また、後者は西壁にも及んでいるらしい。前者は住居の拡張に伴ってつくられたものと解せられるが、だとすれば、本址は円形に近いプランを拡張し、楕円形プランをもつに至ったと考えられる。床はローム中で平坦で強く固められている。柱穴と考えられるのはP₁及び15号住のP₂・P₄・P₅である。このうちP₂~P₅は本址床面から掘り込まれたと解すべきで、P₂は本址床面からの深さは30cm程度となる。1回の拡張が考えられれば、当初は、P₂・P₄・P₅に加えて、土垣64・65付近にもう1個存在したことが考えられ、拡張に伴ってP₄が棄てられてP₁に替えられた、とすれば、総て方形配置で最も合理的であろう。他の屋内・屋外施設は検出できず、特記すべき出土状態の遺物はない。

遺物 土器はⅠ群1類C(図96-21・22)、2類B(17・18)、3類C(19・20)、4類もしくは5類C(23)のほか、5類A・Bがある。この他図示しないが、Ⅱ群には、1類B、2類B・D、Ⅲ群は、3類(加曾利E式)、Ⅳ群には、3類と4類があるが、少ない。石器は、石鏃3(図227-8~10)、石匙(11)、凹石2のみである。土器・石器とも出土量は少ない。

出土遺物からは時期が特定できないが、切合からすれば、Ⅰ群3類(中越式)の時期もしくはより古い時期の住居址であろう。

(百瀬 長秀)

⑱ 28号住居址(図9・70・227, 図版33)

遺構 千鹿頭社遺跡との境界である市道のすぐ脇、遺跡地用地内北東隅に住居址のほんの一部が用地にかかる状態で検出された。遺跡内では最も標高の低いところであり、市道の北側に存在する千鹿頭社遺跡の同時期の住居址と、本址の南に切り合って存在する6・8・16・22・24各号住を含めた、一群の住居址群の1つとしてとらえねばならない。本址は、この一群の住居址のうち、16号住を切る24号住を切っているが、24号住を切っている22号住との関係は、用地外であるため不明であるが、全形からすれば切っているよう。いずれにせよ、最も新しい部類の住居址ではある。また、付近には、同じく千鹿頭社遺跡と連なる古墳時代の住居址の一群があり、そのうちの13号住が本址西隅を切る。遺構はその西隅がわずかに検出されたのみであり、隅丸方形の竪穴住居址と推定される。24号住の床面を10cm掘っており、壁下に1つのピットを伴う周溝を確認したのみで、他の床面施設は用地外にある。

遺物 出土量は少ない。土器は西隅床面よりⅡ群1類C(図70-2)が底部を欠くがほぼ完形で出土した他は、数点の破片のみである。石器は1点のスクレイパー(図227-12)が出土している。

切り合い関係と遺物より、24号住と同時期、Ⅱ群1類（諸磯A式）期の住居址であろう。（小池 孝）

⑱ 37号住居址（図19・70・97・227・228・266・268・272・274・275・277・282，図版37）

遺跡地用地内の東縁、中央やや南寄り、北東への傾斜地で検出された。すぐ南東に**土坑83・84**、西に切りあう奈良・平安時代の**35号住・36号住**があり、そのうち36号住が本址西壁を切りながら覆土上層に貼り床している。

遺構 円形の堅穴住居址であり、堅くたたいた良好な床面をもつ。北東の傾斜の下にあたる壁は検出できなかった。また、南東に壁上から床面へなだらかな傾斜地があり、そこを除く壁下に周溝がほぼ全周する。床面中央やや西寄りに床面をわずかに掘り窪めた径20cmの地床炉があるが、付近に数個の石が散乱しており、これ等の石は炉と関係あるかもしれない。柱穴はP₃・P₄を含む4本柱であったと推定されるが、他のピットの深さの観察が残っていないため、断定できない。

遺物 出土量が多い。Ⅰ群3類を主体とし、良好な資料がある。垂紐貼付文のみのA（図70-4・5，97-8）や無文のC（図70-6・7，97-1~6・9）が大半で、格子目状の沈線文の加わるB（図70-3，97-7）は少ない。このうち図70-3~5は床面出土である。なお、3は2類的な胎土・器厚をもっており、両者の関係を知る上で重要な役割を果す。こうした3類的な無文系土器に対し、縄文施文の土器は少なく、4・5類Cの無繊維の斜縄文（図70-9，97-10）がわずかに検出されている。また、図70-8は繊維を含む尖底で1類Eとするが、その帰属には問題がある。

石器も多い。石鏃6（図227-13~18）、石匙2（19・20）、スクレイパー13（21~26，228-1~7）、石錐2（15・16）、使用痕あるもの7（8~14）、玦状耳飾（17）、その他装身具（18）、打製石斧2（図266-14）、小形磨製石斧3（図268-24）、乳棒状石斧4、凹石18（図274-8，275-7・9，277-2）、敲打器4（図272-14）と合計61点でなり、種類も量も圧倒的に多い。この中では特に凹石は16点も出土しており、1遺構からの出土量としては本遺跡中最多である。また、石鏃6点に対しスクレイパー13点と全体の傾向と比較してスクレイパーの割合が高く、しかもその中に使用痕の観察されるもの（特に図227-26，図228-3）が多い点は本址の特徴として上げられるであろう。なお、図282-5は、土製門板としてあるが、側面に整形痕を確認できなかったことから疑問が残る。発掘時の出土状況の所見によれば、遺物は、住居址の炉付近に集中したが、床面よりも覆土中に集中していたとある。出土土器からみて縄文時代前期初頭Ⅰ群3類（中越式）土器に属する住居址であろう。（小池 孝）

⑳ 42号住居址（図3，図版33）

遺跡の北端付近、センターライン沿いに位置し、北向き傾斜面に立地する。ローム層上面で検出され、ローム層及礫混じりのローム層を掘り込んでいる。周囲の遺構との切り合いは、1・10号住の項で記した通りで、**1号住**を切り、**11号住**の埋土上につくられ、本址廃絶後、**10号住**及び**土坑5・20**に切られる。

遺構 不整形なもしくは五角形プランの堅穴住居址である。壁はほぼ垂直で、壁高は南壁で30cm、他で10cmを測る。周溝は幅10cm未満、深さ1~3cmと小さいが、住居址東南隅及び南壁~西壁にかけて残されている。床は残存部分が少なく記すべき内容がない。床面のピットは10号住との関係で本址に属するものを特定できない。柱穴は10号住の項を参照されたいが、P₂・P₃・P₄・P₅を結んだ方形配置の可能性はある。その他の施設は屋内・屋外とも確認できず、遺物も出土していない。

さて、本址の形状について、本来方形プランを基本として造られたものが、増・改築の結果、現形状を

呈するに至ったという可能性を考えてみる必要がある。張り出している西壁部分は拡張の結果だとみれば、西～南壁下の周溝はその拡張の結果つくられたものとみなさざるを得ない。従って西・南側の二方向を同時拡張したことになり少々不自然であるが、東南壁ぎわにわずかに残された周溝を拡張前の住居址のものとみなせばつじつまは合う。一方、10号住南壁中央の突出部分を本址に伴うピットの残痕と考えれば周溝は分断され、それぞれ別の時期に造られたものと解することができるようになる。西南壁～西壁下の周溝を拡張後のもの、東南壁下の周溝を拡張前のものとすれば、拡張の説明としてはより自然である。しかし、拡張前の住居址のプランが不整形となって不自然さは残る。いずれにしてもすっきりはしないが何らかの形での拡張を考えるべきだろう。

遺物 重複した住居址のため、残存部分が少なく、遺物の検出ができなかった。

切合関係から判断して、Ⅱ群1類（諸磯A式）の時期に属する可能性が強い。（百瀬 長秀）

②1 46号住居址（図24・70・78・102・103・230・231・271・275・277・282，図版37）

遺構 遺跡地の用地内センターラインの西側、中央やや北寄りの北への傾斜地で検出された。南北に長軸をもつ楕円形の堅穴住居址であり、その北壁を土塚100・108に、南壁を土塚101と時期不詳の堅穴5に切られている。なお、土塚101から本址と同時期の土器片が出土している。壁高は地形に従い南から西は30cmを測るが、北へ向かって低くなり、一部は確認できなかった。床面の西半は堅い叩きで良好だが、東半は攪乱されて所々残るのみであり、周溝は無い。楕円プランの両端に数個のピットがそれぞれ集中しており、P₈・P₁₁・P₁₄および堅穴5の底のそれより9cm深い部分の4個が支柱穴と推定される。またP₂・P₄・P₇・P₁₀の4個は浅く補助柱穴的なものとも考えられる。床面はほぼ中央に径100cmの大形で浅い地床炉がある。壁外施設は無いが先述した土塚101は本址と関連する可能性がある。

遺物 出土量が多い。土器（図70-10，図78-1，図102，図103）はⅡ群2類が大部分を占め、西日本系のⅡ群4類がわずかに入りこむ。床面出土品（図70-10，図78-1，図102-1～19）も多い。器形の復元できる前二者は、いずれもⅡ群4類Aであり、強く外へ張り出す底縁と、半截竹管の押し引き文様に共通性をもつ。図70-10は、口縁の内湾する薄手の浅鉢で、表面地の部分と内面内湾部に施朱がみられる。図78-1は非常に小形で二条の押し引の間を鎖状の文様で埋めるが、口縁部が無い。前者と同様の形態であろうか。他は、Ⅱ群4類かと思われる図102-17を除き、いずれもⅡ群2類である。覆土の出土土器（図102-20-27，図103）も多い。Ⅱ群1類（図102-20・21）・4類（図103-19～23）もあるが、他はすべてⅡ群2類である。

石器（図230-9～33，図231-1～5，図271-4，図275-1，図277-7）のうち床面からは石鏃5、石錐、乳棒状磨石斧、凹石が出土している。16点出土した石鏃のうち製作途中に片脚、もしくは先端の欠損したものが3点（図230-16・23・24）あり、しかも内2点が床面出土であること、複数挟入石器（33）が再加工品であること、発掘時の所見に「床面には黒曜石の細粒が全面に混入している。」とあること等、石器製作址の性格がそこに感じられなくもないが、その後の処理に於て、本址の性格を決める剥片、碎片等の分析が不可能となってしまい、ここでは、その可能性を指摘するにとどめたい。なお、複数挟入石器（33）は、そこに残された使用痕から、刃部に非常に顕著な線状痕を持つ大形のスクレイパーに、少くも3つは対をなす挟入を施したもので、その後の使用の痕跡は確認できない。6点出土した石匙のうち、図230-27は、関西地方に一般的な形態で、鳥浜貝塚出土のものと酷似することと、本址出土の西日本系のⅡ群4類土器と同様、搬入品である可能性がある。なお、石質は硅質粘板岩との鑑定を得ている。この他、土器片錘ⅡB類（図282-11）があるが、側面の加工痕を確認できず、疑問である。

本址は、その出土土器より縄文時代前期Ⅱ群2類（諸磯B式）土器期の住居址である。（小池 孝）

② 47号住居址（図19・70・104～106・231）

遺構 本址は発掘区の西北隅、用地外に住居址の一部を残して検出された。131号住が東南に隣接している。礫がまじる土層中のため明確な掘り込みが確認できず、周壁は検出できなかった。遺物の集中が多く、また、炉址が確認されたこともあわせ、住居址としてとらえた。従ってプランは遺物の散布状態、炉の位置等から判定したものであり、明確なプランではない。炉址は住居址の中央に直径20cm、深さ4cmの浅い凹みをもち、わずかな焼土が認められ、中から小石が2個検出された。東南壁にあたる位置に大石があるが、多分壁の一部として利用されていたと思われる。この大石は隣接する131号住の壁にも利用されている。柱穴・周溝ともに確認できなかった。床面は礫を多量に露出させており良好な状態とはいえない。炉址北の床面に30～10cm程の石が5個集中していた。

遺物 土器はⅡ群2類が大半を占める。縄文加飾のみのA（図106-1～8, 104-4）、爪形文等のB（2・5～23）、平行沈線文のC（図105-1～10）、浮線文のD（14～18）、無文のD（図106-9～15）などがある。胴部以下が縄文となる浅鉢（図70-14・15, 106-16）もある。該期に対応する西日本的なⅡ群4類（図106-17～23）もわずかに検出されている。なお、少量存在するⅡ群1類的なもの（図104-1・5・6・9）も図示した。

石器は、石鏃9（図231-6～14）、スクレイパー（15）、複数抉入石器（16）石錐（19）使用痕ある剥片2（17・18）、小形磨製石斧2、乳棒状石斧、凹石と小形石器の出土量が多い。他に装飾品で、玦状耳飾と形態不明のもの（図231-20・21）の2点が出土している。

出土土器から、Ⅱ群2類（諸磯B式）土器に属する住居址と考えている。（青沼 博之）

③ 52号住居址（図27・107・108・232・277・278）

遺構 発掘区北寄中央にある。17号住・61号住・64号住と接し、あるいは切り合っているが、北への傾斜面であることや、17号住との間に石垣が築かれたりしたために、遺構からその先後を明らかにすることはできなかった。住居址南半を残すのみであり、南壁で現高35cmと残りが良い。周溝は幅20cm、深さ5～10cmで南と西側にめぐるが、東側にはない。床面残存部は平坦で良好であるが、柱穴は検出されていない。中央部に土壇102が掘り込まれており、その周辺にわずかに認められる焼土面が本址の炉の位置を示すものであろう。地床炉である。プランは一辺3.6m程度の隅丸方形であらう。

遺物 土器はすべて破片である。Ⅰ群1類～5類までであるが、繊維を多量に含み条痕を施すもの（図107-12～16）、同じく縄文、燃糸文のもの（26～30）、斜縄文あるいは羽状縄文（図108-1～3・12）、同じく竹管文（14・15）など、繊維土器が主である。繊維を含まないものの中には、薄手で幅広の隆帯に刻を持つもの（図107-17～19）、同じく細線文（20～24）、指頭圧痕の著しい底部（25）、厚手で斜縄文を主とするもの（図108-4～11・13）などがある。これらの土器は、条痕文系のものが古い様相とされるほかは、関東・東海各地方における前期前半の各型式に比定しうるものである。やや新しい一群（Ⅰ群5類）は他遺構よりの混入であらう。13もまたⅡ群土器であらう。図示しなかったものは、繊維土器4割、無繊維縄文土器2割、Ⅰ群3類Cが3割、同Dが1割程度ある。Ⅰ群3類土器出土遺構のうちでは繊維土器が多い方である。

石器は石鏃3（図232-1～3）、縦型石匙（4）、スクレイパー3（5～7）、使用痕ある剥片類6（7～13）、乳棒状磨製石斧、小型有抉頭磨石器、凹石3（図277-11、278-10）がある。

出土土器のうち、I群3類が少ない点を考慮してI群1類や2類に近い、本遺跡でも最も古い時期の住居址とも考えられる。

(土屋 積)

②④ 56号住居址 (図24・70・71・108・109・232・269・275, 図版39)

遺構 本址は発掘区の西北用地境より10m程内側へ入った所に位置している。58・127号住と隣接し、上層から数個の平安時代の土壇が検出されたのみで他の遺構とは重複しておらず、単独で検出された堅穴住居址である。やや隅丸方形を呈し、一辺3m~3.5mの規模で、本遺跡から発見された縄文時代前期にかかる住居址の中では小さい方である。壁高は南西~南東にかけて高く、北東へ行くに従い低くなるが全周し、ほぼ垂直に近い状態で立ち上る。周溝はない。床面はほぼ平坦で、6個の小石が散在する。ピットは4箇所から検出されたが、住居址中央やや南寄りのP₂と、北西壁隅のP₁が支柱穴と考えられるが、不規則な位置であり、P₂のみで円錐状の上屋も考えられる。炉址焼土は検出できなかった。

遺物 土器は器形のわかる破片が多い。縄文のみの深鉢で、繊維を含まず、裏面に指頭痕やヘラ状工具によるナテの痕が顕著な一群(図70-17・18, 71-1~3)はI群4・5類Gに属するが、最近問題になった土器である。一方、繊維を含む典型的なI群5類A(図70-16)・B(図71-4~7)が伴出している。その他、少量ずつであるが、I群1類A(図70-22~24, 71-1・2)、2類A(図18~21)・B(17)、3類A(16)、4・5類A(図71-3~8)やC(9~19)などと共にII群2類B(21)も混入している。

土器に比較すると石器は非常に少なく、石鏃4(図232-14~17)、使用痕ある剥片(18)、磨製石斧(図269-C-2)、凹石4(図275-2)の計10点のみである。

器形のわかる大形破片や出土量からみてI群5類土器の住居址と考えられる。(青沼 博之)

②⑤ 58号住居址 (図30・109・232)

遺構 発掘区の北境から道路敷内の南に広がる住居址群中の一軒である。北に46号・90号住、南に66号住、西に56号住が土壇群をはさんで隣接するが他住居址との切合はない。本址も西南壁の一部が確認されたのみで、全容は知り得ないが、直径5~6m程の円~楕円形プランをもっていたものと推測できる。床面は北東の部分がやや低くなるがほぼ平坦で、自然堆積した大きな平石が住居址中央やや東に突き出し、70×30cmの石がさらに東にすわっている。住居址中央と思われる箇所に焼土がわずかに認められたが、この場所が地床炉として使用されたのであろう、周壁は南壁の一部が残るのみであるが、壁高も高い所で20~10cmと低い。確認された周壁下のみ深さ5cm、幅30~40cmと幅広い周溝が認められる。検出されたピットの数は多い。土壇群と重複しているのですべてを本址に属するものとは言い難い。支柱穴は南西壁に接したP₂・P₄かP₃・P₅と、この二本の直角延長線上に並ぶP₁₁~P₁₄をあてることができる。

遺物 縄文で加飾される土器片のみが出土している(図109-22~27)。裏面に指圧痕が顕著に見られ、胎土中には雲母を多量に含み焼成がよい。I群4・5類G(22~24)と胎土中に雲母を含むが、焼成のややもろいII群1・2類A(25~29)に属するらしい二種のみである。石器は、石鏃6(図232-19~24)、石錐(25)、球状耳飾、凹石2のみの出土で非常に少ない。

出土土器が少なく時期決定はむづかしく、I群4・5類、からII群1・2類にわたる二~三型式とせざるを得ない。(青沼 博之)

②⑥ 59号住居址 (図27・109・110・269)

遺構 発掘区北寄中央にある。61号住に切られるが、北への傾斜面のため西半が失われており、切り合い部分は明確ではない。南西壁の一部を残すのみであるが、現壁高35cm前後で外傾する。西側壁下の浅い凹部は全周しない周溝の一部であると考えられる。壁近く位置する3箇所のピットを柱穴とすれば、円形プランの周囲に5~6本の支柱穴を配置するものであったろう。床は平坦であるが北へやや傾斜する。炉は残存しない。

遺物 土器はすべて破片である。図示したものはI群3類A(図109-30~32)・B(図110-1~3)が主体であり、II群と考えられる縄文のみもつもの(9~14)、その他I群1類C(5)・D(6)や4類B(7)・D(8)などの前期前半やII群1類B(15)もあるが少ない。II群土器はおそらく64号住に伴うものであろうから、前期前半でも古い時期が考えられよう。図示しなかったものは、I群3類C・F、I群4~5類Aがそれぞれ同量ある。I群3類中の装飾あるものや繊維土器で1類に含まれるものはほとんどない。石器は図示してないが石鏃4、抉入刺突具、スクレイパー3、石錐、乳棒状磨製石斧(図269-2)、凹石がある。

出土土器から一群3類(中越式)期を中心とした住居址であろう。

(土屋 積)

②7 61号住居址(図27・110・232・271)

遺構 発掘区北寄中央にある。59号住を切り、52号住・64号住とも切り合い関係にあると思われるが、傾斜のために本址の北半が失われており不明確である。壁は北側を除き残存するが、現高10~20cmで外傾する。壁に接して幅10~15cm、深さ5cm以下の浅い周溝が継続的にめぐる。柱穴と考えられるピットはない。床は平坦であるが炉は残存しない。床面中央の人頭大礫5個があるいは炉を示すものかもしれない。プランは楕円あるいは円形で径約3mである。

遺物 土器は少量である。I群3類A(図110-16~18)・D(19~21)と図示しないが無文のCが大半を占める。少量のI群1類B(25)・C(30・31)・D(23・29)の如き前期前葉の一群と搬入品らしい2類A(27)や、やや中厚手となった同種(22)もある。16~25が床面、26~32が覆土出土である。石器は石鏃(図232-36)、横型石匙(37)、粗製刃器(図271-14)がある。

本址は、出土土器の大半を占めるI群3類(中越式)土器の時期に属するであろう。

(土屋 積)

②8 64号住居址(図27・71・111・112・233・268・271・274・276・279)

遺構 発掘区北寄中央にある。52号住に切られるが、本址の周溝を重視すれば、接しているだけかもしれない。北への側斜のため、両住居址とも大半が失われているので、明確にできない。南壁と西壁の一部を残すのみで、現高30cmで外傾する。幅15cm前後の浅い周溝が壁より20cm程内側をめぐるが、東南部にあるだけで全周はしない。南壁際中央に不整形のピットがあるが、本址に伴うものか不明である。床面は平坦である。炉は残存しない。東西4.4m程の隅丸方形のプランを考えられよう。

遺物 土器は器形の明らかなものは少ない。床面上の土器(図110-1~14)はI群5類A(1・2)的なわずかに繊維を含むものを除くと、II群1類B(3~5)で主体となるA(6~13)の多くは結節があり、内面をていねいに磨く斜縄文を主体としたものが多い。なお、同期に伴出するII群4類A(14)も1片検出されている。覆土出土土器も同様で、一部に竹管文を有するものがある。なかのI群3類Cの無文土器(図111-15・16)などは時期的にさかのぼるものであり、本址に伴うとは考えられない。これらを除けば、II群1類あるいは2類のA種としうるものであるが、竹管文を持つもの(図111-17~20)の存在から1類(諸磯A式)としてよいだろう。

石器は石鏃 3 (図233-1~3)、挟入刺突具、横型石匙(6)、有扶頭磨石器(5)、小形磨製石斧(図268-1)、乳棒状石斧、凹石 9 (図274-10, 276-5, 279-11)、横刃型石器 (図271-1) がある。

出土土器からⅡ群 1 類 (諸磯A式) 期の住居址としてよいであろう。 (土屋 積)

②⑨ 66号住居址 (図30・71・112・113・233・234・268・270, 図版38)

遺構 発掘区北西寄にある。南東部は50号住に切られ南西部は142号住・57号住に切られているが、床面レベルがより低いため床面、壁ともにほぼ完存する。北側壁は傾斜のため一部失われている。南東壁にちかいP₂・P₃・P₄は50号住の柱穴であり、残りを本址の柱穴とすれば4ないし6本の支柱穴を考慮することができる。現壁高10cm前後で周溝は持たない。炉は床面北寄を掘りくぼめた地床炉で径60cm、深さ15cm程度である。プランは4.2×3.2m程度の方形であったと考えられる。比較的小形である。

遺物 土器はすべて破片で少量である。覆土ではⅠ群 3 類A~E (図113-1~5・8) と焼成の良い斜縄文あるいは羽状縄文を持つⅡ群 1 類A (14~16) を主体とし、該期の東海系らしいⅠ群 2 類C (9~11) や繊維を含む4・5類A (6・7・12) などが混在する。床面出土土器は(図71-9, 112-22・23同土器)はⅡ群 1 類(諸磯A式)に降る可能性もあるが、覆土出土土器との関係からすれば、いわゆる中越式の新しい部分に伴うが、Ⅰ群 5 類に含めたGの可能性が強い。ちなみに、図示しなかった土器では、赤褐色、斜縄文あるいは羽状縄文、内面指ナゲが約6割と多く、薄手、無文、含雲母が約2割、残りは縄文を持つ繊維土器と縄文を持つ薄手、含雲母がほぼ同量ある。この組成も上記の推測を裏付けよう。石器は石鏃 8 (図233-19~26)、石匙 4 (27~30)、スクレイパー 5 (図234-1~5)、使用痕ある剥片(6)、玦状耳飾(7)、乳棒状石斧(図270-13)、小形磨製石斧(図268-13)、凹石がある。

出土遺物からはⅠ群 3 ~ 5 類 (中越式~黒浜式) と多少幅をもった住居址とせざるを得ない。(土屋 積)

③⑩ 68号住居址 (図33・113・234, 図版40)

遺構 発掘区中央部北寄にある。南壁の一部を残すのみで他は攪乱あるいは69号住に切られている。残存床面はわずかであるが平坦で堅く良好である。現壁高10~15cmを示す。P₁を支柱穴のひとつと考えるが、他は不明である。検出部分には幅10~20cm、深さ10cm程度の周溝がめぐる。炉は残存しない。

遺物 土器はすべて破片で、無繊維で斜縄文・羽状縄文を施すⅠ群 4・5類C (図113-26~33) に比定できるものを主体とするが、繊維を含むⅠ群 4・5類A (21~23・25) やⅠ群 2 類A (18・19)、同類に近いもの(20)も少しある。図示しないが全く装飾を持たないⅠ群 3 類C がほぼ同量ある。石器は石鏃 3 (図234-8~10)、スクレイパー 3 (11~13)、使用痕ある剥片類3 (14~16)、凹石がある。

本址はⅠ群 3 類C を伴う点からⅠ群 3 ~ 5 類 (中越式~黒浜式) 時期の住居址と考えたい。(土屋 積)

③⑪ 69号住居址 (図33・113・114・234, 図版40)

遺構 発掘区中央部北寄にある。68号住を切り、70号住に切られる。全体の3割ほどを残すのみである。P₁・P₂・P₄などを支柱穴と考えれば、円形プランの周囲に5~6本を配置するものであったことになろう。現壁高20~30cmを示す。周溝は幅10~20cm、深さ5~10cmで壁よりやや内側を全周する。周溝中には小ピットがある。床面は平坦で堅く良好である。炉は残存しない。

遺物 土器はすべて破片である。Ⅰ群 1 類D (図113-34) や搬入品である2類C (35) のほか、繊維土器、条痕文土器、Ⅱ群 1 類Aなどの斜縄文土器は少なく、半数以上は、赤褐色で内面が指頭或はヘラ状工具に

よるナデがあり、雲母を含むⅠ群3類に胎土、成形の似た斜線文ある4・5類Gとした土器や無文土器である。なお混入品と考えられるⅣ群(後期)(41・42)、須恵器(図114-1・2)がある。石器は石鏃2(図234-17・18)、横型石匙(19)、スクレイパー 3(20~22)、使用痕ある剥片(23)、小形磨製石斧がある。

本址は伴出土器からⅠ群3類(中越式)でも最も新しい時期と考えられる。(土屋 積)

③② 73号住居址(図32・114・234・266・268・269・282, 図版40)

遺構 遺跡の南寄りにある。砂質ロームを深く掘り込んだ堅穴住居址で黒褐色の覆土が落ち込んでいた。遺構の三分之一を次年度に調査しているが、前年度では残存する筈の部分で遺構が明確に把握できなかつたようである。南西部を一部、85号住によって切られ貼床されている。壁高は周溝内部の床面との差で見ると南側で40cm、西側で44cmと比較的深い。壁と周溝部の間には10~20cm高いテラス部が、特に南側で認められ、拡張された痕跡かと思われる。周溝は残存部ではすべて認められ、ほぼ全周していたものであろう。周溝の幅は最大部で30cm、深さ5cm内外である。北側の壁が消える地点で周溝様の溝が延びているが、記録していないため不明である。床面は周溝とP₁を境に土坑191寄りが礫の多い砂質ロームとなり、全体的にあまり良好な床面ではない。炉址は確認できなかった。柱穴かピットは南側に偏在する。P₁~P₅までの住居内のもものはP₁を除くとやや浅く、位置的にみて主柱穴の判定にくるしむ。壁外のP₅は内部から土器片鏃2点が出土している。

遺物 出土量は少ない。図114-3~7は床面出土、他の土器片は覆土での出土である。Ⅰ群2類B(3)・C(12)、口縁に半截竹管による平行沈線と口唇に刻目を付するもの(11)があり、共に薄手で内面に指圧痕を残す。3類AかC(8・9)やBかD(10)は金雲母を多量に含む。4類Aの異条斜縄文を付す土器(37)があるが、以上は少ない。1群5類は本址床面でも出土し、主体となる群である。微量の繊維を含むA(19~21)、比較的多量の繊維を含み内面滑らかに研磨されたもの(4・13~16・18)と微量の繊維を含むか含まないか、という程度のB(17・22)や、金雲母や砂粒を含み、内面へラ整形痕が顕著なC(5~7)もある。Ⅱ群1類D(23)、Ⅰ群4・5類CかⅡ群1類Aかの区別ができないもの(24~36)がある。このうち24・27・30・34は内面指圧痕顕著であるのでⅠ群4・5類Gとしたい。25は舟形把手、28は口唇に縄文原体を深く押圧した刻目を付し古い要素かと思われるが、26は厚手で諸磯期かと思われる。28は中越遺跡・阿久遺跡に類例を求め得る。なお、覆土から土器片鏃1点が出土している。

石器では石鏃(図234-24)、石匙2(25・26)、スクレイパー(27)が覆土から出土している。打製石斧(図266-6)はAⅢ型で、本遺跡遺構内出土では唯一の資料であるが、本址の出土遺物の土器形式が相当広範囲にわたるため、所属形式は断定できない。前期の遺物の可能であろう。小形磨石斧2(図268-21)、定角石斧、乳棒状石斧(図269-4)、凹石が覆土から出土している。その他土器片鏃3(図282-12~14)がある。

本址は床面出土及び覆土の中心をなす土器群からみてⅠ群5類(黒浜式)の時期と考える。(伴 信夫)

③③ 74号住居址(図35・115・235・273・278・291, 図版40)

遺構 遺跡の南よりに検出された住居址で北側を85号住に切られ、東側は斜面下方になるため耕作で失われ確認できなかった。土坑との切り合い関係について明確な記録がないが、土坑187はⅡ群2類(諸磯B式)、土坑188は縄文後期の遺物出土から本址を切っていたことは確実であり、土坑189・190は出土遺物がないため本址との前後関係は不明である。

壁は南側で良く残っており、壁高39cm、西壁で30cmである。壁面は全般に荒れ、不安定である。P₁・P₂

の間には壁に沿って周溝が部分的にあり、幅17cm、深さ5cmである。床面はロームのたたき床状の堅緻なものであり、中央部には深淺さまざまなピットが掘り込まれ、P₆とP₈の間に石と焼土が認められたので地床炉があったと思われる。支柱穴か補助柱穴かは不明であるが、P₁～P₁₁のうちで、支柱穴はP₁・P₂・P₄を確実なものともみると、構造的にみてP₆・P₈・P₁₁か、85号住のピットとして番号付されているP₆を対称すす位置に求め得る。恐らく六本の支柱となり、P₁₁周辺の85号住内にあるピットの多くは本址の補助柱穴であった可能性が高い。P₁₄は入口部柱穴とみれないだろうか。P₄—P₈を入口とすると主軸方向はN52°Wとなる。P₂—P₄を入口と考えるとN4°Wであるが、貯蔵穴かと思われるP₈との関係が不自然となる。入口は前者の可能性が高い。

なお、P₈の西側には10cm前後高いテラス部がある。また、本址のP₆、土塚190、85号住のP₄・P₈は方形に近い形で深さも近似しており、掘建て柱の遺構が重複していたと思われる。

遺物 床面(図115—1～5)・覆土出土土器(6～22)があるが、主体となるのはI群5類である。I群1類B(6)やこれと併行期頃と思われる3類Aの口縁部片1点が覆土にあるが、図示していない。I群5類では整形の差をみると多くの繊維を含み内面滑らかに磨研されたもの(1・2・7・8・23)とごく微量の繊維を含む内面ナデあるいは篋整形痕等が残るやや雑な仕上げのもの(9～15)、無繊維で内面同様の仕上げの例(17～20)がある。5類A(2・7・12～15)、B(1・8～11)、C(4・17～20)が、口唇に刻目を持ちII群1類Aと類別しがたい例(18)もある。II群2類A(22)、C(5・21)もあるが、これらは床面を切る土塚187が同時期の遺物を持っていることから、こちらからの混入ではないかと思われる。

石器では石鎌6(図235—1～5・7)、石匙(8)、スクレイパー(9)、石錐2(6・10)、軽石製品(11)がある。乳棒状石斧は床面で、凹石2(図278—4)(1は床面)、磨石(図273—15)が出土している。土製品では土錘7(図291—25～27・43)があるが、Ba型5、Bb型1、C型1である。混入であろう。

本址は主体をしめるI群5類(黒浜式)に属すると思われる。

(伴 信夫)

③4 75号住居址(図36・72・115・116・235, 図版41)

遺跡内南端に近く、センターライン東沿いに位置し、北～北東向傾斜面に立地する。礫混じりのローム層最上面で検出され、同層中につくられている。本址の周辺は、**86号住・132号住・135号住・143号住・99号住**及び**土塚168～175**が切り合って存しており、前後関係の結論から記すと、75号住→143号住→86号住→(土塚171)→135号住→132号住及び土塚168・169→土塚174→99号住及び土塚170・172・173・175の順に営なまれたものと考えられる。その根拠は各々直接切り合う住居址の項で記すことにする。

本址と直接切り合うのは**86・135号住**である。それぞれ本址の覆土から掘り込んでいるものと考えられるが、覆土中では切り合いがとらえられず、本址床面で切り合いを確認した。まず、**135号住**中には本址床と同レベルでの貼床は認められず、単純な覆土と認められた事から、同址は本址を切って造られたものと断定した。**86号住**は、本址との境界となる周溝を境にして床面レベルが10cm低くなる。ところが、その周溝は本址床面にまで延長されており、本址は86号住の拡張部分とする解釈もなり立つ。しかし、床面に段差が生じるのはいかにも不自然である。そこで、境界となる周溝は86号住の壁直下ではなくやや内側に在ったと考え、西壁沿いの周溝が切れる付近から同址北壁がつくられたものとするれば最も合理的であろう。問題は残るものの、本址は**86号住**に切られているものとする。

遺構 既に切り合いに関連してその大要は述べた通りである。本址はわずかにその北西隅付近のみが残されているのみである。壁はほぼ垂直に近く壁高は20～30cmを測る。周溝は確認されない。床はロームで

堅く固められており平坦である。床面のピットは確実に本址に伴うものはない。実測図中で本址に属するピットも、既述のように86号住の壁がその周溝よりも北寄りになるとすれば、同址の床面に造られた可能性も出てくる。炉址は残されていない。屋外施設は検出されず、特記すべき出土状況を示す遺物もない。

遺物 土器は床面(図72-1~3, 115-24~34, 116-1~4)と覆土に区分できるが、Ⅰ群とⅡ群が混在している。前者のうちには、Ⅱ群1類A・Bの半完形(図72-1~3)のほか、Ⅰ群5類B(図115-25・26)、4類C(32) やや、時期的に古そうな粒の大きい斜縄文(含繊維)ある例(24)もあり、混在は明らかである。一方、覆土も同傾向を示し、含繊維のⅠ群4・5類A(図116-5~13)と共に無繊維のⅡ群1類A(20~33)的な土器も多い、Ⅱ群1類C(15)やその類似例(14・16)のほか、該期に伴う西日本的な様相をもつⅡ群4類が数片ある。このほか、Ⅰ群4・5類Gとした無繊維で金雲母を含み、裏面に指痕の残る縄文施文の土器(20・27, 図72-4)がある。底部はほとんど平底である。

石器には、石鏃7(図235-12~18)、石匙6(19~24)、スクレイパー2(25・26)、石錐(28)、使用痕のある剥片(27)、軽石(29)、打製石斧、乳棒状石斧3、凹石、磨石がある。

出土遺物からみてⅠ群5類か、Ⅱ群1類(黒浜式~諸磯A式)の時期の住居址であろう。(百瀬 長秀)

③⑤ 80号住居址(図39・117・271, 図版42)

遺構 遺構群の南端に重複関係がなく検出された住居址である。西より東に向ってゆるく傾斜する地形に、礫まじりのローム層を掘込んで作られており、プランは多角形状を呈する。炉は地床炉で中央部2箇所焼土が残存する。柱穴はあまりバランスがよくないが壁際にあるP₁~P₆の6箇所である。中央部やや北寄りに40×60cmの浅いピットP₇がある。壁は礫まじり軟質ロームで余りよくないが、西側で20~30cm、東側で10~15cmを測る。床面は良好で中央やや東寄りに向って皿状に傾斜する。P₆附近に人頭大の石が数個置いてあり、南壁上に人頭大から40~80cm大の石がある。

遺物 完形土器はなくすべて破片である。大半がⅡ群2類(図117-1~26)に属し、うち数片(15・16)にⅡ群4類の西日本系の土器が伴出している。他時期の土器を伴出しない良好な資料といえよう。石器は、磨石、横刃(図271-13)、凹石5が出土している。

出土遺物よりⅡ群2類(諸磯B式)期の住居址である。(木下平八郎)

③⑥ 86号住居址(図36・72・119・120・236・269・270・272・274・276・278, 図版41)

遺跡の南端に近く、センターライン東沿いに位置し、北東向傾斜面に立地する。礫混じりのローム層の最上面で検出され、同層中につくられている。本址を含む周囲の遺構群の切り合いについては75号住の項で記した通りである。本址と直接切り合うのは75号住・135号住・143号住及び土塚171・172である。99号住は本址直上にはのらないものとみられる。これらの諸遺構のうち75号住との関係は先記した通りで、本址がこれを切っている。143号住・135号住は、本址覆土中では切り合いを確認し得ず、本址床面において確認しえた。135号住上の本址床面と同レベルでは、貼床等床面を延長させた痕跡がないため、同址が本址を切っているものと判断した。恐らく本址覆土中より掘り込んだものであろう。143号住上にはやはり貼床等本址床面の延長施設は見えられなかったが、本址床面と同レベルでまとまった焼土を確認した。本址炉址の痕跡である可能性が強いため、同址覆土中に本址がのるものと判断した。土塚171・172は検出面にて本址を切っていることを確認した。

遺構 切り合いに関連してその一部を述べた。一部重複するが遺構の概要を記す。壁はほぼ垂直で、西

壁は標高の高い側であることもあって最高50cmの壁高を有する。土坑171に切られる付近では壁高は10cmに満たない。周溝は南～西壁をほぼ全周し、また、北壁にも明瞭に残る。幅20cm前後、深さ3～6cmを測る。全周溝内には径10～20cm、深さ5～10cm程度の小ピットが不等間隔ながら連続して残される。土留用材を押えた杭の痕跡かもしれないが断定はできない。床は堅く固められる。壁・床ともローム層に含まれる礫が若干突出する。床面に残されたピットは11もしくは12個で、このうち柱穴は規模から判断してP₁～P₃とみられ、方形の配置を示すと考えて良い。なお、132号住内のP₄西隣にある深さ24cmのピットは、本址床面から測れば深さ50cm、位置も良く、あるいは本址に属するかもしれない。また、各々の柱穴に隣接したピットがあることからすれば、柱の建て直しがあったかも知れない。炉址は143号住覆土上にあった焼土塊がそれに当る。構造は不明である。屋外施設は検出されず、特記すべき出土状態を示す遺物はない。

遺物 土器と石器がある。土器は床面と覆土出土に区分されているが余り変りない。竹管文などの文様ある例は少く、大半が斜縄文を中心とした土器である。繊維を含むI群5類A（図119-22・23）は床面から出土せず、B（18・19-床, 22, 図120-4～6）がわずかに検出されている。他は無繊維の斜縄文が大部分で、II群1類Aか或はI群4・5類Gに伴う金雲母を含む特長的な土器（図72-5）に二分できる。I群4類A・Cに属するような縄文は認められない。この他、該期に伴う良好な資料としてII群4類Cの浅鉢（図72-9）や同A（図120-9）・同B（10・12）・同F（8）などが少量ある。II群1類（諸磯A式）の典型例がなく、むしろ、I群5類（黒浜式）が主体となる可能性もある。

石器には、石鏃3（図236-1～6）、石槍（7）、挟入刺突具（8）、石匙5（9～13）、使用痕のある剝片（14）、定角石斧（図269-C）、乳棒状石斧3（図270-14）、凹石8（図274-12, 276-2, 278-3）、敲打器IV類（図272-15）がある。

出土遺物からみて、I群5類（黒浜式）もしくはII群1類（諸磯A式）の時期に属するが確定はできなかった。

（百瀬 長秀）

③7 90号住居址（図42・121・236）

遺構 発掘区北寄中央にある。東半は46号住と切り合うと思われるが、傾斜面のため切り合い部分には不明である。床面はローム面であり、平坦、良好であるが、壁、周溝などは検出できず、床面のひろがりやピットの位置からプランを推定できるのみである。4.6×4m程度の楕円形かと考えられる。ピットはP₁～P₃までであるが、柱穴は特定できない。しかし、壁に沿って並ぶ可能性がある。炉は残存しない。

遺物 土器は少量の破片のみである。I群1類C（図121-12）・D（13）、II群3類A（16）などもあるが、主体となるのはII群2類B（14）・C（15）・D（17）と考えられる。石器は石鏃（図236-15）、石錐（16）、凹石各1点がある。遺物量は少ない。他に92号住との中間の検出面で石皿1を検出している。

出土土器からII群2類（諸磯B式）時期の住居址と考えたい。

（土屋 積）

③8 92号住居址（図42-2, 121・236・275）

遺構 本址は発掘区の北西境に広がる住居址群のほぼ中央、STA108+60の北西7mに位置している。他の遺構との重複はないが、北東に傾斜する立地のためや、北東部の発掘ができなかったため、南東から南西にかけての一部分が確認できたのみである。炉址も検出できなかった。ピットは住居址内に5、住居址外に7あった。住居址の全容がとらえられないため、柱穴の位置、本数を知ることとはできないが、周壁に沿った配置とすれば、P₁・P₃をあてることができる。周溝は確認された壁直下にめぐっている。深さ約10cm、幅10～13cmの規模である。おそらく全周していたものと思われる。周壁はほぼ垂直に立ち上り、30～

遺物 出土量は少ない。斜縄文を施し、内面が磨かれたⅡ群1類A（図121-18・20）、2類A・C・D（19-22-25）のほか、本遺跡では数少ない中期初頭のⅢ群1類（21）も1片ある。遺物量が少なく、主体となるべき時期を決定できないが、ややⅡ群2類が多い。石器も数は少ない。石錐2（図236-17・18）、小形磨製石斧3、凹石2（図275-3）の7点のみである。石錐のうち1点（17）は先端、両側縁がわずかにつぶれており使用された後をのこす。

本住居址の時期決定は遺物の少ないこともあり困難であるが、縄文前期後半土器型式でいえばⅡ群2類（諸磯B式）に属する時期と思われる。（青沼 博之）

㊸ 93号住居址（図43・72・121・122・236・237・266，図版44）

遺構 発掘区中央やや南に位置し、東南約2mに102号住が隣接する。他の遺構との重複は全くなく、単独で検出された住居址である。炉は住居址中央東寄りの深さ16cm、80×100cmの不整形をしたP₁₀で、底部よりわずかに焼土が検出された。床面に掘られたピットの数が多く、支柱穴を断定するのは困難であるが、周壁に沿って配置された柱穴と思われ、北より、P₈・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆の6本をあてることができよう。地形が北東に傾斜する斜面に作られた住居址のため、北東部に周壁は検出できなかった。壁高は残存する西南壁で45cmあり、北東部へ行くに従い低くなり消える。壁はほぼ垂直に立ち上り良好な状態である。周溝は西から南の壁直下に、深さ3～5cm、幅10cmで、長さ4.5mが検出されたのみである。床面はほぼ平坦で比較的良好な状態であるが、礫を含む土層中に構築されているので、床・壁・ピット中に礫がくいこみ、特に住居址中央から西にかけ、幅1.2m程の礫の帯が縦断している。北西部には一抱えもある礫が数個かたまっていた。

遺物 床面と覆土出土に区分されている。床面出土土器（図72-10～13、121-26～33、122-1～6）のうち、含繊維はⅠ群5類B（図72-11、122-4）の他は縄文施文の4・5類A（図122-3）とやや古くなるらしい厚手の1類D（図121-26・27）など少量で、他は竹管工具による文様をもつ4類D（図122-5・6）やⅡ群1類かと思われる木葉痕ある底部（図72-12）のほかは無繊維・斜縄文の1群4・5類C的なものが多い。覆土出土例（図122-7～18）は、含繊維の斜縄文（7・8・10～12）と網状文（8）等のⅠ群5類Aと、無繊維で裏面に指痕が残り、金雲母を含む4・5類Gの範疇に入る一群（13・17・18）が目立つ。これらは床面出土の中にもあり（図72-10、121-28・31・33）、現在、中部高地特有の土器といえる。

石器は石鏃（図236-19）、石匙4（20～22、図237-1）、打製石斧（図266-16）、乳棒状石斧、凹石の総点数8と少ない。他に装飾品が2点出土している（図237-2・3）。本遺跡から玉状装飾品の出土は少なく、平玉状は1、管玉状は3で、そのうちの各1が本址からの出土である。

床面出土土器からみて、Ⅰ群5類（黒浜式）期に属する住居址と考えたい。（青沼 博之）

㊹ 95号住居址（図44-1、122・123・237，図版45）

遺跡内南寄り、センターライン付近に位置し、北東向き傾斜面に立地する。ローム層最上面で検出され、礫混じりのローム層中につくられている。土坑136を切り、縄文時代後期の110号住に切られている。

遺構 円形もしくは楕円形プランと思われる堅穴住居址である。壁はほぼ垂直で西南壁で壁高30cmを測る。床はほぼ平坦で、ローム層はよく固められており堅い。西～南壁下に周溝が残される。恐らく住居址内を半周するもので、幅10cm、深さ1～3cm程度の小規模なものである。床面に残されたピットは6個で、このうちP₁・P₂・P₅・P₆が柱穴となる可能性が強い。この4個が全て同時に使用されたものとはいえない

20cmの高さをもち良好な状態で遺存していた。北西部は傾斜地のため確認できなかった。床面は平坦で、南壁コーナーに大小6個、P₃壁上に1、住居址中央西寄りに1の扁平な石が検出された。だろうが、方形に配置された柱穴の一部をなすものであろう。炉は住居址のほぼ中央にあり、径50cm×70cm、深さ10cm程度の浅い地床炉で、焼土が若干堆積していた。炉中央に長方形の礫が転落しているが、炉に配されたものではなからう。屋外施設は検出されず、特記すべき出土状態の遺物はない。

遺物 土器と石器がある。土器はⅠ・Ⅱ群があるがⅠ群は少量の5類Aがあるのみで、主体はⅡ群である。Ⅱ群1類A(図122-26・31)・B(20・21・25・27・28・32-34)・C(19・30, 図123-4)・E(8-10)、2類B(図122-22-24・35, 123-1-3)・C(図122-29)・D(図123-5-7)が多く、該期に伴出する他地域土器として少量の4類C・D(11)がある。Ⅱ群1類でも後半期が多い傾向である。石器には、石鏃5(図237-4-8)、スクレイパー2(9・10)、石錐(13)、使用痕のある剥片2(11・12)がある。

出土遺物からみて、Ⅱ群1類(諸磯A式)時期の住居址であろう。(百瀬 長秀)

④1 96号住居址(図37・72・123・124・237・266・272)

遺構 発掘区中央部東南寄にある。東部を76号住に切れ、南部を97号住に切れ、他の部分も東への傾斜面のため失われており、わずかに西壁を残すのみで床面も全体の3割程度が残るのみである。現壁高30cm前後で、周溝、柱穴、炉などの施設は検出されなかった。床面は礫混じりの軟弱なローム面であり、東へやや傾斜するが、平坦である。プランは隅丸方形であろうか。

遺物 すべて破片であるが、床面上検出の土器は繊維を多量に含み縄文あるいはへら状工具による施文があるⅠ群2・3類を主に、Ⅰ群1類B・C(図123-21-27)や、Ⅱ群1類C(図124-3)も含んでいる。これらの土器に無繊維のいわゆる中越式といわれるⅠ群3類(図123-12-19)や同時期の薄手搬入品の2類C(20)を伴うことから、おおよその時期を推定できよう。覆土出土土器(図124-4-19)も床面例とほぼ同傾向である。図示しなかったものは約6割が赤褐色、内面指ナデ、斜縄文あるいは羽状縄文を持つⅠ群4・5類Gで、約2割は無文、薄手のいわゆるⅠ群3類C(中越式)、他はⅠ群4・5類の繊維土器、2類の凸帯、細線文あるものがそれぞれ1割程度ある。この組成からすれば、Ⅰ群3類のうちでもやや新しい様相といえようか。

石器は石鏃10(図237-4-7)、石槍(8)、縦型石匙(9)、スクレイパー3(10・11)、石錐、使用痕ある剥片類4(12・13)、珧状耳飾1、打製石斧2(図266-2)、乳棒状石斧2、凹石5(内2床面)、磨石、敲打器(図272-2)、石皿がある。

出土土器からⅠ群3類(中越式)期に属する住居址と考えたい。(土屋 積)

④2 98号住居址(図43・72・124・238・270)

遺構 調査区のはほぼ中央北寄に検出された住居址である。北側を44号住に切られており、74年度調査のグリット堀の時点で上部の大半が失われている。残存部分より推察すると楕円形に近い住居址と考えられる。炉は地床炉で中央部からその周辺に薄く焼土が広がっている。ピットはP₁~P₄の4個検出されているが柱穴はP₂・P₃以外やや不明確である。壁は礫まじりのローム層を10cmほど掘込んで作られており、わずかに残る部分は良好である。床面は平坦でやや堅い部分もあるがあまりよくない。東北隅付近にフンド3に伴うとおもはれる石組の残存部があり、下部がピット状となる。このP₄があるいは柱穴の1つかもされない。この付近は細粒の炭化物が多く認められる。なお、この上部覆土中より石製の小玉が1個出土し

ている。中央炉の横のピットの縁に乳棒状磨製石斧が直立して出土した。土器片出土は少量である。

遺物 全部破片である。胎土中に雲母を含んだ、無文のⅠ群3類C(図124-20・21)、やや薄手の2類B(22)、繊維を含む縄文の4・5類A(23)のほかは、無繊維で縄文のある4・5類CかⅡ群1類A(24-27)がある。図示しない土器も含めてⅠ群3類が主体となる。石器は石鏃5(図238-1-5)・抉入刺突具(6)・石匙(7)・スクレイパー(8)・使用痕のある剥片3(9-11)・乳棒状磨製石斧2(図270-7)・凹石が出土している。

本住居址は出土土器からみてⅠ群3類(中越式)に属する可能性が強い。(木下平八郎)

④3 102号住居址(図44-2, 73・125・238・266, 図版46)

遺構 本址は東南2mに隣接した93号住と同様、他の遺構との切り合い関係はなく、単独で検出された不整形円形を呈する数少ない住居址の一つである。炉は住居址中央やや南に位置し、約5cm程掘り凹められた、90×100cmの地床炉である。焼土はわずかししか観察されず、炉中に小石の散布が見られ、敷いたものとも考えられたが、小石、礫が散在する土層中であるので、人工のものとは断定し難い。支柱穴は、P・P₂・P₃の3本と思われる。P₁に対する柱穴が西側に見られず、支柱穴3本という不規則な状態である。浅いP₃・P₄は補助的な柱穴であろう。住居址中央北に、径1m、深さ21cmのピットが検出された。貯蔵庫的なピットであろうか。周壁は全周しているが、東北に傾く斜面上に構築されているため、西南壁が41cmと高いのに比べ、北東壁は8cmと低くなってきている。周溝は深さ5cm、幅15cmで西壁下と東南壁にのみ検出された。西壁下に続く周溝中に、径20cmの小ピットが2個認められた。床面はかなり堅く、敲いたと思われるが、剥離している部分も多く平坦ではない。

遺物 Ⅰ群1・2・3類、Ⅱ群2類の土器片が床面、覆土中に混在している。図73-1は、黒褐色を呈し、石英粒や細粒砂を含み、厚さ3~4mmの堅く焼成された胎土をもっている。表裏全面に指圧痕が残り、口唇部と頸部に半載竹管による刺突文を施こし、その間を浅い平行沈線が、左上から右下へ、右上から左下へあるいは格子状に施文されている。裏面にも半載竹管による格子文が口縁部6cmに施されている。格子は左上から右下へ次に右上から左下への順につけられている。剥落しているが、波状口縁の頂点から粘土紐が縦位に貼付された痕跡がある。Ⅰ群2類B種に属し、清水ノ上I式にあたる土器である。同系統の薄手土器でやや古手の1群2類B(図125-13・14)も数例ある。床面出土の主体となる土器はⅠ群3類A(8・15)、C(9-12)であるが、同時期かやや古く考えられる繊維を多量に含んだ1類B~D(16・17)の丸底もある。覆土ではⅡ群2類A(18・23・24)・C(19)・D(20)・E(22)が多くなる。多少問題もあるが、床面出土土器を重視し、本址をⅠ群3類(中越式)期の時期としたい。

石器は総数12点で、石鏃2(図238-15・16)、石匙(18)、スクレイパー2(19・20)、打製石斧(図266-13)、小形磨製石斧、乳棒状石斧、凹石2である。抉入刺突具(図238-17)は黒曜石製で、本遺跡より16点しか検出されておらず特異な石器とみることが出来る。乳棒状石斧は刃部破損の後、再研磨されている。

出土土器よりみて、Ⅰ群3類(中越式)期の住居址としたい。(青沼 博之)

④4 104号住居址(図21・126・238・272)

遺構 発掘区中央部東寄にある。南半は41号住に切られ、北半は44号住が上になっており、東半は斜面のため失われている。残存床面は44号住下を含め全体の2割程度である。P₁~P₃は本址の柱穴と考えられる。残存部の現壁高25cm前後で外傾する。床は平坦で炉は残存しない。円形プランを持ったものであろう。

遺物 土器はすべて破片で少量である。Ⅰ群3類D(図126-1-4)のうち3・4は2類に属する可能性も

ある。櫛状具による刺突を連続した特徴的なI群4類D(5・6・10)や、一片であるが同種工具による5類D(9)と、4・5類A(7)や同C(8)が出土している。図示以外の土器片もほぼ同じ構成であるが、竹管、櫛状具による文様のものはない。石器は石鏃3(図238-21~23)、スクレイパー(24)、小玉(25)、敲打器(図272-4)があるが、全体量は少ない。

本址は出土土器からI群3類(中越式)期の住居址としてよいであろう。(土屋 積)

④⑤ 106号住居址(図21・73・126・127・239・274・276)

遺構 発掘区中央部東寄にある。西壁を残すのみで他部分は失われているが、床面はかなりの部分を残している。東壁部分を僅かに奈良・平安時代の105号住が切っている。P₁~P₄を支柱穴と考えると径4m強の隅丸方形のプランを考えられる。残存壁高30cm程度で周溝はない。床面は土間の礫が露出して凹凸があり、東へ傾斜している。一部に硬いタタキ面もみられた。北寄に小礫を伴う小形の地床炉がある。

遺物 土器はすべて破片であるが、多少器形の判明する個体もある。床面出土(図73-2~6, 126-11~19)と覆土に区分できる。床面出土例はI群3類C(図126-11~14)、や繊維を含む1類C・D(15)、5類B(図73-2)のほかは、無繊維で金雲母を含み裏面に指痕の残る斜縄文施文の4・5類G(2, 図126-17~19)がやや多い。覆土もほぼ同傾向を示し、I群1類中の条痕文(20)、撚糸文(21)や4・5類A(図127-2・7)を除くと4・5類Cのうち金雲母を含むもの(図73-5・6)と含まないグループが半々程度である。平行沈線文と斜縄文あるII群2類的な例(図127-19)もあるが器形面から4・5類Aと同時期の可能性もある。なお、底部の側辺(20)までや底面に細線を付し、斜縄文を付すもの(21)もある。図示しないもののうち、縄文施文5割、縄文あるいは無文の繊維土器2割、I群3類A・Cが3割程度ある。

石器は石鏃4(図239-1~4)、縦型石匙(5)、同横型(6)、スクレイパー3(7~9)、有抉顕磨石器(10)、打製石斧、小形磨製石斧、凹石3(図274-3, 276-10)がある。

本址の所属時期は、床面出土土器をとれば、I群5類(黒浜式)期となるが、所謂中越式(I群3類)としてとらえるとその新しい部分に該当するのではないかと思う。(土屋 積)

④⑥ 108号住居址(図46・128・129・239)

遺構 本址は発掘区中央から東南約15m程の所に位置し、102号住が北西に隣接し、南には歴史時代の柱列2が西南へ4個伸びているが、ほぼ単独で検出された住居址である。大小の礫を多量に含む土層中に構築されているため、床面、壁中に大小の石が露呈しており、南~北西にかけて残存する壁は、この自然堆積した大石を利用し作られている。東側は傾斜地のため周壁は検出できなかった。壁高が一番高い西南で32cmある。周溝は北西から南にかけて認められたのみで他にはない。炉は住居址中央よりやや南寄りにわずか焼土が認められるのみではっきりとした位置はつかめなかった。ピットは大小あわせ住居址内に7、壁を切り壁外に及んでいるもの1の計8である。不規則な配列となり、東側には検出できなかったが、おそらく、周壁に沿って並ぶP₁~P₃・P₃の4本をあてることができる。

遺物 床面出土は4片のみで、繊維を含むI群5類B(図129-1)や無繊維の斜縄文のみ(2~4)でこれが4・5類CかII群1類Aかの判別がむづかしい。他の覆土出土品のうち、やや厚手で口縁部に凸帯をもつ、5や撚糸文の6、無文の7などは1類に入るかも知れない。同じ含繊維土器でも斜縄文(8)、羽状縄文(12)のほか、竹管文様ある例(図128-4・5)は5類A・Bとしてよいであろう。これ以外の無繊維土器は縄文施文が大半で、そのうち裏面指痕のあるグループ(図129-13~15)と、そうでない斜縄文・羽状縄文(9~

11・16、図128-1・2)があり、I群3～5類及びII群1類Aとも考えられる。なお、少量ではあるがII群1類B・C(図128-6・7)や2類D(8)、同期に伴出する西日本からの搬入品としての4類B(10)や、類似した口唇部に刻目ある4類C(図129-17・18)が検出されている。

石器は12点ある。石鏃3(図239-11~13)、石匙2(14・15)、スクレイパー(16)、使用痕ある剥片(17)、打製石斧、乳棒状石斧、凹石等である。

床面出土土器のみでは判断しにくい、I群5類からII群1類にかけての時期と考えたい。(青沼 博之)

④7 111号住居址(図47・73・130・240・272・280, 図版46)

遺構 発掘区中央東南寄にある。112・113号住と切り合うが、遺構自体からはその先後を明らかにできなかった。原地形の北東への傾斜のための北東壁は低くなるが、南半で現壁高40cm前後で垂直にちかく良く残る。壁沿に幅20cm、深さ5cm程度の浅い周溝がめぐる。床面は平坦であるが、壁面とともに地山の礫が露出する。P₁・P₃~P₅、112号住内P₂を支柱穴と考える。住居内北寄にP₄に切られて径40cm程の地床炉がある。柱穴、炉の位置から主軸方位N22°Wの楕円形プランを考えるが、その場合P₄は本址に付属しないかもしれない。

遺物 床面出土土器(図73-7~9, 130-1~5・13)のなかには器形の明らかなものもある。大半がI群5類であり、繊維を含むB(図73-9, 130-5)と無繊維で金雲母を含むグループのG(図73-8, 130-1~4)のみである。覆土中の土器も繊維を含む例(図73-10, 130-6・10)は少く、金雲母を含む例(図130-7~9・14・15)や斜縄文・羽状縄文(11・12・16)が半分以上を占める。図示しない資料も同傾向を示し、I群5類A~Cを主体とする比較的単純な土器といえる。底部はやや上げ底の平底のみで、木葉底(14・15)もある。

石器は石鏃6(図240-1~6)、縦型石匙(17)、横型石匙3(8~10)、スクレイパー4(11~14)、石錐2(20・21)、使用痕ある剥片類5(15~19)、管玉状石製品、小形磨製石斧、敲打器(図272-11)、石皿(図280-3)がある。

出土土器からI群5類(黒浜式)期の住居址としてよいであろう。(土屋 積)

④8 112号住居址(図47・73・131・132・241・267・271・273・275・276・277, 図版46)

遺構 発掘区中央東南寄にある。113号住の上層にあり、111号住に切られていると考えられるが、遺構における所見ではない。東側は年次の異なる発掘区にかかるが、原地形の傾斜のため失われている。現壁高10~40cmで、幅10~25cm、深さ5cm前後の浅い周溝が全周する。床面南半は平坦で良く残るが、北半は荒れている。P₁・P₃・P₅、113号住内P₁を支柱穴と考える。P₄は入口にかかわる施設かもしれない。炉は攪乱のため不明である。

遺物 床面出土土器(図73-11~16, 132)は無文、無繊維、波状口縁、尖底のI群3類C(中越式)を主体とする。縄文を持つものもあるが図130-20を除いて繊維は含まない。同22は、胎土、色調焼成、成形技法などが無文尖底土器と酷似するが平底であり注目してよいものであろう。この平底土器の存在とともに、尖底土器にも細線による格子文や粘土紐貼付文を持つものが少ないことから、いわゆる中越式のなかでもやや新しい様相といえよう。覆土土器(図131)も主体は床面と同様であるが、表裏面に条痕あるI群2類D(1・2・7)や同C(3)のほか繊維を含む複合口縁か口縁直下に低い凸帯あるI群1類B(8・9)、竹管文による波状文ある5類B(13)、斜縄文、羽状縄文の5類A(10~12)などもわずか含んでいる。金雲母を含むG(14~16・19・20)も多い。木葉底(20)や底面に深い凹みのある例(19)がある。図示しなかったものが多

量にあるが、床面出土の8割はI群3類C、1割が4・5類G、他に同B、Dと繊維土器がある。覆土出土は95%がI群3類Cで、残りが2類A、3類A・D・Fである。

石器は石鏃5(図241-1~5)、縦型石匙(6)、スクレイパー10(7~16)、石錐(28)、使用痕ある剥片類11(17~27) 打製石斧4(図267-29)、小形磨製石斧、乳棒状石斧、凹石6(図275-4・5, 276-4, 277-9)、横刃形石器類2(図271-3・12)、磨石(図273-19)がある。

出土土器からみて、I群3類(中越式)期の住居址としてよいであろう。(土屋 積)

④9 113号住居址(図47・133・242・266, 図版46)

遺構 発掘区の中央から東南寄の112号住居内にある。112号住居址が上に作られたものである。そのため現壁高20cm程であるが、北寄は不明瞭になる。南半壁沿に幅20cm、深さ5cm弱の浅い周溝状の凹部があるが、周溝であるかどうか断定できない。P₃・P₄は柱穴としてよいだろう。床面は平坦であるが、壁面には地山の礫が露出している。炉は見出されていない。

遺物 土器はすべて破片であり、無繊維でヘラあるいは竹管による施文を行なう一群と繊維を多量に含み斜縄文または羽状縄文を施す一群(図133-15~19)とがある。前者はI群3類(中越式)で、図133-1・2のように裏面にも表面同様の格子文を施すものがある。同8は、竹管による刺突を口縁端部に行ない、その直下に短い粘土紐を貼付け、その下に二列の連続刺突、さらにその下にカギ裂状の刺突を何列か行なう。裏面は一列の刺突があり、その下は表面の刺突による瘤状の盛りあがり連続する。表面波状部の貼付粘土紐には刺突が行なわれ、裏面には竹管による凹線を三条施す。竹管原体は端部および裏面と表面では異なる。施文法を除けば他のI群3類土器と異なるところのない土器である。同20~22は繊維を含まないI群4類あるいは5類である。以上の組成から、I群3類土器群中でも古い様相かとも思われるが、図示しなかった土器のなかに繊維土器はなく、ほとんどすべてがI群3類Cであり、Aや4・5群G的なものをわずかに含むのみである。

石器は石鏃21(図242-1~21)、抉入刺突具(22)、縦型石匙2(23・24)、スクレイパー4(25~28)、複数抉入石器2(29・30)、石錐2(33・34)、使用痕ある剥片類2(31・32)、打製石斧(図266-9)がある。

出土土器からI群3類(中越式)でも古い時期の住居址と考えたい。(土屋 積)

⑤0 118号住居址(図50・74・134・243・268, 図版47)

遺構 本址は発掘区西南の用地界で重複して検出された一群の堅穴住居址の最西端に位置している。87号住の下層、礫混入ローム層中より検出された。炉址は住居址中央部に、70×55cmの方形に掘り凹められた深さ10cmのピットと考えられるが、焼土・灰等は観察されなかった。支柱穴は、西北、東南の壁直下に見られるP₁・P₄の2本をあてることができ、切妻の屋根が想定できよう。周壁は、東57cm、西52cm、南64cm、北40cmで立ち上り全周し、壁中に礫を多く含むが良好な状態で遺存していた。北壁に自然堆積した長さ120cm、幅37cmの大石を利用している。周溝は南壁直下から東南のP₄までわずかに見られるのみで他にはない。床面は礫が露出しているがほぼ平坦であり良好な状態である。

遺物 床面出土土器(図134-1~17)は大半がII群1類(諸磯A式)である。斜縄文のみのA(1~5)、竹管工具による文様施文のB~D(6~14, 図74-2)で、多少問題のあるのは斜縄文で雲母を含む例(図134-15)やII群2類的なもの(16・17)の伴出であるが、爪形文ある土器(9・10・12・13)も雲母を含んでいるので、II群1類としてよいであろう。覆土出土土器には繊維を含む斜縄文のI群4・5類A(図73-3, 134-19)や

B (18・20) もあるが、図示しない土器の大半はⅡ群1類A・Bである。また、図74-4は口縁部に押し引き爪形文を横走させ、胴部中央に円形刺突文をつけ、器全面に細かい縄文をつけた浅鉢で、製作・胎土など良好な土器である。なお、やや上げ底気味の余り平坦でない底部底面に、縄の原体のようなものが無雑作に印された例(21)がある。

石器は10点と少ない。石鏃4(図243-1~4)、小形磨製石斧(図268-7)、凹石5である。

出土土器は比較的単純であり、その大半を占めるⅡ群1類(諸磯A式)期をもって、本址の所属時期と決定してよいであろう。

(青沼 博之)

⑤1 119号住居址 (図49・74・135・243・267・278・280, 図版47)

遺構 調査区の南隅中央寄りに検出された住居址である。西隅は117号住に壁の上部を削り取られており、本址の床面上10cm前後のところに貼床され、北隅は133号住に幅30cm、長さ2.3m切り取られており、東北部は黒褐色土層を掘込んで構築されている、不整形な隅丸方形の住居址である。炉は中央やや西北寄りに位置し、上部で80×90cmの半月型で播鉢状に掘り込まれており、深さ53cmを測る、焼土の残存量はあまり多くない。周辺に散在する石があるが、炉縁石として使われたかは不明である。柱穴は不規則であるがP₁~P₄の4個である。壁は2つの住居址に切り取られ南隅から東側が残っており深さ45cm前後で、この部分は良好で他はよくない。床面は部分的に良く東隅から南隅にかけて15cm前後高くなっている場所がある。

遺物 土器、石器とも出土量は多い。床面と覆土出土土器に区分できるが、余り差はない。前者(図135-1~14)の主体となるのはⅡ群1類A~Eで、1片のみ4類B(13)がある。覆土出土例のうち、Ⅰ群5類B(18)とⅡ群4類C(31)を除くとⅡ群1類のみである。なお、底部底面に縄文の施文される例(14)がある。図示しない土器の中には、裏面に指痕が残り、赤褐色で胎土に金雲母を含み斜縄文あるⅠ群4・5類G(32)も数片あるが、他は同傾向を示す。

石器は、石鏃6(図243-5~10)、スクレイパー2(12・13)、小形磨製石斧、乳棒状磨製石斧、打製石斧2(図267-19・21)、敲打器類2、凹石5(図278-12)(うち1個は砥石に使用)、石皿2(図280-7)がある。石皿の1点は北約50m離れた98号住出土の石皿と接合した。

出土遺物から、本址はⅡ群1類(諸磯A式)期の住居址としてよいであろう。

(木下平八郎)

⑤2 122号住居址 (図51・136・243・273)

遺構 発掘区の西南境、重複した竪穴住居址群の北西隅に位置している。本址南隅に重複して114号住が上層より検出されている。炉は住居址の中心からやや北西寄り、60×42cmの径をもち、深さ6cmの浅鉢状のピットである。火床より焼土が2cmの厚さで認められた。柱穴はP₁~P₅の5本と思われるが、北東、南西部に柱穴がなく不規則な配列である。住居址の東に80×70cm、深さ32cmの大形のP₆が検出されたが、その規模や、本住居址の周溝によりピットの北西部がわずかに切られていることも考えあわせると、本址の施設ではなく、本址南外側にある土塚の一群ととらえた方がよいと思われる。本址の構築された位置より斜面が次第に急になっていくため、東北から東南にかけて周壁はなくなり周溝を残すのみである。傾斜の上方にあたる西南壁は20cmの高さで、ほぼ垂直に立ち上り良好な状態である。周溝は幅10cm、深さ5~8cmではほぼ全周するが、南西の一部で途切れている。この途切れた両端に小ピットがあるところから見て、この場所を入口と考えたい。周溝中には小ピットが並んでいる。床面は多少の凹凸があるが、ほぼ平坦である。遺物出土量は少ないが、住居址東の大ピットから、土器片とともに石匙(図243-16)が検出された。

遺物 床面(図136-1~20)と覆土出土土器が区分できるが大差ない。地文に縄文をもつ土器片が主体を占める。繊維を含んだ縄文のみのⅠ群5類A(図136-5・21)、所謂コンパス文の施こされたB(6~9)、半載竹管か棒状工具により、やや深めの横走る沈線が施こされ波状口縁をもつもの(26)にはすべて繊維が含まれているが量は少ない。数量的に中心をなすのは、繊維を含まず、縄文を地文としたⅡ群1類のA・B・D種に分類される土器片(1~4・10~16・22・23・25・27)である。その他、Ⅱ群B(17・18・28)は棕櫚状文が口縁に走り、黒褐色を呈す薄手の土器片である。黄味を帯びた胎土に粘土紐が貼付され、方形に区切られた窓の部分に丹彩が施こされている。Ⅱ群4類D(24)も1片ある。19は黒褐色を帯びた薄手の土器片で、地文は縄文で口唇部には刻目をつけ、口縁部には半載竹管による沈線が斜めに施こされ格子状文がつけられ、その下に横走る平行沈線がつけられている。類例が今までになく注意される土器であるが、Ⅱ群1類(諸磯A式)に比定される東海系の土器ではないかと思われる。20は浅鉢の底部で、内面に浅い条痕がつけられている。

石器は11点出土している。器種別数は石鏃3(図243-13~15)、横長の石匙2(16・17)、スクレイパー3(18~20)、使用痕あるフリク(21)、砥石(図273-6)、凹石である。その他玦状耳飾(図243-22)が出土している。玦状耳飾りは本遺跡で18個出土しており、住居址からは12点検出されているうちの1つである。図273-6は上質の緑泥片岩製で全面がきれいに磨かれている。両端が欠損しているため全体を知ることはできないが、側面の一方は約4mmの凹みで溝が長軸方向に走り、光沢を帯び磨かれており、溝には細かな擦痕が全面についている。もう一方は自然の割れが、深さ8mmで断面V字形に走り、内面の壁は擦りへらされている。両側面の溝に平行し右側の溝には二本、左側の自然面を利用した溝に一本、幅5~3mmの細い溝がつけられ、表面の平坦な面には斜め方向に擦痕がつけられている。類例を見ないが、特殊な磨石か砥石である。

本址の所属時期はⅡ群1類(諸磯A式)期としてよいであろう。

(青沼 博之)

⑤③ 125号住居址(図54・137・243)

遺跡のほぼ中央、用地内西隅に位置し、北東向傾斜面に立地する。ローム層上面で検出され、ローム層を掘り込んでいる。本址覆土上の東半は、奈良・平安X期の121号住がのる。本址の壁の一部を破壊しているらしいが、床面には影響がない。本址南東側が把えきれないのは、傾斜面谷向きで流失もしくは耕作時の破壊等が原因となるものであろう。

遺構 東側半分を失っているが、ほぼ円形のプランを呈する竪穴住居址である。壁はほぼ垂直で西南隅で壁高30cmを計測する。床はほぼ平坦で、若干礫がみられる。ピットは3個検出された。うち、P₁・P₃は柱穴の可能性が強いが、やや東に片寄った配置になろう。床面に残された礫は、配されたものとするよりローム自体に含まれていたものと解すべきであろう。屋外施設は検出されず、特記すべき状態の出土遺物はない。

遺物 出土量はごく少ない。土器はⅠ・Ⅱ群が出土している。Ⅰ群には、1類A(図137-2)、B(1)や図示しない中に2類A、3類F、4類もしくは5類Cがある。Ⅱ群には比較的良好な資料として4類B(5・6・8・9)、C(10)があり、4類に属するが詳細不明の尖底土器底部(7)もある。石器には石鏃(図243-23)と凹石があるのみである。

出土遺物からは時期が特定できず、前期前半と幅広くとらえておきたい。

(百瀬 長秀)

⑤④ 127号住居址(図51・137・243・244・267・274)

遺構 遺跡の北よりに検出された堅穴住居址で、東側を奈良・平安時代Ⅶ期の63号住に切られている。西壁が残存するのみであるが、P₃近くの壁で21cmの高さを持つ。残存する壁下には幅15cm、深さ4～8cmの周溝が存在し、ほぼ全周していた可能性がある。床面はロームであるが東半は破壊されている。中央の焼土を持つ楕円形で103×80cm、深さ23cmの火処は、63号住のカマドと考えた方が良いと思われる。むしろ、それに切られる浅い凹穴は幅43cm、深さ5cmで焼土等が存在したか不明であるが、本址の地床炉と考えられる。ピットはP₁、P₂、P₃が主柱穴と考えられ、4本の主柱を持った構造であったと推定される。床面は中央部へ7～10cmくぼむ。

遺物 出土量が多くない。Ⅰ群1類では繊維を多く含み、やや厚手のA～D(図137-11～14)、2類では薄手のA(15・16)、B(17～20)があるが、中には3類とすべきものも混在し、区分しにくい。繊維を含む5類A・B(21～23)のほか、4・5類C(24・26・27)、Ⅱ群4類A(25)がある。図示しない土器には無文のⅠ群3類A～C(28)もわずかある。石器では石鏃9(図243-24～32)、石匙(33)、スクレイパー2(34・35)、石錐(図244-2)、使用痕のあるもの(1)、打製石斧(図267-20)、凹石(図274-11)がある。

本址の所属時期は遺物の出土状況についての記録がなく、出土遺物も多岐にわたるため細別できないが、前期前半であることは確実である。 (伴 信夫)

⑤ 131号住居址 (図55・74・138・244・267)

遺構 発掘区北西用地境に位置しており、47号住が北西に隣接する。他の遺構との重複はなく、単独で検出された。傾斜地にあるため北西部のみ確認できただけで他は不明である。周壁は北～北西にかけてのコーナーを含む一部分が確認できたのみで、壁高も15cm前後と低く次第に消滅してしまう。北壁には1m前後の自然堆積した大石があり、壁の一部として使用されている。周溝はない。住居址の中心より北寄りに60×50cm、深さ6cmの不整楕円形ピットの中と、そのすぐ北東横に焼土が検出されたが、炉址はこの浅いピットと見ることができる。他にピットは西南壁に接し3、北壁に2検出されているのみで、全体を知り得ないが、ピットの深さ等から、P₁・P₂を柱穴と見ることができ、5～6本の主柱穴をもつものと考えられる。

遺物 Ⅱ群2類土器を中心とする。図74-6は鉢形土器で、北西壁のコーナー近くに床面に置かれた状態で出土した。底部から胴部へ外傾した胴下半部と直立する上半部をもち口縁部はほぼ直角に近い角度で内傾し、口唇部に焼成前にあけられた孔が1個ある。千葉県飯山満東遺跡に同型の鉢が出土しているが、口唇部に穿孔されており、90度毎か180度毎に2～4個あるのを見れば、おそらく180度の位置に、もう1孔があけられていたものと思われる。外傾する胴下半部にのみ縄文が施され、無文の胴上半部と内面は、ていねいに研磨されている。同形の例(図138-20)もある。Ⅱ群2類Aの土器であろう。また、半載竹管による爪形文を中心に施文されるB(1～6・11～13)、平行沈線文の施されるC(7～10・12)、浮線文が施されるD(14～16)、爪形文・浮線文の組合わさったもの(19)などが中心となる。胎土は黒褐色を呈し、ほとんどの土器が雲母を含んでおり焼成は良好である。黄褐色を呈す胎土をもち、薄く堅い焼成で、器面表裏には丹彩が施されている。Ⅱ群4類A(17)や、半載竹管による連続押し引き文が連弧文を描き、やや厚手となり、胎土に繊維を多量に含み、焼成もやや甘いⅠ群5類B(18)などもある。

石器は、石鏃13(図244-3～15)、石槍(16)、石匙5(17～21)、スクレイパー(22)、石錐5(25～29)、使用痕ある剥片2(23・24)、打製石斧(図267-27)、乳棒状石斧、凹石2、敲打器(22)などと32点、装飾品では玦状耳飾3(30～32)が出土した。小形石器の出土量が多く、本遺跡で9番目に多い数の出土である。また、玦状耳飾

が一軒の住居址より3個出土したのは本址のみである。

出土遺物より、本址がⅡ群2類（諸磯B式）期に属することはまちがいない。（青沼 博之）

⑤⑥ 132号住居址（図36・139・140・245・272，図版41）

遺跡内南端に近く、センターライン東沿いに位置し、北東向き傾斜面に立地する。143号住の床面で検出され、礫混じりのローム層に掘り込まれるが、恐らくは135号住覆土中より掘り込んだものであろう。本址周辺の遺構の切り合いは75号住の項に記した通りである。本址と直接切り合うのは、134号住・135号住である。両者の床面で本址との切り合いを確認した。本址覆土中には貼床など、床面の延長施設は認められないため、本址が両者を切っているものと判断した。

遺構 径3.0×3.4mと小形の堅穴住居址である。壁は135号住覆土中に造られたものとみられるが埋土中では把握できなかった。残存部はほぼ垂直で、南壁の143号住を切る付近では壁高20cm程度、135号住床面を切る付近では壁高5cm前後を、それぞれ測る。周溝は認められない。床はロームで堅く固められ遺存状態は良好である。床面のピットは11個あるが、柱穴の可能性があるのはP₈・P₉・P₁₄・P₁₂・P₁₃とP₁₄の北西に接するピットである。このうちP₁₄北西のピットは86号住に、P₈・P₁₃は135号住にそれぞれ属する可能性がある。一応不整形の配置を示すが、間隔のバランスが悪く、柱穴と断定しきれない。P₁₀・P₁₄はそれぞれ大きめのピットだが性格は不明である。炉は検出されず、屋外施設も検出できない。

遺物 土器の出土量は比較的多く、Ⅱ群1類を主体とする。床面（図139）と覆土（図140）に区別されているが、ほとんど差はない。Ⅱ群1類A（図140-9）は図示しないものに多い。B・Cは良好な資料が多いがEは少量（15・17）である。B・Cの中でも爪形文がやや大きくなり、爪形文帯間が多少隆帯となりその上に刻目や刺突を加える一群（図139-11~19，140-7・10・13）などは、2類B~Dに含めてもよい例があり、一方、1類Bの爪形文帯による磨消縄文ある一群やCの円形竹管文ある一群も、やや文様構成上からみると後出の傾向が認められ、1類（諸磯A式）でもその後半の時期を考えるとよいのではないか。ちなみに、伴出する西日本的なⅡ群4類（北白川下層式）では、Aとした棕櫚状爪形文はなく、B（図139-20・21）やD（図140-19・20）のみである点を指摘できる。

石器には、石鏃6（図245-1~6）、石匙4（7~10）、使用痕のある剥片（11）、定角石斧、敲打器Ⅵ類（図272-10）、石皿2がある。

出土遺物からみて、Ⅱ群1類（諸磯A式）後半の時期に属する住居址であろう。（百瀬 長秀）

⑤⑦ 135号住居址（図36・141・245・278，図版41）

遺跡内南端に近く、センターライン東沿いに位置し、ほぼ北東向き傾斜面に立地している。75・86号住覆土中~礫混じりのローム層最上面で検出され、ローム層中に営まれる。本址と直接切り合うのは、75号・86号・132号・143号住及び土坑173・174である。このうち前三者との関係は⑤④・⑤⑥・⑤⑥に述べた通りで、本址は75号・86号住を切り、132号住に切られている。143号住との切り合いは同址床面で初めて確認された。本址覆土中には貼床等の143号住の床面の延長施設は確認されなかったため、本址がこれを切っているものと判断した。次に土坑173・174は、本址床面で切り合いを確認したが、前者は縄文時代後期堀ノ内式土器を、後者は同中期曽利式土器をそれぞれ伴っており、本址が切られていることは明白である。

遺構 プランが不明な堅穴住居址である。壁はほぼ垂直で、西壁で壁高15~20cmを測る。周溝は西壁下に残存する。幅10cm前後、深さは10cm弱である。床はロームで堅く固められる。壁・床ともロームに含まれている礫が突

出する。本址に属するのが明白なピットは、土坑173に隣接する1個のみであるが、132号住のP₈・P₁₃は本址の柱穴である可能性が残される。根拠が全くないため判断しかねるが、どちらの住居址に属するにしても、柱穴の配置は不整形となる。炉址は本址中央が132号住に切られたため全く確認できない。屋外施設は扱えられず、特記すべき状況を示す出土遺物はない。

遺物 出土量は少ない。図示しなかったものを含めて土器では斜縄文の繊維を含むⅠ群4・5類A(図141-1~3)は少なく、他はⅡ群1類A(6~8)・B・C(4・5)が主体となる。石器には、石鏃(図245-12)、使用痕のある剥片(13)、凹石(図278-13)の三点のみである。

出土遺物や切合関係から判断してⅡ群1類(諸磯A式)の時期の住居址であろう。(百瀬 長秀)

⑤8 138号住居址(図12, 図版35)

遺構 平安期の18号住に、ほぼ床面同一レベルまで掘り込まれ、縄文前期21号住と切り合っている。床面は一部黒色土中にあり、傾斜や切り合いのために詳細はほとんど明らかにしえない。中央部の焼土面を炉と考え、一辺5m程度の方形プランを推定しただけである。ピットの帰属も明らかでない。中央部に残るやや安定した床面は18号住のものである。

遺物 Ⅰ群3類土器を少量出土しており、遺物からすれば、本址を21号住が切ったことになる。その場合、21号住の部分的貼床を本址が切ったかのようになることは、攪乱などによるものとするほかはない。石器の出土はない。

遺物は少ないが、一応Ⅰ群3類(中越式)期の住居と考えたい。(土屋 積)

⑤9 139号住居址(図32・142・245)

遺構 発掘区中央部北寄にある。67号・101号住、土坑116などに切られ、大半が失われている。幅20cm、深さ10cm程度の周溝を残すのみで、壁は残していない。柱穴は明確には指摘できず、床面は平坦である。炉も残存しない。住居址であれば方形にちかいプランを持ったものであろう。

遺物 土器は図示した以外は余りない。無繊維で斜縄文あるⅡ群1・2類A(図142-6~20)が主体となり、わずかにⅠ群3類D(1)、Ⅱ群1類B(2)・D(3・4)や、1類か2類の無文浅鉢(5)がある。なお、該期に伴うⅡ群4類D(22)が1片ある。石器は、石鏃2(図245-19・20)、スクレイパー(22)、有袂顕磨石器(23)、使用痕ある剥片類2(24・25)、凹石とがある。

Ⅱ群1類(諸磯A式)期の遺構であろうが、住居址と断定はできない。(土屋 積)

⑥0 141号住居址(図46・143・246・269)

遺構 発掘区中央部西端にある。北半は116号住、土坑123に切られ、南半は傾斜面のため大半が失われている。ピット3箇所があるが、そのうちP₁は本址の柱穴と考えてよいだろう。残存部で現壁高25cm程度で、幅20cm、深さ15cm前後の周溝がめぐる。床面は平坦である。炉は残存しない。隅丸方形にちかいプランを持ったものであろうか。

遺物 土器量は少ない。Ⅱ群1類Aの斜縄文ある土器(14~24)である。石器は石鏃6(図246-1~6)、縦型石匙2(7・8)、石錐2(16・17)、使用痕ある剥片類7(9~15)、定角石斧(図269-C1)がある。繊維を含むもの(図

遺物 土器量は少ない。繊維を含むもの(図143-13)や無文に近く竹管による刺突や刻目のあるもの(11・12)、押しきのある凸帯をもつ例(25)や薄手のⅡ群4類A(26)を除くと大半がⅡ群1類Aの斜縄文ある

土器(14~24)である。石器は石鏃6(図246-1-6)、縦型石匙2(7・8)、石錐2(16・17)、使用痕ある剥片類7(9~15)、定角石斧(図269-C1)がある。

出土土器からⅡ群1類(諸磯A式)期に所属させてよい住居址である。(土屋 積)

⑥1 143号住居址(図36)

遺跡内では南端に近い、センターライン東沿いに位置し、北~北東向きの傾斜面に立地する。86号住居土中より掘り込まれたものとみられ、同址覆土~ローム層中にかけてつくられている。本址周囲にある諸遺構の切り合いについては75号住の項に記した通りである。本址と直接切り合うのは、**86号・135号・132号住**である。これらの諸遺構との関係も、それぞれの項に記した通りで、覆土中に86号住がつくられ、132号・135号住に切られている。なお、本址西壁のうち北側は135号住にそっくり切られてしまったものと考えられるが、**75号住**はまず本址に切られ、次いで135号住に切られたものであろう。また、132号住は135号住を切ると同時に本址の一部を切っている可能性がある。

遺構 諸遺構に切られてその大半を失なった堅穴住居址である。残存する壁は高さ8cm程度、床面はロームで堅く良好である。その他、記述すべき内容をもたない。

遺物 全く出土していない。切り合い関係からみて、Ⅰ群5類(黒浜式)もしくはⅡ群1類(諸磯A式)のいずれかのものであろう。(百瀬 長秀)

⑥2 堅穴1(図14・144・246, 図版48)

遺構 用地内北隅に近い緩傾面の低い位置に単独に検出された。東西3.2m、南北3.0mの不整形円形を呈する。小礫まじりのロームを北側から西南側までは約20~30cm掘り込んでいるが、東半分は5~10cmと浅く、一部大石を周壁に利用している。床面は比較的堅く、ほぼ平坦であるが、北西部に大きなP₂・P₃があり、残る部分は拳大の石が一面に散在し、一部周壁外へも及んでいる。これらは床に密着したり、やや浮いたものもある。柱穴や炉址・周溝などはない。北西壁中にあるP₁は、柱穴としては大きすぎ、やや性格不明のピットである。形状や内部施設などから住居址とせず、堅穴とした。

遺物 すべて覆土出土である。土器は無繊維のⅠ群4類C(5)、4・5類C(2・4)と、繊維を含む5類A(1・3)、やや時期的に下るⅡ群2類D(6)、Ⅳ群2類が数片ある。図示以外の土器も含めて、主体となるのはⅠ群5類で、金雲母を含み裏面に指痕を残す4・5類Gも少なくない。石器は、石鏃3(図246-18~20)、石匙の半欠(21)がある。(樋口 昇一)

⑥3 堅穴2(図13・246)

遺構 用地内中央部の北隅に近く、緩傾斜面の低い位置に縄文前期の**19号住**の東壁側を切って検出された。**土坑79・82・98・99**と切り合うが、調査の所見では、すべて本址より後出のものらしい。長径3.2m、短径2.8m程度の不整形及び台形を呈している。耕作土が浅いため、攪乱が床面直上まで及ぶ部分もあったが、周壁は全体に20cm~10cmと浅い掘り込みだが、比較的よく残っていた。ピットはP₁~P₆までであるが、柱穴の形状をもつP₁(-25cm)・P₂・P₃はその配置に難があり、他は浅すぎたりして性格がつかめない。床面は良く固められており、ほぼ平坦である。周溝や炉址は確認されていない。堅穴1と同様の理由で、住居址としなかった。

遺物 土器はなく、石鏃(図246-22)と使用痕ある剥片(23)のみで、所属時期を明確にできないが、ほ

ほ縄文前期としてよいであろう。

(樋口 昇一)

⑥④ 集石 1 (図27・144・246)

遺構 遺跡用地内北隅にあり、16号住の覆土である褐色土中から検出された。なお、本址の付近には古墳時代の9号住が貼床をして築かれており、畑の耕作の影響もあり、結局集石の深くに残った部分を調査したのみにとどまった。本址の範囲は、ほぼ4m×3mの楕円形状に広がっており、集められた石は、一辺50cm前後の板状の石から、人頭大、こぶし大程の石が、ほぼ平面上に不規則に散在し、遺物は、その石の間から出土しており、集石下には、土壇と確認できるものはなかった。なお、本址に先行する16号住居址の床面から40～60cm高いレベルで集石は見当らなくなり、それを本址の限界とした。

遺物 集石の散在する範囲内からの遺物を本址のものとした。土器のなかで図示できうるものはすべて無繊維の縄文のみのものである。6点とも雲母を含んでおり、9～11は若干薄手で、色調が黒灰色～白灰色、焼成やや不良という点でよく似ており、12・13は、外面黒褐色、内面赤褐色で指頭圧痕を若干残し、胎土、焼成共に良好で堅緻、金雲母を多量にみせている。ともにI群4・5類Gとしてよい。石器は、石鏃7(図246-24～29)と、使用痕のある剥片(30)である。7点の石鏃は、6点が黒曜石製であり、有柄凹基である。31は、有柄円基であり、先端にドリル様使用痕が観察される。

本址は、遺構の状態から推測すると、16号住が廃屋となり、埋没途中の凹地へ石と遺物を意識的に集めたと考えられる。16号住に多いI群3類C・D種はなく、それより新しい時期としたい。(高桑 俊雄)

⑥⑤ 集石 2 (図12・145)

遺構 発掘区北部138号住北東に接している。人頭大から拳大の円礫十数個が不規則に散在する。ローム面をわずかに掘りくぼめて礫を置いているようであるが明確でない。1.4×0.8m程度の楕円形となるが西側は138号住に切られた可能性がある。

遺物 図145-4はローム面に密着して出土しており本址に伴うものと考えられ、I群4類あるいは5類のCあるいはGである。集石付近で検出された土器片には繊維土器(2・3)がかなりあり、他にI群3類の無文土器や細線文土器、乳房状尖底(1)もあり、混在している。

(土屋 積)

⑥⑥ 集石炉 1 (図41・144)

遺構 用地内の最も南隅84号住の東北隅の外に検出された。1.1m×1.0mのほぼ円形で、ローム層を約45cm播鉢状に掘込んでいる。底面から10～15cmに細粒炭の混入する黒褐色土層があり、一部に黄褐色土層が認められた。その上に平石を敷き、その中に入頭大よりやや小さい礫が十数個つめ込まれている。石は炭で黒く汚れており表面は焼けてわずかにもろくなっている。

遺物 縄文と沈線文あるII群2類に似た土器片1片(図144-7)のみである。集石最上部の10cm位上から出土しており、本址に伴うものか不明である。したがって時期決定はできない。(木下平八郎)

⑥⑦ 方形配列土壇群 (図65・14・7, 図版53・54)

発掘の段階では単なる土壇として処理したが、その後、諏訪郡原村阿久遺跡の調査によって「方形配列土壇群」が発見され、ほぼ同時期の本遺跡にも類似例があることが確認された。しかし、複雑な切り合い関係のある一帯の上、当初から意図的な調査を実施してないので不明確な部分が多い。

用地内遺跡部分の北隅、北向きの緩斜面上に位置し、付近は住居址群が密集する。古墳時代Ⅱ期の**9号住**、縄文前期の**20・23号住**と重複し、切り合い関係をもつ。北東側が一部用地外であり、かつ、9号住床面下も調査しなかったので、完形とはならない。

主軸方向をN-50°-Wとすると、北西（短）辺5.2m、南西（長）辺6.6mの方形を呈し、阿久例などとほぼ同規模である。北西辺は、ほぼ直線的に土坑10・9・12・17・18・19と並ぶが、土坑9は10・12に切られて、かつ浅すぎるので除外してよいであろう。すると真中の12・17・18は壁を接し、両端に10と19があり、5個となる。これに対面する南東辺は土坑23・24・26の3個のみで、残り2個が用地外となる。24がやや浅すぎる点問題があるが、ほぼ規則的に並ぶ。一方、西南辺は土坑22・27の2個であるが、27は3箇の連結であり、中間の深さ37cmの部分で27a・次の52cmを27bと仮稱すると、22・27・27a(b)の3個となり、既出例と合致する。ただ、この西南辺の3個は、穴の穿ち方がややナベ底状で浅い点が指摘できる。これに対面する北東辺は、先述したように9号住の貼床面までの調査のため、未検出となっている。一方が開く「コ」の字の配列とすべきか、貼床下の存在を考慮して、既出例などと同様の方形配列とすべきか決定できない。

本址を形成する各土坑出土遺物は土器・石器があるが、土器は大半がⅠ・Ⅱ群の縄文前期である。詳細については巻末掲載一覧表を参照してもらい、以下、簡単に問題点を指摘したい。まず、土坑自体の形態面では、平面形が円・方・楕円など不統一であり、かつ穴の掘り方も、北西辺を除くと既出例より不揃いである。ただ、1m以上に及ぶ深さがなく、全体に浅い傾向にある点は、現地形からみて耕作による削平を考慮してよいであろう。土坑各個の土層断面図が作成されていないので、阿久例に顕著な柱痕跡などについては不明である。プランでは、南西辺の3個が、他辺に対し、やや直線的でない点がかかる。時期的な点では、20・23号住（Ⅱ群1類-諸磯A式）を土坑27が切るという調査時の記録を認めると、本址は少くとも前期中葉以後の構築となる。阿久遺跡検出7例は共にⅠ群3～4類（中越式・関山式）期であって、Ⅱ群まで下るものはない。この点、本址の時期決定には大きな問題が残る。なお、本址以外にもそれらしき土坑群があるが、深さや形態面で相違点が多く、取り上げない。（樋口 昇一）

イ）縄文時代中期

① 26号住居址（図15・74・96・226・227・266・267・270・277・282，図版36）

遺構 遺跡地用地内の東縁ほぼ中央付近、STA108+80の東に検出されたが、さらに西に点在する50・50・65・100号住と同一時期の一群をなしている。北への傾斜地が、一度ほぼ平坦になっているところにロームまで掘りこまれた竪穴住居址であり、本址西隅は後世の**集列石**によって深く削り取られた状態になっている。床面は叩き固められ炉の北側部分が若干高めとなっている。周溝はなく、柱穴は、P₁・P₂・P₃もしくはP₄、それに集列石で破壊された部分にあったと推定される1個の計4本であろう。炉は中央奥寄りにある輝石安山岩を組み合わせた1.2m×1mの方形切炬燵状石囲炉であり、内部より若干の動物の骨片とⅢ群の土器片が出土した。南東の壁より20cm内側の床面に、円板状の石の蓋を持つ正位の埋甕がある。土器は底部の細くなる深鉢で口縁部が欠きとられるが底は抜かれていない。内部には覆土よりもやや黒味の強い土が充満するが、遺物、石片等は認められなかった。この埋甕のある側の壁下に周溝が半周する。また、調査時の所見では、東から南西の壁近くより多量の焼土があったことから調査者は火災にあった可能性を指摘しており、また、本址上面は、後世の流れこみの大石や礫におおわれていたとある。

遺物 比較的多い。土器はすべてⅢ群3類で、南信地方に多い唐草文のついた埋甕（図74-7）や周溝内より伏さった状態で出土した小形深鉢（8）の底部は、胎土・製作とも良好である。覆土内出土土器（図96-12~16）も含めて曾利Ⅱ式併行が主となる。石器は出土量が多いが、問題もある。床面出土品は石鏃1点（図226-20）のみである。石鏃17（20~35）、石槍（37）、石匙2（38・39）、石錐（図227-1）、使用痕あるもの3（4・5）、石核（7）、スクレイパー3（1~3）、打製石斧9（図266-3・8・10, 267-32・33）、定角石斧、乳棒状石斧3（図270-11）、凹石7（図277-6）、敲打器など49点がある。このうち石鏃などを含めて、斜面上方に広がる縄文時代前期の遺構からの流れ込みを想定する必要があるだろう。しかし、打製石斧や凹石の数の多い点は、本址の時期を示すものであろう。なお、図227-1は先端部をもち、石錐としての要素も兼ね備えているスクレイパーでもある。土器片錘2（図282-3・4）がある。

本址は、埋甕や炉の形等から、Ⅲ群3類中の曾利Ⅱ式期の住居址としてよいであろう。（小池 孝）

② 49号住居址（図23・74・231・279）

遺構 発掘区西北にあり、西側は用地外のため未掘、北半は傾斜面のため遺存しない。検出された部分では他遺構との切合はみられないが、本址廃絶後、その覆土上に奈良・平安時代Ⅶ期の53号住が、北半部に重複する形で作られている。浅いピットが4箇所にあるが、そのうちP₁・P₂は柱穴としてよいかもしれない。残存する南側で現壁高16cm前後で外傾する。周溝は幅18cm前後、深さ8cm前後で検出部分では全周する。周溝中には小ピット多数がある。床面は平坦であるが、北側へやや傾斜する。炉は残存しない。

遺物 床面中央から底部を欠失した深鉢が押しつぶされたかたちで出土している（図74-9）。中期初頭、梨久保式に含まれるものであろう。この他、同時期の小破片が数片あるのみである。石器は石鏃4（図231-22~25）、縦型石匙（26）、スクレイパー（27）、珧状耳飾（28）、定角石斧、凹石3（図279-2）が出土した。

遺物量は少ないが、Ⅲ群1類中期初頭（梨久保式）期の住居址は本遺跡で唯一である。（土屋 積）

③ 50号住居址（図25・74・107・231，図版38）

遺構 26・65・100号住と同時期の一群をなす本址は、遺跡地用地内のほぼ中央やや西寄りにある。付近は北への傾斜地となっており、北東隅で68号住、北西隅で66号住のいずれも縄文時代前期の住居址の上に重なり、南西隅を奈良・平安期の142号住に切られている。堅穴住居址であるが、覆土が浅く床面と推定されるところまで耕作がおよんでおり、南側の一部の壁と周溝、それに炉と柱穴が検出されたのみで、発掘時の所見では床面もプランも不明としてある。本址に伴うと判断されるピットから推定して、N-48°-Wに長軸をもつ6.8×6.2mの楕円形のプランを呈するものと思われる。柱穴はP₂・P₃・P₄・P₁₀・P₆とP₈かP₇の6本であろうがP₂・P₃・P₁₀・P₈とP₇の状況からみて数回の柱穴の移動を伴う建てかえが考えられる。床面は、縄文時代前期の住居址と重なる部分でその存在がわからなかったほど軟弱であり、内側で110×70cmの長方形石囲炉と思われるものも平石を床上に置きならべたかのような状態でしか確認できなかった。そして、その内部と周辺に焼土が検出された。

遺物 出土量は少ない。土器はいずれもⅢ群3類（図74-10, 107-1~11）であり、図74-10の図上復元したものと図107-1~5が床面、図107-6~11が覆土より出土した。石器には石鏃5（図231-29~33）、石匙（34）、スクレイパー（35）の7点があるが、縄文時代前期の様相が多分にみられ、斜面上方からの流れこみも考えねばならないと思う。

床面出土土器や炉形態より縄文中期Ⅲ群3類（曾利Ⅱ式）期の住居址と推定される。（小池 孝）

④ 65号住居址 (図31・75・78・112・233・267, 図版39)

遺跡のほぼ中央、センターラインの西側10m程に位置し、北東～東向き斜面に立地する。拳大の礫相当量を含むローム層の最上面で検出され、同層を掘り込んでつくられている。本址の廃絶後、その覆土を掘り込んで、奈良・平安時代Ⅳ期の62号住がつけられる。また、本址を切って、須恵器杯・灰釉陶器瓶・近世陶器皿を有する土坑120がつけられる。

遺構 ほぼ円形のプランを呈する竪穴住居址である。壁はほぼ垂直で、南西壁で壁高20cmを測るが、斜面谷向きの北東寄りでは壁が確認できなかった。周溝は2本残されている。その1本は南西壁を中心に壁直下を $\frac{1}{4}$ 周し、幅10cm弱、深さ5cm程である。もう1本は幅15cm、深さ10cm程で、南西壁より40cm程内側に、やはり $\frac{1}{4}$ 周する。床の南西側はローム層を堅く固めてあるが、壁が不明瞭となる東北側は黒色土層を床とするため、確認できなかった。

床面で検出されたピットは12個ある。柱穴は P_1 ・ P_2 ・ P_3 の可能性が強く、住居址南東隅の黒色土床面にもう1個の存在を想定すれば4本柱を方形に配置したものと考えられる。また、 P_3 も柱穴とすることも可能で P_1 から P_3 へ建て替えられたという想定もできる。 P_4 は本址の付属施設なのか、全く別の土坑なのか確認し得なかった。炉は住居址のほぼ中央、いく分か北西寄りに方形石囲炉が築かれる。この炉は二重構造を示す。外側は径1.3×1.1m、床面からの深さ30～35cmの方形を呈し、北西辺のみ縁石が残される。この縁石は幅20、長さ50、厚さ40cmの板状で、炉の底に接して据えられ、頭は床上10cm程出ている。この炉の内側に、径100×90cm、床よりの深さ50cm弱の方形の掘り込みが残される。確認はできないが地床炉もしくは縁石を抜かれた石囲炉の残骸の可能性がある。炉が同位置で拡張された可能性が残される。内側の掘り込み内には焼土が残されていた。また、炉内より深鉢形土器1個体(図75-1)が出土した。

住居址南東壁際、床面がローム層から黒色土層に変わる付近より、新・旧2個体の埋甕が並んで発見された。旧埋甕上面にはロームが貼られ、新埋甕設置の折には床とされたものらしい。旧埋甕は深鉢形土器下胴部(2)を正位に埋めており、径は15cm、底部は残されている。新埋甕はより壁に近づけて設けられており、深鉢形土器胴部(図版79-1)を正位に埋め、底部は欠損する。共に上端は床面と同レベルで、内部は黒色土が埋まっている。後者内部より黒曜石フレイクが1点出土した。二重の周溝と炉、柱穴と埋甕の在り方等からみて、一回の拡張がなされたことが推定しうる。屋外施設は検出できなかった。

遺物 土器と石器がある。土器は総てⅢ群3類(図112-16-21)に属する。埋甕に用いられたもの(図75-2)を含め、いずれも、曾利Ⅱ式に比定し得る。石器には、石鏃3(図233-7-9)、石匙2(10・11)、スクレイパー2(12・13)、石錐2(17・18)、使用痕ある剥片3(14-16)、打製石斧(図267-26)、凹石がある。

出土遺物からみて、Ⅲ群3類(曾利Ⅱ式)の時期の住居址である。

(百瀬 長秀)

⑤ 100号住居址 (図22・75・125・238・282, 図版46)

遺構 遺跡のほぼ中央に検出された竪穴住居址で、奈良・平安時代Ⅶ期の45号住によって切られ、耕作によって攪乱され、南東部の一部を残すのみである。残存部壁高は9cmで、床はロームの軟弱な貼床である。埋甕があり内部から黒曜石フレイクが出土している。調査時の記録によると壁残存部の東端の内側に径40cm、深さ45cmの柱穴と更にもう1個検出されているが、本址に伴うものか不明としている。また、径5m程の範囲内の西側の完全に攪乱部を除き、 $\frac{3}{5}$ 程の床面は部分的に床面が残っており、焼土部がほぼ中央にあったとしている。

遺物 埋甕(図75-3)は胴最大径37cm、残存高42cmの深鉢で唐草文と綾杉文で埋めるもので、Ⅲ群3類である。他に小破片少量(図125-1~7)があるが、同時期のものであろう。石器では石槍(図238-14) 1点のみ床面から出土した。この時期では数少ない出土例である。他に土器片錘(図282-16)がある。

出土土器よりⅢ群3類(曾利Ⅱ式)期の住居址であろう。

(伴 信夫)

ウ) 縄文時代後期

① 38号住居址(図20・75・78・97~100・229・266・267・268・273・274・278・279・282)

遺跡中央の用地東はずれに位置し、東ないし北東向き傾斜面に立地する。ローム層最上面で検出され、同層を掘り込んでつくられている。本址付近に堆積するローム層は拳大程度の礫を多量に含む。本址は、縄文後期の39号住及び奈良・平安Ⅵ期の40号住と切り合っている。39号住は本址東寄りの一部を切り、本址より低いレベルで床をつくっている。40号住は本址東南壁から覆土にかけて掘り込み、本址とほぼ同じレベルで床をつくっている。

遺構 円形プランを呈する。壁はほぼ垂直で、15~20cmの壁高を測る。周溝は認められない。床は礫含みのローム層のため、やや荒れた状態を呈する。礫の突出をおさえるため、一部にロームが貼られた可能性がある。床面で検出されたピットは15個で、柱穴の可能性が有るのは、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_6 \sim P_8$ の6個である。配置は、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_7$ か、もしくは $P_8 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_6$ を結ぶ方形が考えられる。 P_9 は径85×65cmの方形ピットで、安易に貯蔵穴の名称を与えることはできないが、大形のものである。炉は方形を呈するとみられる石囲炉が住居址中央につくられている。径70×50cmの浅く掘り込まれたピットの四周に、幅20cm、長さ30cm、厚さ20cm程度の板状礫を配している。礫は原位置から動いたものであるが、三方に残されていた。炉内からは若干の焼土と共に、小形の深鉢形土器1個体(図78-4)が出土した。本址の営なまれた時期決定の根拠となろう。屋外施設は検出されなかった。

遺物 土器は総てⅣ群に属するものである。1類(図97-19)、2類(11~13・16・20)、3類(14・15・21、98-1)、4類(図78-4~6、98-11~20・23・24、99-11~14)、5類(図78-7、99-1・5・6・8・15・16、100-3)、6類(図100-1・2・4~6)がある。

石器には、石鏃4(図229-1~4)、石匙4(5~8)、スクレイパー4(9~12)、石錐3(15~17)、使用痕のある剥片2(13・14)、軽石(19)、装飾品(18)、石錘10(20~29)、打製石斧6(図266-1・4、267-24)、小形磨製石斧3(図268-10・19)、定角石斧、乳棒状石斧2、凹石16(図274-6・7、278-2、279-9)、磨石2(図273-18)、敲打器Ⅲ類2、軽石、海浜石などがある。石錐の多さが目立つ。土器片錘5(図282-6~10)については土器片錘一覧表を参照されたい。

出土遺物の時期は多様で限定は難しいが、4類に属する小形深鉢が炉址内より出土しており、同類の土器は量的にも多いため、4類(加曾利BⅠ式)の時期を中心として営なまれた住居址と考える。(百瀬 長秀)

② 39号住居址(図20・75・101・230)

遺跡中央、用地内東端に位置し、東~北東向き傾斜面に立地する。礫含みのローム層最上面で検出され、同層を掘り込んでつくられている。半分は用地外へかかるため完掘できなかった。本址は縄文後期の38号住を切り、本址覆土を掘り込んで奈良・平安Ⅵ期の40号住が造られている。

遺構 楕円形プランを呈するらしい。壁はほぼ垂直で壁高20~25cmを測る。周溝は認められず、床はほ

ほぼ平坦である。西壁ぎわのみ礫含みのローム層がそのまま床とされ、やや荒れた様相を呈する。他は黒色土上に薄くロームを貼った部分が局部的に残されている。部分的にも貼床がなされたらしい。床面のピットは1個のみ発見された。P₁は柱穴の可能性が高いが配置は全く不明である。炉は未確認である。南壁付近に焼土が検出されたが、これは40号住のカマドに伴うものであろう。特記すべき出土状況を示す遺物はなく、屋外施設も検出されなかった。

遺物 土器は総てⅣ群に属する。その中で分類に従うと、2類(図101-1・4)、3類(2・3)、4類(5)、5類(10~12・14)、6類(6~9)に分けられる。石器には石鎌4(図230-1~4)、石錘4(5~8)、乳棒状石斧、横刃、磨石と量は少ない。

38号住を切ることや、出土土器より判断し、5~6類の時期の住居址であろう。(百瀬 長秀)

③ 81号住居址(図58・59・61・75・78・118・236・282, 図版42)

用地内遺跡の南隅、北東に緩傾斜する部分に、137号・107号住と切り合って検出された。傾斜地のため耕作が深くまで達し、かつ、石が多く調査は難行した。まず、3軒の竪穴の先後関係を結論づけると、107号→137号→81号住となり、本址が最も新しい。本址付近の層序関係は厚さは一定しないが下からローム、褐色土、黒褐色土、黒色土(耕土)とはり、褐色土は部分的存在であり、耕土と黒色土とは判別つかない所が多い。最上部に作られた本址は、黒色土層中にあり、平面的には137号・107号両住居址の東南部に重なるように、主軸方向をやや変化させて構築された敷石住居である。

遺構 住居址北東側 1/3 程度は、傾斜地の低い部分になり、敷石部の残存もあるが、耕作による攪乱をうけ、周壁などを推定できる痕跡はなかったが、ほぼ直径3.5m~4.0mの円形に近いプランとなろう。しかし、北西壁付近の縁石がやや直線的であり、隅丸の方形も考慮される。最大長さ60cmから、人頭大の手頃な平板石を敷きつめた部分は、先の直線的な北西壁側の一列の縁石につづいて、南西から南壁付近まで連続し、また、住居址中心部の炉付近に一群、傾斜の低い北側に比較的大形の平石が散在的に残っている。炉址から南側にかけてはやや耕作土が深いこと、北側は大形の石のため残存したとも考えられる。これらの敷石の大半は、多少の高低や、耕作による移動もあるがその上面は平坦であり、黒色土中に据えられた状態のものも多かった。また、縁石には、裏ごめの礫らしい一・二を見出すが、典型的な箇所はほとんどない。敷石のない部分の黒色土は、炉址付近の一部に踏み固められたらしい堅い面もあるが、全体的に床面状でなく、ざりとて敷石が抜き取られたという積極的な痕跡も見出されなかった。周壁は、残存する南西側で、敷石上面より数cm前後高い107号住のロームの床面部を利用しているが、南側は107号住の周壁と重複し、その区別がつきにくい。他は黒色土中のため立ち上りなどは明確に検出できなかった。

炉址は、ほぼ住居址中心部にある。一辺約80cmの方形石囲みの中に、口縁部を欠く大形土器(図78-8)を敷石上面からは15cm深く埋めこんで使用している。土器内部や石囲い中に焼土・灰が少量検出された。なお、この炉址は、炉体土器の 2/3 以上がかくれるように、石囲いに使用した石を上にかぶせてあり、かつ、石囲い石の一部もくづしてあった。住居廃絶時の人為的な痕跡とも考えられるが、本址の検出時の状況から結論は下せない。床面上には炉址以外、柱穴・ピットなど検出できなかった。調査時点では、本址に伴う柱穴的ピットとして、後日検出したローム層中の P₁₄ と P₁₆ をあてていたが、周壁に重なり、対象的位置にある以外、その検出面が黒色土との根拠がつかめず、参考にとどめたい。また、炉址の南西部、即ち入口部と考えた北東部からみると奥壁に当る部分には、大形の平板石が横たわり、その下部はロームを掘り込んだピットとなり、何かいわくありげであるが、両者の関係に同時性を示す証拠もなく、ここが137

号住と重複する部分でもあり、指摘するにとどめたい。

以上、本址は、137号・107号住を黒色土で埋め、その上に構築された敷石住居と認定したが、断面図でもわかる如く、基盤となるローム層も本址のプランに重なるよう掘り込まれた部分もあり、他住居址と重複はするが、本址構築時に、ローム層に達するような「掘り方」的な作業が実施されたものか否か、今後検討すべきであろう。

遺物 出土量は少ない。炉体土器(図78-8)は特殊な器形や文様をもつ。浅鉢か注口土器の器下半部で文様も胴中心部のやや明瞭な沈線による区画文のみであり、器面全体にミガキがある。県内には類似例が少ないがIV群3類に比定した。この他、器形のわかる大きな破片はないが、磨消縄文方法や細かな紐線文帯のあるIV群3類(1~20)が主体を占める。網代底も多い(21~27)。石器は石鏃(図236-1)、石錘(2)、定角石斧2、凹石2、土器片錘1(図282-15)のほか混入品と思われる一孔ある滑石製品(3)がある。

出土土器から考えてIV群3類土器を伴う住居址と考えられる。(樋口 昇一)

④ 88号住居址(図56・57・120・121・267・268・272・277, 図版44)

遺跡の南寄り、用地内の西はずれ近くに位置し、北~北東向き傾斜面に立地する。黒色土層中で検出され、一層下層の礫混じり黒色土層中に営まれる。また、柱穴等深い掘り込みを要する施設はローム層にかけてつくられる。なお、礫混じり黒色土層は住居址中央部では薄い堆積を示すが、住居址周囲に広がっている。ローム層中にも相当量の礫が含まれている。奈良・平安V期の79号住が東隣りに営なまれているが切り合わない。

遺構 非常に良好な状態で遺存している。黒色土および礫混じり黒色土を掘り込んだ堅穴に平石を敷いた敷石住居址である。プランは一見して柄鏡形であるが、内部に張り出し部分を含んだ円形プランというとらえ方も可能である。住居址は、壁・床・張出部・壁外周部および敷石下部から成り立っている(図56)。

壁の構造は、掘り込み、縁石、裏ごめから成る。黒色土層からの掘り込みは輪郭が充分とらえられないが、床面よりも半径80~120cm外周より掘られており、直径5.75×5.05mの楕円形を呈す。壁は床の敷石の外周に接して、縁石によってつくられる。縁石は敷石同様の平石を割って、これを立てている。床面は床の敷石底面と同レベルもしくは幾分掘り込んで立てられる。上面は敷石上面より10~20cm高くなる。縁石と掘り込みの間には裏ごめとして人頭大程の礫が全周におたって密に入れられる。乱雑、不規則に積まれたものといえる。壁の基部は縁石によって明瞭に画され、上部は裏ごめの礫自体が壁面を構成したものであろう。最も残りの良い西壁で、敷石上面からの壁高35cmを測る。

床は既に記したように敷石となる。縁石内側で径3.5×3.4mのほぼ円形プランとなり、炉を中心として敷石部分と敷石の無い部分にわかれる。敷石されるのは西南壁(奥壁)から炉にかけてと、西北壁下の2箇所である。総て厚さ3~4cmの割った平石を用いる。径40cmに達する大形平石の形状に合わせてその間隙には小形の平石を配し、全面を敷きつめている。また、基盤となる土層に含まれる礫が敷石間に頭を出している。敷石のない部分は特に固められた様子が看取できず、床としては不十分かと思われる。黒色土層の床面であるため軟弱なままだったと考えても良いが、或いはいったん敷いた平石が取り除かれた可能性もある。東北壁隅に1個だけ残された平石の在り方は、後者の可能性を示すものといえる。炉は中央よりやや西南壁寄りにあり、石囲炉の一種とみられる。不整形プランで10cm程度床を掘り下げており、敷石上面からは15cm程深くなる。周囲に径10cm前後の小礫を配したらしい。炉内部には若干焼土が残されていた。

張り出し部は柄鏡の柄に相当する部分と、その反対側の壁外部分の2箇所につくられる。まず柄に当た

る張り出しについて述べる。住居址北東壁付近に当り、壁・裏ごめを切って床のレベルに合わせてつくられる。厚さ12cmの平石を用いており、この部分だけ床の敷石が屋外に連続し延長されていることになる。出入口に相当する施設とするのが妥当であろうが、付随する施設は確認されなかった。次に南壁外の張り出し部であるが、ここは奥壁に相当する場所であろう。入口部分同様、10cm程の厚い平石を3枚用い、これを裏ごめの礫の上に並べている。この外周には自然の転石とみられる巨礫が2個並んでいる。あるいはこの巨礫を意識して張り出し部を設けたのかも知れない。住居址最奥部に設けられた祭壇的施設と解せないこともないが推測の域を出ない。

壁外周及敷石下部には大小17個のピットが存在する(図57)。総てローム層最上面から検出された。本址よりも古い時期の遺構ということになるが、黒色土中のピットは検出困難であることを考えれば、むしろ、本址検出面より掘り込まれた可能性がある。これらのピットは、便宜的に本址の真下に在るものと、そうでないものとに分けて考える。前者は、P₂・P₉・P₁₁・P₁₂・P₁₄・P₁₅が相当するが、本址が使されている間、及びそれ以後、埋納施設としてしか機能を持ち得ないことは明らかである。住居建設に先行する何らかの意味を想定することも含め、実証性に乏しい。次に、後者は、P₁・P₃・P₁₀・P₁₃・P₁₆等がある。これらは住居址の主軸を中心として左右対称に配される。P₁₀とP₁₃の一方を除外すると、おおむね方形の配置を示す。黒色土層から掘り込まれたものならば、深さ・大きさ共柱穴として充分であろう。実証できないが、本址は壁外に柱を建てた構造である可能性がある。なお、P₄～P₈は本址からやや離れてしまい、意味づけは困難である。

遺物 土器は総てⅣ群に属する。細分すれば、2類・3類の中間的文様をもつもの(図120-14・15・26・31)、5類(32)、及び2類もしくは3類に属するものとみられる粗製土器(図121-1~4)がある。このうち粗製土器は、器形は不明だが口縁はおおむね外傾し、口端は外面が折り返しによって肥厚する。口唇は平坦で広い。器表は丁寧に磨かれたものと、荒くナデているだけのものがある。

石器には、打製石斧(図267-22)、小形磨製石斧(図268-20)、定角石斧2、乳棒状石斧2、凹石2(図277-8)、磨石、敲打器Ⅳ類(図272-5)がある。

出土遺物からみて、Ⅳ群2類もしくは3類の時期に属する住居址であろう。(百瀬 長秀)

⑤ 99号住居址(図45・75・124・238・271, 図版45)

遺跡の南端近く、センターライン東側に位置し、北東向き傾斜面に立地する。黒色土中に検出され、同層中に築かれている。斜面で地表からの堆積が浅く、耕作による破壊がみられ、構造には不明な点が多い。周囲の遺構との切り合いは、75号住(108頁)に記述してある。本址は135号・132号住、土塚169の埋没後その上に築かれる。

遺構 円もしくは楕円形プランと思われる敷石住居址である。竪穴であるか否か確認できなかったが、双方の可能性はある。残存する構造は、住居跡西南隅に当たる敷石部分と、推定される住居址床面下のローム層より検出されたピットのみである。敷石には大小二種類の礫を用いる。大は厚さ10cmにも及ぶ平石を割ったもので、弧状に配される。その外周に、弧を整形させて厚さ5cm程度の角礫が敷かれる。いずれも礫上面が平坦にされる。後者の角礫の外周が住居址床面の区界であり、壁があった部分であろう。敷石部分以外の床は黒色土で特に固めた様子はみられない。いったん配した敷石を除去したか、或いは最初から敷石しない部分であったのか判然としない。敷石を欠く部分には巨礫すら残っているが、これは住居址築造以前からの自然堆積である。ピットはP₁～P₅の5個があり、いずれもローム層上面で検出されてい

るが、黒色土中より掘り込まれた可能性もある。ほぼ一直線の配置で、本址との関連は不明である。

遺物 土器は総てIV群に属する。細分すれば、2類と3類の中間の様相のもの(図124-29・31・32)、3類に属するもの(28・31)がある。石器には、石匙(図238-12)、スクレイパー(13)、小形磨製石斧、石錘(図271-21)があるのみで、量は少ない。土錘はIBa型が1個出土しているが混入品であろう。

遺構・遺物からみて、IV群2類もしくは3類の時期に属するものであろう。(百瀬 長秀)

⑥ 107号住居址 (図59・61)

遺構 81号・137号住と重複して検出された。約半分ずつ切り合う81・137号の敷石住居址に対し、本址は、両住居址を包括するような、やや大形の住居址である。しかし、明確に遺存するのは、北西～南西にかけての周壁とそれに沿う床面の一部のみで、大半が両住居址と重なる。現存部分より推定して、直径5.5m前後の円乃至楕円形プランを想定できる。3つの住居址の中では最も古く、ローム層中に構築されたが、東側半分は重複による混乱と傾斜の低い部分のため、不明である。

明確にのこる西側の周壁は、ローム層を50～60cm掘り込んでいるが、やや外傾し、壁面自体も軟弱で、一般的住居址のそれとは趣を異にする。床面も西壁に近い部分はほぼ平坦であるが、余り固められていない。81号・137号住に重複する床面部分も、多分ローム層中と考えるが、次に作られた137号住によって上部10cm前後を削り取られ、最終的に検出したローム面には、ほとんど床面状の痕跡はなかった。このローム面には十数個のピットが検出されたが、調査時点では、ほぼ住居址中心にあるP₁₀と西壁中央のP₂、南壁寄りのP₃の3個を本址のものとしている。このうちP₁₀は、137号住によって上部を削られているが、ローム面が凹み、わずかに焼土・灰を検出したので炉址と考えられる。P₂・P₃は削られた部分を復元すると柱穴としてもよいだろう。

以上、本址は、8号・137号両敷石住居址構築以前に作られた住居址であるが、敷石住居址であるのか、通常の堅穴住居址なのか、余り明確ではない。当初、137号住と同一視していたが、調査の進行に従い、別個の堅穴と認定されたため、検出状況にやや混乱があった。ローム層を掘り込んだ本址西側の周壁の在り方を根拠としたが、先述した通りその周壁や床面などが一般的堅穴住居址と異なっており、調査当時も独立した住居址とすべきか、81号・137号住に付随した外郭的遺構とすべきかで討議されたが、結論的に一応一住居址とすることになった経過を付記しておく。

遺物 本址に確実に伴出した遺物はないが、覆土出土土器の中に該期の小片があり、付近の状況も考慮して81号・137号住とほぼ同時期と考えたい。(樋口 昇一)

⑦ 110号住居址 (図44・78・129・269, 図版45)

遺跡南寄り、センターライン付近に位置し、北東向き傾斜面に立地する。黒色土層中で検出され、礫混じりのローム層にかけてつくられる。縄文前期の95号住を切っている。

遺構 プランや形態不明の敷石住居址である。輪郭が把握されなかったのは、住居址東側は傾斜が低く耕作により破壊された上、性格不明のピット列が在ることによる。本址は黒色土層中からローム層にかけて掘り込んだ堅穴住居址に平石を敷くのを基本とするが、東側は掘り込みがないかも知れない。残存する西壁はほぼ垂直で、掘り込みの深さは15cm程である。掘り込みの上に堆積した黒色土上に平石を敷く。また、住居址中央寄りでは黒色土が堆積せず、ローム層の上に平石が敷かれる。石は径20～40cm、厚さ6～10cm程度の割り平石と、径15cm程の角礫とが用いられる。平石の外周側に角礫を配して形を整えている。

石の無い部分は、固められた様子がみられない。或いは、一旦敷いた石が除去されたものかも知れない。

敷石下のローム層最上面でピットが多数検出された。いずれも深さ20cmに満たない。中で柱穴の可能性があるのはP₄のみである。また、敷石東側に一列に並ぶP₅～P₁₀は、本址の施設か否か判明しない。その他、屋内外の施設は発見されず、特記すべき出土状態の遺物もない。

遺物 土器の大半はIV群に属するが、I群もしくはII群の可能性の強いもの(図129-21)が若干みられる。IV群では、2類と3類の中間の様相をもつもの(11・15・20)と、3類(12-14・16-19)とがある。前者も恐らく3類に含めて良いだろう。石器には、定角石斧(図269-B-1)、乳棒状石斧、凹石3の5個がある。

出土遺物からみて、IV群3類の時期の住居址であろう。

(百瀬 長秀)

⑧ 137号住居址 (図59・60・61・76・78・79・141・245・268・269・271・277・283)

遺構 位置、切り合い等については81号・107号住居址の項で述べたので省略したい。切り合う3住居址の中で2番目に構築された。検出し得たプランは、傾斜の高い西側 $\frac{3}{8}$ のみで、東側は攪乱によって不明である。現存部分は、81号・107号住同様、低い方に開いたU字状を呈し、径4.2m程の円形プランを想定したい。

本址もまた、81号住と同じく、敷石下面は、黒色土層中にある。しかし、最終段階での記録によれば、炉址付近の土層関係などから、より古い107号住の床面部分のローム層を10cm前後掘り込み、そこへ黒色土を埋め、敷石したという。敷石部分は81号住の構築や、耕作による攪乱で、整然としたところがなく、土層の深い西側壁に偏在している。それも、大半が移動した形跡があり、敷石上面が平坦となる原状のままの部分は少ない。また、81号住に存在した長さ50cm以上の平板石は少く、人頭大のものが多い。大きい石の抜き取りも考えられ、その際の混乱が現われているかも知れない。ちなみに、敷石面につづく黒色土中にある床面的な堅い部分も面的に広がらず、炉址周辺のみ部分的に確認されたのみであった。周壁は北から西側にかけて107号住の床面を5cm前後掘り込んで存在したが、先記したように、西壁部分は移動したらしい石がこの周壁の上や107号住床面まで雑然と散在していた。ただ、P₃の西側にこの周壁に沿って裏ごめ石らしい小礫が並列しており、その石の下面がローム面に密着したところがあり、敷石住居構築の一方法が窺えた。炉址は住居中心部よりやや西に寄っていた。長径63cm、短径50cm、深さ38cmの楕円形のピットをローム層中に掘りその東側に深鉢らしい無文土器の胴下半部のみを埋め込んである。だが、このピットの最下層には褐色土があり、その上に敷石ののる部分と同じ黒色土が半分ほど埋まり、そこへ土器を据えている点、ローム土層中に掘られたピットは「掘り方」的なものと解釈すべきか、或は、前段階の107号住のピットを再利用したか判別つかなかった。土器内や付近に焼土や灰の堆積がわずかに認められている。なお、この炉址とピット(P₁₁)には、81号住のような石囲いの施設は認められなかった。床面上にはこの他、炉の西側で西壁に密着したP₃(120cm×78cm、-13cm)がローム層中にあるが、床面、すなわち敷石面からみると関係のない深さに埋まっているが、107号住のものかどうかこれも判別つかない。ただ、このP₁₁と並列する周壁外のP₂については、107号住に伴うピットを、本址の時期に更に38cmほどロームを深く掘り込んでいたことがピット内土層の状況から判明している。すると、本址に伴うピットは、床面上にあるP₉をのぞくと、北のP₁、西のP₂、南のP₃・P₆と周壁外に規則的に並び、深さも柱穴として十分な50cm前後あるので、これらを支柱穴と考えている。この点は81号住におけるP₁₂とP₁₄の在り方も同様壁外に対象的に位置するので参考となろう。

以上、本址は、裏ごめ礫や、平石の存在を中心に81号住より先に構築された余り整然としないが敷石住

居址と認定した。107号住居址も含め、最終段階の多忙な調査であり、該種住居址の構築法や、切り合い関係等充分検討できなかつた点惜しまれる。

遺物 土器・石器とも出土量は少なくない。土器は完形でないが注口土器の優品がある(図79-1)。他は破片で大半が無文か文様の判別できない小片である。有文土器片のうち主体となるのはIV群3類の浅鉢や深鉢(9・10・12~14)であるが、同2類に比定される深鉢類(11)や同時期と考えられる粗い磨消縄文あるもの(15~18)もある。石器は後期住居址では38号住に次いで多く総計17点を数える。スクレイパー、小形磨石斧2(図268-2・22)、定角石斧3(図269-A-3)、乳棒状石斧、凹石4(図277-4)があり、とくに両端に抉のある細長い石錘(図245-14~18)が5個と土器片錘3(図283-1~3)がまとまって出土している。

出土遺物から、IV群3類の土器を伴う数石住居址と考えたい。

(樋口 昇一)

9 140号住居址 (図55・143・271・283)

遺構 調査区の南隅近くに検出された。西側から東に向ってゆるやかに低くなる傾斜地の礫まじり黒色土を掘り込んで作られたと推察される。黒色土層に作られており、農耕のためプランがはっきりしないが、柱穴の位置よりみて円型に近い住居址である。炉は中央部にある三角形状の浅い掘り込みで、底の部分に焼土が4~5cmの厚さで残っており、炉石は構築の時点よりない。柱穴は形状、深さ等からみて西より南に円を画いてならば5箇所のほかははっきりしないが、北から東側にかけてあるいくつかのピットは位置的には西南側に比べてバランスがよくないがいくつかは柱穴であろう。掘り込みの浅いのは、黒色土と、農耕のため床面がはっきりせず、ローム面まで掘りさげられたものである。西壁近くにある2個の平石の下部あたりを生活面とすれば、北東側のピットの深さは充分と考えられる。柱列の内側に炉をかこむように6個のピットがある。壁、周溝、床面等は検出できなかった。床面は黒色土のため堅く締らず、表土も浅く農耕の折破壊されている。

遺物 少量の土器片(図143-1~10)が出土しており、10は注口土器の口縁部である。共にIV群2類に属する。石器は石錘1(図271-17)と土器片錘2(図283-4・5)のみである。

出土遺物よりみて、縄文後期前葉、IV群2類の住居址であろう。

(木下平八郎)

イ 弥生時代の遺構と遺物 (図2)

本遺跡では、明確な弥生時代遺構の検出はなかった。ただ、以下述べる2つの土壇がその可能性はあるが、住居址などと異り、確実とはいえない。遺物、とくに土器片は初期の条痕文系の良好な資料が出土しているので、調査区域外に中心があるかも知れない。ちなみに、該期の遺構、とくに住居址などは県下は勿論、他地域でも発見例は少なく、むしろ、土壇などに伴出する例が多い。本遺跡例もその点で、今後検討される必要があろう。

ア) 土壇 (図24・36・45)

土壇108は調査地域北半中心部に位置し、住居址群の密集する中にある。縄文前期の46号住の北壁を切っているが、その東側は平安時代期と考えられる土壇100に切られている。径約1mの円形で、ロームへの掘り込みは20mと浅く皿状の平坦な底面となる。土壇178は調査区域南東隅に近く、やはり縄文前期の86号住の東南隅を切っている。この部分は土壇が多く、とくに本址は西側の土壇171(縄文前期土器片出土)と重複し不整形を呈する。深さ約60cmある平らな底面から推定して、108同様径1m前後の大きさであろう。ただ、171との切合関係は調査時点で不明なまま残されている。

両土壇は直線距離にして約83m離れているが、出土土器は共に庄ノ畑式である。遺物の出土状態は、覆土中であり、底面に密着するとか、周辺に石とか焼土が存在するとかいう特殊な在り方ではなかった。この点両者を弥生期とするにやゝ躊躇するが、覆土中でもやゝ底面に近いという点と、他に伴出遺物がないことから、一応本期に入れた。

イ) 土壇出土の土器 (図148・153, 図版90)

大形の壺2点がある。土壇108出土の壺(図148-2)は体部上半部の破片で、櫛描の波状文、直線文と篋描の鋸歯文をもつ。土壇178出土の壺(図153-22)は頸部から上半部を欠くが、他はほぼ現存する。体部上半に横走の、下半に綾杉状の櫛描条痕をもつ。いずれも弥生時代中期初頭の庄ノ畑式土器に比定されるものである。⁽¹⁾

ウ) 包含層出土の土器⁽²⁾ (挿図28, 図172, 図版88~90)

条痕文系土器で総て破片である。壺・甕・顔面付き壺がある。壺は口径16cm以下の細口の小形壺、口径16cm以上の大形壺と無頸壺がある。小形壺は口縁部等の相違によって2種に分けられる。小形壺A(1・2・4・8・24・27)は、口縁端部に刻目をつけ、口縁部以下を横走または綾杉状の条痕を施したもの、小形壺B(3・5~7)は口縁部直下に凸帯をもち、そこに刻目をつけ、口縁部以下を横走・斜走の条痕をつけるが篋描文で頸部を飾るもの(7)もあるが、その数は少ない。大形壺(15・16・18・20・22・23)は口縁部直下にオサエ痕のある凸帯をつけ、篋または櫛等による波状文、はね上げ文を描く。胴部文様帯は条痕で飾るが、斜(横)走と横位の綾杉条痕とを組み合わせたもの(26)や、篋で綾杉条痕を描いたものもみられる(33)。また、類例が少ないので、詳細は不明であるが、体部上半に刻目をもつ、2条の凸帯をめぐらし、1部に環状のブリッジをもつもの(挿図28-1)がある。ブリッジ上には竹管を押しつけている。また、口縁部内面に条痕または弧線文を描いたものもある。無頸壺は4例出土したが、いずれも条痕文で飾り、内面には粘土帯積み上げ痕が明瞭に残る。

甕は横走または綾杉状条痕をもつAと無文のBがある。Aは口縁部の形状によって4種に分けられる。A₁は口縁端部を内傾させ、そこに篋描刺突文(押引文)をほどこしたもの(9・17・30)、A₂は口縁端部に刻目をつけたもの(31・36・37・42~44・46~49)、A₃はオサエ痕のあるもの(10・32~34・35)、A₄は口縁端部の内外面から指頭で横方向に押さえたもの(39・40・41)で、端部がとがる。A₁は縄文土器からの影響をもつと思われるもので、外面を軽く削っている。

条痕は貝(1・12・15・17・21・27・29・30・36・37)、篋(3~6・8・10・11・25・28・38~41)、櫛(31・32・34・35・44・47、挿図28-2)、半截竹管(26)を用いて右まわりにほどこされている。これらの条痕は、文様の種別によって、かなり意識的に用いられているように観察される。例えば横走、斜走条痕には貝または櫛を、また、壺の綾杉状条痕は篋が多い。前者は器面調整を、後者は文様を意識した施文方法といえよう。壺の綾杉状条痕はさらに単独の文様となった場合が、横「ハ」の字の文様帯である(33)。

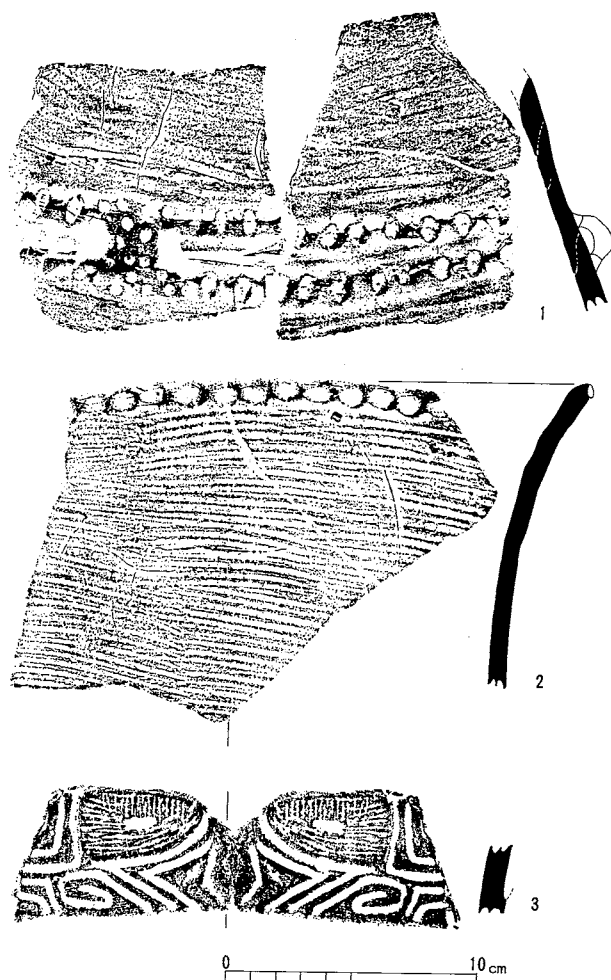
胎土は暗褐色系と明黄灰色系がある。ともに石英等の砂粒を含むが、後者は粘土の

水籤が十分にされた硬い焼きの土器である。尾張地方の土器胎土に近似しており東海系胎土と呼称する。東海系胎土の土器(1・5・12~14・17・21・22・30・36・37、挿図28-1)は貝殻条痕文をもつもののほとんどで、篋描条痕は2例にすぎない。一般にこの傾向は中部高地の条痕文系土器一般にいえることである。

顔面付き壺は顔面部の目と鼻の一部が出土した。三角形の目は、中央部の腫とその周囲の細い篋描沈線からなり、眼球と鼻を太い篋描沈線で描き、さらに入墨と思われるものを、それら下辺部に描いている。また、鼻の部分は粘土を貼りつけた痕があり、本来は粘土で鼻を表現してあったものである。

長野県下に広く出土する容器形土偶の一部とも思われるが、一般には顔面部幅は10cm以下で、最大でも丸子町腰越例が約13.6cmであり、本例は推定幅20cm以上に達する。従って、北関東地方に広く分布する顔面付き壺の一部との考え方が妥当と考える。だとするならば、長野県下で最初に見い出された顔面付き壺といえよう。

以上の土器類は総てほぼ同一型式の内容をもち、長野県下最古の弥生式土器の一群で、諏訪地方では庄ノ畑式土器と呼ばれるものに該当する。本遺跡に隣接した、諏訪・西山地域には諏訪市荒神山・本城遺跡岡谷市庄ノ畑遺跡等が知られ、地域的まとまりの中で、初期の弥生文化が開花した事実は、今後の弥生文



挿図28 包含層出土弥生土器拓影(1:3)

化波及のあり方を考える上で、重要な指標となると考える。

(笹沢 浩)

- 註 1. 藤森栄一・桐原健他「岡谷市庄之畑遺跡」『長野県考古学会研究報告書』1 1966
2. 出土状態の記録が完備されていないので、ここでは一括してとり扱った。
3. 上伊那郡宮田村中越遺跡では、条痕文をもつ壺の頸部下半に本例と同様に刻目をつけた2条の凸帯をめぐらした完形土器がある。ただし、ブリッジはない。(中越遺跡保存対策委員会「中越遺跡発掘調査概報」『伊那路』23-12 1979) また、新潟県六野瀬遺跡出土の壺の頸部に竹管を施文した断面三角形の凸帯を一条めぐらしたものがある。六野瀬遺跡Y1型とされ、静岡県丸子式土器の系譜を引くものと共存しているが、Y1型例は縄文である(杉原荘介「新潟県・六の瀬遺跡の調査」『考古学集刊』4-1 1968)
4. 県内では意外に類例が少なく、管見には塩尻市横山城遺跡(藤沢宗平「松本市横山城遺跡」『信濃』18-4)にみられる。
5. 上伊那郡中川村苅谷原遺跡(太田保「長野県上伊那郡中川村片桐刈谷原遺跡の一括土器について」『長野県考古学会誌』10 1972)に好例がある。
6. 時間の関係で、これらの占める割合はだしてない。また、半截竹管と櫛の区別が困難なものが多い。
7. 丸子町腰越・松本市城山腰・箕輪町上金・大町市柿ノ木・喬木村唐沢原(『信濃史料』1巻下)、高森町玄与原(神村透「中部山岳地帯」『日本考古学講座』4 1969)、佐久町館(烏田恵子「南佐久郡佐久町館遺跡出土の容器形土偶について」『信濃考古』58 1980)長野市新諏訪町遺跡などで出土している。
8. 工楽善通「弥生土器」『日本の美術』3 1979
9. 笹沢浩「入門講座・弥生土器—中部高地I」『考古学ジャーナル』1977
10. 「荒神山遺跡」「本城遺跡」『中央道報告—諏訪市その3—』1974

ウ 古墳時代の遺構と遺物 (図2)

ア) 古墳時代Ⅰ期

① 48号住居址 (図25・174・286, 図版38・91・92・95)

遺構 調査区の西隅に検出された。東側の大半を43号住居が三角形状に覆っているため攪乱がある。カマドは北壁中央にあり、石組白色粘土で構築されており、東側の石組は43号住居造成の折、破壊されたものと推測され、西側の一部を残すのみで、天井石はない。残存する石組から推定して80×90cm位の規模となり、焼土は3～6cmの厚さで残り、甕・坏の小破片が少量出土した。柱穴はやや東へ寄るがP₁～P₄の4個で、P₅・P₆は補助柱穴であろう。南から北へ傾斜する地形上につくられているが周壁は四辺共残っており、東側は前述の住居址上に重なるので14cmと低いが、西南壁は40～50cmを測り、礫まじりローム層を掘り込んでおり余りよくない。周溝はなく、床面はよく固められて良好で、ことにカマドの前面部は特によい。遺物の量は破片であるが多い。北隅コーナーに½個体の須恵坏が、その西側に土師坏の½個体のものが重ねて壁の直下に置いてあり、南隅コーナー近くの床上15cmに鉄製鋤先が、カマド周辺より土錘が出土した。

遺物 床面上より土師坏AⅡ (図174-1)・GⅡ b₂ (4・5)、須恵器高坏の脚部(8)、同じく碗(9)、他に土師器小破片13、須恵器5がある。覆土中よりは、土師器坏D (2)・GⅡ b₂ (6)、鉢DⅠ d₃ (7)や鉄製品の鋤先 (図286-17)、棒状金具 (18)、土錘ⅠBa 4個がある。その他、土師・須恵器小片があるが、他の時期のものが混入している。

(木下平八郎)

② 82号住居址 (図40・175・291, 図版43・91-94)

遺跡の最南端に位置する。他との切り合い関係はない。西から東への傾斜面の褐色土層から礫混りのローム層内へ切り込んでいる。傾斜面上に立地するために、谷側(東側)の壁は黒土層の中に入って判別しにくい状態であった。谷側は調査者の観察によるとローム層の上に黒土を盛り上げ貼床状に叩いてあるという。東側の壁面は確定線ではない。

遺構 隅丸方形の竪穴住居址で、ほぼそのプランが検出できた。カマドは北壁中央にある。30～40cm大の板石を組み合わせてカマドを形成するが、天井石も残り完形に近い。規模は長軸1.3m、幅0.8mである。隣接する83号住居の南側に集石が見られるが、本址にともなう煙道に関係するものかとも思われる。柱穴はP₁～P₆が支柱穴としてそれぞれ対応する。P₅はカマド西側に検出されたが他より浅く、補助的なものと思われる。壁は西側で45cm、東側で10cm残存し、西壁は礫混りである。また、西壁にはカマド西側から続く周溝が見られるが浅いものであった。床面はローム層をよく叩いてある。

遺物の出土状態はカマドを中心に坏、甕、その東側に小形壺A a₄ (図175-7)、小形甕(12)が出土した。また、甕B c₂ (5)はP₃、高坏B (8)はP₂、高坏A (10)はP₁の近くでそれぞれ検出された。

遺物 土師器と土錘が出土した。土師器は坏、甕、小形壺、高坏、鉢、小形甕、壺、甕である。坏は4点で、坏GⅡ b₃ (1)・GⅡ b₂ (2・3)・HⅠ b₃ (4)が、甕は2点でB c₂ (5・6)、小形壺A a₄ (7)、高坏は3点ともに黒色土器で、高坏A (9・10)・B (8)がある。鉢C b₃ (11)、小形甕(12)、壺AⅡ (13)の他に甕A (14)・AⅠ (15)の2点がある。土錘(図291-59)はⅠD形である。

単独の住居址であり、資料も多く良好な該期の住居址である。

(小林 秀夫)

③ 85号住居址 (図35・176・286・291, 図版40)

遺跡の南東側に位置し、西南側から東北側へゆるやかに傾斜する地点で、石礫群が散在し、本址より後に形成された**フンド4**の範囲内である。また、後世の耕作による攪乱があり、特に本址の中央にも直径3m大の攪乱穴があり、住居址の検出の条件としてはあまりよくない。切り合い関係は本住居に切られて縄文時代前期の**74号住**がある。他に土塚187～190も隣接する。

遺構 方形のやや胴張り気味の堅穴住居址である。カマドは北壁のほぼ中央にあるがほとんど破壊されて、石組の一部と焼土のみであったのみである。柱穴は本址にともなうものと思われるのはP₁～P₃で他は不明である。壁は北側、西側の2面では約20cmの高さで明確に検出できたが、他は確認できず、周溝も検出されなかった。床面は74号住の上に貼床されたらしいが、中央部が攪乱され、わずかに壁周辺で確かめられたのみで残存部はほぼ平坦である。

遺物 出土量は少なく、床面出土の土師器、小形甕A I (図176-9)と甌Ab₃ (10) 2点と刀子片4 (図286-4~7)、土錘 (図291-30) のみである。 (小林 秀夫)

④ 116号住居址 (図46・174・286, 図版47・91)

遺跡の中央西側に位置する。西側コーナーの一部は用地界で調査できなかったがほぼプランは判明した。層位的には耕作土下に黒土層、次に褐色土と続くが、本址はこの褐色土層からローム層へと切り込んでいる。しかし、東北壁のみ礫石が混入し確認が困難である。他の住居址との切り合い関係は、南側で縄文前期の**141号住**の大半を切っている。また、南西壁にかかる**土塚123**は、141号住を切っているが、本址の壁や床面が完存しているので本址はそれを埋めて構築したことがわかる。

遺構 ほぼ方形の住居址で、主軸は北西に傾いているが、カマドは北西壁中央にある。ほとんど破壊された石組のカマドで、わずかに裾石と焼土が残存していた。主柱穴は、ほぼ規則的に配置したP₁～P₄の4本と思われるが、P₃～P₄は副次的なものであろう。壁は垂直で良好である。周溝は幅は約15cm、深さ10cmほどで北西壁から南東壁にかけて検出された。東側の壁については確認できなかった。床面はよく叩きしめられ堅く平坦である。遺物の出土状態は、ほとんどカマド周辺の床面出土である。

遺物 土師器は坏D I b₂ (図174-10)・G II b₃ (11-14)・G I b₃ (15)、小形甕 (16)、甕底部 (17)、壺A II (18)、甕 (19)と、須恵器の甕 (20・21)、鉄鏃 (図286-25) の出土があった。この内須恵器の甕は、陶邑古窯址群 I の編年ではTK-43に比定されよう。 (小林 秀夫)

⑤ 128号住居址 (図48・176, 図版91)

遺構 用地内南側のやや高い部分に位置する。住居址の約半分に相当する北東部分は奈良・平安時代I期の**114号住**に切られ、また、南東壁部は、奈良・平安時代VIII期の**124号住**と重複する。壁は、南西壁および北西壁と南東壁の一部が確認された。垂直に近い立ち上がりを見せ、壁高は約15～30cmである。床面はほぼ平坦で、114号住に当たる部分とのレベル差はない。柱穴は、西隅から少し北西に寄ったところに1個P₁があり、深さ35cmを計りしっかりしているが柱穴としては大きすぎる。他については不明である。北西壁の中央付近に石組粘土カマドがあったとみられ、袖石らしき石が2個と焼土が残存している。114号住と重複するため、肝心な部分は不明である。

遺物 土師器坏Dd₃ (図176-1)・Cc₂ (2)・G II b₂ (3)、小形壺Cb₃ (4・5)、小形甕A (6)、甌Bb₃ (7)、甕 (8) が出土している。4・5の短頸壺の器形は須恵器の影響を受けたもので、この時期の特徴的な土器である。7の甌は小形で、単孔である。2は床面から、他は覆土出土である。 (岩崎 孝治)

イ) 古墳時代Ⅱ期

① 7号住居址 (図5・7・177・285, 図版33・91・92・100)

遺構 遺跡用地内北隅に検出された。北西から南東にかけて約 $\frac{2}{3}$ 程が用地外へ出ており、大部分が未調査である。なお、周辺には遺構が多く、南側に縄文時代前期の6号住、西側に同じく16号住・22号住があったため、その覆土中に掘り込まれた住居址である。また、本址南東側は、同時期の9号住と切り合っているが、用地外へかかってしまうために新旧関係は確認できなかった。カマドは調査範囲内では検出できず、柱穴は西隅中央寄りに1本検出した。床面からの深さは62cmを測る。壁は南壁の6号住との切り合い部分以東がローム層的で良好である。西壁は、貼床とその上に散在する焼土の範囲状況を確かめて確認した。壁高は、はっきりと検出できた南壁部分で約30cmを測る。床面は、他の遺構との切り合いのない南東部はロームであり、他の部分は黒色土の貼床で、全体的に軟弱な状態であった。焼土が本址北西部から中央部床面上にかけてかなり広い範囲で残存しており、その厚さは最大4cm位、用地外へ向かって徐々に量が増えていくようである。火災の痕跡なのであろうか。

遺物 出土品は少ない。土器はほとんどが床面からの出土で、坏、高坏、甕があり、須恵器片も見られる。手捏ね坏AⅠ(図177-4)は、南西隅、床面焼土中から完形のまま出土した。土師器では坏Cc₂(1)・同GⅡb₃(2)、甕AⅠ(6)、黒色土器の坏GⅡb₃(3)、高坏A(5)などが計測できた。鉄製品のうち、環(図285-5)は、銀鍍金してあり、床面からの遺物である。検出時、環の下には、ワラ、或はカヤの炭化した物が附着していた。また、細長い鉄製品(6)は、紡錘車の軸にでも使用されたと思われる。(高桑 俊雄)

② 9号住居址 (図7・178, 図版35)

遺構 用地内の北東隅で発見されたが一部用地外にかかる。東・南側はローム層を掘り込んでいるため、残存状態のよい壁と、よく叩きしめられた床面が残る。この部分での残存壁高は10~22cmである。西から北にかけては、縄文前期の6・8・16・20号住の一部と、土坑9・12・15~19の上部を掘り込んで貼床したはっきりしない床面であり、壁も確認できなかった。7号住とは用地内でわずかに接しているが、切り合い関係を確認するところまで至らなかった。覆土はローム粒混入の黒褐色土である。カマドは西壁中央やや北寄りに存在したと思われるが、この部分が耕作による攪乱を受けており、焼土や石が散在するのみで位置ははっきりせず、規模・形状は不明であるが、石組粘土と思われる。ピットは、北西隅に1、南西隅に3、南壁ぞいに2の計6個ある。このうちP₁・P₄は柱穴と考えられるが、P₃~P₆は8~11cmと浅く、柱穴とは考えにくい。また、P₂は上部が貼床されたピットである。ピットの覆土はローム塊混入の黒褐色土である。住居址北側の床面は前述した通りのはっきりしない貼床であり、この他のピットは確認できなかった。遺物は西壁ぞいの焼土周辺より出土している。特に甕の破片が多い。

遺物 図示できるものは4点である。横方向のていねいな篋磨きの上へ黒色塗料を塗った土師器坏GⅡb₃が2点(図178-1・2)、いずれも小破片である。また壺AⅡ(3)、小形甕AⅡ(4)も出土しているが、いずれも図上復元した部分の $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{6}$ の破片である。

③ 13号住居址 (図9・178・291, 図版33・34・93・94)

遺構 遺跡用地内北隅、千鹿頭社遺跡と本遺跡を画する市道東側に検出された。7・9・14住と同時期で、さらに昭和49年度に調査された千鹿頭社遺跡の10・12号住とも一群をなすものである。本址の南東に

は、これもまた互いに切り合う縄文時代前期の6・8・16・22・24・28号住があり、本址はそのうち16号住の北西側をわずかに、また、24・28号住も一部切っている形となっている。現地形は北への傾斜地であるが、北側は市道手前へ行くに従い耕土下の黒土層が非常に深くなっており、そのために本址の南半はローム層までの掘りこみとなっているが、北半はロームまで達せず、壁断面をみても北側は黒土が深く落ちこんでおり、床面にもロームの貼りがみられる。この事はまた、先述した市道とその南側を流れる用水との下に何らかの遺構の存在をうかがわせるものである。壁もまた地形に従い、南西は50～60cmの高さで確認できたが、北側は、周溝によりかろうじてその境を確認できたにとどまった。北西壁中央やや北寄りに作られた石組粘土カマドは、平板状の石を両側に立て並べて袖石とし、その外側を灰やロームを含む黒色土で固めてある。袖石の手前には細長い平石がわたされ、右袖石の内側にはりついた状態で土師器甕片が出土している。カマド焚き口には焼土とその周りのかなり広い範囲の床面に焼土混り黒土があったほか、カマド右側の住居址北隅に径100cm、厚さ6～7cmの焼だまりがみられた。この灰だまり付近を除く全周にはっきりした周溝が巡っている。床面は貼床も含めて周縁部は良く叩き固められているが中央部に近づくに従い軟弱となっており、支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4本と推定される。なお、カマド手前にあたる部分とP₂周辺の、床面より5～15cm上層に、こぶし大～径40cm程の板状や棒状の石が検出されたが、本址や本址の床面施設との関連は不明である。

遺物 床面より土師器が多数出土している。カマド左側の壁近くの床面より4個体の完形の土師器の甕A・AⅡや小形甕AⅠ(図9-1の土器4・5・6・10, 図178-8・10・9)が壁側にむかってたおれた状態で出土したほか、西隅の床面より30cm上の覆土内より土師器環GⅡb₃(図9-1の土器11, 図178-7)が底を上にして出土している。他に土製品として覆土上層より土錘IC3点(図291-46~48)と留金具2(図285-8)が発見された。

(小池 孝)

④ 14号住居址(図8・177, 図版34・91・94)

遺構 遺跡の北端にある。縄文前期の11号住を切り、北側は流出土で荒れている。P₆からP₁方向への壁線らしく図示されているものは傾斜を示す落しの方向が逆方向で、壁線ではなく耕作によって攪乱され10～20cmの段差を持って、西或いは北へ落ち込むことを示す線である。壁が残るのは東壁と南壁で、壁高はそれぞれ29cm、19cmであり、後者は11号住床面との差である。西壁・北壁は破壊されているが、方形の竪穴住居址であったと思われる。壁残存部下には幅10～18cm、深さ数cmの周溝がめぐる。床面はロームで堅緻である。カマドは西壁南よりあったと推定され、P₂脇に焼土がわずかに残るだけである。支柱穴はP₁～P₄の4個であり、P₅～P₇は補助柱穴か建て直しが行われたものかと思われる。P₆は108×106cm、深さ53cmの袋状をなす貯蔵穴と思われるものである。P₈は11号住の柱穴痕と思われる。

遺物 出土量は多くない。図177-8・13は床面、他は覆土からの出土である。土師器環3点のうちGⅡ(7)はほぼ完形で暗赤褐色を呈し、内面に漆黒彩がみられる。小形甕AⅠ(11)・AⅡ(12)・B(9)の3点、甕10点中のAⅠ(10・14)・A(15)、鉢Bb₃(8)、高坏5点、他に甑、高坏片などがある。(伴 信夫)

エ 奈良・平安時代の遺構と遺物

ア) 奈良・平安時代Ⅰ期

① 31・32号住居址(図17・179・287・291, 図版95)

遺構 発掘区南西部の路線内ぎりぎりの所で検出した2軒の堅穴住居址であるが、発掘時での検出状況、出土遺物等から判断して、両者はさして時間差のない段階で建て替えられた可能性もあり、また、後述のように、31号住のきめ手となった、**土塚71**南部の床面の一部と考えられるものが、住居址の床面であるか否か、判断に苦しむ所である。従って、本報告では、両者を切り離すことなく、一括して報告する。

31号住は周溝、カマド等の検出はできなかった。僅かに、土塚71の南部に1.5 m四方の範囲に、かなり良好の床面と思われる堅く踏みかためられた部分が認められた。これをもって、住居址の存在を想定するには根拠は乏しいが、発掘時の所見を尊重しておく。床面想定部分には多くの土塚とピット群が検出されたが、それらが本住居址にともなうものか否かは確認できなかった。

32号住は、31号住の北側に接して検出された。西壁と北壁、および北壁中央部分に構築された石組カマドと、床面、柱穴等を検出した。しかし、東壁部は用地外にのびて検出できず、また南壁部分は、31号住とはほぼ同一のレベルの床面で接し、その両者の境界は明らかにできなかった。床面は西壁ぞいの約半分は、かなり良好な状態で検出されたが、東壁ぞいについては、黒色土中にあり、はっきりできなかった。床面上には、土塚等が多数検出されたが、このうち、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_9$ がその位置、深さ、規模等から、本址の支柱穴と考えられるものであろう。ただし、 P_9 の位置が北壁ぎわに寄りすぎ、ピットから考えられる柱の配列は台形状となる。カマドは板状の安山岩を用いて築かれており、かなり残存状態は良い。

床面上に検出された土塚群は、支柱穴を除くと計16個あり、それらのうちの大半は路線幅に接した住居址東壁付近に列状にあった。調査時では確認できなかったが、図面上の整理では、これら土塚群の一部は総柱の堀立柱建物址の可能性も考えたが、柱間隔が一部では3、4 mにもなり、間隔が広すぎる。しかし、土塚81・ P_2 、土塚71・74・76、 P_8 は1つの規則的な配列と一定の深さをもち、しかも、それらの大部分が32号住よりは新しいものであることと、調査時に堀立柱建物址の検出方法をとり得ていないこと、路線外にも土塚群が検出される可能性もあること等から、見落とし、未検出の堀方(土塚)も予想されようが、現段階では何ともいえない。

32号住よりも後出と考えられる土塚、ピットは土塚81・71・72・76・77・78が考えられる。土塚71・72は切りあい関係にあり、土塚71は P_3 、土塚72を切って構築している。土塚72は31号住床面を切っており、また、土塚77には、32号住にともなう焼土が、その埋土内に流れおちている。土塚71・72・76からは須恵器、土師器小片も出土しており、遺物の点からも裏づけられる。その他の土塚については出土遺物だけでは、その時期・性格等についてははっきりしない。

遺物 大部分は32号住の想定床面部分から出土したが、31号住とした地域からも一部が出土した。しかし、出土遺物から時間差は認められない。土師器鉢(図179—8)、高坏(13~15)、甕A(9・10)・B(11)、須恵器坏Aa₁(1)・A II a₁(2・3)・B(4)、蓋A III(5)・B I(6・7)などの土器類と子持勾玉(図287—3)がある。高坏は長脚と短脚とがある。長脚部外面は篋で縦方向にするどく削り、面取りをしている。内面は横方向に右まわりに篋削りがなされている。坏部は塊状のものであろう。子持勾玉は32号住西北隅で、床面より約10cmほど、浮いた状態で出土し、本址にともなうものか否かはっきりしない。なお、土錘I(図291—69)がある。

(笹沢 浩)

② 44号住居址(図23・179・273)

遺構 用地内調査区中央より少し南東部に寄ったところに検出された。北・東両側に縄文前期の**98・104号住**が一部重複するが、本址はそれらの上に貼床して構築されている。黒褐色土から礫混じりのローム層

に掘り込んで構築された住居址である。残存壁高は10～13cmを計るが、壁の状態は礫が多く良好とはいえない。なお、北東壁は破壊されている。床面は、柱穴のまわりおよびカマド付近には、しっかりした部分もあるが、全体に小礫が目立ち凹凸が多く98・104号住に重複する部分はよくない。各コーナーにはしっかりしたP₁～P₄の支柱穴が規則的に並ぶ。カマドは、耕作によって壊されたものか、その痕跡をわずかに残しているだけである。すなわち、北西壁の中央に袖石とおもわれる平石が残存し、そのまわりに焼土が堆積している。そこから土師器甕片が出土している。

遺物 土師器坏A I (図179-16) が床面から、甕A (18) がカマド付近から出土している。また、石器として、南西壁際の西隅付近の床面から出土した頁岩製の砥石 (図273-1) がある。 (岩崎 孝治)

③ 77号住居址 (図38・179・263, 図版41)

遺構 遺跡地用地内の南半の中央やや西寄り、奈良・平安時代I期～IV期の住居址が集中するうちの南端といった位置に単独に検出された。同時期の遺構として北東に31・32号住、西に114・133号住がある。なお、切り合いではないが、上層の大部分を後世の遺構である**フンド4**がおおい、さらに北には柱列2がある。隅丸方形プランを呈し、壁は良好、床面もロームの叩きで大部分良好だが、図38上でP₁とP₂を結ぶ線の外側からP₃にかけての一点鎖線で囲まれた部分は軟弱でかつ、やや低くなっている。中央やや北寄りの床面に焼土がある。カマド右前の平石はその上面が床面と同レベルであり、地山の石と判断される。カマドについてはその詳細な実測図がないため発掘時の所見を引用すると、「カマドは北壁中央に石組粘土カマドがあった。袖石は立っており、壁の線より外側に支脚石も立っていた。内部に土師器片が散乱し、焼土もありカマド内より骨片の小指頭大のものが2～3点出土した。焼土は径60cm、深さ5cmである。」とある。表土および黒土が浅く、先述の床面状況も含めてある程度の攪乱が考えられる。

遺物 出土量はやや多いが図示できるものは少ない。土師器の小形甕A III (20)、カマド左側より出土した壺 (図179-21)、須恵器坏 (19) の3点は共に床面出土である。なお、カマド上面に張りついた状態で土師器甕胴部破片が検出されている。石製紡錘車 (図263-13) が覆土から出土した。 (小池 孝)

④ 114号住居址 (図48・180・286・291)

遺構 用地内調査区西側の用地境界線際で南北方向の中央よりやや南側寄りに検出された。壁は北西壁の西半分が西隅を含めて検出されたのみである。西隅の壁高は15cm前後であるが、砂礫混じりで良好ではない。南西壁は、古墳時代の**128号住**を切る形になるわけであるが床面のレベル差もなく、立ち上がりは認められなかった。また、南東壁部は、平安時代の**124号住**により切られているが、南隅付近でわずかに立ち上がりが見られる。北西壁の中央よりやや西隅側に寄ったところにカマドがあり、石組粘土カマドと思われ、両袖石と支脚石がほぼ原型を留めて残存していた。内部には焼土が約15cmの厚さに堆積しており、そこから土師器片が約1個体分出土した。カマド付近の床面は、貼床がみられ良好であるが、他の部分は小礫が目立ち荒れている。また、床面中央よりやや北東へ寄ったところに焼土が見られるが性格は不明である。柱穴は4個と推定されるが、P₁・P₄は規則的な位置に存るが、P₂・P₃は、ややはずれている。

遺物 土師器坏A II (図180-5)、小形甕A III (8)、甕C (10)、須恵器鉢 (1)、蓋A III (2・3)、坏A III a₃ (4)・Aa₁ (6) が出土している。5は内墨で内面緻密なヘラミガキが施され光沢のある焼成良好な土器で、該期の好資料といえよう。7の須恵器は鉢に、また9は坏に分類される器形になると思われる。なお、1の須恵器鉢はこの住居址に伴うものかどうか疑問である。他に、土錘I Ba' (図291-35)、刀子 (図286-

15) が出土している。

(岩崎 孝治)

⑤ 133号住居址 (図49・180, 図版47)

遺構 用地内調査区中央部から少し南方寄りに位置する。黒褐色土を掘り込んで構築され、縄文前期の119号住の北隅および北西壁の約半分を破壊している。また、西側で117号住と、北西側では115号住と重複しているが、その部分は覆土中に各々の住居址床面の貼床が見られる。すなわち、本址は、切り合い関係にあるそのふたつの住居址より古いことがわかる。壁は礫が混じり良好ではない。なお、南東壁は119号住の床面を19～27cm掘り込んでつくられている。床面はやはり礫が目立ち凹凸がはげしい。柱穴は検出できず不明である。カマドは北西壁の中央に在り、石組カマドの痕跡を残す。左側の袖石がくずれて内部に落ち込んでおり、中央部には7cm前後の厚さに焼土が堆積している。その中から土師器の甕破片が出土している。

遺物 黒色土器環AⅠ (図180-11)、土師器甕A (12・18)・F (14)、須恵器蓋 (15)、横瓶 (17) がある。14の底部には木葉痕がみられる。12・13・16が床面、他は覆土からの出土である。 (岩崎 孝治)

イ) 奈良・平安時代Ⅱ期

① 142号住居址 (図54・181・290, 図版38・92・95)

遺跡の中央やや北寄り、西側の用地界近くに位置する。地形的には遺跡内では高所で、西から東への傾斜面である。住居址、土塚が複雑に重なり合い、柱穴・ピットなど前後関係の決定はかなり困難であった。切り合い関係は直接かかわるのは6軒である。北東側で縄文前期の66号住、南東側隅で縄文中期の50号住を切り、西側壁で奈良・平安Ⅴ期の55号住に切られ、本址の中央を奈良・平安Ⅳ期の57号住、同Ⅵ期の60号住に貼床されて切られた状態になった。したがって住居址内施設、壁は攪乱されている。

遺構 隅丸方形の堅穴住居址で、カマドは北西壁の中央に、袖石の一部の板石と、焼土の一部が残っている。柱穴はP₁～P₄までが主柱穴として対応するものと思われる。他にも多くのピットが検出されているが関係がつかめないままである。壁は北東壁を除いてよく残り、壁高は60cm～50cmである。東壁は切り合いの関係などで不明の部分がある。床面は土塚、ピットなどが重複しており判然としない。遺物の出土状態は各時期混在し、覆土内出土の遺物も多い。

遺物 土師器、須恵器が出土している。土師器は環AⅡ (図180-1・2・3)、甕F (10・15)・A (14)、高坏 (11) で、1は黒色土器である。須恵器は、環AⅡ (4)・AⅢ (5・6)・BⅡ (7)、蓋 (8)・C (9)・BⅡ (13)、高坏脚 (12)、短頸壺 (17)、広口鉢 (16) の出土があった。遺構の項で既述したように、複雑な切り合い関係があり、遺物も混在している。また、覆土内出土の遺物も多い。他に土器の様式的な検討から、57・60号住覆土内出土の中にも本址出土遺物と考えた方がよいものも存在する。例えば1・5・6・9・11・12・15などである。8は様式的に他からの混入品と思われる。このほか、土錘4 (図290-10～13) の出土があった。総てA-1類である。 (小林 秀夫)

ウ) 奈良・平安時代Ⅲ期

① 4号住居址 (図4・5・182・263・285, 図版93・95)

STA109+00の東側、遺跡地用地内ほぼ中央の北への傾斜地より検出された。本址の北にあり互いに重複する2・3・5号住のうち、奈良・平安時代Ⅶ期の5号住が本址北壁を切りながら床面より2～3cm上

へ黒土の叩きの床面を伴いながら約3割程度重複して構築され、さらに5号住の上層に構築された奈良・平安時代Ⅸ期の**3号住**が本址の覆土をわずかに切りとっている。なお、3・4・5号住がすっぽり入るような広い範囲の住居址上層に**フンド1**がある。

遺構 不整ながら隅丸方形のローム層まで掘り込まれた堅穴住居址で、壁は地形や切り合いから西と南の壁が検出されたのみであった。ロームの中に多量の礫が混入しており、床面上にそれがみられると共に、床面を凹凸の激しいものになっている。またその北東隅は範囲を明確につかむことができなかった。柱穴は不明だが、 P_2 ・ P_4 ・ P_8 と P_{12} の東隅のピットの4本とも推定される。北西壁中央北寄りの床面に焼土面が検出されたが、これは5号住構築者によって破壊されたカマドの痕跡であろう。なお、本址北隅の土坑33からは縄文前期Ⅱ群2類の土器片が出土している。

遺物 土器、石製品、鉄製品がある。土器は本期の良好は資料であるが、 P_1 内壁に底を上貼りついたような状態で出土した二・三を除き、総て覆土出土である。黒色土器坏AⅡ(図182-1)・CⅡ b_3 (2)、須恵器坏AⅡ a_1 (3~5)・AⅠ a_1 (7)・AⅢ a_3 (6)、土師器は甕B(14・15)C(9)・D(10~13)、と小形甕AⅡ(16)・AⅢ(17)がある。石製品として滑石未成品(図263-15)の他に滑石片が2点(内1点は P_1 内)出土している。鉄製品(図285-1~3)のうちの鉄鏃(1)は P_8 の西、床面上23cmにあった。帯金具(2)は残欠、刀子(3)は覆中である。

ここで、本址の所属する住居址群中の順序を古い順に並べると以下の様になる。なおカッコ内は各住居址の奈良・平安時代の所属時期、それに続く数字は床面の標高である。

4住(Ⅲ期) 815.12m→5住(Ⅶ期) 815.15m→2住(Ⅶ期) 814.82m→3住(Ⅸ期) 815.16m

これ等の住居址はまた、図4・5の様な位置関係で順次構築されたのである。従って、3号住の掘込み内にあった、5号住のはほぼ6割の覆土、4号住、2号住の覆土の一部もその外へ動かされていることになり、また3・4・5号住の床面の間には3~4cmの比高差しかないほど、遺物の錯綜、遺構の重複の激しい一帯である。なお、これ等の住居址はすべて北西の同一主軸方向を向いている。(小池 孝)

② 91号住居址(図31・183・291)

遺跡の中央部西側の傾斜面に位置する。耕作時の攪乱によって堅穴住居址の約半分が破壊されている。切り合い関係は、直接かかわっているのは、住居址内西側中央の**土坑114**である。土坑114は、出土遺物から縄文前期の諸磯A式期とされるもので、埋めたてて貼床を行なったものであろう。住居址外では縄文中期の65号住と東側の壁を接する。

遺構 約半分のプランの残存のみで特別の遺構はない。西北壁の中央部にカマドの残欠があった。ほとんど破壊されて、石組の一部と焼土の広がりを確認したにすぎない。壁面も東側の壁で10cm前後残ったにすぎない。床面は一部に堅い部分が残るだけで他は確認できない。

遺物 量的には多くないが、土師器と須恵器、土錘が出土した。須恵器は蓋BⅠ(図183-1)、坏AⅡ a_1 (2)・AⅢ a_1 (3)の3点、土師器は甕が中心で、小形甕AⅠ(4)、甕D(5・6)の3点である。このうち5はカマド内、6は覆土内出土である。土錘(図291-31)はI B aが2個出土している。(小林 秀夫)

③ 117号住居址(図49・183・286, 図版47)

遺跡の南側の西よりの用地界近くから検出された堅穴住居址で、遺跡内では地形的に高い位置にある。付近は遺構が密集し複雑な様相を呈しているが、本址はその南端部にあたる。直接切り合い関係にある住

居址だけでも、縄文前期の119号住、奈良・平安Ⅰ期の133号住、同Ⅶ期の115号住がある。礫混りのローム層内へ切り込まれた住居址で、住居址の上層への切り込み面、土層などは耕作時の攪乱によってほとんど観察困難な状態であった。壁の構築、床面のレベル、出土土器の編年などから各住居址の切り合い関係を見ると、119号住の北西部を133号住の南東壁が切り、逆に133号住は115号住にその北東壁を切られたものと思われる。したがって、本址の残存部は、住居址の北西部のみで、北西壁中央にカマドがあるのみで、他の施設は検出されなかった。

遺構 残存している部分で推定すると、隅丸方形の胴部がやや張るプランとなる。カマドは北西壁中央部にあり、ややくずれた形態で、両袖部が残っているのみで、石組のほとんどは破壊されている。焼土は広く残り、その範囲は80～50cmである。壁は北西から南西壁のみ残り、壁高は最高で40cmである。他の施設は検出されなかった。

遺物 遺物は総て床面出土である。土師器は2点で、共に甕(図183-11)・D(12)である。須恵器は広口鉢(7)と坏AⅡa₁(8)・AⅡ(9)・AⅡa₃(10)の4点である。刀子残欠1点(図286-16)の出土があった。

(小林 秀夫)

④ 126号住居址 (図53・183・286)

遺構 位置や切り合い関係は123号住居址に述べてあるので、ここでは省略したい。住居址の大半を123号住に切られて、住居址の内部施設はほとんど不明であるが、推定するとやや胴張りの長方形の堅穴住居址となる。南西壁に焼土がみられるが、カマドとする積極的な根拠を持たない。柱穴のうち確実なのは、P₂のみである。壁は北西壁で15cm前後検出されたが、南東側は地形上、また後世の耕作によってほとんど確認できなかった。床面は小礫がみえるが、この面の上に貼床を行っていたものと思われる。遺物の出土状態は総て床面出土である。

遺物 土師器は坏AⅢ(図183-13)、短頸壺(15)、甕A(16)、小形甕(17)、壺(18)があり、このうち13は黒色土器である。須恵器は蓋BⅡ(14)1点である。鉄鏃(図286-27)は、雁股式の類に入るものと思われるが、先端部が欠失していて不明の部分が多い。

(小林 秀夫)

エ) 奈良・平安時代Ⅳ期

① 30号住居址 (図16・184・285, 図版95)

遺構 遺跡のほぼ中央部に検出された住居址で、西側を奈良・平安Ⅸ期の34号住に切られている。黒土中に掘り込まれた住居址で壁高はさだかではないが、東壁28cm、西壁43cmである。床面は中央部からカマド寄りには良好であり、切り合い関係が遺物検討の結果から逆転し、本址の方が34号住より古いということになった。本址床面より約20cm上部に、前記住居の床面が存在したと考えられる。ただし、調査記録ではこの点が明記していない。

カマドは東壁中央に石組が残存し、支脚石も残すが焼土は少なく北袖は土器で補強している。カマド前の床面には平板な石が多数ほぼ密着する状態で存在したが、カマドに使用されていた石材であろう。北壁中央部下には本址床面を4cm掘りくぼめた焼土部が認められたが、性格は不明である。支柱穴はP₁～P₄の4個である。

遺物 北東床面からは須恵器蓋BⅠ(図184-18)・BⅡ(19)など4点、カマドからは土師器甕B(25)・D(26)の2点が出土し、床面からの灰釉陶器の出土は皆無で覆土上層から灰釉の出土をみたとの記録があるので、灰釉(28-31)は本址に伴出したとは断定できない。一部は34号住に属するのではないかとと思われる。

る。また、須恵器蓋・坏(6・7)・B_a₃(21)・B_a₂(22)は34号住居土の遺物であるが、時期差がありすぎるため、本址との伴出の可能性をみるため本址で扱っている。

土師器坏A(1)・AⅡ(2)、須恵器の坏BⅠ・BⅡ(3~5)、蓋AⅢ(7~9)は奈良・平安時代Ⅰ期のもので、明らかに混入品である。須恵器蓋(10~14)は端末を僅かにふくらませるだけで、同BⅡ・BⅠ(15~18)より古い形態を残し、完形品BⅡ(10・11)は伝世した住居址廃棄時より古いと考えてよからう。

本址のものは15~27で、蓋BⅡ(15~17・19)・BⅠ(18)の5点の内、15・17・18はほぼ完形か完成品の美濃須衛産と考えられるもので灰白色を呈し、18は0-10かK-78号窯期の内面ロクロ痕顕著なものである。19は端末の形態に新しさを感じずるものである。坏CⅡ_a₂(20)・B_a₃(21)・B_a₂(22)・BⅡ(23)など4点があり、以上は須恵器である。土師器では甕D(26・27)がある。灰釉陶器はいずれも破片であるが壺(28)、蓋C(29)、多嘴瓶?(30・31)は0-10号窯期で猿投産である。

鉄製品の鎌(図285-11)はP₃南の壁下床面、鋌状鉄製品(15)はP₁の東側床面にそれぞれ密着して出土している。(伴 信夫)

② 35号住居址(図18・185・273)

遺跡の中央部、東寄りの地点で、西から東への傾斜面の一番谷側で検出された。本住居址を境目として2年次に調査がかり、検出状況は必ずしも明確でない。住居址の検出面は黒色土中で壁面がつかみにくく、また床面も黒褐色土とロームによる貼床がなされ検出しにくい状態であった。直接切り合い関係にある住居址は4軒、縄文前期の37号住、奈良・平安Ⅶ期の36号住、同Ⅷ期の71号住である。本址は36号住に東壁を切られ、反対側の西側は71号住に大半を貼床されている。

遺構 隅丸方形の竪穴住居址で、大半が切り合い関係にあり、住居址内の内部施設もあまり残っていない。カマドは、北壁の西側隅に石組のカマド残欠が検出されたが、石組がくずれ焚口が一段と低くなって焼土が厚く堆積していた。カマド内から甕の破片が出土した。壁は北側と西側に残っていたが、壁高は約13cmほどである。床面は黒褐色土とロームによる貼床で、非常に軟弱であった。柱穴はない。

遺物 土師器は坏EⅠ_b₃₄(図185-1・2)・EⅡ_b₃₄(3・4)・C_a₂(5)・CⅡ_a₂(6)と、小形皿_a₂(12・13)、甕D(17・18)、甕底部(19・20)で、この内黒色土器は5・6である。また、甕17・18はカマド内、5・12・13・19・20は覆土内出土である。須恵器は11点、坏BⅠ(14)・BⅡ(15)・BⅢ(10)・CⅡ_a₂(7・8)・CⅡ(9)、蓋BⅡ(11)、長頸壺(16・23)、甕(21・22)が出土した。この内7~9・11・14・16・21・22は覆土内出土である。また、須恵器長頸壺の底部(23)は、樽崎彰一氏によれば鳴海32号窯址に比定されるという。砥石(図273-4)は硅質砂岩製で全面磨滅している。(小林 秀夫)

③ 57号住居址(図29・185・290, 図版39)

遺跡地をほぼ南北に走る用地内の西側、中央やや北寄りの北への傾斜地にある本址は、深い掘りこみを持つ奈良・平安Ⅱ期の142号住の覆土にすっぽり納まるような状態で検出された。床面が1~6cm高く、プランは南西壁側が、西で100cm、南で30cm縮まっているが、他は142号住と全く重なる。この142号住は、北東側で、縄文前期の66号住の上に床面を貼ると共に50号住の一部を切っており、さらに、本址の南西に接するようにして奈良・平安Ⅴ期の55号住が、それを切りながら、主軸方向をずらして本址と全く重なる同Ⅵ期の60号住があるが、これら2つはかなり上層に築かれた住居址であり、本址にはほとんど影響を与えていない。

遺構 主軸方向の長い長方形プランを呈する竪穴住居址である。壁は良好であり、検出面から床面までの深さは地形に従って南西側で50cm、北東で5cmを測る。床面は、特にカマドを中心とする北西側が良好な叩きであったが、南東側は、発掘時点では確認されておらず、軟弱なものであったらしい。南東壁下から北東壁下の一部にかけてやや幅広の周溝がめぐる。床面には、比較的浅いピットがいくつかあるが、整理段階の初期で、支柱穴として $P_2 \cdot P_4 \cdot P_7 \cdot P_8$ を比定してある。 $P_2 \cdot P_4$ は浅く、 $P_5 \cdot P_7$ は、142号住居中の $P_3 \cdot P_4$ と同位置であり、疑問も残るが、初期の判断に従いたい。北西壁やや北寄りに石組粘土カマドがある。本址を構築時に、北西壁ほぼ中央にあらわれた142号住のカマドの、竪穴内にかかる大部分を破壊し、そのすぐ北側に構築した状態であり、142号住のカマドの石を転用した可能性もあろう。カマドは、袖石を立て並べて粘土で固定した上に、両側から平石をせり出すような形で組み合わせてあり、多分全体を粘土で固めてあったであろう。壁に近い部分には、石組・粘土共に検出されなかったが、破壊されたのか否かは不明である。内部は良く使われており、10cmの厚さの焼土がみられた。屋外施設はない。

遺物 南西側に比較的多い。土器は、住居址の切り合いがそのまま反映して非常に複雑であるが時期を加味して図のようにまとめた。すべて小破片で覆土より出土している。坏EⅢ b_3b_4 (図185-24・25)の土師器の他は須恵器である。短頸壺が2点(26・31)、蓋がBⅠ・BⅡ・Dなど5点(30, 33~36)、坏ではⅡ・AⅢ・BⅡなど4点(27~29・32)もある。なお28はN-32(檜崎)という。他に土錘(図290-1~9)が9点出土しており、内2点が床面出土である。総てⅠA類であり、当遺跡出土同類の半数にあたり、切り合い関係にある、142・60・55号住から出土した同類を合わせた15点という数字は、全出土数19点の80%に当ると共に、1セットを推定していい数字ではないかと思われる。なお、土器形式からみて図中の「土師甕底」「須恵壺胴」は142号住の遺物と解釈した。

(小池 孝)

④ 123号住居址 (図53・186, 図版95)

遺跡の南側の中央部に位置する。全体的に**フンド4**におおわれ、礫群内に住居址を構築したもので、壁面の一部には小礫や50cm大の礫が混入している。また、西から東への傾斜地のため東側の壁は検出しにくい状態であった。切り合い関係は住居址西側で奈良・平安Ⅲ期の**126号住**を切り、住居址周辺に検出された**柱列群**をも切っている。柱列群、フンド4、土坑などとの前後関係も検討を要する面もあるが、住居址の切りこみ面、地形上の制約から不明の部分もある。

遺構 隅丸方形の、小形の竪穴住居址である。東側壁をのぞいてほぼ全体のプランが確められた。カマドは北西壁中央に袖石の一部と焼土が見られた。柱穴は確認されたもので2本、 P_1 と P_2 である。他に西側の壁近くで、2つのピットがみられたが柱穴とは考えられない。壁はほぼ全周するが10cm~15cmと低い。床面は礫が混入していて安定していない。

遺物 土師器、須恵器を中心に8点出土した。ほとんど覆土内出土である。床面出土は土師器坏EⅡ b_3b_4 (図186-2)と甕F(8)である。他覆土内出土は、坏Eb b_3b_4 (1)、甕D(7)の土師器と、蓋BⅡ(4)、坏BⅡ a_3 (5)・BⅡ(6)の須恵器に分類される。

(小林 秀夫)

オ) 奈良・平安時代Ⅴ期

① 55号住居址 (図28・188・263・285, 図版38)

遺跡地用地内西側縁中央やや北寄りの北への傾斜地で用地外にわずかかかる状況で発見された。地表から床面までが浅く、耕作によると思われる攪乱が傾斜の下方で床面までおよんでいる。北東側に3軒の重

なる住居址があるが、本址はそれ等のいずれともわずかながらかかわりを持っており、142・57号住の上に乘ると共に60号住に切られている。

遺構 先述した事情により、北東側の床、壁に不明な点が多いが、一辺5.5mの隅丸方形の堅穴住居址と推定される。発掘時に確認できなかったカマドの位置を用地外の南西壁とすれば、主軸方向N-135°-Wとなり、87号住と共に当遺跡では特異な主軸方向を示すことになる。床面は全体に軟弱で南東壁下のみ周溝がみとめられた。柱穴は確認できない。

遺物 土器は土師器の坏EⅡ(図188-1)、甕C(3)、黒色土器坏CⅡa₂(2)がある。なお、住居址南隅、P。の南西に40点の棒状礫がほぼ向きを同じくして床面上にかためて置かれた状態で発見された。多少のパラツキはあるものの長さ約12cm、重さ150~300g、損傷やわずかにみられる加工痕と民俗例から考えてむしろ状編物のおもりと考えられる。なお、その詳細は後章を参照されたい。その他刀子(図285-23)、土錘が出土した。また、同じく本址南隅に2つの特殊磨石と1点の凹石があったが、遺物処理の段階で本址とは無関係のものとして処理されている。(小池 孝)

② 76号住居址(図37・186・291, 図版96~99)

遺構 発掘区中央部から東南に寄ったところにある。南西部は96号住を切っており、南東隅は112号住上にある。砂礫混じりの褐色土層中に掘り込まれており、壁など明確でない。柱穴と考えられるようなピットは検出できなかった。北壁の一部が明確であるが段差はわずかである。石組粘土カマドであったと考えられる礫群と焼土が北壁際にあるが原型は保っていない。4.3×4.0m程度の方形プランと考えられる。

遺物 須恵器、土師器がほぼ同量、黒色土器が少量ある。須恵器は坏CⅡa₂(図186-17)・CⅡ(18)・BⅡ(19)、蓋BⅠ(23)、甕(25)や横瓶がある。土師器では坏EⅡa₂b₃(9)・DⅡ(10)・CⅡ(11・14)・CⅡa₂(12・15)・CⅡa₂a₃(16)、皿BⅡa₂(13)、甕C(24)・F(20)、小形甕(21)などバラエティーに富む。13~16は黒色土器である。坏類の高台の有無の割合はいずれもほぼ同量である。9には墨書がある。図化図化したものもほとんどが破片である。土錘(図291-51)が6個出土した。(土屋 積)

③ 78号住居址(図37・187・289, 図版41・95)

遺構 STA 109+20の西側、遺跡地用地内中央やや南寄りの北東への傾斜地に他の遺構との切り合い無く検出された。付近には76・79・94・105号住など本址と同時期の住居址が集中している。礫混りロームにわずかに掘りこまれた堅穴住居址らしく、検出時にすでに北東壁と北隅の床面は確認できず、遺構外と推定される礫群によってその範囲を推測した。1辺4mの小形の住居址である。床面はわずかに貼り床がみられるが大部分不良であり、南半壁下に両端に浅いくぼみを持つ周溝がめぐる。柱穴は不明、北東壁やや東寄りの50×40cmの範囲に、周りに方板状の石2個をもつ15cmの厚さの焼土が確認されたが、石組粘土カマドの痕跡と推定される。方板状の石は袖石でもあったろうか。

遺物 少量である。黒色土器の碗AⅠa₂a₃(図187-1)が床面上に伏さった状態で発見された。他は覆土で須恵器甕(2)、蓋BⅠ(4・5)、坏CⅡa₂(7)がある。なお覆土から、聖宋元宝、元祐通宝の各1点(図289-16・17)が出土している。(小池 孝)

④ 79号住居址(図39・188・291, 図版42・97・98)

遺構 調査区の中央南寄りに単独に検出された。東南から北西に向ってゆるく傾斜する地形上の礫まじ

りローム層を掘込み、北西部は黒色土の中に構築された住居址である。カマドは北東壁ほぼ中央にある。石組粘土造りで、天井石と左側の袖石は外されており右側の石組は3個残り、その奥に60×80cmの転石があり、その傾斜を利用して煙道の入口としている。焼土は5cm前後の厚さで火床に残っていた。柱穴は東隅と北隅のP₁・P₂の2個で、反対側にはない。屋外の存在が考えられるので精査したが検出できなかったが、西南側の地形よりみて住居の構築は可能である。壁は東南側は良好で、北西側は黒色土のため良くない。東隅と北隅西寄壁には転石がそのまま残されている。壁高は東隅で30cm、南隅で80cmを測る。周溝は東隅から西南壁中央部に達する幅10～20cm、深さ5cm前後の浅いものである。床面は礫まじりロームで良く、西隅は黒色土でやや堅くしまっている。カマド右前方20cmの床面上に $\frac{2}{3}$ 個体の土師器坏(4)と北隅東寄の壁直下に完型の黒色土器坏(5)が、南壁中央直下の周溝上に $\frac{1}{2}$ 個体の須恵器坏(6)が出土した。

遺物 床面上から土師器坏E II a₂b₃(図188-4)、黒色土器坏C II a₂(5)、須恵器坏C II a₂(6)の他、小破片の甕、坏、長頸壺の口縁部等がある。土錘 I Ba(図291-28) 2個が出土している。(木下平八郎)

⑤ 84号住居址(図41・187・286, 図版43・98・100)

遺構 調査区の最も南隅に検出された住居址である。西から東に緩く傾斜する地形上の、礫まじりローム層を掘り込んでいるが、東側は黒色土層の中に構築されている。本址は、その内部にすっぽり入る小形の奈良・平安Ⅸ期134号住が、床面をわずかにけづって存在するが、それ以外の部分は比較的よく遺存していた。なお、東壁北側に縄文期の集石炉1が近接している。

ほぼ方形プランで、周壁はよく残り、傾斜の高い西側では約30cm、低い東側は10cm前後を測る。カマドは北西壁中央やや西寄りに石組粘土で作られており、規模は70×85cmで、火床の中央やや左寄りに10×5×20cmの安山岩の自然石を支脚とし、その周囲に焼土が5cm前後の厚さで残存していた。このカマドの上部と焚口を覆うように、大は20×30cm、小は拳大の礫が集石されており、その右側にはかき出したとおもわれる焼土や灰が径80cm、厚さ4cm前後のほぼ円形に堆積していた。柱穴は内外を精査したが検出できなかった。なお、134号住内のP₃は位置的にもよくない。西隅に50×80cm、深さ8cmの浅いピットがあり、その南側にある石は大きく根が深いため取り除いてない。周溝はない。床面は134号住以外では南西部が良好で、北隅もロームで貼床されているが堅くよい。ただ、東隅は4cm前後低くなっており、黒色土の中に礫が頭を出しており、貼床もなくわずかに堅くなっている程度である。遺物はカマドの内部と周辺に多く、カマド内より土師器小形甕片と鉄鏃が、焚口附近より須恵器坏等が出土している。

遺物 少ない。須恵器短頸壺(図187-8)、坏C II a₂(9)、土師器小形甕A(10)や図示してないが土師器坏Eが伴なう。平根両丸圭頭式鉄鏃(図286-11・12) 2個がカマド内と床面から出土した。(木下平八郎)

⑥ 94号住居址(図43・188・263)

遺構 用地内調査区のはぼ中心よりやや西北寄りに単独で検出された。黒褐色土層からローム層直上にかけて構築され、壁は、南西部が緩やかではあるがしっかりした立ち上がりを見せ、その高さは20cm前後を測る。他の部分は、本址が傾斜地に構築されている関係から、北東に向かうにしたがって低くなり、北東壁の立ち上がりは確認できなかった。床面は、黒褐色土層中にロームを貼ってつくっている。剥離部分が多少みられ、小さな凹凸が多い。柱穴は、4隅にそれぞれ1個ずつ規則的に並ぶ。その他に、南東壁のやや南隅寄りに1個存在する。カマドは、北西壁の中央付近に痕跡的に認められる。石組はなく、袖石と支脚石と思われる2個の立石があり、その付近に焼土が散乱し、石に挟まれた部分は8cm程堆積していた。

遺物 土師器環EⅡb₃(図188-7)、須恵器環CⅡa₂(9)、長頸瓶(10)があり、7は内面に乱射状暗文が見られ黒色で光沢がある。10はロクロナデ整形で、部分的に自然釉がみられ、焼きは硬く灰釉質である。他に滑石製の管玉状のもの(図263-17)が出土しているが、混入であろう。(岩崎 孝治)

⑦ 105号住居址(図21・187)

遺構 発掘区中央部東寄りにある。北壁は41号住に切られているが、その部分に土・33があり、はつきりしない。西南側は106号住と切り合うかとも思われるが、傾斜のため失われており明らかでない。西側で現高50cmの外傾する壁がある。P₁・P₂が支柱穴と考えられるほか、周溝、カマドなどの施設は不明である。床面は平坦で、柱穴周辺に礫がある。

遺物 須恵器が大半で、少量の黒色土器、土師器を伴う。須恵器には環AⅡa₃(図187-12)・CⅡa₂(14・15)、高台付環、甕(20)があり、環の台付と無台はほぼ同量である。蓋はすべてBⅠ(17・18)である。黒色土器には環AⅡ(11)があり、土師器には甕、台付環がある。22の甕の波状文の原体は上下で異なる。土錘が1個出土した。(土屋 積)

カ) 奈良・平安時代Ⅵ期

① 40号住居址(図20・189・285)

遺跡中央部東側の用地界に接して検出された隅丸方形の堅穴住居址である。東側は用地外にかかり、全形は確認できていない。全体的に東へ傾斜している地形にあるために壁の一部は検出できない状態であった。本址は縄文後期38号住・39号住と切り合い関係にある。まず38号住が39号住に切れ、本址は38号住とはほぼ床面レベルを同じにしているので、本址を構築する際39号住の一部を埋め込め貼床をしたものと思われる。北西壁は傾斜面上の地形と耕作によって破壊され検出困難であった。

遺構 隅丸方形のプランが推定できる。カマドは北壁中央に位置するが、ほとんど削り取られて、焼土と石組の一部のみが残っただけである。柱穴はP₁とP₂が西側の床面に対応している。東側の床面上に約70cm大の焼土がある。床面は西側の一部に良好な部分が残っている。その他屋内外の施設は検出されなかった。遺物の出土状態は、床面を中心としたほぼ一括遺物である。

遺物 土師器、須恵器を中心として多量に遺物が出土し、須恵器の出土が多いのが特色である。土師器は甕と環が出土した。環は、EⅡb₃b₄(図189-1)・CⅡa₂b₃(2)・CⅡ(3・4)で、このうち2～4は黒色土器である。甕は4点で、器形にバラエティがある。甕B(23)・A(24)・D(25-26)に分類される。須恵器は環、蓋、埴、高環、長頸瓶、甕と種類も多い。環AⅢa₁(5)・CⅡa₂(7・8)・C(9)・BⅢ(10)・B(11)・BⅣa₂(13-17)、蓋BⅠ(18・19)・BⅡ(20)、長頸瓶(12)、甕(27・28)の他に、埴(21)高環(22)と思われるものもある。このうちで須恵器環BⅣ類は本住居址から5点の出土があったが、十二ノ后遺跡内での類似資料はフンド3内に1点のみである。鉄製鎌(図285-22)が出土している。(小林 秀夫)

② 51号住居址(図26・188・284, 図版96)

遺跡の中央西側、西から東への傾斜面上に位置する。奈良・平安期に属する62号住・54号住、縄文前期の65号住・土壇103と切り合い関係にある。検出状況は、傾斜面に黒土が堆積していたので、本址東側は貼床になっていて検出は困難であった。切り合い関係は奈良・平安Ⅳ期の62号住西側の壁および床面の一部を黒土を埋めて貼床し住居址の構築を行なっている。また、反対側の西側のコーナーは、奈良・平安Ⅶ

期の**54号住**に埋められている。62号住との床面レベル差は約27cmで本址の方が高くなっている。

遺構 隅丸方形の住居址であるが、台形状を呈する。切り合いの関係からカマドの位置は確められなかったが、東壁中央に舟底状のピットがあり、量的には多くないが焼土と炭化物の出土があった。柱穴はP₁～P₃があるが、柱穴として対象されるものかは検討する必要がある。壁は西側の残存部分で約45cmを測る。床面は東側の一部で貼床が認められた。その他の遺構の検出はない。遺物は、覆土内出土が多く、切り合う62号住と重複するものもある。

遺物 土師器は坏Eのみ5点で、Ⅱ(図188-11)・EⅢb₃(12)・EⅢ(13)・E(14)・Eb₃(15)である。12は完形土器で手法が明らかに観察される。須恵器は坏3点、甕1点の4点あり、坏はCⅡ(16)・BⅡa₂a₃(16)・BⅡa₂a₃(17)・CⅡ(18)に分類される。その他鉄鍔(図284-14)がある。(小林 秀夫)

③ 60号住居址(図28・190, 図版38・39・96)

遺構 遺跡地をほぼ南北に走る用地の西側、中央やや北寄りの北への傾斜地にある。奈良・平安V期の**55号住**の西隅をわずかに切りながら同IV期の**57号住**の床上55cmに主軸方向を55°西へ振って重なるように築かれている。従って本址はほとんどが57号住覆土を床面としており、床面と地表との比高差の小さいこととあいまって、その全体像には不明な点が多い。また、用地西側集列石の西の51・62・67・89・101号住とそれに続く130号住と同一時期の一群をなしている。以下実測図の不備を、現場担当者のメモと57・142号住の写真等とで補いながら説明してみたい。写真から一辺約4.6mの隅丸方形の堅穴住居址と推定され、主軸はN-110°-Wをさすと思われる。壁は南西隅で確認できたのみで、床面も南西隅をのぞいた部分では叩きらしき部分が一部あったのみで、プランや周溝、ピット等の床面施設も確認できなかった。西壁中央やや南寄りにあったとされる石組粘土カマドについても、その実測図がないため、発掘時の所見や担当主任のメモによると、規模は60×50cmでその詳しい状況については「カマド袖石がL字型に立っていて内外に焼土が認められ、特に左側に径60cmの範囲で2.5cmの層をなしていた。」とある。

遺物 少なく、小破片のみである。黒色土器坏CⅡ(図190-1・2)や須恵器坏BⅡ(5)・BⅢ(6)などがあるが、遺構の状況から1・3以外は本址に伴うかどうか問題もある。なお、土錘(I A類)が1点出土している。(小池 孝)

④ 62号住居址(図26・192)

遺跡の中央、西側の西から東への傾斜面上に位置する。**54号住**、**51号住**、**65号住**、**土坑103**と切り合い関係にある。検出状況は傾斜面に黒土が堆積し、東壁は確認しにくい状態であった。北東壁は縄文前期の**65号住**を切って一部貼床を行なっている関係でコーナーの検出が充分でない。西壁は、ほぼ同時期と思われる**51号住**に一部切られている。51号住の項で記述したように本址の上に一部黒色土を入れ貼床を行なっているのが観察されている。また、南側に本址に大半を切られた住居址のコーナーが検出されたが、その詳細は不明である。

遺構 隅丸方形の大半が検出された。カマドは北壁の中央部にあり、板石を組み合わせた石組で、天井石まで残り、その保存状態は良好である。柱穴はP₁～P₄があるが、それぞれの組み合わせの状態は位置的にあまりよくない。壁は残存部分で見ると、西壁は壁高約44cm、東壁は約15cmである。周溝はカマド西側に一部みられたのみである。床面は東側 $\frac{1}{3}$ ほどが黒土の上に貼床がなされているのが観察されており、他は礫混りのローム面に床を形成している。遺物は、カマド内に多くの土師器が出土し、須恵器は

覆土内が多かった。

遺物 土師器甕A(図192-1)・B(8)、坏EⅢa₂b₃(2・3)と須恵器坏CⅡ(4)、蓋BⅠ(5)・BⅡ(6・7)で、このうち土師器甕B(8)がほぼ完存である。(小林 秀夫)

⑤ 67号住居址(図32・190, 図版97)

遺構のほぼ中央から検出された住居址で、他の住居址と同様、小礫混りのローム層の面に切り込んで発見されたが、この上面の褐色土層からと思われる。切り合い関係は、西側を65号住、北西側を139号住が切り、北側を101号住に切られ、東側は集列石に切られるという複雑さであり、本址の残存状況は、約 $\frac{1}{3}$ である。

遺構 方形に近い隅丸方形と思われる。北西壁の中央に、石組の長方形のカマドが残存しているが、一部石が抜き取られている。石組を中心に粘土で被ってあり、焼土、灰、炭化物などが焚口部を中心かなりの量で出土した。柱穴や周溝は調査範囲では確認できなかった。壁は北西側と南西側の一部のみが残っただけである。床面は調査時の観察では、西側の部分は貼床が残っていたが、東側は不安定な黒色土になりその状況は貼床がとれた状態であったという。他に西側隅に楕円形のピットがあるが、本址に伴うものか確認できなかった。他屋外施設はない。遺物の出土状況は、土師器坏(7)が北西隅の床面に接し出土したが、他は、カマド周辺である。

遺物 出土量は少ない。完形土器で製作手法がよく判かる土師器坏EⅢa₂b₃(図190-7)があり、糸切りを残し、内面を幅広いへら状工具で内面へラミガキが行なわれている。須恵器は坏CⅡ(8)・Ba₃(9)で9は覆土出土である。(小林 秀夫)

⑥ 83号住居址(図40・191・286, 図版43)

遺構 発掘区西寄り地区で単独に検出された堅穴住居址である。西より東に傾斜する角礫まじりのローム層を掘りこんで構築しているが、東壁は黒色土を掘り込んでいる。西壁はほぼ垂直に近い。カマドは石組カマドで、北壁中央より西に偏した位置に構築しているが、両側石2点のみ残存していたにすぎない。カマド内には少量の焼土が認められた。カマドに接して西側に貯蔵穴と考えられるピットが認められた。ピットは主柱穴P₁～P₄と西北隅にP₅とがあるが、P₅については柱穴であるかどうか疑わしい。主柱穴は台形状に配置されている。床面の状態は、東壁ぞいのみ不安定である。南壁上に、壁に接して石組がみられるが、本址にともなうものであるのか否かは不明である。

遺物 土師器と須恵器がある。奈良・平安Ⅰ期とⅥ期の遺物が出土している。前者のほとんどが覆土出土で、混入品であろう。Ⅰ期と考えられるのは、土師器坏AⅡa₃(図191-4)、壺(13)、須恵器蓋AⅢ(1・2)・BⅠ(5)、坏AⅡa₃(3)、長頸壺(7)等があり、Ⅵ期では土師器坏Eb₃(10・11)・DⅢa₂b₃(16)、黒色土器坏CⅡa₂(12)、須恵器坏CⅡ(17・18)がある。土師器甕(14)、須恵器甕(15)もⅥ期のものであろうか。土師器壺は口縁部内外面はヨコナデされ、胴部外面は連孤状の暗文風篋磨きが、内面は刷毛目をほどこしている。この他に鉄鏃(図286-9)が1片ある。(笹沢 浩)

⑦ 87号住居址(図41・193・286)

遺構 用地内調査区西側の用地境界線際の中央部より少し南方に寄ったところに検出された。黒褐色土中に掘り込まれたため、プランの確認はむずかしく、わずかに南隅の壁が検出できただけである。この部

分の壁高は40cmであるが、上部は軟弱である。しかし、 $P_1 \sim P_4$ の柱穴はしっかりしており、東側のものがややはずれてはいるが、他の3個は規則的に並ぶ。したがって、プラン及び規模は推定可能である。カマドは、南西壁に当たる部分のほぼ中央に位置する。石組はくずれており、袖石と思われるものが、左に1個、右に3個、痕跡的に残っている。付近に焼土が堆積し、厚いところは10cmを測る。また、煙道に使用されたとみられる石が3個あり、粘土および焼土が付着していた。しかし、これらはちょうど用地外との境にあるため、煙道については不明な点が多い。床面は、粘土貼床でカマドに近い部分には残っているが、他の部分にはみられない。

遺物 黒色土器坏C II (図193-6・7)・B II a₂ (8)・C II a₂ (9・10)、土師器小形甕B I (13・14・15・)、甕C (17)E (18)、須恵器坏B II a₃ (11)・C II (12)・B I (16)があり、8の内面は放射状ヘラミガキが施されている。13の底部は二次焼成を強くうけ海綿状胎土となっており、15の底部は、回転糸切りであるが、途中まで切ってやり直しをして3回目で切り離したという痕跡が残っている。以上の遺物のうち6・9・11・14・17は覆土から、他は床面出土である。なお、図には無いが、土師器甕Fの胴下半部片が床面から出土している。器外面は縦方向のていねいなヘラ削りがされており、赤褐色を呈す焼成良好な土器である。他に鉄鏃(図286-10)、鉄製鎌(13)、留金具? (14)がある。

(岩崎 孝治)

⑧ 89号住居址 (図33・192, 図版40)

遺構 発掘区中央部北寄りにある。南側を70号住に切られ、北・東壁は黒土中のために検出できなかった。検出されたのは南西隅だけである。 $P_1 \sim P_3$ を支柱穴と考えるが、他は不明である。残存壁高15cm程度で、床面は保存状態悪く凹凸がある。周溝はない。北西壁にカマドの痕跡とみられる径60cm程度の焼土面がある。カマドが壁中央にあったとすれば、一辺5m程度の方形プランであったことになる。

遺物 遺物は少なく図化した土師器坏E III b₃ (図192-9)、須恵器坏C II a₂ (10)、小形甕B III (11)、広口鉢(12)、蓋C(13)の5点とも破片であり、他に土師器、須恵器の甕、坏があるだけである。9の坏は外面下半をケズリ、内面は暗文があるが底部には達しない。11の甕は口縁部の屈曲に特徴がある。遺構図中の坏は10である。

(土屋 積)

⑨ 97号住居址 (図34・190・286, 図版96・99)

遺構 位置や切り合い関係は72号住と重複するので省略する。方形のプランと思われるが、大半を109号住に切られ、反対に南側コーナーで103号住を切っている。残存している遺構は P_1 の柱穴、壁面、床面のみで、壁面は残存部で約55cmに達する。床面は平坦で堅い。北側に木炭化した建築部材が検出された。

遺物 土師器は小形甕A (図190-20・22)、甕D (21)と、黒色土器皿B II a₃ (13)、須恵器は坏C I (10)・C II (11)・B III a₃ (14)、蓋C(16)・B I (17~19)がある。灰釉陶器は皿B II (15)1点の出土があった。13~16は床面、他は覆土内出土である。様式的には坏、蓋、小形甕A (20)は床面出土の土器と同一時期と考えられよう。他に土鏃はI B aが3個、鉄鏃4 (図286-19~21・24)、釘(22・23)が出土している。

(小林 秀夫)

⑩ 101号住居址 (図32・192・193・291, 図版98)

遺構 調査区中央部西寄りに検出された。東側の半分以上を集列石に破壊され、残る部分も深耕のため荒されているが、プランは現存する周壁からやや六角形状を想定させる。南側にある67号住と139号住の

北側を切って作られている。附近は土壇やピットが多く複雑な状態を呈している。カマドは北壁中央部にあるがやや北に寄る。煙道部とおもわれるところに石組に使用した石が1個だけ残っている。焚口部や火床には焼土の量が少なく、附近一帯は農耕による攪乱で焼土、細粒炭、灰等が混るが、焼けた白粘土が僅かに認められるので石組粘土が推定できる。柱穴は西・北壁寄りに多いピットのうちどれが本址に伴うか、前述の如く攪乱されており決定しかねる。周壁は北から西側と南側半分が残っており良好である。周溝はなく、床面も大半が荒れており、南壁中央部と集列石の縁の部分はよい。遺物もカマドの附近、床面、壁の上に多く、土師器・須恵器の坏・甕等の破片が攪乱された状態で出土している。

遺物 土器は多い。土師器坏C II a₂ (図192-14・16)・C III a₂ (15)、須恵器坏C II a₂ (20)・C III a₂ (17)、黒色土器鉢A (21)、甕B II (4) がカマド附近から出土した。黒色土器坏C I a₃ (18)、須恵器坏C II a₂ (19)、土師器甕E (図193-1・2)・C (3)・B II (4)、形態のちがう I Baと II Bの2個の土錘 (図291-33・70) などと共に攪乱されているが床面、壁上より出土している。その他、土師器坏片、甕片等があり、覆土中より灰粘陶器 (5) があるが他からの混入である。
(木下平八郎)

⑪ 103号住居址 (図34・188)

遺構 位置や切り合い関係は72号住に重複するので省略する。97号住・109号住に切られて、わずかに南側のコーナーが残ったのみである。壁は残存部では高く50cmほどある。柱穴P₁が109号住にわずかかかって検出されているが、本址か109号住に伴うものか明確でない。床面はほとんど残存せず不明である。

遺物 複雑な切り合い関係のため、伴出状況が不明のものもある。黒色土器の坏C III (図188-20)、須恵器の坏C II (21)・C II a₁ (22)・Ba₃ (23) である。このうち20・21は覆土内出土である。(小林 秀夫)

⑫ 130号住居址 (図50・188)

遺跡の内ではほぼ中央の西側に位置する。西側から東側へとゆるやかな傾斜地が形成されるが、奈良・平安Ⅸ期の129号住と同Ⅷ期の120号住と切り合い関係にあり、本址は3住居址が重なるうちの最も古い時期にあたる。耕作時の抜根などで北西壁は破壊され、周溝によって確認されたのみである。また西南壁は溝状の流水址によって壁の状況はあまり明確とはいえない。

遺構 方形プランと思われるが、確認されたのは西南壁と北西側の周溝と、本址に伴うものと考えられるP₁、他に北西壁中央に痕跡的に検出された焼土があるがカマドに結びつくかは確かめられなかった。床面はかなり荒れていて小礫が見られた、その他の遺構は検出されない。遺物は、覆土内で出土量も少ない。

遺物 土師器坏E II (図188-25)、須恵器坏C II (24)・C II a₂ (26) の三点が図示でき、他に小破片であるが、須恵器・土師器の甕・坏がある。このうち25は内面暗文を施し、黄褐色を呈する甲州型坏と呼ばれるものである。
(小林 秀夫)

キ) 奈良・平安時代Ⅶ期

① 2号住居址 (図4・194, 図版33)

遺跡用地内のほぼ中央、北東への傾斜地である、STA 109+00の北西の位置に検出された。南西側に主軸方向を同じくする三基の住居址があり、本址は奈良・平安同期の5号住を接するように切り、同Ⅸ期の3号住に約2割おおよわれるが、本址への影響はほとんどない。各住居址のレベル差については4号住の項(143頁)を、位置関係については全体図等を参照されたい。北東の壁外に中心をもつ**フンド2**によっ

て、北東壁と床面の一部が影響をうけている。なお、南西壁の**土壇33**からは縄文前期Ⅱ群2類の土器片が出土している。

遺構 礫混り ROOM に掘りこまれており、壁の立ちあがりはゆるやかで、カマド手前の北西側へゆるく傾斜する床面も凹凸があり、全面に礫の混入がみられる。周溝はない。ピットは5個検出されたが、 P_1 はフンド2に、 $P_2 \cdot P_3$ は3号住に伴うものと考えられ、 $P_4 \cdot P_5$ が本址入口部に伴う柱穴と推定されるが、支柱穴は壁内外で検出されなかった。カマドは北西壁中央に石組粘土カマドがあった。壁から焚口まで170cm、幅は現存値で80cmだが、煙道側は耕作によるものか破壊されており、焚口が床面の $\frac{2}{3}$ まで達する大形のカマドである。袖石が特に右側に残っており、縦断面を追うと、低い火床部から一段高くなった煙道部が長く続いて壁外へ延びている。カマド北側にあたる床面の北東隅に径100cmの範囲で焼土が広くひろがっていた。なお、遺構図中(図4)本址南西壁下に図示された灰釉陶器は、本址覆土中に床面を持つ3号住のものであろう。

遺物 比較的多い。土器は2・5・15・17・18が床面、8・25・26がピット内より出土し、他は覆土内出土である。土師器では坏はすべてDⅡa₂(図194-1~3)、甕はB(16・17)・D(15)・E(13・14)、小形甕AⅢ(18)があるが、うち1には判読不能な墨書がある。黒色土器は坏BⅡa₂(4)が1個、須恵器では坏CⅡa₂(5)・BⅢ(6)、皿(20)、蓋BⅡ(9~11)、長頸壺(12)、甕(21~25)があり、5は完形品である。24・25と26の陶器は中世遺物であり、フンド2に伴うものと判断され、 P_1 から出土したことになろう。(小池 孝)

② 5号住居址(図4・195・285, 図版33・92・94・98)

STA 109 + 00西側、遺跡地用地内ほぼ中央の北への傾斜地に検出された。南にあった**4号住**の壁を壊しながらその覆土を叩いて床面としている。また、同時期の**2号住**によって北東壁を切られ、その後奈良・平安Ⅸ期の**3号住**が本址覆土の東約半分を床面としている。この3号住と本址の床面の間には1~2cmのレベル差しかなく、従って本址の覆土は、3号住構築時に南西側と北西の一部を除き、大部分が移動されていることになる。なお、4号住の項(P)に本群住居址の構築順と床面の標高が記してあるので参照されたい。なお、本址を含む広い範囲をフンド1が覆っている。

遺構 他の遺構との重複をまぬがれた北西側の状況からみて、礫混りのROOM層まで掘りこまれた方形の堅穴住居址である。壁、床面とも良好であるが、ピット、周溝等の屋内施設や屋外施設は確認できなかった。カマドは北西壁中央東寄りにあり、地表に近いことから耕作による破壊をうけて、袖の部分の粘土と補強に用いたと思われる石が検出されたのみであるが、石組粘土カマドであったと推測される。カマド内右袖に付いて土師器の小形甕が出土した。焼土は少い。

遺物 比較的多い。土器は総て床面出土で、カマド内の土師器小形甕AⅡ(図195-7)が直立し、北隅に土師器壺(8)が横倒しの状態で、カマド右袖手前に黒色土器坏CⅡa₂(1)が伏さった状態でそれぞれ完形のまま出土している。この他、小形甕AⅠ(2・4)、甕A(3)・D(6)があり、1以外はすべて土師器である。鉄製品として中央南寄りの床面から紡錘車(図285-4)が1点出土している。

なお、本址を含む広い範囲をフンド1が覆っている。

(小池 孝)

③ 45号住居址(図22・195)

遺跡のほぼ中央、北よりの傾斜面に位置する。耕作時に攪乱され残存部分は南側の壁のみである。壁高も残存部で10cm~15cmで層位的な面も確認されていない。切り合い関係は縄文中期の**100号住**を切り、ま

た東側で縄文前期の**98号住**を切っているものと思われる。

遺構 南側の壁とP₁～P₅の柱穴、一部の床面のみであるが、隅丸方形であろう。柱穴と確定できるものはP₄であるが他は住居址の全容が判明しない以上、その対象とともに解明されなければ決定できない。ピットとされたうちP₅は直径48cm深さ15cmで、ピット内には小穴が確められたがその性格は不明である。床面は100号住の床面を一部埋めているものと思われる。ほとんど礫混りのローム面まで掘り込まないと検出できない状態であった。

遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器があるが、うち灰釉陶器長頸瓶(図195-14)は覆土内出土であり、時期的にも他の遺物と異なることから本址に伴う遺物でなく、他からの混入物と思われる。土師器は坏と小形甕がある。坏A II_b₄(9)・A II(10)・C III(17)・C III_a₂(18)と小形甕A II(21)である。このうち10と17・18は黒色土器である。須恵器は坏C II(11・15・16)・B(19)・B III_a₃(20)・C III_a₃(13)、碗(12)、甕(23)などがあつた。

(小林 秀夫)

④ 53号住居址(図26・196・197, 図版98・99)

遺跡の北側端近くの西側の幅杭に接して位置する。南から北西側に向つての傾斜面に立地するために、壁、床面ともに残存状態は良好でなかつた。したがつて住居址内の遺構の検出状況にも差がある。

遺構、ほぼ方形のプランと思われる。切り合い関係はなく単独の住居址であるが、平面上では縄文中期の49号住とは重複する。残存部で見るとカマドの残欠と思われる焼土痕が、北西壁中央部から検出されているが、位置的に少しずれている。ピットはP₁～P₅の5個が南側に偏存するが、柱穴としてどれが対応するのか現状では判別できない。壁も西側と南側を中心に確認できたが、最高壁高は西南隅のコーナーで約30cm、他は10cm内外である。床面の状況はほぼ平坦である。住居址北西側と、その反対北東側に焼土がみられた。遺物は非常に多量であつた。この内土師器、黒色土器の大半は覆土内、須恵器は床面出土のものが多く対照的である。他にカマド南側に砥石があつた。

遺物 土師器26点、この内黒色土器は17点である。須恵器は28点、灰釉陶器1、砥石1、土錘9がある。土師器は坏C II_a₂(図196-1)・E III(2)・E(3・4)、甕E(20)、小形甕B I(21)・B II(22)・B III(23・24)である。黒色土器は坏C I_a₂(5)・C II_a₂(6・7・8)・II_a₂_a₃(25)、碗A II_a₃(9)・A II(10)・A III_a₃(11)、皿B II(12・13・14)・B II_a₂(15)・B II_a₅(16)・B(17)・Ba₂(18・19)、鉢A(26)などあつたが、この内墨書土器が8・13・18・19の4点あり、8は字体の判別がつかないが、他は「山」である。

須恵器は坏II_a₂(図197-1~20)が中心である。他に坏B(21)、長頸壺(22・23)、蓋B I(24)・B II(25)、甕(26・28)、四耳壺(29)が出土した。灰釉陶器は長頸壺(27)1点である。これらの土器のなかで土師器坏(図196-2~4)、灰釉長頸壺(図197-27)、須恵器甕(28)は本址の土器様式の中では異なるもので混入の可能性がある。土錘が9個(図290-18~22)出土した。

(小林 秀夫)

⑤54号住居址(図26・202)

遺跡のほぼ中央西側の西から東への傾斜面にある。遺構が複雑に切り合う地点で、奈良・平安VI期の**51・62号住**、縄文中期の**65号住**、**土坑103**と切り合い関係にある。検出状況は住居址北東側は耕作によって攪乱されて、わずかに西側壁の一部の検出のみであり、住居址の切り込み面の確認はできなかった。切り合い関係は、本址南東側に51号住があるが、発掘時の観察によれば本址の床面は西側の一部を除いて明確にとらえることはできなかったという。51号住と接する東側は一部攪乱されているが、兩住居址とのレベ

ル、出土資料を検討すると、本址は51号住の上に貼床を行なって構築した可能性がある。

遺構 検出できたのは、西壁と床面の一部のみである。南側のコーナーを見ると隅丸方形の比較的小規模な住居址である。壁高は約20cmである。柱穴と思われるのは南側にP₁のみあるが他は確認されていない。床面は西側の一部には明確にとらえられる部分もあったが、他は検出が困難であった。また西側より、土壇103が床面下に掘られているが、本址との関係は不明である。

遺物 少ない。須恵器蓋CⅡ(図202-10)、坏(11)・C(12)の3点のみである。(小林 秀夫)

⑥ 63号住居址(図28・199)

遺構の北寄りのほぼ中央に位置している。南から北東側へ傾斜している地形で壁の残存も北東側はほとんどない状態で、床面から想定せざるを得なかった。検出面も黒土中のため住居址の全容の確認は困難であった。切り合い関係は縄文前期の127号住の東側を切っている他に、土壇142・143を切っている。反対に東側のコーナーの床面を土壇145に切られている。

遺構 方形のプランを想定できる。確実にカマドとされたものはないが、東壁の中央部に焼土と板石が2枚あり、他にそれらしき部分もないのでここを想定した。柱穴はP₁～P₅まで検出されているが、対応するのはP₃とP₄あるいはP₂を加えてもよい。他ピットは大小数多く発見されたが、性格の判明するものはない。ただ、西壁添いに小さなピットが連続するが、周溝的な意味を持つものか検討の必要がある。壁高は、約30cmで西側と南側に明確にとらえられた。床面は黒土中のためあまり堅くないが平坦である。遺物はほとんどが床面出土である。

遺物 土師器は坏CⅡb₃(図199-1)と甕C(5)で1は黒色土器である。須恵器は坏CⅡ(2)・CⅡa₂(3)・4)・Ca₁(6)・C(7)、甕(8)がある。このうち7は体部に墨書がある。(小林 秀夫)

⑦ 115号住居址(図49・198・291, 図版99)

遺構 黒褐色土層中に検出された。124号住床面の一部を北壁が切り、この部分の周壁は確認されたが、117・133号住と南半分は切りあい関係にあり、周壁と床面の南辺は十分に認められなかった。しかし、南辺部では奈良・平安Ⅲ期の117号住の床面北辺部を約8cm削りとり、同Ⅰ期の133号住を約30cm埋めたとて、本址南辺部の床面を構築していたことは、一部貼り床が認められたことにより確認できた。従って、本址の規模は北壁に接した東西幅のみ、約4.1m知られたにとどまった。ピットは6個検出されたが、支柱穴は台形状に配置されているP₁～P₄が考えられ、P₅・P₆の性格は不明である。石組みカマドが北壁中央に検出された。両裾石と天井石の一部が残存し、カマド内には約10cmほどの焼土がレンズ状に堆積していた。

遺物 土師器坏CⅡ(図198-1)、甕E(11~15)、小形甕BⅠ(10)・C(9)、黒色土器坏CⅡa₂(2)・BⅡa₂(3)、皿BⅡa₂(4)・BⅢa₂(5)、須恵器坏CⅡa₂(6・7)、長頸壺底部片(8)、甕(16)と、土錘ⅠBa(図291-36)が2点出土している。4の口縁部内面に、「池」(?)が対に2字、6の底部に「居」の墨書が認められた。長頸壺と土師器甕Eの底部片(12)は覆土から、甕Eのうちの3点(13~15)はカマド内、他は床面出土である。長頸壺を除いてはほぼ、本址にとまらぬものと考えられる。(小林 秀夫)

ク) 奈良・平安時代Ⅷ期

① 36号住居址(図19・199, 図版37)

位置、切り合い関係などは35号住(146頁)と重複するので省略する。本址は縄文前期の37号住の上に

貼床をし、反対側の西側は奈良・平安Ⅳ期の**35号住**を切っている。

遺構 方形の竪穴住居址と思われる。確実に残存しているのは、西壁と、その中央にカマドの残欠と考えられる焼土と火床が検出されたのみである。焼土の範囲は55cm×50cm程で、おそらく石組のカマドであろう。ピットはP₁・P₂・P₃があるが、柱穴かどうか検討を要する。壁は西壁のみで壁高は15cmである。床面の残存部はローム面の叩き、他は貼床である。遺物はすべて床面出土である。

遺物 土師器は3点で坏CⅡa₂(図199-9)・CⅡ(10)、甕C(20)、この内9・10はは黒色土器 須恵器も坏が3点出土した。坏CⅡa₂(11)・CⅡ(12)・B(13)である。灰釉陶器は5点で、皿Aa₃(14・15)、碗AⅠ(16)・Aa₃(17)と長頸瓶(18)。このうち18は篠岡系、他は東濃系で時期的には15が折戸53号窯、14・17・18は黒笹90号窯に比定されよう。すべて床面出土であり、セットとしても良好である。(小林 秀夫)

② 43号住居址 (図22・38・39・200・285・290)

遺構 調査区の西隅に検出された。**48号住**の東側を半分以上覆うように黒色土の中に作られている。カマドは東壁の北隅より80cm中央に寄ったところにあり、石組白粘土で、規模は100×110cm、天井石は外されているが他はよく残っており、右側袖石は転石が取り除かれずそのまま利用されている。支脚は高さ29cmで底部が一辺17cm、上部は10cmの方形で側面が台形となる柱状の安山岩を使用している。焚口付近から煙道入口にかけて焼土の量が多く7cm前後の堆積がみられ、火床の奥には上を覆っていた石が落下しており、片面に火を受けた跡がうかがはれる。柱穴は床面の状態が悪く、精査したが検出できなかった。壁は東北隅から南東隅にかけて認められ、少量のロームを混入した黒色土であるが良い方である。地形が北東に傾斜しており西南側では殆ど残っておらず、東壁で16~35cmを測る。周溝はない。床面は黒色土にロームを混入した土で貼床されており、ロームが多く混入する場所は良好であるがその他は良くない。特に南半分は悪く、西側半分の床面上に拳大から人頭大の礫が多数入り込んでいるが、石の形態等よりみて住居址に伴なうものではなく、住居廃棄後に投入されたもので、大きな礫は床面に一部食い込んでおり、床面上に配置された様子はない。遺物は床面と覆土中より多く出土し、焚口前方150cmの床面上と覆土中より鉄鏝が、北東隅より西へ130cm寄った壁の上に刀子の破片が、カマド内部から坏と甕の破片が、その周辺の覆土中より土錘が、また、東隅壁近くの覆土中より混入品の滑石製の白玉が出土した。

遺物 土師器は碗AⅡa₃(図200-1)、坏CⅡa₂(2)、小形甕BⅡ(16)、甕E(17)、その他Bタイプの甕がある。黒色土器は坏CⅠ(3)・CⅡa₃(4~6)、碗AⅡa₂(8)。須恵器は坏C(9・12)・BⅡ(15)・Ba₂(13・14)・Ca₂(11)、長頸壺(20)、甕(23・24)があり、23は口縁部の小破片であるが、両面に釉薬がみられる。灰釉陶器碗AⅠ(19)は猿投窯の製品である。鉄製品は平根鏝(図285-17~19)、尖根鏝(21)、刀子(18)、引手の残欠である馬具(20)と多い。土錘5(図290-15~17)はI BaとI Cの両タイプがある。(木下平八郎)

③ 71号住居址 (図18・201・286・291)

遺構 調査区中央部東寄りに検出された。東北側は**35号住**に大半が切られており、ローム層への掘込みも浅く、西隅から東隅中央寄りを結ぶ線より北東部は黒土層中に構築されている。カマドの位置は不明で、35号住により破壊されたものであろう。柱穴はP₁・P₂が西隅と南隅にあり共に掘込みは浅く、柱穴として疑問が残る。壁は西側の全部と南側が残っており、他の部分は黒土層の中で攪乱されており検出できなかったが、残る壁の状態は良好である。周溝はなく、床面の状態は良い方である。遺物は床面上には小破片のみで、覆土中より土師器、黒色土器の坏、小形甕、皿、土錘等が出土している。

遺物 土師器環DⅡa₂(図201-1)、黒色土器環CⅡa₂(2)には「万」の墨書がある。黒色土器環CⅠ(3)、皿Ba₂(4)、土師器の小形甕BⅢ(5)、土錘ⅠBaが2個、同ⅠD(図291-57・58)2個の計4個があり、他に須恵器環Ba₂(6)があるが、他からの混入とおもわれる。留金具片(図286-2)がある。(木下平八郎)

④ 120号住居址(図50・202・286, 図版99・100)

遺跡の内ではほぼ中央部の西側に位置し、西から東への緩傾斜地に立地する。褐色土層から礫混りのローム層に切り込んだ住居址で、北東隅を奈良・平安期Ⅵ期の129号住に切られ、反対の西側は同Ⅵ期の130住を切っているが、他の残存状況は良好である。地形上、また耕作上傾斜面の方は壁が低い。

遺構 隅丸方形の住居址であるが、切り合いのため、カマドは確められなかった。柱穴P₁・P₂は南側に対で確認できたが他は検出できない。壁は西南壁で高さ約40cm、東側に行くにつれて低くなっていく。幅15cm前後の浅い周溝が壁の残存部にそっている。床面は叩きしめられ、平坦である。遺物は、南東壁近くに甕の破片が覆土内より発見された。他は床面出土である。

遺物 土師器甕E(図202-1・2)、環DⅡa₂(5)と灰釉陶器碗AⅠ(3)・Aa₃(4)が出土し、5の外表面体部に「長」の黒書がある。灰釉陶器碗は東濃系で、時期的には黒笹90号に比定されよう。他に鉄鏃(図286-26)が出土した。(小林 秀夫)

⑤ 124号住居址(図48・52・201・291, 図版96)

遺構 C地区西側に114・128号住その他の諸遺構等と複雑に切りあった状態で検出された。すなわち、本址は、南壁と東壁の一部に、壁の立ち上りが認められた以外は、西壁は、古墳時代Ⅰ期の128号住、奈良・平安Ⅰ期の114号住と切りあい関係にあり、また、北壁は周溝Ⅰにより、南壁の大部分は土壇140・141によって切られていた。床面は礫まじりの砂質ロームの上を白色粘土で貼って構築していたが、それは部分的であって、全面に亘って検出された訳ではない。従って、本址の平面形、規模等は不明であるが、残存した壁と床面の状態から、その平面形は隅丸方形で、規模は南北5.4、東西4.6m以上のプランの想定が可能である。床面上には多数のピットが検出されたが、本址にともなうものか、明らかになし得なかった。なお、西壁は114・128号住を埋めたてて構築してあったものと思われるが、黒色土のために検出はできなかった。また、P₂付近に焼土が認められたが、直接カマドとは関係のない位置にある。しかし、カマドそのものの検出は、他の遺構に破壊されたためか、検出できなかった。

遺物 本址の壁ぎわがかなり不鮮明な状態にあったが、出土遺物は床面上から、かなりまとまって出土し、その内容も、ほぼ同一時期と考えられるものである。ただ、土師器甕F(26)は114号住におちこんだ状態で検出されたが、本住居址にともなうものであろう。土師器環AⅢ(図201-9)・DⅡa₂(7・8)・BⅡ(10)、甕F(26)、小形甕BⅠ(27・28)、黒色土器碗AⅡa₂(11)、環CⅡa₂(12・14)・環CⅡ(13・15)・BⅡa₂(18)、皿BⅢ(19)、須恵器環CⅡ(16・17・20~23)・BⅡ(24)・BⅡa₂(25)がある。19の黒色土器皿Bには「又」の墨書がみられる。その他土錘(図291-37~41・55・56・61)が11個とまとまって出土した。(笹沢 浩)

ケ) 奈良・平安時代Ⅸ期

① 3号住居址(図4・203・291, 図版33・95・99)

遺構 遺跡地用地内ほぼ中央、S T A109+00の東側の北への傾斜地に位置する。そこに切りあって検出された遺構のうちでは最も新しく、かつまた、床面の標高の最も高い住居址である(143頁の4号住の

項参照)。従って本址は、他の総ての住居址の覆土を床面としており、中でも**5号住**の覆土がその6割強を占めていることになる。なお、本址を含めた南西の広い範囲を**フンド1**が覆っている。遺構は前記の事情で壁が検出できなかったため、叩きの床面の範囲から推すと、4.0×4.2mの方形もしくは隅丸方形プランであったと思われる。床面は、おおむね良好であるが傾斜の下方2号住にかかる部分では、明確に把握できなかった。周溝はわからず、柱穴も不明な点が多いが、2号住内南西側の本址床面から40cmの深さを測るP₂・P₃を本址の柱穴群の一部としたい。北西壁中央北寄りの床面上に65×50cmの範囲の焼土面が検出された。上面に拳大の石がのっており、耕作によって破壊された本址のカマド痕跡と考え、石組粘土カマドを想定している。

遺物 カマド周辺、および2号住にかかる付近より比較的多く出土した。土師器では、坏DⅡa₂(図203-1)・BⅡa₂(2~4)、黒色土器は坏CⅡa₂(5~7)・BⅡ(8)・BⅡa₃(9・10)がある。灰釉陶器は多く、壺AⅠ(11・12)・AⅡa₃(13・16)・AⅡ(14)・Aa₃(15)・a₂(17)や皿AⅡa₃(19~21)・AⅡ(22・23)・a₃(24)、長頸瓶(25・26)がある。2・7・16・18が床面出土であり、器形は2点の長頸壺を除くと、坏・壺・皿が大半を占める。灰釉陶器はほとんどが東濃系であるが、19・25・26は猿投窯、24は篠岡産である。この他、土製品として土錘ⅠC(図291-45)とⅠAの2点がある。なお、図203には、4・5号住出土とされていた新しい時期のものもわずかに含まれている。

(小池 孝)

② 34号住居址 (図16・206・263・285)

遺跡のはぼ中央、東側の用地界近くに検出された。この一帯は傾斜地のために耕作により攪乱が多い上に数多くの住居址が切り合い、その確認には困難な条件があった。このような中での本址の検出状況は、直接切りあう奈良・平安Ⅳ期**30号住**のとの関係は、遺物の様式的な検討から、本址が後出するものと確定した。発掘時の観察では、本址以前に30号住が検出され、本址を30号住が切るという結果になった。床面も30号住はかなり明確であったのに比較して、本址は残存部分でも貼床状で軟かい状態であり、壁も西側と北側を中心として残ったのみで、南側・東側は検出できなかったが、結論的には本址が30号住を埋めたて貼床を行なって住居址を形成したと推定した。

遺構 やや不整形の隅丸方形のプランであるが、大半は不明の部分が多い。カマドは北西壁の中央に、焼土と石組の一部がみつき、周辺から土師器片が多量に検出されているところからその位置を推定できるが、南西壁中央にも焼土があり、移築されたものか、他の遺構に関連するものか検討を要する。本址にともなう柱穴は確認されなかった。壁は南西壁が最も良好で壁高29cm、北西壁は8cmである。床面は残存部分では良好な貼床であった。その他の施設はみられない。

遺物 土師器は7点、内黒色土器は坏CⅡ(図206-1)・BⅡ(2)・B(3)の3点で、他は皿BⅡ(5)、甕D(10)・C(11)、小形甕A(12)である。1がカマド出土で他は覆土内出土。須恵器は1点の甕(13)のみで、灰釉陶器壺AⅡa₃(4)・AⅡ(6~9)がある。いずれも覆土内出土で、総て東濃系窯址で折戸53号址の時期にあてられよう。鉄製品として引き手残欠の馬具(図285-13)がある。

(小林 秀夫)

③ 41号住居址 (図21・204・285)

遺跡中央部の東側の用地界に接した西から東への傾斜面の谷側に位置して検出された。発掘地域の関係から調査が2年度に亘ったこともあり検出状況には混乱の部分もあった。北側を縄文前期の**104号住**、南側を奈良・平安Ⅴ期の**105号住**、また、東側で縄文後期の**38号住**を切り、西壁で**土坑133・134**と接するとい

う状態であり、南東壁は奈良・平安Ⅹ期の**33号住**に切られ、さらに、この33号住はほぼ同時期の**29号住**に切られ、さらに、本址も南側のコーナーで**29号住**に切られるという複雑な関係にある。実測図のレベルと、発掘時の観察から切り合いの前後関係をまとめると、105号住→41号住→33号住→29号住の順序になる。**41号住**は105号住を同一レベルで切り、33号住は41号住と並ぶ形に105号住を切る。29号住は33号住の上に105号住・41号住と同レベルで叩きの貼床を形成し、住居址を築造したと思われる。

遺構 確実に遺構と確認されたのは、北西壁に検出されたカマドと、柱穴P₁と南側隅に焼土がみられたのみである。カマドは石組で、袖石はよく残存し、天井石状の板石もあり、焼土も厚く残っている。カマド址内部からも土師器片、刀子が出土した。P₁はやや浅いが位置的にはよい。床面は調査者によると、黒

遺物 土師器は、23点と多く、器形の変化にも富んでいる。坏CⅠa₂(図204-1)・CⅡa₂(2・6)・CⅡ(3~5・7~9)・DⅡa₂(10)・DⅡ(11)に分類され、1~9までが黒色土器である。この他、小形甕CⅡ(17)・5・7~9)・DⅡa₂(10)・DⅡ(11)に分類され、1~9までが黒色土器である。この他、小形甕CⅡ(17)・CⅢ(19)・底部(18)・AⅡ(23~25)・AⅢ(26)・B(30)、甕D(20~22・31)などがある。須恵器は長頸壺(12・13)、甕(14・32)の4点のみ。灰釉陶器は、皿BⅢ(27)・BⅢa₂(28)・BⅡ(29)・碗Aa₂(15・16)の5点で、胎土の様相から永田窯系のもと思われる。時期的には、折戸53号窯址にあてられよう。前述したように複雑な切り合い関係のため、このうち、特に覆土内出土の土器は、確実に本址伴出するかどうか問題もある。例えば、短頸壺(14・17)、甕(20・24)である。刀子(図285-16)1点の出土があった。

(小林 秀夫)

④ 70号住居址 (図33・202・286, 図版40)

遺構 発掘区中央部北寄りにある。**69号住**・**89号住**を切っている。ほぼ全形を残しているが、保存状態は良くない。P₁・P₂・P₄を支柱穴とし、4本を考えたいが、西隅には検出されていない。残存壁高20cm前後で立上りは垂直にちかい。周溝はない。北壁中央部にカマドの痕跡を残す。床面は多少の凹凸があるが堅くしっかりしたものである。方形プランで、4.4×4.4mほどで主軸をN29°Wとしている。

遺物 少量で、図示したのは土師器甕E(13)、黒色土器坏CⅢa₃(図202-14)、須恵器坏Ca₂(15)の3点で、14のみ完形である。他に土師器甕・坏、須恵器甕・坏・蓋の破片が少量ある。遺構図中の坏は89号住のものである。土師器甕には図示したもののほかにⅨ期相当の外周ケズリの著しいものがある。鉄製紡錘車片(図286-1)が1個出土している。

(土屋 積)

⑤ 72号住居址 (図34・202・286・290・291)

遺跡中央の東寄りの傾斜面に位置する。縄文時代、奈良・平安時代の住居址が密集する地帯で、直接切り合い関係にある住居址だけで7基を数える。かなりきつい傾斜面であるので、壁が充分につかめない面もあり、黒土中からの検出であり、住居址内施設もほとんど判明しないままであった。切り合い関係をまとめると、この一帯の住居址は、縄文前期の**111・112号住**、奈良・平安Ⅵ期の**97・103号住**、この両者より新しい**109号住**、本址と接するⅧ期の**71号住**、Ⅸ期の本址が関連してくる。103号住-97号住-109号住-72号住という切り合い関係が成立するものと考えられる。

遺構 東側のコーナーが黒色土内のため検出できなかったが隅丸長方形のプランを確認できる。カマドは北西壁中央よりやや北寄りにあり、石組の残欠と焼土がわずかに残っている。他に南側の中央に焼土がみられた。柱穴は検出できない。壁は西南側はかなり良好に残り壁高は約70cmほどあるが、反対に東側の壁は15cmしか残っていない。床面はローム面を叩いて固めている。カマド西側を中心に遺物が出土した。

遺物 土師器は9点で坏が多い。坏CⅡa₂(図202-16-18・20-22)・B(19)と小形甕底部(23・24)がある。このうち16-22は黒色土器である。灰釉陶器は4点で、埴AⅠa₃(26)・AⅡa₃(27)、皿Aa₃(28)、埴(25)に分類される。このうち26は猿投系、28は東濃系で、時期的には折戸53号窯址である。土器以外では12個という土錘の出土が目立った。ⅠBa(図290-23, 291-24・42)5、ⅠBbが3、ⅠC(49・50)が4個あり、住居址内出土数では本址例が一番多い。鉄製品として刀子(図286-3)半欠がある。

なお、図34の×印1～8の記号は、図202中の土器番号とは次のようになる。3→17、4→26、5→22、6→21、7→27、8→18。

(小林 秀夫)

⑥ 129号住居址 (図50・202)

遺跡中央西側寄りの地形的には西から東への傾斜面に位置する。したがって北東壁の確認は困難で、現存部分は南壁の半分のみである。小礫混りのローム層面からの検出しかできなかった。他の住居址との切り合い関係は、隣接する奈良・平安Ⅵ期の130号住、同Ⅶ期の120号住の内では最も新しい。南壁で120号住を、西壁で130号住を切っている。また、土坑124は本址と壁を接する位置にあるが、切り合い関係のないところを見ると本址の北壁もこの直前までと考えられる。

遺構 東西3.1m、南北推定で3.1～3.2mのほぼ方形に近いプランである。カマドは西壁中央に検出されたがほとんど破壊され、壁外が中心の焼土が見えるのみで、石組はほとんどが抜きとられ、その構造は判然としない。柱穴もP₁・P₂のみでその関連はつかめない。壁は主として壁高20cmの南壁のみの検出である。周溝は確認できなかった。床面は小礫が混りかなり凹凸があり、おそらく貼床されていたものと思われる。遺物は、カマド周辺に土師器片の出土があった。

遺物 図示できるのは灰釉陶器の埴AⅠ(図202-7)・Aa₃(8)と須恵器坏CⅡa₂(6)であるが、6は出土状態不明で本址に伴うかは疑問である。灰釉陶器埴は、胎土から東濃系窯址の産と考えられ、時期的には折戸53号窯に比定できる。

(小林 秀夫)

⑦ 134号住居址 (図41・202, 図版43)

遺構 調査区の南隅84号住の中に検出された。84号住の中にすっぽり入る小形の住居址で、84号住床面を11～15cm掘込んで作られている。カマドは北東壁の中央にあるがやや東に偏る。石組白粘土作りで、70×100cmを測り、両袖石はよく残り、焚口前に天井石が落ちており、支脚はなく、火床に焼土が5cm前後の厚さで残っている。柱穴は西隅にある径50cm、深さ5cm前後の浅いピットが1個検出されたが、柱穴とするには浅すぎる。壁は砂礫まじりのロームで、高さは10～12cmであまり良くない。周溝は西北壁中央から、南西壁にかけてわずかに認められる。床面は砂礫ローム中の礫を抜いて作られており良好である。覆土中より土師器、須恵器、灰釉等の坏、埴、甕の小片が、カマド内よりは須恵器の甕片が出土している。

遺物 灰釉陶器埴Aa₃(図202-9)1点の他に土師器の糸切底がある。

(木下平八郎)

コ) 奈良・平安時代Ⅹ期

① 18号住居址 (図12・205・285, 図版35・99)

遺構 遺跡の北寄りに検出された。縄文前期の138号住の主要部を切り、21号住の北部を切っている。本址床面は138号住床面の上部にあったようであるが、カマド部では殆んど同一レベルで、遺物も両址のものが混在するような状態であった。本址の21号住残存部床面へ食い込む部分で見ると、138号住より

18cm高い床面となるが、傾斜を持っていたものであろうか。黒色土、黒褐色土を切り込み、一部はロームに至る掘り込みのためプランや壁の状態は不詳である。カマドは東壁中央につくられた石組粘土カマドであったが、耕作で破壊されたとし、原形は不明である。P₂は長方形と楕円形のピットの複合であるが、ともに黒土の落ち込みで須恵器を出土し、P₉・P₁₀はともに炭化物・焼土が落ち込み須恵器・土師器の小片が出土した。これらは他の柱穴の覆土が黒褐色であるのに比し、色調、出土遺物が異り、本址に所属する可能性が強い。他のピットは138号住と区別不能である。P₁・P₃・P₅~P₇・P₁₁~P₁₃はいずれも縄文土器片を出している。なお、P₁₃よりの中央部の焼土は138号住の地床炉かと調査者が考えているものである。床面はやや軟弱で、貼床が一部残る。

遺物 土師器には坏D I a₂(図205-1)・D II a₂(2)・D II (3)、完形の皿B III a₂(4)、須恵器には坏B (5・6)と本址には伴わない蓋(7)がある。灰釉陶器では壺A II (8)・A a₃(9)があるが図示しなかった1片が東濃産で、9は0-53窯期前葉の永田窯産である。他に角棒状鉄製品(図285-7)が出土した。(伴 信夫)

② 29号住居址 (図15・205, 図版37)

遺跡のほぼ中央、東側の用地界に接して位置する。西から東への傾斜面の谷側に位置するため、後世の攪乱で壁面が破壊されほとんど検出不能の状態であった。また、住居址の中央を東西に発掘年度で区分された上に、複雑な切り合い関係があり、検出にはより困難であった。本址と直接関連ある切り合い関係は、北側で奈良・平安X期の41号住、西側で同V期の105号住、東南側で同IX期の34号住、ほとんど重なるようにして同X期の33号住をそれぞれ切っていて、この周辺のグループの中では最も新しい住居址である。本址は33号住の上に105住、41号住と同じレベルに叩きの床を形成していたものと考えられる。

遺構 やや不整な隅丸方形のプランを呈する。黒土中から掘りこまれたために壁の状態はあまりはっきりしないが、床面などからプランはほとんど問題ないものと思われる。カマドは東壁に2基並んで検出された。焼土の広がりからカマド間の切り合いが観察され、新旧に区分されるようである。南側にある小形が古く、北側の大形が新しい。両方ともに石組のカマドで、旧は煙道が残り、新は袖石が残っていた。

焚口部の焼土は10cmにも達する。規模は旧が40cm×70cm、新は80cm×70cmである。両方ともに破壊されている。他に住居址内に焼土が数箇所見られた。ピットは数個検出されているが、本址に確実にともなう柱穴かどうか問題がある。壁は黒土層中のためあまり明確でなく、壁高は残存している範囲で20cmほどである。床面はロームと黒土との叩きの貼床で堅いところがある。覆土内から床面に掛けて人頭犬から拳大の礫が散在している。

遺物 土師器は6点あり、皿A III a₂(図205-10)、坏Ba₂(11・12)・C I (13)・C II (14)と甕底部(15)である。このうち13・14は黒色土器で、須恵器は坏C III (16)のみ、灰釉陶器は、東濃系の皿B II a₃(17)・B III (18)の2点ある。(小林 秀夫)

③ 33号住居址 (図18・205・285, 図版37)

S T A 109+00の東側、遺跡用地内の東半分中央やや南寄りの、北東への傾斜地に検出された。奈良・平安V期の105号住の東側を切りながら、同IX期の41号住の南に並ぶ位置にある。41号住と105号住は同一平面上で切り合っており、本址床面はその12~13cm下にあたる。さらに本址覆土範囲のほとんどをその床面とした同X期の29号住が、41号住と105号住と同一平面上に構築されている。このように近接した標高の内で切り合っていた本址を含む住居址群であったが、その過程において二年度に亘る調査を余議なくさ

れたため、一部に未発掘部分を残してしまい、主として規模とプランの一部に図上復元によらざるを得なかった部分があることを了承されたい。

遺構 5.20×4.20mの主軸方向の長い長方形のプランと推定される。壁はその大部分が床上12～13cmで29号住に切られているわけだが、斜面の下方である北東と、北西壁は、検出時にそれを確認することが出来なかった。床面は、調査時の所見によればロームの貼床で比較的良好とあり、先の壁の状況とあわせて、本址は黒土中もしくは斜面の下方では床面がロームまで達していない住居址であったかと思われる。周溝は無い。柱穴は6個あるピットのうちP₄・P₅が柱穴群の一部であると思われるが詳細は不明である。カマドは、北西壁中央の床面に径60cmの焼土が確認されており、袖石と思われる石1個があること等、29号住構築者によって破壊されているが石組粘土カマドがあったであろう。なお、本址は図の部分年初年度に調査されたが、前記の事情により、その西側は未発掘に終わってしまった。

遺物 本址を切る29号住のものが混入している可能性もあるが、両者の間に型式差は認められず2軒を同時期として扱った。土師器では坏DⅡ(図205-19・23)・DⅡa₂(20)・BⅡa₂(22)、皿BⅡa₂(21)、灰釉陶器は碗Aa₂(25)・Aa₃(30)・AⅡ(26・27)・AⅡa₂(28)、皿AⅡ(31)・BⅡa₃(32)・BⅡa₂(33)と一点の須恵器壺(24)がある。このうち、27・33が床面、19・20がカマド内、23がピット内から出土している他は覆土の遺物である。また、灰釉陶器は総てが0-53といいいほとんどが東濃系であるが、27・28は永田窯のものであり注目される。なお、24の須恵器壺底部は後世の混入物であろうか。他に鉄鎌(図285-12)がある。(小池 孝)

④ 121号住居址(図50・206・291)

遺跡のはほぼ中央、用地内西隅に位置し、北東向傾斜面に立地する。黒色土中で検出され、掘り込みはロームには及んでいない。本址西～北側にある縄文前期の125号住の覆土上につくられる。住居址の南東側約半分は集列石に切られている。

遺構 南東側半分を失っているが、隅丸方形のプランであろう。壁はほぼ垂直で、西壁で25cm前後の壁高を測る。床はほぼ平坦である。西壁ぎわ程軟弱で覆土との判別が難しい程であるが、中央～東壁寄りでは焼土を混ぜて堅く、良好なつくりであった。床面上の諸施設は全く確認できなかった。ただ、北壁中央部、集列石に切られる付近に焼土が集中しており、カマドの残骸と思われる。屋外施設は検出し得ず、特記すべき出土状態の遺物もない。

遺物 黒色土器は坏CⅡa₂(図206-14)、土師器は甕C(28・29)・E(27)があり、須恵器は坏Ba₂(17・18)・CⅡa₂(15)・C(16)、蓋CⅠ(19)、甕(30)、広口鉢(31)、灰釉陶器は碗Aa₂(23)・Aa₃(22)、皿BⅡa₂(21)・B(20)、長頸瓶(24・25)である。須恵器甕(30)は混入品かもしれない。また灰釉陶器のうち20～33は東濃窯の、26は猿投窯のそれぞれ産であろう。土錘はⅠC(図291-54)が出土している。(百瀬 長秀)

サ) 時期不詳

① 109号住居址(図34・291)

遺構 位置や切り合い関係は72号住(161頁)で述べてあるので省略する。プランは、隅丸方形であるが、半分を72号住に切られていて、住居址の内部施設はほとんど判からない。本址に伴う遺構は柱穴と思われるP₁・P₂がある。壁は東側だけが72号住に切られているが、残存している他の壁はわずか壁高7～8cmしかない。

遺物 確実に本址に伴う土器の検出はなく、所属時期を決定できないが、土錘4(図291-34・53・60)の

出土や切り合い関係から奈良・平安Ⅵ期からⅨ期までの間と思われる。

(小林 秀夫)

② 136号住居址 (図55)

遺跡の最南端に位置する。礫混りの ROOM 内に形成された堅穴住居址で、黒色土内から切りこまれたもので検出は困難であった。切り合い関係はなく単独の住居址である。不整形で規模は小形である。カマドは北東壁中央に焼土がみられただけで他は詳細は判からない。規模は55cm×60cmである。柱穴と思われるのはP₁だけである。壁は黒褐色土中であまりはっきりしないが、壁高は約20cmほどである。床面は礫混りの ROOM 層の上に黒色土で床面を構築しているのであまりはっきりしていない。

遺物 遺物は須恵器環Cの破片が出土しているのみで、時期を決定できないが、奈良・平安Ⅳ～Ⅵ期の間に入るものと考えられる。

(小林 秀夫)

オ その他の遺構と遺物

本遺跡からは住居址以外に数種の遺構が検出されている。これらのうち、縄文・弥生両時代に所属する明確なものは各時代で取上げたが、それ以外は種々問題点があり、便宜上こゝに一括した。各遺構のもつ性格等はまとめの項で述べることにし、こゝでは主にその内容のみを簡単に報告したい。

ア) 土坑及び土坑群

① 土 坑

土坑の総数はナンバーをつけたもの197基で、このうち縄文前期の方形配列土坑群や時期不詳の柱列2なども含めているので160～170基になる。詳しくは別表1の一覧表を参照していただきたい。また、土器・石器ともに住居址出土例と殆ど変わらないのでここでは特例以外は触れない。

まず、形状では、プランが円乃至楕円を主とし、他に方形や五角形が多少加わる点、他遺跡例と変わらない。大きさは一般的に100×70cmから80cmが多く、長径が150cmをこえるもの、50cm以下の例は少ない。原則的には単独で掘られたのであろうが、時に同時期の2ヶ連結した例がなくもない。深さは検出面からの計測でないので正確を期し難いが、50cm前後が最も多く、20cm以下、100cm以上は少なくなる。こうしたプラン、大きさ等と時期的な関係には特に指摘すべき事項はない。

土坑自体の時期決定は非常にむずかしく、今回も1・2を除くと確実といえる例は少ない。土坑埋土中の土器片や住居址、土坑との切り合い関係からの推測で万全ではないが、一応、時期的区分をしてみると次のようになる。

縄文前期—70、同中期18、同後期18、弥生中期2、平安時代14、中世3、近世1の計126基で、残りは不明となる。住居址数と較べ縄文前期が多く、平安時代が少ないのは当然の結果であろう。縄文時代、特に前・中・後期に土坑が多出する例は県内のみでなく全国的傾向といえる。各期毎の概要を記したい。

縄文前期は一部早期末までのぼる可能性ある土器片を含め、所謂中越式から諸磯B式までが主体となり住居址の所属時期と同一傾向である。本遺跡自体が相当耕作による攪乱をうけており、住居址は勿論、土坑自体からの出土土器でさえ1～3型式に及ぶ混在ぶりを示す。また、完形乃至半完形に近い土器を出土する例は少く、殆どが小片程度である。わけても諸磯期に顕著な土坑と浅鉢という関係をとらえるため小破片も器形を注意したが、70例中わずかに1基にすぎなかった点意外であった。深鉢でもほぼ器形のはっきりした例は、土坑130の諸磯A式(図155-3)程度である。土器以外の遺物として、石鏃、石匙などの石器は約1/5基

から検出され、球状耳飾は1基、他に炭化物が比較的多く検出された例もあるが、土塚としての特色を示す事実は認められなかった。

次に中期とした土塚は18基と少ないが、釣手土器の釣手部(図76-5)と石皿を出土した土塚5以外に特記する例はない。しかし、後期になると、浅鉢の完型品を伴う土塚173(図76-7)、175(同-8)、66(同-6)や釣手土器をもつ土塚176(図155-21)など、他遺跡例と同一の土塚が検出されている。しかしすべてが浅鉢とは限らない。骨片出土例も中・後で各1例あるのみである。

弥生時代の土塚については本文134頁に触れており、また、平安時代以降のそれについても特記すべき事項もないので省略したい。

なお、土塚の中でも、阿久遺跡の調査後急にクローズアップされた方形配列土塚群についてはすでに触れたが、平面形の似た例として図62に示す一群がある。方形配列土塚群に較べて浅いという点が指摘できるが、土塚埋土中や全体の覆土中からは縄文前期土器片が多く何かしらその形状は意味あり気であり、今後の課題としておきたい。

土塚の性格や分布については、その分析を途中で打切ったので省略したい。

② 土塚群1・2(図64)

縄文時代の多い土塚の中で、趣の変わった例として区分したものに土塚群1・2がある。調査区域の最も南側に検出された80号住などを含む10数件の住居址群内にある。この付近は有賀峠からの押し出しが最も強く、ために耕土が薄く、かつその一部は移転した住宅があり、ゴミ捨て場が掘られたりして、土層の堆積関係が最も不明確な地点である。140号住検出作業中、その西部に板状の石があり、敷石住居址の可能性を予想して付近を拡張したところ、耕土下の相当削平された二次堆積らしい礫を含むローム状土層面に黒土の落ち込みが点在することがわかった。その結果、これらの土塚は通常の土塚(例えばすぐ横の土塚147)に較べれば、規模は径30~60cmと小さく、かつまちまちだが、分散せずまとまっており2つの土塚群としてとらえることにした。

土塚群1は4ヶ、同2は8ヶからなり、前者ではほぼ一列に3m、後者では5mの長さで2列に並ぶ。先記した如く現地表面も基盤も相当削平されており、それを考慮しても50cmをこえる深さのものがなく、また、形態的にすべてなべ底状に掘られている点が注意され、あえて、柱列や土塚とせず、分離したわけである。しかし、遺物の出土は全くなく、時期も決定できない上、類例も余り知らないなのでその性格も不明とせざるを得ない。(樋口 昇一)

イ) 竪穴

① 竪穴3(図13, 図版48)

調査区域ほぼ中央の北へ緩傾斜する部分に単独に検出された。北約3mに26住(縄文中期)、南~西数mに45(奈良平安Ⅶ期)・66・98(縄文前期)号住があり、東側は一部フンド3と接するらしいが詳細はわからない。また、26号住・本址・45号住の西側には集列石遺構がほぼ南北に通っているが、本址のみその影響はほとんど受けていない。ローム層を掘り込んだ北隅がやや欠ける1.8m×1.4mの方形プランである。南西から北東へ傾斜するため、前者では周壁が30cmあるが、後者側は5cm程度となる。覆土は前述した集列石に関係するらしい人頭大(少)から拳大の礫を混入した黒色土で、その下面は床面から5cm上となり部分的に厚さ5m~2cmの酸化鉄が層状に堆積していた。床面までは黒褐色土となる。床面はほぼ平坦であるが、

余り硬くない。壁にそって径5～7cm、深さ8～10cmの小ピットがほぼ等間隔に20ヶ程あるが、そのうち周壁に接するものは、堅穴内へ傾斜して掘られていた。カマド・焼土等はない。

遺物は床面に近い黒褐色土から土師器の細片を得たのみであり、細かな時期比定はできないが、集列石との関係からみて奈良・平安時代に属する遺構と考えたい。(樋口 昇一)

② 堅穴4 (図17, 図版48)

遺跡の南東側の用地界に近く位置し、奈良・平安Ⅰ期の31・32号住に接している。地形的に西から東への傾斜面の一番谷側である。遺構は石積みの中のロームを掘りこんで、隅丸方形のプランを形成する堅穴で、規模は2.4m×2.2m、壁高は12cmである。床面は調査者によると一部叩いてあるところも見られたというが全体的でなかった。東側の壁は確認できなかったが、浅いピットが2つ連なって検出された。遺物は土師器片、須恵器片の出土があったが、本址ともなうものかは確められない。検出状態、遺物からは遺構の性格はとらえられない。31号住に重複している可能性がある。(小林 秀夫)

③ 堅穴5 (図24, 図版37)

集列石を挟んで堅穴3と対面する位置にある。46号住(縄文前期)の東南隅を切って作られた、長径3.1m、短径2.2の不整形円形を呈する小堅穴である。覆土は多少の礫を混入した黒色土層で、床面近くになると黒褐～茶褐色土があった。北東部に連結するピット(深さ28cm)は一部本址を切っているので土垢とすべきだったかも知れない。本址西南側の周壁は壁面が緩く、通常の住居址周壁などとは異なっており、掘り込まれたローム層も余り硬くない。西側壁下には浅い凹みや人頭大の石があり、中に板状の石(70cm×60cm)が床面に据えられた状態で検出されたが、加工等の痕跡はない。床面も余り硬くはないが、ほぼ平坦であった。P₆は位置的にみると46住に伴うようだが、深さなどから考えて、本址と同時期であろう。遺物は1片もなく、時期を決定できない。(樋口 昇一)

ウ) 周溝1 (図52)

調査区域内では最も高い位置にある124号住(奈良・平安Ⅷ期)の北東壁から北西壁にかけて検出された。付近一帯は縄文前期と奈良・平安期の住居址が密集しているが、これら住居址調査終了後、土垢179などの断面観察で、更に下部に遺構らしい部分の存在が予測され、掘下げたところ本址の存在が判明した。北西壁下にあたる弧状の部分は、幅1m前後、深さ20cm程で、長さ約4～5mあり、底面も軟かいがやや平坦であり、溝状となっているが、北側の土垢179付近から南西部へのびる部分は、幅・深さとも小さくなり、線状になってしまう。太い溝状部分は基盤であるローム混りの砂質褐色土層を掘り凹めてあり、黒土の落込みから検出はさほど困難でなかったがそこにつながる東南部や、線状となる南西部は、基盤自体の荒れもあって、不明確であった。溝状部分には人頭大の礫数ヶの落込みの他は、付属施設らしいものは何もなく、遺物も皆無であった。調査時点では、奈良・平安期住居址下にある点や付近の出土土器から縄文後期頃と考えたが、その後の検討では、これらの溝状遺構がすべて同一時期でないらしいことや、上にある124号住との関係も、埋めて貼床したと速断できない部分も生じ、所属時期を決定する遺物もないので、時期不詳とすることになった。ために124号住の記述では、本址が切っていると表現してあるのは以上の点からである。いずれにしても、付近は土層の荒れがひどく、他住居址もその認定に苦労した地域であり、本址の掘り方にも多少の問題があったので、その性格づけなどはできなかった。(樋口 昇一)

エ) 柱 列 (図53)

① 柱列1 (図53)

調査地域の南側に近い123・126号住(奈良平安Ⅲ・Ⅳ期)や墓塚1に接してローム層を掘って検出された。123住の北西及び北東壁にはほぼ平行して「」状に並んでいる。P₁~P₇は径50cm~80cm、深さ12cm~24cmとやや大小あるが、北西列のP₁~P₄、北東列のP₄~P₆があり、柱中心間の総長は4.2cmと2.8cm、柱間は1.4m(P₂・P₃のみやや短かい)と規則性があり、2間×3間の建物址を想定できる。しかし、調査当初から目標としていた掘立柱をもつ建物址の発見と考えたが、P₁~P₆に対応する他の部分が丁度123・126号住内に入るため検出できなかった。なお、P₆につづくP₇も計測値上では正確に位置しており、これを加えると3間×3間となる。しかし、やや浅い点と掘り方自体がP₁~P₆までと異なっていた点から一応は必ずして考えた。なおまた、P₇から逆のくの字状に南へつづくP₈・P₉・P₁₀からはほぼ直角に並ぶP₁₁・P₁₂、更にP₁₂につづくP₁₃などもあるが、柱列1に較べると規則性に難点があり、調査時点においても、ピット自体がややそれらしくないと記録されている。

この柱列に確実に伴う遺物は全くないが123号住が奈良平安時代Ⅳ期、126号住が同Ⅲ期であるとき、本址がこの2住居址に切られたとすればそれ以前の構築と考えてよいであろう。しかし反面、P₁~P₆の深さを考えれば、2住居址内にその痕跡が当然残る筈であるが、検出できなかったのは調査延長期間の最末期に当り床面上の貼床部分を精査できなかったからであろう。調査記録にはその点の記述がないので補足しておく。

(樋口 昇一)

② 柱列2 (図38)

柱列1の北西約10m、77(奈良平安Ⅰ期)・78(同Ⅴ期)・95(縄文前期)・108(同)号住にかこまれた中にある。本址は調査当初土塚として処理されたが(土塚192~197)、192~195が直線上に並び、また先の柱列1ともほぼ棟方向が平行する関係にある点、掘り方自体もしっかりしており、かつ底面に板状の石がある点から、一応柱列として処理することにした。土塚192~194は径1.2~1.0m、深さ20~30cm、共に底面に板状の石が据えられている。柱中心間は正確に2.1mを計る。これに土塚195を加えるとやや、中心線がずれ、かつ柱間距離も多少短くなる。この柱列の横に土塚196・197が並ぶが、やや方向がずれる。3間或は2間と考えてもこの2個はずれている。付近を精査したが他は未検出である。傾斜の強い面に構築されている点が気になる。本址に伴う遺物はない。

(樋口 昇一)

オ) フンド (図2, 208~210, 287, 図版48・49)

この名称については、調査時点においても種々論議されたが、最終決定をみないまま引継がれたため、一応本項ではそのまま使用することにした。調査者によれば、住居址、土塚などといった明確な遺構を伴わないが、特殊な遺物が出土したり、またそれがかたまっていたり、遺物の出土状態に意識的な行為を感じさせるような在り方が目立った地域をまとめて呼称したという。以下、4つのフンドを略述する。

① フンド1 (図66・209・210)

調査地域のほぼ中心部、2・5号(奈良平安Ⅷ期)、3号(同Ⅸ期)、4号(同Ⅲ期)各住居址の重複する上面にあたる13×10m程の範囲をさす。表土下20~30cmの耕土すれすれか、わずかその下部の黒色乃至黒褐色

土層中に、平板状の大きめの石などを含む礫群があらわれた。礫群の密集する部分や散在する部分もあったが、これら礫群を含むやや広い範囲は土器片などの出土が多少多く調査者の注意を引いた。ところが、その中央部付近で、2ケの石鈿帯(図66では「石」とのみ記入されている。図287—102)が検出されるに及んで、何らかの遺構を予想し、全面的な調査に切りかえ、遺物出土地点の記入なども行いながら付近を精査したところ、土師器、須恵器、灰釉陶器片は勿論、鉄製品を含む各種の遺物が多少の高低はあるものの散在して出土した。しかし、最後まで遺構らしい明確な痕跡はつかめず、この礫群を中心とした付近をフンド1として検討することになった。

出土遺物は比較的種類に富んでいる。土師器、須恵器、灰釉陶器は勿論、カワラケ、青磁器、青白磁器、白磁器などの細片もあり、刀子や古銭、角釘といった鉄製品もある。勿論出土遺物の層位的分別などできないが、比較的上層出土といわれる中世遺物は後述するとして、それ以外は次のような器種がある。

土師器坏EⅡ a₂b₃、小形無頸壺、黒色土器坏C、須恵器坏CⅡ、灰釉陶器鳥付蓋がある。土師器坏Eと須恵器坏Cに墨書がみられるが、坏Eは破片のため判読不可能、坏Cは「佳」とあるが、これまた判読できない。小形無頸壺は底部を欠損するが、粘土紐巻き上げ法で作られ、内面に指頭によるオサエ痕が著しい。内面に赤色顔料がびっしりとこぼりついている。祭祀用具であろうが、他の土器とセットをなすかは判らない。古墳時代の“手づくね土器”の可能性もある。灰釉陶器鳥付蓋は金鈿場遺跡で確認された水鳥付鈕蓋平瓶(本書51頁)と同一のものである。小形無頸壺を除いた土器群は、十二ノ后遺跡Ⅴ期であろう。

古銭、刀子、角釘のほか石製模造品1ケについては、調査期間中盗難にあい、詳細は不明である。

② フンド2 (図2・66・208・287)

2号住(奈良平安Ⅶ期)北東壁上面一帯にあたり、或はフンド1号と同一のものかも知れない。4m×1.5～2mの範囲で、本址は比較的礫が多く、3ブロック状に並ぶが、礫群は集石状に積み重なるという状態ではなく、無雑作に平面的に散在する感がある。礫の多い点が他と異なる点といえる。遺物は余り多くなく、1点の鉄鎌(図287—5)を除くと土器類(図208—35～40)である。

土師器坏EⅡ a₂b₃、甕、須恵器BⅡ、甕がある。坏Eの底部には「嶋」と読める墨書がある。土師器甕は古墳時代のもと思われる。他図示しない小片を含めて主なる土器は十二ノ后遺跡Ⅴ期に属する。

③ フンド3 (図207・208)

調査区域のほぼ中央部北東側の標高では最も低い点にあたる付近で、集列石の東側、竪穴3と接する部分以東一帯である。集列石の北端から本址付近は住居址の検出はない。別記するように各期の集落が等高線上に弧を描くようにあるとすれば、この部分は弧の内側の空白部に当る。しかし、現地形は耕土下すぐに礫を多く含むローム質黄褐色土層となり、耕作による礫の抜取りなどで相当荒れている。しかし、部分的に残る耕土直下の礫の中にはフンド1・2のような、多少意識的とも思える礫の集積があったり、遺物の出土が面的広がりをもつなど、他と異なる状態が認められたのでフンド3として区別した。範囲は約10m四方程度らしい。細片では青磁器、カワラケなど新しいものもあるが、土師器、須恵器(図207, 208)が多く、他は不明鉄器(図287—4)があるのみである。このうち土師器、須恵器は時期的に3区分できる。

金鈿場遺跡Ⅲ期(本書56頁参照) 須恵器では、坏蓋(1)、坏身(2)、碗(18)、短頸壺(7～9)、台付壺(24)、長頸壺(25・26)、甕(21・22)、高坏(23)、甕(19・23)と器種も多く、土師器では甕(34)と黒色土器高坏(28・29)がほぼ同一時期であろう。しかし、台付甕と想定したものは、他の甕より後出の可能性もあり、同様

なことは須恵器高坏と同蓋・坏(1・2)にもいえる。従って以上の土器群は、若干、後出例を含んでいるにしてもほぼ6世紀末～7世紀初頭に位置するといえよう。

とは須恵器高坏と同蓋・坏(1・2)にも言える。従って以上の土器群は、若干、後出例を含んでいるにしても、ほぼ6世紀末～7世紀初頭に位置すると言えよう。

十二ノ后遺跡Ⅰ期 須恵器坏A(3～6)、蓋(10・11)がある。ただし、坏Aはかなり後出の例を含む懸念もあり、確実なのは蓋のみである。

同Ⅵ期 土師器坏E(32)、須恵器坏C(30・31)、長頸壺(27)がほぼこの時期に該当する。

以上、本址は主体となる時期は金鑄場遺跡Ⅲ期であるが、遺物自体の性格から一時期に限定しなくてもよいであろう。

④ フンド4 (図53・209・210)

調査区域では最も東南側に近く、柱列1・2、墓塚1や10軒以上の縄文、奈良平安時代住居址を含む25m×20mほどの相当な広範囲にわたる。土層関係は既述の各フンドと同様であり、下位の住居址との関係が明確な部分もあれば、全然把握できない点もあった。本址はまず、32号住(奈良平安時代Ⅰ期)北西隅で壁面より約10cm浮いている子持勾玉(図287-3)が何の遺構らしい痕跡のない部分から突然検出されたのに注目し、同一面を精査したところ(既に下部まで掘り進んだ部分も多かった)多少、礫が平面上に集まっていたり、その中から土師器の皿が数枚重なるような形で出土したり、土器片が一面に散布したような状態で検出されるといった状況が確認され、既掘部分でも同一傾向の様相があった点も証言され、やゝ広すぎるくらいがあったが先の範囲を一応区画してみた。出土遺物は子持勾玉を除くとすべて土器片であるが、特に注目すべきは、大半が「カワラケ」であり、この点他のフンドと特色を異にする。勿論、他の細片の中にはいわゆる中世陶器や奈良平安期のものもあり、一概に本址を中世遺構とするわけにはいかないが、フンドと認定した中にもこうした例がある点を記しておきたい。遺物の説明は「中世の遺構と遺物」で述べる。

(樋口昇一・笹沢 浩)

カ) 墓塚1 (図13・210・287)

調査地域では南半のほぼ中央に位置する部分から単独に検出された。周囲数mの範囲に住居址・柱列などが存在する。1.4m×1.3mの不整形を呈し、ローム層を約20cm掘り凹めてある。壁はやや傾斜がゆるく、底面が平らななべ底状をしている。遺構上面からやや下に7cm程の灰層があり、その下部は細かい炭粒や焼土を多く混える茶褐色土が充満し、点々と内部に細片化した骨片が認められた。また、北西部の灰層下部から鉄釘14本(図287-6～19)が小範囲から検出され、さらに須恵器蓋CⅡが2片、灰釉陶器手付水注の破片(図210-20～22)が出土した。この他、人頭大の礫が2ヶ茶褐色土中にあった。耕土が相当攪乱をうけていたが、黒色土層より掘り込まれて、今少し深い土塚であったと考えられる。

手付水注は胴下半と水注部分を欠くが、淡黄緑色の釉が全面に残存している。胎土から猿投窯産である。榑崎彰一氏は10世紀代の所産と考えている。この他、須恵器蓋CⅡは十二ノ后遺跡Ⅵ期である。骨片の存在から墳墓的遺構とみなしたが、出土遺物などからも平安時代としてはほぼ間違いのないであろう。

(樋口 昇一・笹沢 浩)

キ) 集列石 (図2, 図版50)

調査区域のほぼ中央部に南北に斜めにわずかに曲りながら横切る形で、約70mにわたって存在する。調査途上、耕土下の浅い部分から礫を多く含んだ比較的堅い黒褐色土層が注意されていたが、次第にその部分が弧状に連続することが判明した。しかし、住居址等の発掘に追われ、全域の調査はできず、住居址との関係を検討するに好適な67・101号住に接する部分のみにとどまったり、他は表面を露呈しただけであった。幅は2.0～2.5m(低い方の堅穴3・5付近で最大10m程になるが、この部分は相当攪乱されていて詳細は不明)あるが、高い部分の方がやや細い傾向が見受けられた。拳大～人頭大の礫を多く含む層は表面がほぼ平坦で厚さ30cm～60cm程あり、礫の含み方は一様でなく、特に人工的に構築したという確実な証拠は認められない。この層の下にある基盤となるローム層はカマボコ状になり、わけても西側には細いながら溝状の部分が付属するやにみえたが、全面かどうか確認はしていない。カマボコ状となるローム層面は他と較べると小さな凹凸はあるがやや硬く、付近の同一層面とは明らかに異っている。67・101号住の場合はこの集列石によって切られているが、両者の層序関係を示す断面図作成が手違いからできずここに詳細な観察結果を記すことができない。

本址周辺の耕土、覆土からは、縄文～平安時代各期の遺物が出土しているが、確実に先記した礫を含む黒褐色土層からの遺物は、内耳鍋(図209-39～41)3個体分と「カワラケ」と呼ばれる皿や高台付の坏の小片である。調査当初は、これらから本址を中世遺構と判断したが、その後の整理で、中世以前に遡る土器片も検出されており、住居址以外の他遺構同様、一括してここに取り上げた。

カ 中世の遺構と遺物

当初、内耳鍋の出土を根拠として集列石を中世遺構と考えたが、その後の検討で、中世と限定するには多少無理があることが判明し、土塚、住居址以外の遺物と一括して取扱うことになった。ために、中世の遺構として明確に指摘できるものはない。しかし、本遺跡の全面(包含層)からかなりの量の中世土器が検出されており、特にフンド1・4と集列石に多いことは前述したとおりで、遺物の上からも、中世遺構の存在は当然考慮されよう。以下、簡単に遺物のみ記録し、後日の課題としたい。(図209・210)

土師器は「カワラケ」と呼ばれる皿と高台付の坏、内耳鍋がある。皿は口径10.5～16.0cm、器高3cm前後の法量もち、口縁部が僅かに外反する皿A(8～13・33)、口径7.0～8.0cm、器高5cmの法量もち、口縁部が僅かに内湾ぎみに立ち上る皿B(2～7・14・34)、口径7～10cm、器高2～3cmの法量もち、逆梯形の器形で底部の厚い皿C(15～20)、口径8～10cm、器高1～2cmの法量もち口縁部が外反ぎみに外へ大きく開く皿D(21～26・29～32)がある。なお、口縁部が内湾ぎみに開くもの(27・28)があり、以上の分類にあてはまらないが、2例のみで類例が少なく、ここでは皿Dとして扱う。皿AとBは粘土紐巻き上げのち口縁部を右まわりにヨコナデをほどこしている。底部外面には指頭圧痕が残っている。皿C・Dは総ろくろ成形で、底部に糸切り痕を残す。一部に油煙の付着したものがあり、灯明皿として用いられたものがある。坏B(37・38)は口径10cm内外のもので、フンド4から2例出土した。36も成形から本類に属するであろう。いずれもろくろ成形、付け台付である。

内耳鍋は集列石から3例(図209-39～41)と包含層(図210-1・2)から2例出土している。口径23～33cm、器高15cm内外である。雲母等の細砂を少量含んだ硬質の土器である。底部は薄く仕上げられ、外面には煤煙が多量に付着している。

青磁器(図210-10～19)は、フンド1上層から出土した。南宋竜泉窯、元代から明代の景德鎮窯のものなどがある。陶器は瀬戸・美濃系の雑器類が、フンド1上層、包含層から多少出土している。(笹沢 浩)

4) まとめ

ア 縄文時代の土器・土製品について

ア) 縄文前期の土器

縄文土器の出土量は多く、破片数にして優に万をこえる。その大部分が前期で、他は少ない。遺構・遺物の上からも、中越・阿久両遺跡に匹敵する拠点集落といえる。前期のなかでも主体となるのは関山式併行の所謂“中越式”期で、ついで諸磯A、同B式、黒浜式、花積下層式各期の順になる。諸磯C式以降の前期末葉の資料は痕跡的に存在するのみである。中期は5軒の住居址が検出されたが、周辺の該期遺跡に較べると小規模であり、特に問題とする点はない。後期は9軒の住居址とグリット出土遺物にあやまった資料があり、諏訪地方では良好な例を加えたといえる。晩期は断片的な例である。以下、前期のみの研究略史を記し、他は主に編年を中心に問題点などを指摘したい。

県内の前期縄文土器を概観すると、関東・中部地方に分布圏の中心をおく一群と、東海・近畿地方のその一群が入り込んでいる。下伊那・木曾両地方南部をのぞき、地理的位置からみて前者の在り方が常に優位を占め、後者が客体として存在するというパターンは変わらない。しかし、その間、明らかに両者の影響下から誕生した当地方独特一土着性の強い一群もある。昭和30年代当初型式設定された神ノ木式・有尾式や、40年代に定着した中越式がそれに当る。これら3形式とも前期前半に位置しており、それに続く中葉の諸磯式期以後は、関東とほぼ同じ分布圏の中に入って土着性が薄くなり、わずかに関西系の北白川下層式などが混入する程度になり、中期までこの傾向が続く。

こうした状況の中で作られた前期編年は、昭和30年代と余りかわらず、とくに前半期中越式が加わった程度である。しかし、中越式自体、中越遺跡の本報告が未刊のため、上伊那郡誌に発表された中越式3区分案の概要のみで、その形式内容の細部については不明確な部分が多い。その後、南信地域で小規模ではあるが良好な該期やその前後の遺跡が調査・報告され、次第に資料の集積が進んでいる。卒論などで取扱った研究者は数名いるが、中越式自体に関する個別的・総括的発言は県内では見られず、むしろ東海地方からの積極的アプローチが目立っている。だが、それも中越式の実態が不明確なためカッコ付で説明されることが多い。

ところが、最近、諏訪市千鹿頭社遺跡では3軒、阿久遺跡ではわずか一軒であるが、該期の良好な一括資料が提示されたり、中越式と並ぶ土着の神ノ木、有尾両式についての優れた論放が発表され、ようやく該期研究の再検討の時期が訪れている。なかでも、阿久遺跡は前半から中葉までに及ぶ数十軒の住居址や土坯・集石等から膨大な資料が検出され、関山式期は勿論、黒浜式～諸磯B式期までの時期区分に何らかの見解を提示できそうである。ただ、未だ整理が半ばにも達せず、ここに発表できない点を了とされたい。

前期中葉の諸磯式土器については、これも近年、北信地方で諸磯B式の二区分案が発表されているが、未だ個別的な意見のみで、総括的な論考はない。

一方、周辺の県外に目を転じると、新資料の増加は勿論であるが、早期後半から前期にかけての総括的論文や形式個々の丹念な研究があり、むしろ県内の比較検討に役立つものが多い。とくに該期において密接な関連性を示す東海地方に示唆に富んだ研究が多いことは、共伴関係を主に型式編年を進める立場からは参考になる。

本遺跡出土の前期土器は、南信地方のみならず、県下にあっても質、量とも優れた資料といえる。しかし、種々の事情からそれを本格的に検討することができなかった。これは、他項目でも同様であるが、ここでは以下各群土器に伴う問題点や課題を簡単に記述し、今後稿をあらためて、全般的考察を行いたい。なお、住居址・土塚などの遺構出土土器は、遺構毎にまとめられていて群別の記述には不便なので、ここでは、遺構と同じ程度の資料がある遺構外出土土器を、群別に分類図示してあるので、それを中心に述べていくことにする。

① 第Ⅰ群土器

早期末～黒浜式までの前期前半期を一括した。本遺跡の主体となる土器であり、また、地域的特色など問題点もあるので、あえて諸磯式以降の前期後半期と大別した。

第1類土器（図156、図版55・56）

長野県下においては、早期後半から前期初項にかけての良好な遺跡が少なく、型式設定できるような資料に恵まれていなかった。しかし、近年の大規模調査により、次第にこの間の究明が行なわれつつある。小県郡和田村男女倉遺跡における条痕文、絡条体圧痕文を含む早期終末期土器、男女倉遺跡から和田峠をこえて対峙する諏訪郡下諏訪町浪人塚・ホウロク両遺跡出土の早期後半期の土器、南に下り上伊那郡飯島町カゴタ遺跡出土の東海系を含む該期土器の新知見など、更に諏訪郡でも関東に近い茅野市判ノ木山西遺跡から検出された特殊な刺突文土器など、比較的まとまった資料が報告されつつある。

本遺跡出土例は、数も少なく断片的である。繊維を多量に含み、厚手作りが目安となる。A～Fに細分したが、Aの茅山式に比定した条痕文ある土器（図156-1～9、137-2）などは、貝殻条痕でなく、擦痕的な例が多く、むしろもう少し時期的に下降し、前期初頭にまで残るのではないかと思われる。Bに区分した複合口縁や頸部の隆帯ある例（図156-11～26）は、断片的ではあるが県内で認められている。C・Dなどを含めて前期初頭花積下層式に比定してよいのではないか。まとまった良好な資料がないが、類例は増加しており、今後伴出土器の検討を通して解明されるものと思う。

第2類土器（図156-11～26）

上述した1類に対して客体として存在する他地域に分布の中心を置く一群である。近年、清水ノ上貝塚の報告や地元東海地方の意欲的な研究成果により、その型式内容が判明してきており、本県では、むしろこの客体土器を鍵として編年操作が可能な時点にきている。A・B（図157-1～19）などはかつて木島式、或は「おせんべ土器」として一括して取扱われてきたが、近年二分されている。本県でも伊那谷ではこの期の良好な遺跡が発掘調査され、A・Bの前後関係がほぼ検証されている。しかし、実はこの伊那谷の遺跡で出土する関東系土器（本遺跡の第1類）は余り特徴的な文様要素をもたず、今一步両者一東海・関東一の関係が不明瞭な点が多い。かつその上、本類Bの細線文のみの一部は、後述する第3～5類とも関連するらしく、その編年の位置の幅が大きく、安易に両者を結びつけることができない状況にある。これに対しCに分類した清水ノ上Ⅱ式（図157-23～26）は、多少地域性を加味しているものの、良好な資料が増加しており、本遺跡でも半完形品（図69-15）や大きな破片（図133-8）もあり、その編年の位置はほぼ推定できる時点に達している。ただ、木島式の新しい部分としたBとのつながりや、Dの北白川下層Ⅰ式への変遷が本県の場合まだ明瞭でない。本類もまた、次の第3類から第5類の土器との組合せなど、課題は山積している。なお、Dの北白川下層Ⅰ式（図132-1・2）などは、県内でも本遺跡でも出土例は多くない。やはりこの時期は東海地方の土器の波及が強いとためと考えるべきではないか。ちなみに、清水ノ上Ⅱ式の

型式特徴のみではあてはまらない一部の薄手土器もあり、この点は今少し類例の増加を俟ちたい。

第3類土器（図158，図版60～62）

型式名のみが先行してしまった所謂「中越式」を一括する。実は、筆者自身もまたこの型式内容については完全な理解点に達しておらず、曖昧な部分が多い。しかし、中越遺跡の発掘調査以来、南は下伊那、北は諏訪まで、天竜川上・中流域一帯（主として長野県）に分布する土着的色彩の濃厚な土器群であり、一型式として設定される十分な内容があることは間違いないだろう。

まずその特徴は、胎土に繊維を含まず、4～7mm程の薄手から厚手の中間の作りで、無文土器が卓越することがあげられる。故に文様は同時期の関東系土器に較べると対照的に簡単で、波状口縁頂部から垂下する刻目のある粘土紐貼付文のみだったり（刻目のないものもある）、口縁部から頸部に細線格子目文を付すのみといった程度である。器形にも特徴がある。60cmをこえるような余り大形土器がなく、器高は25cm前後が殆どで、口縁部は平縁と波状口縁があるが、4つのゆるやかな頂部をもつ後者が多い傾向とみたい。やや外反する口縁部が頸部でしまり、再び胴部でふくらみながら丸底の底部へいたる器形も圧倒的に多いらしく、単純な深鉢は少ない（なお、中越遺跡の本類には壺形に近い器形もあり、本遺跡でも図88-10がそれに近い）。なお、胎土に金雲母を含む点も強調してよく、また、木島式ほどではないが、表裏面に軽い指圧痕の残る点もあげられる。このような土器を本類のA～Dとして細分したが、拓影図をみてもわかる通り、本遺跡の主体となる土器であることが理解していただけたと思う。このA～Dのうち細線格子目文の有無をもって木島式との関係から時間的な差をとらえる考えもあるが、粘土紐と併用する例（図113-2・3）もわずかではあるが存在し、簡単に結論は下せない。ただ、筆者もこの細分案は検討しており、器形・胎土等の比較検討は要するであろう。

第3類土器の中でもう1点注意すべきは、A～Dと同一の胎土や製作であるが、文様の全然異なるEに分類した一群である。これは次の第I群4類Dとの区分がやや不明瞭、即ち中越式と神ノ木式との関係をどう捉えるかという点にある。複合口縁的な口縁部に2～3条の爪形文や刺突文をめぐらす構成は、清水ノ上II式の縁帯文手法とも関連するし、一方、複合口縁は関山式の一部とも通づる面がある。この爪形文・刺突文帯の下は縄文や櫛状施文具による条線文風の沈線文、また例は少ないが無文となる場合などあり、器形もA～Dとは異なる口縁部のやや内湾する深鉢などがあって、3類・4類の区分が多少問題があった点反省し、ここでは一応同一内容と訂正しておきたい。

以上の第3類土器のうちEを除くA～Dの一群は、伊那谷に中心を置くと考えられていたが、本遺跡につづく（同一遺跡としてよい）千鹿頭社遺跡で良好なセット資料が検出され、また、同じ諏訪郡下の阿久遺跡でも住居址セットが把握されるに及び、その分布が伊那谷のみでなく、諏訪地方一天竜川上流域一に及ぶことが判明してきた。そして問題は「中越式」と「神ノ木式」の関係をどう解釈するかという点であろう。昭和30年代初め、筆者等が『信濃史料』第一巻考古篇で提唱した神ノ木式は、単純に言えば、関山式に対比する長野県独自の型式と考えており、今日いう所の「中越式」の存在は余り重要視せず、次項で述べる第4類を中心に設定したのである。なぜならば、当時中越遺跡は「西原遺跡」と呼ばれ、その出土遺物の中心は本項でいう第4類、神ノ木式と殆ど類似しており、それに伴出する無文土器群（中越式）は注意はしたが、型式内容の要素としてとりあげなかった（この経緯については別に触れたい）。そのため、『信濃史料』発刊後実施された中越遺跡の発掘調査では、ねらった「神ノ木式」は成果がなく、むしろ「無文尖底土器」（中越式）が多出し、早期末の大集落という印象が強調され、一部には、中越式一木島式一早期末という図式ができ上がってしまった。これは、林茂樹氏等による『上伊那誌』（考古篇）での中越式3期編年案

によって一部訂正されたが、その後、筆者を含め関係者の後始末がなく、いたづらに混乱をまねく結果を生じてしまった点、深く反省している。この点については次項で述べることにする。

第4類土器（図159，図版63～69）

所謂「神ノ木式」である。繊維を含むA・Bとした関山式の一群と繊維を含まぬC・Dの一群を一括した内容をさす。前者はひとまずおき、後者について触れよう。C・Dともに繊維はなく、焼成・胎土・製作などが良好で、深鉢を主とした器形が多く、丸底が消えて平底となる点が共通する。CとDの区分は、Cの口縁部文様帯や胴部文様が関山式に似るのに対し、Dの竹管による爪形文、刺突文、沈線文などの口縁部文様帯が特色ある構成をとる点にある。Dの文様要素が関山式と関連するのは当然であるが、2類Cとした東海地方の清水ノ上Ⅱ式とも脈絡があることは縁帯文的複合口縁部の加飾からも明確に指摘できる。

では、A・Bの関山式とC・Dの一群は、同一型式の二グループとして扱えてよいかといえ、すでに関東地方では関山式の細分案が論議されている今日、とうてい承認できるわけがない。関山式自体、余り良好な資料がない本県では、その細分案は参考となろうが、決め手を欠ききらいはある。そこで検討しなければならぬ作業は、第3類一中越式との関係究明であろう。結論からいえば、2・3・4類を含めた試案程度のもはあるが、未だ資料不足、分析不十分で発表ができる内容ではない。本遺跡出土土器はこの課題に恰好のデーターを提示してくれたが、何分、余りにも遺物が混在し、調査自体も短期間で精密さを欠いているため、遺物操作に自信がないというのが本音である。この点、現在報告書刊行を目前にした阿久遺跡では、別の視点から細かな分析を進めており、その結果に期待したい。

なお、本類と次の第5類に共通したG（図160，図版66・67）について、若干の見解を記しておきたい。Gとした一群は、繊維を含まず、縄文のみを文様とするが、胎土に金雲母を多く含み、裏面に指頭痕やそれに類似した凹凸が顕著に認められ、焼成・胎土とも中位の深鉢を主とした一群である。量的には4・5類A・Cと同程度かやや多い傾向にあり、完形土器も多く見逃すことができない一群である。縄文は斜縄文が最も多いが、羽状縄文、異条斜縄文のほか特殊な縄文があるらしく、また、4・5類のA・Cの縄文ともさして変らないようだがその詳細は解明していない。胎土に繊維を含まず、金雲母を含む点や、指頭圧痕などある点は、第3類との共通項であり、むしろ、第3類・第4類土器グループとして位置づけていたが、伴出関係を追ってみると、次の第5類一黒浜式土器との組合せも考慮されるに至った。中越式・神ノ木式・有尾式という地域的特色をもつ土器群の構成要素の中でも重要な役割を担う一群となろう。決め手となるのは縄文原体の解明と器形変化ではないだろうか。県内を含め管見にふれる例はない。

第5類土器（図161，図版63～69）

A・Bの黒浜式とC・Dに区分した一群を含めた所謂「有尾式」である。「神ノ木式」同様、この型式名も内容充実の努力がなされず、問題を残したまま20年を経過してしまった。神ノ木式に比べ、その後もC・Dについては良好な資料には恵まれてない。その点、現在進められている標式遺跡である有尾遺跡出土土器の再検討に期待する面が大きい。本遺跡でもA・B・Cには完形・半完形土器（図69～74）があるが、問題の竹管文による文様構成を示すDの典型例は破片でも少ない。本遺跡の位置が県の東部に片寄っている点、即ち黒浜式土器分布図のより強い範囲に入るためかもしれない。

なお、前項で記したGも含め、今後型式内容の分析が進めば、最少2細分の必要性があろう。

なお、こゝでは第Ⅰ群か第Ⅱ群に入る特殊な底部について触れておきたい。図161-7・19（図版76）に示す、底面の対照的な位置に4ヶ所の小孔がかけられる例である。19は1孔のみであるか他に2片同様な

底部がある。小孔は両面から穿たれる場合が多く、焼成前の製作時に貫通している。こしきのな用途を考えるべきか、他の目的があるのか、不明である。器形自体も底部の厚さから類推すれば深鉢とも、浅鉢とも解釈できるが、底部内外面が特に磨かれたというような痕跡もない。胎土・焼成からみるとⅠ群4・5類土器に非常に似ている。しかし、断定はできない。類例を待ちたい。

② 第Ⅱ群土器 (図162~164, 図版70~78)

縄文前期中葉の諸磯A・同B式を中心とした一群と、それに併行関係にある、東海・関西系の土器を一括したが、後半期の諸磯C式は10数片、終末の十三善台式などは皆無に近い。

第1類の諸磯A式、同2類の諸磯B式については、図示した以外にも大きな破片が多くあり、今少し時間をかければ、あと10数個体の復元が可能であったろう。南信地方では最良の該期資料といえる。そのため、各型式毎の検討を計画したが、種々の事情で実現できず、今回は第Ⅰ群にポイントを置き、Ⅱ群・Ⅲ群は省略したい。ただ、現在諸磯式土器については、一部の研究者により精力的な型式分析が進められ、その細分案も発表され、県内でも2・3の論文で同傾向の主張がなされている。確かにA式の後半と、B式の前半の理解や認識には混乱があり、文様構成やその要素の解明は、近いうちに新しい試案の発表があることであろう。勿論この場合、鳥浜貝塚、峰一合遺跡、村山遺跡など西日本の土器の多い隣接地域との関係も十分考慮する必要があることは言を俟たない。

本遺跡の主体となる縄文前期の土器については、当初相当計画的方針でのぞんだが、種々の事情に加えて、筆者自身の勉強不足のため、ごく一部の問題点の指摘に終わってしまった。この点については、稿をあらため、所見を発表する所存である。なお、紙数や時間の関係もあり、参考文献等は省略させていただく。

イ) 縄文後期の土器

① 第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器については、小破片が多い事、整理の下手際からいわゆる粗製土器の検討が不可能な事、時間的制限等によって、全体像を把えきっていない。ここではいわゆる精製土器を中心に器形毎に文様モチーフの変化を把える試みを行なって考察に替えることにするが、極めて不十分なものであることを予め述べておきたい。

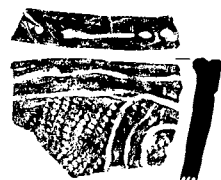
a. 器種・器形

第Ⅳ群土器には、深鉢、浅鉢、注口土器がある。深鉢はA~Dに、浅鉢はA~Cに分けられるが、注口土器は器形分類が行なえるだけの資料がない。以下、各器形の概略を示す。

深鉢A……原則として口縁端部以外に屈曲を有しない類である。

底部からの立ち上がりはやや急角度で、胴部は幾分かふくらみ気味ながらほぼ直線的に開き、そのまま口縁部に至る。口縁端部は内屈するものが多いが、時期が下がる程、屈曲部が幅広いものが増すらしい。平口縁もしくは小さな波状口縁を呈する。

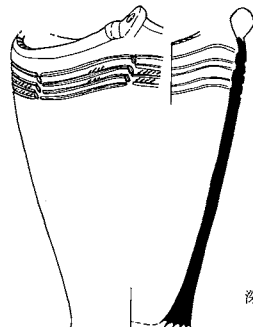
(樋口 昇一)



深鉢 A-1



深鉢 A-2



深鉢 A-3

插图29 縄文後期土器の分類 (その1)

深鉢B……胴部にゆるやかな屈曲をもつ類である。底部からの立ち上がりは深鉢Aよりもゆるやかで、ややふくらみ気味に立ち上がり、胴部はやや張り気味になる。胴部上半でゆるく内傾してから口縁部は外反する。口縁端部で角度小さく内屈するものもある。小さな波状口縁が多いらしい。

深鉢C……胴部の屈曲が大きい類で、胴部が丸く張ることと頸部でやや鋭く外屈して口縁部が開くことが特徴である。装飾付きの平口縁もしくは小さな波状口縁を呈する。

深鉢D……深鉢Bに類似する。胴部下半が張り気味でいったんくびれて立ち上がり、口縁部は開いて端部近くで内屈する。大きな波状口縁もしくは平口縁を呈する。

浅鉢A……胴部が丸く張り、頸部で外屈して口縁部は朝顔形に大きく開く類である。

浅鉢B……丸くふくらみつつ開く類である。

浅鉢C……単純に直線的に開く類である。

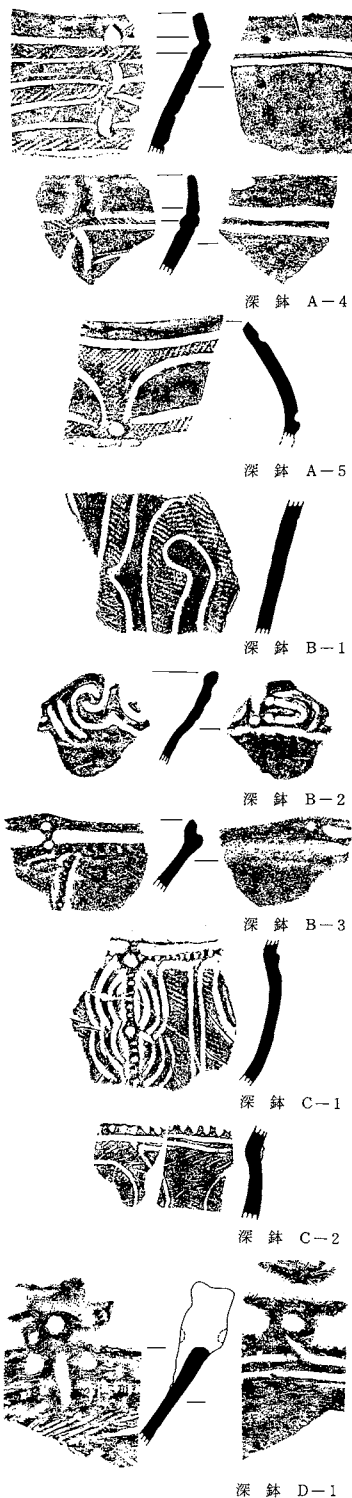
b. 文様構成(挿図29~31)

深鉢A-1……量が乏しいためはっきりしないが、口縁部文様帯が未発達な事と、胴部文様が器面を縦位に区画する沈線から構成される事が特徴といえるであろう。胴部には縄文を地文として3本一単位の沈線を曲線的に垂下させるモチーフがある。

深鉢A-2……口縁部文様帯は未発達である。口縁部直下内面に一条の沈線を加えるものがみられるが、深鉢A-3の口縁文様帯と関連をもつものかもしれない。口縁外面にはヘラ先の連続押圧痕をもつ隆帯が貼付される。深鉢B-3の口縁直下屈曲部にみられる連続押圧痕に関連するものであろうか。隆帯には「8の字」状の貼付文が加えられる。胴部文様は横位の区画を軸とした三角形のモチーフが主体的となり、縄文も多用される。

深鉢A-3……口縁端部は短く鋭く尖る。口縁部内面には数条の沈線がめぐり、外面にも数条の沈線が施される。いずれもヘラ描きらしいが削り出し風に描く。沈線間には何ヶ所かに連続短線が加えられるが、これは深鉢A-2の「8の字」構図の貼付文の変化であろう。なお、尖った口唇部には連続押圧が加えられる。胴部文様は不明だが無文の類が多いらしい。文様構図は総て横位である。

深鉢A-4……口縁端部付近で鋭く内屈し端部は平坦である。屈曲部内面には削り出し風の沈線が加えられる。屈曲部外面の文様帯は未発達である。胴部は横位の沈線で区切られた縄文帯の3~4ヶ所に向かい合う短弧線のモチーフが描かれるが、深鉢



挿図30 縄文後期土器の分類(その2)

A-2の「8の字状」の粘土貼付の変形とみられる。

深鉢A-5……深鉢Dとの関連が強く、あるいはそれに含めて考
えるべきかと思われる類である。口縁部の屈曲部は幅広く、こ
こに文様帯が発達する。曲線・直線モチーフと縄文とを組み合
わせている。胴部には深鉢D-2同様の羽状沈線が描かれるら
しい。

深鉢B-1……器形は全く不明で、あるいは深鉢Aに属するかも
しれない。胴部文様のみ判明しており、縦位の沈線間に磨消縄
文を用いている。

深鉢B-2……口縁部のみとらえられている。口縁部は屈曲し、
端部は丸いものが主らしい。口縁部文様帯には、表裏とも入組
文風の構図が沈線で描かれる。胴部は深鉢C-1と類似するか
もしれない。

深鉢B-3……器形は深鉢B-2と同様だが、口縁部が狭く、文
様帯も萎縮して棒状工具による沈線や刺突が用いられる。屈曲
部には、ヘラによる押圧が加えられる。胴部の文様は深鉢C-
1と類似するかもしれない。ヘラによる押圧をもつ隆帯や「8
の字」状構図の粘土貼付も多用されるらしい。

深鉢C-1……胴部のみ確認されている。頸部には押圧痕付きの
隆帯を一周させ、それ以下には3本一単位を基本とした沈線を
縦位に配する。直線のみならず縦位の弧線構図や、その中央に
押圧痕付隆帯を垂下させたりもする。地文に縄文を用い、磨消
手法も用いている。「8の字」状の粘土貼付も多用されるらし
い。

深鉢C-2……やはり胴部文様のみ確認した。頸部には深鉢C-
1同様の押圧痕付隆帯が配される。胴部の沈線は横位の区画モ
チーフが加わり、沈線は1本のみである。

深鉢D-1……口縁部～胴部上半のみから推定し得た。口縁部は
屈曲しない。平口縁で口端は平坦、内面には沈線が加えられる
が深鉢A-4のそれと近似する。外面の口縁部文様帯は未発達
で、口縁部～胴部全体にヘラ描き羽状沈線が加えられる。

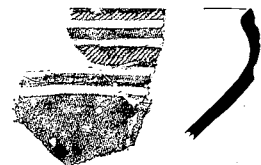
深鉢D-2……大きな波状口縁を示す。口縁端部は屈曲しないが
いく分か立ち気味となる。口縁部文様帯は未発達だが、縄文を
地文とし波状口縁に沿って沈線をめぐらせるものがある。口縁
端部は尖り内側が大きく肥厚されて三角形の断面形を呈する。
この端部にはヘラによる押圧痕が連続して加えられるが、深鉢
A-3の手法と共通する。口縁部内面は施文されない。胴部の文様は深鉢D-1と同様の羽状沈線が
用いられる。



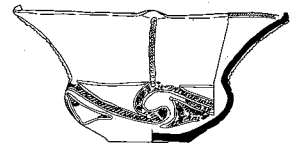
深鉢 D-2



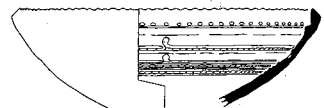
深鉢 D-3



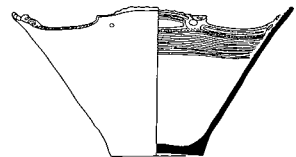
深鉢 D-4



浅鉢 A



浅鉢 B



浅鉢 C

挿図31 縄文後期土器の分類 (その3)

深鉢D-3……器形は推定の域を出ないが、口縁部は内屈し、プロポーションは深鉢D-1・D-2よりも硬直するものとみられる。口縁部文様帯が発達し、撚りの細かい縄文を地文として深い沈線により直線的な構図が描かれる。瘤が貼付されることもある。深鉢A-5の口縁部文様帯とのつながりが考慮される。口縁端部は平坦であるが尖らせるものもある。胴部は深鉢D-1・D-2と同様の羽状沈線が全面に描かれる。

深鉢D-4……口縁部の内屈が甘いほか、器形は不詳である。口縁部文様帯は発達しており、ヘラ描き沈線は削り出し風に面取りしている。胴部にはやはり羽状沈線が加えられる。

浅鉢A……細分不可能である。口縁部外面は無文で、口唇部に4単位の加飾を加え、そこから押圧痕を付した隆帯を垂下させる。口縁端部は薄く、内面には沈線が施されるが、これは深鉢A-3程には発達しない。胴部には縄文を地文として沈線により三角形構図が描かれ、入組文風の構図も用いられる。

浅鉢B……やはり細分する資料には恵まれてない。外面は全く施文されず、内面のみに文様帯をもつ。口縁端部は外面が削られて尖り、押圧が加わる。内面は沈線とヘラ状工具の刺突等が帯状に加えられる。深鉢A-3の構図・手法と似ている。

浅鉢C……これも細分し得ない。口唇部には加飾されるが、文様は浅鉢Bと全く同様である。

注口土器……細分が困難な為、各遺構の項で記述することにする。

以上に示した土器の文様構成は器形毎に系統的に把えてよいものとみられる。すなわち深鉢AではA-1～A-5の順に変化してゆくものとみられ、同様に深鉢B-1～B-3、深鉢C-1～C-2、深鉢D-1～D-4という変化が考えられるだろう。また、深鉢A-1・A-2と深鉢B-3、深鉢A-2と深鉢C-2、深鉢A-2と浅鉢A、深鉢A-3と深鉢D-2、深鉢A-3と浅鉢B、深鉢A-5と深鉢D-3には各々関連性が認められる。

系統性、関連性を考慮して類別すれば以下のようなものと思われる。

第1類……深鉢B-1が唯一の類である。

第2類……深鉢A-1・B-2を内容とする。

第3類……深鉢A-2・B-3、浅鉢Aを内容とする。

第4類……深鉢A-3・A-4、浅鉢B・Cをその内容とする。

第5類……深鉢A-5・D-1・D-2をその内容とする。

第6類……深鉢D-3・D-4をその内容とするが、D-4はさらに新しい時期への過渡的要素を持っており、或は分離すべきかと思われる。

以上の各類型を既存の土器型式と比較すれば次のようになろう。

第1類～第5類については、関東地方の型式とつながりがあり、それぞれ、称名寺式、堀ノ内I式、堀ノ内II式、加曾利B I式、加曾利B II・III式に類似する。第6類は加曾利B III式併行期以後と思われ中部山地の独自型式に発展する可能性を有している。時間的位置づけも今の所限定すべきではないだろう。

② 第V群土器

第V群土器は縄文時代晩期の土器を指す。本遺跡からはごく少量出土しただけであり1類型の範疇に含まれるものである。第V群第1類土器としてとらえられたのは精製土器のみである。深鉢、浅鉢、注口土器があるが、いずれも破片のみであり、注口土器に至っては注口部分のみである。

深鉢は器形は全く不明で、工字文モチーフを粘土を貼付して描き、貼付の周囲を押えた上磨いて、削り

出し風に似せている。

浅鉢は、やや深めで碗状を呈する。施文モチーフは深鉢に全く同じであり、施文技法も同じである。

注口土器は、その全体像がとらえきれない。

(百瀬 長秀)

分類の項を含め次の文献を参照した。

松戸市教育委員会 『貝の花貝塚』 1970

庄和町教育委員会 『神明貝塚』 1970

神奈川県教育委員会 『東正院遺跡調査報告』 1972

松本市教育委員会 『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』 1972

埼玉県教育委員会 『高井東遺跡』 1975

ウ) 縄文時代の土製品について (図281~284)

土偶、耳飾、土器片錘、土製円板がある。すべて遺構外出土品である。住居址出土品でないため、説明されなかったもので、土偶、耳飾等についてのみ多少記述しておきたい。

① 土偶(図281-1) 首、右腕と腰部以下を欠く板状土偶である。両腕は直線的な肩から垂直に下り、短い手の部分の先端に、指を表現したらしい刻目が入る。乳房以外は簡単な沈線が肩部と乳房間から垂下するのみである。裏面は沈線による渦文が背中にあり、肩部の平行な沈線へ連絡している。よく磨かれて、胎土、焼成ともよく、丁寧な作りである。腕の形状や文様から縄文後期のものであろう。

② 耳飾他(2~7) 縦2.0cm、横1.5cmの手づくねの耳飾である。2は胴部がややへこんでおり、全面に篋状工具による刺突が付けられている。縦に径3mmの貫通孔がある。3は上下面がややふくらみ、胴全面に1同様の施文具による格子状沈線文が施文される。径4mmの貫通孔がある。共に単独出土であるが、文様などから縄文前期ではなかろうか。4・5は縄文時代というより古墳時代以降と考えられるものである。胎土、焼成など土師器的な感じであり、むしろ祭祀遺物的とすべきかも知れない。6・7は共によく似た8cm×4.5cmの棒状土製品で、頭部には貫孔しない小孔が途中まで穿たれ、下部は欠損した割れ口となっている。当初土偶の一部と考えたが、焼成、胎土等はむしろ古墳時代以降例と酷似しており、問題が残る。4~7は、縄文土器の多い部分からの検出であったので、一応ここへ入れた。

③ 土器片錘・土製円板(図282~284) 土器片錘は24点出土したが、縄文前期はなく、中期1点(100号住-No.10)のみで、他は多少不明な例もあるが後期の所産としてよいだろう。該期に土器片錘が盛行する点、付近の遺跡と同一といえる。形態的には切目が長軸にあるもの18点、短軸にもある例6点があり、前者のⅢA a型の重さは2.5g~17.9gで重さに大きな開きがあるが、後者のⅡaとⅢA b型では1例(73住出土例、4.8g)を除けば23g~15gとほぼ一定している点、大きな差がある。用途によるものか、時期的な差がよく判らない。

なお、土製円板は10点以上あるが、時期は不明である。有孔の例(図284-1)もある。(山本 賢司)

イ 縄文時代の石器・石製品について

ア) 小形石器

ここで「小形」と分類した石器について、まず、全般的な面、次に各器種毎に考察を加えたい。

本遺跡出土の小形石器（以下特別ことわらない限り石器とあるのは小形石器をさす）は1,771点の多量を数える。その器種別出土数および出土地点は表9にある。全石器の出土地点をみまると、60%の1,031点⁽¹⁾が住居址で、この比率は器種毎にみてもほぼ同様である。全面発掘でなく、かつ調査の精度にバラツキがあり、数字自体には疑問があるものの、例えば石鏃と石匙といった異器種の出土傾向には差がないことを示しており、石器使用、放棄、その後の動き方を考える上で一つの参考にならう。ただ、石錘は住居址からはその17%しか出土しておらず、遺構外から73%と多く、土塚からも10%出土している。遺構と遺物の関からみて特異である。また装身具の中の「その他」としたものは有孔の玉状の類であるが、その総てが住居址出土であるのは、大きさからみて、遺構の内と外との発掘精度によると思われる。

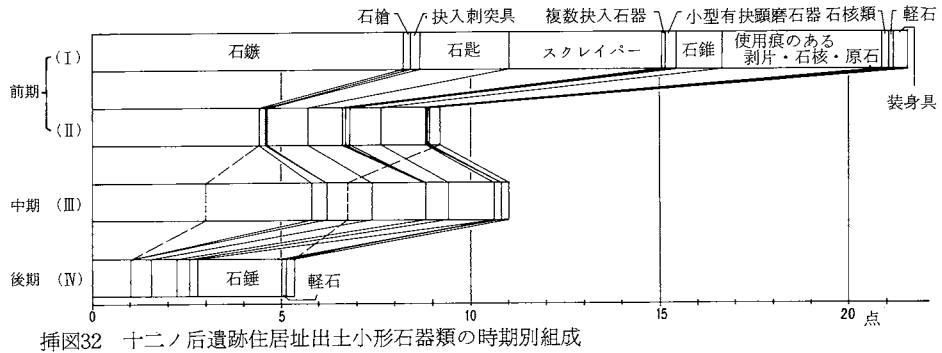
① 住居址出土石器の時期的組成変化

石器の所属時期は次の点を原則として決定した。まず住居址出土の石器については、伴出土器によって決定された「住居址の所属する時期」の所産と認定した。もちろん個々の石器については、このように単純にはいかないであろうが、全体をとらえようとした時、最も適当であろうという判断による。なお、本遺跡の縄文時代の住居址は、前期前半32基、前期後半24基、時期不明5基の計61基が前期、残りの5基が中期、9基が後期と区分される。次に遺構外出土石器については、住居址出土石器の所属時期の総和を反

表9 十二ノ后遺跡出土縄文時代小形石器器種別出土場所一覧

器種	住居址				堅穴	集石	土塚	遺構外	計
	前期(61)	中期(5)	後期(9)	計(75)					
石鏃	377	29	9	415 (58.5)	4 (0.5)	7 (1)	30 (4)	252 (36)	708 (100)
石槍	11	2		13 (81)			1 (6)	2 (13)	16 (100)
抉入刺突具	10			10 (63)				6 (37)	16 (100)
石匙	108	6	5	119 (67)	1 (0.5)		5 (3)	53 (29.5)	178 (100)
スクレイパー	152	7	6	165 (64)			14 (5)	80 (31)	259 (100)
複数抉入石器	5			5 (83)				1 (17)	6 (100)
小型有抉頭磨石	(1) 12			(1) 12 (67)			(1) 1 (5)	(1) 5 (28)	(3) 18 (100)
石錐	59	3	3	65 (68)			2 (2)	28 (30)	95 (100)
使用痕の有る石核・剥片・原石	165	6	2	173 (66)	1 (0.5)	1 (0.5)	3 (1)	83 (32)	261 (100)
石核類	7	1		8 (73)			1 (9)	2 (18)	11 (100)
石錘			20	20 (17)			11 (10)	84 (73)	115 (100)
軽石	4		1	5 (63)				3 (37)	8 (100)
装身具	珠状耳飾	11	1	12 (67)			1 (5)	5 (28)	18 (100)
	海浜石	1		2 (50)				2 (50)	4 (100)
	その他	7		8 (100)					8 (100)
計	(1) 928 (90)	55 (5)	48 (5)	(1) 1031 (100) (60)	6 (0.5)	8 (0.5)	(1) 69 (4)	(1) 607 (35)	(3) 1771 (100)

各欄の()内の数字は、右下が器種別の百分率。右上が全住居址出土石器を100とした時の時期別の百分率、左上はだぶりの数である。



挿図32 十二ノ后遺跡住居址出土小形石器類の時期別組成

映しているものと考え、その比率に従うこととした。

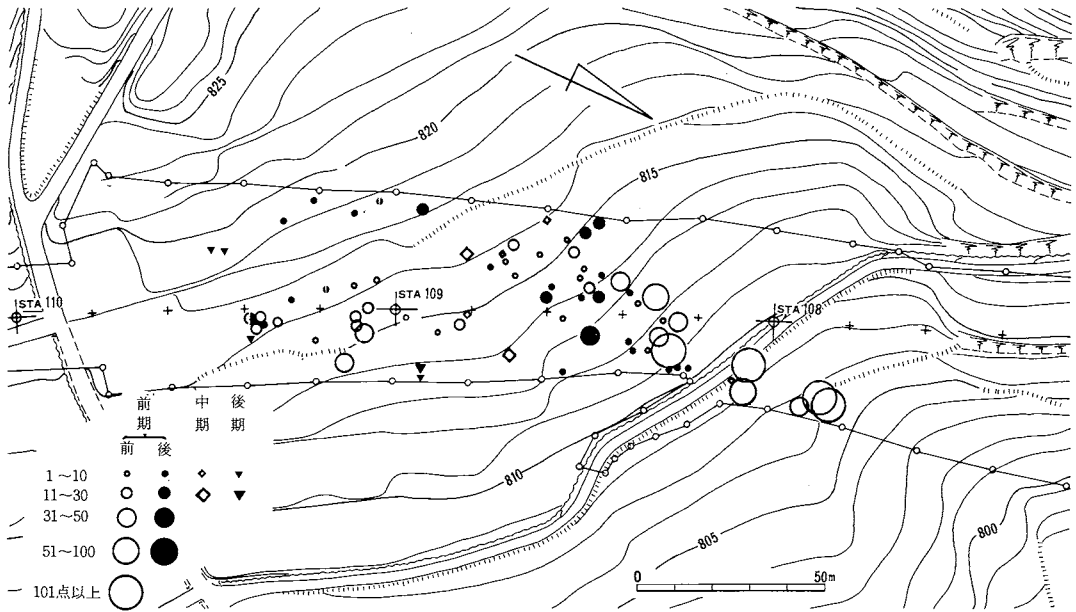
住居址出土石器1,031点の内訳は、前期前半とされた住居址から出土したものが689点(68%)、前期後半239点(22%)、中期55点(5%)、後期48点(5%)である。この数字をもとに、時期別の1基あたりの石器組成を組み立ててみた(挿図32)。それによるとまず、前期前半の住居址(Ⅰ群土器伴出)からは1基あたり21点をこえるのに対し、前期後半(Ⅱ群土器伴出)では9点強しか出土しておらず、半分以下に減少している。さらに、器種別にみると、石鏃、石匙もほぼ半減しているが、中でも、スクレイパー、使用痕ある剥片・石核・原石が際立って減少を示し、いずれも1基あたり約4点出土していたものが1点近くになっている。これが中期(Ⅲ群土器伴出)になると、若干増加しているようにも見えるが、全部で5基という少ない中での操作であり、例えば、用地東縁の傾斜地下方にある1基(26号住居址)出土の石器を除いてみると、石鏃および総数の平均は破線の如き減少を示すことになり、確実性の乏しい数字である。後期(Ⅳ群土器伴出)の住居址からは新しい器種として1基あたり2点の石錘が出土しており、これを除くなら、1基あたりの石器数は3点とさらに減少し、器種も貧弱となる。

以上のように、中・後期に関しては資料が少なく確実とはいえないが、前期に限っては時期的に石器組成が変化していることが確実である。

② 面的広がりの中での石器の偏在

本遺跡と隣接する千鹿頭社遺跡出土石器の出土傾向を面的にみるために、住居址出土の遺物の量と位置を、伴出土器に従った時期区分をした上で、現地形の上におとしてみたのが挿図33である。遺構外出土遺物は除外してある。

まず、住居址間の石器量のバラツキの大きい前期前半の石器をみてみよう。今回発掘された中央道用地内の該期の住居址は、STA 108+80の東幅杭からSTA 109+40のセンター杭にかけて、西にふくらむ弧状に連なっている。該期住居址からは先述した如くここで扱う石器全体の68%が出土しており、特に、大量の石器の出土した同時期の住居址がある千鹿頭社遺跡と一群をなすと思われる住居址(8・16・12号住居址等)からの出土量が多い。これ等は、弧状に連なる住居址群の西縁にあたり、微地形的にみるなら、遺跡地内を北北東にはする低い尾根の西側、北への傾斜地であり、北東への傾斜地である全体とは向きが異なる。もちろん前期前半という時間幅でのことであり、中央道用地内という部分発掘の結果から、軽々に遺跡の全体像を述べられることではないものの、この極端な遺物の偏在は、集落内のあり方として注目しなければならぬものであろう。しかも、次の前期後半になっても、先述した数量の減少が全体におよび、また住居址群の南への移動がみられる中であって、やはり住居址群の西縁に出土量が多いようにも見える。そうだとするならば、この遺物の偏在がかなり長期にわたっていたといえ、新たな問題を投げかけること



挿図33 千鹿頭社・十二ノ后遺跡住居址出土小形石器分布

になろう。なお、この時期の石器数の減少は、集落規模の縮小とあわせて考える必要があるだろう。

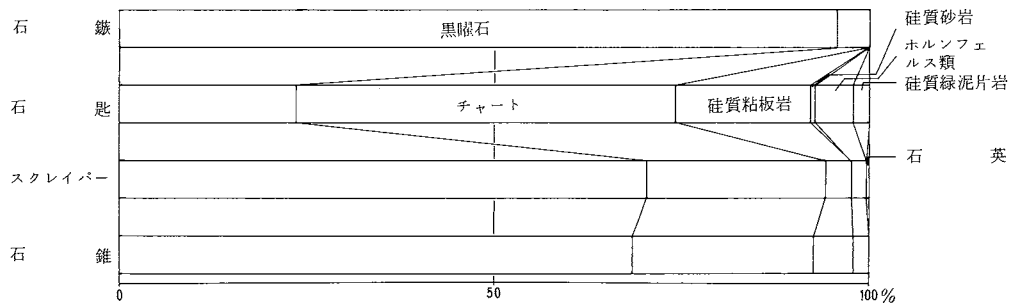
中期、後期に関しては、住居址数、遺物量とも激減しており、面的操作は不可能であるが、用地東縁に近い住居址から比較的多くの石器が出土しており、全時期を通じて傾斜面の上方から下方へという遺物の移動があったであろうということも考慮されねばならないのはもちろんである。

③ 石質の比較

本遺跡からは特に、石鏃・石匙・スクレイパー・石錐の打製石器と、石錘の磨製石器が多量に出土している。そこで、これ等を石質の面からみようと、石質組成を組み立ててみた（挿図34）。

石鏃は、96%が黒曜石製であり、残り4%も総てチャート製である。最も多量に出土したにもかかわらず最も少ない種類の石質に限定されており、黒曜石で石鏃を作るというのは、かなり定着化した意識であったといえよう。

石匙は、50%がチャート、24%が黒曜石、18%が珪質粘板岩で、黒曜石の占める量が少ない器種であると同時に、多種の石が素材として使用されている器種であり、これは形態的に似たスクレイパーとの比較に



挿図34 十二ノ后遺跡出土主な小形石器の器種別石質組成

おいてもいえる。すなわち、スクレイパーの場合70%が黒曜石、24%がチャート、4%が珪質粘板岩なのである。石匙を、つまみをもつスクレイパーと考えた分類基準からみるなら、この石質の違いは「つまみ」の有無に関係している。つまり、黒曜石はつまみ作出という複雑な二次加工を施そうとする場合、そのもろさから敬遠されるのだと解釈することもできそうであるが、この事に関してはスクレイパーの項で、別の考えを提示したい。なお、スクレイパーの中の「つまみを持たない石匙」の形態のものを抽出しても、この二者の相違がみられることを付記しておく。スクレイパーはまた、石錐と石器組成が非常に似ており、この面からも石匙の石質のちがいは際立ってみえるのである。

磨製石器の石錐は、68%が粘板岩、22%が細粒砂岩、4%が砂岩である。加工のし易いという観点と同時に、特に硬さを必要としないこの石器の性質に起因しよう。なお、多量にある使用痕のある剥片・石核・原石については、分類の項で述べた如く、剥片・石核・原石の部分であるという観点から、石質については云々しないことにする。

④ 器種別石器の扱い

①の項の如く石器の所属時期を決定した上で、例えば「前期前半の石器群」といった大分類を試みたのだが、次の理由からそれは断念せざるを得なかった。1つは、この場合、発掘後の遺物処理によって対象が遺構出土遺物に限られてしまうため、35%ある遺構外出土遺物が除外されてしまうということ、他は、遺構の時期決定の方法が、主体となる土器によるにもかかわらず、その決定された時期に総ての石器が所属すると断定してしまうことである。遺構の記述からわかる様に、多くの場合一住居址から二〜三群の土器が出土しており、石器もまた同様な傾向をもつとしたら、この土器組成に従った石器の分類は不可能であろう。また、中・後期の住居址には、多量に散在していたであろう前期の遺物が入りこんでいる可能性が非常に大きいのだが、それを抽出することもまたできない。

以上のことから、ここでは、個々の石器の所属時期を言及せず、全体を、分類や所属時期の項で述べた如く68%の前期前半、22%の前期後半、5%づつの中期と後期、それに極くわずかの晩期と弥生時代のものでできた一群の石器ととらえるのみにとどめ、器種毎に一括して論じ、その中で必要に応じ所属時期についてふれる様にしていきたい。なお、以下の記述の中で紙数の関係から細かい数値、数量等について省略したものがある。詳しくは別表4の石器一覧表を参照されたい。また、ある程度統計処理の可能な量が出土した石器を主として扱っており、ここではふれてない器種がある。了承されたい。

A—打製石器

(i) 石 鏃

形態：最初に形態分類の難しい21点（一覧表で型式無記入）を除外して考えることにする。この21点は、従来石鏃の未成品として扱われていたものに似るが、いずれも二次加工として調整が施され、小形軽量であることから本群に含めたものである。残りの687点について、各点から観察してみる。

「茎」 有茎18点、無茎641点、欠損品28点である。千鹿頭社遺跡では396点中有茎はわずか2点であり、本遺跡の方が有茎の占める比率は高い。遺構のあり方から、前期以外の石鏃がより多くなったためにもみえるが、本遺跡での遺構出土有茎石鏃の総てが前期の住居址からであり、有茎の絶対量も少なく、否定も肯定もできない。⁽²⁾

「基部形態」 有茎の場合、技術的困難さのためか円基（表10のAC）が9点と半数あるが、無茎では、その77%、493点が凹基（BA）であり、平基（BB）と円基（BC）がそれぞれ67点の10%づつとなり、無茎凹

基が本遺跡石鏃の主体をなしている。凹基にはその形態に様々なものがみられるが、ここではその分類をするにとどめたい。なお、分類では決りと逆刺の組み合わせでその形態を表現してあるが、繁雑であり、より良い分類が必要である。

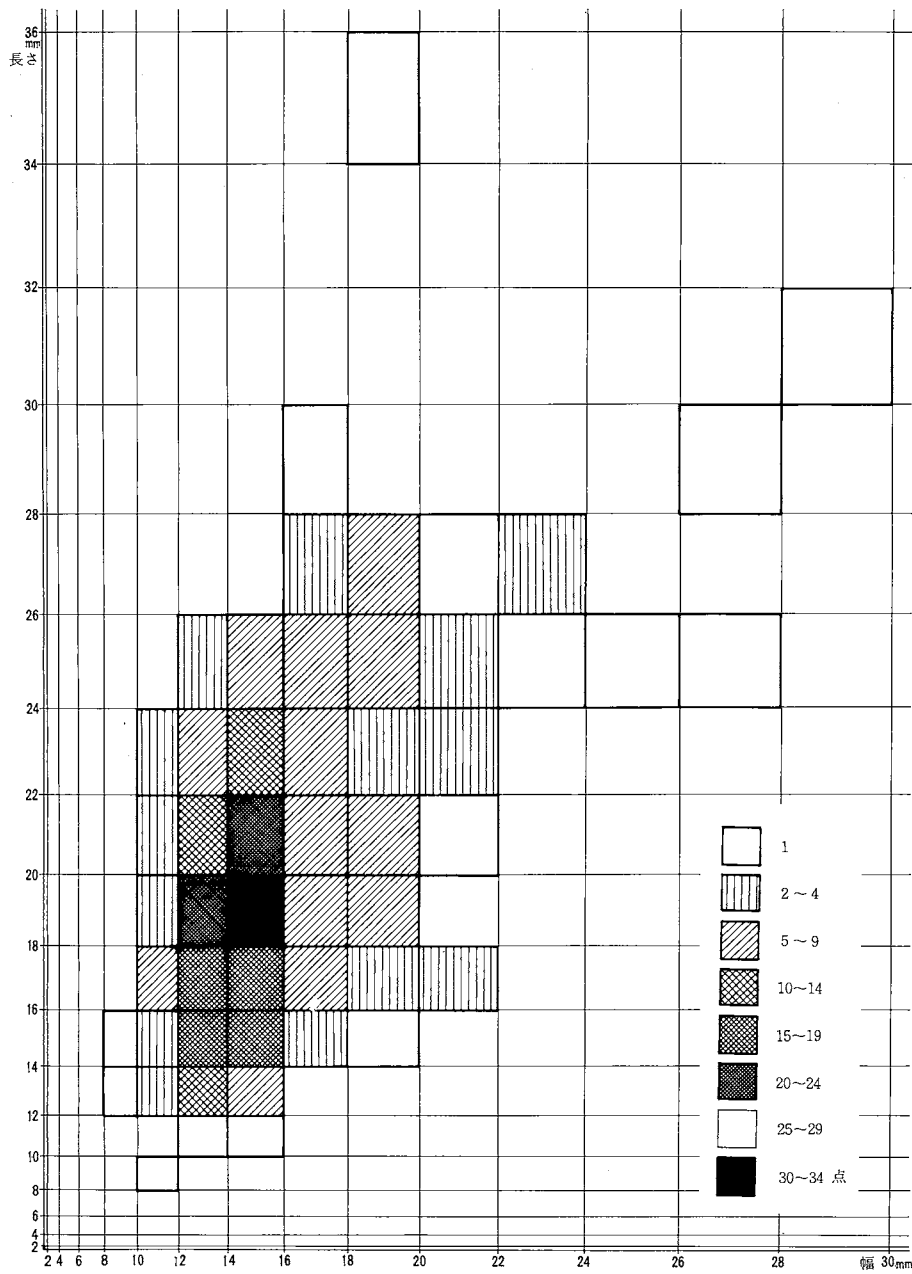
「側辺形態」無茎の場合、凹基には直なもの(BAC)が43%と最も多く、次いで外湾(BAD)が35%であるが、平基から円基となるに従って外湾が多くなり、平基では(BBD)49%、円基では(BCD)66%を占めるようになる。この傾向は有茎でも同様で、有茎に側辺の外湾するものが増えているのは、円基が多いことに帰因するといえよう。側辺に突出部を有するものは無茎凹基にしかみとめられない(BAA)。側辺形態としては最も手のこんだものであり、基部も同様に丹念な加工を施した結果と思われる。なお、この突出部を有するものの総てがそうであるように、1個体の両側辺は同一形態であるのが普通であり、製作者の左右対象に作るという意識が強く感じられる。従って、左右の違いは特に問題としなかった。

数量処理の可能な無茎石鏃について、基部形態ごとに長さと同幅をみた(挿図35-38)。これは分布図であるが、わかり易いよう、長さと同幅について2mm間隔に区切った平均値をその目盛りとした。例えば横軸の14と16の間隔は15mmの $\frac{1}{2}$ 、7.5mmになっている。

表10 十二ノ后遺跡出土石鏃型式別破損状況一覧

	計	0	破	A	B	C	D	E	F	G	H
計	687	445	242	61	108	12	12	16	27	1	5
A	18	7	11	4	0	0	0	1	1	0	5
AA	6	1	5	2	0	0	0	0	0	0	3
AAA	0	0	0								
AAB	1	0	1								1
AAC	2	1	1								1
AAD	2	0	2	1							1
AA・	1	—	1	1							
AB	3	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1
ABA	0	0	0								
ABB	1	0	1	1							
ABC	1	0	1								1
ABD	1	1	0								
AB・	0	—	0								
AC	9	5	4	1	0	0	0	1	1	0	1
ACA	0	0	0								
ACB	0	0	0								
ACC	1	1	0								
ACD	7	4	3					1	1		1
AC・	1	—	1	1							
AD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A・・	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B	641	438	203	57	105	10	12	15	4	0	—
BA	493	324	169	45	95	9	10	8	2	0	—
BAA	44	33	11	3	6	1	1				—
BAB	69	48	21	8	12			1			—
BAC	210	133	77	19	47	3	6	1	1		—
BAD	163	110	53	12	29	4	3	4	1		—
BA・	7	—	7	3	1	1		2			—
BB	67	48	19	8	6	0	2	3	0	0	
BBA	0	0	0								
BBB	12	10	2		2						
BBC	19	11	8	4	3		1				
BBD	33	27	6	3	1			2			
BB・	3	—	3	1			1	1			
BC	67	57	10	2	3	1	0	4	0	0	—
BCA	0	0	0								
BCB	10	9	1			1					
BCC	12	10	2		1			1			
BCD	44	38	6	1	2			3			
BC・	1	—	1	1							
BD	13	9	4	2	1	0	0	0	1	0	—
BDA	0	0	0								
BDB	0	0	0								
BDC	4	3	1		1						
BDD	9	6	3	2					1		
BD・	0	—	0								
B・・	1	—	1	0	0	0	0	0	1	0	—
・・・	28	—	28	0	3	2	0	0	22	1	0

※他に、型式分類不可能の両面加工のある小剥片21

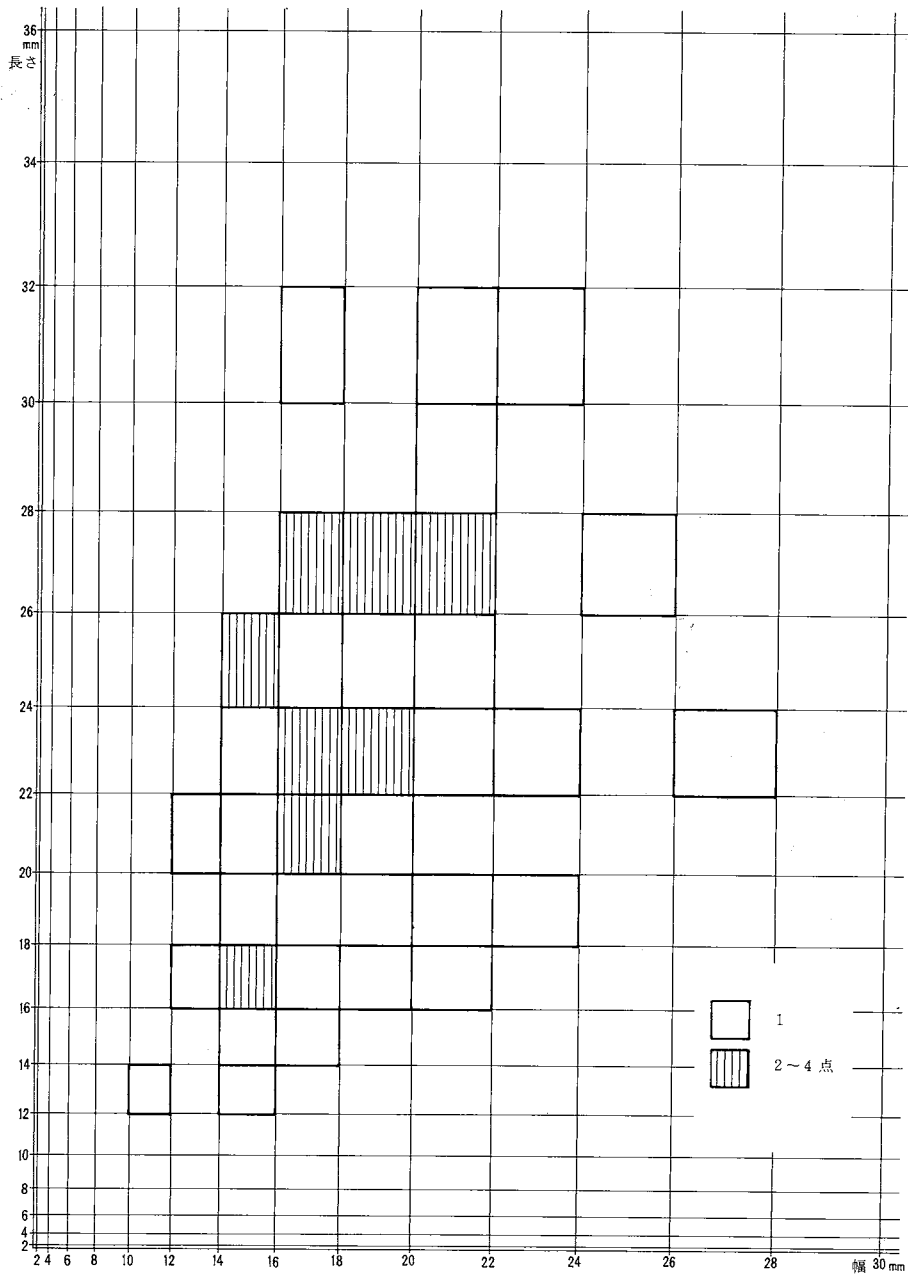


挿図35 十二ノ后遺跡出土無基凹基式石鏃長幅関係

無基凹基(挿図35)では、長さ14~22mm、幅12~16mmの範囲のものが多く。特に長さ20mm、幅14mm付近に非常に多く、分布の中心といえる。また幅に比べて長さのバラツキが大きく、幅の方により制約があったようである。なお、最も長さの短い1点は局部磨製石鏃(図247-68)である。

無基平基(挿図36)では、長さ22~28mm、幅16~20mmのものが比較的多い。バラツキは無基凹基とほぼ同様であるが、より大形のものが多く。

無基円基(挿図37)のバラツキは、前2者より大形の部類にひろがっている。しかし分布の中心は、長さ

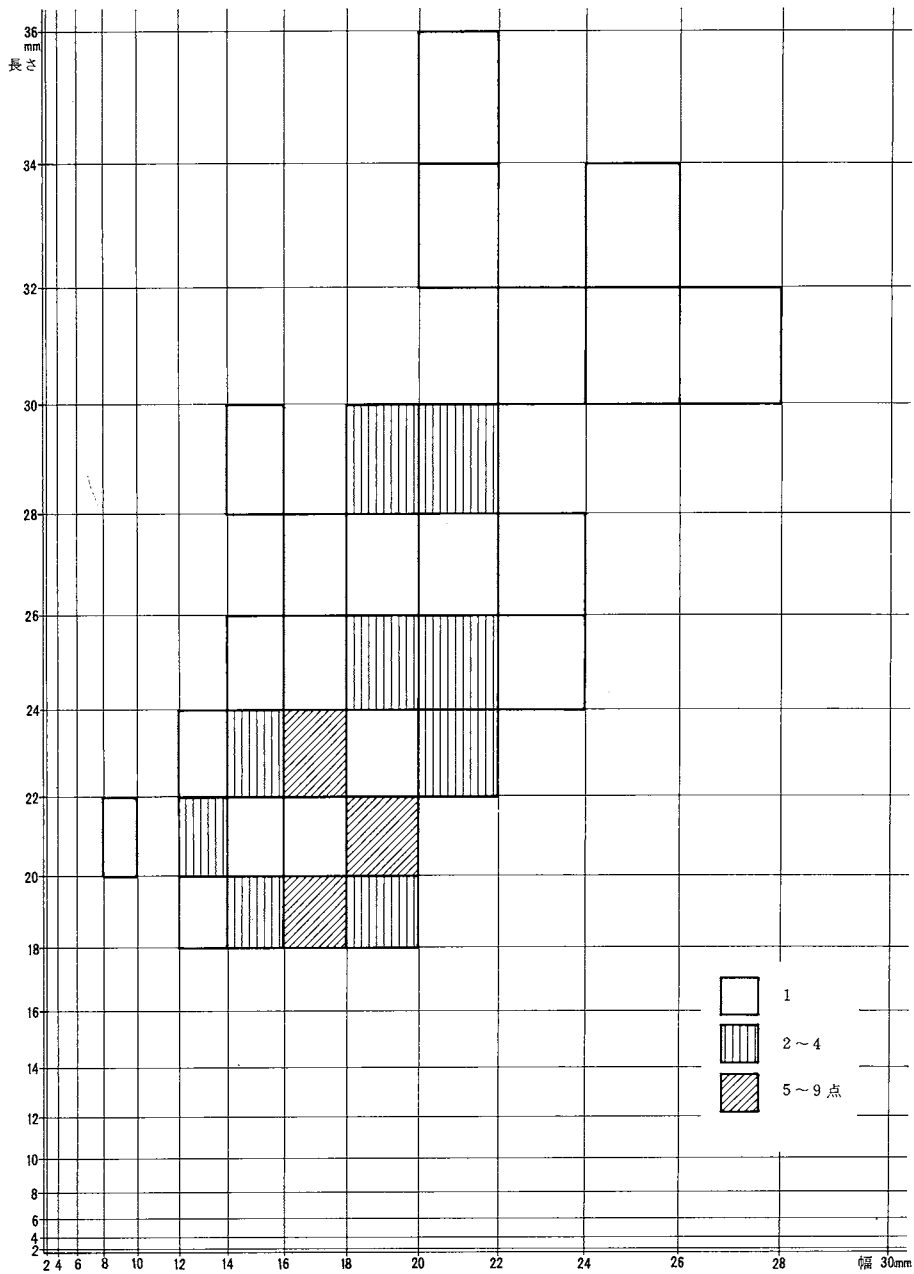


挿図36 十二ノ后遺跡出土無茎平基式石鏃長幅関係

18~24mm、幅16~20mmと、この中では小形の方にあり、前2者とまた異なった分布を示す。

無茎尖基(挿図38)は前3者と際立った違いをみせている。点数が少ないが、8~18mmと幅狭で、長さは非常に長いところまでバラツキがみられる。

これ等から各型式の最も典型的大きさを抽出するなら、無茎凹基=20×14(長さ×幅)、無茎平基=25×18、無茎円基=21×18、無茎尖基=25×12(単位mm)となろう。石鏃の分類にあたり、長さと幅の比率も要素としたわけであるが(分類の項参照)、それは表ではこの様に分布する石鏃を0を基点に放射状に

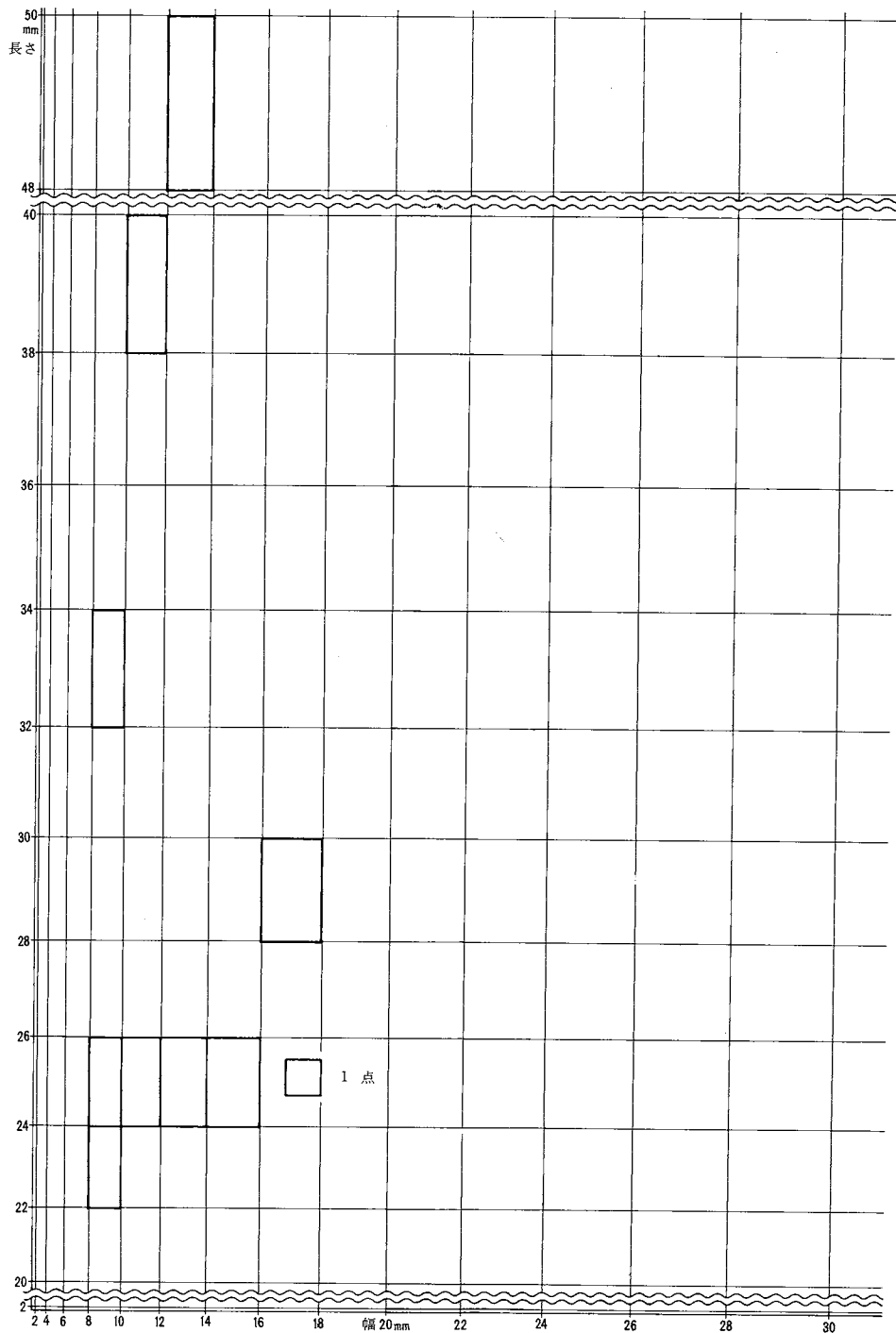


挿図37 十二ノ后遺跡出土無茎円基式石鏃長幅関係

切りわけるといことになる。そうすること自体、大きさを無視するという舌足らずのものであり、何よりも、この図で切りわけるとき線をどこに何本引いたら良いのか決めることができずに、その面からの検討は加えなかった。

重量：無茎石鏃について、基部形態別に重量をみてみることにする(挿図39)。

無茎凹基の場合、0.2~1.4gの間に非常に集中し、平均値は0.8gである。しかし、分布状況を見ると最頻値の0.5gを中心に0.3~0.6gが最も多く、重くなるに従ってその数は急速に減少している。この状況か



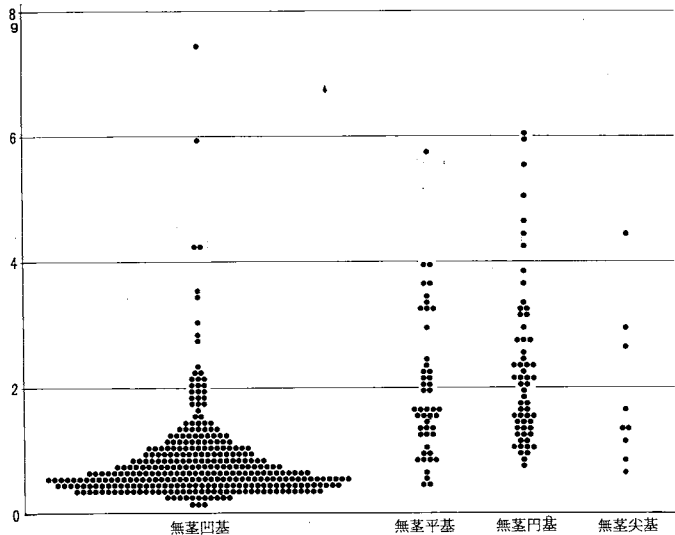
挿図38 十二ノ后遺跡出土無基尖基式石鏃長幅関係

ら無基凹基は、ある重さ（大きさ）のものを作ろうとしたのではなく、より軽量なもの、小さなものを目ざして作られており、大きさの限度は重さにして1.5g程度であったということができよう。0.5gの最頻値は剥片剥離と二次加工における技術的限界を示していると解せられる。従って、本遺跡出土例に限っては、

2g付近に集まるようにみえる一群も含め、より重い無茎凹基は多少性格の異なるものとしてとらえた方が良さそうである。

無茎平基、無茎円基はいずれも、ほぼ1g台～2g台に集中する傾向がみられる。表でみる限り、重くなるに従っての無茎凹基の急激な減少を補うかのような分布をみせているが、はたしてそのような位置にあったのかは量的にみても少なく何ともいえない。無茎尖基は検討に値する数が無い。

素材と二次加工：素材は、二次加工が全面を覆う例が多い。しかし、総てが剥片である。素材の面が残っていない



挿図39 十二ノ后遺跡出土石鏃重量分布

くても石鏃の二面には、平面上に置いて安定する面と不安定な面があり、安定するように置いた時見える面が、素材の剥片の正面であると解されるからである。二次加工は総て調整である。その順序については観察する時間が無かったが、実測中に気がついたことがある。それは、石鏃の片側面をみて、その側辺の調整が右側の方が後である場合、反対側の側面をみても側辺の調整は右側の方が後であるということである。側辺に関する限り、一辺の片面を調整後、先端角の二等分線を軸として半回転して同じ位置にきた他辺の片面を調整するというをくりかえす剥離順序の結果と思われる。

調整剥離の際、末端までのびた1つの剥離によって、その加撃点の反対端の欠失している例がある。基部からの加撃で先端の欠失するもの16例、側辺からの加撃で片脚の欠失するもの20例である。欠失後、それを補うような形での調整はみられないが、破損品とも解されず一応完形品として扱った。

破損状況：本遺跡出土石鏃は、35%が破損品である。茎の有無と基部形態によって破損状況が異なるであろうことは、形態をみただけで予想されよう。そこで、状況をつかみ得る量が出土している無茎凹基についてみてみたい。この種の石鏃の様々にみえる破損状況も、先端部と両脚部の3つの尖端の有無の組み合わせと解することができる。そこで、総ての破損状況をこの3箇所の有無に分解し、脚部については、その総ての破損を合計して2で割る方法で片脚あたりを出した。先端部のみが残る22点については全体の比率から、そのうち17点が無茎凹基のものであるとした。

この操作の結果、無茎凹基の破損は、先端部に関わるもの74例（欠けるもの55例、のみ残るもの19例）片脚あたりの脚部に関わるもの65例（欠けるもの122例、のみが残るもの8例）であった。この数字をみる限り、各尖端はほぼ同様に破損しているようである。今後さらに、尖端の強さはもちろん、破損の際の力の加わり方、その量など、質的検討を加えなければ、これ以上のことはいえそうにない(表10)。

使用痕：後述する石鏃にみられる磨耗と全く同じもの（内容については石鏃の項参照）が9点の石鏃にみられた。無茎凹基5点、無茎円基、無茎尖基各1点、有茎円基2点である。いずれも石鏃と同様の使用の結果であろう。無茎凹基を除けばみな狭長で分厚く、その対称性で石鏃に分類したものの石鏃とのへだたりの少ないものである。687点という総数からみても、石鏃の大部分が薄い先端部を持つことをみても、こ

の磨耗は、石鏃としてでなく石錐としての機能に転用された結果と解すべきであろう。この他に、先端の縁辺につぶれのみられる無茎凹基が1点、両側辺の両面に縁辺と平行な線状痕の観察される無茎凹基が1点あった。前者は石錐の機能への転用と解せられるが、後者は側辺を石匙などの刃部と同様に使用した結果であろうと思われ、非常に例外的な使用痕である。このように本遺跡出土の石鏃には、その本来的機能に関わる使用痕は全く見出すことができなかった。

(ii) 石 槍

分類で述べたように、石鏃との界に“およそ5g以上”といった境界しか引き得ず、特に大形の無茎凹基の石鏃との間に錯綜を生じてしまった(図225-11・12等と図248-13・21等)。有茎尖基と解される100号住居址出土(図238-14)以外全て無茎であるが、中でも凹基が6点と約半数を占めている。全体に剥離が少なく、雑な印象を受ける中であって、1号住居址から出土した石槍(図212-15)は非常に整ったものである。長さ66mmの狭長な無茎凹基で、平面形をみると、先端部は舌状の円味をもち、あまり幅を増すことなく基部へ至っており、先端と同様丸味を帯びた両脚部は、その基部近くの両側縁に抉りを持つことにより、あたかも小さなつまみを基部両端に持つかのようである。チャート製。側縁を中心に剥離の稜線がなめらかになっている印象を受ける。(実体顕微鏡観察では、それが使用痕なのか明言するまでの観察ができなかった。)本遺跡の遺物の中でも特異な石器として注目してよいのではないかと思われる。

(iii) 抉入刺突具

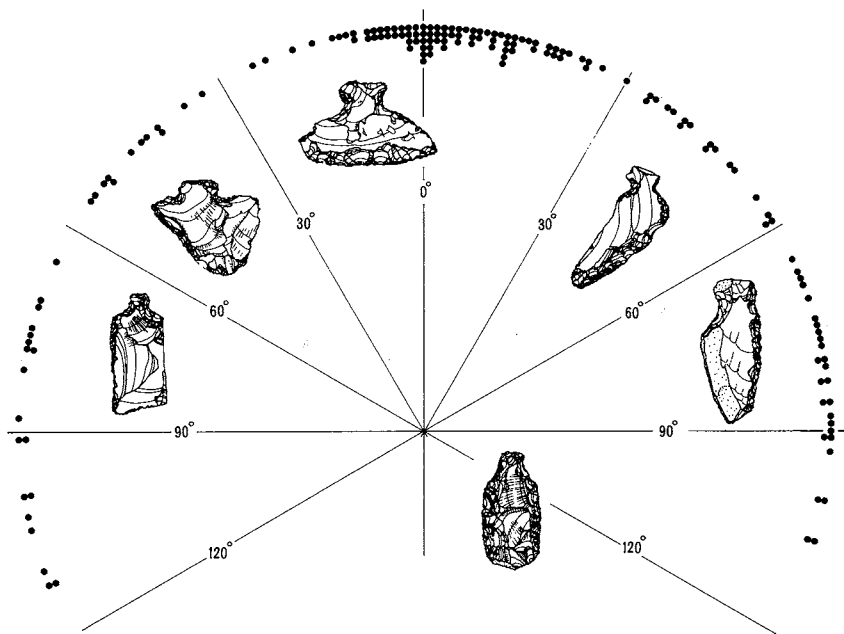
全体の形態からみると無茎凹基7点、無茎平基7点、無茎円基2点である。大きさを比較するために重量をみると、1.25gから6.4gまでバラツキがあるが、1.25gから2.8gと、4.65gから6.4gの2群、石鏃の大形品と石槍の小形品に相当する重量のものがみられる。調整をみてもまた、石槍と石鏃の中間的印象を受ける。なお、千鹿頭社遺跡では、側縁に施された抉入が先端に近いものと基部に近いものの二種類がみられたが、本遺跡からは後者しか出土しておらず、千鹿頭社遺跡ほどの優品も無い。

(iv) 石 匙

形態：まず、この石器の特徴であるつまみと刃部についてみてみたい。分類の項で述べたように、二次加工によって、つまみ部と刃部は明瞭に指摘することができる。分類の際、二次加工として刃部作出がみられず、それにかわって調整が施されているものが例外的にあるとしたが、その後の観察により、それ等は、素材である剥片の頂端部に刃部位置があるため、素材調整の上へ刃部作出を施してあると判断されるもの(図250-11)や、両面からの剥離が観察されるものの断面片刃であるもの(図215-11、226-9、230-27、236-13、237-1、242-23、250-7)である。

このように観察される刃部の、両端を結ぶ線と基準線とのなす角をつまみ角として、わかるものについてその分布を調べてみた(挿図40)。その際、つまみと刃との位置関係をもみる意味で、つまみ角の左右を意識した上で、グラフ上へ点をおとした。つまり、グラフの90°の線上に刃をおいてみれば、●の位置がほぼつまみの位置であると解せるわけである。なお、主として縦型と分類されたものに2箇所刃部を持つものがあるが、刃部を1単位として表化してある。

挿図では、つまみ角は左8°から右16°に非常に集中している。その両側と左75°から78°、左51°から55°、右34°から41°、右65°から91°にも比較的多く集まっている。これは、左右をとおして0°付近に集まる非常に多くの1群と、45°付近、80°付近に散漫ではあるが集まる1群がそれぞれあることを示している。すなわち、この3群が分類の項での横型、斜型、縦型の3分類に相当するわけで、3分類法が単に角度を3等分しただけでないことが理解できよう。そこで、つまみ角と型式の関係を、 $0^{\circ} \leq \text{横型} < 30^{\circ}$ 、 $30^{\circ} \leq \text{斜型} < 60^{\circ}$ 、 60°



挿図40 十二ノ后遺跡出土石匙つまみ角分布

≦縦型<120°とした。なお、1個体に2つの刃を持つ22例は、縦型+縦型11例、縦型+斜型9例、縦型+横型1例、斜型+斜型1例である。

もう少し挿図をみよう。つまみ位置を加味した挿図では、0°の線より右側に●の数が多いのではないだろうか。数えてみると、ちょうど0°の上にある6例を除くと全体の62%、96点が右側にある。この傾向は型式のちがいに左右されることも無いようであり、特に横型をみると、視覚的にも明らかのようにその分布の中心は0°より右へ3°はずれており、刃部を下へ向けた時、その右上の方へつまみをつけるという意識がうかがえるように見える。この横型では、0°より左側では、より0°に近い方に●が集中しているのに反し、右側では、0°に近い方には集中するものの、10°前後の例も少なくはなく、バラツキ気味である。右側の方が多ただけでなく、多少の“ちがい”も許されるのではないかと類推される。

つまみの大きさとつまみ角についてみてみよう。つまみの大きさは、非常に大きいAが38例で19%、中形のBが62例で31%、小さいCが57例で28%、極めて小さいDが30例で15%、不明が14例である。Aでは縦型が39%、横型が50%であるのに、Dでは縦型が23%、横型が70%である。全体的にみて、つまみの大きさが小さくなってゆくに従い、縦型の割合が減少してゆく。この点に関しては、次の素材と形態との関係で理由を考えてみたい。

素材と形態：分類の項ではふれなかったが、素材はすべて剥片である。従って、そこから二次加工にはある種の制約が生まれてくると思われる。すなわち、バルブ部分を何らかの方法で除去しない限り、①つまみ部分を小さくするためには、その位置をバルブ部から離れた方が容易である。②つまみ部の小ささを問題にしなれば、つまみ部にバルブを使用すれば、刃部は容易に、任意の位置へ作出することができる。③縦長剥片のバルブ部をつまみ部とすれば、2つの刃部を作出することが容易である。

これ等の制約を証明するように、本遺跡出土の石匙には次のような形態と素材との関係が観察されている。

- ①縦型石匙は多くがバルブ部につまみを作出している。特に縦型に多い2つの刃部を持つものは、いずれも縦長剥片を素材とし、わずかにある小さなつまみを持つものは、剥片の末端につまみ部作出があるものの大部分はバルブ部分をつまみ部としている。従って、縦型石匙には大きなつまみを持つものの割合が横型より多くなるようである。
- ②横型において大きなつまみを持つものは、横長、あるいは矩形剥片を素材とし、そのバルブ部をつまみとしているものが多い。
- ③横型において小さなつまみを持つものは、縦長剥片を用い、その1側縁につまみ部を作出し、反対側の側縁に刃部作出のみられる例が多い。

刃部形態と刃角：刃部の平面形をみてもみると、64%が外湾しており、直なものが29%、内湾が5%である。後述するスクレイパーと比較して、外湾するものへの集中がみられ、より定形化した石器であるということができよう。また、総ての石匙について刃角を測定してみた。もちろん相手は石器でありこの数字個々を問題にはできない。この種の試みは初めてで比較の対象も無かったが、本遺跡出土石匙の刃角は、刃部の平面形や、つまみ部との位置関係に左右されることなく55°を中心とする正規分布を示していた。全体的にみると利器としての石匙の性質は、つまみ位置や平面形の変化に拘らず一定しているようである。

関西系といわれる石匙：本遺跡出土石匙の全体形については、バラツキが大きく、系統的に分類することが不可能であったため、特に問題としなかった。しかし、特異な形を示すものが無くはない。その1つは46号住居址出土の横型石匙（図230-27）である。つまみが幾分大きめであるものの肩が張り、両側縁が内湾する腰高の二等辺三角形を呈する。刃部は直である。全体が両面加工で素材の面を残さぬまでに丹念に調整されており、薄手である。石質はチャートとのことであるが、肉眼でみる限り他のチャートと異っており、北白川下層式石器に伴う石匙と解したい。また、非常に小さなつまみを持つ丸味を帯びた二等辺三角形のものが93号住居址と遺構外から出土している（図237-1、図251-10）。いずれもチャート製であり、これ等も関西系とされるものではないかと思われる。

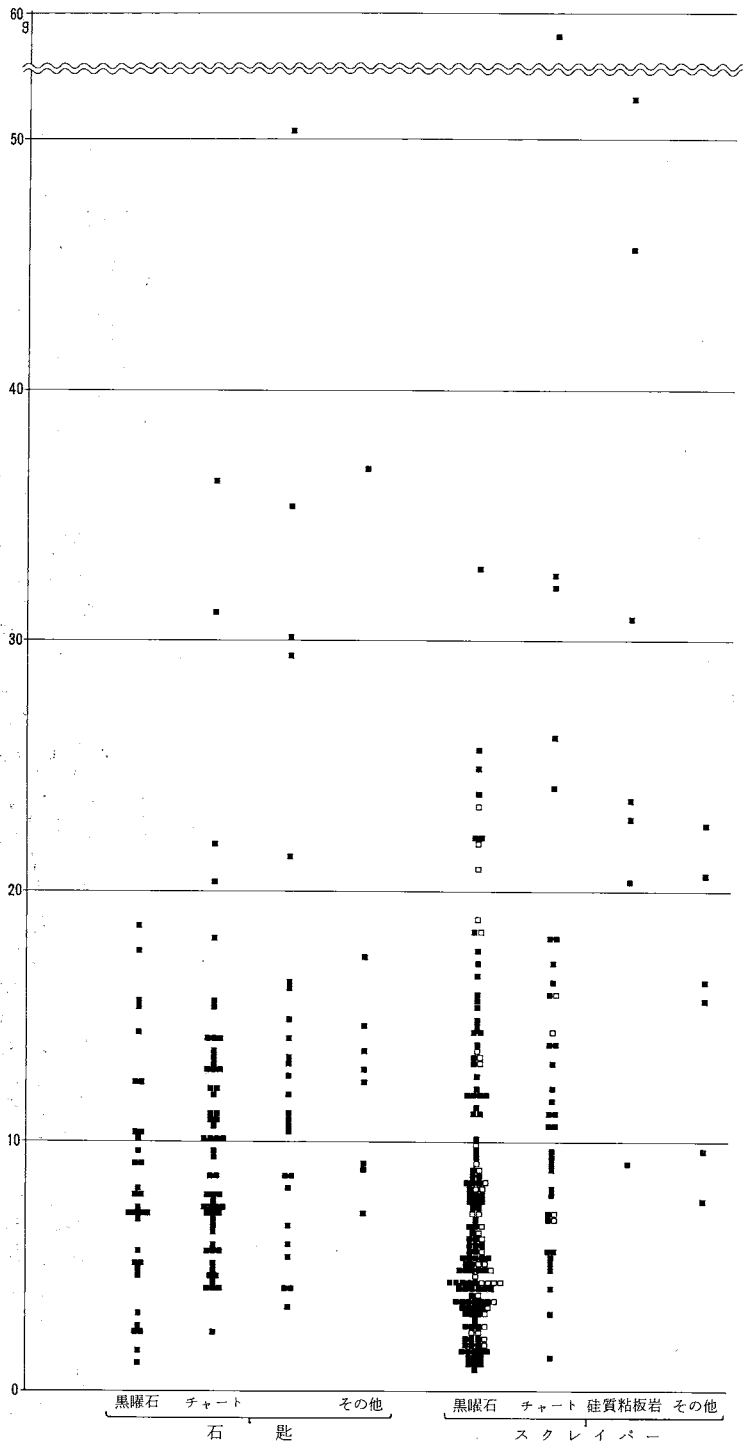
使用痕：一覧表にみられるように、4割以上の75例において何らかの使用痕が観察された。そこで、この使用痕の中から、刃部作出部にみられる線状痕、刃部作出部にみられる磨研痕、つまみ挟入部を結ぶ部分にみられる線状痕の3種類についてみていく中で、石匙の機能面をある程度復元してみたい。まず、刃部作出部の線状痕は、本遺跡出土石匙に最も多くみられた使用痕である（別表一覧表参照）。1、2の刃縁部と直交するものを例外として、刃縁部と平行方向につけられたかなり長目の線状痕であり、縁辺に近いところほど顕著にみられる。同一個体の表面と裏面を比較すると、裏面により多くの線状痕が観察される他、裏面にみられて表面にみられない例はあっても、その逆は無い。表面の刃部作出部では剥離と剥離との稜線である突出部を中心としてみられ、その場合、片側のみにあるのではなく、稜線の左右に等しく観察される。緻密ガラス質の黒曜石製に多く、その6割以上にある他、チャート製の次に述べる磨研痕をもつものの中にも、その磨研痕をおおうような状態で現われる場合があり、極端なものは、磨研痕を消し去ってしまっているものさえある。次の刃部作出部の磨研痕は、線状痕に次いで多い使用痕であり、裏面により顕著でかつ、縁辺に近づくに従ってその磨研の程度は高くなっている。黒曜石製にはこの種の使用痕はついておらず、チャート製に多く、その3割程度にみられ、硅質粘板岩にもわずかにある。石器表面の微細な凹凸が使用に従って平滑化したものと思われる。最後につまみ部をみてもみると、つまみの下の最もくびれた部分を、くびれ部を結ぶ線に直交する方向へ極めて細く短い線状痕がおおう例がある。この線状痕は全く平行ではないが、全体的にみると一定の方向が観察される。また、刃部の線状痕と比べて非常に

弱いもので、「刷毛ではいたよう」な状態を示す。これは刃部に線状痕をもつ黒曜石製のものに7例見出すことができた(図230-25, 236-13, 243-33, 250-13, 264-12等)。

以上の諸観察結果から、この3種類の使用痕のうち、前二者は『刃部縁辺とその両面を、対象物に対して裏面より大きな力が加わるようにあてながら、刃と平行方向にかなり頻繁に往復運動した結果、主として対象物との間に入った微細な砂粒等によってひきおこされた使用痕』であり、後一者は『つまみ挟入部をおおうもの上下方向へのわずかな運動によって、それと石匙との間に入った極く微細な砂粒等によってひきおこされたいわば装着痕である』と解したい。「対象物」「おおうもの」が何であったのかは現段階では断定できないことであるが、線状痕が「対象物」「おおうもの」自体の作用によるものではない可能性が大きく、高位率の顕微鏡による磨研痕を中心とした石器表面の微細変化の観察の必要があるだろう。なお、多様な形を示す石匙も、使用痕から見る限り総てが同様な作業に供されたものであろうと判断される。

(V) スクレイパー

素材と二次加工・形態：素材は総数259点のうち86%の233点が剥片であり、13点が石核、8点が原石、15点が主に破損が原



挿図41 十二ノ后遺跡出土石匙・スクレイパー石質別重量分布

因の不明品である。二次加工は88%、270例が片面加工による刃部作出である。この数字は、石匙の刃部と同様、個々の二次加工を1つの単位としてとらえてある。以上から、本群石器の大部分が、片面加工による刃部作出のされた剥片であるといえる。ちなみに、その数は202点、全体の78%である。なお、同一素材に複数の二次加工が施されている場合、同様の加工が施されるのが普通である。次に刃部作出部の形状をみると、Aの舌状もしくは全周するものが36例、13%、Bの外湾が97例、36%、Cの直が94例、35%、Dの内湾が43例、16%である。このうちAについては、平面形の違いと同時に、刃部の非常に分厚いものが多く、使用痕をみても、後三者がいずれも石匙の刃部にみられる使用痕を有するものが多いのに反し、刃部裏面の縁辺に、それと直交する方向の短い線状痕が主としてみられ、旧石器の表現を借りるなら、これが搔器であり、他が削器ということができよう。BからDの削器の刃部形態は、石匙に比べバラツキが大きく、特に内湾するものが相当みうけられる。刃角については石匙とほぼ同様の分布をみせている。

石匙との重量と石質の違い：まず、大きさの単位として、ほぼ体積と同義である重さについて、二者をみると、スクレイパーは、1gから9gの間に集中し、平均9.7g、中央値7.05g、最頻値は4.5gである。一方石匙は、4gから15gの間に比較的集中し、平均値10.9g、中央値9.5g、最頻値7.5gである。スクレイパーはその二次加工が刃部作出のみというより損失の少ないものであるのに反し、石匙より軽くなっているのである。この辺をより詳しく検討するため、両石器の石質別重量分布を作った(挿図41)。チャート製、珪質粘板岩製の石匙は4gから15gの間にほぼ均質に分布し、黒曜石製のものは2gから11gの間に多くみられる。一方同じ石質のスクレイパーの場合、バラツキが大きく、3gから19gの間に比較的多いのに反し、黒曜石製の場合、4g付近にその分布の中心を持ちながら1gから9gの間に非常に多くみられる。

この石質による重さの違いは、素材の大きさの違いとして説明されそうである。つまり、同様の機能を果たしたであろう二者は、素材からみるとその大きさのために、黒曜石製はつまみ部作出の困難さから、つまみを持たぬスクレイパーに多くとどまり、チャート製・珪質粘板岩製は素材の大きさから好んで石匙まで加工されたと考えられる。言い換えるなら、石匙にはある程度の大きさ(4g以上)が必要であって、より小さい黒曜石の剥片は敬遠され、主としてスクレイパーの素材にとどまったのに対し、より大形のチャート、珪質粘板岩の剥片は好んで石匙まで加工されたのであろう。これにより、最初に述べた石匙とスクレイパー、さらには石鏃との間の石質の違いが説明されそうである。⁽⁴⁾

(vi) 複数挟入石器

6点出土しているが、46号・113号住居址出土品以外は、千鹿頭社遺跡出土例と似ているという程度である。以下、主なものについて若干の観察結果を記したい。46号住居址出土例(図230-33)は、丁寧な二次加工の施された大形品である。形態的には整った印象は無く、スクレイパーを素材として両面加工によって挟入部を作出しており、しかも、スクレイパーの段階の使用痕である線状痕が非常に多く、キズもあることから、かなり使いこんだスクレイパーを再加工したと判断される。再加工後の使用痕は見出すことができなかった。一方、113号住居址出土の1例(図242-29)も同様に、整わぬ形で丁寧な二次加工が施されている。使用痕からみて、後述する小型有挟頭磨石器の1種と考えられなくもないが、縁辺のつぶれが1箇所突出部に集中しており、そのみが機能部とも考えられる。この種の石器に特異な使用痕というものも見出し得ず、出土遺構から前期の石器であろうということはいえるものの、新たな見解を示すには至らなかった。

(vii) 小型有挟頭磨石器

素材・二次加工：18点出土している。表面のかかなりの部分が使用痕におおわれているため、自然面と区

別し難いものもあるが、多くが剥片を素材としており、2種類の二次加工が施されている。1つは両面加工の挟入が対をなして施されているものであり、この挟入により作り出されたつまみ部を本群石器の総てが持っている。これは、例えば石匙、挟入刺突具にもあるが、それ等が機能部として、刃部や尖頭部を持つのに反し、本群石器にはそれがみられない。もう1つの二次加工は、両面加工の調整である。全体形を整えるために必要に応じてなされたようで、中にはこれが全くみられない例もある。(図213-4, 217-1, 232-8, 256-1・2)。なお、土塚15(図264-12)の石匙と、遺構外出土の挟入刺突具(図248-38)と同一形態のものは、それぞれからの転用であると考えた。

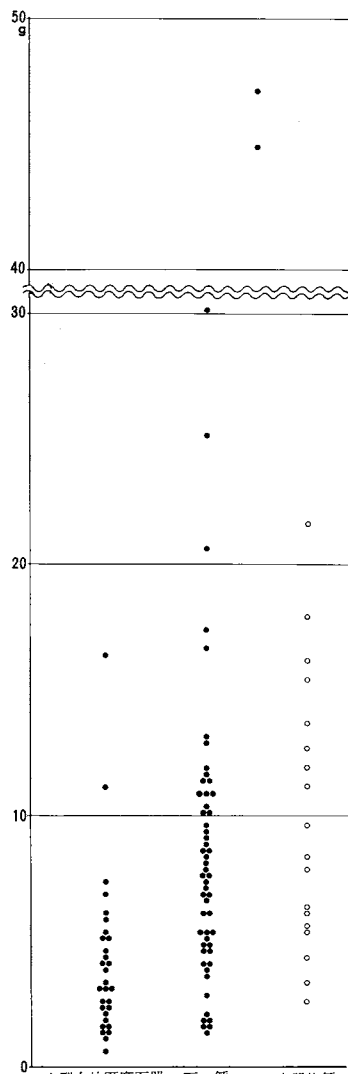
重量：形態上利器としての性質の全くうかがえない本群石器の重さは、千鹿頭社遺跡出土の16点をあわせた中から30点を計測し得た。その結果1g台を中心に6gまで、かなり一定のパラッキを持ちながら集中していることがわかった、分布の状態は磨製石錘と非常に類似している(挿図42)。

石質：総てが黒曜石製である。石質に限定があったこともあろうが、次に述べる本群石器に特徴的な使用痕が黒曜石以外にはつきにくく、抽出し得なかった可能性も考えられよう。

使用痕および破損状況：本群石器に特徴的な使用痕について観察結果を述べてみたい。使用痕として、つぶれ・線状痕・擦痕・点状痕がみられた。分類の項で述べた様に、最後の点状痕が小型有挟頭磨石器を他の類似石器と識別し、他の石器からの転用という判断を下し得る最大の材料であるので、最初に見てみる。挟入部を結ぶ部分を除く全面に認められ、石器表面の突出した部分により多く、それがやがて稜線、縁辺のつぶれへと続いている。よく観察すると、割れ円錐のヒビ割れであるこの点状痕は、他の使用痕と直接的関連のみられないことから、石器表面の上方からの加撃によるものであろうと判断される。

さらに破損状況を見てみると、最も点状痕が顕著に観察される12号住居址(図217-1)、52号住居址(図232-8)、106号住居址(図239-10)、遺構外(図248-38、256-1・2)出土例はいずれも完形であり、かつ、特に点状痕の少ない面というものも観察することができなかった。その二次加工からしてかなり丈夫ではあったろうが、この加撃は、石器自体を破壊するほど強いものではなかったということはいえそうである。線状痕、擦痕は挟入部を結ぶ部分を除く全面に不定方向の短いものが観察されるほか、挟入部を結ぶ部分に、石匙のつまみ挟入部にみられた装着痕と解した線状痕と同様のものがみられた。18点中3点にみられ、178点中7点にみられた石匙より、その比率は大きい。

以上、この石器の使用痕の原因を組み立てるなら、『挟入部を結ぶ部分をおおった上で、少くも黒曜石に傷がつくような硬さのものと、打点を任意にかえながら、かなり頻繁にぶつかり合ったためであり、そのものとは、小型有挟頭磨石器にあたったのか、小型有挟頭磨石器があたったのかは別として、それほど鋭くなく、しかもこの石器表面と点的に接するような形をしていた』と結論づけたい。千鹿頭社遺跡出土資料



挿図42 十二ノ后遺跡出土小型有挟頭磨石器・石錘・土器片錘重量分布(千鹿頭社遺跡分含む)

と共に、今まで例品をみないものであるが、原石として分類され易いものであり、今後資料は増加するであろう。

(viii) 石 錐

素材・二次加工：充分な観察ができなかったが多くが剥片である。ただ素材の形態としては棒状あるいはそれに類する形であって、石鏃、石匙等の素材であった板状とは異なっていることが、二次加工が部分的になされたものの観察を通じていえる。つまみ部を持つものについて、先端角の二等分線を引いてみると、例えば75号住居址（図235-28）、遺構外（図256-5-11）出土に顕著にみられるように、つまみ部は多くが左右どちらかに偏在している。つまみの具体的機能を考える上で1つの手がかりとなるものではないだろうか。多く両面加工によって先端部を作出する本群石器の中に、板状のつまみ部から、すべて片面加工によって断面三角形の非常に小さな突出部を作出する例がある（図217-17, 218-35, 223-24等）。15例と全体の16%である。先端部を持つといいながら、機能において他の石錐と異なるのではないと思われる。

使用痕：95点中15%の14点に観察された。先端部の縁辺のつぶれが5例、先端部の縁辺および稜線の磨耗が8例、擦痕と線状痕のあるものが1例である（別表4参照）。磨痕は、先端部の稜に軸線に対して直角方向に、先端を中心とした円錐状にけずられたような状態で、特に先端部からわずかに広がった部分に多く観察された。このけずられた方に特に方向性はみられず、石質によるちがいがいもなかった。縁辺のつぶれの中には、この磨耗の前段階のものもあるのではないと思われる。なお、9点の石鏃、1点の扶入刺突具に全く同様の磨耗が観察された。遺構外出土の1点（図256-15）のみにみられた擦痕と線状痕は、錐部軸線と平行方向のもので、錐部の先端部を除いた全面にわたっていた。いずれも面をなして著しいもので、擦痕は先端からつまみ部に向かうに従ってその幅が広がり、その広がった中にはつまみ部方向にふくらむしわ状のキズが連続してみられた。

以上から、磨耗のあるものは『対象物に垂直に立て、往復回転運動することにより拡孔あるいは穿孔する道具の先端部』なのであろう。ただ、かなり硬いものとの間でできたであろうこの磨耗が、即対象物の硬さを示すのか、あるいは対象物との間に介在した何ものかによるのかわからない。また、先端部にあまり磨耗のみられないことから、拡孔の道具とみることもできよう。また、擦痕、線状痕のある1例は、『すでにあいていた孔にそれと垂直方向に突き入れる運動をくりかえした』ものであろう。擦痕からみて、その対象物は柔軟性を持つものであり、石器先端部は対象物にふれることがなかったようである。なお、断面三角形の小さな錐部を持つものに使用痕を見いだすことはできなかった。

(ix) 使用痕のある石核・剥片・原石

分類の項で述べたように資料性の乏しいものである。細かな点にはふれることができないので、わかる部分について述べ、後は主として観察された特殊な使用痕を有するものについて記述するにとどめたい。本群の素材は9割以上が剥片によって占められている。剥片・石核・原石の総量がわからないので明言はできないが、一次加工のみの石器はその大部分が剥片のようである。使用痕は78.4%、279例が刃こぼれである。縁辺の両面に等しい力が加わったのではなく、どちらかに偏った方向からの力が加わっているであろう。使用痕部の形態をみると、外湾24%、87例、直なもの31%109例、内湾するもの45%、160例であり、内湾が多い。石匙、スクレイパーの刃部では内湾が他二者のいずれも半分以下であり、使用方法において、それらと異なっているものと思われる。なお、本群石器の中で石匙、スクレイパーに非常に多かった縁辺と平行な線状痕を伴うものは25例しかないことも、これを裏付ける資料となろう。また、本群石器と

スクレイパーとの間で大きさの比較を行なったところ、スクレイパーの方が重さで2倍あった。

次に本群の中でその後の観察で二次加工が施されている疑いの強いもの、特殊な使用痕の状況を示すものについて、二、三述べておく。

遺構外出土例(図258-12)は、原石の一端を両面加工で調整後、先端部を折り取るような形でノミ状部を作出したものであり、この最後にできた面に、先端を中心に縁辺と直交する線状痕がみられる。同じ遺構外出土例(図259-4)には、剥片の頂端、断面ふくらみを持った片刃状の刃面に相当する部分の縁辺近くに、縁辺と直交する擦痕がみられる。剥片の側縁には刃こぼれがあり、この擦痕と何らかの形で関連性があるものと思われる。これと全く同様の使用痕は、132号住居址出土の原石を素材としたもの(図245-11)の、図で上端の断面ふくらみを持った両刃状の刃面に相当する部分に見られる。16号住居址(図223-12)、141号住居址(図246-14)出土の剥片は、内湾する刃こぼれ部を伴い、側縁の外湾する部分が極端に磨滅している。

B 磨製石器

(X) 石 錘

成形は擦切切目によるものが80%を占める。擦切加工のみられないものも、原材がそれを必要としない手頃な大きさであったからと思われるのが大部分である。打製のもの例外とみてよいであろう。115点出土しているが、38号住居址から10点、137号住居址から5点、土塚83から7点と多い。

重量は1gから12gの間に集中している(挿図42)。しかし、その中では、ほぼ均一に分散しており、例えば石鏃、石匙にみられる、ある重さ(大きさ)への集中はみられない。成形法からして大きさはかなり容易に調整できると思われるところから、許される重さの範囲の広い石器であるといえそうである。

所属時期は千鹿頭土遺跡の石錘所屬時期と分布状況から、後期のものとした。なお、同時期の土器片錘は、その重量(挿図42)と形態、出土量および素材から、この石錘にかわるものとして作られたものではないかと思われる。

(ㄨ) 装身具

18点出土した袂状耳飾は、いずれも全体形の半分以上が破損しており、完形品は無い。131号住居址から3点出土しているほかは、出土地点について特に際立った集中傾向は見出せなかった。総てが滑石製である。装身具としては他に、3点の管玉状、1点ずつの臼玉状、平玉状の滑石製品がみられる他、次の様な特異な形態のものがある。

1点は16号住居址出土の淡緑色の滑石製品で、有孔三叉状垂飾品としたものである(図224-1)。底辺の内湾する丸味をもった二等辺三角形の頂部に1孔が穿たれ、そこから両側辺の背部に1本の溝が掘られており、その結果、ブリッジ状の釣り部分がみごとに作り出されている。もう1点は、81号住居址出土の有孔垂飾品(図236-3)である。濃青色の滑石を素材とし、片端のすぼまる角柱状の一面に縦に走る1本の溝が掘られ、その両側面を貫通してかなり大きめの1孔が穿たれている。いずれも単なる装身具というだけではない形であろう。特に後者の溝は意味があるように思える。

なお、この他に古墳時代の遺構から出土した装身具の中に縄文時代のものではないかと思われるものがあるが、それについては古墳時代以降の石製品の項でふれることにする。(小池 孝)

註1 「器種別石器の扱い」でも述べるように、本遺跡では1住居址から2～3群の土器が出土している例が多いが、このようにして出された数値も大きな時間幅でみれば「ほぼ均等に誤差を含んだ数」でもあらうと考え、時間的総量の変化

をみる目やすとした。

- 2 千鹿頭社遺跡の縄文時代の遺構は、前期の住居址が6、集石1、中期と後期の土器集中箇所が各1である。
- 3 無茎の平基や円基に破損品がより少ないのは、基部の丈夫さにあるであろうし、有茎に破損品の多いのも、無茎にはない茎という先端部のためであることは容易にわかることである。
- 4 当然のこととして、本遺跡での石器製作に関しても何らかの検討を加えねばならないところであるが、手元にある資料は、素材である原石、剥片、石核の大部分が無いという不充分なものであり、この点に関しては白紙とせざるを得ない。
- 5 使用痕の項にあるように、小型有扶頭磨石器に顕著にみられるのは磨痕ではなく打痕である。従ってこの名は事実にくわいなものであり、形態、機能を反映した命名が必要である。

参考文献

- 1 詫間町文化財保護委員会『紫雲出』1964
- 2 S.A.セミュエーフ、田中琢抄訳「石器の用途と使用痕」『考古学研究』14-4 1968
- 3 加藤晋平・桑原護『中本遺跡』1969
- 4 長野県考古学会『有明山社』1969
- 5 山形県教育委員会『岡山』1972、『岡山遺跡発掘調査報告書』1975
- 6 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書Ⅰ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ』1973~1976
- 7 青森県教育委員会『中の平遺跡発掘報告書』1974
- 8 芹沢長介編『最古の狩人たち—古代史発掘1』1974
- 9 『長野県中央道報告—諏訪市その3—』1974
- 10 杉原莊介・戸沢充則「北海道白滝服部台における細石器文化」『明治大学文学部考古学研究報告』第5冊 1975
- 11 片岡肇「長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査」『平安博物館研究紀要』6 1976
- 12 田中英司「縄文時代における剥片石器の製作について」『埼玉考古』16 1977
- 13 函館市教育委員会『函館空港第4地点・中野遺跡』1977
- 14 甘粕健編「考古資料の見方(遺物編)」『地方史マニュアル』6 1977
- 15 北海道教育委員会『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』1977
- 16 宮城県教育委員会『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』1978


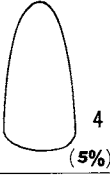
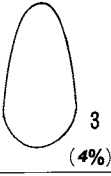
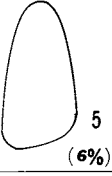
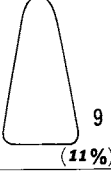
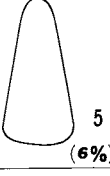
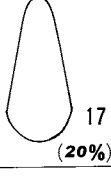
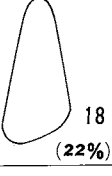
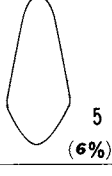
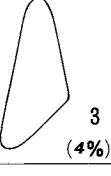
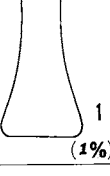
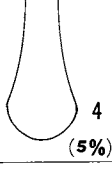
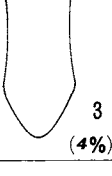
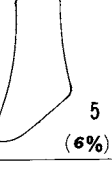
イ) 大形石器

器種ごとに概要を説明し、別表4を付す。表中の長さ、幅、厚さは最大値をとる。刃幅は使用痕、形態から判断される刃部両端を直線で計る。折損、使用痕の記号については各項で説明する。石質は信州大学教養部田中邦雄教授に代表例の鑑定を依頼し、それに同定したため錯誤があるかもしれないが、当方の責任である。出土地点を明示しないものは遺構外出土遺物であり、遺構床面出土遺物は床として示した。カッコ内数値は破損品の現長である。

大形石器として本項で一括するのは作業上の理由からであり、小形石器とされたものと同じに扱うべきものもいくつか含まれているが、特に意図してのことではない。実測図・図版(写真)は同番号とした。

(i) 打製石斧 (83点)(図266・267, 図版114)

83点あるが、そのうち約20%にあたる18点が破損品である。破損品には相互に接合するものはない。つ

83 (100%)	A 11 (13%)	AB 9 (11%)	B 24 (29%)	C 23 (28%)	D 8 (10%)	E 8 (10%)
I 13 (16%)	 1 (1%)	 4 (5%)	 3 (4%)	 5 (6%)		
II 57 (69%)	 9 (11%)	 5 (6%)	 17 (20%)	 18 (22%)	 5 (6%)	 3 (4%)
III 13 (16%)	 1 (1%)		 4 (5%)		 3 (4%)	 5 (6%)

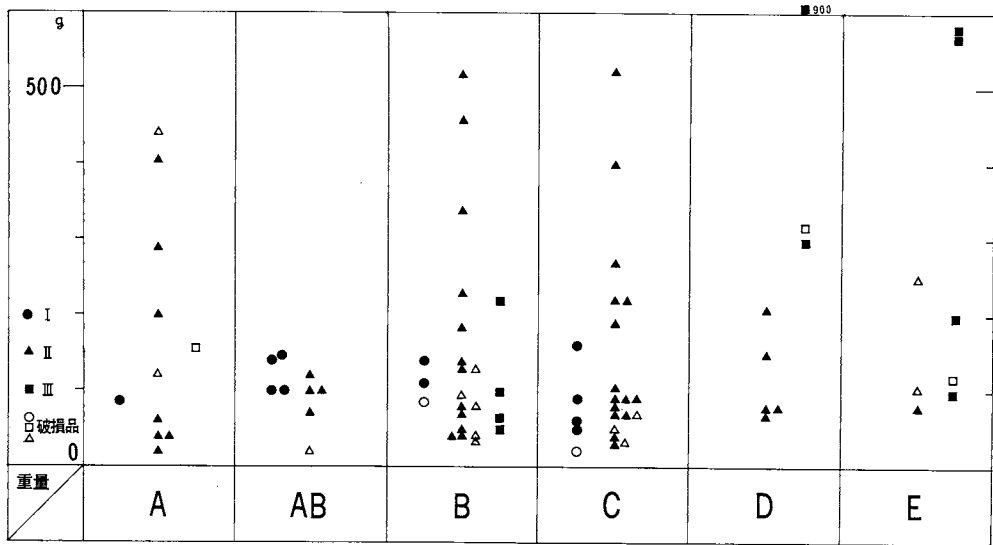
挿図43 十二ノ后遺跡出土打製石斧形態模式図

まり65点については現在観察される形態が最終的な使用の結果を示すものと考えられる。これは未使用のまま廃棄された可能性を考えていない。いまのところ石器類の廃棄パターンが実証的に明らかにされていないので、使用の各段階において遺存されたことを前提としておきたい。打製石斧は製作法の故に現資料が製作当初の原形か、それに使用痕跡の加わったものか、再調整されたものか、区分が困難であるが、第二の場合がほとんどと考える。

形態：打製石斧の側縁は、おそらく着柄部であり、使用対象に直接触れる部分ではないので、使用による変形を受ける可能性は少ない。分銅型、短冊型、撓型などの側縁形態による分類はこの点で合理的なものといえる。さらに機能を直接示している刃部形態とを組み合わせると、挿図43のような模式的分類案となる。空欄は本遺跡でみとめられないものである。これらは平面的プロポジションのみによる分類であり、分析のための一方法にすぎない。これを補うため同時に重量を示しておく。各類型の実例は、挿図44に示し、破損品は当該部分が実例のどれに近似するかをもって区分し、全資料を14類型に分類しえた。なお、D-Ⅲ、E-Ⅱ、E-Ⅲとしたものは石鏃、有肩石器などとよばれ、時に打製石斧とはされないものである。

使用痕：刃部に擦痕を残すものは少ないが、磨滅するものがある。縁辺打痕は多少なりともほとんどが持つが、本来のものと断言はできない。磨滅、擦痕は刃部を中心にみとめられるが、その方向のわかるものは少ない。明らかなものは縁縁に直交する擦痕がわずかの範囲にみとめられる。縦断面形が湾曲するものは外湾面により明瞭につく。斧身の湾曲するものは、製作第一段階における剥片の形状に影響されたものであり、ほとんどにわずかながら湾曲がある。

分類と機能：刃部形態が長期の使用や再調整によって形態分類にまで影響をおよぼすほどに変形してゆくものであるなら、それにつれて重量は減少してゆくはずである。しかし、AからD類型への変化は、刃部端の磨滅の進行であるとは考えられない。主なる使用部分が一方にかたより斜刃状を呈するものC、E



挿図44 十二ノ后遺跡出土打製石斧の形態別重量分布

を除いても、A、AB、B、Dの過程に重量の減少傾向はみられない。B類とC類は数量、重量分布ともよく似たありかたを示しており、一方から一方への変化ということはあまり考えられない。この二種に並列的な作りわけを考えるとすれば、I類については、B-AB-A、II類については、B-A、B-ABという変化の可能性もある。同様にII類について、C-D-Eともいえる。いずれにしても、打製石斧の刃部に丸刃・平刃型と斜刃型ともいいうるような二種を指摘することが可能である。斜刃型とは、いわゆる粗大石匙などにまで関連を持つとも思われる。すくなくともこの二種には機能的な差を考える必要がある。

一方、重量のみ注目すれば、A、B、CのそれぞれII類、E-III類は重量差が著しい。これらを事例で示せば以下のようなになる(図266・267)。

- A-II 大形-4、中形-3、小形-2・5 C-II 大形-27、中形-23・25、小形-24・26
 B-II 大形-13、中形-16~18、小形-14・15 E-III 大形-33、中形-32

表11 十二ノ后遺跡出土時期別住居址(多)出土打製石斧の形態別分布

	A			AB		B			C			D		E		計	
	I	II		I	II	I	II		I	II		II	III	II	III		
		大	中				小	大		中	小				大		中
112住			1								1	1	1			4	
26住				1	1	1			1						1	2	8
38住	1	1								1	1	1		1			6

	I	II	III
112住	0	3	1
26住	2	3	3
38住	1	5	0

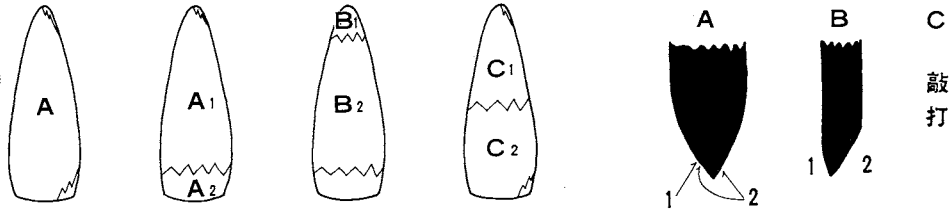
各類は以上のように細分可能である。出土数の多い住居址についてみると表11のようになる。112号住は前期、26号住は中期、38号住は後期であり、いずれも床面出土品ではない。

各住居について刃部形態は多様であるが、側縁形態には傾向性がある。同一住居覆土出土というのみで

は明確でないが、側縁形態（Ⅰ～Ⅲ類）と刃部形態（丸刃・平刃・斜刃）とに、機能に直接結びついた形態とそれ以外の要素とを考慮することもできよう。

(ii) 磨製石斧

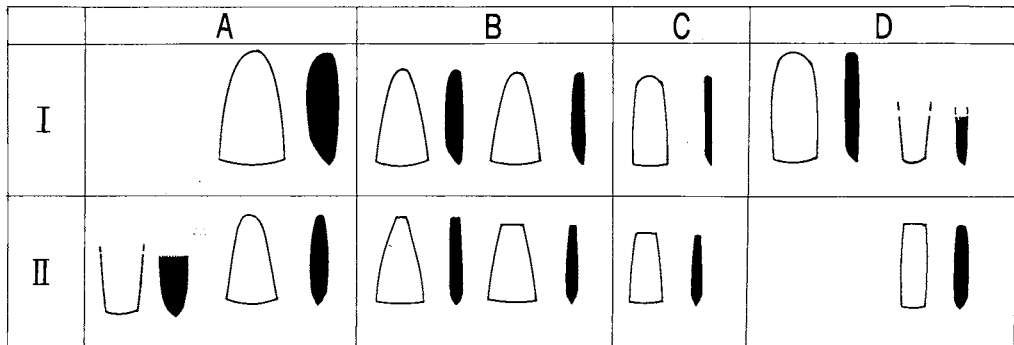
主要な整形を研磨によるいわゆる石斧類は、形態から小形磨製石斧、定角石斧、乳棒状石斧の三種に大別できる。磨製石斧類は折損するものが多く、使用痕の観察も比較的容易である。その類型は挿図45(右)・(左)のようになる。使用痕は実体顕微鏡(×40)を用い、製作痕と明らかに区別しうるものの位置を示す。方向については、各項でふれたい。



挿図45 十二ノ后遺跡出土磨製石斧の折損部位(左)と使用痕の位置(右)模式図

①小形磨製石斧(68点)(図268、図版116)

形態：片刃と両刃があり、平面形にも大別して4種ある。模式的分類は挿図46のようになる。対応する実例は別表や、図268に示した。断面形で両刃状を呈するものでも刃部が両端へ行くにしたがって中心線をはずれるものは、片刃として分類した。すなわち両刃としたものは、刃先全体が中心線上にあるものである。



挿図46 十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧形態模式図

研磨による仕上げは丁寧で、石材は蛇紋岩を主体とする。非常に良質な材を用いて玉器的なものもある。D-I類は刃部のみ磨いている。I類は片刃である点、定角石斧、乳棒状石斧とは明らかに異なる。II類は刃部も平面形も定角石斧に相似するものがあり、主な石材と仕上げの程度が異なる。27、28は実用品とは考えられない。29、30は定角石斧A類の刃部片を研磨、転用したもので、3(B-I類)に似る。

折損・使用痕：折損のありかたは表12のようになる。I、II類とも大差なく、他の磨製石斧類に比べて完形品の率がたかい。頭部に敲打痕をもつものが多いけれども、頭部の欠損するものが少ない。一方、ほぼ中央部で横に折損するものが多い。全般に敲打の衝撃が強いものでなかったことを予想させる。また、B-I類についてみると、20g以下で折損するものはA₁1、A₂2であり、40g以下ではA₁5、C₁3であり、大形のものほど横方向の力が加わることが多かったことが考えられよう。一方、B₁、B₂の折損類型(頭部

表12 十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧の折損と使用痕

	折 損								使 用 痕				
	A	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	計	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	B ₁₂
A-I	1	1	0	0	0	0	0	2	-	-	-	1	-
B-I	8	6	2	0	1	4	1	22	1	-	6	-	2
C-I	0	0	0	1	0	0	5	6	1	1	2	-	-
D-I	2	3	1	0	0	0	3	9	-	-	4	-	-
A-II	1	1	0	0	0	0	2	4	-	1	-	-	-
B-II	4	1	1	0	1	2	1	10	1	1	-	-	-
C-II	1	0	0	0	0	0	0	1	-	1	-	-	-
D-II	3	0	0	1	0	0	3	7	-	1	-	-	-
他	1	1	0	2	0	0	3	7	-	-	-	-	-
計	21	13	4	4	2	6	18	68	3	5	12	1	2

2例である。研ぎだし面がないことは機能による以外に研磨による消失を考える必要がある。

分類と機能：以上、小形磨製石斧としたものには、いくつか用途のちがいを示すと考えられるデータがある。折損、使用痕がすべて使用の結果を示すものと前提すれば、C-I類などは明らかな特徴を示す。折損以前の原形を考えるためにA、A₁のみの重量を示せば挿図47のようになって、模式的分類案の各類型に大形品と小形品のあることを示している。刃部の両刃、片刃の重量のみでまとめれば以下のようなになる。

I 片刃

- ①75g以上 (A-I、B-I、D-I)
- ②60g前後 (B-I、C-I)
- ③20g以下 (B-I、D-I)

II 両刃

- ①45g以上 (A-II、B-II、D-II)
- ②30g以下 (B-II、C-II、D-II)

これらのうち使用痕の明瞭なものは12点あり、類型で示せば以下のようなになる。

I-① A₁1、B₁2、B₂1、B₁₂1

- ② B₁1、B₁₂1
- ③ B₁1

II-① A₂2

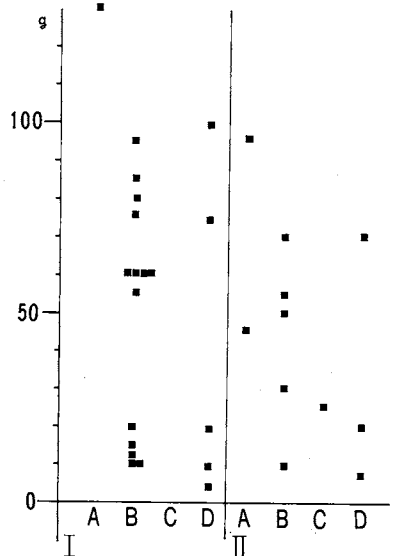
- ② A₂2

大形品ほど多様である。つまり機能が限定されていない可能性がある。敲打痕と折損からみて使用法は以下のようにまとめられる。認められた使用痕はすべて刃部に直角である。

- ①A-I類、B-I類の55g以上のものは頭部への軽い敲打により、刃部両面に平均しない力を加える。また、斧身に対して直角方向に力が加えられることがある(図268-1~5)。
- ②D-I類の75g以上のものは、刃部両面に平均しない力が加えられる(11)。
- ③B-I類の20g以下のものも同様(6・7)。
- ④C-I類、D-I類の小形品は刃部両面に平均しない力が加えられ、斧身に対して直角方向の力が加えられる(8~10・12~15)。
- ⑤A-II類、B-II類の45g以上のものは刃部両面に平均した力が加えられ、頭部に強い打撃が加えられることがある(16~20)。
- ⑥B-II類、C-II類、D-II類それぞれの30g以下のものは刃

欠損)は6例あるが、1例(55g)をのぞいて15g以下の小形品である。これは小形品ほど、頭部あるいは刃部を破損するような強い衝撃が加わったことを予測させる。一方、C-I類においてはB₁1、C₂5であって横方向の力が加えられることが多かったと思われるが、いずれも35g以下の小形品である。

II類(両刃)のうち使用痕の認められるものは両面に均一にあるが、片面のみが1例ある。I類(片刃)は、刃の研ぎだしてない側にあるもの12例、研ぎだし面にあるもの1例、両面



挿図47 十二ノ后遺跡出土小形磨製石斧の形態別重量分布

部両面に平均した力が加えられる(21~23・25・26)。

⑦D-II類の大形品は不明(24)。

以上は主に木工用の加工具の諸器種に対応するものであろう。

⑤定角石斧(23点)(図269, 図版117)

形態：いわゆる定角石斧は厚さと長さの傾向から三種に大別できる。Aは扁平で短かく最も小形のものは小形磨製石斧B-II類に近似する。Bは厚さを増し、頭部が細くなるもの、Cは長さを増し、幅を減ずるものである。刃部を破損するもの、頭部に敲打痕を残すものが多い。石材は、硬質の火山岩系のもの、蛇紋岩系のものとの二種ある。23点中、ほぼ原形をとどめるもの2点である。

折損・使用痕：折損は表13のようになる。使用痕は敲打痕以外には明らかでないが、刃部はすべて両刃である。

刃部を欠くものも多く、刃部片(A₂)がない。頭部片(B₁)の多いこと、頭部に敲打痕を残すものが多いこととあわせれば、かなり強い打撃が頭部に加えられたものであろう。しかし、それが刃部に敲打痕を残した使用の段階であるのか、刃部が本来の形態を保っていた段階のものであるか明確でない。ただ、刃の破損が1回の衝撃によると思われるものと連続的剝離によると思われるものと二種あり、前者の頭部にはほとんど敲打痕が認められないので、頭部への打撃は定角石斧本来の使用法ではなかった可能性が大きい。

分類と機能：最終的に転用されたと考えられる凹を持つものが6点あるが、これらのうち刃部を残すものはすべて敲打されて磨滅している。凹を持たずに刃部を敲打するものが1点であるから、敲打と凹には機能的関連があるかもしれない。また、本来的には刃部が1回で破損するような強い衝撃が加えられたと考えられ、それが頭部の敲打によらないとすれば、当然着柄されたものである。しかし、使用痕を詳細に観察しうる資料が少ないので、その方法は明確でない。ただ、中軸線に対してやや斜め(10°~15°)に使用痕の認められるものが1点ある。(図269-C)形態分類のA、B、Cは用途の差として認識しうるデータはないが、Aが小形磨製石斧B-II類に、Bが乳棒状石斧A、AB類に、Cは同じくB類に形態の類似を認めうるかもしれない。

⑥乳棒状石斧(94点)(図269、270、図版117・118)

形態：定角石斧以外の大形磨製石斧類と乳棒状磨製石斧は大別して三種ある。ひとつは典型的乳棒状石斧(図269-1~5)で、断面は円形にちかい。断面が扁平になるものは、前者にちかいものと(図270-11~15)、定角石斧C類としたものにちかいもの(同6~8)がある。それぞれをA、B、ABとする。94点中はほぼ完形で残るものは5点にすぎず、破損品のなかに同一個体と考えられるものはない。各類型には大きさにバラエティーがある。AB類はほとんど大形品であるが、A、B類は大形品から小形品まで平均的にある。

折損・使用痕：折損類型は表13のようになる。A、AB、B類以外は含めていない。

表13 十二ノ后遺跡出土乳棒状石斧(左)と定角石斧(右)の形態別折損一覧

	A	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	計	使用痕C		A	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	計
A	3	4	0	4	3	12	2	28	5	A	0	4	0	1	0	1	1	7
AB	0	1	2	5	1	1	9	19	3	B	1	1	0	1	0	1	0	4
B	2	6	1	9	1	9	12	40	1	C	1	3	0	3	0	1	1	9
計	5	11	3	18	5	22	23	87	9	計	2	8	0	5	0	3	2	20

刃部を欠くものおよび刃部14点、頭部を欠くものおよび頭部23点、全体のほぼ上半および下半45点となる。頭部にはほとんど敲打痕を持つが、大形のものほど強い打撃を受けているように観察されるのは、石斧の自重による差であろうか。使用痕は刃部両面に平均して残されるものが少数あるほか、敲打痕で磨滅するものがあり、それはB類に少ない。

分類と機能：使用痕の観察しうるものは中軸線にほぼ平行する。多数の破片のなかに同一個体と考えられるものがないことは、使用場所や破損品の転用再加工のありかたに関連しよう。同質の石材を主材とする石器がほかにないので他器種への転用が多かったとは思われない。転用があるとすれば同類型の小形品に再加工することは可能である。刃部を欠くものが多い割に刃部片が少ないことは、刃部のみ折損するような使用法は遺跡外で行なわれたとも考えられる。それに対して、頭部片や半分に折損するものが多いことは大破に至るような使用法が遺跡内で行なわれたものであろうか。それは利器でなく敲打器として用いられた結果である可能性がある。

(iii) 打製刃器類 (図271-1~4, 図版119)

いわゆる横刃型石器が6点(1~6)、粗大石匙1点(7)、弥生石包丁2点(8・9)、尖頭石器2点(10・11)、刃器3点(12~14)ある。横刃型石器といわれるものは、打製石斧に似て、側縁の一方のみが鋭角的になるものである。打製石斧と区分することが困難なものがあり、明らかに異なるもののみをここで取りあげた。

横刃型石器 素材は本来的に一辺の薄いものを用い、その辺に刃部を成している。石材も加工法も打製石斧と大差ない。一部に不明瞭な磨滅をもつものがあるが、明確な使用痕は観察できなかった。

粗大石匙 靴形石器などによばれるものである。打製石斧E-Ⅲ類としたものに類似する。

石包丁 弥生時代石包丁である。8は使用によって刃部に光沢をもっている。9の刃部にみられる擦痕は製作痕と考えられる。

尖頭石器 10は磨製石斧の再利用と考えられる。尖頭に作られ、先端が多少磨滅する。ドリルの機能を有するものであろうか。

刃器 12・13はスクレイパー的機能を持つものであろう。14は黒曜石製品に類似品がある。スクレイパー的なものは他に2点ある。

(iv) 石錘 (図271-15~21, 図版119)

石錘には二種ある。溝を全周させるものと、両端に袂のあるものである。前者には大形自然礫を加工したものがあ

(v) 敲打器類 (図272-1~17, 図版120)

主に敲打痕を有する礫器類には大別4種ある。

I類 円筒形で両端に敲打痕をもつものである。半折したと思われるものが多い(1)。

II類 偏平円礫の周囲を敲打するもの。側面全周を平均して敲打している。敲打にともなう剝離のあるものがある。

III類 不定形礫の一部を敲打するもの。自然礫が敲打に用いられたものである(3・4)。

IV類 敲打あるいは磨滅により礫の一端または両端が面取りしたようになるものである。先端が鋭角的になるものがあるが、ほとんどは丸みをおびて刃部状にはならない。図示したものが本遺跡出土の類品のすべてである(5~7)。

以上のうちⅠ～Ⅲ類は敲打以外の機能は考えられない。Ⅳ類は中农信地方前期遺跡で量は多くないが普遍的にみられるものである。成形された面の形状に平滑なものと粗面なものがある。機能は明らかでない。

(vi) 磨石 (図273-14~21, 図版121)

礫が人為的に磨滅したものは、ほとんどが凹を持つものであり、別に扱う。単に磨滅しただけの礫を磨石とした。扁平なものと球にちかいものがある。球形のものは表面が平滑なものと粗面なものがある。

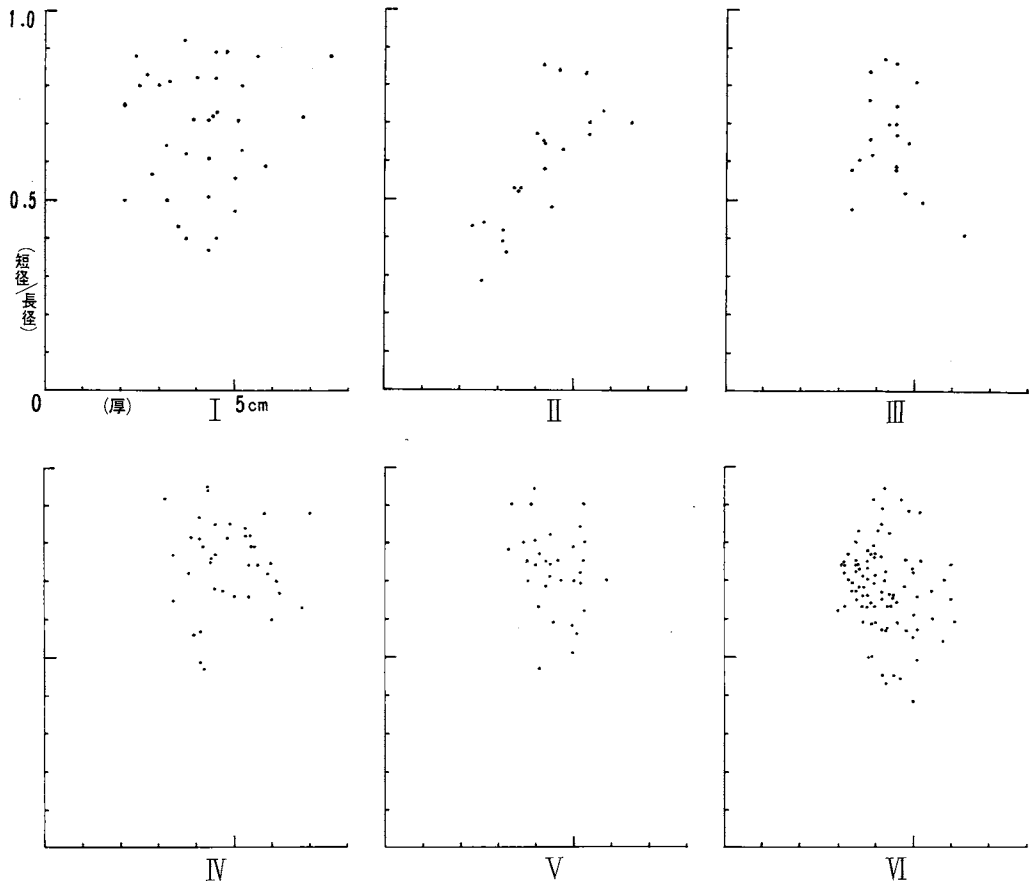
(vii) 特殊磨石 (図274-1~5, 図版122)

特殊磨石とよばれる磨石は、断面三角形の細長い礫の角が磨滅して六角形になったものを典型とするが、六面すべてが磨滅したものもある(4・5)。5の磨滅面は平滑で砥石状になる。これらと異なり、自然礫の一面が磨滅したものも同様の機能を有するものであろう。いずれも磨滅部分は礫の角であり、幅が狭く長くなっている。

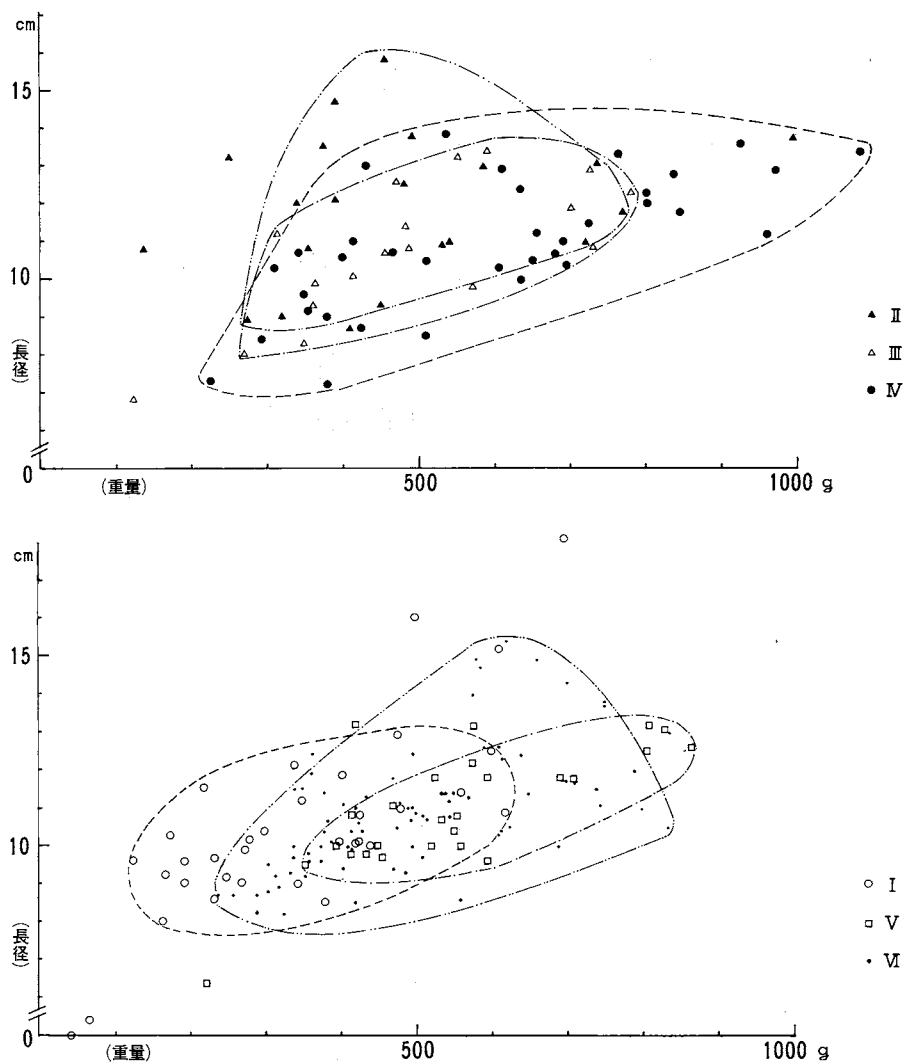
(viii) 凹石 (図274-6~12・275~279, 図版122・123)

いわゆる凹石は、凹自身の形状、礫の敲打、磨滅のありかたが多様である。ここでは、わずかでも凹を持つものをすべて扱うことにする。

凹石としたもので凹以外に機能を示していると考えられる要素には、磨滅と敲打痕がある。この二要素



挿図48 十二ノ后遺跡出土凹石の形態別分布



挿図49 十二ノ后遺跡出土凹石の形態別重量分布

のありかたで以下のように形態分類できる。凹自体の数、形状などは各類型ごとにみてゆきたい。

- I、自然礫に凹のみ残されるもの II、礫両端に敲打痕を残すもの
- III、礫側面の一部が磨滅あるいは敲打されるもの IV、礫側面全周が磨滅あるいは敲打されるもの
- V、礫全面が磨滅あるいは敲打されるが、定型化しないもの VI、同上、定型化したもの
- VII、他器種からの転用であることが明らかなもの、特殊なもの

以上、7類型に分類すると、I-46、II-21、III-22、IV-45、V-41、VI-109、VII-18の合計302個となる。これらをまとめれば、挿図48・49のようになる。図から読み取りうることは次のようなことである。

① I類は個体差が大きく、プロポーションにも規格性がないが、小形品が多く、特に200g以下のものは他類型にはほとんどない。自然礫のため変異が大きいのであろう。

② II類は細長いものほど薄くなり、短径と長径の比と厚さの間に相関関係が認められる。重量は250gから750g程度の範囲に納まるが、長径は比較的ばらつきがある。敲打器としての機能が反映するものであ

うか。

③Ⅲ類はプロポーションにかかわらず、厚さがほぼ一定である。重量はⅡ類とほぼ等しいが、長径はより差が小さい。厚さが一定であることにより、長径と重量に相関関係を示している。

④Ⅳ類は短径と長径の比と厚さとの関係がⅡ類と逆のありかたを示すようにみえる。重量には最もばらつきがある。

⑤Ⅴ類は厚さがほぼ一定することにより、プロポーションにかかわらず長径が増すにしたがって重量も増す。

⑥Ⅵ類は厚さ4cm、長径10cm、短径7cm、重量450g程度を標準とする。重量でⅠ類とⅤ類の中間型を示す。

以上の形態と凹との関連は記述が煩雑になるのでⅥ類に限り検討を行う。凹の所在面と数との関係から述べる。

A) 片面のみにあるもの (11個)

①凹2 (6個) —— すべて長円形の凹を持ち、最大長径25mm、深さ4mm程度である。

②小敲打痕が集合するもの (5個)

B) 両面にあるもの (41個)

①各面凹1 (4個) —— 凹は円形にちかく径13~23mmでほぼ中央にある。

②片面1片面2 (6個) —— 1凹の方は浅い円形

③各面凹2 (11個) —— ほぼ円形の凹が中軸線上にならぶ。

④各面3個以上 (10個) —— 凹がならんで溝状になるものもある。

C) 3面以上にあるもの (50個)

①2-2-2-2 (両側面にも2) (6個) —— 凹は長円形か円形。すべて図278-2と相似した形態を示す。

②1-1-1 (側面も凹がいくつかある) (7個) —— 中心に円形か長円形の凹。図313-8のような円形型が多い。

③両面に小凹多数 (側面には凹1が多い) (7個)

④2-1-1 (両側面に種々の凹があるもの) (16個)

⑤凹が連続して溝状になるもの (9個) —— 凹は深く6mm前後。側面には1~2の凹を持つ。扁平なものが多い。

⑥①に加えさらに両端に1凹あるものが1個ある (2-2-2-2-1-1)。

不明4個

D) 不明1個

以上の凹の形態で特徴的なことは長円形のもものが、凹石長軸線に対して左下りに傾くことである。円形にちかい凹でも左下方向に張り出す傾向がある。明らかに右下りになるものは1個だけである。凹の形成はすべてが敲打によって行なわれており、明らかに磨滅によって成されたと考えられるものはなかった。凹の平面形、断面形、その深さなどは変化が漸移的であり、一連の変化過程にあるものとするのが自然である。ただ、凹石の形態と凹のありかたに密接な関連が認められる場合は、凹の形状じたいが合目的なものである可能性がある。たとえば、石鱗形 (図278-2)、円盤形 (同8)、扁平形 (同1) などである。

I~Ⅶ類までのうち、Ⅶ類以外は大略、上記Ⅵ類と同様の凹のありかたを示す。Ⅶ類のうち図279-3

～10は磨滅させて大形の凹部を形成している。石材は、ほとんどすべてが輝石安山岩であり、花崗岩、閃緑岩などの火成岩、粘板岩などの堆積岩がわずかにある。(表中で明示しないものは安山岩である)

折損するものはきわめて少なく、ほとんどが原形を保っている。折損は凹石に残される凹以外の敲打痕、磨滅痕に関連するものと思われ、小さく何回にもわたるものでなく、1回で半折するような割れかたである。凹の成形過程に直接起因すると考えられる折損例はなかった。

(ix) 石皿 (図280)

形態：25点あるがほぼ完存するものは2点だけである。縁部を作り出すもの5・6・8・25、使用部の磨滅によって縁部が形成されたような形状を示すもの2～4・7・11～13・15・17～24、ほとんど縁部をなさないもの1・9・10・14・16となる。14が両面とも砥石状の平滑面を持つほかは、すべて多孔質の粗面である。縁部の成形以外に彫刻などが施されるものはない。

折損：ほぼ完形2点(1・16)、長軸方向に半折2点(2・17)、短軸方向に半折9点(3・4・7・8・18～21・24)、両方向に折損するもの5点(5・6・9・11・22)、小部分を欠損するもの1点(10)、両端を欠損するもの1点(12)、三方向以上に折損するもの5点(13～15・23・25)である。17は別遺構より出土したものが接合してほぼ半分となった。他に同一個体と考えられるものはない。

(x) 石棒 (図273)

明らかに石棒と考えられるものは、7・8・13の三点ある。13は下端が折れた後、さらに磨かれている。図版121-0は石棒であろうが、下端が丸く磨滅しており、中世石造物の可能性も否定できない。9は石剣、10は石棒であろうが折れ方が特異である。11・12は石棒の様相があるが別のものかもしれない。

(xi) 砥石 (図273)

1～4はほぼ全面を磨滅させる。5は両面の磨滅が著しく石皿状になる。6は磨製石斧の転用であり、左右両面は非常に平滑で溝状に磨滅する。

(xii) その他の石器 (図273・279)

いわゆる蜂巣石が遺構外より3点出土している。図279-1に示したものの凹部は径5～10cmのほぼ円形で、深さは径に比例して2～4.5cm程度であり、最大のものから最小のものまで漸移的に変化する。多孔質の安山岩を用い、凹面もまた粗面である。他の2例はより大形の安山岩塊を用い、凹部の形状は同様であるがやや小さく浅いものが多い。

同12に示したものは、両面とも砥石状の平滑面をなし、線刻的な条線を残すものである。あるいは金属器によるものかもしれない。

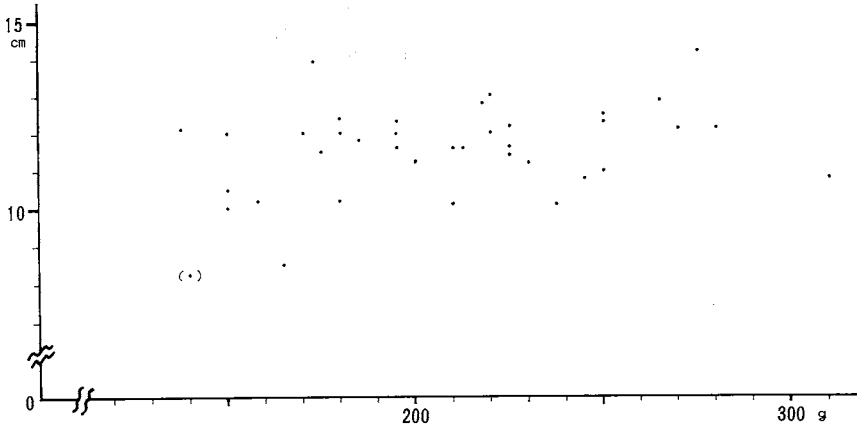
図273-22は滑石製品の未成品と考えられ、同23は周囲を磨滅させる小礫である。(土屋 積)

参考文献

- 小川良祐 「前島・島之上・出口遺跡出土の石器について」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』埼玉県教育委員会 1977
- 平出一治 「縄文時代の石皿について」『信濃』30-4 1978
- 雪田 孝 「石器」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』1969
- 小日向正 「凹石について」『吉野屋遺跡』新潟県立三条商業高校考古班編 1974
- 小林公明 「石製農耕具」『曾利』長野県富士見町教育委員会 1978
- 小田静夫 「縄文中期の打製石斧」『どるめん』10 1976

〈付〉 55号住居址床面出土の円礫について

55号住居址床面より同形態の円礫が40個出土している。ほとんどが長さ12cm前後、重量150～300g程度の棒状礫であり、両端にわずかな敲打痕状の磨滅を持つ。中央部に打撃による簡単な挾を持つものもある。これらは住居址南コーナーに近い床面上に長円形の集石状に見出された。重量と長さとの関係を示せば挿図50のようになる。



挿図50 十二ノ后遺跡55号住居址出土円礫の長さ重量相関図

中央部挾は縄状のものを巻きつけるためのものであることは、挾部分を全周する礫表面の変色が一部に観察されることから予想しうる。両端の磨滅は敲打というより接触程度の軽いものである。

民俗例として、近年まで用いられた俵編用の径糸のおもりがあるが、形態、磨滅などは、これらの礫と全く等しい。実見したものの重さと長さを記せば以下のようなものがある。650g—13.2cm、760—15.7、710—20.3、500—14.2、440—14.5。長さで2～3cm、重さで2～3倍とかなり大形である。以上のことから、むしろ状編物のためのおもりと考えるのは妥当であろうが、長さが約4寸にそろふことや、現用品より軽いことは編物の形状についてさらに考察の余地あることを示している。 (土屋 積)

ウ 奈良・平安時代の土器について

ア) 東日本の奈良・平安時代土器の編年研究

東日本の奈良・平安時代の土器の編年研究は、各遺跡毎、地域毎になされつつある。前者では、東京都中田⁽¹⁾、神奈川県鶴川⁽²⁾、鳶尾⁽³⁾の諸遺跡で、また、千葉県山田水呑遺跡等⁽⁴⁾があり、後者では相模地方で河野喜映氏⁽⁵⁾、武蔵地方で高橋一夫氏⁽⁶⁾、甲斐下東地域で菊島(坂本)美夫氏⁽⁷⁾、甲斐北巨摩地方で末木健氏⁽⁸⁾、北陸地方では吉岡康暢⁽⁹⁾・船崎久雄⁽¹⁰⁾・橋本正氏⁽¹¹⁾、東北地方では多賀城地域で岡田茂弘・桑原滋郎両氏⁽¹²⁾らの研究業績がある。

これら最近の編年研究を通して、一般に歴史時代の土器と総称されている、奈良・平安時代の土器にもかなり小地域毎に特徴をもつ土器生産がおこなわれ、地域毎に土器様式の発展消長がみられることが明らかにされつつあり、従って、地域毎の編年大系を、まず、樹立しようとする、最近の研究動向は、それなりに意義深いものである。小出義治氏らが中心におこなっている「東日本の歴史時代土器の編年研究」はその意味で重要である。

しかし、岡田氏らの編年研究を除いては、その絶対年代を求める根拠が極めて乏しい。従来、檜崎彰一氏らによって確立されつつある灰釉陶器の年代から⁽¹³⁾、土器の年代を求めようとする傾向にあったが、最近、後述のように、その編年大系、特にその年代観について、疑問が提出され、その見直しがせまられている⁽¹⁴⁾中で、積極的に灰釉陶器から土器の年代を求めることはせず、考古学本来の、一地域の土器そのものの、様式的検討をすすめる中で、土器編年を確立しようとしている。例えば、絶対年代の一つの根拠を、武蔵園分寺瓦を併用して焼成したと考えられる武蔵新久宮窯址出土土器群との比較検討の中で求めようとしている動きはその現われである。⁽¹⁵⁾

天竜川流域の奈良・平安時代の編年研究は宮沢恒之⁽¹⁶⁾・伴信夫⁽¹⁷⁾・岡田正彦⁽¹⁸⁾ら諸氏によって試みられている。特に、岡田氏の平安時代にはほぼ該当すると思われる土器の編年大系はもっともまとまりをみせ、示唆に富むものである。岡田氏は土器の様式変化と竈穴住居址内のカマドの位置変遷とによって、編年案を提案した。しかし、土器の様式変化の分析が不十分である上に、カマドの変遷の必然性が説かれていないこともあって、問題点が多い。年代の与え方も、灰釉陶器の編年観をそのままあてはめたきらいがあるように思われる。

しかし、天竜川流域の奈良・平安時代の土器を検討する上で、灰釉陶器の存在を無視することは不可能である。灰釉陶器は土器組成の重要な分野を占めるとともに、灰釉陶器を模した須恵器や土師器が作られていることに示されるように、当地方の土器生産そのものに強い影響を与えているからにはほかならない。この傾向は天竜川流域に灰釉陶器が爆発的に、東海地方から搬入されてくる、折戸53号窯期には特に著しい。従って、灰釉陶器の絶対年代が求められるとすれば、灰釉陶器が若干の伝世の可能性のある初期を除いた、少くとも、多量に、しかも一括搬入されてきたと考えられる雑器化した灰釉陶器の存在する段階で有効な手段となろう。灰釉陶器そのものが、土器組成の重要な位置を占め、単に搬入品としての役割以上のものをもっているからである。

檜崎彰一氏による灰釉陶器の編年大系は、高島忠平氏を始め、かなりの研究者から疑問が提示されつつある。つまり、檜崎氏編年のうち、灰釉陶器初源期の鳴海32号窯期と最終期の折戸第53号窯期と、それに続く白瓷系陶器の年代は、前者が平城宮6ABO出土の資料から、後者は何例かの経塚出土の資料によって、その年代がおさえられているが、その中間部分については、平城京東三坊大路側溝(SD650)出土資料から⁽¹⁹⁾

得られた年代とは100年から150年の較差が生じるというのである。この指摘は檜崎氏が黒笹90号窯期の年代を、同窯址灰原の中から出土した皇宋通宝一枚で主として求めたのに対して、平城京例では多量の銭貨と木簡による年代決定だけに説得力をもつ。しかし、最近、檜崎氏は、東三坊大路側溝での灰釉陶器の出土状態について細部検討を要望しており、今後に多くの問題が残されている。従って、現状では檜崎氏の灰釉陶器の編年年代を無条件で活用することはさしひかえねばならないであろう。ただし、折戸53号窯期の時期は白瓷系陶器との関係で、その上限はともかくも、ほぼその年代の一点は、氏の指摘のようにおさえられるであろう。

イ) 編年作業上での基礎的視点

十二ノ后遺跡出土の奈良・平安時代の土器類は、主として堅穴住居址から出土したものが大半を占める。しかし、各遺構の項で述べられた如くに、本遺跡は縄文時代から中世に渡り、各種遺構が重複して構築されており、住居址内出土の総ての土器類を編年資料として用いることは必ずしも妥当でない。混入した状態で検出された資料も当然予想される。さらに、発掘調査も満足できる状態の中で行えなかった面もあるやに聞く。従って、編年を組み立てる上には、多くの制約があるのも事実である。しかし、同一遺跡で、かなり継続性を持った編年資料が多量に得られているのも事実であり、未だ、白紙に近い状態にあるといえる諏訪盆地地域の、奈良・平安時代の土器編年を試み、今後の検討課題の一つとしたい。

この場合に、住居址内から出土した土器類に一括性が認められるか否かは、明らかに混入品と認められるものを除いては、諏訪盆地、あるいは天竜川上流域から出土した土器類に直接あたり、その妥当性を検討するようにつとめたが、時間的制約もあり、図面上だけで終わってしまったものもある²¹⁾。

本稿での編年試案は、以上のような問題点もあることを踏まえた上で、土器編年の基準を求める基礎的な立場、つまり第一点は、諏訪盆地で作られた土器そのもののうち、普遍的な資料を様式学的検討で、相対的な編年を確立し、第二点は、絶対年代の求められ得る資料を、第一点で求められた編年の中に検討を加えて位置づけ、編年に絶対年代を附加してゆくこととした。しかし、第二点については、諏訪盆地の資料だけでは現在では全く不可能であり、他地域の資料と研究成果をとり入れてゆくこととした。

十二ノ后遺跡出土の土器は須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器がある。灰釉陶器の総てと、須恵器の一部は東海地方からの搬入品である。須恵器の大部分は、胎土内に長石粒を多量に含む、焼成の悪いものが大半で、これらは天竜川流域で焼成されたものと考えられている。土師器のうち坏Eは、器形、胎土、色調、成形技法など、諏訪盆地の他の供膳形態の土器とは大きく異なり、甲州から搬入されたものであるという考え方が強い²²⁾。事実坏Eの消長の中で、その後半期では、より甲府盆地で無理なく、展開過程が理解でき、甲府盆地の供膳形態の土器の中で主流的立場をもち、この点では諏訪盆地と異なる。しかし、両地域ではともに、坏Eの初源形態は現在の所、明らかにされておらず、単に坏Eが、甲府盆地からの搬入品と決めてしまうには、いまだ時期尚早であろう。諏訪盆地における供膳形態の土器群の中で坏Eの占める位置は、甲府盆地ほどでないにしても、重要な一部を荷っている(挿図51)。従って、坏Eもまた、諏訪盆地の土器編年作業を確立する上で、一つの資料として用いて何らさしつかえないものであろう。

十二ノ后遺跡での編年は奈良・平安時代に限定し、十二ノ后遺跡Ⅰ期からⅩ期(正確には十二ノ后遺跡奈良・平安時代Ⅰ期～Ⅹ期であるが省略してある)まで後述のように細分を試みた。

ウ) 十二ノ后遺跡の奈良・平安時代の土器編年

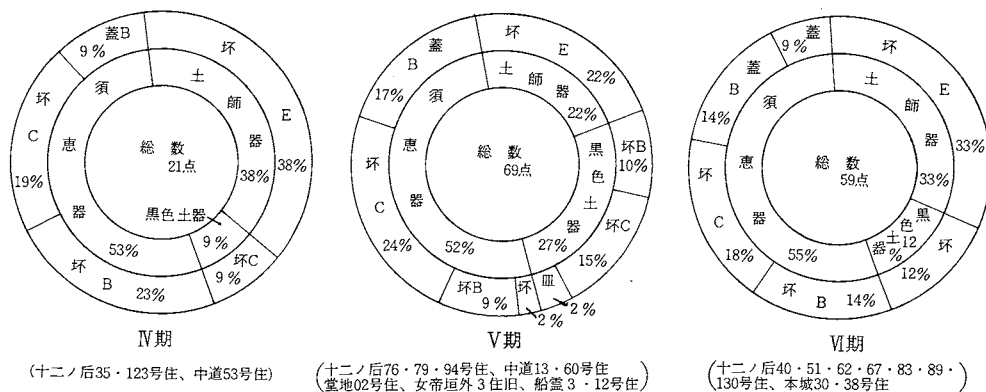
十二ノ后遺跡Ⅰ期 31・32・44・114・133号住および30・83号住上層出土土器を標式とする。土師器環A、高環、甕A・C、小形甕A、黒色土器環A、須恵器環AⅡ・B、蓋AⅢ・BⅠがある。Ⅰ期は全国的傾向と同様に、古墳時代様式の土器類と奈良時代様式の土器類との交替期にあたる。すなわち、土師器環Aのうち、古墳時代様式環Aの系譜につらなるものと、須恵器蓋Aはこの段階で消滅し、あらたに、須恵器環A・Bと蓋Bとが登場する。総じて、供膳形態では土師器が極端に減少し、その分だけ須恵器類が多くなる。供膳形態における須恵器の絶対的な優位性はⅢ期まで続く。土師器甕もまた、古墳時代様式の系譜に連らなる甕Aが主体であるが、新しく甕Cがあらわれる。なお、須恵器蓋AはBよりも時間的に先行する。

十二ノ后遺跡Ⅱ期 142号住出土土器を標式とする。土師器環A、甕A、黒色土器環A、高環、須恵器環AⅡ・AⅢ、蓋BⅡ、短頸壺、広口鉢などが知られる。土師器環Aは前代にみられた放射状暗文はみられず、内面を横方向に磨くだけである。外面は胴部を僅かに磨く程度のもので、口縁部はヨコナデ、胴部から底部は篋削りというものが多くいようであるが資料不足である。これはこの段階で消滅する。黒色土器環Aは土師器環Aと器形は大差ないが、暗文状の篋磨きはみられない。

十二ノ后遺跡Ⅲ期 4・91・117・126号住出土土器を標式とする。土師器甕A・B・C・D、小形甕A、壺A、短頸壺、黒色土器AⅡ、須恵器環AⅠ・AⅡ・AⅢ、環B、蓋BⅡ等が知られる。丸底の黒色土器環AⅡは本期で終り、平底の環AⅡが登場する。丸底の黒色土器環AⅡは、Ⅱ期では口縁部直下から削りがおこなわれていたが、本期では、底部のみに限定される。土師器甕類はⅡ期とほぼ同様であるが甕Dが多くなる傾向を示す。須恵器環AはⅠ・Ⅱ・Ⅲがあり、器形上でも変化に富む。環Bと蓋は資料不足であるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの存在が予想される。蓋BⅡは、Ⅱ期以上に口縁部の立ち上りが顕著となる。供膳形態の主流は須恵器である。

十二ノ后遺跡Ⅳ期 30・35・57・123号住出土土器を標式とする。ただし、30号住の混入資料はとり除いてある。土師器は環EⅠ・EⅡ、甕A・B・C・D・Fがあり、須恵器は環AⅡ・AⅢ・BⅠ・BⅡ・BⅢ・CⅡ、蓋BⅠ・BⅡ、短頸壺、長頸壺、甕、灰釉陶器蓋C、多嘴壺と思われるもの等がある。以上のように、本期に土師器環E、甕F、須恵器環C、灰釉陶器が加わる。

土師器環EはA期のもので、ⅠとⅡがある。外傾指数は総て50以下の箱形の器形をもち、底部整形は、a₂b₃b₄である。土師器甕Fは弧状にゆるく、あるいは「く」の字形に外反する口縁部をもち、胴部内面は篋で丁寧にナデて整形してある。須恵器環は篋切りのAと糸切りのCとが共存するが、中道遺跡ではAの



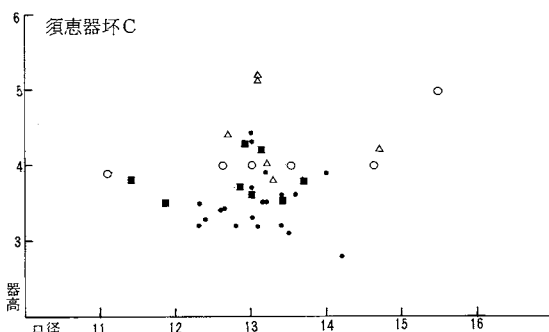
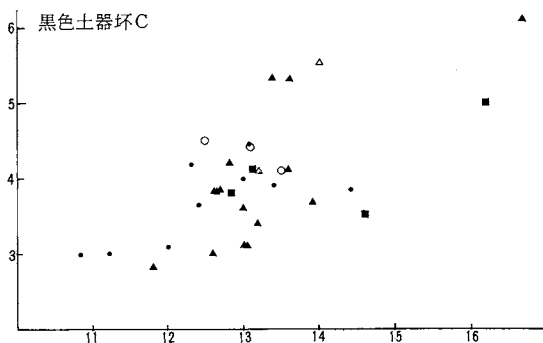
挿図51 十二ノ后遺跡および周辺遺跡出土の供膳形態の器種別占有率

方が多い。須恵器環Bは高台部がⅢ期同様に外傾するものとともに、内傾するものもある。蓋Bは鈕が擬宝珠形の最後の姿をとどめるもの以外に、頂部が平坦となるものもあらわれる。口縁部の立ち上りも、Ⅲ期以上に背高となる一方、屈折部のすどさを欠き、丸みを帯びる。灰釉陶器は仏器の一部と思われるもので、須恵器蓋Bの一部(図184-18)とともに、折戸10号窯期に比定されている。また、35号住出土の長頸壺底部片(図185-23)、57号住出土の坏(同28)は鳴海32号窯期に比定されている。

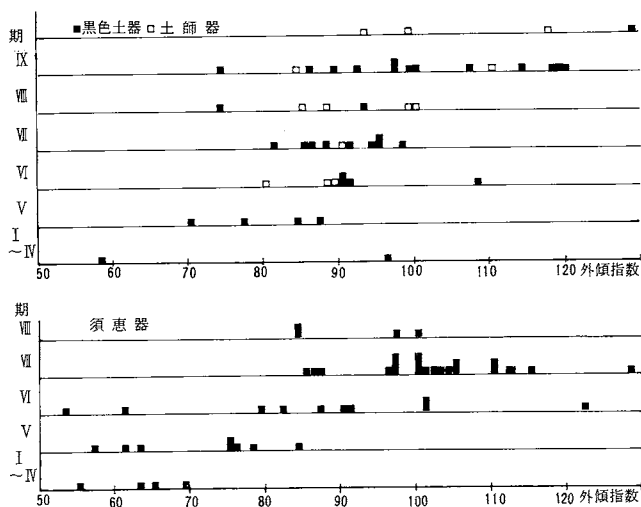
Ⅳ期はかように、初期の特殊な灰釉陶器が搬入される一方、土師器環E、甕Fなど、甲州、武蔵とも関係深い土器類が共存し、興味ある組みあわせとなっている。また、供膳形態の土器類には糸切り技法が確実に採用されている。前代同様に供膳形態の土器は須恵器類が中心であるが(73%)、土師器類が加わる(22%)など、本期には天竜川流域の土器の変遷の中で大きな変革がみられるのである。

十二ノ后遺跡V期 55・76・78・79・105号住出土土器を標式とした。土師器環EⅠ・EⅡ、甕A・B・C・D・F、小形甕A、黒色土器CⅡ、碗AⅠ、皿B、須恵器環AⅡ・CⅡ、坏BⅡ、蓋BⅠ・BⅡがある。Ⅳ期の器種にあらたに、黒色土器環CⅡa₂、皿Ba₂が加わった。黒色土器CⅡa₂はⅣ期にも存在が予想されるが、はっきりしない。いずれにしても、本期から、黒色土器が供膳形態の中で大きな役割をはたすことになる(18%)。黒色土器皿Bは施釉陶器の影響を端的に受けたものである。

土師器環EはB期のものが主体で、外傾指数は主体が50代であるが、60代前半のものもある。一般に、供膳形態の土器は、坏Eと同様に、箱形の器形から逆梯形状の器形へと移る中間的なものが多い。外傾指数は、黒色土器環Cは70~80、須恵器環Cは55~85を示す。后者は60と80の2点に集中している。これはあらたに登場した、黒色土器環Cは、ほぼ一点に集中しているのに対して、須恵器環Cの



挿図52 黒色土器・須恵器環C時期別法量分布 (単位cm)
(△ I~Ⅳ期、○ V期、■ VI期、● VII期、▲ VIII~IX期)



挿図53 環の外傾指数の時期別分布

バラツキは、新しい要素と古い要素が器形の上で、混在していることを示していると思われる。同時に、黒色土器の外傾指数70～80は、須恵器環Cの新しい要素としての器形を受けて成立したことを示しているものと思われる。須恵器環Cの底部調整の大部はa₂であるがa₁も若干ある。須恵器環Bの好資料は恵まれなかったが、セットとなる蓋Bから、その存在が予想される。蓋Bは、口縁端部がほぼ直に立ち上るか、僅かに外反するものがある。前者の鈕は背の高い典型的な擬宝珠形をしているが、後者では、頂部を凹ませたもので、前者の例は少ない。

十二ノ后遺跡Ⅵ期 40・51・60・62・67・83・87・89・97・101・103・130号住出土土器を標式とする。土師器環CⅡ・EⅡ・EⅢ、甕A・B・C・D・E・F、小形甕A・BI・BⅡ、黒色土器環BⅡ・CⅡ、埴A、鉢A、皿B、須恵器環BⅡ・CⅡ、蓋BⅡ・BⅢ・D、灰釉陶器皿等が知られる。供膳形態の土器群では須恵器が主流である(61%)が、黒色土器の占める割合が、さらに高くなり(8%)、あらたに環B、鉢、埴が加わる。黒色土器環Cは外傾指数からみた場合にⅤ期と大差ない。一般に、全時代を通じて、その変化は漸進的である。黒色土器環Cの各期の外傾指数はⅥ期では80～90、Ⅶ期では80～100、Ⅷ期では75～95、Ⅸ期では75～120、Ⅹ期では130となる。土師器環EはC期のもので、外傾指数も総て65以上で、逆梯形状となる。須恵器環Cは外傾指数が80～90に集中し、Ⅴ期にみられた、箱形の器形はみられない。環BはBⅡ・BⅢ以外に背高の環BⅣがあらわれる。蓋Bは器高が低くなり、口縁部の屈折部も鋭さを欠く。甕の主体はCから生じたEとなる。口縁部から頸部内面にカキ目を施すことにより、Cにみられたすどい稜を失なったもので、Ⅶ・Ⅷ期を通して、煮沸形態の主流となる。甕Fの頸部は武蔵地方同様に「コ」の字形に近い器形となる。

十二ノ后遺跡Ⅶ期 2・5・45・53・63・115号住出土土器を標式とする。土師器環CⅡ、甕A～E、小形甕BI・BⅡ・BⅢ、黒色土器環BⅡ・CⅡ、鉢A、埴AⅡ・AⅢ、須恵器環BI・BⅡ・BⅢ・CⅡ、蓋BⅡ、四耳壺・甕等が知られる。供膳形態では土師器環Eは全く姿を消す。須恵器は主体を占めている(59%)ものの環B、蓋Bは量的に大きく減少し、須恵器環Cが中心となる。しかし、それも規格化された典型的な逆梯形状となり、その成形も乱造されたものが多い。土師器環CはⅥ期にあらわれたものの、本期でも主流とならず、内面の磨き目が省略された環Dを出現させたが、それらの占める位置は低く(5%)、本期の供膳形態の主流は須恵器環C(43%)と内面に暗文をもつ黒色土器類(36%)である。煮沸形態では、甕Eと小形甕Bが主流をなす。

十二ノ后遺跡Ⅷ期 36・43・71・120・124号住出土土器を標式とする。土師器環B・CⅡ・DⅡ、甕D・E・F、小形甕A・BⅡ・BⅢ、黒色土器環BⅡ・CⅡ、埴AⅡ、皿B、須恵器環BⅡ・CⅡ、灰釉陶器埴、皿、長頸壺等がある。供膳形態の土器のうち、須恵器類は僅かに存在するにとどまり(21%)、黒色土器もまた、数量は多いもの(47%)の、前代に出現した器種が固定化し、整形も粗雑化する。あらたに、口クロで水引きしたままの土師器環Dがかなりの

表15 十二ノ后遺跡出土灰釉陶器の産地別個体数

Ⅸ期 (0-53 築期古)						
個体 産地	埴A	皿A	皿B	瓶	計	(産地別個体数 全数量×100)
東濃	13	1	1	0	15	(46%)
中津川	0	0	3	0	3	(10%)
篠岡	0	1	0	0	1	(3%)
猿投	2	4	0	2	8	(26%)
不明	5	0	0	0	5	(15%)
計	20	6	4	2	32	
Ⅹ期 (0-53 築期新)						
個体 産地	埴A	皿A	皿B	計	(産地別個体数 全数量×100)	
東濃	13	1	5	19	(86%)	
中津川	2	0	0	2	(10%)	
篠岡	0	0	1	1	(4%)	
計	15	1	6	22		

位置を占める(14%)。灰釉陶器もかなり一般化してくる(18%)。煮沸形態では甕Fの頸部は、典型的な「コ」の字形となる。甕Eは口縁部から胴部上半にクロコナデされたものがみられるが、その数量は非常に少ない。灰釉陶器は黒笹90号窯期のものが9例みられる。猿投・篠岡など東濃産のものである。

十二ノ后遺跡Ⅸ期 3・41・129号住出土土器を標式とする。土師器環BⅡ・DⅡ・DⅢ、甕B・E、黒色土器環BⅡ・CⅡ・CⅢ、灰釉陶器碗、皿、長頸壺等が知られる。供膳形態では須恵器類は完全に姿を消し、主体は土師器(12%)、黒色土器(44%)、灰釉陶器(44%)となる。黒色土器は暗文が省略されたものがみられるなど、一層粗雑化がみられる。灰釉陶器は折戸53号窯(古)期(黒笹87号窯期)のもので、伊那谷へは、爆発的に搬入されている(表15)³¹⁾。煮沸形態では土師器甕は量的に少なくなる。この傾向は諏訪盆地では一般的にいえそうである。甕にかわって、羽釜が登場するが、本遺跡では出土例がない。³²⁾

十二ノ后遺跡Ⅹ期 18・29・33・34・121号住出土土器を標式とした。土師器環B・DⅡ・DⅢ、皿A・BⅡ、甕F、黒色土器環CⅡ・CⅢ、灰釉陶器碗、皿、長頸壺等が知られる。供膳形態では、土師器(34%)と灰釉陶器(53%)が主流を占め、黒色土器の占める地位は軽くなった(13%)。灰釉陶器は折戸53号窯(新)のもので、ほとんどが、底部に糸切痕を残し、一部には山茶碗と思われるものもみられる。灰釉陶器の多量の搬入は土師器の生産にも大きな影響を与え、土師器皿Bの出現は、その端的なあらわれである。皿Aは中世の「カワラケ」の祖源であろう。

以上、10期に細分して検討したが、まだ問題点もあり、今後更に資料の集積を行い検討して行きたい。

エ) 十二ノ后遺跡の年代比定

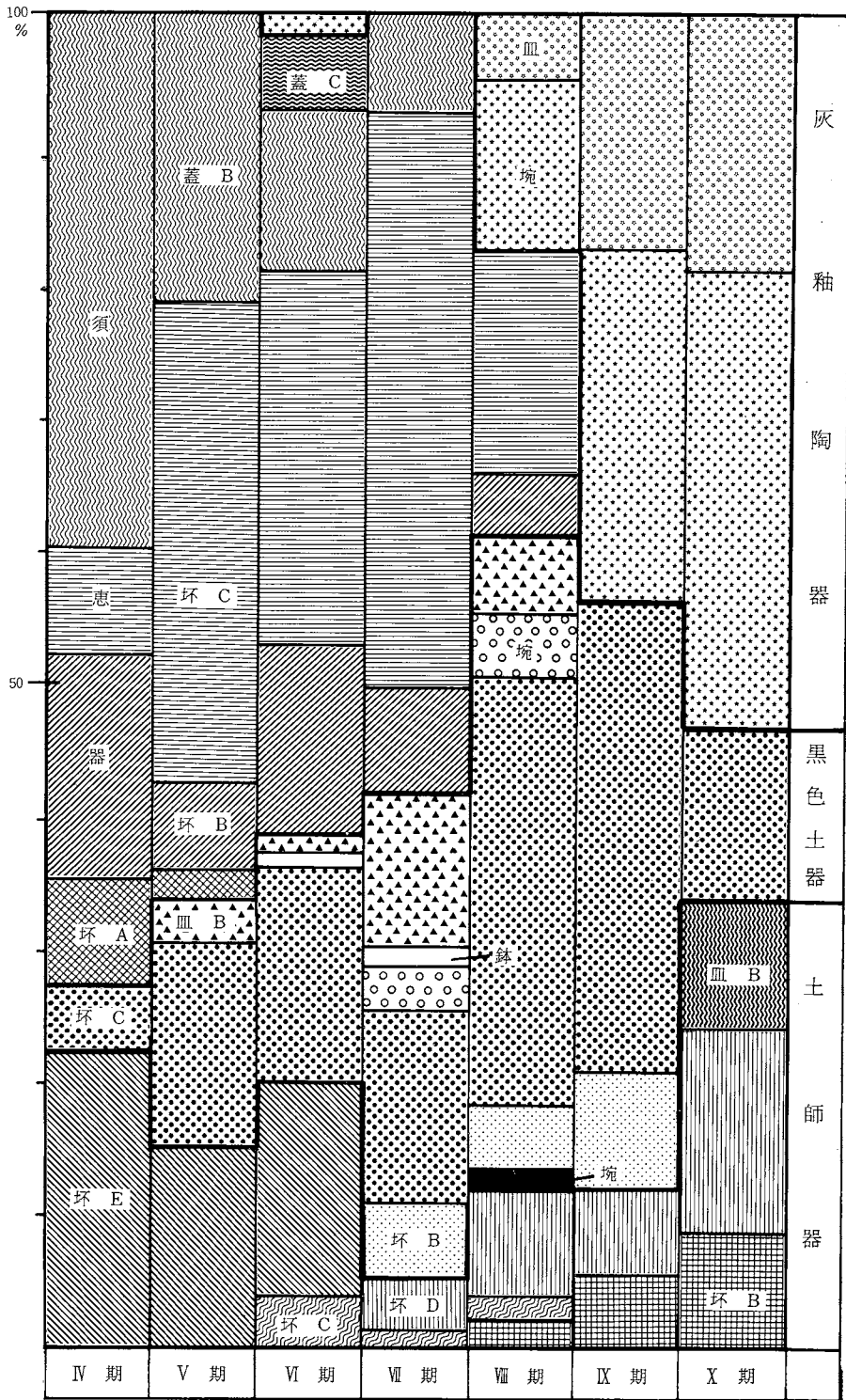
すでに様式的変遷——編年試案についてはその根拠を大略述べた。しかし、その年代比定は長野県下出土の資料では大きな制約がある。特に灰釉陶器の編年観が、その中間部分については疑問視されている以上、それを無条件で用いることはさしひかえねばならないであろう。従って、本編年の年代比定は様式変遷を主とした、あくまでも相対年代にならざるを得ない。

われわれは、その相対年代の根拠を、長野県下で古銭と伴出した土器群、初期と終末の灰釉陶器、ほぼ年代幅がおさえられている平城宮・藤原宮等の官衙址出土の土器群等を比較検討の上で求めた。もちろん、土器といえども、それは歴史的遺物であり、歴史的動向と深いかわりがある。³³⁾従って、それらを根拠としていることはいうまでもない。

十二ノ后遺跡編年で、年代幅がある程度おさえられるのは、Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅹの各期である。初期の段階の年代幅が明確化しつつあるのは、飛鳥・藤原宮、平城宮出土資料が長年の研究成果の結果、かなり細密な、そして信用できるものとして発表されつつあるからであり、初期の灰釉陶器研究も、その成果と深いかわりがあるからにはかならない。十二ノ后遺跡Ⅹ期にあたる最終末の灰釉陶器の年代については、檜崎氏の研究成果を否定するだけの説得力のある見解は見あらず、まず、氏の研究成果を受け入れることは何らさしつかえがない所であり、また、長野県下出土の灰釉陶器に併出する古銭の示す年代もその考え方を裏付けている。

Ⅰ期 須恵器蓋A・Bが指標となる。Aは飛鳥Ⅱ期、Bは飛鳥Ⅴ期にほぼ該当し、Ⅰ期の年代は7世紀前半も終りから末頃までとなる。³⁴⁾³⁵⁾

Ⅱ期 須恵器の供膳形態が少ないために十分な比較はできないが、土師器環と須恵器蓋Bの類似性から飯田市恒川遺跡44号住居址出土土器に比定できそうである。44号住居址では和銅銀銭(初鑄710、改鑄721年)と併出しており、銀銭は流布期間が限定されており、また、出土須恵器が平城宮S K³⁶⁾



挿図54 十二ノ后遺跡出土奈良・平安時代土器時期別器種構成

820に酷似している所からⅡ期は平城宮Ⅲ期の示す年代³⁷⁾

—— 8世紀中葉頃を考慮することができる。

Ⅳ期 鳴海32号窯期、折戸10号窯期に属すると思われる須恵器・灰釉陶器が併出している。従って、Ⅳ期は奈良時代末から9世紀代前半の年代が与えられよう。³⁹⁾

Ⅴ期 須恵器坏Bが欠如しているので、比較がやや困難であるが、飯田市恒川遺跡2号住居址出土土器群と類似している。この住居址では富寿神宝(818年铸造)をともない、灰釉陶器浄瓶、稜皿、縁釉碗(花文陶)等実年代に近い年代を示す良好な資料が検出されている。比較しうる土器は黒色土器皿B、須恵器坏Cである。恒川遺跡2号住居址は9世紀前半頃の年代が与えられているが、稜皿等から後葉頃まで下る可能性もあろう。さすればⅤ期は9世紀代中葉を前後する時期と考えられる。

Ⅹ期 折戸53号窯期(新)が併出する時期である。この時期の灰釉陶器自体すでにその年代幅は把握されており、年代を知る根拠となりうるが、飯田市清水遺跡41号住居址では皇宋通宝(1039年铸造)、伊那市月見松遺跡39号住居址では熙寧元宝(1068年铸造)、元符通宝(1098~1100年铸造)、⁴²⁾長野市浅川西条遺跡17号住居址では紹聖元宝(1094~1097年铸造)⁴³⁾が土器類と併出している。灰釉陶器以外では、羽釜、土師器坏D(カワラケに近い)、黒色土器坏Cがあり、Ⅹ期の土器群と様式的に共通する。従って、本期にはほぼ12世紀代の年代が与えられよう。

以上の操作と、十二ノ后遺跡出土の土器様式の変化を組みあわせると、ほぼ表16のような編年大綱が予想される。(編年表は別図参照)。(笹沢 浩)

表16 十二ノ后遺跡の年代比定

西 暦	十二ノ后遺跡	年代推定の根拠となる資料(古銭)
650	I	
700	II	恒川遺跡44住和銅銀銭
750	III	
800	IV	
850	V	恒川遺跡2住富寿神宝
900	VI	
950	VII	
1000	VIII	
1050	IX	
1100	X	清水遺跡41住皇宋通宝 浅川西条遺跡17住紹聖元宝 月見松遺跡39住熙寧元宝・元符通宝

- 註1 服部敬史・岡田淳子「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡資料編Ⅲ』1968
- 2 小出義治「鶴川遺跡K・P地点発掘調査報告」『町田市史史料集第一集』1970
- 3 神奈川県教育委員会『鳶尾遺跡』1975
- 4 松村恵司「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』1977
- 5 河野喜映「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論—歴史時代を中心として—」『神奈川考古』1 1976
- 6 高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』13・14 1975
- 7 坂本美夫「山梨県に於ける晩期土師式土器編年の再検討—特に奈良時代を中心として—」『甲斐考古』16-1 1979、同「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』12-2 1975
- 8 末木健「山梨の土師式土器」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡須玉町地内—』1976
- 9 吉岡康暢『加賀三浦遺跡の研究』1967
- 10 舟崎久雄・橋本正「土器の編年」『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』(富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ) 1974
- 11 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『研究紀要』1、宮城県多賀城調査研究所 1974

- 12 橋崎彰一氏の灰釉陶器の編年観を示す論文は1958年の「猿投山須恵器の編年」『世界陶磁器全集』第1巻に始まり、いくつかの訂正を経て、ほぼ、1971年の『日本陶器全集』6巻の「白瓷」で完結している。
- 13 A. 高島忠平「平城宮東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』57-1 1971
B. 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討〔1〕—初期の鉛釉陶・灰釉陶—」『考古学雑誌』65-2 1979
- 14 坂詰秀一「新久窯の性格」『武蔵新久窯跡』1971
福田健二「南関東における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』64-3 1978
- 15 宮沢恒之「信濃飯田地方の土師器の様相」『信濃』20-11 1968
- 16 伴信夫『長野県中央道報告—上伊那郡箕輪町—昭和48年度』1973中の、中道遺跡
- 17 岡田正彦「平安時代土師器等の編年試論—特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として—」『信濃』29-9 1977
- 18 吉田恵二・小笠原好彦「平城京の遺物—土器」『平城宮発掘調査報告VI』（奈良国立文化財研究所学報23）1975
- 19 前掲註13-Aに同じ。
- 20 橋崎彰一「猿投窯と白瓷の年代」東洋陶磁学会第7回大会研究発表・記念講演要旨 1979
- 21 筆者が直接に資料に接して検討した天竜川上流域の諸遺跡は、中央道関係の箕輪町中道、諏訪市本城・荒神山・女帝垣外、岡谷市船靈社・新井南、諏訪郡富士見町足場遺跡等にすぎない。中央道関係の諸資料は膨大な数に達するが、すでに多くの資料は各地に建設された諸施設にあずけ入れてあり、十分に検討する機会を持ちえなかった。
- 22 岡田正彦氏によって、最初に指摘された。『長野県中央道報告—諏訪郡富士見町その1—昭和48年「足場遺跡」』1973
- 23 前掲註7・8に同じ。
- 24 田辺昭三「須恵器」『日本美術工芸』388-399 1971
- 25 これは長野県下一般の傾向である。例えば、善光寺平では、長野市塩崎遺跡群（A 矢口忠良他「塩崎遺跡群」『長野市の埋蔵文化財第4集』1978、『同5集』1979、『同9集』1980）、天竜川下流域では飯田市恒川遺跡群（B 小林正春「恒川遺跡発掘調査概報」『信濃』31-4 1979）等で理解できる。
- 26 中道遺跡13・20号住居址では坏A 7点、坏Cは5点である。同遺跡5号住居址は十二ノ后遺跡Ⅲ期にほぼあてられるが、そこでは坏A 3点、坏C 2点（うち1点は静止糸切り）である。
- 27 東海地方の9世紀前半とされる古窯址にもよくみられる。例えば須原6号窯および篠岡第66号窯（A 立木公宏・松崎章他『桃花台ニュータウン遺跡調査報告—小牧市篠岡古窯址群—』1976）がある。長野県下では上水内郡髪山古窯址群（B 笹沢浩「第5様式期の生活」『上水内郡誌歴史編』1973）、上水内郡山神古窯址（C 桐原健・岩野見司「長野県上水内郡豊野町山ノ神古窯址発掘調査概報」『長野県考古学会誌』2 1965）等に類例がある。
- 28 県内では松本市田溝池第1号古窯址（A 遮那藤麻呂「長野県松本市岡田区田溝池における須恵器窯跡の調査」『信濃』21-12 1969）、前述の髪山古窯址群前高山支群にみられるのみで、意外に少ない器種である。
- 29 凸帯付四耳壺の類例は長野県下と甲府盆地に1例（末木健他『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡須玉町地内—』1976）知られるのみで、他地域での出土例はみられない。県下の古窯址からの出土例は松本平と善光寺平にあり、集落遺跡からの出土も多い。その直接の系譜は、南安曇郡大口沢古窯址出土品から四耳壺に求められそうであり、そこから信州独自の土器として生産されたであろう（笹沢浩「東海・中部高地・北陸の須恵器—中部高地」『世界陶磁全集』2 1979）。その上限は9世紀代、下限は11世紀代と考えている。
- 30 須恵器坏Cの器面調整はろくろで水引いたのちに、器面の凹凸をならすために、ロクロナデをする場合と、その手順をはぶいた、成形時のままのものがあると考える。今後、この両者を区別する必要があるが、実際にはその相違を区別することは困難な場合が多い。しかし、器面に凹凸が残されている坏Cは本期から多く、前代のものは少な

- い。多分に感覚的な基準で判断することは危険であるが53号住居址では凹凸の著しいものが11例で、全体の60%を占める。
- 31 檜崎彰一「瓷器の道—信濃における灰釉陶器の分布—」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』 1968
- 32 岡田正彦『中央道報告—諏訪市内その1・その2—』 1973中の「城山遺跡」
- 33 前掲註24に同じ。
- 34・35 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』 3 1973、稲田孝司「小墾田宮推定地の調査—遺物—
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅰ（奈良国立文化財研究所学報27）、西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ（奈良国立文化財研究所学報31 1978）なお、飛鳥時代、平城宮時代の土器による細分は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 1976 に従った。
- 36 前掲註25Bに同じ。
- 37 小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「遺物—土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ（奈良国立文化財研究所学報26 1976）
- 38 檜崎彰一氏の御教示による。
- 39 鳴海32号窯期の1時期について檜崎氏は、平城宮大膳職跡出土の長頸瓶から、770～780年にあることを指摘している。
檜崎彰一「白瓷」『日本陶磁全集』 6 1971
- 40 前掲註25Bに同じ。
- 41 大沢和夫・佐藤甞信・今村善興「清水遺跡—弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代の集落址、方形周溝墓群—」
1976
- 42 林茂樹・藤沢宗平他『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』 1968
- 43 米山一政・矢口忠良他『浅川西条—長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落—』 1975
- 補遺
- 東日本の奈良・平安時代の土器の編年研究の最近の成果には、福田健二（註14）・国平健三（「上浜田遺跡」神奈川県教育委員会 1979）両氏のものがある。

エ 古墳・奈良・平安時代の鉄製品・石製品・土製品について

ア) 鉄製品

本遺跡出土の鉄製品は鉄鏃35点、帯金具3点、留金具3点、馬具2点、刀子15点、紡錘車6点、鎌7点、鉄犁1点、釘16点、古銭32点である。その他性格不明の鉄製品4点である。各個の詳細は鉄製品一覧表(別表7)を参照されたい。また、出土状態については各住居址の項で述べた通りである。これらの中で特に問題となる出土状態を示すものはなく、また、本遺跡を意味づける特色ある鉄製品もない。

遺跡全体の鉄製品を出土量の面からみると、古銭を除くと約60点(調査時点ではもう少し多かったという。調査後の移動でくづれたものを含めて)、住居址だけに限定すると44点となる。時期別には、古墳時代I期4点、II期3点、奈良・平安時代I期1点、II期なし、III期5点、IV期2点、V期3点、VI期10点、VII期3点、VIII期7点、IX期4点、X期2点であり、ほぼ各期に伴出したらしい事が判明する。

表17 十二ノ后遺跡出土鉄製品一覧

時期 鉄製品	古墳		奈良・平安時代										その他	合計	
	I	II	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X			
鉄 鏃	1				2		2	7		4				19	35
帯 金 具					1									2	3
留 金 具		1								1				1	3
馬具(引手)										1	1			2	2
刀 子	1		1		2		1			1	2			13	21
紡 錘 車		1							1		1			3	6
鎌						1		1	1				1	3	7
鉄 犁	1														1
鉄 釘								2						14	16
環	1														1
そ の 他	1						1			1		1	1	1	4
合 計	4	3	1	0	5	1	4	10	2	8	4	2	56	100	
住 居 址 数	5	4	6	1	4	4	7	12	7	5	7	4	2		

時期・種類別の一覧は表17の通りである。遺跡全体の出土量を見ると、検出された住居址数からすると多いことは指摘されるにしても、鉄製品の性格から考えると、総てが検出されるはずもなく、また保存の面からも量的な問題は慎重な検討が必要であろう。本遺跡の古墳時代から奈良平安時代までの住居址は68基、うち鉄製品が出土した住居址は27基である。本遺跡の住居址の保存状態には多少の問題があり、遺跡全体の鉄製品の所有関係については検討する資料になりえなかったことは残念である。なお、古銭については、確実に住居址に伴うものはない。また釘については今後検討する課題である。

イ) 石製品

本項では、石銚帯と子持勾玉の二点について扱いは石器の項を参照していただきたい。

① 石銚帯 (図287-1・2, 図版129)

この石銚帯はフンド1から共に出土したものである。表面が濃緑色の光沢を持つ丸柄である。1は表面、側面ともによく研磨されているが、裏面は切断面を残したままで、ほとんど研磨されず1mm幅の溝が13本走っている。周辺端部のみ一周するように削られている。帯に装着するための潜穴を三ヶ所に穿つ。各孔は完孔している。各部の寸法は最大幅4.3cm、高さ2.8cm、厚さ0.9cm、石質は緑泥片岩類である。

2は、1と同様、表面、側面ともによく研磨されているが、裏面はわずかに1mm幅の溝を各所に残し、磨ききれておらず、1と同様な整形である。潜穴も三ヶ所に穿がたれ、各孔ともに完孔しているが1に比べると浅い。最大幅は4.5cm、高さ2.9cm、厚さ0.8cm、石質は1と同じである。

1、2ともに石銚帯の分類(『平城京発掘調査報告』VI 1974)によれば、石銚帯 b I に属するものである。

う。長野県内で現在まで知られているところでは、古墳3、集落址2の出土例がある。青銅製銚帯は、茅野市姥塚古墳例の巡方1、伊那市福島遺跡第C-7号住居址出土の丸軋2がある。また最近、松本市新村安塚第8号墳で、玄室内から丸軋1の出土が報告されている。石銚帯は諏訪市湖南双子塚古墳から巡方2枚、伊那市福島遺跡第D-11号住居址から丸軋1、伊那市月見松遺跡第105号住居址から丸軋の破片1の出土があり、諏訪郡下諏訪町諏訪神社下社境内からも石銚の出土が報せられ、藤森栄一氏によると「単独出土、下社関係遺跡の例」とされている。本資料の2例を加えると、古墳3、集落址3、その他1の計7遺跡となる。

本遺跡における出土地点は、調査者によれば峠に関連する祭祀遺構とされている。このフンド1の併出遺物は、灰釉水鳥蓋付平瓶の頭部破片、土師器坏、皿、青磁碗などである。時期的に合致するものもあれば、少しずれるものも混入している。今のところ遺構の出土状態のみでは明確な性格はつかめない。

この遺構のあり方は別にふれるとして、全国的な銚帯のあり方を集成された阿部義平氏によれば、墳墓等の副葬品、官衛、集落での遺失物、工房等での回収品に大別されるという。長野県内での出土例は前述した通りであるが、伊那市福島遺跡例を「銅製品の铸造自体は確認されないが、フィゴの羽口等が出土しており、若干の銚も遺失物としてみるよりも、素材として集められたことも考えてみたい。」とされている。伊那市月見松遺跡も105号住居址のカマド近辺からの出土である。遺失物的性格を強く持っているものと思われる。古墳出土例を見ると、諏訪市双子塚古墳は、前方後円墳ともいわれるが、現存していない古墳である。横穴式石室を内部主体として、馬具(引手)、鉄鎌、刀子、須恵器、土師器、石帯などを副葬し、須恵器、土師器から築造年代は6世紀後半から7世紀初頭と考えられている。茅野市姥塚古墳は、同じく内部主体を横穴式石室とするもので、八稜鏡と唐草文鏡の2面の和鏡、直刀、馬具(轡・雲珠・辻金具)、鉄鎌、須恵器、土師器と青銅製銚帯が出土している。築造年代は報告者は8世紀の年代を与えているが、須恵器——土瓶形土器から見ると7世紀代と思われる。松本市新村安塚古墳群第8号墳は、墳丘の大部分は失なわれ、内部主体もかなり破壊されていた古墳である。副葬品は須恵器、土師器、灰釉陶器、直刀、責金具、刀子、鉄鎌、紡錘車、環、勾玉、銅製銚帯などであった。銚帯の出土状況を報告者の小松氏は、「前室の帯金具も埋められた礫などとほぼ同じ高さより出土しており、石室破壊の時の所作と考えられる」とされている。かなり後世の破壊を受けたようである。このような状態の中で、確実な古墳の築造年代を決定することは困難であるが、出土遺物の中から古い様相を持つものを取りあげると、土師器高坏形土器と坏形土器がある。実測図から推定していくと、十二ノ后遺跡の編年の奈良・平安時代I期にあたり、第8号古墳の築造年代を7世紀後半から終末に近い年代が与えられると思われる。以上、古墳出土例を見ると、いずれも7世紀の後半から終末にかかる内部主体を横穴式石室とする古墳で、後の追葬、または混入が予想されるが、8世紀代の副葬品が多い傾向にある。むしろ8世紀が埋葬の中心と思われる感もある。このような例は長野県では、糸切底の底部を持つ土師器の出土例が非常に多いなど、問題とされるところである。阿部氏の集成された表によると、古墳からの出土例は主として東北地方に多く、他には山口県見島古墳群、鹿児島県新富地下式横穴など、地域的なかたよりがうかがえる。今後このような8～9世紀代の遺物の副葬のあり方については再検討の必要があろう。

集落址出土例として、伊那市福島遺跡例は、前述したように、阿部氏によって一応の性格付がされている。同市月見松遺跡例は、住居址内のカマド付近からの出土であったという。月見松・福島両遺跡の出土状況は、意図的な出土状態ではない。本遺跡の場合も明確ではないが、意図的であったとはいえそうもない。ただ、灰釉水鳥蓋付平瓶の蓋部分(図209-1)の出土に問題がある。このほぼ完形品(本書金鋤場遺跡図44

・45) が近接する金鑄場古墳の玄室内、および墳丘周辺に散在的に出土したことである。日常に使用されたとはいえない平瓶が、二個の石鍔帯とともに出土したことは、平瓶の製作年代が9世紀前半であり、石鍔帯の盛行時期と合致し、調査時に祭祀的遺構と考えたのも当然のことと思われる。金鑄場古墳出土例は、その出土状況から古墳との関係は一応切離して考えたが、今後再検討の必要があろう。諏訪神社下社境内地出土品は単独出土で、直接神社とは関係がなさそうであり、現在のところ明確な祭祀遺構出土品はないところを見ると、遺失物的性格と考えた方が無難と思われる。以上、長野県内出土の鍔帯について、青銅鍔帯、石鍔帯を出土のあり方を中心に見てきたが、特別な出土状態を示しているものはなかった。前述してきたように、古墳と集落出土の状況は異なるが、各々の出土状況は共通している。資料の多少は、調査の状況によって各地域ともに異なるが、出土例は全国的にも多い方であろう。この意義は、古墳出土の問題とともに今後の大きな課題となろう。

本文の資料は、昭和54年7月までの小林の管見にふれたものであり、当然未見の文献があるものと思われる。今後のご教示をお願いしたい。

② 子持勾玉 (図287-3, 図版129)

十二ノ后遺跡Ⅰ期に属する32号住の、西北隅で壁面より10cmほど浮いた状態で出土した(フンド4とも重なる)。形態的には、「目や口を刻したり一種の文様」(大場1956)を表わしたものと思われる。一般に検出される形とはやや異なり、ある種の動物の形状を示している感がある。最大長5.5cm、C字状である。突起は、削り出され、その痕跡は明瞭で全体的に細い。石材は滑石製と思われる。

長野県内の出土は10数例であるが、出土状態は単独出土が多く確実な出土例は少ない。この内で、平出遺跡第42号住居址出土例(大場他1955)は確実に併出したとは断定できないまでも、唯一の類例である。時期的には古墳時代前期に属するものである。本例も平出遺跡と同様、確実に住居址に併出するものではないが、32号住の時期が7世紀後半から8世紀にかけてと考えられ、平出遺跡例と本例との間には形態的に差が認められる。子持勾玉自体の出土例は古墳、祭祀遺跡、単独出土例などが中心で、古墳時代をほぼ共通の時代としているが住居址内出土の例は少く、また住居址内出土の祭祀遺物、祭祀の形態などとの関係は今後の検討課題であるが、平出遺跡例を古墳時代の前半の資料とすれば、本例は古墳時代の終末の資料と考えられ、子持勾玉の形態的な差を示すものと思われる。このような意味での問題提示となれば幸いである。

(小林 秀夫)

註1 本報告書金鑄場古墳の項参照。

註2 藤森栄一氏は「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」註の中で「石製鍔、単独出土、神社関係遺跡の例」とされている。

参考文献

- 阿部義平「鍔帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』 1976
「平城宮発掘調査報告Ⅵ」『奈良国立文化財研究所学報』23 1975
藤森栄一「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」『古墳の地域的研究』 1939
宮坂光昭「諏訪湖盆東縁の終末期古墳群の考察」『信濃』22-4 1970
『松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会 1979
『伊那・福島遺跡』(長野県考古学会研究報告書6) 長野県考古学会 1968
『月見松遺跡Ⅲ次緊急発掘調査概報』伊那市教育委員会 1977

ウ) 土製品

古墳時代から平安時代（中には中・近世まで下降するものもあるかも知れないが、一応、こゝでは一括した）にわたる土製品としては、縄文時代土製品としての土器片鈿・土製円板とは異なった所謂管状の土鈿がある。以下、これについての若干のまとめをしておきたい。

本遺跡出土の土鈿は総数 166 点に及ぶ。そのうち住居址・土壇など遺構内での出土は 105 点、遺構外は 61 点ある。7 形態に細分した分類基準によれば、I A 型 19 点、I B a 型 69 点、I B b 型 6 点、I C 型 29 点、I D 型 34 点、II A 型 7 点、II B 型 3 点となる。なお、これらの形態差をみるために計測可能なものについて、重さと長さ、最大径と長さの相関関係を表わす図(挿図55)を参考までに作成した。(重さと長さ 59 点、最大径と長さについては 125 点、I B b 型については、計測可能な土鈿がないために表示していない。)また、各形態別・遺構別出土数は表 19 にまとめ、また形態別の長さ、最大径、重量の平均値については表 18 の通りである。

この 2 つの相関図と表 18 から明らかなとうり、I A 型は長さ 6 cm から 9 cm の大形で径も 2.5 cm から

表 18 十二ノ后遺跡出土土鈿形態別計測一覧

形態	出土数	長さ(mm)	長さの平均値	最大径(mm)	最大径の平均値	重量(g)	重量の平均値
I A	13	62~92	77	25~30	27.3	31.3~66	52.5
I B a	24	36~52.5	44.2	10~14	11.7	3.7~11.5	5.4
I C	12	31.5~38	35.3	10.5~14.5	12.3	2.6~8.1	4.3
I D	11	20.5~29.5	26.1	5~8	5.9	0.4~5.5	1.1
II A・B	3	39~49	43.6	20~28	24	15.1~51.3	29.3

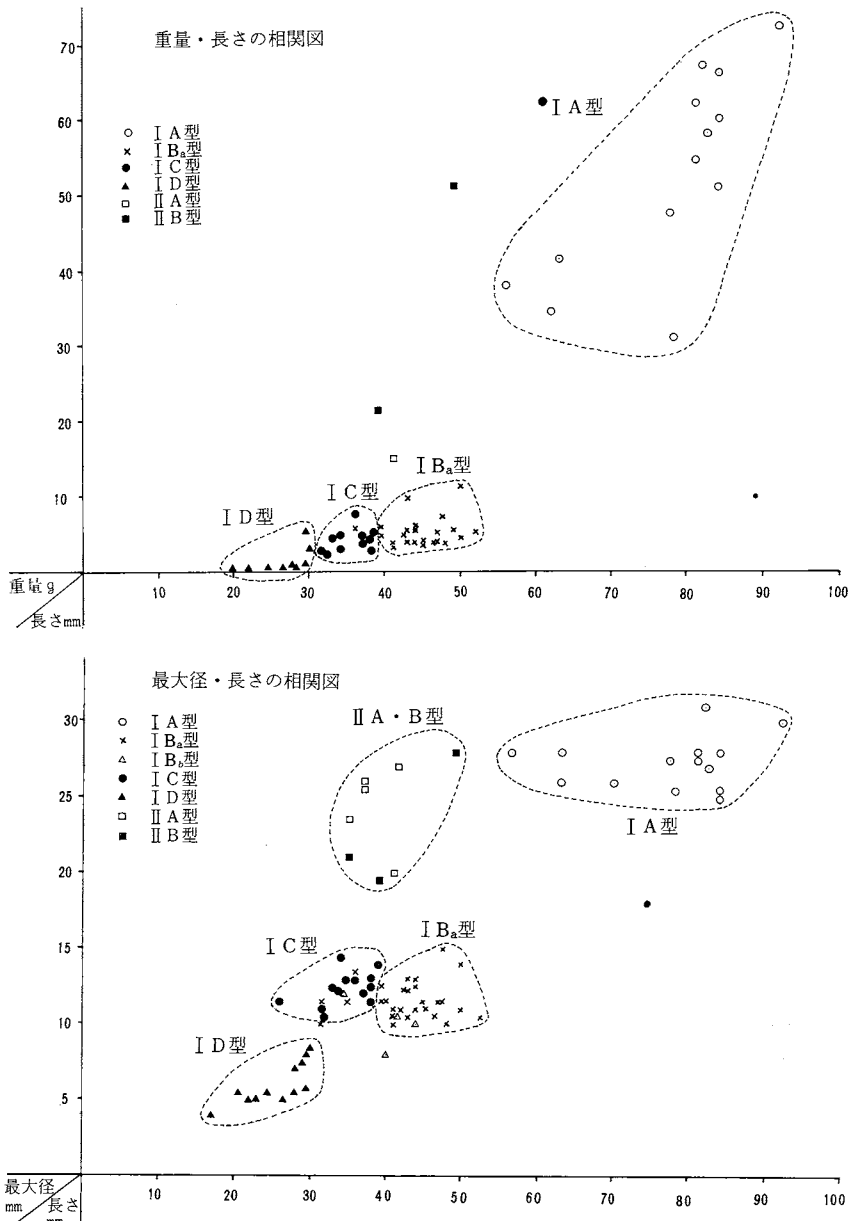
注 出土数は計測可能な土鈿についてのみ記載したため一覧表の出土数と異なる。I B b 型については計測可能な土鈿がないため記載していない。

ら 3 cm ほどあり、重量も 31 g から 66 g と重く、他に比べ一段と大形であり、網目の大きい漁網に使用されたのであろう。I B a 型は 68 点ともっとも多い。長さが 4 cm から 5 cm、径 12 mm 前後、重さ 4 g から 6 g 程度で、諏訪湖周辺の遺跡ではもっとも出土例の多い土鈿である。ということはこの土鈿を使用した網漁法が当時最も一般的な漁法であったといえるのだろう。次に I C 型は、I B a 型とほぼ同じ重量を示すが、長さが 4 cm 以下と短くなり、I B a 型土鈿使用の網よりも、いくぶん小さな網目の網に使用された土鈿と考えてよいであろう。次に最も小形の I D 型は、計測表および 2 つの相関図から明らかなとうり、他の土鈿に比べ長さ 2 cm から 3 cm、最大径も、0.5 cm から 1 cm ほど、重さも平均して 1 g 前後で最も小形・軽量である。さらに相関図には表わす事はできなかったが、I D 型の特徴として、内径の計測値があげられる。他の土鈿は形態は変わっても内径は 4 mm から 5 mm に一定しているが、この型式の内径は 1.5 mm から 2 mm 程度と極端に小さいことである。この事実、この土鈿が網漁に使用されたのではなく、釣漁法に関連する可能性をもつ点が指摘できよう。次に II A および II B 型は、I 型のような紡錘形をとらず、径が 2 cm から 3 cm と大きい、長さが 5 cm どまりの管状形をしているのが特徴であろう。

以上、各型土錘の特徴について述べたが、その形態の相違は、土錘を付けた網の種類の違いに起因するものと思われ、さらに、それは網漁による捕獲対象物の魚種により決定された形態差となろうが、今後類例を待って更に検討を進めたい。

なお、欠損状態について触れておきたい。別表8の一覧表で完形としたものは、製作時点での完形のみでなく、欠損乃至磨滅しているが、現状でも土錘としての機能を果し、使用可能と判断したものを含んでいる。欠損状態を視察すると、殆どは両先端が磨滅・欠損している。特にI B a型・I C型にその例が多い。これらの磨滅痕は網に固定した際の使用痕であろうが、ただ、I D型のみ両端が少く、片側先端欠損例が多い点注意される。本型を網漁法でなく、釣漁法の用具と考えた一因でもある。

次にこの種土錘の時期的分布につ



挿図55 十二ノ后遺跡出土土錘重量・長さ・最大径相関図

いては、別表8では、縄文前期、あるいは後期の遺構から13点出土しているが、これは本遺跡が縄文時代から平安時代まで重複しているための混入であることは勿論で、その所属時期が古墳・奈良・平安時代と考えてまず大過ないであろう。今少しくわしくみると、確実に該期遺構に伴うという例は少ないが、古墳時代I・II期から、奈良・平安時代I~IV期までの全般にわたって伴出しており、現在までのところ、時

期的な集中はみられない。或は他遺跡例などを加えて再検討すれば、初現の問題やその形態変遷なども解明されるであろう。

以上、十二ノ后遺跡出土の土錘 166 点について 7 形態に分類し若干の検討をしたが、この分類基準は今後類例を加え再検討する必要があると思われる。しかし、これら多数の土錘の出土と、その土錘の形態の多様性は、この時期における漁撈の重要性と、諏訪湖という内陸部の湖沼を漁場とする生業としての漁撈がもつ意義づけを物語るものであろう。

(山本 賢司)

オ 集落・住居址・その他

縄文前期と奈良・平安時代の 2 つの時期に中心を置いた本遺跡は、検出した住居址のみでも 140 軒余、他の遺構も含めれば、確かに拠点集落の露呈といえよう。以下、特に遺構を中心とした諸問題について簡単にふれながらまとめにかえたい。

縄文時代の住居址は、前期 60 軒、中期 5 軒、後期 9 軒の計 74 軒が調査された。これはすぐ隣接し、同一遺跡としてよい千鹿頭社遺跡を加えるとあと 10 軒程ふえるが、遺跡全体からみれば、 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ 程度の調査面積である時、前期のみでも、優に 100 軒を超す大集落が存在したことになる。けだし県内でも最大級の前期遺跡といえよう。細かい分析はしてないが、これら前期集落の分布について、本書 183 頁の石器の項で述べられているように、等高線に沿いゆるい弧状を呈して住居址が連なり、多少時期的にそれが移動した形跡もあるという。中央道は丁度この弧状の上半部を通過しており、先の千鹿頭社遺跡は西北部の先端にあたり、反対側東南部は未調査に終わっているが、両端の長さは推定 200～250m に及ぶであろう。地形面からは、中期のような馬蹄形とはならずゆるい半月形の、諏訪湖方面に開いた集落構造を想定できよう。住居址個々にも時期的な変化や特色を抽出できないかと考えていたが、切り合い関係が激しく、その操作はできなかった。住居址以外では、堅穴、集石、集石炉、土壇などがあったが、何といても最大の収穫は方形配列土壇群であろう。調査時点ではまだ阿久遺跡の同種遺構が土中に埋まっており、整理の段階でその存在を見出したとはいえ、調査当時、土壇として扱いながら特殊な遺構としてその全体図を作成した担当者の見識は高く評価してよいであろう。いづれにしろ、阿久例のみでなく、こうした大規模な建造物が縄文前期に存在したことを本遺跡でも立証したことになった。

縄文中期はわずか 5 軒であるが、付近にも余り同期の住居址が存在しそうな所をみると、縄文中期＝大集落というイメージとは反対に、こうした 2～3 軒のみで構成される分村的生活の実体も解明する必要がある。季節的移動説のみでは説明しきれない内容がある。縄文後期では完全ではないが敷石住居址の新例を加え、また、該期には少い一般的な堅穴住居址を検出した点は、良好な土器の出土と共に収穫といえる。

弥生時代は、住居址の検出はなかったが、土壇から中期土器の典型的資料が得られている。断片的資料の多かった当地方の該期研究に少なからぬ役割を果たしたといえよう。

奈良・平安時代住居址も 10 期に区分した各期に、多少のバラツキはあるがほとんど数軒ずつ分散している。古墳時代を加えた約 70 軒が数百年にわたって集落をかまえていたわけで、この点からも、本遺跡が何らかの意味で重要な役割を担った遺跡であることが証明できよう。そこでまず浮かぶのは有賀峠との関係である。調査区域をほぼ南北に斜めに横切る集列石は、基盤となるローム質土層面がカマボコ状を呈している点、調査者は最も古い道を想定している。その上の礫を含む土層も、次第に付近の畠から取り出された礫

が集積しつつ古道を作り上げ、後世農道や畑地の境界線となってより礫が自然に堆積し、少くとも内耳鍋の検出された中世まで利用された往還と想定できなくはない。集列石の方向は確かに有賀峠へ通じているし、地形的にも道を作る好適の場を選んでいる。時期が確定しないフンド1～3が、集列石に近い場所を占めていたり、中世「カワラケ」を出土したり、柱列と呼んだ掘立柱建造物の存在も何か暗示的であるといえよう。とりわけ、石銚帯や子持勾玉の出土状況は、単なる住居址に結び付ける遺物というより、そこに祭祀的背景を重ねあわせて考える方がより合理的になるだろう。古代東山道筋としては杖突峠説とこの有賀峠説があるが、強いて本道と結び付けなくてもよい。伊那谷への最短距離にあるこの峠の意味は、その出入口部で発見された本遺跡の内容を検討するだけで理解できるであろう。ちなみに、先学達が注目していた本遺跡名となった「十二ノ后」とか、東につづく「女帝垣外」、少し離れた「鐘鋳場」・「神送り山」などの地名も、今後充分検討する必要があるだろう。

各時代、各遺構についてもまだ十分説明できないが、今後の課題としたい。

(樋口 昇一)

4. 荒神山古墳

調査の経過 本古墳は諏訪市大字湖南字南大熊の荒神山で工事中に発見された。荒神山遺跡の立地については、すでに報告されているので省略するが、この古墳は荒神山遺跡の中では最高部に位置し、先に調査された大熊城址よりの中腹の斜面にある。発見の発端は、第二次の発掘調査終了直前、ブルドーザーが遺構外と思われる斜面を掘削中、調査員が蕨手刀の残欠を発見したことにある。そこで、直ちに第三次調査が組まれた。しかし、調査団が古墳の位置を確認した段階では、ほとんど破壊され、わずかに横穴式石室の堀方の一部と、側壁の控え積みの板石状の石が発見されたにすぎなかった。そのため調査は堀方、控え積みを中心に実施し、埋土中から鉄鏃、土師器片、須恵器片を検出したが、攪乱されて埋葬時の状態は復元できず、かつ前述した蕨手刀の出土地点も確認はできなかった。なお、和鏡1点が石室から北東方向へ5m離れた地点に出土した。

墳丘 斜面を利用して構築したもので、内部主体の方向は東側に向って開口していたものと思われる。斜面に向って横穴式石室構築のための堀方を掘り、石室を構築し、内部主体がかくれる程度に墳丘を盛ったものであろうが、現状では全く痕跡すら残っていなかった。

内部主体 横穴式石室構築のための堀方と、一部控え積みと思われる板石状の石のみが残存し、他に推定できる資料は得られなかった。堀方と思われる残存部は、幅4m50cmほどである。遺物の散布範囲は、約2mである。おそらくこのあたりが石室の範囲を示しているものと思われる。

副葬品 銅製鏡1面、須恵器坏蓋3、他に実測不可能な土師器片4、須恵器片2、蕨手刀1刀、鉄鏃(平根形4、尖根形約27点)、骨片11点の出土があった。(挿図29)

出土状態は古墳の存在を発見した段階ですでに破壊されていたもので埋葬時の状態でなく、ほとんど問題にならない。このうち銅製鏡と蕨手刀は堀方から離れて出土し、他は堀方内出土である。堀方内に南北にかけて幅2mの範囲に須恵器片、土師器片、鉄鏃、骨片が、一部敷石状の上に堆積した黒色土内に雑然と散布していた。ほとんどの遺物が敷石より20cm～30cm上のレベル内であった。

銅製鏡(1)はいわゆる和鏡(直径11cm、高さ0.6cm)と呼ばれるもので、その中心部、内区が欠けていて鏡式は不明である。

蕨手刀(5)は、柄先を欠いている。蕨手刀としては身幅の狭いもので、柄反り、刀反りはあまりない。桐原健氏の形態分類のⅠ型である。刀部には朱が付着し木質部も残存していたが、かなりしっかりした造りである。計測値は次の通りである。全長51.5cm、刃長38.0cm、茎長13.5cm、先重ね0.8cm、先幅3.0cm、元重ね0.8cm、元幅3.8cm、茎先長0.8cm。

鉄鏃は大きく平根形(6～9)と尖根形(10～26)に分類される。平根形はいわゆる飛燕形といわれるもので、腹挟りの部分を一部欠くものもあるが、共に腹挟りを残している。4例とも両丸造りで、篋びきがある。後藤守一博士の分類では広鋒腹扶三角形式に属するものであろう。平根形にしては長い茎を有しているもので、7は逆刺があるものかも知れない。尖根形は、斧矢形(10、11、17、25)、片刀形(13、15、19、21、23)のものが多く他は茎部のみのものである。

須恵器坏蓋(2~4)は小破片を復元実測しているが、擬法珠様のつまみをつけ、かえりのない器形になると思われる。天井部外表面には、ヘラケズリ、端部近くはロクロナデし、灰白色で焼成良好である。

この他、実測不能の土師器片4、須恵器片2、鉄鏃茎破片10の出土があった他、骨片11、古銭1がある。いずれも内部主体と思われる地点からであった。

以上が古墳出土の遺物である。年代的にある程度明らかにできるものは、須恵器坏蓋である。大阪陶邑古窯址群の編年でいう、MT21に相当するものと思われる4期の時期であろう。また最近の藤原宮址の編年の飛鳥Ⅴ期に相当するもので、時期的には7世紀後半あたりが考えられよう。和鏡は中心部が欠けて、ほとんど資料価値を失っている。諏訪地方に分布する古墳のなかで、和鏡が副葬されているのは、茅野市姥塚古墳例があり、八稜鏡の出土があったが、時期的には、荒神山古墳と同様の年代を与えている。蕨手刀について特に信濃におけるあり方については、桐原健氏の論考に詳しい。大略はゆずるとして、本古墳例は、桐原氏の分類のⅠ形態に属し、編年試案では最も古い形態に属しているという。年代的には「古墳時代後半から最末期に置かれ得る」とされている。先に見た須恵器の編年とほぼ一致するものである。

まとめ 近接する諏訪市湖南双子塚古墳はすでに消滅しているが、前方後円墳ともいわれており、横穴式石室を内部主体とし、副葬品の豊富さで知られている。石製鏃の出土など追葬や他からの混入も予想されるが、伴出した土師器、須恵器から築造年代は6世紀後半7世紀初めにあたり、本古墳より先行するものである。守屋山麓一帯の古墳の分布の問題は、金鑄場古墳の頃でふれたのでくり返さないが、2~3基ほどの散在的な分布で、10基とか20基というような群集化しない特色を持ち、ある一つの単位——系統を予想させるものがある。本古墳の築造は、前述した如く7世紀後半と思われる。残存していた堀方の大きさを見ると、古墳時代の終末に近く築造される小規模な横穴式石室とは異なる。副葬品がないので明確にしえないが、予想しているよりも古い可能性もあり得る。(小林 秀夫)

参考文献

- 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報31 1978
平安学園『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
中央道報告書——諏訪市その3 1974
桐原健「蕨手刀の祖型と性格」『信濃』28-4 1976
後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『日本古代文化研究』所収 1942
桐原健「諏訪盆地に見られる終末期古墳の様相」『長野県考古学会誌』7 1969
 〃 「諏訪盆地古墳群にみられる一様相」『信濃』16-10 1964
藤森栄一「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」『古墳の地域的研究』所収 1973
宮坂光昭「諏訪湖盆東縁の終末期古墳群の考察」『信濃』22-4 1970
 〃 「地方における古墳時代末期墓制の展開」『信濃』25-4 1973
 〃 「長野県茅野市釜石古墳」『信濃』19-4 1967
信濃史料刊行会『信濃考古綜覧』〈上・下〉 1956
石井昌国「出土刀」『新版考古学講座7—有史文化(下)』 1970

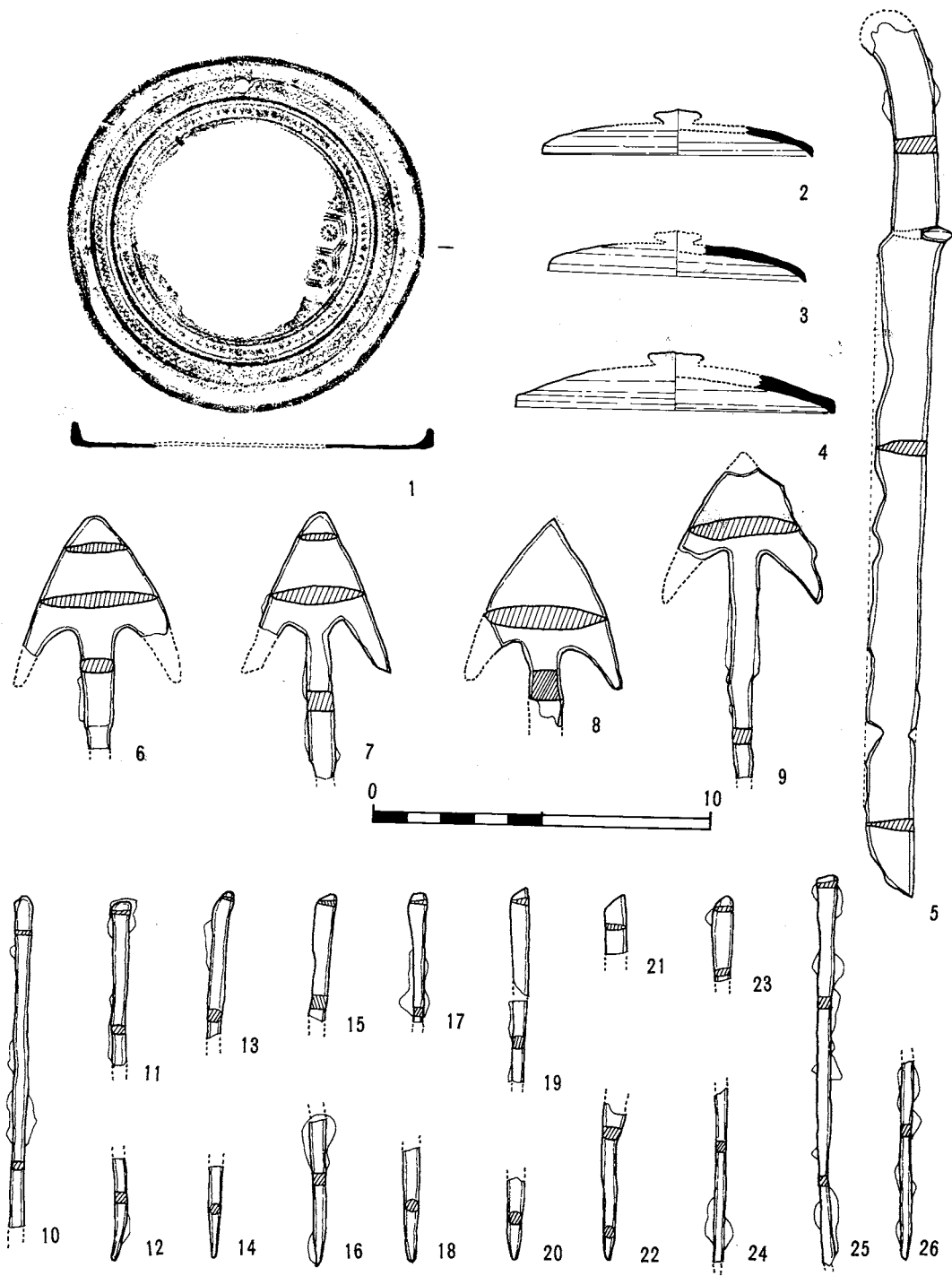


插图56 荒神山古墳出土遺物 (1:2)

別表1 金鑄場遺跡出土土器度量一覧

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考
1号古墳	201	H	坏C	II・b ₃	13.7	3.3		1/2		12	20	KO	坏B	I・b ₁	15.5	7.5		1/2	
	202	〃	鉢	A I	15.0			1/6			21	H	坏F	I・b ₁	16.8	(7.5)		1/2	漆黒彩
	203	〃	小形甕	A I	15.5			1/6			22	KO	坏L	a ₂	15.0	4.5		1/2	
	204	KO	坏C	A ₂ II			4.7		底部片		23	〃	坏B	II・b ₃	12.7	(4.1)		1/6	
	205	K	長頸壺		8.7	20.0	7.0	1/6	底くろ成形劣る		24	〃	坏G	a ₂	12.4	(3.7)		1/4	
	206	H	坏G	II・b ₃	11.9	(4.8)		1/6			25	〃	坏H	I・b ₃	13.1	(3.3)		1/6	
	207	K	短頸壺		(9.0)	(14.1)		1/6	淡緑彩		26	〃	坏H	II・b ₃	11.8	(3.3)		1/6	
	208	H	坏G	II・b ₃	13.3	(4.0)		1/6			27	〃	坏H	II・b ₃	10.0	(3.1)		1/6	
	209	S	坏B	A ₂ II	14.4	4.3	10.4	1/2			28	〃	坏G	II・a ₂	13.5			1/6	口縁部片
	210	S	長頸瓶		10.5	23.7	8.0	1/2	ほぼ完存		29	〃	甕	A I	21.1			1/6	底部欠
	211	S	横瓶		12.7	25.5		1/2			30	〃	甕	A	19.5			1/6	口縁部片
1住	1	H	壺	A I	24.0				底部欠	36	〃	小形甕	A I	15.0			〃		
	2	KO	手捏ね坏	A II・a ₂	8.2	4.0			ほぼ完存	41	〃	〃	〃	14.5			〃		
2住	5	〃	甕							44	〃	〃	A II	12.7					
	6	H	坏E	b ₃	15.7		6.5		底部片	45	〃	甕	A	19.2				口縁部片	
3住	7	〃	甕		20.6					46	〃	小形甕	A II	10.9					
	8	H	甕				9.1		底部片	47	〃	甕	A I	14.6				〃	
4住	10	H	小形甕		15.6					49	〃	甕	A I	17.5				体部下半・底部	
	11	〃	甕	A II	14.0					50	〃	甕	A			7.0		脚部片	
5住	12	〃	壺	A II	(19.0)					54	〃	高坏	A			6.5		脚部	
	13	H	壺				7.0		底部片	55	〃	高坏	A			10.3		脚部	
8住	14	H	坏L	b ₃	11.9			1/4		56	〃	小形甕	D						
	15	S	坏B				7.0		底部片	59	H	坏G	I・a ₁	15.7	4.0		1/3	口縁部片	
9住	16	H	甕	A I	18.6					61	〃	坏G	II・b ₂	12.2				口縁部片	
	17	S	坏		14.2					63	〃	小形甕		13.7				口縁部片	
10住	19	H	甕							64	〃	甕		12.5				底部片	
	19	H	甕							66	〃	小形甕		10.8	11.6			ほぼ完存	
11住	16	H	甕	A I	18.6					67	〃	手捏ね甕	A	(10.5)	(18.5)			体部片	
	17	S	坏		14.2					68	S	壺	A					底部片	
11住	16	H	甕	A I	18.6					69	H	壺	A						
	19	H	甕		14.2		7.0		口縁部片	70	K	短頸壺		9.1				後出	
							7.0		底部	73	H	甕						底部片	

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考
15	74	H	甕	D			6.6	底部片	
住	76	"	小形甕				9.8	脚部	
16	88	S	環	b ₃	9.6	4.3		1/2	
	89	H	環G	II・b ₂	10.8			口縁部片	
	90	KO	環D	I・b ₃	10.1	(3.9)		口縁部片	
	91	H	環	II・b ₂	12.0			口縁部片	
	93	KO	鉢D	AII	12.0			口縁部片	
	94	H	小形甕	AI	11.5			口縁部片	
	95	"	"	AI	16.2			"	
	96	"	"	AII	15.0			"	
	97	"	"		16.5			"	
	99	"	"		15.3			"	
	100	"	甕		18.4			"	
	103	"	甕	A	23.9			"	
住	106	"	"		24.5		7.7	底部片	
	108	"	甕				6.5	"	
	109	"	小形甕	BII	(13.8)	(17.4)	6.0	体部へラ削り	
	113	"	高環				14.0	脚部	
	115	"	"				13.3	脚部片	
	116	"	"						
17	77	KO	環D	I・a ₂	16.0	(4.5)		1/2	
	78	"	鉢D	II・a ₂	15.4	(4.0)		口縁部片	
	80	H	環G	II・b ₃	11.4		6.7	1/2	
住	82	"	甕	A			10.5	底部片	
	85	"	壺		(21.0)			口縁部・欠	
	87	"	甕	A					
18	212	H	環G	II・b ₃	12.2	4.4		1/2	
	213	"	環I	b ₂	12.5	4.1		1/2	
	214	"	環F	b ₄	13.0	(6.3)		1/2	
	215	"	鉢A	II・C ₂	10.0	(7.5)		1/2	
住	217	"	小形甕	AII	13.2			1/2	
	218	"	壺	AI	28.3			1/2	
	228	H	甕	AII	19.7	35.6	7.6		ほぼ完存
	219	KO	環G	II・b ₂	12.5	3.7		1/4	
	220	H	小形甕	A	(8.5)	(6.9)		口縁部欠	
	221	"	小形甕	AII	11.0		6.5		
	222	"	"	"	11.6		13.5		
	223	"	"	BII	13.6		19.0		
	224	"	"	AI	16.2				
	225	"	"	AII	12.4				
	226	"	"	AI	16.3				
	227	"	壺	AI	29.1	(29.8)	(8.6)		底部欠
	229	"	甕	AII	23.0	33.2	7.0		ほぼ完存
	230	"	甕	AII	20.8	36.5	7.0		ほぼ完存
	231	H	甕	AI	20.9	(39.4)	(7.5)		底部欠
	232	"	環G	II・b ₃	12.0	4.6		1/2	
	233	"	環B	II・b ₄	11.7	4.7		1/2	
20	234	"	手捏ね鉢	I・a ₀	13.5	10.5	5.0		ほぼ完存
	235	"	小形甕	AII・a ₀	12.4	(14.0)	7.6		ほぼ完存
住	236	"	手捏ね鉢	AII・c ₀	10.7	6.5	6.2		ほぼ完存
	237	"	壺	AI	25.0	27.7	11.0		ほぼ完存
	238	"	"	"			8.0		口縁部・仕上部欠
	239	H	甕	A	19.7				体下半欠
	240	"	"	AI	21.2	(42.8)	7.8	1/2	
	241	"	"	II・b ₃	21.4	3.9		1/2	漆黒彩
	242	"	環G	"	12.5	4.2		1/2	漆黒彩
	243	"	"	"	12.5	4.0		1/2	漆黒彩
	244	"	"	"	12.7	4.0		1/2	漆黒彩
	245	"	"	"	11.3	4.0		1/2	漆黒彩
	246	"	"	"	12.5	4.0		1/2	漆黒彩
	247	"	"	"	11.4	3.8		1/2	漆黒彩
	248	"	環I	b ₃	12.5	4.2		1/2	漆黒彩
	249	"	環G	II・b ₃	12.0	3.7		1/2	漆黒彩
	250	"	環J	b ₃	12.1	4.0		1/2	漆黒彩

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	
21	251	H	坏F	II・c ₃	11.5	(5.4)		1/2漆黒彩		住	286	H	甕	A	16.6			1/2		
	252	KO	高坏	A	13.5			1/4			287	"	"	"	19.7			1/2		
	255	H	小形甕	AI	16.2			1/6			288	"	壺	A II	14.2			1/6		
	256	"	小形甕	"			5.7	体下半・底部			289	"	甕	A	21.2			1/6		
	257	"	壺	AI	22.7			1/2			290	H	坏G	II・b ₃	12.5	4.2			1/2漆黒彩	
	258	"	"	"	25.2	31.8	10.5	1/2			291	"	甕	"					底部片	
住	259	"	甕	C	20.4			1/2		292	S	甕	"	11.0				1/2	口縁部片	
	260	"	甕	"			6.0	1/4底部		住	293	KO	坏L	b ₂	13.6	4.2			ほぼ完存	
	261	"	壺	"			9.3	1/2底部			294	"	坏L	b ₂	13.5	4.5			"	
262	H	坏G	II・a ₃	14.0	(3.9)		1/6		295		"	"	"	14.0	4.7			1/6		
22	263	"	"	II・b ₃	12.6	(3.3)		1/4		296	"	坏B	II・b ₄	15.2	5.5			1/6		
	264	"	"	"	12.6	3.7		1/6		297	"	鉢D	II・a ₄	14.2	5.5			1/6		
	265	"	"	II・b ₂	13.6	(3.2)		1/6		298	"	高坏	A	16.7	(17.5)			1/4		
	266	"	手握ね坏	C・b ₂	11.5	3.7		1/2	口縁部ゆがみあり	299	H	高坏	"					脚部片		
	267	"	"	AI・a ₃	12.4	5.0		1/2		300	"	"	"					(11.0)		
	268	"	鉢	A II・c ₃	13.2	9.5	6.5	1/2	口縁部ゆがみあり	301	S	"	"					脚部片		
	269	"	"	A II・b ₄	14.0	8.7		1/2	ほぼ完存	302	H	鉢D	I・b ₄	(21.2)	(6.8)			脚部片		
	270	"	"	A II・b ₃	17.3	11.2	7.0	1/2	器表磨耗	303	"	小形甕	D	13.8	(17.0)			口縁部欠		
	271	KO	高坏	C	11.4	9.0	9.0	1/2		304	"	甕	"	18.5				脚下半欠		
	272	H	壺	B	15.7	(16.0)	8.7	1/2	1/2漆黒彩	305	"	"	"					1/2		
	273	"	"	A II	12.5			1/2		306	"	"	"	24.2				底部		
	274	"	"	"	14.0			1/6		住	307	H	坏G	II・b ₃	(14.0)	(4.0)			口縁部欠	
	275	"	"	AI	18.8			1/6			308	"	壺	AI	(24.7)				"	
	276	"	鉢	CI・b ₃	24.0	(12.8)		1/4			309	"	甕	A					底部片	
277	"	甕	AI	19.7	(34.3)		1/6	1/2体下半欠	310		"	甕	"					底部		
278	"	小形甕	A II	14.0			1/6		住		311	H	坏I	b ₃	12.7	4.3			1/2漆黒彩	
279	"	"	AI	15.3			1/6				312	"	坏G	II・b ₃	11.7	3.7			1/6	
280	"	"	AI	17.7			1/6			313	KO	坏B	II・b ₃	11.3	4.1			ほぼ完存		
281	"	"	AI	16.3			1/6			314	S	短頸甕	"	(7.7)	(12.5)			口縁部欠		
282	"	"	BI	19.8			1/4			315	H	高坏	"					脚部		
283	"	甕	"	26.6			1/2			316	"	小形甕	"	14.2				1/4		
284	"	甕	"	28.7			1/2		住	26	住	住	住	住	住	住	住	住	住	
285	S	坏	"	11.0	(3.3)		1/6													

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考
27	317	H	壺	A II	18.0			1/2 口縁部ゆがみあり		33	341	KO	環B	II・b ₁	13.8	4.5		2/3 器表剥落	
	318	〃	甕	A I	20.2	40.2	7.7	ほぼ完存			342	H	小形壺	C II・a ₁	9.3	9.0	6.0		
	319	〃	〃	A I	18.7	39.1	7.3	〃			343	〃	〃	C I・c ₁	12.6	10.2	5.3		
28	320	H	環G	II・b ₃	13.4	4.3		2/3 漆黒彩		34	344	〃	〃	C I・c ₁	12.0	9.5		1/4 〃	
	321	KO	環L	b ₂	14.4	3.7		1/6 〃			345	〃	小形甕	A I	16.0	22.8	6.3		
	322	〃	〃	b ₀	12.0	3.2		1/6 口縁部欠			353	H	環G	II・b ₂	13.0	4.0		1/2 漆黒彩	
	323	〃	環A	II・b ₃	(9.7)	(5.0)		1/6 〃			354	〃	環G	II・b ₂	12.4	(4.2)		1/3 〃	
	324	H	手提ね甕	A	8.5	9.6	5.5	1/6 漆黒彩			355	〃	〃	b ₃	12.5	4.0		1/3 〃	
	325	〃	環I	b ₃	12.4	4.0		1/6 漆黒彩			356	〃	〃	b ₃	12.0	4.0		1/2 漆黒彩	
	326	〃	環C	b ₁	14.0	5.2		1/6 〃			357	〃	〃	b ₃	12.7	(3.5)		1/6 〃	
	327	〃	環H	I・a ₃	12.4	3.1		1/6 〃			358	〃	環I	b ₃	13.5	4.5		1/2 漆黒彩	
	328	〃	鉢C	c ₀	22.0	(7.5)		1/4 脚部			359	KO	環F	II・c ₃	12.0	5.9		1/4 器表摩耗	
	329	〃	小形甕	D			10.8	脚部・漆黒彩			360	H	鉢	A II・c ₀	11.8	(8.7)		1/2 〃	
住	330	〃	〃	〃			10.2	脚部・漆黒彩		361	KO	高環	B	16.8			1/2 〃		
	331	〃	甕	A	24.2			1/6 〃		362	〃	〃	A	17.1			1/2 脚部片		
	332	〃	〃	〃	19.1			1/6 〃		363	H	高環	A I	15.4	(20.4)		1/4 〃		
	333	S	環	〃	11.5	(4.0)		1/4 〃		364	〃	小形甕	A I	16.0			1/4 〃		
	334	〃	環	〃	11.3	(3.7)		1/6 〃		365	〃	〃	〃	15.8			1/4 〃		
	335	〃	高環	〃	11.5	(12.0)	(8.7)	1/6 〃		366	〃	〃	〃	22.6	28.2	8.3		ほぼ完存	
	336	KO	環D	I・a II	14.3	4.5		2/6 〃		367	〃	壺	A I	20.3			1/4 〃		
29	337	〃	小形甕	A I	15.8	20.7		ほぼ完存		368	〃	〃	〃	17.1	21.2	9.3			
	338	〃	甕	A	20.6			1/2 〃		369	〃	小形甕	A I	21.5	(40.0)		3/4 〃		
	351	H	壺	A I	25.0	32.1	9.3	1/6 〃		370	〃	甕	A I	18.4		7.8			
31	352	〃	甕	A I	18.5	(38.0)		1/4 体下半欠		371	〃	〃	〃	21.0			1/6 〃		
	346	H	環G	II・b ₃	14.7	(4.0)		1/4 脚部片		372	〃	小形甕	B I	18.4			1/6 〃		
32	348	〃	高環	〃				脚部片		373	〃	〃	A	21.0			1/6 〃		
	349	〃	小形甕	B	(20.5)		7.0	底部片		377	H	環G	II・b ₃	13.6	3.8		1/2 漆黒彩		
	350	〃	壺	A I				口縁部欠		378	〃	〃	〃	13.0	(3.5)		1/6 〃		
	339	H	環G	II・b ₃	12.5	4.9		ほぼ完存・漆黒彩		379	〃	〃	b ₂	12.7	4.0		1/2 〃		
33	340	〃	〃	II・b ₃	12.4	3.8		〃		380	〃	〃	b ₃	12.0	3.3		1/4 漆黒彩		
	340	住	甕	〃				〃		381	〃	〃	〃	11.7	3.2		1/6 底部片		
										382	〃	甕	c ₂	12.8	(5.1)	5.8		1/2 〃	

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考	
35	384	KO	環F	II・c, b ₄	10.6	3.3		1/2 ほぼ完存 底部片	高杯	S	418	S	高杯			13.5	1/2脚部	考		
	385	H	環		13.0							419	H	環K	II・b ₃	9.6	4.6		1/2漆黒彩 ほぼ完存	
	386	〃	瓶	A II	12.5							420	S	環	A I	10.0	3.7		〃	
	387	〃	小形甕	B II	14.4							421	H	甕	A I	20.3	43.3		〃	
	388	〃	〃	A I	16.0		(20.3)					422	H	〃	A II	19.1	37.5		〃	
	389	〃	〃	C	14.6		(20.5)													
	390	〃	〃	A II	16.0							423	H	環G	II・b ₃	13.5	(3.7)		1/2	
	391	〃	壺	A I	21.6							424	KO	〃	〃	12.7	(4.0)		1/2	
	392	〃	〃	A II	9.2							425	H	〃	b ₃	11.6	(2.8)		1/2	
	393	〃	〃	D	(8.0)		(20.8)				口縁部欠・体部1/2	426	KO	手捏ね環B	b ₄	8.4	4.7		ほぼ完存	
	394	S	提瓶	A II	18.5		33.7	5.3			ほぼ完存	427	H	鉢	A II・b ₄	13.4	(7.5)		1/2	
	395	H	甕	A	21.1		35.6	7.1			〃	428	〃	鉢	〃	14.7	(10.9)		1/2	
396	〃	〃	A I	19.8				429	〃	〃	A I・c ₃	19.2	10.8	ほぼ完存						
397	〃	〃	A	22.7				430	KO	鉢	B I・b ₄	17.2	13.4	〃						
398	〃	〃	A I	20.3	(40.2)		1/2口縁ゆがみあり	431	H	高杯	A	16.0	(15.8)	1/4						
399	〃	〃						432	〃	環F	II・b ₃	11.0	6.2	完存・器表剥落						
36	400	KO	環G	II・b ₃	13.8	3.5		1/2	住	S	433	〃	小形壺	B	12.1	(10.0)	1/2	考		
	401	〃	〃	b ₃	13.8	3.3		1/2			434	〃	〃	A II	11.2		1/2			
	402	H	〃	b ₂	13.0	4.5		1/2			435	〃	甕	〃			底部			
	403	KO	〃	d ₂	14.5	(5.2)		1/2			436	〃	壺	〃			底部			
	404	H	〃	c ₄	13.8	(7.8)		1/2			437	〃	壺	A			(8.5)			
	405	H	鉢D	II・b ₃	14.0	8.2		1/2			438	〃	〃	A II	15.3	19.7	9.5		ほぼ完存・器表摩耗	
	407	〃	高杯	B	14.3			1/2			439	S	蓋	〃	11.5	3.7	1/2			
	408	〃	小形甕	A II	13.2			1/2			440	〃	提瓶	C	5.3	18.1			ほぼ完存	
	409	〃	手捏ね甕	B II	13.2	12.8		ほぼ完存			374	H	甕	B	20.1	29.8	ほぼ完存・口縁部大 きくゆがみ			
	410	〃	小形甕	B II	15.3			1/4			375	〃	〃	〃	22.5	40.7	ほぼ完存			
	411	〃	甕	A	18.6			1/2											1/2	漆黒彩
	412	〃	甕	A	21.4		8.0	体下半・底部			376	H	環G	II・b ₃	12.4	4.1				
413	〃	甕	A				1/2													
37	414	H	環G	II・b ₃	12.5	3.7		1/2	住	H	117	H	甕	A	21.6			漆黒彩		
	415	〃	環K	I・b ₄	13.5	(6.5)		1/2			120	〃	壺	A II	15.6					
	416	〃	小形壺	C I・b ₄	11.5	(7.2)		1/2			122	H	環	II	10.8	5.5				
	417	KO	高杯	A	17.0			1/2			123	〃	環G	II	13.0	3.1				

遺構	図No.	種別	器	種	口径cm	器高cm	底径cm	備	考
土8 坛	128	H	甕 A II		13.0				
土 坛	129	H	环K II・b ₄		11.1	4.6		漆黒彩	
	130	KO	环I b ₂		11.5	4.5		底部欠	
	131	H	环A II・a ₀		11.9				
	132	〃	环K II・b ₁		12.2	(5.6)		口縁部片	
	134	〃	小形甕 A II		12.9				
	135	〃	壺 A II		16.8			口縁部片	
	9	137	S	壺		18.0	11.9	脚部	
142	142	H	高环						
土 坛	143	H	甕 A		21.5			口縁部片	
	144	〃	环G II		12.8	(4.0)			
集 石	146	H	环G II・b ₃		13.3			漆黒彩	
	147	〃	环D II・b ₄		12.1	4.3		1/8	
	148	〃	环D b ₃		14.2	3.7		漆黒彩	
	149	〃	环D II・b ₄		12.3	(4.7)			
	152	〃	环G		12.2	(3.2)			
	153	S	环C		17.0	3.7			
	154	H	小形甕 A II		13.1				
	155	〃	甕 A		21.3				
	157	〃	小形甕 A II		11.1				
	163	〃	高环					脚部片	
集2 石	167	S	环C		10.9	5.2			
	168	S	环B				11.0	底部片	
	441	H	环G II・b ₃		12.5	3.7		1/8	
	442	〃	环G II・b ₂		13.4	(4.2)		1/8	
	443	〃	环G II・b ₂		12.2	5.0		1/8	
	444	〃	环 a ₄		16.9	(4.5)		1/8	
	445	〃	鉢 A II・b ₃		11.3	6.4		ほぼ完存	
	446	〃	甕		22.0			1/8	
	447	〃	〃		22.6			1/8	
	448	〃	小形甕 A I		16.0			1/8	
	449	〃	〃		18.0			1/8	
	450	〃	鉢?		20.6			1/8	
	451	H	小形甕 B I		17.0	(19.2)		1/8	
	452	S	环C II・a ₃		12.2	3.3	7.0	1/8	
	453	H	鉢		11.1	(11.0)		1/8	体下半欠・器表剥 落
	454	K	碗 A II・a ₂		15.0	5.8	高台7.4	完存	
1	455	H	环D b ₃		14.4	(4.6)		1/8	
	456	〃	甕 A II		15.0			1/8	
	457	S	环		9.9	2.8		1/8	
集2 石	458	H	环E b ₄		14.1	4.9		1/8	
	459	H	环G II・b ₃		12.4	3.8		1/8	
	460	KO	鉢C II・a ₁		13.4	4.6		1/8	

別表 2 金鑄場遺跡出土土銚一覽

遺物番号	出土遺構	挿図No.	長さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損状態	備考
1	10号住	1	47	10	3	4.1	IBa	I	床面
2	17号住	2	(33)	8	2.5	(2.3)	IBa	IIa	覆土
3	〃	3	46	9	2	3.2	IBa	I	覆土
4	35号住	4	30	12	5	3.2	IC	I	
5	36号住	5	38	14	3	6.3	IBa	I	覆土
6	〃	6	41	26	6.5	(10.0)	IIb	IV	覆土
7	〃	7	36	27.5	8	(14.7)	IIA	IV	覆土
8	〃	8	51	49	7.5	80	IIA	I	
9	その他	9	(24)	10	2.5	(2.2)	IBa	IIIa	
10	〃	10	27	9.5	2	1.6	ID	I	
11	〃	11	(22)	7	1.5	(0.9)	ID	IIa	
12	〃	12	28.5	8	2	1.5	ID	I	
13	〃	13	34	11	3	4.1	IC	I	
14	〃	14	50	35	6	60	IIb	I	
15	〃	15	43	32	7	32	IIb	I	
16	〃	16	40	30	6.5	20	IIb	I	

遺物番号	出土遺構	挿図No.	長さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損状態	備考
17	その他	17	40	27	5	(16.6)	IIb	IV	
18	〃	18	27	29.5	7.5	(25.2)	IIb	IIb	
19	〃	19	37	26	6.5	25.4	IIb	I	
20	〃	20	47	35	7	60	IIb	I	
21	〃	21	39	(28.5)		(12.0)	IIb	IV	
22	〃	22	50	34	8	60	IIA	I	
23	〃	23	39	27.5	6.5	30	IIA	I	
24	〃	24	42	31.5	9	50	IIb	I	
25	〃	25	42	31	6.5	(20.0)	IIA	IV	
26	〃	26	39	28	7	(20.0)	IIA	IV	
27	〃	27	21.5	34	7	(15.0)	IIb	IIa	
28	〃	28	(34)	30	8	(15.0)	IIb	IIb	
29	〃	29	40	25.5	7.5	(20.0)	IIA	IIb	
30	〃	30	(34)			(6.0)	IIA	IIbIV	
31	〃	31	35	32	7	15	IIA	I	
32	〃	32	40	27.5	5.5	30	IIA	I	

別表3 十二ノ后遺跡土坑一覽

No.	プラン	大きさ (cm)			状 態	出 土 遺 物			図 番 号		備考
		長軸	短軸	深さ		鉢	土 器	石器・他	遺構	遺 物	
1	円	92	84	40	12住切	深	有尾, 前縄3		7	143	縄前
2	不橢	102	67	50		〃	曾利IV	石鏃	3	〃	縄中
3	隅長	124	62	44		〃	有尾, 諸A, 黒浜3	剥片石器3, 凹石	〃	143・75	縄前
4	円	100	93	29		〃	縄前, 縄後		〃	143	縄後
5	〃	103	97	32		釣	釣手	石皿	〃	75	縄中
6	長橢	87	53	30	10住・42住切石6ヶ落込	深	堀・内5		〃	143	縄後
7	橢	78	57	33		〃	花積4, 木島, 中越2		〃	〃	縄前
8	〃	91	62	26	12住切				7		
9	方?	82	/	57	土10・土12切, 9住上貼床	深	前縄織6	石鏃2, 炭化物多	〃	144	縄前
10	橢	102	79	80	切一土9	〃	中越, 前縄織, 黒浜2		〃	〃	〃
11	円	77	75	13		深浅	諸A, 諸B6, 北下II		7	144	縄前
12	方	88	87	58	R・B混入土充満, 底に平石, 9住上貼床	深	中越	石鏃	5・7	〃	〃
13	円	107	96	32		〃	諸B5		7	〃	〃
14	橢	78	67	28	19住切				13		〃
15	方	95	87	62	9住に貼床	深	木島, 中越, 黒浜4	石鏃, 石匙	5・14	144	〃
16	方?	61	/	15	6住切, 切19土	〃	黒浜2		6	〃	〃
17	方	97	91	63	石落込R・B, 混入褐色土層	〃	中越2, 繊維		5	〃	〃
18	〃	94	84	72	〃	〃	中越, 木島, 清水上, 諸B		〃	〃	〃
19	〃	85	76	58	〃	〃	中越, 花積?, 黒浜		5・6	〃	〃
20	橢	81	55	47	11住接				8		〃
21	橢	75	56	35	11住接				8		〃
22	〃	118	110	59	20住・23住接	深	花積2, 木島2, 中越9, 諸A5		14・65	146	縄前
23	方?	108	108	87	石6ヶ落込, 23・24・26住接	〃	諸2	凹石3: 磨石・敲 打器3: 磨石斧	〃	〃	〃
24	円	98	92	55		〃	花積下		〃	〃	〃
25	橢	174	124	40	攪乱多, 須恵・灰釉混入, 大型ピット	〃	諸A, 北下II, 縄のみ2	凹石, 石鏃3, 瑛 状耳飾	14	〃	〃
26	〃	105	73	77	上面に焼土, 内部に炭少	〃	関山	石鏃3	14・65	〃	〃
27	長	123	97	59	20・23住切, 3連続			石匙	〃		〃
28	橢	100	90	42	23住接				14		〃
29	方?	63	60	26					62		〃
30	不橢	100	87	52		深	諸A		〃	146	縄前
31	円	87	86	28					62		〃
32	不整	97	80	52					〃		〃
33	五	110	110	40	2~5住に貼床	深	諸B		4・5	146	縄前
34	方	100	95	38	67住連, 石あり	〃	花積9, 中越3, 木島8	石錐, 石槍?	62	〃	〃
35	橢	90	72	19		〃	中越5, 花積	石鏃	〃	144	縄前
36	〃	114	79	23		〃	木島, 中越5, 黒浜?		〃	〃	〃
37	〃	116	88	30		〃	関山3, 中越2, 諸B6, 中2		〃	〃	縄中
38	円?	84	/	19	60住連	〃	木島, 黒浜		〃	〃	縄前
39	橢	97	82	47		〃	〃, 中越3, 関山, 花積, 諸B, 他5		〃	145	〃
40	〃	85	69	23		〃	花積, 中越, 黒浜	石鏃, 磨石斧	〃	〃	〃
41	方	85	61	31		深	黒浜, 諸A, 北下II, 木島, 他2	凹石2	13	145	〃
42	橢	93	70	20		〃	花積, 中越	石鏃2	〃	〃	〃
43	〃	108	81	42		〃	黒浜4		10	〃	〃
44	円	70	62	30		〃	曾利II, 堀内		13	145・146	〃

No.	プラン	大きさ(cm)			状 態	出 土 遺 物			図 番 号		備考
		長軸	短軸	深さ		鉢	土 器	石器・他	遺 構	遺 物	
45	円	107	101	62	上面に礫多, 21住一切	深	曾利Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ12	土製円板, 石鏃, 乳棒状斧	12	146・147	縄中
46	不楕	104	98	46		〃	中越4, 北下Ⅲ, 織維縄	凹石	62	147	縄前
47	〃	95	87	43	48住連	〃	中越4, 関山?	〃	〃	〃	〃
48	〃	/	75	38	47住連	〃	織維縄2, 黒浜	磨石斧	〃	〃	〃
49	方?	75	67	40	50・97・51住連	〃	諸B2		〃	〃	〃
50	方	60	60	29	49・97・51住連				〃	〃	〃
51	方	78	72	35					62		
52	〃	90	80	36					〃		
53	楕	112	84	25		深	諸A, 中?		〃	147	縄前
54	〃	109	97	24					〃		
55	方	97	84	23					〃		
56	楕	95	73	34	95住連				〃		
57	方?	63	55	39			土師器, 短頸壺, 須恵环		〃	147	平後
58	不楕	105	60	22					〃		
59	長	100	87	32				石匙	〃		
60	不整	/	80	27	38住連	深	花積, 織維3		〃		縄前
61	不楕	75	60	29		深	中越, 諸2	フレイク	62		縄前
62	〃	85	66	40		〃	花積, 諸		〃		〃
63	方	83	62	77		〃	中越2, 木島, 諸2		10		〃
64	楕	120	84	65	15住内				〃		
65	不楕	100	87	40	〃				〃		
66	隅方	179	148	77	大型ピット, 内部に石	深	大木10, 深鉢	石匙, 石鏃2, 原石	13	75	縄中
67	不楕	70	70	24	34住連	〃	花積		62		縄前
68	方	94	95	32	69住連				〃		
69	不楕	73	/	25	68住連				〃		
70	方	81	77	30					〃		
71	五	210	161	52	31・32住に貼床	深	諸B4, 縄前, 須恵器片		17		縄前
72	楕	/	63	25	31・32住に貼床, 土71連		土師器, 暗文坏片, 須恵环カメ片		〃		平後
73	五	114	88	70	〃 74住連	深	諸B2		〃		縄前
74	〃	99	68	50	〃 73住連	〃	中越3, 清水上, 諸B2, 堀内		〃		縄後
75	楕	103	85	75	32住に貼床	〃	花積, 諸B3, 中	凹石	〃		縄中
76	〃	85	68	47	32住に貼床, 78住連	〃	土師甕片		〃		平後
77	不楕	132	93	55	〃	〃	堀内13	骨片, 磨石2	〃		縄後
78	円	98	91	60	〃 76住連			石鏃2	〃		
79	楕	87	72	44	竪穴2の壁切				13		
80	円	55	53	43			土師甕片3		17		平後
81	円	80	74	45	32住重	深	縄?		17		
82	〃	85	80	68	竪穴2壁切				13		
83	楕	135	/	125	84住連	深	諸B7, 堀Ⅱ57	凹石2, 打石斧2, 磨石鏃5, 筒茶製品	19		縄後
84	〃	150	/	107	83住連	〃	堀内3	磨石鏃	〃		〃
85	〃	78	54	42	85~94住連				11・62		
86	方?	100	/	28	〃				〃		
87	楕	90	/	40	〃				〃		
88	長	82	/	55	〃				〃		
89	〃	79	/	57	〃				〃		
90	長?	/	68	55	〃				〃		

No.	プラン	大きさ (cm)			状態	出土遺物			図番号		備考
		長軸	短軸	深さ		鉢	土器	石器・他	遺構	遺物	
91	不楕	70	/	43	85~94住連				11・62		
92	長	83	/	23	〃				〃		
93	不楕	/	62	13	〃				〃		
94	楕	128	/	30	〃				〃		
95	不楕	/	55	18	56住連				62		
96	方	75	62	24					〃		
97	楕	75	60	12	底に石				〃		
98	不楕	100	62	30	〃, 竪穴2壁切				13		
99	楕	75	62	30	〃				〃		
100	円	132	116	60	46住壁重, 土108切・石有				24		
101	円	112	108	47	46住接, 石10数コ	深	諸B 5	木炭, 黒曜石チップ	24	147	縄前
102	楕	128	98	22	52住重				27		
103	長	136	98	18	54住重				26		
104	隅方	107	80	44	土105切	深	曾利後半深鉢把手		16	146	縄中
105	楕	/	92	26	切土106・104	〃	諸B 2, 織縄		〃	147	縄前
106	円	66	64	28	土105切	〃	諸C 2		〃	〃	〃
107	〃	102	97	46		〃	諸B 2, 中初	骨片	〃	146・148	縄中
108	楕	/	108	20	46住切, 切土100		弥生庄の烟壺		24	148	弥生
109	方	78	55	30		深	諸B 4		29	〃	縄前
110	〃	62	55	30		〃	諸B		〃	〃	〃
111	円	91	88	10	焼土	深	前縄4, 諸A, 諸B, 北下Ⅲ		63	148	縄前
112	長?	137	78	35	2ヶ連	〃	諸B 5, 黒浜4, 北下Ⅲ 2		〃	〃	〃
113	楕	130	77	64	切142住	〃	中初2		54	〃	縄中
114	〃	65	50	24	91住重	〃	諸A 3		31	〃	縄前
115	〃	110	95	45	2ヶ連, 底に焼土		須恵環, 土師甕片少		〃	〃	平後
116	円	112	106	26	139住重				32		
117	方	107	88	62	切142住				54		
118	楕	/	30	45	小形				32		
119	円	130	120	30	底に小穴4ヶ	深	諸A~B 4		31	148	縄前
120	楕	134	127	77	65住切, 2段底		須恵器杯, 灰釉瓶底, 淡黄釉皿(江戸以降)		〃	〃	江戸
121	不楕	166	130	46	上部石3ヶ		須恵環, 土師環片		31	148	平後
122	楕	144	163	58		深	諸B, 曾Ⅱ 3		29	149	縄中
123	方	113	113	90	141住切, 116住切貼床	〃	後6	磁石, 石鏝2, 黒	46	〃	縄後
124	楕	82	63	32	内部に石	〃	諸B 7, 北下Ⅱ~Ⅲ		50	〃	縄前
125	方	80	75	22		〃	曾利		32	〃	縄中
126	楕	90	60	20	101住重				32		
127	隅長	97	73	36		深	諸B 5, 諸A 2, 北下Ⅱ 3		27	149	縄前
128	円	124	114	51		〃	諸B6, 須恵環片, 土師器内黒環		〃	149・153	平後
129	〃	114	105	33		〃	織縄2, 前縄8		16	153	縄前
130	楕	230	157	42	石多数	〃	諸A 2, 諸B, 他		29	〃	〃
131	円	115	112	22	拳大の石充滿	深	諸B 8	中心に石皿半欠品	27	150	縄前
132	不方	200	175	82	円形土塼2ヶか		須恵蓋環片, 土師環片		16	153	平後
133	円	135	120	34	焼土, 4住切			大観通宝	21		
134	〃	110	106	32	41住の下?, 石13落込	深	縄中	石皿	〃	150	縄中
135	不楕	190	155	51	石多, 南袋状				27		
136	楕?	/	110	27	切95住	深	諸A~B 2, 北下Ⅲ		44	150	縄前

No.	プラン	大きさ (cm)			状 態	出土遺物			図 番 号		備考
		長軸	短軸	深さ		鉢	土 器	石器・他	遺 構	遺 物	
137	楕	70	63	25		深	中初5		51・52	153	縄中
138	〃	120	60	63	2つの土坑か		須恵高台坏片		63	〃	平後
139	円	110	110	35	底に石		須恵甕片, 土師甕底		31	〃	〃
140	楕	165	116	65	124住接	深	諸B 3, 土師内黒坏片 3		49・52	150・153	〃
141	不整	148	137	86	124住壁一重, 2段底, 3土坑の連絡か				48・52		
142	楕	130	110	28	127住・63住重	深	諸B 2		51	150	縄前
143	不楕	105	73	18	〃	〃	中初2		〃	〃	縄中
144	隅方	33	98	29	63住重		青磁	開元通宝, 景徳元寶	53		中世
145	不楕	145	100	34	〃, なべ底状				51		
146	隅方	91	75	132	小型2ヶ重	深	堀内10		36・45	150	縄後
147	円	130	124	85	140住重	〃	諸B		64		縄前
148	〃	56	50	41			カワラケ片		63	153	中世
149	〃	49	46	13			〃		63	〃	〃
150	長	102	42	32	二つの土坑か		須恵甕片		〃	〃	平後
151	円	47	48	32					63		
152	〃	48	45	23					〃		
153	〃	32	29	61			須恵坏片高台付		〃	153	平後
154	楕	30	25	28					〃		
155	円	42	40	62		深	前縄		〃	150	縄前
156	楕	45	32	43		〃	諸磯B		〃		〃
157	不整	140	110	42	3つの土坑か				〃		
158	方	65	57	16					〃		
159	楕	113	90	16		深	堀内		42	150	縄後
160	〃	108	92	68		〃	曾利V 6, 堀内 3		52・64	150・151	〃
161	円	70	67	61				元祐通宝	63		
162	〃	44	44	64					〃		
163	〃	44	41	50	2つの土坑か				〃		
164	〃	54	55	63					〃	151	縄中
165	方	74	55	18	覆土に大小の礫充滿	深	中初 須恵坏片		〃		平後
166	不楕	72	58	41		深	諸B 3, 前縄 3, 他 2		51・52	151	縄前
167	方	131	106	22	底に小石がしかれる	〃	前縄 3, 神の木		〃	〃	〃
168	楕	105	107	40		〃	諸A 3, 諸B 5		36・45	〃	〃
169	〃	130	115	70		〃	黒浜, 諸A, 諸B		〃	〃	〃
170	不楕	150	86	84		〃	加B 5		〃	〃	縄中
171	楕	100	/	112	86住接, 土172・178連	深	前縄 3		36・45	151	縄前
172	不楕	122	82	40	土172・178連	〃	堀内 4		〃	〃	縄後
173	楔	135	55	25	135住切	浅	堀内II (完形浅鉢)		〃	75	〃
174	長楕	180	100	36	〃	深	諸B, 曾II 10	磨石斧	〃	151・152	縄中
175	長	108	52	27		浅	堀内II (完形浅鉢)		45	75	縄後
176	不楕	170	99	30	2つ連結	釣	釣手, 堀内 4		52	152・153	〃
177	円	56	53	48					36		
178	楕	85	/	69	土171・172連, 86住壁接		左の畑		36・45	153	弥生
179	〃	110	82	68	124住連				52		
180	円	75	70	39		深	曾利I		〃	152	縄中
181	楕	130	105	52	土182接	深	堀内 4		29	152	縄後

No.	プラン	大きさ (cm)			状 態	鉢	出 土 遺 物		図 番 号		備考
		長軸	短軸	深さ			土 器	石器・他	遺 構	遺 物	
182	楕	98	62	49	土181接	深	諸A, 諸B 2		29	152	縄前
183	方	89	75	83		〃	諸B		52	〃	〃
184	六	113	117	76		〃	諸B, 後初		63	〃	縄後
185	不整	142	102	56	2つの土拡か	〃	諸B 2		〃	〃	縄前
186	円	126	106	63	北側袋状	〃	堀内3	土製円板	〃	〃	縄後
187	隅長	116	72	62	74住重	〃	花積, 諸B, 前縄		35	〃	縄前後
188	楕	135	110	42	〃	〃	縄後		〃	〃	縄後
189	〃	115	90	60	〃				〃		
190	方	105	78	60	74住接				〃		
191	楕?	170	/	15	73住切	深	堀内3		32	152	縄後
192	楕	112	87	41	内部に石あり, 柱列2				38		
193	〃	110	89	26	〃				〃		
194	〃	98	91	26	〃				〃		
195	〃	113	73	30	柱列2				〃		
196	〃	90	92	22	〃				〃		
197	〃	67	58	42	〃				〃		

註 「プラン」欄は「形」を省略してある。「状態」欄は次のように省略してある。

12住切： 12号住に切られる。切12住： 12号住を切っている。「接」・「重」・「連」は「接する」・「重複する」・「連続(結)する」の略である。

「出土遺物」欄の土器の項は形式名を略してあるが、それにつづく数字は破片数を示す。

十二ノ后遺跡石器一覽表の註

- 1 出土地点は、○号住居址→○住、○号堅穴→○堅、○号土坑→○ド、遺構外→外と略記し、それぞれに遺構毎の通し番号を付した。フは覆土、ユは床面、Pはピット内出土の意味である。
- 2 破損により型式の不明の部分は・とした。
- 3 計測値はいずれも誤差を含んでいる。長さでおよそ±0.5mm、重さで±0.05g、石匙のつまみ角は±2°。特に刃角とあるのは、その数字±5°位の内にはほぼ納まる目やすと解して頂きたい。
- 4 ()内は破損器の残存値、— は不明である。
- 5 石質は次のように記号化した。
黒曜石→ob、チャート、チャート質→ch、珪質→si、粘板岩→sl、ホルンフェルス→ho、砂岩→sa、緑泥片岩→sc、石英→qu。
- 6 破損状況欄の空白は総て完形をあらわす。
- 7 石匙とスクレイパーにおいて
 - 表では型式名と、刃部に関する計測値使用痕は対応する位置にある。
 - 使用痕は、ことわらない限り刃部の使用痕であり、ただ単に線状痕とあるのは刃部と平行な長目のものをさす。
 - 刃部ふくらみ値は、刃部両端を結んだ線から最突出部、最凹部(一)までの距離である。
- 8 小型有扶頭磨石器の使用痕のうち、扶入部をめぐる扶入部を結ぶ線に直交する方向の短い線状痕(扶入部に線状痕と略記)以外はすべて、その部分を除いた部分にみられるものである。
- 9 使用痕のある剥片・石核・原石での使用痕部の計測、表記は、スクレイパーの刃部に準ずる。
- 10 小形石器一覽表中の使用痕・備考欄に記入されている略語は下記の内容を示している。
 - 石器の部位に関するもの
表裏面→両面、表面→表、裏面→裏、先端→先、基部→基、稜線→稜、縁辺→縁、側辺→側、下端→下、刃部→刃、つまみ→撮、軸部→軸、片脚→片
 - 使用痕に関するもの
線状痕→線痕、磨耗→磨、まめつ→まめ、つぶれ→つ・つぶ、点状痕→点痕、磨滅激しい→磨多、刃こぼれ→刃こぼ・こ
 - その他
局部磨製→局磨、加工→加、抉り状→抉り、側辺と直交する→側辺直交、使用痕部に平行する→使用痕平行、縁辺と直交する→縁辺直交・縁直交、縁辺と平行な→縁辺平行、不定方向→不方、縁辺・側辺と斜交する→側辺斜交

別表4 十二ノ后遺跡出土石器一覽

石鏃

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長さ 指數	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長さ 指數	破損 状況	備考	図番号	
1	1住-1	BA ₁ BAA	35.5		18.8	3.9	2.0	189		ch.	212-1	29	-15	BA ₁ D ₁ CB	20.0		15.0	2.7	0.6	133		片欠	-29	
2	-2	BA ₁ BBB	21.5		(12.7)	3.7	(0.6)	—	B		-2	30	-16	BCCBB	23.6	20.2	18.0	3.8	(1.4)	112	B		-30	
3	-3	BA ₁ BBA	26.3		17.4	3.0	(1.0)	151			-3													
4	-4	BA ₁ BBA	23.9		13.2	4.0	(0.7)	181	B		-4	31	-17	BCD ₁ ・・	(17.8)	(13.3)	18.1	3.0	(1.1)	—	A		-31	
5	-5	BA ₁ CBB	19.5		15.1	4.2	1.0	129			-5	32	-18	BDD ₁ ・A	(35.6)	(26.6)	9.0	6.5	(1.9)	—	A		-32	
6	-6	BA ₁ CBB	21.3		(16.1)	3.6	(0.8)	—	B		-6	33	-19	BDCBB	(32.1)	21.1	23.1	6.5	(3.6)	91	B		-33	
7	-7	BA ₁ CBB	(20.0)		20.6	7.2	(2.6)	—	A		-7													
8	-8	BA ₁ D ₁ BB	22.5		13.6	3.8	(0.6)	165	B		-8	34	11住-1	BA ₁ AAB	22.7		(13.5)	3.6	(0.8)	—	B		215-5	
9	-9	BA ₁ D ₁ BB	(20.0)		(14.6)	3.9	(0.8)	—	D		-9	35	-2	BA ₁ BBB	18.2		14.2	3.7	0.6	128		ch.	-6	
10	-10	BA ₁ D ₁ CC	15.5		16.7	2.5	0.4	93			-10	36	-3	BA ₁ CBB	22.8		15.6	4.1	1.0	146		ch.	-7	
11	-11	BA ₁ ・・・	(14.7)		(16.0)	4.1	(0.8)	—	A		-11	37	12住-1	BA ₁ ABB	21.9		15.9	3.8	0.8	138			-16	
12	-12	BCCCC	19.9	16.6	18.8	4.7	1.3	88			-12	38	-2	BA ₁ BBB	27.5		18.6	3.0	0.8	148			-17	
13	-13	BDCBB	24.9	15.8	11.0	5.8	1.4	144			-13	39	-3	BA ₁ BAB	20.9		13.1	3.0	0.4	160			-18	
14	-14	BA ₁ D ₁ CB	(21.2)		21.0	3.1	(0.8)	—	A	片欠	-14	40	-4	BA ₁ BBA	21.1		16.8	4.0	0.7	126			-19	
15	6住-1	BBD ₁ EB	23.8		16.5	5.0	2.1	144			213-10	41	-5	BA ₁ BBB	19.5		13.6	3.2	0.5	143			-20	
16	8住-1	BA ₁ AAB	15.7		13.6	3.2	(0.5)	115			-15	42	-6	BA ₁ BBB	19.1		(12.6)	3.1	(0.6)	—	B		-21	
17	-2	BA ₁ B・B	(22.3)		18.8	3.4	(0.9)	—	A		-16	43	-7	BA ₁ BBB	16.6		(16.1)	2.5	(0.5)	—	B		-22	
18	-3	BA ₁ BBB	(15.7)		18.5	4.0	0.8	—	A		-17	44	-8	BA ₁ B・B	(11.1)		15.2	2.9	(0.4)	—	A		-23	
19	-4	BA ₁ BBB	20.7		14.3	2.0	0.4	145			-17	45	-9	BA ₁ BBB	13.6		13.8	3.0	0.4	99			-24	
20	-5	BA ₁ CBB	18.0		(13.2)	2.9	(0.4)	—	B	片欠	-18	46	-10	BA ₁ CAB	21.0		14.3	3.5	0.6	147			-25	
21	-6	BA ₁ D ₁ BB	(17.0)		(12.1)	2.0	(0.3)	—	D		-19	47	-11	BA ₁ CBB	22.2		14.3	4.9	1.0	155			-26	
22	-7	BA ₁ CBB	23.1		16.6	4.3	0.9	139			-20	48	-12	BA ₁ BBA	21.8		13.9	2.0	0.4	157			-27	
23	-8	BA ₁ CBB	18.7		13.3	2.1	0.4	141		線痕	-21	50	-13	BA ₁ BBB	(19.1)		(14.3)	2.4	(0.5)	—	D		-28	
24	-9	BA ₁ CBB	17.8		17.0	4.0	0.9	105			-22		-14	BA ₁ BBA	19.1		14.2	3.2	0.5	135			-29	
25	-10	BA ₁ CBB	18.0		17.0	3.6	0.9	106		先欠	-23	51	-15	BA ₁ CBB	16.8		13.0	2.1	0.3	129			-30	
26	-11	BA ₁ D ₁ BB	19.8		12.8	3.3	0.7	155			-24	52	-16	BA ₁ CBB	17.3		14.7	2.4	0.5	118			-31	
27	-13	BA ₁ D ₁ CB	18.7		13.0	3.0	(0.5)	144	B		-25	53	-17	BA ₁ CBB	17.4		13.6	2.9	0.5	128			-32	
28	-14	BA ₁ D ₁ BB	23.0		13.5	4.0	0.9	170		片欠	-27	54	-18	BA ₁ CBB	14.8		13.0	2.3	0.4	114			-33	
											-28	55	-19	BA ₁ CBB	15.7		13.2	2.7	0.4	119			-34	

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長さ 指数	尖頭部 破壊 状況	備考	図番号
56	12住-20	BA ₁ CBB	14.2		13.0	2.2	0.3	109			215-35
57	-21	BA ₁ CBB	14.0		13.1	2.5	0.3	107			-36
58	-22	BA ₁ D ₁ CA	24.8		13.6	3.6	1.1	182			-37
59	-23	BA ₁ D ₁ BA	18.2		10.5	3.3	0.6	173			-38
60	-24	BA ₁ D ₁ BB	24.6		19.6	6.0	2.1	126			-39
61	-25	BA ₁ D ₁ BB	22.1		14.7	3.1	1.0	150	ch.		-40
62	-26	BA ₁ D ₁ CB	16.7		14.5	2.7	0.5	115			-41
63	-27	BA ₁ D ₁ CB	14.6		14.6	3.0	0.5	100			-42
64	-28	BA ₁ D ₁ CB	14.5		14.5	2.9	0.4	114	ch.		-43
65	-29	BA ₁ D ₁ CB	15.2		13.3	2.6	0.4	114			-44
66	-30	BA ₁ D ₁ CC	13.1		14.6	2.1	0.3	90			-45
67	-31	BA ₁ D ₁ DB	19.2		19.1	4.7	0.8	101			-46
68	-32	BBBBCC	23.5		26.0	9.0	3.3	90			-47
69	-33	BBBBBB	17.8		18.0	4.9	1.2	99			-48
70	-34	BBBEC	15.0		17.2	3.8	0.8	87	先欠		-49
71	-36		20.0		14.0	2.9	0.7	103			-51
72	-37		25.8		16.4	6.0	2.0	104			-52
73	-38		23.6		15.0	4.9	1.5	105			-53
74	-39		26.9		20.0	5.0	2.6	106			-54
75	-40		30.2		13.9	4.4	1.9	107			-55
76	-41		20.5		20.0	3.8	1.0	108			-56
77	15住-1	BA ₁ A ₁ B	(14.7)		(15.6)	2.8	(0.5)		D		218-1
78	-2	BA ₁ ACC	13.2		14.5	3.6	0.5	91			-2
79	-3	BA ₁ BAB	18.1		14.4	4.8	0.8	126			-3
80	-4	BA ₁ BBB	19.4		14.9	3.0	0.6	130			-4
81	-5	BA ₁ BBB	27.0		20.4	7.2	2.7	132			-5
82	-6	BA ₁ CCB	24.5		(17.8)	4.0	1.2				-6
83	-7	BA ₁ CAB	19.2		13.0	2.9	0.5	148		ch.	-7
84	-8	BA ₁ CCB	15.1		13.3	2.2	0.4	114			-8
85	-9	BA ₁ CBB	17.6		13.9	2.9	0.5	127			-9
86	-10	BA ₁ CBB	(14.6)		(13.7)	2.5	(0.5)		C		-10
87	-11	BA ₁ D ₁ PB	(21.7)		(17.3)	5.2	(1.6)				-11
88	-12	BA ₁ D ₁ CB	19.0		13.0	3.5	0.8	146			-12
											219-1
			13.8		13.5	3.0	0.3	102			-1
			24.7		17.0	2.8	0.7	145			-2
			24.5		(14.4)	(3.1)	(0.1)		B		-3
			18.1		15.5	2.1	0.4	117			-4
			17.9		15.5	3.2	0.7	115	ch.		-5
			16.4		14.6	3.0	0.4	112			-6
			16.1		13.6	3.4	0.4	118			-7
			15.7		13.6	2.0	0.2	115			-8
			25.5		(16.5)	5.3	(1.4)		B		-9
			22.0		(14.9)	3.1	(0.5)		B		-10
			(12.9)		14.0	2.4	(0.3)		A		-11
			13.0		12.8	2.7	0.3	102			-12
			12.0		12.2	1.9	0.2	98			-13
			(22.5)		(15.0)	3.6	(0.9)		B		-14
			(16.1)		18.0	4.4	(1.2)		A		-15
			20.9		18.5	5.0	1.4	113			-16
			19.6		14.0	2.5	0.6	140			-17
			21.1		16.0	3.0	0.6	132			-18
			18.0		15.9	2.8	0.6	113			-19
			18.3		12.0	4.0	0.6	153			-20
			15.2		(9.7)	3.0	(0.3)		B	ch.	-21
			20.2		(15.0)	3.2	(0.6)		B		-22
			20.2		12.9	3.2	0.6	157			-23
			17.2		(11.8)	2.7	(0.4)		B	先欠	-24
			(21.0)		(22.1)	4.2	(2.1)		D		-25
			27.1		17.4	6.6	2.1	156			-26
			26.1		18.3	5.9	2.2	143			-27
			(24.1)		(16.2)	3.2	(1.0)		D		-28

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長さ 指数	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長さ 指数	破損 状況	備考	図番号	
121	16住-29	BBCBB	24.0		(14.7)	3.1	(0.9)	—	B		219-29	154	21住-2	7 BA,CBB	19.0		14.6	3.1	0.6	130			—2	
122	-30	BBD,CB	24.5		14.5	5.0	1.6	169			30	155	-3	7 BA,CBB	24.8		16.0	5.0	1.4	155		ch.	—3	
123	-31	BBD,BB	23.2		17.9	6.8	(2.1)	—	A		31	156	-4	7 BA,D,BB	20.0		13.6	4.2	(0.8)	147		B	—4	
124	-32	BBD, B	18.0		17.9	3.8	(1.2)	—	A		32	157	-5	7 BA,D,BB	15.5		12.0	3.7	0.5	129			—5	
125	-33	BBD, .	(17.5)		15.1	5.3	(1.1)	—	A		33	158	-6	7 BA,D,CB	24.4		19.3	5.9	2.1	126			—6	
126	-34	BBD,BB	26.2		21.9	7.8	3.4	120			34	159	-7	7 BBBAB	29.1		(22.8)	4.4	(1.7)	—		B	—7	
127	-35	BBD,CB	24.7		20.5	6.5	3.0	120			35	160	-8	7 BBBBB	23.2		(18.8)	3.6	(1.1)	—		B	—8	
128	-36	BBD,CB	17.1		20.8	4.0	1.3	82			36	161	-9	7 BBAAA	28.8		(7.0)	2.6	(0.4)	—		B	狭長	—9
129	-37	BBD,BB	23.6	21.1	15.8	6.5	1.9	134			37	162	-10	7 BBD,CB	24.5		19.4	5.7	2.2	126			—10	
130	-38	BBD,CB	22.0	17.0	17.4	6.8	2.1	98			38	163	-13	7 BCD,CC	22.5	18.8	21.4	4.3	1.9	88			—13	
131	-39	BBD,CB	20.4	15.9	(16.2)	4.7	(1.3)	—	B		39	164	-15	7 BCD,CB	26.0		19.2	7.3	3.2	—			—15	
132	-40	BBD,CB	18.7	16.0	15.4	3.3	0.9	104			40	165	-16	7 AA, . . .	(18.2)		16.0	3.2	(0.9)	—		A	—16	
133	-41	AA,BAB	(18.5)	18.5	13.8	2.7	(0.4)	134	H		41	166	-17	7 . . .CB .	(16.0)		(12.0)	(2.5)	(0.3)	—		F	—17	
134	-42	. . .CB .	(19.8)		(17.1)	(3.2)	(0.7)	—	F		42	167	-18	7 BA,BEC	16.1		20.0	3.8	1.1	80			先欠	—18
135	-43	BA . CB .	19.5		(16.2)	3.3	(0.7)	—	F		43	168	23住-1	7 BA,D,BB	22.9		(15.0)	3.9	0.8	—		B	—26-5	
136	-44	. . .C .	(18.4)		(16.0)	(4.9)	(1.3)	—	F		44	169	-2	7 BA,D,BB	16.7		11.3	3.0	0.5	148			—6	
137	-48	BBD,CB	22.9		21.2	7.0	3.2	108			48	170	-3	7 BA,D,BB	13.5		11.8	2.3	(0.3)	114		B	—7	
138	-78		18.8		14.1	4.4	1.1	—	F		221-3	171	-4	7 BA, . B .	(14.2)		(11.0)	3.0	(0.4)	—		C	—8	
139	17住-1	7 BA,AAB	21.7		15.8	5.0	1.0	137		ch.	224-3	172	25住-1	7 BA,CAB	30.7		(13.2)	2.4	(0.7)	—		B	—15	
140	-2	7 BA,D,BC	12.1		13.0	4.9	0.5	93			4	173	-2	7 BA,D,CB	20.4		14.9	5.0	1.3	137			—16	
141	-3	7 BA,CAB	21.2		14.7	2.3	0.4	144			5	174	-3	7 ACD,DC	22.1	14.0	23.5	8.3	3.2	60			—17	
142	-4	7 BA,CBB	15.5		12.9	2.7	0.3	120			6	175	-4	7 . . .D .	(21.0)		(20.7)	4.6	(2.0)	—		F	—18	
143	-5	P BA,CBB	17.0		12.0	2.6	0.5	142		ch.	7	176	26住-1	7 BA,AAB	(17.5)		15.1	2.9	(0.8)	—		A	—20	
144	-6	7 BA,D,BB	20.6		19.1	3.1	0.9	108			8	177	-2	7 BA,AAB	18.4		18.2	4.1	0.9	101			—21	
145	-7	7 BA,D,BB	18.7		16.2	4.4	0.9	115		側下欠	9	178	-3	7 BA,D,BB	17.0		16.8	1.9	0.4	101			—22	
146	-8	BBCBB	24.0		14.3	2.8	0.8	168			10	179	-4	7 BA,CBB	12.2		12.0	1.8	0.2	102			—23	
147	-9	7 BCD,DC	18.8	12.3	17.3	4.6	1.3	71			11	180	-5	7 BA,CBB	18.2		14.6	4.8	1.0	125			—24	
148	-10		25.2		20.2	6.0	3.1	—			12	181	-6	7 BA,CBC	21.0		(20.0)	3.5	(1.2)	—		B	—25	
149	20住-1	7 BA,AAB	26.1		(15.0)	4.0	(1.0)	—	B		21	182	-7	7 BA,CBB	(19.5)		(14.8)	2.8	(0.6)	—		C	—26	
150	-2	7 BA,AAB	16.2		13.5	3.2	0.4	120			22	183	-8	7 BA,D,BC	15.6		15.9	2.8	0.5	98			—27	
151	-3	7 BA,BLB	(18.8)		14.2	3.3	(0.6)	—	A		23	184	-9	7 BA,D,CC	16.9		19.0	2.7	0.6	89			—28	
152	-4	7 BA,CBB	13.7		10.6	2.3	0.3	129			24	185	-10	7 BA,D,BA	(18.7)		(10.6)	3.0	(0.4)	—			—29	
153	21住-1	7 BA,CAB	23.8		15.2	3.2	0.6	157			25-1	185												

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部の 長さ 指數	破損 状況	備考	図番号
186	26住-11	BA ₁ D ₁ BB	20.3		15.2	5.7	1.6	134		ch.	226-30
187	-12	BA ₁ D ₁ FB	24.5		16.8	3.3	1.2	146		片欠	-31
188	-13	BA ₁ D ₁ CB	19.0		(14.8)	(2.5)	(0.5)	-	B		-32
189	-14	BBBAB	17.1		12.0	3.0	0.5	143			-33
190	-15	BBC**	(19.3)		(15.9)	5.3	(1.3)	-	A		-34
191	-16	BCD ₁ CB	26.3	22.3	18.4	4.2	2.3	121			-35
192	-17	**C**	(15.6)		(16.2)	3.2	(0.9)	-	G		-36
193	27住-1	BA ₁ BCB	13.3		13.5	2.5	0.3	99			227-8
194	-2	BA ₁ CEC	10.3		(13.5)	2.1	(0.2)	-	B		-9
195	-3	BA ₁ D ₁ CB	21.8		15.6	3.6	0.9	140			-10
196	37住-1	BA ₁ D ₁ BB	19.7		15.1	2.3	0.4	130			-13
197	-2	BA ₁ D ₁ CB	16.8		14.6	3.8	0.8	115			-14
198	-3	BA ₁ D ₁ CB	21.4		16.8	2.7	0.7	127			-15
199	-4	BBC**	(19.7)		20.2	5.0	(1.8)	-	A		-16
200	-5	BCBCB	18.5	16.0	16.2	5.0	1.1	99			-17
201	-6	BCCCB	23.0	18.5	19.0	6.5	2.7	97			-18
202	38住-1	BA ₁ AAB	27.7		18.2	5.4	1.8	152			229-1
203	-2	B*ABB	(26.0)		(14.4)	4.9	(1.4)	-	F		-2
204	-3	BA ₁ CBB	19.3		15.5	3.9	0.7	125			-3
205	-4	BA ₁ D ₁ BB	(17.7)		(12.9)	3.1	(0.6)	-	C		-4
206	39住-1	BA ₁ CBB	16.8		15.1	4.4	0.8	111			230-1
207	-2	BA ₁ BBC	13.1		14.8	3.3	0.5	89			-2
208	-3	BA ₁ D ₁ CB	19.7		13.9	2.9	0.7	142			-3
209	-4	BBD ₁ AB	21.0		15.1	5.8	1.5	139			-4
210	46住-1	BA ₁ AAB	(20.1)		17.1	7.0	(1.5)	-	A		-9
211	-2	BA ₁ CAB	21.0		(14.5)	3.1	(0.5)	-	B		-10
212	-3	BA ₁ CBB	27.7		(22.5)	4.1	(1.6)	-	B		-11
213	-4	BA ₁ CBB	26.2		(15.2)	(4.8)	(1.5)	-	B		-12
214	-5	BA ₁ CBB	25.3		(19.1)	2.3	(0.9)	-	B		-13
215	-6	BA ₁ C* ₁ B	(19.9)		19.8	3.7	(0.9)	-	A		-14
216	-7	BA ₁ CCB	20.0		(14.0)	3.2	(0.6)	-	B		-15
230-16		BA ₁ CBB	3.5		15.3	3.5	0.8	136		片欠	230-16
-17		BA ₁ D ₁ AA	3.6		10.7	3.6	0.6	208			-17
-18		BA ₁ D ₁ BB	2.4		17.4	2.4	0.8	122			-18
-19		BA ₁ D ₁ * ₁ B	2.6		13.8	2.6	(0.4)	-	D		-19
-20		BA ₁ D ₁ BC	2.6		15.9	2.6	0.4	95			-20
-21		BA ₁ * ₁ **	2.7		19.8	2.7	(0.5)	-	A		-21
-22		BB** ₁ B	3.2		(13.5)	(3.5)	(0.9)	-	D		-22
-23		BA ₁ D ₁ EC	3.0		21.7	3.0	1.0	78		先欠	-23
-24		BA ₁ CCB	4.0		(19.2)	4.0	(1.3)	-	B		-24
231-6		BA ₁ BAA	3.1		12.0	3.1	(0.6)	-	A		231-6
-7		BA ₁ CBB	3.3		14.2	3.3	0.5	130			-7
-8		BA ₁ CBB	3.0		12.2	3.0	0.4	129			-8
-9		BA ₁ D ₁ BB	2.6		(20.3)	2.6	(0.8)	-	B		-9
-10		BA ₁ D ₁ BB	2.8		(19.9)	2.8	(1.0)	-	C		-10
-11		BBCEC	3.0		23.6	3.0	1.5	78		先欠	-11
-12		BCD ₁ BB	6.3	20.8	19.4	6.3	3.0	107			-12
-13		BDCBB	6.3	19.7	17.0	6.3	2.6	116			-13
-14		BA ₁ D ₁ EC	3.9		20.2	3.9	1.3	86		先欠	-14
-22		BA ₁ AAB	2.8		(15.7)	2.8	(0.6)	-	C		-22
-23		BA ₁ AAB	3.7		11.7	3.7	0.5	153			-23
-24		BA ₁ CBB	2.4		(11.8)	2.4	(0.3)	-	B		-24
-25		BA ₁ CBC	2.5		16.6	2.5	(0.6)	-	B		-25
-29		BA ₁ BBB	3.5		14.2	3.5	0.6	120		先欠	-29
-30		BA ₁ CBA	3.0		(8.7)	3.0	(0.3)	-	B		-30
-31		BA ₁ CBB	3.6		16.7	3.6	0.6	111			-31
-32		BA ₁ D ₁ BB	2.9		(11.0)	2.9	-	-	B		-32
-33		BA ₁ D ₁ BB	3.2		12.3	3.2	0.5	-	A		-33
232-1		BA ₁ AAB	6.1		15.9	6.1	(1.5)	-	B	先磨	232-1
-2		BA ₁ BBB	3.3		18.9	3.3	0.8	123			-2
-3		BA ₁ CBB	2.4		16.0	2.4	0.5	116			-3
233-1		BA ₁ D ₁ BB	2.2		16.1	2.2	0.4	107			233-1

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	
248	56住-2	BA ₁ D ₁ BB	22.5	17.6	4.0	1.3	128				232-15	278	68住-3	BDD ₁ CB	25.5	21.1	12.9	3.7	1.2	164			234-10	
249	-3	BA ₁ D ₁ BB	24.1	19.9	8.3	3.0	121				-16													
250	-4	BCCCB	20.1	15.1	6.2	1.4	105				-17	279	69住-1	BBD ₁ BB	19.1		15.2	6.9	1.7	126			-17	
251	58住-1	BA ₃ CBB	22.3	13.8	2.8	(0.5)	-		B		-19		73住-1	BBBAB	22.0		18.8	4.9	1.5	117			-24	
252	-2	BA ₃ CBB	16.2	13.0	2.7	0.4	125				-20	281												
253	-3	BA ₁ D ₁ CB	21.3	19.3	3.1	0.9	110				-21													
254	-4	BA ₁ D ₁ CB	17.0	(16.0)	3.4	0.8	-		B		-22	282	74住-1	BA ₃ ABB	15.0	(14.2)	4.5	(0.6)	-			B		235-1
255	-5	BA ₁ D ₁ CB	24.0	20.9	5.6	2.3	115				-23	283	-2	BA ₁ D ₁ BB	18.2	15.0	4.1	0.9	121				-2	
256	-6	BBCBB	20.3	18.2	6.8	2.0	112				-24	284	-3	BA ₁ D ₁ BB	19.9	18.3	3.1	0.8	109				-3	
257	59住-1	BA ₁ C ₁	(13.2)	13.9	3.3	(0.5)	-		A		285		-4	BA ₁ D ₁ BB	18.2	15.4	4.0	1.0	118				-4	
258	-2	BA ₁ D ₁ BB	(17.0)	16.9	3.0	(1.0)	-		A		-26	286	-5	BBD ₁ BA	21.1	12.1	4.0	0.9	174				-5	
259	-3	BC ₁ •••	(22.4)	27.2	(4.6)	(2.1)	-		A		-27	287	-7	••D ₁ BA	(19.9)	(9.8)	(4.9)	(0.8)	-			F		-7
260	-4	ACCBA	35.0	27.4	14.9	6.0	3.2	184			-28													
261	61住-1	BA ₃ CBB	22.1		4.6	1.3	116			ch.	-29	288	75住-1	BA ₁ BAB	23.1	15.9	5.1	1.0	145					-12
262	64住-1	BA ₃ CAA	30.0	(14.1)	3.5	(1.1)	-				289		-2	BA ₃ CBB	19.7	13.2	3.5	0.5	149					-13
263	-2	BA ₁ D ₁ BB	15.7	14.4	2.8	0.4	109				-36	290	-3	BA ₃ CAB	18.1	13.0	2.2	0.4	139					-14
264	-3	BA ₁ D ₁ BB	17.1	13.0	3.1	0.5	132			ch.	291		-4	BA ₁ D ₁ BB	20.5	14.6	3.5	0.7	140					-15
265	65住-1	BA ₃ CBB	20.8		3.2	0.6	152				292		-5	BA ₁ D ₁ BB	16.2	13.1	3.5	0.5	124					-16
266	-2	BA ₃ CAB	19.0	12.2	3.1	0.5	156				-2	293	-6	BBD ₁ DA	31.3	16.8	8.3	3.9	186					-17
267	-3	BBCBB	26.2	18.6	6.3	2.3	141				-3	294	-7	BCCAA	21.4	17.8	8.9	4.4	0.9	200		ch.		-18
268	66住-1	BA ₃ BBB	22.9	19.8	8.1	2.3	116				-7	295	81住-1	BA ₃ CBB	13.0	13.8	3.0	0.3	94					236-1
269	-2	BA ₃ CBB	14.8	10.9	2.1	0.3	136				-8													
270	-3	BA ₁ D ₁ BB	24.1	(13.9)	3.4	(0.8)	-				296		-1	BA ₁ D ₁ BB	18.4	12.8	2.3	0.4	144					-4
271	-4	BA ₁ D ₁ C ₁	(17.0)	(18.3)	4.2	(1.1)	-				297		-2	BA ₁ D ₁ BB	18.2	13.7	3.3	(0.5)	133			B		-5
272	-5	BBBBB	31.8	21.0	6.0	3.3	151		F		298		-3	BA ₁ D ₁ CB	27.9	23.4	7.7	4.3	119					-6
273	-6	BBD ₁ BB	25.9	15.3	3.6	1.2	169		C		-19	299	90住-1	BA ₃ CBB	15.0	15.2	2.4	0.4	99					-15
274	-7	ABD ₁ CA	24.0	23.0	4.0	1.3	174				-21	300	93住-1	BCD ₁ CB	23.0	19.0	16.8	4.2	1.4	113				-19
275	-8	BCD ₁ BB	32.7	29.8	8.0	4.6	143				-22													
276	68住-1	BA ₁ D ₁ BB	17.6		5.0	1.0	116				-23	301	95住-1	BA ₃ AAB	26.9	16.2	5.8	1.4	166					237-4
277	-2	BBD ₁ CB	23.5	15.2	4.1	1.6	149				-24	302	-2	••AB ₁	(21.6)	(17.4)	(4.3)	(1.3)	-			F		-5
											303		-3	BA ₃ BBB	16.6	14.2	3.3	0.5	117					-6
											304		-4	BA ₃ D ₁ EB	17.2	14.0	4.3	1.0	123					-7
											-9	305	-5	••D ₁ D ₁	(27.6)	(23.4)	6.0	(3.8)	-			F		-8

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長 指數	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長 指數	破損 状況	備考	図番号
306	96住-1	BA ₁ BBB	20.4		17.8	4.0	(1.0)	115	D		237-14	337	111住-5	BBD,CB	21.1		16.0	3.8	1.7	132			240-5
307	-2	BA ₁ BAB	17.2		13.2	1.8	0.3	130			-15	338	-6	BBD,BB	22.8		22.4	9.0	3.9	102			-6
308	-3	BA ₁ B・・	(17.3)		17.2	5.9	(1.4)		A		-16												
309	-4	BA ₁ CBB	19.7		(13.0)	4.6	(0.8)		B		-17	339	112住-1	BA ₁ CAA	21.1		13.6	2.9	0.5	155			241-1
310	-5	BA ₁ CBB	18.9		(13.0)	3.5	(0.6)		B		-18	340	-2	BA ₁ CBB	18.5		15.6	3.4	0.7	119		A	-2
311	-6	BA ₁ BBB	13.7		11.2	2.8	0.2	122		片欠	-19	341	-3	BA ₁ C・B	(12.1)		12.9	2.9	(0.4)				-3
312	-7	BA ₁ CBC	11.9		14.9	3.1	0.4	80		先磨	-20	342	-4	BA ₁ BBC	16.3		17.7	4.0	0.9	92		E	-4
313	-8	BA ₁ D,CB	19.2		12.0	3.1	0.7	154			-21	343	-5	BCC・・	(23.8)	(19.9)	(18.9)	(6.0)	(1.8)				-5
314	-9	BCD,BC	22.4	19.1	21.1	5.3	2.2	91			-22												
315	-10	ACD ₁ DB	(25.6)	23.8	21.0	6.4	(3.2)	113	F		-23	344	113住-1	BA ₁ ABB	24.0		17.2	4.1	1.4	140			242-1
316	98住-1	BA ₁ BBB	25.1		18.2	5.3	1.7	138			345		-2	BA ₁ AAB	26.2		19.5	5.1	1.9	134			-2
317	-2	BA ₁ CBB	(18.4)		17.0	3.7	(0.8)		A		238-1	346	-3	BA ₁ BBB	18.5		13.4	2.1	0.3	138		B	-3
318	-3	BA ₁ D,CB	20.1		15.1	4.9	1.3	133			-2	347	-4	BA ₁ BBB	16.2		(11.1)	2.8	(0.3)			A	-4
319	-4	BA ₁ CBC	17.6		(15.8)	6.0	(1.3)		B		-3	348	-5	BA ₁ B・B	(12.6)		14.5	3.0	(0.5)			A	-5
320	-5	BCD ₁ CB	22.0	17.6	14.3	5.0	1.5	123			-4	349	-6	BA ₁ CAB	21.6		13.8	2.6	0.5	157		A	-6
											-5	350	-7	BA ₁ C・B	(14.9)		17.6	3.0	(0.6)			A	-7
321	102住-1	BA ₁ AAB	19.1		14.2	3.9	0.7	135			-15	351	-8	BA ₁ CBB	18.5		(12.3)	2.1	(0.4)			B	-8
322	-2	BA ₁ CBB	26.1		18.2	2.3	0.8	143			-16	352	-9	BA ₁ C・B	(13.5)		13.6	2.8	(0.4)			A	-9
323	104住-1	BCBAB	22.0	14.8	13.6	4.6	1.0	109		ch.	-21	353	-10	BA ₁ CBB	15.1		11.4	3.1	0.3	132			-10
324	-2	BCCBB	19.1	17.3	12.5	4.0	0.8	138			-22	354	-11	BA ₁ D,BA	20.4		11.8	2.5	0.4	173			-11
325	-3	BCD ₁ BB	24.2	20.9	21.8	8.8	3.8	96			-23	355	-12	BA ₁ D,BB	17.1		13.2	4.0	0.7	130			-12
326	106住-1	BA ₁ CAB	(21.2)		(13.3)	2.2	(0.4)		C		-23	356	-13	BA ₁ D,BB	17.1		15.8	2.4	0.4	108			-13
327	-2	BA ₁ CAB	22.5		13.6	2.9	0.6	165			239-1	357	-14	BA ₁ D,BB	18.8		13.1	3.6	0.7	144			-14
328	-3	BA ₁ CBB	18.6		13.7	2.2	0.4	136			-2	358	-15	BBCAB	26.4		17.1	4.5	2.0	154			-15
329	-4	BDD ₁ BB	25.8	15.0	8.3	3.3	0.7	181			-3	359	-16	BBC・B	(14.9)		17.3	4.8	(1.1)			A	-16
330	108住-1	BA ₁ CBB	21.6		(15.2)	2.7	(0.5)		B		-4	360	-17	BBCBB	15.7		14.2	3.8	0.8	107			-17
331	-2	BA ₁ CBB	25.5		15.0	2.5	0.7	170			361		-18	BCBAB	23.8	27.1	19.2	7.8	2.6	141			-18
332	-3	BDD ₁ CC	19.4		20.2	5.2	1.9	96			-11	362	-19	BCD,BB	25.9	22.0	21.4	7.6	2.9	103			-19
333	111住-1	BA ₁ CBB	(17.3)		(16.8)	2.9	(0.5)		D		-12	363	-20	BCD,EB	21.2	19.2	19.0	4.9	2.1	101		先欠	-20
334	-2	BA ₁ D,BB	20.0		14.4	4.6	0.8	139			-13	364	-21	BCD ₁ CB	23.3	20.3	16.7	6.6	2.1	122			-21
335	-3	BA ₁ CBB	19.3		13.4	3.1	0.8	144			240-1	365	118住-1	BA ₁ CAB	24.0		16.1	2.9	0.7	149			243-1
336	-4	BA ₁ D,BB	17.2		14.7	3.4	0.6	117			-2	366	-2	BA ₁ CBB	24.0		14.9	4.0	0.9	161		片欠	-2
											-3	367	-3	BA ₁ D,BB	26.3		(20.7)	3.6	(0.9)			B	-3
											-4	368	-4	・・D,C・	(21.9)		17.9	2.8	(1.0)			F	-4

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部の 長さ 指数	尖頭部 破損 状況	備考	図番号
369	119住-1	BA,BAB	22.8	15.5	4.2	0.7	147	243-5			245-1
370	-2	BA,CBB	13.4	9.4	2.5	0.2	143	-6			-2
371	-3	BA,•BB	23.8	(14.4)	(3.2)	(0.6)	-	-7	B	先磨	-3
372	-4	BA,D,BB	24.1	16.4	5.8	1.9	147	-8			-4
373	-5	BA,D,CC	19.9	(18.8)	2.6	0.8	-	-9	B		-5
374	-6	BCCCC	22.3	17.8	7.2	2.4	85	-10			-6
375	122住-1	BA,CBB	16.7	13.0	3.8	0.6	128	-13			-12
376	-2	BA,D,CB	16.3	14.0	4.7	0.7	116	-14			
377	-3	BA,D,CB	26.7	22.9	8.5	4.2	117	-15			-19
378	125住-1	BA,AAB	19.5	14.6	4.3	0.8	134	-23			-20
379	127住-1	BA,AAB	23.0	17.0	3.4	0.9	135	-24			246-1
380	-2	BA,AAB	18.9	13.1	3.4	0.6	144	-25			-2
381	-3	BA,BBB	24.0	(16.8)	3.0	(0.7)	-	-26	B		-3
382	-4	BA,CBB	17.4	13.0	1.8	0.3	134	-27			-4
383	-5	BA,CAB	21.4	13.2	3.2	0.6	162	-28			-5
384	-6	BA,D,••	(16.1)	15.3	4.0	(1.0)	-	-29	A		-6
385	-7	BA,D,••	(13.2)	19.0	3.8	(0.8)	-	-30	片欠		-18
386	-8	BCBEC	19.0	14.7	4.9	1.7	79	-31	先欠	ch.	-19
387	-9	BCD,BB	29.2	24.6	5.1	(2.7)	118	-32	E		-20
388	131住-1	BA,BAB	24.4	(16.1)	(4.2)	(0.7)	-	244-3	B		-22
389	-2	BA,•••	(20.0)	17.0	4.0	(1.1)	-	-4	A		
390	-3	BA,CBB	24.1	(16.5)	4.2	(1.0)	-	-5	B		-24
391	-4	BA,CBB	21.5	(16.3)	3.0	(0.5)	-	-6	B		-25
392	-5	BA,CBC	24.1	(18.9)	3.7	(0.8)	-	-7	B		-26
393	-6	BA,D,DB	23.9	(20.0)	3.9	(1.7)	-	-8	E		-27
394	-7	BA,D,BB	18.2	15.1	4.2	0.9	121	-9			-28
395	-8	BA,D,BB	15.9	15.6	5.0	0.8	102	-10			-29
396	-9	BA,D,BB	15.0	14.9	1.7	0.3	101	-11			-31
397	-10	BBD,BB	19.7	19.2	4.7	1.3	103	-12			247-1
398	-11	BCD,DB	23.0	16.6	6.9	2.2	98	-13			-3
399	-12	ACD,•B	29.4	27.0	5.9	(2.9)	132	-14	E		-2
400	-13	••CB•	(17.0)	(14.1)	(4.1)	(0.8)	-	-15	F		

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号
431	外 5	BA ₃ AAB	19.0		14.6	2.8	0.5	130			465	外 39	BA ₃ CDA		25.2		13.8	5.0	1.3	183			247-15
432	6	BA ₃ AAB	18.7		14.7	3.8	0.6	127			466	40	BA ₃ CBB		21.0		13.6	3.1	0.6	154			16
433	7	BA ₃ AAB	18.5		14.3	3.0	0.6	129			467	41	BA ₃ CBB	B	17.9		(12.0)	2.6	(0.3)	—			17
434	8	BA ₃ AAB	15.7		11.8	2.2	0.3	133			468	42	BA ₃ CBB		23.2		15.6	2.4	0.6	149			71
435	9	BA ₃ ABC	13.6		(12.7)	2.9	(0.4)	—	B		469	43	BA ₃ CBB		24.5		(13.5)	4.8	(1.0)	—			
436	10	BA ₃ ABB	22.3		16.6	4.3	1.3	134			247-4	44	BA ₃ CBB		21.8		13.2	4.2	0.8	165			
437	11	BA ₃ ABB	17.7		16.4	4.0	1.0	108			— 5												
438	12	BA ₃ ABB	22.1		16.0	4.0	1.0	138			471	45	BA ₃ CBB		18.3		12.4	3.2	0.5	148			
439	13	BA ₃ ABB	24.0		18.5	6.4	1.9	130			472	46	BA ₃ CBB	B	22.8		(18.1)	3.5	(0.8)	—			29
440	14	BA ₃ AAB	16.8		14.7	3.4	0.7	114			473	47	BA ₃ CAB		19.3		13.4	2.2	0.4	144			19
441	15	BA ₃ ABB	22.0		16.2	4.7	0.9	136			474	48	BA ₃ CBB		17.3		11.6	3.5	0.5	149			20
442	16	BA ₃ AAB	21.3		15.6	5.5	1.2	137			475	49	BA ₃ CBB		15.3		(10.2)	2.3	(0.3)	—			21
443	17	BA ₃ ABB	19.9		(14.0)	(3.6)	(0.8)	—	B		476	50	BA ₃ CBB		(25.0)		(15.1)	3.1	(0.8)	—			
444	18	BA ₃ BBA	29.0		17.1	4.3	1.4	170			477	51	BA ₃ CAB		22.8		15.8	3.6	0.8	144			
445	19	BA ₃ BBA	22.1		13.0	4.8	0.8	170			478	52	BA ₃ CBB		22.3		15.8	1.9	0.5	141			
446	20	BA ₃ BBB	24.2		18.0	4.0	1.0	134			— 6	53	BA ₃ C·B	A	(14.5)		15.8	2.4	(0.5)	—			
447	21	BA ₃ BAB	19.7		14.0	3.7	0.5	144			— 7	54	BA ₃ CBB		20.8		14.2	3.3	0.6	146			
448	22	BA ₃ BAB	19.7		15.3	2.7	0.5	129			— 8												
449	23	BA ₃ B·B	(19.4)		17.8	2.8	(0.6)	—	A		481	55	BA ₃ CBB		20.2		12.6	2.5	0.4	160			
450	24	BA ₃ BBB	22.1		15.0	2.5	0.5	147			482	56	BA ₃ C·B	D	(15.2)		(12.6)	2.5	(0.4)	—			
451	25	BA ₃ BBB	22.8		14.6	3.0	0.5	156			483	57	BA ₃ CAA		18.9		10.9	3.2	0.4	173			
452	26	BA ₃ BBA	20.2		11.7	2.3	0.4	190			484	58	BA ₃ C·B	A	(11.7)		13.9	2.4	(0.3)	—			
453	27	BA ₃ BBB	13.5		12.9	4.2	0.5	105			485	59	BA ₃ CBB		16.1		13.0	3.7	0.5	124			
454	28	BA ₃ BCB	21.1		17.0	4.7	1.1	124			486	60	BA ₃ CBB		16.0		11.4	2.7	0.3	140			
455	29	BA ₃ BBB	24.8		16.1	5.0	1.2	154			— 9	61	BA ₃ CBB		16.2		11.9	2.1	0.3	136			
456	30	BA ₃ BCB	21.0		16.2	4.5	1.0	130			— 10	62	BA ₃ C·B	A	(12.8)		10.7	3.3	(0.3)	—			
457	31	BA ₃ BBB	19.6		(4.2)	3.9	(0.8)	—	B		489	63	BA ₃ CBB		18.8		16.0	3.2	0.7	118			
458	32	BA ₃ BEB	20.2		18.0	4.2	1.2	112			490	64	BA ₃ CBB		17.7		13.1	3.7	0.6	135			--22
459	33	BA ₃ CAA	(24.5)		12.8	2.5	(0.6)	—	A		— 11	65	BA ₃ CBB		18.6		13.9	2.9	0.5	134			
460	34	BA ₃ CAA	22.8		11.7	3.8	0.7	195			— 12	66	BA ₃ CBB		21.2		17.3	5.2	1.2	123			
461	35	BA ₃ CAA	19.0		10.5	3.0	0.5	181			493	67	BA ₃ CBB		18.2		14.6	3.0	0.7	125			
462	36	BA ₃ C·A	(16.3)		(13.5)	3.3	(0.7)	—	D		494	68	BA ₃ CBB		13.9		10.0	3.5	0.4	139			
463	37	BA ₃ CAA	21.9		10.1	4.6	0.8	217			495	69	BA ₃ CBB		23.0		14.6	4.1	1.1	158			
464	38	BA ₃ CCA	16.7		10.2	2.2	0.3	164			496	70	BA ₃ CBA		22.8		13.4	3.5	0.9	170			
											— 13	71	BA ₃ C·B		(20.1)		(13.0)	4.6	(1.0)	—			
											— 14	72	BA ₃ CBB		21.6		(13.1)	4.7	(1.0)	—			

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号
499	外	BA ₂ CBB	18.4		14.9	2.7	0.5	123			532	外	BA ₂ CBB	(22.0)		(18.8)	4.1	(1.2)		B			
500	74	BA ₂ CBB	(17.5)		14.4	3.0	(0.6)	—	A		533	—107	BA ₂ CBB	19.1		17.3	4.9	1.1	110				
501	75	BA ₂ CAB	18.0		12.0	2.6	0.3	150			534	—108	BA ₂ CBB	15.6		14.4	2.5	(0.3)	108		F		
502	76	BA ₂ CCB	15.1		12.3	4.3	0.6	123			535	—109	BA ₂ CBB	(16.0)		(13.0)	2.5	(0.4)	—		B		
503	77	BA ₂ CCB	24.2		19.8	4.6	1.8	122			536	—110	BA ₂ CBB	23.7		20.8	3.8	1.5	114				
504	78	BA ₂ CCB	18.0		16.7	5.3	1.2	108			537	—111	BA ₂ CBB	24.4		21.0	5.8	2.1	116				
505	79	BA ₂ CBB	19.9		15.6	4.3	0.9	128		先欠	—75	—112	BA ₂ CBB	21.0		18.6	5.2	1.3	113				
506	80	BA ₂ C・C	(13.0)		19.5	2.2	(0.4)	—	A		539	—113	BA ₂ CCB	16.6		16.1	3.0	1.6	103				
507	81	BA ₂ CBB	18.3		18.0	3.7	0.7	102		先欠	—27	—114	BA ₂ CEB	18.8		19.0	4.3	1.4	99				
508	82	BA ₂ CBB	28.4		27.4	3.2	1.5	105		先磨	—28	—115	BA ₂ CEB	17.0		16.5	4.1	1.1	103				
509	83	BA ₂ CBB	21.6		(15.1)	3.0	(0.6)	—	B	ch.	—18	—116	BA ₂ CBC	15.1		18.7	3.2	(0.8)	—		A		
510	84	BA ₂ CBB	17.2		15.4	2.6	0.5	112			—30	—117	BA ₂ CCC	13.5		14.9	3.2	0.6	91				
511	85	BA ₂ CBB	15.9		14.7	2.0	0.3	108			544	—118	BA ₂ CCC	10.9		12.0	2.4	0.2	91				
512	86	BA ₂ CBB	15.5		14.6	4.2	0.6	106			545	—119	BA ₂ D ₁ AB	21.8		13.3	2.8	0.5	164				
513	87	BA ₂ C・B	(18.3)		16.1	3.1	(0.6)	—	A		—32	—120	BA ₂ D ₁ AB	26.0		(14.3)	2.4	(0.6)	—		B		
514	88	BA ₂ CBB	20.5		(13.5)	3.0	(0.7)	—	B		547	—121	BA ₂ D ₁ AA	24.1		14.2	4.1	1.3	170				
515	89	BA ₂ CBB	20.3		(12.5)	3.4	(0.6)	—	B		548	—122	BA ₂ D ₁ AA	(22.8)		13.9	3.9	(0.9)	—		A		
516	90	BA ₂ CBB	17.7		18.2	3.2	0.7	97			549	—123	BA ₂ D ₁ BB	26.3		18.0	8.6	2.2	146				
517	91	BA ₂ C・B	(13.7)		17.1	3.2	(0.5)	—	A		550	—124	BA ₂ D ₁ BB	22.8		(15.7)	4.1	(1.0)	—		B		
518	92	BA ₂ CBB	16.7		(13.9)	3.0	(0.4)	—	B		551	—125	BA ₂ D ₁ BB	21.1		13.0	3.0	(0.6)	162				
519	93	BA ₂ CBB	15.9		16.1	6.1	1.0	99			552	—126	BA ₂ D ₁ CB	16.4		13.1	2.8	0.5	125				
520	94	BA ₂ CBB	16.1		14.1	2.5	0.4	114			553	—127	BA ₂ D ₁ CB	21.2		13.9	2.7	0.5	153				
521	95	BA ₂ CBB	15.5		14.0	2.6	0.4	110			554	—128	BA ₂ D ₁ CB	17.7		11.0	2.7	0.4	161				
522	96	BA ₂ CBB	(15.2)		13.7	2.5	(0.3)	—	A		555	—129	BA ₂ D ₁ CB	16.1		11.9	3.2	0.5	135				
523	97	BA ₂ CBB	14.0		13.8	3.5	0.4	101			556	—130	BA ₂ D ₁ CB	23.8		(19.0)	4.2	(0.7)	—		B		
524	98	BA ₂ CBB	14.4		14.4	3.0	3.5	100			557	—131	BA ₂ D ₁ CA	25.1		13.0	3.0	1.0	193				
525	99	BA ₂ CCB	14.0		14.3	2.2	0.3	98			558	—132	BA ₂ D ₁ ・B	(18.1)		16.8	4.3	(1.2)	—		A		
526	100	BA ₂ CBB	22.0		(16.1)	2.1	(0.6)	—	B		559	—133	BA ₂ D ₁ CB	(28.1)		(16.8)	4.9	(1.6)	—		B		
527	101	BA ₂ CBB	22.1		20.0	8.1	2.4	111			—33	—134	BA ₂ D ₁ CB	18.0		13.3	2.9	0.6	135				
528	102	BA ₂ CBB	16.9		15.4	3.1	0.6	110			—34	—135	BA ₂ D ₁ CB	25.2		(15.9)	3.8	1.1	—		B		
529	103	BA ₂ CBB	20.4		17.8	4.8	1.2	115		片欠	—72	—136	BA ₂ D ₁ CB	19.0		12.8	3.7	0.9	149				
530	104	BA ₂ CBB	18.8		14.7	3.4	0.6	128		片欠	—73	—137	BA ₂ D ₁ CB	28.4		(17.1)	4.1	(1.7)	—		B		
531	0	BA ₂ CBB	16.1		14.5	3.0	0.5	110		片欠	—74	—138	BA ₂ D ₁ EB	22.3		17.1	5.2	(1.4)	130				
531	105	BA ₂ CBB	16.1		14.5	3.0	0.5	110		片欠	—74	—139	BA ₂ D ₁ BB	25.8		22.5	6.7	3.4	115				

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号	
566	外—140	BA ₄ D ₁ BB	22.0		15.8	3.4	0.9	139			247—54	600	外—174	BBD ₁ CB	26.8		17.7	7.0	2.4	151			248—6	
567	—141	BA ₄ D ₁ CB	22.0		(16.5)	2.9	(0.7)	—	B		—55													
568	—142	BA ₄ D ₁ CB	15.6		12.1	2.7	0.4	129	B		—56	601	—175	BBD ₁ EB	27.5		21.2	7.4	3.7	130			—7	
569	—143	BA ₄ D ₁ CB	21.1		(12.5)	(3.1)	(0.5)	—	A			602	—176	BBD ₁ EC	13.0		14.7	2.6	0.6	88			—8	
570	—144	BA ₄ D ₁ CB	(13.1)		(13.2)	3.0	(0.3)	—				603	—177	BBD ₁ CB	22.1		19.0	7.1	2.4	116			—9	
571	—145	BA ₄ D ₁ CB	13.5		13.1	3.0	0.5	103			—57	605	—178	BBD ₁ CB	28.3		21.9	10.0	5.7	129			ch.	
572	—146	BA ₄ D ₁ CB	16.8		14.4	2.8	0.5	117				606	—180	BBD ₁ CB	17.5		16.7	3.0	0.9	105				
573	—147	BA ₄ D ₁ CB	14.9		13.8	3.7	0.5	108			—58	60	—181	BCBBB	22.8	21.0	17.7	5.2	1.7	119				
574	—148	BA ₄ D ₁ CB	18.4		15.2	4.4	1.0	121			608	608	—182	CBBBC	21.6	16.0	19.8	5.4	1.7	81			先磨	
575	—149	BA ₄ D ₁ BB	17.1		13.5	3.2	0.5	127			609	609	—183	CBBBC	23.9	(23.0)	(28.0)	5.6	(3.0)	—	C		—11	
576	—150	BA ₄ D ₁ CB	31.1		28.2	9.5	7.4	110			—59	610	—184	BCBDB	30.4	26.2	24.7	9.4	6.0	106			—12	
577	—151	BA ₄ D ₁ BB	18.9		14.0	2.6	0.6	135			—60												—13	
578	—152	BA ₄ D ₁ CB	21.6		15.4	5.8	2.0	140				611	—185	BCD ₁ BB	24.5	22.0	22.0	10.6	4.4	100			—15	
579	—153	BA ₄ D ₁ CB	23.1		18.5	5.3	1.9	125			—61	612	—186	BCD ₁ BB	21.5	18.8	17.7	4.1	1.2	106				
580	—154	BA ₄ D ₁ EC	25.0		27.6	8.9	6.0	91		ch.	—62	613	—187	BCCDC	21.5	17.0	18.7	4.0	1.5	91			片欠	
581	—155	BA ₄ D ₁ BC	14.6		16.6	2.4	0.3	88				614	—188	BCD ₁ BB	34.1	31.7	20.4	6.5	3.7	155			—17	
582	—156	BA ₄ D ₁ BC	14.9		16.0	2.8	0.5	93		ch.	—63	615	—189	BCD ₁ CB	26.1	20.4	16.0	5.0	1.8	128			—18	
583	—157	BA ₄ D ₁ BC	14.9		18.0	2.1	0.3	83			—64	616	—190	BCBBB	22.3	19.0	16.0	3.1	1.2	119			—14	
584	—158	BA ₄ D ₁ CC	14.4		17.9	2.6	0.4	80			617	617	—191	BCD ₁ CB	25.8	22.8	15.0	3.6	1.5	152				
585	—159	BA ₄ D ₁ ••	(23.3)		(16.1)	(3.8)	(0.7)	—	E		—65	618	—192	BCD ₁ CB	26.0	23.5	(14.1)	4.9	(1.5)	—	B			
586	—160	BA ₄ D ₁ •C	(17.8)		22.8	3.3	(1.2)	—	A		—66	619	—193	BCD ₁ CB	24.8	22.0	(14.7)	5.8	(1.7)	—	E			
587	—161	BA ₄ D ₁ CC	9.8		11.1	1.0	0.1	88		局磨	—67	620	—194	BCCBA	23.4	20.9	12.4	5.3	1.1	169			248—19	
588	—162	BA ₄ D ₁ DB	25.8		25.9	5.1	2.8	100			—69	621	—195	BCD ₁ BB	20.1	18.7	13.3	6.2	1.2	141			—21	
589	—163	BA ₄ D ₁ DB	27.3		(25.4)	5.7	(3.1)	—	E		622	622	—196	BCD ₁ ••	(20.8)	(19.5)	(7.0)	(3.3)	(0.7)	—	E		—22	
590	—164	BA ₄ D ₁ •C	(19.2)		27.1	3.1	(1.7)	—	A		623	623	—197	BCD ₁ CA	28.4	27.4	14.3	6.1	2.0	185			248—19	
591	—165	BA ₄ ••	(22.8)		(22.8)	4.5	(2.9)	—	A		624	624	—198	BCD ₁ CB	29.3	27.1	21.9	10.4	6.0	124			—25	
592	—166	BA ₄ •••	(14.2)		(22.7)	(2.9)	(1.1)	—	E		—70	626	—200	BCD ₁ BB	18.0	17.8	15.8	4.0	1.1	113			—22	
593	—167	BBBBB	17.9		15.1	3.4	0.7	119			248—1	627	—201	BCD ₁ CB	18.0	17.5	17.9	5.1	1.4	98			—25	
594	—168	BBBBB	17.0		14.6	5.0	0.8	116			—2	628	—202	BCD ₁ CB	24.2	22.1	21.0	8.0	3.3	105				
595	—169	BBBCB	21.8		17.2	4.2	1.3	127		片欠	—10	629	—203	BCD ₁ DC	20.7	15.7	19.3	3.1	1.0	81				
596	—170	BBCAA	(21.4)		10.8	4.4	(0.9)	—	A		—3	630	—204	BCD ₁ CB	19.1	16.3	16.6	4.7	1.3	98				
597	—171	BBCBB	31.0		23.0	5.4	3.2	135			—4													
598	—172	BBCBB	23.2		16.9	5.0	1.6	137				631	—205	BCD ₁ CB	28.1	26.6	18.2	7.5	3.0	146			—20	
599	—173	BBCBB	27.0		24.3	5.2	3.6	111		先欠	—5	632	—206	BCD ₁ CB	32.1	27.1	24.0	7.7	5.0	113				

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部長幅指数	破損状況	備考	図番号
633	外-207	BCD,CB	23.5	19.9	16.1	2.0	1.0	124			
634	-208	BCD,CB	21.6	20.2	18.9	5.0	2.3	107			
635	-209	BCD,DB	23.0	21.0	17.2	4.8	2.1	122		-23	
636	-210	BCD,DB	24.5	22.0	19.5	4.9	2.2	113			
637	-211	BCD,DB	23.4	21.6	20.2	6.8	3.0	107			
638	-212	BDD,AA	(35.1)	(28.7)	(8.7)	(6.6)	(2.4)	—	A	ch.	-24
639	-213	BDD,BA	38.7	22.0	10.7	7.3	2.9	206			
640	-214	BDD,CA	23.3	17.4	9.4	3.3	0.9	185			
641	-215	BDD,BA	49.3	37.0	12.5	6.6	4.4	296			
642	-216	BDCBB	24.3	14.8	14.7	4.9	1.3	101			
643	-217	AA,CBA	(26.1)	26.1	12.5	4.1	(1.0)	209			
644	-218	AA,CBA	27.3	26.2	15.2	4.8	1.4	172			
645	-219	AA,D,BB	(25.3)	24.4	19.8	5.0	(2.1)	123			
646	-220	AA,D, *B	(17.5)	(16.0)	16.2	3.9	(1.1)	—	A	s.s.l.	-29
647	-221	ABBBB	(25.7)	(13.5)	13.6	4.8	(1.0)	—	A		-30
648	-222	ABCB	(21.3)	18.4	15.0	2.8	(0.8)	123	H		
649	-223	ACD,BA	(30.7)	19.5	10.5	6.6	(1.7)	186	H		
650	-224	ACD,DA	25.9	18.5	10.2	6.0	1.7	181		先基層	-31
651	-225	ACD,BB	21.6	15.1	13.6	3.8	1.0	111			
652	-226	••AB•	(17.1)		13.5	(2.8)	(0.5)	—	F		
653	-227	••CA•	(20.5)		(12.0)	(3.4)	(0.6)	—	F		
654	-228	••D,B•	(17.8)		(11.0)	(2.4)	(0.4)	—	F		
655	-229	••D,B•	(19.8)		(13.1)	(4.3)	(0.8)	—	F		
656	-230	••CB•	(18.6)		(13.1)	(3.5)	(0.6)	—	F		
657	-231	•••B•	(15.9)		(13.7)	(3.9)	(0.5)	—	F		
658	-232	•••B•	(12.6)		(8.7)	(2.5)	(0.3)	—	F		
659	-233	••D,C•	(19.8)		(20.9)	(5.8)	(1.8)	—	F		
660	-234	••D,D•	(20.9)		(18.4)	(6.9)	(2.3)	—	F		
661	-235	BB•••	(14.8)		17.0	(4.5)	(0.9)	—	A		
662	-236	BB•••	(14.4)		(18.7)	(2.6)	(0.7)	—	E		
663	-237	••CB•	(27.9)		(19.0)	(5.5)	(2.1)	—	C		
664	-238	••CC•	(31.0)		(17.2)	(4.5)	(2.0)	—	B		
665	-239	••CC•	25.2		(15.2)	(6.8)	(1.7)	—	B		
666	-240	••D,C•	(24.4)		(16.1)	(5.0)	(1.3)	—	B		
667	外-241	••D,D•	(22.5)		17.2	(5.0)	(1.6)	—	F		249-1
668	-242		24.7		21.3	8.2	4.4				
669	-243		26.8		18.8	6.2	2.9				
670	-244		25.1		18.2	6.6	2.9				
671	-245		24.8		22.8	8.4	4.3				
672	-246		20.0		17.0	9.2	3.1				
673	-247		25.5		14.3	7.2	2.3				
674	-248		23.3		11.0	4.9	1.1				
675	-249		15.5		15.3	4.9	1.2				
676	-250		27.0		21.4	6.9	3.0				
677	-251		23.5		20.1	7.2	3.3				
678	-422	BDD,BA	32.4	29.0	8.5	6.3	1.6			先基層	256-32
679	±2-1	BA,CBB	24.0		(14.0)	2.8	0.6			B	264-1
680	±9-1	BA,D,AA	21.0		12.0	3.0	0.6			175	-6
681	-2	BCCBB	25.7	20.7	19.0	8.3	2.7			109	-7
682	±12-1	BBD,CB	13.9		11.4	2.4	0.4			122	-8
683	±15-1	BBD,BB	28.7		(22.9)	4.5	(2.6)				264-11
684	±25-1	BA,ABA	25.9		13.9	3.9	1.1			186	ch.
685	-2	BA,D,BB	17.9		13.8	2.0	0.5			130	ch.
686	-3	BA,D,BB	(19.0)		19.2	(2.3)	(0.7)				A
687	-4		25.5		18.7	5.3	2.3				-17
688	±26-1	BA,D,CC	17.0		(16.0)	2.9	(0.6)				B
689	-2	BBD, *B	(16.0)		(14.1)	(2.9)	(0.7)				E
690	±35-1	BA,CAB	24.1		15.7	4.5	0.9			154	-25
691	±40-1	BBBEB	23.0		17.7	4.8	1.6			130	-26
692	±42-1	••CC•	(25.1)		(19.3)	7.7	(1.9)				F

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	尖頭部 の長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	尖頭部 の長幅 指数	破損 状況	備考	図番号
693	±45-1	BA ₁ D ₁ BB	26.0		(16.9)	3.8	(1.0)	—	B		265-3
694	—2	BCCBB	19.0	16.9	18.0	4.9	1.5	94			—4
695	±66-1	BA ₆ BA ₆ B	23.2		(17.7)	3.9	(0.8)	—	B		—6
696	—2	BA ₆ BBB	21.1		(15.7)	3.2	(0.7)	—	B		—7
697	±78-1	BA ₄ D ₁ AF	18.8		13.6	4.0	0.7	138			—11
698	—2	BA ₄ D ₁ BB	12.6		11.5	2.8	0.3	110			—12
699	±107-1	BA ₃ CAB	17.3		13.0	3.8	0.6	133		ch.	—23
700	±130-1	BA ₄ CBB	18.7		15.5	3.0	0.7	121		ch.	—27
701	±146-1	BBCBB	23.1		(19.4)	3.1	(1.0)	—	B		—29
702	—2	BCD ₁ CB	30.1	26.6	22.0	7.4	4.2	121			—30
703	±164-1	BA ₃ CBB	20.6		21.5	3.5	1.2	96			—31
704	±177-1	BA ₂ BBB	23.5		17.0	5.1	1.4	138			—32
705	—2	BA ₃ D ₁ CB	21.6		(16.1)	3.0	(0.7)	—	B		—33
706	—3	BA ₅ •••	(15.1)		(10.5)	(2.6)	(0.3)	—	E		—34
707	—4	BBD ₁ AB	25.3		17.5	6.9	2.0	145			—35
708	±179-1	BA ₄ CBB	18.0		14.0	2.5	0.5	129		片欠	—37

石 匙

No.	出土地点	型 式	長 さ (mm)	幅 (mm)	厚 さ (mm)	重 量 (g)	石 質	刃 長 (mm)	刀部ふくらみ 値(mm)	つまみ 角 (°)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
1	1住-17	フ CBA +	53.7	47.0	8.0	15.6		40.5	6.0	59	62		両面線痕	212-17
2	-18	フ ABB	57.5	22.0	7.8	8.2		37.0	3.0	51	30		両面線痕	-18
3	-19	フ AAB +	52.0	32.5	8.3	12.8	ch.	30.3	-1.0	91	36		刃つぶ 刃加なし	-19
4	-20	フ BCA	33.6	57.2	8.0	14.7	ch.ho.	32.8	2.6	83	67		稜まめ	-20
5	-21	フ /	32.6	(30.1)	5.9	(3.7)		40.1	1.2	52	57			-21
6	-22	フ B・A	(22.3)	45.5	9.0	(6.5)		50.0	7.7	8	56	刃 端 欠	裏線痕刃こぼ	-22
7	8住-21	フ ACB	(50.5)	24.0	8.2	(8.8)	ch.	41.8	4.7	4	70	刃 端 欠	裏磨痕	213-35
8	-22	フ ADA +	35.7	24.0	7.0	4.9		24.8	4.9	100	76		裏線痕	-36
9	-23	フ ABA	44.4	36.5	7.1	10.1	ch.	23.0	3.2	76	51		裏線痕	214- 1
10	-24	フ ACA +	38.8	53.6	8.4	12.8	ch.	27.7	29.1	4	40		裏稜つぶ 円刃	- 2
11	-25	フ BCA	36.5	29.6	6.5	8.5	si.sl.	29.1	5.9	102	34		木の葉状	- 3
12	-26	フ CBB	40.5	28.4	4.5	4.1	ch.	56.4	8.5	26	35			- 4
13	-27	フ BDA	15.8	26.9	2.9	1.0		36.9	4.0	10	55			- 5
14	10住- 1	BD・	(27.0)	(32.5)	(8.0)	(5.9)	ch.	41.0	3.3	41	33			- 4
15	11住- 5	フ ADA	35.5	27.1	4.8	4.1	ch.	22.5	1.9	1	24	刃 全 欠		215- 1
16	- 6	フ BAB	26.6	(36.3)	7.5	(9.5)	ch.	—	—	—	—	刃 全 欠		- 9
17	- 7	フ BAA	35.7	58.4	9.1	16.4	si.sl.	27.3	3.0	65	45	刃 両 端 欠		-10
18	12住-42	フ AAA	33.0	21.3	6.9	5.1		57.8	7.2	9	85		刃 両 面 加	-11
19	-43	フ CAA	49.4	37.4	9.0	16.0	si.sl.	12.9	2.0	86	87			216- 1
20	-44	フ BAB	28.6	(38.4)	4.1	(5.4)	ch.	46.4	3.0	41	48			- 2
21	-45	フ BBA	43.2	(39.0)	7.0	(10.8)	ch.	(34.7)	(2.1)	—	50	刃 片 端 欠		- 3
22	-46	フ BCB	27.5	(36.9)	6.9	(6.7)	ch.	(30.8)	(5.9)	—	41	刃 片 端 欠	裏磨痕	- 4
23	-47	フ CBB	26.3	22.0	5.6	2.6		(35.5)	(1.3)	—	41	刃 片 端 欠	表刃こぼ	- 5
24	15住-19	フ BBA	49.0	(44.8)	10.4	(18.5)		16.7	0.6	35	64			- 6
25	-20	フ B・A	(23.3)	35.6	(7.5)	(5.7)		31.3	37.8	2	70	刃 端 欠	両面線痕	218-19
26	16住-50	フ AAA	46.1	35.5	6.7	10.2	ch.	33.5	10.8	—	77	つまみ 欠	刃つぶ	-20
27	-51	フ AA・+	(35.4)	(30.0)	8.0	(7.9)	ch.	37.0	1.8	69	53		両面磨痕	219-50
28	-52	フ ABA	(33.3)	(21.0)	(6.8)	(3.9)	ch.	10.0	0.5	—	56	刃 端 欠		-51
29	-53	フ ADA	47.9	(23.0)	(6.5)	(5.9)	ch.	14.9	-1.1	—	64			-52
30	-54	フ BAA	31.3	(36.0)	7.8	(10.4)	ch.	23.0	(4.1)	—	35	刃 半 欠		-53
31	-55	フ BBA	(29.0)	(31.2)	(7.9)	(7.0)	ch.	37.4	0.9	91	30	刃 背 欠	表稜つぶ、 裏磨痕	220- 1
32	-56	フ BC・	(28.4)	28.0	(4.2)	(2.8)	si.sl.	(35.4)	(9.6)	—	77	刃 片 端 欠		- 2
33	-57	フ BCA	39.6	63.8	7.5	(11.8)	si.sl.	(10.5)	(0.8)	—	69	刃 片 端 欠		- 3
34	-58	フ BDA	41.3	49.0	7.6	10.5	si.sl.	(21.0)	(1.7)	—	59	刃 片 端 欠		- 4
35	-59	フ B・・	(25.0)	(37.1)	(9.3)	(11.0)	ch.	67.6	7.5	20	55	つまみ 端 欠		- 5
36	17住-11	フ AAB+	38.0	18.4	4.8	3.1		51.4	4.3	18	48	つまみと 刃片端欠	裏磨痕、線痕	- 6
37	-12	フ CCA	54.8	47.5	7.8	14.1	ch.	(34.8)	-1.5	—	18			224-13
38	-13	フ BCA	(42.0)	(40.1)	(10.5)	(12.7)	ch.	21.8	0.8	74	35		刃加なし	-14
39	19住- 1	フ BBB	18.2	42.9	8.0	7.2		17.3	-0.6	110	35		裏磨痕	-15
40	21住-19	フ ABA	89.8	23.3	9.2	17.5		53.3	5.9	46	56	刃 半 欠		-19
40	21住-19	フ ABA	89.8	23.3	9.2	17.5		(33.4)	(2.3)	—	69		両面線痕	-19
40	21住-19	フ ABA	89.8	23.3	9.2	17.5		38.2	1.8	1	64		両面線痕	-19
40	21住-19	フ ABA	89.8	23.3	9.2	17.5		67.2	4.4	81	64		鋸歯状刃つぶ	225-19

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刀部ふくらみ 値(mm)	つまみ 角(°)	刃角 (°)	破損状況	使用痕備考	図番号	
41	-20	フ	ABA	(47.7)	(30.0)	7.6	(12.0)	ch.	35.3	1.9	81	50	刃端欠		-20
42	-21	フ	BBB	45.2	37.5	9.0	14.4	ch.	31.0	1.6	8	50	裏磨痕		-21
43	22住-1	フ	BBA	34.8	23.2	7.0	6.8		24.5	11.9	24	65	裏縁辺直交短線痕	226-4	
44	23住-5	ユ	BDA	33.0	47.4	8.0	9.6		45.2	7.3	4	38	両面線痕少	-9	
45	-6	フ	B・A	(22.9)	(32.0)	(8.4)	(5.3)		(13.4)	0.6	—	58	つまみ・ 刃片端欠	-10	
46	26住-38	フ	CCA	47.0	28.0	4.8	4.5	ch.	34.7	4.3	38	53			-38
47	-39	フ	BCB	31.9	59.5	6.7	11.2	si.sl.	56.8	2.1	3	75			-39
48	27住-4		BBC	29.5	(41.8)	8.2	(8.0)		(36.5)	(-1.0)	—	38	刃片端欠	両面線状痕多	227-11
49	37住-7		AAA + AAC	66.3	30.0	9.0	20.3	ch.	52.4	5.9	78	66			-19
50	-8		BCA	36.6	31.4	6.2	4.8	ch.	46.0 33.4	-1.6 3.2	83 24	82 48	裏磨痕と線痕多 裏磨痕	-20	
51	38住-5		CBB	42.6	27.5	5.4	7.3	ch.	32.0	-0.9	50	62	裏磨痕	229-5	
52	-6	フ	BBB	41.6	(62.8)	7.9	(21.7)	si.sl.	(40.0)	(1.3)	—	78	刃片端欠		-6
53	-7	フ	BBA	39.3	36.5	10.0	12.4	si.sa.	33.5	3.6	21	90			-7
54	-8		〃	35.0	38.6	8.1	10.6	ch.	38.0	4.3	29	72			-8
55	46住-17		〃	28.7	46.4	8.8	10.2		46.0	7.6	7	49	両面線痕多、 搬基線痕	230-25	
56	-18	フ	BBA	38.5	48.3	7.4	11.9	si.sl.	50.4	7.0	19	33		230-26	
57	-19	フ	BCB	49.5	50.1	6.8	13.2	si.sl.	48.2	1.5	6	58		-27	
58	-20		〃	24.8	23.0	5.0	2.3		17.5	1.8	11	60		-28	
59	-21	フ	BCA	28.6	46.0	6.4	5.8	si.sl.	46.3	3.6	10	66		-29	
60	-22		CDB	47.0	38.4	5.6	7.1	ch.	45.0	2.3	45	80	裏磨痕	-30	
61	49住-5		BBA	44.0	40.8	6.2	12.2	ch.	32.6	32.5	2	38			231-26
62	50住-6	フ	BCB	37.6	50.0	8.5	11.0	ch.	49.2	2.8	3	45			-34
63	52住-4		AAB + CAA	44.9	32.8	9.8	12.3		20.7 33.0	0.4 2.9	77 54	77 55	表少、裏多線痕 両面線痕多、 搬基線痕	232-4	
64	61住-2		BBC	37.2	49.0	9.6	12.3		35.9	-2.2	10	62	両面線痕多、 搬基線痕	-37	
65	64住-6		BCB	49.3	88.6	13.2	50.3	si.sl.	88.6	7.3	0.5	56			233-6
66	65住-4		ACB + ACB	78.0	47.4	10.9	36.2	ch.	47.0	-2.0	100	46	刃加なし	-10	
67	-5	フ	CDA	40.5	37.0	9.4	10.2	ch.	42.0 42.3	-1.5 13.0	78 33	52 65	裏磨痕	-11	
68	66住-9	ユ	ABB + ABB	(28.0)	(18.5)	(8.1)	(3.3)	ch.	(16.4)	(0.7)	—	68	刃端欠		-27
69	-10	ユ	ACB	22.8	23.4	3.3	1.7		(5.6)	(0.2)	—	55			-28
70	-11	ユ	BBB	38.0	34.2	9.2	9.1		11.4	5.3	106	35	加工前に両面 線痕多	-29	
71	-12		BCB	37.3	48.8	6.4	7.0	ch.	25.3 46.0	1.0 1.0	0 23	70 43		-30	
72	69住-3		B・B	18.4	(27.4)	6.3	(4.6)	si.sl.	(23.0)	(0.6)	—	52	つまみ・ 刃部片端欠		234-19
73	73住-2	フ	CCA	49.6	38.5	5.8	5.6	ch.	45.0	3.5	41	52			-25
74	-3	フ	BBA	28.4	46.9	7.0	8.7	ch.	39.5	3.0	16	36			-26
75	74住-8		BDA	29.9	38.2	6.8	5.9	ch.	35.5	1.5	23	57			235-8

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (°)	刀部ふくらみ 値(mm)	つまみ 角 (°)	刃角 (°)	破損状況	使用痕 備考	図番号
76	75住- 8	ADA	27.9	19.7	5.7	2.5		20.2	3.2	77	59		両面線痕少	235-19
77	- 9	フ CBA	47.0	43.0	7.1	12.6	si.sl.	54.4	5.7	40	84			-20
78	-10	BDA	29.0	65.5	5.0	9.2	ho.	63.1	8.0	3	43			-21
79	-11	フ BAA	29.0	56.7	9.3	13.2	ch.	50.7	3.1	0	77		表稜つぶ、裏磨痕	-22
80	-12	BDB	26.5	(40.2)	6.0	(6.3)	ch.	33.0	1.1	1	62	刃端欠		-23
81	-13	フ BDC	24.6	38.8	5.8	3.4	si.sl.	31.9	-1.9	3	83			-24
82	86住- 6	ACA	75.6	54.8	11.3	36.9	sa.ho.	60.5	9.4	104	33			236- 9
83	- 7	フ BCA	(51.9)	(50.0)	12.6	(30.2)	ch.	(37.4)	(2.8)	—	83	刃片端欠	裏磨痕	-10
84	- 8	フ //	42.2	68.0	9.8	18.2	ch.	68.0	7.4	7	62		裏磨痕と線痕	-11
85	- 9	ホ BBB	23.5	(37.2)	4.3	(3.3)	si.sl.	(36.0)	(1.5)	—	71	刃片端欠	裏線痕多、 搬基線痕	-12
86	-10	フ BCB	30.0	41.5	6.1	5.1		38.0	1.3	3	80			-13
87	93住- 2	ABA+	54.6	27.1	6.3	8.0	ch.	40.0	3.1	67	46			-20
		ABA						40.0	3.6	76	39			
88	- 3	BBA	42.7	49.6	7.5	12.1	ch.	46.2	10.0	8	30		刃つぶ	-21
89	- 4	BDA	45.2	54.7	6.2	10.9	si.sl.	55.0	13.5	2	42		縁磨痕	-22
90	- 5	//	35.1	39.1	5.4	7.9	ch.	33.2	2.2	12	47		刃両面加	237- 1
91	96住-12	フ AAA+	46.4	29.0	9.3	8.6	si.sl.	37.0	5.6	78	50			-25
		AAB						38.2	2.0	65	41			
92	98住- 7	BBA	52.8	65.0	12.4	29.3	si.sl.	56.4	5.0	12	32			238- 7
93	99住- 1	BCA	(41.5)	(35.9)	6.2	(8.5)	ho.	(21.3)	(3.0)	—	30	刃片端欠		-12
94	102住- 4	フ ADA	54.7	25.4	7.2	8.0		44.5	5.0	80	70		両面線痕多	-18
95	106住- 5	フ ACA	53.4	35.0	9.8	21.9	ch.	43.9	10.7	75	64		裏線痕多、 片側薄化	239- 5
96	- 6	フ BBA	34.2	(35.6)	6.6	(7.8)	ch.	(30.8)	(3.5)	—	46	刃片端欠	片側両面薄化	- 6
97	108住- 4	BCA	34.8	61.5	5.2	10.1	ch.	61.2	17.7	5	55		裏磨痕	-14
98	- 5	BDA	36.8	41.9	6.6	7.2	ch.ho.	41.1	5.2	0.5	46			-15
99	111住- 7	ABA	57.8	24.3	9.7	12.9	ch.	38.0	2.2	86	66		裏磨痕	240- 7
100	- 8	フ BBB	37.1	54.2	9.5	12.8	ch.ho.	54.0	8.0	1	67			- 8
101	- 9	CCA	32.3	32.0	4.2	4.0	si.sl.	35.6	3.6	40	37			- 9
102	-10	フ BCB	36.0	(38.5)	(7.4)	(7.9)		(38.7)	(3.2)	—	55	刃片端欠		-10
103	112住- 6	フ CBA+	37.8	32.4	7.3	9.3	ch.	32.8	6.6	59	40			241- 6
		ABB						17.6	0.8	99	69			
104	113住-23	ABA+	40.2	24.6	8.0	7.9		26.2	3.5	71	67		稜縁つぶ	242-23
		CBA						23.3	3.0	55	67		刃両面加	
105	-24	ホ ACB+	43.2	27.3	5.3	4.5	ch.	21.8	-0.8	112	67			-24
		CCA						27.0	2.5	58	43			
106	122住- 4	BBB	45.0	78.2	8.6	35.3	si.sl.	57.4	3.6	5	85			243-16
107	- 5	フ B・B	(26.9)	(34.2)	(6.3)	(5.9)	ch.	(25.8)	(2.0)	—	50	つまみ・ 刃端欠	裏磨痕と線痕	-17
108	127住-10	BBA	33.4	40.0	7.8	7.2		39.3	4.3	25	46		裏線痕、両面に縁直 交線痕、搬基線痕	-33
109	131住-15	CBB	(29.2)	(25.3)	(6.9)	(4.5)	ch.	(16.1)	(0.7)	—	47	刃大欠	裏磨痕多	244-17
110	-16	フ BCA	28.1	67.3	4.6	8.1	si.sl.	68.0	11.2	8	7		裏磨痕	-18
111	-17	フ //	30.5	35.0	8.0	7.0	ch.	32.3	7.7	1	34			-19
112	-18	フ BC・	(25.1)	(41.2)	5.8	(4.6)	si.sc.	—	—	—	—	刃全欠		-20

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刀部ふくらみ 値(mm)	つまみ 角(°)	刃角 (°)	破損状況	使用痕備考	図番号
113	131住-19	フ・A	(24.3)	(37.2)	(7.6)	(6.1)	ch.	(36.0)	(2.4)	—	73	刃端残		244-21
114	132住-7	ADA	72.0	38.0	11.4	21.4	si.sl.	61.2	6.4	68	59			245-7
115	-8	BBA	33.3	35.2	4.4	5.3	si.sl.	36.8	7.4	12	19			-8
116	-9	フ	21.9	45.0	5.0	4.1	si.sl.	44.0	3.9	13	63			-9
117	-10	BCB	38.4	59.3	8.6	14.1	si.sl.	54.6	3.0	3	50			-10
118	141住-7	AAC+	(43.8)	24.5	6.3	(7.2)	ch.	(29.0)	(-1.6)	—	61	刃端欠	裏磨痕と線痕	246-7
		AAC						(31.9)	(-2.0)	—	52			
119	-8	A・A	(54.5)	(27.1)	(8.0)	(10.5)	ch.	(13.2)	(1.5)	—	45	つまみ・ 刃端欠	裏磨痕	-8
120	1堅-4	B・A	(23.8)	(28.4)	(10.0)	(5.7)	ch.	(27.7)	(2.2)	—	65	刃端残		-21
121	外-260	CAC	47.4	42.5	9.7	15.5		19.2	-2.1	51	54		不定方向の線痕	249-11
122	-261	AAC	(41.6)	24.3	9.1	(12.1)	ch.	(24.8)	(-1.2)	—	53	刃端欠	裏磨痕少	-12
123	-262	ABB+	59.4	39.7	8.0	14.0	ch.	38.6	2.8	91	51			
		CBA						54.2	8.4	45	47			
124	-263	ABA+	34.7	28.1	5.9	6.7	ch.	23.4	2.0	93	31			-13
		ABA						19.0	1.6	72	34			
125	-264	ABA+	48.1	41.2	8.5	13.7	ho?	31.2	5.7	80	36			-14
		CBA						41.3	6.2	46	35			
126	-265	ACA+	55.6	33.6	9.5	14.2	ch.	41.5	2.9	90	63			
		CCB						41.0	0.9	55	48			
127	-266	A・A+	73.0	(30.6)	9.8	(21.3)	ch.	56.0	5.7	75	67	つまみ・片刃	裏磨痕多と線痕	-15
		A・A						47.0	5.6	99	53	端欠	裏磨痕多、線痕	
128	-267	ACA+	47.3	23.4	7.3	9.2		27.0	2.4	91	58		両面線痕	-16
		ACA						26.7	1.5	88	65		裏線痕	
129	-268	ACA+	43.3	32.1	8.2	10.3		32.3	4.9	88	55		両面線痕	
		CCC						23.2	-2.8	49	65			
130	-269	A・A	(49.5)	25.2	10.5	(14.8)	ch.	42.5	7.8	71	65	つまみ欠	(127と131の全面に 黒色物付着)	
131	-270	A・B	(56.6)	49.5	11.3	(36.0)	ho.	46.5	1.2	89	55	つまみ欠	裏磨痕多、線痕	-17
132	-271	BAA	51.6	(44.8)	10.2	(23.0)	ch.	(45.6)	(5.8)	—	57	刃片端欠		
133	-272	BAA	56.3	60.0	8.0	31.0	ch.	57.2	8.0	7	45		裏磨痕	250-1
134	-273	BA・	(40.0)	48.4	13.6	(21.2)	ch.	—	—	—	—	刃全欠		-2
135	-274	BAA	37.2	(33.7)	11.8	(17.0)		(34.7)	(11.3)	—	46	刃端欠	両面線痕多	-3
136	-275	フ	34.2	40.8	5.5	7.4	ch.	38.1	45.0	15	50		裏磨痕	-5
137	-276	フ	30.1	41.4	5.5	6.4	ch.	39.3	6.3	0	50		稜縁つぶ	-6
138	-277	フ	31.1	38.8	9.0	13.7	ch.	36.3	5.5	0	64			
139	-278	フ	34.0	(36.4)	8.2	(8.6)		17.7	(1.5)	—	77	刃片端欠	裏線痕	
140	-279	フ	33.9	36.0	7.0	7.0	ch.	28.6	2.9	10	40			-4
141	-280	フ	31.1	37.1	4.6	5.6	ch.	36.5	4.7	10	53		裏磨痕	
142	-281	フ	29.7	34.7	7.1	7.5	ch.	33.4	5.6	5	40			
143	-282	フ	40.9	36.5	5.1	9.7	ch.	34.5	4.8	19	52		裏稜縁つぶ 両面加	-7
144	-283	BBA	34.4	55.0	7.9	13.4	ch.	52.2	4.7	2	53		裏磨痕多、線痕	-10
145	-284	フ	36.8	42.0	5.9	7.1		38.2	4.5	18	51		両面線痕	
146	-285	フ	26.7	36.8	5.8	5.6	ch.	32.7	3.1	6	43			
147	-286	フ	27.7	38.0	5.2	5.1	ch.	35.3	4.0	16	51		裏磨痕	-9
148	-287	BBB	30.8	33.7	9.0	8.8	si.sc.	28.0	1.0	6	53			-12
149	-288	CBB	30.2	28.5	9.2	4.7		21.2	-0.7	43	75		裏線痕多、両面線直 交線痕少、掘基線痕	-13
150	-289	BCA	43.0	55.2	6.8	15.5	ch.	58.2	10.8	19	55	(刃部 作出2回)	線痕	251-1
151	-290	フ	36.4	63.3	9.1	17.4	si.sc.	56.8	8.8	13	58			-2
152	-291	フ	44.8	40.5	8.3	14.9	si.sl.	37.7	5.7	13	60		裏磨痕	

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	つまみ 角 (°)	刃角 (°)	破損状況	使用痕 備考	図番号
153	外 - 292	BCA	32.5	56.7	11.8	13.3	si.sl.	56.6	7.9	7	72			
154	- 293	ACA+ CCB	49.0	37.7	8.5	10.8	ch.	33.0 21.0	2.5 1.0	112 37	71 82			
155	- 294	CCA	42.5	39.4	8.6	11.8	ch.	45.4	9.3	36	73	裏磨痕少 刃部鋸歯状	251-4	
156	- 295	BCA	27.0	46.8	8.1	8.6	ch.	45.5	7.6	2	43		-3	
157	- 296	BCB	38.7	56.8	8.8	15.5	ch.	53.4	1.2	14	45	裏磨痕、線痕非常多	-5	
158	- 297	〃	43.2	45.2	5.8	7.4	ch.	41.0	0.5	13	51			
159	- 298	〃	34.8	53.5	6.0	7.9	ch.	52.0	1.6	0.5	55		-6	
160	- 299	〃	34.0	58.7	8.9	10.5	si.sl.	47.6	0.8	2	40			
161	外 - 300	BDA	35.0	56.8	6.5	11.1	ch.	53.8	10.9	0.5	39		刃部鋸歯状	-7
162	- 301	〃	37.8	(46.3)	5.2	(7.0)	ch.	45.3	8.0	12	25	背片端欠		-8
163	- 302	〃	28.8	49.6	(5.7)	(7.0)	si.sc.	46.6	6.2	5	80	片面欠		
164	- 303	〃	31.8	31.0	6.2	5.7		27.8	4.4	20	48	両面線痕		-9
165	- 304	〃	31.8	39.0	6.5	6.6	si.si.	35.9	2.6	11	47			
166	- 305	〃	29.3	28.2	6.1	4.4	ch.	25.7	2.1	16	66			-10
167	- 306	〃	25.7	20.8	5.8	2.3		14.6	1.1	12	55	両面線痕少、 刃部両面加		-11
168	- 307	BDB	34.2	38.8	10.0	11.0	ch.	28.9	-1.0	7	55			
169	- 308	BDC	26.8	36.5	5.1	4.1	ch.	29.4	-1.2	2	54	刃部加2回		
170	- 309	BBA	31.5	46.8	6.5	7.8	ch.	43.6	3.0	4	72	刃部両面加	250-11	
171	- 310	・・A	38.5	(29.7)	(6.0)	(6.2)	ch.	35.0	2.0	—	52	つまみ欠		
172	- 311	CBA	53.2	61.6	9.3	30.0	si.sl.	71.7	11.4	34	53			-8
173	- 312	BDB	(60.9)	93.5	13.0	(66.6)	si.sl.	58.5	1.0	12	52	つまみ欠		251-12
174	5 D-1	CBB	41.1	35.0	9.2	10.3		35.0	2.0	34	53		両面線痕少、 ハート形	264-4
175	15 D-2	BAB	26.7	28.9	9.0	7.3		17.5	1.0	5	73		両面線痕、振基線痕 (刃は有扶輪磨石器18と同)	-12
176	44 D-1	B・A	22.3	33.0	6.1	(4.7)	ho.	29.3	2.8	1	58	つまみ欠		265-1
177	59 D-1	CBB	38.2	43.1	5.4	7.2		37.5	2.4	44	36		両面線痕多	-5
178	66 D-3	ABB	56.2	37.7	11.1	18.7		31.0	1.1	106	56		両面線痕多 撮部まで	-8

スクレイパー

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
1	1住-23	ユ BBA	(28.0)	(31.0)	(8.0)	(6.1)	ch.	(19.1)	(2.2)	59	頂端欠		212-23
2	-24	フ CAA	54.4	26.5	9.1	11.0		41.4	0.8	73			-24
3	-25	フ 〃	56.7	65.0	11.1	18.0	ch.	47.2	-1.9	55			-25
4	-26	フ 〃	40.6	74.2	15.7	59.1	ch.	53.0	-1.0	80			-26
5	-27	フ 〃	91.2	23.1	8.8	20.5	ho?	86.1	-1.5	51			-27
6	-28	フ CDA+ DA) A	76.4	31.0	13.6	23.9		53.3 72.2	-1.0 -45	80 72		裏線痕 両面線痕、稜つぶ刃こぼ	213-1
7	-29	フ DAA	58.8	32.6	9.0	20.3	si.sl.	44.5	-2.0	74			-2
8	-30	フ BAB	23.2	46.2	10.5	13.0	ch.	25.0	4.7	66			-3
9	6住-2	ユ BAA	38.4	22.0	5.8	3.6		27.0	3.1	34		両面線痕	-11
10	-3	フ BBD	12.2	27.0	6.9	1.9		27.2	3.4	58			-12
11	8住-28	フ AAA	31.6	24.0	11.0	8.3		0	31.6	65		刃部全周	214-6
12	-29	フ 〃	(33.4)	31.5	7.2	(8.1)		(32.4)	(10.2)	59	末端欠	刃つぶ	-7

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
13	8住-30	フ BAA	25.8	32.0	5.8	3.3		26.0	4.1	59		刃つぶ	214-8
14	-31	フ //	29.2	58.8	10.9	16.3	ch.	55.7	6.0	71			-9
15	-32	フ (BA+BA) A	20.5	13.6	9.4	0.8		13.1	1.9	27			-10
16	-33	フ DAA	40.5	14.6	10.7	3.6		17.5	2.1	30			-11
17	-34	フ (5AD+2AC) A	41.0	48.9	16.9	24.1	ch.	32.3	-1.5	51		内湾する刃が連続。 刃長、ふくらみ値省略。	-12
18	-35	フ DBD	21.2	21.4	4.1	1.7		18.8	-0.7	33			-13
19	-36	フ DBA	(23.5)	31.8	8.0	(4.7)	ch.	11.0	-5.3	70	末端欠	全周を調整	-14
20	-37	フ //	47.2	16.6	6.5	3.5		39.0	-6.5	70		全周を調整	-15
21	11住-8	フ ABA	38.5	20.3	8.3	5.7		20.2	17.1	50		表へ刃こぼ	215-12
22	-9	フ CAA	24.0	32.6	6.6	4.8		23.1	-0.6	80		表へ刃こぼ	-13
23	12住-48	フ AAA	30.8	18.3	9.5	5.0		20.9	5.4				216-7
24	-49	フ AAC	28.8	16.0	6.9	3.2		15.9	8.0	58			-8
25	-50	フ AAB	19.2	18.6	5.2	2.2		19.6	10.2	73			-9
26	-51	フ AAA	44.0	26.6	8.2	5.0		23.6	5.7	73			-10
27	-52	フ BAA	69.6	28.2	12.5	17.2	ch.	70.3	17.2	67		表へ刃こぼ 背部薄化	-11
28	-53	フ //	48.2	42.4	12.2	17.2		18.0	1.6	55		裏内湾部軸直交線痕	-12
29	-54	フ //	31.3	36.9	5.4	7.3		36.4	8.4	56			-13
30	-55	フ //	35.4	18.8	6.1	4.2		29.8	5.4	55			-14
31	-56	フ BAC	32.5	31.7	8.0	8.5		27.5	4.5	64			-15
32	-57	フ (BA+DA) A	32.0	20.8	7.8	4.0		29.0	4.8	61		表へ刃こぼ	-16
33	-58	フ BAD	(24.0)	(34.2)	(7.3)	(4.6)		25.7	-1.2	52		表へ刃こぼ	-17
34	-59	フ BAB	38.0	27.1	11.0	8.4		(27.1)	(1.5)	57	破損品		-18
35	-60	フ CAB	29.3	42.8	9.3	11.0		20.0	3.8	71			-19
36	-61	フ CAA	30.1	21.0	6.4	4.0		36.2	2.0	55		両面線痕多	-20
37	-62	フ //	18.0	29.6	6.8	3.4		25.6	1.8	64		刃つぶ	-21
38	-63	フ //	19.5	27.4	7.0	(4.0)		26.8	3.7	51			-22
39	-64	フ CBA	(21.8)	(18.6)	5.0	(1.8)		26.1	2.0	55	片側刃欠	裏に縁直交線痕	-23
40	-65	フ (DB+DB) A	30.9	31.5	5.8	5.9		(24.5)	(1.2)	(65)	末端欠		-24
41	15住-21	フ AAA	30.0	41.0	12.8	15.8	ch.	39.7	16.6	86		刃こぼ	218-21
42	-22	フ //(28.7)	(43.2)	(8.1)	(13.0)		ch.	(46.6)	(15.5)	77			-22
43	-23	フ BAA	27.9	22.0	8.2	4.4		22.7	4.5	71	側端頂端欠		-23
44	-24	フ CAD	37.1	42.0	9.0	16.3	ho.	42.1	2.8	51			-24
45	-25	フ CAA	33.8	20.5	9.4	4.8		27.7	0.8	56			-25
46	-26	フ DAA	37.8	21.1	7.9	4.2		30.8	-2.1	65		刃つぶ	-26
47	16住-45	フ BAA	38.5	27.9	6.9	7.5	gu.	30.0	2.8	55		刃こぼ、刃縁部つぶ	219-45
48	-60	フ AAA	31.4	30.4	9.5	8.0		30.3	26.2	72			220-7
49	-61	フ //(35.0)	29.8	7.0	(7.7)			33.9	21.3	83	末端欠	刃こぼ	-8
50	-62	フ //	18.6	21.4	11.8	4.8		14.0	19.9	65		稜つぶ、点痕不定方向線痕	-9
51	-63	フ BAA	33.5	19.2	4.8	3.0		27.0	1.9	63		裏に縁直交短線痕	-10
52	-64	フ //(34.6)	(16.8)	(8.1)	(3.9)			(26.7)	(2.7)	71	半欠	裏線痕少	-11
53	-65	フ //	21.1	18.2	3.1	1.1		15.6	2.1	67			-12
54	-66	フ (BA+CA) A	29.4	15.1	3.9	1.4		27.6	8.1	65			-13
55	-67	フ BAA	31.1	40.0	7.3	6.5		13.0	-0.5	51			-14
56	-68	フ //	42.2	24.5	11.1	10.2		35.0	7.2	31			-15
57	-69	フ //	28.0	44.0	12.1	11.8		30.0	4.9	8.6			-16
58	-70	フ //(19.0)	30.5	5.1	(4.1)		ch.	40.9	2.8	65			-17
59	-71	フ CAA	29.2	29.2	6.9	5.5		16.9	2.4	75	末端欠		-18
								21.5	1.2	32			-18

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
60	16住-72	フ CBA	30.5	42.0	5.7	6.8	ch.	33.2	1.3	65		側縁薄化	220-19
61	-73	フ CAA	24.9	32.5	6.3	4.3		39.9	2.5	75			-20
62	-74	フ DAA	46.7	24.8	7.5	8.2		35.5	-3.2	45	刃端欠	裏線痕	-21
63	-75	フ (DA+DA) A	17.0	35.2	8.4	4.3		5.9	-1.6	75		ノッチ状	-22
64	-76	フ (DA+DA) D	59.8	86.5	12.4	51.5	si. sl.	8.3	-1.0	80		三角形	221-1
								49.2	-2.6	83			
								40.0	-3.0	63			
								81.5	-2.0	64			
65	-79	フ DBA	(30.0)	(38.5)	(5.5)	(5.2)	ch.	9.5	-3.4	78	頂端残	石匙か?	-4
66	19住-2	フ (DA+DA) A	60.0	49.0	13.5	32.1	ch.	35.9	-1.8	51		表面頂端薄化	224-20
								38.3	-3.0	62			
67	21住-22	フ BAA	(44.3)	(31.3)	9.2	(10.5)		(20.3)	(3.0)	51	末端欠		225-22
68	-23	フ (CA+CA) A	(34.0)	(20.8)	(8.4)	(5.6)		24.8	1.4	58	頂端、末端欠		-23
								23.0	1.2	68			
69	-24	フ (CA+BA) A	64.9	34.0	9.4	22.0		28.3	0.8	37			-24
								55.9	5.8	66			
70	-25	フ BAA	(24.2)	40.0	(8.4)	(9.1)	ch.	(16.1)	1.1	40	末端欠		-25
71	-26	フ //	27.9	41.7	7.6	7.8		38.0	4.0	62			-26
72	23住-7	フ AAA	28.2	20.9	7.2	3.5		20.5	6.0	55			226-11
73	-8	フ BAD	(17.7)	(19.8)	(4.2)	(1.4)	ch.	(20.6)	(5.8)	50	一部残		-12
74	24住-1	フ CAA	(25.2)	41.0	6.2	(5.3)		32.8	1.8	88	末端欠	裏線痕	-14
75	25住-5	フ CAB	28.7	38.9	7.1	8.4		25.3	0.7	77		両面に縁直交長線痕	-19
76	26住-21	フ AAA	29.0	25.4	9.0	4.4		28.8	12.5	68		石錐(31)と同	227-1
77	-22	フ BAA	25.2	17.8	4.4	1.9		24.0	7.2	73			-2
78	-23	フ DAA	49.1	22.0	9.9	11.3		37.5	-1.8	64		両面線痕	-3
79	28住-1	フ CAA	23.7	16.5	4.4	1.2		16.9	5.7	38		頂端両面から薄化	-12
80	37住-9	フ BAA	28.7	19.6	4.7	2.2		24.2	10.3	72			-21
81	-10	フ //	34.7	36.0	14.2	14.8		27.9	6.0	43			-22
82	-11	フ //	30.1	36.7	9.0	10.6	ch.	36.6	6.3	50			-23
83	-12	フ BBB	51.9	30.0	12.3	18.5		43.1	5.8	46		縁つぶ	-24
84	-13	フ CAA	41.8	32.2	6.2	9.3	ch.	40.4	-1.2	28		両面磨痕	-25
85	-14	フ //	47.2	36.5	10.6	12.7		38.7	2.0	73		両面線痕多	-26
86	-15	フ //	58.1	35.2	12.3	18.4		53.9	3.7	65		両面線痕少	228-1
87	-16	フ //	45.0	30.0	11.8	15.4		38.8	2.2	54		両面線痕少	-2
88	-17	フ (CA+DA) A	(53.5)	49.6	15.4	(29.0)		55.6	—	—	C A の	両面線痕多 裏面末端薄化	-3
								26.3	-2.2	59	刃部欠	両面に縁直交線痕多	
89	-18	フ CAA	(21.7)	(27.0)	(5.8)	(3.5)	ch.	(18.9)	(0.9)	60	末端残		-4
90	-19	フ DAA	(44.7)	(18.0)	8.2	(6.2)		(36.4)	(-2.8)	61	末端欠		-5
91	-20	フ //	50.6	27.2	9.2	7.9		41.0	-2.4	37			-6
92	-21	フ (DA+DA) A	46.5	26.5	9.1	13.9	ch.	17.9	-1.6	64		両面線痕少	-7
								29.6	-1.1	64			
93	38住-9	フ BAA	(65.8)	(44.2)	(10.0)	(26.0)	ch.	(43.8)	(10.7)	47	片側刃欠		229-9
94	-10	フ //	27.7	34.2	11.7	12.2	ch.	33.0	2.9	72		石匙の一部?	-10
95	-11	フ //	20.5	23.2	6.0	2.7		20.8	3.3	75		表面頂端薄化	-11
96	-12	フ CBA	17.5	43.7	8.4	4.3		30.6	1.2	79			-12
97	46住-23	フ BBA	32.2	19.7	7.8	4.7		27.3	2.6	63			230-31

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
98	46住-24	フ BBB	24.5	53.9	11.5	13.5		50.4	3.3	71		線痕表多、裏少。右端 表に縁直交線痕	230-32
99	47住-10	フ (CA+ DA) A	25.2	38.3	10.0	10.5	ch.	20.6 23.5	0.7 -2.4	73 65			231-15
100	49住-6	CAA	42.6	67.3	14.2	45.7	si.sl.	49.0	3.0	49		頂端調整	-27
101	50住-7	ユ (CA+ DA) A	54.7	35.6	9.5	12.1		26.7 38.2	0.6 -2.0	57 55		縁斜交(40°)線痕	-35
102	52住-5	BAA	28.0	26.2	7.3	5.4		26.6	4.8	73		裏に縁直交短線痕	232-5
103	-6	〃	28.8	15.4	4.7	2.1		14.0	3.0	40			-6
104	-7	CAA	26.7	21.0	9.8	5.3		24.3	0.7	72			-7
105	59住-6	AAA	21.0	20.4	6.5	2.4		18.4	12.5	63			-31
106	-7	(CA+ CA) A	38.8	24.2	7.4	5.7	ch.	25.2 25.7	0.9 1.7	48 61			-32
107	59住-8	DAA	44.3	36.2	10.1	15.9	ch.	34.6	-5.5	81			232-33
108	65住-6	BAD	(22.0)	(18.2)	(5.0)	(1.6)	ch.	(15.5)	(1.1)	43	頂端残		233-12
109	-7	(CA+ DA) A	42.9	22.9	5.4	4.9		29.5 29.0	0.4 -1.4	56 47		表線痕少 全面線痕 末端裏面薄化	-13
110	66住-13	ユ BAA	52.8	35.6	11.0	18.0	ch.	40.9	4.0	63			234-1
111	-14	ユ 〃	41.2	20.3	6.5	5.0		17.9	4.5	52			-2
112	-15	ユ 〃	22.9	52.6	7.4	9.2	ch.	42.4	3.2	85		頂端調整	-3
113	-16	ユ BBC	31.6	27.2	9.1	8.2		25.5	2.5	80		全周に調整(撓形)	-4
114	-17	ユ DAA	46.5	25.8	10.6	7.7		8.3	-2.0	70			-5
115	68住-4	CAD	(17.2)	(18.2)	(4.6)	(0.8)		16.9	0.6	59	刃部残		-11
116	-5	DBD	(26.8)	35.1	(6.4)	(5.3)	ch.	(16.2)	(2.7)	74	2ヶ所欠	形態不明	-12
117	-6	〃	14.5	32.5	5.7	1.8		18.4	-3.0	84		両端ふくらむ山形、全周調整	-13
118	69住-4	BAA	31.6	32.0	13.0	11.1	ch.	27.2	4.2	72			-20
119	-5	〃	13.0	24.2	4.4	1.4		22.0	2.6	63		頂端表面薄化	-21
120	-6	(BA+ BA) A	23.0	22.9	5.9	1.7		15.7 13.0	0.9 2.5	78 50			-22
121	73住-4	BAA	15.3	39.8	5.9	4.2	ch.	37.5	3.3	55		頂端調整	-27
122	74住-9	フ CAA	53.2	36.8	14.3	25.5		47.4	3.4	61			235-9
123	75住-14	BAA	28.5	28.5	8.2	6.7		23.7	4.5	67		裏に縁直交短線痕	-25
124	-15	〃	(23.0)	(28.1)	(6.2)	(4.2)	ch.	(23.4)	(5.9)	77	末端残		-26
125	95住-6	フ (BA+ BA+ CA) A	41.5	19.1	8.0	5.3		27.0 11.9	3.6 3.1	71 86		裏に縁直交~斜交(40°)短線痕	237-9
126	-7	(BB+ CB) A	25.5	32.3	8.0	7.2	ch.	18.8 20.0 15.9	0.6 2.2 -0.8	83 52 62		裏に縁直交短線痕	-10
127	96住-13	BAB	40.3	67.0	13.3	26.2	ch.	67.0	24.0	50		両面加工で木の葉状	-26
128	-14	CBA	35.6	16.3	4.3	2.3		14.6	-0.3	41		頂端調整	-27
129	-16	ユ (CB+ CB) C	55.7	22.5	8.9	7.4		27.2 36.7	1.1 -1.5	70 68		刃部鋸歯状	-29

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
130	98住-8	BAA	(26.2)	(25.0)	(4.8)	(2.7)		(19.1)	(1.8)	79	末端欠	側辺調整	238-8
131	99住-2	(CA+CA)A	(52.8)	36.0	7.8	(13.5)	ch.	45.2 30.7	1.8 -1.0	65 53			-13
132	102住-5	フ BAA	39.7	36.9	13.2	11.9		22.3	4.4	72			-19
133	-6	フ CAD	(20.7)	(30.1)	(7.2)	(3.5)		(19.8)	(0.9)	70	端欠	破損は頂端表面の割離による	-20
134	104住-4	フ BAA	(40.8)	31.0	6.9	8.8	ch.	40.0	5.8	61	頂端欠		-24
135	106住-7	(BA+CA)A	24.4	15.7	6.3	2.6		12.8 19.0	2.8 1.0	50 52		裏縁刃つぶ少	239-7
136	-8	フ DAA	(25.0)	(23.9)	7.0	(3.4)		19.5	-1.0	42	片側辺欠	縁つぶ 末端表面薄化	-8
137	-9	フ CAA	42.0	25.5	7.0	6.1		39.0	2.4	33		頂端表面薄化	-9
138	108住-6	フ AAA	47.0	37.8	15.2	25.0		41.5	18.8	69		裏に縁直交短線痕	-16
139	111住-11	〃	47.3	39.9	8.5	14.4	ch.	47.9	22.0	45		裏磨痕	240-11
140	-12	BAA	(38.0)	(43.7)	9.0	(19.6)	ch.	(37.0)	3.7	65	側辺末端欠		-12
141	-13	フ CAA	(32.2)	(15.2)	(8.1)	(3.6)	ch.	(28.4)	(-0.9)	49	頂端欠	側辺調整	-13
142	-14	フ (DB+DB)A	(62.2)	(20.8)	(9.0)	(10.4)	ch.	16.0 (24.0)	-5.5 (-3.0)	94 96	片側辺欠	形態不明	-14
143	112住-7	ユ AAA	38.2	25.5	8.8	7.1		24.5	7.0	71		裏に縁直交短線痕多	241-7
144	-8	(BA+BA)A	40.1	32.1	10.2	11.6	ch.	30.2 19.7	5.5 2.4	42 42		頂端表面薄化	-8
145	-9	ユ BAA	(27.2)	(34.8)	8.3	(7.6)	ch.	(26.5)	(3.2)	48	末端欠		-9
146	-10	ユ 〃	28.5	(39.9)	8.3	(11.5)	ch.	(32.2)	(4.1)	72	片側辺欠		-10
147	-11	フ 〃	23.4	(30.9)	7.0	(4.5)		(24.9)	(2.7)	83	両側端欠	刃つぶ	-11
148	-12	フ (BA+BA)A	29.4	23.0	7.8	5.3		25.2	3.5	65			-12
149	-13	ユ CAA	(38.9)	23.4	6.2	(5.3)		24.1 32.2	3.0 1.4	52 78	末端欠	裏に縁直交短線痕 表面薄化頂端	-13
150	-14	フ 〃	37.1	30.0	13.7	13.0		34.7	5.3	52		両面線痕多、縁直交線痕多	-14
151	-15	ユ DAA	71.7	25.3	9.4	23.5	si.sl.	51.4	-2.8	75			-15
152	-16	ユ 〃	38.6	23.5	9.0	5.8		25.4	-1.0	64			-16
153	113住-25	ユ BAB	26.8	52.7	11.2	14.6		49.8	7.0	82		縁つぶ少 両面加工	242-25
154	-26	ユ CAA	52.8	34.2	5.7	9.6	ch.	46.9	1.0	44			-26
155	-27	ユ 〃	50.4	27.2	9.9	13.9	ch.	36.4	2.0	74			-27
156	-28	フ CBA	22.0	26.7	5.0	3.9		15.8	0.5	44			-28
157	119住-7	BAA	39.4	28.8	4.5	5.7	ch.	39.0	11.8	53			243-11
158	-8	ユ 〃	26.5	39.5	9.6	8.6		28.0	2.7	41			-12
159	122住-6	〃	55.5	29.9	15.2	22.2		41.2	6.3	62		両面線痕多	-18
160	-7	ユ (BA+DB)A	41.0	38.5	6.6	7.0	ch.	17.5 10.7	2.0 -3.6	70 82	頂端欠	刃部連続、側辺表面薄化、形態不明	-19
161	-8	CBA	38.0	32.5	8.3	9.2		26.4	1.0	51		抉り状	-20
162	127住-11	(BA+BA)A	47.3	31.5	9.5	13.9		41.4 23.5	4.8 3.6	68 81		裏線痕	-34
163	-12	(CA+CA)A	35.8	14.7	6.6	3.2		24.6 22.0	0.6 0.8	86 72			-35
164	131住-20	BAA	25.7	35.0	7.2	8.0	ch.	24.2	5.0	50		裏磨痕と線痕	244-22

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
165	137住-6	BAA	36.9	19.9	11.3	6.8	ch.	34.2	10.8	51			245-21
166	139住-4	CAA	22.5	16.2	3.6	1.5		13.8	1.0	61		刃こぼ	-22
167	外-313	AAA	43.9	40.2	12.9	21.8		41.9	27.8	52		縁つぶ	252-1
168	-314	〃											-2
169	-315	〃	32.0	43.4	9.0	13.1		43.3	17.8	79		裏に縁直交短線痕	-3
170	-316	〃	32.8	45.3	11.7	18.8		44.5	14.0	64			-4
171	-317	〃	32.7	40.0	4.8	6.2		32.7	18.6	41			-5
172	-318	〃	36.8	23.5	16.0	13.3		27.9	10.2	60		縁つぶ	-8
173	-319	〃	20.8	25.5	6.5	4.4		22.8	19.0	80		縁つぶ	-6
174	-320	〃	24.4	18.2	6.4	2.7		24.0	9.9	67		裏に縁直交短線痕	-11
175	-321	〃	42.8	31.6	10.4	9.9		41.4	11.0	65		両面線痕少	-9
176	-322	〃	43.5	22.9	6.7	6.5		42.3	12.0	41		頂端表面薄化	-10
177	-323	〃	(28.8)	(23.5)	9.4	(6.0)		(34.3)	(7.3)	50	頂端欠	縁つぶ	
178	-324	〃	24.6	24.3	8.7	4.3		23.5	6.0	46		縁つぶ	頂端調整
179	-325	〃	24.8	21.6	8.2	3.5		24.8	9.2	67			-7
180	-326	AAB	32.4	43.5	17.8	23.3		20.4	37.8	67		縁つぶ	-12
181	-327	〃	21.0	36.8	7.9	6.6		33.1	18.8	74			-14
182	-328	〃	26.3	30.0	10.3	7.2		26.8	18.9	83			-13
183	-329	AAC	28.5	31.0	7.7	5.7		26.8	5.6	75			-15
184	-330	ABC	26.6	37.7	12.2	8.9		35.3	9.5	46			-16
185	-331	(BA+DA) A	54.6	39.6	9.2	15.6	ch. ho.	38.5	1.5	83			253-1
186	-332	BAA	44.8	30.2	11.2	14.4		42.5	6.3	59		裏中央に太擦痕。 両端表面薄	-2
187	-333	〃	48.8	27.8	12.0	13.4		39.4	4.9	44		全面線痕少	-3
188	-334	〃	30.7	23.2	11.7	6.0		30.2	3.0	50			-4
189	-335	〃	42.4	23.3	11.0	9.6		27.4	2.2	56		刃つぶ	-5
190	-336	〃	(45.8)	21.2	4.8	(5.3)	si. sl.	(45.7)	5.9	51	末端欠	裏磨痕、挟入1	-6
191	-337	〃	42.5	17.9	7.3	4.0		29.0	2.1	65		両面線痕少	-7
192	-338	(BA+BA) A	39.2	20.7	4.7	5.1		27.2	3.2	71			-8
193	-339	BAA	28.8	19.0	7.6	4.9	ch.	28.5	3.3	58			-9
194	-340	〃	28.6	19.2	5.8	(2.7)		(23.1)	(2.4)	54	末端欠		-10
195	-341	〃	(20.5)	(24.0)	(7.8)	(3.1)		(18.2)	(2.5)	66	末端残	稜縁つぶ、点痕	-11
196	-342	BAA	21.0	15.5	4.9	1.6		15.5	1.8	53			-12
197	-343	(BA+BA) A	36.2	18.0	7.5	4.0		15.5	1.5	59			-13
198	-344	BAA	28.0	25.8	7.0	5.1	ch.	25.6	2.8	42		表面からの片面加工挽形	-14
199	-345	〃	17.1	27.0	8.2	3.4		23.3	3.0	82			-15
200	-346	BAD	48.7	48.6	9.7	22.9	si. sl.	44.8	7.0	38		刃部反対端両面から薄化	-16
201	-347	〃	31.9	(36.6)	9.4	11.0	ch.	31.9	3.4	52	端欠	1対の挟入有り、そこから破損。	-17
202	-348	〃	31.4	34.8	9.2	9.2	si. sl.	33.2	5.1	60		裏磨痕 石匙?	-18
203	-349	CAA	42.8	36.0	10.4	11.8		32.0	1.7	71		縁つぶ	254-1
204	-350	〃	(40.6)	(31.8)	7.1	(6.6)	ch.	31.6	1.2	38	末端欠		-2
205	-351	(BA+CA) A	51.0	26.6	9.8	9.4		25.3	2.0	54		両面線痕	-3
206	-352	CAA	48.5	29.7	7.2	8.3		43.2	1.0	64		両面線痕	-4
207	-353	〃	40.8	17.5	10.2	5.4		32.3	1.9	40		両面線痕	-5
208	-354	〃	38.4	23.5	4.2	2.8		31.1	-1.0	39		両面線痕非常多	-6
209	-355	〃	38.4	22.4	6.3	5.3	ch.	19.3	1.1	48			-7
210	-356	〃	33.0	18.6	7.9	4.3		22.2	0.7	46			-8

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
211	外 - 357	CAA	(38.2)	(22.8)	(9.5)	(7.3)	ch.	(31.6)	(2.2)	75	頂端欠	挿入1	254-9
212	- 358	〃	(30.6)	(26.4)	(9.2)	(7.7)		(22.5)	(1.2)	72	末端欠	両面線痕	-10
213	- 359	(CA+ CA)A	35.5	21.4	6.7	5.2		25.2	-0.9	53		両面線痕少	-11
214	- 360	CAA	35.0	18.7	5.0	3.6		22.3	0.8	57		両面線痕少	-12
215	- 361	〃	42.7	18.8	5.9	3.1		25.7	1.3	31			-13
216	- 362	〃	37.2	19.2	8.4	4.3		30.5	0.9	48		刃こぼ	-14
217	- 363	(CA+ CA)A	30.8	19.0	6.2	6.1		21.4	0.9	50		頂端調整	-15
218	- 364	CAA	27.2	18.5	7.0	3.7		25.2	-0.8	41		両面線痕	-16
219	- 365	〃	(31.0)	16.5	(3.7)	(1.9)		20.2	1.0	56		両面線痕少	-17
220	- 366	〃	31.0	10.8	6.8	3.2	ch.	24.0	1.4	47	頂端欠	両面線痕、縁平行太擦痕 全面不定方向の線痕、擦痕	-18
221	- 367	BAA	30.0	14.2	6.0	2.0		17.4	0.8	75		挿入1	-19
222	- 368	CAA	22.8	17.5	3.2	1.4	ch.	16.1	1.8	58			-20
223	- 369	〃	35.2	13.2	5.1	2.1		24.5	1.1	25			-21
224	- 370	〃	26.0	12.6	4.0	1.0		20.9	0.8	45			-22
225	- 371	〃	27.0	8.3	5.1	(1.2)		21.4	-0.7	33		両面線痕	-23
226	- 372	〃	23.4	(14.2)	2.4	(1.0)		(23.3)	(0.7)	70	頂端欠		-24
227	- 373	〃	23.4	(15.6)	3.7	(1.3)		17.9	1.0	35	片側辺欠	頂端調整	-25
228	- 374	(CA+ CA+ DA)A	59.9	52.7	13.3	32.5	ch.	15.7	-1.0	51	片側辺欠		255-1
229	- 375	(CA+ CA)A	40.0	45.9	9.7	17.6		46.6	-1.7	46			-2
230	- 376	CAA	40.0	59.8	12.1	30.8	si.sl.	39.7	1.5	50		裏に縁直交短線痕と擦痕 裏に縁直交不定方向短線痕	-3
231	- 377	〃	38.7	41.7	8.8	9.7	ch.ho.	43.4	-2.6	69			-4
232	- 378	〃	29.4	35.0	10.4	8.9		33.0	1.6	75			-5
233	- 379	〃	21.7	23.0	(4.7)	(2.9)		37.1	1.7	66			-6
234	- 380	〃	17.5	25.0	3.7	1.3		53.5	1.6	80			-7
235	- 381	CAB	32.5	29.3	5.7	6.3		19.5	0.7	44			-8
236	- 382	CBA	(29.4)	(23.0)	(5.0)	(3.1)	ch.	23.8	1.5	78		裏中央に刃部斜交(70°)擦痕	-9
237	- 383	CBC	68.6	37.3	11.8	20.9		9.7	0.6	49	末端欠	両面線痕多	-10
238	- 384	CAD	(19.7)	(19.0)	(10.1)	(4.3)	si.sl.	19.4	0.6	60		頂端調整	-11
239	- 385	〃	(20.0)	(45.2)	(9.0)	(6.6)		23.1	0.8	62		矩形板状に調整	-12
240	- 386	DAA	71.8	55.0	8.5	33.0		52.8	2.8	67		両面線痕少	-13
241	- 387	〃	49.5	51.6	10.2	22.5	ho.	(17.3)	0.7	60	刃の一部	石匙か?	-14
242	- 388	〃	22.7	(32.7)	5.0	(3.2)	ch.	(44.3)	(2.0)	81	刃部のみ	両面加工	-15
243	- 389	DBA	(32.0)	19.8	5.2	(3.2)		28.0	-2.6	64		裏面線痕	-16
244	- 390	DAC	24.8	37.3	9.8	7.0							-17
245	- 404	(BA+ BA)A	54.7	22.8	11.8	12.0		48.4	-4.0	60		石錐65と同	-18
246	- 405	(DA+ DA)A	48.3	28.0	13.9	16.5		24.5	-1.7	45	片側辺欠	頂端調整	-19
247	3ド-1	CAA	34.2	34.2	6.9	7.9	ch.	(28.4)	-1.3	34	頂端欠		264-2
248	7ド-1	BAA	25.6	29.7	7.4	4.9		15.2	-2.1	61		側辺つぶ	-20
249	17ド-1	AAA-	29.1	30.9	8.5	7.7		42.4	3.2	56		両面線痕 石錐75と同	256-14
250	26ド-3	BBA	(20.0)	(27.4)	(8.2)	(4.3)	ch.	35.2	2.4	54		裏線痕	-21
251	- 4	〃	52.1	35.0	13.1	14.4		16.0	-1.2	69		刃つぶ、一部稜つぶ	258-18
								9.0	2.1	52		刃部連続、2つの突出部	-22

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	刃長 (mm)	刃部ふくらみ 値(mm)	刃角 (°)	破損状況	使用痕・備考	図番号
252	40D-2	BAA	29.3	37.8	8.5	7.9		33.7	4.1	42		両面線痕少	264-27
253	42D-2	CAA	36.1	18.6	4.6	2.7		28.3	1.0	39		裏線痕少	-29
254	-3	DAB	36.5	43.7	10.3	16.0		28.2	-1.0	49			-30
255	66D-4	CAA	28.4	58.0	13.3	15.6		33.0	1.1	50		両面線痕多 刃部両面加工	265-9
256	77D-1	々	25.4	34.7	10.2	7.6		21.2	1.2	54		片側辺薄化	-10
257	78D-3	AAA	16.1	18.9	6.4	1.7		21.9	8.1	56			-13
158	123D-1	DAC	17.0	33.0	8.2	3.6		11.9	-1.1	79		刃こぼ	-24
159	142D-1	CAA	19.6	30.2	6.0	3.5		19.0	0.7	50			-28

複数挟入石器

No.	出土地点	挟入数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	破損状況	石質・使用痕・備考	図番号
1	8住-38	フ 4 対	48.4	17.5	8.4	6.6		つまみ状部有イモムシ状	214-17
2	46住-25	フ 3対+1	93.8	40.7	10.8	34.5		挟入前に右辺表裏面に縁辺と平行な線痕多。 稜つ点痕部分的	230-33
3	47住-11	(1対)+2	(29.0)	12.5	4.3	(1.2)	1対の挟入部より上欠	全面に不定方向の線痕	231-16
4	113住-29	ユ 1対+3+1	45.2	37.3	10.4	9.7		稜つ、点痕少、突出部1ヶ所稜つ多	242-29 -30
5	-30	ユ 3 対	22.8	17.9	3.9	1.5			
6	外 - 513	3対+1	60.6	36.0	13.9	27.3		si. sl. 尖頭器?	261-1

小型有挟頭磨石器

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	欠損状況	使用痕・備考	図番号
1	1住-31	フ A	24.1	22.1	5.7	1.9		点痕、線痕、稜つ共少	213-4
2	12住-42	フ A	33.0	21.3	6.9	5.1		点痕、線痕、稜つ 点痕、稜つ共多	石匙18と同 216-1 217-1
3	-66	フ A	38.1	20.0	6.4	3.9			
4	16住-80	フ -	(22.7)	(33.9)	(13.7)	(9.2)	挟入部の1方のみ残	点痕、不方擦痕 加工前不方線痕多 縁稜つ少、点痕少 稜つ、点痕共多、不方擦痕	221-5 -6 -7 -8
5	-81	フ -	(30.0)	(26.6)	(6.7)	(5.6)	挟入部の1方のみ残		
6	-82	フ C	27.5	25.7	10.0	6.1			
7	-83	フ A	28.3	20.4	7.1	3.2			
8	21住-27	C	17.6	56.9	5.3	1.5		片面加工	225-27
9	52住-8	A	19.4	13.0	4.7	1.2		稜つ、点痕、不方線痕共多	232-8
10	64住-5	A	49.0	29.6	10.8	16.3		点痕、不方線痕少	233-5
11	106住-10	A	37.2	24.9	6.5	6.9		縁稜つ点痕、不方線痕共多、挟入部に線痕	239-10
12	139住-5	C	15.5	11.2	2.3	0.5		縁稜つ、点痕少	245-23
13	外 - 254	B	35.8	21.7	8.0	5.8		縁稜つ、点痕共多、挟入部に線痕 挟入刺突具11と同 縁稜つ、点痕不方線痕共多 縁稜つ、点痕、不方線痕共多 稜つ、点痕 点痕、不方線痕	248-38 256-1 -2 -3 -4
14	- 391	A	18.7	17.7	4.3	1.3			
15	- 392	C	18.3	19.8	3.6	1.3			
16	- 393	C	29.0	26.8	5.5	4.6			
17	- 394	A	22.0	26.2	4.9	3.2			
18	15D-2	C	26.7	28.9	9.0	7.3		縁稜つ、点痕、不方線痕、挟入部に線痕。 石匙175と同	264-12

石鏃

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	鏃部長 (mm)	鏃部幅 (mm)	欠損 状況	使用痕・備考	図番号					
1	1住-33 -34	フ AA	36.4	25.5	9.6	9.7	ch.	7.7	7.1	A	両側、先端、稜磨耗	213-6 -7					
2		フ ヌ	(18.4)	27.5	8.4	(3.4)		(4.9)	(10.0)								
3	8住-12 -43 -44	フ ヌ	16.0	8.2	2.6	0.3	ch.	7.0	4.8	A		213-26 214-21 -22					
4		フ ヌ	31.8	18.1	7.1	3.8		7.0	6.2								
5		フ ヌ	(22.3)	19.5	3.4	(1.4)		(3.5)	5.4								
6	11住-11	BA	21.5	8.1	4.0	10.7		21.5	8.1			215-15					
7	12住-35 -82 -83 -84 -85 -86 -87 -88 -89	フ AA	21.9	13.6	4.0	0.7		12.1	8.1	A	遺物紛失	-50 217-17 -18 -19 -20 -21 -22 -23 -24					
8		フ AB	18.6	25.4	7.0	2.9		2.5	3.2								
9		フ AA	33.3	25.8	7.6	5.8		3.0	3.0								
10		フ AB	47.5	21.0	6.7	5.4		3.4	6.4								
11		フ AA	37.3	24.7	11.1	3.9		9.2	5.8								
12		フ ヌ	(25.0)	18.0	7.0	(2.5)		(8.5)	7.5								
13		フ ヌ	30.7	16.1	4.9	1.6		13.6	6.5								
14		フ BA	33.6	13.5	4.9	1.4		21.6	8.3								
15		フ ヌ	28.3	10.7	5.5	1.7		(9.1)	8.2								
16		15住-35	フ AB	27.1	26.5	6.8		4.8					3.1	2.9			218-35
17		16住-77 -141 -142 -143 -144 -145 -146 -147 -148	フ ヌ	22.6	26.5	7.2		3.5	ch.				1.6	4.9	A	先端、稜磨耗	221-2 223-20 -21 -22 -23 -24 -25 -26 -27
18			フ AA	36.5	36.8	9.1		10.1					5.2	8.0			
19			フ AB	26.4	38.9	8.8		4.8					2.1	2.9			
20			フ ヌ	(25.0)	20.9	8.0		(2.5)					(2.3)	3.0			
21			フ AA	20.8	20.3	5.8		2.0					6.9	5.4			
22	フ AB		21.8	21.8	3.3	1.7	2.1	5.5									
23	フ BA		31.1	13.7	7.7	1.9	8.5	5.2									
24	フ ヌ		35.5	16.1	7.3	3.4	4.3	5.0									
25	フ ヌ		21.2	8.6	7.4	1.0	21.2	8.6									
26	17住-14 -15 -16		フ AA	(16.6)	23.0	6.0	(1.8)	ch.		(1.6)	9.0	A		224-16 -17 -18			
27		フ AB	43.1	10.9	6.6	6.6	23.9		13.7								
28		フ AA	26.4	14.7	4.8	1.4	10.7		6.5								
29	20住-5 -6	フ BB	36.2	10.5	8.5	2.4		12.8	7.3			-25 -26					
30		フ AA	22.2	9.8	3.7	0.5		9.9	4.1								
31	26住-21	フ ヌ	26.1	29.7	9.0	4.4		2.8	3.8		スクレイパー76と同	227-1					
32	37住-29 -30	フ ヌ	(39.2)	17.4	8.1	4.0	ch.	7.5	6.1	A		228-15 -16					
33		フ AA	22.7	8.6	3.8	0.5		(11.7)	8.7				6.0				
34	38住-15 -16 -17	フ ヌ	17.7	20.0	5.5	1.5	ch.	5.3	9.0		面側つ 石鏃(BB)状 先端磨耗	229-15 -16 -17					
35		フ BA	35.3	16.0	4.6	2.9		21.6	11.6								
36		フ ヌ	37.0	13.2	5.5	2.9		17.1	9.0								
37	46住-28 -29 -30	フ AA	25.1	16.3	7.7	1.9		8.9	6.5		先端つ 石鏃(AD)状	231-3 -4 -5					
38		フ BA	25.0	10.5	6.3	1.4		4.3	5.0								
39		フ AA	34.2	22.9	10.0	6.9		7.2	8.0								
40	47住-14	フ AB	20.1	24.0	7.5	2.2		3.6	5.2			-19					

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	錐部長 (mm)	錐部幅 (mm)	欠損 状況	使用痕・備考	図番号	
41	58住-7	BA	30.4	11.1	6.7	2.1	ch.	21.0	9.7			232-25	
42	59住-9	AA	(35.7)	22.3	7.7	(6.5)	ch.	10.2	9.0	A		-34	
43	65住-11 -12	フ BB	(38.2)	14.8	7.3	(3.7)		(8.8)	7.4	A		233-17 -18	
44		フ BA	38.9	14.0	8.4	3.3		10.8	8.3				
45	74住-6 -10	〃	(17.5)	10.6	6.3	(1.2)		(2.3)	6.3	A		235-6 -10	
46		AA	29.3	15.4	5.0	1.6		9.0	4.5				
47	75住-17	〃	27.7	33.0	7.0	5.8	ch.	3.6	5.8		先端磨耗	-28	
48	90住-2	〃	21.8	(19.1)	0.8	(1.3)	ch.	7.0	6.0	B		236-16	
49	92住-1 -2	〃	31.6	16.2	7.9	3.4		13.7	9.8		先端両側つ少	-17 -18	
50		〃	33.3	15.0	3.6	1.1		19.9	6.1				
51	95住-10	フ BA	(23.9)	10.2	5.9	(1.4)		(1.5)	4.3	A		237-13	
52	96住-15	〃	35.0	18.9	6.9	4.1	si. sl.	15.2	9.6		先端磨耗	-28	
53	111住-20 -21	フ AA	29.8	20.1	5.6	2.2		7.3	5.1			240-20 -21	
54		フ BB	30.3	8.6	5.1	1.2		14.2	6.0				
55	112住-28	ユ AA	23.0	19.6	6.2	1.9		6.6	4.8			241-28	
56	113住-33 -34	ユ 〃	(34.4)	28.0	4.4	3.6	ch.	(10.2)	7.7	A	つまみ部に1対の抉入 縁つ 錐部両面加工	242-33 -34	
57		ユ AB	37.2	10.0	11.0	2.4		14.5	5.5				
58	127住-14	AA	25.2	19.9	7.7	3.3		3.3	4.9			244-2	
59	131住-23 -24	〃	(23.6)	45.3	10.0	(7.0)		3.3	7.0	A		-25 -26	
60		〃	36.2	30.3	8.0	6.2	si. sl.	13.3	11.1				
61	-25	〃	35.6	24.1	4.6	3.9	si. sl.	11.0	8.1			-27	
62	131住-26 -27	BA	26.6	9.7	4.7	1.1	ch. ho.	12.4	8.0		先端磨耗 石鏝(AD)状 先端磨耗	244-28 -29	
63		BA	23.5	11.4	6.7	1.2		4.6 12.8	7.0 8.8				
64	141住-16 -17	〃	39.0	11.2	4.0	2.2	ch.	29.0	9.5		石鏝(AD)状	246-16 -17	
65		〃	25.2	9.9	4.7	1.2	ch.	13.8	9.0				
66	外-387 -395 -396 -397 -398 -399 -400 -401 -402 -403 -404 -405 -406	AA	47.2	51.2	10.2	22.5	ho.	7.9	11.8	A	スクレイパー-241と同 先端両側磨耗 つまみ部に1対の抉入 先端、縁稜つ、 スクレイパー-245と同 錐部両面軸線と平行な 線痕、擦痕多	255-14 256-5 -6 -7 -8 -9 -10 -11 -12 -13 -14 -15 -16	
67		〃	38.0	27.0	6.6	5.1	ch.	20.0	12.2				
68		〃	32.2	34.4	7.3	6.0	ch.	9.4	6.8				
69		〃	36.8	30.6	8.1	8.6	si. sl.	8.0	7.2				
70		〃	34.4	20.7	6.9	3.3	ch.	16.5	8.3				
71		〃	(23.3)	32.0	4.5	(2.4)	si. sl.	(10.7)	8.7				
72		〃	27.5	23.2	8.5	5.8		5.4	6.7				
73		〃	30.5	22.3	9.4	3.8		11.2	6.2				
74		〃	27.2	17.6	5.7	1.5		11.7	7.1				
75		〃	AB	17.8	15.7	5.5	0.8		2.0				3.7
76		〃	AA	54.7	22.8	11.8	12.0		11.8				14.2
77		〃	〃	52.1	18.7	10.2	9.7		15.6				11.8
78		〃	〃	45.0	20.8	10.3	8.8	ch.	11.7				14.2

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	錐部長 (mm)	錐部幅 (mm)	欠損 状況	使用痕・備考	図番号
79	—407	AA	(44.0)	20.2	14.1	(9.6)		(4.9)	7.8	A		—17
80	—408	〃	50.5	17.5	9.6	4.6	ch.	31.9	8.2			—18
81	—409	〃	33.0	19.2	7.0	4.5	ch.	8.3	7.5			—19
82	—410	〃	(18.9)	12.5	7.2	(1.9)		(4.4)	8.2	A		—20
83	—411	〃	21.9	10.8	3.7	0.9	ch.	6.0	5.4			—21
84	—412	BA	52.9	14.0	9.0	5.6		24.4	10.5			—22
85	—413	〃	37.0	12.8	6.7	2.3		9.8	7.9			—23
								8.2	7.4			
86	—414	BA	32.3	11.9	4.3	1.6		19.4	10.2			—24
87	—415	〃	(29.0)	11.9	6.4	(1.8)		(3.4)	4.9	A		—25
88	—416	〃	28.3	12.1	5.0	1.3		15.7	9.2			—26
89	—417	〃	28.6	13.7	7.4	2.4		21.0	13.7			—27
90	—418	〃	27.6	15.7	5.0	1.7		12.5	9.6			—28
91	—419	〃	(24.7)	9.0	6.0	(1.1)		(13.3)	8.0	A		—29
92	—420	〃	26.2	10.2	4.9	1.3	ch.	9.3	8.6		石鏃(AD)状	—30
93	—421	〃	(21.2)	9.4	6.0	(1.1)		11.5	8.0	A		—31
94	34D—2	AB	28.2	14.3	4.7	1.5		6.1	4.7			264—24
95	101D—1	BA	29.3	13.6	7.1	2.8		3.6	6.5			265—22

使用痕のある剥片・石核・原石

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長 (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号
1	1住—32	ユ CBA	41.8	17.2	7.1	3.7	20.2	—2.2		213—5
2	6住—4	フ 〃	39.0	27.9	9.3	5.5	26.7	—5.7		—13
3	—5	ユ (AA+CA)A	32.3	27.0	5.3	3.0	22.1 18.2	2.1 —0.8		—14
4	8住—39	ABA	25.7	26.0	6.9	4.4	24.1	5.1		214—17
5	—40	フ BAA	23.5	46.5	11.0	12.4	23.3	—0.9	ch.	—18
6	—41	フ (BA+BA)A	(37.6)	(16.5)	(5.4)	(2.2)	(29.0) (20.9)	(0.9) (—0.8)		—19
7	—42	フ CAA	15.1	14.9	3.1	0.6	12.9	—0.9	刃こ全周	—20
8	10住—2	〃	26.5	12.3	4.6	1.4	9.9	—0.9		215—2
9	12住—67	AAA	31.1	19.6	6.8	3.9	31.0	6.9		217—2
10	—68	〃	25.5	18.0	5.6	2.4	16.5	3.3		—3
11	—69	〃	22.8	21.2	9.1	2.9	16.6	3.9		—4
12	—70	〃	20.9	19.9	5.6	1.9	19.2	2.7		—5
13	—71	フ 〃	24.7	30.6	6.5	4.9	19.2	1.5		—6
14	—72	CAA	43.7	33.0	10.0	9.4	35.8	—2.6		—7
15	—73	〃	31.1	20.0	6.6	3.7	24.2	3.2		—8
16	—74	フ 〃	20.9	39.8	7.5	5.8	14.5	—1.1	不方擦痕	—9
17	—75	〃	31.1	14.5	6.1	2.0	25.0	—2.4		—10
18	—76	〃	29.2	20.2	7.2	4.8	21.6	—2.2		—11
19	—77	フ (CA+CA+ CA+CA)A	31.3	12.1	6.6	1.6	4.5 3.1 6.4 4.2	—0.4 —0.5 —1.0 —0.8		—12
20	—78	フ CBA	36.0	49.8	10.5	16.1	28.4	—4.2		—13
21	—79	フ 〃	25.0	24.8	5.5	3.5	12.7	—0.8		—14
22	—80	〃	18.3	27.3	5.6	2.1	14.2	—1.8		—15
23	—81	〃	23.4	25.6	8.3	5.4	9.9	—1.8	頂端表面から薄化	—16

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長さ (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号
24	15住-27	フ A A A	27.5	18.0	7.0	3.4	22.4	6.7	長さ幅任意 裏刃こ直交短太擦痕	218-27
25	-28	フ //	18.1	17.4	4.1	1.1	15.7	6.8		-28
26	-29	フ A B A	17.0	16.6	4.8	1.4	16.8	5.0		-29
27	-30	フ A A A	32.7	24.2	8.0	5.2	32.7	17.2		-30
28	-31	フ C B A	(34.2)	(24.1)	9.1	(4.8)	17.3	-3.5		-31
29	-32	フ C A A	32.6	18.2	7.2	3.1	9.5	-1.0		-32
30	-33	フ C B A	16.6	18.9	3.5	0.9	15.7	-1.0		末端縁辺つ
31	-34	フ C A A	16.0	24.2	4.6	1.3	12.7	0.6		-34
32	16住-84	フ A A A	45.1	39.4	10.8	17.2	28.7	2.3	ch. 頂端表面から薄化 稜つ	221-9
33	-85	(AA+AA)A	49.5	28.8	10.0	14.2	29.5 22.0	2.6 2.2		-10
34	-86	(AB+AB)A	45.6	33.1	12.5	16.7	34.5 45.2	5.1 13.2		-11
35	-87	(AA+BA)A	45.5	31.0	11.4	9.0	13.9 13.3	6.0 0.4		-12
36	-88	(AA+AA)A	40.4	25.9	8.4	7.1	13.6 14.9	1.0 2.4		-13
37	-89	AAA	30.4	16.2	8.8	3.3	7.2	0.5		-14
38	-90	フ //	25.7	18.4	7.6	3.2	20.0	3.1		-15
39	-91	フ //	24.2	23.1	5.2	3.3	18.5	2.6		-16
40	-92	フ //	26.9	16.4	4.3	1.6	7.3	1.0		-17
41	-93	ABA	29.6	10.2	10.0	1.8	25.9	5.0		-18
42	-94	フ //	30.5	43.3	6.8	7.0	27.1	3.8		-19
43	-95	(AA+BA)A	18.9	23.8	4.9	2.0	13.1 13.4	1.5 0.6		-20
44	-96	ABA	52.1	35.7	8.8	12.9	18.9	1.5		両面縁辺平行線痕
45	-97	フ //	33.0	31.7	6.8	6.2	31.5	10.9	ch. 頂端表面から薄化	-2
46	-98	BAA	41.1	34.9	9.6	10.5	30.1	3.7	-3	
47	-99	(BA+BA)A	33.2	20.0	8.6	5.5	29.0 24.2	0.8 1.0	-4	
48	-100	BAA	35.6	17.5	5.9	3.0	12.8	0.3	-5	
49	-101	BAD	26.8	15.2	4.2	1.6	15.2	1.0	-6	
50	-102	BAA	24.0	28.2	3.5	1.9	17.4	-0.9	-7	
51	-103	(BA+BA)A	15.5	(16.0)	4.0	(0.9)	13.3 (8.8)	-0.4 (-0.4)	-8	
52	-104	BAA	26.0	26.8	11.0	5.2	20.8	0.4	-9	
53	-105	フ //	16.0	19.1	2.8	1.0	16.1	2.1	裏縁辺平行線痕	-10
54	-106	フ //	16.4	21.5	5.2	2.0	(18.0)	1.2	-11	
55	-107	フ //	26.1	27.0	10.9	4.3	28.7	2.0	-12	
56	-108	フ //	20.3	24.3	4.0	1.5	14.7	0.7	-13	
57	-109	フ //	18.6	27.8	5.4	2.2	14.6	-0.4	-14	
58	-110	BBA	52.2	27.9	15.6	22.6	24.1	1.1	裏側辺斜交(75°)擦痕	-15
59	-111	フ //	33.7	19.0	12.2	5.2	25.0	1.4	裏側辺平行線痕	-16
60	-112	フ //	36.2	19.5	6.7	4.5	20.6	-0.8	-17	
61	-113	フ //	36.9	30.8	11.7	11.9	19.6	1.1	-18	
62	16住-114	(BB+BB)B	35.5	19.8	10.7	7.4	18.6 27.1	1.0 1.2	裏中央稜つ	222-19
63	-115	BBB	(19.9)	(31.0)	10.0	(6.1)	(22.6)	(-0.8)	-20	
64	-116	フ (CA+CA)A	43.2	32.9	14.0	15.5	14.1 18.5	-1.2 -1.0	石錐(AB)か?	-21
65	-117	(CA+CA+CA)A	37.2	22.4	5.1	2.0	14.9 14.0	-2.3 -1.4	-22	
66	-118	CAA	34.5	17.0	6.2	2.9	6.1	-1.0	-23	
67	-119	(CA+CA)A	57.5	22.1	8.8	9.0	12.0 21.4	-0.8 -1.4	-24	
68	-120	CAA	33.5	16.9	8.2	4.0	8.7	-0.4	-25	
69	-121	フ //	31.8	17.9	10.5	4.9	12.3	-1.1	-26	
70	-122	フ //	34.2	26.5	9.3	6.6	9.8	-0.9	223-1	
71	-123	(CA+CA+CA+CA)A	30.4	23.3	8.0	5.4	11.6 11.1	-0.6 -0.6	-2	
72	-124	CAA	32.5	20.2	10.7	2.8	18.9	-2.3	-3	
73	-125	フ //	23.8	15.4	4.8	1.5	9.4	-0.6	-4	

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長 (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号	
74	-126	CAA	19.2	17.8	4.0	1.2	9.8	-2.1	頂端表面から薄化	223-5	
75	-127	〃	25.5	14.0	5.6	1.3	10.0	-2.0		-6	
76	-128	(CB+CB)A	35.6	43.8	10.4	9.5	12.0 18.2	-1.5 -2.0		-7	
77	-129	(CA+CB)A	25.3	36.8	7.8	7.2	9.0 10.0	-1.1 -1.1		-8	
78	-130	CAA	20.9	27.5	7.4	3.6	7.7	-1.3		-9	
79	-131	〃	19.1	19.9	4.8	1.9	5.4	-0.4		-10	
80	-132	CBB	20.4	34.0	11.2	6.2	20.0	2.7		-11	
81	-133	(AB+CA+CA)A	41.1	18.9	8.1	3.8	14.1 10.3	3.1 -1.9		A B側辺ま多	-12
82	-134	フ (AA+CA)A	23.0	14.0	5.0	1.1	8.6 7.9	0.9 -1.0		-13	
83	-135	フ (AB+CA)A	23.4	32.7	5.9	4.3	29.8 7.8	6.7 -1.4		A B縁辺平行線痕 頂端表面から薄化	-14
84	-136	〃	19.8	26.1	6.9	3.1	10.8 6.7	1.6 -1.0		A B側辺ま	-15
85	-137	フ BAA	19.7	18.0	4.0	1.2	17.2	0.3		つまみ状部有り	-16
86	-138	ABA	18.2	(27.3)	5.8	(2.0)	(21.9)	(3.6)		つまみ状部有り	-17
87	-139	(AA+AA)B	24.4	49.9	17.6	14.0	16.0 13.5	1.9 1.5		-18	
88	-140	BAB	22.1	28.3	9.5	5.2	23.9	-0.9	両面縁辺平行線痕	-19	
89	21住-28	フ AAA	23.9	22.2	6.9	3.5	11.2	5.8	頂端表面から薄化	225-28	
90	-29	(AB+AB)A	43.0	15.3	9.5	5.0	40.1 29.1	3.7 3.5	裏使用痕直交・斜交(50°)擦痕	-29	
91	-30	フ (BA+BA)A	48.2	21.8	7.6	7.1	24.1 16.1	1.0 0.8	-30		
92	-31	(BA+BA+CA+CA)A	31.0	15.9	4.0	1.6	16.9 9.9	0.8 -0.2	-31		
93	-32	フ (BA+BA)A	27.0	16.8	5.5	2.6	5.7 5.0	-0.7 -1.1	-32		
94	-33	フ BAA	(20.0)	30.0	(5.2)	(2.4)	16.2 13.0	0.3 -0.4	ch. 頂端両面から薄化	-33	
95	-34	〃	23.8	45.2	9.0	7.9	9.8	-0.5	226-1		
96	-35	フ BBA	37.8	19.6	6.8	4.3	14.5	0.8	-2		
97	-36	〃	24.3	26.1	9.0	5.3	15.0	0.7	-3		
98	23住-9	フ BAA	30.2	23.7	4.7	2.3	13.6	0.4	-13		
99	26住-24	フ AAA	22.4	26.7	9.4	4.2	15.1	1.0	227-4		
100	-25	フ (BA+CA+CA)A	26.6	14.2	2.3	0.8	24.2 4.5	1.0 -0.3	-5		
101	-26	フ BAA	30.5	31.0	10.5	8.2	9.0	-1.0	0.2	-6	
102	37住-22	AAA	27.7	36.6	3.1	2.5	29.6	8.3	228-8		
103	-23	(AB+AB)A	38.6	30.1	8.0	8.0	36.5 29.7	5.1 2.9	-9		
104	-24	ABA	21.2	58.9	8.8	6.3	38.7	6.5	-10		
105	-25	(BA+BA)A	43.0	11.1	5.6	2.0	39.1 31.6	1.5 1.7	-11		
106	-26	BAB	28.9	34.3	6.1	7.5	20.9	0.5	-12		
107	-27	(CA+CA)A	33.8	32.4	7.3	7.0	16.3 18.7	-1.7 -2.2	末端表面から薄化	-13	
108	-28	CAA	44.6	24.0	9.3	10.1	30.6	-2.2	-14		
109	38住-13	AAA	29.6	26.0	5.3	4.0	24.0	2.3	頂端表面から薄化	229-13	
110	-14	BAA	29.2	19.0	6.8	3.4	13.3	-0.4	-14		
111	46住-26	(CA+CA)A	18.6	23.2	2.7	1.0	15.9 8.9	-0.9 -1.0	231-1		
112	47住-12	フ AAA	28.2	42.5	8.5	9.5	27.7	4.3	-17		
113	-13	フ BAA	21.2	19.0	6.2	2.2	9.4	0.4	-18		
114	52住-9	AAA	33.5	16.3	5.4	2.0	30.7	7.3	232-9		
115	-10	(BA+BA)A	34.9	28.0	6.0	5.6	25.7 25.4	1.5 -0.8	ch.	-10	
116	-11	CAA	29.3	14.8	6.0	2.6	9.5	-0.7	-11		
117	-12	(CA+CA+)	30.9	31.7	6.0	2.9	7.4 7.3	-1.1 -0.6	2番目の使用痕裏縁辺	-12	

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長さ (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号
		CA+CA)A					6.0 21.9	-1.0 -2.2	斜交(60°)線痕	
118	52住-13	BBD	32.0	23.0	9.7	4.9	8.7	0.4	縁辺斜交(40°)線痕 側辺薄化	232-13
119	-14	CAA	25.4	23.3	7.8	4.1	10.9	-1.4		
120	56住-5	(CB+CA)A	31.8	14.5	10.0	3.8	22.2 6.8	-1.3 -1.5		-18
121	65住-8	フ AAA	33.8	13.9	5.9	3.0	33.0	5.5		233-14 -15
122	-9	フ (CA+CA+CA)A	23.7	15.2	4.7	1.7	11.2 10.8 6.0	-1.0 -0.6 -1.5		
123	-10	フ (AA+CA+CA)A	34.0	14.9	5.8	2.1	23.8 11.2 8.3	3.0 -2.1 -0.4		
124	-18	AAA	21.6	30.5	9.4	3.2	14.7	0.9		
125	68住-7	BAB	50.8	35.2	18.2	26.6	33.3	±0.9	表使用痕平行線痕 頂端と末端薄化 表右縁辺直交短線痕	-14 -15 -16
126	-8	(BA+BA)A	24.9	16.8	7.1	2.4	8.1 10.8	-0.3 -0.3		
127	-9	(CA+CA)A	38.5	19.5	5.6	2.5	6.1 10.7	-5.5 -1.3		
128	69住-7	BAA	13.5	19.9	4.2	0.8	16.8	0.8		-23
129	75住-16	ABA	31.6	26.4	8.0	9.0	22.0	1.9	ch.	235-27
130	86住-11	CAA	29.2	14.5	3.6	1.3	13.6	-1.6		236-14
131	95住-8	BAA	37.3	21.3	5.0	3.1	15.2	-0.3	頂端調整 片側辺表面から薄化	237-11 -12
132	-9	CAA	35.1	23.9	7.8	4.7	15.8	-2.0		
133	96住-17	BAA	32.2	20.6	7.4	4.4	22.6	0.9		-30 -31 -32 -33
134	-18	(AA+CA)A	32.0	13.0	3.4	1.1	14.2 22.1	2.0 -1.0		
135	-19	CAA	49.6	19.1	7.4	5.3	15.9	-2.0		
135	-20	(BA+CA)A	32.6	16.6	5.7	2.1	18.0 10.3	0.7 -0.3		
137	98住-9	BAA	30.6	10.7	2.9	1.1	11.6	0.3	表縁辺平行線痕	238-9 -10 -11
138	-10	CAA	26.3	17.5	4.0	1.7	12.0	-2.0		
139	-11	〃	25.9	23.4	6.6	3.0	7.1	-0.8		
140	108住-7	AAA	24.8	25.4	7.8	3.1	24.6	9.3		239-17
141	111住-15	フ 〃	17.5	27.2	4.0	1.5	18.4	1.4	ch.	240-15 -16 -17 -18 -19
142	-16	フ (AA+BA)A	(49.2)	(26.3)	(8.9)	(7.5)	40.2 45.1	2.9 1.8		
143	-17	フ (CA+CB)A	32.2	41.6	10.6	10.3	13.0 38.8	-1.0 -2.1		
144	-18	CAA	20.9	26.5	7.8	3.5	14.9	-1.0		
145	-19	BBC	19.2	37.3	9.0	6.4	25.6 31.1	2.0 1.0		
146	112住-17	ユ AAA	26.0	22.0	8.5	3.6	15.5	1.7	ch. 頂端裏面から薄化 一端薄化 裏縁辺直交線痕 頂端表面から薄化	241-17 -18 -19 -20 -21 -22 -23 -24 -25 -26 -27
147	-18	ユ (AB+CB)A	43.9	25.6	4.2	4.4	24.3 21.0	3.2 -1.5		
148	-19	ユ AAB	29.8	38.0	12.2	10.3	18.0	1.0		
149	-20	ユ BAA	39.8	30.3	6.0	7.3	29.1	1.1		
150	-21	フ BAC	39.2	20.6	13.0	9.6	10.4	0.6		
151	-22	ユ CBA	24.5	13.4	4.5	1.3	21.0	-0.7		
152	-23	ユ CAA	25.0	22.5	5.2	2.5	19.0	-2.4		
153	-24	ユ 〃	27.0	22.6	6.7	2.6	15.5	-5.4		
154	-25	ユ (BA+CA)A	19.4	17.0	5.7	1.6	11.6 11.3	0.5 -1.6		
155	-26	ユ CAA	16.8	31.9	3.2	1.6	21.9	-0.5		
156	-27	ユ 〃	17.3	38.6	4.9	2.8	16.9	-0.8		

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長 (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号	
157	113住-31 -32	ユ AAB	32.6	22.1	7.9	4.8	21.1	4.7		242-31 -32	
158		ユ BAA	27.8	18.3	4.0	1.8	23.2	0.5			
159	122住-9	AAA	37.4	24.5	10.4	7.8	21.5	3.0	縁つ多	243-21	
160	127住-13	CBA	26.2	24.8	5.6	3.0	10.2	-0.7		244-1	
161	131住-21 -22	フ (AA+BA)A	21.2	17.8	4.7	2.1	55.1 15.2	1.7 -0.9	調整?	-23 -24	
162		AAA	15.9	17.7	3.7	1.1	17.2	2.8			
163	132住-11	フ AAC	81.5	10.9	13.8	9.8	4.5	0.6	上端に縁辺直交太短擦痕 反対端つ	245-11	
164	135住-2	(AB+BB)A	36.8	18.4	7.6	2.2	36.8 31.3	9.8 1.0	縁辺平行線痕、稜つ	-13	
165	139住-6 -7	BBA	20.4	29.2	4.2	2.3	23.5	1.0		-24 -25	
166		(CA+CA)A	41.2	17.4	5.8	4.2	12.1 18.4	-0.8 -1.7			
167	141住-9 -10 -11 -12 -13 -14 -15	AAA	43.0	23.1	12.8	8.8	30.8	2.7	右側辺に挟り 裏縁辺直交・平行線痕 A B部の縁辺ま多 左上の裏縁辺直交短線痕	246-9 -10 -11 -12 -13 -14 -15	
168		〃	25.9	15.6	5.9	2.0	22.7	4.0			
169		BAA	19.6	24.2	4.8	1.6	13.7	0.7			
170		(BA+BA)A	20.1	21.2	3.8	1.3	15.9 13.1	0.7 0.6			
171		(CA+CA)A	27.2	42.1	13.0	8.2	10.2 14.3	-0.5 -0.9			
172		(AB+CA+CA)A	41.4	19.8	9.3	4.3	11.6	0.7			
173		(CA+CA+CA)A	30.0	16.6	5.9	1.6	24.3 12.8	-1.4 -2.8			
173							7.3	-0.8			
174	2 堅-2	ABA	23.3	17.5	7.9	3.1	21.2	5.1		-23	
175	1 集-7	BAA	61.8	23.5	7.5	8.6	16.2	-0.4	ch.	-30	
176	外-359 -423 -424 -425 -426 -427 -428 -429 -430 -431 -432 -433 -434 -435 -436 -437 -438 -439 -440 -441 -442 -443 -444 -445	CBA	30.6	26.4	9.2	7.7	12.5	-0.9	両面縁辺直交短線痕 スクレイパー212を破損後利用 裏縁辺直交線痕 裏縁辺直交短線痕 縁つ 縁つ A B部の裏縁辺平行線痕 裏縁辺平行線痕 C C部の裏縁辺平行線痕	254-10 257-1 -2 -3 -4 -5 -6 -7 -8 -9 -10 -11 -12 -13 -14 -15 -16 -17 -18 -19 -20 -21 -22 -23	
177		AAA	43.3	52.5	14.2	27.7	27.3	1.9			
178		〃	51.4	23.8	11.2	7.4	22.3	4.6			
179		〃	44.8	21.2	4.2	3.1	15.4	1.6			
180		〃	31.7	23.8	5.2	3.1	14.9	1.8			
181		〃	24.9	23.2	6.4	2.6	25.4	4.0			
182		〃	28.8	29.0	8.7	7.1	13.0	2.0			
183		〃	26.1	19.7	6.7	3.0	21.7 20.3	2.8 3.8			
184		-430	AAC	23.5	23.9	5.1	2.7	17.1			3.9
185		-431	〃	35.6	23.0	11.2	8.4	23.9			2.8
186		-432	(AA+BA)A	31.0	23.5	8.7	6.0	20.7 14.2			3.0 -0.5
187		-433	(AB+BA)A	23.3	21.2	9.3	2.9	22.8 14.9			2.2 0.4
188		-434	BAA	52.5	36.0	13.2	20.3	39.6			5.4
189		-435	〃	34.2	25.2	6.5	5.8	29.4			2.2
190		-436	〃	30.6	30.5	11.5	6.6	24.7			1.3
191		-437	〃	22.9	26.1	4.8	3.0	13.7			-0.3
192		-438	〃	35.0	19.4	5.4	3.4	19.8			1.0
193		-439	〃	43.2	11.0	8.9	2.3	20.9			0.5
194		-440	〃	25.4	30.4	6.6	3.5	14.0			-0.3
195		-441	〃	24.8	20.8	6.9	3.4	14.7			1.0
196	-442	〃	32.1	20.2	7.1	4.1	14.8	0.7			
197	-443	(BA+CC)A	33.5	15.4	6.3	2.5	15.2 14.7	-0.7 -1.3			
198	-444	(BA+BA)A	30.3	14.0	5.9	2.6	9.9 12.0	0.3 -0.2			
199	-445	〃	22.7	13.6	4.3	1.0	8.3 19.3	0.2 -0.7			

No.	出土地点	型 式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長 (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号
200	外-446	BAA	28.2	10.6	3.0	0.9	18.4	0.7		257-24
201	-447	〃	22.8	10.8	4.6	0.9	15.0	0.8	裏縁辺平行線痕	-25
202	-448	〃	16.5	20.0	5.0	1.3	11.0	-0.4		258-1
203	-449	〃	16.0	24.9	3.9	1.6	14.7	0.4		-2
204	-450	〃	15.8	19.4	4.2	0.9	13.5	0.7		-3
205	-451	〃	12.6	25.3	4.2	1.3	15.0	0.3	ch. 頂端調整か?	-4
206	-452	BBA	72.3	30.9	8.4	18.7	61.8	3.2	ch. 片側辺両面から薄化	-5
207	-453	〃	33.4	24.1	8.9	6.7	28.3	2.0	両面縁辺平行線痕少	-6
208	-454	(BB+BB)A	30.0	21.5	6.3	3.9	19.0 11.2	1.0 0.4	頂端表面から薄化	-7
209	-455	BBA	28.9	19.5	7.4	3.3	12.9	0.7	頂端表面から薄化	-8
210	-456	〃	34.2	17.3	5.8	3.9	29.8	1.6		-9
211	-457	BBB	24.0	16.2	4.3	1.8	14.0	0.5		-10
212	-458	(BB+BB)C	60.4	24.0	7.6	11.6	26.4 33.2	-0.4 -1.6		-11
213	-459	ACC	41.5	14.6	6.1	3.3	5.5	1.2	裏縁辺直交線痕	-12
214	-460	(BA+ CA+CA)A	49.1	37.2	9.7	13.2	21.2 28.3 10.7	1.0 -2.0 -3.0	両面縁辺平行線痕多 CAは対をなす?	-13
215	-461	(BA+CA)A	71.2	36.4	16.2	17.2	28.5 65.3	-1.7 -4.5	共に縁辺平行線痕少	-14
216	-462	(BA+BA+ CB+CB)A	43.2	30.2	11.0	9.2	16.3 22.5 11.3 15.0	-0.7 0.8 -0.4 -0.9	共に裏縁辺直交短線痕多 頂端表面から薄化	-15
217	-463	CAA	55.3	43.0	15.0	20.8	20.4	-2.0		-16
218	-464	〃	54.9	25.8	8.2	8.9	10.4	-1.8		-17
219	-466	〃	47.2	48.0	13.4	18.1	17.6	-1.1		-19
220	-467	〃	42.6	30.3	12.4	13.3	30.4	-2.7		259-1
221	-468	〃	36.0	33.5	8.0	8.0	28.3	-1.2	裏縁辺直交線痕	-2
222	-469	(BC+CA)A	27.5	32.1	8.7	5.7	18.8 8.3	1.0 -1.0	BC部の両縁辺平行線痕 CA部の裏縁辺直交線痕	-3
223	-470	(AC+CA)A	51.6	15.5	9.8	6.8	11.8 19.2	2.9 -2.4	AC部の裏縁辺直交太擦痕	-4
224	-471	(CA+CA)A	45.6	21.9	8.0	6.5	16.0 13.7	-0.9 -2.0		-5
225	-472	(BC+CA)A	42.3	12.0	4.8	2.2	15.7 22.0	-0.3 -1.7	BC部の両縁辺平行線痕	-6
226	-473	(CA+CA)A	41.0	15.8	4.3	2.4	18.5 9.4	-1.3 -1.0	CA部の裏縁辺直交線痕と縁つ	-7
227	-474	(BA+CA)A	39.1	21.0	10.1	5.8	12.8 10.0	0.9 -1.0		-8
228	-475	CAA	24.5	23.8	4.8	2.6	11.3	-0.7		-9
229	-476	〃	36.8	18.2	3.5	2.3	17.8	-2.4		-10
230	-477	〃	33.3	21.0	6.7	3.7	21.0	-2.2		-11
231	-478	〃	35.7	22.8	5.0	3.1	8.4	-1.0		-12
232	-479	〃	33.3	21.9	3.6	1.6	15.6	-1.8		-13
233	-480	〃	35.4	12.6	5.4	2.1	10.0	-1.0		-14
234	-481	〃	30.4	23.0	6.5	2.7	17.6	-2.0	末端の縁つ	-15
235	-482	〃	30.2	13.8	5.1	2.0	7.5	-0.6		259-16
236	-483	〃	26.7	18.5	4.8	1.9	16.7	-2.7	裏縁辺平行線痕少	-17
237	-484	〃	31.0	19.0	5.9	2.4	9.7	-1.5		-18
238	-485	〃	27.0	16.4	3.4	1.7	15.2	-2.0		-19
239	-486	〃	29.5	22.0	8.7	7.3	8.5	-0.7		-20
240	-487	〃	26.6	21.3	7.4	2.4	14.5	1.6		-21
241	-488	〃	27.8	11.5	3.4	1.1	16.6	-1.1		-22
242	-489	(CA+CA)A	23.4	15.1	3.5	1.2	7.0 6.2	-1.5 -0.4		-23
243	-490	(CA+CA+ CA+CA)A	18.5	13.7	5.6	1.3	5.9 3.0 9.0 4.8	-0.7 -0.6 -0.3 -0.6		-24
244	-491	CAA	19.0	13.2	4.0	0.8	7.9	-0.8	両面縁辺平行線痕少	-25
245	-492	(CA+CA)C	47.2	23.1	24.7	22.4	6.9 7.5	-1.9 -2.2		260-1
246	-493	CAC	37.6	27.0	5.0	4.9	19.2	-1.1		-2
247	-494	CBA	38.6	30.4	15.1	12.0	17.8	-1.6	両面縁辺平行線痕少	-3
248	-495	〃	40.0	17.3	8.1	3.4	28.6	-3.2	両面縁辺平行線痕	-4
249	-496	〃	21.4	23.0	9.0	4.5	15.2	-2.0		-5

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	使用痕部 長 (mm)	使用痕部 ふくらみ値 (mm)	石質・使用痕・備考	図番号
250	外-497	CBA	18.7	26.7	7.3	2.3	12.6	2.0	両面縁辺直交線痕(最凹部)	260-6
251	-498	(AA+CA)A	53.4	27.4	10.0	12.2	27.0 33.7	3.2 -4.7	AA部に縁辺直交線痕、 CA部の裏面に縁辺平行 直交線痕	-7 -
252	-499	〃	49.4	20.0	6.0	6.2	36.8 19.1	7.2 -3.0		-8
253	-500	〃	42.0	20.8	7.0	5.0	15.1 19.0	1.8 -1.2		-9
254	-501	〃	28.6	20.2	6.9	3.9	25.2 14.1	2.6 -1.0		-10
255	-502	〃	26.5	20.0	6.0	2.9	21.2 18.5	3.4 -1.2	CA部に縁辺斜交(30°)大擦痕	-11
256	-503	(AA+AA+ CA)A	18.1	19.3	6.2	1.7	10.5 17.6 3.2	1.6 4.1 -0.6		-12
257	-504	(AB+CB)A	25.1	33.2	9.7	5.7	17.0 16.5	3.2 -1.2	両面縁辺平行線痕、頂端 表面から薄化	-13
258	-510	BCA	28.6	28.6	8.5	5.4	19.1	-0.6		-19
259	12丁-2	BBB	19.1	24.6	4.8	2.5	9.1	0.3		264-9
260	-3	(CA+CA)A	25.1	39.4	6.6	4.4	7.2 12.0	-1.0 -0.9		-10
261	44丁-2	BAA	24.8	14.3	4.0	0.9	10.2	-0.5		265-2

石核類

No.	出土地点	打点部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質・備考	図番号
1	12住-90	フ 両端	28.8	15.7	9.0	3.0	} 遺物紛失	217-25
2	-91	一	22.3	37.4	18.2	10.7		-26
3	-92	片面上端、他面側端	13.7	39.0	15.8	6.5		-27
4	16住-149	頂端	31.7	22.0	8.8	6.6	ch	223-28
5	-150	頂端、末端	24.3	17.1	8.5	3.8		-29
6	-151	フ 片面全周	20.0	22.6	7.0	2.9		-30
7	21住-39	フ 末端両面	17.0	11.0	2.9	0.6		
8	26住-27	フ 表面頂端	24.3	34.9	9.0	7.9	末端直部に刃こぼれ	227-7
9	外-509	片端片面、他端両面	51.5	21.6	9.6	11.8		260-18
10	-512	片端全面	22.1	9.9	7.2	1.7		-21
11	-	両端	25.1	15.3	9.0	3.7		264-3

軽石(製品)

No.	出土地点	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	破損状況	備考	図番号
1	10住-3	環状	28.8	30.1	20.2	11.9	0	穿孔孔径16.0mm、孔径6.0mm	215-3
2	16住-153	つぶれた鼓形	(51.0)	(73.6)	41.8	(22.3)	1/2 欠	推定径下面70mm、上面6.0mm	224-2
3	38住-19	円盤状	(56.8)	(42.5)	15.1	(8.7)	1/2 欠	推定径65mm 2孔有り、孔径5.6mm 9.5mm	229-19
4	74住-11	板状	81.7	123.0	9.5	(12.1)	1/4 欠	ゆがんだ長方形、「下床面内北側ピ ット」	235-11
5	75住-18	〃	61.4	(53.0)	10.6	(6.4)	欠損	形態不明	-29

No.	出土地点	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mm)	破損状況	備考	図番号
6	外—514	板状 扁平な半球 扁平塊	54.0	(68.1)	12.4	(7.5)	1 端 欠	三角形	261—2 —3
7	—515		79.8	133.0	69.4	(248.0)	わずかに欠		
8	—516		79.7	50.0	21.9	22.4	0		

石錘

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	破損状況	備考	図番号
1	38住—20	フ A ₂ A	61.8	14.0	5.9	10.4	粘板岩	片端欠 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	経節状	229—20
2		フ 〃	56.2	13.4	5.4	6.9	〃			
3		フ A ₁ A	50.9	8.1	5.3	3.8	〃			
4		フ A ₂ A	38.0	11.3	5.6	4.2	〃			
5		フ 〃	28.3	9.5	4.7	2.1	砂岩			
6		フ A ₁ A	(51.0)	16.1	7.0	(9.7)	粘板岩			
7		フ A ₂ A	(39.0)	15.1	6.4	(5.6)	〃			
8		フ A ₁ A	(37.3)	(14.3)	(5.7)	(5.2)	〃			
9		フ A ₂ C	55.5	11.1	7.5	6.7	細粒砂岩			
10		フ B A	52.1	16.8	6.6	8.7	粘板岩			
11	39住—5	A ₂ A	45.1	12.9	6.7	7.5	〃	1/4 欠	胴部を1条の溝がめぐる	230—5
12		〃	36.0	11.8	5.9	5.3	〃			
13		フ 〃	58.0	15.0	9.5	(9.7)	〃			
14		フ A ₂ C	50.5	10.2	9.7	7.5	砂岩			
15	81住—2	フ A ₁ A	(32.9)	(10.8)	(6.2)	(4.0)	粘板岩	片端欠		236—2
16	137住—1	A ₂ A	85.4	14.0	10.4	20.7	〃	両端欠 両側端欠		245—14
17		〃	64.9	11.6	5.2	6.1	〃			
18		〃	45.8	10.5	5.7	5.0	細粒砂岩			
19		〃	(34.9)	10.2	7.0	(4.1)	粘板岩			
20		〃	A ₂ A	38.4	9.4	7.4	(3.4)			
21	外—524	A ₁ A	107.6	15.2	9.1	30.2	〃	片面に擦り切り溝		262—1
22		〃	73.8	11.7	6.9	10.1	〃			
23		〃	56.3	13.0	5.6	8.3	〃			
24		〃	64.6	11.7	5.5	8.5	砂岩			
25		〃	51.0	11.2	7.2	7.6	細粒砂岩			
26		〃	40.5	10.9	6.8	5.3	〃			
27		〃	33.2	12.6	8.7	5.3	〃			
28		〃	29.0	13.0	3.6	3.0	〃			
29		〃	31.0	8.7	4.3	1.9	〃			
30		〃	24.8	10.0	4.7	1.7	〃			
31		〃	26.6	7.8	4.7	1.6	〃			
32		〃	23.0	9.2	4.1	1.5	〃			
33		〃	61.9	13.3	9.7	(14.7)	粘板岩			
34		〃	(47.7)	13.3	9.1	(10.6)	〃			
35		〃	(48.3)	12.7	(9.5)	(9.3)	〃			
36		〃	(44.3)	15.1	8.4	(8.4)	粘板岩?			
37		〃	(43.9)	12.0	7.1	(6.7)	〃			
38		〃	(44.9)	(13.7)	(8.1)	(6.3)	粘板岩			
39		〃	39.5	13.0	6.7	(6.0)	粘板岩?			
40		〃	31.9	(12.5)	(6.3)	(4.6)	粘板岩			
41	〃	(27.0)	9.0	(1.9)	(2.5)	〃				

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	破損状況	備考	図番号
42	—545	A ₁ A	(18.6)	(10.7)	(3.5)	(1.2)	細粒砂岩	片端残		
43	—546	A ₂ A	55.3	15.7	9.3	17.5	〃			—13
44	—547	〃	47.8	17.0	9.2	13.2	粘板岩			—14
45	—548	〃	68.1	17.8	6.2	11.7	〃			—15
46	—549	〃	56.0	14.5	9.5	11.3	粘板岩?			—16
47	—550	〃	67.4	12.4	6.6	11.4	細粒砂岩?			—17
48	—551	〃	72.2	14.2	6.7	11.0	粘板岩?	片面に擦り切り溝		—18
49	—552	〃	60.4	14.2	8.2	10.9	細粒砂岩			—19
50	—553	〃	62.4	14.7	7.0	10.8	〃			—20
51	—554	〃	45.2	14.8	7.5	10.0	〃			—21
52	—555	〃	76.3	10.2	6.7	9.6	粘板岩			—22
53	—556	〃	61.6	10.0	8.9	9.4	粘板岩?			—23
54	—557	〃	65.3	14.7	4.9	8.1	粘板岩			—24
55	—558	〃	33.9	12.8	9.6	7.9	細粒砂岩			—25
56	—559	〃	37.9	12.8	9.6	7.2	粘板岩?			—26
57	—560	〃	40.1	13.6	5.5	4.8	〃			—27
58	—561	〃	34.8	11.8	6.0	4.6	細粒砂岩			—28
59	—562	〃	31.3	12.7	5.5	4.1	粘板岩			—29
60	—563	〃	28.8	8.4	5.1	1.8	粘板岩?			—30
61	—564	〃	(58.0)	13.3	10.5	(14.9)	粘板岩	片端欠		
62	—565	〃	(68.2)	13.0	10.2	(13.3)	粘板岩?	〃		
63	—566	〃	(70.0)	(12.0)	(7.5)	(9.5)	粘板岩?	〃		
64	—567	〃	(55.8)	11.5	7.2	(7.9)	〃	〃		
65	—568	〃	(38.1)	10.8	(10.0)	(7.0)	粘板岩	〃		
66	—569	〃	(54.5)	(12.5)	(6.6)	(6.7)	〃	〃		
67	—570	〃	(46.1)	(9.4)	(6.6)	(5.2)	細粒砂岩?	〃		
68	—571	〃	(34.9)	12.6	5.7	(4.5)	粘板岩	〃		
69	—572	〃	(43.0)	18.7	(4.2)	(4.6)	〃	〃		
70	—573	〃	(33.7)	(12.0)	(5.9)	(4.2)	〃	〃		
71	—574	〃	(36.5)	(12.7)	(6.0)	(3.7)	〃	〃		
72	—575	〃	(37.6)	(11.7)	(4.7)	(3.6)	〃	〃		
73	—576	〃	(28.0)	(12.7)	4.9	(3.1)	細粒砂岩	〃		
74	—577	〃	(28.9)	(15.2)	(4.1)	(3.1)	粘板岩	片端と片面欠		
75	—578	〃	(24.5)	(7.9)	(4.7)	(1.1)	〃	〃		
76	—579	〃	(36.3)	14.7	6.6	(6.3)	〃	両端欠		
77	—580	〃	(35.1)	10.8	5.2	(3.3)	〃	〃		
78	—581	〃	58.0	11.8	(6.5)	(6.3)	〃	片面半欠		
79	—582	〃	(52.6)	11.8	(5.3)	(4.2)	〃	片面欠		
80	—583	〃	(28.8)	(8.6)	(3.0)	(1.1)	〃	〃		
81	—584	〃	(29.0)	(10.1)	(2.6)	(1.0)	〃	両端と片面欠		
82	—585	〃	(50.5)	(14.9)	(4.7)	(5.9)	〃	片端と片面欠		
83	—586	〃	(28.0)	(13.9)	(3.1)	(1.4)	〃	〃		
84	—587	〃	(40.7)	(10.8)	(3.2)	(2.4)	〃	両端と片面欠		
85	—588	A ₁ C	81.0	18.2	5.2	12.9	〃			263—10
86	—589	〃	77.6	11.3	8.0	9.2	〃			—11
87	—590	〃	53.1	15.7	6.1	8.8	緑泥片岩			—12
88	—591	A ₂ C	(49.8)	16.0	10.7	(15.9)	細粒砂岩	片端欠		
89	—592	B A	95.0	24.4	14.2	47.1	粘板岩			263—1
90	—593	〃	70.0	23.2	9.4	25.0	〃			—2
91	—594	〃	60.6	18.0	9.5	16.7	ホルンフェルス			—3
92	—595	〃	48.4	16.3	9.8	12.0	粘板岩			—4
93	—596	〃	35.8	18.1	5.5	6.8	細粒砂岩			—5
94	—597	〃	38.8	12.1	5.7	4.6	〃			—6
95	—598	〃	(45.7)	(24.2)	(11.1)	(18.7)	粘板岩	片端欠		

No.	出土地点	型式	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mm)	石質	破損状況	備考	図番号
96	外-599	B A	(36.1)	(22.6)	(10.0)	(12.0)	細粒砂岩	片端欠	多孔質輝石安山岩の 焼けたもの	265-14
97	-600	〃	(43.1)	(17.0)	(8.9)	(11.4)	粘板岩	〃		
98	-601	〃	(43.0)	13.1	7.9	(8.4)	緑泥滑石片岩	〃		
99	-602	〃	(61.0)	13.0	4.9	(6.3)	粘板岩?	〃		
100	-603	〃	(30.4)	(20.1)	(5.2)	(4.4)	細粒砂岩	〃		
101	-604	〃	(40.5)	(19.0)	(5.8)	(6.8)	粘板岩	片端と片面欠		
102	-605	C A	29.6	12.5	6.3	3.6	紅柱石ホルンフェルス			
103	-606	C B	86.9	31.0	10.0	44.8	緑簾緑泥片岩			
104	-607	D A	66.6	33.0	20.9	57.7	?	片端欠		
105	83 D-1	A ₁ A	67.6	13.7	9.1	11.6	砂岩	〃		
106	-2	〃	(49.0)	(11.7)	10.0	(7.7)	粘板岩	〃		
107	-3	A ₂ A	(50.7)	9.7	8.1	(6.2)	〃	両端欠		
108	-4	A ₁ A	(43.8)	10.0	5.5	(3.6)	〃	片端欠		
109	-5	〃	(33.0)	(7.7)	(2.8)	(1.1)	〃	片端と片面欠		
110	-6	A ₂ A	(24.2)	(12.4)	(6.5)	(2.7)	砂岩	片端残		
111	-7	A ₁ C	(24.7)	(11.7)	(5.4)	(2.5)	粘板岩	〃		
112	84 D-1	A ₂ A	(51.8)	11.0	4.8	(4.5)	〃	片端欠		
113	123 D-2	〃	55.0	10.9	5.4	6.0	細粒砂岩	〃		
114	-3	A ₁ A	(53.7)	14.4	8.2	(10.6)	粘板岩	片端欠		
115	177 D-5	〃	41.6	12.2	5.8	5.0	〃	〃		

装身具

No.	出土地点	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	破損状況	備考	図番号
1	1住-35	フ 海浜石	29.5	18.0	11.8	9.1	ch.			213-8
2	-36	フ 珽状耳飾	(24.1)	(10.9)	1.5	(0.7)	滑石	1/2欠		-9
3	8住-45	フ 〃	28.8	(20.5)	3.4	(3.2)	〃	1/2欠		214-23
4	10住-4		9.8	9.2	4.0	0.6	〃			215-4
5	16住-152		23.8	45.7	13.8	13.5	〃		背部に1条の溝	224-1
6	37住-31	フ 珽状耳飾	(31.1)	(34.0)	(5.8)	(7.0)	〃	1/4欠	有孔(2つ)	228-17
7	-32	フ 管玉状	(33.1)	(16.0)	(12.0)	(4.9)	〃	1/2欠		-18
8	38住-18		58.6	33.8	11.2	40.8	蛇紋岩			229-18
9	47住-15		(27.0)	(20.1)	4.0	(3.5)	滑石	3/8欠	有孔、遺物紛失	231-20
10	-16		(20.1)	(12.4)	(3.6)	-	〃	-		-21
11	49住-7		(27.7)	(24.3)	(6.9)	(5.5)	〃	3/4欠		-28
12	59住-10		(23.2)	(19.5)	(5.9)	(4.2)	〃	3/4欠		232-35
13	66住-19		(23.2)	(14.8)	(5.5)	(2.4)	〃	1/2欠		234-7
14	81住-3		31.8	13.3	10.7	7.2	〃		正面から下面に1条の溝	236-3
15	93住-6	フ 平玉状	15.0	14.4	8.0	2.4	〃		孔径3.6 推定長29mm推定径15mm	237-2
16	-7	フ 管玉状	(28.5)	(13.0)	(5.2)	(1.7)	〃	3/8欠		-3

No.	出土地点	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	破損状況	備考	図番号	
17	96住-21	玦状耳飾	(38.9)	(33.9)	(5.0)	(10.0)	滑石	¼欠	推定幅70mm	237-34	
18	122住-10	〃	35.8	46.3	9.6	14.8	〃	½欠		243-22	
19	131住-28	〃	33.1	34.9	(7.3)	(10.0)	〃	¼欠	推定幅45mm	244-30	
20	-29	〃	(28.9)	(18.1)	(3.0)	(2.3)	〃	½欠		-31	
21	-30	〃	(37.8)	(22.2)	(5.2)	(5.8)	〃	⅜欠		-32	
22	111住-22	管玉状	17.5	10.5	9.6	2.3	〃			240-22	
23	外-517	玦状耳飾	42.5	(27.6)	8.9	12.3	〃	½欠	有孔	261-4	
24	-518	〃	36.2	26.4	7.1	(7.9)	〃	½欠		-5	
25	-519	〃	36.9	(18.0)	(9.1)	(9.0)	〃	⅜欠		-6	
26	-520	〃	21.5	(16.8)	7.9	(3.7)	〃	½欠		-7	
27	-521	〃	(16.0)	26.2	(7.4)	(3.5)	〃	下½欠		-8	
28	-522	海浜石	17.5	13.9	4.3	1.6	蛇紋岩			-9	
29	-523	〃	51.7	34.0	13.5	32.4	〃			-10	
30	25F-5	玦状耳飾?	(5.8)	(6.7)	(4.2)	(0.2)	滑石	断片			264-18

打製石斧

類 型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	備 考	図番号
A-I	38住	9.8	4.8	3.7	1.3	85	緑泥片		266-1
	96住 26住	7.3 7.0	3.3 3.9	2.9 3.3	1.3 1.2	60 40	緑泥片	一部磨製	-2
A-II	26住 112住 76住	14.2 10.5 15.8	6.4 4.5 6.6	5.7 (2.5) 6.4	2.4 1.9 2.8	290 (120) 405	緑泥片		-3
		12.5	5.4	5.5	2.2	200			
3	38住	(14.8)	8.0	6.9	2.5	(440)	緑泥片		-4
4		6.5 8.4	2.4 3.2	2.2 2.8	0.7 1.2	20 40	緑泥片		-5
A-III	73住	9.4	5.3	(2.4)	2.5	(155)	緑泥片		-6
A B-I	19住	9.6	5.7	5.2	2.0	145	緑泥片		-7
	26住 15住	10.9 9.6	6.4 5.6	4.5 5.2	1.5 1.4	140 100	緑泥片		-8
A B-II	113住 106住	9.0 (5.2)	3.9 (5.3)	3.5 4.6	1.3 0.9	70 (20)	緑泥片		-9
		12.1	4.8	4.6	1.2	100			
2	26住 96住	11.5 10.2	5.3 5.2	5.3 4.8	0.8 1.7	100 120	緑泥片		-10
		9.3	4.7	4.2	1.7	(85)	頁 岩		-11
B-I	108住	10.8	5.0	4.7	1.9	140	石墨片		-12
		9.4	5.4	5.3	1.6	110			
B-II	102住	12.7	7.5	6.5	2.5	340	閃 綠		-13
類 型	1	26住	12.0	7.8	7.2	3.4	460		266-13
	B-II		15.7	7.9	7.6	3.2	520		
2	37住	10.0	4.0	3.8	1.6	80	緑泥片		-14
		11.1	5.2	5.2	1.9	140			
3	83土塚	9.4	4.5	4.4	1.0	50		?	
		10.3	3.8	3.2	1.5	(80)			
4	20住 83土塚	(6.5)	3.6	1.4	1.4	(35)			
		10.5	3.3	2.7	0.7	40	緑泥片		-15
5	93住床 1住	8.7	3.6	3.6	1.1	40			
		14.5	5.6	4.9	1.7	230	緑泥片		-16
6	8住 37住	(9.3)	4.8	4.7	1.9	(130)			
		11.0	4.7	4.4	2.1	185			
7	119住床	11.8	4.0	4.1	1.7	130	緑泥片		-17
		9.0	4.0	3.8	1.4	70			
8	8住 37住	(8.5)	3.7		1.8	(95)			-18
		(8.9)	3.2		1.5	(40)	緑泥片		
9	119住床	8.0	5.9	5.8	1.1	65	頁 岩		267-19
		10.2	6.0	6.0	1.8	100			
10	127住	9.4	7.3	7.1	2.7	220			
		7.5	4.9	4.7	1.2	50	緑泥片		-20
11	119住床 16住 26住 23土塚	8.2	4.4	4.3	1.5	60	石墨片		-21
		7.4	3.8	3.3	1.3	50			
12	88住	8.6	5.0	4.9	1.6	90		?	
		(4.0)	(4.3)		(1.1)	(20)			
13	2	9.0	4.9	4.7	2.3	160	緑泥片	一部調整磨製	-22
		14.2	6.1	5.5	1.3	190	頁 岩	砥石状の痕あり	-23
14	1	14.3	7.0	7.0	1.5	220			

類	型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	図番号	
C-II	1	112住	(9.1)	5.0	1.0	(70)				267 -23	
			7.8	5.3	1.2	70					
			8.3	4.7	1.4	90					
		(8.6)	5.6	1.0	80						
2	38住		10.4	4.4	4.3	90	緑泥片	刃部研磨		-24	
			(6.0)	4.1	3.9	(50)					
3			14.2	5.3	4.9	220	緑泥片			-25	
			10.5	4.9	4.6	105					
			16.7	6.8	5.8	2.3	400				
			11.0	3.8	2.7	1.4	70				
4	65住		11.1	4.6	4.2	90				-26	
			9.1	3.8	3.5	0.7	40	片麻			
5	123土塚	131住	7.6	3.7	2.4	30				-27	
			(8.0)	4.2	0.4	(30)					
D-II	1	112住	13.3	7.3	7.2	1.4	270	緑泥片	全面平滑		
			15.7	9.7	9.4	2.7	525				
D-II	1	112住	12.1	5.3	5.0	1.4	150	緑泥片			

小形磨製石斧

類	型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号
A-I	64住	(8.2)	8.4	4.8	4.6	2.2	130	A	B ₂	蛇文		268 -5
			(8.2)	2.4	2.4	170	A ₁	?				
B-I	137住	(5.3)	8.5	4.2	4.0	1.8	95	A	A ₁			-2
			(4.0)	(5.3)	(1.8)	55	B ₂	?				
			(6.4)	(5.3)	2.2	105	C ₁					
			(4.8)	4.5	4.2	55	C ₂					
			8.4	4.8	4.5	80	A	B ₁₂				
47住 16住 102住	(7.3)	7.8	4.9	4.8	(1.0)	60	A ₁	?	緑泥片			-3 -4 -5
			(3.0)	1.4	85	A ₂						
			7.0	4.3	1.2	60						

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号	類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号	
B-I	99住	(4.7)	2.9	2.5	1.2	20	〃	A	〃	加熱	268-7	B-II	37住	(6.8)	4.3	3.8	1.8	85	C ₂	A ₁	蛇文		-19	
C-I		(5.0)	4.0	3.8	0.8	30	C ₂	B ₁	緑泥片		--8		92住	(5.6)	3.4	1.3	40	C ₁	?	緑泥片			-20	
		(4.9)	3.3	2.9	0.9	25	〃	A ₂	蛇文															
		(3.1)	3.0	2.8	0.8	15	〃	A ₁	緑泥片															
		(2.2)	2.6	2.4	0.7	3	〃	B	〃															
D-I	38住	(4.5)	2.3	(2.2)	0.8	15	B ₁	B ₁	蛇文		-9		73住	4.6	3.2	2.8	1.1	30	A	A	〃		-21	
							B	B ₁	〃		-10		137住	3.5	2.0	1.8	0.7	10	〃	A	〃		-22	
							A	A	緑泥片		-11		111住	(2.6)	2.1	0.8	0.8	5	C ₁	?	〃			
							〃	?	〃															
A-II	176土塚	10.0	4.7	4.3	1.4	100	A	B ₁	緑泥片		-12		37住	9.4	2.5	1.8	1.5	70	〃	A	緑泥片		-24	
		7.9	4.0	3.2	1.7	75	〃	B	〃		-13		115住	5.8	1.7	1.2	0.9	20	〃	A ₂	〃		-25	
		(4.6)	2.7	2.2	0.8	15	C ₂	B ₁	〃		-14			(4.1)	1.9	1.7	0.5	10	C ₂	A	〃			
		(6.1)	3.2	2.5	1.2	20	A ₁	B ₁	〃		-15			(4.5)	1.7	1.2	0.7	10	〃	〃	〃			
		(3.0)	3.7	2.5	1.9	20	A ₂	〃	〃					(4.5)	1.7	1.2	0.6	7	〃	〃	〃			
		(5.0)	2.5	1.9	0.9	20	C ₂	B	〃					3.8	1.5	1.2	0.6	7	A	〃	〃			
B-II	79住	(4.4)	2.7	0.8	0.6	5	C ₂	?	蛇文		-16		92住	(1.8)	1.3	0.7	0.7	5	B ₁	?	緑泥片			-26
		(3.8)	1.5	0.8	0.6	5	A ₁	A ₁	緑泥片		-17			(1.7)	1.5	0.4	0.4	2	C ₂	A	蛇文	すり切痕あり		
		(3.3)	1.5	0.6	0.6	5	〃	?	蛇文															
							〃	?	〃															
A-II	176土塚	(5.6)	3.8	3.2	2.5	80	C ₂	A	〃		-18		16住	3.0	1.1	0.5	0.5	2	A ₁	?	〃			-27
		6.3	3.7	2.8	1.3	45	A	A ₂	〃		-19			(3.8)	2.7	2.7	0.5	10	A	A	〃			
		8.6	(3.8)	(2.4)	(2.0)	95	A ₁	A	緑泥片					(4.5)	5.2	4.8	1.2	55	C ₂	〃	緑泥片			
B-II	38住	(5.5)	4.3	3.7	1.8	55	C ₂	〃	蛇文	破損部研磨			69住	(4.0)	4.3	4.0	1.0	25	〃	B	〃	〃		-30
							A	?	緑泥片				57住床	(4.3)	2.4	1.0	1.0	18	〃	C	〃	〃		-29
		6.9	3.6	3.4	1.2	50	A	?	蛇文		-18		92住	(5.5)	(5.5)	1.1	1.1	5	B ₁	?	〃	すり切痕あり		
		8.2	3.8	1.5	70	A ₁	A ₁	A	〃		-19					1.0	1.0	15	〃	〃	緑泥片			

定角石斧

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号	類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号
A-1	130土塚	(10.6)	5.0	(4.5)	2.3	195	A ₁	A	蛇文	加熱	269-A-1	A	88住	(8.6)	(5.4)	5.5	(2.8)	215	C ₁	?	緑泥片		
		(11.6)	6.3	(3.0)	2.6	335	〃	〃	〃		-A-2			(7.5)	6.4	(6.0)	2.8	235	C ₂	〃	蛇文	凹	
		(13.0)	6.6	3.0	440	AC	凹				-A-3			11.9	3.4	5.3	3.3	385	A	A	緑泥片		269-B-1
A	137住	(11.0)	(5.8)		2.8	340	B ₁	?	〃			B	110住床	(12.6)	5.7	(5.5)	3.2	340	A ₁	?	凹		-B-2
		(12.9)	6.1	(2.7)	2.8	365	A ₁	A	蛇文					(7.6)	(5.0)	(3.0)	170	C ₁	〃	蛇文			

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号
B	49住	(7.0)	7.8		5.2	450	B ₁	〃	安山		
C-1	141土塚	(15.4)	6.7	(5.8)	3.3	585	A ₁	C	緑泥片	凹	289-C-1
	2	(14.8)	5.8	5.1	3.1	440	A	A	閃緑		-C-2
	86住	(11.0)	6.2	5.6	3.2	360	C ₂	〃	蛇文		-C
	81住	(6.7)	(5.5)		3.1	185	C ₁	?	閃緑		
	38住	(8.7)	7.0		3.8	415	B ₁	〃	〃	凹	

乳棒状石斧①

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号
A-1	1住	(22.9)	7.0		5.1	1280	A ₁	?	緑泥片		269-1
	59住	(23.6)	6.0		4.0	710	〃	〃	〃		-2
	75住	(16.0)	(6.0)		4.1	530	C ₁	〃	〃		
	12住	(13.7)	5.8		3.4	455	〃	〃	〃		
		(11.1)	(4.4)		3.1	230	〃	〃	〃		
A-3	38住	(12.5)	(3.3)		3.5	200	〃	〃	〃		
	74住床	(7.5)	(4.3)		3.4	200	〃	〃	〃		
		(8.5)	(4.2)		3.1	150	〃	〃	〃		
		(7.2)	(4.5)		(3.0)	135	〃	〃	〃		
		(7.7)	3.5		(2.3)	80	〃	〃	〃		
AB-1	98住	(5.1)	(3.7)		(2.0)	50	B ₂	〃	〃		
	45土塚	(4.7)			(2.5)	50	〃	〃	〃		

乳棒状石斧②

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号
AB-2	98住	(13.9)	6.7	6.7	3.6	615	C ₂	A	緑泥片		270-7

類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号	類型	出土地点	長さ cm	幅 cm	刃幅 cm	厚さ cm	重さ g	折損	使用痕	石質	備考	図番号				
AB-2	78住	(10.4)	5.8	5.6	(2.5)	265	C ₂	A	緑泥片	刃部敲打者	270-7	B-2	75住	(13.0)	5.0	2.7	270	C ₁	?	緑泥片	凹 再成形(敲打)	270-12					
		(9.5)	5.8	5.5	3.0	320	B ₂	?	閃緑 緑泥片				108住	(12.8)	5.4	4.5	3.2	410	B ₁	A			?	?			
AB-3	2号竪穴	(4.8)	(6.0)	5.4	(3.0)	70	A ₂	?	?	刃部磨減	-8	B-3	1住	(9.4)	(5.5)	2.7	280	B ₁	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-13 -14 -15		
		(6.2)	7.4	6.1	3.0	180	?	AC	?				?	37住	(8.5)	5.5	4.6	3.1	235	C ₂	A	?	?			?	?
B-1	174土坑床	(12.9)	4.6	3.5	2.6	290	C ₂	A ₂	?	?	頭部磨減	-11	66住床	(16.1)	4.6	2.6	320	A ₁	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(11.3)	4.1	2.3	190	A ₁	?	?	?	?			88住	(11.0)	(4.5)	(2.7)	180	?	?	?	?	?	?	?			?
B-2	93住床	(8.9)	4.6	3.9	2.1	150	B ₁	?	?	刃部再研磨	-12	C	86住	(14.2)	3.9	2.5	220	?	A	?	?	?	?	?	?	弥生 ?	-13 -14 -15
		(9.5)	4.3	3.5	2.6	145	C ₂	A	?				?	11住	(7.8)	5.0	4.2	3.0	180	C ₂	A	?	?	?	?		
B-2	182土坑	(9.5)	4.3	3.5	2.6	145	C ₂	A	?	?	刃部再研磨	-11	1住	(10.8)	4.4	2.5	195	B ₁	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(7.8)	5.0	4.2	3.0	180	?	?	?	?			174土坑床	(9.4)	5.0	4.3	2.8	220	?	?	?	?	?	?			?
B-2	26住	(24.5)	6.1	5.3	3.0	770	A ₁	AC	?	?	刃部再研磨	-12	86住	(8.4)	3.2	2.5	125	?	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(9.6)	4.8	2.2	100	C ₁	?	?	?	?			21住	(9.6)	4.0	2.9	215	B ₁	?	?	?	?	?	?			?
B-2	15住	(6.8)	4.3	6.0	2.8	240	B ₁	A	?	?	刃部再研磨	-12	112住	(8.0)	4.3	4.0	110	C ₂	A	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(9.5)	(7.3)	2.65	265	C ₂	?	?	?	?			37住	(9.8)	4.7	3.0	2.2	140	?	?	?	?	?	?			?
B-2	102住	(8.4)	6.4	6.0	2.8	240	C ₂	A	?	?	刃部再研磨	-12	1住	(10.8)	4.4	2.5	195	B ₁	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(8.5)	6.0	6.3	3.3	210	?	?	?	?			26住	(8.5)	6.0	6.3	3.3	210	?	?	?	?	?	?			?
B-2	1住	(0.4)	5.6	(5.2)	2.3	320	?	A ₂	?	?	刃部再研磨	-12	86住	(8.7)	3.5	3.0	2.4	130	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(8.5)	6.0	6.3	3.3	210	B ₁	?	?	?			37住	(8.4)	3.2	(3.1)	2.5	125	?	?	?	?	?	?			?
B-2	93住床	21.0	5.7	(3.3)	3.1	615	A	A ₂	?	?	刃部敲打者	-12	86住	(8.6)	6.8	6.1	3.5	360	?	A	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(7.3)	4.9	3.1	360	A ₁	?	?	?	?			112住	(8.6)	(5.3)	4.0	2.7	130	A ₂	?	?	?	?	?			?
B-2	15住	(12.4)	5.1	2.6	280	?	?	?	?	刃部磨減	-12	C	1住	(9.0)	7.4	7.4	3.0	330	C ₂	A	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10
		(13.9)	4.5	2.7	260	C ₁	?	?	?				?	11住	(7.1)	5.8	5.7	1.9	130	?	?	?	?	?	?		
B-2	86住	(11.5)	(5.0)	3.1	280	?	?	?	?	刃部磨減	-12	?	8住	(7.8)	5.5	3.0	245	C ₂	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(6.0)	5.3	2.9	155	B ₁	?	?	?				?	46住	(7.8)	5.5	3.0	245	C ₂	?	?	?	?	?			?
B-2	47住	(6.0)	5.3	4.6	65	A ₂	A	?	?	刃部磨減	-12	?	8住	(7.8)	5.5	3.0	245	C ₂	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(8.4)	(5.0)	(2.5)	160	C ₁	?	?	?				?	8住	(7.8)	5.5	3.0	245	C ₂	?	?	?	?	?			?
B-2	26住	(10.8)	5.5	5.1	2.7	275	C ₂	B	?	?	刃部磨減	-12	8住	(3.8)	5.5	3.0	25	B ₂	?	?	?	?	?	?	凹 再成形(敲打)	-9 -10	
		(15.2)	5.3	3.2	400	C ₁	?	?	?	?			8住	(3.8)	5.5	3.0	25	B ₂	?	?	?	?	?	?			?

石錘

図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
271-15	9.3	7.7	7.8	880	安山	137住	
-16	8.1	5.3	3.4	145	〃	140住	
-17	8.5	4.5	3.5	165	〃		
-18	9.8	3.9	3.4	180	〃		
-19	4.9	3.5	1.0	30	粘板	8住	
-20	4.6	3.0	1.2	23	砂岩	33住	
-21	4.8	3.3	0.9	25	緑泥片	99住	

横刃・他

図番号	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
271-1	4.5	9.8	0.9	75	緑泥片	64住	
-2	4.6	8.2	0.9	45	安山	21住	
-3	3.5	7.3	1.0	30	〃	112住	
-4	5.1	7.0	1.3	90	砂岩	46住	
-5	3.5	6.6	1.6	40	粘板	8住	
-6	3.0	6.6	0.7	25	頁岩	127住	
-7	4.8	11.5	1.5	90	ホルン		
-8	(3.5)	(4.0)	0.5	12	珪質砂		弥生砲丁
-9	3.8	7.3	0.7	30	頁岩	124住	〃
-10	(8.3)	4.1	1.5	80	緑泥片	15住	尖頭石器
-11	(7.3)	4.1	0.8	35	輝緑		〃
-12	6.8	4.8	1.0	38	粘板	112住	
-13	4.6	5.6	0.8	22	砂岩	80住	
-14	2.9	6.6	0.9	20	緑泥片	61住	
	3.3	6.6	0.6	15	砂岩	39住	
	3.8	5.2	0.8	15	緑泥片	16住	

砥石

図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
273-1	12.1	4.3	2.0	210	頁岩	44住床	全面磨減
-2	9.5	3.2	1.8	110	砂岩	123住	4面磨減
-3	4.8	3.0	1.4	30	珪質砂	8住	〃
-4	7.0	2.1	1.9	35	〃	35住	全面磨減
-5	9.9	(7.8)	3.6	205	砂岩	土塚134	2面磨減
-6	(9.1)	6.2	4.3	450	頁岩	122住	すり切溝?

石棒・他

図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
273-7	(19.0)	7.7	5.9	1250	緑泥片		
-8	(6.0)	12.6	11.3	1030	安山		凹線状擦痕
-9	(6.0)	3.4	2.2	80	緑泥片		
-10	(11.5)	2.4	2.0	95	粘板		
-11	(7.7)	4.0	3.7	150	〃		?

-12	(3.6)	3.2	2.5	75	砂	21住床	砥石?
-13	9.3	9.4	9.1	1250	流紋	46住	全面磨減
	(15.8)	15.5	14.5	4830	安山	39住	下半欠損
	12.0	1.7	1.5	55	緑泥片		〃

磨石・他

図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
273-14	7.1	6.1	4.6	270	流紋	19住	側面全周敲打
-15	10.5	7.8	4.6	650	安山	74住床	
-16	8.7	7.9	5.6	460	〃		
-17	4.4	4.2	3.3	70	〃		
-18	6.6	6.5		310	〃	38住	全面敲打
-19	7.2	7.0		410	〃	112住	
-20	5.6	5.2		160	〃		
-21	3.9	3.7	3.8	〃	〃		
		7.2		400	〃	75住	
	7.4	6.1	3.6	220	〃	88住	
		5.1	2.7	200	〃	38住	扁平円盤
	7.6	5.2	4.1	250	〃	96住	
				160	〃	80住	
	6.2	5.7		200	〃	17住	
	6.0	5.2		220	〃	39住	球形
	5.2	4.6		120	〃	46住	

敲打器Ⅰ類

図番号	長さ (cm)	長径幅 (cm)	短径幅 (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
272-1	14.0	6.5	6.0	930	安山		完形、凹あり
	10.9	6.3	6.2	640	〃	119住	〃
	(10.5)	6.1	6.0	630	〃		一部欠
	(6.5)	6.3	6.0	370	〃	119住	半欠
	(6.8)	6.7	6.5	430	〃	72住	〃
	(6.5)	6.3	5.9	460	〃	37住	〃
	(7.8)	6.8	6.4	530	〃	37住	〃
	(6.4)	6.8	6.5	440	〃		〃

敲打器Ⅱ類

図番号	長さ (cm)	長径幅 (cm)	短径幅 (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
272-2	12.2	9.6	3.9	720	緑泥片	96住床	一部破損
	13.7	11.7	3.5	900	安山		〃
	11.3	10.0	2.5	490	〃		完形
	12.6	(7.9)	3.0	360	砂岩	21住床	半欠
	(10.3)	(8.3)	2.9	300	〃		〃

敲打器Ⅲ類

図番号	長さ (cm)	長径幅 (cm)	短径幅 (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
272-3	12.8	8.0	3.1	530	安山		

272-4	10.1	6.6	5.6	710	輝	104住	
	17.7	7.1	2.8	420	石墨片	76住	
	16.5	7.2	4.6	870	安山		
	14.3	7.7	3.5	550	〃		
	12.6	6.8	3.8	580	〃		
	13.2	6.3	4.0	480	〃		
	11.1	6.4	4.4	380	〃	131住	
	(4.6)	6.8	5.8	270	〃	38住	半欠
	(8.7)	6.4	3.5	230	〃	26住	〃
	6.2	5.8	4.0	240	〃	37住	
	(7.0)	9.8	4.2	430	〃	38住	半欠
	(10.5)	5.0	3.9	390	〃	土塚23	〃

敲打器Ⅳ類

図番号	長さ (cm)	長径(幅) (cm)	短径(柄) (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
272-5	6.0	5.5	3.2	205	緑泥片	88住	石斧転用
-6	5.8	5.3	2.1	130	〃		〃
-7	8.9	2.4	1.1	32	〃		〃 ?
-8	6.8	2.4	1.9	47	粘板		
-9	5.2	1.8	1.7	20	緑泥片	1住	
-10	8.7	4.1	2.6	140	〃	132住	
-11	11.2	2.2	1.7	65	粘板	111住	
-12	16.2	3.3	2.4	210	緑泥片		
-13	10.1	5.0	3.8	240	安山		
-14	10.0	3.8	3.5	200	緑泥片	37住	
-15	7.0	3.8	3.0	130	閃緑	86住	
-16	4.7	3.0	2.3	35	流紋	土塚23	
-17	6.4	2.5	1.1	20	安山		

特殊磨石・他

図番号	長さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
274-1	13.4	9.4	6.8	1050	安山		
	15.0	7.9	5.5	910	〃		
	15.1	7.5	6.5	905	〃	112住	同類型
	11.6	7.5	5.6	585	〃	104住	折損
-2	11.8	6.4	5.9	720	〃		
	11.2	8.9	5.8	885	砂岩	93住床	
	12.8	7.4	6.6	1120	安山		折損
	9.6	8.5	5.0	740	〃	土塚23	同類型
	9.6	6.3	5.5	505	〃	108住	〃
	8.6	8.5	5.7	630	〃	土塚131	〃
	7.8	8.2	6.9	585	〃	土塚184	〃
-3	11.9	7.3	6.2	730	〃	106住	〃
	8.1	6.9	5.1	420	〃		同類型
	7.4	6.9	4.3	325	〃	37住	〃
-4	11.6	7.4	7.0	930	砂岩		凹あり
-5	11.0	5.4	5.1	390	流紋		〃

石皿

番号	図番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石質	出土地点
1	280-1	42.3	36.5	11.0	安山	

2	280-2	32.5	(20.5)	4.8	〃	土塚5
3	-3	(18.0)	24.2	3.8	〃	111住
4	-4	(22.5)	20.6	5.8	〃	117住
5	-5	(17.0)	(12.3)	3.3	〃	
6	-6	(18.5)	(20.5)	5.7	〃	
7	-7	(17.0)	27.5	5.0	〃	119住
8	-8	(23.7)	22.3	4.8	〃	90、92住の間
9	-9	(20.0)	(17.5)	5.3	〃	土塚5
10	-10	(37.0)	25.1	12.7	〃	
11	-11	(16.0)	(17.0)	2.8	〃	
12	-12	25.6	18.8	3.8	〃	
13	-13	(20.5)	(20.4)	7.3	〃	
14	-14	(20.0)	(20.8)	3.8	花崗	砥石状
15	-15	(16.8)	(16.4)	4.0	安山	
16		23.1	16.3	8.0	花崗	
17		27.5	(11.6)	3.8	安山	119住・98住
18		(15.0)	17.5	4.5	〃	182土塚
19		(22.8)	24.6	6.4	〃	
20		(16.4)	(25.0)	6.3	〃	132住
21		(17.7)	20.3	5.9	片麻岩	1住
22		(14.7)	(7.8)	5.4	〃	96住
23		(14.2)	(11.7)	3.0	〃	12住
24		(20.5)	(27.0)	7.0	〃	132住
25		(11.2)	(13.8)	2.5	〃	土塚131

凹石①

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
I-1		11.0	7.8	5.1	480		
2		9.9	8.2	4.0	275		
3		(10.6)	6.3	2.5	(225)	1住	
4	274-6	(14.6)	9.5	4.3	(772)	38住	
5	-7	16.0	4.3	4.3	500	38住	
6		11.4	10.1	4.5	558		
7		12.9	5.2	4.5	475	38住	
8		(12.0)	7.9	4.4	(630)	38住	
9		10.0	8.0	5.2	440		
10		9.0	5.0	5.0	345		
11		10.9	7.9	6.8	622		
12		9.0	7.3	3.0	195	119住	
13		8.5	7.6	4.8	380	92住	
14		9.2	7.5	4.5	250	37住	
15	-8	15.2	7.1	5.0	610	37住	
16		9.6	4.8	3.2	195	88住	
17	-9	5.0	4.0	2.5	45		
18		5.4	4.5	2.7	72	37住	
19		12.5	6.2	2.1	(245)	土塚165	粘板
20	-11	10.1	7.4	4.5	420	127住	
21		10.1	9.3	3.7	402	125住	
22		9.9	8.7	7.5	693	37住	
23		10.2	6.3	3.7	280	8住	
24		9.2	5.2	2.8	170	139住	
25	-10	9.6	4.1	3.5	125	64住	

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
I-26		10.8	6.4	5.8	425	80住	
27		9.0	6.4	3.9	270	46住	
28		10.3	7.7	2.1	175	122住	
29		8.6	6.2	4.4	235	118住	
30		10.1	6.4	5.2	425	118住	
31		11.2	8.0	4.3	350	86住	
32		11.5	4.6	3.7	218	8住	
33		12.1	6.2	4.3	340	49住	
34	274-12	(9.3)	5.9	(2.4)	170	86住	粘板
35		8.0	7.0	2.4	166	11住	
36	275-2	9.7	6.2	3.2	236	56住	
37		10.4	8.4	3.3	300	26住	
38	-1	12.5	11.0	5.6	600	46住	
39		(13.2)	(7.8)	4.9	(600)	38住	
40		9.6	7.5	(3.5)	(332)	96住	
41		(3)	(7.8)	(2.3)	(63)	15住	
42		(11.0)	7.6	6.7	(760)	26住	
43		(7.7)	(6.8)	(5.5)	(320)	137住	
44		(6.6)	6.4	4.5	(195)	26住	
45		(9.0)	5.0	3.6	(160)	12住	
46		11.9	7.3	4.3	400	土塚75	
II-47		13.5	5.7	3.1	375	38住	
48		14.7	5.8	3.1	390		
49	-3	15.8	7.0	2.6	455	92住	
50		12.1	6.4	3.4	390		
51		12.5	6.0	4.4	480		
52		10.8	5.6	3.5	355	86住	粘板
53	-4	13.8	8.7	4.7	955	112住	
54		13.1	8.8	5.4	735		
55		10.9	9.0	5.3	530	68住	
56	-5	9.0	7.6	4.6	320	112住	
57		9.3	7.9	4.2	450		
58		11.8	8.3	6.5	770	56住	
59		11.0	7.7	5.4	720		
60		11.0	7.2	4.2	540		
61	-7	8.9	6.0	4.0	275	37住	
62	-6	13.0	7.5	4.2	585	8住	
63		13.2	5.7	2.3	248	11住	閃緑
64		12.0	4.3	3.2	340	37住	
65		13.7	7.2	3.6	490		
66		8.4	6.2	5.8	410	83土塚	
67		10.8	3.1	2.6	130	96住	
III-68		10.1	6.8	4.5	415		
69		12.9	9.8	3.8	725		
70		13.4	7.0	4.7	590	80住	
71		10.9	8.8	5.0	730	136住	
72		11.9	8.3	4.5	700		
73	276-1	18.2	7.5	6.3	1230		
74	-2	12.3	7.3	4.5	782	86住	
75		9.3	6.5	4.3	360	119住	

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
III-76		9.9	6.5	3.8	365	102住	
77		9.8	8.4	4.5	570		
78		8.3	7.2	4.2	350	56住	
79		10.7	7.0	4.8	455		
80	275-10	12.6	7.3	3.3	470		
81		11.2	5.4	3.3	315		閃緑
82		10.8	6.3	4.5	485		
83		(10.1)	7.3	6.0	560	1住	
84	-9	(9.1)	7.2	5.7	536	37住	
85		(6.7)	5.5	4.6	(307)		
86	-8	8.0	6.0	4.5	270		
87		6.8	5.7	3.8	123	38住	
88		13.1	6.6	5.3	550	土塚23	
89		11.4	7.2	4.0	480		
IV-90	276-5	11.0	8.4	4.4	413	64住	
91		11.0	9.0	5.3	690	73住	
92		10.6	7.0	5.0	400	106住	
93		10.7	8.0	4.4	483	110住	
94	-4	13.8	6.5	4.2	535	112住	
95		12.9	8.5	5.4	970		
96		13.4	8.4	6.8	1080	118住	
97		12.3	10.5	4.9	802	96住	
98	-3	13.6	9.2	4.5	925		
99	-1	13.3	9.8	5.6	767		
100		11.8	9.9	5.3	843		
101		10.0	7.5	6.0	635	47住	
102		12.0	8.6	5.9	806		
103	-7	11.5	9.1	5.5	725		
104		(9.8)	8.6	5.0	(590)	110住	
105		(9.1)	6.5	6.3	(425)	64住	
106	-8	8.4	7.7	3.2	295		
107		13.0	6.4	4.1	430		
108		8.7	7.6	4.1	423		砂岩
109		10.7	10.2	4.3	680		
110	-9	9.6	6.9	3.8	350		
111		9.0	7.3	4.1	380		
112		10.3	7.9	3.4	(312)		
113		(8.6)	6.8	5.2	(402)		
114		10.5	8.1	4.5	510		
115		11.0	7.7	6.1	(800)		
116		10.4	8.5	5.4	697		
117		7.2	6.8	4.3	282		
118		12.8	8.6	6.2	835		
119		12.4	7.4	6.0	633	溝1	
120		9.3	(3.2)	3.5	(135)	37住	
121	-6	12.9	7.4	4.1	612	土塚165	
122		9.4	7.4	5.5	(525)	64住	
123		10.3	8.8	4.5	605	11住	
124		8.5	7.5	5.8	512	137住	
125		10.3	6.7	3.4	312	86住	
126	277-2	11.2	9.8	7.0	960	37住	

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
IV-127		7.3	5.8	4.2	225	106住	
128		(10.7)	7.3	5.1	(640)	74住	
129		(9.8)	(8.6)	(6.4)	(660)	土塚130	
130		11.1	9.0	4.8	655	土塚123	
131		10.3	7.6	5.4	650		赤色付着物
132		9.1	7.4	3.9	355	64住	
133		(8.8)	8.5	4.6	445	3土塚	半折
134		10.7	5.9	4.0	340	16住	
V-135		13.2	8.3	4.1	575	37住	
136	277-3	10.7	7.9	4.4	431	15住	

凹石②

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
V-137	277-4	11.8	6.6	5.1	526	137住	
138	-11	13.2	6.2	4.1	420	52住	
139	-6	11.1	6.6	4.5	470	26住	
140		9.5	7.4	3.3	355	12住	
141		10.0	6.8	4.3	395	137住	
142		10.0	7.0	5.9	522	37住	
143		12.2	9.8	3.7	(556)	58住	
144		10.8	9.7	3.4	(495)	21住	
145		13.1	9.0	5.2	831	59住	
146	-7	10.8	8.1	5.3	555	46住	
147		12.5	7.7	5.3	805	21住	
148	-8	13.2	7.7	5.0	810	88住	
149		10.4	7.4	4.4	550		
150	-5	10.0	7.7	4.1	450		
151		10.0	8.0	5.3	560		
152		11.8	6.0	5.0	690	37住	
153		10.4	8.7	5.2	(610)		
154		(9.7)	7.1	7.1	(620)		
155		(7.7)	6.7	5.4	(565)	112住	
156	-10	(12.0)	4.3	2.6	(210)		砂岩
157		(5.4)	7.5	3.7	(180)	86住	
158		(5.0)	7.2	4.3	(173)	27住	
159		8.7	6.5	3.8	280	16住	
160		10.9	8.1	4.1	420	土塚46	
161		9.8	6.9	5.1	430	土塚41	
162		6.5	6.4	4.3	220	竪穴1	
163		(8.6)	5.8	5.8	460	竪穴2	半折
164		12.6	10.0	5.0	865	37住	
165		12.2	8.5	3.8	575		
166		9.7	8.0	4.4	455	86住	
167		10.7	8.0	4.6	533		
168		9.6	8.7	5.3	595	93住	
169		8.8	8.0	3.9	435	102住	
170		11.8	8.9	4.3	595	土塚146	
171		11.8	8.5	5.2	712		
172		8.7	8.2	4.0	378		
173		9.8	6.9	4.7	415		

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
V-174		(5.5)	5.8	4.5	215		
175		(5.7)	6.2	2.4	113		
VI-176	278-1	12.4	7.8	3.2	365		
177		12.6	8.3	3.8	610	37住	
178		11.5	8.4	5.0	740		
179		11.7	8.4	5.0	710		
180		10.0	8.8	5.2	690		
181	-11	11.4	6.7	3.7	380		
182	-5	8.7	5.5	3.8	288		
183		10.9	7.8	3.5	500		
184		11.0	7.8	4.0	800	38住	
185		8.7	6.2	3.2	240		
186	-4	11.4	6.5	4.3	535	74住	
187	-6	15.4	7.0	4.5	618	136住	
188		14.9	5.7	5.0	580	17住	
189	-7	14.9	6.5	4.7	658		
190		14.0	6.0	4.3	575		
191		12.6	6.2	5.1	590		
192		12.0	6.5	5.8	790		
193		11.5	5.2	4.2	350		
194		10.9	6.4	6.1	(685)		
195		8.1	5.5	4.8	(345)		
196		9.2	7.6	3.6	356	106住	
197	-8	8.5	8.0	4.3	422	土塚146	
198		10.1	6.8	3.5	390	96住	
199		9.6	7.1	3.5	375	96住	
200		8.6	7.8	4.7	560		
201	-9	11.0	7.2	3.5	490	土塚146	
202		11.1	8.2	3.2	405	131住	
203		9.2	7.4	3.5	316	90住	
204		10.5	7.3	4.3	475		
205		10.6	7.4	3.3	425	37住	
206		11.2	7.7	4.0	545	38住	
207		9.4	7.2	4.0	470		
208		9.5	7.0	3.2	303	112住	
209		11.8	7.8	3.7	472		
210		10.4	8.5	4.4	615	80住	
211		11.4	8.0	5.8	650		
212		11.6	10.3	4.2	(780)	38住	閃緑 花崗
213		10.0	8.5	4.2	(455)		
214		8.8	6.4	3.6	305	81住	
215		9.9	7.5	4.0	413	64住	
216	-12	10.4	7.3	3.8	415	119住	
217	-13	8.2	6.4	3.8	290	135住	
218		10.0	8.3	4.1	497	66住	
219		8.9	6.5	3.8	319	65住 海柱穴	
220		9.7	7.5	3.3	340	52住	
221		10.0	7.4	3.2	342	25住	
222		9.6	7.2	3.8	360	8住	
223		10.8	8.3	3.9	545		
224		10.3	9.1	4.9	612		

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
VI-225	278-10	14.3	8.2	4.3	700	52住	
226		9.7	8.8	4.0	508	118住	
227		11.3	8.9	4.0	570		
228		10.4	7.7	3.5	378		
229		11.4	8.6	4.8	(657)		
230		(9.8)	7.7	4.6	(617)	土塚146	
231		(9.8)	7.7	3.8	(460)	119住	
232		9.3	(6.5)	3.5	(320)	64住	
233		(8.8)	7.5	3.5	(290)	110住	
234				3.4	(110)	112住	
235	14.2	9.2	6.0	1240	38住		
236	11.4	7.6	4.2	540	49住		
237	10.5	7.8	6.0	835			
238	12.3	7.3	4.0	615	76住下層		
239	10.4	7.0	3.4	430	37住		
240	11.0	6.3	4.2	420	118住		
241	10.8	7.0	4.2	508	17住		
242	11.7	7.7	5.1	700	21住		
243	11.4	6.7	4.6	550	75住		
244	9.4	6.2	4.5	406			
245	10.0	6.4	4.4	412			
246	12.4	7.8	4.4	640			
247	13.7	7.6	5.0	750	26住		
248	10.5	7.0	5.5	625			
249	13.9	7.2	(3.5)	(525)	37住		
250	(8.6)	8.5	6.3	(700)	98住		
251	(6.6)	6.8	3.5	(265)	26住		
252	(6.0)	6.8	4.2	(240)	80住		
253	(6.3)	7.0	3.0	(200)	37住		
254	(4.8)	6.5	3.7	(165)	1住		
255	(4.7)	5.6	4.3	(152)	8住		
256	8.7	6.0	3.4	260	131住		
257	11.0	7.0	4.6	495	土塚165		
258	9.3	6.3	3.6	335			
259	-2	10.0	6.3	3.7	375	38住	
260		9.3	6.7	4.3	485	80住	
261		7.0	5.0	3.7	170	96住	
262		10.7	7.0	4.5	495	96住	
263		10.7	6.5	5.0	515	108住	
264		10.0	6.3	4.0	435	38住	

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
VI-265		13.0	7.4	4.8	835		
266		11.0	8.3	5.2	745		
267		9.8	6.3	3.9	360	38住	
268		11.3	7.4	3.5	435		
269		8.2	6.2	4.2	324	58住	
270	278-3	11.1	7.0	4.4	480	86住	花崗

凹石③

No.	図番号	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土地点	備考
VI-271		11.5	7.1	3.0	338	64住	
272		14.7	7.4	3.9	585	81住	
273		10.5	(6.5)	4.0	(375)	土塚130	
274		(8.2)	7.6	4.0	(340)		
275		11.2	6.7	5.5	(490)	56住	
276		(6.5)	7.2	3.8	(295)		
277		(5.8)	5.8	3.4	(163)	38住	
278		(8.0)	6.5	4.5	390	16住	半折
279		11.9	8.1	3.6	360	47住	
280		12.4	7.3	3.9	495	土塚41	
281		10.7	5.3	3.8	385	土塚23	
282		(9.3)	6.6	5.5	445	土塚23	半折
283		(7.3)	7.7	4.5	440	竪穴1	半折
284		(9.0)	6.7	3.9	340	土塚123	半折
VII-285		8.8	6.7	2.7	167		閃緑
286		(12.0)	9.6	3.6	588		磨石斧
287		(9.5)	(5.7)	3.2	350	26住	
288		7.8	9.2	3.4	285	27住	
289		11.5	10.6	5.5	962		
290		11.9	5.6	4.1	385	119住	砥石?
291		10.3	3.4	1.2	60		刃器?
292		21.5	19.0	10.0	4150		緑泥片
293	-2	15.0	(7.7)	8.1	1160	49住	半折
294	-3	11.4	10.7	5.8	520		
295	-4	9.7	9.0	7.1	880	土塚83	
296	-5	9.1	7.9	3.5	270		
297	-6	6.9	6.1	3.8	190		
298	-7	7.4	6.6	3.4	195	土塚25	
299	-8	5.9	5.0	2.6	45		
300	-9	4.6	4.0	3.0	65	38住	
301	-10	13.3	(9.8)	6.3	810		
302	-11	11.8	(9.3)	4.2	500	64住	

別表5 十二ノ后遺跡出土土器片錘ならびに土製円板一覧

No	図番号	長さ		厚さ mm	重さ g	形態	土器型式	出土地点
		長軸mm	短軸mm					
1	282-1	22	—	4.5	3.1	I A	?	1住
2	—2	51	32	12	29.7	III B	前期	〃
3	—3	39	34	9.5	23.2	II A b	後期?	26住
4	—4	35	28.5	9	12.0	I B	後期(堀之内)	〃
5	—5	48	36	8.5	15.0	I B	?	37住
6	—6	48	18	8.5	11.9	III A a	?	38住
7	—7	(33)	23.5	5	(6.6)	III A a	後期(堀之内)	〃
8	—8	28	20	6.5	6.0	III A a	後期(堀之内)	〃
9	—9	28	12	7	3.3	III A a	後期?	〃
10	—10	(20)	17	7	(3.9)	III A b	後期?(1/2欠)	〃
11	—11	46	39	9.5	22.9	II B	前期	46住
12	—12	22	15.5	7.5	4.8	III A b	?	73住
13	—13	62	19	7.5	9.7	III A a	後期?	〃
14	—14	(41)	18	7.5	(8.2)	III A a	?(1/2欠)	〃
15	—15	44	30	8.5	17.9	III A a	後期	81住
16	—16	49	37	8	23.7	II A	中期?	100住
17	283-1	35	25	6	7.0	I B	?	137住
18	—2	65	56	12	58.1	I B	後期(堀之内)	〃
19	—3	56	35	9	20.4	I B	中期?	〃
No	図番号	長軸mm	短軸mm	厚さ mm	重さ g	形態	土器型式	出土地点
20	283-4	51	45	10	24.1	I B	後期?	140住
21	—5	49	30	7.5	16.0	III A a	後期(堀之内)	〃
22	—6	34	21	7.5	8.3	III A a	後期(堀之内)	土塚45
23	—7	50.4	44	12	28.7	I B	?	土塚83
24	—8	32	17.5	6	5.6	III A a	後期?	土塚138
25	—9	37	17.5	6	5.3	III A a	後期?	土塚187
26	—10	66	21	6.5	11.2	III B	後期?	その他
27	—11	39.5	37	8	14.9	I B	?	〃
28	—12	32	—	10	12.2	I A	?	〃
29	284-1	43.5	42.5	7.5	17.1	I B	後期(堀之内)	〃
30	—2	41	21	10	13.7	III A a	?	〃
31	—3	39.5	23.5	7	7.8	III A a	後期	〃
32	—4	47.5	33.5	9.5	21.7	III A b	後期	〃
33	—5	(37.5)	16.5	7	(5.5)	III A a	?	〃
34	—6	49.5	20	10.5	12.6	III B	後期	〃
35	—7	37.5	20	5	4.4	III A a	後期?	〃
36	—8	51	46	9	26.1	I B	?	〃
37	—9	42	39	8	17.5	I B	前期(諸磯)	〃
38	—10	27	23.5	7	4.5	I B	?	〃
39	—11	37	15	6	2.5	III A a	後期(堀之内)	〃
40	—12	38	21	6	6.4	III A a	後期	〃
41	—13	(31)	21	9.5	(8.9)	III A a	後期	〃
42	—14	59	15	10	(15.4)	III A b	?	〃
43	—	51	22	12	13.7	III B	前期	93住

別表6 十二ノ后遺跡出土古墳時代以降土器法量一覽 (備考欄の数字は全器形の推定残存量を示す。()内は灰細陶器の所属編年を示す(植崎彰一氏教示))

出土地点	図番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高指数	備考	
48 住	174-1	H	坏A II	10.0	5.0			1/2	
	2	"	坏D	11.0	3.2			1/2	
	4	"	坏G II b ₂	11.8	3.2			1/4	
	5	"	"	11.8	3.4			1/4	
	6	"	"	11.8				1/4	
	7	"	鉢D I d ₃	21.2				1/4	
	9	S	埴	12.2	5.2			完	
	116 住	10	H	坏D I b ₂	5.8	2.1			1/2
		11	"	坏G II b ₃	6.8	2.1			"
12		"	"	6.4	2.0			"	
13		"	"	6.9	1.3			1/4	
14		"	"	5.3	1.5			1/4	
15		"	坏G I b ₃	8.8	3.0			1/2	
16		"	小形甕?	6.4				1/4	
18		"	壺A II	8.4				"	
19		"	甕	10.2				"	
20		"	"	16.0				"	
21		"	"	26.3				"	
包含層	22	H	坏D II b ₃	12.8	4.0			1/2	
	23	K o	坏D I	16.2				1/4	
	24	H	坏G II b ₃	13.8	3.6			1/4	
	25	"	"	12.2				1/4	
	26	"	"	12.2	3.0			1/4	
	27	"	"	12.8				1/4	
	28	S	坏	10.0	3.0			1/4	
82 住	175-1	H	坏G II b ₃					完	
	2	"	坏G II b ₂					完	
	3	"	"					完	
	4	"	坏H I b ₃					"	
	5	"	甕B c ₂	12.5	8.2	7.1		完	
	6	"	"	15.8	9.3			1/4	
	7	"	小形壺A a ₄	10.0	8.1			1/4	
	8	K o	高坏B					1/4	
	9	"	高坏A					1/4	
	10	"	"					1/4	
	11	H	鉢C b ₃	21.8	8.0			1/4	
	12	"	小形甕	12.0	9.1			"	
	13	"	壺A II					1/4	
	14	"	甕A					"	
	15	"	甕A I					1/4	
128 住	176-1	"	坏D d ₃	10.8				1/4	
	2	"	坏C c ₂	10.0	4.5			完	
	3	"	坏G II b ₂	14.2	4.0			1/4	
	4	"	小形壺C b ₃	14.0				1/4	
	5	"	"	10.6	9.0			1/4	
	6	"	小形甕A	11.8				1/4	
	7	"	甕B b ₃	17.0				1/4	
	8	"	甕	26.6	34.0			1/4	
85 住	176-9	H	小形甕A I	17.7				1/4	
	10	"	甕A b ₃	24.0	24.0			7.6	
	包含層	11	S	埴(?)	10.2				
		12	"	坏	10.6				1/4
		13	"	器台	18.9				
	7 住	177-1	H	坏C c ₂	12.6	4.5			完
		2	"	坏G II b ₃	12.3	4.0			"
		3	K o	"	12.0				1/4
		4	H	手捏ね坏A I	8.5	3.7			完
		5	K o	高坏A	16.8				1/4
		6	H	甕A I	12.8				9.2
	14 住	7	"	坏G II	10.6	3.9			完
		8	"	鉢B b ₃	16.6	12.4			1/4
		9	"	小形甕B	16.4				1/4
10		"	甕A I					9.3	
11		"	小形甕A I	15.2				1/4	
12		"	小形甕A II	13.4				1/4	
13		"	甕	17.2				1/4	
9 住	178-1	"	坏G II b ₃	14.4	3.1			1/4	
	2	"	"	12.5	3.5			1/4	
	3	"	壺A II	19.3				1/4	
	4	"	小形甕"	12.6				1/4	
13 住	5	"	甕A					1/4	
	6	"	"	20.8				"	
	7	"	坏G II b ₃	11.8	4.0			1/4	
	8	"	甕A II	19.8	30.8	8.2		"	
	9	"	小形甕A I	14.4	21.0	7.8		"	
	10	"	"	15.0	18.6	8.0		1/4	
31 32 住	179-1	S	坏A a ₁					へり記号	
	2	"	坏A II a ₁	13.2	4.0	8.0	30.3	略完	
	3	"	"	12.0				1/4	
	5	"	蓋A III	11.2				1/4	
	6	"	蓋B I	16.2				略完	
	8	"	鉢(?)	14.0				1/4	
	9	H	甕A	17.5				1/4	
	10	"	"	21.6				1/4	
	11	"	" B	14.2				1/4	
	13	"	高坏					9.8	
	14	"	"					"	
	44 住	16	H	坏A I	16.2				1/4
		18	H	甕A	22.0				1/4
	77 住	19	S	高坏(?)	9.6				1/4

出土地点	図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数	備考	
77 住	179-20	H	小形甕A III	11.0				1/8	
	21	H	壺	14.7				1/8	
包含層	22	S	腺					1/4	
	23	S	鉢			10.0		1/4	
114 住	180-1	S	鉢	25.8	10.0	8.8		1/8	
	2	"	蓋A III	9.8	2.2			1/8	
	3	"	"	5.7	3.4			1/4	
	4	"	坏A III a ₃	9.6	3.2			1/8	
	5	H	坏A II	15.1	8.6			1/8	
	6	S	坏A a ₁			5.2		略存	
	8	H	小形甕A III	10.0				1/8	
	10	"	甕C	24.8				1/4	
	133 住	11	K o	坏A I	16.4	7.0			1/8
		12	H	甕A	15.0				1/4
14		"	甕F	12.8				1/4	
15		S	蓋	10.0				1/4	
17		"	横瓶					1/8	
18		H	甕A	21.8				1/8	
142 住	181-1	K o	坏A II	13.8				1/8	
	2	H	"	13.1	3.8			1/8	
	3	H	"	12.4				1/8	
	4	S	"	12.8				1/8	
	6	"	坏A III	8.0				1/4	
	7	"	坏B II	12.7	7.5	10.0		1/8	
	8	"	蓋	10.9	3.3			1/8	
	10	H	甕F	30.1		5.0		1/8	
	11	"	高坏		8.5				
	12	S	" 脚					略存	
	13	"	蓋B II	15.0	3.5			1/8	
	14	H	甕A	16.3				1/4	
	15	"	甕F	17.2					
	17	S	短頸壺	11.5					
	包含層	18	S	蓋A II	12.4				1/8
		19	"	坏(?)	7.8				
		20	"	短頸壺					1/4
21		"	坏B I	16.2	3.9	7.9		1/8	
4 住		182-1	K o	坏A II	13.2	4.3			完
	2	"	" b ₃	14.0	5.5	7.6	39.29	1/8	
	3	S	" a ₁	12.7	4.4	7.2	34.65	完	
	4	"	" a ₁	13.3	3.4	8.6	25.56	1/8	
	5	"	" a ₁	14.2				1/8	
	6	"	坏A III a ₃					"	
	7	"	坏A I a ₁	17.0	5.6	12.0	32.94	"	
	8	"	坏B II a ₃	12.0	4.4	8.4		1/8	
	9	H	甕C	23.5				1/8	
	10	"	甕D	27.5				1/8	
	11	"	"	24.8				1/8	
	12	"	"	24.2				1/8	
	13	"	"	22.3				1/8	
	14	"	甕B	23.2				1/8	
	15	"	"	22.0	34.0	7.1		完	

出土地点	図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数	備考	
	182-16	H	小形甕A II	14.0				1/8	
	17	"	小形甕A III	11.5				1/4	
91 住	183-1	S	蓋B I	16.5				1/8	
	2	"	坏A II a ₁	14.7	4.2	12.8		1/8	
	3	"	坏A III "	10.8	4.5			1/4	
	4	H	小形甕A I	16.3				1/8	
	5	"	甕D	24.3				1/8	
	6	"	"	18.5				1/8	
117 住	7	S	広口鉢	21.1				1/4	
	8	"	坏A II a ₁	13.1	5.1	7.5	38.9	1/8	
	9	"	坏A II	12.5				1/8	
	10	"	坏A II a ₃	13.1	5.2	7.1		1/8	
	12	H	甕D	14.2		7.6		1/8	
126 住	13	K o	坏A III	11.9				1/8	
	14	S	蓋B II	12.8	2.8			1/8	
	15	H	短頸壺	15.8					
	16	"	甕A	19.1				1/8	
	17	"	小形甕	13.5					
	18	"	壺	18.4					
	30 住	184-1	"	坏A			7.6		1/4
		2	"	坏A II	12.6				"
5		S	坏A a ₁	6.4				1/8	
7		"	蓋	12.2					
8		"	蓋A III	10.4				1/8	
9		"	"	9.6				1/8	
10		"	蓋B II	14.8	2.9			完	
11		"	"	15.3	3.6			"	
12		"	"	15.5				1/8	
13		"	蓋B I	16.5				1/8	
14		"	蓋B II					"	
15		"	"	15.0	3.6			完	
16		"	"	15.3				1/8	
17		"	"	15.6	3.8			略完	
18		"	蓋B I	16.1	3.7			完	
19		"	蓋B II	14.0				1/8	
20		"	坏C II a ₂	13.2	3.5	5.8	26.5	1/8	
21		"	坏B a ₃					1/8	
22	"	坏B a ₂					"		
23	"	坏B II	15.0				"		
25	H	甕B	20.2				1/4		
26	"	甕D	22.6				1/8		
27	"	"	17.5				"		
28	K	壺(?)	11.0						
29	"	蓋C	14.0						
30	"	多口嘴瓶?	5.6				0-10		
31	"	"	5.3				1/8		
35 住	185-1	H	坏E I b ₃ b ₄	13.2	5.1	9.1	38.6	1/8	
	2	"	"	13.3	5.4	8.5	40.6	1/8	
	3	"	坏E II b ₃ b ₄	12.6				1/8	
	6	K o	坏C II a ₂	13.3	4.1	5.4	30.8	1/8	
	7	S	"	13.5	3.5		25.9	1/8	
	8	"	"	12.3	3.9	6.3	31.7	1/8	

出土地点	图番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高指数	備考				
35 住	185-9	S	坏C II	13.6	2.6	4.3		1/8				
	10	"	坏B III	11.0				1/8				
	11	"	蓋B II	15.5				1/4				
	12	H	小形皿 a ₂	9.3				完存				
	14	S	坏B I	18.0				1/4				
	15	"	坏B II	13.1				1/8				
	16	"	長頸壺					11.3	1/8			
	17	H	甗D	21.9								
	18	"	"	22.6						1/8		
	21	S	甗	16.4								
	22	"	"	14.4								
	23	"	長頸壺(?)					10.6		N-32		
57 住	24	H	坏E III b ₃ b ₄	10.3	2.3			1/8				
	25	"	"	10.4				1/8				
	26	S	短頸壺	14.0				1/2				
	27	"	坏II	13.4				1/4				
	28	"	"	12.6				1/8				
	29	"	坏A III	8.3				"				
	30	"	蓋D	11.1				1/8				
	31	"	短頸壺	9.5								
	32	"	坏B II	14.1				1/4				
	33	"	蓋B I	16.0				"				
	34	"	蓋B II	13.3				1/3				
	35	"	"	13.4				1/2				
36	"	"		"								
123 住	186-1	H	坏E b ₃ b ₄	11.8	4.7	7.8	39.8	1/8				
	2	"	坏E II "					13.1	1/4			
	4	S	蓋B II					11.1	3.7	7.9	33.3	1/4
	5	"	坏B II a ₃					10.5	3.8	7.3	36.1	1/8
	6	"	坏B II					10.5	3.8	7.3	36.1	1/8
	7	H	甗D					15.0				1/8
	8	"	甗F					12.2				1/8
76 住	9	H	坏E II a ₂ b ₃	11.8	4.4	7.0	37.2	完				
	10	"	坏D II	15.0				1/8				
	11	"	坏C II	13.5	3.8	8.2	28.1	1/3				
	12	"	坏C II a ₂	14.9	3.9	7.8	26.1	1/8				
	13	K o	皿B II a ₂	11.7	2.6	5.4		1/2				
	14	"	坏C II	14.5				1/8				
	15	"	" a ₂	13.5	4.1	6.6	30.3	1/8				
	16	"	" a ₂ a ₃	13.1	4.4	6.3	33.5	完				
	17	S	" a ₂	15.5	5.0	9.2	32.2	1/8				
	18	"	坏C II	14.1				1/8				
	19	"	坏B II	14.8				1/8				
	20	H	甗F	15.5				1/8				
	21	"	小形甗	9.0				1/8				
	23	S	蓋B I	17.0				1/10				
	24	H	甗C	27.1				1/8				
	25	S	甗	42.2				1/4				
78 住	187-1	K o	埴A I a ₂ a ₃	17.0	7.6	6.4	44.0	完存				
	2	S	甗	12.2								
	4	"	蓋B I	17.3	4.2			1/8				
	5	"	"	17.1				1/10				
	7	"	坏C II a ₂	12.6	4.0	6.4	31.7	1/8				

出土地点	图番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高指数	備考			
84 住	187-8	S	短頸壺	8.2	4.0	6.3	30.7	1/8			
	9	"	坏C II a ₂	13.0				1/2			
	10	H	小形甗 A	16.7				18.6	9.2	完	
105 住	11	K o	坏A II	13.6	4.0	8.6	27.4	1/8			
	12	S	坏A II a ₃	14.6				1/2			
	14	"	坏C II a ₂	13.5				4.0	7.4	30.0	完
	15	"	"	13.4							1/8
	17	"	蓋B I	16.4				3.0			1/8
	18	"	"	18.9							1/8
	22	"	甗	44.4							1/8
55 住	188-1	H	坏E II	11.0	4.4	5.9	30.3	1/8			
	2	K o	坏C II a ₂	14.5				1/8			
	3	H	甗C	22.0							
79 住	4	H	坏E II a ₂ b ₃	11.2	4.4	6.1	39.2	1/2			
	5	K o	坏C II a ₂	12.5	4.0	5.5	32.0	完			
	6	S	"	11.2	3.9	5.3	34.8	1/2			
94 住	7	H	坏E II b ₃					1/8			
	9	S	坏C II a ₂	11.5	3.0	4.9	26.0	1/2			
	10	S	長頸瓶	7.5				1/8			
51 住	11	H	坏E II	11.8	4.3	5.0	39.8	1/8			
	12	"	坏E III b ₃	10.8				1/2			
	13	"	坏E III	9.8							1/8
	15	"	坏E b ₃					4.2			1/8
	16	S	坏C II	14.1							1/8
103 住	17	"	坏B II a ₂ a ₃	12.8	4.4	9.0		1/4			
	20	K o	坏C III	11.2				1/8			
	21	S	" II	12.6	3.8	6.7	33.3	1/8			
	22	"	" II a ₁	11.4				1/4			
23	"	坏B a ₃		8.0						1/8	
130 住	24	"	坏C II	12.9				1/8			
	25	H	坏E II	11.0				1/8			
	26	S	坏C II a ₂	12.8	4.3	6.0	33.5	1/2			
40 住	189-1	H	坏E II b ₃ b ₄	11.3				1/8			
	2	K o	坏C II a ₂ b ₃	12.1				1/8			
	3	"	坏C II	13.0				1/4			
	4	"	"	12.4				1/8			
	5	S	坏A III a ₁	11.1	3.9	7.0	35.1	1/8			
	7	"	坏C II a ₂	13.4	3.5	7.3	26.1	1/8			
	8	"	"	13.0	3.6	7.0	27.6	1/8			
	10	"	坏B III	11.8				1/8			
	12	"	長頸瓶	7.6				1/10-10			
	13	"	坏B IV a ₂	15.1	6.4	9.2		1/8			
	14	"	"	16.7	7.5	9.7		1/4			
	15	"	"	16.1				1/8			
	18	"	蓋B I	18.2				"			
	19	"	"	17.1				"			
	20	"	蓋B II	15.8				1/8			
21	"	埴(?)	18.8				1/8				
22	"	高环(?)	14.2				1/2				

出土地点	图番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数	備考	
43	200-9	S	环C	15.1				1/5	
	11	"	环Ca ₂	13.7		5.8		"	
	12	"	环C	14.2				"	
	13	"	环Ba ₂			10.8		1/2	
	14	"	"			9.0		1/3	
	15	"	环B II	15.7				1/10	
	16	H	小形甕B II	13.5		5.8		"	
	19	K	碗A I	18.1				1/40-90	
	20	S	長頸壺	7.7				"	
	23	"	甕	32.8				"	
24	"	"	49.8				"		
71	201-1	H	环D IIa ₂	12.8	3.6	5.7	28.1	1/5	
	2	ko	环C "	12.8				1/4	
	3	"	环C I	16.0				1/5	
	4	"	皿Ba ₂			7.3		1/5	
	5	H	小形甕B III	11.7				1/6	
	6	S	环Ba ₂			8.3		"	
	124	7	H	环D IIa ₂	15.0	4.5	7.1	30.0	1/2
8		"	"	13.4	4.3	4.7	32.0	1/3	
9		"	环A III	11.3	3.5	4.0	30.9	"	
10		"	环B II	15.6				1/5	
11		ko	碗A IIa ₂	13.0	5.0	7.0	38.4	1/4	
12		"	环C IIa ₂	13.4	5.3	5.6	39.1	1/2	
13		"	环C II	12.7				"	
14		"	环Ca ₂			7.1		1/5	
15		"	环C II	13.3				1/5	
16		S	"	13.1				"	
17		"	"	13.0				1/6	
18		ko	环B IIa ₂	14.4	5.0	7.0		1/4	
19		"	皿B III	11.9				1/5	
20		S	环C II	13.9	4.0	5.9	28.7	1/5	
21		"	"	12.7	3.9	5.3	30.7	1/5	
22		"	"	12.8				1/5	
23		"	"	13.7				1/6	
24		"	环B II	14.0				1/4	
25		"	" a ₂	12.4	3.5	8.3		1/5	
26		H	甕F	14.5				1/6	
27		"	小形甕B I	16.9				1/5	
28		"	"	16.1				1/4	
120		202-1	H	甕E	27.0				1/5
		2	"	"	22.5	23.8	10.8		"
		3	K	碗A I	17.2				K-90
		4	"	" Aa ₃			9.1		"
		5	H	环D IIa ₂	13.0	3.8	5.3		略完
129		6	S	环C "	13.5	3.8	7.1	28.1	1/5
	7	K	碗A I	16.9		7.3		1/40-53	
	8	"	碗Aa ₃					1/50-53	
134	9	"	"		7.4		1/40-53		
54	10	S	蓋B II	15.4				1/4	
	11	"	环	11.2				"	

出土地点	图番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数	備考	
54	202-12	"	环C	6.1				1/4	
70	13	H	甕F	23.1				1/6	
	14	ko	环C IIIa ₂	11.6	2.8	5.0	24.1	略完	
	15	S	环Ca ₂		6.1			1/6	
72	16	ko	环C IIa ₂	13.6	5.3	5.8	38.9	1/4	
	17	"	"	12.5				1/6	
	18	"	"	13.0	3.6	6.0	27.6	略完	
	19	"	环B		6.1			1/4	
	20	"	环C IIa ₂	12.6	3.7	5.3	29.3	1/5	
	21	"	"	12.6	3.7	6.0	29.3	1/4	
	22	"	"	13.2	3.4	5.0	25.7	1/6	
	26	K	碗A Ia ₃	16.0	4.8	8.5		1/5	
	27	"	碗A II "	15.1	5.5	6.4		"	
	28	"	皿Aa ₃			7.1		1/4	
	203-1	2	H	环D IIa ₂	13.0	3.5	5.3	26.9	完
3		"	环B IIa ₂	15.0	4.9	6.8		"	
4		"	"	15.3				1/2	
3		ko	环C IIa ₂	12.6	4.8	7.2		略完	
5		ko	环C IIa ₂	13.8	3.6	5.6	26.0	1/5	
6		"	"	13.0	3.2	5.8	24.6	1/2	
7		"	"	12.6	3.0	5.6	23.8	完	
8		"	环B II	15.9				"	
9		"	环B IIa ₅	14.3	5.2	17.0		1/5	
10		"	"	14.3	4.1	8.1		"	
11		K	碗A I	16.2				"	
12		"	"	16.7				"	
13		"	碗A IIa ₃	15.7	4.8	7.0	30.5	完	
14		"	碗A II	15.4				1/4	
15		"	碗Aa ₃			7.5		1/5	
16		"	碗A IIa ₃	13.0	4.8	6.6		"	
17		"	碗a ₂			7.2		"	
19		"	皿A IIa ₃	13.4	3.0	6.6		略完	
20		"	"	12.9	3.1	6.1		1/2	
21		"	"	13.2	3.0	6.3		"	
22		"	皿A II	13.6				1/5	
23		"	"	12.6				1/4	
24		"	" a ₃			7.0		"	
25		"	長頸瓶	10.7				1/5	
26		"	"					1/4	
204-1		ko	环C Ia ₂	16.7	6.1	5.5	36.5		完
		2	"	环C II "	13.6	4.2	6.4		略完
	3	"	环C II	13.1				1/5	
	4	"	"	13.3				1/10	
	5	"	"	12.5				1/6	
	6	"	环C IIa ₂	12.7	3.8	5.3	29.9	1/5	
	7	"	环C II	13.2				1/6	
	8	"	"	13.0				1/5	
	9	"	"	14.0				"	
	10	H	环D IIa ₂	12.5	3.8	6.1	30.4	1/5	
	11	"	环D II	13.6				1/4	
	12	S	長頸壺			8.5		1/5	
	13	"	"			12.9		1/4	

出土地点	図番号	種別	器 種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高 指数	備考	
41	204-14	S	甗	13.2				1/2	
	15	K	碗A _{a2}			9.7		1/2	
	16	"	"			9.2		"	
	17	H	小形甗C II	13.2				1/2	
	19	"	小形甗C III	9.2				1/2	
	20	"	甗 D	21.8				1/2	
	21	"	"	20.8				1/2	
	22	"	"	15.8				1/2	
	23	"	小形甗A II	14.0				1/2	
	24	"	"	13.0				1/2	
	25	"	"	13.3				1/2	
	26	"	小形甗A III	11.6				1/2	
	27	K	皿B III	11.6				1/2	
	28	"	" a ₂	11.6	2.4	6.5		略完	
住	29	"	皿B II	12.3				1/2	
	30	H	小形甗B			7.1		1/2	
	31	"	甗 D	15.4				1/2	
	32	S	甗	12.9				1/2	
	18	205-1	H	坏D I a ₂	16.1	4.0	6.7	24.8	1/2
		2	"	坏D II "	13.5	3.7	6.6	27.4	完
		3	"	坏D II	12.3				以
		4	"	皿B III a ₂	10.3	2.0	4.8		完
		5	S	坏 B			9.8		略存
		6	"	"			4.4		以
		8	K	碗A II	13.1				以
		9	"	碗A a ₂			3.8		以
		29	10	H	皿A III a ₂	10.3	2.1	4.8	
	11		"	坏B a ₂			8.2		以
12	"		"			8.0		"	
13	K o		坏C I	16.2				1/2	
14	"		坏C II	12.0				1/2	
16	S		坏C III	11.5				1/2	
17	K		皿B II a ₃	12.0	2.4	6.2		1/2	
18	"		皿B III	10.6				1/2	
33	19	H	坏D II	13.4				1/2	
	20	"	" a ₂	13.6	3.6	6.5	26.4	1/2	
	21	"	皿B II a ₂	12.0	2.2	5.4		完	
	22	"	坏B II a ₂	15.6	5.0	6.5		以	
	23	"	坏D II	12.3				1/2	
	24	S	壺			4.8		1/2	
	25	K	碗A a ₂			8.2		1/2	
	26	"	碗A II	14.4				1/2	
	27	"	"	14.7				1/2	
	28	"	碗A II a ₂	12.0	5.0	6.0		1/2	
	30	"	碗A a ₃			6.8		1/2	
	31	"	皿A II	14.7				1/2	
	32	"	皿B II a ₃	12.8	2.3	6.6		完	
	33	"	皿B III a ₂	10.8	2.1	5.7		1/2	
	34	206-1	K o	坏C II	12.0				1/2
2		"	坏B II	12.7				1/2	
4		K	碗A II a ₃	14.4	4.7	6.6		1/2	
5		H	皿B II	12.5				1/2	
								1/2	
住	206-6	K	碗A II	14.0				1/2	
	7	"	"	12.2				"	
	9	"	"	15.0				"	
	10	H	甗 D	20.8				1/2	
	11	"	甗 C	17.3				1/2	
	12	"	小形甗A	11.8				"	
	13	S	甗	37.2				1/2	
	住	14	K o	坏C II a ₂	13.0	3.1	6.8	23.8	1/2
		15	S	"	13.0	3.5	5.6	26.9	"
		16	"	坏C	12.8				1/2
		17	"	坏B a ₂			10.6		完形
		18	"	"			6.2		1/2
		19	"	蓋C I	16.0				1/2
20		K	皿B			11.3		1/2	
21		"	皿B II a ₂	10.6	1.9	6.6		完存	
22		"	碗A a ₃			7.1		1/2	
23		"	碗A a ₂			7.2		"	
24		"	長頸瓶	10.4				1/2	
25		"	"	9.3				1/2	
27		H	甗 E	25.8				1/2	
28		"	甗 C	25.6				1/2	
29	"	"	22.0				1/2		
30	S	甗	27.2				1/2		
31	"	広口鉢	28.8				1/2		
フ	207-1	S	蓋A II	14.2				1/2	
	2	"	坏A II	12.3				1/2	
	3	"	坏C II a ₁	13.3	4.0	5.2	30.0	"	
	4	"	" a ₃ b ₄	12.0	3.9	5.2	32.5	完	
	5	"	坏C III a ₁	11.5				1/2	
	6	"	" a ₃	11.5	4.0	4.8	34.7	1/2	
	7	"	短頸壺	8.8				1/2	
	8	"	"			5.0		1/2	
	9	"	"					1/2	
	10	"	蓋C I	18.7				1/2	
	11	"	"	18.6				"	
	12	"	蓋C II	15.8	3.8			1/2	
	13	"	"	15.7	4.0			略完	
	14	"	"	12.8	4.4			完存	
	15	"	坏B II a ₃	12.9				1/2	
	16	"	坏B III a ₂ a ₃	10.5	4.3	7.1		1/2	
	17	"	坏B IV	8.0				1/2	
	18	"	碗	8.5	5.0			1/2	
	19	"	壺					1/2	
	20	"	"	12.3				1/2	
	21	"	疎					1/2	
	22	"	"					1/2	
	23	"	高 坏 台付壺	9.5	7.5	8.7		1/2	
	24	"	フラスコ形瓶			10.0		1/2	
3	208-25	"	長頸壺					1/2	
	26	"	"					1/2	
	27	"	壺	7.1				1/2	
	28	K o	高 坏	9.5	14.8	10.8		1/2	
	29	"	"	16.9				1/2	
	30	S	坏C II	14.7	4.5	8.3	30.6	1/2	

出土地点	図番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高指数	備考
フンド 3	208-31	S	环C II	14.3				1/2
	32	H	环Eb ₃			6.0		1/2
	33	S	甕	21.0				
	34	H	甕 D	20.7				
フンド 2	35	"	环Eb ₃ b ₄			7.0		1/2
	36	S	蓋C II	12.8	3.4			完
	37	"	"	14.4				1/2
	38	"	"	13.8	3.8			完
	39	H	甕 C	19.7				1/2
40	S	甕	20.9				1/2	
フンド 1	41	H	环Eb ₃ b ₄					1/2
	42	Ko	环Ca ₂			7.1		1/2
	43	H	环Eb ₃ b ₄			5.1		"
	44	S	环C IIa ₂	13.8	4.2	7.4	30.4	完
	45	"	"	12.0	3.8	5.7	31.6	1/2
	46	H	手づくね土器	4.3				1/2朱あり
	209-1	K	鳥紐蓋					1/2
	2	HA	皿 B	8.2	1.0			"
	3	"	"	7.4	1.0			1/2
	4	"	"	7.4	1.1			1/2
	5	"	皿 B	7.5	1.0			1/2
	6	"	"	7.7	1.5			1/2
	7	"	"	7.1	1.0			1/2
	8	"	皿 A	11.7	3.2	5.0		"
9	"	"	10.8	3.0	3.3		1/2	
10	"	"	15.1	3.0	7.4		1/2	
11	"	"	13.1	2.9	7.0		1/2	
12	"	"	12.5	2.9	8.0		"	
13	"	"	12.5	2.4	4.8		"	
14	"	皿 B	6.1	1.3	3.4		1/2	
フンド 4	15	HA	皿 C	9.2	2.7	5.1		略完
	16	"	"	8.8	2.5	5.0		"
	17	"	"	8.9	3.0	4.0		"
	18	"	"	8.2	2.9	4.4		1/2
	19	"	"	8.0	2.7	3.3		"
	20	"	"	7.2	1.8	3.0		"
	21	"	皿 D	9.8	1.9	4.8		完
	22	"	"	8.6	1.8	4.5		1/2
	23	"	"	9.2	1.7	4.8		"
	24	"	"	9.2	1.4	4.0		1/2
	25	"	"	8.8	1.6	4.2		"
	26	"	"	8.0	1.8	3.5		"
	27	"	"	9.0	1.9	5.0		"
	28	"	"	8.9	1.8	5.0		"
	29	"	"	10.0	1.9	5.1		"
	30	"	"	9.8	2.1	5.0		完
	31	"	"	9.4	2.0	4.5		1/2
	32	"	"	8.2				1/2
	33	"	皿 A	12.8				1/2
34	"	皿 B	12.5				"	
35	"	皿 D	10.6	2.0	5.8		"	
36	"	环 B	14.1				1/2	
37	"	"	9.8	3.3	4.7		完	

出土地点	図番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高指数	備考
フンド 4	209-38	HA	环 B					1/2
集列石	39	"	内耳鍋	28.8				1/2
	40	"	"	28.5				1/2
	41	"	"	22.2		15.4		1/2
包含層・フンド 4	1	"	"	37.5				1/2
	2	"	"	26.8	15.5	20.4		1/2
	3	"	皿 C				3.8	
	4	"	皿 B	8.0	1.1	4.2		1/2
	5	"	皿 C	8.0	2.0	4.2		完
	6	"	皿 D	8.6	1.6	4.4		完
	7	"	"	10.0	2.0	5.0		完
	8	"	皿 B	7.4	1.2	3.8		1/2
	9	"	"	8.0	1.2	5.0		"
フンド 1	10	SE	埴	16.0				1/2
	11	"	"	15.9				1/2
	12	"	"	13.9				1/2
	13	"	"		6.2			1/2
	14	"	"			5.7		1/2
	15	"	"			4.0		1/2
	16	"	"			5.6		
	17	"	"	10.5				1/2
	18	"	"	10.8				1/2
19	"	"	8.0				1/2	
墓塚 1	210-20	S	蓋C II	13.2				1/2
	21	"	"	13.1				1/2
	22	K	手付水注	3.9				1/2
包含層	1	H	甕 C	26.3	37.0	10.4		完
	2	"	甕 B	22.0				1/2
	3	"	甕 F	19.6				1/2
	4	K	皿 A			7.0		1/2

別表7 十二ノ后遺跡出土鉄製品一覽

No	図番号	出土遺構	出土遺物	備	考	時期
1	285-1	4住	鉄鎌	平根形式変形定角式か	奈平Ⅲ	
2	-2	〃	帯金具	残欠	〃	
3	-3	〃	刀子		〃	
4	-4	5住	紡錘車		奈平Ⅵ	
5	-5	7住	環		古Ⅱ	
6	-6	〃	紡錘車軸		〃	
7	-7	18住	留金具	(角棒状鉄製品)	奈平Ⅹ	
8	-8	13住	〃	(縄文前期住居址)	古Ⅱ	
9	-9	19住	鉄鎌	(縄文中期住居址)	〃	
10	-10	26住	鎌		奈平Ⅳ	
11	-11	30住	〃		奈平Ⅹ	
12	-12	33住	馬具	引き手残欠	奈平Ⅹ	
13	-13	34住	鉄鎌	(鉄状鉄製品)	奈平Ⅵ	
14	-14	51住	刀子		奈平Ⅳ	
15	-15	30住	刀子	平根形式 有基面丸造三角形式	奈平Ⅳ	
16	-16	41住	刀子		奈平Ⅳ	
17	-17	43住	鉄鎌		奈平Ⅳ	
18	-18	〃	刀子		奈平Ⅳ	
19	-19	〃	鉄鎌	平根形式 有基面丸造三角形式	〃	
20	-20	〃	馬具	引き手残欠	〃	
21	-21	〃	鉄鎌	尖根形式	〃	
22	-22	40住	鎌		奈平Ⅵ	
23	-23	55住	刀子	刃部残欠	奈平Ⅴ	
24	286-1	70住	紡錘車		奈平Ⅹ	
25	-2	71住	留金具		奈平Ⅳ	
26	-3	72住	刀子		奈平Ⅳ	
27	-4	85住	〃	フンド4か 85号住の可能性	古Ⅰ	
28	-5	〃	〃	〃	〃	
29	-6	〃	〃	〃	〃	
30	-7	〃	〃	略完存	〃	
31	-8	〃	〃		〃	
32	-9	83住	鉄鎌	有基 両丸造三角形式	奈平Ⅵ	
33	-10	87住	〃	〃	〃	
34	-11	84住	〃	〃	奈平Ⅴ	
35	-12	〃	鎌		奈平Ⅴ	
36	-13	87住	鎌		奈平Ⅵ	
37	-14	〃	?	留金具状のものか	奈平Ⅵ	

No	図番号	出土遺構	出土遺物	備	考	時期
38	286-15	114住	刀子			奈平Ⅰ
39	-16	117住	〃			奈平Ⅲ
40	-17	48住	撃	重量320g		古Ⅰ
41	-18	〃	?	棒状鉄製品		奈平Ⅵ
42	-19	97住	鉄鎌	尖根形式の茎か		〃
43	-20	〃	〃	〃		〃
44	-21	〃	釘	〃		〃
45	-22	〃	〃	〃		〃
46	-23	〃	鉄鎌	〃		〃
47	-24	〃	〃	〃		〃
48	-25	116住	〃	〃		古Ⅰ
49	-26	120住	〃	木工具の可能性 縛で細部不明		奈平Ⅳ
50	-27	126住	〃	有茎雁?形式か		奈平Ⅲ
51	287-1	フンド1	石棒帯	最大幅4.3cm 高さ2.8cm 厚さ0.9cm		
52	-2	〃	〃	最大幅4.5cm 高さ2.9cm 厚さ0.8cm		
53	-3	フンド4	子持勾玉	最大長6.1cm 最大幅4.1cm 厚さ1.2cm		
54	-4	〃	?	釘状のものか?		
55	-5	フンド2	鉄鎌			奈平Ⅵ
56	-6	墓拡1	釘	朱付着 (長さ? 厚さ0.6)		〃
57	-7	〃	〃	(長さ2.6 厚さ0.5)		〃
58	-8	〃	〃	(長さ4.2 厚さ0.4)		〃
59	-9	〃	〃			〃
60	-10	〃	〃			〃
61	-11	〃	〃			〃
62	-12	〃	〃	(長さ4.9 厚さ0.3)		〃
63	-13	〃	〃	(長さ5.2 厚さ0.4)		〃
64	-14	〃	〃	(長さ4.6 厚さ0.4)		〃
65	-15	〃	〃	(長さ4.5 厚さ0.3)		〃
66	-16	〃	〃	(長さ3.3 厚さ0.3)		〃
67	-17	〃	〃	(長さ3.5 厚さ0.4)		〃
68	-18	〃	〃	(長さ3.5 厚さ0.3)		〃
69	-19	〃	〃	(長さ3.3 厚さ0.3)		〃
70	-20	〃	刀子	出土地不明		〃
71	-21	〃	〃	出土状態不明		〃
72	-22	BM-43	帯金具	黒色土層出土		〃
73	-23	BY-51	〃			〃
74	-24	BK-43	鎌			〃

No	図番号	出土遺構	出土遺物	備	考
106	289-3	土壕161	元祐通宝		
107	-4	土壕133	大觀通宝	破片 約1/2	
108	-5	DF-46	寛永通宝	黑色土層出土	
109	-6	BY-51	開元通宝	〃	
110	-7	AU-52	寛永通宝	〃	
111	-8		元祐通宝	〃	
112	-9		開元通宝	耕作土中	
113	-10		太平通宝	黑色土層出土	
114	-11		開元通宝	〃	
115	-12		政和通宝	〃	良好なものである
116	-13		熙寧元宝	〃	
117	-14		開元通宝	〃	
118	-15		大觀通宝	〃	
119	-16	78 住	聖宋元宝	〃	
120	-17	〃	元祐通宝	〃	
121	-18		元豊通宝	黑色土層出土	
122	-19		元豊通宝	〃	
123	-20		祥符元宝	〃	
124	-21		寛永通宝	〃	
125	-22		元祐通宝	出土状態不明	
126	-23		熙寧元宝	〃	
127	-24		寛永通宝	〃	
128	-25		洪武通宝	〃	
129	-26		文久永宝	〃	
130	-27		寛永通宝	〃	
131	-28		〃	〃	
132	-29		〃	〃	
133	-30		開元通宝	〃	
134	-31	BY-51	紹聖元宝	〃	
135	-32		元豊通宝	〃	

No	図番号	出土遺構	出土遺物	備	考
75	287-25	BK-42	紡錘車	黑色土層出土	
76	-26	CS-49	鎌	〃	
77	-27	AM-49	〃	〃	
78	-28		紡錘車軸	出土状態不明	
79	-29	CS-45	〃	黑色土層出土	
80	288-1	BK-45	鉄鎌	平根腸状三角形式 両丸造 篋被ぎ有	
81	-2	AI-44	〃	〃	〃
82	-3	BU-45	〃	〃	五角形式
83	-4	AI-44	〃	尖根三角形式	〃
84	-5	BF-46	〃	平根三角形式	〃
85	-6	AL-44	〃	平根有茎三角形式 両丸造 篋被ぎ有	
86	-7	BM-43	〃	平根有茎五角形式 平造	
87	-8	AJ-47	〃	尖根形式 篋被ぎ 茎部に木質部残存	
88	-9	BK-45	〃	尖根形式 茎部に木質部残存	
89	-10	BW-54	〃	尖根形式 (茎破片)	
90	-11	BY-50	?	尖根有茎片刃箭形式	
91	-12	BY-53	?	尖根形式 (茎破片)	
92	-13		鉄鎌	出土状態不明	
93	-14		〃	〃	尖根形式 (茎破片)
94	-15		〃	〃	〃
95	-16		〃	〃	〃
96	-17		〃	〃	〃
97	-18	ED-43	刀子	黑色土層出土	
98	-19	AK-45	〃	〃	
99	-20		〃	〃	
100	-21	BK-45	〃	出土状態不明	
101	-22	EF-41	〃	黑色土層出土	
102	-23		〃	〃	
103	-24	BL-43	〃	出土状態不明	
104	289-1	土壕145	開元通宝	黑色土層出土	
105	-2	〃	景徳元宝	〃	

別表8 十二ノ后遺跡出土土錘(縄文以外)一覧

No	図番号	高さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損 状態	出土 地点	No	図番号	長さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損 状態	出土 地点
1	291-45	37	12	4	3.95	I C	I	3住フ	50		27	10.5	4.5	(2.5)	I B a	II b	72住フ
2		70	26	5	(38.0)	I A	II b	〃	51		25	12	3.5	(2.8)	〃	〃	74住
3	-46	34.5	13	4	4.6	I C	II a	13住フ	52		30	10	5	(2.1)	〃	〃	〃
4	-47	36	13	4	4.7	〃	〃	〃	53	291-25	36	13.5	4.5	5.9	〃	I	〃
5	-48	37	12	4.5	(3.4)	〃	IV	〃フ	54	-26	47	11.5	4	5.2	〃	〃	〃
6	-69	49	28	9	51.3	II B	I	31住	55		34	12	4.5	3.2	I C	〃	〃
7	290-15	26	11.5	4	(3.4)	I C	II a	43住フ	56	-43	44	10	4	4.0	I B b	〃	〃
8	-16	45.5	11	4	4.2	I B a	I	〃フ	57	-27	41	11	4.5	4.0	I B a	〃	〃
9	-17	42	11	3.5	(4.9)	〃	II a	〃フ	58	-51	37	12.5	4	4.3	I C	〃	76住フ
10		31.5	10	4	(2.9)	〃	〃	〃フ	59		27	11	4.5	(2.5)	I B a	III b	〃
11		21.5	11	4	(2.0)	〃	〃	〃フ	60	-28	42.5	12	5	4.9	〃	I	79住
12		48	11.5	5	5.6	〃	I	48住フ	61		20.5	9	4	(1.4)	〃	II a	〃
13		41	11	4	4.5	〃	II a	〃フ	62	-29	39.5	11.5	4	6.0	〃	I	81住
14		40	11.5	2	4.3	〃	〃	〃フ	63	-52	31.5	11	3	3.0	I C	〃	〃
15	-18	45	11.5	4	4.0	〃	I	53住フ	64		18	6.5	2	(0.8)	I D	II a	〃
16	-19	52.5	10.5	3	5.4	〃	〃	53住ユ	65	-59	29.5	8	3	5.5	〃	I	82住フ
17	-20	48	10	4.5	4.0	〃	〃	〃ヤ	66	-30	41	10.5	4	3.7	I B a	〃	85住
18		40	12	4.5	(4.7)	〃	II b	〃ヤ	67	-31	(41)	12	4	(4.6)	〃	II a	91住フ
19		32	12.5	4.5	(4.5)	〃	III a	〃ヤ	68		33.5	12	4.5	(4.2)	〃	〃	〃フ
20		25	11	3.5	(2.1)	〃	II a	〃ヤ	69		28	11.5	5	(3.0)	I C	〃	92住
21	-21	50	11	4	4.6	〃	I	〃	70		35	12.5	4	(3.7)	I B a	〃	97住
22		38	12.5	3	5.6	I C	II b	〃	71		34	12	5	(4.2)	〃	〃	〃
23	-22	38	10.5	4	(3.1)	I B a	II	〃	72		27	12	5	(2.6)	〃	〃	〃
24		45	25	6	(13.7)	I A	II a	55住フ	73	-32	46.5	10.5	4	4.0	〃	I	99住
25	290-1	77.5	27.5	7	47.5	〃	I	57住ユ	74	-33	39.5	12.5	5	5.0	〃	〃	101住
26	-2	84	28	6	66.0	〃	〃	〃	75	-70	35	21	8.5	(14.8)	II B	II b	〃
27	-3	82	31	6	67.2	〃	〃	〃フ	76		41.5	10.5	4	(4.4)	I B b	〃	105住フ
28	-4	84	25	6	60.5	〃	〃	〃フ	77	-34	41	10	4.5	3.7	I B a	I	109住
29	-5	84	25.5	6	51.4	〃	〃	〃フ	78	-53	34	14.5	4.5	5.0	I C	〃	〃
30	-6	81	27.5	6	62.3	〃	〃	〃フ	79		31	10	5	(2.7)	I B a	III b	〃
31	-7	81.5	27	6	54.0	〃	〃	〃フ	80	-60	20	6.5	1.2	(0.9)	I D	II a	〃
32	-8	56.5	28	5.5	38.7	〃	〃	〃フ	81	-35	39	11.5	5	(3.1)	I B a	III b	114住
33	-9	62	26	5.5	34.3	〃	〃	〃フ	82		38	11.5	5	(4.1)	〃	〃	115住
34		72.5	26	5.5	(28.6)	〃	II b	60住フ	83	-36	38	11	4	4.6	〃	II b	〃ユ
35		36	11.5	4	(2.5)	I B a	II a	71住	84	-54	36	14	4	8.1	I C	I	121住
36	291-57	21	7	3	(0.9)	I D	〃	〃	85	-37	38	11.5	4	4.2	I B a	〃	124住
37	〃-58	16	4.5	2	(0.4)	〃	〃	〃	86	-55	37	12	4.5	4.0	I C	〃	〃
38		33	9.5	5	(4.2)	I B a	〃	〃	87	-56	37	12	3.5	4.5	〃	〃	〃
39	290-23	49.5	13	5	(6.6)	〃	III b	72住フ	88	-38	47.5	15	5.5	7.4	I B a	〃	〃フ
40	291-49	33	12.5	5	4.7	I C	I	〃フ	89	-39	44	13	5	6.3	〃	〃	〃フ
41	-24	43	10.5	4	4.0	I B a	〃	〃フ	90	-40	44	11	4.2	3.7	〃	II b	〃フ
42		33.5	11	5.5	(3.7)	I B b	III b	〃フ	91	-41	48	13	5	(5.4)	〃	III b	〃フ
43	-50	39	14	4.5	(6.1)	I C	II b	〃フ	92		43	11.5	4.5	(5.3)	〃	II a	〃フ
44		33	12	5.5	(3.8)	〃	III b	〃フ	93		35	11.5	4	(4.4)	〃	II b	〃フ
45		34.5	12	6	(3.3)	I B b	II b	〃フ	94		31.5	11.5	4	(3.1)	〃	〃	〃フ
46	-42	34.5	11	4	(3.0)	〃	III b	〃フ	95	-61	23.5	8	2	(1.1)	I D	III b	〃フ
47		41.5	13	4	(5.7)	I B a	II a	〃フ	96	290-10	92	30	6	72.3	I A	I	142住フ
48		33	12.5	4	(5.2)	〃	〃	〃フ	97	-11	82.5	27	6	58.1	〃	〃	〃フ
49		35	17	5	(5.9)	I C	II b	〃フ									

No	図番号	長さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損 状態	出土 地点	No	図番号	長さ (mm)	最大径 (mm)	内径 (mm)	重さ (g)	形態	破損 状態	出土 地点
98	290-12	78	25.5	5	31.3	I A	I	142住フ	135		27	5	1.5	0.4	I D	I	その他
99	-13	61	26	5.5	(32.7)	〃	II b	〃 フ	136	291-65	24.5	5.5	1.5	0.5	〃	〃	〃
100									137	-66	22	5	1.5	0.4	〃	〃	〃
100		29	11	5		I C	I	土壙66	138	-67	20.5	5.5	2	0.4	〃	〃	〃
101	291-44	38	13	3	5.2	〃	〃	土壙133	139		(21)	5.5	1.5	(0.5)	〃	II b	〃
102		40	8	4.5	(2.6)	I B b	II b	〃	140		25	6.5	2.5	0.9	〃	〃	〃
103		37	13	4.5	(5.1)	I B a	〃	土壙141	141		(17)	5	2	(0.6)	〃	II a	〃
104	-62	26.5	5	1.5	0.5	I D	I	土壙157	142		(15)	5.5	2	(0.4)	〃	〃	〃
105		18	6	1.5	(0.5)	〃	II b	土壙162	143	-68	28	5.5	1.5	0.7	〃	I	〃
106	-71	41	20	10	15.1	II A	I	その他	144		23	5	1.5	0.4	〃	〃	〃
107		42.5	(24)	(6.5)	(11.4)	〃	IV	〃	145		33	12.5	5.5	(3.4)	I C	III b	〃
108	-72	37	26	7	(15.5)	〃	〃	〃	146		38	11.5	4	3.2	〃	I	〃
109	-73	37	25.5	(5.5)	(13.4)	〃	〃	〃	147		(29)	12	4	(3.3)	I B a	II b	〃
110	-74	39	24.5	(8.5)	21.5	II B	I	〃	148		(26)	12	4.5	(3.2)	〃	II a	〃
111		41.5	27	(6.5)	(12.8)	II A	IV	〃	149		(32)	13	4	(4.2)	I C	II b	〃
112	-75	35	23.5	6.5	(11.0)	〃	〃	〃	150		(23.5)	13	4.5	(3.3)	I B a	II a	〃
113	-14	63	26	4	(20.0)	I A	〃	〃	151		(30)	12.5	3	(3.8)	I C	II b	〃
114		63	28	10	41.4	〃	I	〃	152		(34)	10	3.5	(3.3)	〃	〃	〃
115		(36)	24	6.5	(10.5)	〃	IV	〃	153		(40)	14	4.5	(5.8)	I B a	II a	〃
116		46	10	3.5	(6.8)	I B a	III b	〃	154		36	11.5	4.5	(4.8)	I C	II b	〃
117		32	10.5	3	2.6	I C	I	〃	155		38	12	5	(4.9)	〃	〃	〃
118		30	8.5	3	3.1	I D	II b	〃	156		47	11.5	4	4.0	I B a	I	〃
119		17	4	1.5	(0.5)	〃	II a	〃	157		(32)	12	4	(4.2)	〃	III b	〃
120		20	5.5	1.5	(0.8)	〃	III b	〃	158		(33)	13.5	5	(5.7)	〃	II a	〃
121		25	10	3.5	(2.2)	I C	〃	〃	159		44	12.5	6	6.0	〃	I	〃
122		(17)	7	2	(0.9)	I D	III a	〃	160		43	13	5.5	5.3	〃	〃	〃
123		(19)	6.5	3	(0.7)	〃	〃	〃	161		(26)	12.5	5	3.4	〃	III b	〃
124		(14.5)	8	3	(0.6)	〃	II a	〃	162		43	12	3	10.0	〃	I	〃
125		(22)	7.5	3	(0.9)	〃	〃	〃	163		50	14	4.5	11.5	〃	〃	〃
126		(29)	8.5	2	(1.7)	〃	II b	〃	164		(13.5)	26	(6)	(3.9)	II A	II b	〃
127		(19)	7	2	(1.0)	〃	III a	〃	165		48	10.5	4.5	(4.7)	I B a	III b	〃
128		(23.5)	7.5	2.5	(1.1)	〃	II a	〃	166		44	15	6	(6.5)	〃	II b	〃
129		(17)	7	3	(0.7)	〃	〃	〃	167		(18)	12	4	(1.7)	〃	III a	48住
130		(17)	5.5	1.5	(0.6)	〃	III b	〃	168		37	13	4.5	4.0	I C	I	76住
131		(30)	8	2	(1.6)	〃	II b	〃	169		38	12.5	4.5	4.7	〃	〃	〃
132		28	7	2.5	0.9	〃	I	〃	170		39	8.5	2.0	2.7	〃	〃	〃
133	-63	29.5	6.5	2	1.2	〃	〃	〃	171		(19)	7	2.0	(0.8)	〃	III b	〃
134	-64	29	7.5	2	1.2	〃	〃	〃									

別表9 十二ノ后遺跡出土縄文土器出土地点一覧

図69	8住フー1, 11住ユ一2・同フー3~7, 12住ユ一8, 15住フー9・10, 16住ユ一12・同フー11・13~15	図95	21住一1~19, 23住一20~29
図70	21住一1, 28住一2, 37住ユ一3~5・同ユ一6~9, 46住一10, 47住ユ一11・同フー12~15, 56住一16~18	図96	24住一1~5, 25住一6~11, 26住一12~16, 27住一17~23
図71	56住一1~7, 64住一8, 66住一9・10	図97	37住一1~10, 38住(1)一11~20
図72	75住ユ一1~3・同フー4, 86住一5~9, 93住ユ一12・同一10・11・13, 96住ユ一14・同フー15, 98住ユ一16	図98	38住(2)一1~24
図73	102住一1, 106住ユ一2・3, 同フー4~6, 111住ユ一7~9, 同フー10, 112住ユ一11~16	図99	38住(3)一1~16
図74	26住埋壘一7・8, 49住一9, 50住ユ一10, 118住ユ一1・2, 同フー3・4, 119住一5, 131住一6	図100	38住(4)一1~19
図75	38住一4, 65住炉一1, 同フー2, 81住ユ一7・8, 同フー9・10, 99住一11・12, 100住一3	図101	39住一1~18
図76	137住一1~3, 3土一4, 5土一5, 66土一6, 173土一7, 175土一8, 外一9~11	図102	46住(1)ユ一1~19, 46住フー20~27
図77	遺構外一1~15	図103	46住(2)フー1~23
図78	38住一3~7, 46住ユ一1, 65住フー2, 81住炉一8, 110住一9, 137住一10~12	図104	47住(1)一1~23
図79	137住一1, 遺構外一2~9	図105	47住(2)一1~18
図80	1住一1~30	図106	47住(3)一1~25
図81	6住ユ一1~3, 8住ユ一4~25	図107	50住一1~11, 52住一12~30
図82	8住ユ一1~21	図108	52住一1~15, 56住一16~24
図83	8住フー1~19	図109	56住一1~20, 58住一22~29, 59住一30~32
図84	10住一1~22	図110	59住一1~15, 61住ユ一16~25, 同フー26~32
図85	11住一1~28	図111	64住(1)ユ一1~14, 同フー15~26
図86	11住一1~7	図112	64住(2)フー1~15, 65住ユ一16~19, 同フー21, 66住ユ一20・22・23
図87	12住一1~26	図113	66住フー1~17, 68住フー18~33, 69住(1)ユ一34~42
図88	15住一1~28	図114	69住(2)一1・2, 73住床面一3~7, 同フー8~37
図89	16住一1~35	図115	74住ユ一1~5, 同フー6~23, 75住(1)ユ一24~34
図90	16住一1~23	図116	75住(2)ユ一1~4, 同フー5~36
図91	16住一1~19	図117	80住フー1~27
図92	17住一1~32	図118	81住一1~27
図93	17住一1~12, 19住一13~31	図119	86住(1)ユ一1~20, 同フー21~30
図94	20住一1~27	図120	86住(2)フー1~12, 88住一13~32
		図121	88住(2)一1~11, 90住ユ一12~17, 92住ユ一18~25, 93住(1)ユ一26~33
		図122	93住(2)ユ一1~6, 同フー7~18, 95住(1)ユ一19~29, 同フー30~35
		図123	95住(2)フー1~11, 96住(1)ユ一12~31
		図124	96住(2)ユ一1~3, 同フー4~19, 98住ユ一20~27, 99住フー28~37

図125	100住-1~7, 102住-8~24		~9, 26±-10, 30±-11, 33±-12~14, 34±-
図126	104住-1~10, 106住(1)-11~22		15·16, 44±-17~24, 104±-25, 107±-26
図127	106住(2)フ-1~22	図149	45±-1~8, 46±-10~12, 47±-13·14, 48±
図128	108住(1)-1~18		-15·16, 49±-17·18, 53±-19·20, 57±-21·
図129	108住(2)フ-1~10, 110住ユ-11~23		22, 101±-23~27, 105±-28~30, 106±-31·
図130	111住-1~16		32
図131	112住(1)ユ-1~22	図150	107±-1, 108±-2, 109±-3~5, 110±-6,
図132	112住(2)フ-1~20		111±-7~13, 112±-14~20, 113±-21·22,
図133	113住-1~22		114±-23·24, 119±-25·26, 120±-27, 121±
図134	118住ユ-1~17, 同フ-18~21		-28·29
図135	119住ユ-1~14, 同フ-15~32	図151	122±-1~3, 123±-4~6, 124±-7~12,
図136	122住ユ-1~20同フ-21~29		125±-13, 127±-14~19, 128±-20~25, 129±
図137	125住-1~10, 127住-11~28		-26~31
図138	131住ユ-1~18, 同フ-19·20	図152	131±-1~8, 134±-9, 136±-10~12, 140±
図139	132住(1)フ-1~20		-13~15, 142±-16·17, 143±-18·19, 146±
図140	132住(2)ユ-1~21		-20~28, 155±-29, 159±-30~33, 160±-34
図141	135住-1~8, 137住-9~19		~36
図142	139住-1~22	図153	160±-1~3, 164±-4, 166±-5~11, 167±
図143	140住-1~10, 141住-11~26		-12~14, 168±-15~21, 169±-22, 170±-23·
図144	竪穴1-1~6, 1号集石-8~13, 同炉-7		24, 171±-25~28, 172±-29·30, 174±-31~
図145	2号集石-1~4, 溝状遺構-5~10, 1±-11~		34
	14, 2±-15, 3±-16~18, 4±-19·20, 6±	図154	174±-1~5, 176±-6~9, 180±-10, 181±
	-21~23, 7±-24~27		-11~13, 186±-14·15, 183±-16, 184±-17,
図146	9±-1~4, 10±-5·6, 11±-7~12, 12±		185±-18·19, 186±-20~22, 187±-23~25,
	-13, 13±-14~17, 15±-18~21, 16±-22, 17		191±-26~28, 174±-29
	±-23·24, 18±-25~27, 19±-28~30, 35±-	図155	128±-1·2, 130±-3~6, 132±-7·8,
	31~35, 36±-36·37, 37±-38, 38±-39		137±-9~12, 138±-13, 139±-14·15, 140±
図147	39±-1~4, 40±-5~7, 41±-8~11, 42±		-16, 148±-17, 149±-18, 150±-19, 153±-
	-12~15, 43±-16, 44±-17~19, 45±-20~24		20, 176±-21, 178±-22
図148	22±-1~3, 23±-4·5, 24±-6, 25±-7		

1:25,000 地形図 NJ-54-36-16-2
みなみおしお

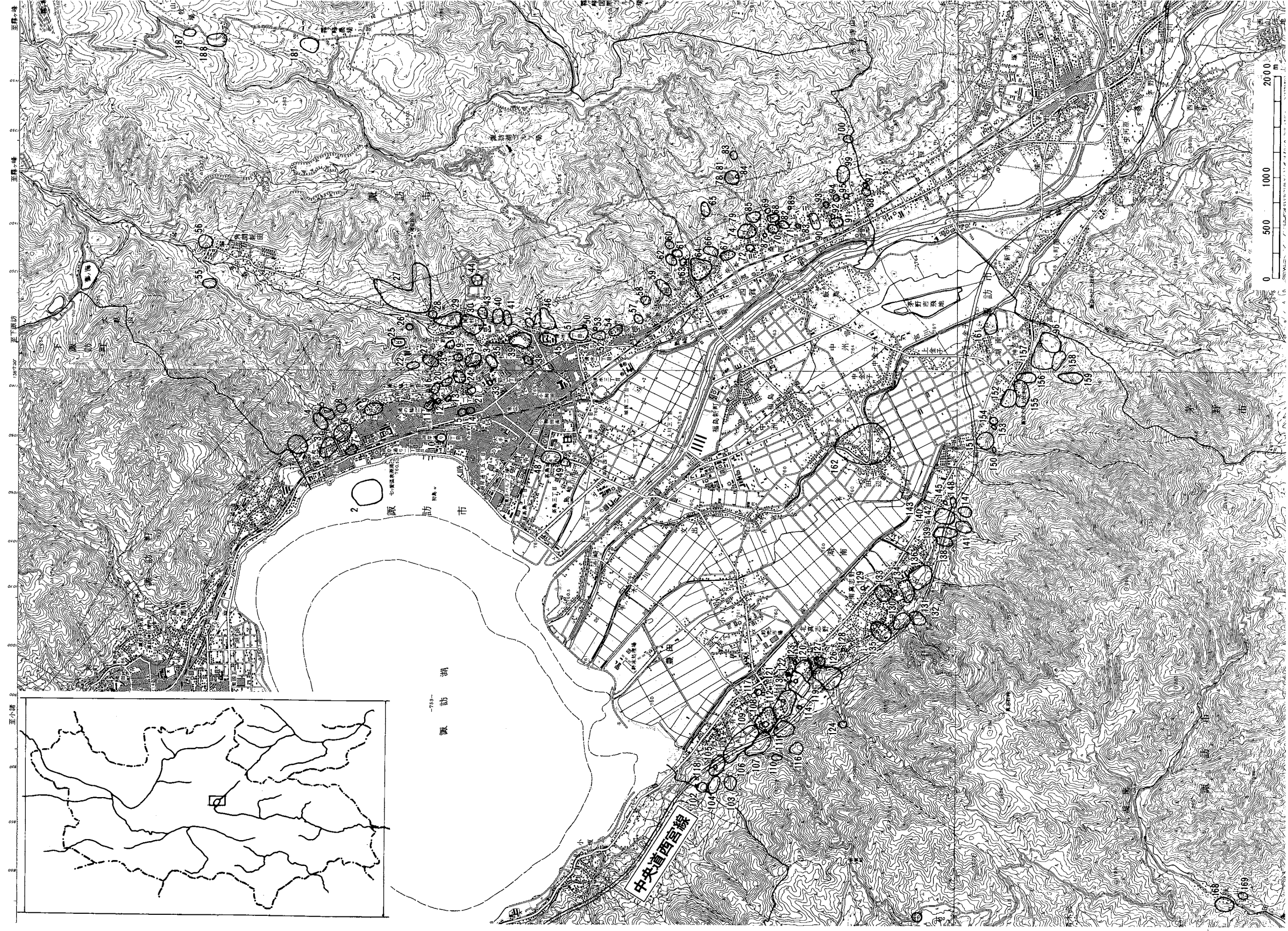


図1 南大池市中央部遺跡分布図 (1:40,000)

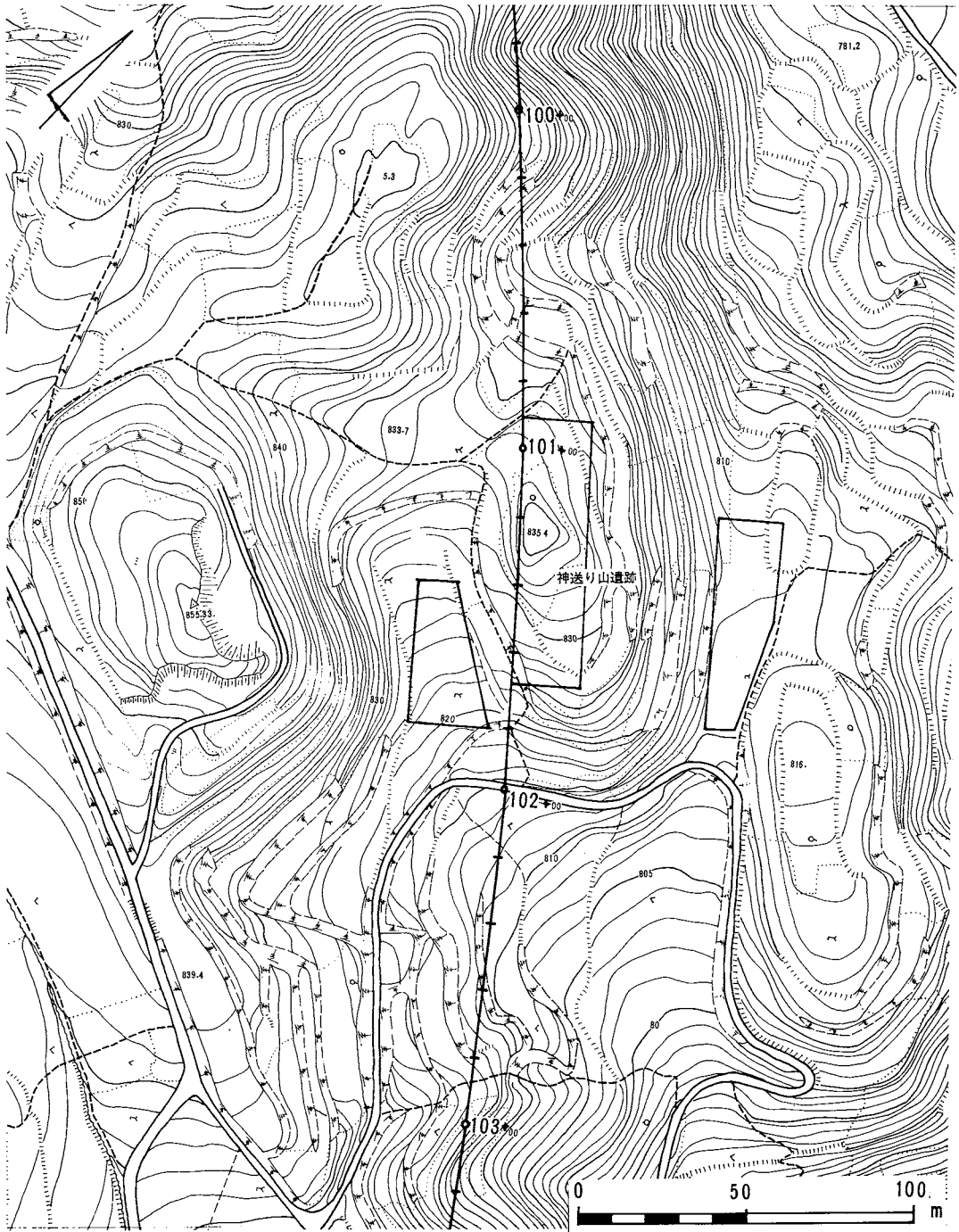


図 2 神送山遺跡付近地形図及び調査範囲図(1 : 2,000)

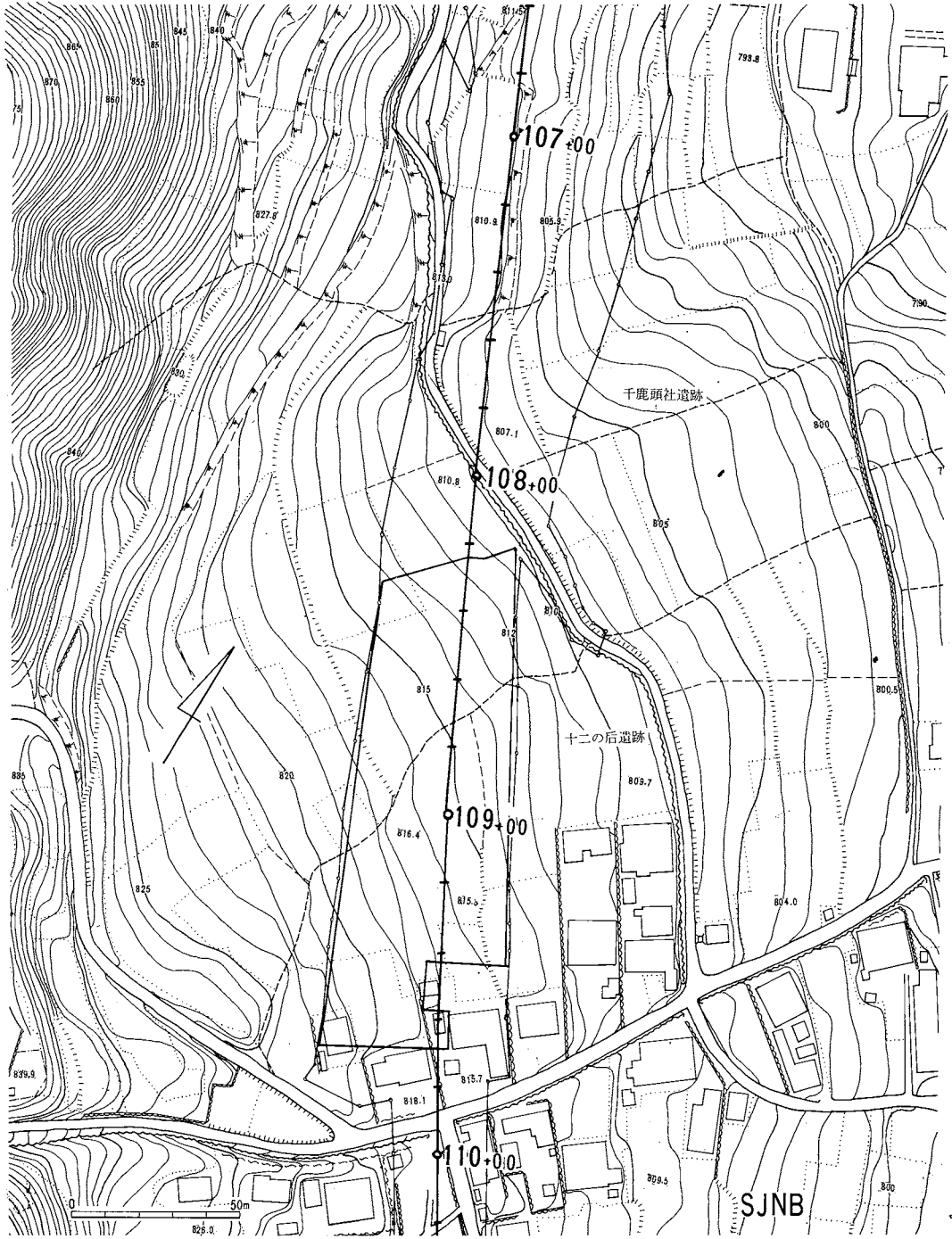


図 3 十二ノ后遺跡付近地形及び調査範囲(1 : 2,000)

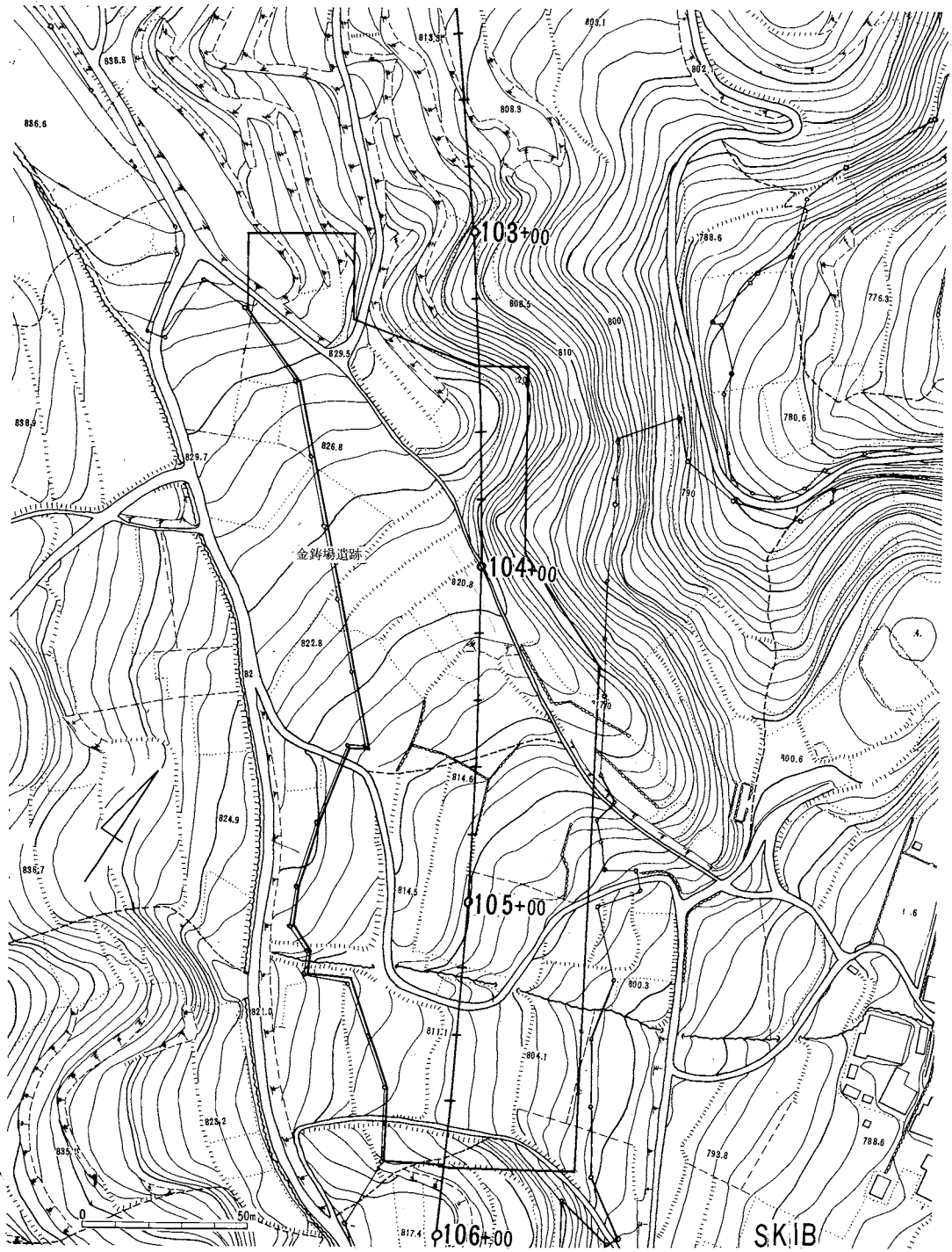
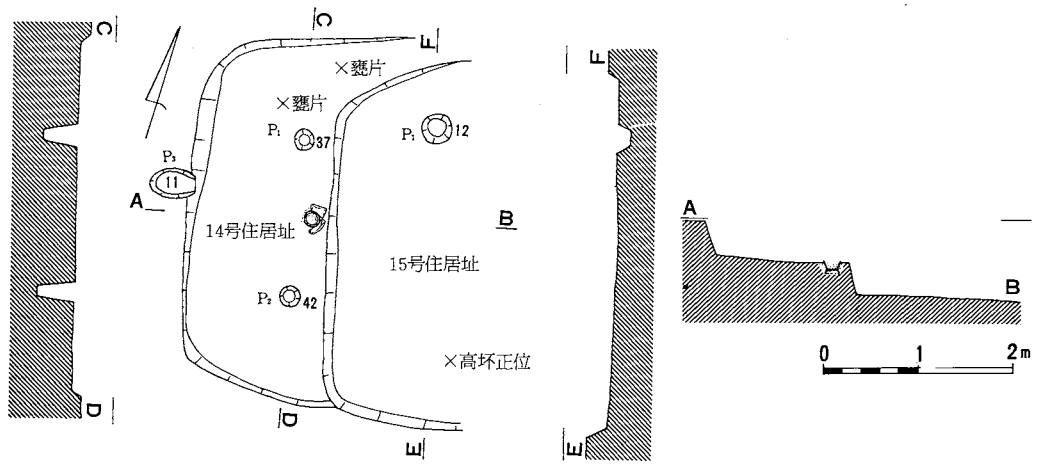


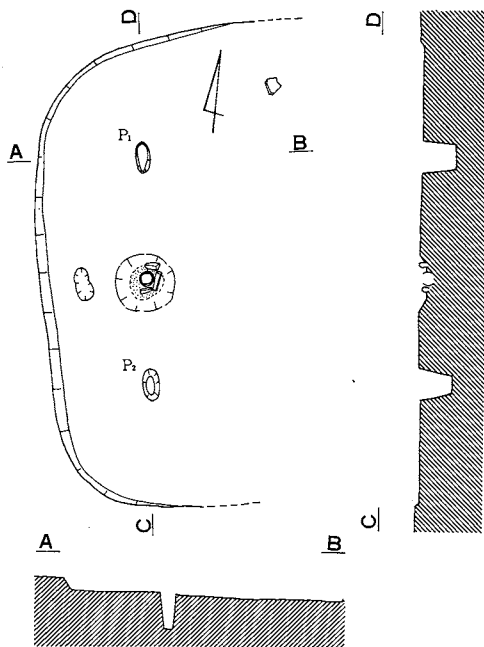
図 4 金铸场遺跡付近地形図及び調査範囲 (1 : 2,000)



図 5 金鑄場遺跡付近遺構全体図(1:800)



1. 14, 15号住居址(1 : 80)



2. 30号住居址(1 : 80)

3. 30号住居址炉(1 : 40)

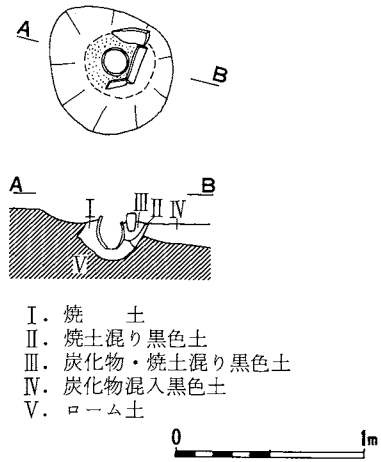
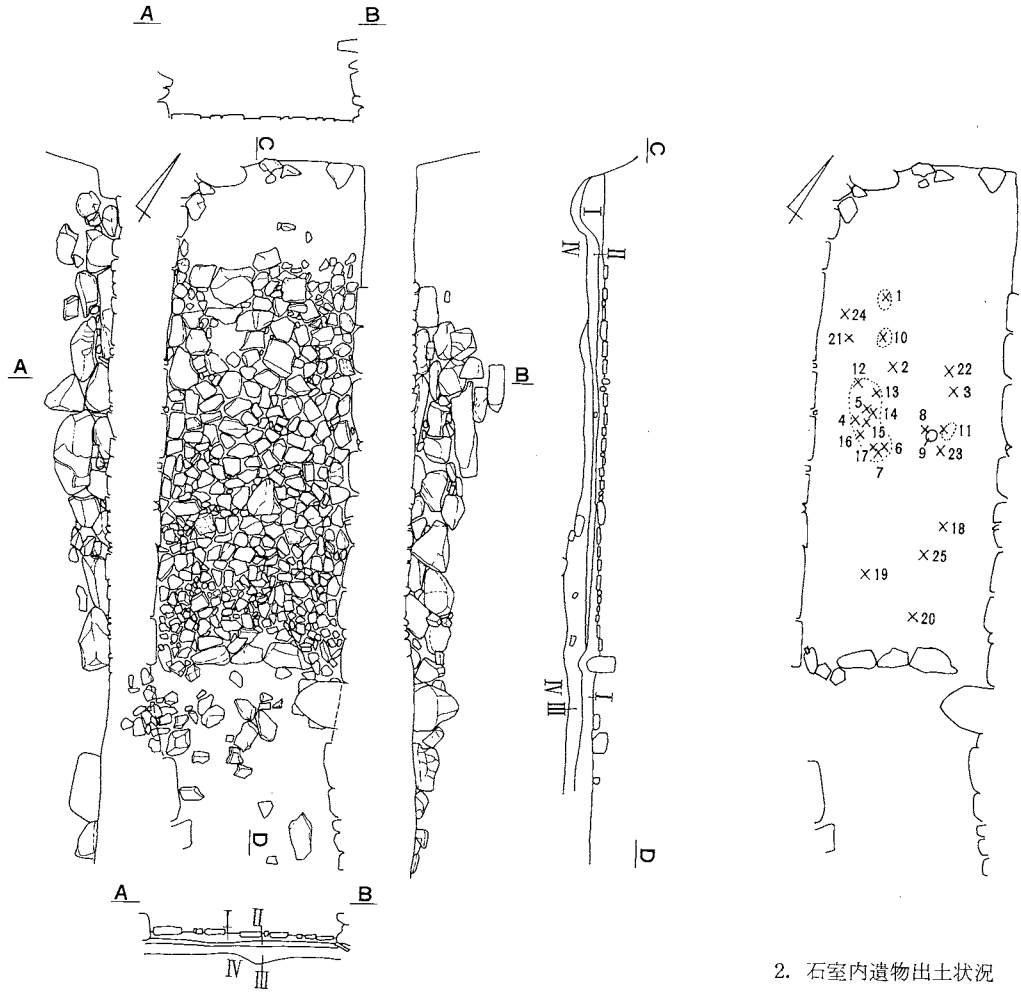


図 6 金鉢場遺跡14・15・30号住居址, 30号住居址炉実測図

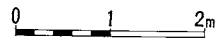


図 7 金鈔場遺跡 1 号古墳全体実測図



1. 1号古墳石室 (1:80)
- I. 軟弱でざらざらした黒褐色土
 - II. 粘質の強い粘床状の固い黒土・ローム互相
 - III. 褐色土(ローム漸移層)
 - IV. ローム土

2. 石室内遺物出土状況



- 1~7-骨片
- 8- 頸骨片
- 9- 頭骨片
- 10~11-骨粉
- 12~17-歯
- 18- 灰釉水鳥紐蓋
- 19-灰釉陶器片
- 20-須恵器片
- 21-土師器片
- 22~23-鉄片
- 24-くるみ
- 25-木炭片

図 8 金鈔場遺跡1号古墳石室実測図, 石室内遺物出土状況

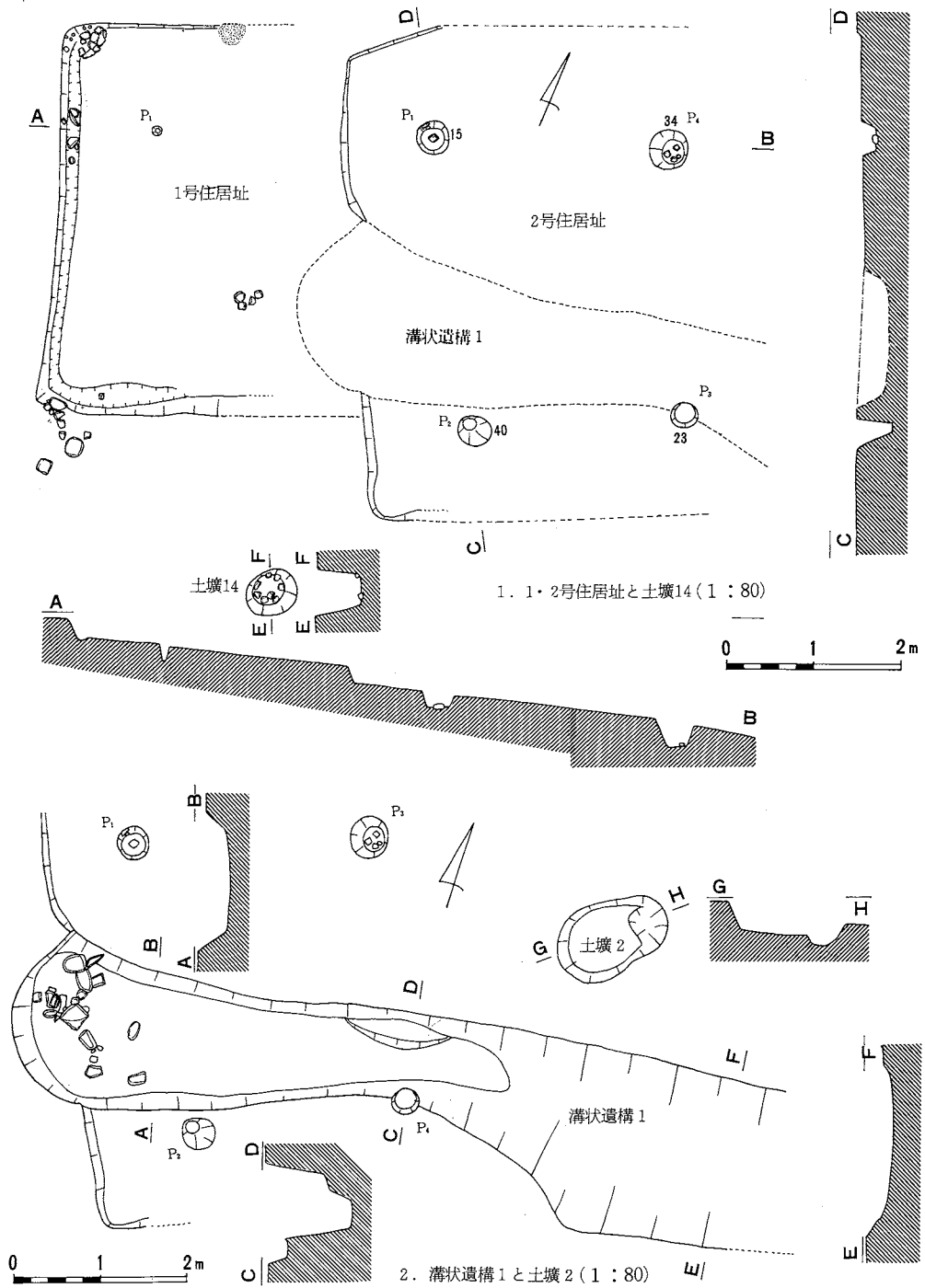
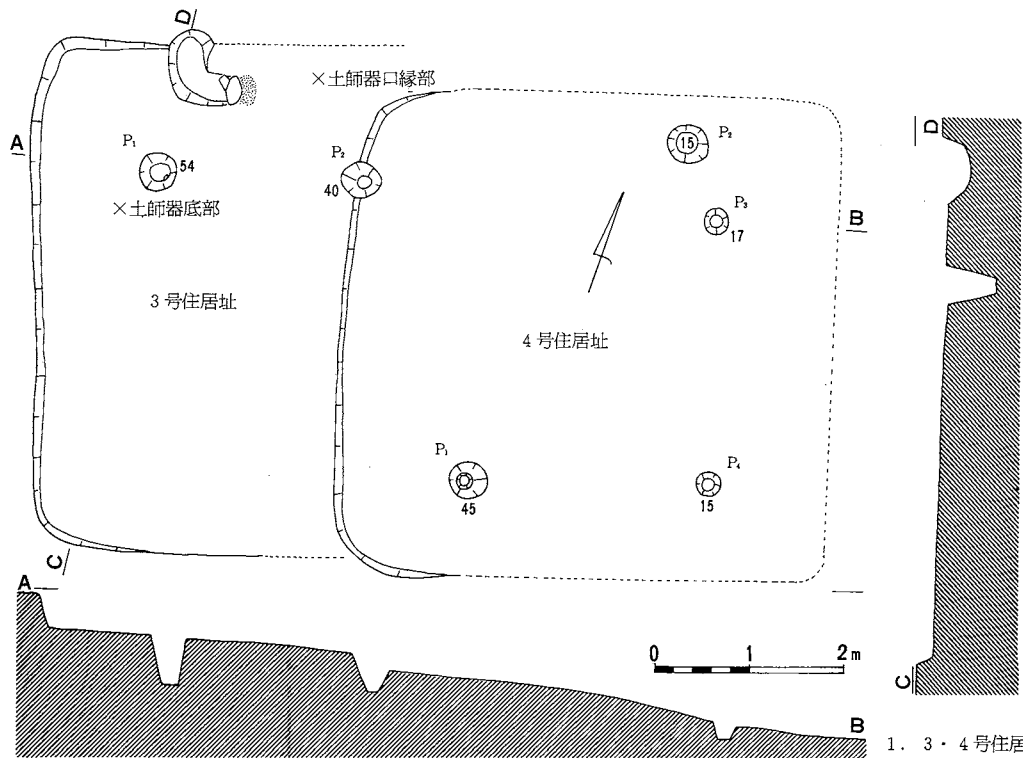
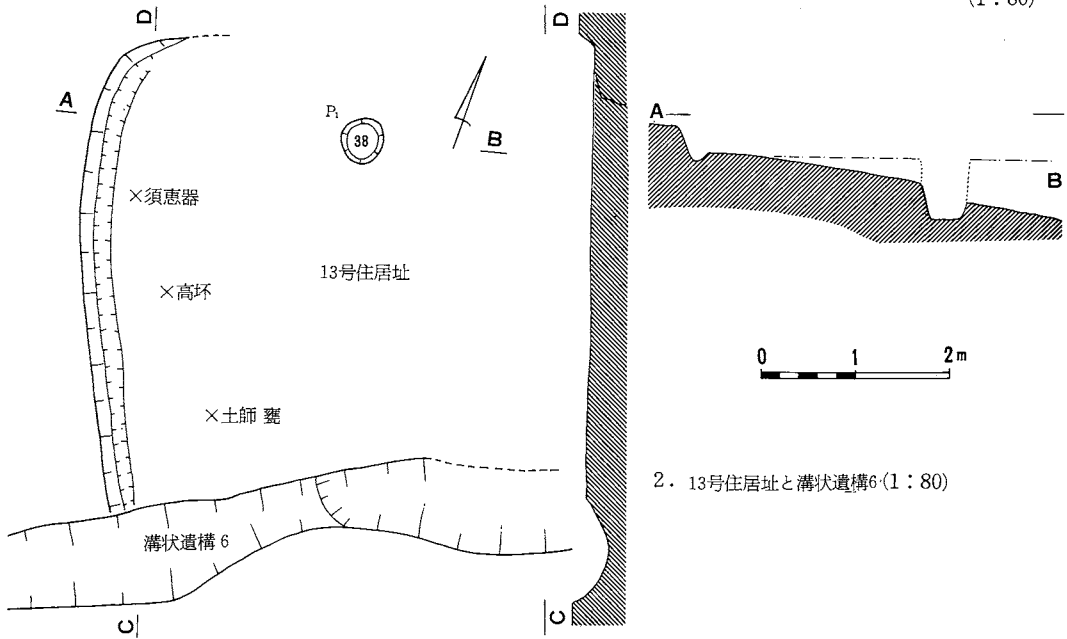


図 9 金鈔場遺跡 1・2号住居址，溝状遺構 1，土壙 2・14実測図



1. 3・4号住居址
(1:80)



2. 13号住居址と溝状遺構6 (1:80)

図10 金鉢場遺跡3・4・13号住居址，溝状遺構6実測図

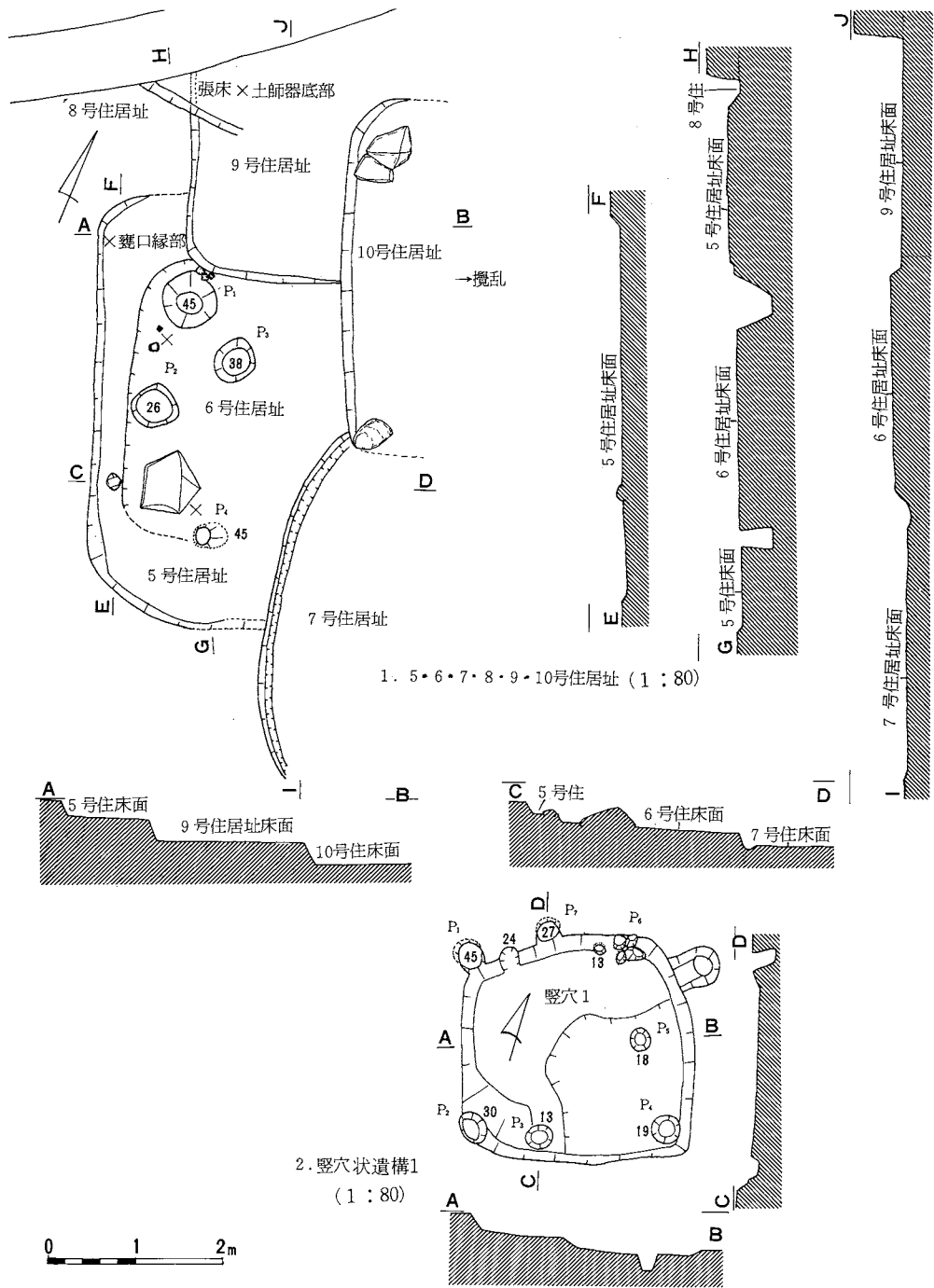


图 11 金鉾場遺跡 5・6・7・8・9・10号住居址，竖穴状遺構 1 实測图

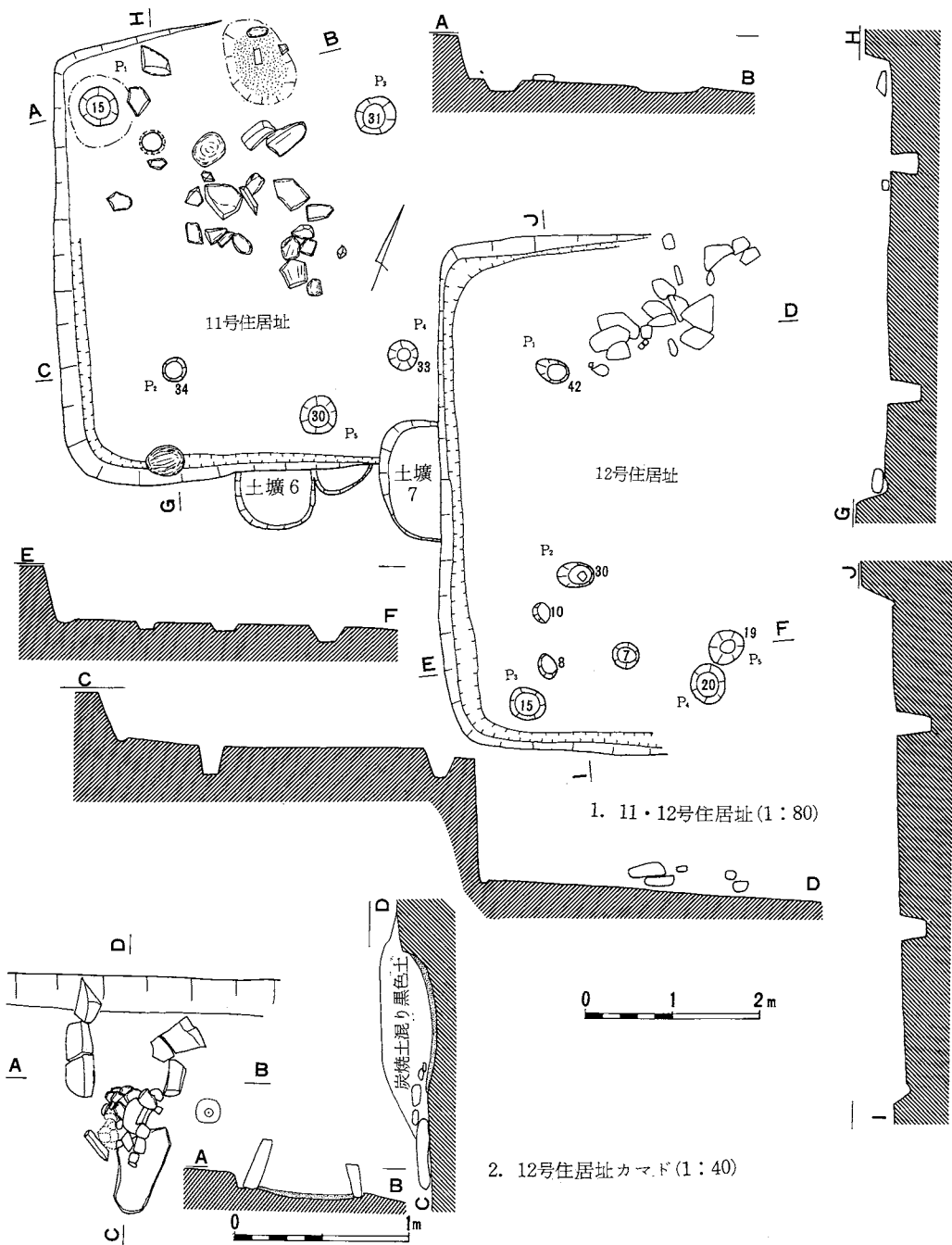


図 12 金鑄場遺跡11・12号住居址，土坑 6・7・15，12号住居址カマド実測図

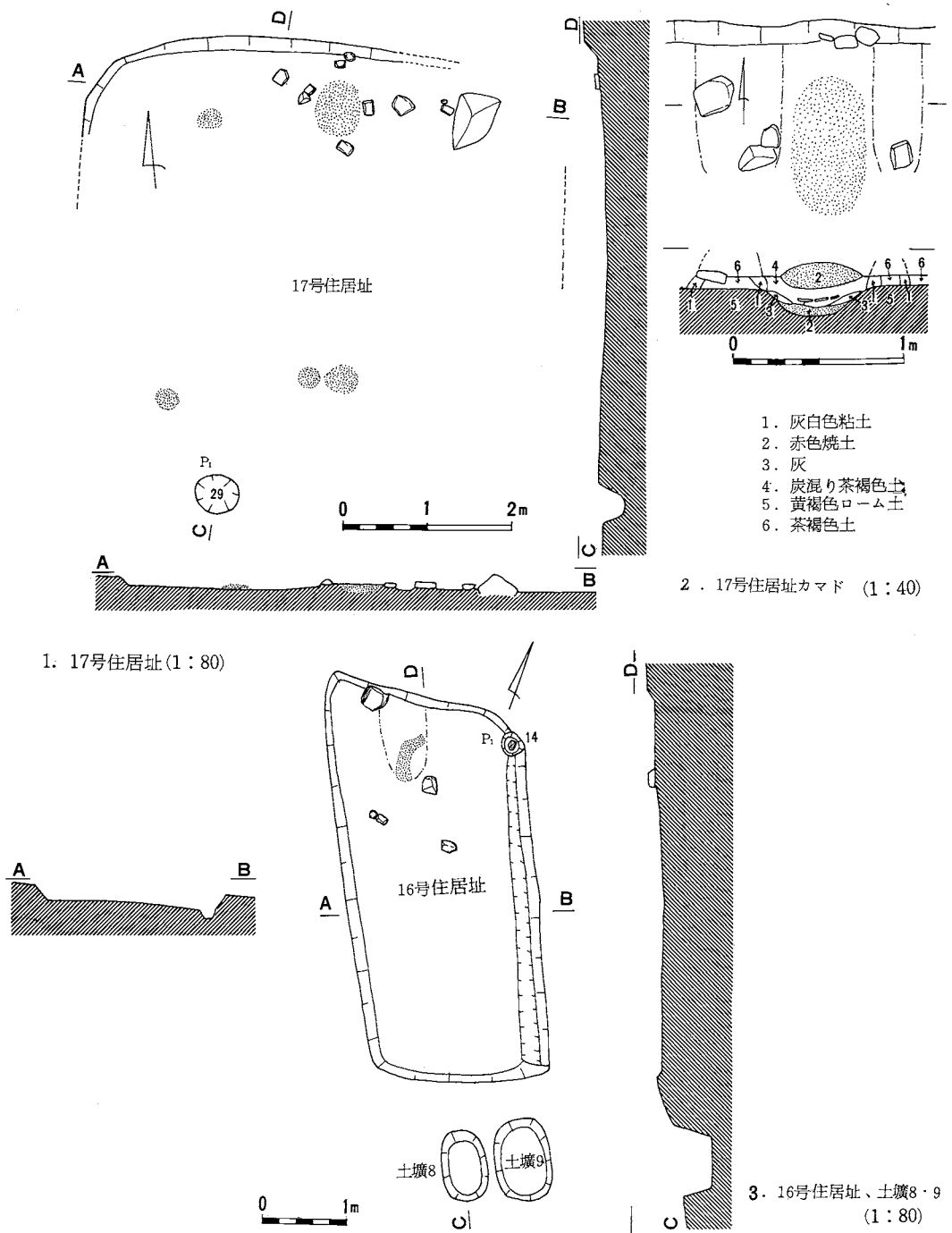
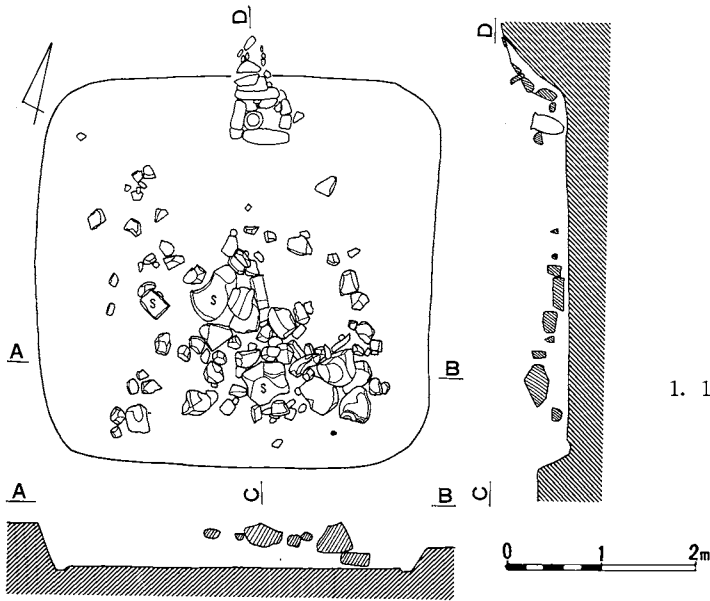
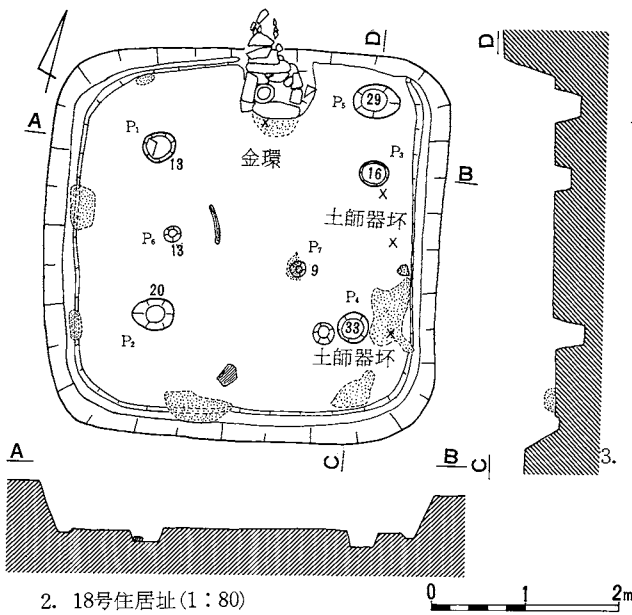


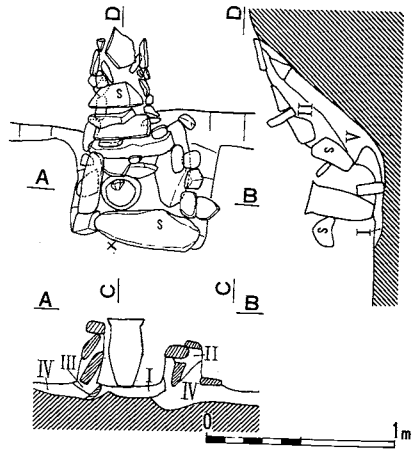
図13 金鈔場遺跡16・17号住居址，17号住居址カマド，土壇8・9実測図



1. 18号住居址内集石 (1:80)



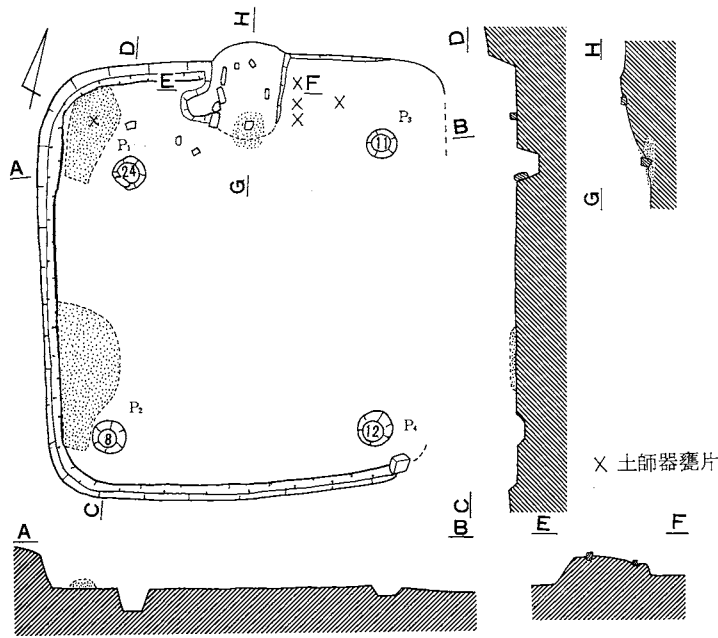
2. 18号住居址 (1:80)



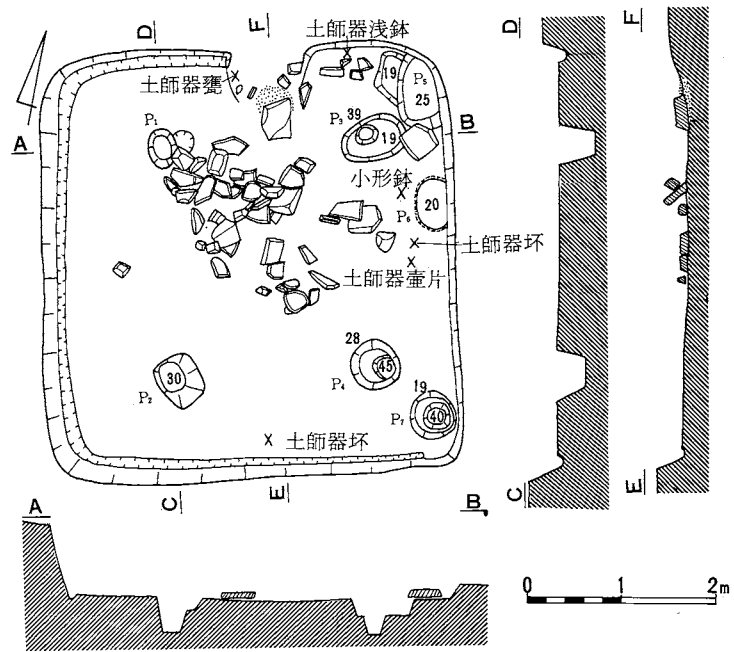
3. 18号住居址カマド (1:40)

- I. 焼土
- II. ローム土
- III. ローム粒混入黒褐色土
- IV. 炭化物・ローム粒混入黒褐色土
- V. ローム粒混入砂質褐色土

図 14 金鑄場遺跡18号住居址, 同カマド, 同内集石実測図

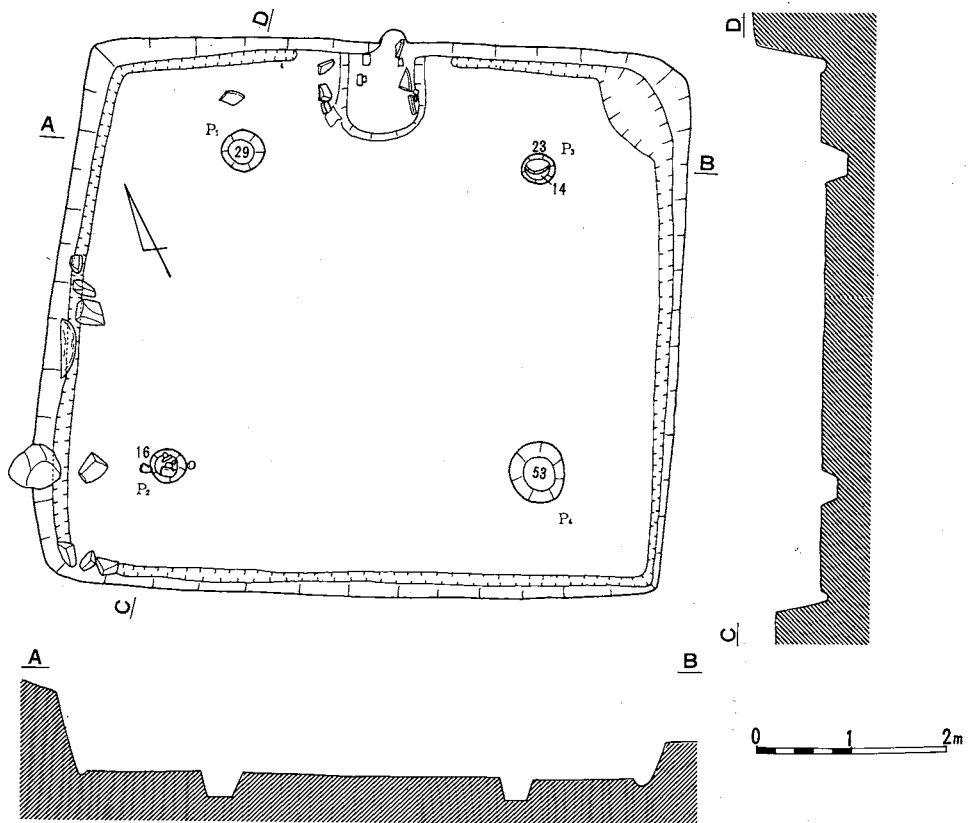


1. 19号住居址 (1 : 80)

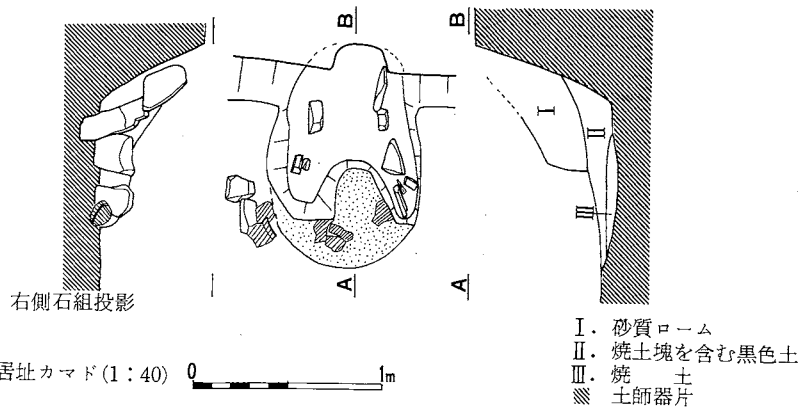


2. 20号住居址 (1 : 80)

图 15 金铸场遗址19·20号住居址实测图

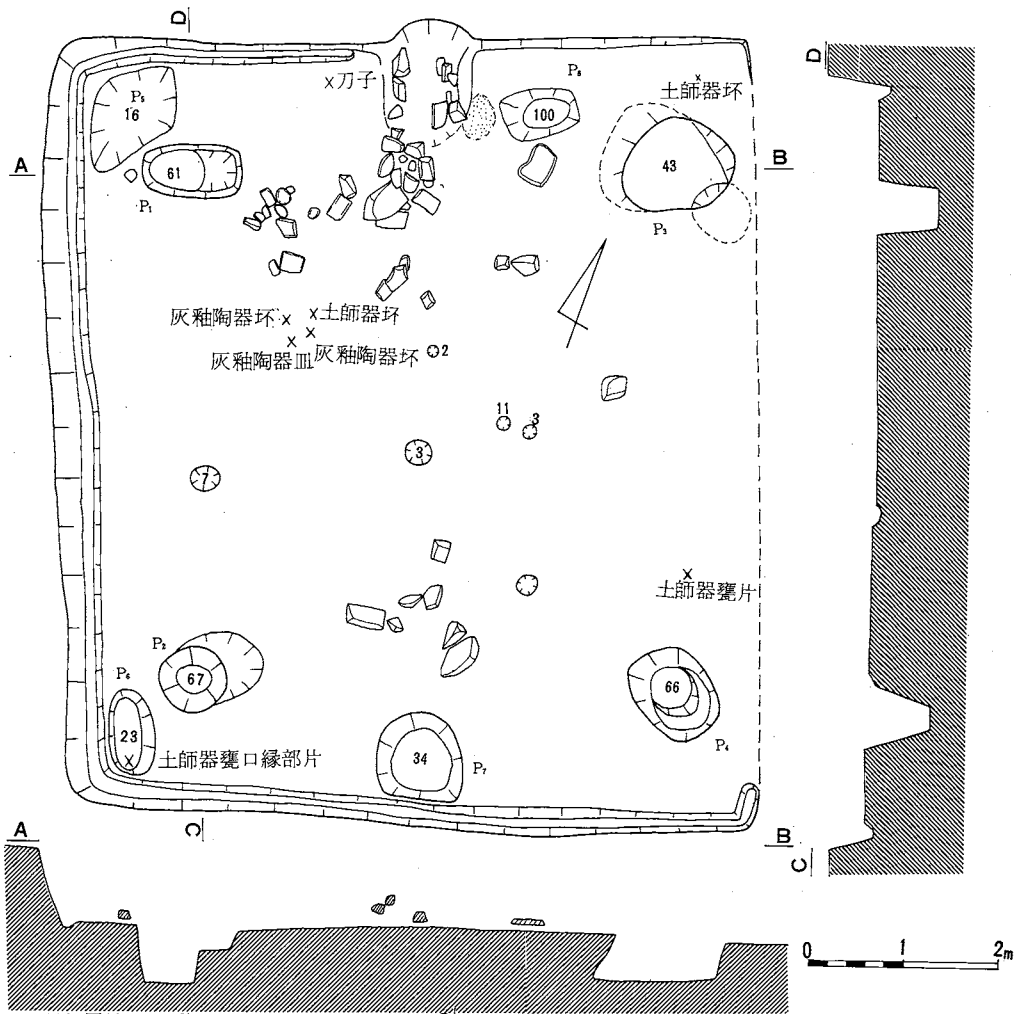


1. 21号住居址(1:80)

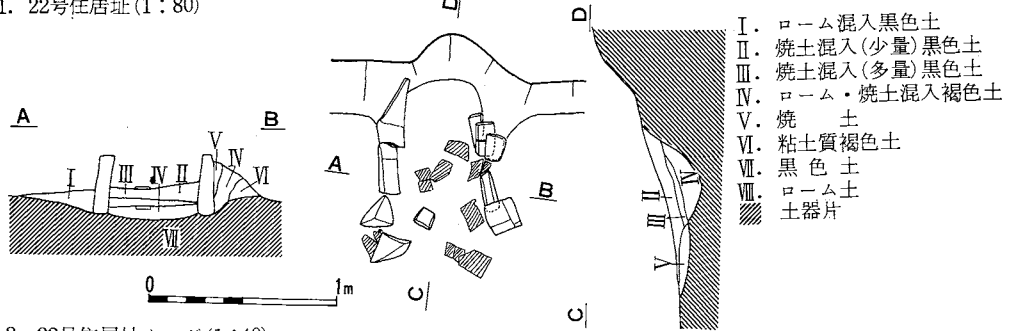


2. 21号住居址カマド(1:40)

図16 金鑄場遺跡21号住居址, 同カマド実測図



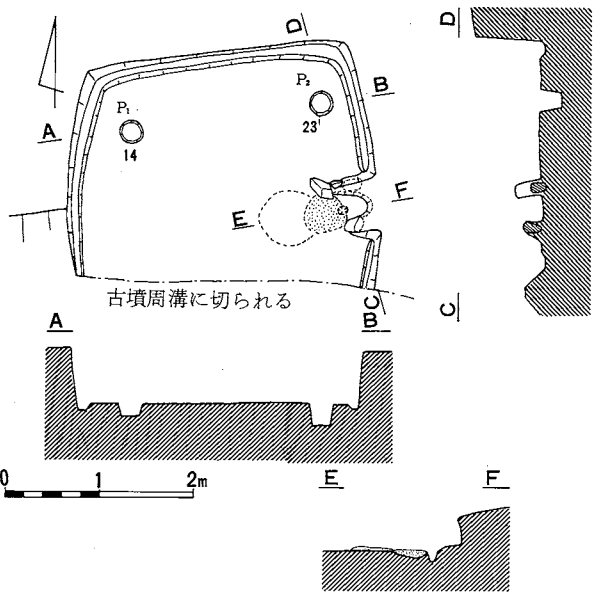
1. 22号住居址(1:80)



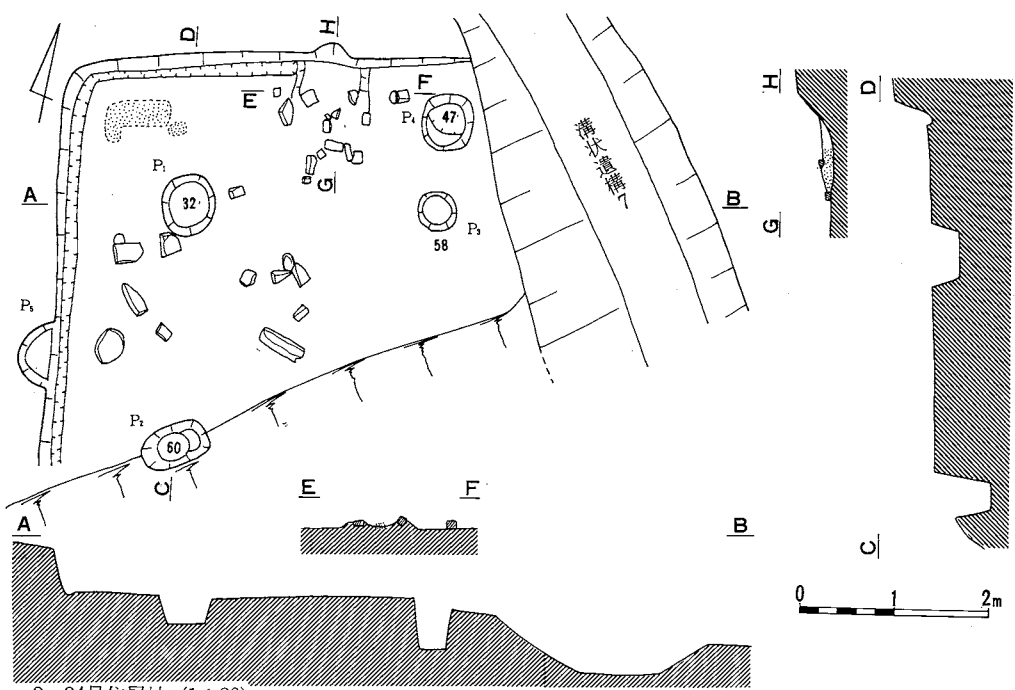
2. 22号住居址カマド(1:40)

- I. ローム混入黒色土
- II. 焼土混入(少量)黒色土
- III. 焼土混入(多量)黒色土
- IV. ローム・焼土混入褐色土
- V. 焼土
- VI. 粘土質褐色土
- VII. 黒色土
- VIII. ローム土
- 土器片

図17 金鑄場遺跡22号住居址, 同カマド実測図

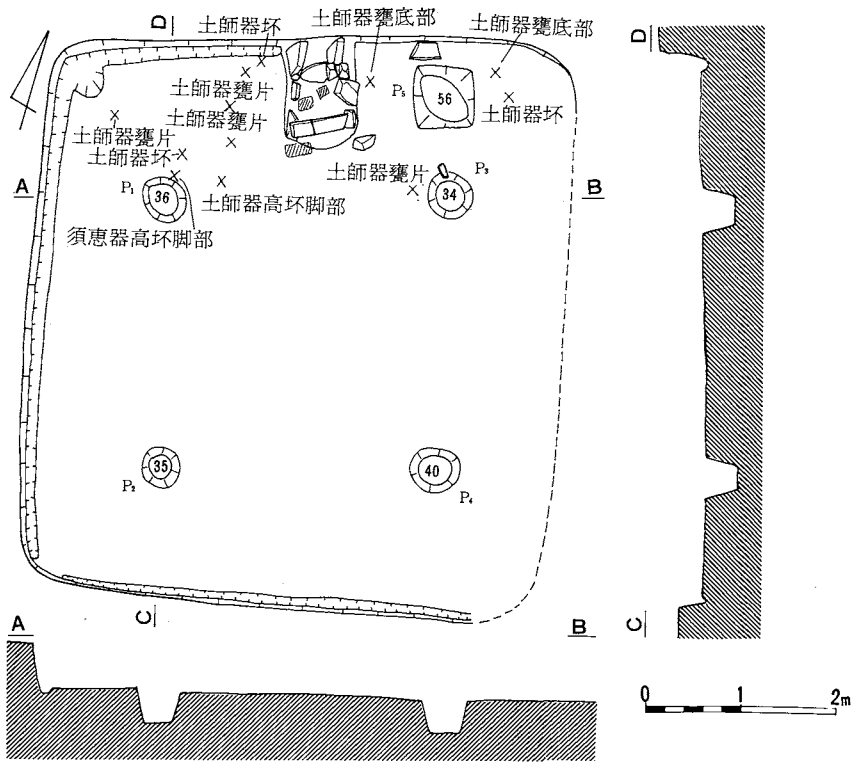


1. 23号住居址 (1:80)

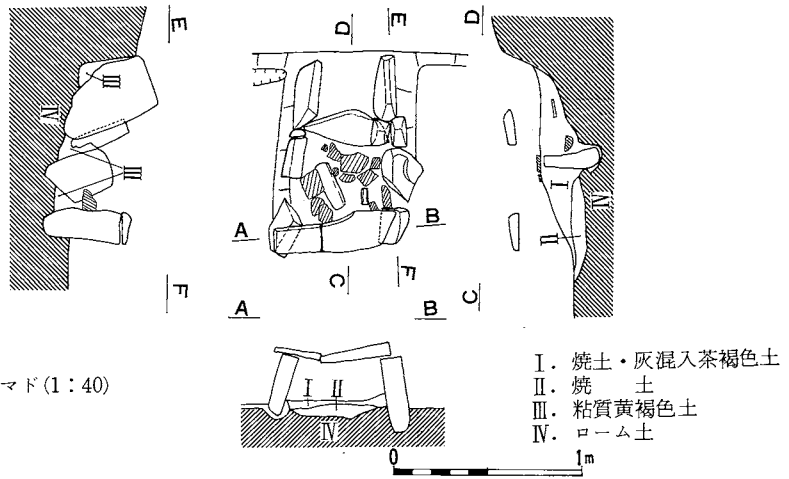


2. 24号住居址 (1:80)

図18 金鑄場遺跡23・24号住居址，溝状遺構7実測図

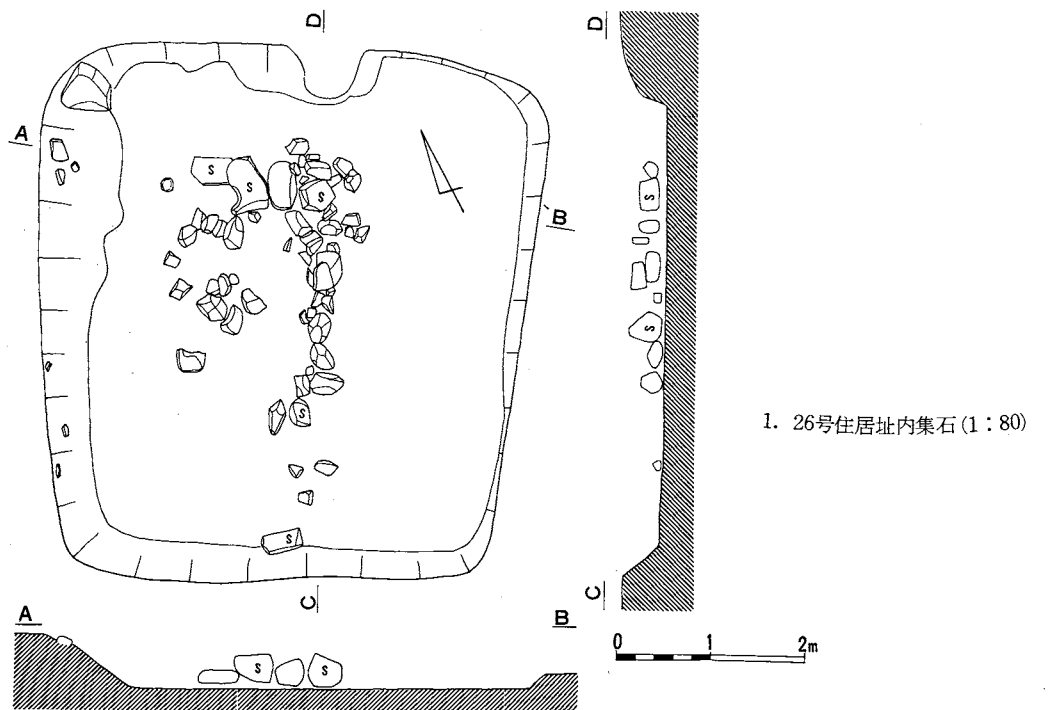


1. 25号住居址(1:80)

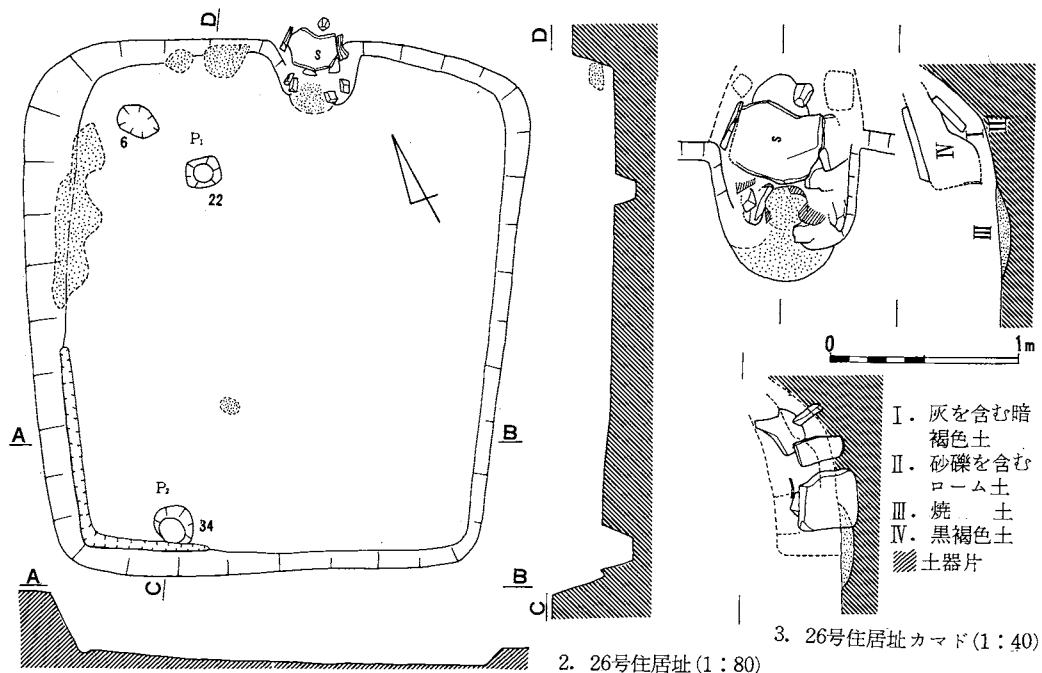


2. 25号住居址カマド(1:40)

図19 金鑄場遺跡25号住居址, 同カマド実測図



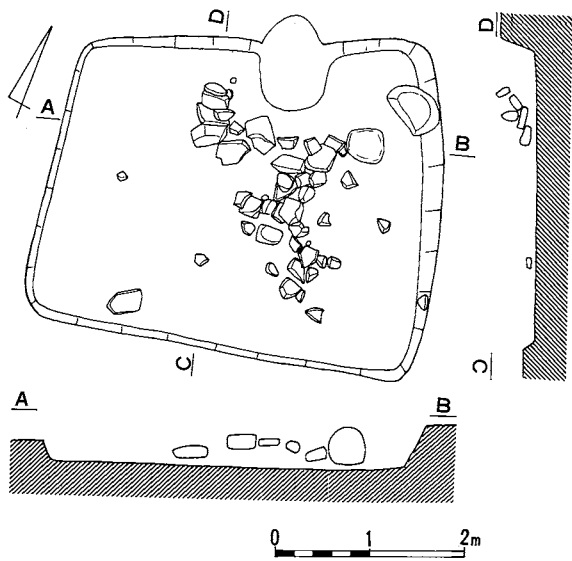
1. 26号住居址内集石 (1 : 80)



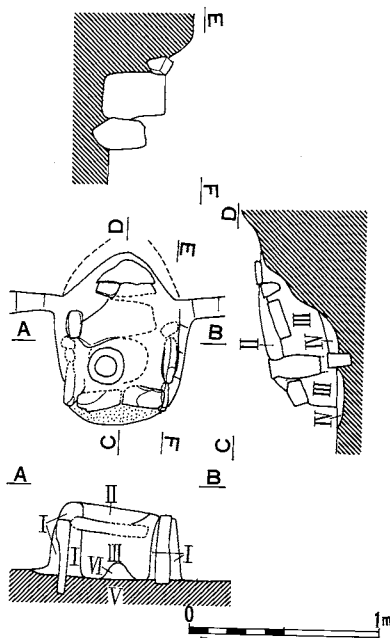
3. 26号住居址カマド (1 : 40)

2. 26号住居址 (1 : 80)

図 20 金鉢場遺跡26号住居址，同内集石，同カマド実測図

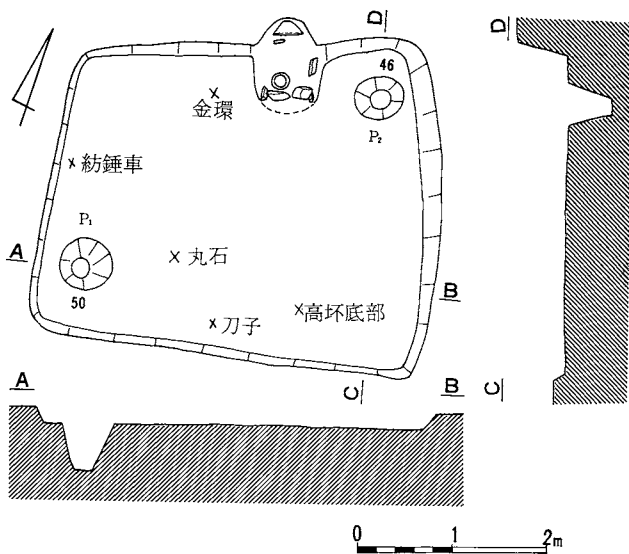


1. 27号住居址内集石(1:80)



- I. 粘土混り黒褐色土
- II. 黒褐色土
- III. ローム混り茶褐色土
- VI. 炭混り茶褐色土
- V. 砂質ローム
- VI. 焼土

3. 27号住居址カマド(1:40)



2. 27号住居址(1:80)

図21 金鋳場遺跡27号住居址, 同カマド, 同内集石実測図

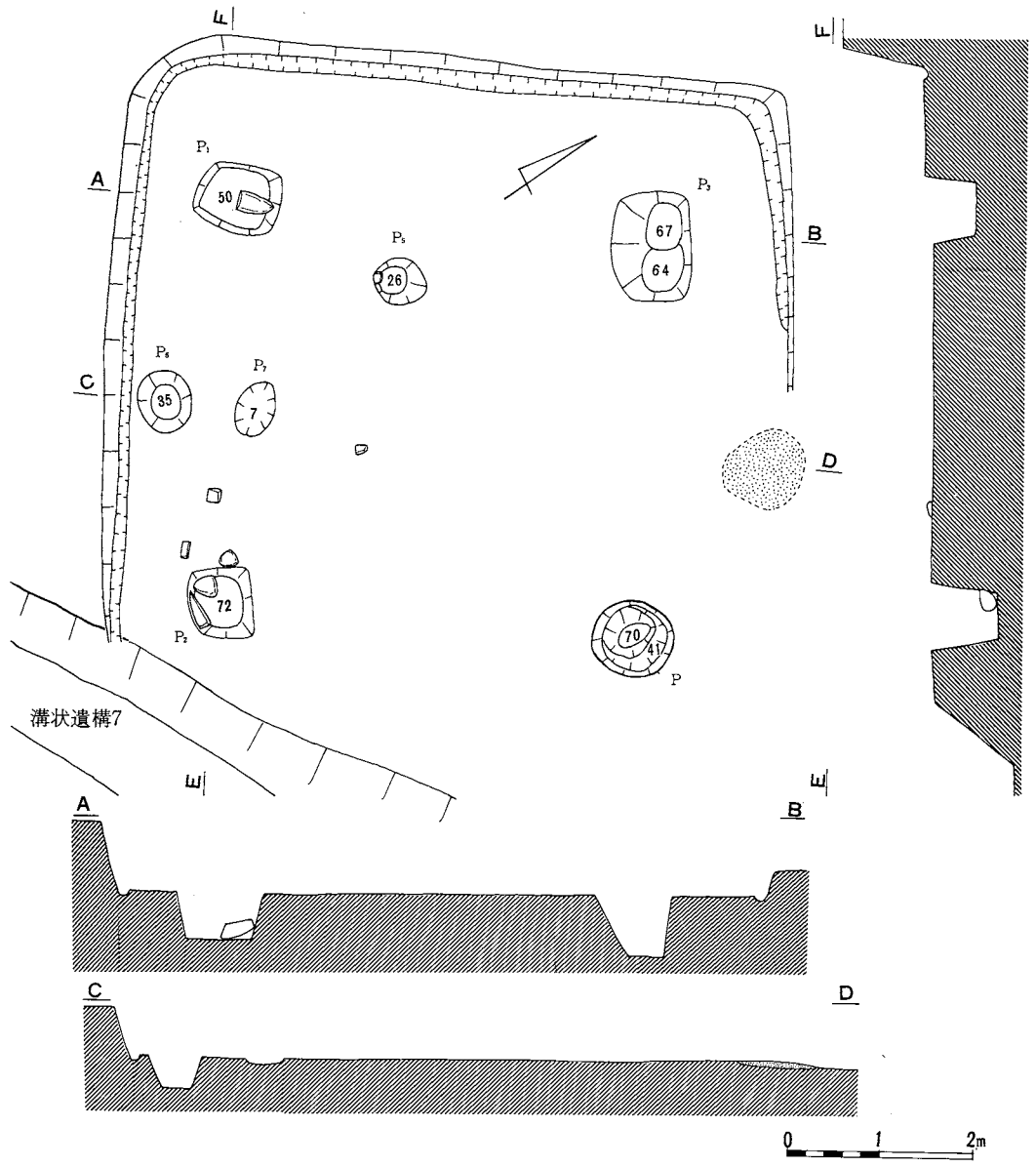
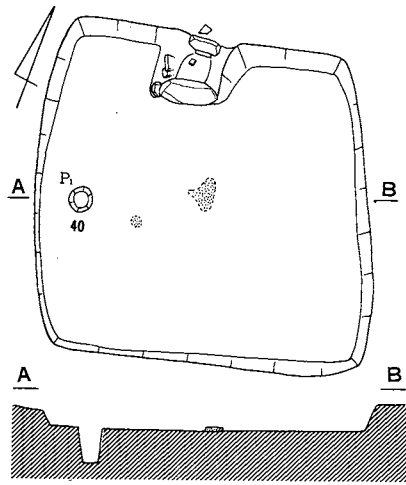
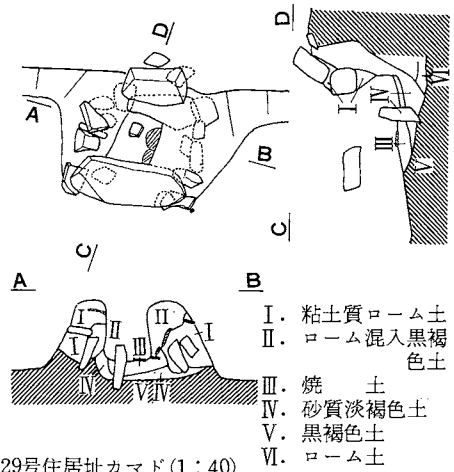


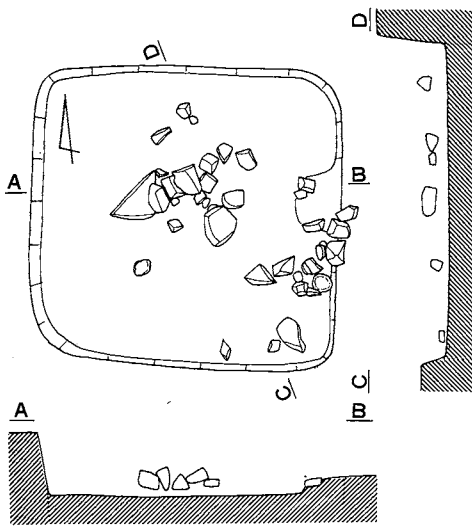
図 22 金鑄場遺跡28号住居址，溝状遺構7 実測図



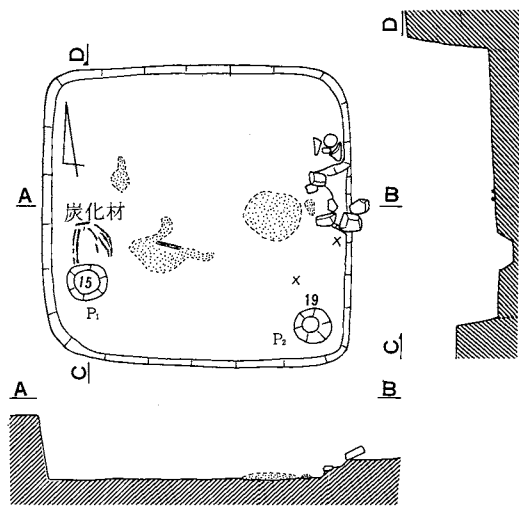
1. 29号住居址 (1 : 80)



2. 29号住居址カマド (1 : 40)



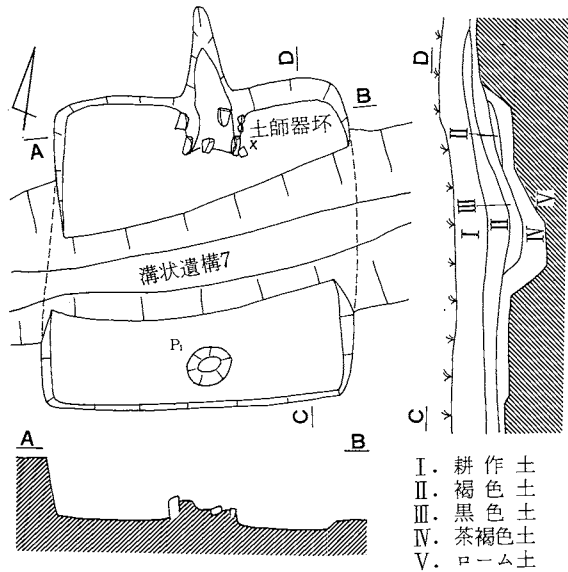
3. 31号住居址内集石 (1 : 80)



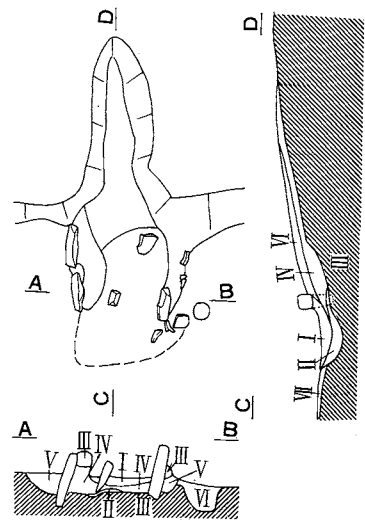
4. 31号住居址 (1 : 80)



図 23 金鑄場遺跡29号住居址, 同カマド, 31号住居址, 同内集石実測図

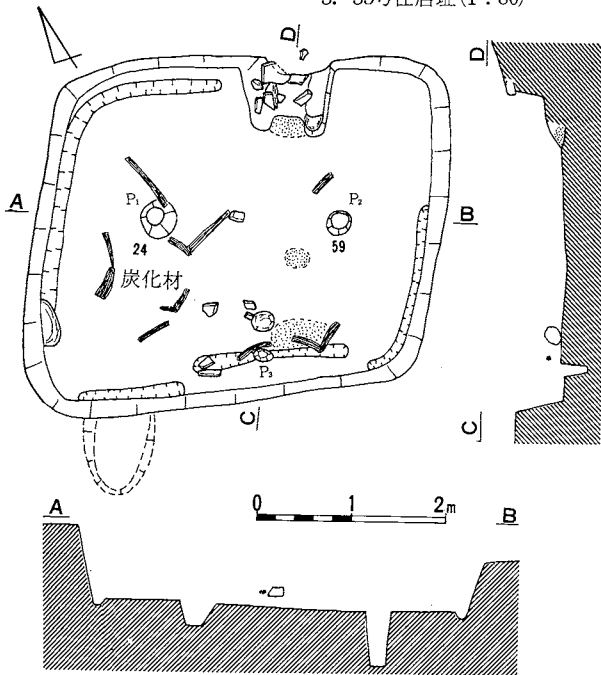


1. 32号住居址・溝状遺構7 (1:80)



2. 32号住居址カマド(1:40)

3. 33号住居址(1:80)



4. 33号住居址カマド(1:40)

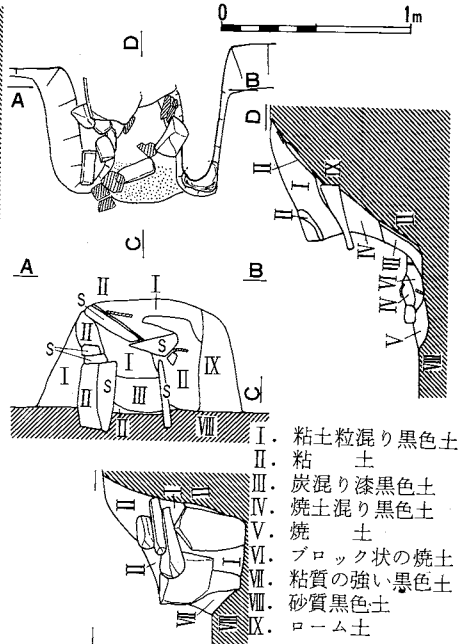
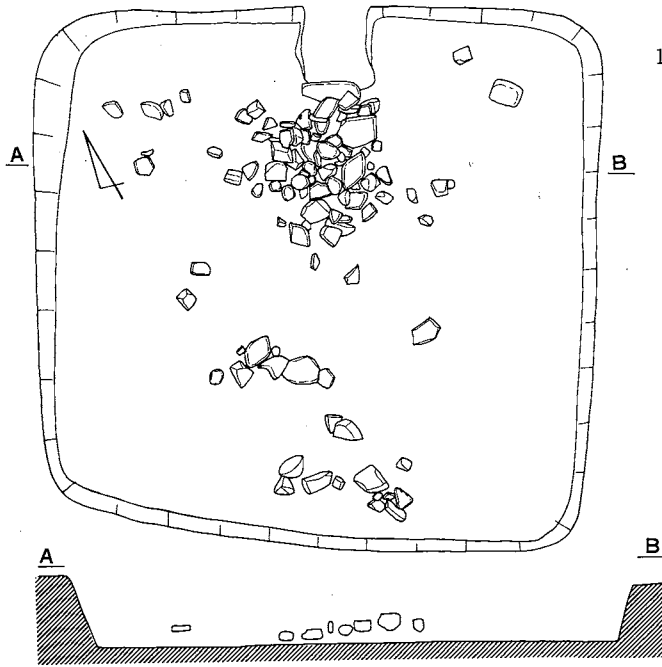
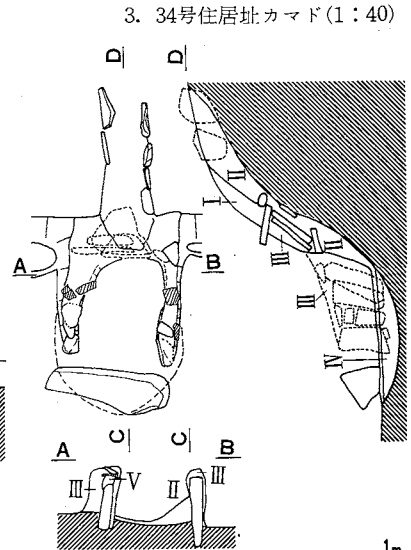


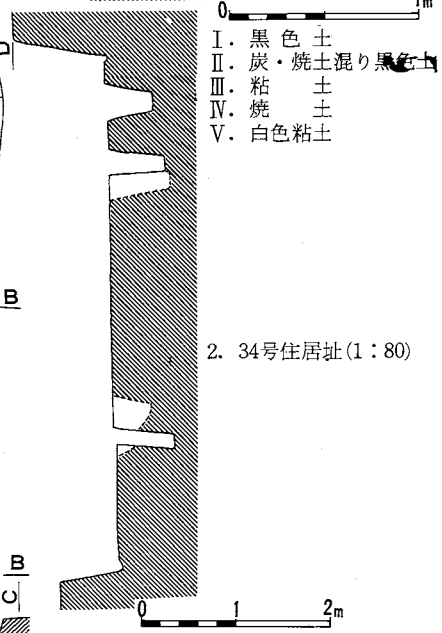
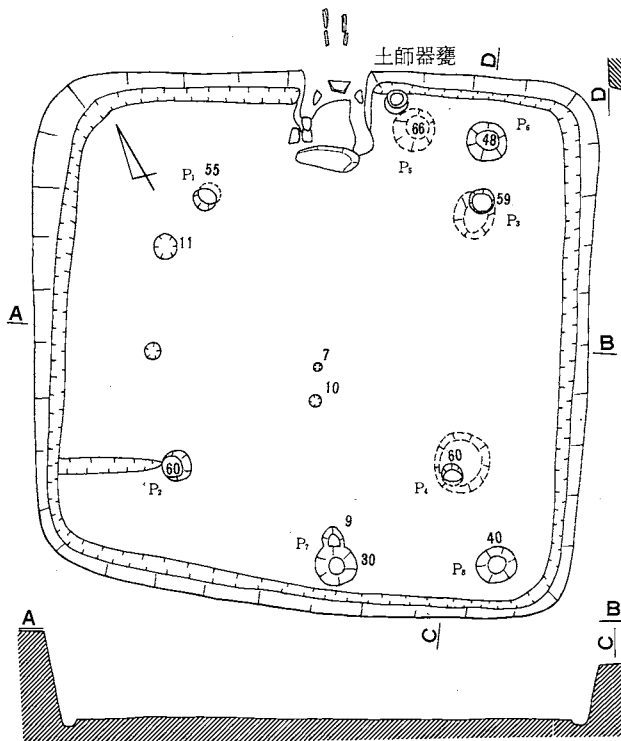
図24 金鑄場遺跡32号住居址, 同カマド, 33号住居址, 同カマド, 溝状遺構7 実測図



1. 34号住居址内集石 (1:80)



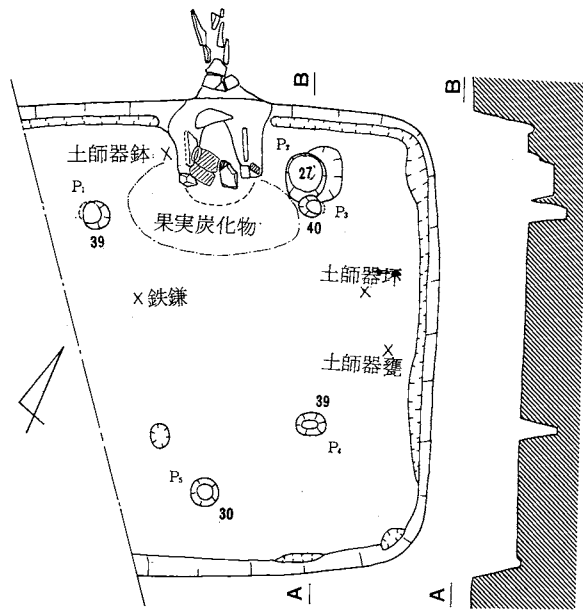
3. 34号住居址カマド (1:40)



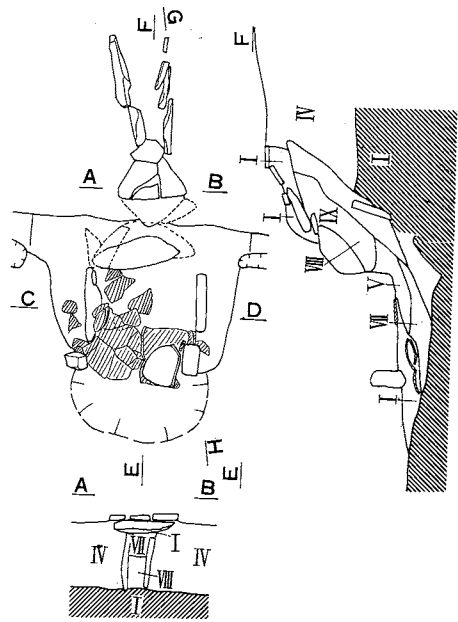
2. 34号住居址 (1:80)

- I. 黒色土
- II. 炭・焼土混り黒色土
- III. 粘土
- IV. 焼土
- V. 白色粘土

図25 金鑄場遺跡34号住居址, 同カマド, 同内集石実測図



1. 35号住居址 (1:80)



2. 35号住居址カマド (1:40)

- I. 黒色土
- II. 粘土
- III. 黒褐色土
- IV. 褐色土
- V. 焼土塊混入黒色土
- VI. 焼土混入黒褐色土
- VII. 焼土
- VIII. 焼土散在褐色土
- IX. ローム塊混入褐色土
- X. ローム土

3. 40号住居址と溝状遺構7 (1:80)

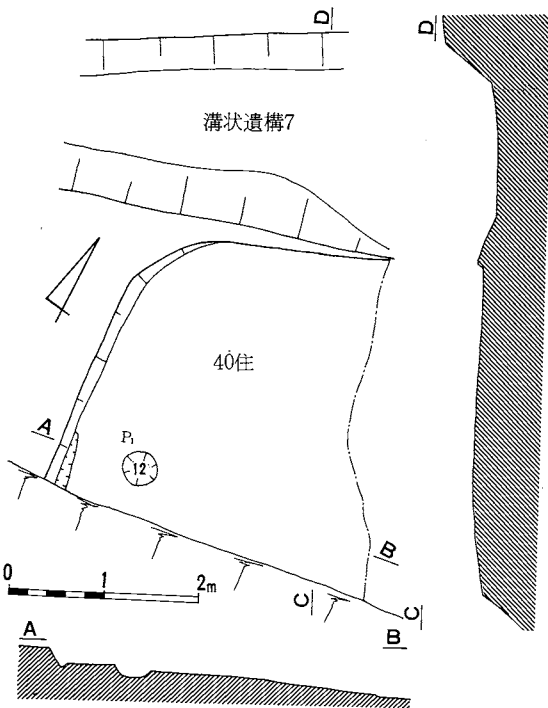


図 26 金鉢場遺跡35号住居址, 同カマド, 40号住居址, 溝状遺構7 実測図

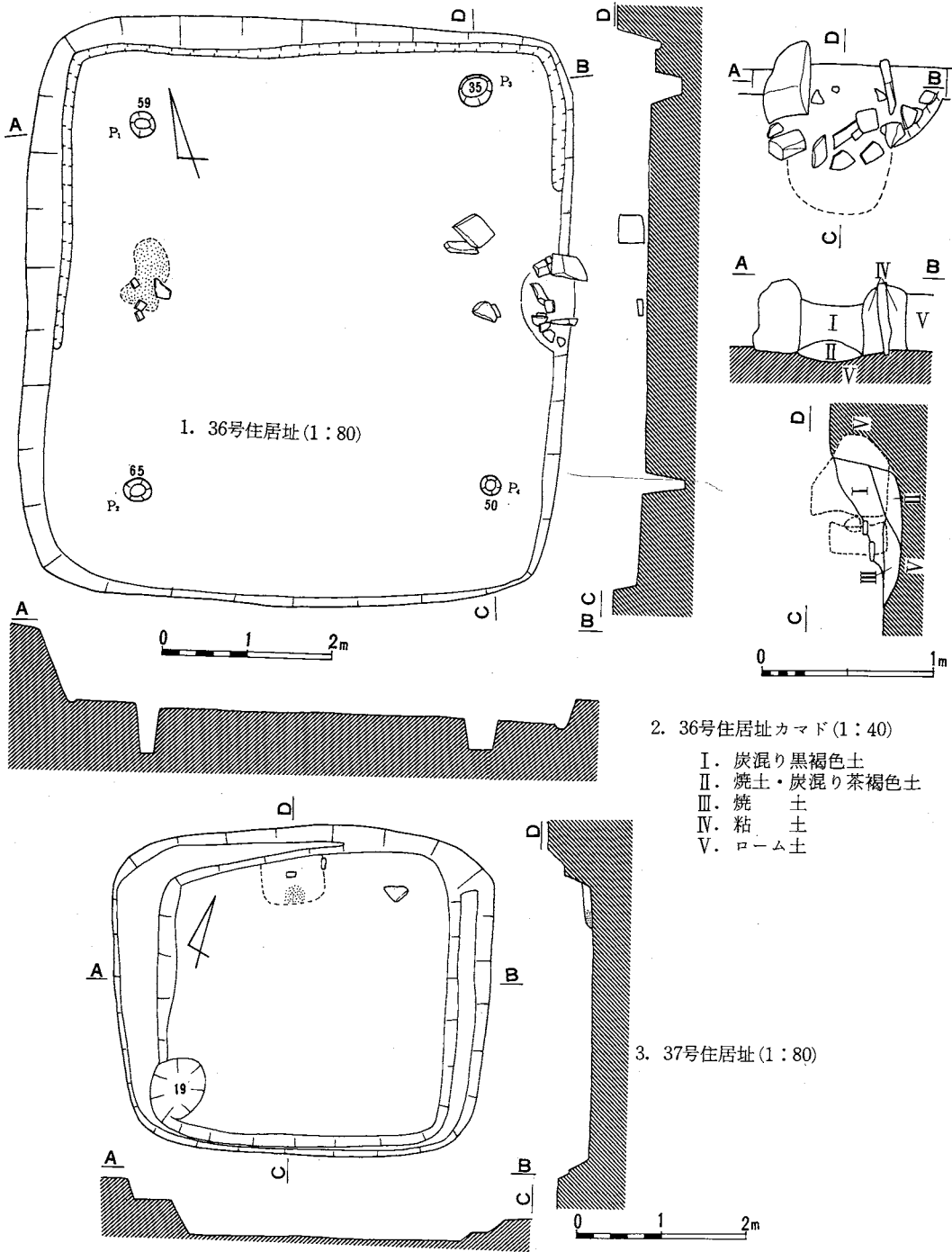
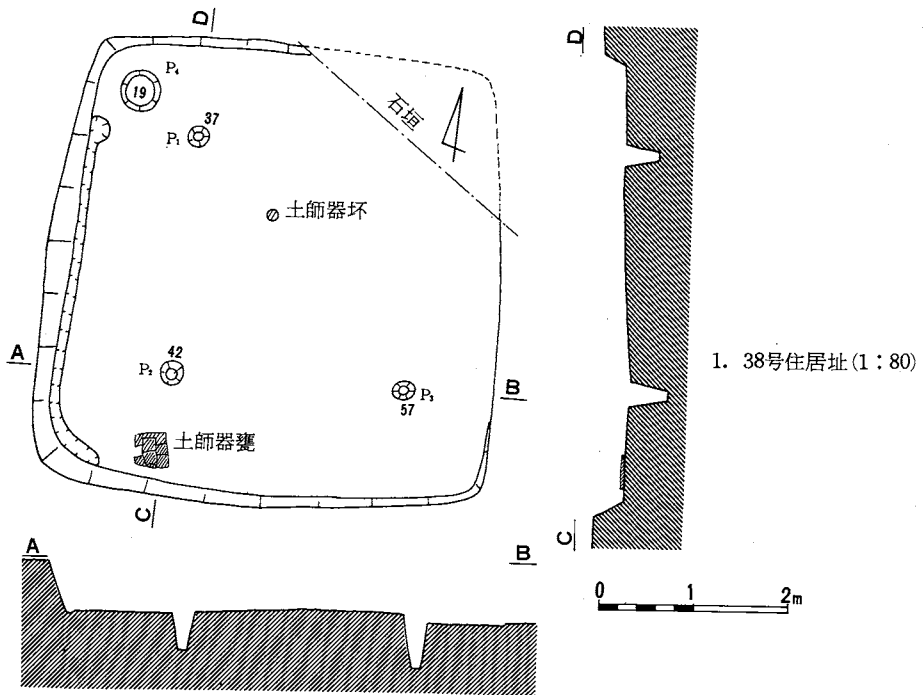
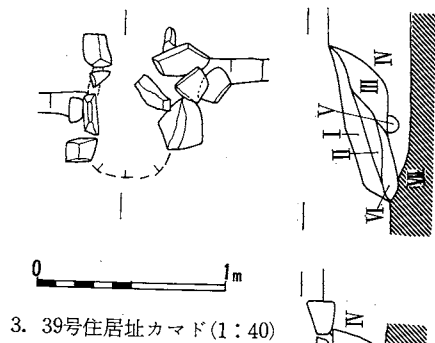
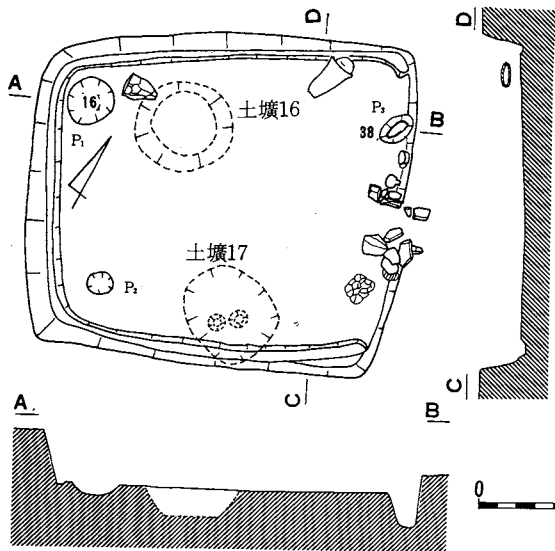


図 27 金鉢場遺跡36号住居址，同カマド，37号住居址実測図



2. 39号住居址 (1:80)



- I. 茶褐色土
- II. 炭混り茶褐色土
- III. 焼土・炭混り黒褐色土
- IV. 黒色土
- V. 焼土ブロック
- VI. 焼土
- VII. 砂質ローム土

図 28 金鉢場遺跡38号住居址, 39号住居址, 同カマド実測図

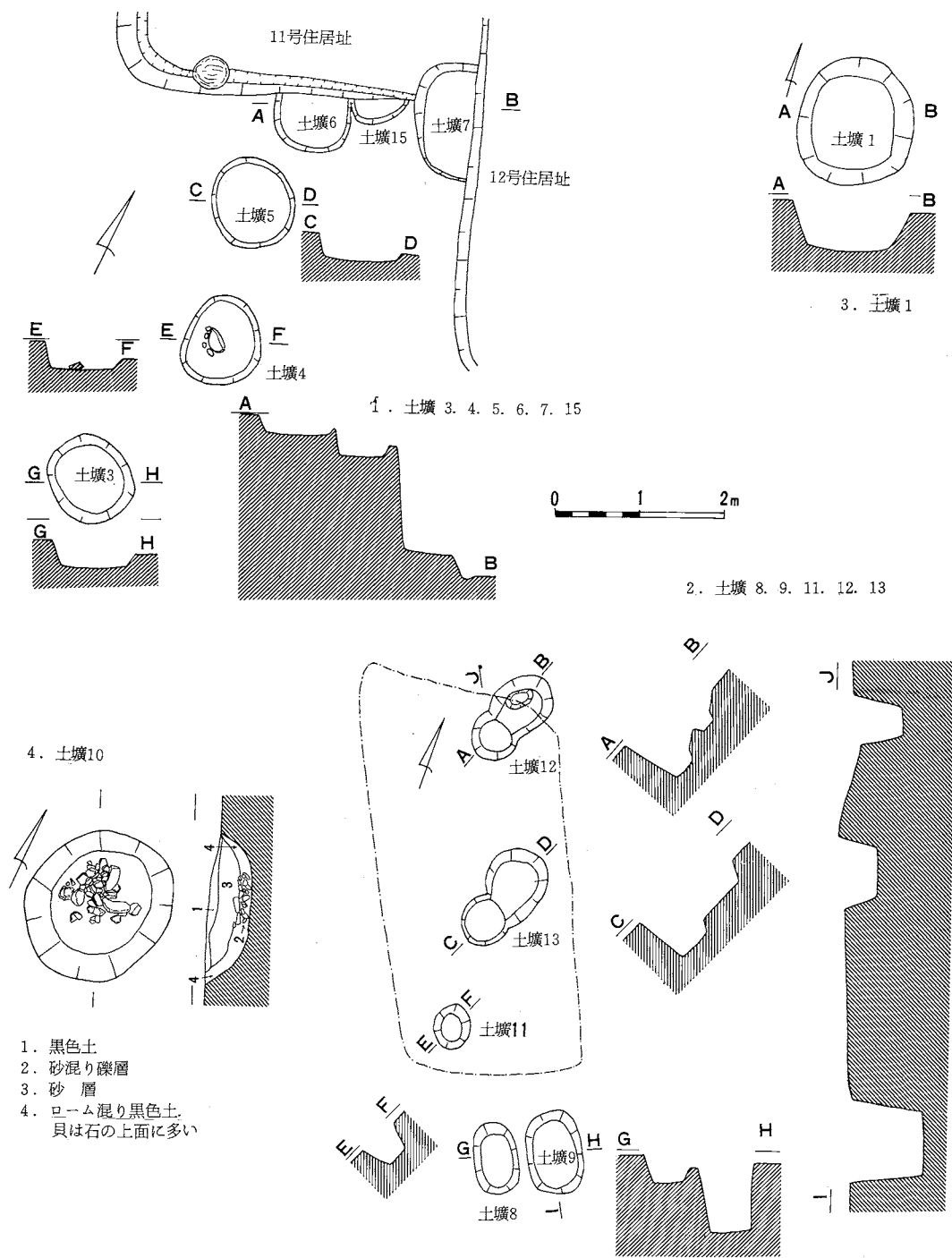
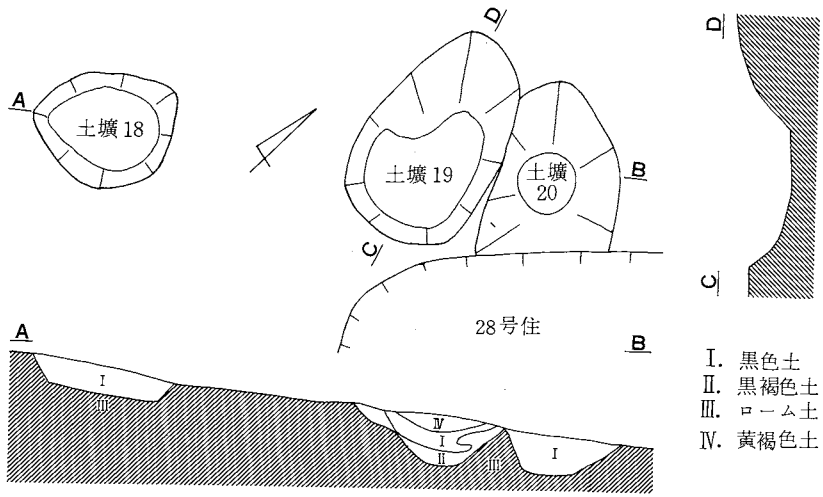
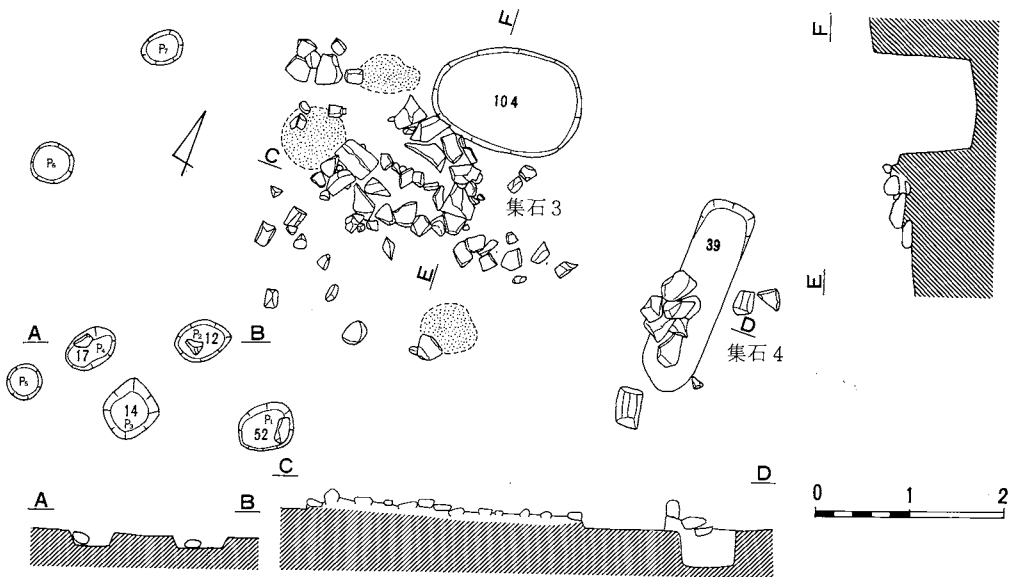
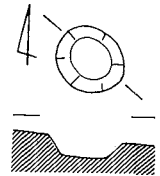


図 29 金鑄場遺跡土壙 1・3～13・15実測図



1. 土壙 18・19・20 (1 : 80)

2. 土壙 21 (1 : 80)



3. 集石 3・4 (1 : 80)

図 30 金鑄場遺跡土壙18~21, 集石 3・4 実測図



图 31 金铸场遺跡列石状遺構 1, 集石 1・2 実測図

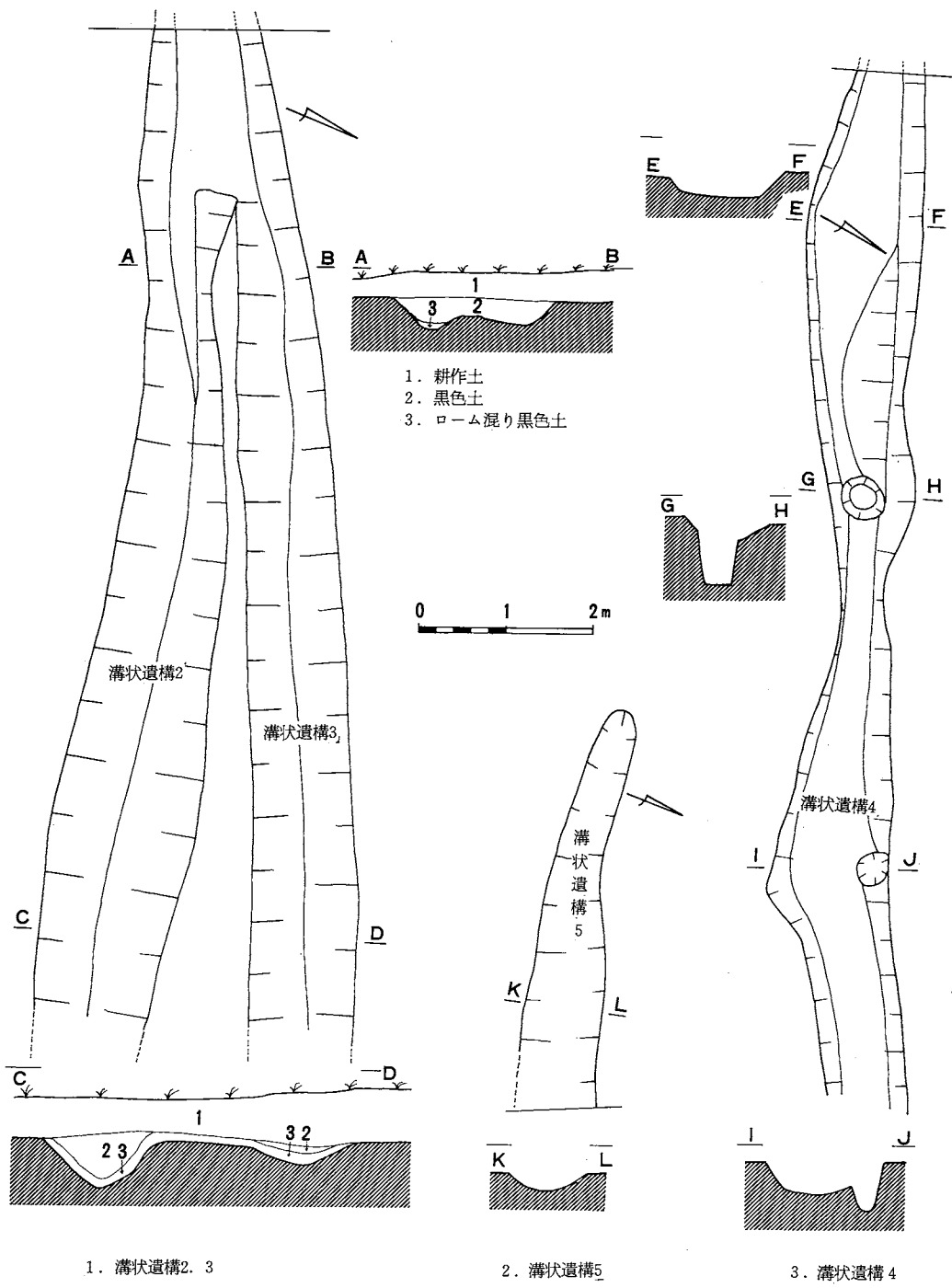
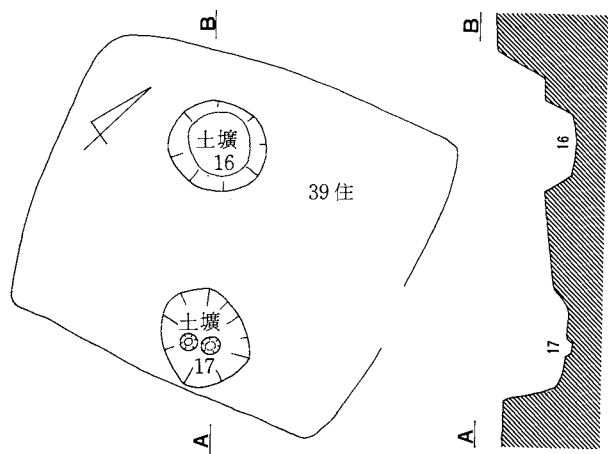
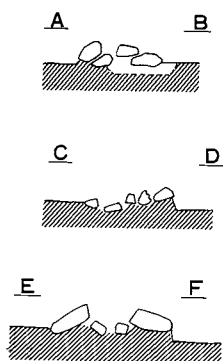
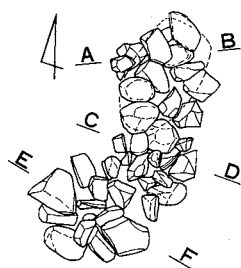


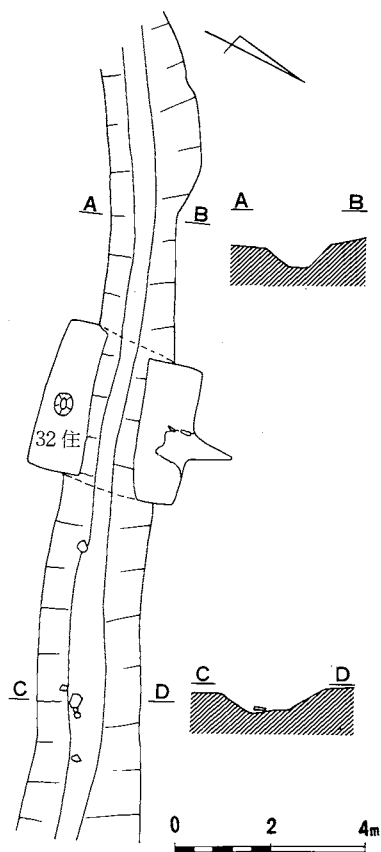
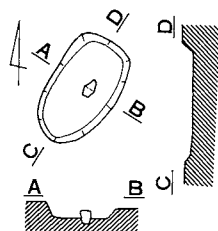
図 32 金鑄場遺跡溝状遺構 2 ~ 5 実測図



1. 土壇 16・17(1:80)



3. 集石 5(1:80)



2. 溝状遺構 7(1:160)

図 33 金鑄場遺跡土壇 16・17, 溝状遺構 7, 集石 5 実測図

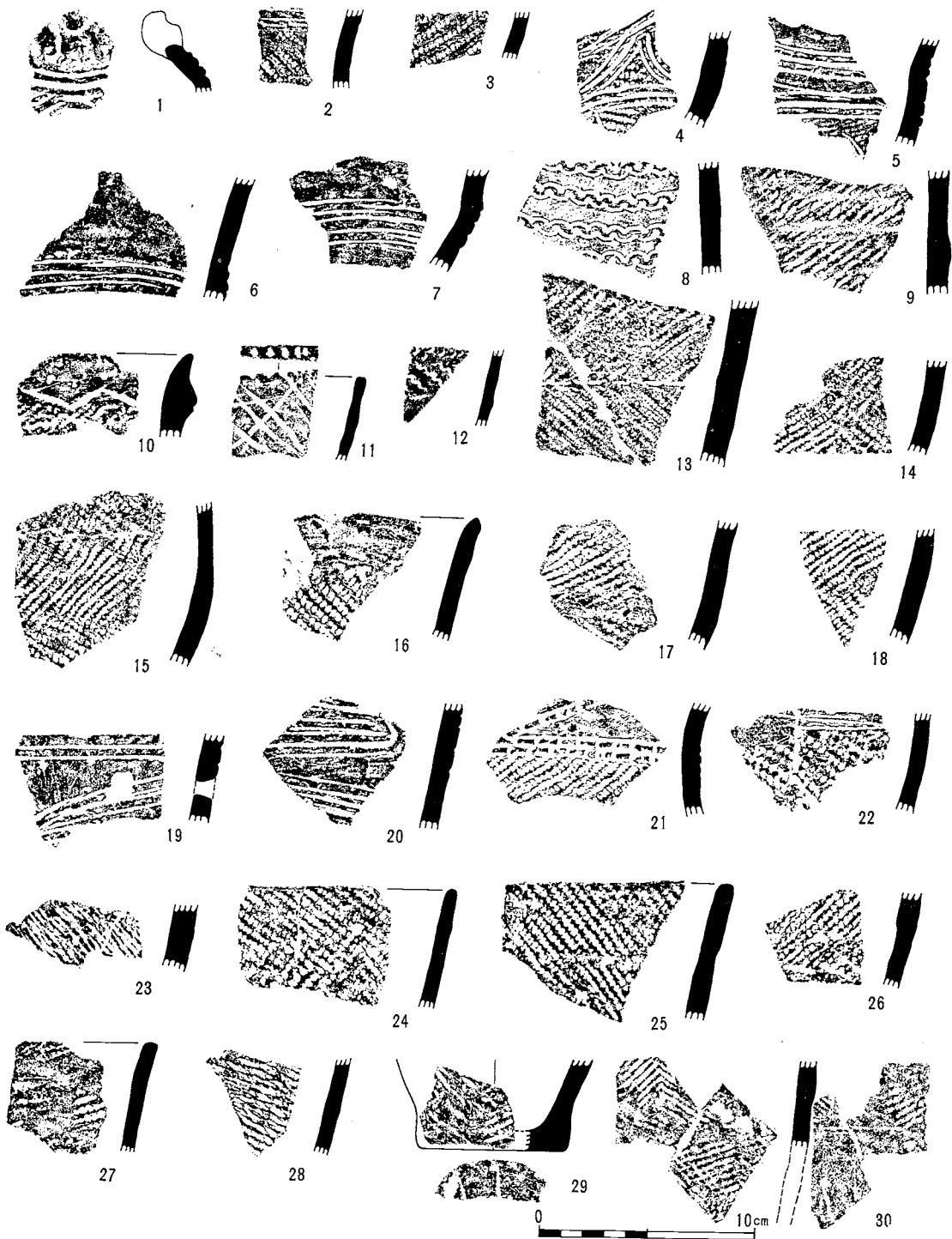


图 34 金铸场遗址出土绳文土器拓影图



图 35 金铸场遺跡出土縄文土器拓影图

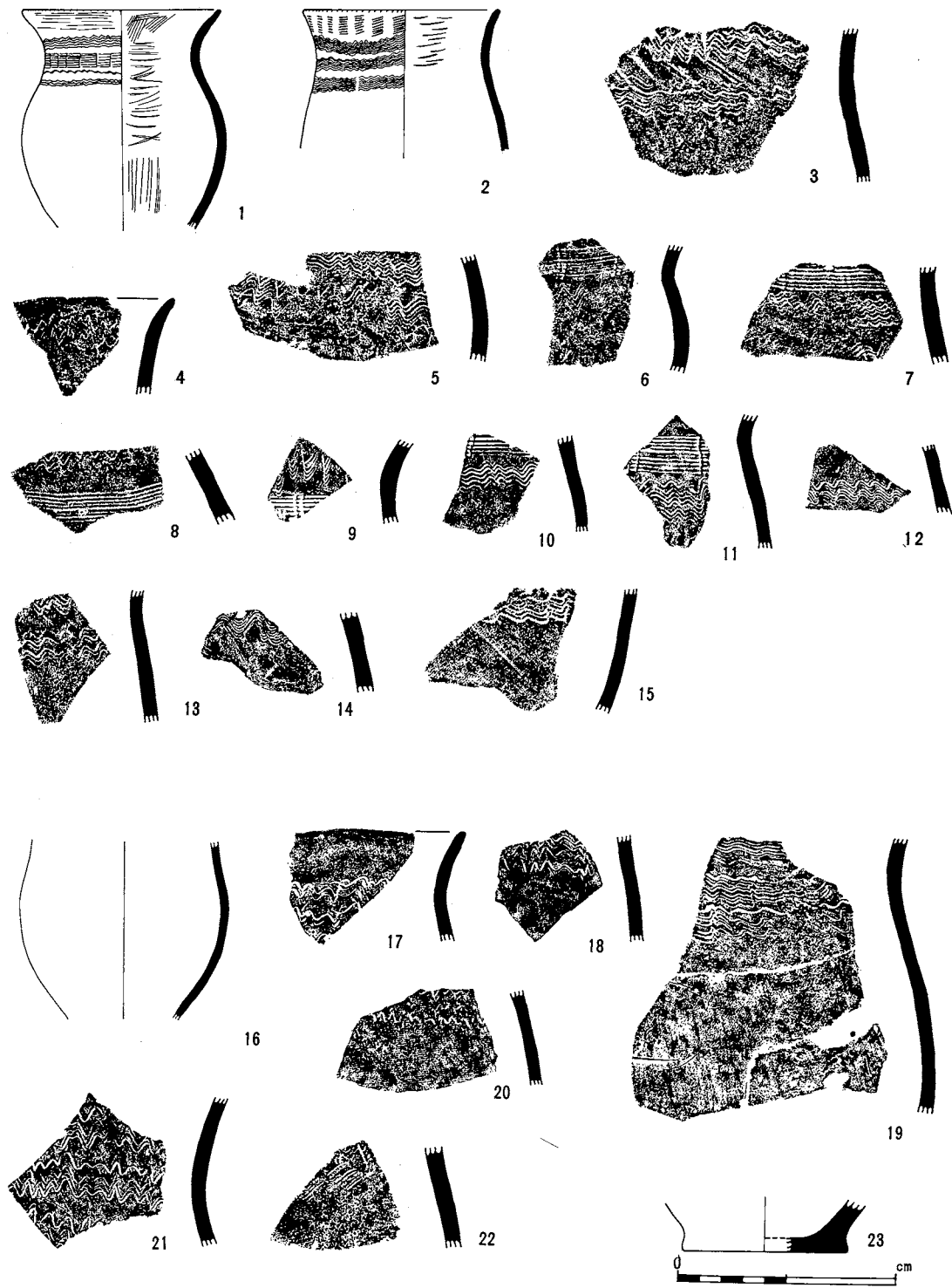


图 36 金铸场遺跡出土弥生土器実測・拓影図

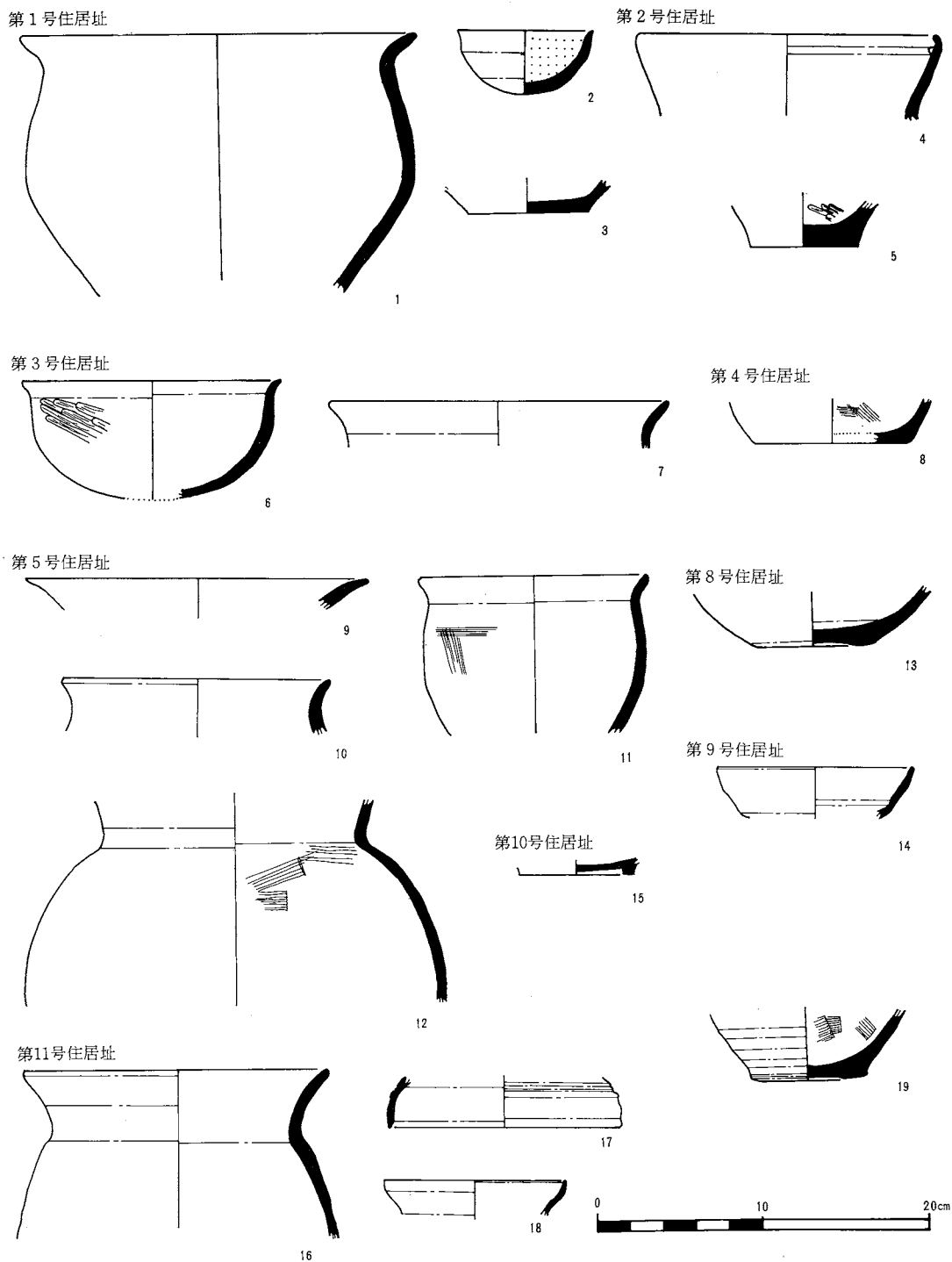


图 37 金铸场遗迹 1~11号住居址出土土器实测图

第12号住居址

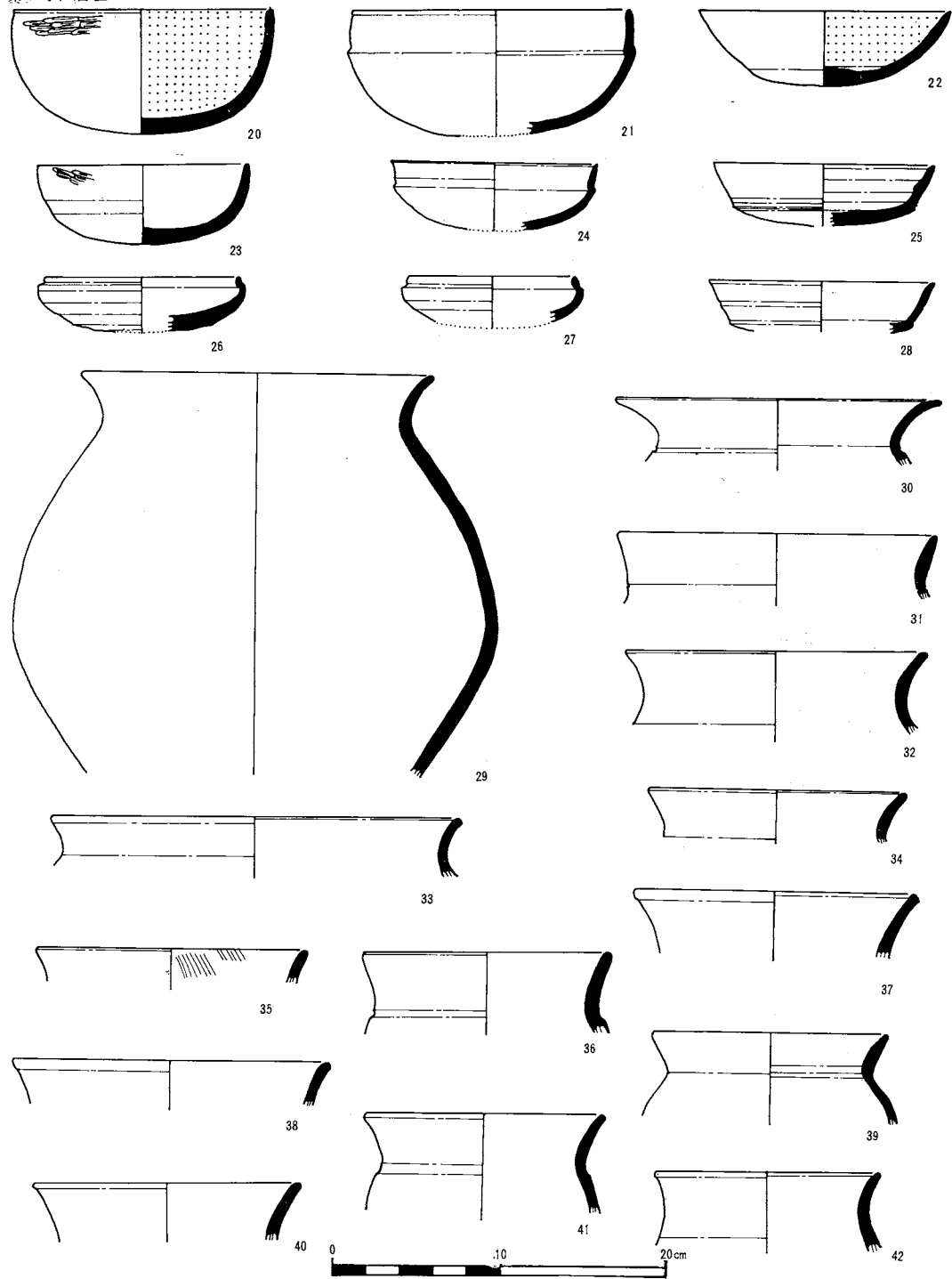
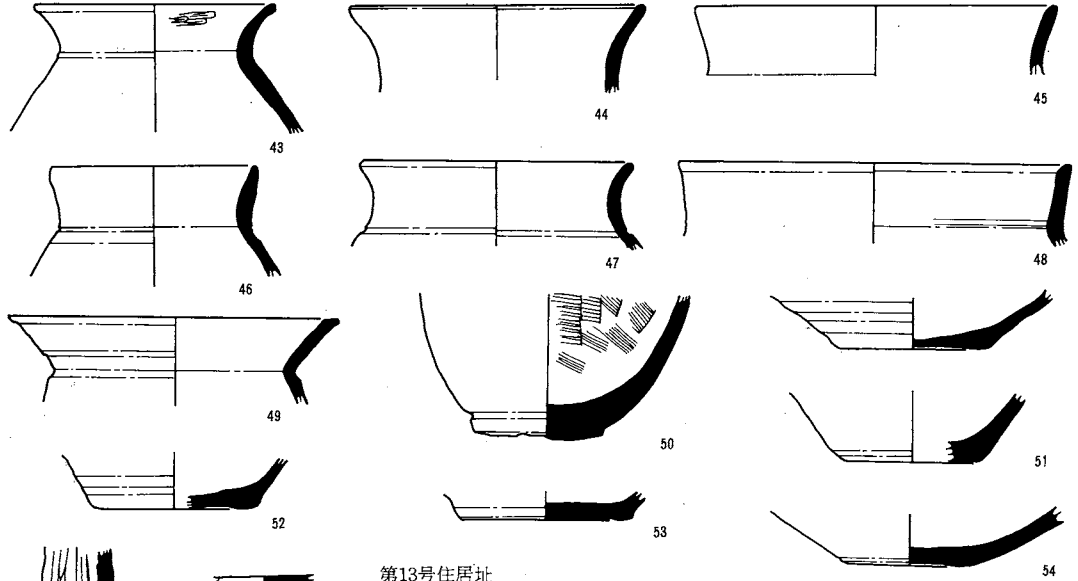


図 38 金鑄場遺跡12号住居址(その1)出土土器実測図

第12号住居址



第13号住居址

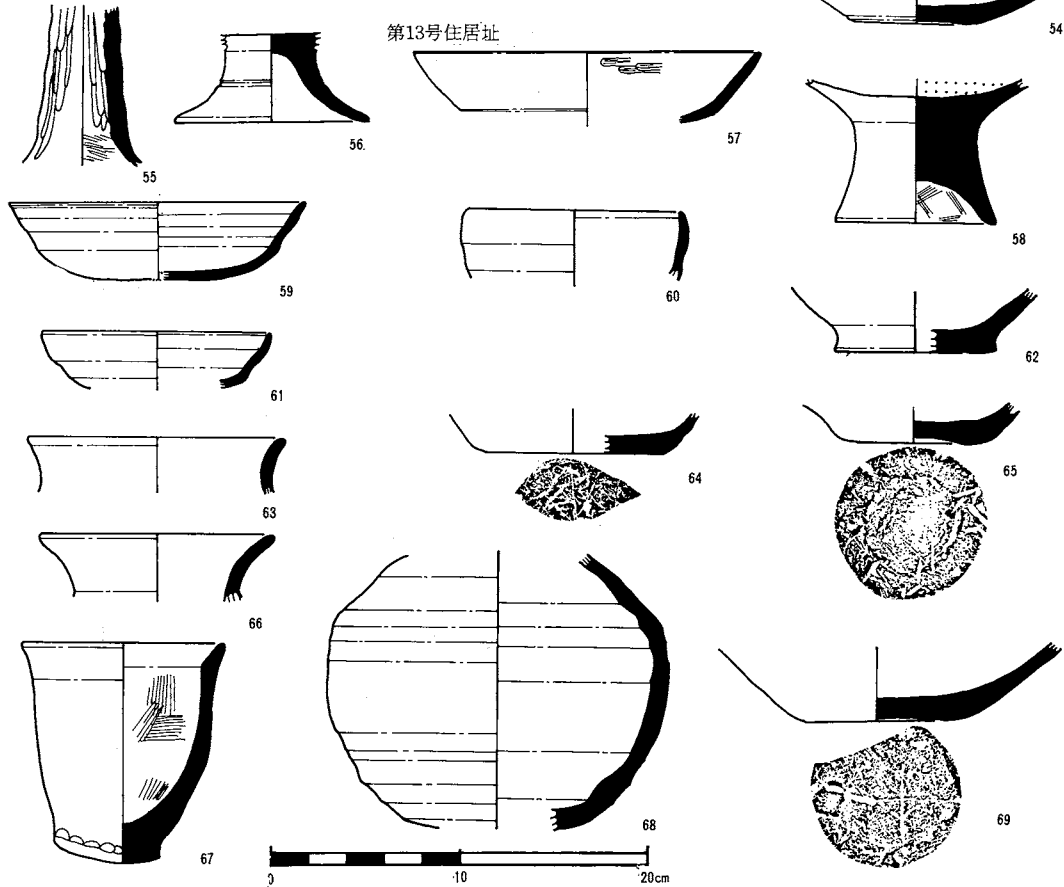
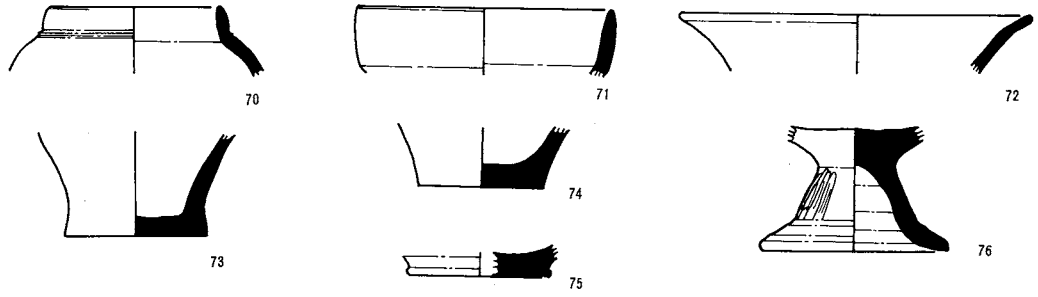


図 39 金鑄場遺跡12号住居址(その2), 13号住居址出土土器実測図

第15号住居址



第17号住居址

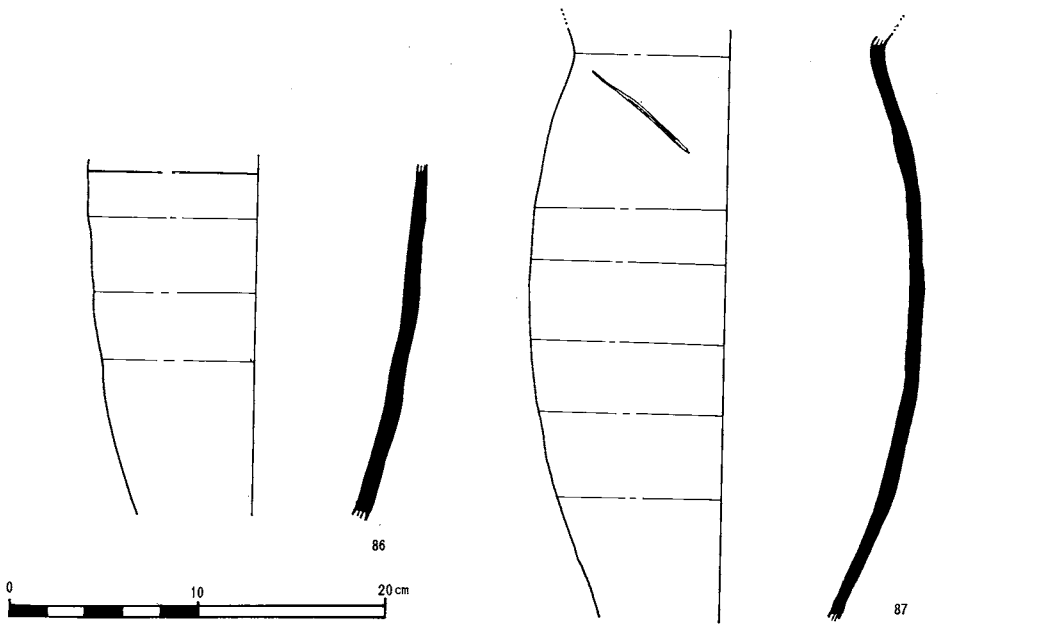
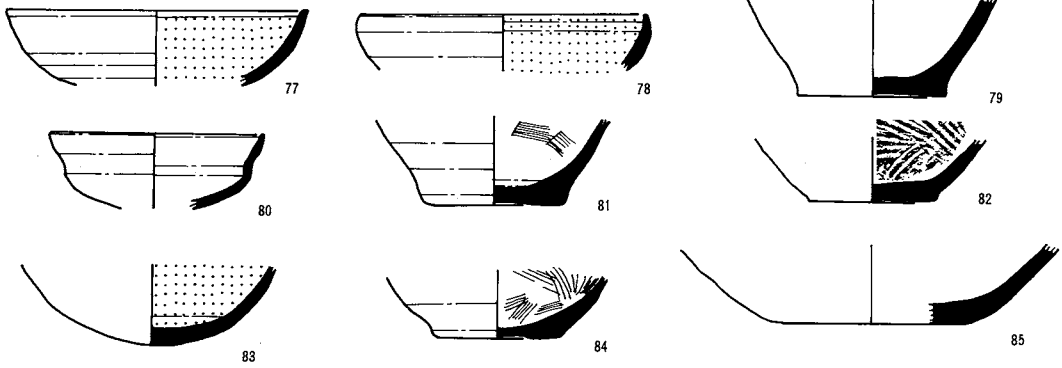


图 40 金铸场遗迹15・17号住居址出土土器实测图

第16号住居址

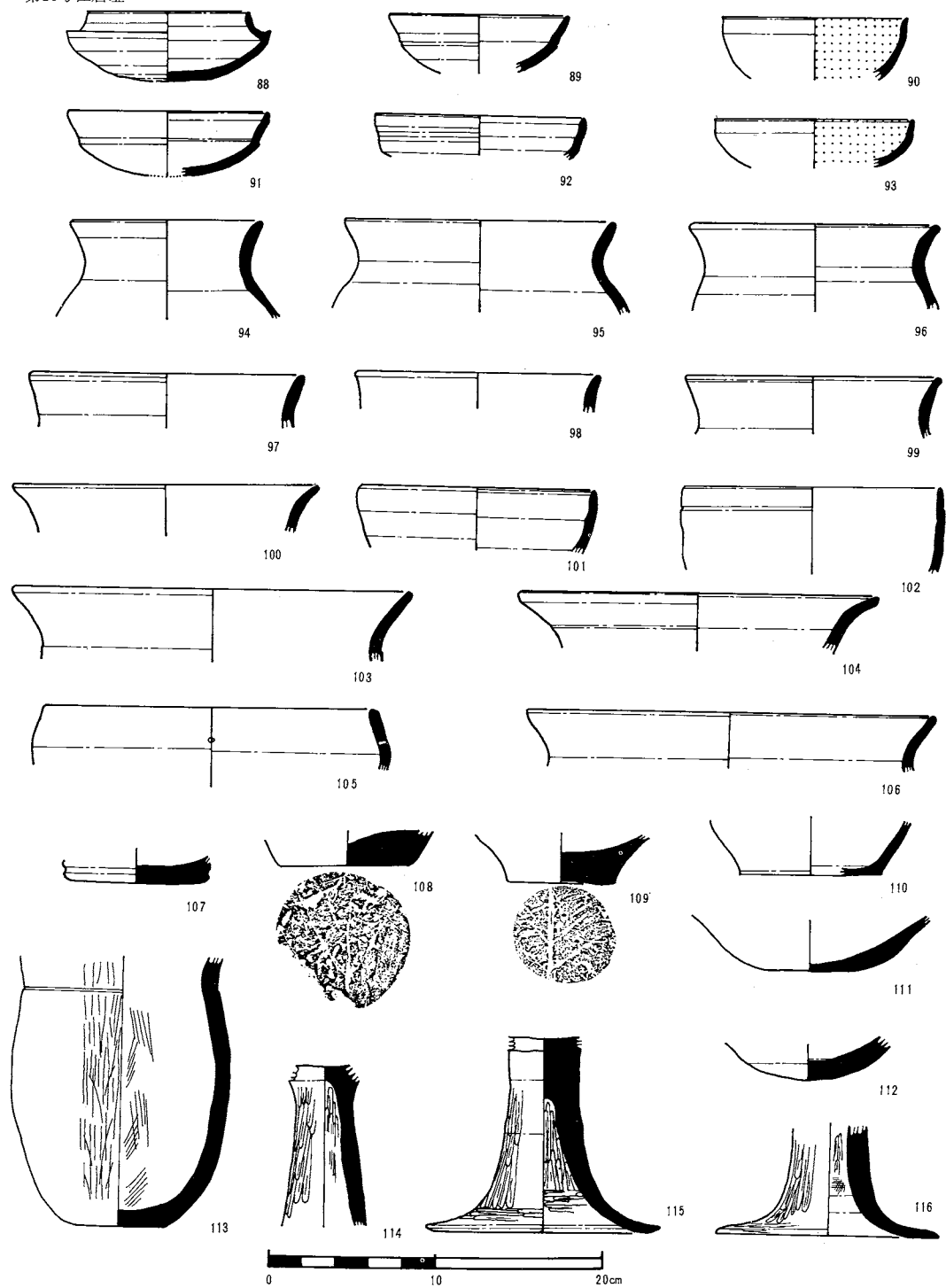
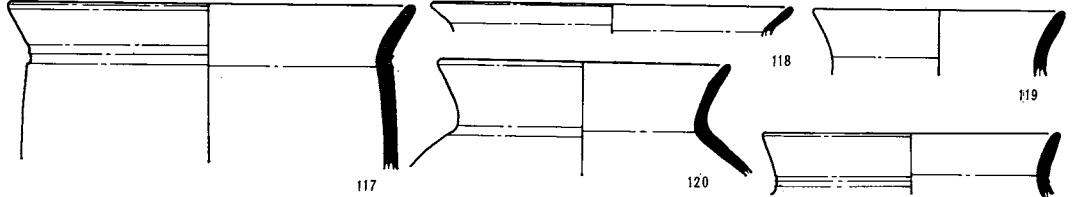
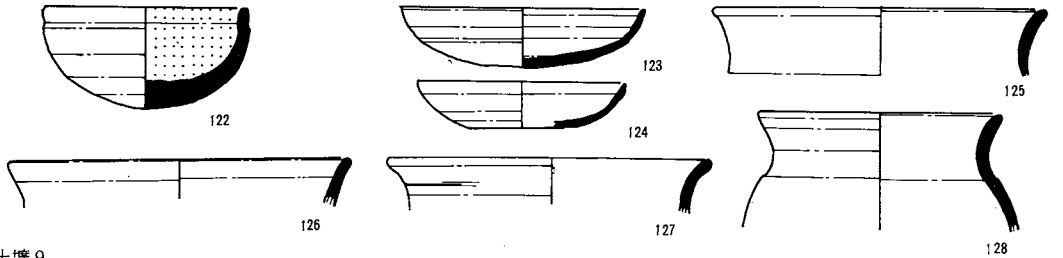


图 41 金铸场遗迹16号住居址出土土器实测图

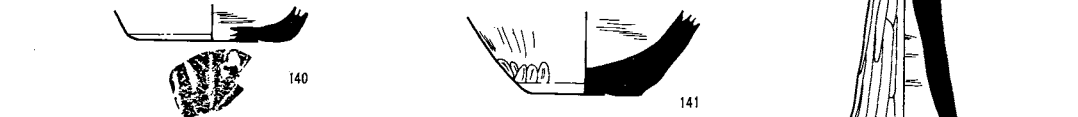
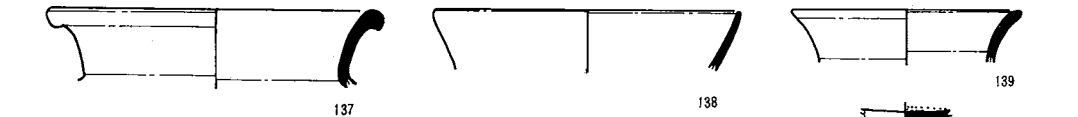
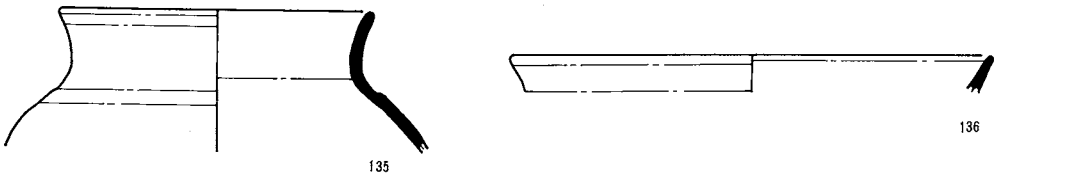
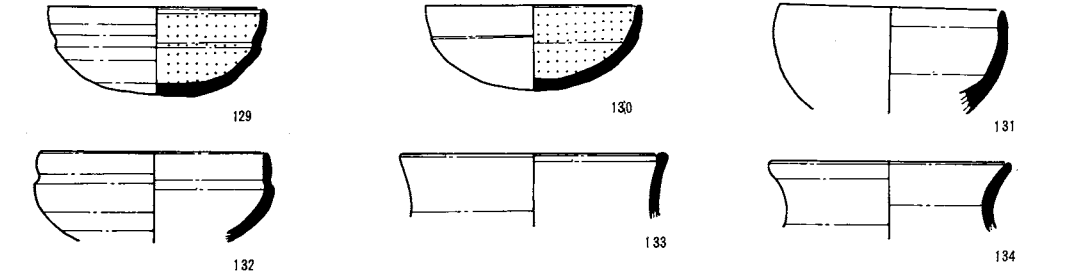
土坑 7



土坑 8



土坑 9



土坑 12

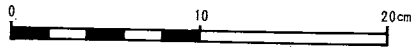
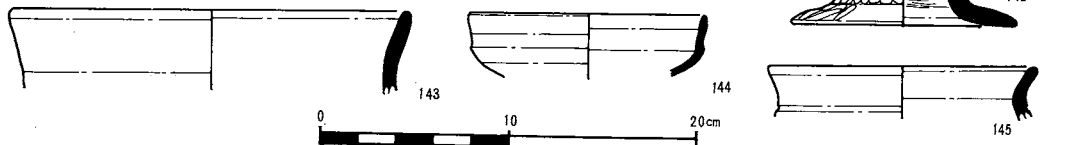
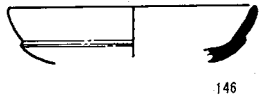


图 42 金铸场遗迹土坑 7 ~ 9 · 12 出土土器实测图

集石 1



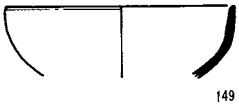
146



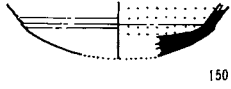
147



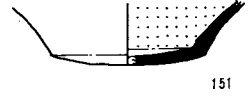
148



149



150



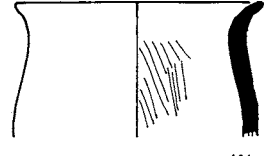
151



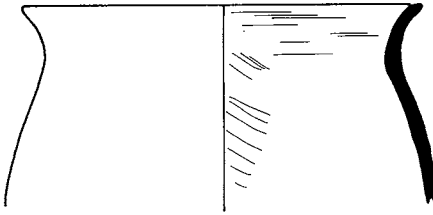
152



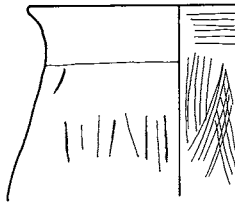
153



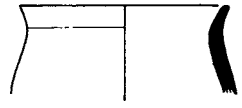
154



155



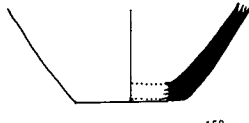
156



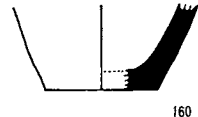
157



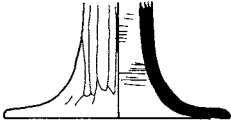
158



159



160



163



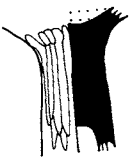
161



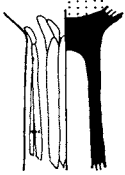
162



164



165

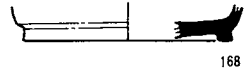


166

集石 2



167



168

图 43 金铸场遗迹集石 1・2 出土土器实测图

1号古墳

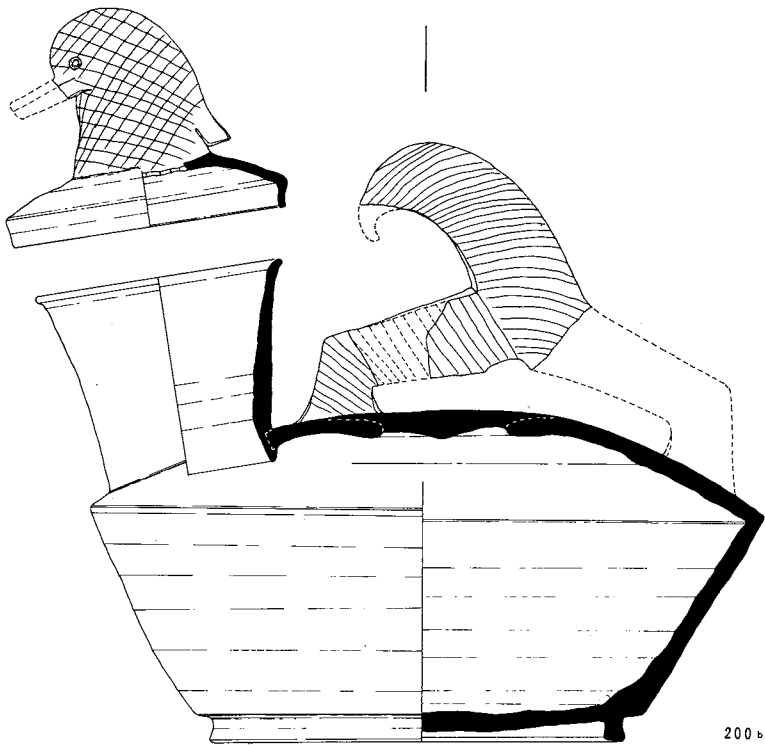
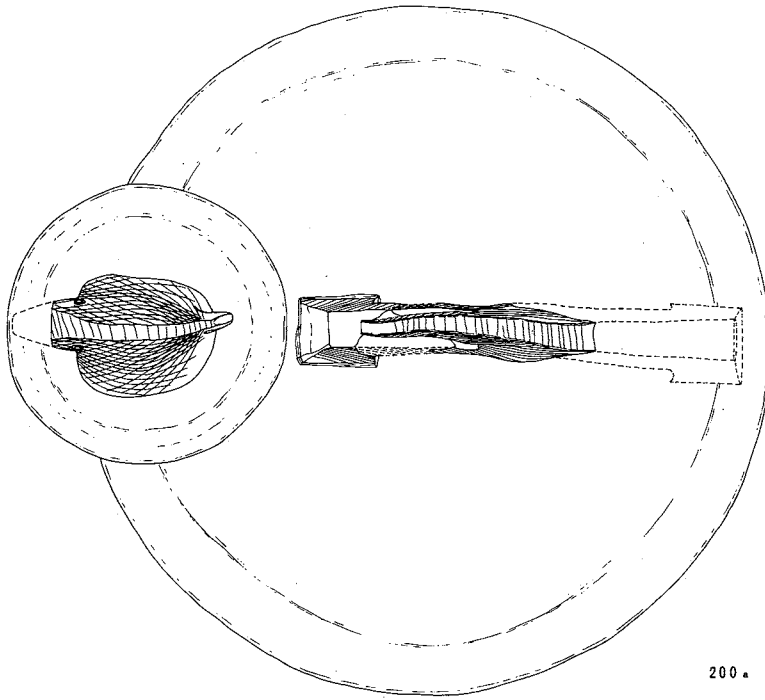


図 44 金鑄場遺跡一号古墳(その1)出土土器実測図

1号古墳

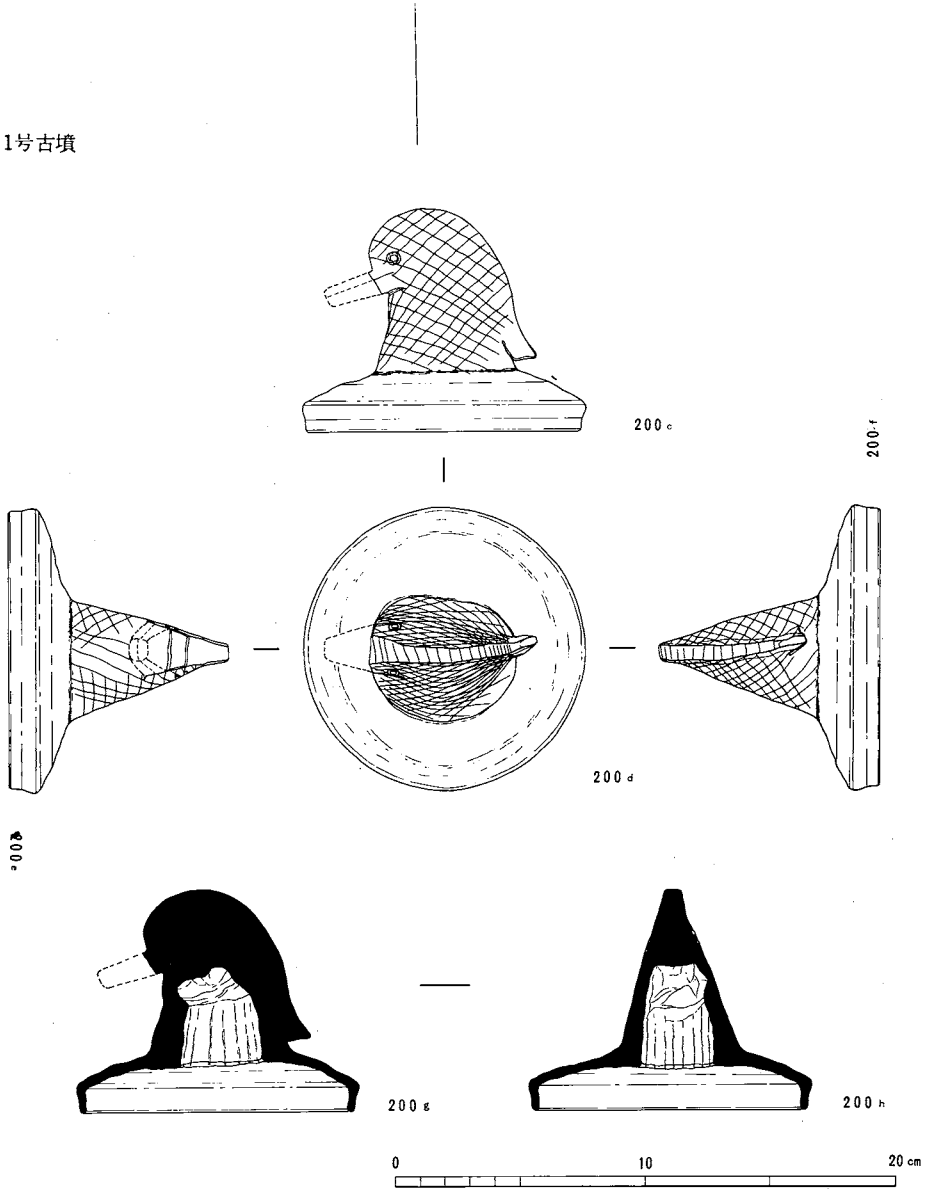
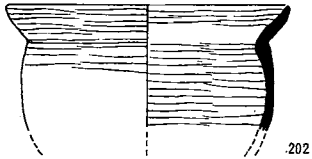


図 45 金鑄場遺跡一号古墳(その2)出土土器実測図

石室



201

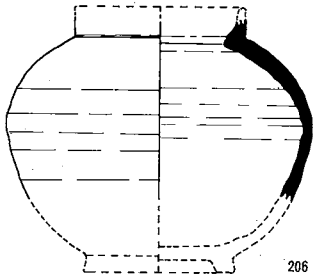


202

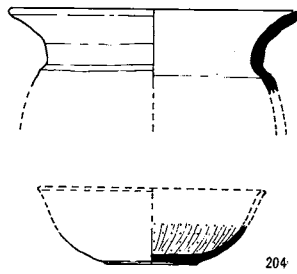
茨道



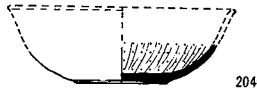
205



206

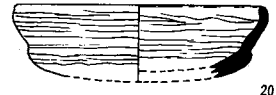


203



204

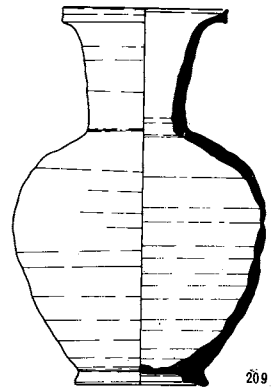
周溝



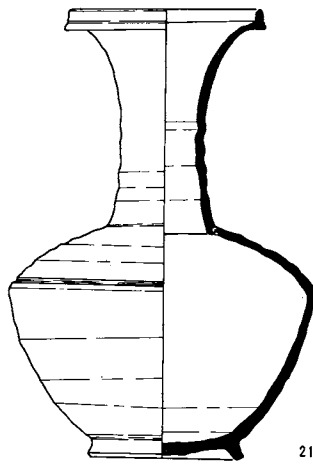
207



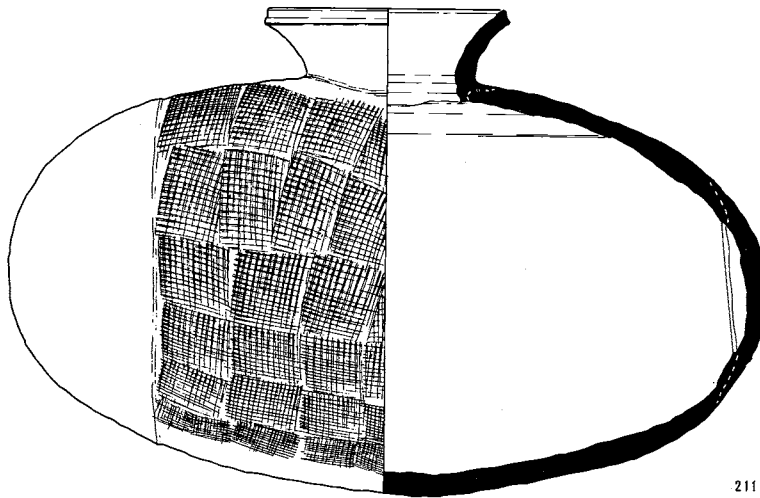
208



209



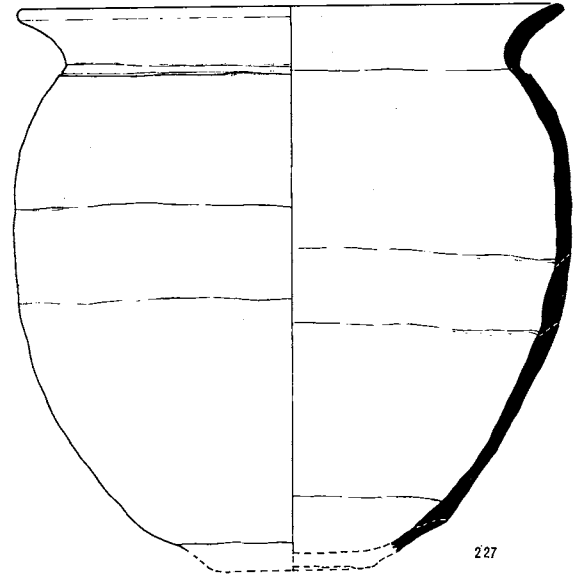
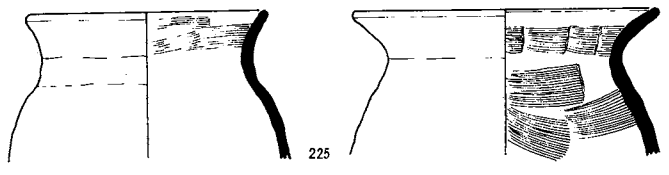
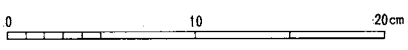
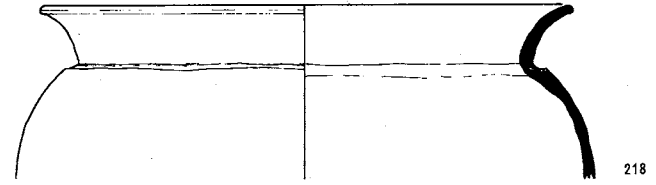
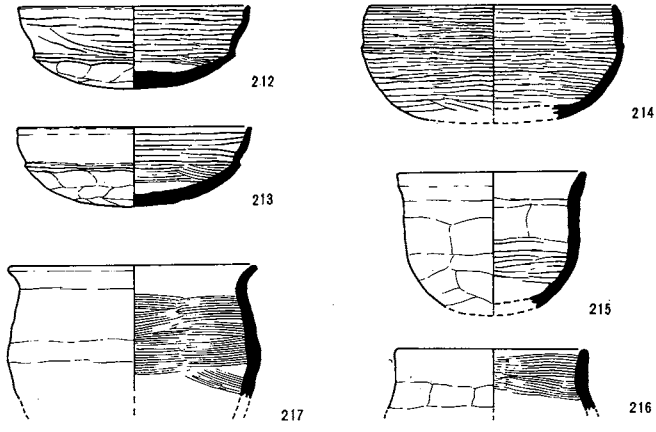
210



211

図 46 金鑄場遺跡一号古墳 (その3) 出土土器実測図

第18号住居址



第19号住居址

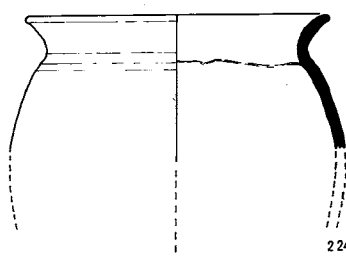
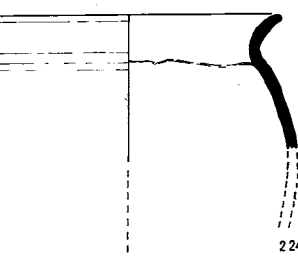
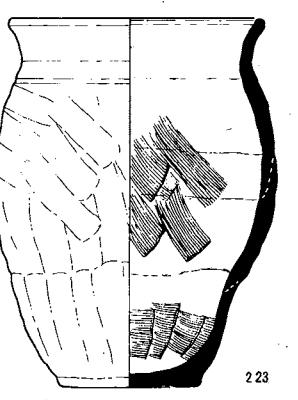
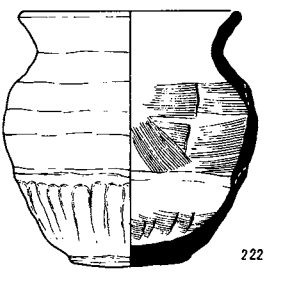
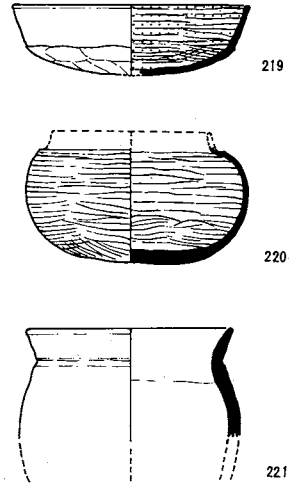
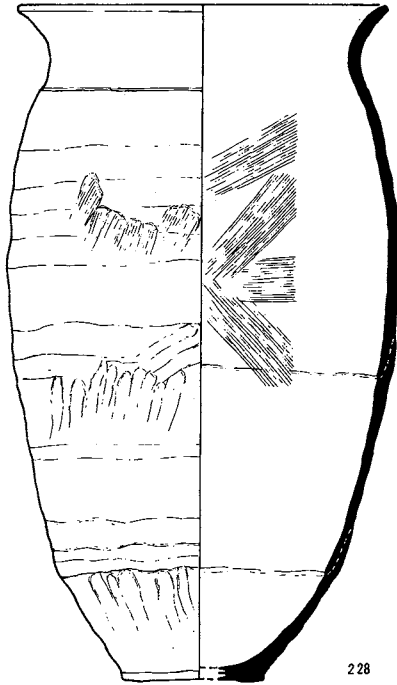
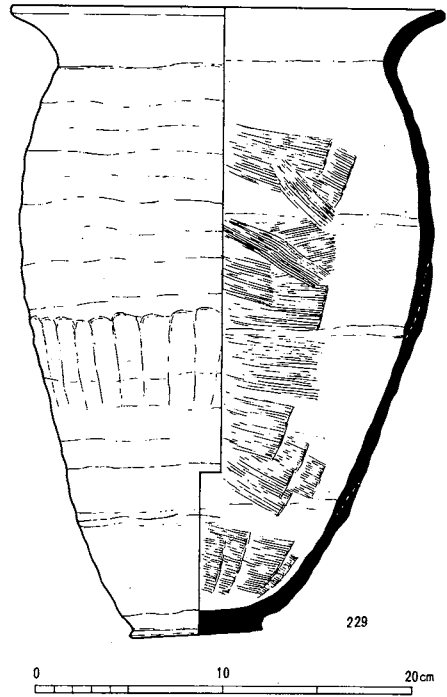


図 47 金鑄場遺跡18・19住居址出土土器(その1)実測図

第18号住居址



第19号住居址



第20号住居址

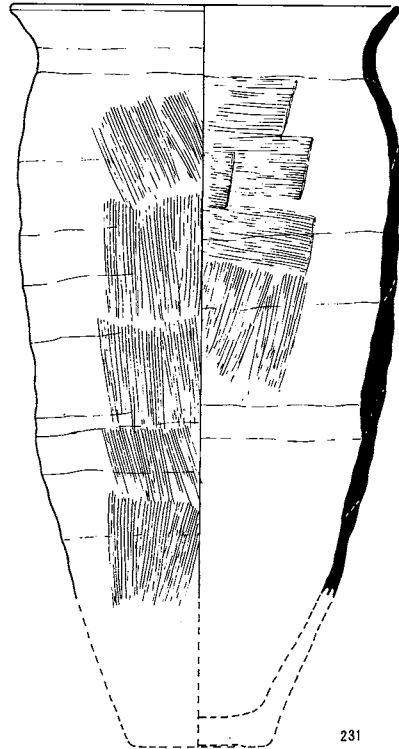
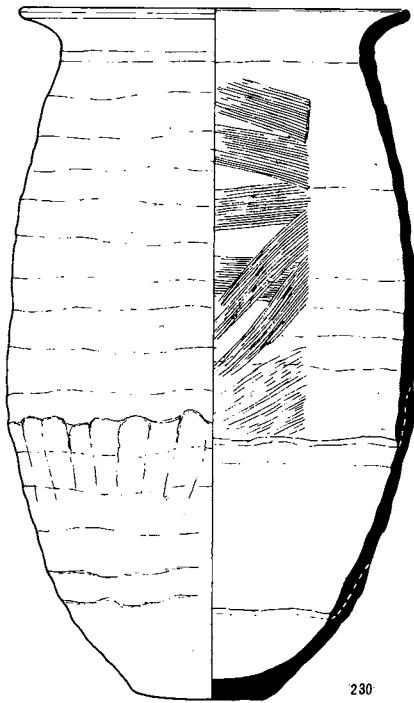
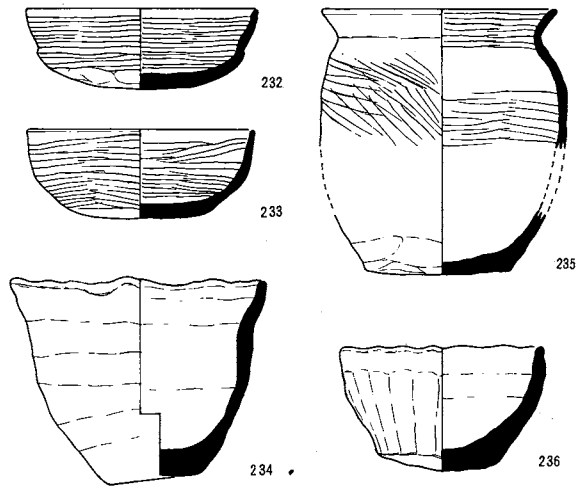
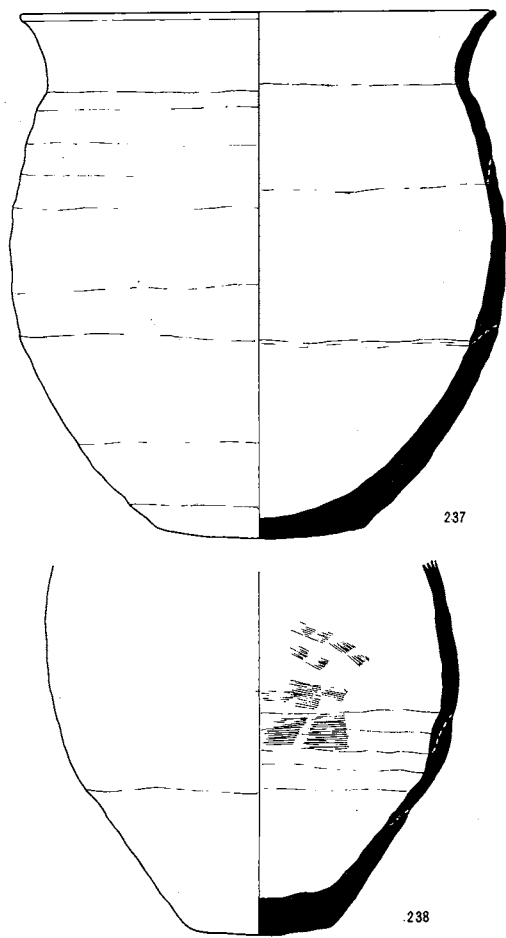
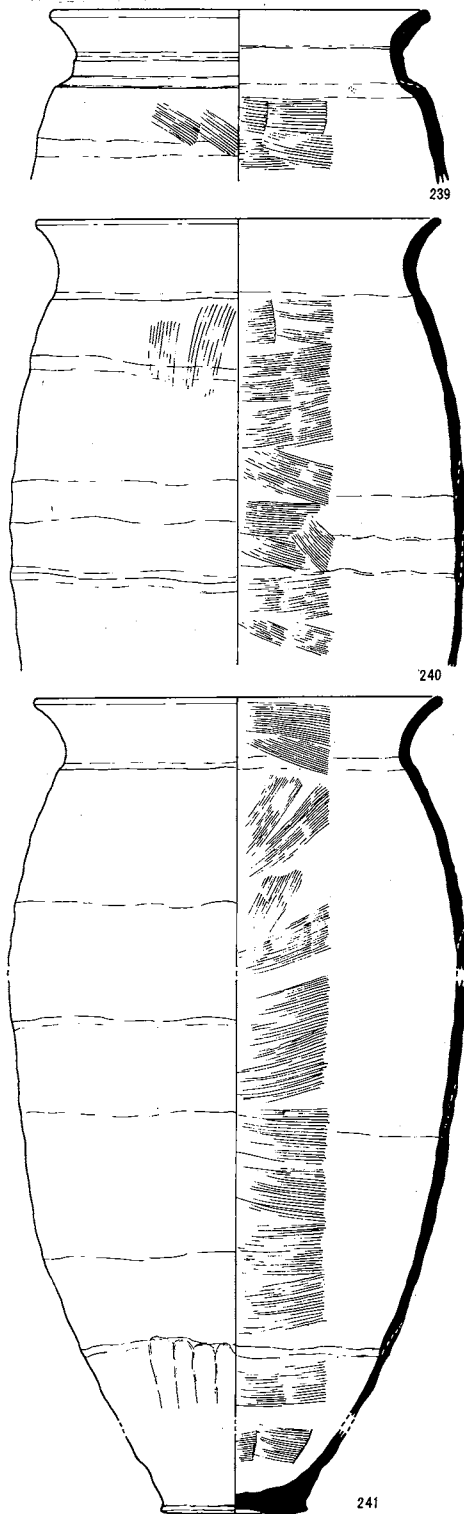


図 48 金鑄場遺跡18・19号住居址(その2), 20号住居址(その1)出土土器実測図

第20号住居址



第21号住居址



0 10 20 cm

図 49 金鑄場遺跡20号住居址(その2), 21号住居址(その1)出土土器実測図

第21号住居址

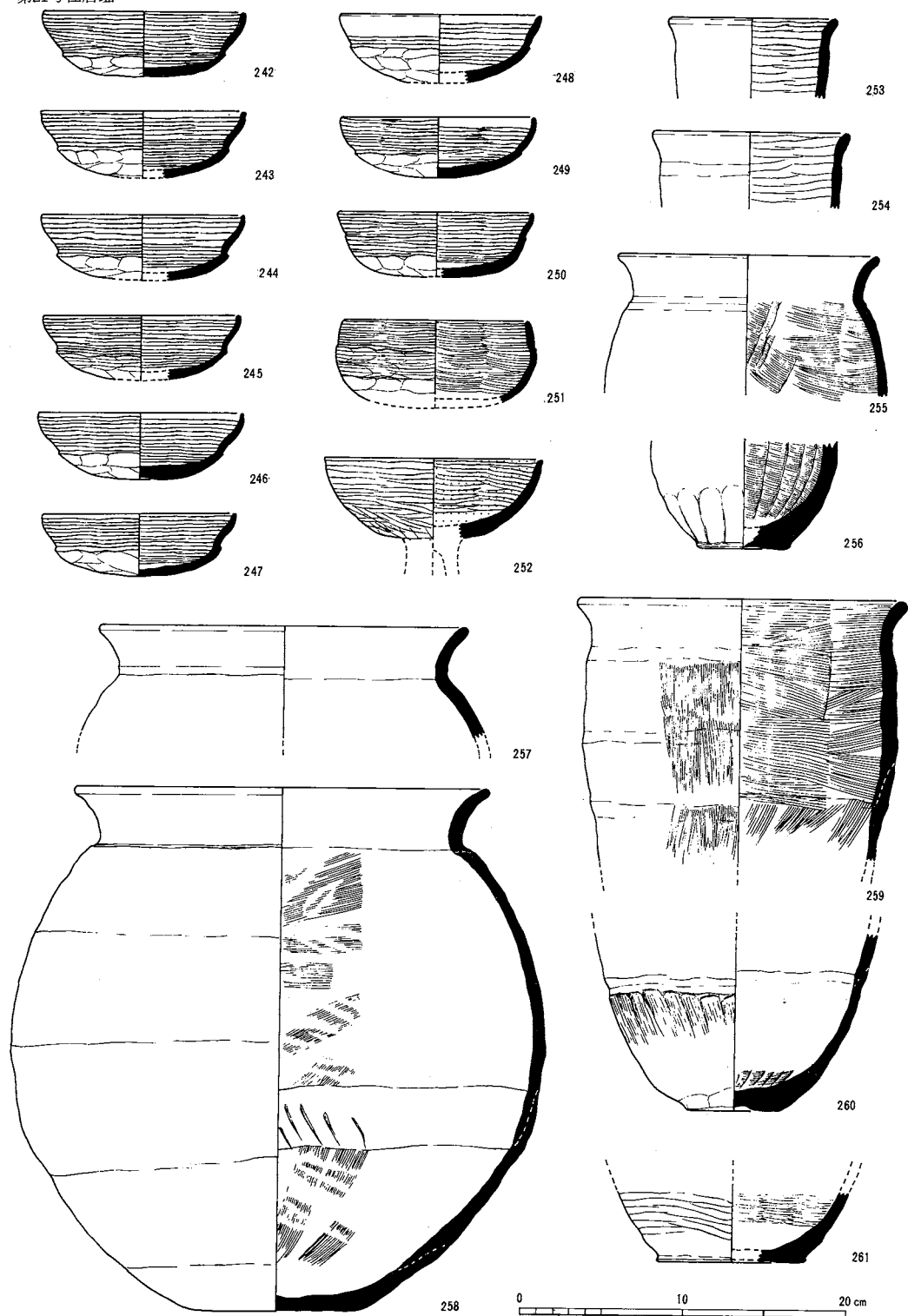


図 50 金鑄場遺跡21号住居址(その2)出土土器実測図

第22号住居址

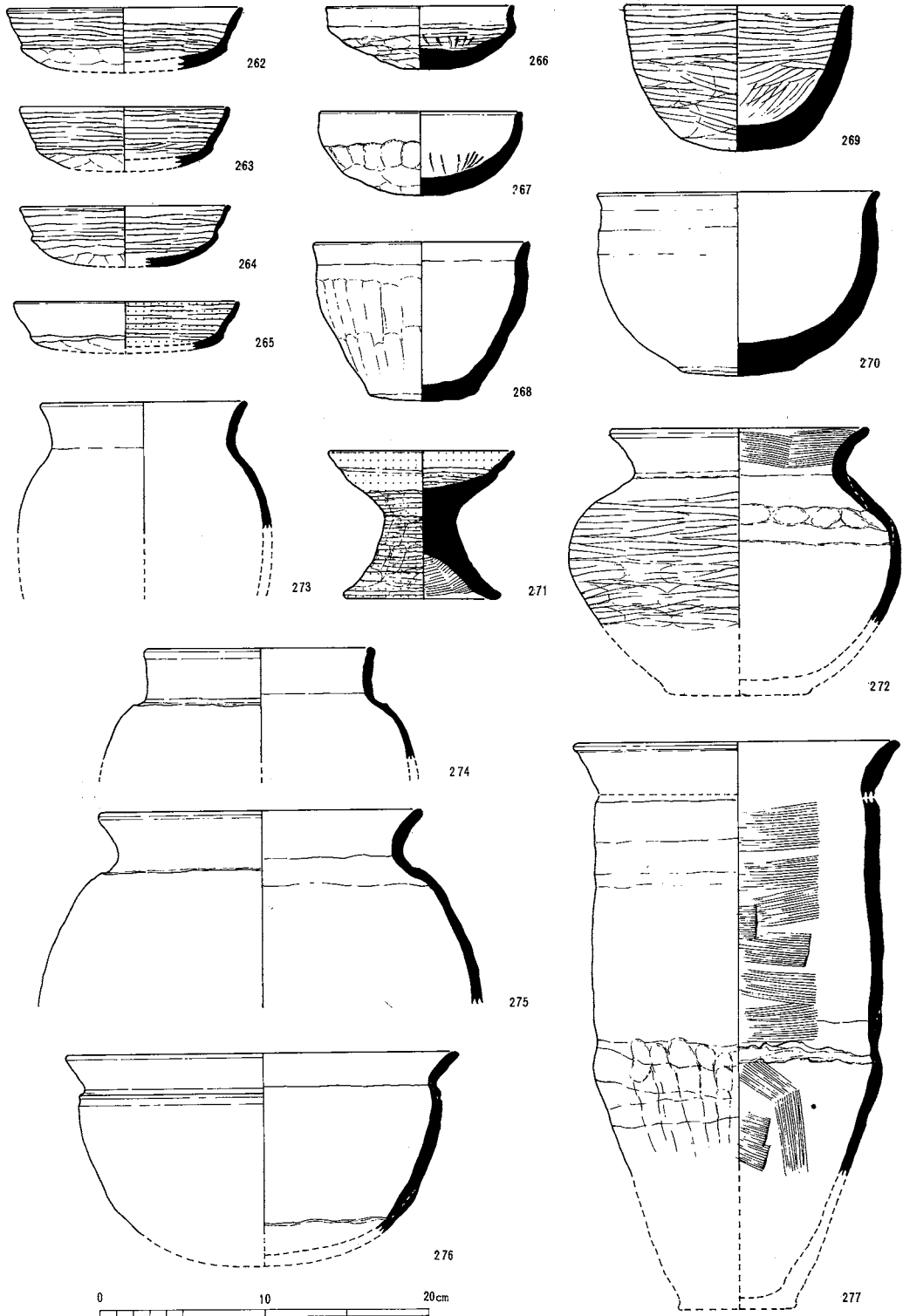
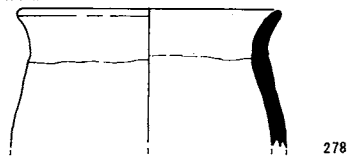
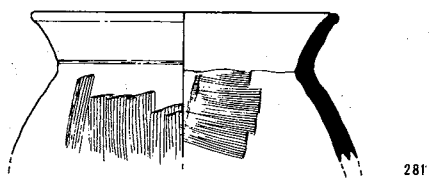


図 51 金鑄場遺跡22号住居址(その1)出土土器実測図

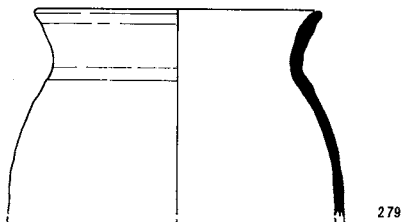
第22号住居址:



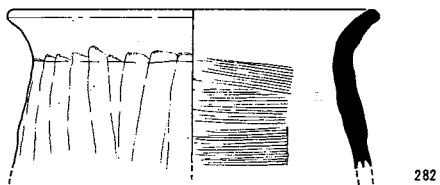
278



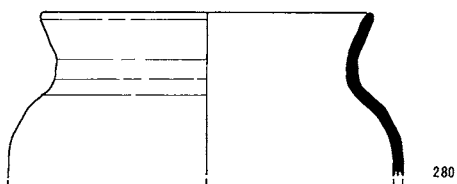
281



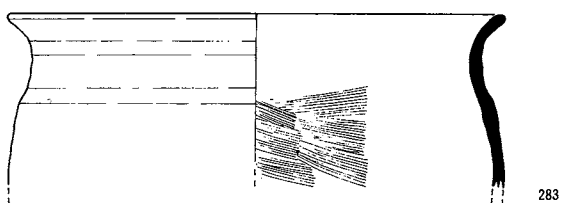
279



282

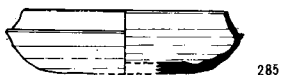


280

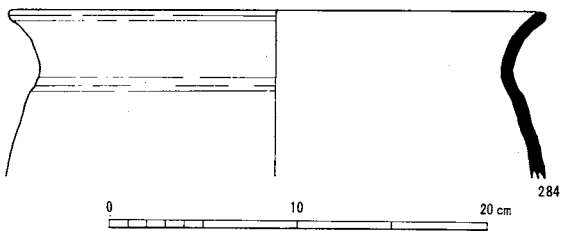


283

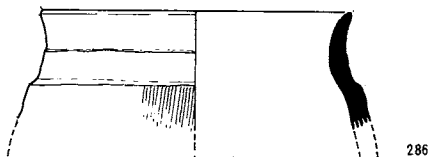
第23号住居址:



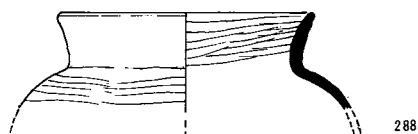
285



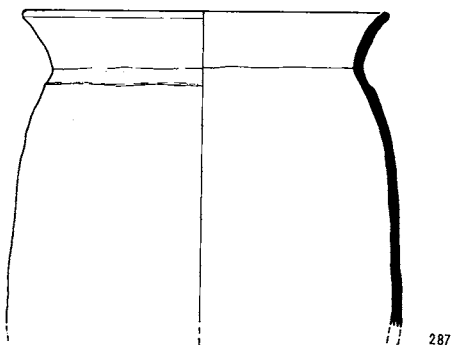
284



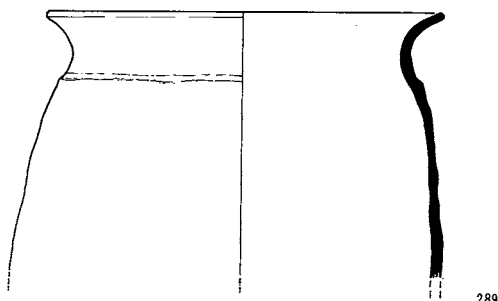
286



288



287

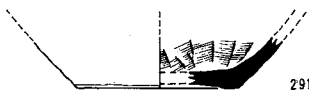


289

第24号住居址:



290



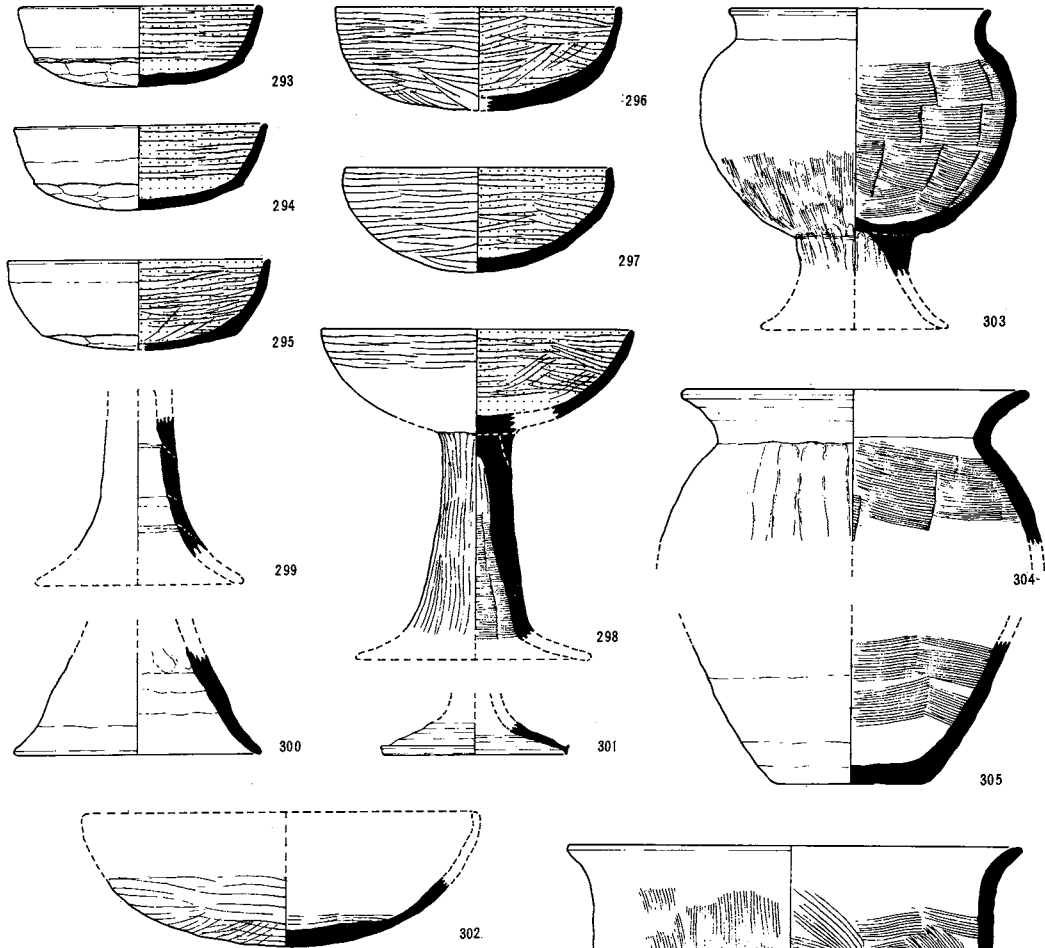
291



292

図 52 金鑄場遺跡22号住居址(その2), 23・24号住居址出土土器実測図

第25号住居址



第26号住居址

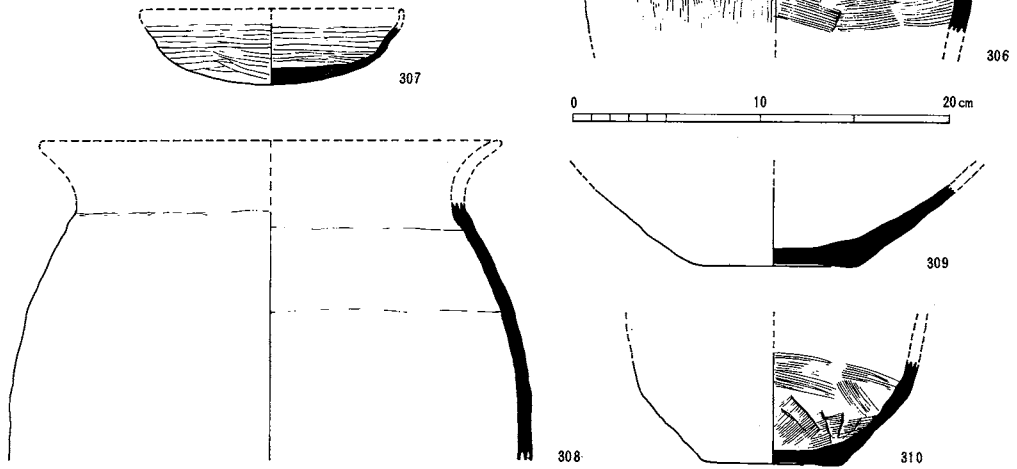


図 53 金鑄場遺跡25・26号住居址出土土器実測図

第27号住居址

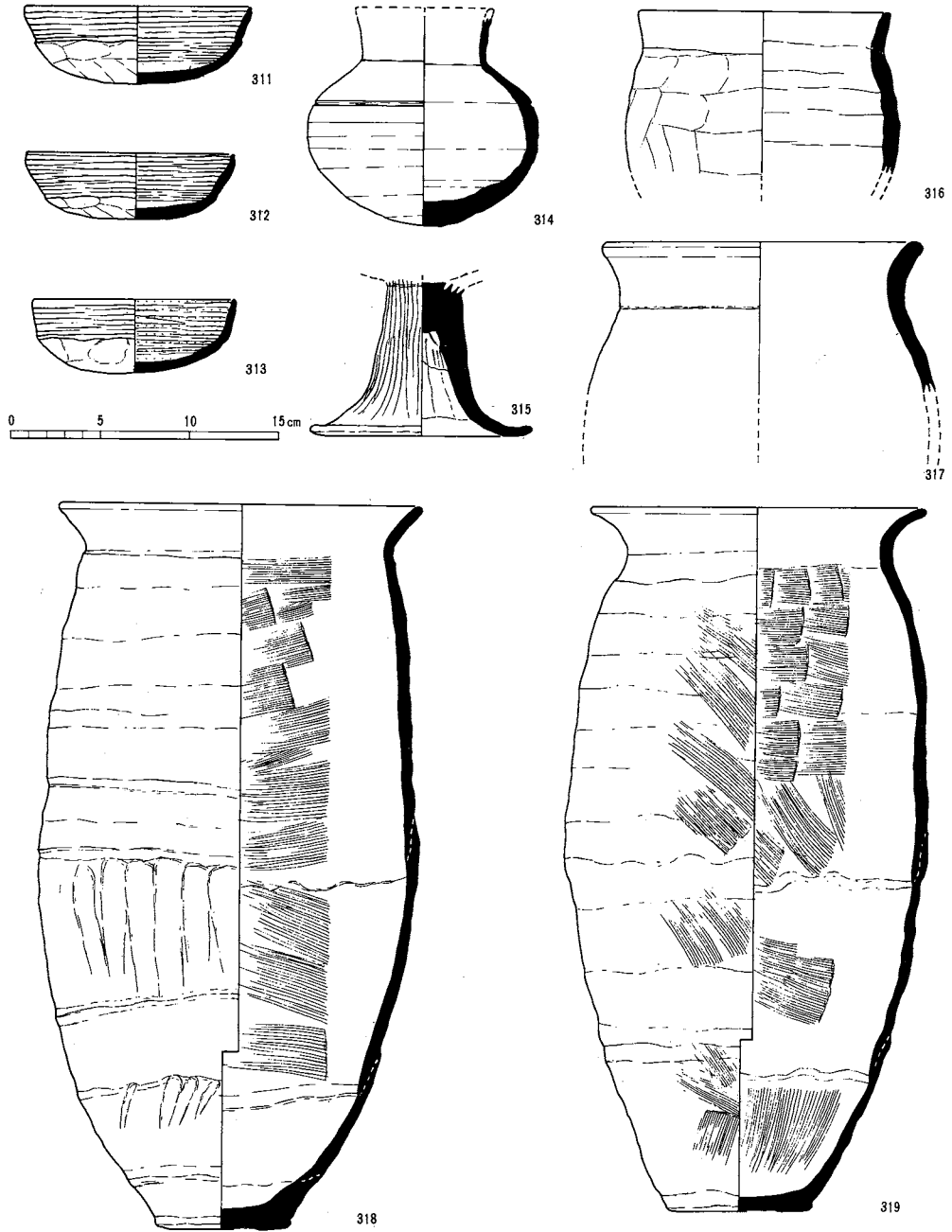
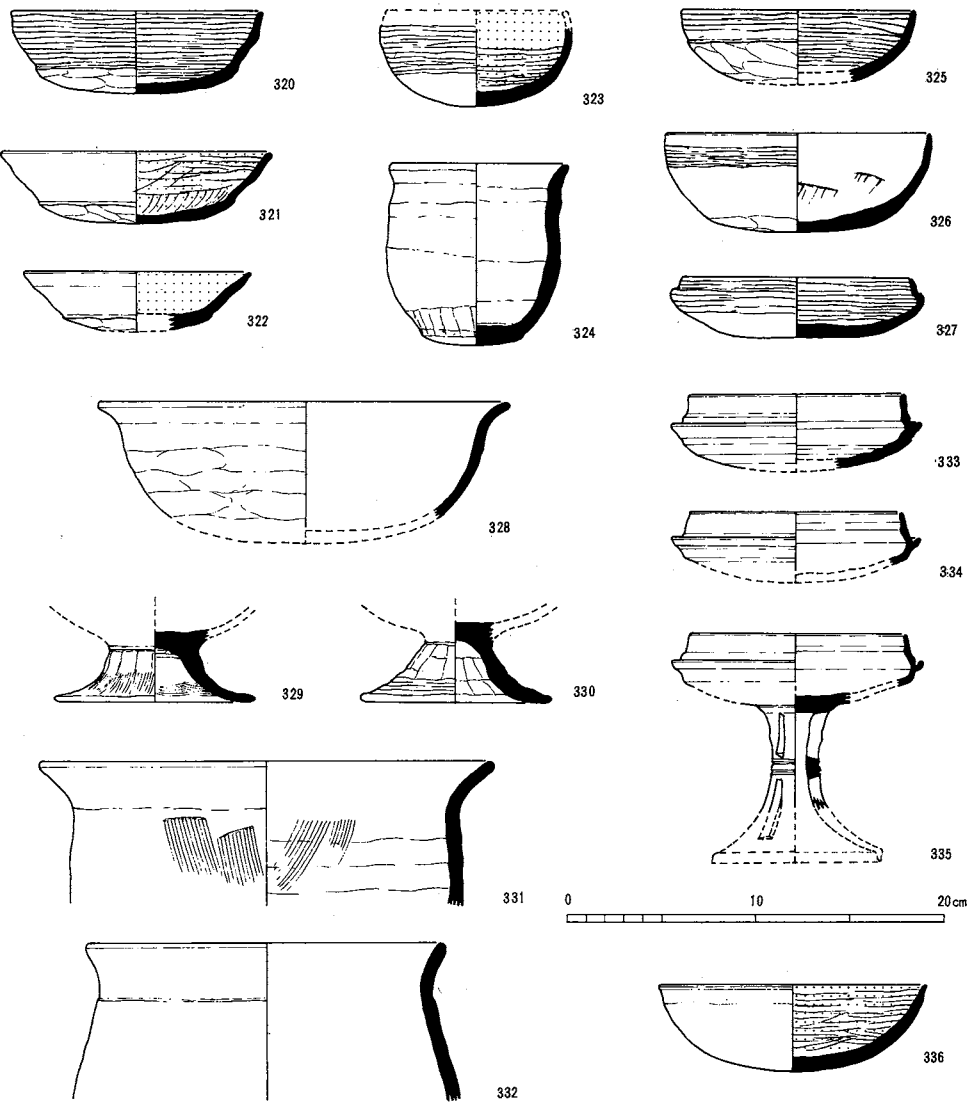


图 54 金铸场遗迹27号住居址出土土器实测图

第28号住居址:



第29号住居址

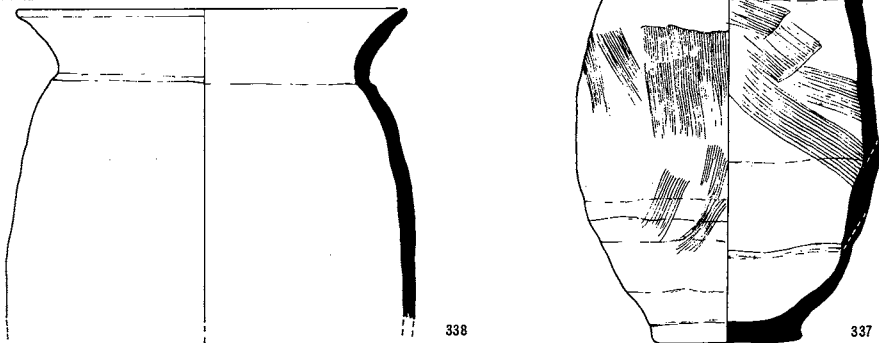
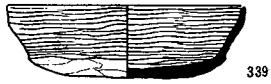


图 55 金铸场遗址28·29号住居址出土土器实测图

第33号住居址:



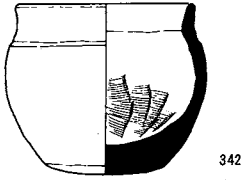
339



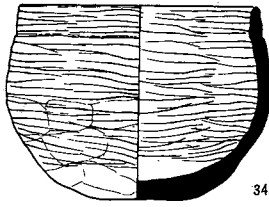
340



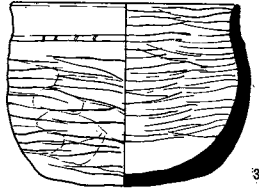
341



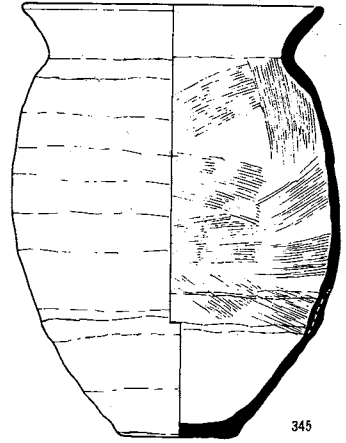
342



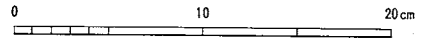
343



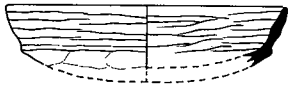
344



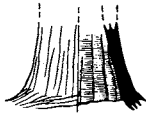
345



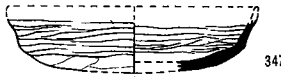
第32号住居址:



346



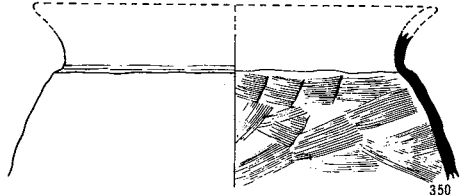
348



347

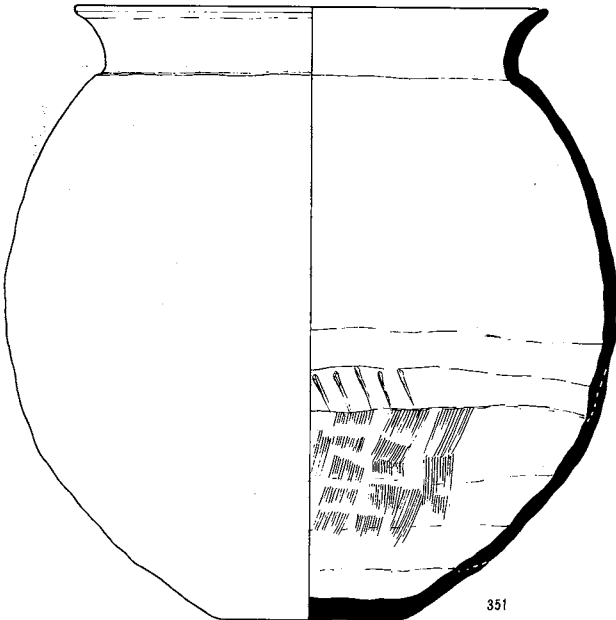


349

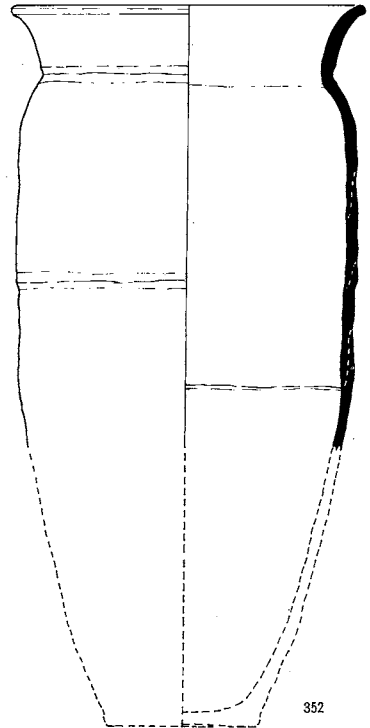


350

第31号住居址:



351



352

图 56 金铸场遗迹31・32・33号住居址出土土器实测图

第34号住居址

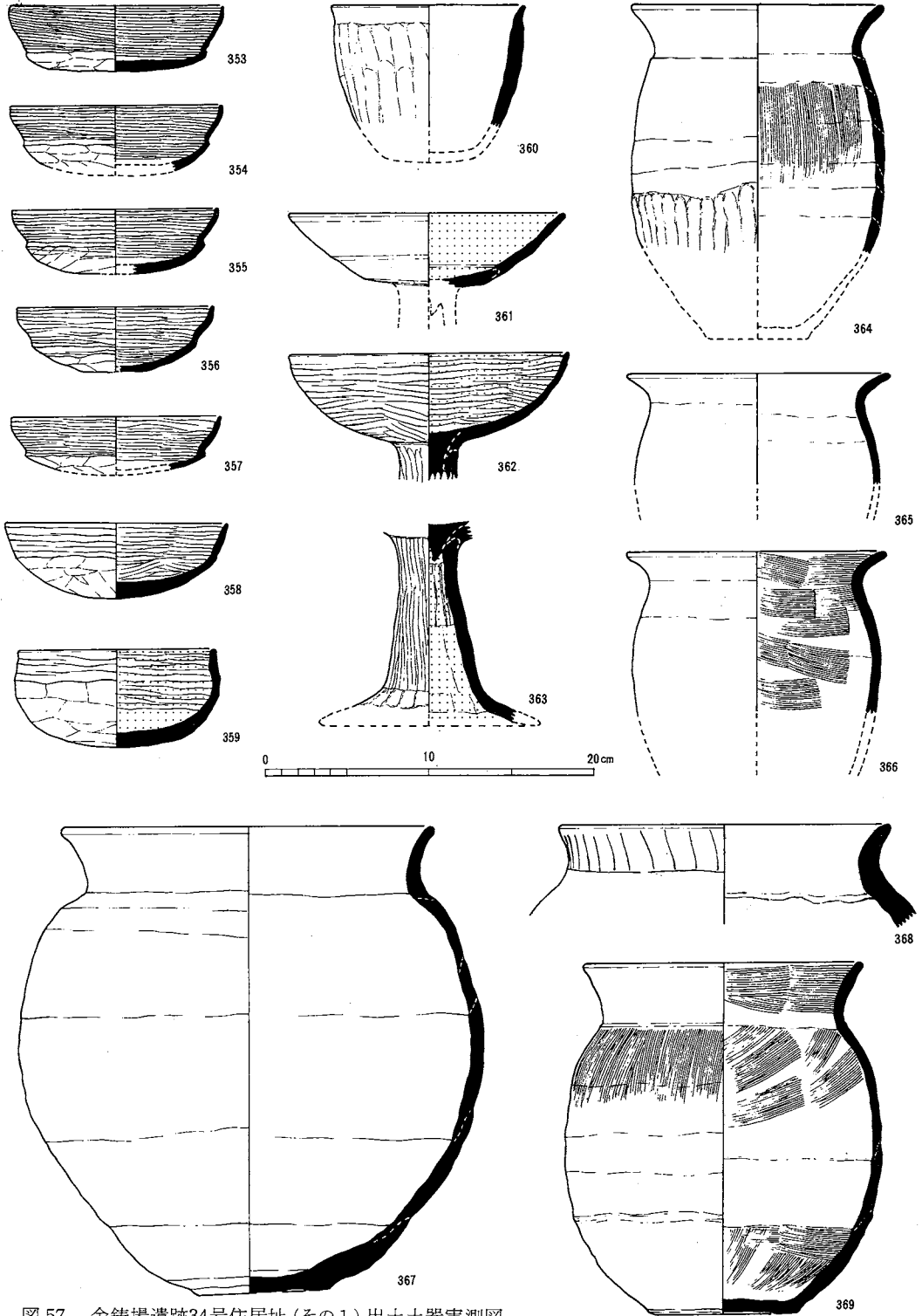
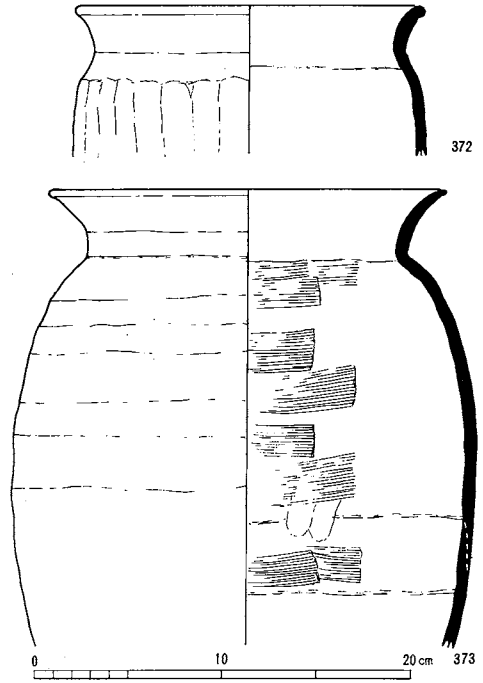
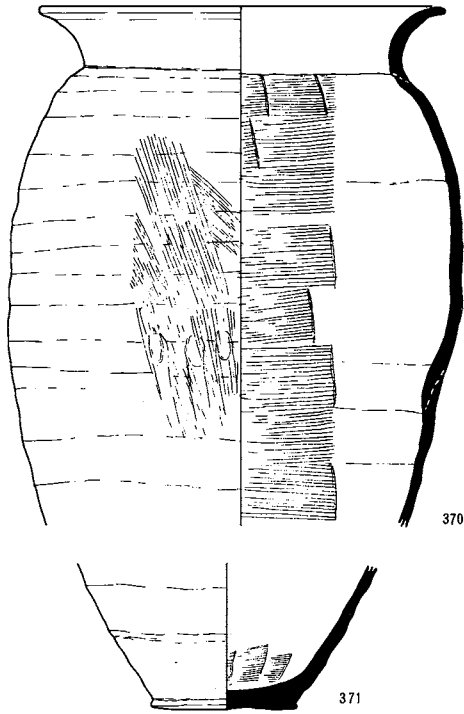
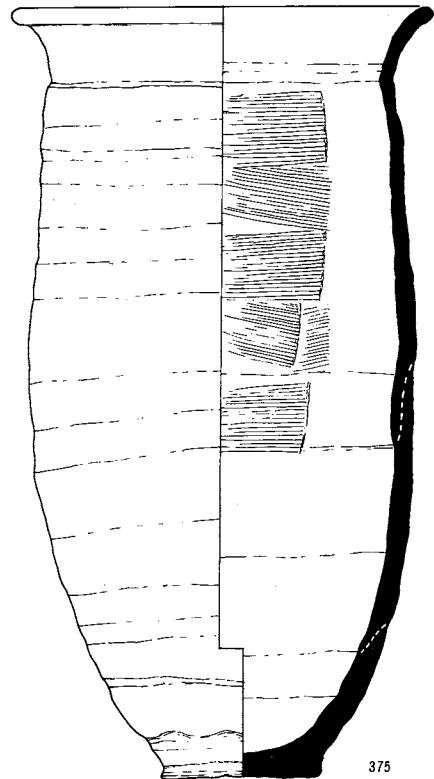
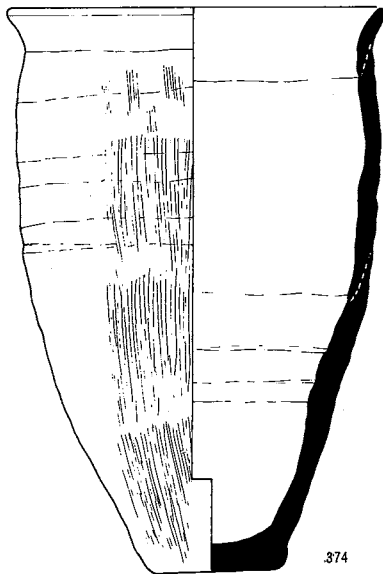


図 57 金鑄場遺跡34号住居址(その1)出土土器実測図

第34号住居址



第39号住居址



第40号住居址



図 58 金鑄場遺跡34号住居址(その2), 39・40号住居址出土土器実測図

第35号住居址

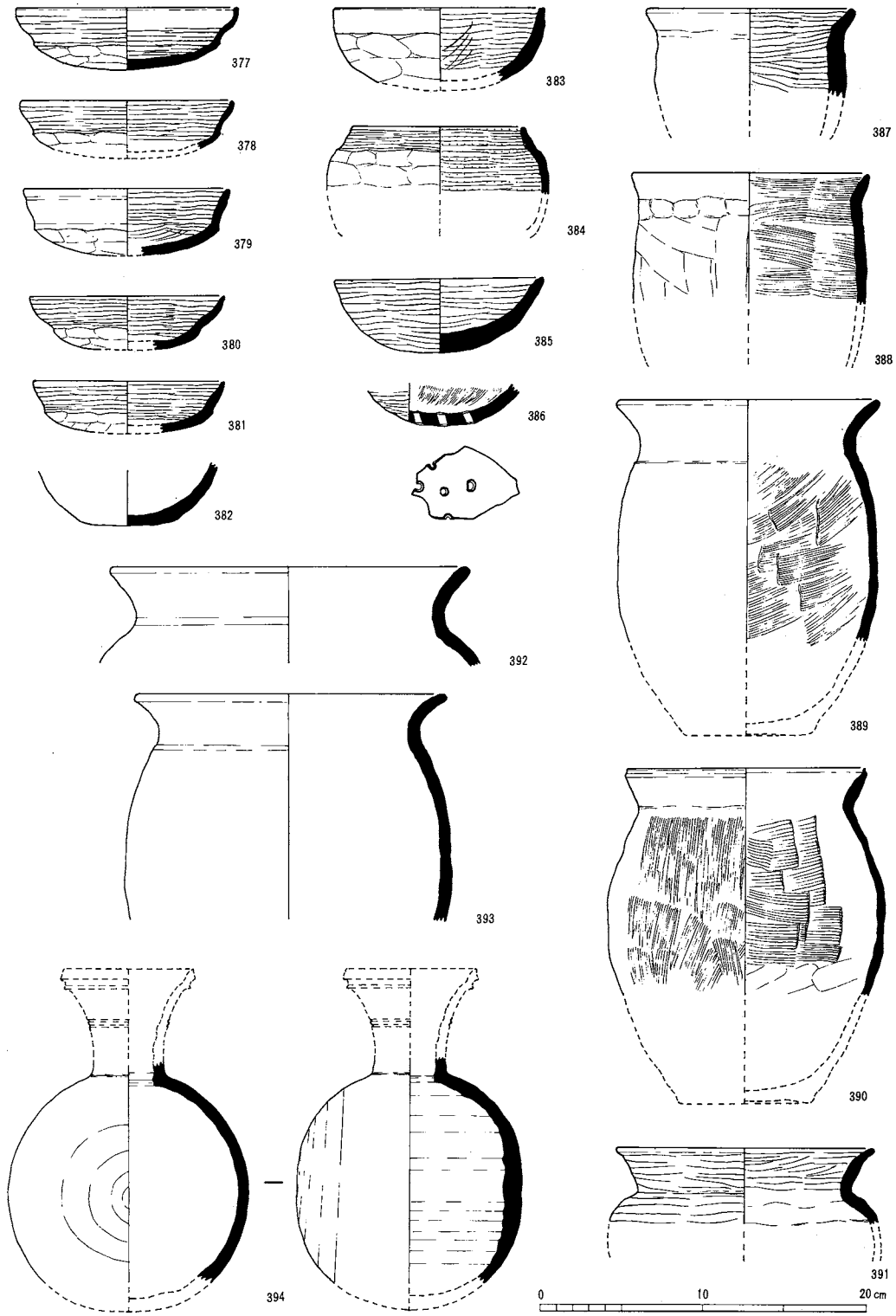


図 59 金鑄場遺跡35号住居址(その1)出土土器実測図

第35号住居址

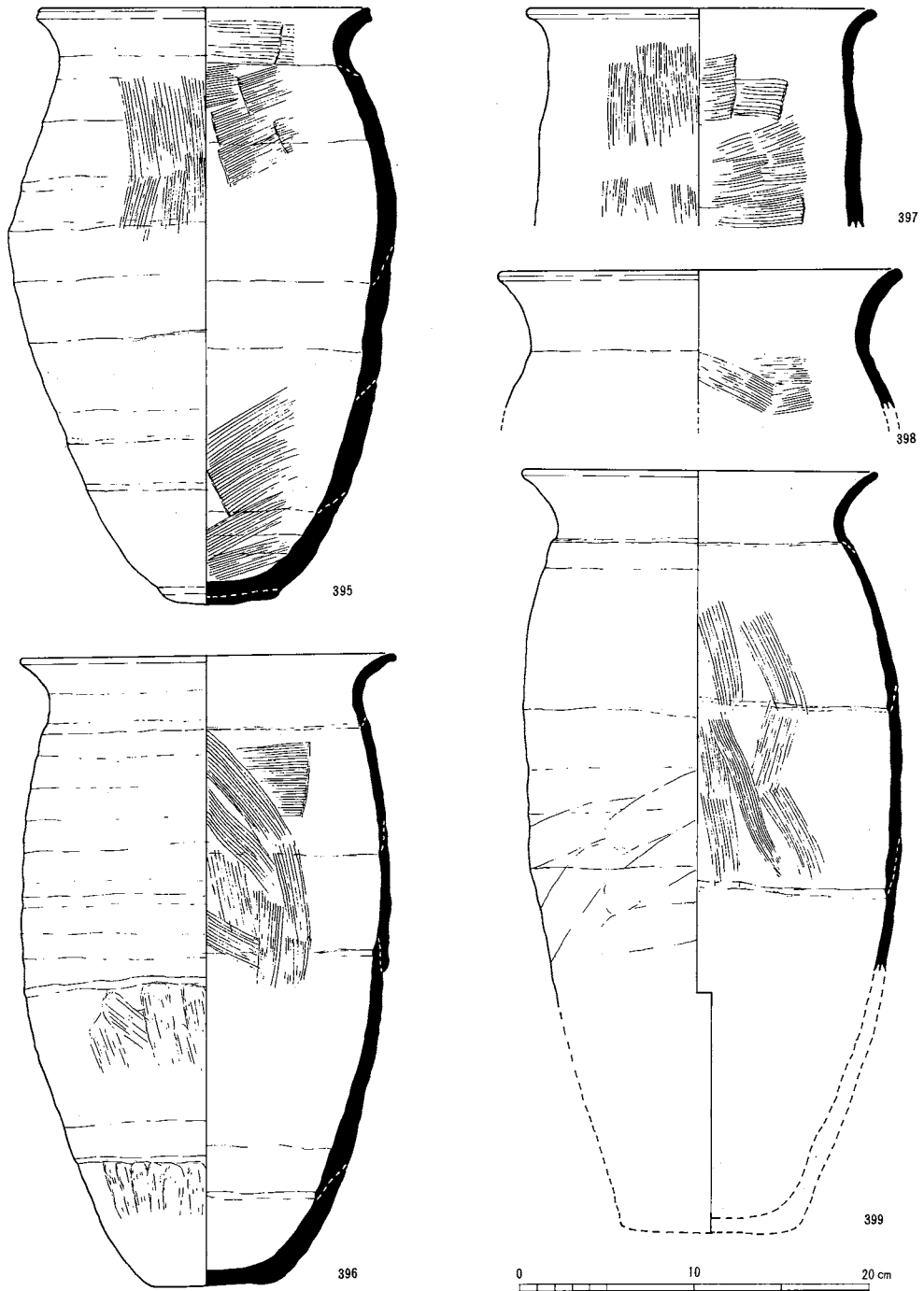


図 60 金鑄場遺跡35号住居址(その2)出土土器実測図

第36号住居址

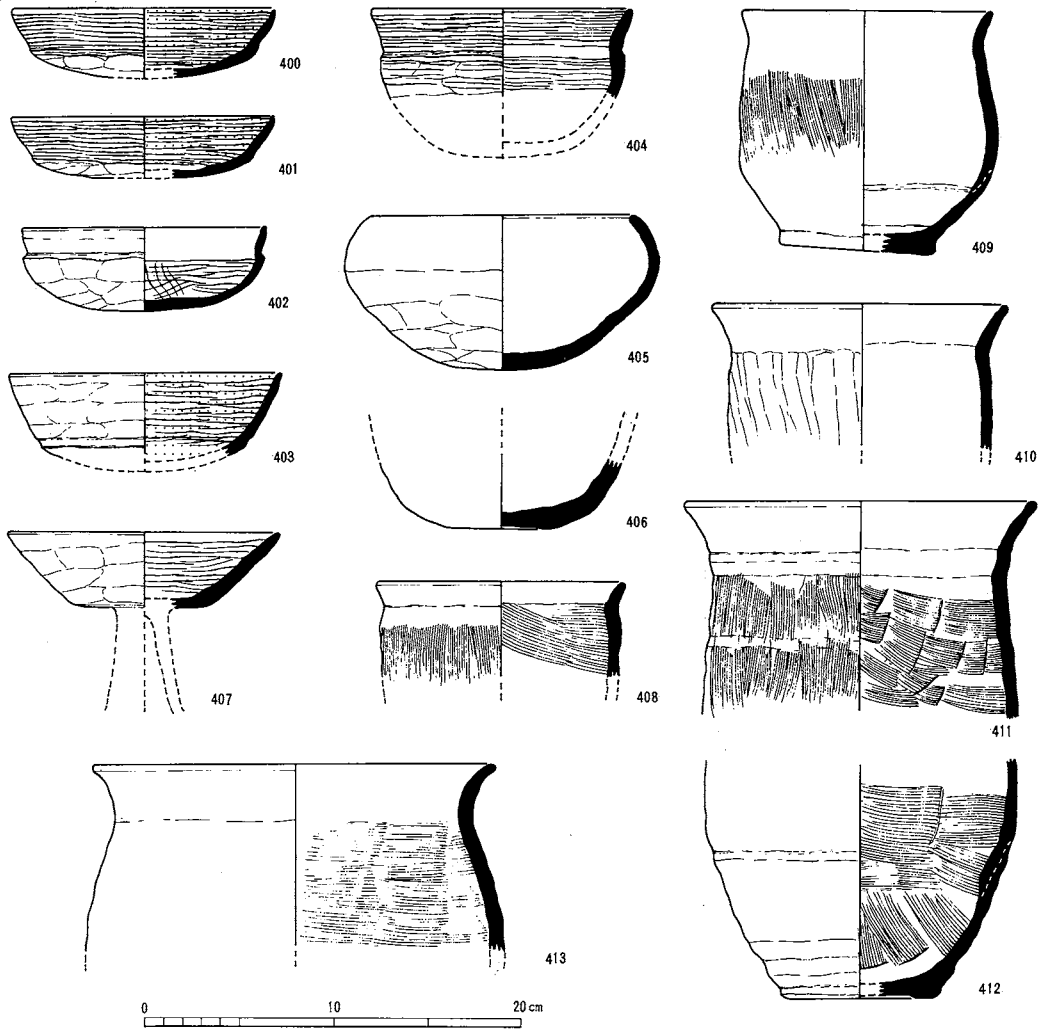
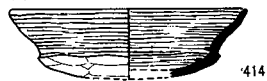
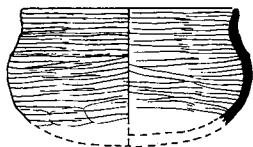


図 61 金鑄場遺跡36号住居址出土土器実測図

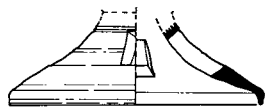
第37号住居址



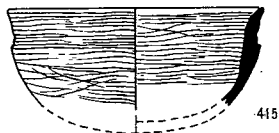
414



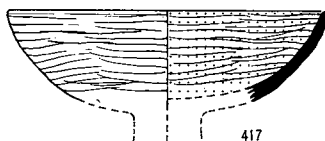
416



418



415

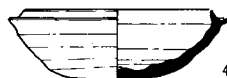


417

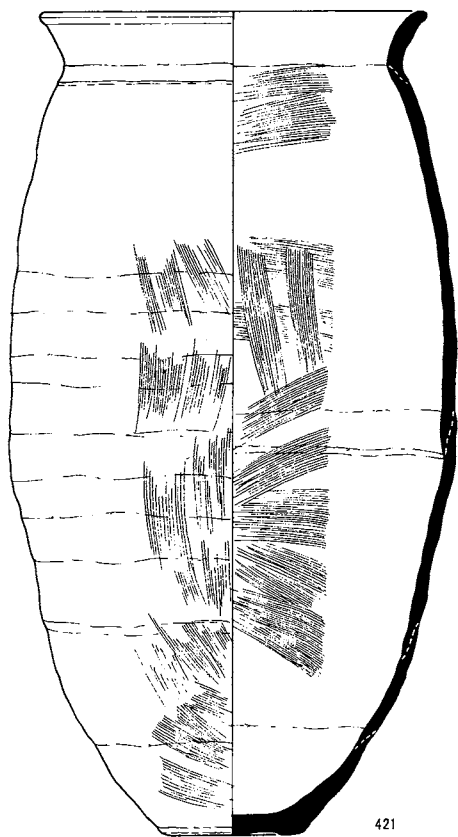
第38号住居址



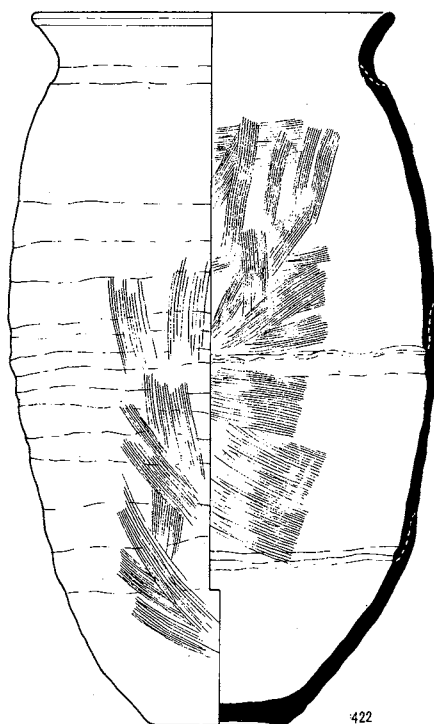
419



420



421



422

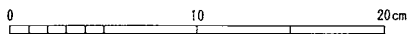


图 62 金铸场遗迹37・38号住居址出土土器实测图

第39号住居址

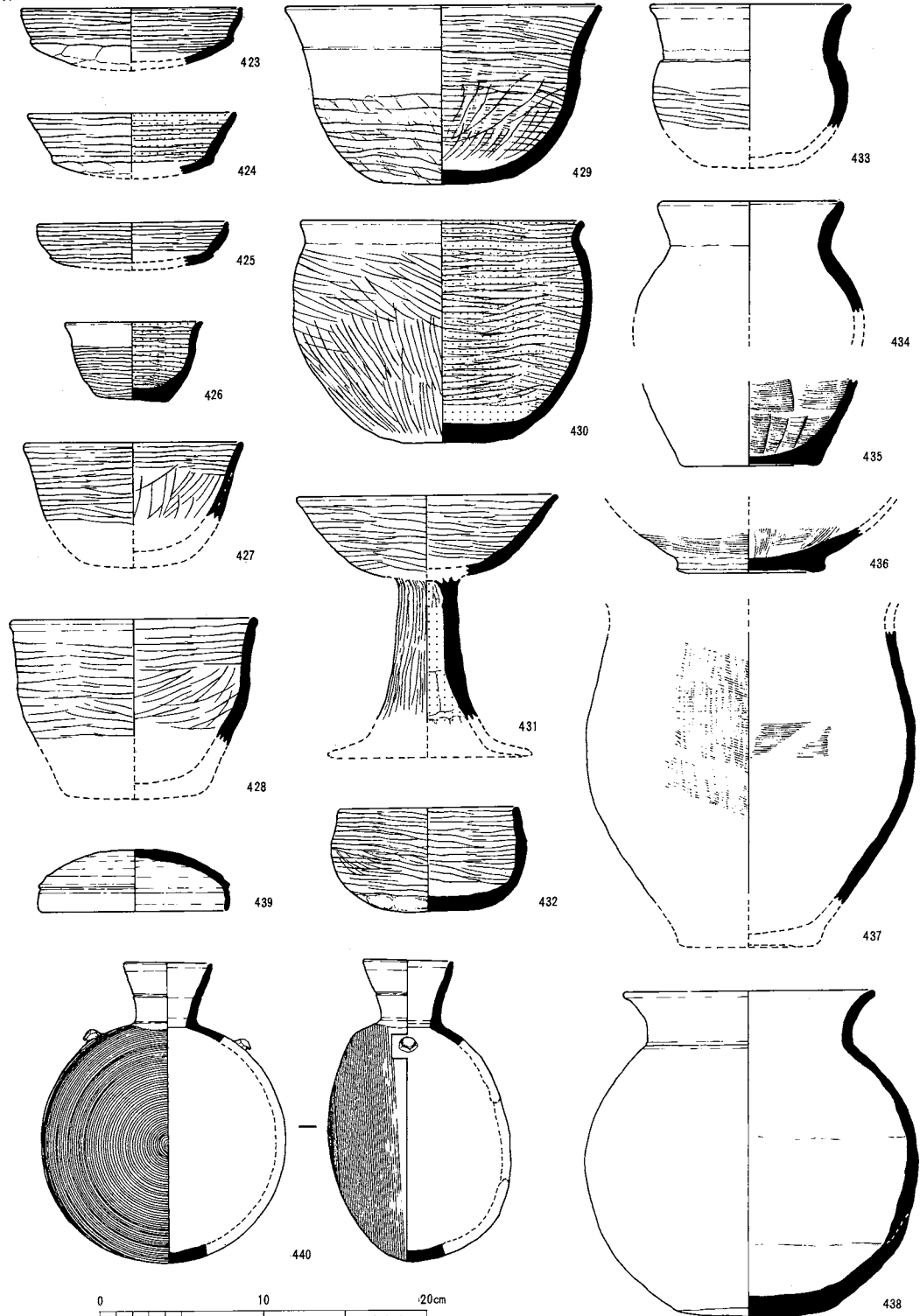
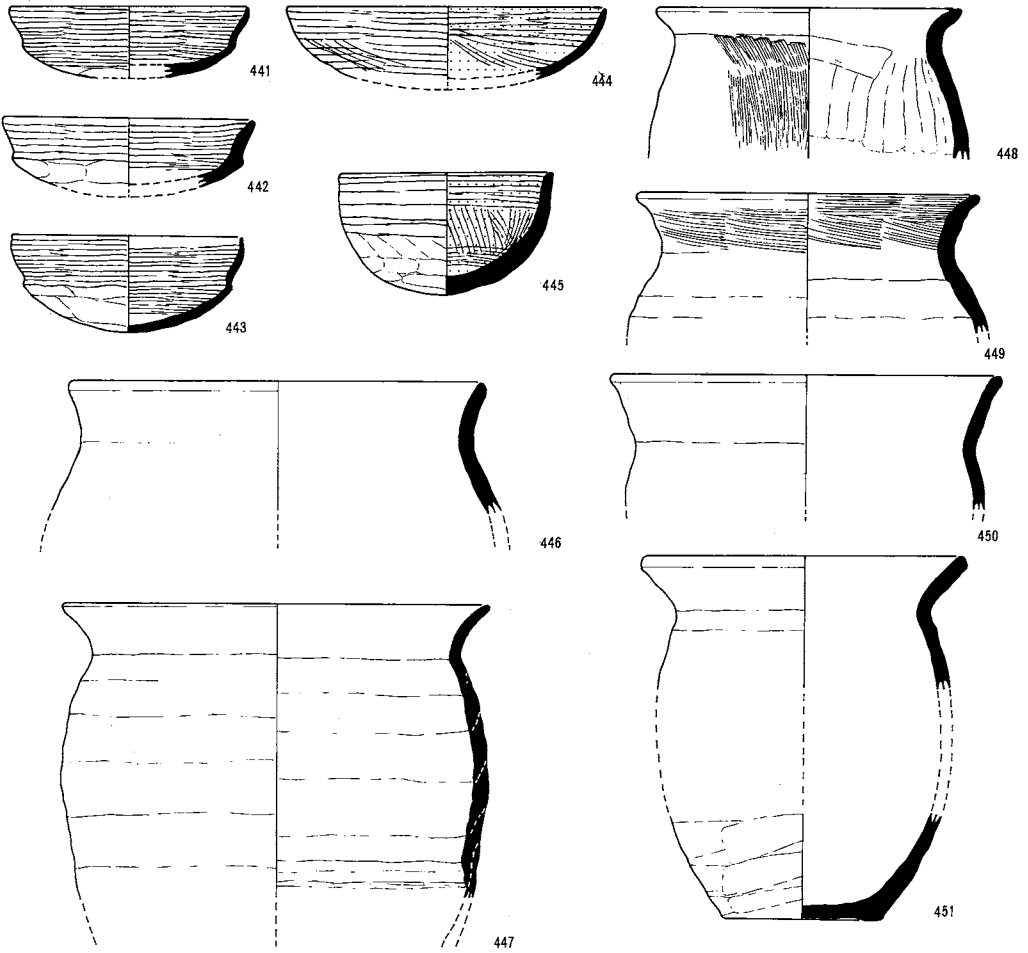


图 63 金铸场遗迹39号住居址出土土器实测图

集石 3

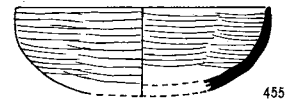


集石 4



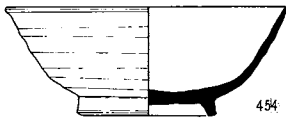
452

溝状遺構 7

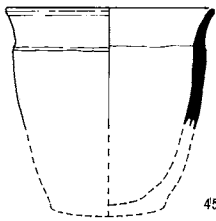


455

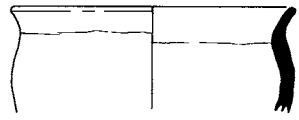
集石 5



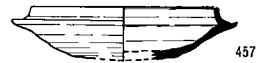
454



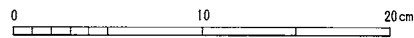
453



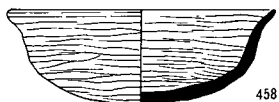
456



457



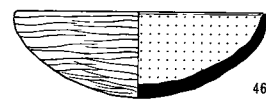
包含層



458



459



460

图 64 金铸场遗迹集石 3 · 4 · 5, 溝状遺構 7, 包含層出土土器実測図

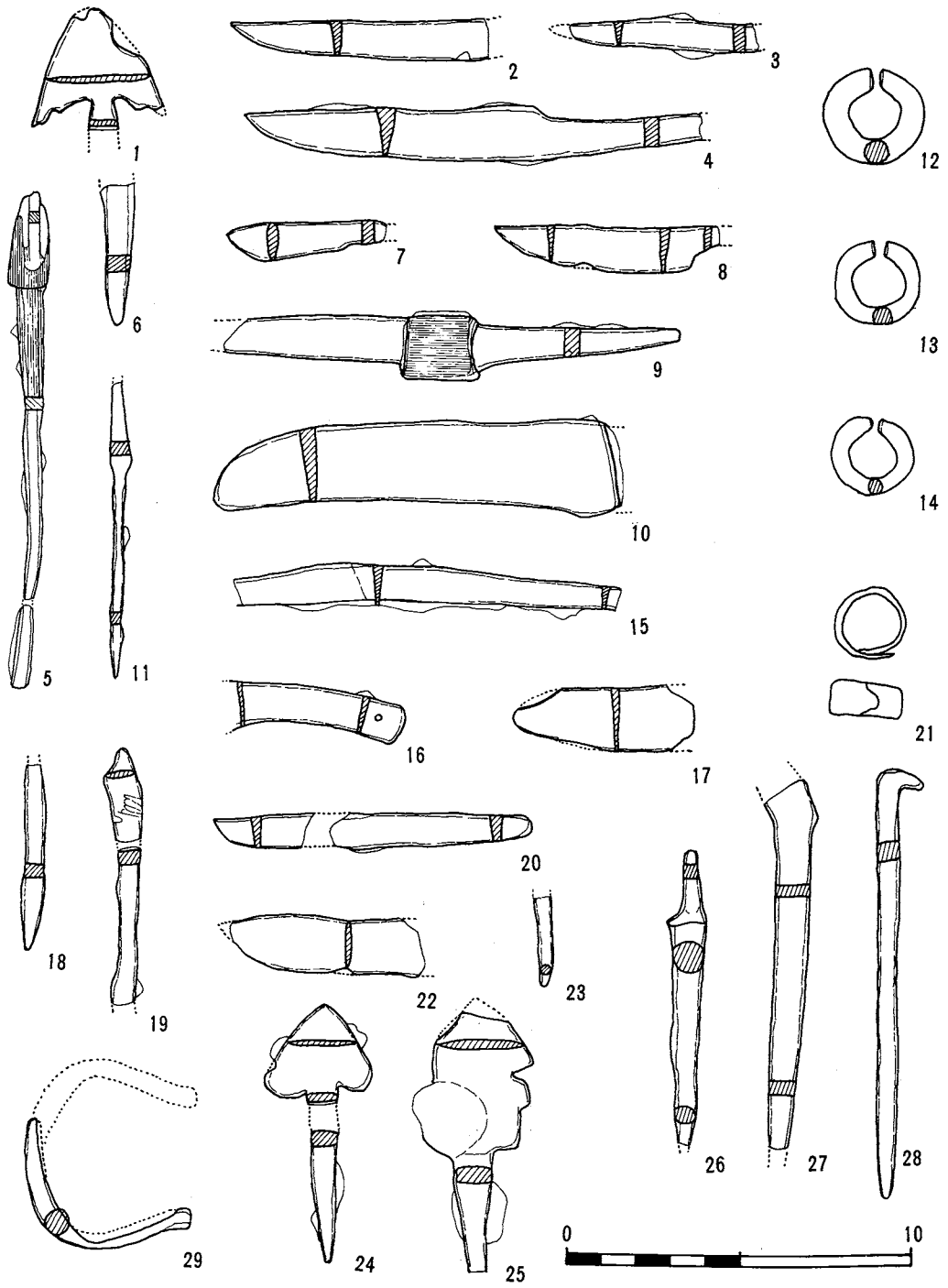


图 65 金铸场遗迹出土鉄製品実測図

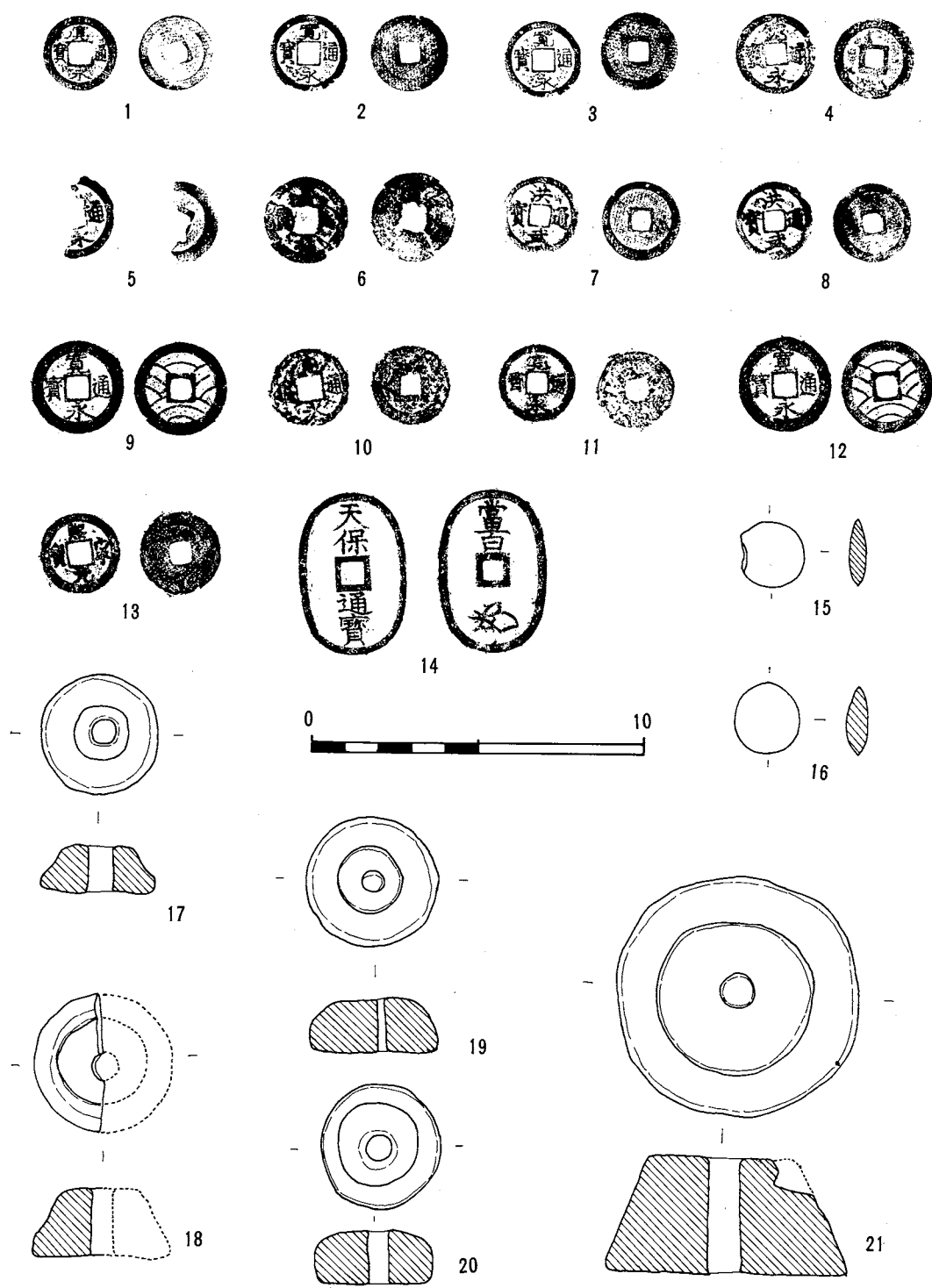


图 66 金铸场遗迹出土钱货，土製紡錘車实测图

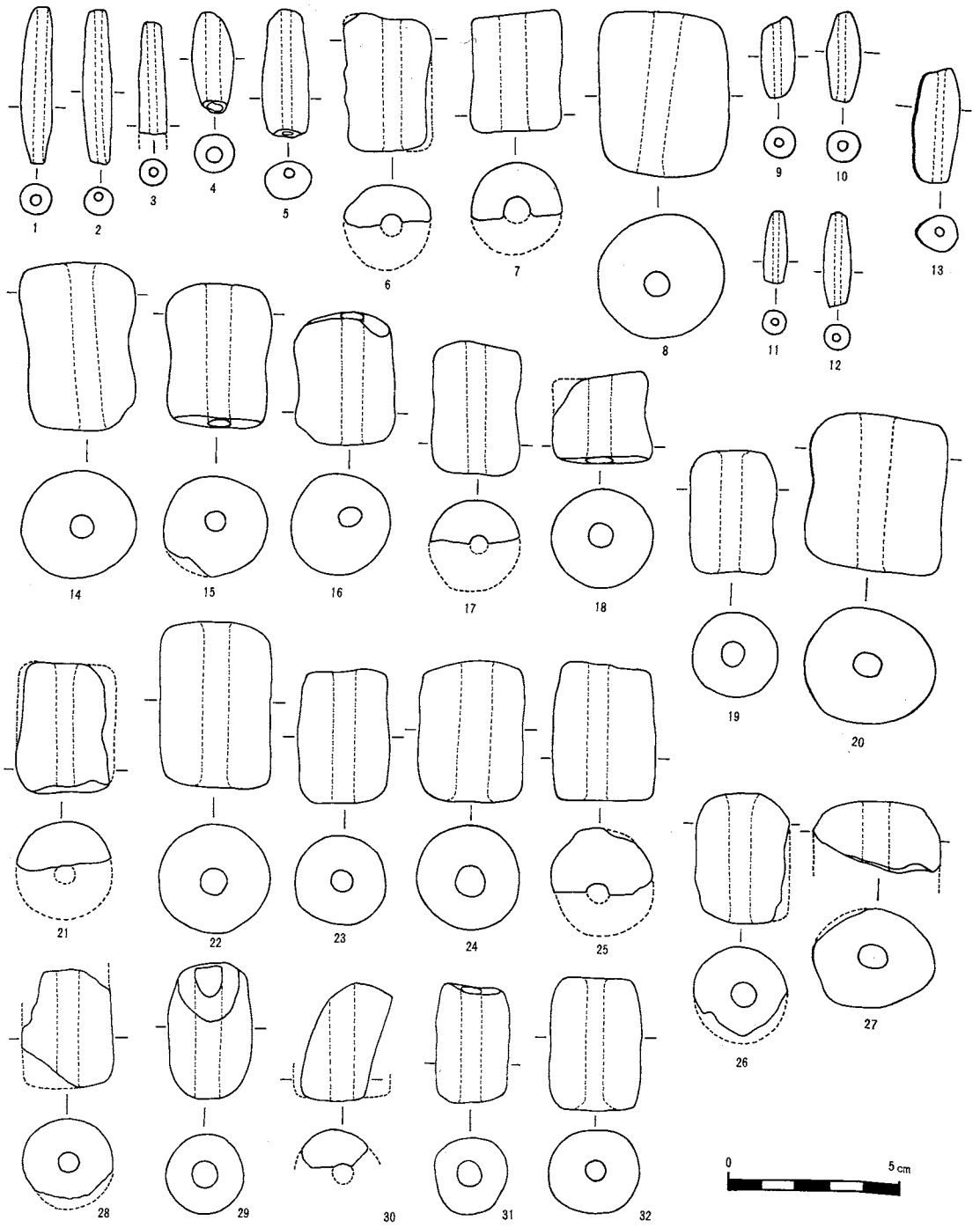


图 67 金铸场遗迹出土土锤头测图

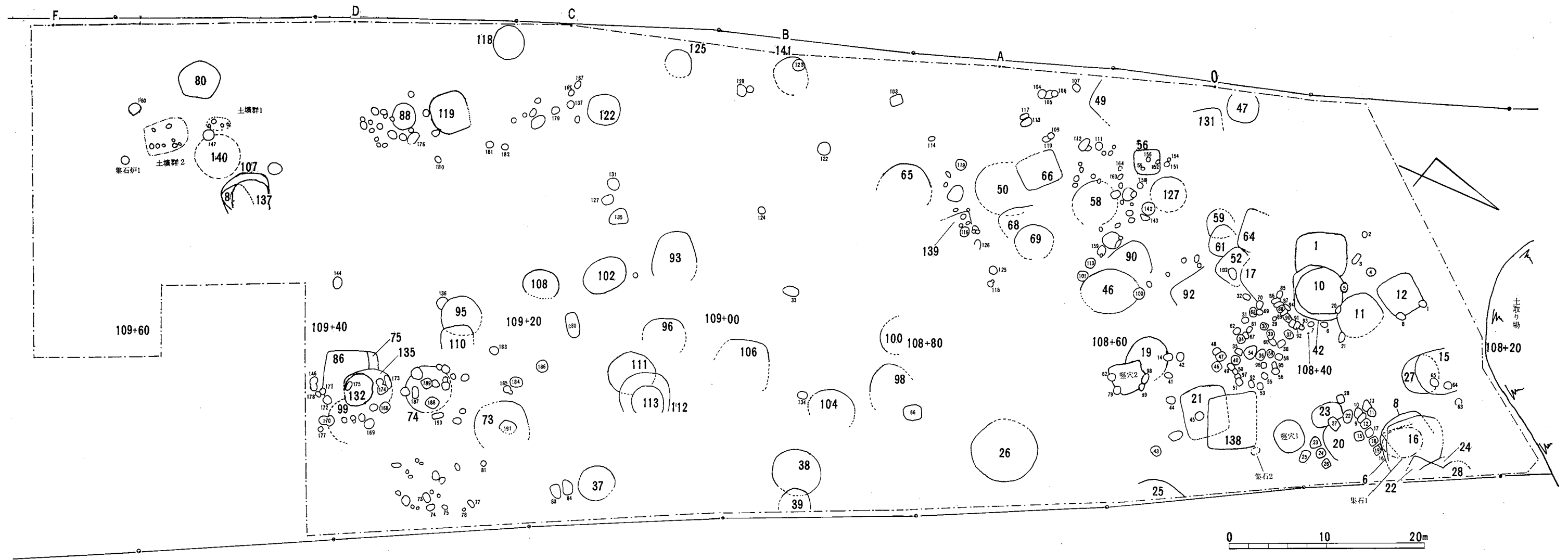


図1 十二ノ后遺跡縄文期遺構全体図

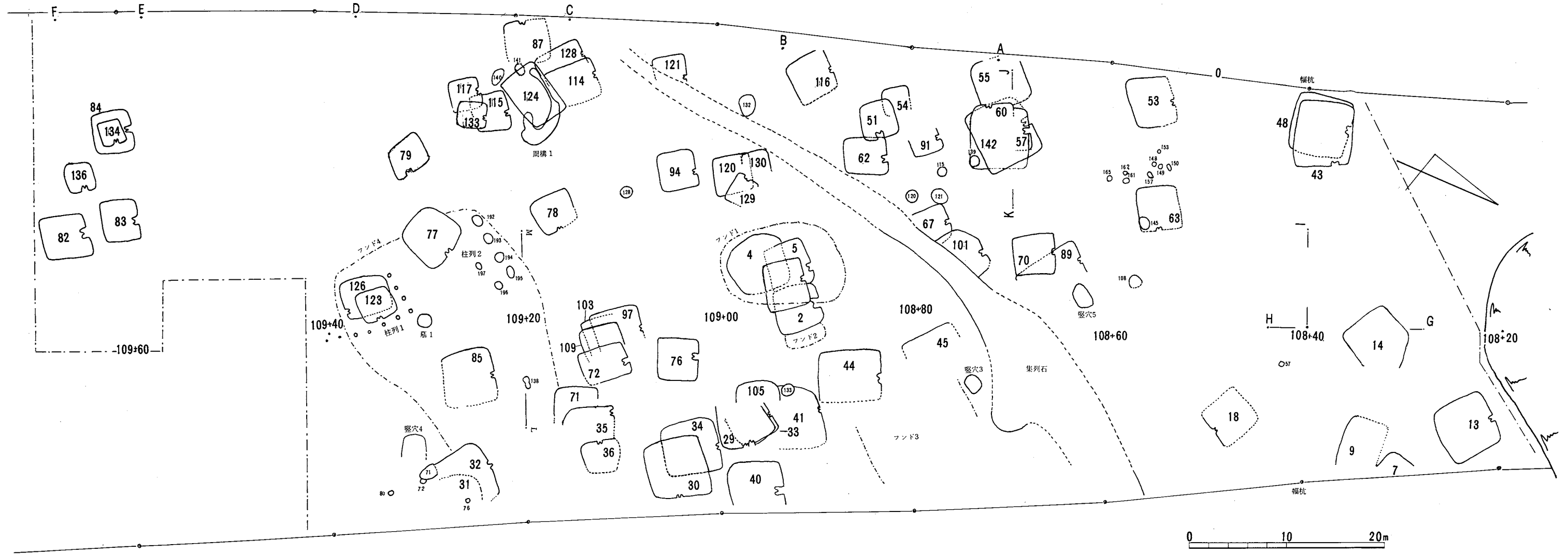


図2 十二ノ后遺跡弥生期以降遺構全体図

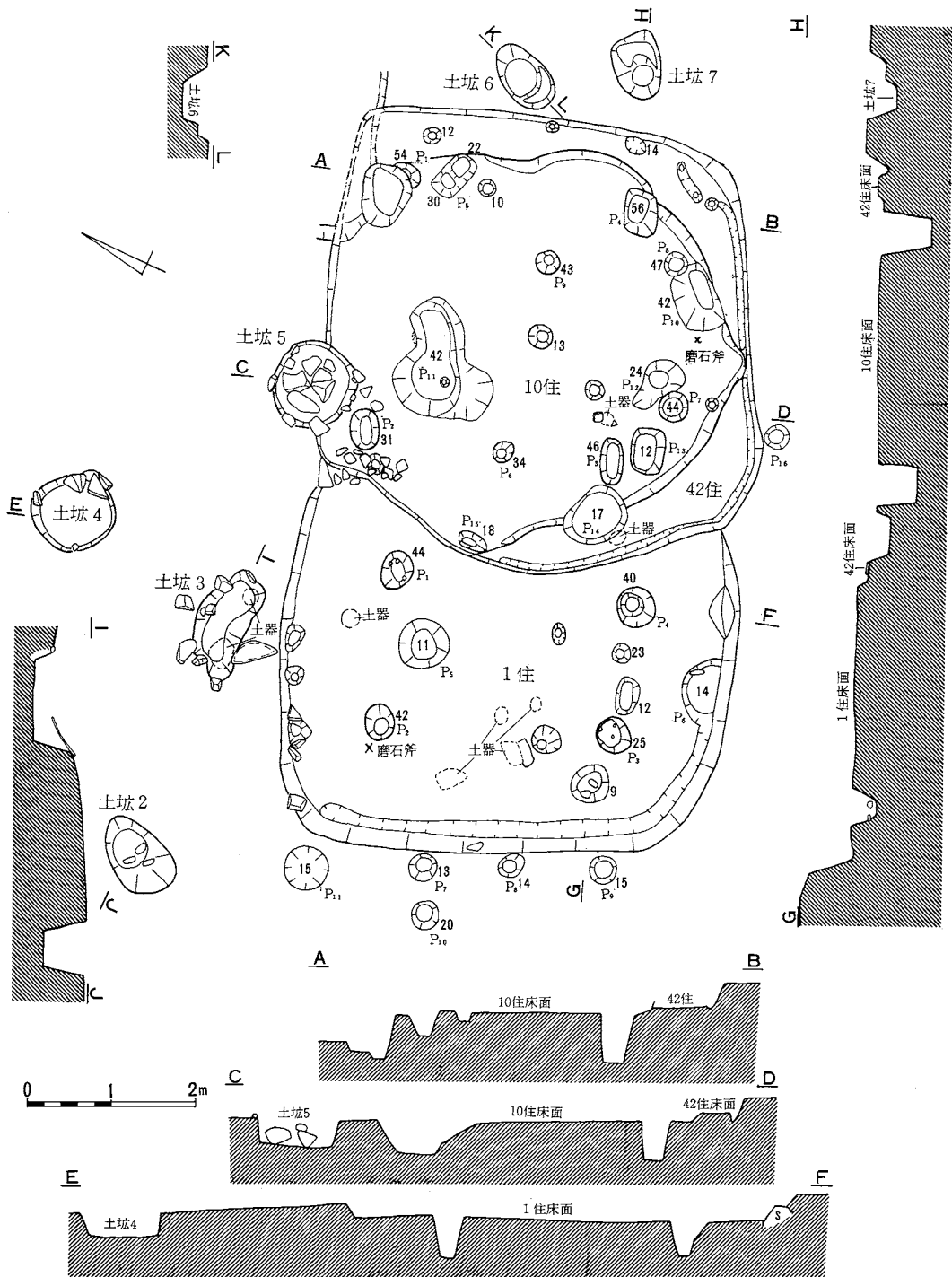


图3 十二ノ后遺跡1・10・42号住居址，土坡2～7実測図

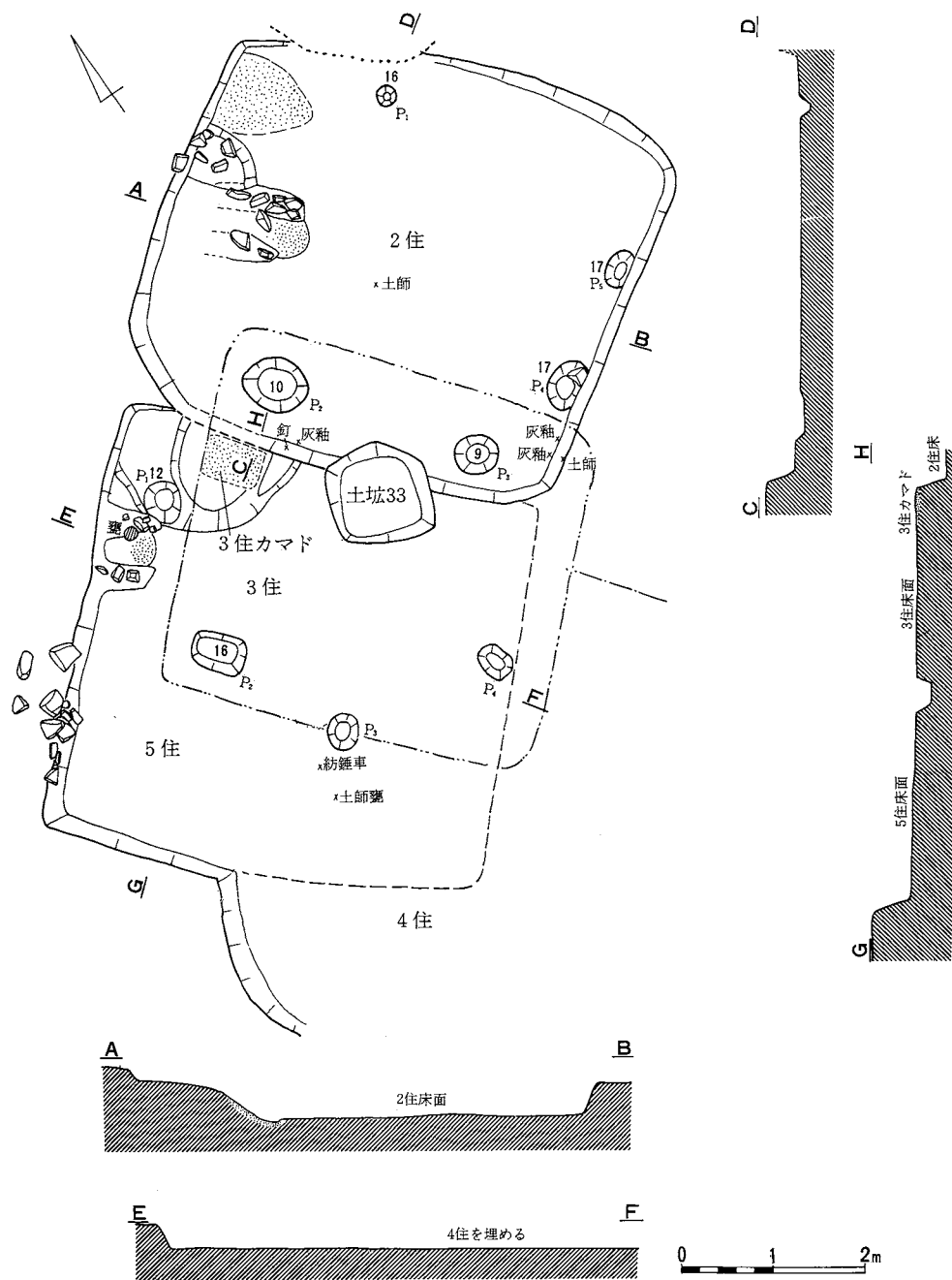


図4 十二ノ后遺跡2・3・4・5号住居址，土城33実測図

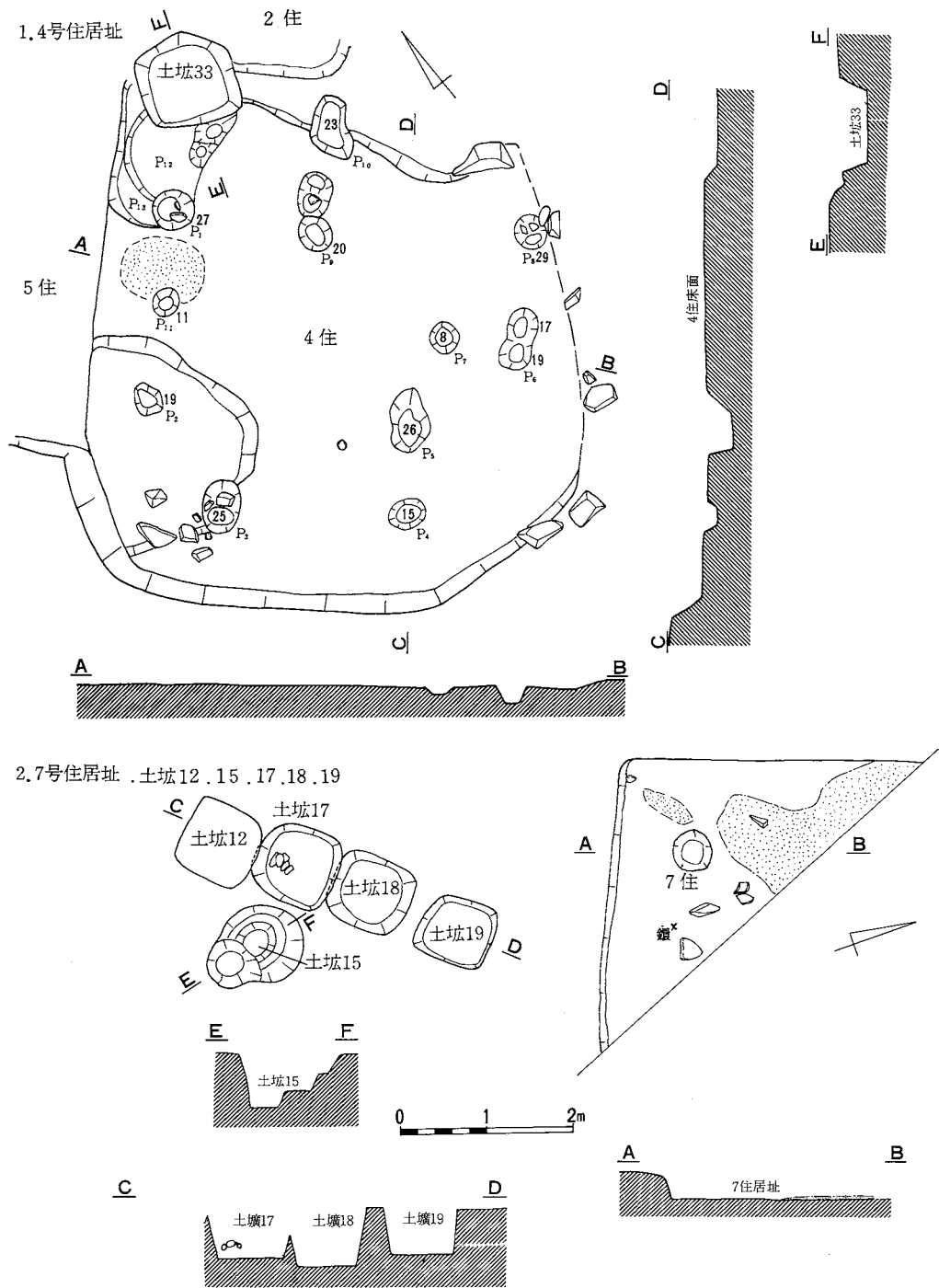


图 5 十二ノ后遺跡 4・7号住居址，土城12・15・17~19・33実測図

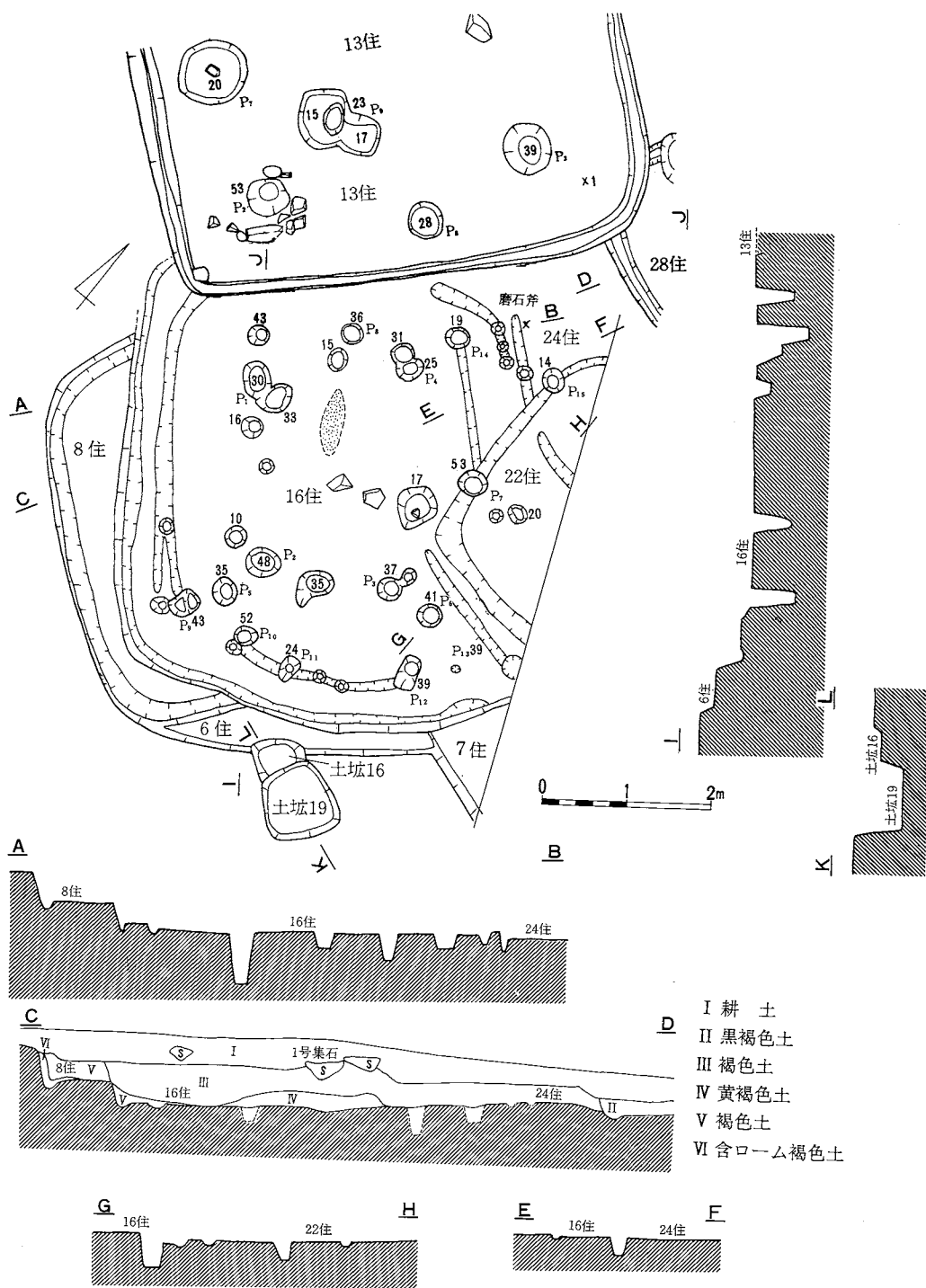
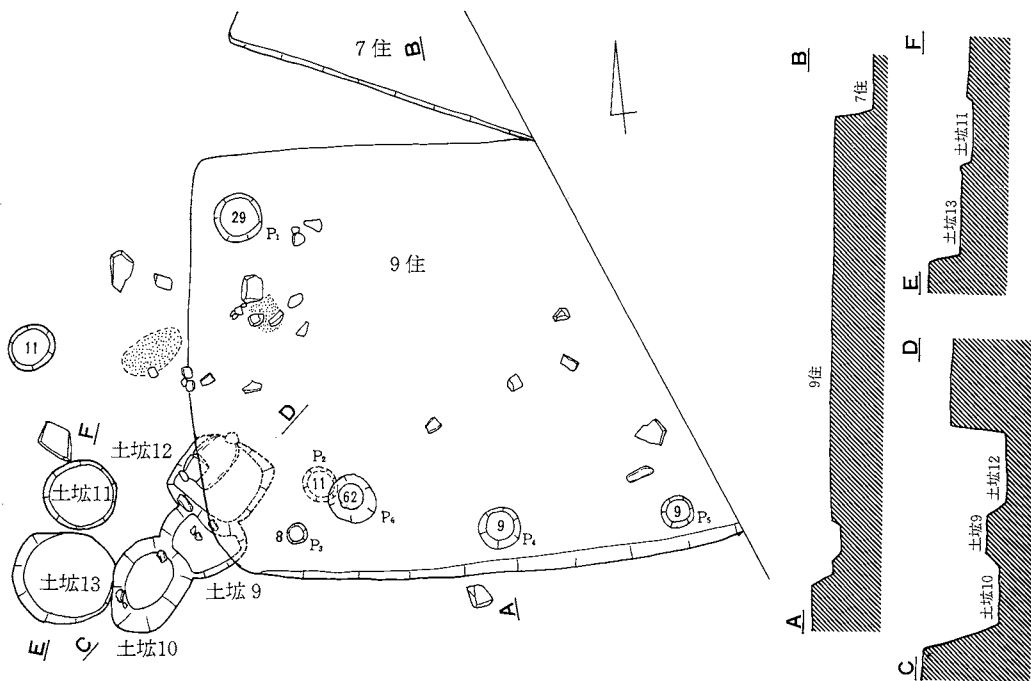


图6 十二ノ后遺跡6・8・16・22・24号住居址，土塚16・19実測図



1. 9号住居址、土城9～13

2. 12号住居址、土城1.8

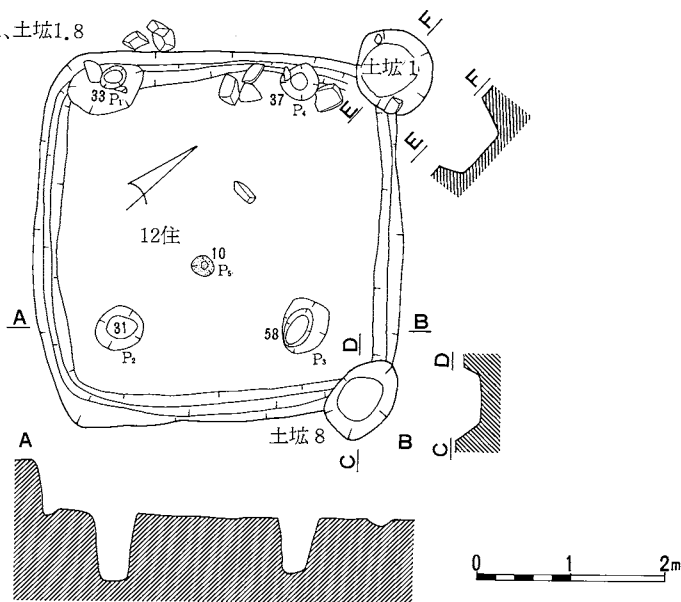


图7 十二ノ后遺跡9・12号住居址，土城1・8・9～13実測図

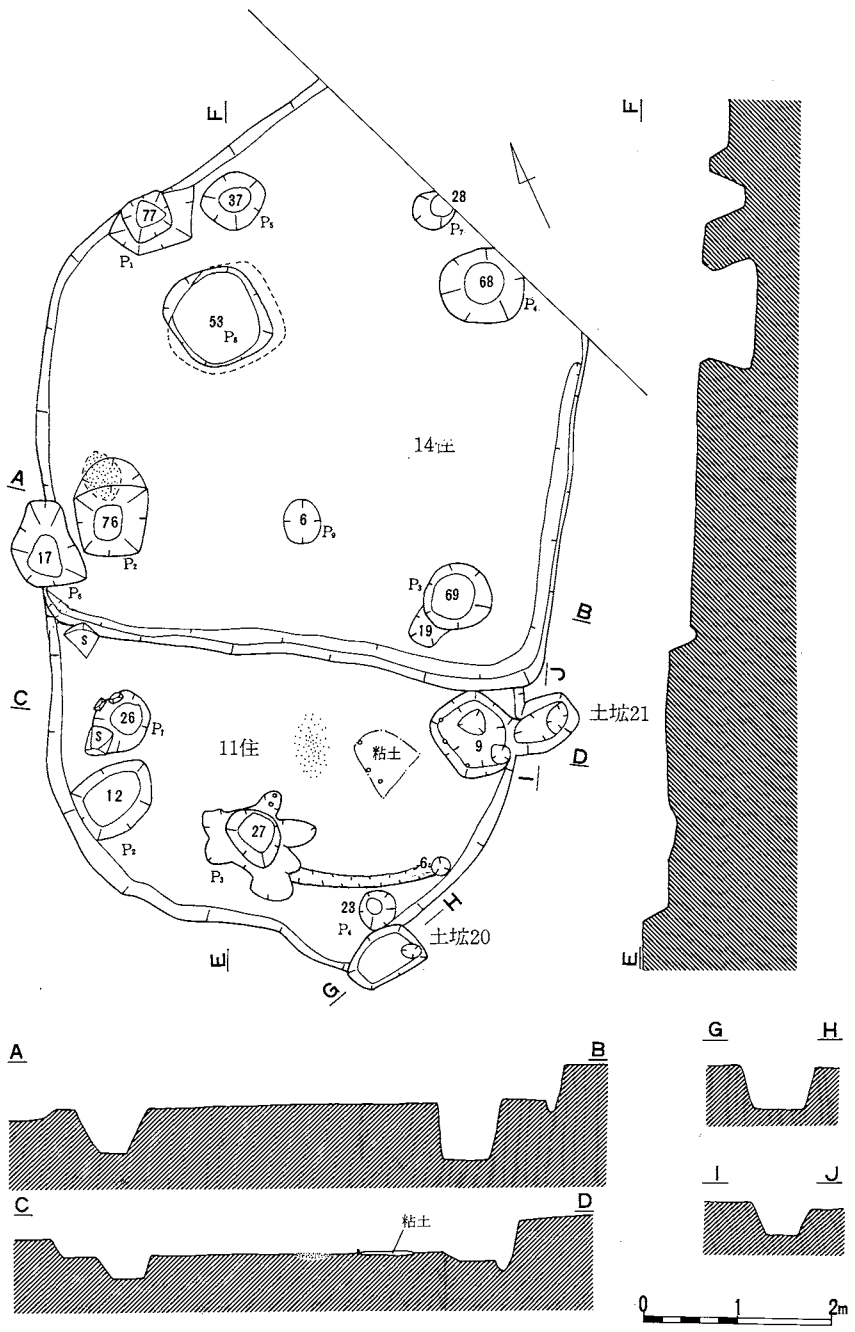


图 8 十二ノ后遺跡11・14号住居址，土城20・21実測図

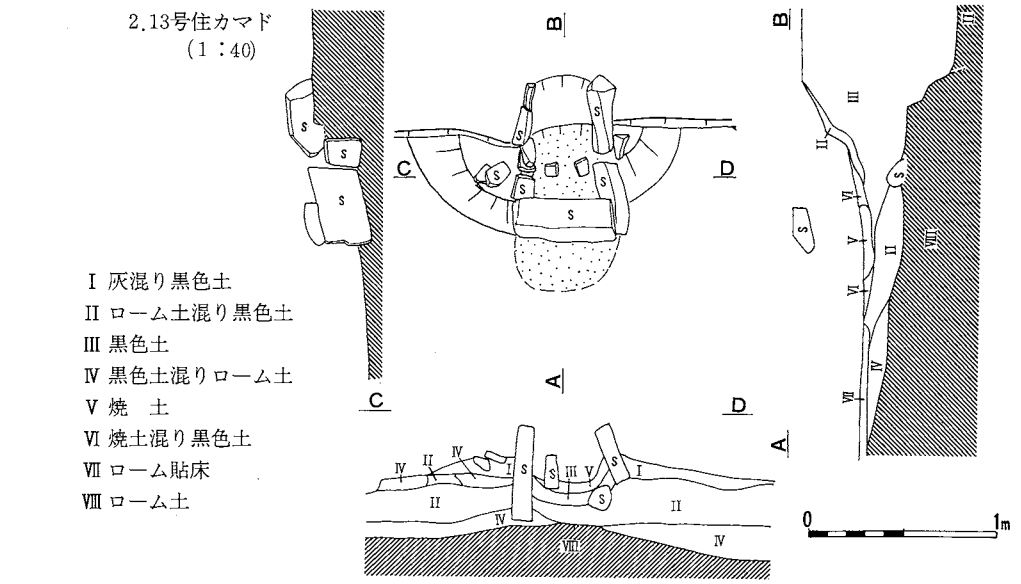
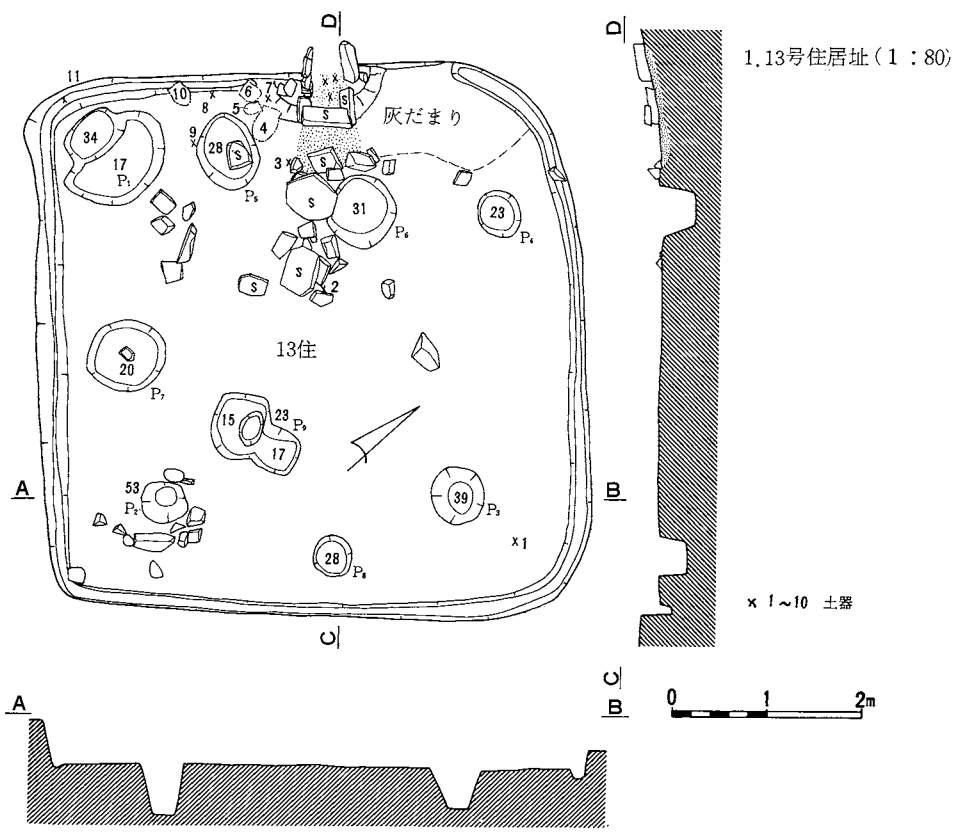
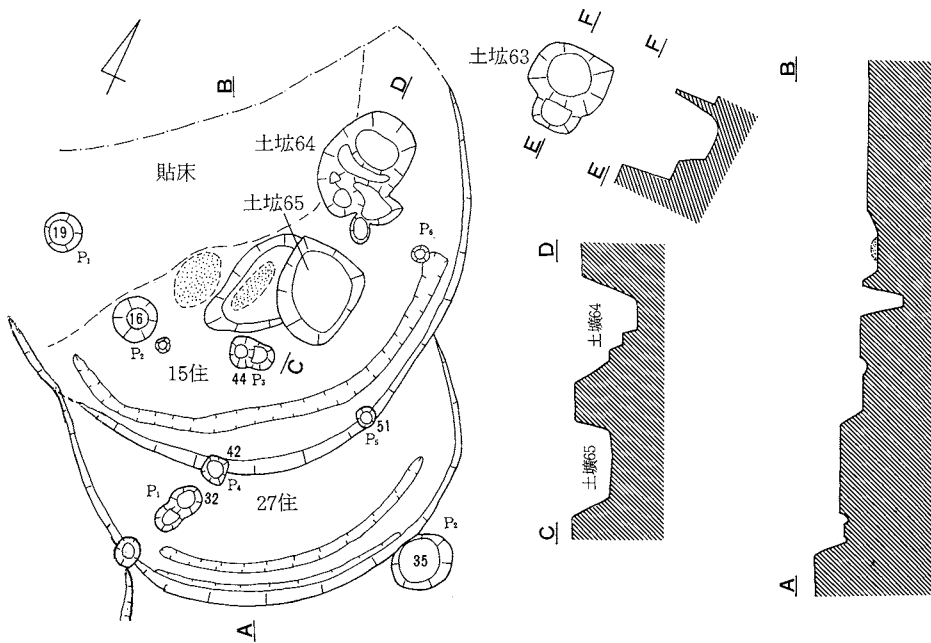
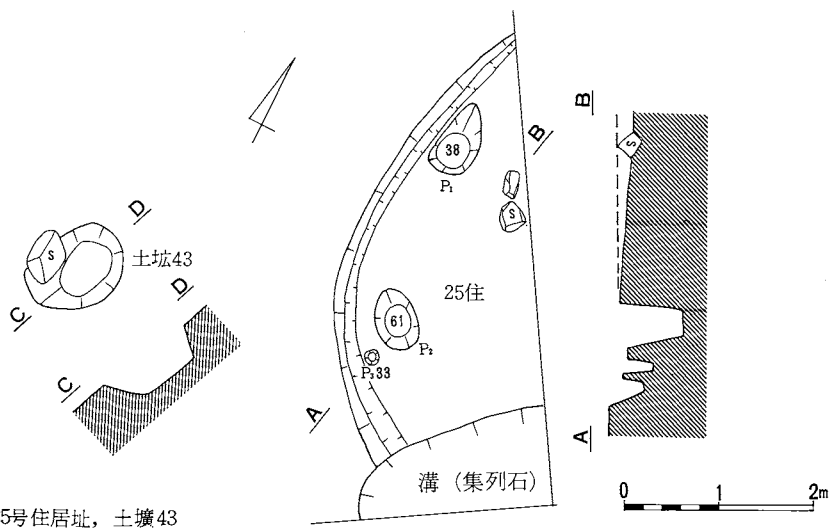


図9 十二ノ后遺跡13・28号住居址, 13号住居址カマド実測図



1. 15, 27号住居址, 土壇63~65



2. 25号住居址, 土壇43

图10 十二ノ后遺跡15・25・27号住居址, 土壇43・63~65実測图

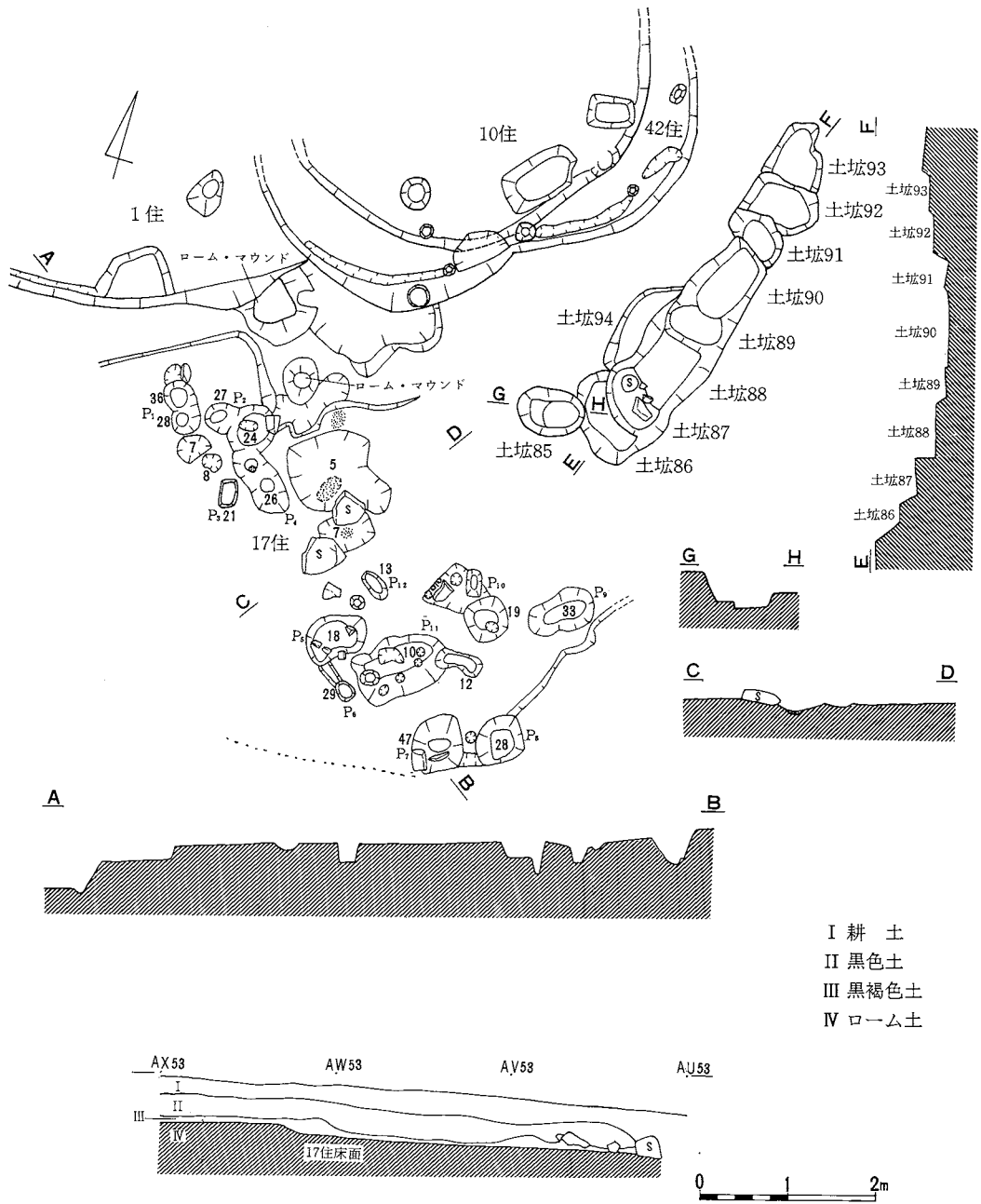


図11 十二ノ后遺跡17号住居址，土塚85～94実測図

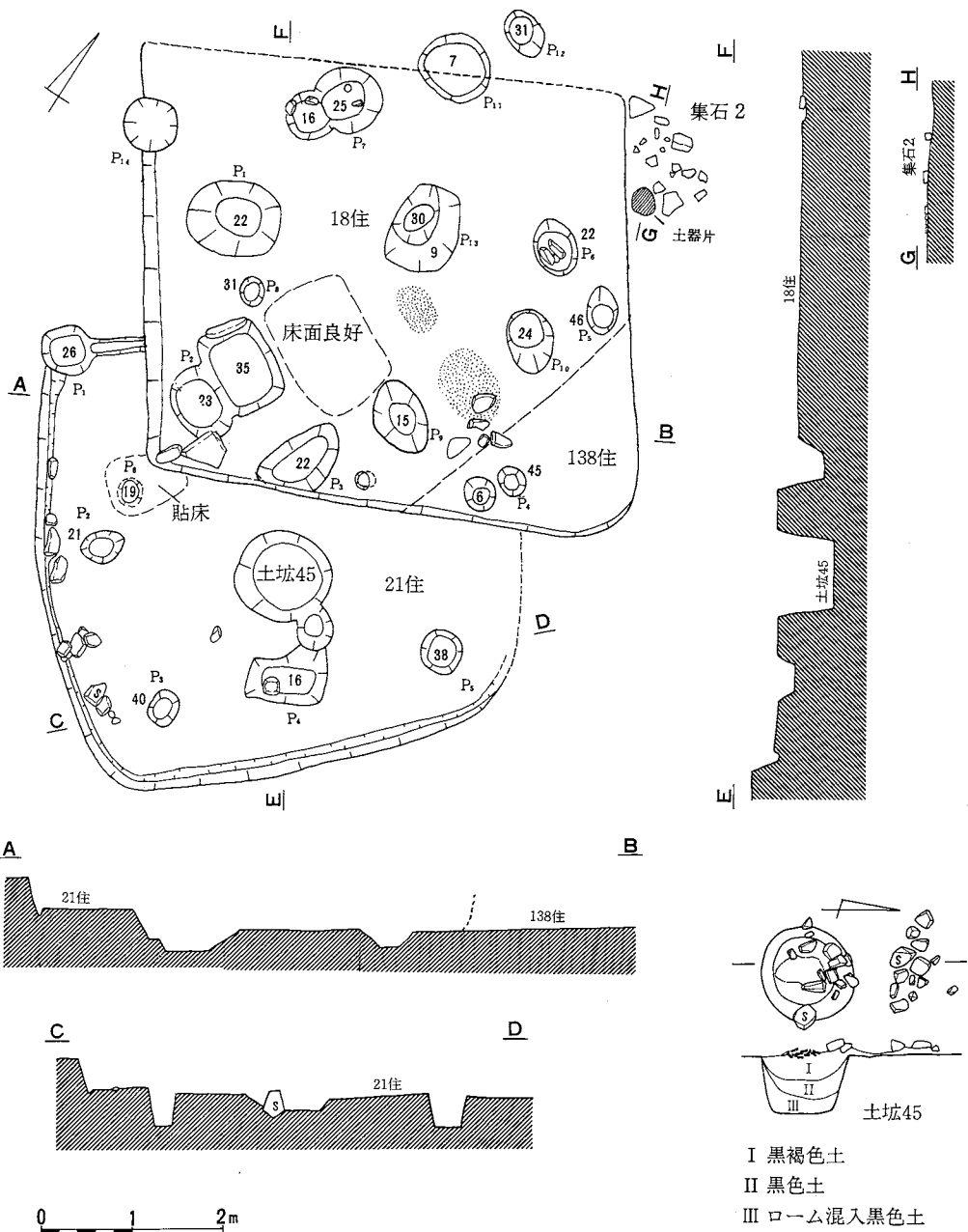
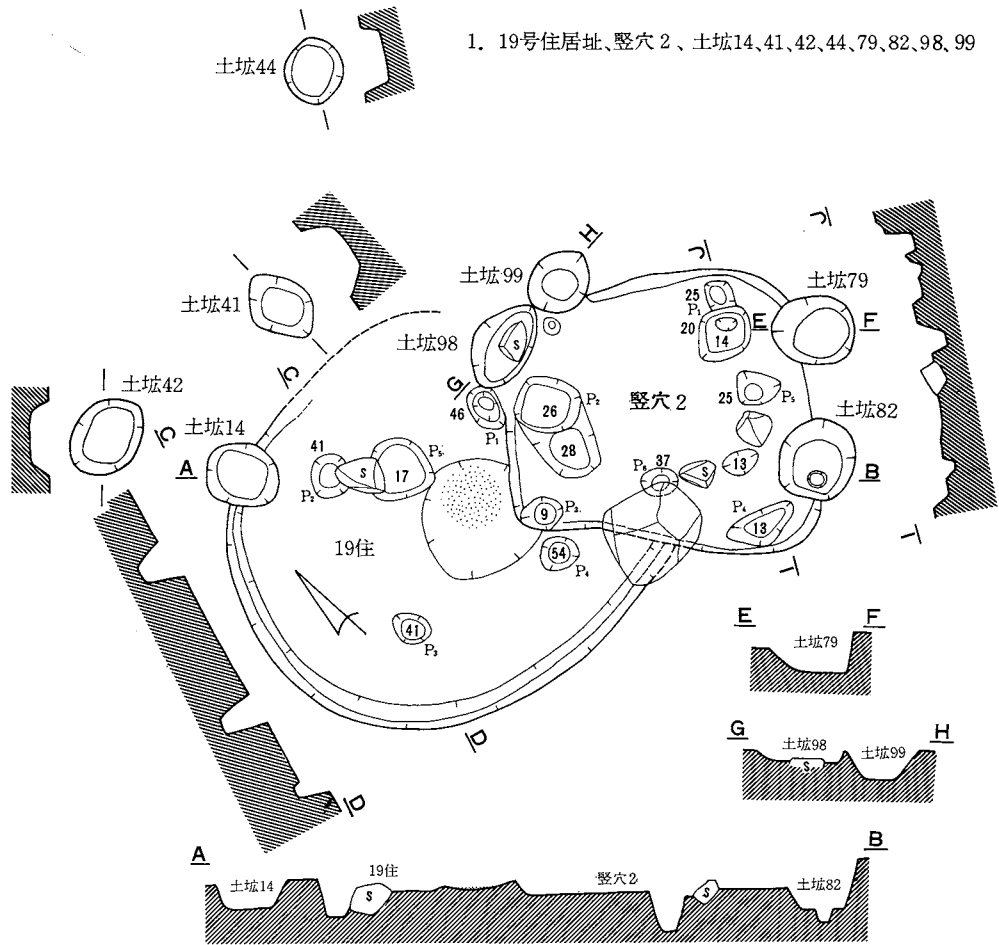
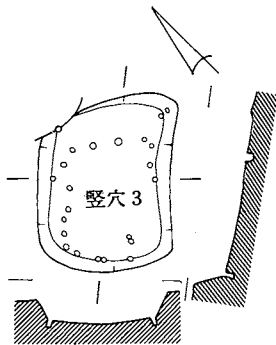


图 12 十二ノ后遺跡18・21・138号住居址，集石2，土坛45実測図

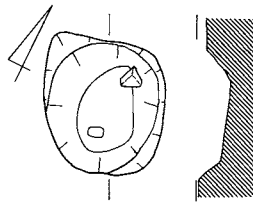


1. 19号住居址、竖穴 2、土城14、41、42、44、79、82、98、99

2. 竖穴 3



3. 墓塚 1



4. 土城66

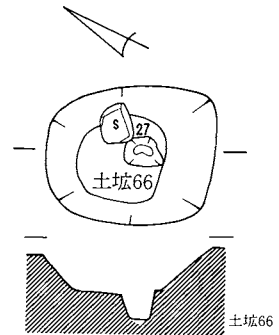


图 13 十二ノ后遺跡19号住居址，竖穴 2・3，墓塚 1，土城14・41・42・44・66・79・82・98・99実測図

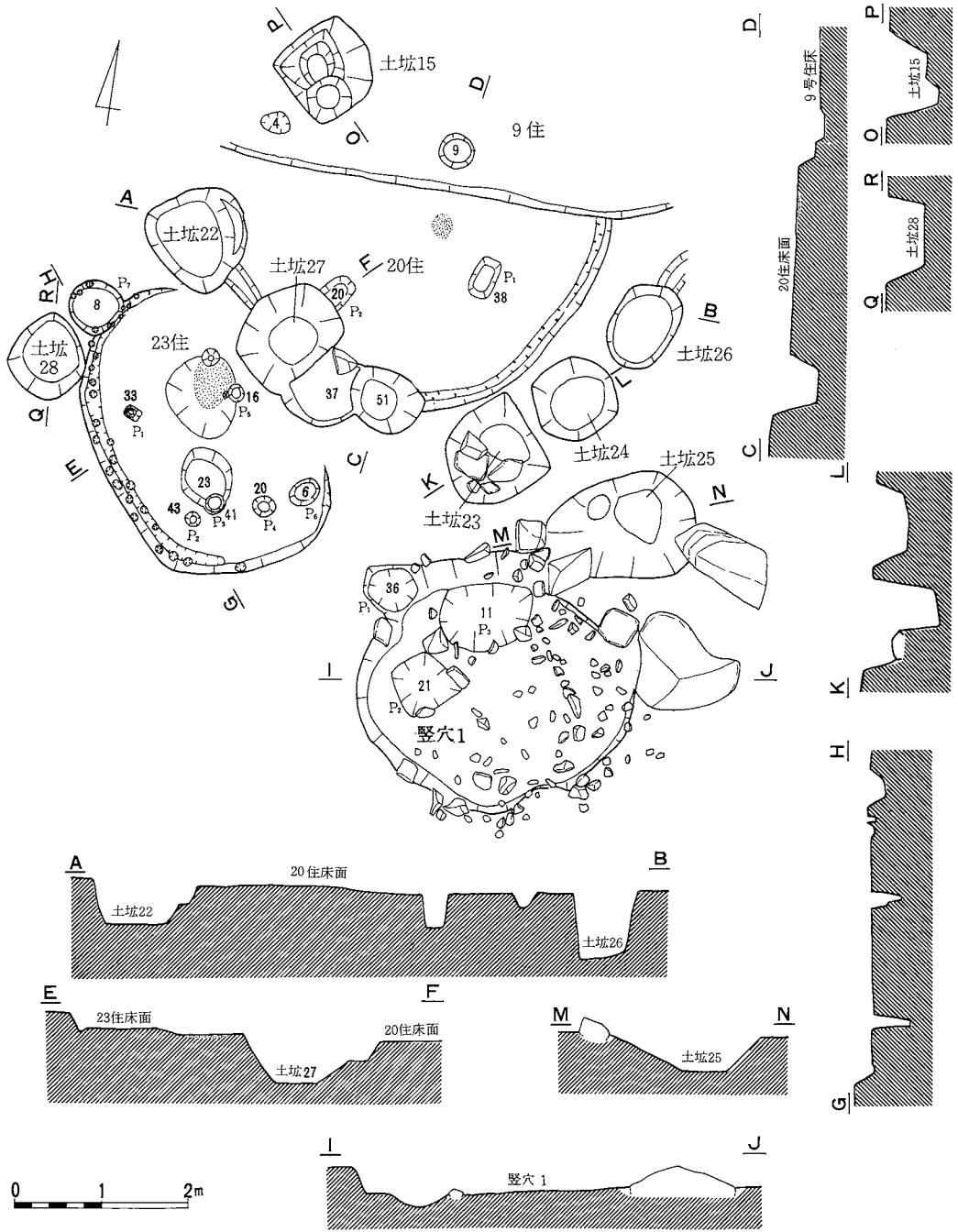
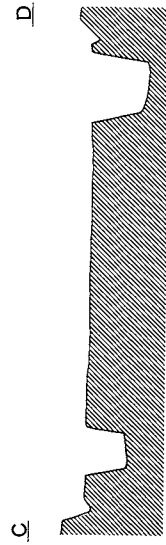
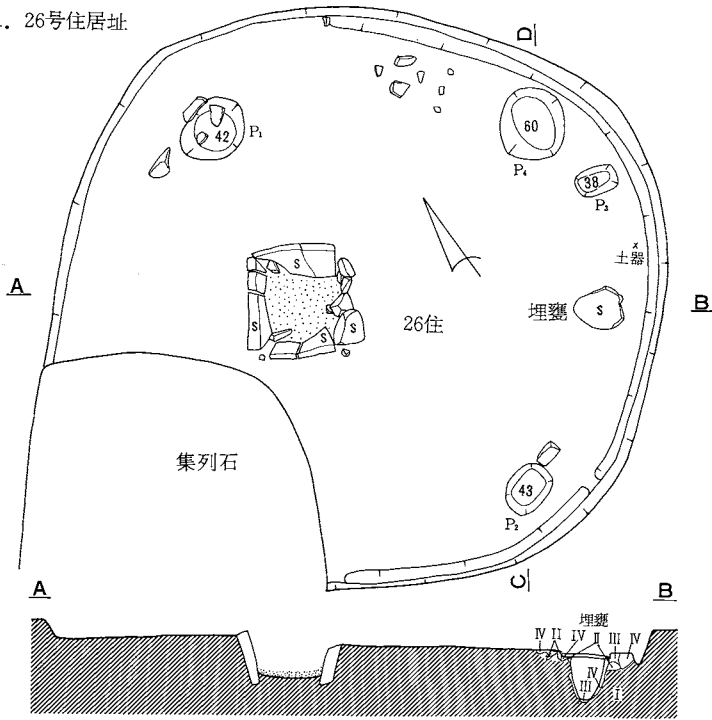


图 14 十二ノ后遺跡20・23号住居址，竖穴1，土城15・22~28実測図

1. 26号住居址



- I ローム
- II 黄褐色
- III 黒褐色
- IV 黒土

2. 29号住居址

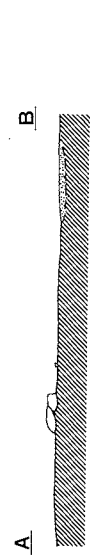
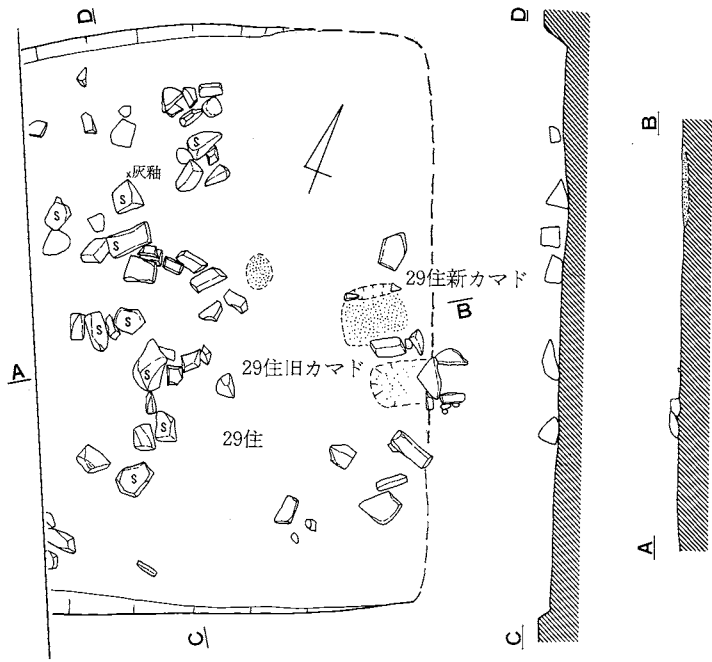
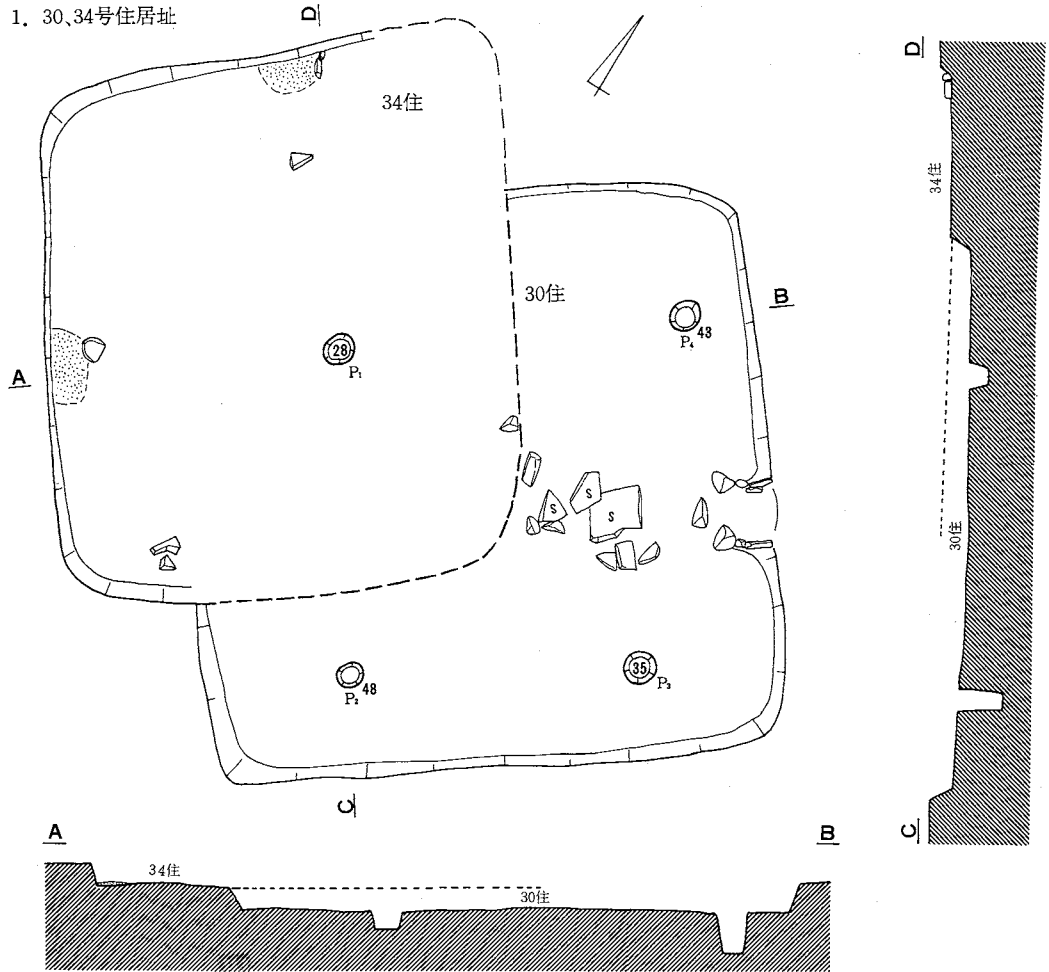
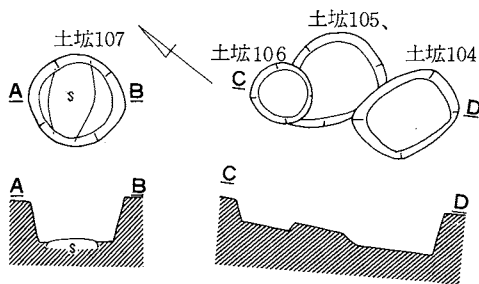


図15 十二ノ后遺跡26・29号住居址実測図

1. 30、34号住居址



2. 土塚104~107



3. 土塚129、土塚132

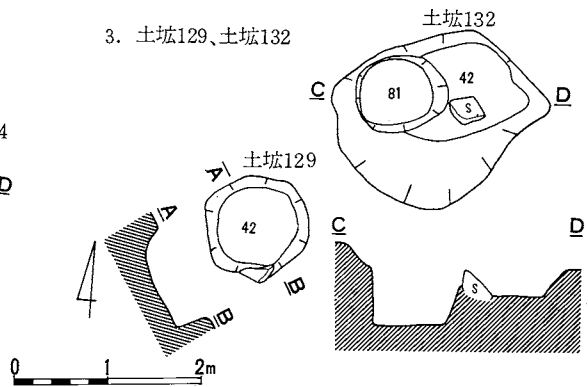


图 16 十二ノ后遺跡30・34号住居址，土塚104~107・129・132实测图

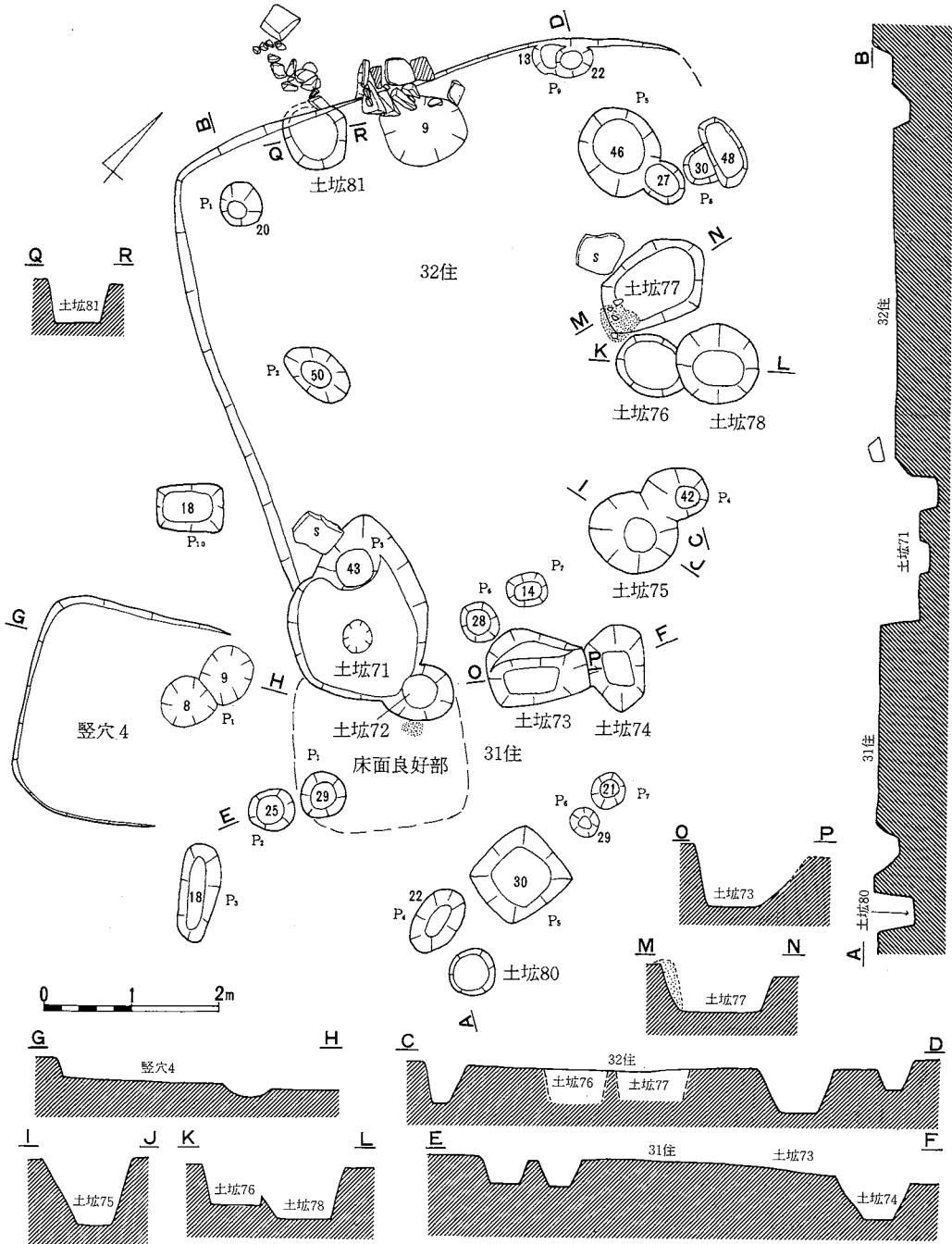


图17 十二ノ后遺跡31・32号住居址，竖穴4，土埴71~78・80・81実测图

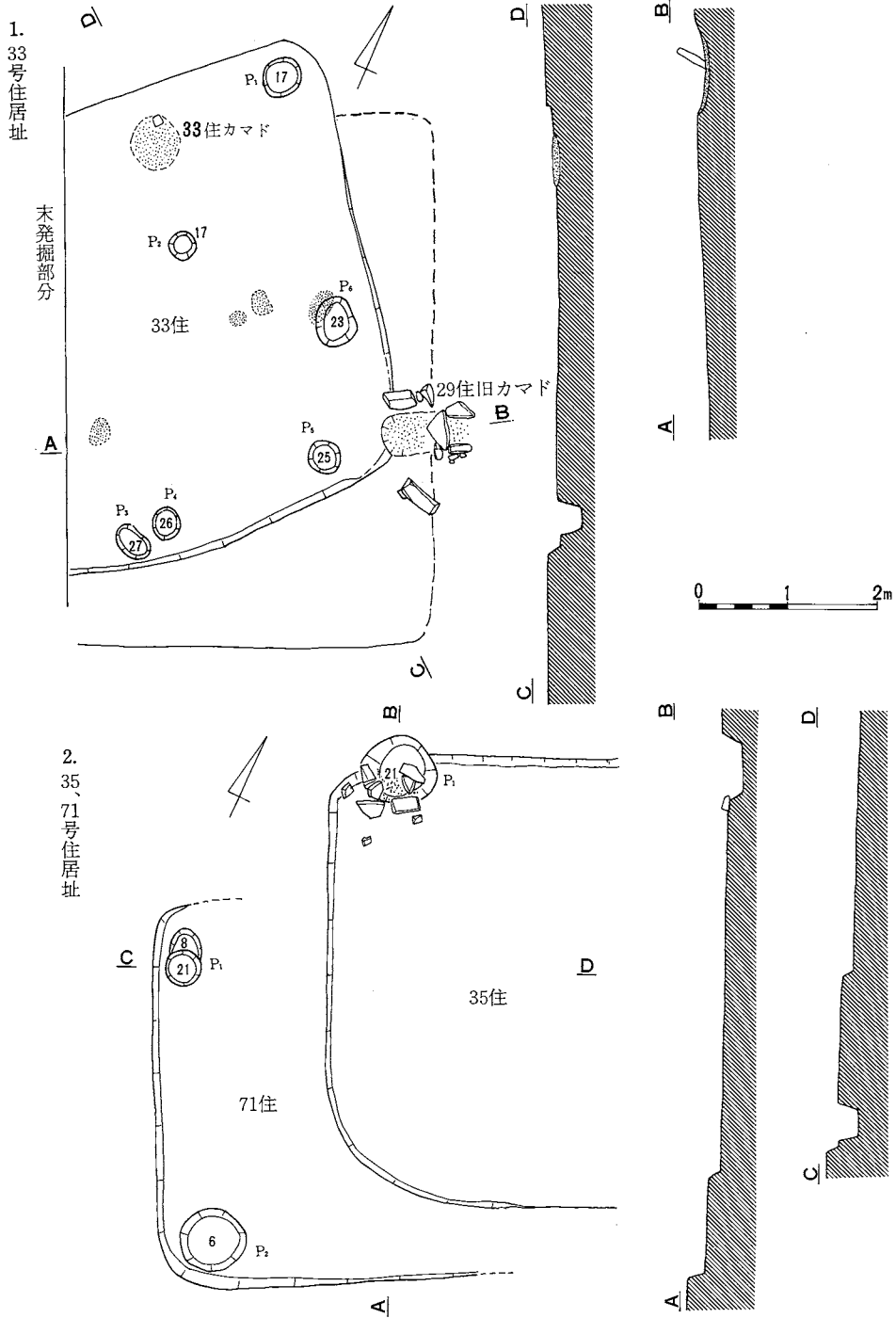
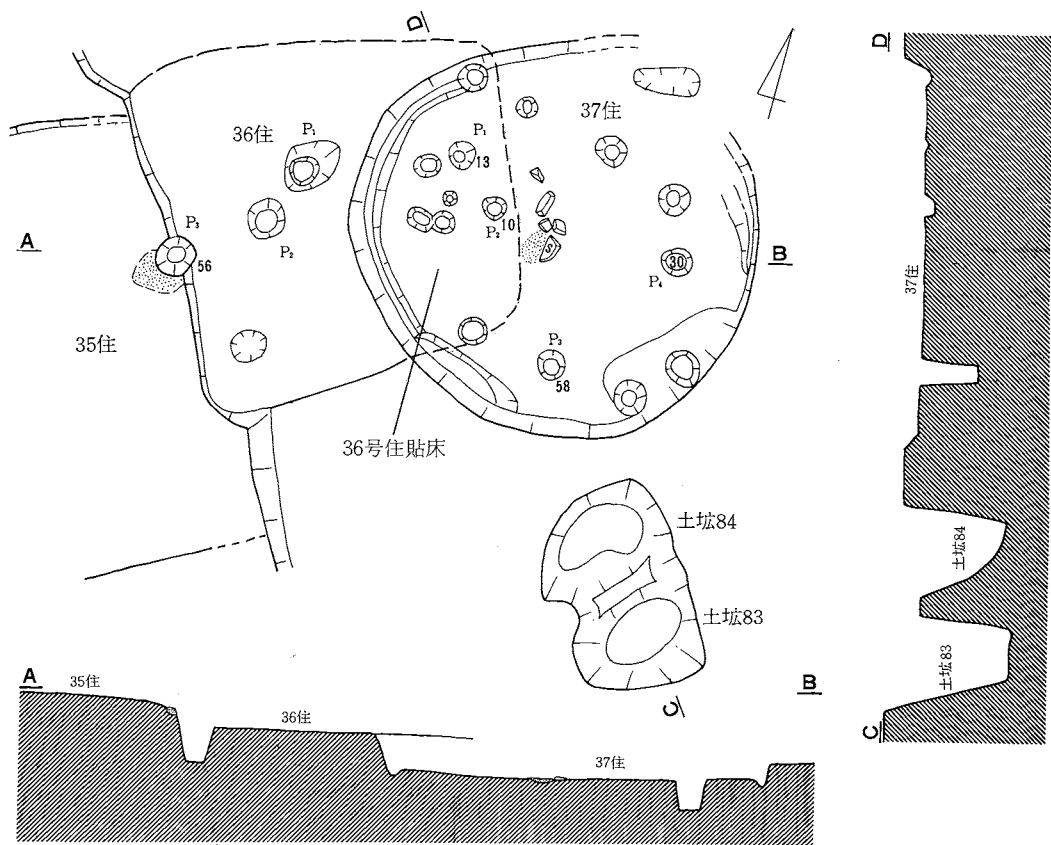


図 18 十二ノ后遺跡33・35・71号住居址実測図



1. 36、37号住居址、土塚83、84、

2. 47号住居址

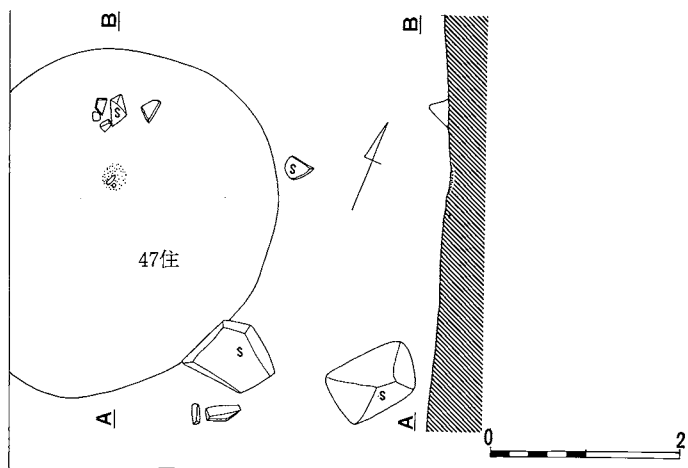


图 19 十二ノ后遺跡36・37・47号住居址，土塚83・84実測図

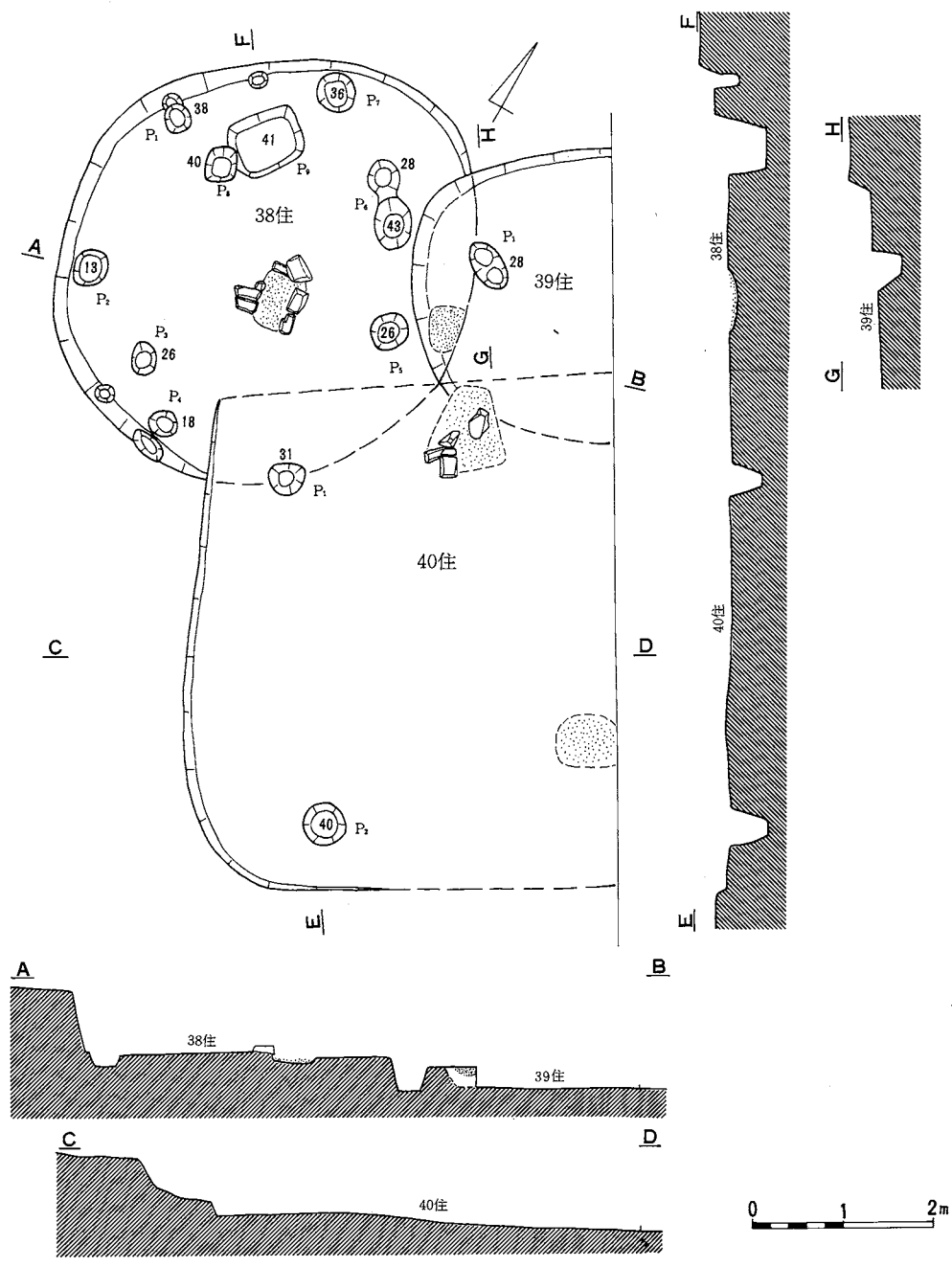


図 20 十二ノ后遺跡38・39・40号住居址実測図

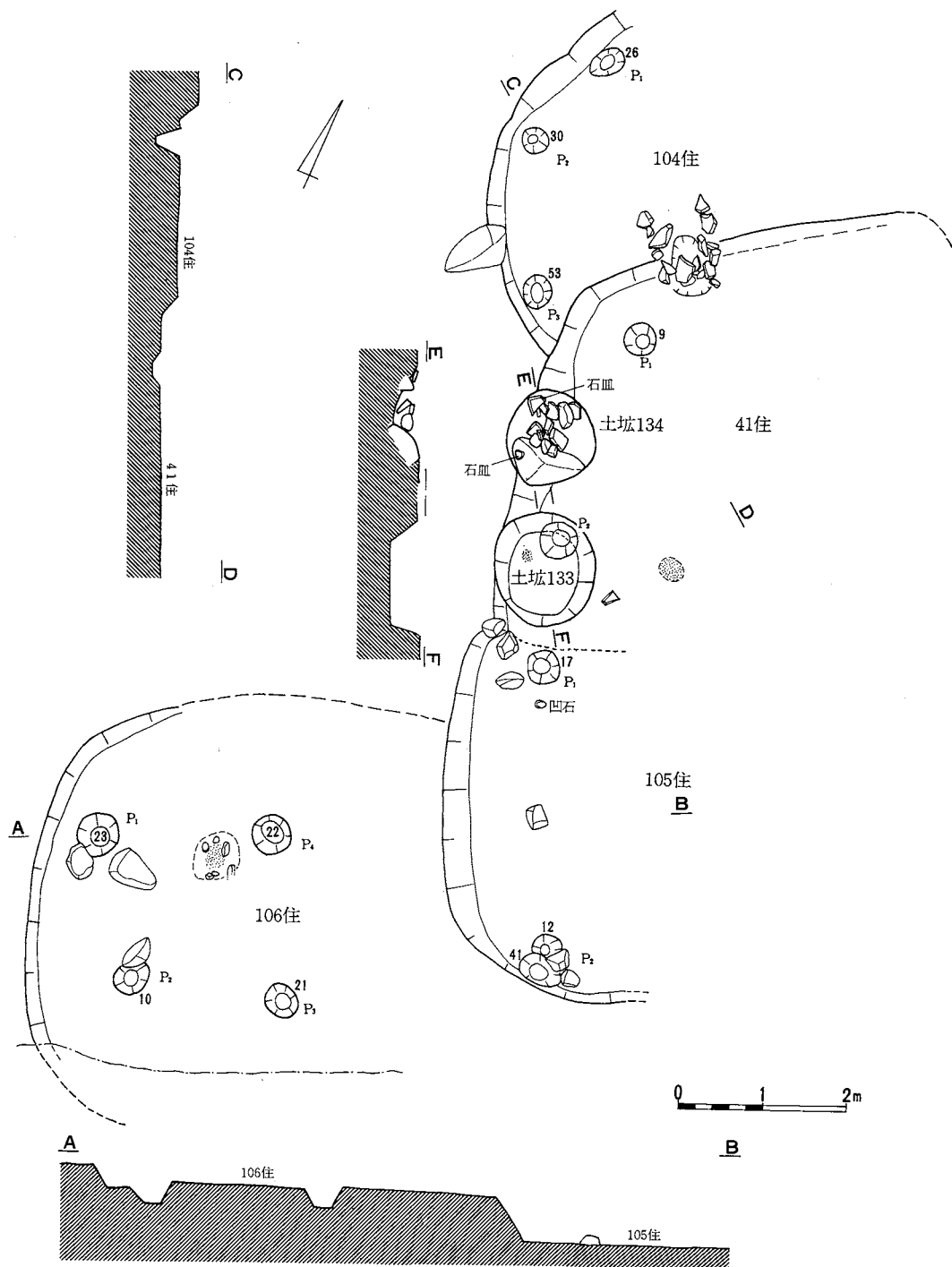


图 21 十二ノ后遺跡41・104・105・106号住居址実測図

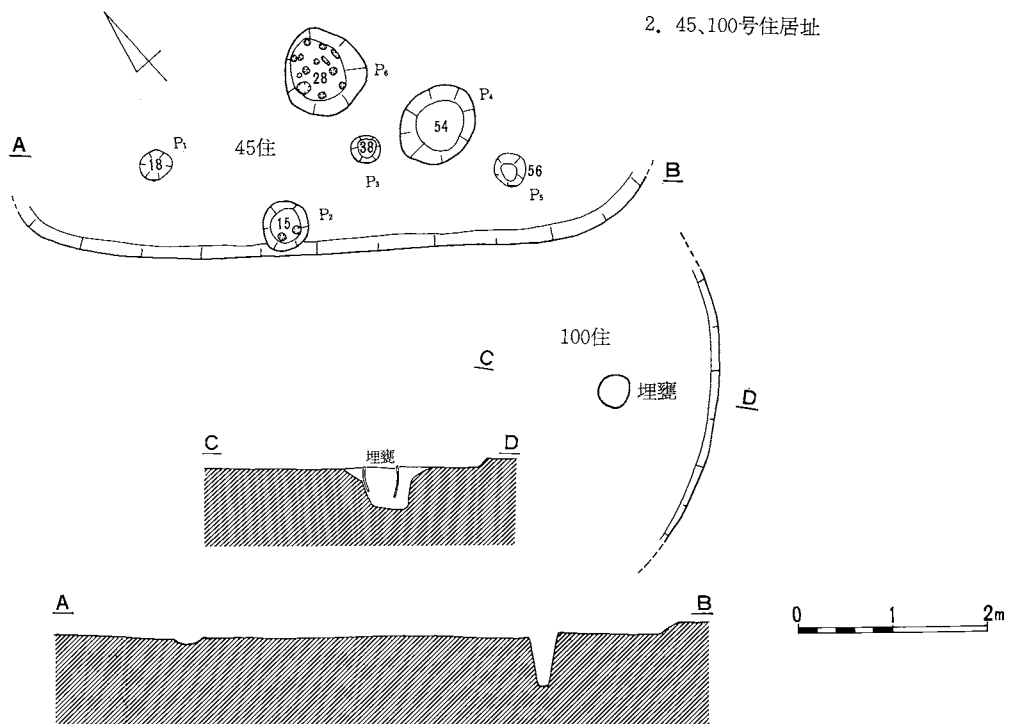
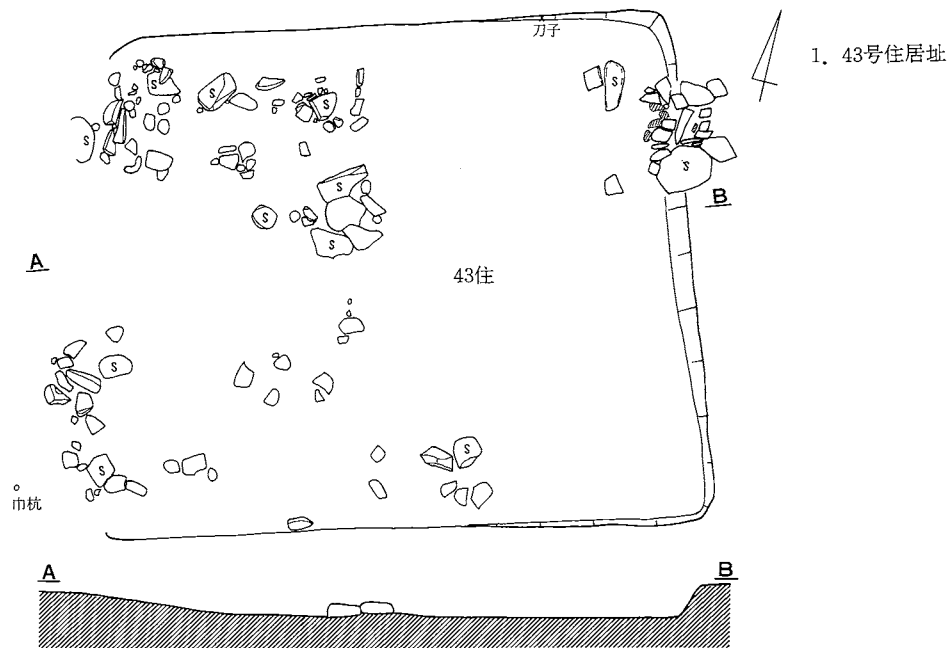


图 22 十二ノ后遺跡43・45・100号住居址実測図

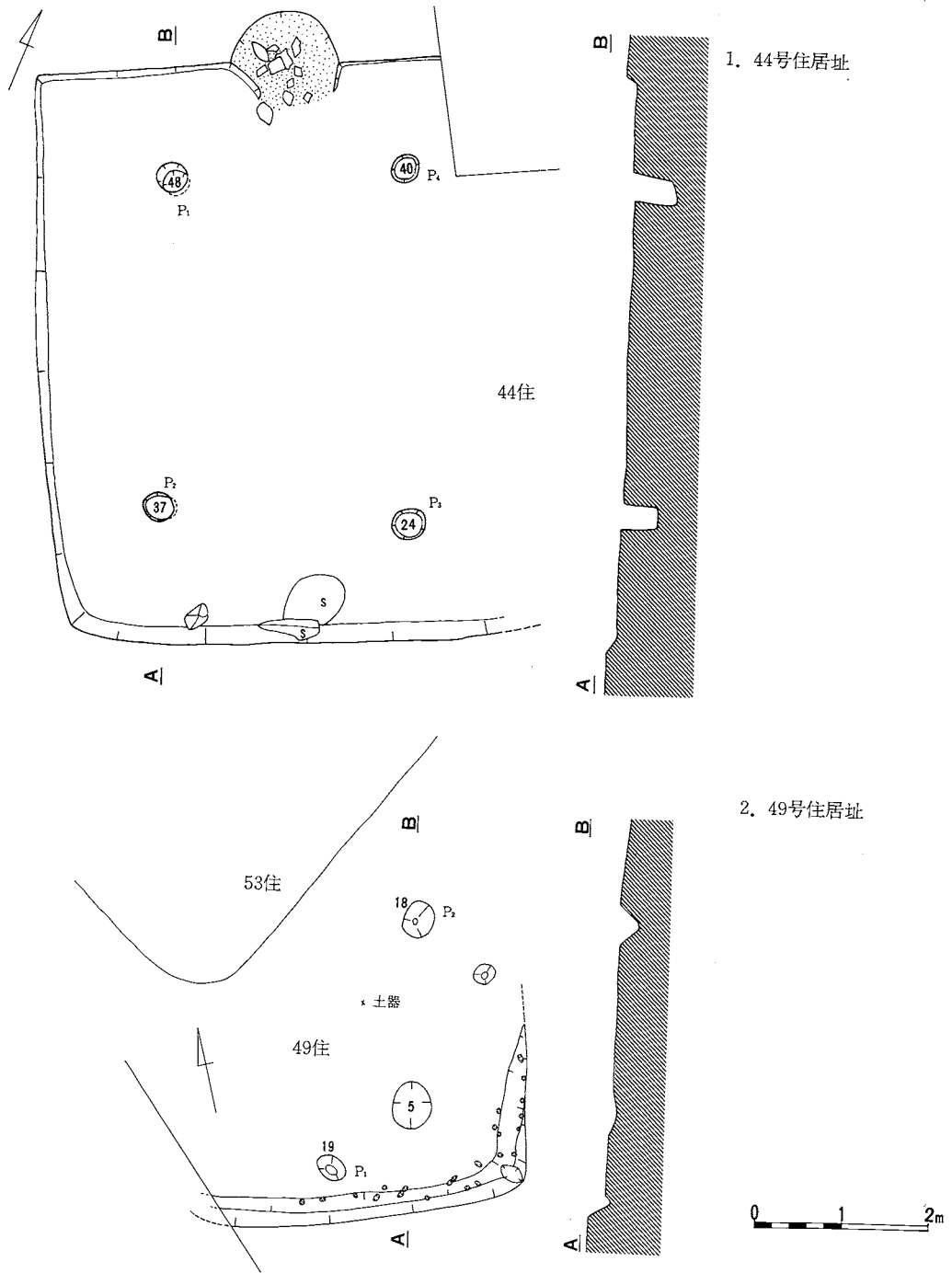
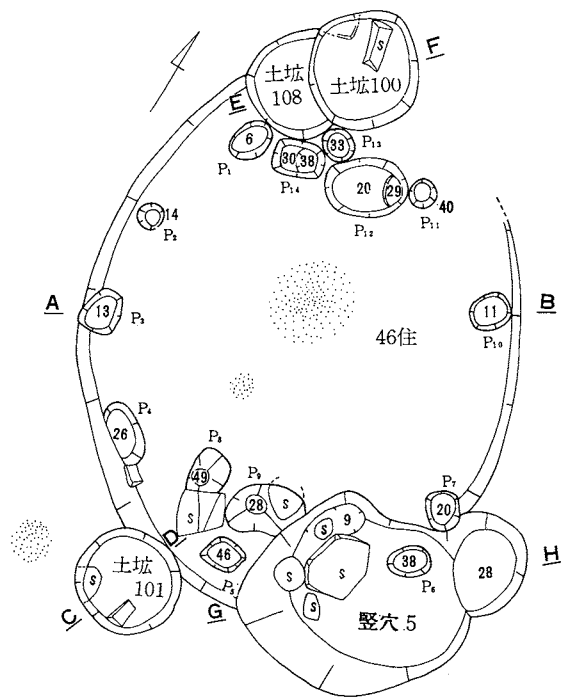
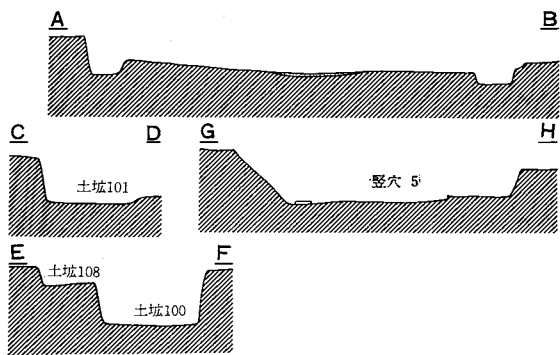


图 23 十二ノ后遺跡44・49号住居址実測図



1. 46号住居址、竪穴5、土壇100、101、108



2. 56号住居址

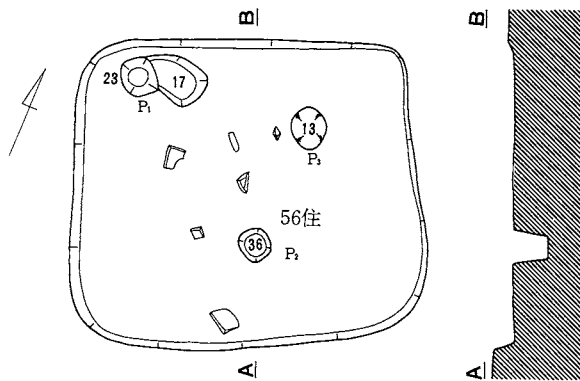
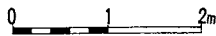


图 24 十二ノ后遺跡46・56号住居址，竪穴5，土壇100・101・108 実測図

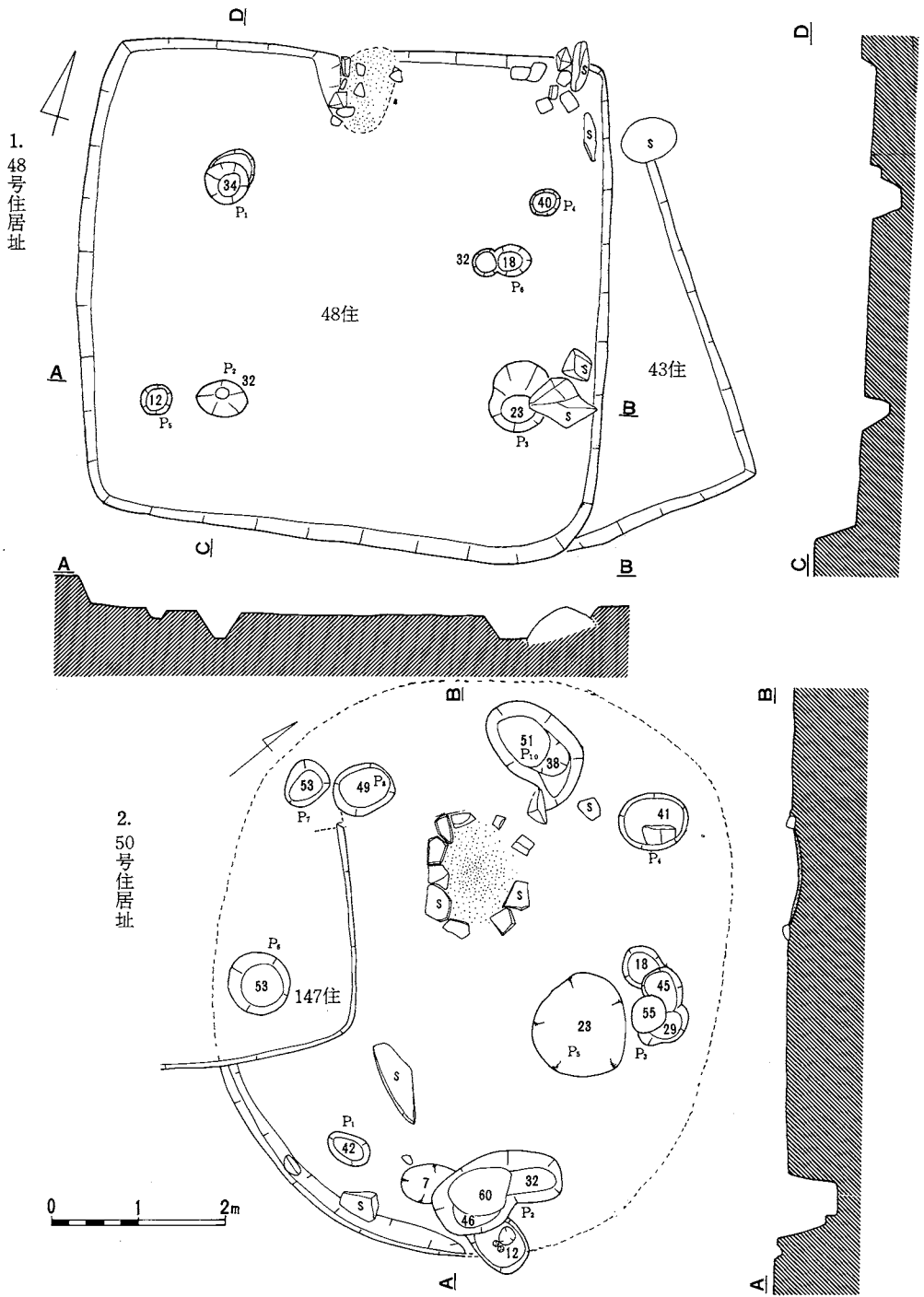


图 25 十二ノ后遺跡48・50号住居址実測図

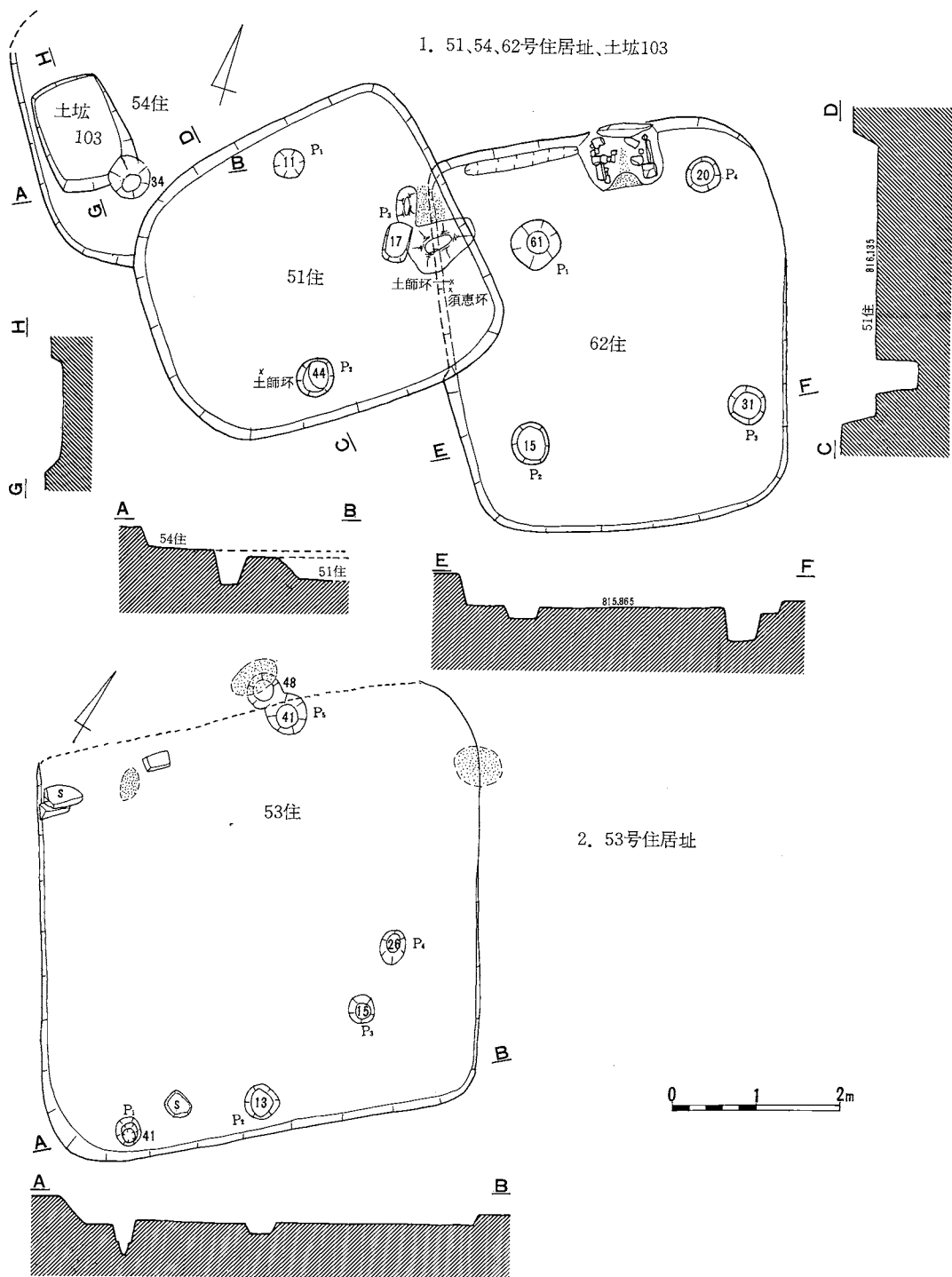


图 26 十二ノ后遺跡51・53・54・62号住居址，土城 103 実測図

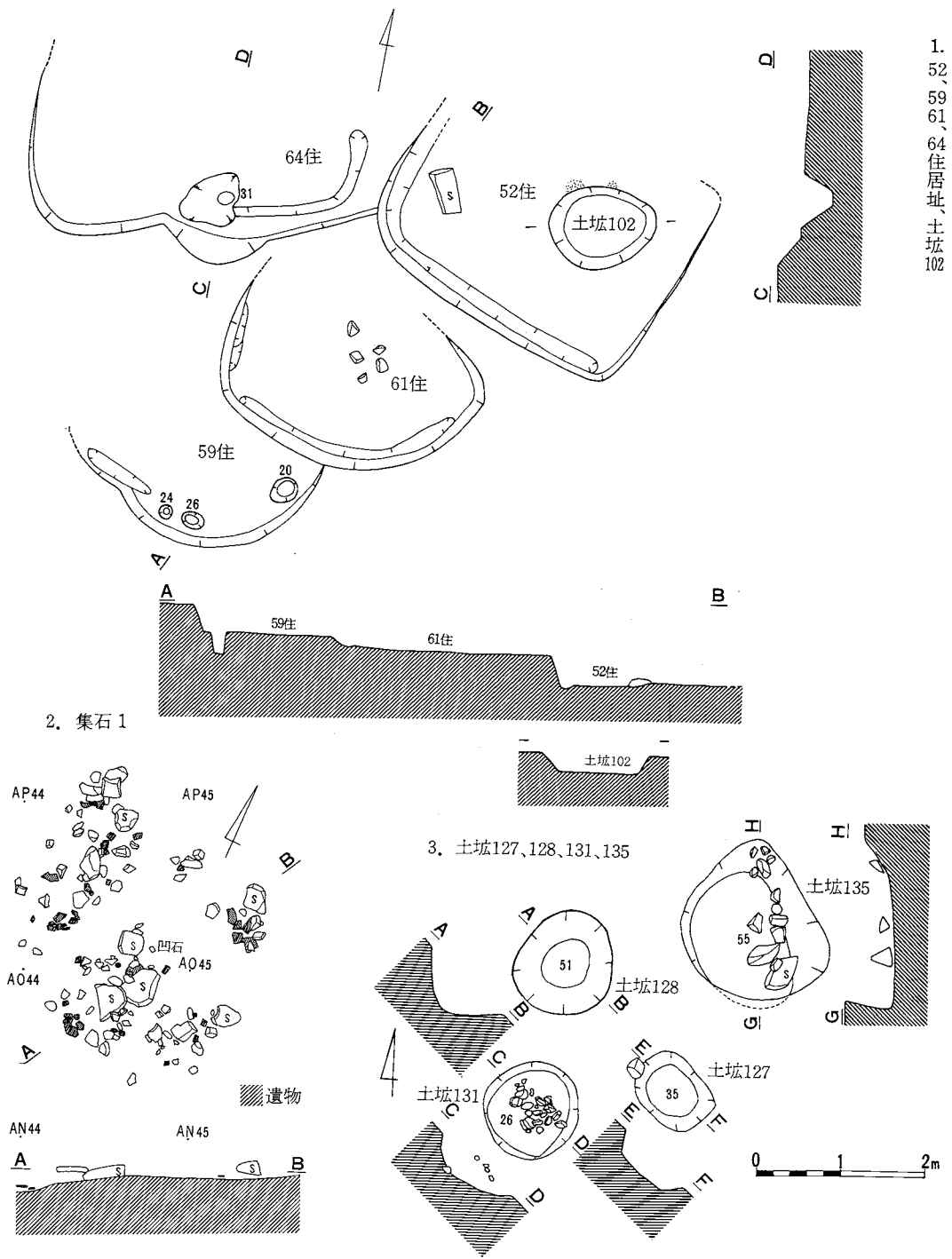


图 27 十二ノ后遺跡52・59・61・64号住居址，集石 1，土塚102・127・128・131・135实测图

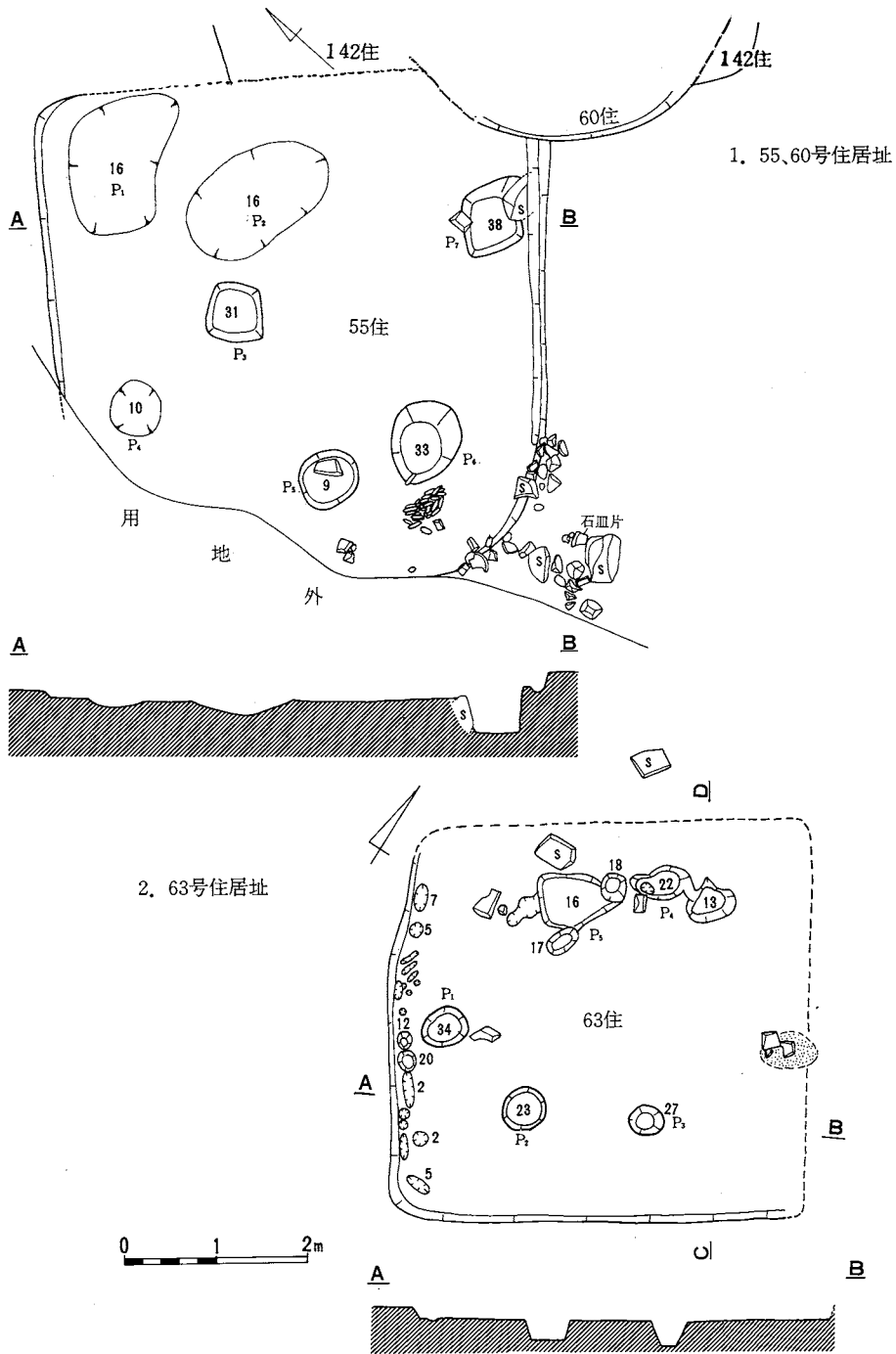
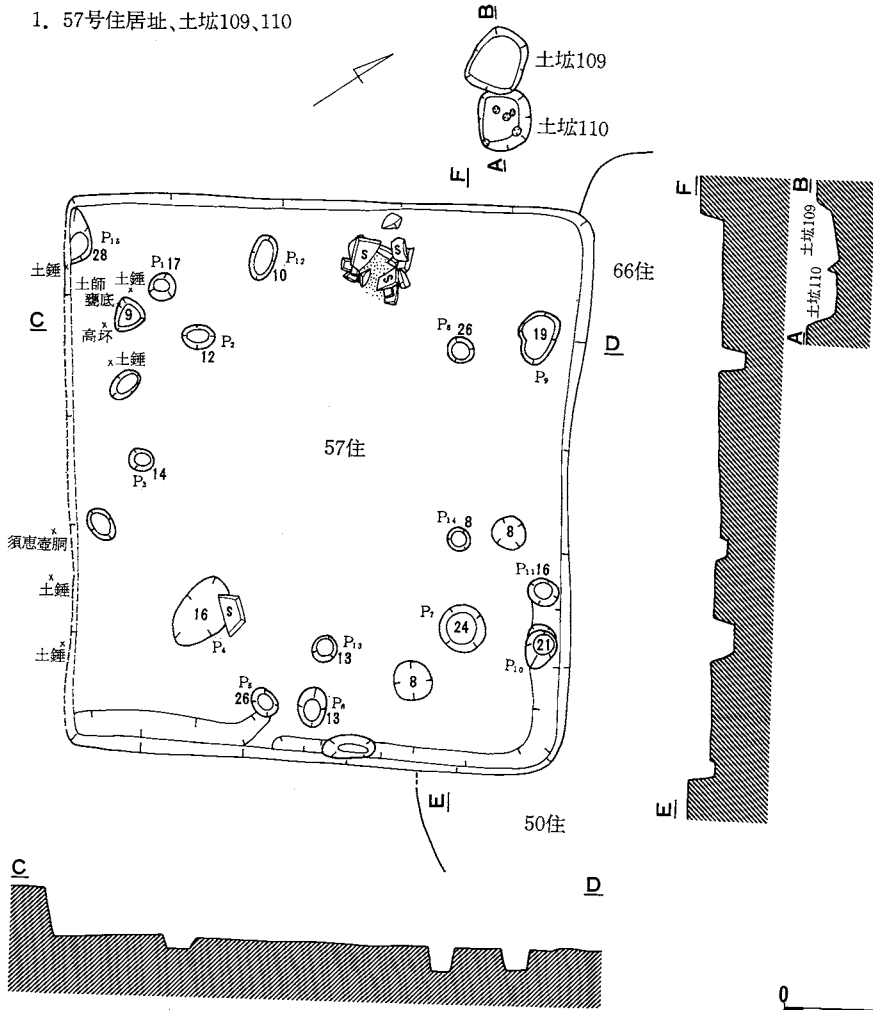
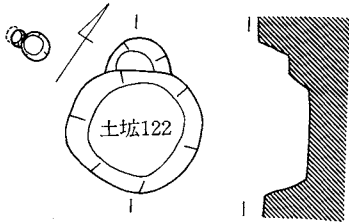


图 28 十二ノ后遺跡55・60・63号住居址実測図

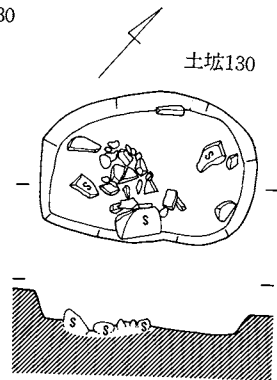
1. 57号住居址、土塚109、110



2. 土塚122



3. 土塚130



4. 土塚181、182

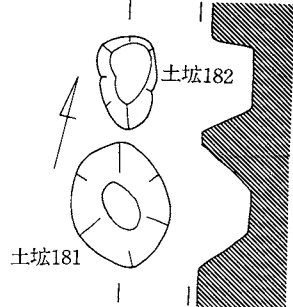
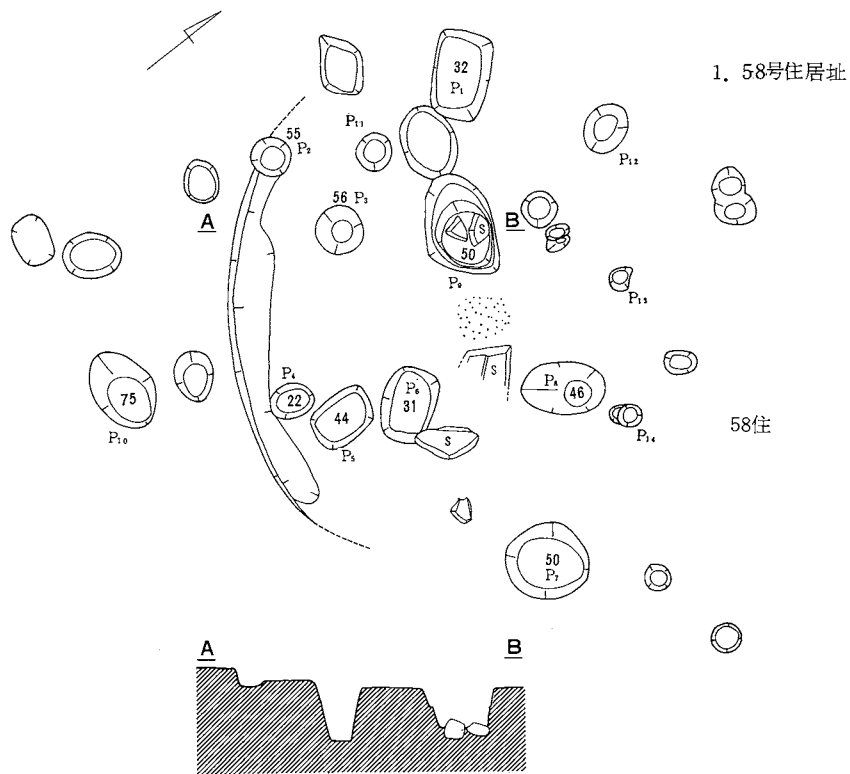


图29 十二ノ后遺跡57号住居址，土塚109・110・122・130・181・182実測図



2. 66号住居址

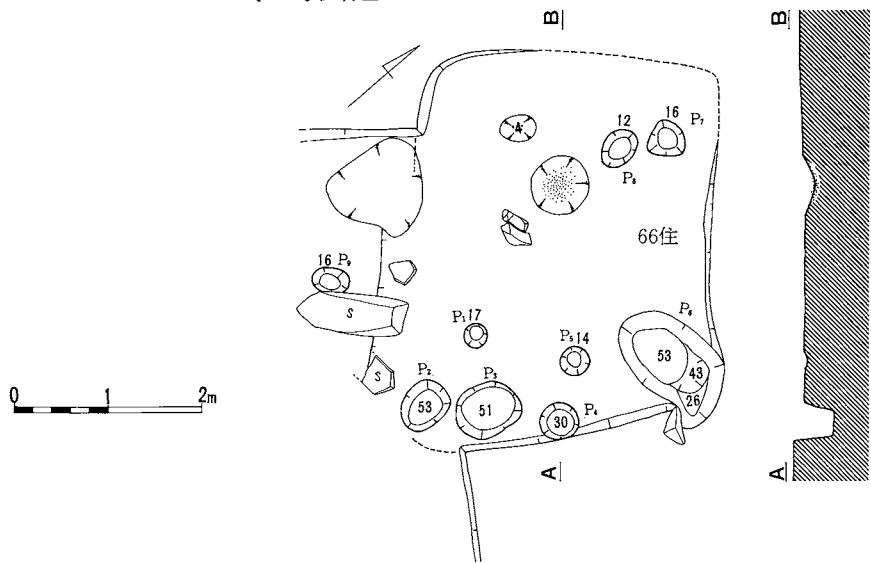


图 30 十二ノ后遺跡58・66号住居址実測図

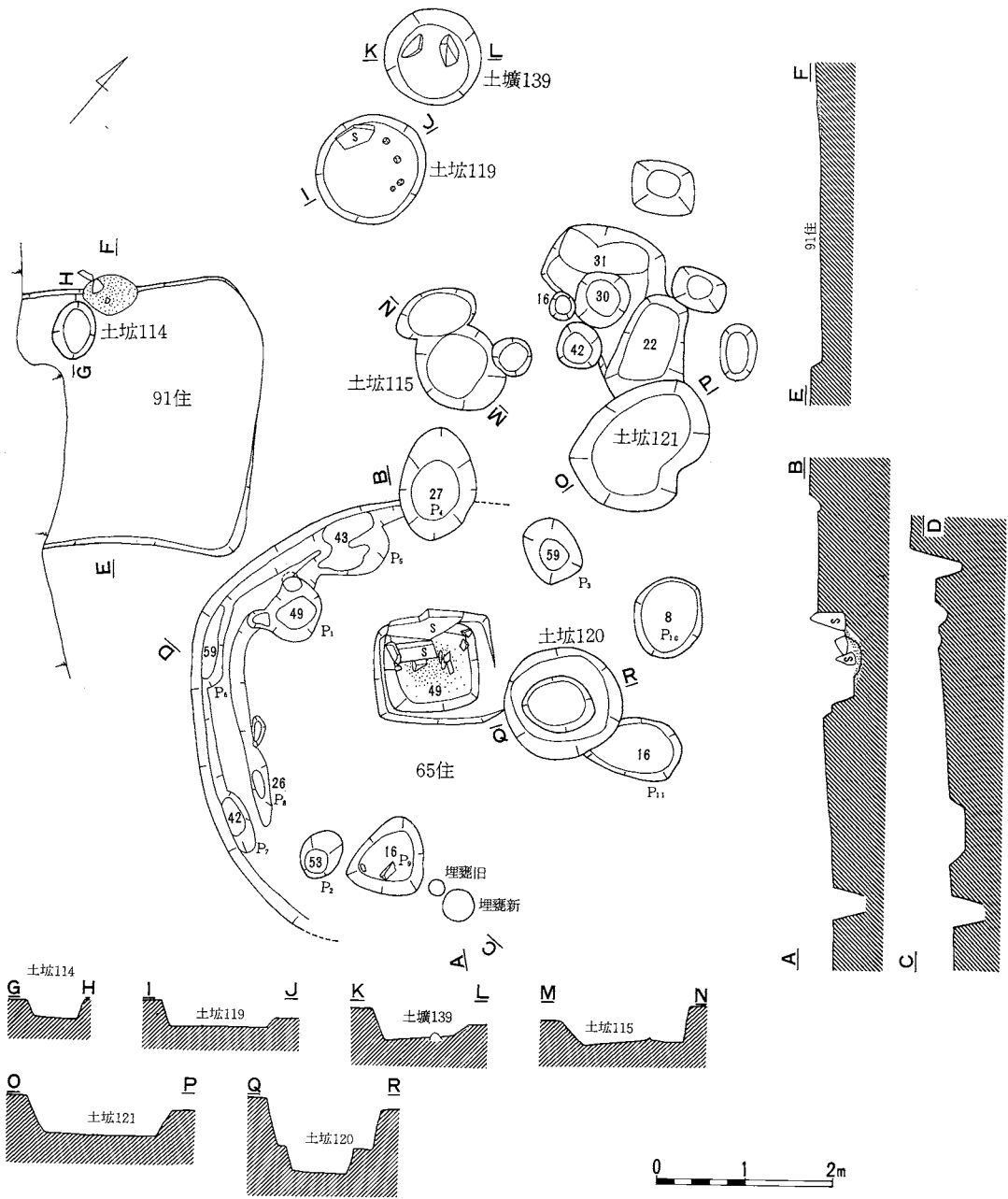


图 31 十二ノ后遺跡65・91号住居址，土坑114・115・119・120・121・139実測図

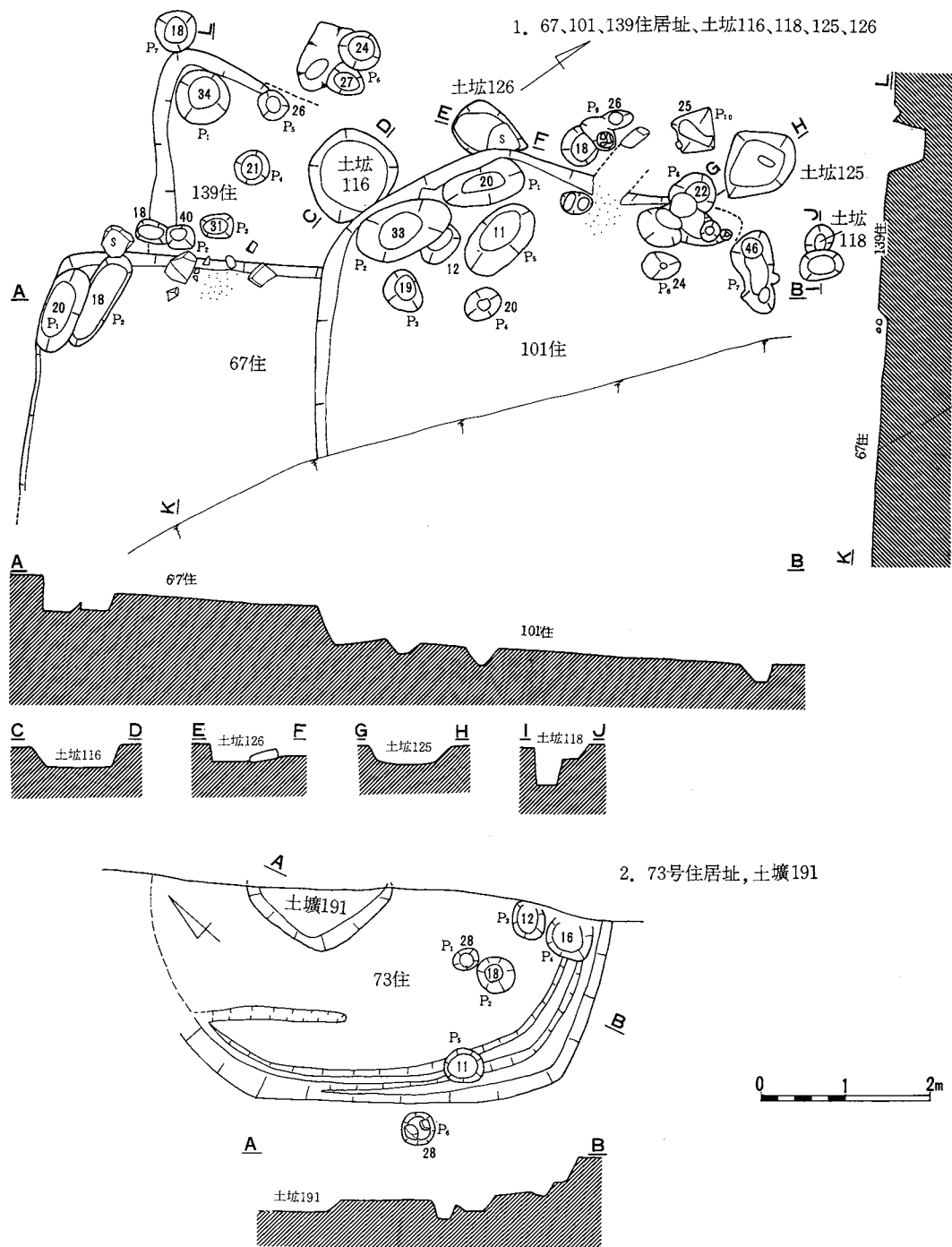


图 32 十二ノ后遺跡67・73・101・139号住居址, 土城116・118・125・126・191 実測図

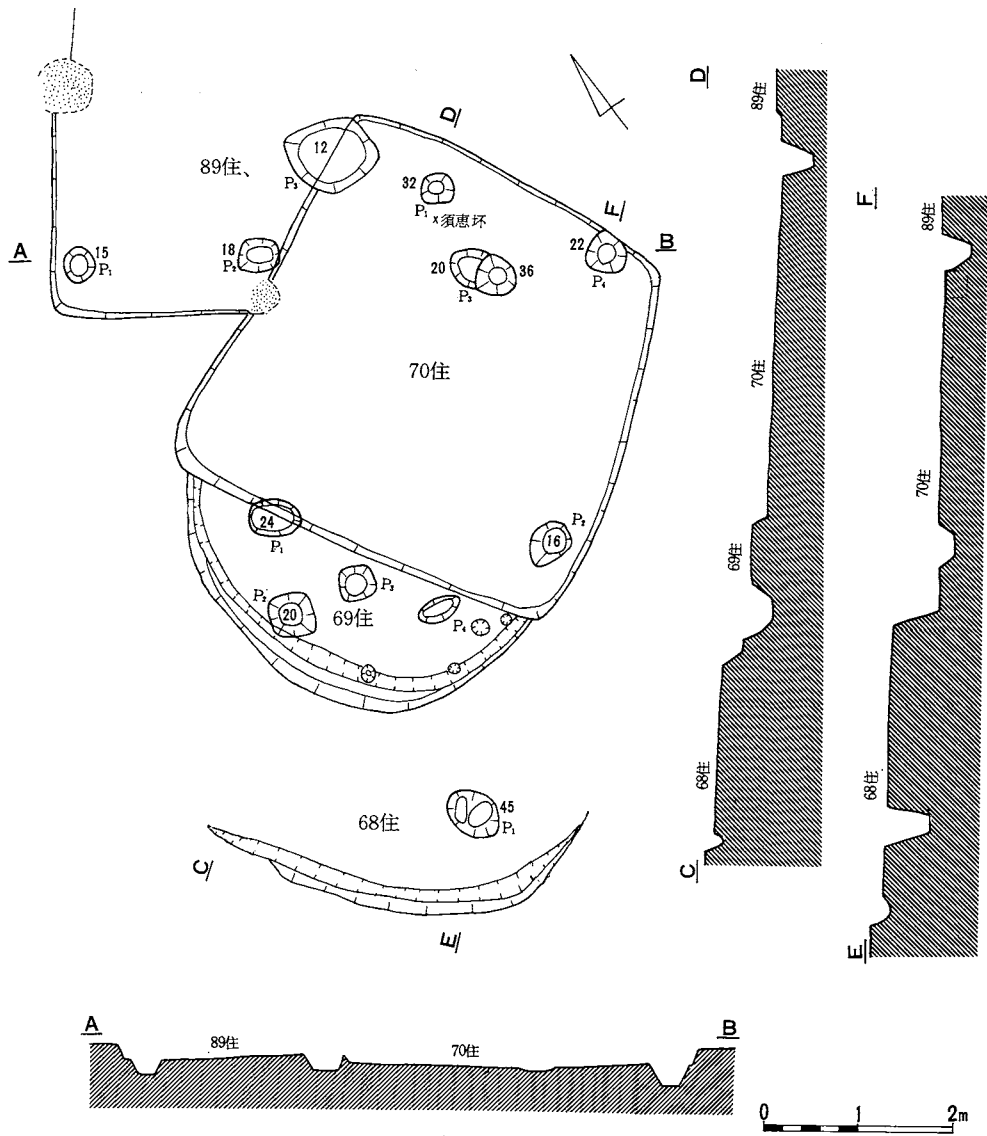


図 33 十二ノ后遺跡68・69・70・89号住居址実測図

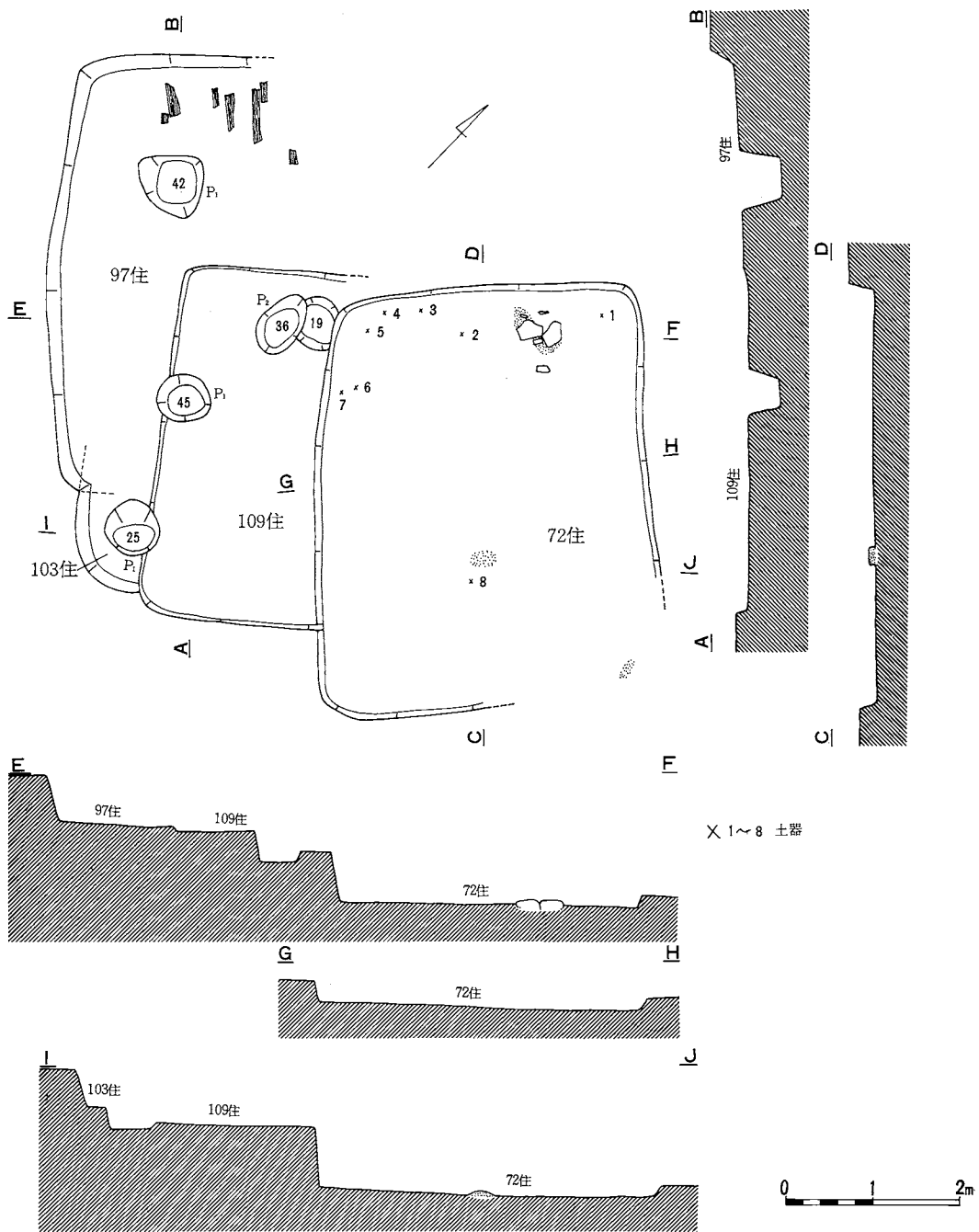


図 34 十二ノ后遺跡72・97・103・109号住居址実測図

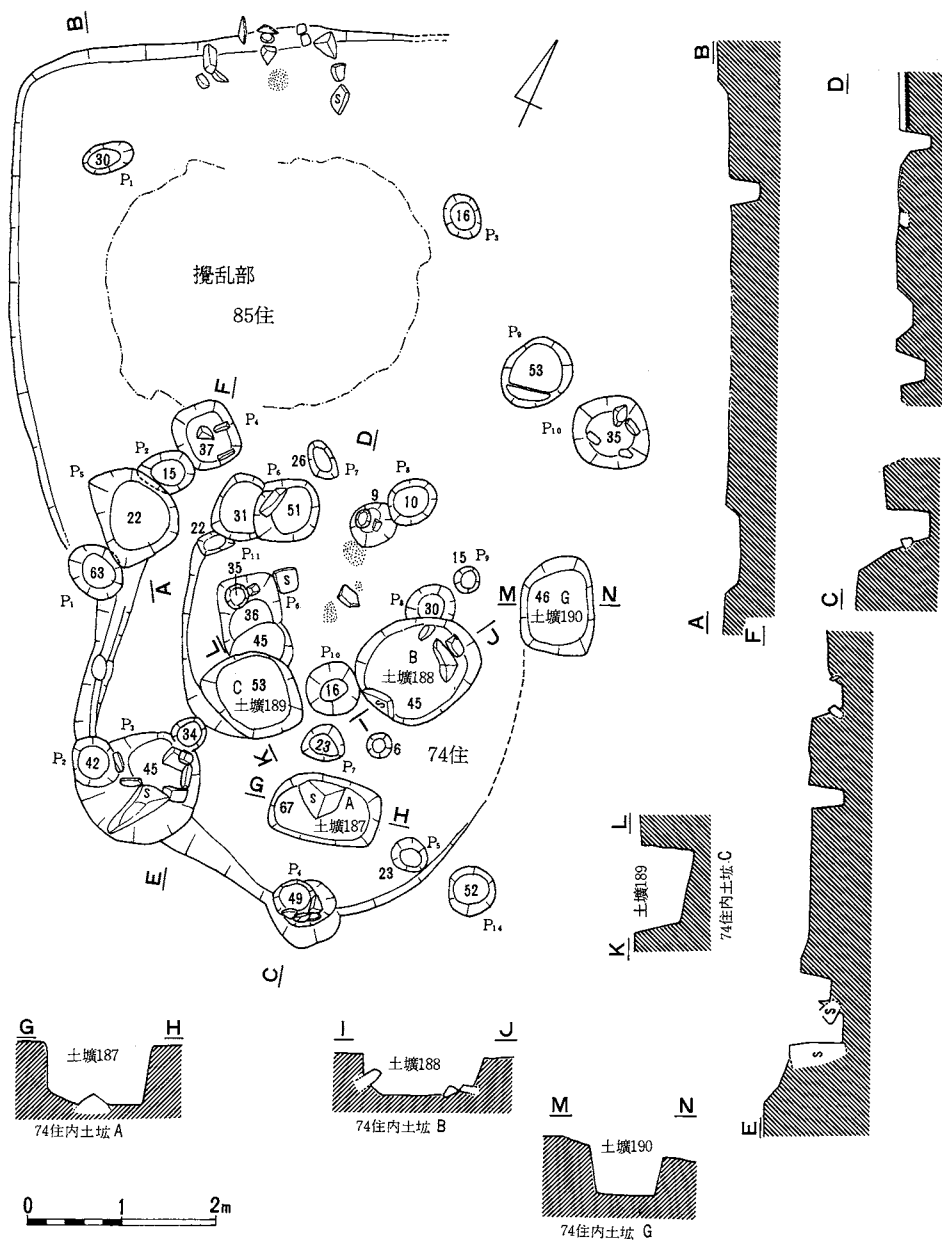


图 35 十二ノ后遺跡74・85号住居址，土壇187~190実測図

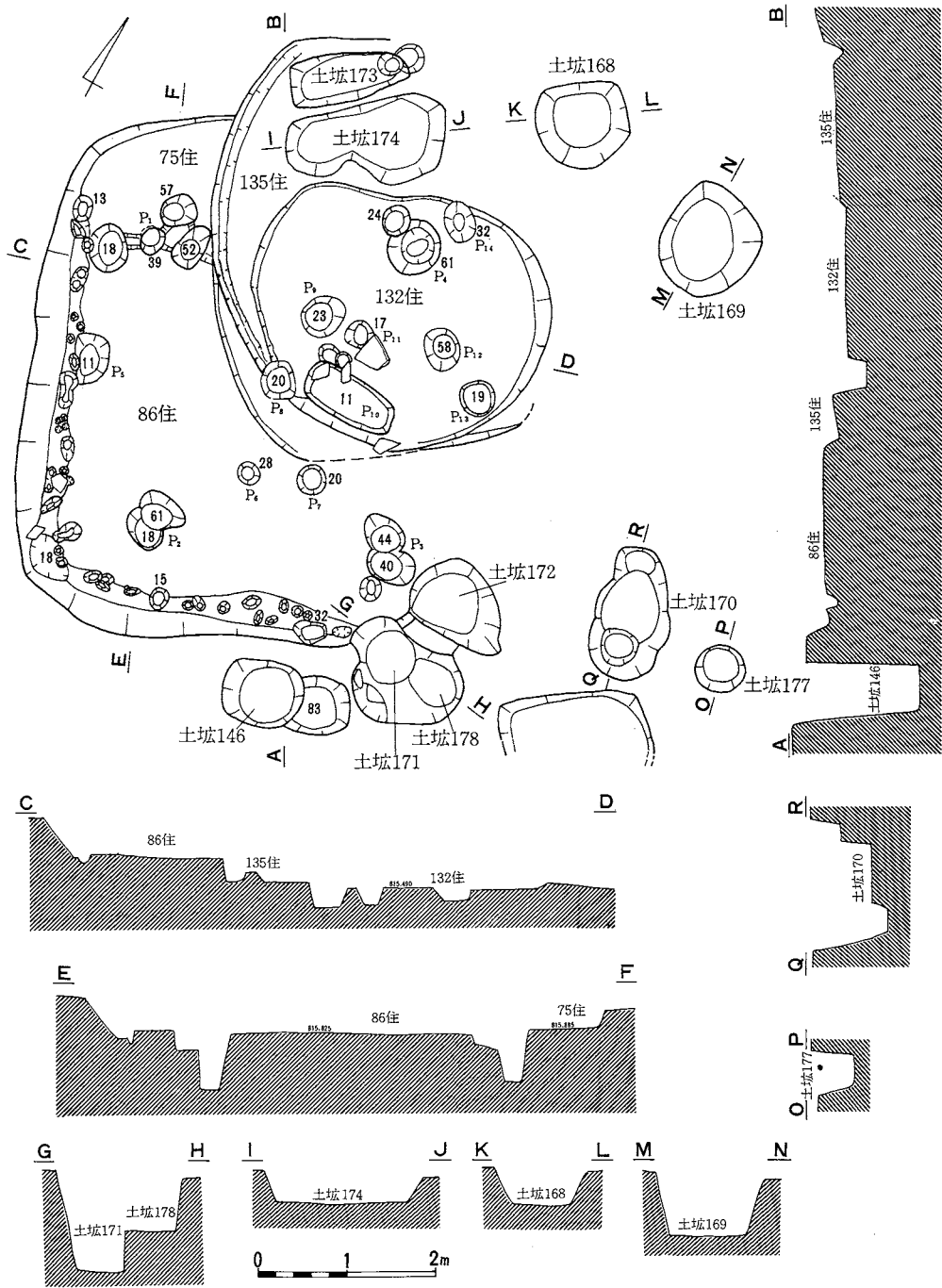
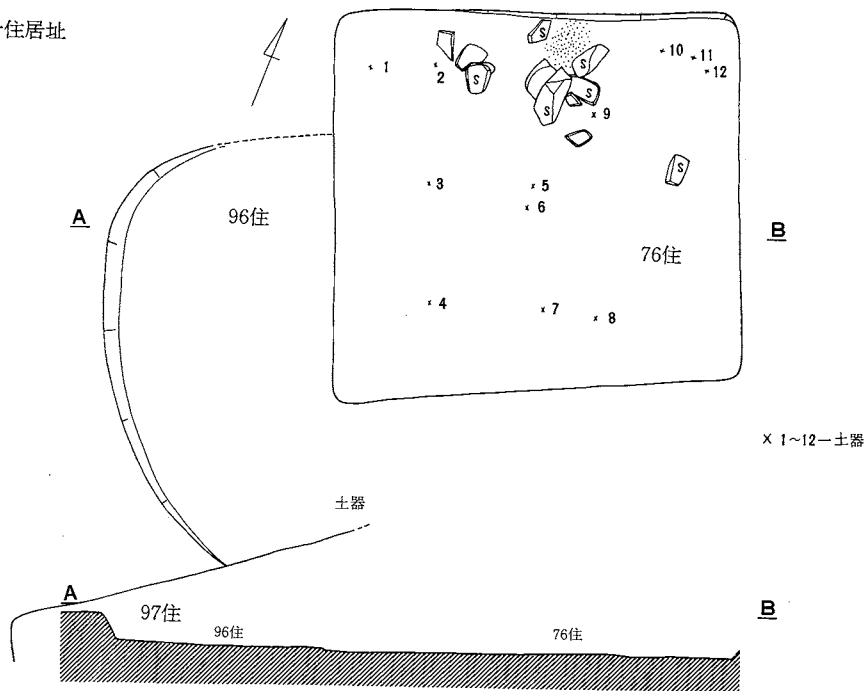


图 36 十二ノ后遺跡75・86・132・135号住居址，土城146・168~174・177・178 実測図

1. 76、96号住居址



2. 78号住居址

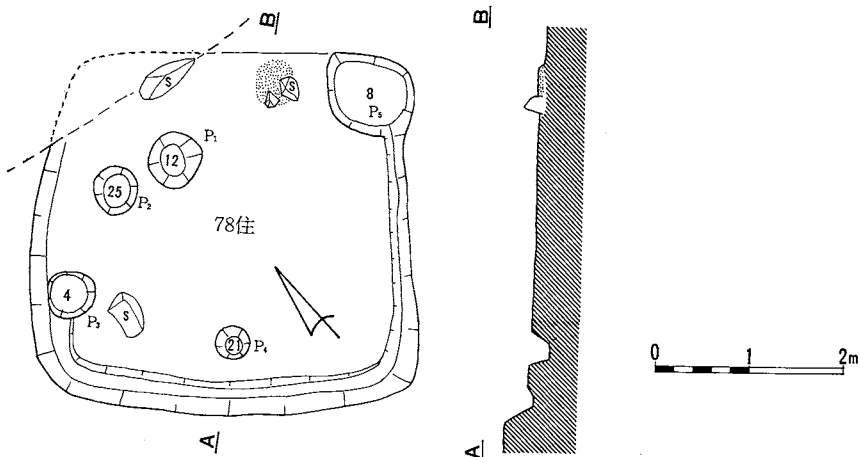


图 37 十二ノ后遺跡76・78・96号住居址実測図

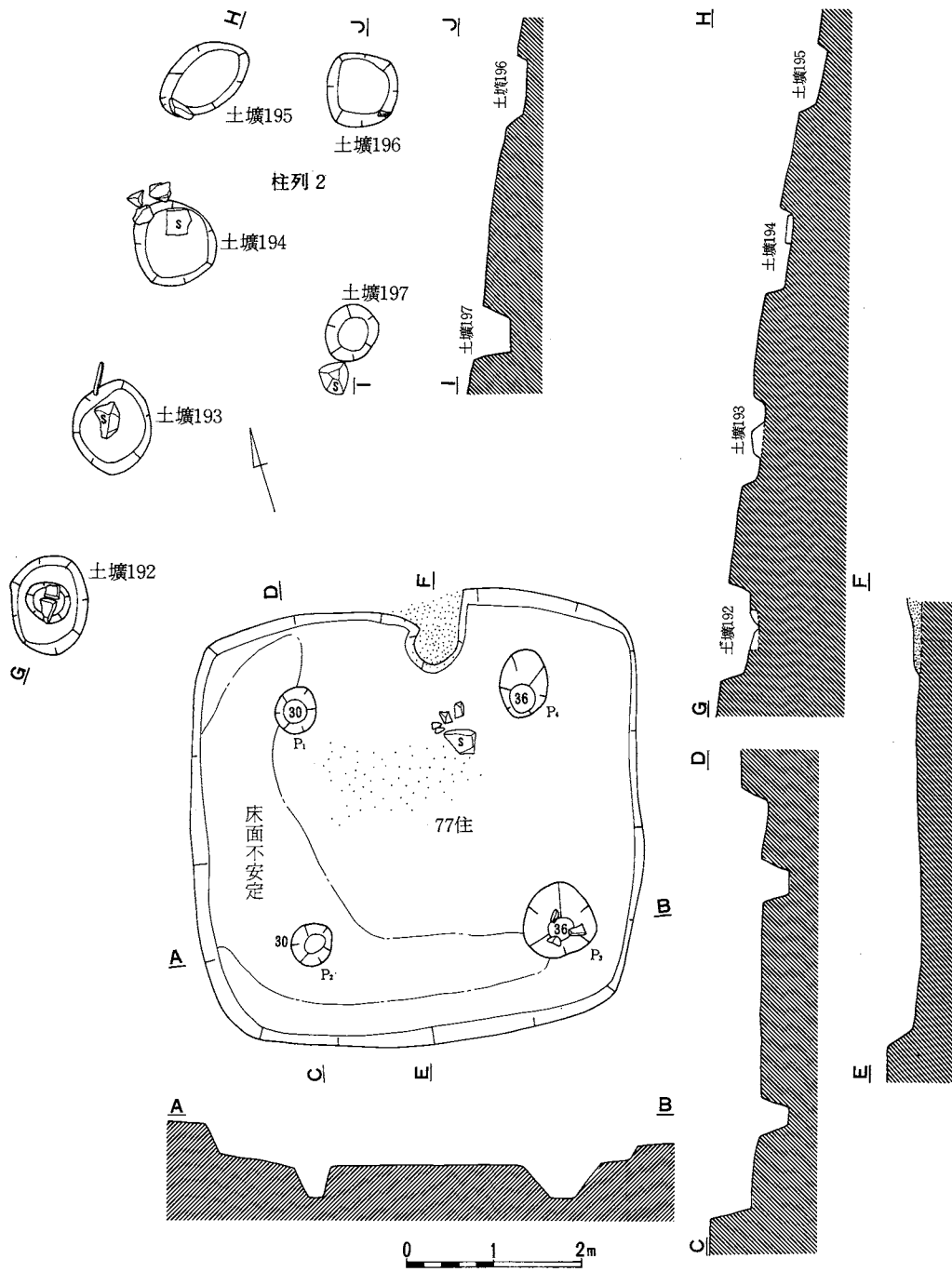
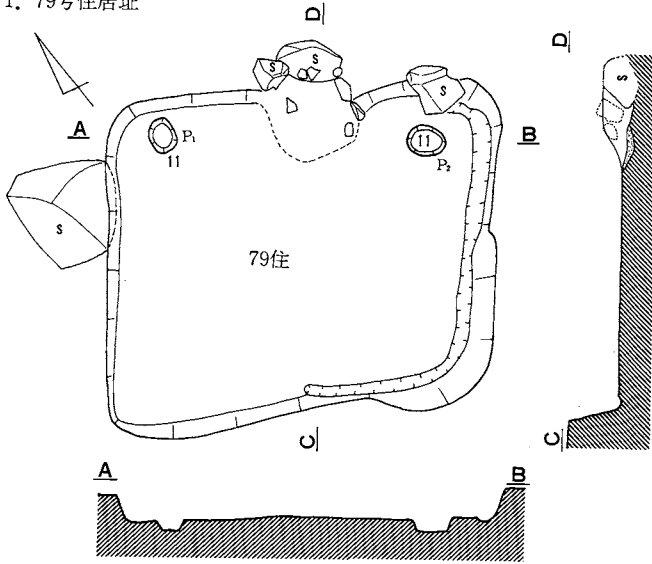


図 38 十二ノ后遺跡77号住居址，土坑192～197実測図

1. 79号住居址



2. 80号住居址

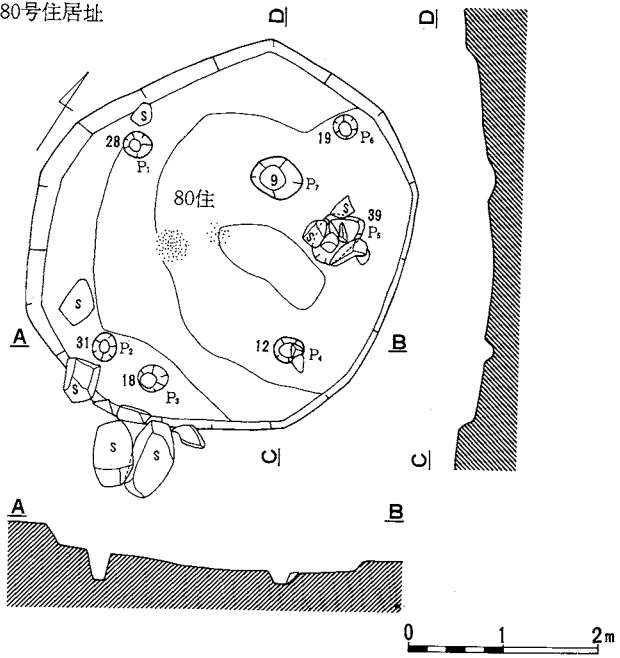


图 39 十二ノ后遺跡79・80号住居址実測図

1. 82, 83号住居址

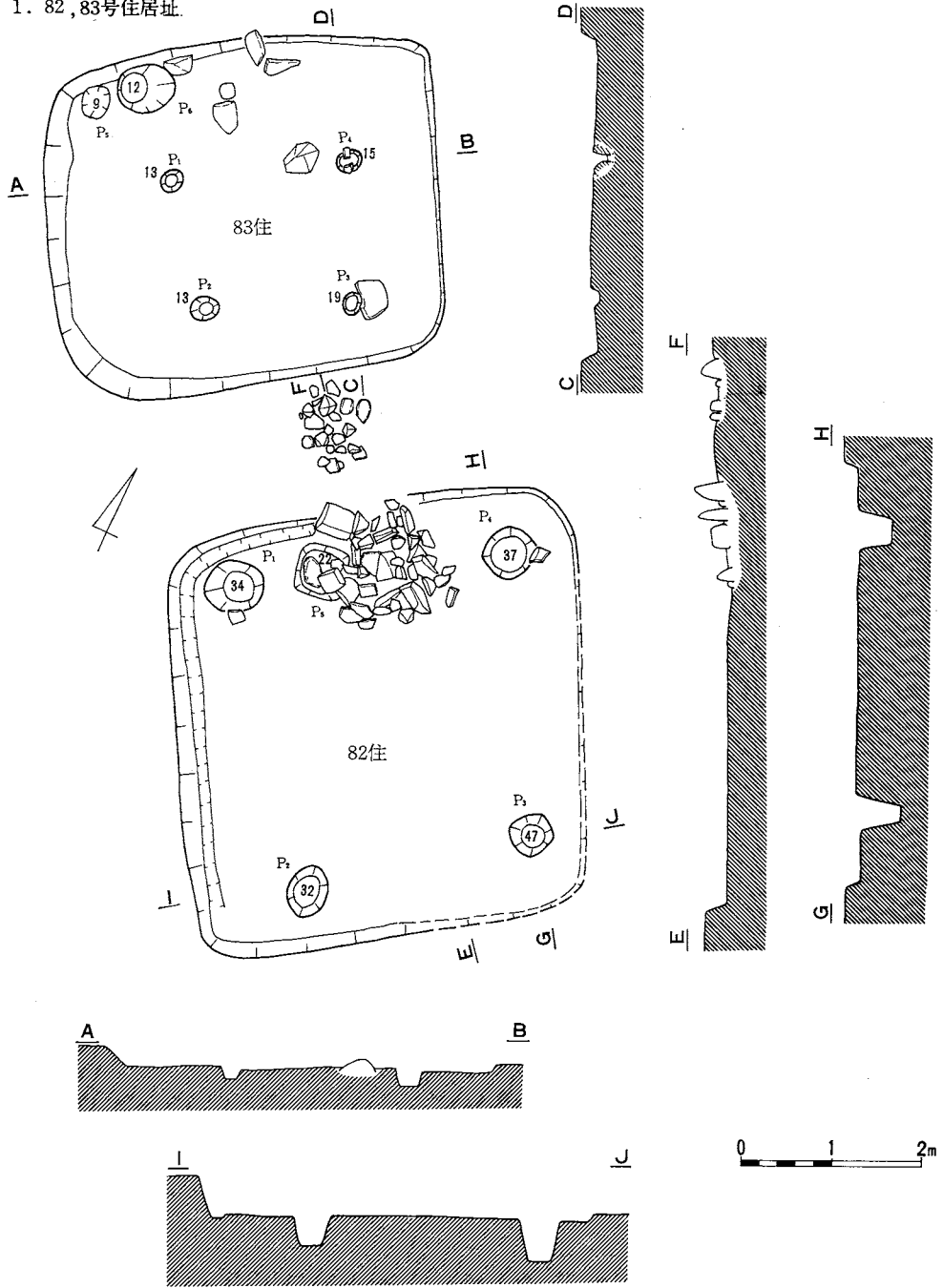


図40 十二ノ后遺跡82・83号住居址実測図

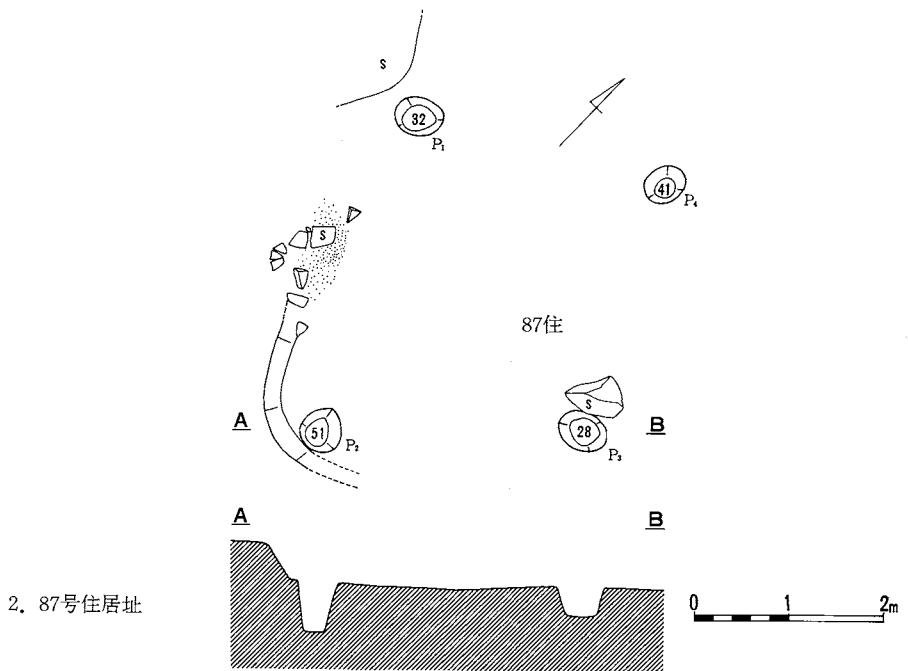
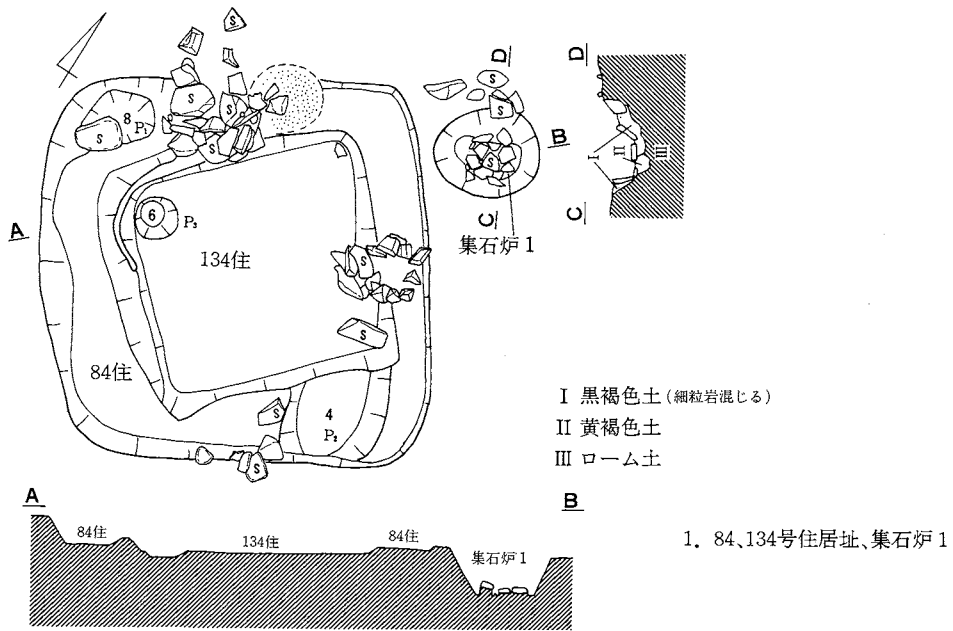


図 41 十二ノ后遺跡84・87・134号住居址、集石炉 1 実測図

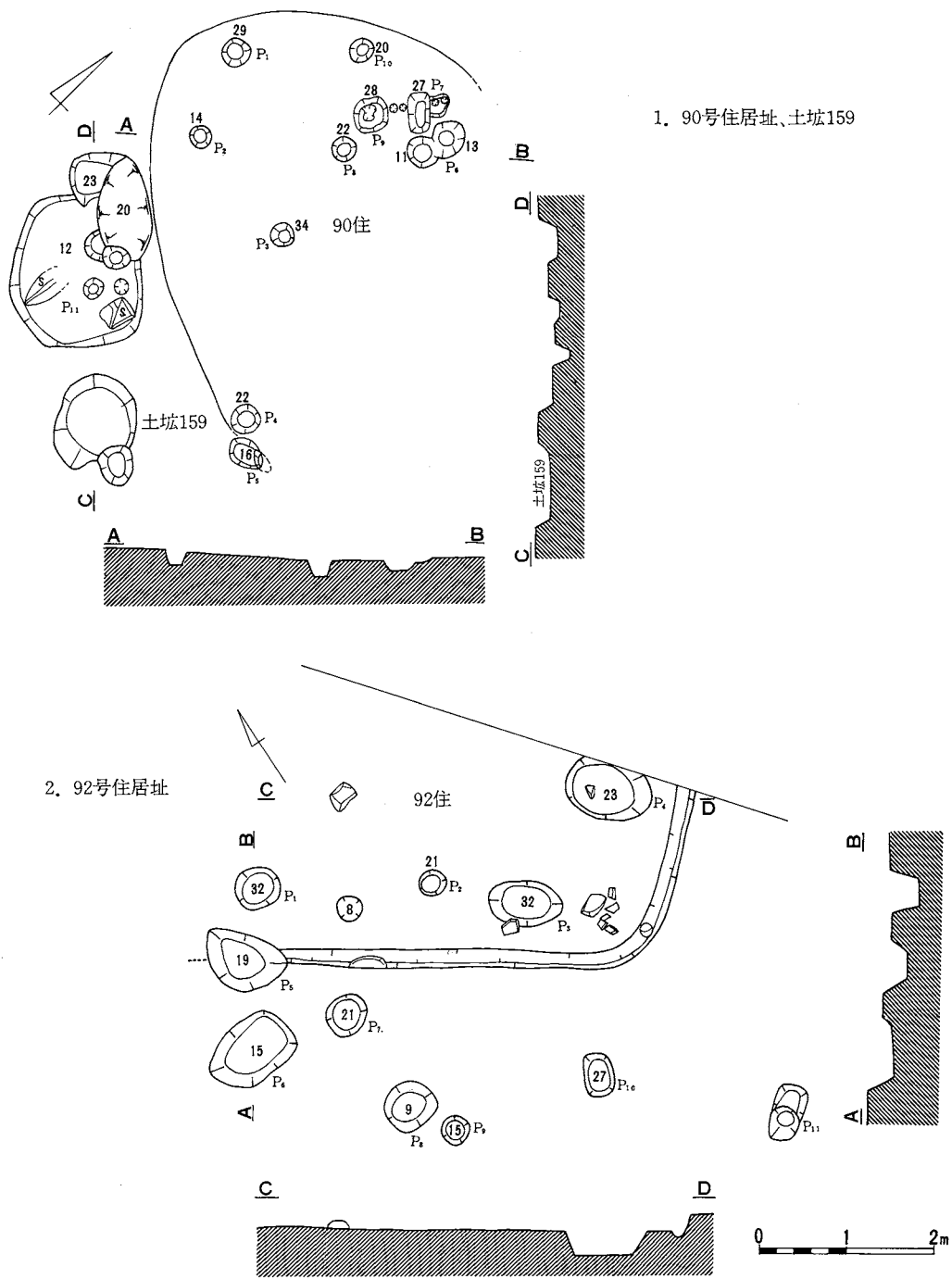
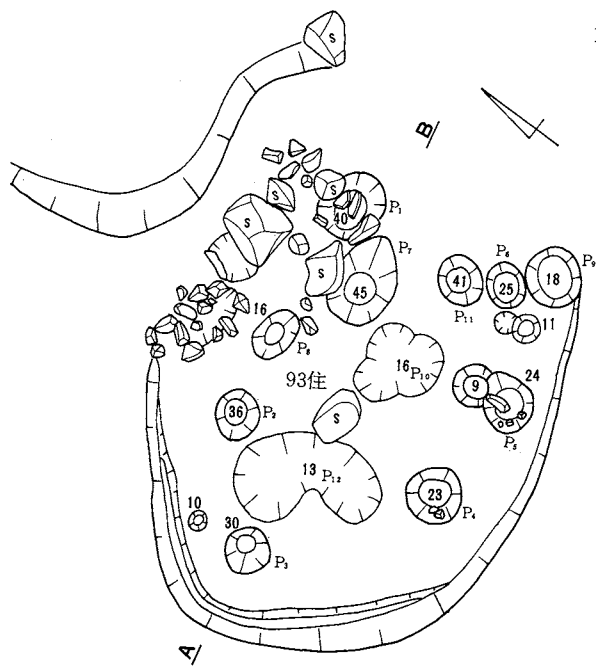
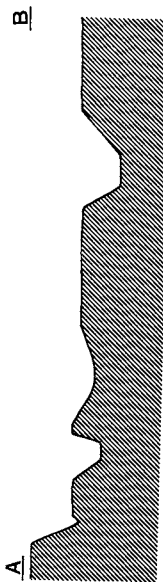


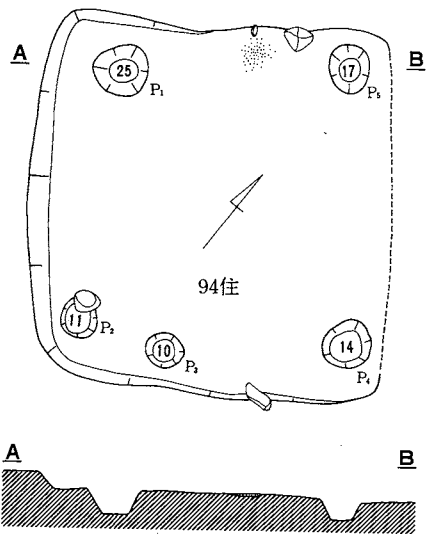
图 42 十二ノ后遺跡90・92号住居址，土塚 159 実測図



1. 93号住居址



2. 94号住居址



3. 98号住居址

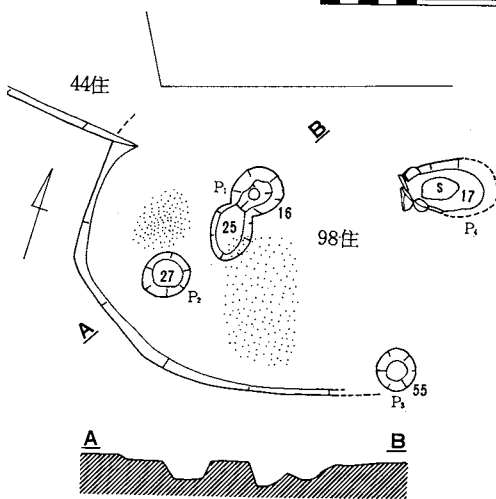


图 43 十二ノ后遺跡93・94・98号住居址実測図

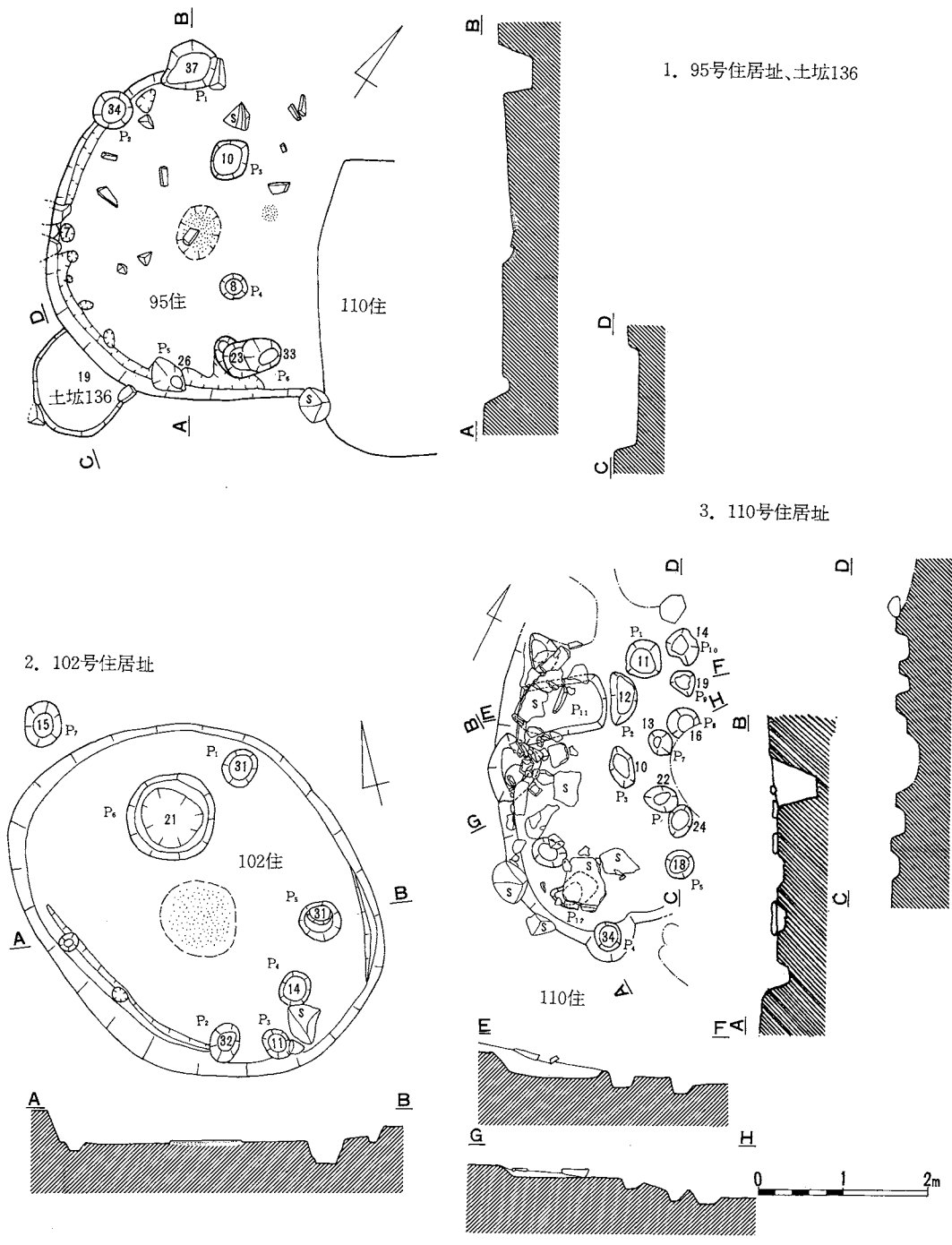


图 44 十二ノ后遺跡95・102・110号住居址，土塚136 实测图

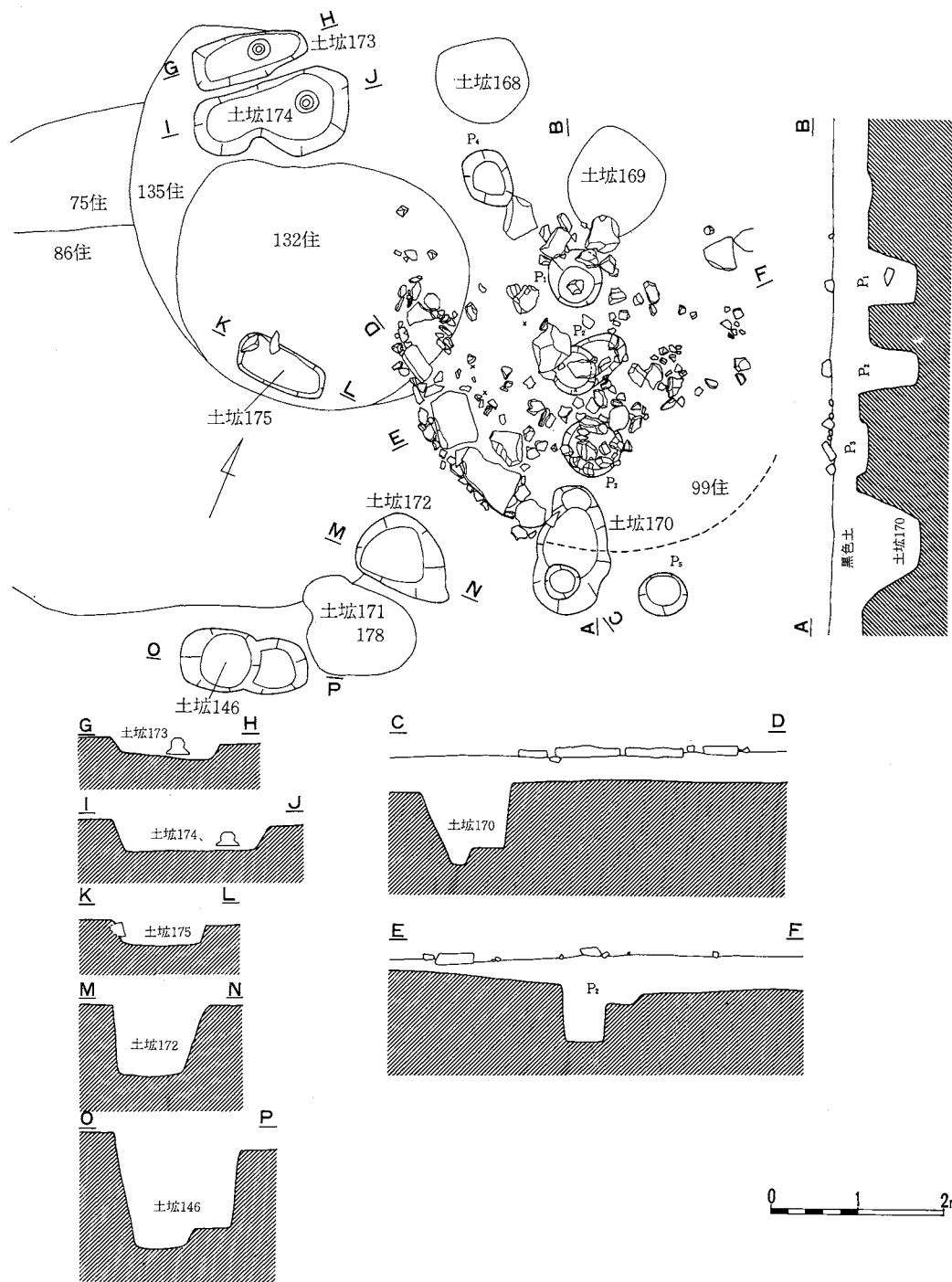
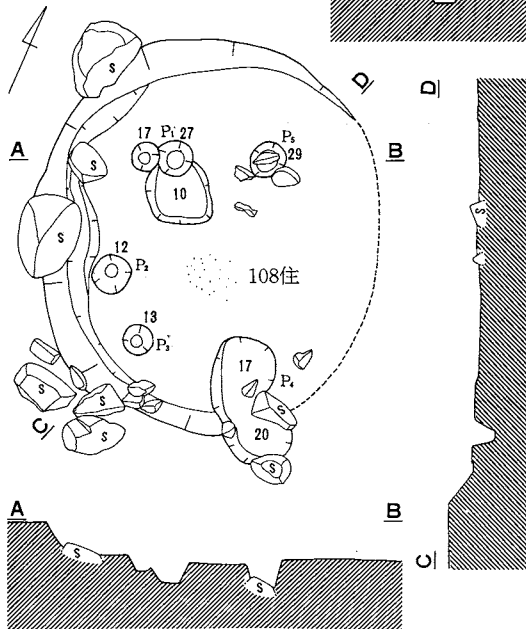
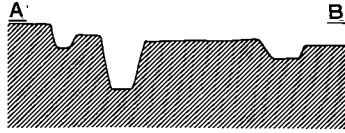
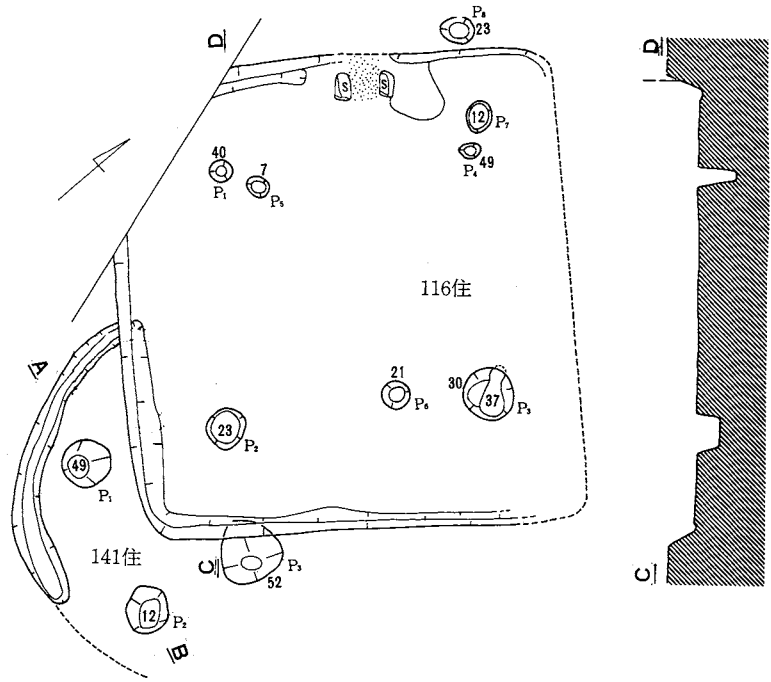


图 45 十二ノ后遺跡99号住居址，土城146・168～175・178実測図

1. 116、141号住居址



2. 108号住居址

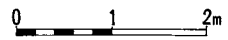


图 46 十二ノ后遺跡108・116・141号住居址，土塚123実測図

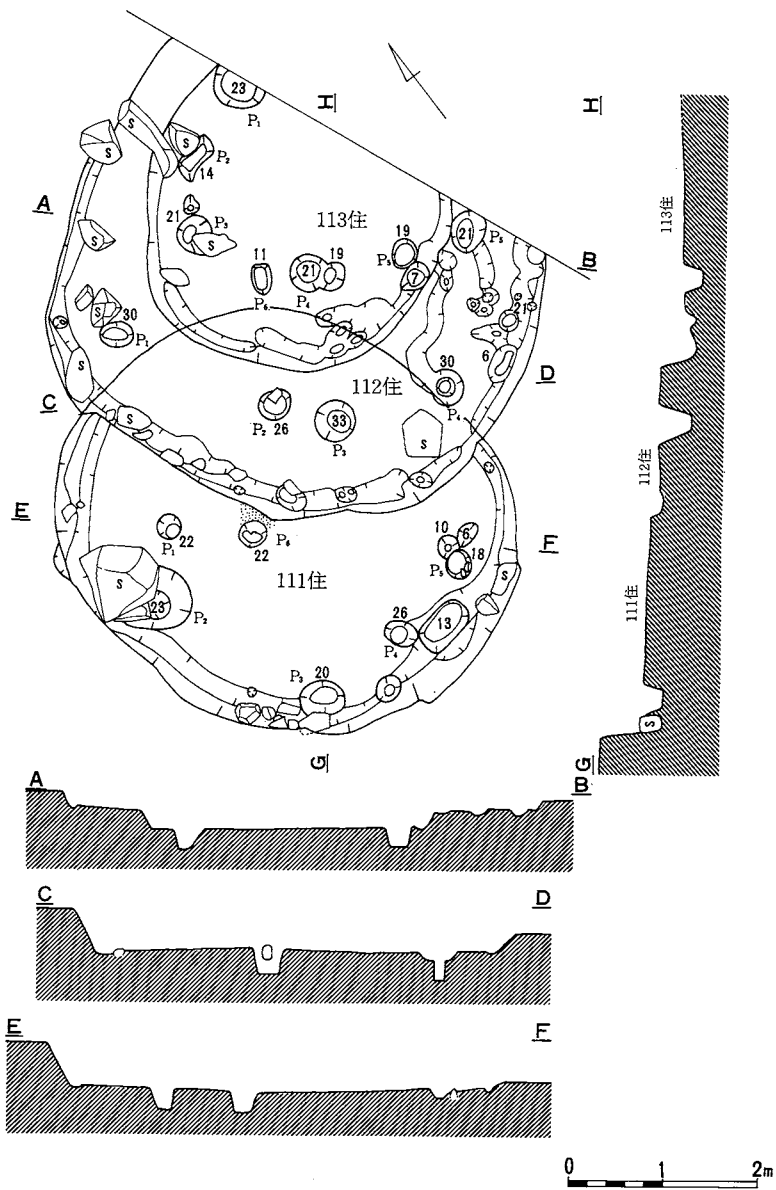


図 47 十二ノ后遺跡111・112・113号住居址実測図

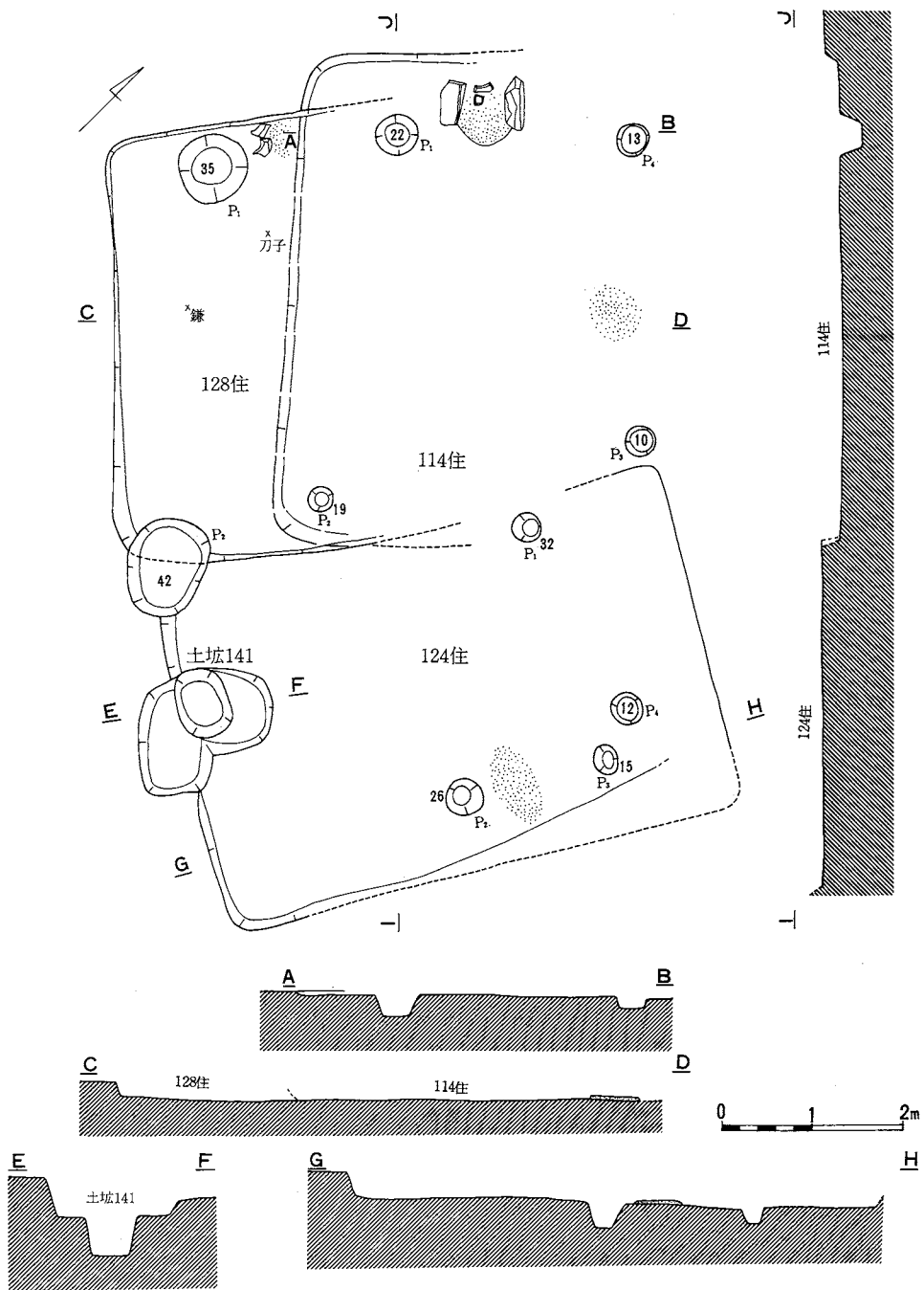


图 48 十二ノ后遺跡114・124・128号住居址，土城141実測図

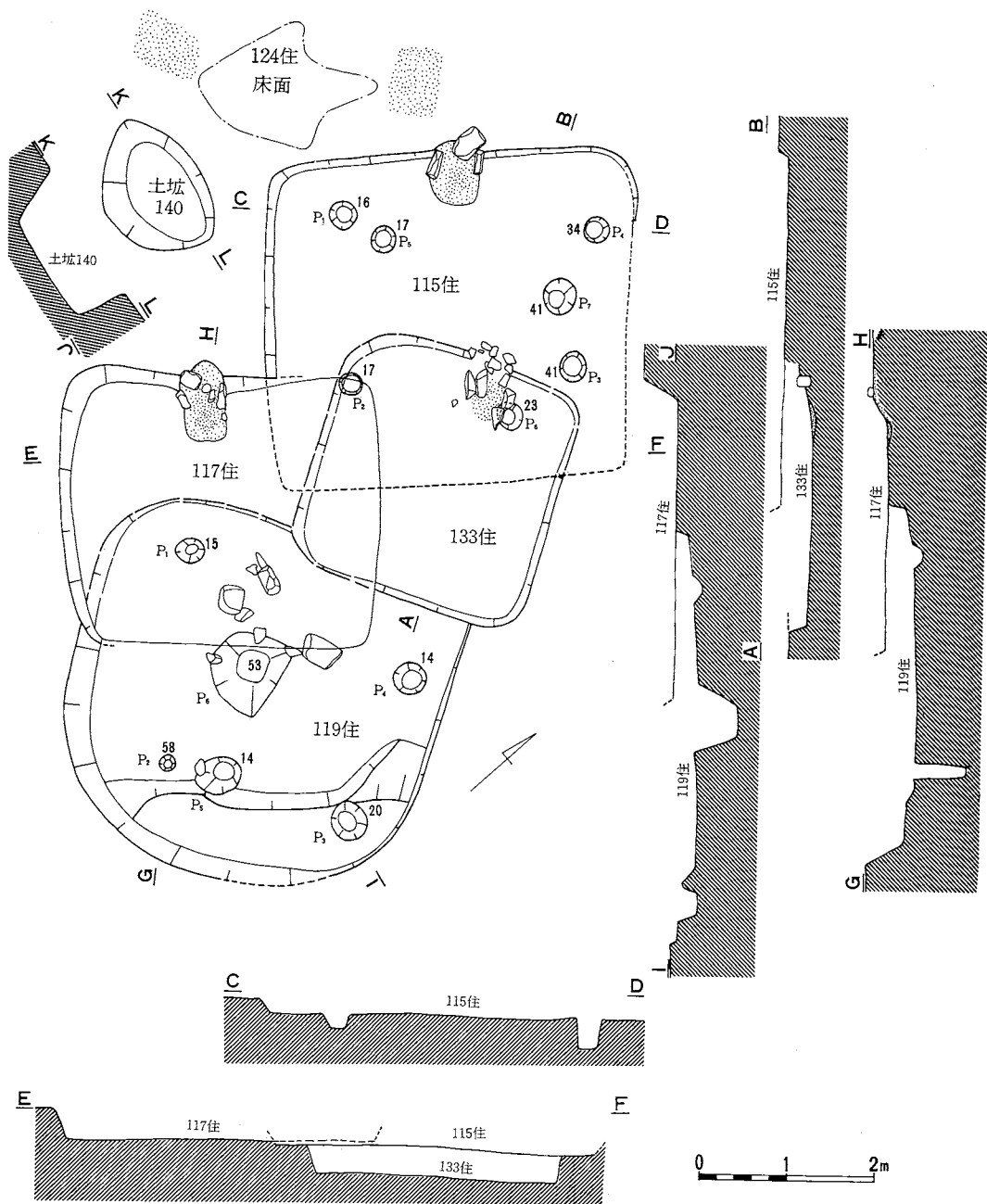
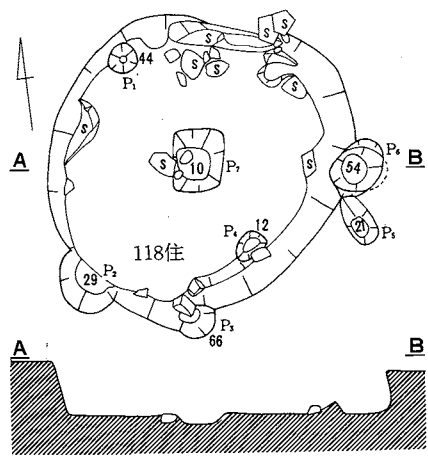
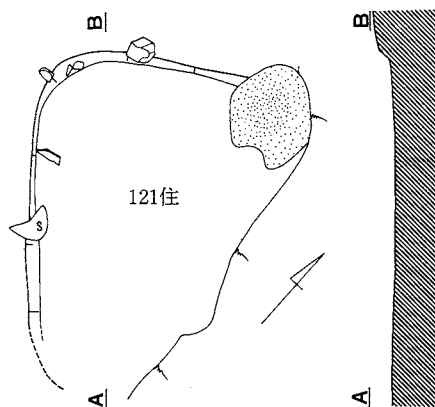


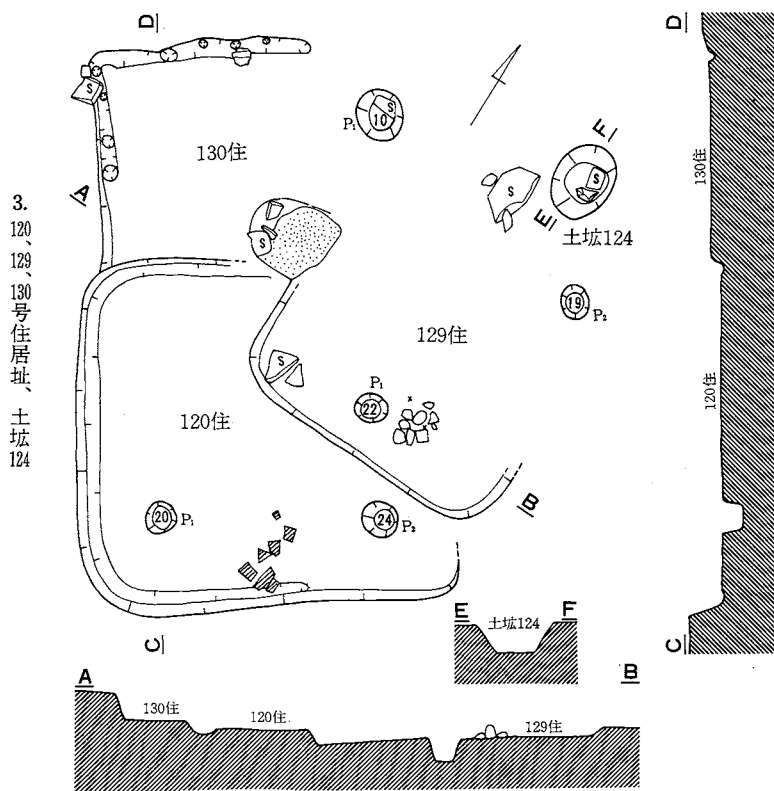
图 49 十二ノ后遺跡115・117・119・133号住居址，土城 140 実測図



1. 118号住居址

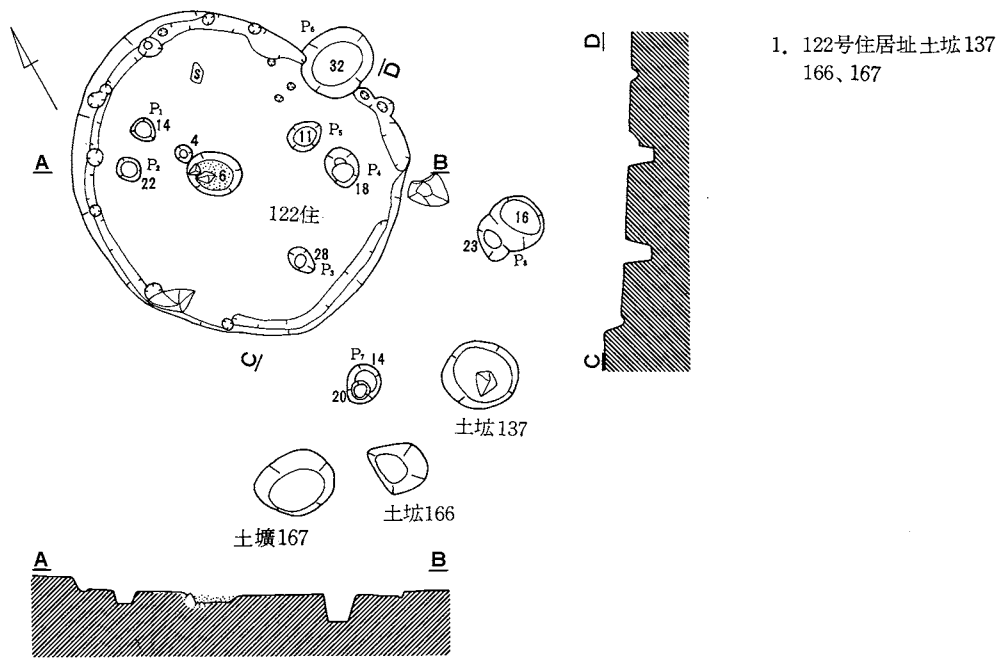


2. 121号住居址



3. 120、129、130号住居址、土坑124

图50 十二ノ后遺跡118・120・121・129・130号住居址，土坑124実測図



2. 127号住居址,土坑142、143、145

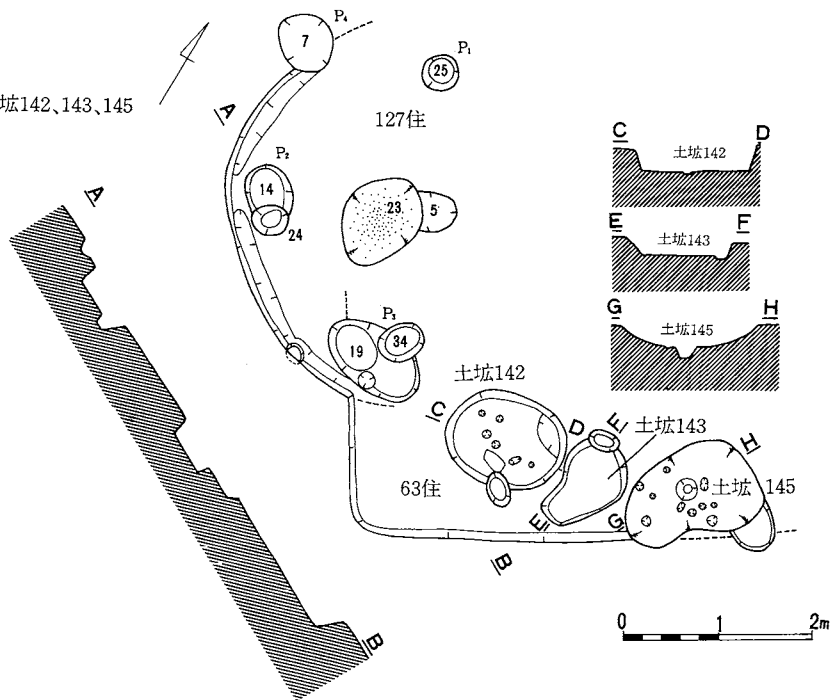


图51 十二ノ后遺跡122・127号住居址,土坑137・142・143・145・166・167実測図

1. 124号住居址、土坡137、140、141、166、167、179,周溝1

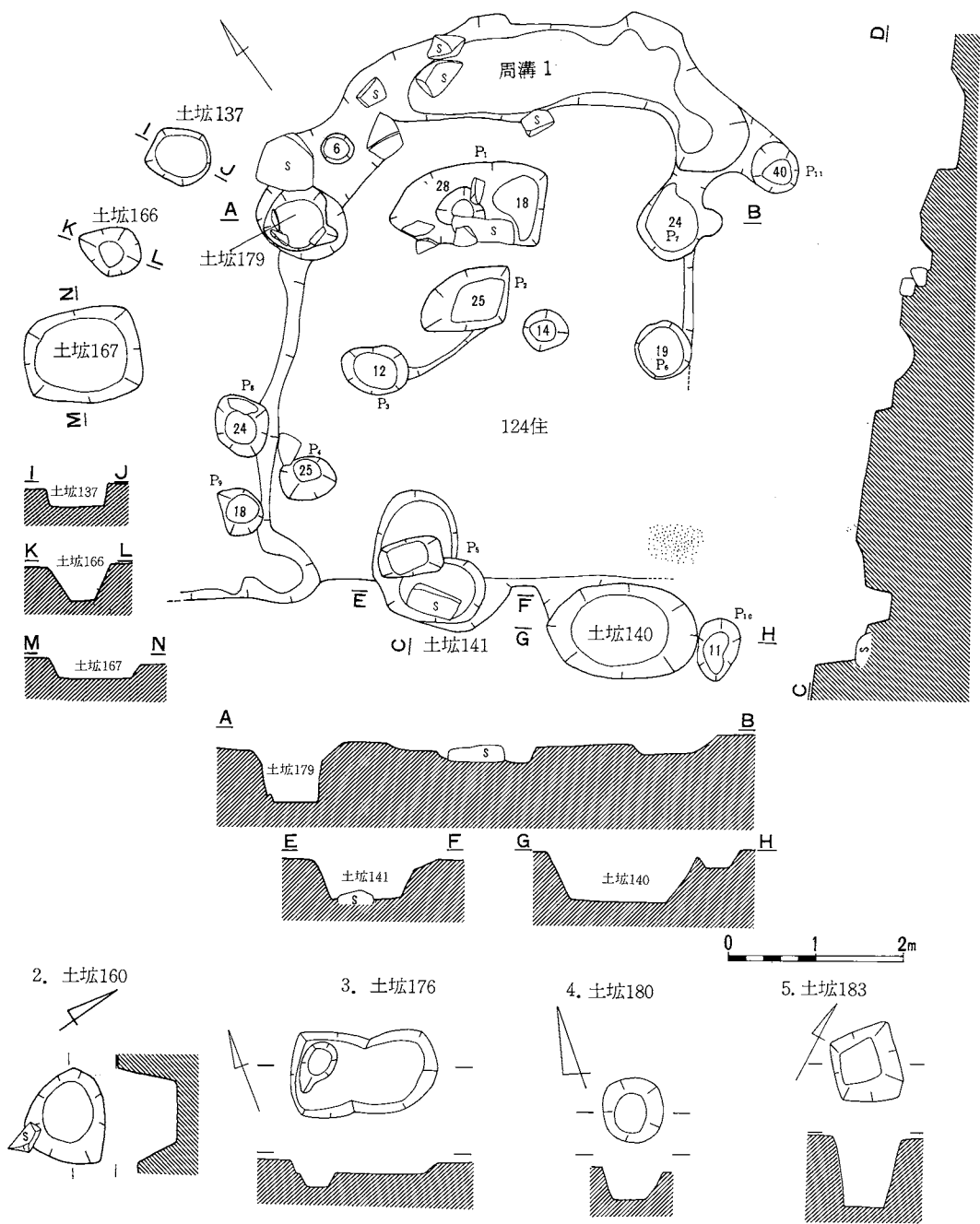


图 52 十二ノ后遺跡124号住居址, 周溝1, 土坡137・140・141・160・166・167・176・179・

180・183実測図

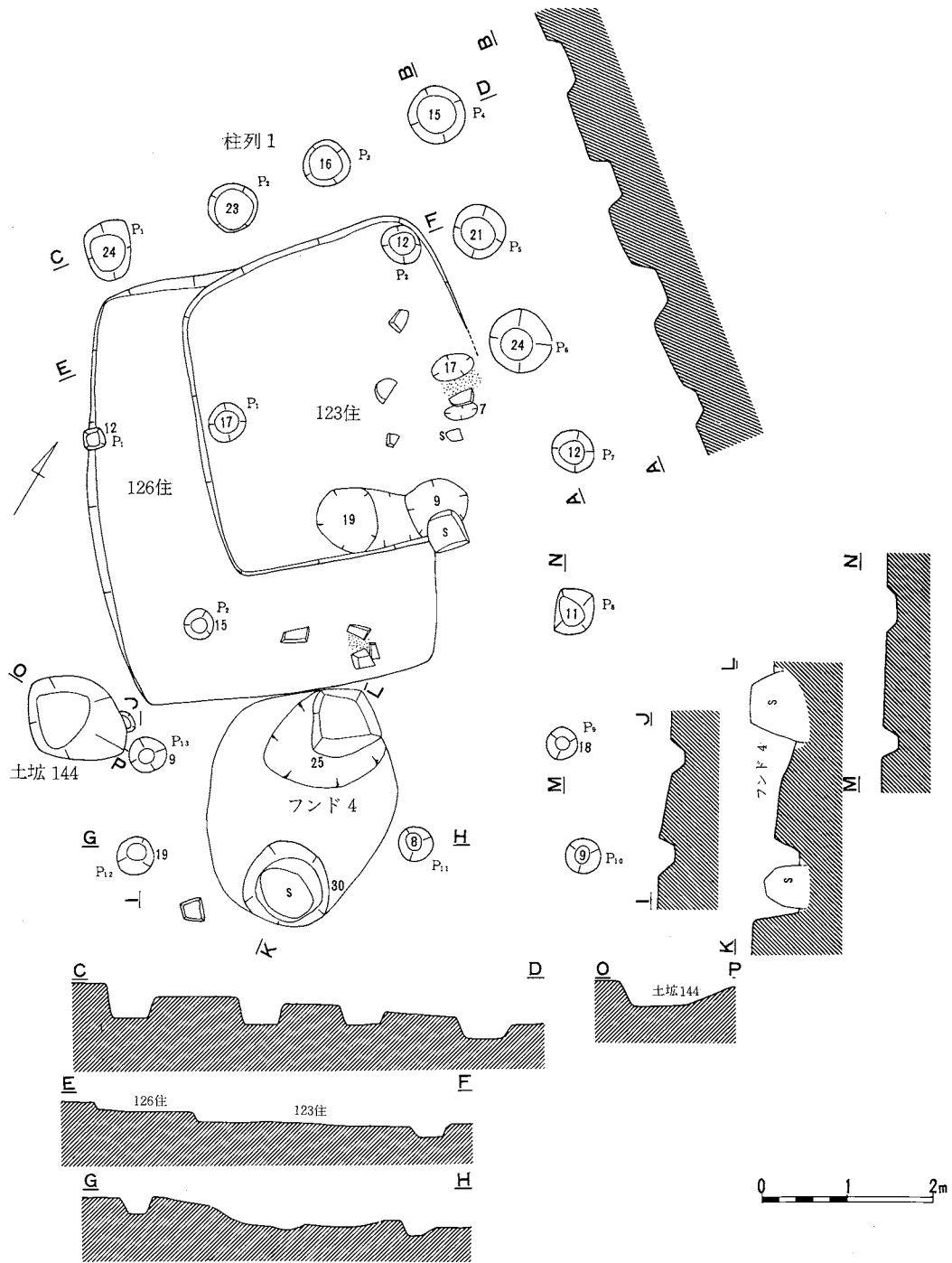


図 53 十二ノ后遺跡123・126号住居址，柱列1，フンド4，土城144 実測図

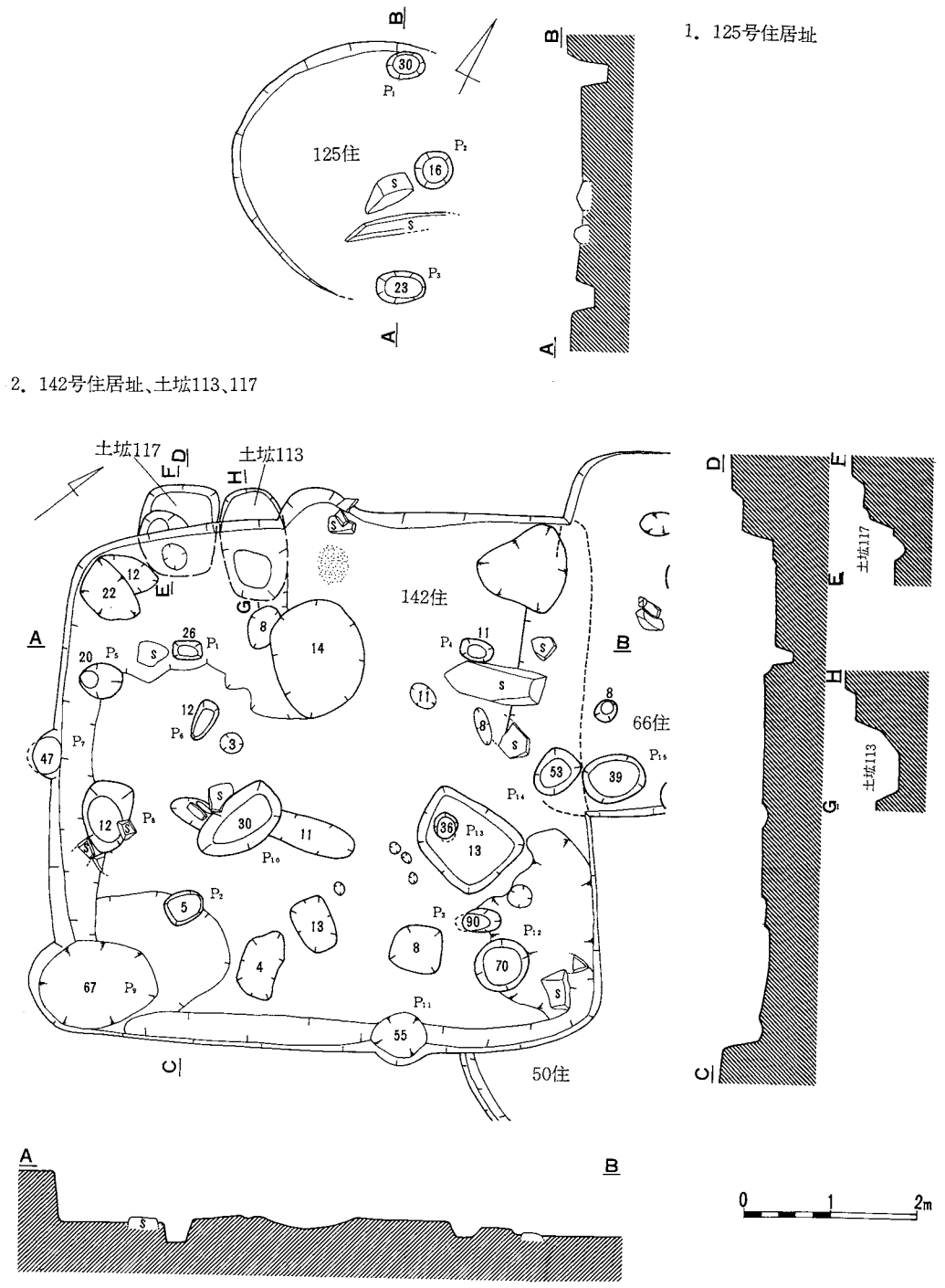
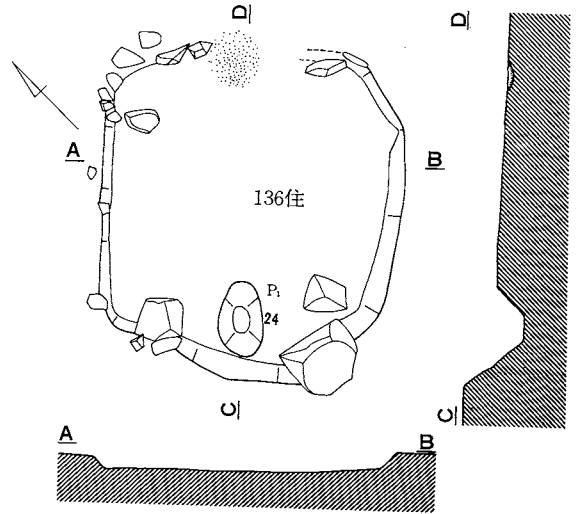
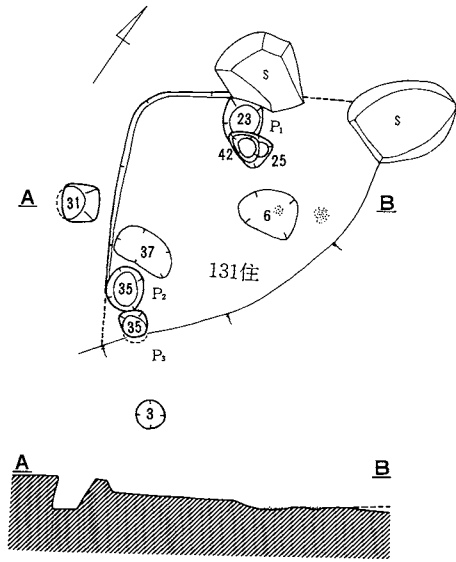


图 54 十二ノ后遺跡125・142号住居址，土坛113・117実測図



3. 140号住居址

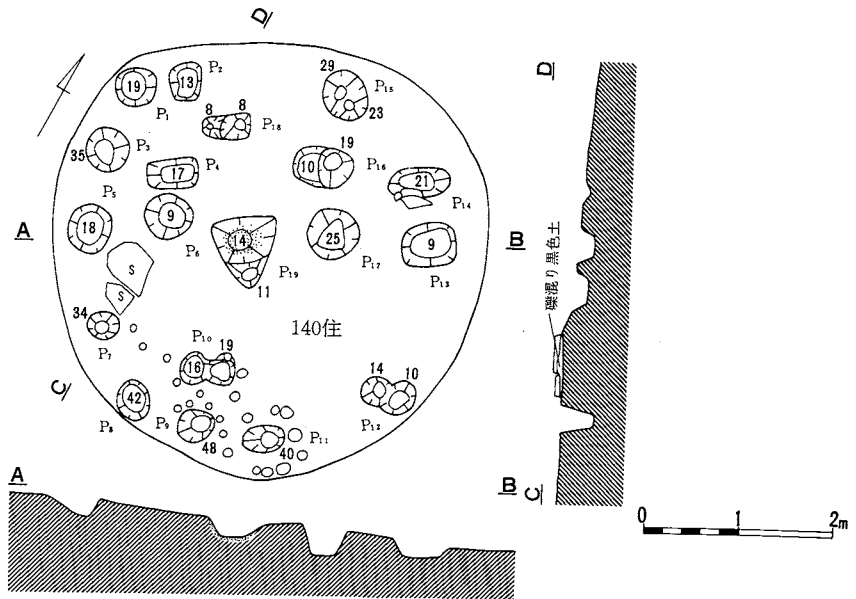


图 55 十二ノ后遺跡131・136・140号住居址実測図

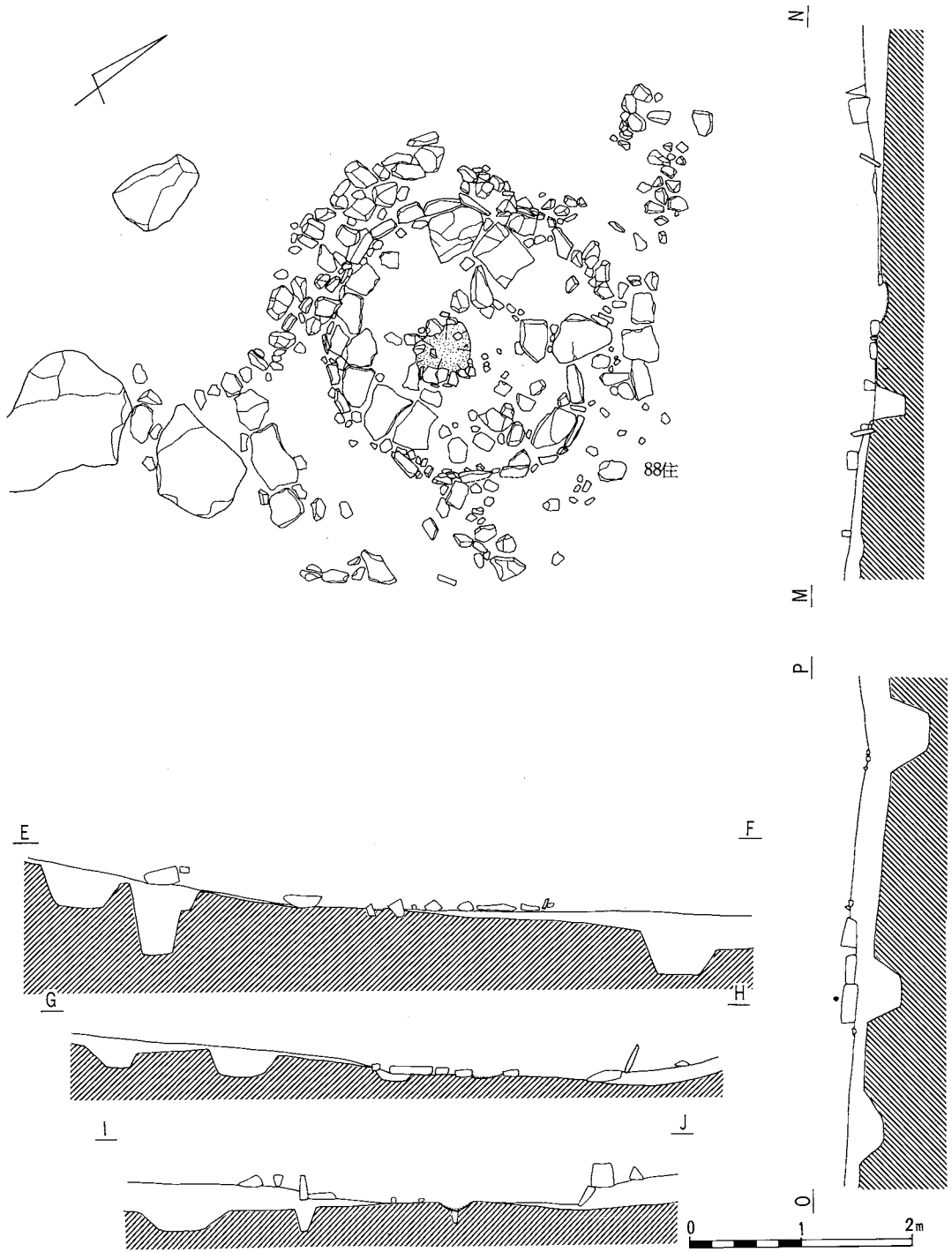


图 56 十二ノ后遺跡88号住居址敷石部実測図

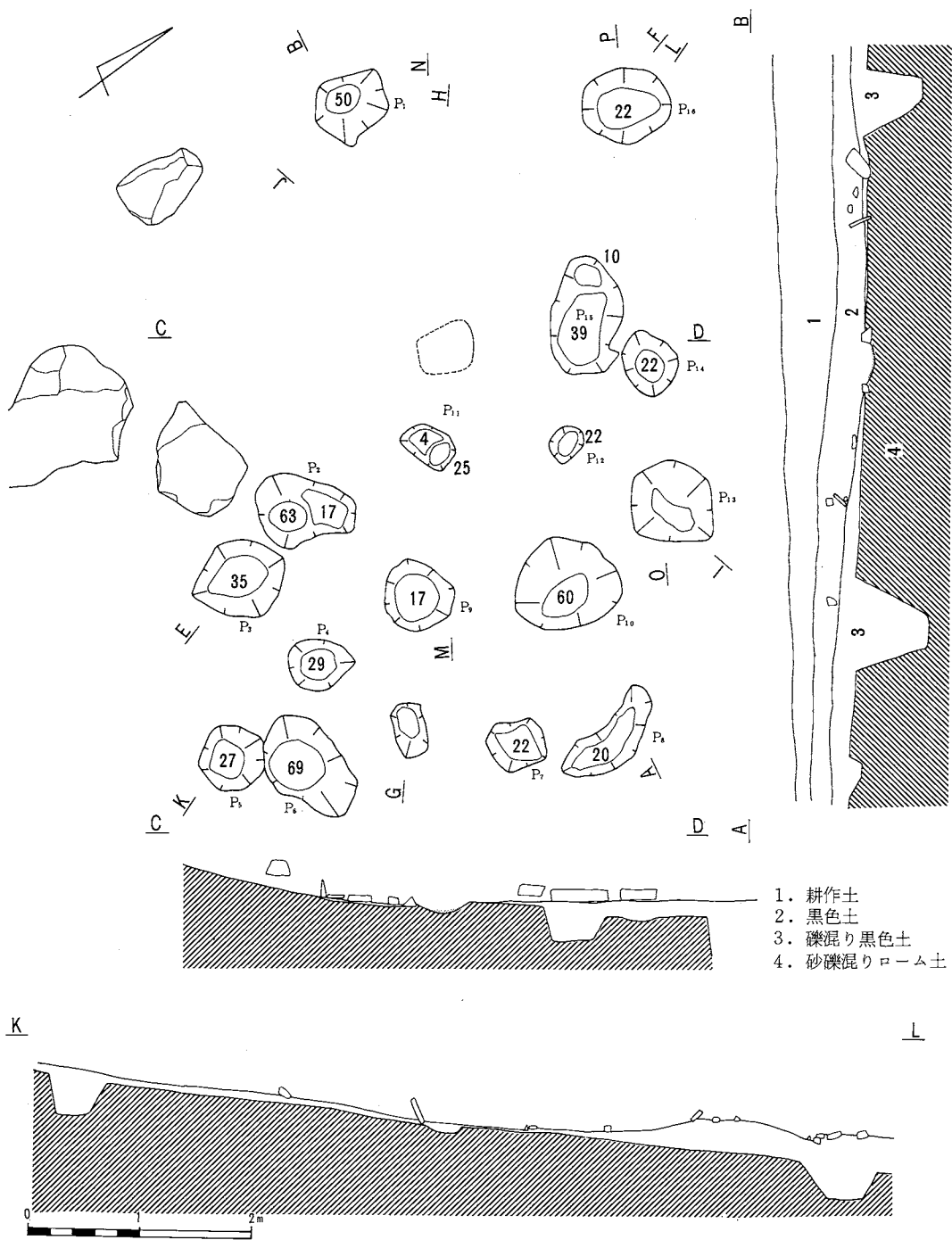
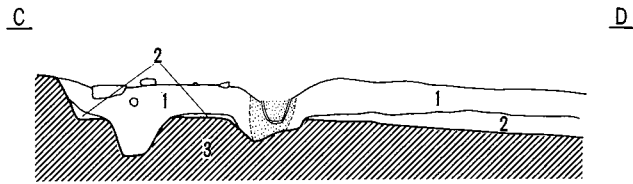
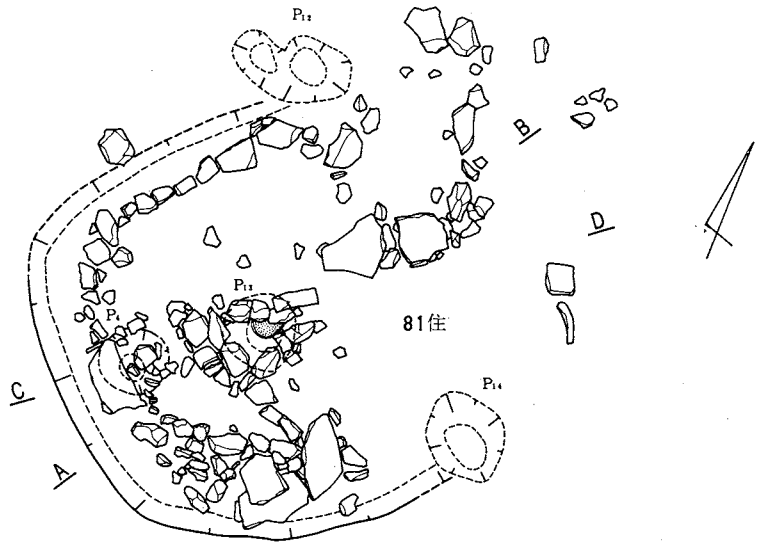
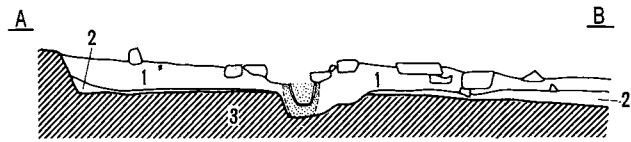


図 57 十二ノ后遺跡88号住居址柱穴，土坑部実測図



- 1. 黒色土
- 2. 黒褐色土
- 3. ローム土

图 58 十二ノ后遺跡81号住居址実測図

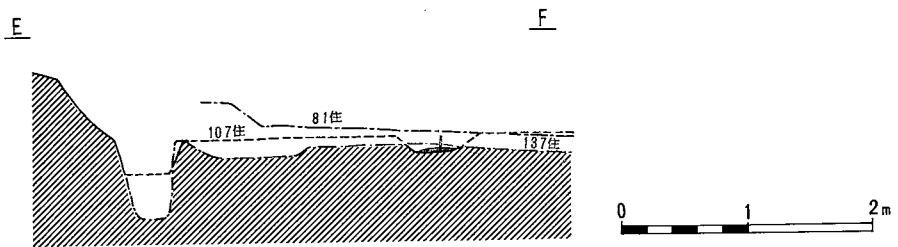
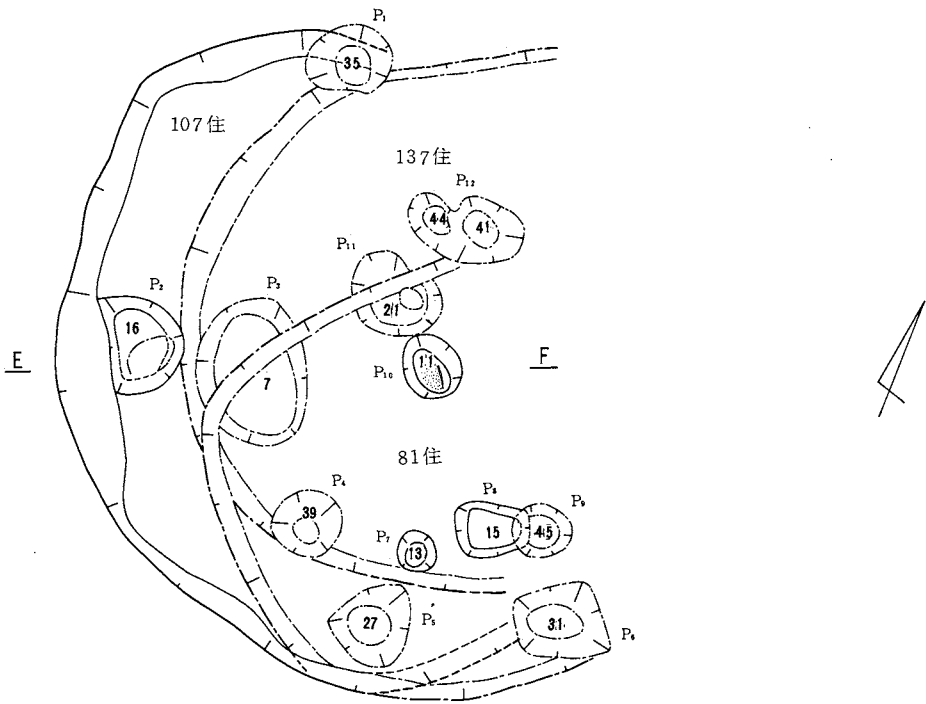
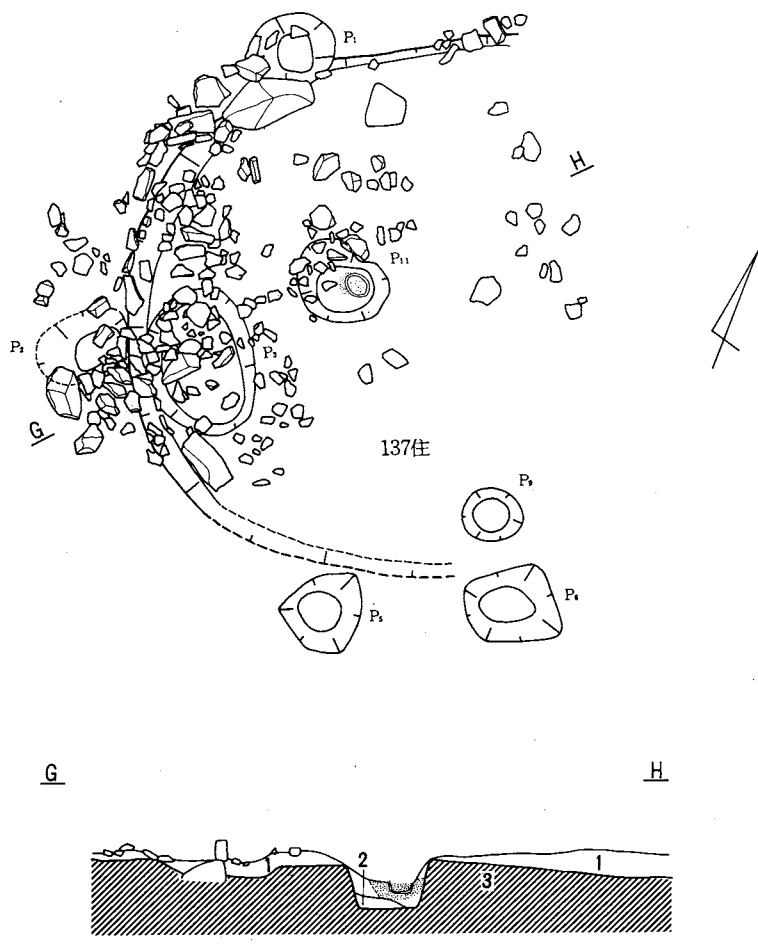


图 59 十二ノ后遺跡81・107・137号住居址実測図



- 1. 黒色土
- 2. 褐色土
- 3. コーム土

図 60 十二ノ后遺跡137号住居址実測図

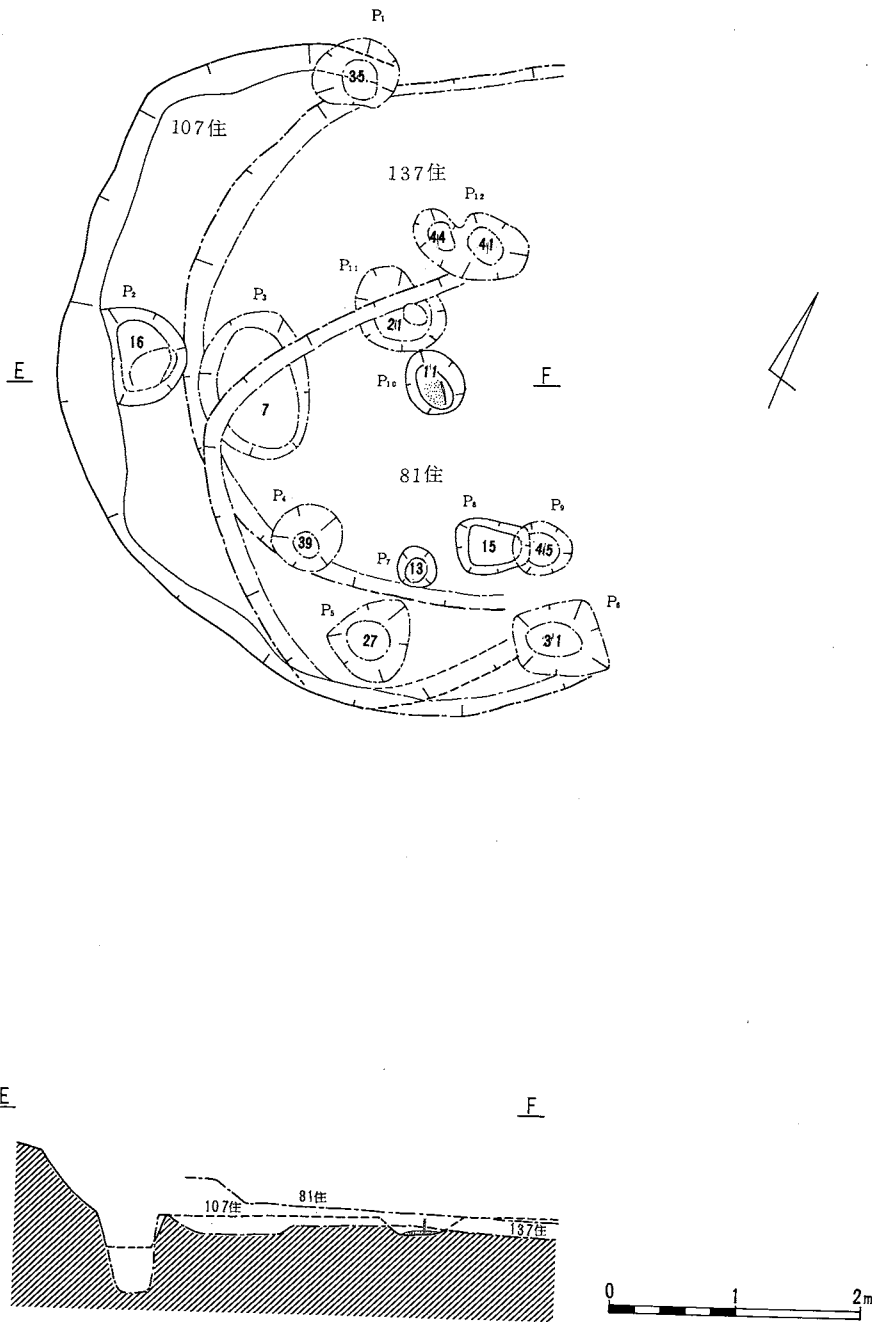


图 61 十二ノ后遺跡81・107・137号住居址実測図

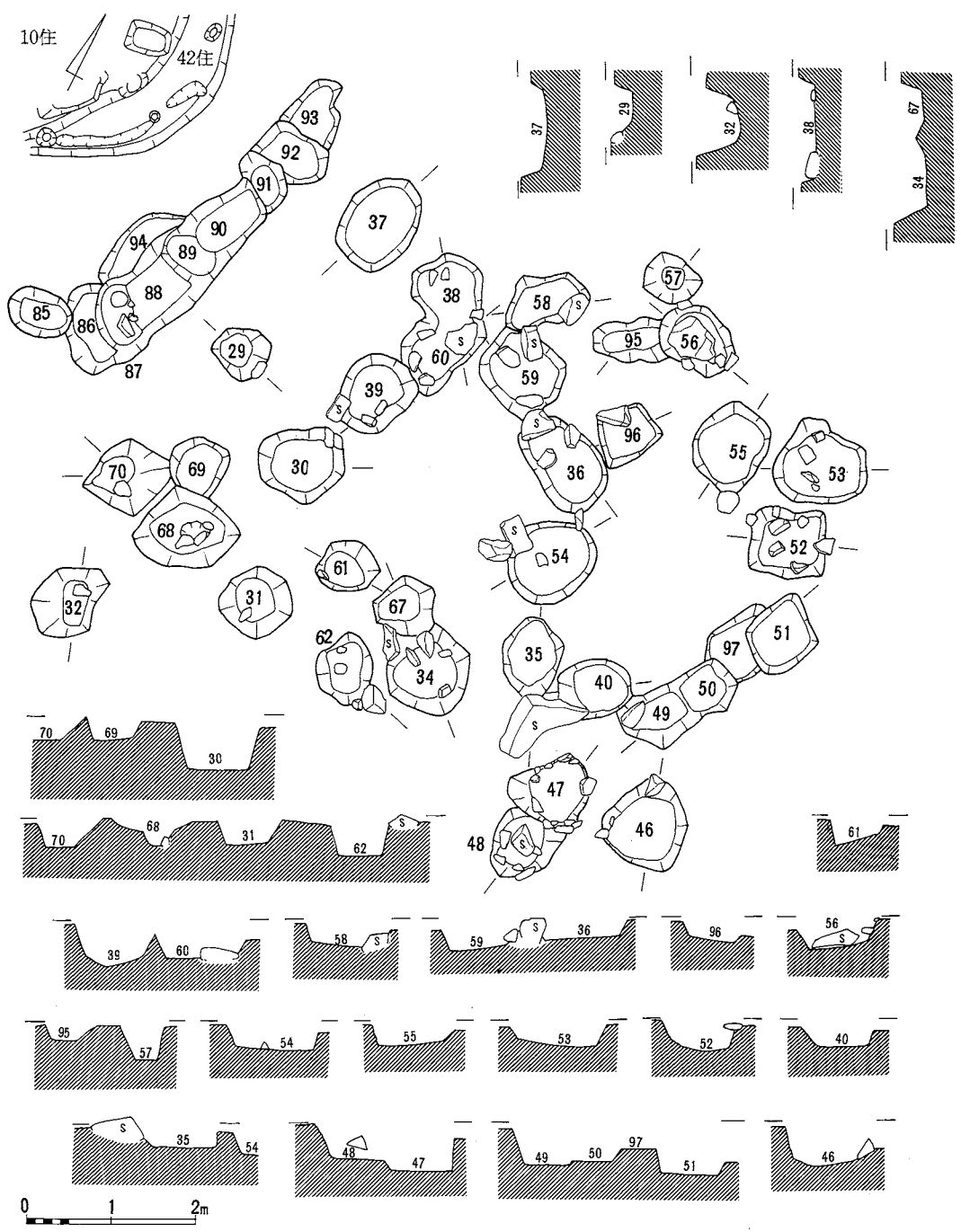


图 62 十二ノ后遺跡土坑29~32・34~40・46~62・67~70・85~97実測図

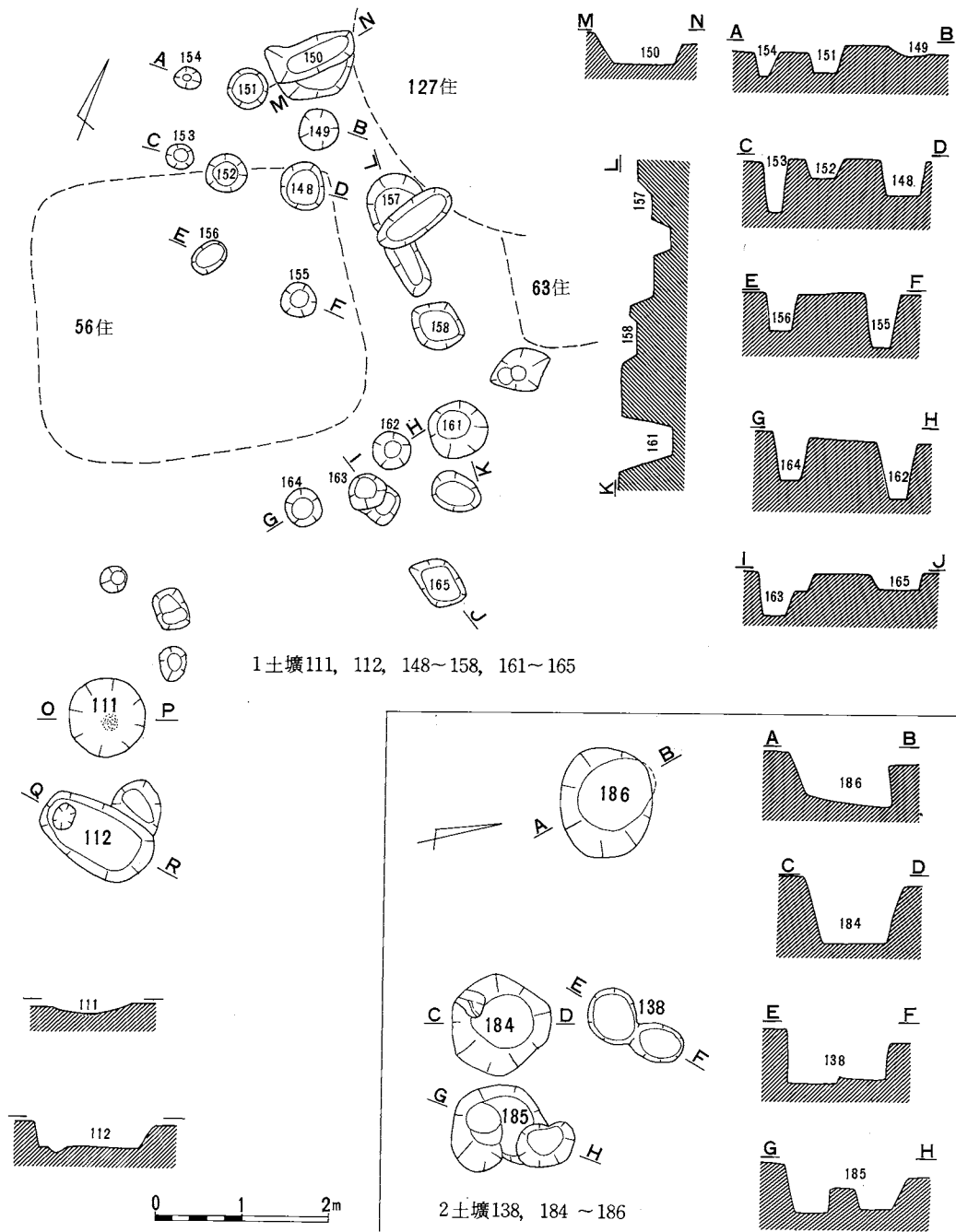


図 63 十二ノ后遺跡土壙111・112・138・148・158・161~165・184~186実測図

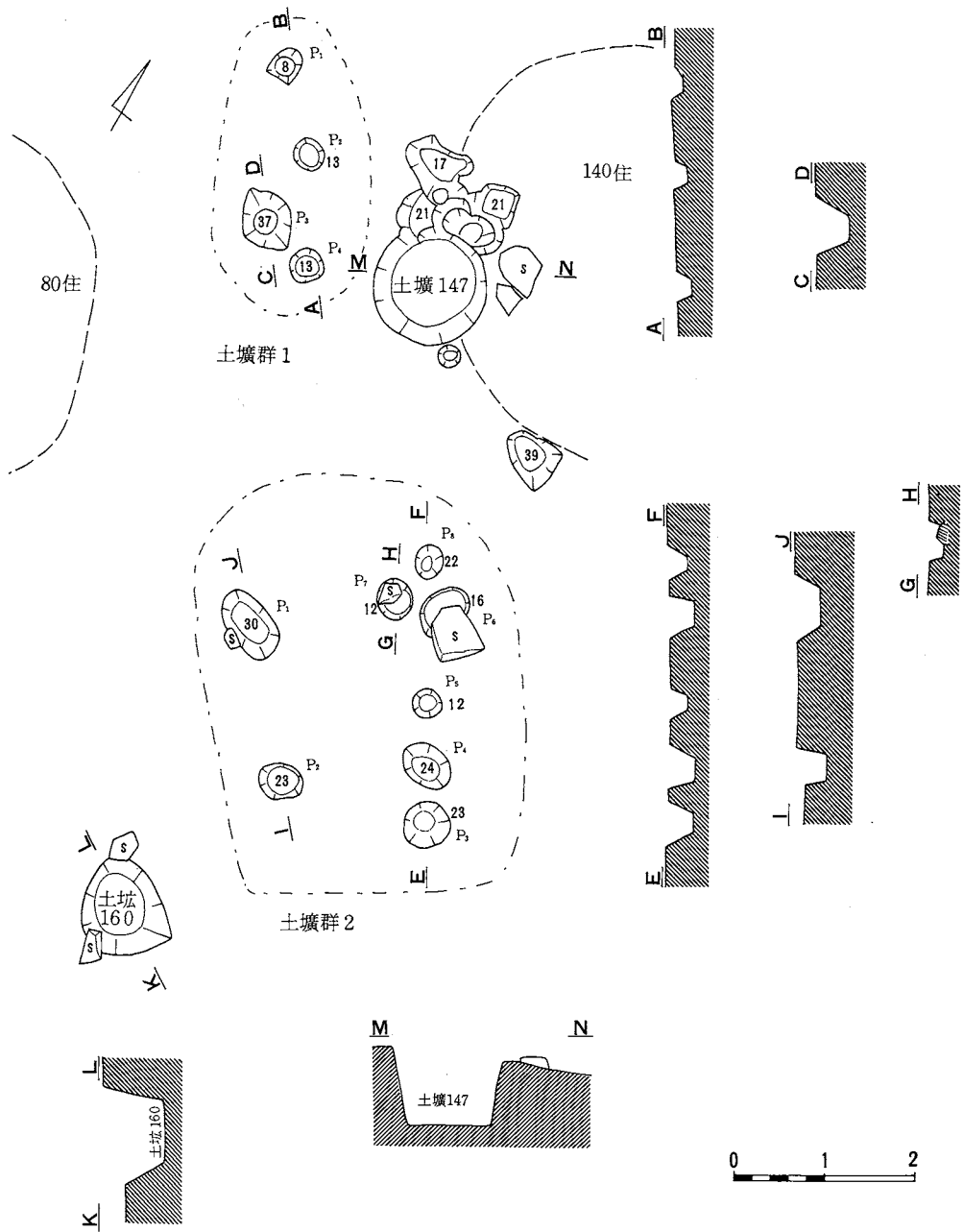


图64 十二ノ后遺跡土壙群1・2，土壙147・160実測図

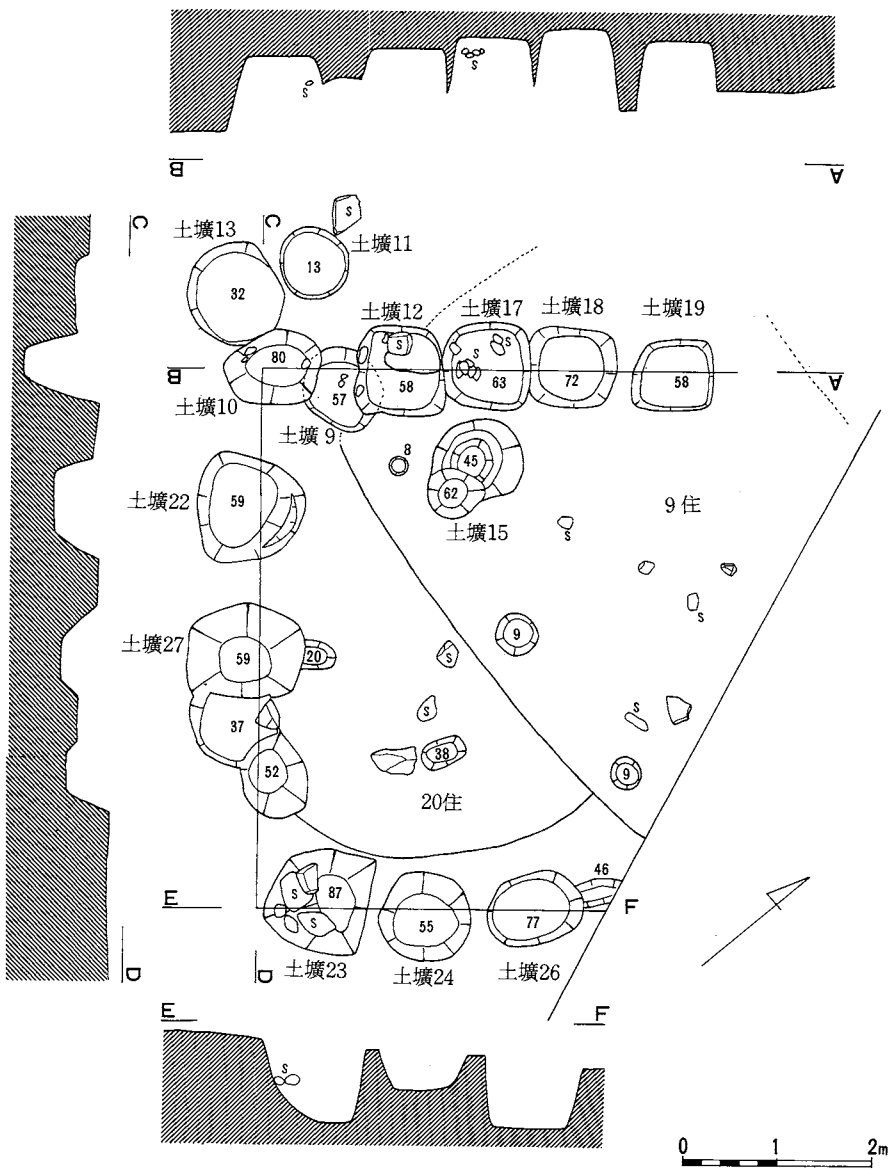
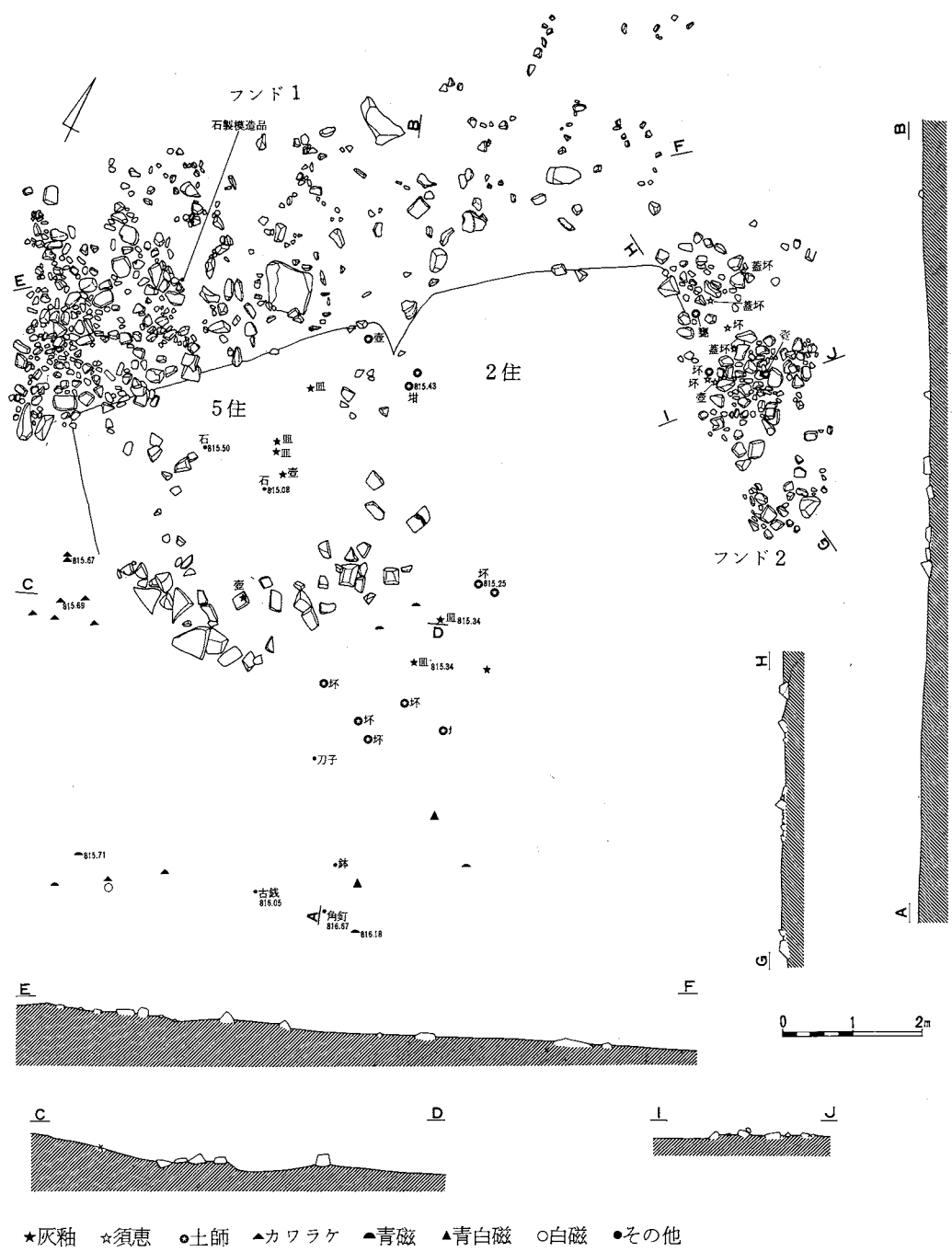


図 65 十二ノ后遺跡方形配列土壇群1 実測図



★灰釉 ☆須恵 ○土師 ▲カワラケ ▲青磁 ▲青白磁 ○白磁 ●その他

図 66 十二ノ后遺跡ファンド1・2 実測図

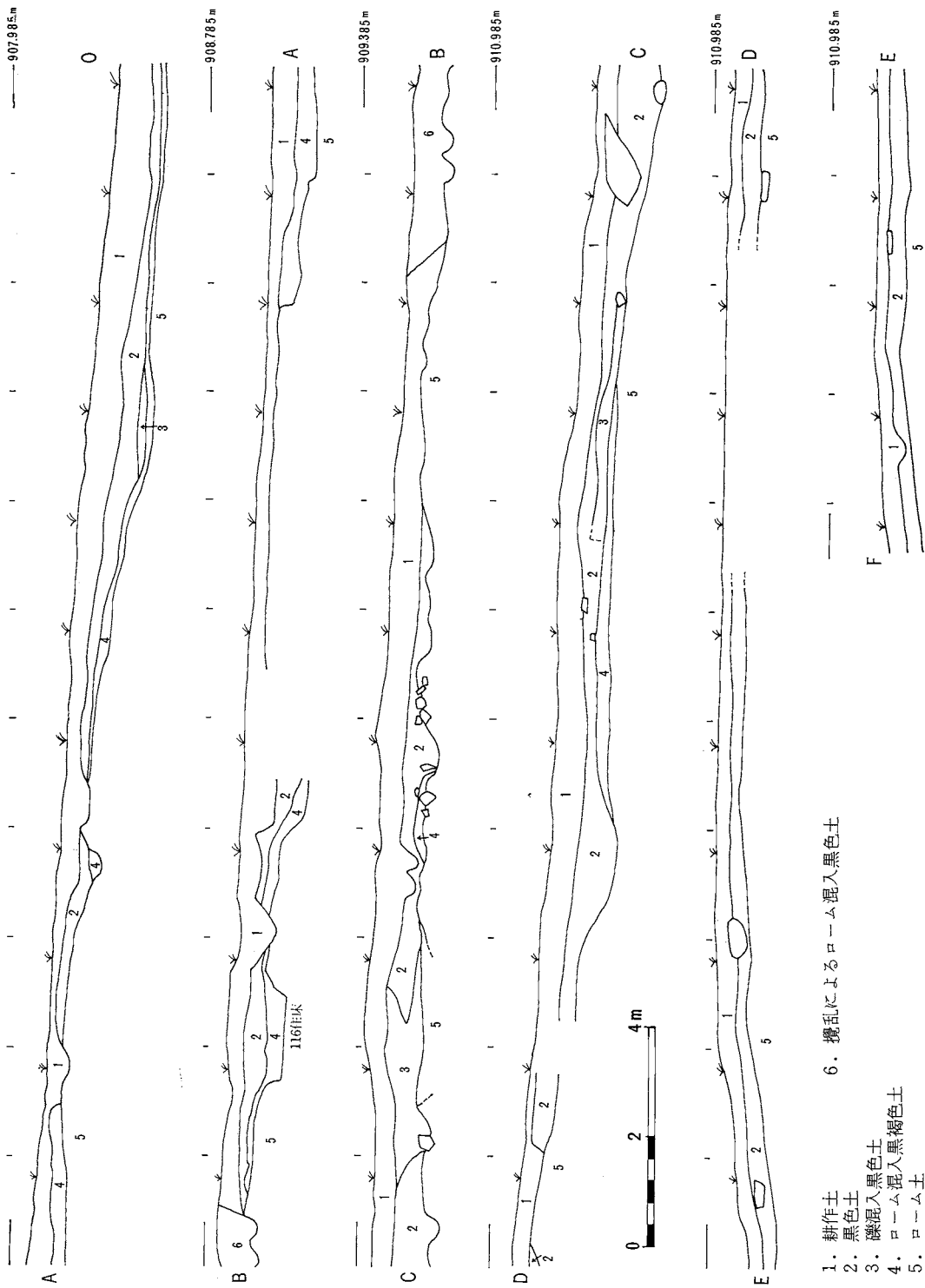
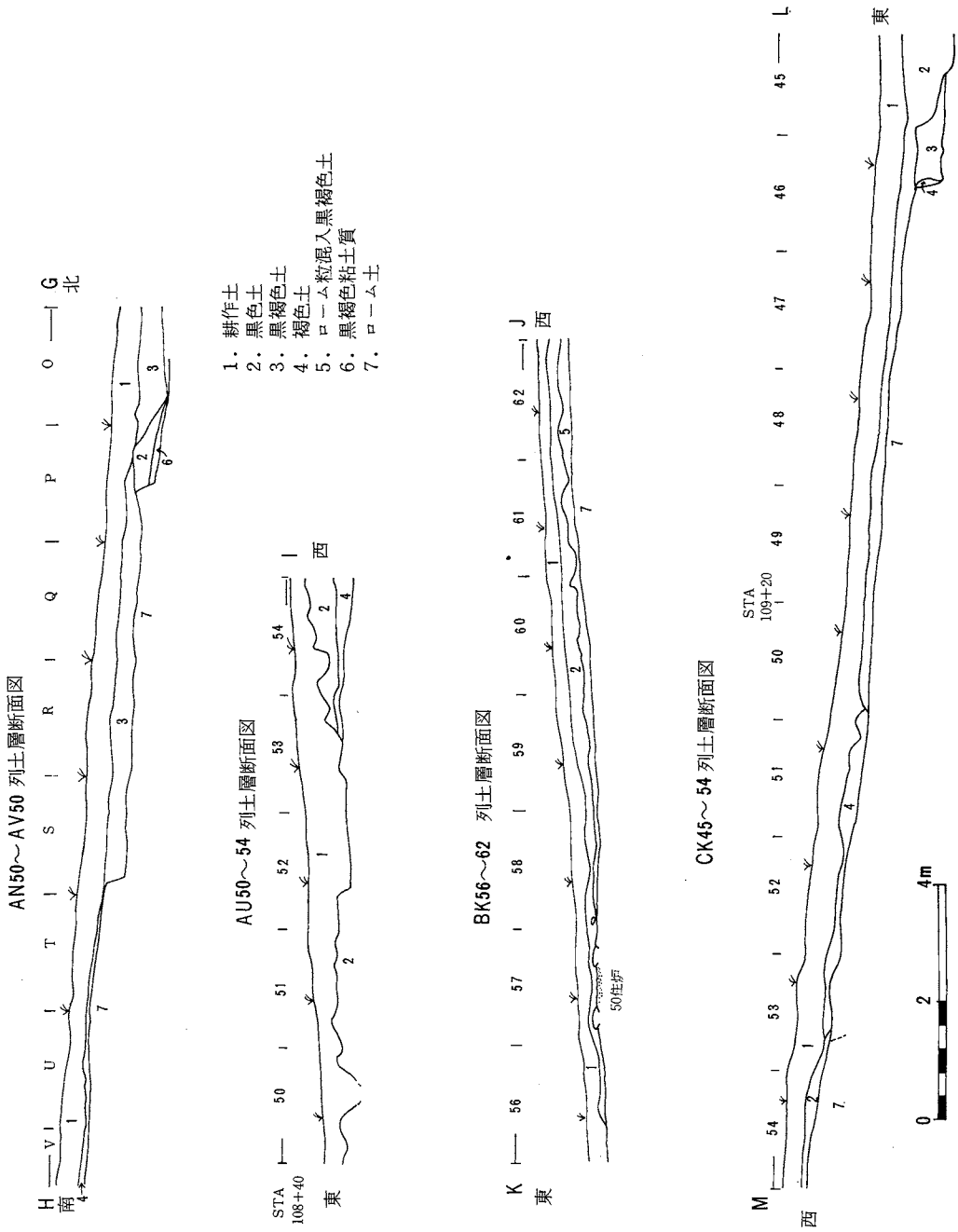


图 67 十二ノ后遺跡土層断面図

- 1. 耕作土
 - 2. 黒色土
 - 3. 濃混入黒色土
 - 4. ローム混入黒褐色土
 - 5. ローム土
6. 攪乱によるローム混入黒色土

図 88 十二ノ后遺跡土層断面図



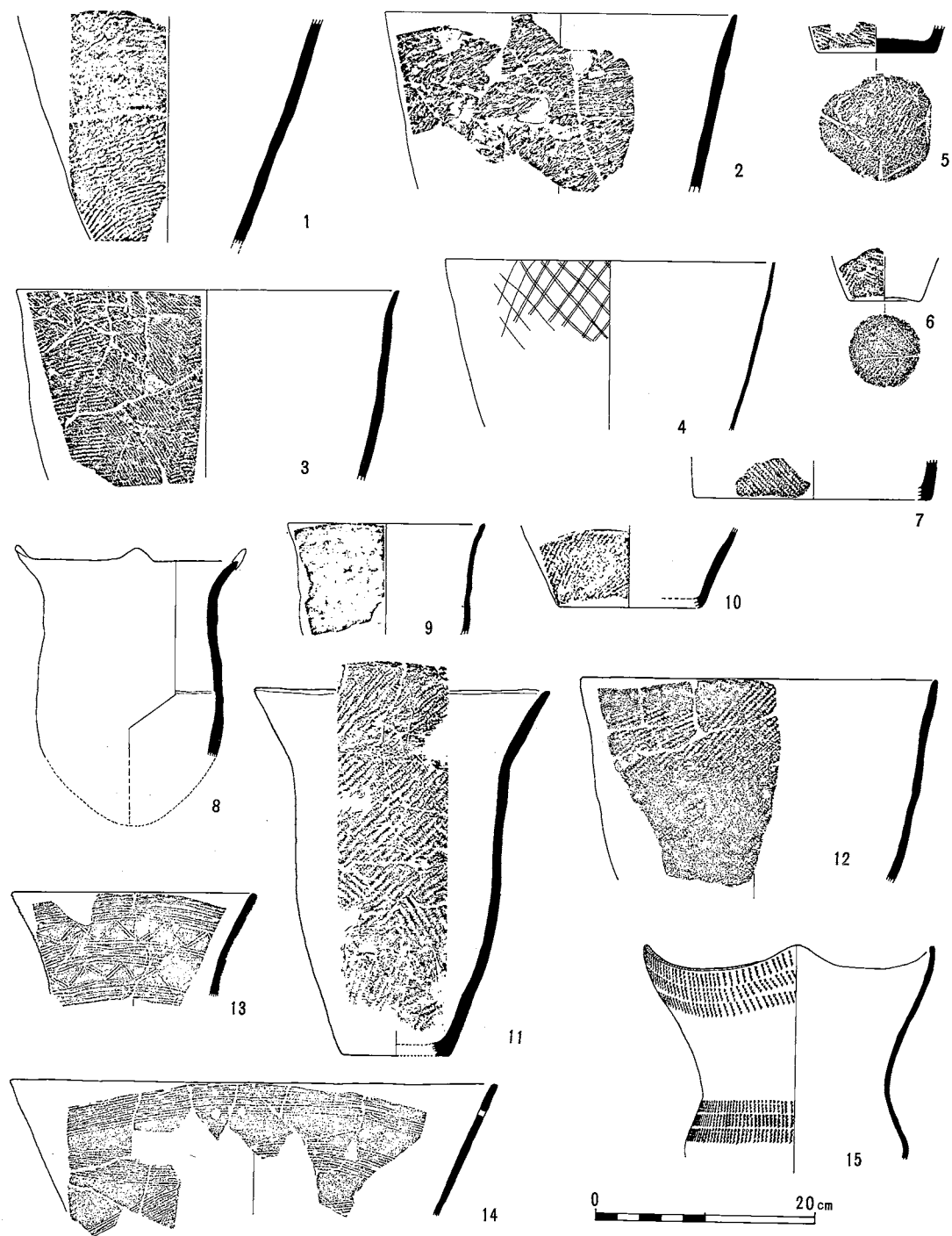


图 69 十二ノ后遺跡 8・11・12・15・16号住居址出土土器実測図

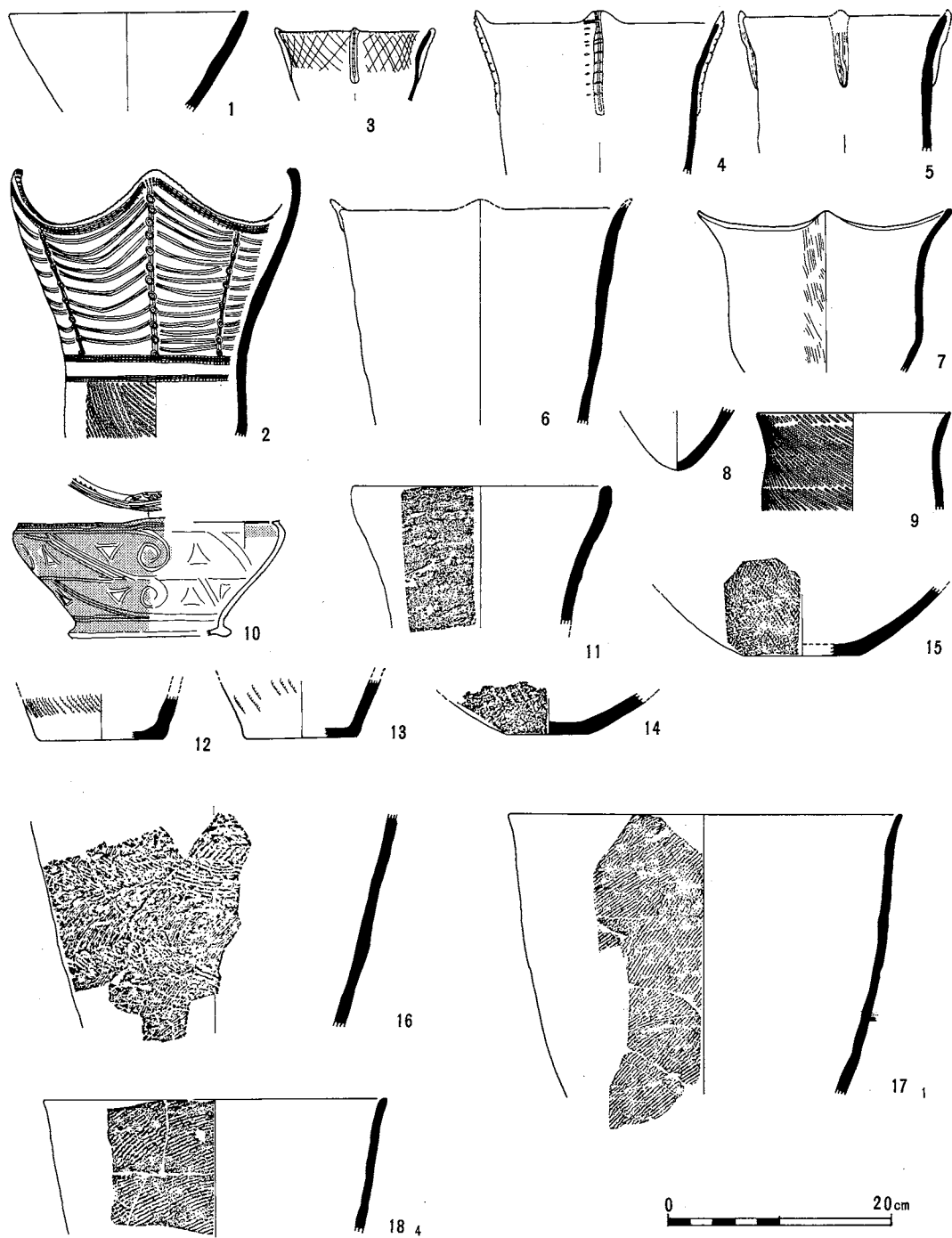


图70 十二ノ后遺跡21・28・37・46・47・56号住居址出土土器実測図

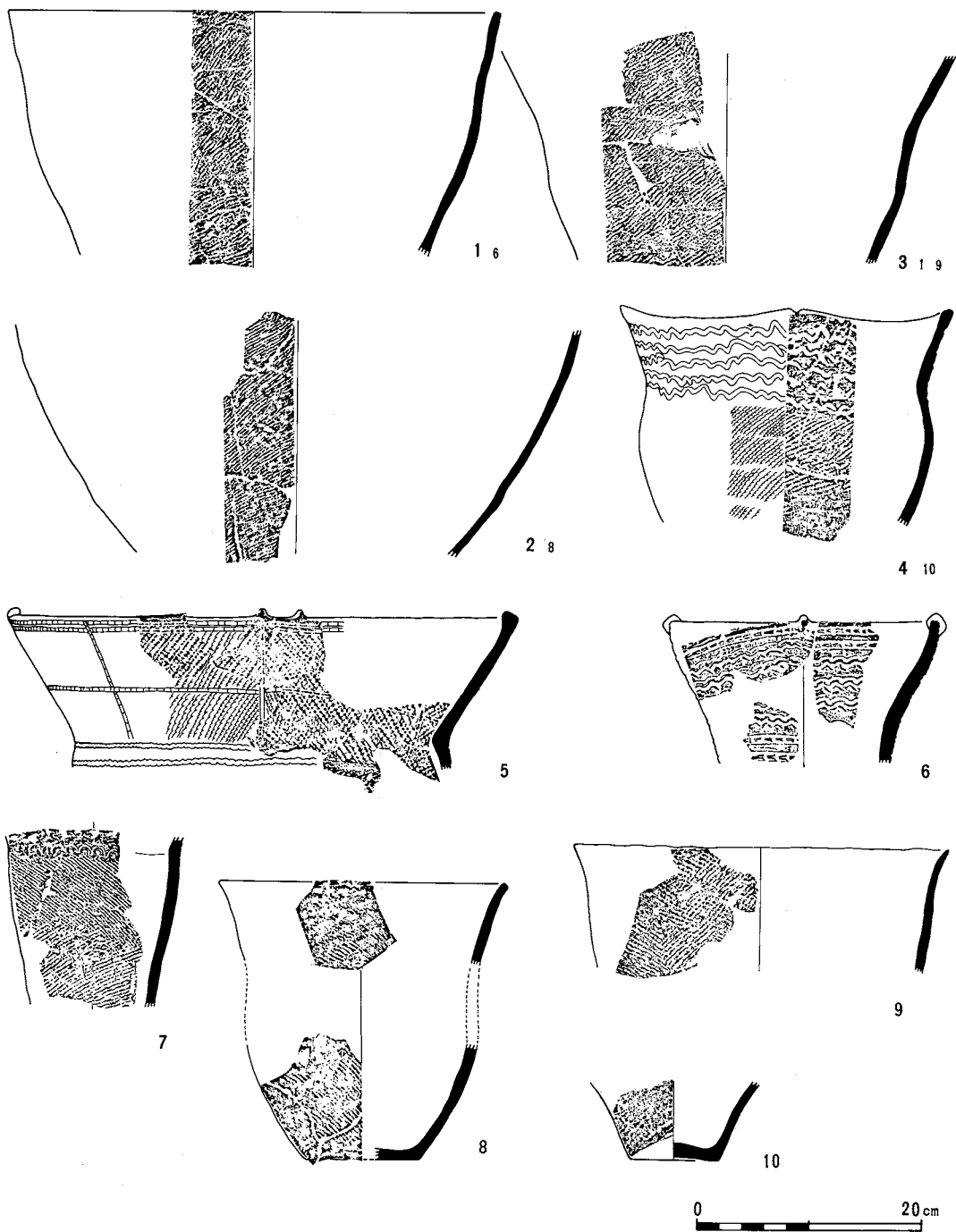


图 71 十二ノ后遺跡56・64・66号住居址出土土器实测图

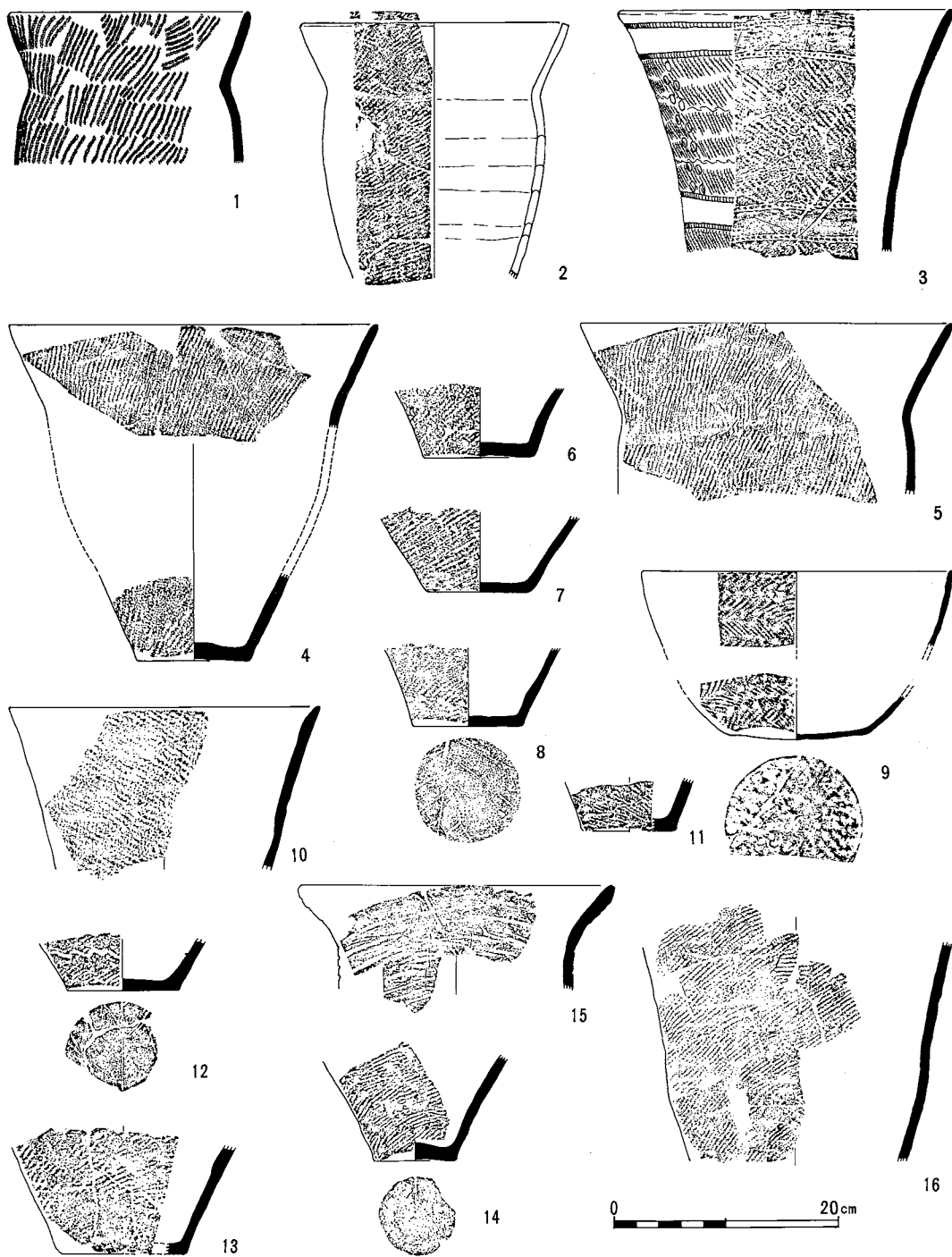


图 72 十二ノ后遺跡75・86・93・96・98号住居址出土土器実測図

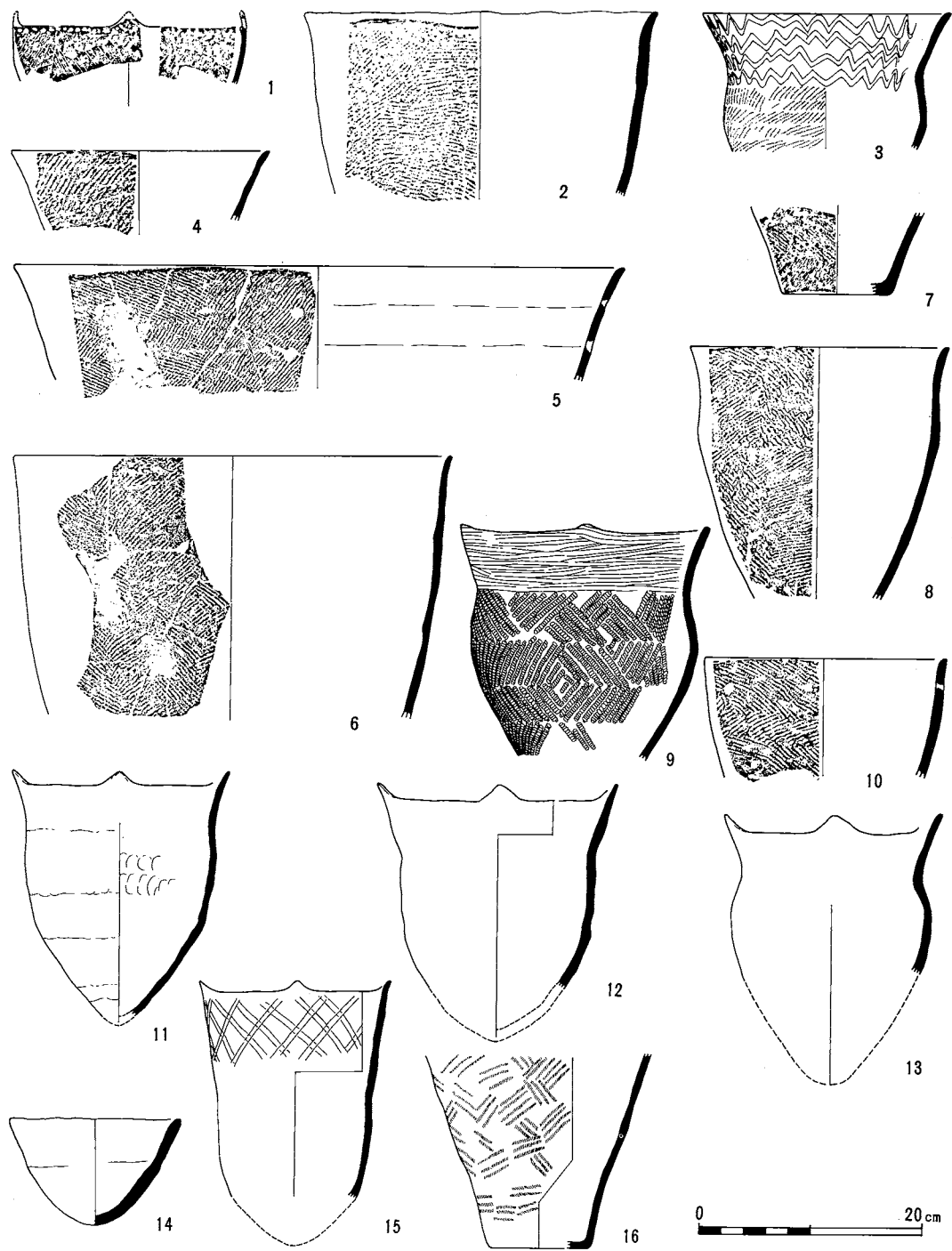


图 73 十二ノ后遺跡102・106・111・112号住居址出土土器実測図

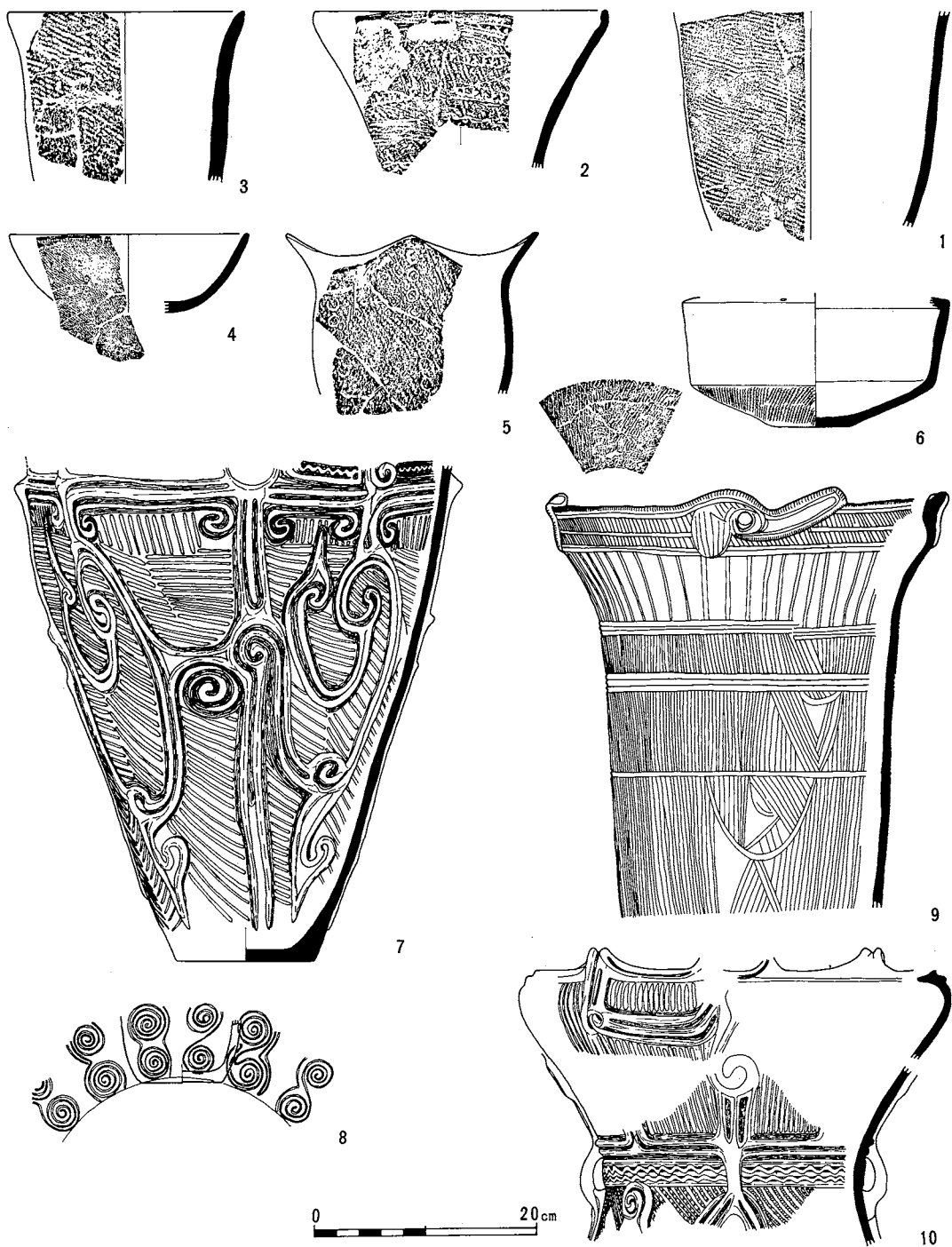


图 74 十二ノ后遺跡118・119・131・26・49・50号住居址出土土器実測図

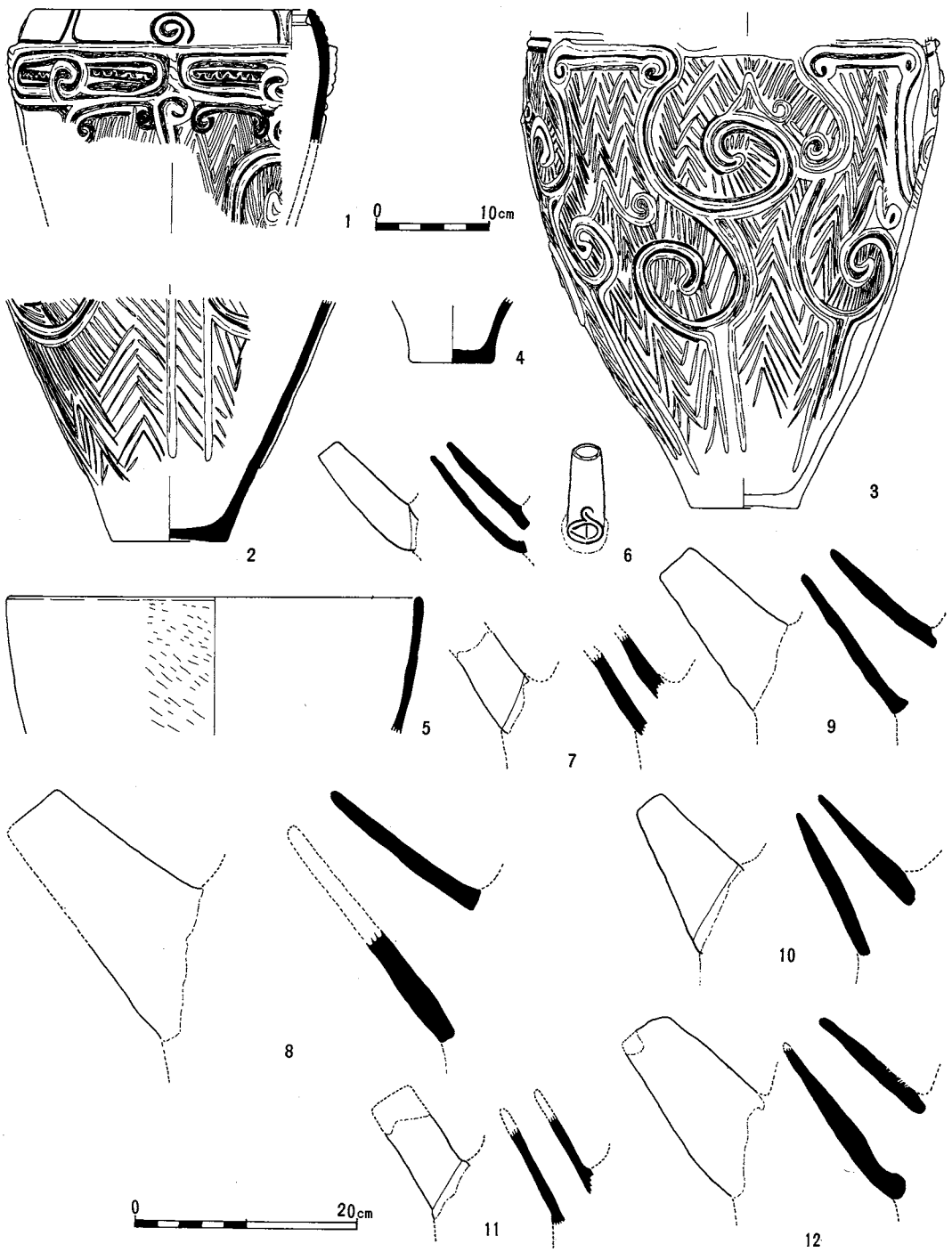


图 75 十二ノ后遺跡65・100・38・39・81・99号住居址出土土器実測図

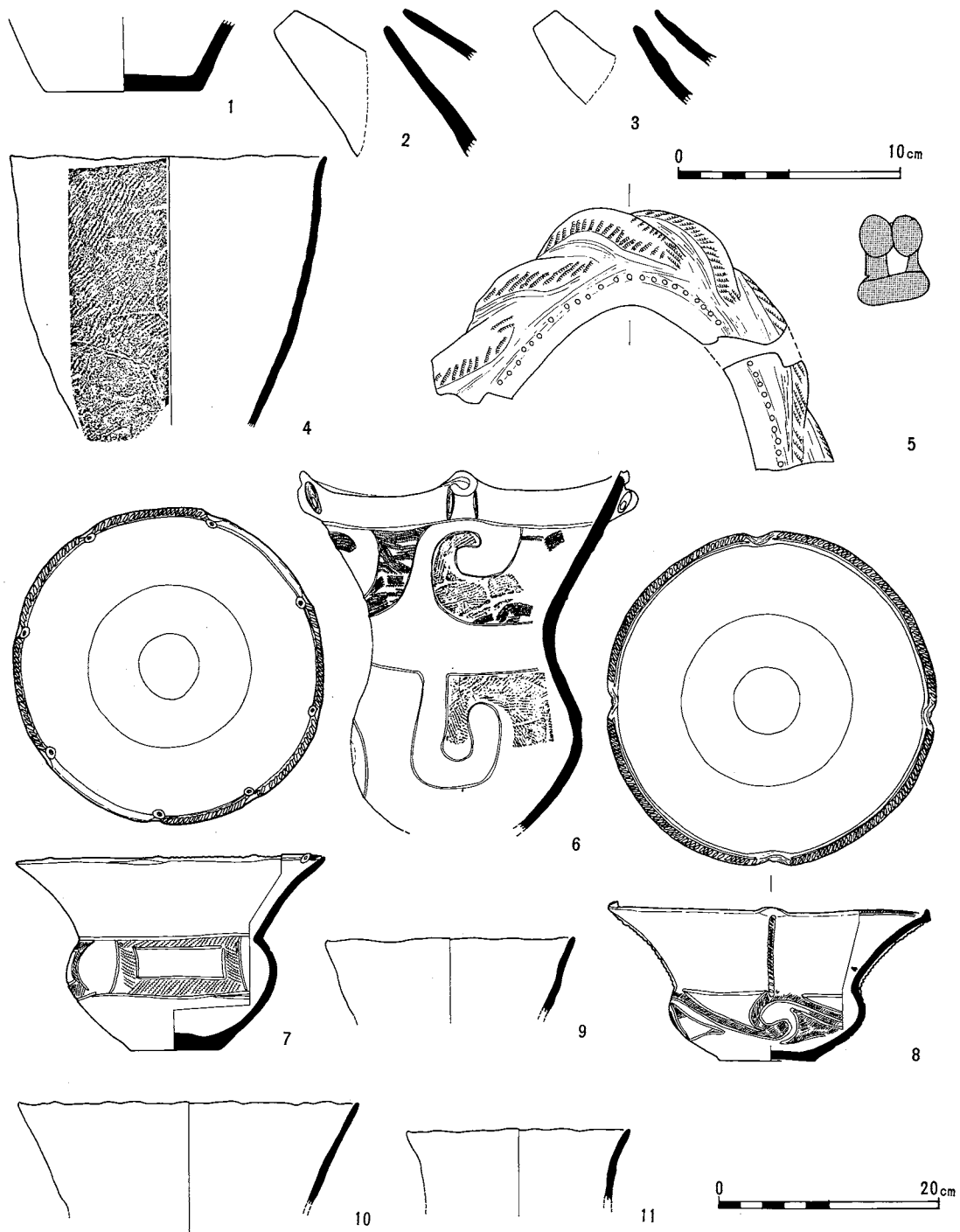


图76 十二ノ后遺跡137号住居址，土坛3・5・66・173・174，遺構外出土土器実測図

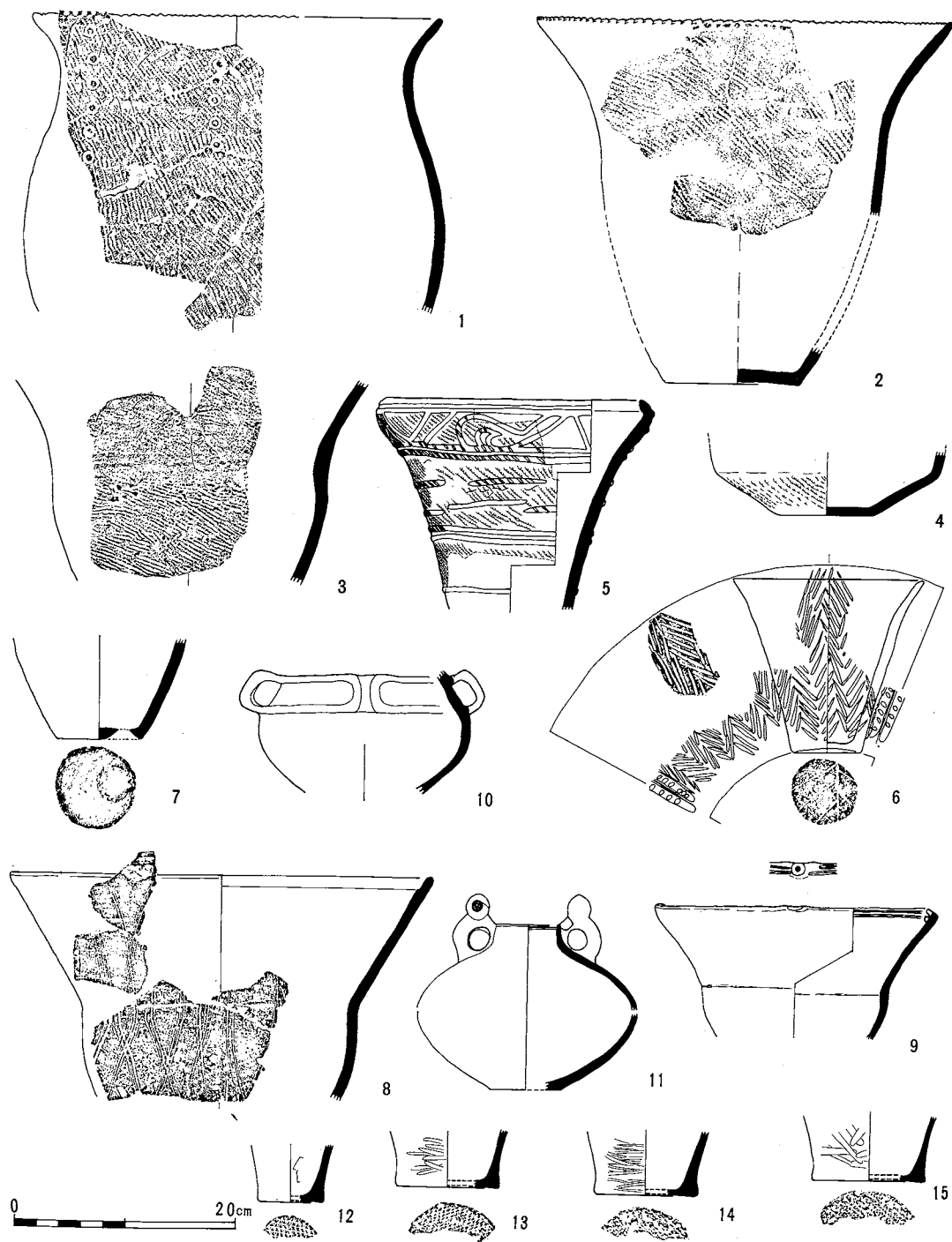


图 77 十二ノ后遺跡遺構外出土土器実測図

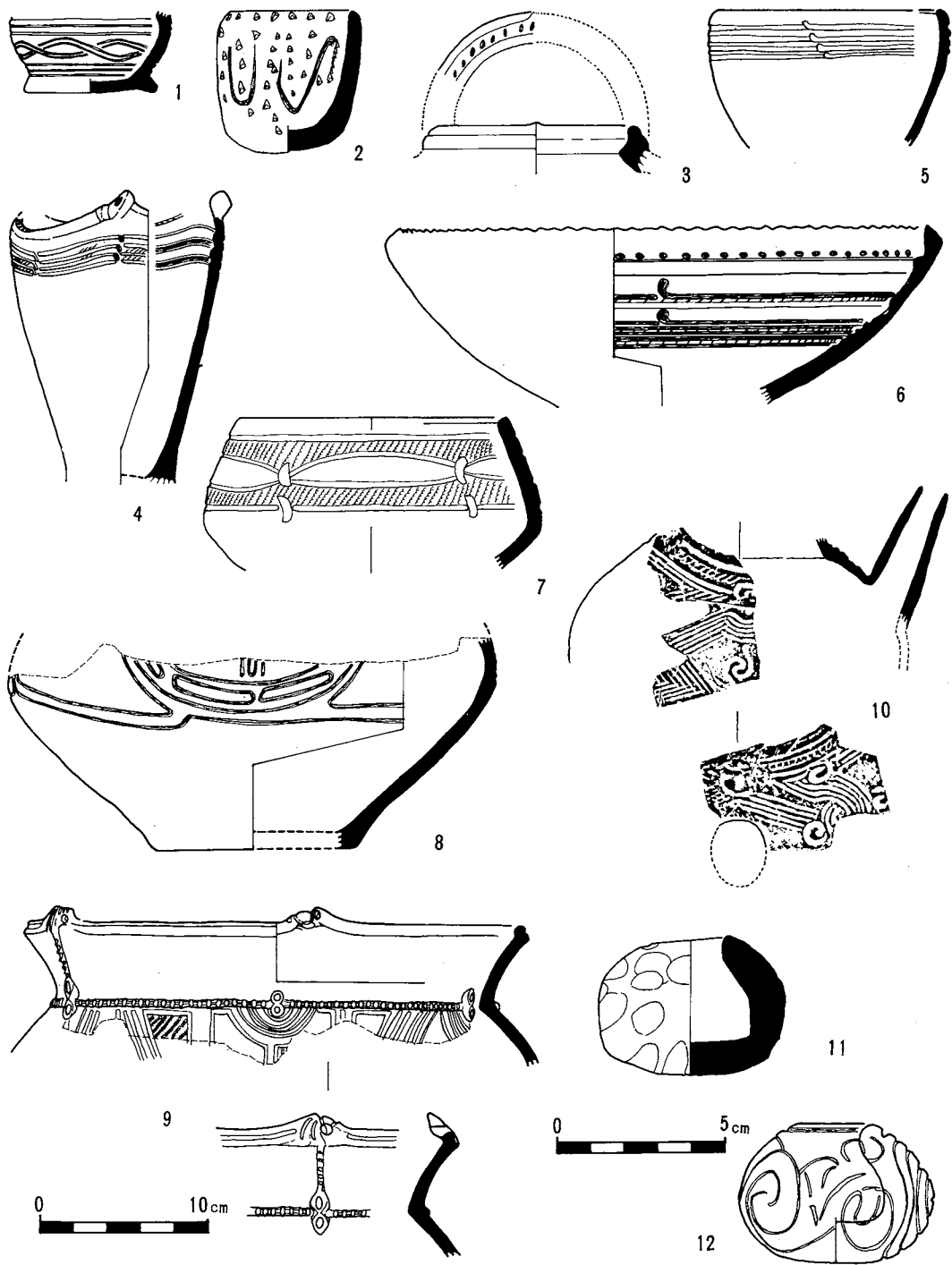


图 78 十二ノ后遺跡46・65・38・81・110・137号住居址出土土器実測图

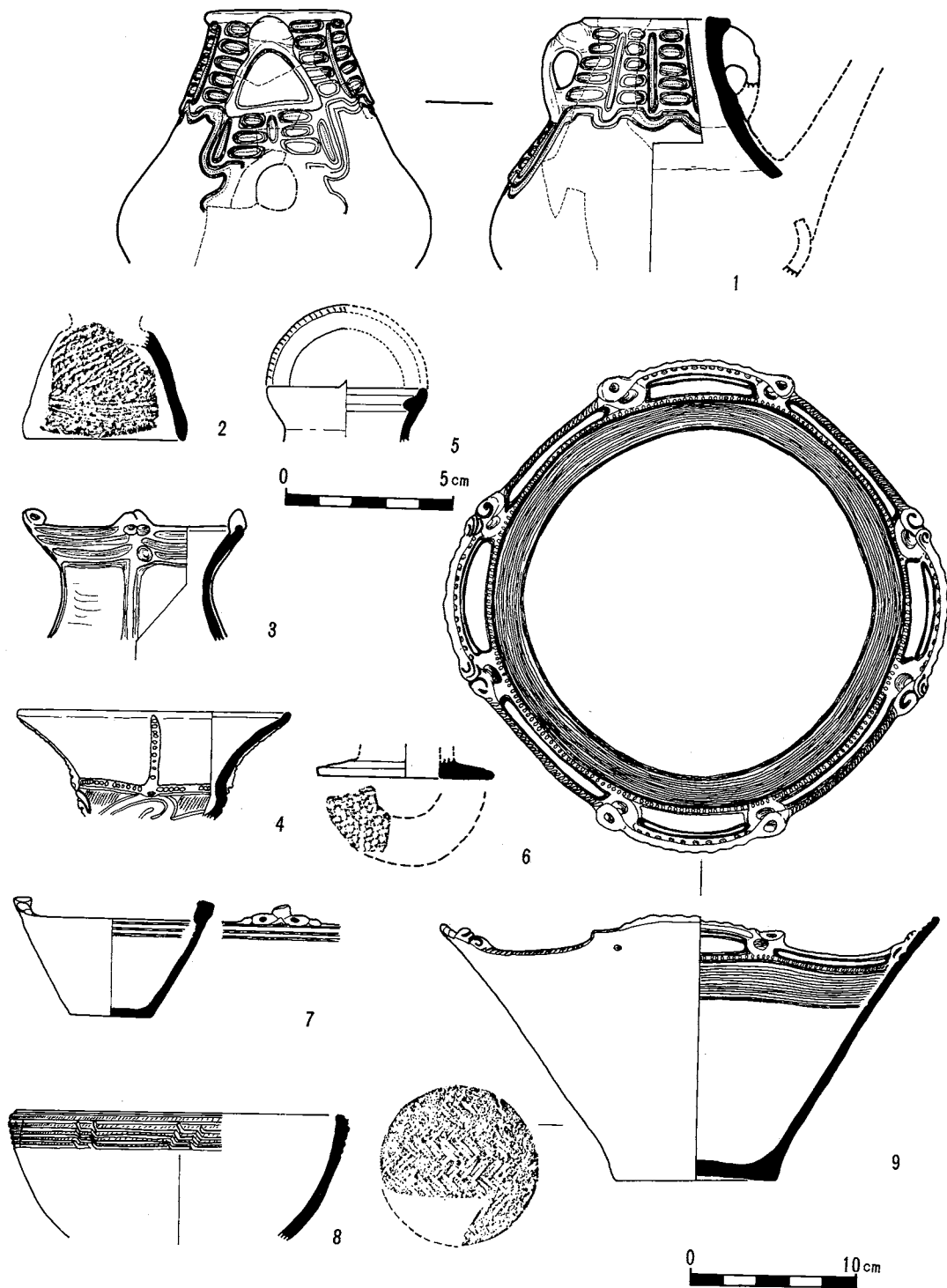


図79 十二ノ后遺跡137号住居址及び遺構外出土土器実測図

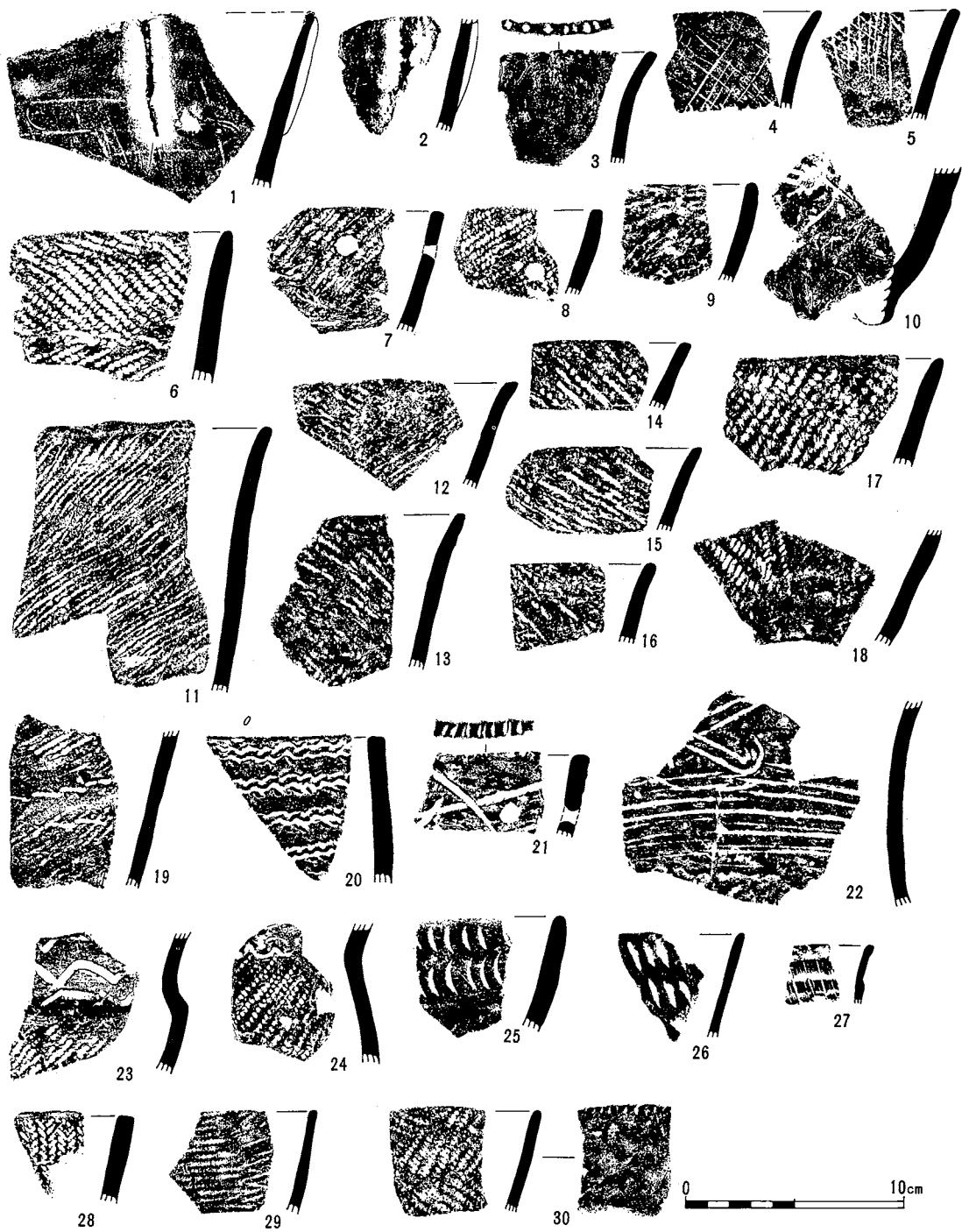


图 80 十二ノ后遺跡 1 号住居址出土土器拓影

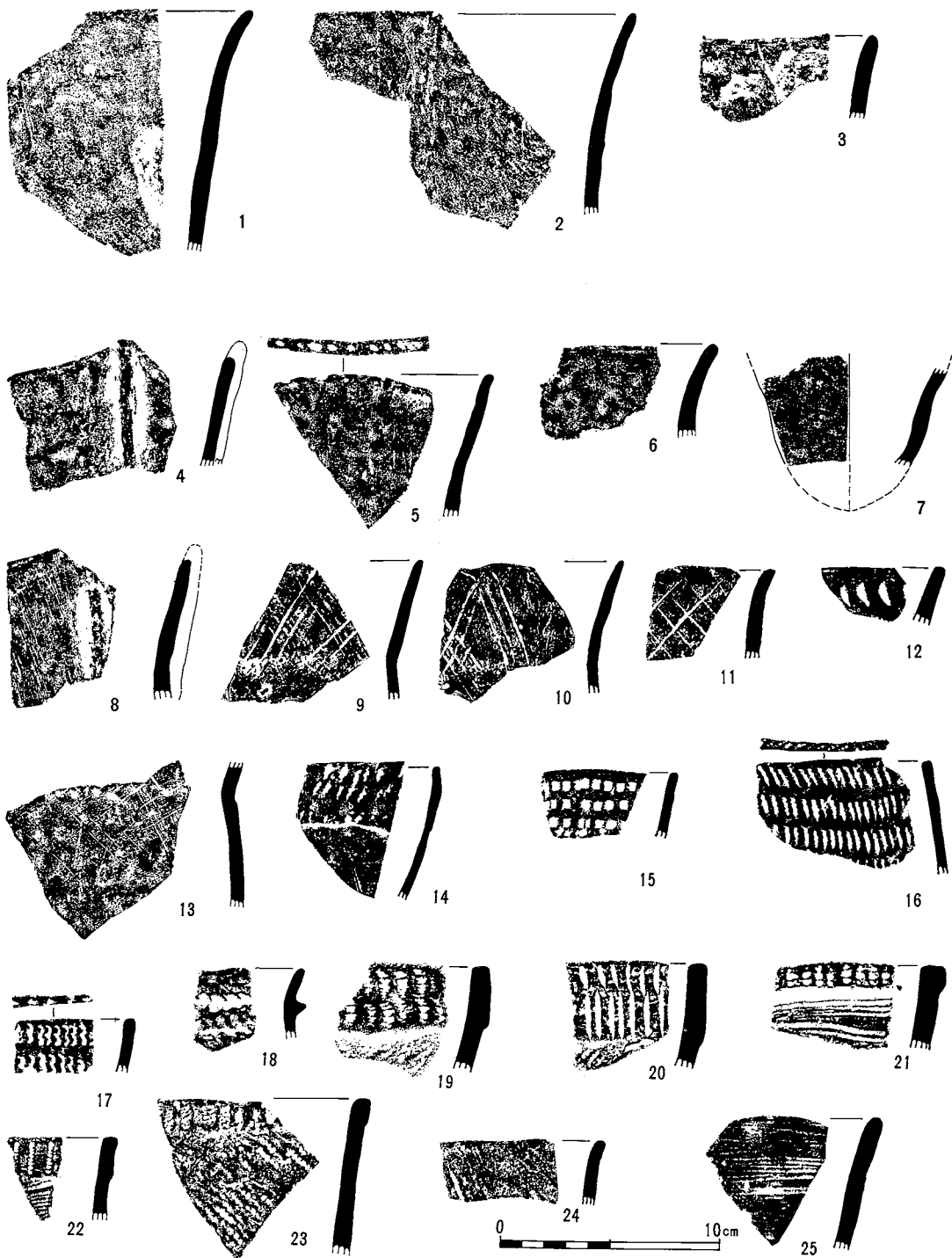


図 81 十二ノ后遺跡 6 号住居址, 8 号住居址(その 1) 出土土器拓影

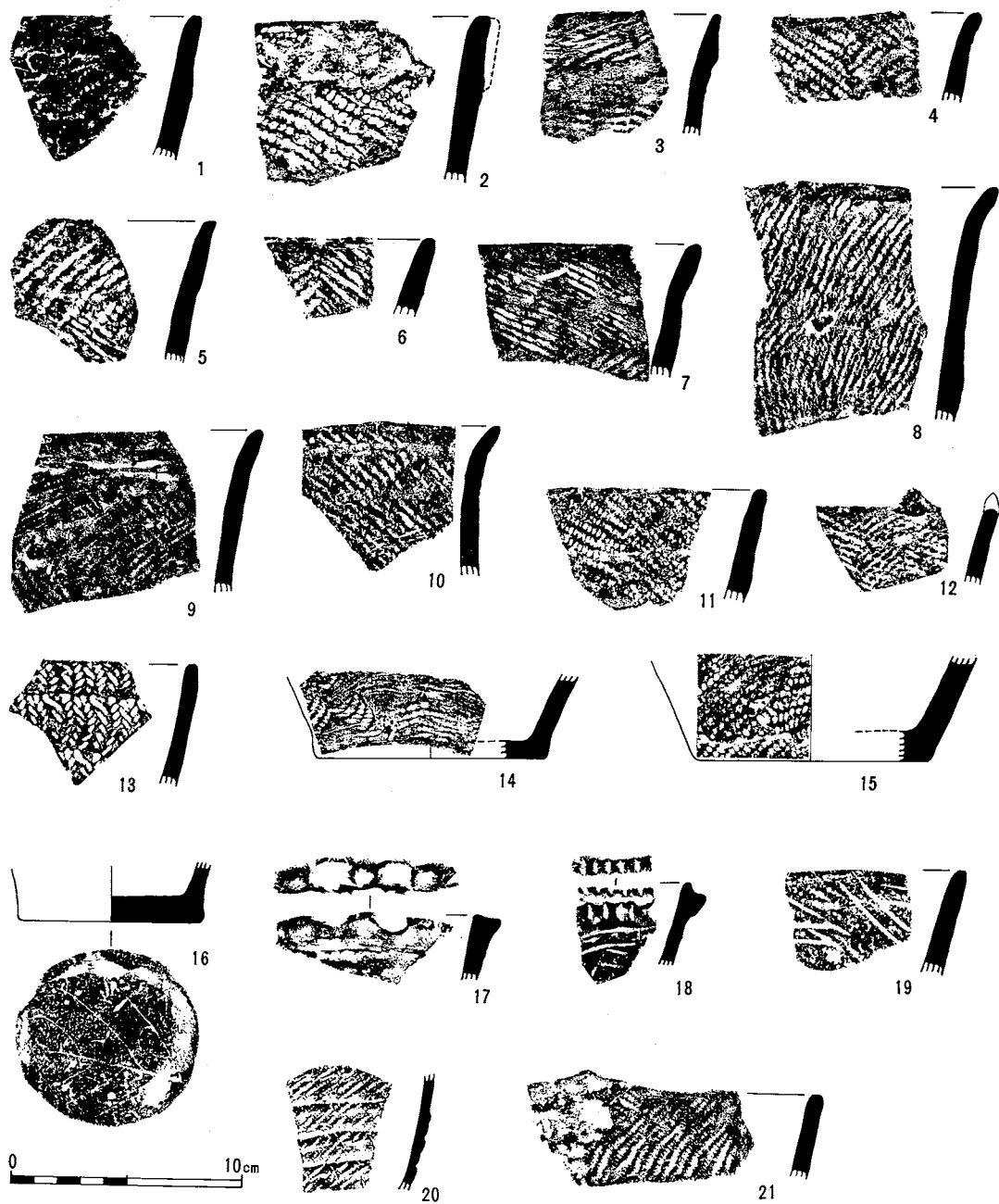


図 82 十二ノ后遺跡 8 号住居址 (その 2) 出土土器拓影

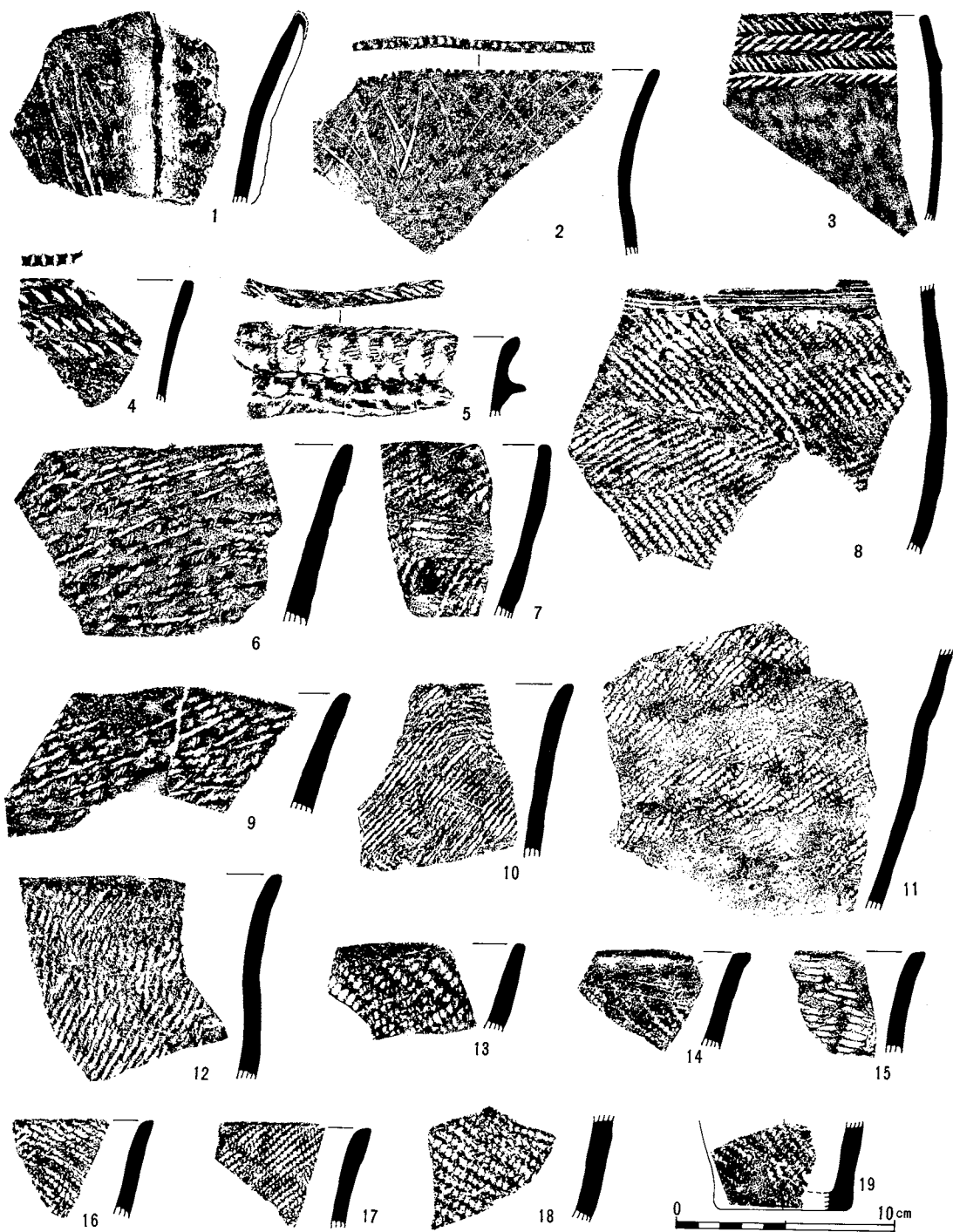


図 83 十二ノ后遺跡 8 号住居址 (その 3) 出土土器拓影

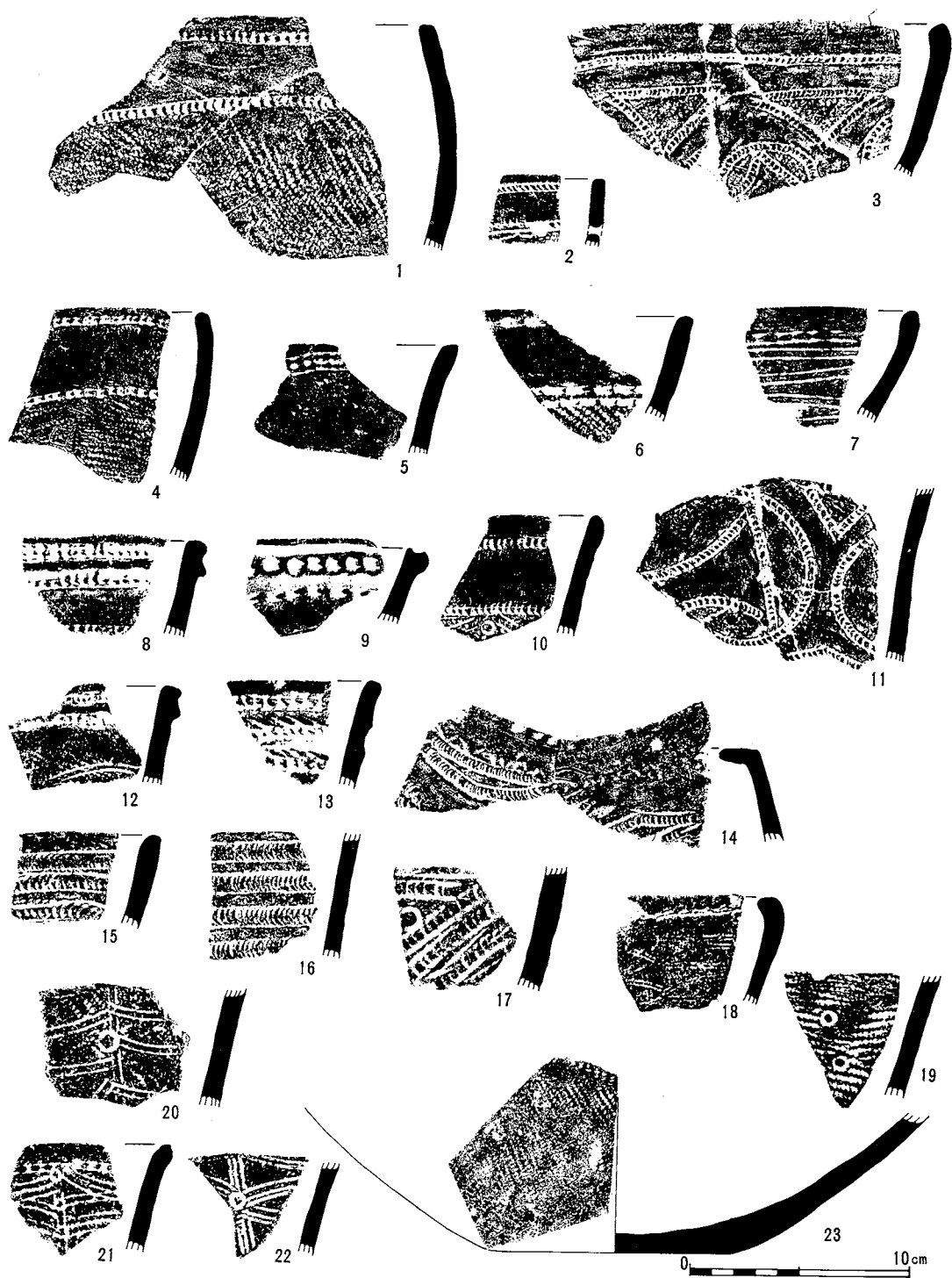


图 84 十二ノ后遺跡10号住居址出土土器拓影



図 85 十二ノ后遺跡11号住居址(その1)出土土器拓影

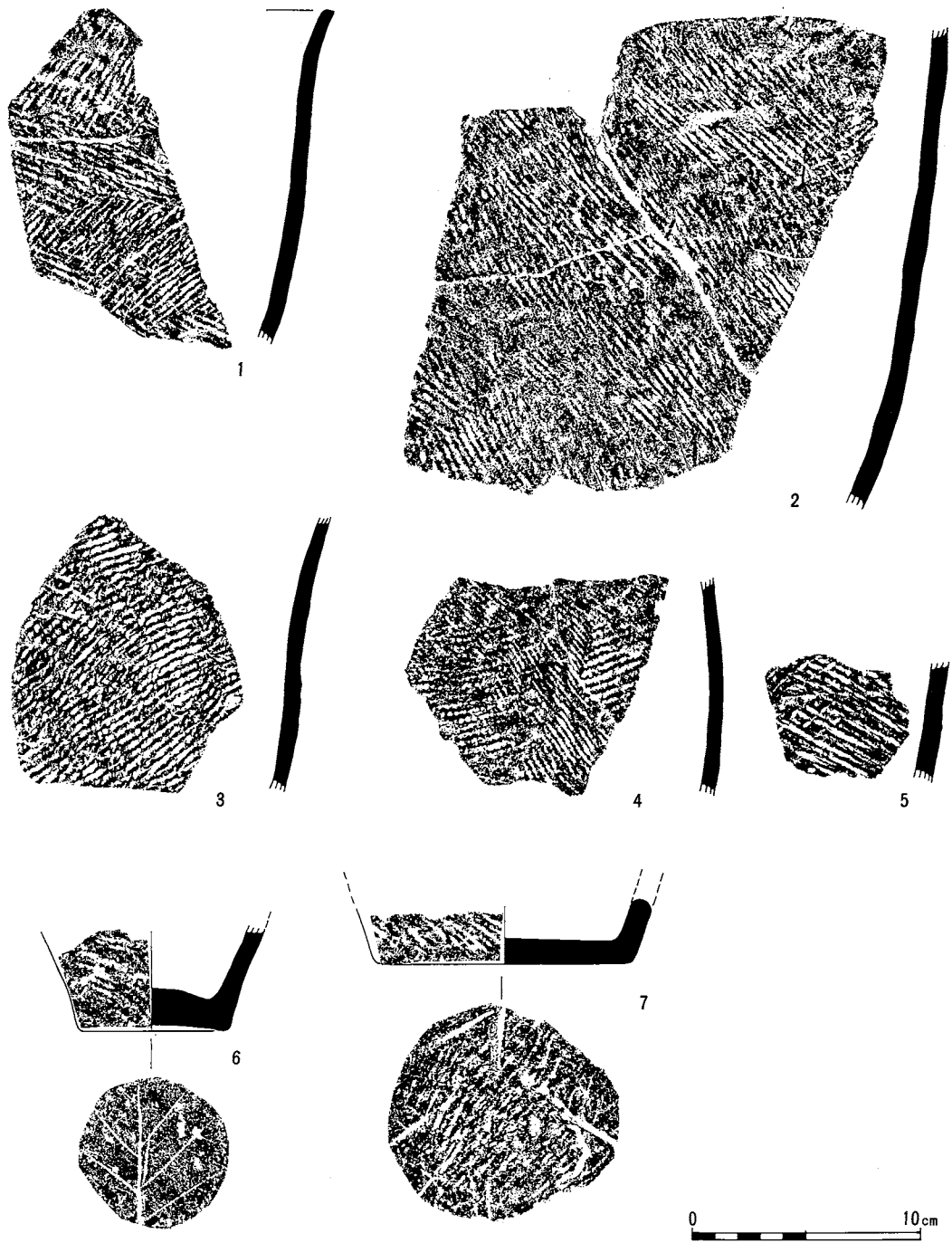


図 86 十二ノ后遺跡11号住居址(その2)出土土器拓影



图 87 十二ノ后遺跡12号住居址出土土器拓影

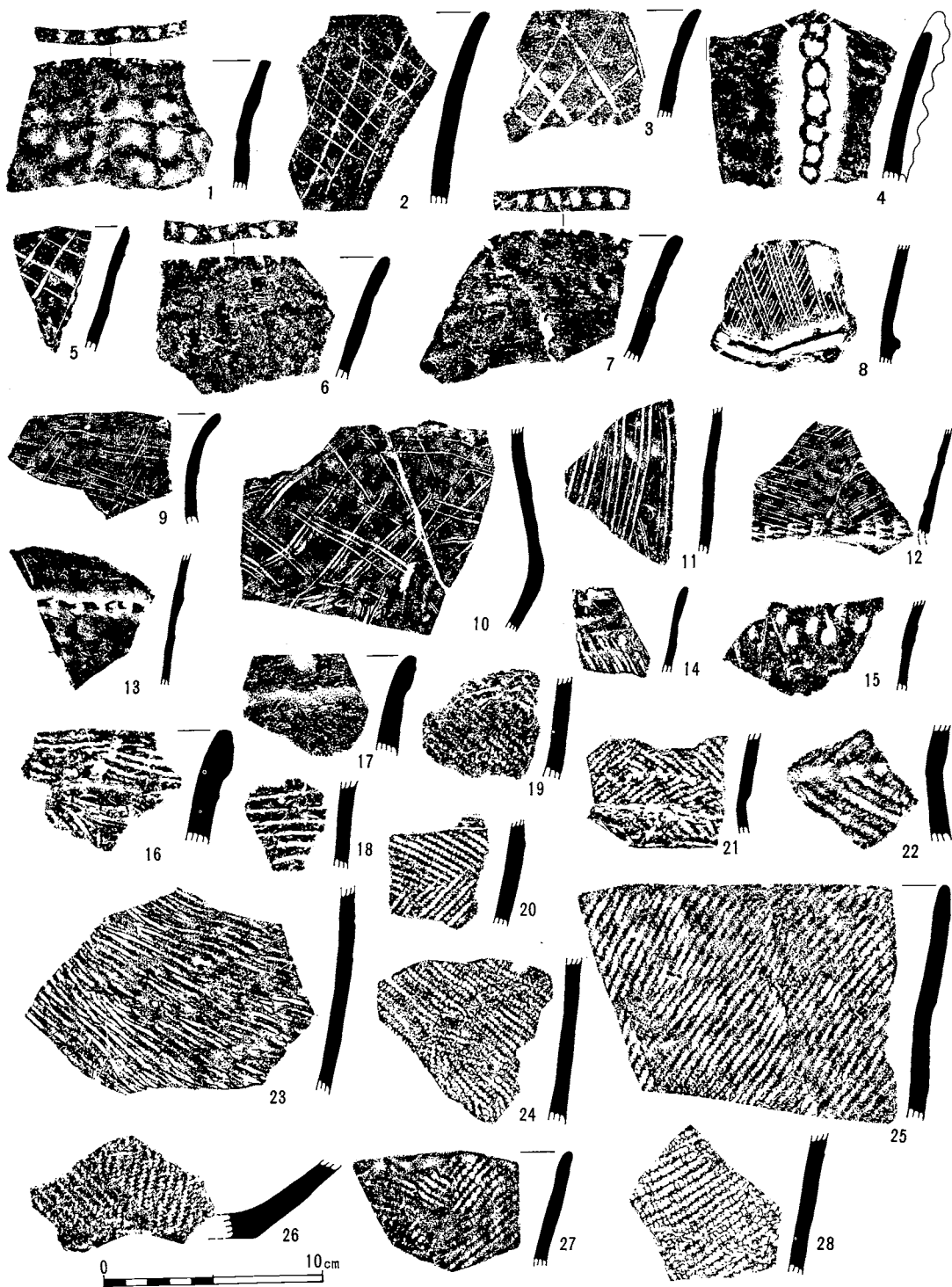


图 88 十二ノ后遺跡15号住居址出土土器拓影

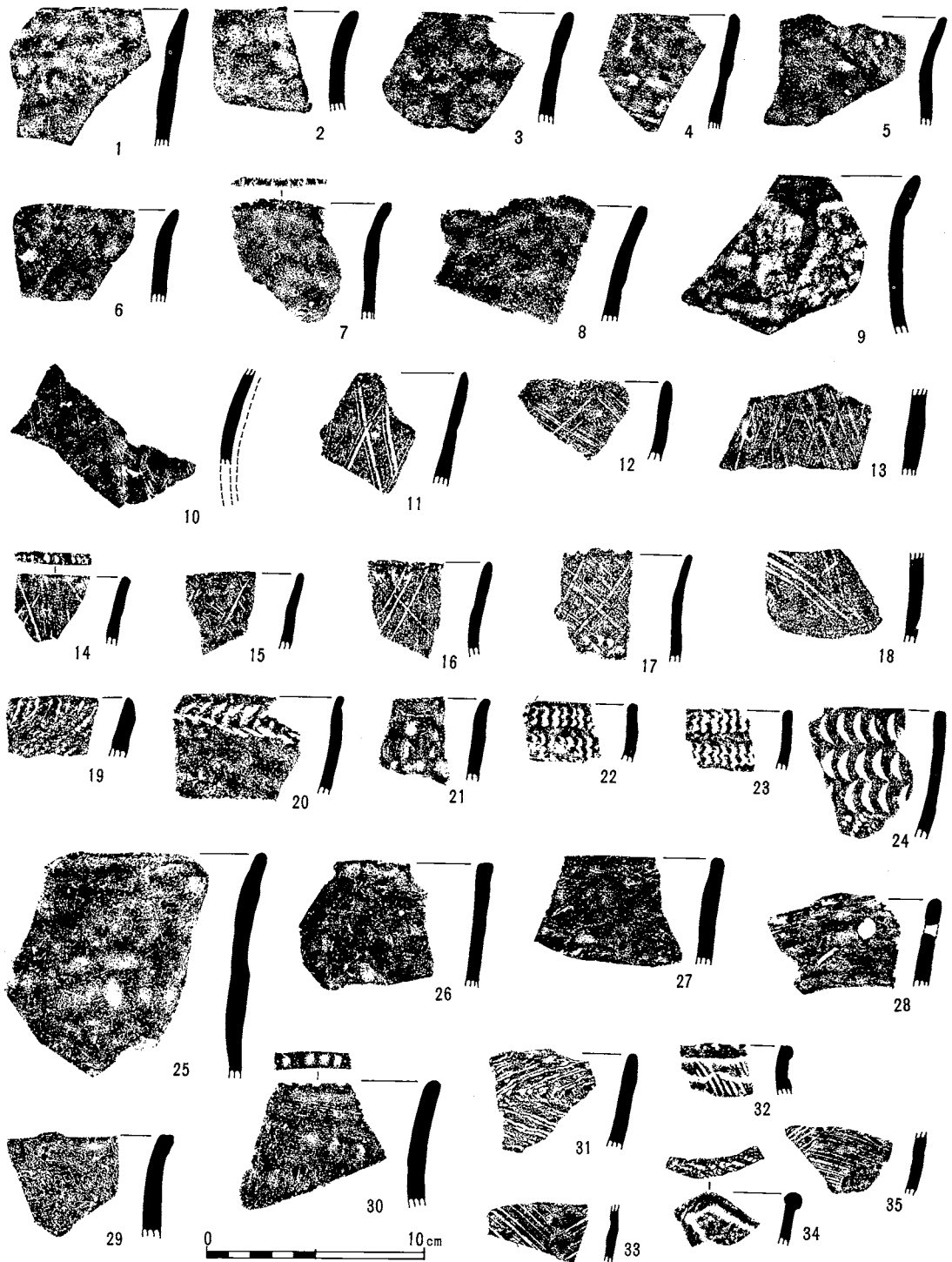


図 89 十二ノ后遺跡16号住居址(その1)出土土器拓影

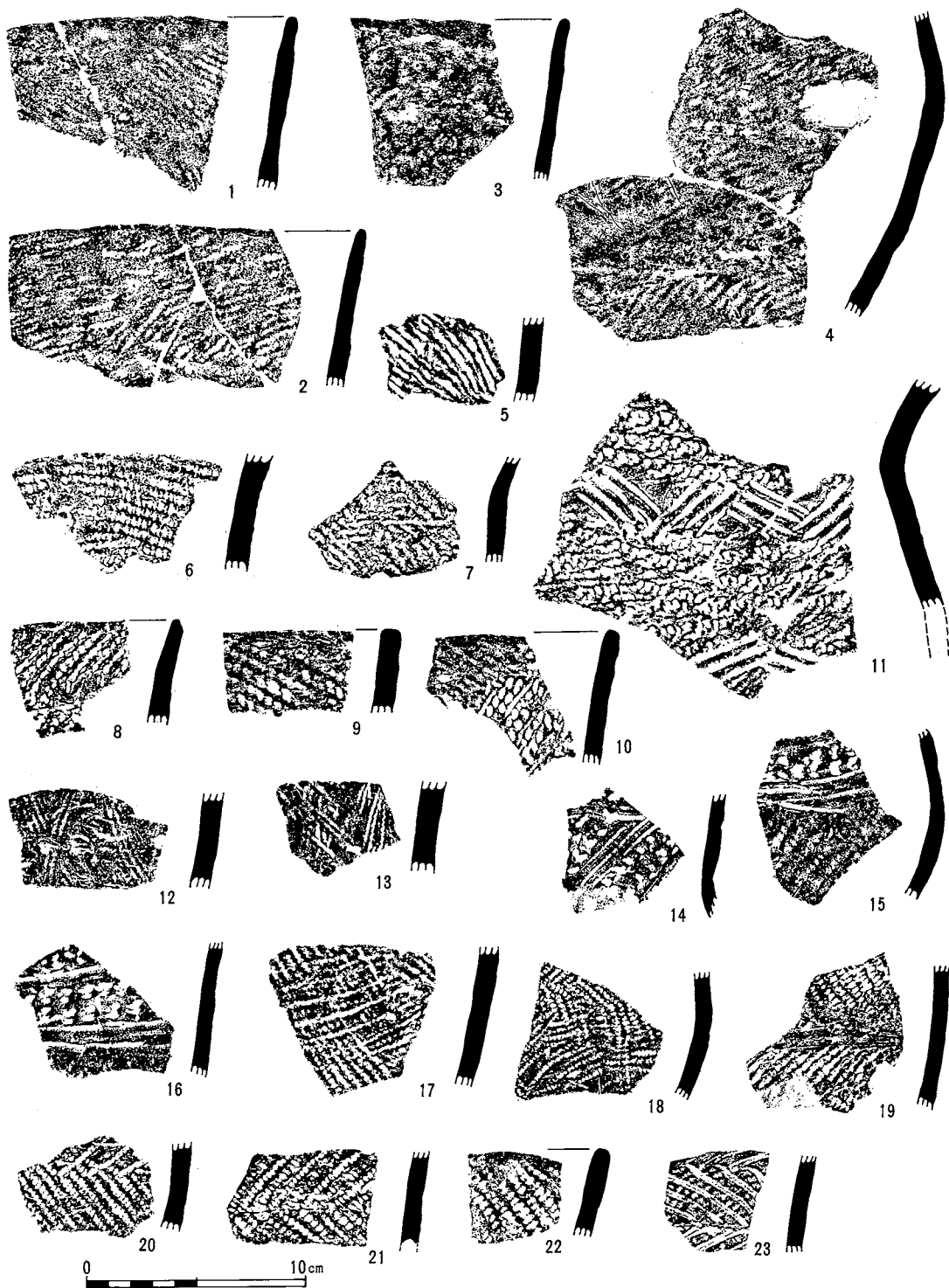


図 90 十二ノ后遺跡16号住居址(その2)出土土器拓影

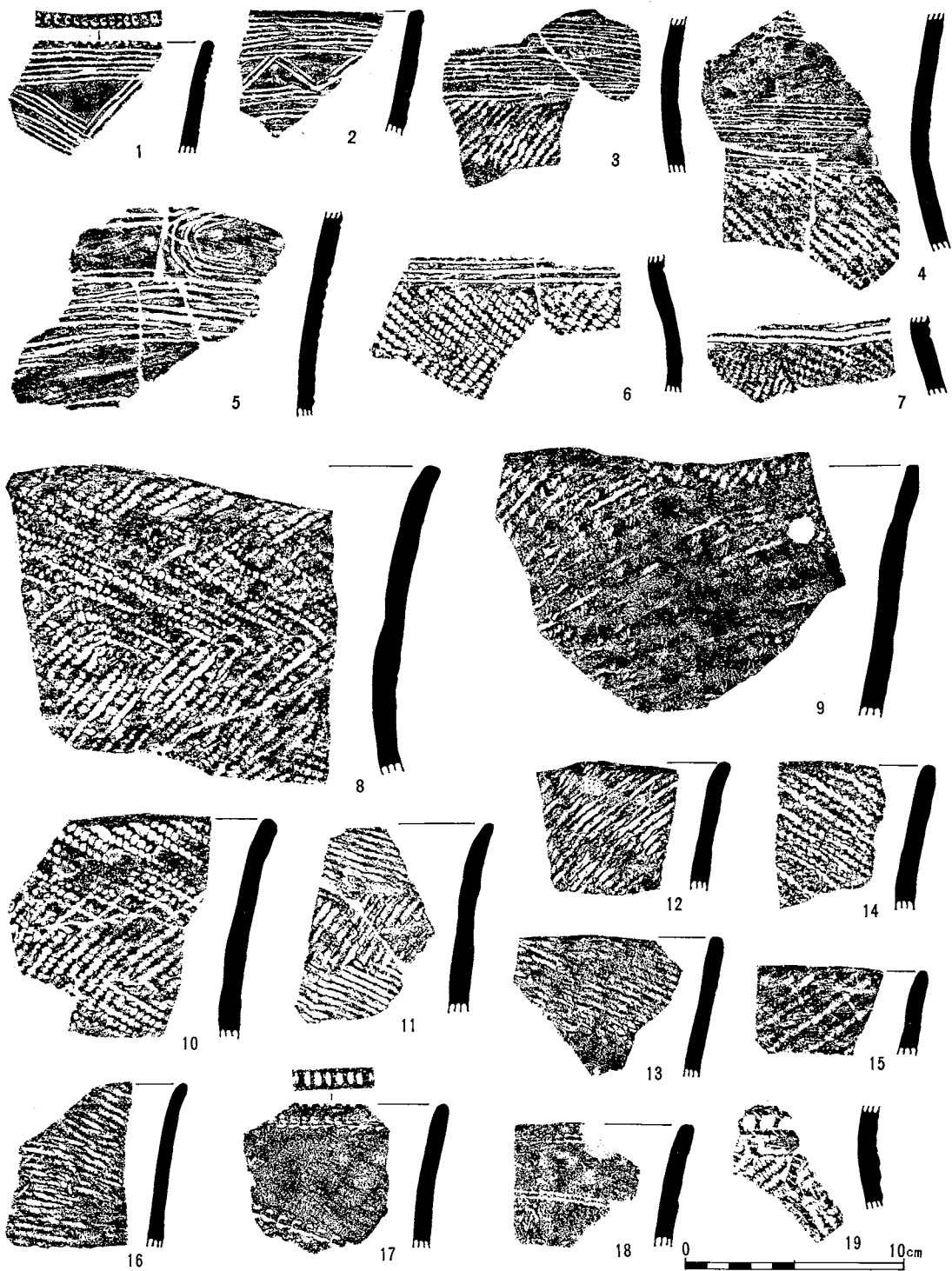


図 91 十二ノ后遺跡16号住居址(その3)出土土器拓影

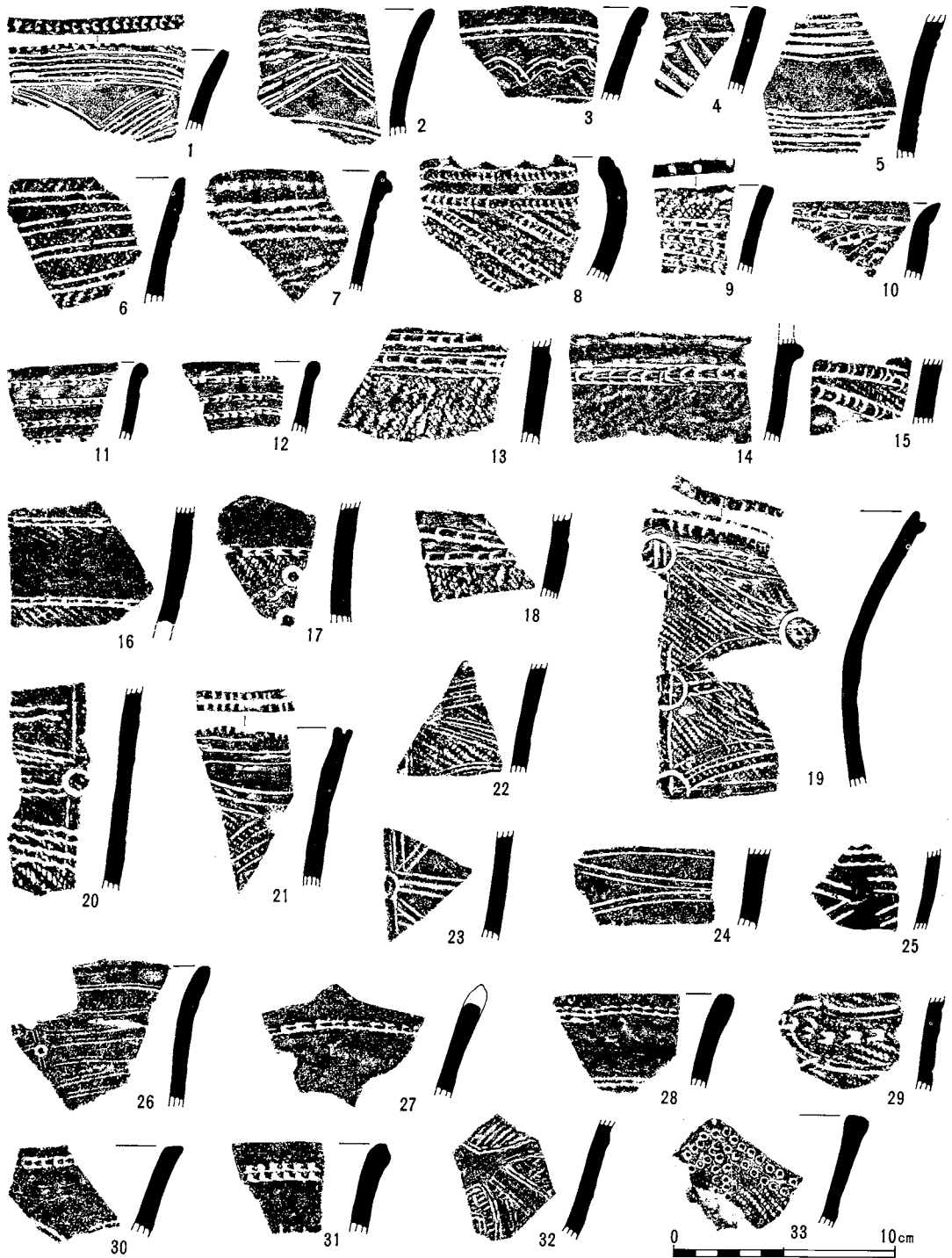


图 92 十二ノ后遺跡17号住居址(その1)出土土器拓影

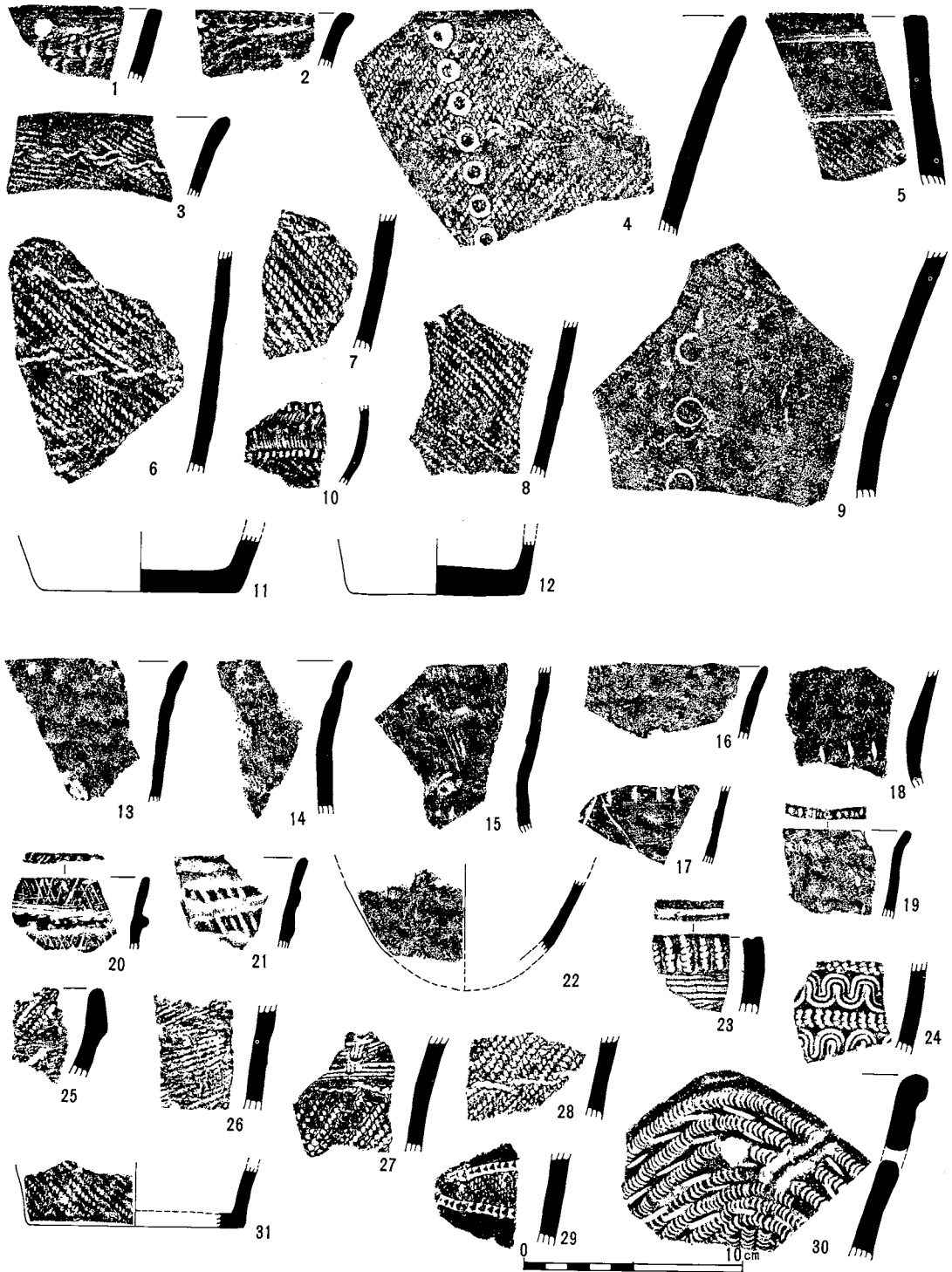


図93 十二ノ后遺跡17号住居址(その2)出土土器, 19号住居址出土土器拓影